

博士学位請求論文

指導教員 松永 知海教授

絵師 高田敬輔が描く浄土の世界

― 「選択集十六章之図」及び「無量寿経曼荼羅」を中心として ―

佛敎大学大学院 文学研究科 仏敎文化専攻

林

竹

人

絵師高田敬輔の描く浄土の世界

Ⅰ 「選択集十六章之図」及び「無量寿経曼荼羅」を中心としてⅠ

目次

序	1
第一章	1
研究目的	2
二	2
先行研究との関係の所在から	2
第一節 美術史的研究	2
第一項 土居義典の研究	2
(一) 國賀由美子氏の研究	
(二) 山本ゆかり氏の研究	
(三) マーニ・ル・ヒックマン氏の研究	
(四) 脇坂淳一の研究	
(五) 五島十嵐氏の研究	
第二項 問題の所在	
第二節 浄土教義の観点から	5
第一項 先行研究	
(一) 「選択集十六章之図」の諸本	
(二) 「無量寿経曼荼羅」の諸本	
(三) 坂野泰巨氏の研究	
(四) 大室俊定氏の研究	
(五) 福原了皓氏の研究	
(六) 鷺津清静氏の研究	
(七) 問題の所在	
第二項	

[illegible]

[illegible]

第四項 (二) 「特留此經」
小結

第二節「述所說彌陀行成攝三段」の「所行」について
627

- 第一項 (一) 「出家修道」
- (二) 「現諸佛土」
- (三) 「五劫思惟」
- (四) 「成滿大願」
- 第二項 (一) 「所行」の「勝行」
- (二) 「積功累德」
- (三) 「供養諸佛」
- (四) 「妙土莊嚴」
- 第三項 (一) 「所行」の「勝果」
- (二) 「供具如意」
- 第四項 (一) 「妙土莊嚴」
- (二) 「供具如意」
- 小結

第三節「述所說彌陀行成攝三段」の「所成」について
659

- 第一項 (一) 『大經曼荼羅開壇記』及び『當麻曼陀羅述獎記』の論述構成
- (二) 右二十四聖
- (三) 左二十四聖
- (四) 觀勢二聖
- (五) 彌陀法王
- (六) 三尊蓋樹
- 第二項 (一) 「所成」の「極樂」
- (二) 「毒地」
- (三) 「毒樹」
- (四) 「毒樓」
- (五) 「毒池」
- (六) 「毒空」
- 第三項 小結

第四節「述所說彌陀行成攝三段」の「所攝」について
715

- 第一項 (一) 「三輩往生」
- (二) 「念仏往生」と余行往生
- 第二項 (一) 「所攝」の「厭欣境界」
- (二) 「懲惡」の「懲惡」の「舉業苦過」の「業道」(五惡痛燒段)

733
760

終章	高田敬輔の描く浄土の世界――「選択集十六章之図」――	919
三二一	念仏往生の《道しるべ》、《西方極楽浄土》、《無量寿経曼荼羅》	
三	さらに見える《発展のために》	
二		
一		
参考文献		931
第三項	「懲惡」の「舉業苦過」の「苦道」（三塗無量苦惱段）	789
第三項	「所攝」の「勸善」	
第三項	「此土修善」	
第四項	「天下和順」	
小結		
第五章	「選択集十六章之図」及び「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響	869
第一節	「選択集十六章之図」の及ぼす影響	
第一項	「秘事法門」にも使用された「選択集十六章之図」	
第二項	「秘事法門」の概要	
第二項	「秘事法門」の使用された事例	
第二項	「忍海」とされる「彩色版・選択集十六章之図」	
第二項	「現地調査」とされる「彩色版・選択集十六章之図」	
第二項	「新井俊定氏の見解」	
第三項	「考察小結」	
第二節	「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響	894
第一項	「古碕大經曼荼羅」との関連	
第一項	「高田敬輔の無量寿経曼荼羅」と古碕「大經曼荼羅図」との対比	
第二項	「両曼荼羅の特色」	
第二項	「考察小結」	
第二項	「震具を巡る随天と諦忍律師との論争」	
第二項	「坐具を巡る随天と諦忍律師との論争」	
第三項	「考察小結」	

序章

一 研究目的

本論文は、《絵師高田敬輔の描く浄土の世界―「選択集十六章之図」及び「無量寿経曼荼羅」を中心として》と題し、江戸中期の近江日野出身の絵師高田敬輔が、浄土宗の根本聖典である法然の『選択本願念仏集』を「選択集十六章之図」とし、浄土三部経の『無量寿経』の教理を「無量寿経曼荼羅」に絵画表現した掛幅状の作品について、その制作意図や表現された各絵相が何を根拠に描かれているのか、さらには後世にどのような影響を与えたのかを説明することを目的とする。

二 先行研究と問題の所在

第一節 美術史の観点から

第一項 先行研究

(一) 土居次義氏の研究

- ① 「天球院障壁画と『敬輔画譜』」 (注1)
- ② 「信楽院の高田敬輔（上）・（下）」 (注2)
- ③ 「高田敬輔の襖絵」 (注3)

高田敬輔を先駆的に取り上げた土居次義氏は、高田敬輔の伝記を伝える『敬輔画譜』（注38…谷田輔長の項に詳述）

に着目し、画歴を紹介するとともに、本論文に関わる「選択集十六章之図」や「無量壽經曼荼羅」にもふれ、その制作の背景や経緯について、「無量壽經曼荼羅」の款記をもとに、原画作成に当たって良照義山の教示によったということが述べられている。また、皇太后の下命や仁和寺法親王からの叙任についても取り上げている。

(二) 國賀^{くにが}由美子氏の研究

- ① 「京狩野門流 高田敬輔雑考」^(注4)
- ② 「近江の画人高田敬輔再考―仁和寺藏『御記』による知見を手がかりとして―」^(注5)
- ③ 「訳注『敬輔画譜』附『高田家系図書』」^(注6)
- ④ 『高田敬輔と小泉斐―近江商人が美術史に果たしたある役割―』^(注7)
- ⑤ 「島崎家伝来「書画帖」について」^(注8)
- ⑥ 「高田敬輔筆 信樂院天井畫」^(注9)（『國華』一三六八号 國華編輯委員會 二〇〇九年 三三頁）
- ⑦ 「高田敬輔の画業―黄檗絵画との接点―」^(注10)
- ⑧ 『近江日野の歴史』第五卷 文化財編^(注11)

國賀（旧姓岩田）由美子氏は、中世絵画から近世、近代日本絵画を専門とする高田敬輔の美術史的研究の第一人者である。仁和寺藏『御記』による敬輔の仁和寺での活動や僧位の叙任、敬輔の伝記を伝える『敬輔画譜』の翻刻、『高田家系図書』の翻刻、黄檗宗との関連等の論考を数多く著し、右の土居次義氏の論考をさらに一歩進めた研究をしている。

また、二〇〇五年には、『高田敬輔と小泉斐―近江商人が美術史に果たしたある役割―』の企画展を行い、図録の編集や企画を手がけている。

(三) 山本ゆかり氏の研究

- ① 「高田敬輔研究」^(注12)

高田敬輔の作品調査を行い、「天下和順図」「八相涅槃図」等の二十一作品について、画題・材質形状・法量・落款・印章・制作年代・所蔵・掲載書・備考の順に項目を設け、作品リストを作成している。

この作品リストには、本論文に関わりのある「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」についての記載はないが、仏教経典を主題とする絵画は、高田敬輔の主要な作画の領域であると述べている。

②「月岡雪鼎・磯田湖龍斎等への僧位叙任について ―『御室御記』に関する報告―」^(注13)

また、仁和寺が真言宗の門跡寺院として僧位僧官の補任に関して一定の権限を朝廷から付与されていたことについて、高田敬輔の弟子である「月岡雪鼎」への叙任の経緯について、『御室御記』の記述を元に詳細に亘って論述されている貴重な研究がある。その中で、高埜利彦氏の論考を援用している中に、近世の僧位僧官叙任例として『京都絵師 法橋 高田豊全』^{〔注〕}高田豊全は高田敬輔のこと。の「名が上がつていることを指摘している。

(四) マニー・L・ヒックマン氏の研究

* 「〔湖東〕 出身の画家、高田敬輔」^(注14)

この論考は、『画乗要略』、『続近世畸人伝』、『敬輔画譜』の「高田敬輔翁略伝」から高田敬輔の画業を伝える伝記部分を取り上げ、敬輔の芸術的傾向や系統、生き方についての情報や僧古碕や敬輔の絵画様式や主題、さらに主な作品について所感が述べられているもので、特に本論文に関わりのある「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」についての記述もあるが、絵相の各部分について詳細な論考は示されていない。

(五) 脇坂淳氏の研究

* 「永敬の和画と漢画」^(注15)

脇坂氏は、京狩野派四代目狩野永敬について論及する中で、「第二章 永字を冠しての継承」^{〔第四節〕}永敬の和画と漢画」と題し、高田敬輔が師事した狩野永敬と共に仁和寺に出入りしていることを記している。

(六) 五十嵐公一氏の研究

① 「狩野永敬の研究」

(注16)

② 「狩野永納と狩野永敬」

(注17)

五十嵐氏は、京狩野派四代目当主の狩野永敬の生涯を概観し、その作品に基づいて永敬を絵画史の流れや同時代の状況を見据えた横の関係から論考をすすめているが、その中で、永敬が四十一歳の若さで突然亡くなった後の弟子達の動きについて述べた中に高田敬輔についての一文がある。

第二項 問題の所在

高田敬輔の美術史的評価は、ほとんどの論者が、敬輔の伝記を伝える『敬輔画譜』の「高田敬輔翁略伝」によって、画歴を伝えている。その中でも特に注目すべき点は、浄土教の教理を教授した良照義山の存在、雪舟様の画風や大画を描く画法を古碕から学んだこと、さらに京狩野派四代目狩野永敬に師事し、狩野派の画法を身に着け、仁和寺に出入りが許され、法橋、法眼の僧位、藤原の姓と大目の官位が叙されたことを知ることができる。

ただ、本論文で取り扱う「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」については、制作の経緯や時期等は明らかではあるが、各絵相や構成等についての浄土教的教理に基づく評価がされていない。従ってその教理的根拠を究明していくことが一つの課題であると考えている。

第二節 浄土教教義の視点から

第一項 先行研究

(一) 「選択集十六章之図」の諸本

- ① 高田敬輔原版「選択集十六章之図」(注18) (紙本摺印着色 一一五・八×五一・五 個人蔵)
- ② 「選択曼陀羅尊像」(注19) (絹本着色 縦一三七・〇 横六八・〇 江戸時代 知恩寺蔵)
- ③ 「選択集十六章之図」(注20) (紙本刷印 縦一二四・三 横五六・二 江戸時代 京都市妙泉寺)
- ④ 「選択集十六章之図」(注21)(注20) (銅版印刷 縦六四・二 横四四・六 明治時代 佛教大学図書館蔵)

①は下段に「選択集十六章之図」の作成の経緯と署名・押印がされた識語があり、版木と同一のものであるので高田敬輔の原版に着色されたものである。②は下段に「賜紫光慈専拝寫」とあるように、知恩寺五十八世光誉慈専が敬輔原版を拝写したものである。③は高田敬輔原版のものとは同じであるが、第七章の阿弥陀如来の光背が敬輔原版と異なる四十八化仏で、「今井重左衛門」が印譜した町版のもの。④は明治期に敬輔原版をもとに銅版印刷画として出版された「知恩院 南門前 豊田製」で、『選択集十六章之図略解』と一具のものとして開版されたもの。

(二) 「無量寿経曼茶羅」の諸本

- ① 高田敬輔原版「無量寿経曼茶羅」(注22) (紙本摺印着色 縦一五三・二×六九・〇 江戸時代 延享二年(一七四五) 七四五) 個人蔵)

- ② 「無量寿経曼茶羅」(注23) (紙本摺印着色 縦一四〇・六 横六五・七 江戸時代 延享二年(一七四五) 亀岡市大圓寺蔵)

①は、最上段に増上寺四十三世連察の題賛があり、敬輔原版のものである。②は敬輔原版ではあるが、連察の題賛が省略されたものである。

(三) 坂野泰巨氏の研究

* 『選択集入門―選択集十六章之図―』(注24)

この書は、高田敬輔画の「選択集十六章之図」の各章毎の絵相に、それを解説した明治期の堀尾貫務の解説書である『選択集十六章図略解』を対照して絵解きをしているものである。

(四) 新井俊定氏の研究

① 「選択集十六章之図」について^(注25)

この論考は、「選択集」の仮名書き判『ひらがな選択集』（寛文六年（一六六六））や高田敬輔の「選択集十六章之図」（正徳四年（一七一四））や西山浄土宗の専阿と隠空の『通俗絵図選択集』（延享元年（一七四四））や関通、忍海画の『和字選択集』を概説する中で、敬輔の経歴や、図の最下段の識語にふれて制作の経緯と意図を述べるとともに、解説書である『選択集十六章図説』や『選択集十六章図略解』の紹介をしている。

② 「和字選択集について」^(注26)

この論考は、右の①の内容をふくらませ、はじめに『選択本願念仏集』の写本や「建曆版」「廬山寺本」「往生院本」「延応本」「建長本」「正中本」「永享本」を紹介し、一に、「ひらがな選択集」（寛文六年（一六六六））がどの系統に属したものであるか検討の結果、延応本系のもので底本として訓読されていると述べている。

二に、『通俗絵図選択集』（延享元年（一七四四））について、制作の経緯を記す慈門専阿の識語について注釈し、慈門専阿について、『新選往生伝』を引用し、その経歴を伝えとともに、底本は義山本によっているのではないかと指摘している。

三に、『和字選択集』（延享元年（一七四四））について、関通が和字に読み下し、忍海が挿画したことにふれ、義山本を底本として訓読されていると指摘するとともに、開版者の関通（一六九六～一七七〇）の経歴と『和字選択集』制作の経緯を示すとともに、画図の作者忍海（一六九六～一七六一）の画歴や業績について述べている。

ここで一つ注目したいのは、高田敬輔開版の「選択集十六章之図」とは異なる彩色版の「選択集十六章之図」（『浄土』一九九八年五・六月合併特大号 法然上人讃仰会刊（口絵四頁））について紹介があり、その画図の

款記について翻刻し、忍海が関わっているという見解を記しているので、これについては、本論文の別項（第五章第一節第二項）を参考にされたい。

四として、高田敬輔の「選択集十六章之図」を取り上げ、その画歴と各宗の僧侶との交流、十六章の図柄について考察が加えられている。また、敬輔の「選択集十六章之図」と忍海の描いたと思われる極彩色の「十六章之図」の共通性と敬輔の影響力にふれている。そして、この「選択集十六章之図」に関する解説書として、湖月の『選択集十六章図説』と堀尾貫務の『選択集十六章図略解』を紹介している。

(五) 大室了皓氏の研究

＊「選択集絵解き物語」

この論考は、『浄土』に四回にわたって連載された「選択集絵解き物語」^(注27)である。
標題に、

選択集十六章之図 正徳甲午季冬近州蒲生日野 高田敬輔題於平安旅寓

新・連載 その一・第一～四章

大室了皓 選択集絵解き物語

選択本願念仏集は難解な書物であるといわれる。この絵解き選択集は それをわかりやすく説明しようとしたもので、種々の流布がみられる。ここでは正徳年間の十六章の図を取り上げてみた。

とあるように、大室氏が高田敬輔の「選択集十六章之図」の十六章各章について、それぞれの絵相の特徴的表現について、現代の一般大衆が理解できるように、平易な文言で絵解きした語り口調で記し、『湖月』や『堀尾貫務』とは趣を異にした内容である。

(六) 福原蓮月氏の研究

＊「『選択集十六章之図』について」

(注28)

この論考は、高田敬輔の木版画に極彩色が施され、箱書きには「御開眼東山禅林寺天華上人、画師沢田氏」、蓋裏には「大谷性」とあり、もと永観堂（禅林寺）の所有品と想定されるものについて考察されたものである。おそらく高田敬輔原版に「画師沢田氏」が彩色したもののようである。

その内容について、

この文の末尾には、近江の蒲生月野の高田敬輔氏が正徳四年に描いて、この図を刊行したことが知られる、そして刊行の直前、華頂山公（浄土宗知恩院の門跡）に観閲してもらい欣賞の言葉を賜ったので刊行したことが示されている。

とあり、敬輔が義山の賞賛を得、刊行したことが述べられている。（注…高田敬輔の出生地は近州蒲生郡日野。華頂山公は知恩院の門跡ではなく、入信院の良照義山のことである。）

また、福原氏は十六章各章の配置の順序の特色を捉え、湖月の解説書『選択集十六章図説』や堀尾貫務の『選択集十六章図略解』とは異なった視点で各章の図柄を略解している。

(七) 鷺津清静氏の研究

* 「通俗圖繪選擇本願念佛集について」
(注29)

鷺津氏は、在家に読ませる意図で変体仮名で書かれ、十六章各段に図が配された『通俗圖繪選擇本願念佛集』について、一、開版主、二、時代背景、三、仕立て、四、編集内容、五、支援の人達、六、絵図の原画という六項目を設け、論考している。

その中で、本論文に直接的に関わりのある部分は、六、絵図の原画の部分である。

①として、同時期に開版された『和字選択集』（延享元年へ一七四四）二月刊行）と『通俗圖繪選擇本願念佛集』（延享元年三月刊行）とは、同じように変体仮名で図入りの体裁を保つものの、『和字選択集』は、和文を関通上人、絵は忍海上人が描き、『通俗圖繪選擇本願念佛集』とは、別物であり、どちらも互いに真

似をしたとは考えられないこと。

②として、『通俗圖繪選擇本願念佛集』の挿絵が、西岸寺所蔵の「選択集曼陀羅」と銘うつた、表題が「選択集十六章之図」の木版刷りの版面に着色した掛け軸の絵と類似していること。そして、その絵図の下部の識語に制作までの因縁が書かれており、高田敬輔が正徳二年（一七一二）に「選択集十六章之図」を描いて良照義山に賞せられ、翌正徳四年にその勧めによって版行したこと。さらに、この識語にある「正徳甲午季冬」は一七一四年のことで、『通俗圖繪選擇本願念佛集』に先行すること三十年であり、この版木を手本として描かれたのが、『通俗圖繪選擇本願念佛集』の挿絵であろうと思えること。

③として、原画は高田敬輔の筆であること。そして、識語の一部を示し、敬輔が京都の旅の途次に銘文をしたためたこと。さらに、敬輔の画歴や交友、弟子等を述べ、古礪上人の感化により、浄土宗の教理にも詳しく、無量寿経曼陀羅など、佛画も多く描いたという。六二歳で法橋、六九歳で法眼に叙せられ、以後は『高田法眼』と称せられたと云う。選択集を絵に描き、念仏信仰の指針としたり、知恩院の門主（マ）に対面でき親しく対話が可能な、当時としても著名な大絵師であり、相応な信仰と人徳とを、兼ね備えていた人と推測できる。宝暦五年八二歳寂。

とまとめている。

第二項 問題の所在

浄土教の教理の観点から、「選択集十六章之図」、「無量寿経曼荼羅」の各諸本が何を強調して表現されているかを把握するために提示した。

また、浄土宗、浄土真宗、天台宗系の諸氏の論考をとりあげることによって、「選択集十六章之図」、「無量寿

経曼茶羅」がどのように理解されているかをみた。

坂野・新井両氏は、「選択集十六章之図」の解説書として、湖月の『選擇集十六章圖説』（延享二年へ一七四五）刊）と堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』（明治廿三年へ一八九〇）刊）の内容をほぼそのまま引用している。

大室・福田・鷺津の各氏はそれぞれの独自の解釈をしている。

しかし、何を根拠に解釈したか出典が明示されず、概説的に捉えた内容になっている。

そこで、本論文は、第二章で「選択集十六章之図」、第三、第四章で「無量寿経曼茶羅」の全体構成と部分構成について、その根拠となる経論をもとに明らかにする。

また、鷺津氏は、『通俗圖繪選擇本願念佛集』（高田敬輔画の絵相）と『和字選択集』（忍海上人画の絵相）についてはふれているが、これについては、別項（第二章第二節）で対比しながら検討を加えることにする。

第三節 近世の画論の観点から

第一項 各画論が伝える高田敬輔

「選択集十六章之図」・「無量寿経曼茶羅」を描いた絵師高田敬輔がどのような人物であったのか、当時の絵師たちの画業を伝える種々の画論の評価をみることにする。

- (一) 中山高陽『画譚雞肋』^(注30)（安永四年へ一七七五）《日本絵画論大成第六巻 翻刻四〇頁 影印一三七頁》
- 中山高陽（一七一七く一七八〇）^(注31)は土佐の出身。宝暦く安永期における江戸を代表する画家の一人である。
- 明和六年（一七六九）に出版された『古今諸家人物志』でも、「唐画」画家のうち江戸で活動した中心的な七

名の中に入れられる人物の画論である。

そこには、高田敬輔は、【眉間毫瑋甫】^{ミケンガウケイホ}として名を挙げられ、「水のみの猩々」「滝の鯉」が代表作として評価されている。さらに、鳥羽僧正、尾形光琳、俵屋宗達、馬渡高雲、古礪、松花堂昭乗等と肩を並べて専門画家の人物として注目されていたことを知ることができる。

(二) 三熊思孝編纂・伴蒿蹊校閲『續近世畸人傳』^(注32)（寛政十年（一七九八））

三熊思孝^(注33)編纂・伴蒿蹊^(注34)校閲『續近世畸人傳』の第五巻には、高田敬輔は菓屋の商売よりは絵に熱中し、仁和寺に出入りしたり、画僧古澗^{ママ}和尚に学んだりして優れた絵を描いたので、法眼に叙位されたことや仏学の知識があったので阿弥陀経曼荼羅（注…阿弥陀経曼荼羅）ではなく「無量寿経曼荼羅」の誤り。）や大経の趣きを山水画に描いたことや眉間毫翁の画号の由来について述べられている。

(三) 中林竹洞

中林竹洞^(注35)（一七七六～一八五八）は、名古屋出身の文人画家。『画道金剛杵』と次項の『竹洞画論』の画論を成している。

①『画道金剛杵』^{がどうこんこうづち}（享和元年（一八〇一））《日本絵画論大成第六巻 翻刻一六五頁 影印二一四頁》

『画道金剛杵』の巻末に古今画人品評という一覧表があり、上品、上中品、上下品、中上品、中中品、中下品、下上品、下中品、下下品の九品に分けられて配属。さらに、文人画に松花堂、古礪。能画にして俗気無き者に、雪舟、蕪村、探幽、宗達、光琳、若冲等が挙げられ、邪として蕭伯が挙げられている。

高田敬輔は、俗の部門に、狩野元信等とともに挙げられている。

②『竹洞画論』（享和二年（一八〇二））《日本絵画論大成第六巻 翻刻二二五頁 影印二五八頁》

『竹洞画論』には、高田敬輔は、【日野の敬輔】として一家を成した画家として取り上げられているが、その評価は、【画体いやし】とあり、品格に欠ける者であるという意味に受け取られる。

また、右の『画道金剛杵』でも、【俗】の部門に挙げられていることから、中林竹洞には、一応、名の有る画家としては認識されているものの、厳しい評価を受けていたと思われる。

(四) 谷田輔長^(注36)『敬輔画譜』^(注37)（文化元年（一八〇四））

絵師高田敬輔がどのような生涯を送ったのか、また、どのような人物であったのか、詳細に記しているのが『敬輔画譜』である。

この書は敬輔没後、約五十年後に子孫や弟子達によって刊行されたもので、高田敬輔の三男で谷田家を継いだ保暲の長子、外孫の谷田輔長が、敬輔の描いた絵の縮図や作画の参考にしたと思われる中国や日本の書画（山水や七賢、八仙、七福神等の故事人物画）の模写や子孫や弟子達の作品が四巻に収められたものである。

冒頭の老泉戒如による「高田敬輔翁畧傳」には、

＊高田敬輔は、近江日野郷の高田俊隆の嫡子として生まれ、名を隆久、後に敬輔と号し、幼い頃から絵を描くことが得意で、長じて狩野永敬に師事してその技法を身につけた人物であったこと。

＊後に仁和寺の法親王に仕えて高田豊前大^{だいさかん}目と称し、このために藤原と改姓し、数年、居して致仕したことや、たまたま古^{ママ}澗師と出逢って雪舟の技法を学ぶことができたことや、画が益々上手くなって遂に一家を為すこと、卅人の弟子が集まり、竹隱體と号して竹隱はその齋の稱であること。

＊京や畿内に頻繁に旅し、一時は洛東の小松谷に寓居し、主の慈光師と善く交わったこと。寺中の障壁画は、みな敬輔が描き、また別に五百羅漢や水墨や小像も描いたが奇観であったこと。

＊また、経蔵や宝蔵に經典等を求めて仏理を極め、峨山の鳳潭師に拝謁し、また華頂の義山師とまみえ、深く浄理に通じたこと。

＊「選択集十六章之図」は正徳年間に作られたもので、義山師が一見して善しとし、集中には『選択本願念仏集』の趣を得ているので版に挙げてもよいと謂われたことから、義山師から賛辞と許諾を得たこと。

* 「無量寿経曼荼羅」についても、壁間に掲げて拱手して詠嘆したとあることから、この「無量寿経曼荼羅」も「選択集十六章之図」と同じように義山師の賞賛と許諾を得たものであること。

* 皇太后に命じられて十六章之図を作って、それを献上したところ、厚く褒賞を得、さらに、これは世人の益になり、君の庸流に非ざることを知ったと述べられていること。

* 仁和寺の法親王から召されて「天下和順圖」を描いたことから法橋に叙位されたこと。そして、間もなく法眼にも叙され、その後高田法眼と称するようになったという経緯が述べられていること。

* さらに、皇女林丘尼公は、最も「壽経曼荼羅」を重んじたことから、これを章段にし、図間に親書したこと。また、三縁山の察公に、その上段に題賛を書いて貰うように要請し、ついに完成させて世に印頒したこと。そして、宝暦五年（一七五五）に八十二歳で没したこと。

等々、高田敬輔の伝記について、詳細に述べられている。

(五) 中尾樗軒『近世逸人画史』(注38)（文化十五年（一八一八））《日本絵画論大成第六巻 翻刻二九〇頁 影印三三四頁》

中尾樗軒(注39)は、江戸本郷、喜福寺門前の質屋伊勢屋の生まれ（生年不詳、文政四年（一八二一））、名は觚哉。『近世逸人画史』『諸名家墓所一覽』他七編の著作がある。

『近世逸人画史』には、九十五人の画家の小伝が記され、その中で、高田敬輔については七十人目に記されている。

(六) 白井華陽(注40)『畫乗要略』巻二（天保二年（一八三一））《日本絵画論大成第十巻 翻刻四二頁 影印一七二頁》

この書は、巻一の筆頭に土佐光信を掲げ、雪舟、長谷川等伯、狩野山楽等の土佐派、狩野派の画家に加えて、松尾芭蕉、来日の中国人僧や儒学者など天保当時の著名な画人達二百七十四名の画業について論評を加えたもの

である。

その巻二、第六十九番目に、僧古礪に続いて高田敬甫（輔）^{ママ}の名があり、柴田義董^{しばたぎとう}（注41）が言うには、高田敬輔も呉俊明もほぼ同じような轍を踏んだ生き方をした人物である。その時々流行に流されず、狩野派の流れをくむ独自の画風をもって描いていたのであるが、田舎に居て自己満足すること無く、その身を大都会に置いて活動したならば、著名な狩野山楽や海北友松等にひけをとらない画業を果たすほどの実力をもった人物であつた。おいしいことである。という高い評価を得ている。

（七）朝岡興禎^{あさおかおきさだ}（注42）『古画備考』二十六 名画（嘉永年間へ一八四八〜一八五四）か）

朝岡興禎は、江戸時代末期の狩野派、狩野栄信の次男である。『古画備考』は、巻一に庚戌（嘉永三年）八月十二日起筆とあり、巻五十には弘化二年（一八四五）起筆とあることから、嘉永年間頃の執筆であると考えられる。「首巻」の目録によると五十一巻からなっていて、日本画家約三千五百名、中国、朝鮮画家約四百八十名の伝記や落款や印章等が記されている。その中で、高田敬輔については、巻二十六 名畫に記されている。

（八）川喜多眞一朗^{（注43）}『古今墨蹟鑒定便覧』第六巻 中の十一表（安政二年（一八五五））

『古今墨蹟鑒定便覧』は、七巻仕様になっていて、一巻、近世儒家之部上。二巻、近世儒家之部下。三巻、地下和哥之部。四巻、地下哥人之部。五巻、畫家之部。六巻、畫家之部。七巻、書家之部、和様書家之部、医家之部の構成になっていて、高田敬輔は第六巻に「僧古礪」の次に記されている。

第二項 問題の所在

以上、高田敬輔について、近世の画論から、高田敬輔の画業と伝記を概観した。

谷田輔長の『敬輔画譜』は、高田敬輔没後五十年に、弟子が師のことを書き著したもので、詳細な経歴を

知ることができるが、多少誇張された伝記的内容があることも否めない。だが、画論の中では最も詳細な経歴や画業を知ることができる貴重な書である。

ここで注目したいのは、評価が大きく二つに分かれていることである。

中山・三熊・中尾・白井・朝岡・川喜多の各氏は、概ね高い評価で、特に中山は、鳥羽僧正、尾形光琳、俵屋宗達、馬渡高雲、古礪、松花堂昭乗等と肩を並べる専門画家としての人物と注目している。

しかし、中林竹洞は、『竹洞画論』で【画体いやし】と記し、品格に欠ける画風であると表現している。また、『画道金剛杵』でも、【俗】の部門に挙げられていることから、著明な絵師ではあるが、格下の取り扱いになっている。

白井華陽も柴田義堇の話を取り上げ、狩野派の流れをくむ優れた独自の画風をもっていたが、田舎で満足せず大都会で活躍したら、狩野山楽や海北友松等にひけを取らない人物であると評し、幕府御用絵師のような表舞台には立たず、自由に身をおく町絵師として生きた高田敬輔について、その活躍を惜しむ評価をしている。

三 研究の目的と方法

以上の先行研究を、美術史、浄土教教義、近世画論の三つの観点から、問題点として捉えたことを究明するため、次のような方法をもって研究の目的としたい。

① 高田敬輔の画業が、『敬輔画譜』『高田敬輔翁畧伝』の伝記の域を出ていないこと。

高田敬輔の画業については、『敬輔画譜』『高田敬輔翁畧伝』に詳細に述べられ、各画論にも絵師として高い評価を得ている。

しかし、本論文で取り上げる「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」については、作成の経緯は触れられているものの、全体構成や部分構成について詳細な説明は無く、図録に数行の解説文で紹介される程度である。

つまり、高田敬輔の表現の視点に立った解釈が希薄であるということである。

よって、高田敬輔が『選択本願念仏集』や『無量寿経』をどのように理解し、その中のどの部分、どの文に着目し、一般大衆の眼に反映させるように絵画表現の工夫がなされたかを研究のねらいの第一とするものである。

② 「絵解き解説書」が概説的であり、典拠が不十分であること。

浄土宗の教理を絵画表現したという視点に立てば、制作の過程、背景等は諸氏が等しく取り上げるところであるが、浄土教的教義の内容について詳細に解説した例はなく、絵解き解説書として、湖月『選択集十六章図説』堀尾貫務『選択集十六章図略解』を挙げることができるが、その解説内容には、典拠が示されず概略的な解釈に留まり、不十分であること。

そこで、本来の『選択本願念仏集』『無量寿経』に立ち返って、高田敬輔の描く絵相が、经文や論疏のどのどの部分を根拠にしているのか明確に提示することにより、どのような意図で描かれたか知ることができる。と考える。

③ 敬輔を取り巻く浄土宗的環境を究明すること。

浄土宗の根本聖典である『選択本願念仏集』『無量寿経』を絵画表現できるほど、高田敬輔に教義を深く身につけさせた多数の宗教関係者の中で、特に親交の深かった浄土宗的環境を構築した僧侶として、良照義山、明誉古磻、雲誉忍海が挙げられること。

浄土教の仏理を教授し、「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」の作成にあたって賞賛を与えた良照

義山。狩野派の画法に加えて、雪舟様や大画の法を師事した明誉古礪。さらに、町絵師の敬輔と画僧の立場の忍海について、「仮名書き選擇集」の挿絵の相違点や『無量寿経』を表現した敬輔「無量寿経曼荼羅」と忍海「大経曼荼羅図」とを対比的に考察をすることにより、三者それぞれとの関連性が、さらに明らかになると考える。

④ 皇族との関係性を明らかにし、高田敬輔の存在価値を評価すること。

國賀由美子氏・山本ゆかり氏の『御室御記』に関する翻刻資料は、仁和寺に出入りしている事実の確認や僧位叙任の経緯を知る根拠となる重要な資料であることが確認できた。

仁和寺法親王からの官位や法橋・法眼を叙任されたこと。「無量寿経曼荼羅」に書き入れをした林丘寺宮松領元秀や「選択集十六章之図」作成を命じた皇太后等の皇室関係者との関連性を明かすことによって、法眼絵師としての存在価値を高めることができると考える。

⑤ 「選択集十六章之図」の及ぼした影響を考察すること。

「選択集十六章之図」は、迷える衆生が念仏を唱えることによって極楽浄土に往生できることを説いた法然の『選択本願念仏集』に基づいて描かれたものであるが、木版印刷であることから大量に頒布され、浄土宗の僧侶や檀信徒は勿論のこと、意外な方向性として、大正期に浄土真宗系の「秘事法門」にも使われたとされる形跡があることから、影響を及ぼした一例として考察を加えることにする。

また、平成期においても、高田敬輔の原版が流用され、画僧忍海画とされる「彩色版・選択集十六章之図」が、高田敬輔の作画であると公表されるに及んでいることから、敬輔の作品が現代にも影響を与えている事実を確認する。

⑥ 「無量寿経曼荼羅」の及ぼした影響を考察すること。

「無量寿経曼荼羅」は浄土宗の根本聖典である『無量寿経』の教義を絵画表現したものであるが、高田敬

輔が描いた同時期（延享年間）に、雪舟様の画法や大画の法を師事したとされる明誉古磧が『無量寿経』の教義を描いた「大経曼荼羅図」を作成していることから、対比的に考察することにより、敬輔は町絵師、古磧は画僧の立場での作画であることを究明する。

さらに、「無量寿経曼荼羅」について詳細に解説した随天の『大経曼荼羅開壇記』の内容について、真言宗の諦忍が「坐具」について批判したことにより、浄土宗の震純も『弾坐具顕正録』で対抗し、他宗の僧侶との論争を引き起こすほど影響を与えたことを提示し、「無量寿経曼荼羅」の価値を評価したい。

以上のようなねらいと方法に基づいて、高田敬輔の「選択集十六章之図」と「無量寿経曼荼羅」の絵相を精査し、敬輔がどのような思いを込めて浄土の世界を描こうとしたか究明する。

四 本論文の概要

本論文は、以下の五章によって構成される。

序章は、一に『研究目的』を掲げ、二に『先行研究と問題の所在』と題し、美術史的観点、浄土教教義の観点、近世画論の視点から諸氏の論考を検討し、問題点を明らかにする。そして、三に、問題点を踏まえて『研究のねらい』を設け、究明する『方法』を探ることにし、四に『本論文の概要』を提示する。

第一章『絵師高田敬輔の主な画業と宗教的環境』では、『敬輔画譜』の「高田敬輔翁畧伝」や『高田敬輔と小泉斐』等の図録資料等を手がかりに、第一節では、どのような生涯を送り、どのような画業を成したのか検討する。そして、主な仏画の作成について時系列的に一覧表を作成する。第二節では、高田敬輔の浄土宗的環境を検討するために、大きく影響を与えたと考えられる良照義山、明誉古磧、曇誉忍海の浄土宗僧侶を『洛東華頂義山行業記並要解』や、近世画論、「忍海上人伝」等の諸資料を通して関わりをみるとともに、三者の関連や関係年

譜を作成し、相互の影響を明らかにする。

第二章《「選択集十六章之図」の概要》では、第一節で「選択集十六章之図」の全体の構成がどのようなになっているか検討する。第二節では、高田敬輔原版の「選択集十六章之図」と明治期の銅版「選択集十六章之図」の掛幅二種と解説書である湖月『選択集十六章図説』と堀尾貫務『選択集十六章図略解』と「ひらがな選択本願念仏集」として挿絵が組み込まれた『通俗図絵選択本願念仏集』と『和字選択本願念仏集』の計七本の資料を対比することにより、類似点や相違点を検討し、敬輔作成の意図を探るとともにそれぞれの特徴を把握する。

そして、第三節では「選択集十六章之図」の十六章各章の絵相について、原典とする『選択本願念仏集』の論述の典拠を明らかにしながら、元祖法然上人の説示を繙き、高田敬輔がどのようなことに着眼して描いたかを読み解いていくことにする。

第三章《「無量寿経曼荼羅」の概要》では、第一節で「無量寿経曼荼羅」を詳細に注釈した『大経曼荼羅開壇記』の「靈應」「定月」「随天」それぞれの序を読み解くことによって「無量寿経曼荼羅」制作の背景と経緯を明らかにする。第二節では、「無量寿経曼荼羅」の各絵相の配置と概要を把握するために、「連察」の題賛や款記、各絵相の配置、『大経曼荼羅開壇記』の総科と「無量寿経曼荼羅」の標文を対比検討する。第三節では、「無量寿経曼荼羅」の《延享本》と《天保本》を比較検討し、相違点を明らかにする。第四節では、「無量寿経曼荼羅」の款記書き入れを行った林丘寺宮松領元秀尊尼の存在や皇室関係者との関係を明らかにする。

第四章《「無量寿経曼荼羅」の部分構成》では、各部分の絵相について具体的に『無量寿経』の经文や『大経曼荼羅戒壇記』を踏まえながら検討を加え、何を表現したのか明らかにする。第一節では、『無量寿経』の全体構成を描いた「明能説釋迦序正流三分」について考察する。第二節では、「述所説彌陀行成攝三段」の「所行（弥陀因位の願行）」について、第三節では、「述所説彌陀行成攝三段」の「所成（弥陀果上の身土）」について、第四節では、「述所説彌陀行成攝三段」の「所攝（弥陀現在の利物）」について、それぞれ経論を基に明らかにし

ていく。

第五章 ≪「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響≫では、第一節で「選択集十六章之図」が及ぼした影響として、大正期の資料から浄土真宗系の「秘事法門」にも「選択集十六章之図」が使用された形跡があること、またごく最近の出来事として、忍海画とされる「彩色版・選択集十六章之図」が高田敬輔原版であると誤報道されていることから、後世まで影響を与えている事実を検証する。さらに、第二節では、「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響として、敬輔が描いた同時期（延享年間）に、古碕も『無量寿経』の教義を描いた「大経曼荼羅図」を作成していることから、対比的に考察することにより、敬輔は町絵師、古碕は画僧の立場での作画であることを究明する。また「無量寿経曼荼羅」について詳細に解説した随天の『大経曼荼羅開壇記』の内容について、真言宗の諦忍が「坐具」について批判したことにより、浄土宗の震純も『彈坐具頭正録』で対抗し、他宗の僧侶との論争を引き起こすほど影響を与えたことを提示し、「無量寿経曼荼羅」の存在価値を評価する。

終章では、≪高田敬輔の描く浄土の世界≫として、迷いや苦悩を抱えた現世の大衆のために、念仏の行者は西方極楽浄土へ往生ができるという救いの道を、老若男女、文字を読めない者にも理解できるように、具体的に絵画表現したものであることを再認識すること。

そして、高田敬輔の描いた浄土の世界は、念仏行者が求める西方極楽浄土往生への ≪道しるべ≫として「選択集十六章之図」があり、現世を厭い離れて阿弥陀仏とともに生きる ≪往き先≫を表出したのが「無量寿経曼荼羅」であるという、高田敬輔が想う理想の世界が描かれていることを知ることができ、念仏信仰の指針として存在した優れた作品であるという結論を得ることにする。

(注2)(注1)

土居次義「天球院障壁画と『敬輔画譜』」(『近世絵画聚考』芸艸堂出版部 一九四八年 六九頁)

土居次義「信楽院の高田敬輔(上)・(下)」(『季刊アート』21-2、21-3 マリア書房 一九七三年)【『季刊アート』21-3 五六頁】

「しかし敬輔の仏画としては、信楽院所蔵の無量寿経曼荼羅が重要資料とみられる。それは、木版着色に成るものであって、堅一七〇糎、横八八糎を参する大作である。その原図は伝存しないようだが、敬輔が正徳四年(一七一四)七月に描くところであり、その版本は現在も末裔の高田家に保存されている。そして、信楽院所伝の版画には美しく着色されているが、それは敬輔自身の筆に成った可能性が大きい。というのは、敬輔の原図を版におこしたのは、敬輔の子三敬であって、その年代は延享二年(一七四五)であり、それは敬輔の生存中のことであるからである。このような本図の制作事情に関しては、三敬がその版画の左端下方にしている左の銘記および上端の増上寺大僧正連察の賛文の年記によって明らかであるが、銘記には、

此曼荼羅者正徳甲午初秋家翁法眼敬輔經

華頂義山長老之檢閱而自図今在延享仲冬

彫刻用流行于世云江州日野町

高田三敬
信楽院蔵版

とあり、連察の賛文の年記には、

于時延享乙丑冬十月

とするされている。なおこの版画の右上方には

無量寿経曼荼羅并流通文者林丘寺宮松領

元秀尊尼御筆

と刻されていて、本図上方の題字と經文および図中の書入れが林丘寺元秀尼の筆に成ることが知られる。

ただし現在信楽院には十六章図(版本)は伝えられないが、高田家には両図の版本が無事保存されている。わたしは、先般これら両図の版本から版画家徳力富吉郎氏の手を煩わして版画を刷ってもらった。

敬輔がこの無量寿経曼荼羅の原図作製に当たっては、知恩院の義山上人の教示によったが、描写は微細を極め、非常な力作である。ここ

にはその図様の詳細をのべる余裕はないが、彼の非凡な描写力とその辛苦のほどは十分にうかがい得られるものがある。(以下略)

(注3) 土居次義「高田敬輔の襖絵」(『國華』九八三號 國華社 一九七五年 九頁)

(注4) 國賀由美子「京狩野門流 高田敬輔雜考」(『日本画の情景』静岡県立美術館、滋賀県立近代美術館 二〇〇〇年 一九七頁)

「敬輔は永敬についた後、師が没したこともあって京狩野家を離れて、数年間仁和寺法親王に仕え、さらに淨福寺の画僧古磧について雪舟を学んだという。これにより独自の画法を打ち立て広く画名を知られるようになったと、諸書は伝える。(中略)

そして敬輔自身、時代の美意識、注文者の好みに応えんと、中世やまと絵に学び、探幽の影響を受け小奇麗に瀟洒化する傾向に馴染めなかったと思われる。早すぎる首領の死を経て、敬輔は自らの行く末を模索したことだろう。結果彼はこの偉大な難物「雪舟」を学び強い影響を受けることになる。だがその前にそこに介在したのは山雪であり、いまだ法橋期の敬輔作品には大きな影を落としているのである。

敬輔没後の文化元年(一八〇四)、遺族や門弟はその遺作や所蔵した古画粉本を縮図し上梓した。『敬輔画譜』三卷である。その第三卷末尾には永敬筆「呂洞賓図」、古磧筆「釈迦文殊普賢図」の縮図を載せ、さらに最後に山雪の「竹林七賢図」を収めている。永敬・古磧といった師の作品に続き、山雪を載せているのは興味深い。竹林七賢は敬輔も自家薬籠中のものとした画題である。敬輔にとって山雪の存在が大きかったことは、周囲の人々も認めるところであつたのだろう。(以下略)

(注5) 國賀由美子「近江の画人高田敬輔再考―仁和寺藏『御記』による知見を手がかりとして―」(『滋賀県立近代美術館研究紀要』第4号

二〇〇二年 一七頁)

敬輔の師である狩野永敬や敬輔が、仁和寺に出入りしていることがわかる貴重な記述である。

「『御室御記』より

元禄三年五月 七日 狩野縫殿(筆者注、以下同じ：永敬)来

同 四年七月二十二日 御対面狩野縫殿敬甫(輔)安□^(虫損)盆^(明か)御礼来^(安明は永敬男、永伯。この時五歳)ル(敬輔十八歳)

同 年九月二十二日 狩野縫殿松之丞(永敬弟・永梢)^(虫損)□^(虫損)樹来

同 年九月二十五日 狩野縫殿来、絵被仰付

同 年九月二十六日 狩野縫殿松之丞兩人来

同 年九月二十七日 狩野縫殿来（故幸家（九條幸家、寛文五年薨去）祭、如例献上也）

同 年九月二十九日 狩野縫殿松之丞来

同 年九月三十日 縫殿松之丞、今日迄二絵仕候

同 年十月二日 狩野縫殿同松之丞来、押絵等被仰付

同 年十月七日 狩野縫殿同松之丞金子被下

同 年十月十一日 狩野松之丞先日為御礼来

同 年九月七日 狩野永敬御前候、富士絵……

同 年九月十三日 狩野縫殿参上図 御前

同 年七月二十二日 狩野永敬盆御礼二来、於 御前屏風絵……

同 年五月十三日 狩野縫殿来図 御前候

同 年五月十六日 狩野縫殿□□□参上

（以下、五月二十三・二十八日 永納、および永敬の弟子が、門跡に御目見得御礼のために参上）

（同年七月二十八日、盆御礼に永敬来る。八月四・十日、弟子二・三人を引連れ、永敬御用を勤める。

……十一日条の石山寺縁起五卷返納と関連か）

同 年八月二十五日 狩野縫殿来（この日は山本素軒も召出され、御前にて図す）

同 年五月十四日 狩野縫殿窺御機嫌来

（狩野縫殿の記事は、右の条を最後とする。同十五年（一七〇二）永敬没す。四十一歳）

また、敬輔の法眼叙任の願書提出の記述については、次のように記されている。

「享保二〇年三月十一日 絵師 高田敬輔位階願之事

十三日 高田敬輔法橋奏願之事

右無別条也

十五日 法橋 免許 江州絵師高田敬輔

御目見得御口祝被下之

元文四年九月二十三日 高田敬輔法眼之願書出之、則添一札等も被出之也

十月 三日 高田敬輔法眼願之事無別条京都へ致言上事

四日 高田敬輔願之事追而從是可申入候、尤明日ニも大岡春ト法眼 御免之年月日

等書付差出可申旨御申渡候也

十二月 七日 絵師高田敬輔召寄、則御普請方内蔵介迄書状添五条家差遣也〔是先達而委細内蔵介入魂有之也〕

二十七日 京都御新殿絵被仰付候、故金五百疋高田敬輔被下之、書状ニ而也

寛保三年閏四月 六日 高田敬輔弟子渡是三法橋願差出

十八日 一、高田敬輔弟子信濃国飯田町渡是三御出入被仰付、依之金百疋差上候

一、渡是三法橋 御免許ニ付〔難病ニ付〕〔名代高田敬輔江渡ス〕

十月 八日 法橋 御免許礼及延引候得共遠国候故漸々只今上京仕候由也、金百疋献上之 渡是三

とあり、敬輔の法眼叙任の願書提出の経緯を知ることができるのである。

(注6) 國賀由美子「訳注『敬輔画譜』附『高田家系図書』」(『滋賀県立近代美術館研究紀要』第5号 二〇〇四年 三四頁)

高田家伝来の「系図書」(図録『高田敬輔と小泉斐』滋賀県立近代美術館七七頁)の中の箇条書きに記された経歴を取り上げている。

「一 敬輔俗名徳左衛門初画銘高田豊前大目藤原隆久ト印御座候其後ノハ藤原ノ敬輔ト御座候則右印ニモ藤原敬輔と御座候

一 師匠盤京都狩野縫殿之助永納之子永伯之親永敬之門人なり後大和国西巖寺古閑^西和尚ノすすめによりて雪舟之筆意ニ御座さ候よし

一 又茶事ハ松尾ヲ傳フ傍ニ樂ノ陶器ヲ作ルことも工ミなりと云う

一家竹隱齋又梅桃庵トモ御さ候

一五十才ニて法橋六十歳ニて法眼

一六十後眉間毫翁ト御さ候

一様ヲ捧女院御所即被為召出於花頂義山和尚被為仰付圖說終開板かくの通書有之候物御さ候

一御室御所へ被為召出天下和順圖奉捧任法橋右ト一所ニ印シ有之候

一正徳甲午初秋無量壽經曼荼羅之圖經嘉花頂義山長老之檢閱版下圖之

一林丘寺宮元秀尊尼流通文増上寺大僧正連察之御賛被添延享乙巳仲冬於東都願上之上彫刻

一系圖書ニ高田三郎源重宗三男重慶嫡高田太郎重之嫡高田六郎重正十三代滿輔

《以下、系図、省略。》

「

とあるように、正徳四年に「選択集十六章之図」を作成し、「女院御所」へ召し出したことと、華頂義山長老から検閲を受け、開版したこと、また、「無量壽經曼荼羅」には、林丘寺元秀尊尼から流通文、増上寺大僧正連察からの題賛を得て、延享二年に東都に願い上げて版刻したことを知ることができる。ただ、この年記については、現存する作品の款記から、法眼叙任を六十二歳とみる國賀氏は、この「系図書」の年記には齟齬があることを指摘している。

(注7)

國賀由美子『高田敬輔と小泉斐一近江商人が美術史に果たしたある役割―』（滋賀県立近代美術館、栃木県立美術館 二〇〇五年 一七六頁）図録の中で、『敬輔画譜』の編纂の経緯を分析し、「近江商人が美術史に果たしたある役割―『敬輔画譜』から読み取れること―」と題した論考において、次のような結論を導き出している。

「つまり『敬輔画譜』はあくまでも日野の文化人たちが中心となって版行に及んだものであり、日野の文化人たちの芸苑交遊録としての性格を有していたのである。寛政から文化年間、全国的に実証主義への眼が開き、本草学や医学の発展とともに、文藝への興味も高まりをみせた。『敬輔画譜』は、このような社会の動きと、そこに占める日野の位置付けを明確にする、同時代史料でもあるのだ。」

とし、『敬輔画譜』は、敬輔の画業を賞讃するとともに、日野の文化人たちの芸苑交遊録としての性格を持っていたことから、敬輔の画業を伝えるばかりでなく、日野の文化遺産的存在として、多くの文化人の関心の中核を担うという大きな役割を果たしたものであると評価している。

(注8) 國賀由美子「島崎家伝来「書画帖」について」(『文化史学の挑戦』思文閣出版 二〇〇五年 二五一頁)

高田敬輔の生地、江州日野の島崎家に代々伝えられた「書画帖」二冊本(『高田敬輔と小泉斐』展図録一〇二〜一〇三頁に掲載)を通して、計四十一点の作品の筆者、内容、署名、印章、年紀等で分類し、所見が述べられている。また、大きく、日野、水戸及び下野、仙台、京の四グループに分けられることとその交友関係の広範囲さを提示している。この島崎家と関係性については、

「江戸中期の近江の代表的画人といえは高田敬輔(延宝二・一六七四〜宝暦五・一七五五 号は竹隱斎。眉間毫翁と称す)であるが、島崎家の一族の島崎雲圃は彼の高弟のひとりであった。」

と島崎雲圃が敬輔の高弟であったことが記されている。

國賀氏はこの論考で、多くの揮毫者は勿論、その間に介在する人物との交友関係等から、近江商人の美術・文化への関与について一つのあり様が提示できるのではないかと述べている。

(注9) 國賀由美子「高田敬輔筆 信楽院天井畫」(『國華』一三六八号 國華編輯委員會 二〇〇九年 三三頁)

高田敬輔の菩提寺である近江日野の信楽院本堂に描かれた天井画について、外陣中央室の「雲龍」、北室「八大龍王」、南室「韋駄天」、内陣中央室の「蓮華・蓮瓣・樂器・瑞鳥」、南北両室の「飛天」について概説をしている。

一は、「雲龍」「飛天」「韋駄天」は、黄檗宗寺院の尊像配置と深くかわること。

二には、「蟠龍」図は禅宗寺院の法堂や山門に描かれるのが常であること。

三には、禪宗では韋駄天の信仰が盛んで、宇治の万福寺の天王殿の布袋の背面に韋駄天が祀られ、護法善として大雄寶殿の本尊である釈迦、阿難、迦葉の三尊像と対面して護衛していること。

信楽院外陣南室の「韋駄天」図は、宝剣を振りかざし、舍利を盗む四者の捷しょうしつ疾つき鬼を追う姿を描くが、敬輔独特の絵相で描かれていること。

四には、従来、外陣北室天井画が「八大龍王」図とされてきたが、実際には九者が描かれており、梵天、帝釈天を中心に、釈迦説法の会衆である天部八部衆の中から七者が描かれていること。

等をあげ、阿弥陀如来が本尊の浄土宗寺院である信楽院に、釈迦に関わる黄檗禅の画様が取り入れられていることを指摘し、その背景に黄檗

宗寺院の正明寺を庇護した後水尾法皇や法皇の皇女林丘寺開基照山元瑤や「選択集十六章之図」の図間に書き入れをした林丘寺二世松領元秀、さらに承秋門院との接点を見出し、皇族や黄檗僧との影響を例示している。

また、信楽院天井画との関連から浄光寺「八相涅槃図」、信楽院「天下和順図」、正明寺「関羽龍虎図」等を検討し、中国南宋、元、明の中国絵画の学習を明らかにするとともに、近江商人の黄檗宗寺院との関わりから、浄土宗、黄檗宗の双方から多くのものを学んで画業に反映させたとしている。

そして、次のような結論で結んでいる。

「敬輔の信楽院天井画は、当時の最新文化を反映したものであった。しかし後水尾法皇も憧憬したニューモードとはいえ、浄土宗の信楽院に黄檗禪に根ざした敬輔の繪畫世界が展開したのは、かなり特殊な例と言わざるをえないであろう。これには、地元でも崇敬される敬輔の畫修行の遍歴と、商人や僧侶ら日野の文化人たちの先進性、長崎貿易をはじめとする富裕な経済力を支える事情が、大きく關與している。しかしその詳細な成立の背景については、今後も究明すべき課題が残される。」

この論考では、敬輔が黄檗禪の影響を多大に受けたということと、皇室との関与及び長崎貿易による近江商人の経済力にまで発展を見据えた新たな内容であり、多くの示唆を与えるものである。

加えて、信楽院の天井画の「八大龍王」図に九者が描かれているという事実を目の当たりにし、先入観で絵画を評価してはならないという、美術研究の基本的な姿勢が問われる貴重な論考である。

(注10) 國賀由美子「高田敬輔の画業―黄檗絵画との接点―」(『黄檗文華』一三〇号 黄檗文化研究所 二〇一一年 五九頁)

高田敬輔の菩提寺信楽院の一連の黄檗禪に関連する作品群を通して、近江商人の黄檗宗寺院との関わりや長崎貿易による日野商人の経済力について、再度、考察が加えられたものである。

黄檗宗大本山万福寺の参道を寄進した近江商人の田中藤左衛門と矢野儀右衛門の近江商人の経済力と黄檗文化との関わりから、高田敬輔の菩提寺信楽院の作品群に黄檗文化の影響がみられるのは、後水尾法皇の皇統や法統によって、黄檗宗や浄土宗の寺院が加護された影響があることが取り上げられている。

「つまり、義山、承秋門院の智遇を得た敬輔が浄土宗での活躍を経て、後水尾および霊元皇女である林丘寺宮たちとも繋がりをもち、地元
の黄檗宗寺院、そして黄檗文化へと接近する大きな足がかりを築いた。（中略）

さらに敬輔と黄檗宗との接点をさぐれば、敬輔は義山に加え鳳潭宗叡（一六五九～一七三八）にも師事したことに注目される。僧鳳潭は
華嚴宗の学僧だが、日野正明寺とも縁深い黄檗僧の鉄眼道光（一六三〇～一六八二）に師事し、延宝六年（一六七八）長崎で外典を学んで
インドに亘ろうとするが、断念したという経歴をもつ。鉄眼は「一切経」出版の大事業を果たしたことで、著名な高僧で萬福寺の宝蔵院
を興し『大蔵経』六千九百余巻の初刷を後水尾法皇に進上した。のちこれらは法皇自らによって正明寺に寄進され、先述の第三代住持晦翁
によってこのため建立された同寺の経堂（元禄九年竣工、滋賀県指定文化財）に、今なお伝えられている。（以下略）

と述べられ、華嚴宗の鳳潭にも師事したことから、鳳潭の師の鉄眼←鉄眼の『大蔵経』出版→鉄眼の萬福寺宝蔵院建立→『大蔵経』の後水尾
法皇への進上→後水尾法皇『大蔵経』を正明寺に寄進→『大蔵経』現存、という構図が出来上がり、敬輔の黄檗文化へ深い繋がりを知ること
ができるのである。

そして、敬輔の黄檗文化と深い繋がりのある画修行については、

「長崎貿易をはじめとする日野商人の経済力を支えた背後には、商人や僧侶ら文化人たちの先進性があった。そして、敬輔の画修行の遍歴
は、黄檗文化の摂取と深く関わり、画人としての先進性を今に伝えるのである。」

とまとめている。

(注11) 『近江日野の歴史』第五巻 文化財編 四十頁（編集…日野町史編さん委員会 二〇〇七年）

* 國賀由美子氏担当…第一章 美の香り 第一節 絵筆の美 絵画 第二項 日野出身の画人たち 第三項 日野ゆかりの画人たち
日野町に残る文化財とその概要とともに個々の作品を論じている。その中の絵画部門を担当している。高田敬輔に関しては、「(一) 高田敬
輔とその門流」と題し、日野町の代表的文化人として紹介している。

(注12) 山本ゆかり「高田敬輔研究」（『鹿島美術研究』年報別冊 第十九号 鹿島美術財団 二〇〇二年 二九八頁）

(注13) 山本ゆかり「月岡雪鼎・磯田湖龍斎等への僧位叙任について——『御室御記』に関する報告——」（『浮世絵芸術』No. 一三二 一九九九年 国際浮

四、絵師へ僧位が下されるまで

《前略》まず、申請の事前に絵師自身から（雪鼎の場合は大坂町奉行所の添書も得たうえで）京都町奉行所へと推免の申立願書が出される。武家側の承認を得てから、仁和寺へと申請が差し出される。その際、師匠の等の保証人を立てることと、仁和寺への出入画師となることが第一条件であったようだ。しかし、雪鼎の場合など出入りの許可と同時に叙任願が提出されていることから、これは形式的なもので、出入願いと叙任願は同時に仁和寺に提出されていたと思われる。申請されると評定にかけられ早ければ翌日にも許可される。同時に翌日には武家伝奏を介して武家側へと奉書が差し出される。武家側・京都所司代からの証人が得られると、武家伝奏から仁和寺へ口頭で伝えられ、正式な叙任の宣旨が下された。《以下、略》

（注14）

マニー・L・ヒックマン「〔湖東〕出身の画家、高田敬輔」、『高田敬輔と小泉斐一近江商人が美術史に果たしたある役割―滋賀県立近代美術館、栃木県立美術館 二〇〇五年 六頁）

（注15）

脇坂淳「永敬の和画と漢画」、『京狩野の研究』中央公論美術出版 二〇一〇年 八八頁）

京狩野派四代目狩野永敬について論及する中で、高田敬輔が永敬と仁和寺に出入りしていることについては、右の（注5）で提示した、國賀氏の研究資料『御室御記』をもとに論述した見解と同様である。

（注16）

五十嵐公一「狩野永敬の研究」、『鹿島美術研究』年報別冊第十八号 鹿島美術財団 二〇〇一年 一一頁）

五十嵐氏は、京狩野派四代目当主の狩野永敬の生涯を概観し、その作品に基づいて永敬を絵画史の流れや同時代の状況を見据えた横の関係から論考をすすめているが、その中で、高田敬輔と仁和寺関係について、仁和寺への出入りや法親王への出仕は、師の永敬と仁和寺の関係からであり、僧綱位の叙任も仁和寺であると指摘している。

ここで注目したいのは、敬輔の法橋位が享保八年（一七二三）、法眼位が享保十八年（一七三三）としていることで、その根拠としている資料が、右の（一）土居次義氏の研究の③「高田敬輔の襖絵」の項で提示した論考からの引用であり、先の國賀由美子氏の『御室御記』で検証された見解とは大きく異なることを指摘しておきたい。

選 擇 集 十 六 章 之 圖

選擇者者蓋淨者之圖也
也予常置之座右以自護心
行也亦有年矣夫耳目之接物
也各有感發其心而目之接
物也最易感發而物又最善
於畫圖也人或有對況掣之
圖則悚然畏懼急生懺悔之
心者豈有看樂土之變則究
爾追趣俄欲遊其境者則豈
非目之接物也最易感發而
物又最善於畫圖也耶予昨
歲選擇一部十有六章每章
形容人之畫圖都為一軸以
掛案壁雖魚虎頭之妙手聊
似陳氏之巧思今秋偶遊京
師之次自携示華頂山公公
一鵬飲實曰善哉子之有為
人之佳趣也蓋為壽報子唯
而去遂從其言付之剞劂
世之譏與誦能予如越人肥
瘠也
正德甲午季冬也別蒲生月
野高田敬輔於平安庵寓

五十嵐公一「狩野永納と狩野永敬永敬」(『近世京都画壇のネットワーク』吉川弘文館 二〇一〇年 一九〇頁)
高田敬輔 原版「選択集十六章之図」

（紙本摺印着色 縦一一五・八×横五一・五 個人蔵）

(注19)

「選拔曼陀羅尊像」

(絹本着色)

縦一三七・〇×横六八・〇

江戸時代

知恩寺蔵



(注20)

「選撰集十六章之図」

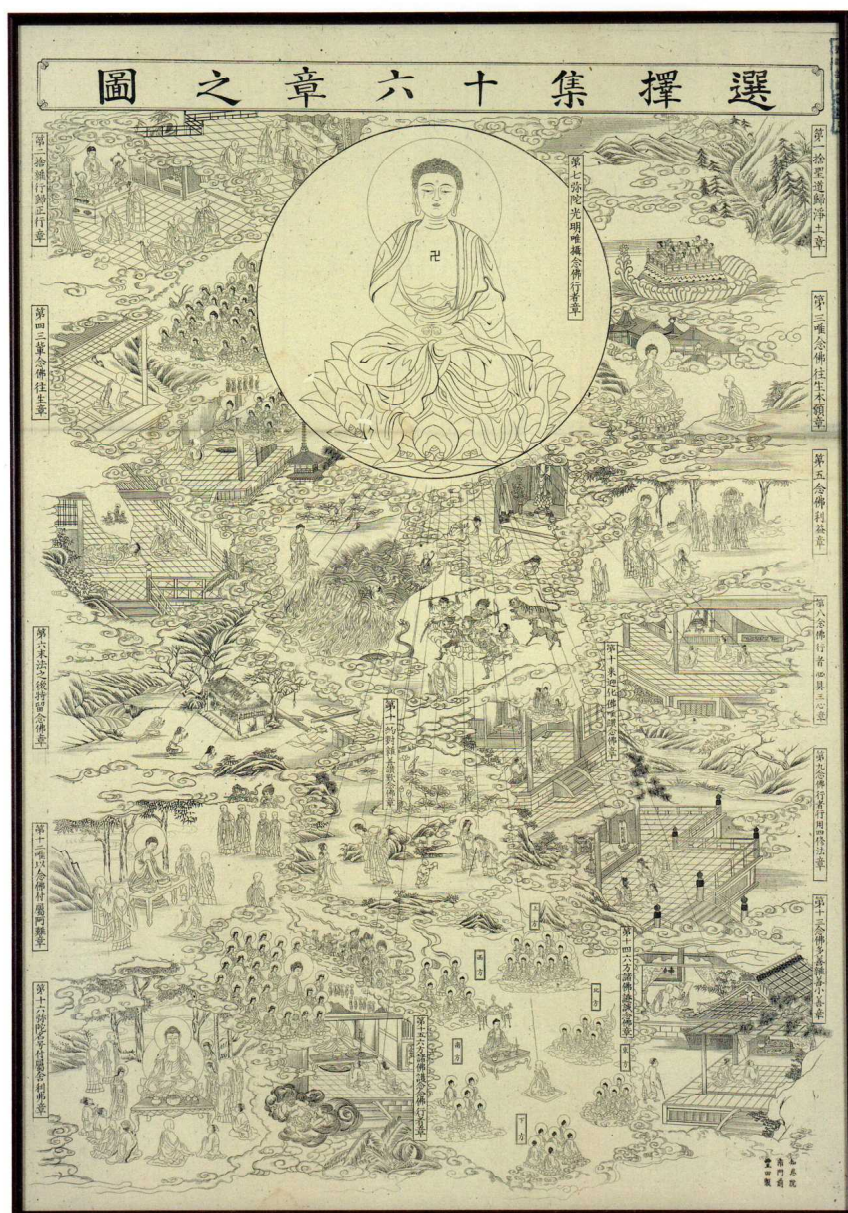
(紙本刷印 縦一二四・三×横五六・二 江戸時代 京都市妙泉寺)



(注 21)

「選撰集十六章之図」

(銅版印刷 縦六四・二×横四四・六 明治時代 佛教大学図書館蔵)





(注 22)

高田敬輔原版「無量壽經曼荼羅」

(紙本刷印着色 縦一五三・二×横六九・〇 江戸時代 延享二年(一七四五) 個人蔵)

(注 23)

「無量壽經曼荼羅」

(紙本摺印着色

縦一四〇・六

横六五・七

江戸時代

延享二年(一七四五)

亀岡市大圓寺蔵)



(注 24) 坂野泰巨『選択集入門―選択集十六章之図―』(文化書院 一九九八年刊)

この書は、高田敬輔画の「選択集十六章之図」の各章の絵相と、それを解説した堀尾貫務の解説書である『選択集十六章図略解』を対照して絵解きをしている。

だが、*高田敬輔原版「選択集十六章之図」と湖月の解説書『選択集十六章図説』《江戸期》

*銅版「選択集十六章之図」と堀尾貫務の解説書『選択集十六章図略解』(豊田製)《明治期》

であるので、堀尾貫務の解説書『選択集十六章図略解』は、高田敬輔の描いた原版の「選択集十六章之図」とは異なる明治二十四年の刊行のもので、構図の異なる銅版画の「選択集十六章之図」である。むしろ、高田敬輔と同時期の湖月の解説書『選択集十六章図説』を用いた方が有効であると考ええる。

当然のこととして絵解きの内容に齟齬が生じる。主な相違点は次のようなものである。

① 第一章……浄土門の易行道を表す乗船には、敬輔原版八人、銅版画十人。解説は十人と説明。

② 第二章……五種正行の阿弥陀仏が敬輔原版は明瞭、銅版画は不明瞭。むしろ五種雑行の三尊を強調。

③ 第三章……二百一十億の諸仏の浄土を象徴する堂宇が、敬輔原版二十一字、銅版画六字。

④ 第六章……末法の世に瘦せ衰えた衆生の姿が、敬輔原版四人、銅版画三人。銅版画と一具であれば三人とすべきだが、敬輔原版にそって四人と説明。

⑤ 第八章……深心を表す絵相が敬輔原版は無し、銅版画は出家、男女の在家の三人が仏前で合掌。敬輔原版の絵相に合わせて描かれていない深心についても解説。

⑥ 第九章……敬輔原版は出家、男女の在家の計三人。銅版画は出家、女在家二人、童子一人の計四人。解説は、出家、在家、男子、女人とあり、四人であるが曖昧。

⑦ 第十一章……敬輔原版は、出家二人、在家、男子、女人の五人、銅版画は、出家一人、在家四人、童子一人の計六人。説明は、出家、在家、男子、女人の姿あり、とある。

(注 29)(注 28)(注 27)(注 26)(注 25)

新井俊定①「選択集十六章之図」について(『浄土』一九九八年五・六号 十六頁 法然上人鑽仰会発行 一九九八年五月)
新井俊定②「和字選択集について」(『法然仏教とその可能性』佛教大学総合研究所編 法蔵館 二〇一二年刊 四〇七頁)
大室了皓「選択集絵解き物語」『浄土』一九九八年五・六月号・九月号 法然上人鑽仰会発行 一九九八年五月・九月刊)
福原蓮月「『選択集十六章之図』について」(『印度學佛教學研究』第三十卷第一号 日本印度學仏教學会 一九八一年十二月 一八三頁)
鷲津清静「通俗圖繪選擇本願念佛集について」(『西山学会年報』第十四号 西山学会 二〇〇四年十二月 四四五頁)

この論考で取り上げられている『通俗圖繪選擇本願念佛集』(高田敬輔画の絵相)と『和字選択集』(忍海上人画の絵相)については、別項(第二章第二節)で対比しながら検討を加えている。

(注 37)(注 36)(注 35)(注 34)(注 33)(注 32)(注 31)(注 30)

中山高陽『画譚雞肋』(安永四年(一七七五))《日本絵画論大成第六卷 翻刻四〇頁 影印一三七頁》

黒川秀一「中山高陽と『画譚肋』」(『日本絵画論大成第六卷 二九八頁 二〇〇〇年 ペリかん社』)

三熊思孝編纂・伴蒿蹊校閲『續近世畸人傳』第五卷(寛政十年(一七九八)) 四二九頁)

宗政五十緒「三熊花顛伝」(『近世畸人伝・続近世畸人伝』二五八頁 一九七二年 平凡社)

宗政五十緒「解説」(『近世畸人伝・続近世畸人伝』五〇一頁 一九七二年 平凡社)

神谷浩「中林竹洞 画論と画作」(『日本絵画論大成第六卷 三二三頁 二〇〇〇年 ペリかん社』)

國賀由美子『近江日野の歴史』第五卷 六十頁(第一章 第一節 第二項日野出身の画人たち (六) 谷田輔長)

『敬輔画譜』「高田敬輔翁畧傳」(文化元年(一八〇四))

「 高田敬輔翁畧傳

高田敬輔。其先源氏。六世祖滿輔。稱高田右兵衛。永禄中。仕織田氏于尾州。其子輔重。稱長兵衛。輔重子信重信重。弟輔之。稱三右衛門。乃其所系也。始移居于江州日野郷。輔之子輔成。輔成子俊隆。稱長兵衛。後改徳左衛門。君者其嫡子也。名隆久。初稱徳左衛門。後號敬輔。少小好繪事。長而師狩野永敬。稍得其家法。後仕 仁和寺法親王。稱高田豊前。大目。有故始改藤原。居數年致仕偶逢古澗師。師謂君曰。公筆力勁健。宜取法於雪舟。是專倣楊師法。画益進。遂爲一家。卅人翕然號竹隱體。竹隱蓋其齋稱也。後頻遊京畿。一

時寓京東小松谷。與主僧慈光師尤善。寺中壁障皆其所画。又別圖五百羅漢水墨小像。俱奇觀也。見令藏其寶庫。君素愛佛理。謁峨山鳳潭師。又見華頂義山師深通淨理正德中。作選擇集十六章圖。山師一觀而謂之曰。善哉。是舉也。深得集中之趣。又作無量壽經曼荼羅

是圖明影一絲殆未得如繪又絲殆

山師揭之壁間。拱手嘆曰。公以画作佛事者耶。

皇太后亦命作十六章圖。圖成獻之。厚加褒賞。由是世人益知君之非庸流也。

仁和寺法親王。特召爲天下和順圖。

是亦壽經中事良伏天下和順日月南明國聖民安治德興仁務修禮讓也之

賞賜尤渥。命叙法橋位。無幾又轉法眼。自後稱高田法眼。先是 皇女林丘公尤重壽

經曼荼羅。因親書章段於圖間。又請緣山察公題贊其上。遂白官印頒于世。

是圖併十六章圖經壽經中雖有印字而藏經院中

時人榮之。又有二河白道之圖。亦出君之巧思。令

人模傳盛行于世。君晚年雲遊四方不常其居。是以足蹟殆徧諸州画名亦隨之矣。其画衣鉢北州。雖取法楊師。至於得意處。往々不拘規矩。其如道釋人物。或多不讓古人。山水則或用水墨。或用淡彩。其佗花卉翎毛。隨意點染間用濃墨。蓋出於楊師遺意云。又香魚遡水圖特妙。

世甚稱之。寬保延享間。遊東都。寓神田倉田某處。諸画者日多。初見市橋侯。侯禮待之又見讚州侯。作廿四將圖。寵遇尤渥。其佗所画不可枚舉也。緣山佛心院及礪川傳通院筆蹟令猶存君於佛画。廣險經軌。悉詳其法。一時應需。圖其涅槃像於本所羅漢寺。秉筆輕易。如

不經意。儼然巨幅。經勿而成。觀者成羣。以故其名大振。居四年。歸鄉後。荆梅桃菴。日棲息其中。蓋以庭中所有名也。君歿後。鄉人箕山先生。爲作梅桃菴記及竹隱齋記。君眉間有一黑子。中心生毫三莖。長可數寸。因號眉間毫翁。君年過八旬。居常棲心於西方。坐起

不忘佛。無一物芥帶于心。至此絕筆。可謂一世能事畢矣。君筆蹟傳人間甚夥。其存于鄉者。一時罹災。不爲不多哉。令特信樂院佛殿藻板雲龍。及天部像。僅存耳。又釋迦文殊普賢三聖墨画一幀。方七八尺許。及十三冥官圖。每幅圖一王。威嚴可怖。地獄變相二幀對之凜

然毛髮皆豎。幸存予舊寺。君延寶甲寅生。寶曆乙亥終。壽八十有二。塔于信樂院先塋之傍。號賢譽宗貞愚德居士。君娶中澤氏。生四子。嫡子正輔。字三敬。稱德左衛門。亦善山水。殆逼乃父。其佗技芸。悉無不綜。繼竹隱二世。叙法橋。轉法眼。二男敬眞。號兩少亦能書

画。殊名楊弓。一時無對。甲亡。三男保嵩。號茂兵衛。繼谷田氏。孫一德。字敬應。又稱德左衛門。夙慕先人之風。留意丹青。駸々不怠。繼竹隱三世。其子德輔、繼竹隱四世。外孫谷田輔長。亦能画。遊于東都水府之間。締交四方名士。以故人多知名。初其宗信重。亦

家日野。子孫相傳。至於敬德者。以丹青遊竹隱之門。獨擅入室之名。常漏月亭。叙于法橋。一德其弟子云。君門人於今稱白足者。臼井祥甫也。森宇內也。月岡雪鼎也。島雲圃也。祥甫才出時輩之右。早亡。惜哉。宇內號東敬。不失家法。雪鼎後之浪華。竟爲一家。以故

其名大聞。雲圃風流自誇好寫梅竹香魚遡水圖。尤用巧思乃令相共奉楊家聲。於是。乃祖之箕裘。庶乎綿々而不絕矣。可不謂盛乎。

寛政歳次庚申二月 前大聖老泉戒如、撰於平安緑天菴

老泉（朱文方印）

門戒之印（白文方印）

（ 高田敬輔翁畧傳

高田敬輔、其の先、源氏、六世の祖、滿輔、高田右兵衛と稱す。永禄中、織田氏に仕え尾州にあり。其の子輔重、長兵衛と稱す。輔重の子、信重、信重の弟、輔之、三右衛門と稱す。乃ち其の系する所なり。始めて江州日野郷に移居す。輔之の子、輔成、輔成の子、俊隆、長兵衛と稱す。のち徳左衛門に改む。君は其の嫡子なり。名は隆久、初め徳左衛門と稱し、のち敬輔と號す。

少小より繪事を好む。長じて狩野永敬を師として、梢^や、其の家法を得る。のちに仁和寺法親王に仕え、高田豊前大目と稱す。故に始めて藤原に改むるあり。居して數年にして致仕す。偶たま古澗師に逢う。師、君に謂いて曰わく。公、筆力^{けいけん}健^{けん}にして、宜しく法を雪舟に取るべし。ここに於いて、専ら楊師の法を倣う。画、益ます進み、遂に一家を爲すこと卅人にして、翕^{きゆう}然^{ぜん}たり。竹隱體と號す。竹隱は蓋し其の齋の稱なり。のち頻りに京畿に遊び、一時、京東小松谷に寓す。主僧慈光師と尤も善し。寺中の壁障、皆、其れ所画す。また別に五百羅漢、水墨小像を圖す。俱に奇觀なり。見るに其の寶庫に藏せしむ。君、素より佛理を愛す。峨山鳳潭師に謁す。また華頂義山師に見え、深く淨理に通ず。正徳中、選擇集十六章圖を作す。山師一觀して之れを謂いて曰わく。善きかな、是れ擧なるや。深く集中の趣を得る、と。また無量壽經曼荼羅を作す（是の圖、一經と區別して彰す。始未宛然、經文に對する如し）。山師これを壁間に掲げ、拱手して嘆じて曰わく。公、画作を以って佛事すといえるや、と。

皇太后、また命じて十六章圖を作す。圖成り、之れを獻ず。厚く褒賞を加う。是れに由り、世人益ます君の庸流に非ざるを知るなり。仁和寺法親王、特に召し、天下和順圖を爲す（是れまた壽經中の事、具狀す。天下和順、日月清明、國豐民安、崇徳興仁、務修禮讓、この態なり）。賞を賜うるに尤も渥し。命じて法橋位に叙す。幾ばくも無くしてまた法眼に轉ず。自後、高田法眼と稱す。

これに先だち皇女林丘公、尤も壽經曼荼羅を重んじ、因りて圖間に章段を親書す。また縁山察公に其の上に題贊を請う。遂に官に白し世に印頒^{きんぱん}す（この圖と十六章圖を併せて延享中に鑲^{きざ}む。梓は郷の信樂院に現藏せしむ）。時の人、之れを榮とす。

また二河白道の圖有り。また君の巧思、人をして模傳を盛行せしめ世に出す。君、晩年は四方に雲遊し、其の居を常とせず。これをして足蹟殆んど諸州を偏くして、画名またこれに隨う。其の画、衣鉢は北州。法を楊師に取ると雖も、得意に至る處は、往々にし

て規矩に拘わらず。其の道釋人物の如きは、或るは多く古人に譲らず。山水則ち或るは水墨を用い、或るは淡彩を用う。其の佗、花卉、翎毛、随意に點染する間に濃墨を用う。蓋し楊師の遺意に出づと云う。また香魚遡水圖、特に妙なり。世に甚だこれを稱す。

寛保延享の間、東都に遊び、神田、倉田某の處に寓す。諸もろの画は日に多し。初めて市橋侯に見ゆ。侯、これを禮待す。また讃州侯に見え、廿四將圖を作す。寵遇、尤も渥し。其の佗、所画、枚舉すべからざるなり。縁山佛心院及び礪川傳通院に筆蹟し、なお存じしむごとし。君の佛画、廣く経軌を險じ、悉く其の法に詳らかなり。一時、需めに應じ、其の涅槃像を本所羅漢寺に於いて圖す。筆を秉ること輕易にして意を経ざるが如し。儼然として巨幅。経ること忽ちにして成る。觀者、羣れを成す。以つての故に其の名大いに振う。居すこと四年。歸郷後、梅桃菴を創め、日々その中に棲息す。蓋し庭中を以つて名有る所なり。君の歿後、郷の人、箕山先生、梅桃菴の記を作り爲し、竹隱齋の記に及ぶ。

君、眉間に一黒子有り。中心に毫三莖、生ゆ。長さ數寸あるべし。因りて眉間毫翁と號す。君、年過ぐるること八旬、居して常に心を西方に棲し、坐起するに佛を忘れず。心に一物、芥帶も無し。ここに至り筆を絶す。一世の能事、畢んぬと謂うべし。君の筆蹟、人間に傳すること甚だ夥し。其の郷に存するは、一時罹災。不爲、多からず。惜しむかな。

特に信樂院佛殿の藻板、雲龍、及び天部像、僅かに存すのみ。また釋迦文殊普賢三聖墨画、一幀、方七八尺許り。十三冥官圖に及びては、幅毎に一王を圖し、威嚴、怖るべし。地獄変相二幀、この對、凜然として毛髮、皆、豎つ。幸いに予の舊寺に存す。

君、延寶甲寅に生れ、寶曆乙亥に終つ。壽八十有二。塔、信樂院の先塋の傍にあり。賢譽宗貞愚德居士と號す。君、中澤氏を娶り、四子を生す。嫡子正輔、字は三敬、徳左衛門と稱す。また山水を善くし、殆ど乃ち父に逼る。其の佗、技芸、悉く綜べざるはなし。竹隱二世を繼ぎ、法橋に叙し、法眼に轉ず。二男敬眞、兩少と號し、また能く書画す。殊に楊弓に名あり、一時、對無し。甲じて亡す。三男保嵩、茂兵衛と號し、谷田氏を繼ぐ。孫一徳、字は敬應。また徳左衛門と稱す。夙に先人の風を慕い、丹青に留意し、駭として怠らず。竹隱三世を繼ぐ。其の子徳輔、竹隱四世を繼ぐ。外孫谷田輔長、また画を能くし、東都水府の間に遊ぶ。四方の名士に締交し、以つての故に、人多く名を知る。初め其の宗、信重、また日野に家して子孫相傳し、敬德に至りては、丹青を以つて竹隱の門に遊び、獨擅、入室の名あり。常に漏月亭に居し、法橋に叙す。一徳、其の弟子と云う。君の門人、今、稱する白足は、白井

祥甫なり。森宇内なり。月岡雪鼎なり。島雲圃なり。祥甫の才、時輩の右に出づるも早亡す。惜しいかな。宇内、東敬と號し、家法を失わず。雪鼎、この後、浪華にて竟いに一家を爲す。以つての故に其の名大いに聞く。雲圃は風流を自ら誇り、梅竹、香魚遡水圖を寫す。尤も巧思を用う。乃ち相共に家聲を楊げ奉らしむ。ここに於いて祖の箕裘^{ききゅう}、庶^{おほ}し。綿々として絶えず。盛んと謂わざるべきや。

寛政歳次庚申（一八〇〇）二月 前大聖老泉戒如、撰於平安緑天菴に於いて撰す。 **老泉**（朱文方印） **門戒之印**（白文方印）

中尾樗軒『近世逸人画史』（文化十五年（一八一八））《日本絵画論大成第十卷 翻刻二九〇頁 影印三三四頁》

木村重圭「京都と江戸の画人伝」（『日本絵画論大成第十卷 三八三頁 二〇〇〇年 ペリカン社』）

白井華陽『画乗要略』（天保二年（一八三一年））（『日本絵画論大成第十卷 翻刻九頁 影印九一頁 二〇〇〇年 ペリカン社』）

柴田義董（安永九年（一七八〇））《文政二年（一八一九）》

【岡山県立美術館 所蔵作品検索システムより（http://jmapps.ne.jp/okayamakenbi/sakka_det.html?list_count=10&person_id=147）】

朝岡興禎（寛政十二年（一八〇〇））《安政三年（一八五六）》

川喜多眞一朗『古今墨蹟鑒定便覧』第六卷 三篇中ノ十一（安政二年（一八五五））

(注 38)(注 39)(注 40)(注 41)

(注 42)(注 43)

第一章

絵師高田敬輔の主な画業と宗教的環境

第一節 高田敬輔の生涯と主な画業

第一項 高田敬輔の生涯と主な画業

前節までの諸氏の先行研究の資料や諸々の画論から、絵師高田敬輔の生涯と主な画業をみてきたが、改めて高田敬輔の生涯と主な画業をたどるには、『敬輔画譜』の「高田敬輔翁畧傳」^(注1)が最も詳細に記されている。

冒頭の老泉戒如による『高田敬輔翁畧傳』の中から部分的に取り上げてみると、まず初めに、

始移居于江州日野郷。輔之子輔成。輔成子俊隆。稱長兵衛。後改徳左衛門。君者其嫡子也。名隆久。初稱徳左衛門。後號敬輔。少小好繪事。長而師狩野永敬。稍得其家法。

(始め、江州日野郷に移居す。輔之の子、輔成。輔成の子、俊隆。長兵衛と稱す。のち徳左衛門に改む。君は其の嫡子なり。名は隆久、初め徳左衛門と稱し、のち敬輔と號す。少小より繪事を好む。長じて狩野永敬を師として、^や梢、其の家法を得る。)

とあり、近江日野郷の高田俊隆の嫡子として生まれ、名を隆久、後に敬輔と号し、幼い頃から絵を描くことが得意で、長じて狩野永敬に師事し、その技法を身につけたという人物であつたことを知ることができる。

後仕 仁和寺法親王。稱高田豊前。大目。有故始改藤原。居數年致仕偶逢古澗^{マヅ}師。師謂君曰。公筆力勁健。宜取法於雪舟。於是。專倣楊師法。画益進。遂為一家。世人翕然號竹隱體。竹隱蓋其齋稱也。

(のちに仁和寺法親王に仕え、高田豊前大目と稱す。故有りて始めて藤原に改むる。居して數年にして致仕

す。偶たま古澗師に逢う。師、君に謂いて曰わく。公、筆力勁健^{けいけん}にして、宜しく法を雪舟に取るべし。ここに於いて、専ら楊師の法を倣う。画、益ます進み、遂いに一家を爲すこと卅人^{きゆうぜん}にして翕然^{きゆうぜん}たり。竹隱體と號す。竹隱は蓋し其の齋の稱なり。）

そして、後に仁和寺の法親王に仕えて高田豊前大目と称し、故有つて藤原と改姓し、数年居して致仕したこ
とや、たまたま古澗^{マヤ}（古澗）師と出逢つて雪舟の技法を学ぶことができたことや、画が益々上手くなり、遂に一
家を為すこと卅人の弟子が集まり、竹隱體と号したこと。また、竹隱はその齋の名前であるということである。

後頻遊京畿。一時寓京東小松谷。與主僧慈光師尤善。寺中壁障皆其所画。又別圖五百羅漢水墨小像。俱奇
觀也。

（後に頻りに京畿に遊び、一時、京東小松谷に寓す。主僧慈光師と尤も善し。寺中の壁障、皆、其の画する所
なり。また別に五百羅漢、水墨小像を圖す。俱に奇觀なり。）

さらに、京や畿内に頻繁に旅し、一時は洛東の小松谷に寓居し、主の慈光師と善く交つた。寺中の障壁画は、
皆、敬輔が描き、また別に五百羅漢や水墨や小像も描いたが奇觀であつたということである。

見令藏其寶庫。君素愛佛理。謁峨山鳳潭師。又見華頂義山師深通淨理。

（見るに其の寶庫に藏せしむ。君、素より佛理を愛す。峨山鳳潭師に謁す。また華頂義山師に見え、深く淨
理に通ず。）

とあるように、寺の経藏や宝藏で研究して仏理を極め、峨山の鳳潭師にも拝謁し、また華頂の義山師とまみえ、
深く淨理に通じたということである。

そして、第二章で扱う「選択集十六章之図」と第三章で扱う「無量寿経曼荼羅」の作成については、

正徳中。作選択集十六章之圖。山師一觀而謂之曰。善哉。是舉也。深得集中之趣。又作無量寿経曼荼羅
山師揭之壁間。拱手嘆曰。公以画作佛事者耶。

是圖區別影一經始
未宛然如對經文

（正徳中に選撰集十六章之図を作す。山師一觀して之れを謂いて曰く。善きかな是の舉なるや。深く集中の趣を得る、と。）

また無量寿経曼荼羅を作す。へ是の圖を、一經と區別して彰す。始末宛然、經文に對する如し。

山師これを壁間に掲げて拱手して嘆じて曰わく、公、画作を以つて仏事するか、と。）

とあり、「選撰集十六章之図」は正徳年間に作られたもので、義山師が一見して善しとし、集中には趣があり挙げてもよいと謂ったということから、華頂義山師から賛辞を受け、許諾を得たことを知ることができる。

さらに、「無量寿経曼荼羅」についても、壁間に掲げて拱手して詠嘆したとあることから、この「無量寿経曼荼羅」も「選撰集十六章之図」と同じように義山師の賞賛と許諾を得たものであることを知ることができるのである。

皇太后尔命作十六章圖。圖成獻之。厚加褒賞。由是世人益知君非庸流也。

（皇太后、また命じて十六章圖を作す。圖成り、之れを獻ず。厚く褒賞を加う。是れに由り、世人、益々君の庸流に非ざるを知るなり。）

また、皇太后に命じられて十六章之圖を作つて、それを献上したところ、厚く褒賞を得、さらに、これは世人の益になり、君が凡庸ではないということを知ることができたと述べられている。

仁和寺法親王。特召為天下和順圖

是尔壽経中事具狀天下和順日月清明
國豐民安崇徳興仁務修禮讓之

賞賜尤渥。命叙法橋位。無幾又轉法眼。自後稱高田法眼。

（仁和寺法親王、特に召し、天下和順圖を爲すへ是れまた壽経中の事、具狀す。天下和順、日月清明、國豐民安、崇徳興仁、務修禮讓、この態なり）。賞を賜うるに尤も渥し。命じて法橋位に叙す。

幾ばくも無くしてまた法眼に轉ず。自後、高田法眼と稱す。）

とあるように、仁和寺の法親王から召されて天下和順圖を描いたことから法橋に叙位されたこと。そして、間もなく法眼にも叙され、その後高田法眼と称するようになったという経緯が述べられている。

さらに、

先是 皇女林丘尼公尤重壽経曼茶羅。因親書章段於圖間。又請縁山察公題贊其上。

遂白官印頒于世

是圖併十六章圖延享中鑤于梓令現藏郷信樂院

時人榮之。又有二河白道図。

（これに先だち皇女林丘公、尤も壽経曼茶羅を重んじ、因りて圖間に章段を親書す。また縁山察公に其の上に題贊を請う。遂に官に白し世に印頒すへこの圖と十六章圖を併せて延享中に鑤きざむ。梓は郷の信樂院に現藏せしむ。時の人、之れを榮とす。また二河白道の圖有り。）

これに先立つて皇女林丘尼公はもつとも無量寿経曼茶羅を重んじたことから、これを章段にし、図間に親書したこと。そして、三縁山の察公にその上に題贊を書いてもらうように要請し、ついに完成させて世に印頒した（この図と十六章圖を併せて延享中に鑤んで、その版木は故郷の信樂院に現藏している）というのである。時の人はこれを榮とした。また二河白道図もある事が述べられている。

君延寶甲寅生 寶曆乙亥終壽八十有二

（君、延寶甲寅に生れ、寶曆乙亥に終つ。壽八十有二。）

そして、宝曆五年（一七五五）に八十二歳で没しており、そこから生年は延宝二年（一六七四）であることが分かる。

本論文で取り扱う「選択集十六章之図」は、敬輔四十歳、正徳三年（一七一三）に絵画化されたもので、翌年に版行されたものである。また、「無量寿経曼茶羅」も翌年の正徳四年（一七一四）四十一歳の時の作である。

さらに、この図絵の後の画業としてどのようなものがあるか、『高田敬輔と小泉斐』^(注2)や『近江湖東・湖南の画人たち』^(注3)の図録等によつて、主な仏画の画業をみると、

* 「選択集十六章之図」正徳三年（一七一三）四十歳

* 「無量寿経曼茶羅」正徳四年（一七一四）四十一歳

- * 「天下和順圖」享保十八年（一七三三）六十歳
- * 「法橋」位叙任 享保二十年（一七三五）六十二歳
- * 「八相涅槃図」
- * 「仏涅槃図」
- * 「釈迦・阿難・迦葉図」元文十八年（一七三三）六十七歳
- * 「法眼」位叙任 寛保二年（一七四二）六十九歳
- * 「八大龍王図」「韋馱天図」（信楽院天井画）寛保三年（一七四三）七十歳
- * 「釈迦三尊像」寛保四年（一七四四）七十一歳
- * 「阿弥陀来迎図」
- * 「無量寿経曼荼羅」版刻 延享二年（一七四五）七十二歳
- * 「釈迦三尊像」寛延三年（一七五〇）七十七歳

のようになっていた。

仏画以外にも「猿回し図」「猿回し図」「群仙図」「寿老人」「梅に三日月」「許来巢不図」「竹林七賢図」「寒山拾得図」「七福人図」「関羽竜虎図」「山水図」などの山水や七賢、八仙、七福神等の故事人物画や「富士図」「富嶽図」「牛図」「虎図」「竜虎図」「香魚図」「鯉図」などの富士や動物や魚などの優れた作品が残されているが、これらの款記をみると、六十歳以降の「法橋」「法眼」「竹隠斎」や七十五歳以降の「眉間毫翁」のものがほとんどで、「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」の仏画制作を始めた四十歳から六十歳までの二十年間の作品が見当たらないのである。その一つの原因として、『敬輔画譜』『高田敬輔翁畧傳』に、

君筆跡傳人間甚夥。其存于郷者。一時罹災。不爲不多。惜哉。

という文言があるように、罹災のために作品が少ないのかも知れない。

さらには、六十二歳の「法橋」叙位の後からの作品が多く、その名称を臆することなく款記したり、追記していることから考えれば、叙位されることを長い間待ち望み、叙された機会に満を持すように描き始めたとも考えられる。僧位に叙されることが世人公認の証になったことは勿論、絵画の価値を一段と確かなものにしたことは間違いないだろう。

第二項 主な仏画関係作品

高田敬輔の作品には様々なものがあるが、特に、本論文に関わりのある仏画について、その一覧表とそれぞれの作品をみることにする。

番号	作品名	形状	材質	法量(単位cm)	年代	所蔵者	備考
①	十王図及び地獄変相図	十二幅	絹本着色	各一〇八・〇×四〇・〇	宝永元年 (一七〇四)	日野町大聖寺	最初期の仏画
②ア	選択集十六章之図	一幅	紙本木版彩色	一二〇・五×五五・三			
②イ	選択集十六章之図	一幅	紙本木版彩色	一一二・八×五〇・六		滋賀県立琵琶湖文化館	
②ウ	選択集十六章之図 版木	一面	木造	一一三・〇×五〇・二	正徳三年 (一七一三)	日野町高田家蔵	
③	無量寿経曼荼羅	一幅	紙本木版彩色	一五二・三×六八・四	正徳四年		

⑦	⑥	⑤	④	イ ③ の	ア
釈迦三尊像	涅槃図	八相涅槃図	天下和順図	木 無量寿経曼荼羅版	
一幅	一幅	一幅	三幅	六面	
紙本墨画淡	紙本着色	紙本着色	絹本淡彩	木造	色
二三六・五×一四三・〇	一六一・〇×一一四・五	三五〇・〇×二七二・三 〈描表具込、本紙部二一 五・五×二二四・〇〉	各一一五・七×四一・九	九三・九×一三・九 九二・〇×四〇・六 九四・〇×一三・九 一七・四×六八・九 二〇・四×六八・九 三一・三×六八・九	
一七四二年 (寛保二) 一七四四年		款記、印より一七 三五年(享保二〇) から一七四二年(寛 保二)の頃の作と みられる。	享保一八年 〈一七三三〉	延享二年 〈一七四五〉	〈一七一四〉
寺 日野町大聖	庵 日野町清寿	寺 日野町浄光	院 日野町信楽	家蔵 日野町高田	
法橋敬輔」(太 下行年六十九翁 「謹画於竹隠窓			例 法橋叙任後の作		

次頁から、右の一覧表の番号順に絵相をみることにする。

⑩	⑨	⑧	
阿弥陀来迎図	釈迦三尊図	信楽院天井画	
一幅	三幅		
紙本着色	紙本墨画淡	紙本墨画淡	
一三八・〇×五八・八	各一三二・五×五八・八		
法眼位叙任後の作）	不詳（法眼の印から （寛延三）	一七四三年 （寛保三）	款記加筆 （寛保四）
個人蔵	寺 安土町浄厳	院 日野町信楽	
印 「法眼敬輔」の	七拝画」 敬輔時年七十有	竹隠斎法眼」 保癸亥歳画之 《韋駄天図》「寛 眼啓輔」 「行年七十翁法	字加筆） 《八大龍王図》

① 十王及び地獄変相図（十二幅 絹本着色 各一〇八・〇×四〇・〇 宝永元年（一七〇四）日野町大聖寺）



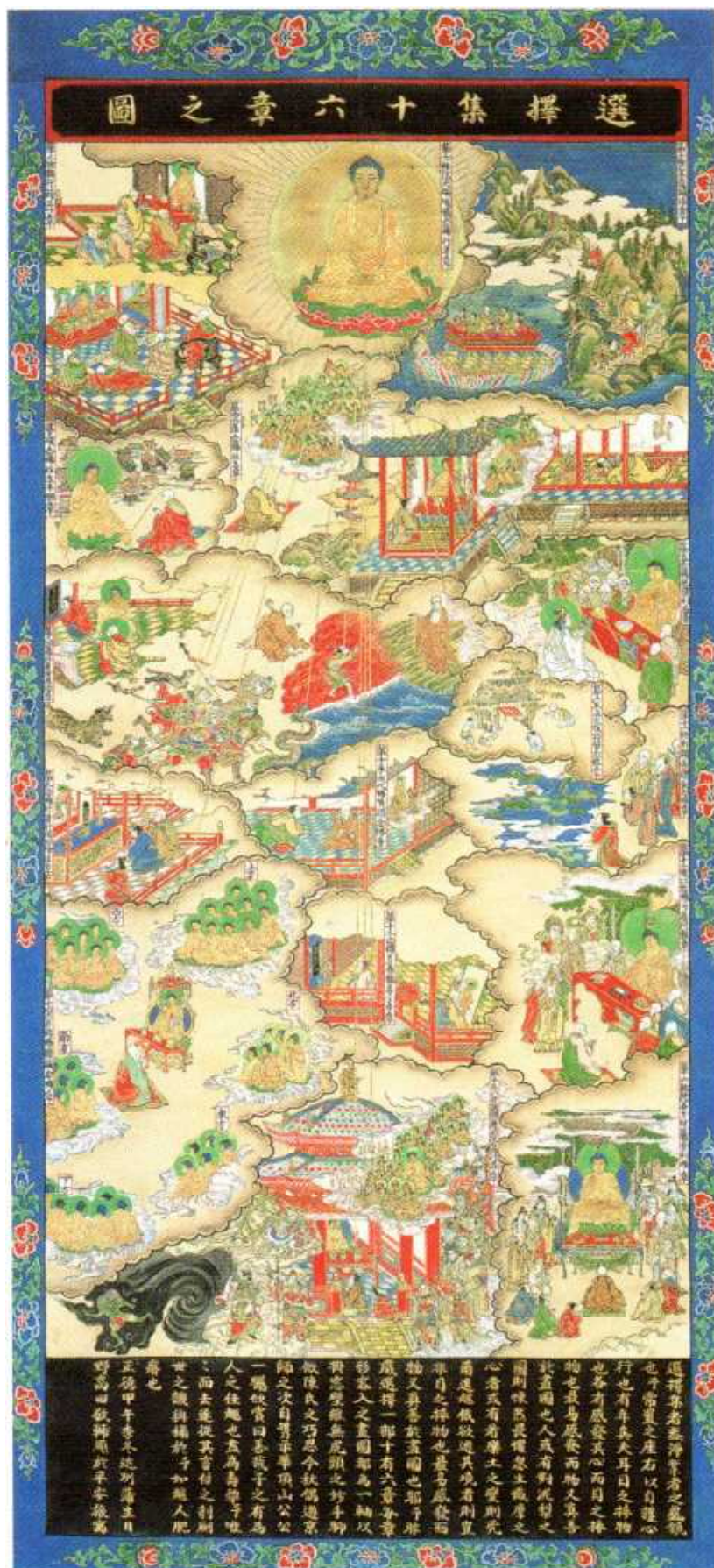
地獄一



地獄二

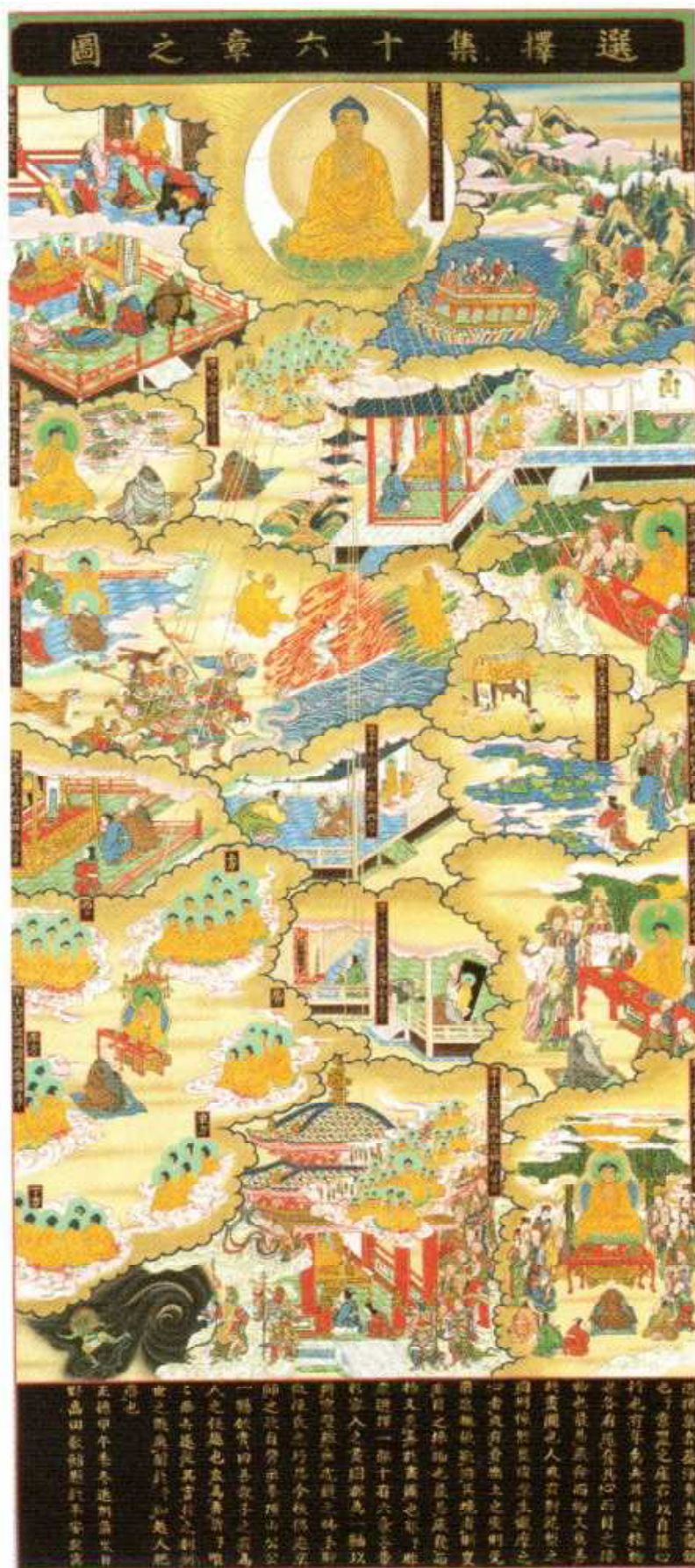
《『近江日野の歴史』第二卷
中世篇 四三頁より転載》

②のア 「選択集十六章之図」(一幅 紙本木版彩色 一二〇・五×五五・三)



《『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載》

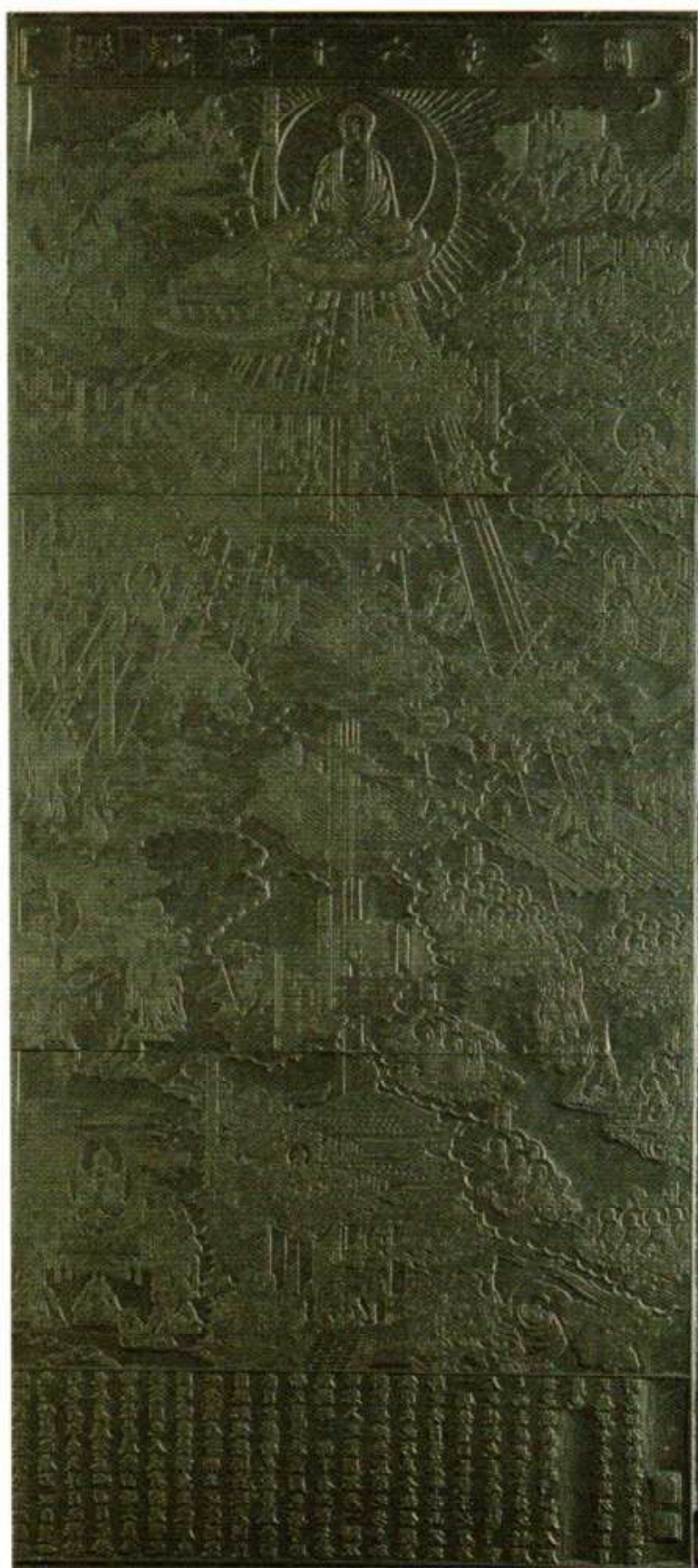
②のイ 「選択集十六章之図」(一幅 紙本木版彩色 一一二・八×五〇・六 滋賀県立琵琶湖文化館)



《『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載》

②のウ 「選択集十六章之図版木」(一面 木造 一一三・〇×五〇・二 正徳三年へ一七一三)

日野町高田家蔵)



《『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載》

③のア 「無量寿経曼荼羅」(一幅 紙本木版彩色 一五二・三×六八・四 正徳四年(一七一四))



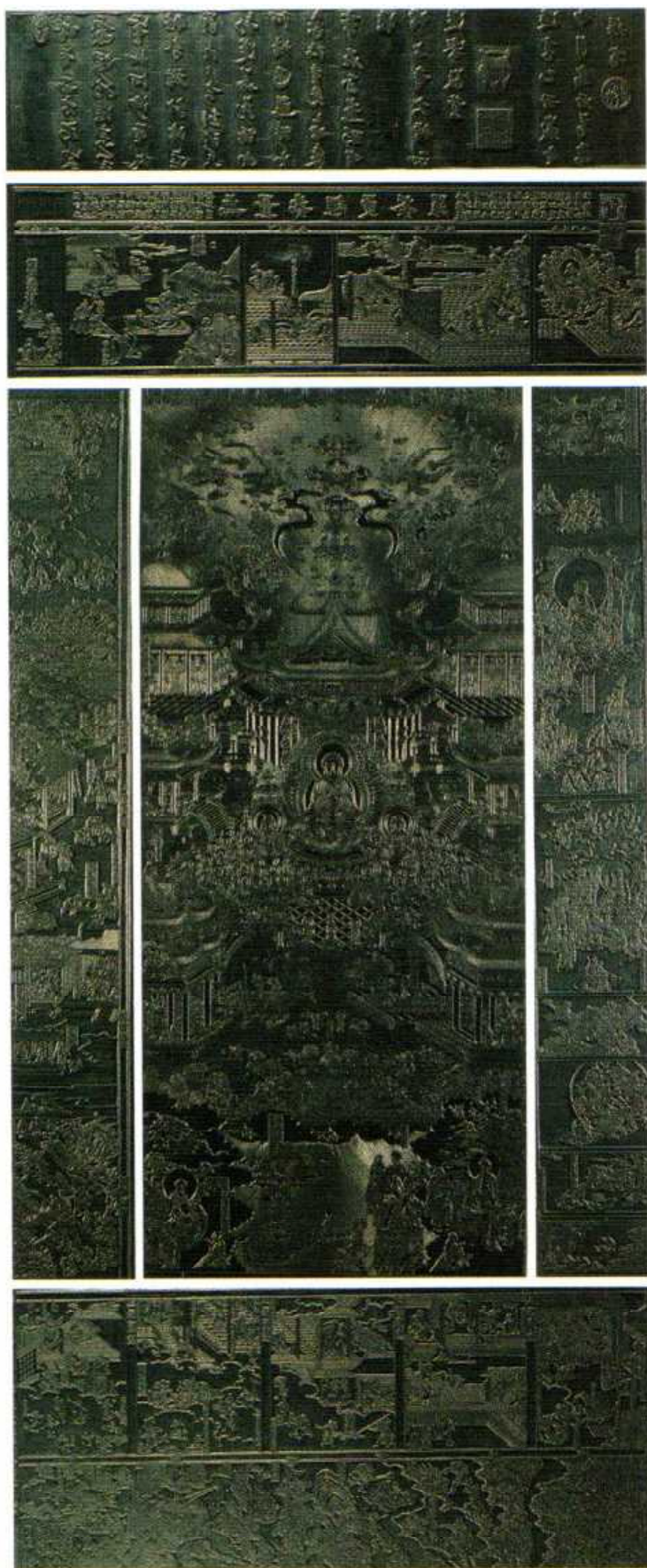
『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載

③のイ

「無量寿経曼荼羅版木」(六面 木造九三・九×一三・九、九二・〇×四〇・六、九四・〇×一三

・九、一七・四×六八・九、二〇・四×六八・九、三一・三×六八・九

延享二年(一七四五) 日野町高田家蔵)



《『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載》

④ 「天下和順図」 (三幅 絹本淡彩 各一一五・七×四一・九 享保一八年(一七三三) 日野町信楽院)



《『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載》

- ⑤ 「八相涅槃図」(一幅 紙本着色 三五〇・〇×二七二・三 款記、印より享保二〇年(一七三五)から寛保二年(一七四二)頃の作 日野町浄光寺)



《『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載》

⑥ 「涅槃図」(一幅 紙本着色 一六一・〇×一一四・五 日野町清寿庵)



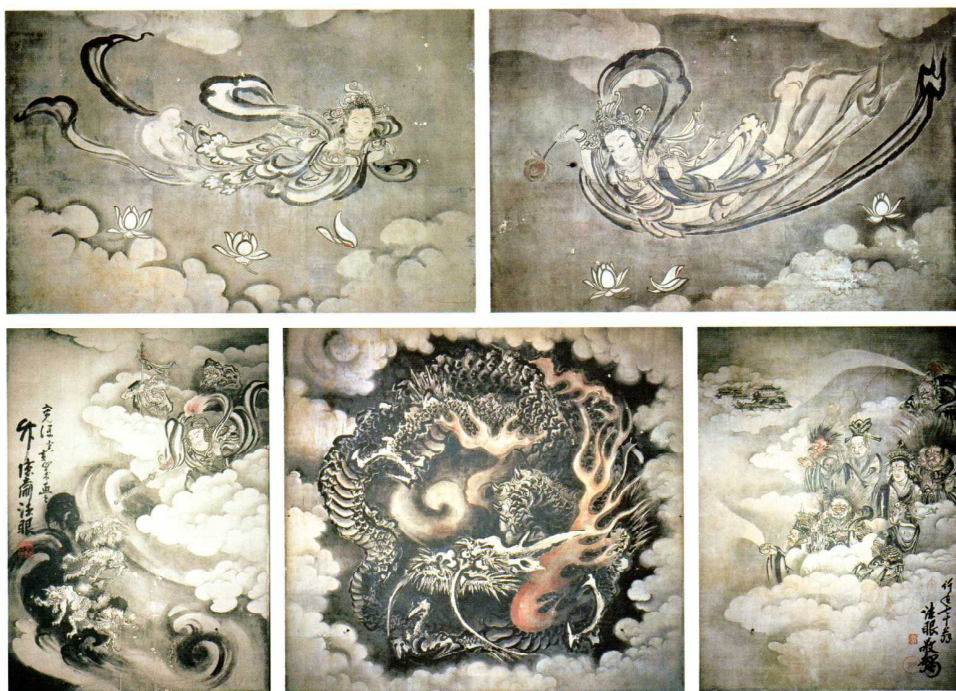
《『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載》

⑦ 「釈迦三尊像」(一幅 紙本墨画淡彩 二三六・五×一四三・〇 寛保二年(一七四二) 日野町大聖寺)



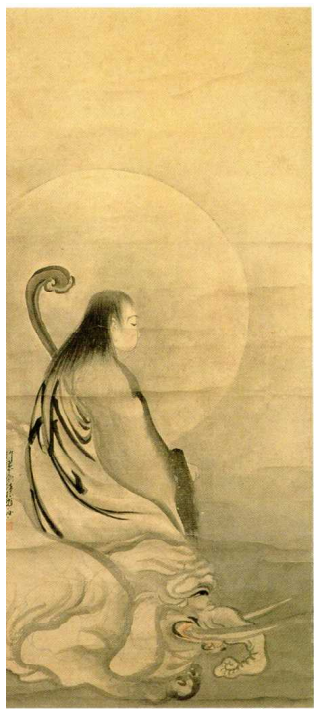
《『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載》

⑧ 「信楽院天井画」（紙本墨画淡彩 寛保三年（一七四三） 日野町信楽院）



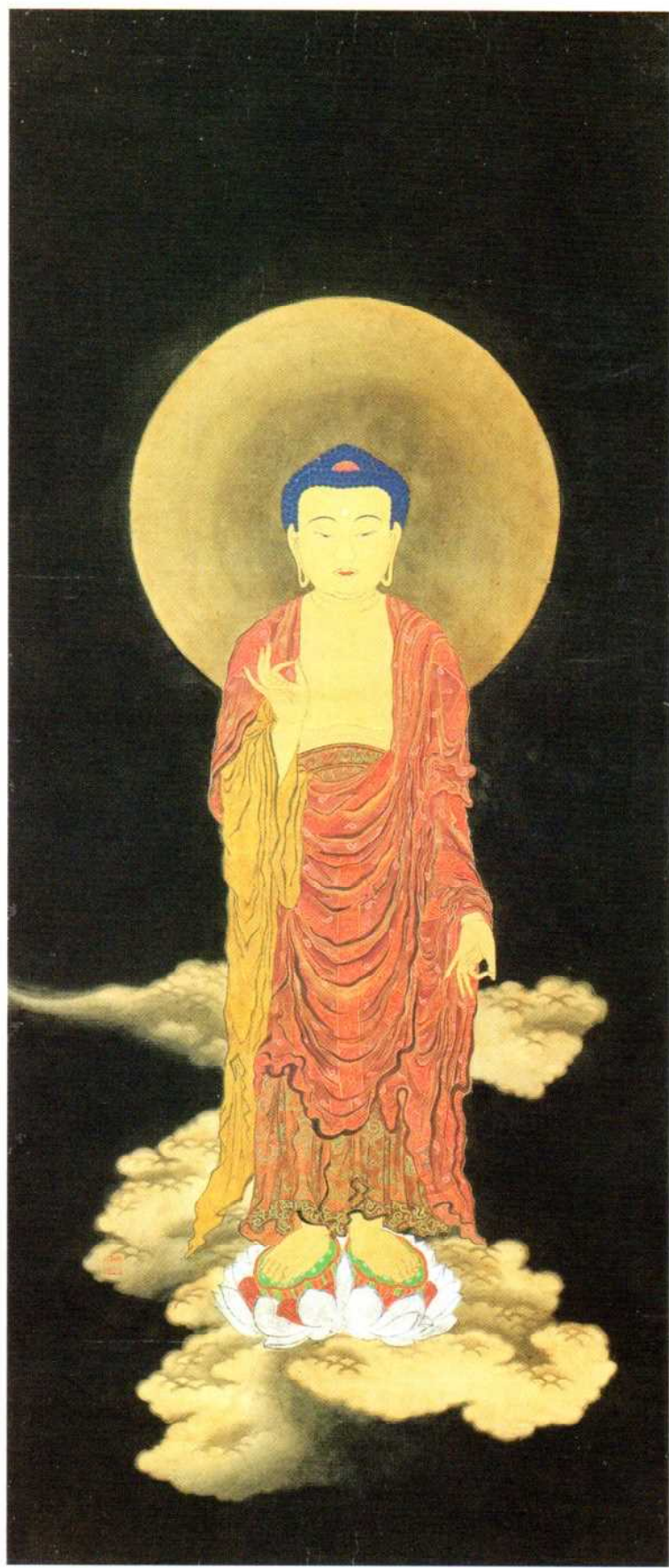
《『高田敬輔と小泉斐』図録（二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館）より転載》

⑨ 「釈迦三尊図」(三幅 紙本墨画淡 各一三二・五×五八・八 寛延三年(一七五〇) 安土町浄厳寺)



《『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載》

⑩ 「阿弥陀来迎図」(一幅 紙本着色 一三八・〇×五八・八 個人蔵)



《『高田敬輔と小泉斐』図録(二〇〇五年刊滋賀県立近代美術館)より転載》

第三項 小結

右の仏画作品を通して、次のようなことを知ることができる。

① 以上の作品の中から、本論文で考察を加える仏画として最も相応しいのは、高田敬輔四十代初めの作品で、仏画の初期の作品でもあり、浄土宗の根本的教義である『選択本願念仏集』と『無量寿経』を絵画表現した「選択集十六章之図」と「無量寿経曼荼羅」であること。

② 仏画以外にも「猿回し図」「群仙図」「寿老人」「梅に三日月」「許来巢不図」「竹林七賢図」「寒山拾得図」等の七賢、八仙、七福神等の故事人物画や「富士図」「竜虎図」「香魚図」「鯉図」などの富士や動物や魚などの優れた作品が残されているが、これらの款記から、六十歳以降の「法橋」「法眼」「竹隠斎」や七十五歳以降の「眉間毫翁」のものがほとんどである。

「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」の仏画制作を始めた四十歳からの二十年間の作品が見当たらず、六十歳以降の作品が現存することから、「高田敬輔翁畧傳」に記されているように、郷里での罹災によるために作品が消失した可能性があること。

③ さらに、六十二歳の「法橋」叙位の後からの作品が多く、その名称を臆することなく款記に記している作品が多いことから、僧位に叙されることが世人公認の証になったことが想定されること。

第二節 絵師高田敬輔の浄土教的環境

第一項 高田敬輔に影響を与えた浄土宗僧侶

絵師高田敬輔の「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」が作成された背景には、様々な要素があるだろうが、やはり仏教関係者や寺院との関係を抜きにすることはできない。前節の『敬輔画譜』の『高田敬輔翁略傳』でみたように、「仁和寺の法親王」「僧古磧」「小松谷の主僧慈光師」「峨山鳳潭師」「華頂義山師」「縁山察公」「縁山仏心院」「礫川伝通院」「本所羅漢寺」「信楽院」「老泉戒如」等の様々な僧侶や寺院の名が挙げられていることから、各師や各寺院との関わりの中で生まれたものであろうし、また、「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」を開版したことにより、さらに関係が深められていったと考えられる。

例えば、「僧古磧」については『畫乗要略』に、一行の記述であるが高田敬輔の一つ手前に記述されていて、ここからは、雪舟様の水墨画の技法を学ぶとともに禅の道をも合わせて体得したことがうかがえる。

その他の人物や寺院については、滋賀県立近代美術館の「研究紀要第五号〈訳注『敬輔画譜』附『高田家系図書』國賀由美子、平成十六年発行〉」の研究資料からみても分かるように、浄土宗、真言宗御室派、華嚴宗、黄檗宗、禅宗などの各宗の高僧との交友範囲の広さと、その人物が身につけていたであろう高い見識に直接ふれることができたということは、絵師高田敬輔の浄土教的素養の深さと広範囲な仏教的環境が整っていたことを物語っている。

そこで、改めて高田敬輔の浄土教的素養を構築のため、大きな影響を与えたと考えられる僧侶の中から、浄土宗の僧侶三名に焦点を当て、さらに考察を深めることにする。

その三名とは、一人は、敬輔に浄土教の教理を教授し、「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」の制作を讃

えた良照義山。さらに、画業の師とされる明譽古磧。そして『和字選擇集』の挿絵を描いた曇譽忍海である。

(一) 良照義山との関わり

中でも良照義山は、『敬輔画譜』の「高田敬輔翁畧傳」(『敬輔画譜』寛政十二年 老泉戒如)に、

又見華頂義山師深通淨理正徳中作選擇集十六章圖山師一觀而謂之曰善哉是舉也深得集中之趣

又作無量壽經曼荼羅

是圖區別影一經始末宛然如對經文

山師揭之壁間拱手嘆曰公以画作佛事者耶

(また華頂義山師に見え、深く淨理に通ず。正徳中に選擇集十六章圖を作る。山師一觀してこれを謂いて曰わく。善きかな、是の舉なるや。深く集中の趣を得る、と。)

また無量壽經曼荼羅を作る(この圖を區別すれば、一經を彰す。始末宛然として經文に對するが如し)山師これを壁間に掲げて、拱手して嘆じて曰わく。公、画作を以って佛事するか、と。)

と記され、浄土宗典籍研究第一人者の良照義山と深いつながりをもち、浄土宗の教義について指導・助言を受けるとともに、「選択集十六章之図」や「無量寿經曼荼羅」の制作について、その出来具合が、まさに經文の如くであり、画作によって仏事をしているようなものであると賞賛されていることから、高田敬輔の浄土的素養は良照義山に負うところが大きいことを知ることができる。

良照義山の生涯については、『新纂浄土宗大辞典』三〇六頁(平成二十八年刊)に、

【義山】慶安元年(一六四八)〜享保二年(一七一七)。禅連社信阿円觀、字は良照。江戸時代の学僧。

宗学・宗史の研究に尽力した。特に『翼賛』六〇巻の編者として有名。京都生まれ。父は三摩宣次、母は吉田氏。寛文二年(一六六二)大和郡山の光伝寺に入って出家し、翌年江戸増上寺で吞誉に従って宗学するが、間もなく下野国大沢円通寺の聞証の室に入って研鑽を積んだ。やがて師、聞証とともに武蔵国岩槻浄国寺に移って上首となり、聞証にかわって俱舎・因明・唯識などを講義し、多くの学

徒を養成。天和三年（一六八三年）京都に帰り、東山華頂山麓の入信院に住み、往生浄土の行業に励みながら講学や著述に専念した。そうした中、宗典類に誤りが多いことを歎き、それらの訂正を志し、諸方に善本を求めて原典批判を行い、句読点や訓点を改め、四声清濁を加えて出版した。彼の興禎による典籍は、三經一論や五部九卷をはじめとして『往生論註』『安樂集』『漢語灯録』『和語灯録』など多数にのぼり、初学者に便宜を与えた。《以下、略》

とあり、さらに詳しい業績については、珂然が著した『洛東華頂義山和尚行業記要解』（寛保元年（一七四一））に詳細に記されている。

例えば、

又師恒歎_下恨宗籍之多_三魚魯_{誤寫}古書之從_中陰晦_{上行不}遂自_三三經一論_三以至_三論註安樂五部九卷群疑選擇等諸部_一求_三得善本_一皆悉校正且改_三句讀訓點_一加_三四聲清濁_一重壽_三之梓_一以便_三初學_一

（また師は恒に宗籍の魚魯多く、古書の隱悔に従うことを歎恨す。遂に三經一論より論註安樂五部九帖、群疑選擇等の諸部に至るにて善本を求め得て、みな悉く校正し、且つ句讀訓点を改め、四聲清濁を加えて重ねて之を梓に壽して、以って初學に便ず。）

と宗籍に写し誤りが多いのや古書との対校が行われていないことを歎き、ついに三經一論から論註、安樂、五部九帖や群疑、選擇等の諸部に至るまで、善本を求めて悉く校正し、かつ句讀訓点を改め四聲清濁を加えて梓行し、初学の者に便宜を与えたという旨が述べられている。

さらに、

師亦以謂此非_三積久_一何以能致是故用_レ力而勤刻_レ意而專以_レ夜繼_レ日累_レ月歷_レ年閱_三多寒暑_一文義註釋事實考覈於_レ是大成矣因析爲_三六十卷_一題曰_三圓光大師行狀翼贊_一

（師はまた以って謂いおく。此れ積むこと久しきに非ずんば何を以って能く致さん。

是の故に力を用いて勤め、意を刻して専らにし、夜を以って日を継ぎ、月を累ね、年を歴て多くの寒暑を
閱し、文義の註釋事實の考覈こうかく、是れに於いて大いに成る。因って析して六十卷と為す。題して圓光大師行
狀翼贊と曰う。）

とあるように、良照義山の研究業績の中で最も優れているとされる法然上人伝註釈書の『円光大師行狀画図翼贊』
について記されているのである。

そしてさらに、

又傳二眞言二兩部大法於和州密匠一而精詳也又講二淨土三部經一凡百餘遍其餘宗籍淨土論註解安樂集觀經疏及行儀
分五部九卷群疑論選擇集等各若干遍

（また眞言兩部の大法を和州の密匠に傳えて、しかも精詳なり。また淨土の三部經を講ずること凡そ百余遍。

其の余の宗籍、淨土論の註解、安樂集、觀經の疏及び行儀分（五部九卷）。群疑論、選擇集等各々若干遍。）
とあるように、眞言兩部の大法を大和の密宗の僧侶達に詳しく伝えたり、また淨土三部經の講説を百遍余り行つ
たり、その他の宗籍や淨土論の注解、安樂集、觀經疏、行儀分など五部九卷や群疑論、選擇集等についても幾度
も行ったことを知ることができるのである。このように、華頂良照義山は、淨土宗典籍のほとんどの原典に註釈
を加え、校正した典籍研究の第一人者であったのである。

この典籍研究について、松永知海氏は、「書師岡村元春と義山版」（注4）の論考で、義山が出版した典籍についてそ
の出版年を奥付から図版付きで、次のように特定している。【典籍と出版年のみ抽出し、掲載する】

（1）元祿四年（一六九一）『淨土三部經』四卷（『佛說無量壽經』二卷、『佛說觀無量壽經』一卷、『阿彌陀
經』一卷）

（2）元祿七年（一六九四）善導撰『觀經疏』四卷

（3）元祿七年（一六九四）善導撰四部五卷（『法事讚』二卷、『觀念法門』一卷、『往生礼讃偈』一卷、『般

舟讃』一卷

- (4) 元禄九年(一六九六)『選擇本願念佛集』二卷【采賢堂 古藤春正監刻版】
- (5) 元禄九年(一六九六)『選擇本願念佛集』二卷【今井七郎兵衛 井上忠兵衛合刻版】
- (6) 元禄十年(一六九七)『往生論』二卷
- (7) 元禄十一年(一六九八)『安樂集』二卷
- (8) 元禄十六年(一七〇三)『當麻曼陀羅述獎記』四卷
- (9) 寶永二年(一七〇五)『釋淨土群疑論』七卷
- (10) 正徳五年(一七一五)『黒谷上人語燈録』十八卷

〈『漢語燈録』十卷、『和語燈録』五卷、『拾遺黒谷上人語燈録』三卷〉

右の史料によつて、義山が浄土宗の典籍を改訂し、四声清濁、句読訓点等をほどこして出版した時期や典籍の種類等が把握できる貴重な論考である。

この典籍研究を重ねた良照義山の業績は、近世浄土宗の基盤となる典籍の確立とそれ以降の浄土宗の発展に大いに寄与するものであったと考えられる。従つて、この良照義山の指導のもとに描く、絵師高田敬輔の仏画も、まさに、良照義山の高い見識から評価された図絵であることから、改めて画業の質の高さを知るとともに、多大な価値を見出すことができるのである。

その良照義山の教授のもとに成し上げた高田敬輔の具体的な作例である「選択集十六章之図」については、第二章で、そして、「無量寿経曼荼羅」については第三章で詳しくみていくことにする。

(二) 明誉古磴との関わり

高田敬輔の浄土教理の師が良照義山とすれば、画業の師の一人に明誉古磴が挙げられる。

その明譽古瀾の画業については、前項で取り上げた種々の画論の中に、高田敬輔とともに、その行業が述べられているので、あらためて提示する。

① 近世の画論にみる明譽古瀾

㊦『人物艸画』―絵本享保職人尽 僧古瀾^{ママ}筆（享保九年（一七二四）刊）【太平文庫 12 一九八三年出版

太平書屋】

この『人物艸^{じんぶつそう}画』は、太平文庫主人の冒頭の「解題」によると、享保九年（一七二四）～、古瀾没七年後に出版されたもので、表題を『類姓草画』とする版もあり、初丁表に「和州西巖寺古瀾／人物草画／文熙堂梓」の扉が欠けている本もあるため、『類姓草画』とも呼ばれ、筆者も他に擬す人もあるが、『続近世畸人伝』（寛政十年（一七九七）刊）の高田敬輔の条下に、

古瀾和尚の画、飄逸一家をなせり、（中略）よに人物草画といへる印本、飄逸至極のものなれども、筆者を記さざるが此和尚の筆也、と敬輔話せられしとぞ

とあることから、『人物草画』の印本は、筆者を記さないのが古瀾師であると高田敬輔が語ったことが記されているから、この『人物艸画』の筆者は古瀾に間違いはないとしている。

そして、その古瀾については、次のように記している。

古瀾（瀾は澗に同じで、谷、また谷水の意。一に礪にも作る）、名は明譽、虚舟と号す。初め和州郡山の西巖寺に住し、後京都報恩寺住職となり、晩年東山西岩倉に隠居した。始め狩野永納に学んだが、後雪舟の画風を慕ったという。遺墨の有名なものに、薬師寺縁起、植槻縁起、法然上人画伝、東大寺棟引図、法隆寺涅槃図等があり、享保二年五月廿二日、六十五歳で示寂したというから、この『人物草画』は没後の出版である。

また、この『人物草画』は、大本、全三巻。上巻十七丁、中巻十八丁、下巻十八丁の計五十三丁であること。

そして、その内容は、

上巻には上達部から神主に至る比較的上級の者三〇種ばかり、中巻には出床（髪結い）から市場売（青物売り）に至る市井下流の者三〇余種、下巻にはさらに卑賤の者共も混えて石匠から節季候に至る四〇種ほど、合計一三〇余種の職業を網羅し、人物草画手本であるとともに、一種「享保職人尽絵」とでも言うべき体裁を成している。（以下、略）

としている。

さらに、この『人物草画』について、鈴木進氏は次のように評価している。

①鈴木進「畫僧古澗と人物草画」（『畫說』三月号 二四四頁 昭和十三年（一九三八）東京美術研究所）

鈴木氏は、古澗の画風について、

藝術にあつて徒らなる師法の墨守は畫派の沈滞であり、自殺である。その反逆こそ藝術の前進であり發展である。狩野派に於ける久隅守景、英一蝶、共に然り、且つその見るべき作品の多くが如實に之を證して居る。

古澗また然り。そしてこの間の事情は『畫乘要略』卷二に、

卓堂先生曰畫家氣習師弟傳染其毒必入_二膏肓_一而古澗敬甫脱_二狩野氏藩籬_一而雪鼎關月代變_二其格_一師弟不_レ受_二束縛_一如_レ是皆可_レ觀也

梅泉曰自_二古澗_一至_二關月_一各_レ立_二一格_一可_レ謂_二有_二膽力_一

とあつて、古澗を始めその一派が、各々個性の發現を意圖し、自からの繪を描いた事が「膽力有りと謂ふ可し」と賞されてゐる所がなか／＼面白い。

と指摘して、狩野派で学んだ高田敬輔や古澗等は、各々個性を發現させ、独自の繪を描いたことは膽力のあることであるという『画乘要略』卷二の關月の条の文言を取り上げて、本論文で着目している高田敬輔や古澗について、独自の画風の画人であるという評価をしているのである。

また、

狩野の風を脱化せんとした古澗の如き逸格的存在は、新様式展開の契機として特に注目すべきものがある。古澗の畫人的地位は勿論それほどのものとも考へられないのであるが、浄土宗門の畫僧として、得意の畫筆を、當時盛んに梓行されてゐる版本の挿繪、畫譜類、人物畫（大黒天）、或は各寺に遺る涅槃圖の大作に揮ひ、かなりの世評を得てゐた事は想像される。そして中林竹洞著「金剛杵」に於ける古今畫人品評の文人畫中に大雅、松花堂等と共にあげられてゐることは注目に値ひする。

と記し、古澗が浄土宗の畫僧として、版本の挿繪や画譜類、人物画（大黒天）、各寺の大涅槃図を描いて世間の評判を得ていたことを取り上げている。

さらに、中林竹洞の『画道金剛杵』の画人の番付表のような「古今画人品評」に、文人画の欄に池大雅や松花堂昭乗等と肩を並べていることに評価を与えている。

そして、右の①⑦の項でもふれたが、『續近世畸人伝』の高田敬輔の条の内容を同じように取り上げ、

古澗和尚の画、飄逸一家をなせり、（中略）よに人物草画といへる印本、飄逸至極のものなれども、筆者を記さざるが此和尚の筆也、と敬輔話せられしとぞ。」

このことについて、

思ふに「人物草画」は享保九年版より前に既に印行され、もと筆者の名はなかったのであって、享保九年版即ち家藏の「人物草畫」は和尚歿後七年、利を見るに敏なる書肆の手によって編輯されたものではあるまいか。（以下、略）

とし、『人物草画』は、高田敬輔の言を借りれば、享保九年版より以前に名を載せずに印行されていたのではないかという見解を述べている。

このことは、高田敬輔と古澗が師弟関係にあり、師の特徴を良く知るものでなければ公言できることなく、

まして画論にまで取り上げられて掲載されるものではないと考えられることから、その緊密さを知ることができるのである。

㊦ 中山高陽『画譚雞肋』（安永四年（一七七五））《日本絵画論大成第六卷 翻刻四〇頁 影印一三八頁》
『画譚雞肋』には、喬鍾馗、喬三教、趙楼台の条に、

古澗の、大黒神。（以下、略）

と六文字で、古澗は大黒神を描くのが得意であることが記されている。

㊧ 西村兼文『本朝畫人傳補遺』藝苑叢書 大正八年（一九一九）刊 《原刊記明和元甲申（一七六四）》
『本朝畫人傳補遺』には、古澗の条に、

一 古澗和尚

名ヲ明譽、號虚舟。淨土門ノ僧ニシテ、始メ和州郡山西岩寺ニ住ス。繪畫ヲ好ミ、前軌ヲ踏ズ。専ラ新案ヲ出ス。行筆超凡大畫ニ妙ヲ得テ豪放、益々見ル。就中、一涅槃像 豎五丈、幅二丈、洛東泉涌寺所藏。此餘大畫多シ、又好ンテ人物ヲ畫ケリ。享保二年五月五日入寂。一條淨福寺ニ葬ル。

とある。

㊨ 三熊思孝編纂・伴蒿蹊『続近世畸人伝』（寛政十年（一七九七）刊）

この『続近世畸人伝』の高田敬輔の条下に、古澗についての行業が記されるが、右の㊦の項でも取り上げているが再掲しておく。

古澗和尚の画、飄逸一家をなせり、（中略）よに人物草画といへる印本、飄逸至極のものなれども、筆者を記さざるが此和尚の筆也、と敬輔話せられしとぞ」

㊩ 谷田輔長『敬輔画譜』（文化元年（一八〇四））

『敬輔画譜』には、

遇逢古澗師 師謂君曰 公筆力勁健 宜取法於雪舟 於是 專倣楊師法

とあり、たまたま古澗（澗）師と出逢って、君の筆力は逞しく力強いと賞められ、雪舟の技法を学び、それ自身につけることができたことが記されている。

④中尾樗軒『近世逸人画史』（文化十五年（一八一八））《日本絵画論大成第十卷 翻刻二九三頁 影印三

四三頁》

古澗和尚は京師浄福寺住持なり。丹青に工也。尤大図を作るに妙なり。今京師妙心寺の涅槃像等也。

又、草画に七福神、及び大黒の像あり。世に古澗の大黒と称す。其大図（へに）いたっては、余人の企て及ぶ所にあらず。

ここでは、京都浄福寺の住職であること。絵を描くのが巧みであること。大画面の画図が得意であること。その例として京都の妙心寺の涅槃像があること。また、『人物草画』に七福神や大黒天の画像があること。世の人は古澗の大黒と称していること。大画面の画図は余人にはまねのできないものである事などが記されていて古澗の行業が良く伝えられている。

⑤白井華陽『畫乘要略』卷二（天保二年（一八一三））《日本絵画論大成第十卷 翻刻四二頁影印一七二頁》
『畫乘要略』卷二の第六十八番目に、高田敬甫（輔）の前に僧古澗の名がある。

僧古澗

古澗不_レ知_二何許人_一初學_二狩野氏_一後不_レ守_二其格_一好畫_二大黒天_一又長_二佛像_一

（古澗、何許の人なるかを知らず。初め狩野氏に學び、後、其の格を守らず。好んで大黒天を畫く。また、佛像に長ず。）

とあり、古澗は何処の人か詳しくは分からないこと。初めは狩野氏に學び、その後は狩野派の画法を守らず、好んで大黒天を描き、また、佛像を描くことに秀でていたことが記されている。

また、この画論で面白いことは、この「僧古磧」の後、「敬甫」、「雪鼎」、「関月」と続いて記されているが、その「関月」の条に、この四人のことが記される中に、「古磧」や「敬甫」のことが、次のように述べられていることである。

柴田義董曰わく、関月の山水人物、頗る大家の風度を見る。

梅泉曰わく、古磧より関月に至るまで、各々、一各を立つ。胆力有りと謂つ可し。

卓堂先生曰わく、画家の気習、師弟伝染、その毒必ず膏盲に入る。而るに、古磧・敬甫は狩野氏の藩籬を脱して、雪鼎・関月、代々、其の格を変ず。師弟、束縛を受けざること是くの如きは、皆観るべし。

のように記され、古磧・敬甫・雪鼎・関月それぞれが、各々、師弟関係の束縛を受けずに独自の画法を身につけ、一派を成していることは注目すべきことであると評価されているのである。

㊦朝岡興禎『古画備考』十一 釋門（嘉永年間へ一八四八〜一八五四）か）

『古画備考』第十一卷の釋門五に、古磧の条があり、次のように記されている。

古磧

名明譽、和州郡山西岸寺ニ住ス、畫法前軌ヲ脱シテ、行筆超凡、好テ人物ヲ畫キ、多ク大黒ヲ寫ス、又大畫ニ於テ、豪放益見ル、書畫一覽

○藥師寺繪縁起四卷、當寺塔頭地藏院住持古澗畫、至極見事候、展開目錄 ○法然上人四十八卷傳、刊本ノ繪

ハ、雒北報恩寺前住古磧、書ハ雒西ノ林觀雲竹ナリ、群書一覽 ○淨花院初代向阿上人繪詞、古磧和尚畫、

北向雲竹筆、全部三冊、京寺町通四條下ル二丁目、赤井長兵衛板、又念佛往生得失記、全一冊、古澗明遍僧正作、北向雲竹筆、

○古澗畫、天狗乗猪図、雪鼎力著述ノ、金玉畫府ニ出ツ、

○元祿十三年春、佛涅槃日、雒北報恩寺前住古澗畫

澄蓮社

明譽

○ 雫北報恩教寺沙門古澗識

虚舟

古澗之印

○ 大黒天、帆掛船ニ乗ル圖

古澗筆

朱学

大黒

西巖寺古閑筆

宝永四年七月十四日

明譽筆

明譽

② 近代の画論における明譽古澗

明治から昭和にかけての画論に、どのような評価を得ているか、一、二、三その例をみることにする。

⑦ 横須賀安枝『本朝画工便覧』（明治二十四年（一八九一）東陽堂發行）

この『本朝画工便覧』には、「釈氏」の欄に三行にわたって、次のように記されている。

古澗

名明譽 虚舟 京都報恩寺ニ住ス雪舟ノ畫風ヲ慕フ大黒ノ像多シ享保二年没六十五

① 藤岡作太郎『近世繪畫史』（明治三十六年（一九〇三）金港堂書籍株式会社發行）

『近世繪畫史』には、次のように記されている。

月岡雪鼎は高田敬輔に學び、敬輔は僧古澗に學ぶ。古澗名は明譽、虚舟と號す、元祿頃の人。はじめ大和郡山の西岸寺に住し、のち移りて京都法恩寺マツにあり。性畫事を嗜み、仙佛山水をよくす。はじめ狩野永納に學び、のち雪舟を慕ふ。されど筆に任せて法格に拘泥せず、筆力雄健にして超凡、好んで大畫を作り、豪放の氣筆墨の外に溢る。またわが國の古畫を愛し、當麻寺の法然上人四十八卷傳模写して上木す。畫くところ藥師寺緣起藥師寺藏 大佛殿木曳圖繪卷東大寺藏 涅槃圖法隆寺藏 等あり。

高田敬輔、名は隆久、竹隱齋と號す、法眼たり、享保頃の人、近江日野に生る。京に出でて狩野永敬永敬の本子納に學び、のち古澗に就く、古澗勧めて法を雪舟に取らしむ。京畿に遊び、また四方を漫遊して、常の居なし。そ

の畫諸國の寺院に多く、筆意頗る勁拔なり。

ここでは、月岡雪鼎と高田敬輔と古磴の師弟關係が述べられ、古磴が高田敬輔の師であることが記されている。また、古磴については、名を明譽、号を虚舟とし、大和郡山の西岸寺に住し、後に京都の法恩寺（報恩寺）の住職を務めたこと。生来、絵事を好み仙仏山水をよく描いたこと。始めは狩野永納に師事し、後に雪舟を慕ったこと。そして、画法に拘ることなく、筆力が雄健で群を抜き、また大画を描くことが得意で、その氣力が絵から外へ溢れるほど見事なものであったこと。そして、我が国の古画を愛し、當麻寺の法然上人四十八卷伝を模写して上木したこと等が記されている。主な画業として、「藥師寺縁起（藥師寺藏）」「大仏殿木曳図絵卷（東大寺藏）」「涅槃圖（法隆寺藏）」が挙げられている。

㊦ 近藤信彦『日本畫僧』（昭和九年（一九三四）東方書院）

この『日本畫僧』には、

古磴

名は虚舟、澄蓮社明譽はその法諱である。初め大和郡山西巖寺（ミヅノイ）にあり、後京都報恩寺に住し、晩に東山西岩倉に隱栖し、享保二年五月廿三日寂した。壽八十五。

古磴、畫を狩野永納に學び、次で雪舟の高風を慕ひ、遂に一家をなし人物山水をよくし、最も大黒天に妙で、近世浄土宗屈指の名手で、その門人に畫人高田敬輔があつた。

古磴の遺作には法然上人勅修御傳、藥師寺繪縁起、向阿上人繪詞傳等の挿繪があり、増上寺には縁山十景等がある。

因に法然上人勅修御傳は正安元年（一二九九）僧舜昌之を作り、土佐吉光等その挿繪を描き、一部四十八卷であるが、元祿十六年浄土僧義山之れを上梓刊行し、其の時古磴に囑して挿繪を作らしめたものである。

とあり、没年が六十五歳であるのに八十五歳と誤っているが、狩野永納に学んだことや人物山水をよく描き、大

黒天が得意で、近世浄土宗屈指の名手であるとの多大な評価を受けている。また高田敬輔が門人であることも明記されている。

古磴の遺作には法然上人勅修御伝、薬師寺絵縁起、向阿上人絵詞伝等の挿絵があり、増上寺の縁山十景等があること。尚、法然上人勅修御伝は、正安元年（一二九九）僧舜昌之が作り、土佐吉光等がその挿絵を描き、一部四十八巻のものであるが、元禄十六年に浄土僧の義山がこれを上梓刊行したが、その時に古磴が挿絵を描いたことが記されている。

③ 近年の研究にみる明誉古磴

最近の明誉古磴の研究について、みることにする。

㊦ 藤堂祐範「法然上人行狀畫圖の弘傳に努めし人々―殊に横井金谷について―」（『佛教文化研究』第10号

一九六一年 佛教文化研究所 知恩院）

藤堂祐範氏は、この論考の中の「Ⅲ 古磴と雲竹」の項で、

高田敬輔亦和尚に就いて繪を習うたというが、敬輔は義山の在俗門弟で選擇集曼荼羅などを描いているから同信同行の間にその事のあったのは疑われない。殊に好んで大黒天の像を描き、郡山在任中には龜紙にその像を描き、春日神社のおん祭に社頭で施したというので、近時まで奈良郡山地方にはその龜紙のものが坊間に散在してあったと。丁度義山忍徴湛澄等と同時代で、又雲竹は義山の在俗門弟、湛澄は國文に堪能な人であつたから、これ等五人を送つて種々宗門典籍の著述刊行が畫作されたのである。享保二年五月二十三日世壽六十五歳にて示寂、墓は報恩寺に在り。著作に當麻曼荼羅撮要二卷、浄土十六祖傳、隆寛律師傳各一卷ありと。

とあり、高田敬輔が古磴から絵をならつたこと。さらに、高田敬輔は義山の在俗門弟であり、選擇集曼荼羅等を

描いているから同信同行の間柄であつたこと。そして、古磡は大黒天を描くのが得意で、多くが坊間に出回つたということである。

また、『法然上人行状画图』四十八卷（勅修御伝）については、義山が校訂した本文に古磡が画を付して『円光大師行状画图』（二十四冊、元禄十三年（一七〇〇））が印行され、さらに、雲竹が詞書きを施したものが『円光大師行状画图翼賛』（六十巻、元禄十六年（一七〇三））として編纂印行されたのである。

また、忍徴が享保二年（一七一七）『勅修円光大師御伝縁起』と目録各一卷を刊行している。

このように、義山、忍徴、湛澄、古磡、雲竹（雲竹は義山の在俗門弟、湛澄は国文に堪能）の五人によって、様々な宗門の典籍等が著述刊行されたという内容が記されている。

そして、古磡は、享保二年五月二十三日、六十五歳で示寂、墓は報恩寺に在ること。著作に當麻曼荼羅撮要二巻、淨土十六祖傳、隆寛律師傳各一卷があることが記されている。

さらに、大涅槃像、嵯峨清涼寺後門壁画、東大寺棟曳絵巻二巻、贈号絵詞伝三巻、向阿上人絵詞伝二巻について解説され、扶桑画人伝、近世逸人画史、続近世畸人伝、大和人物誌などによると、古磡の画の存録されるものに、念仏往生得失記、金玉画府、人物草画等があること。遺筆として薬師寺縁起、植槻縁起があること。その中でも人物草画は世の種々の業体の人物を草体に描いて俳画としても面白いもので、蕪村や華山が慕ったのも無理がないという評価が与えられている。

① アニー・ヒックマンの研究

アニー・ヒックマン氏は、画僧明誉古磡の概要、作風、研究課題と題し、三回シリーズでその論考を発表している。ここでは、特に、高田敬輔と古磡、義山、忍海の関係性が分かる所に視点を当て、論考をみることにする。

(i) 「画僧明誉古磡（1653～1717）の概要」（『美術フォーラム21』2009・vol 20 醍醐書房）

この論考の中で、古磡の得意とする大黒天を描くことになった動機について、

古磴とこの西岸寺との関係において初めての言及がなされるのは貞享元年（一六八四）甲子歳で、「僧侶古磴が敬神の証として自ら大黒天を千体描くことにした」という記述である。

と記されているが、出典が明示されていないため確認することが難しい。

ちなみに増上寺での修行期間について、『大本山増上寺史』^(注5)によれば、修學が許されるのが十五歳で、九部（名目部・頌義部・選択部・小玄義部・大玄義部・文句部・礼讃部・論部・無部）それぞれに三年の年限があるので、九部全てを脩了するのに最も短くて二十七年かかることになる。

だから、貞享元年（一六八四）は、古磴が十五歳で修行に入ったとすれば三十二歳で、修行を始めて十八年目を迎えていることになる。一方、義山は、三十七歳で増上寺での二十年の修行を経て、前年の天和三年（一六八三）に京都へ戻り、入信院に住している。

それから、『當麻曼陀羅白記撮要』と『浄土十六祖図伝』の論述の部分で、

『當麻曼茶羅白記撮要』（一六八八年）と『浄土十六祖傳』（同年）≒

というタイトルで論述をしているが、次のように確認していただきたい。

『當麻曼茶羅白記撮要』↓『當麻曼陀羅白記撮要』≒浄土宗では、當麻曼陀羅としている≒

『浄土十六祖傳』↓『浄土十六祖圖傳』≒西尾市岩瀬文庫／古典籍書誌データベースより≒

(ii) 「画僧明誉古磴（1653～1717）の作風」（『美術フォーラム21』2010・vol 21 醍醐書房）

ここでの論考は、古磴の作品を十四頁のカラー図版で五十二作品を取り上げ、それぞれの解説が記されている。その中で、『韋駄天図・昇龍圖・降龍圖（野村聴松庵）』の項で、高田敬輔について、

古磴の後継者である高田敬輔（一六七四～一七五五）によって描かれた日野の信楽院の本堂にも生き生きと描かれている。（以下、略）

と高田敬輔の菩提寺の天井画の中に描かれる『韋駄天図』が紹介されている。

《圓光大師贈號繪詞（知恩院）》の項では、その奥書から、

奥書があつて、詞は報恩寺の湛澄（一六五一〜一七一二、第十四代住職で古磴の先住に当たる）が撰び、淨写を北向雲竹（一六三二〜一七〇三）が行い、絵は古磴によると記されている。時に古磴は四十五歳であり、本作を完成することによって古磴は一種の証明書を得た形となった。

とあり、湛澄、雲竹、古磴の三者の連携によって完成し、高い評価を得ることになったことが記されている。

(iii) 「画僧明誉古磴（1653〜1717）の研究課題」（『美術フォーラム21』2010・vol 22 醍醐書房）

この論考は三回シリーズの総括の形をとり、「1明誉古磴という名称」〜「12三つの展覧会と作品所在調査」の十二項目にわたり、論述されている。

その中の、《3増上寺と義山良照》の項目では、

年齢が近く同じく知恩院にかかわり、法然上人円光大師にかかわったということとで、二人は言うまでもなく熟知の間柄であつたであろう。

と義山と古磴の間柄について熟知の間柄であつただろうことが記されている。

また、《11書家としての古磴》の項では、

古磴が能書家であつて「江戸時代浄土宗の三筆」の一人などと言われたことについては、「作風」の「人物・画」においてふれたことがあるが、他の二人は誰かというと思海（一六九六〜一七六一）と月僊（一七四一〜一八〇九）で、いずれも古磴より年代が下がる。

とあり、古磴と共に忍海の名も挙げられているが、その根拠の出典が明らかでないので確認ができない。

以上、三回シリーズの古磴研究をみたが、多数の古磴作品の図版提示やその注釈による貴重な研究であるが、論拠の基盤となる資料の出典が明示されないものが多く、推論に頼る傾向がみられる部分が多い論考である。

⑤ 大谷徹獎「画僧・古磴の生涯」（特別展没後三〇〇年『画僧古磴』二〇一七年 大和文華館）

今回の『画僧古磻』の展覧目録の中で、特に注目したのは、古磻の位牌、『薬師寺日記』、報恩寺時代の義山との関係、の三点である。

まず、初めに、古磻の薬師寺蔵の位牌である。

大胆にも図版の第一頁に掲げ、古磻の生涯を概観させるといふ趣向であろうか、注目に値する提示である。

《表》證蓮社明譽上人古磻虚舟大和尚

《裏》釋古磻前住洛陽報恩寺 次住郡山西岸寺後閑居於地藏院

而修補若許破壊 住凡三年 其間檢藥師經意自畫大曼荼羅

一幅及圖藥師寺緣起四軸並安之寶藏又數敷演淨土法以

利有緣終享保二年西五月廿三日寂壽六十五歲

と位牌の銘文を記しているが、図録一四八頁の本文では、【於】と【西】の二文字が欠落した読み取りになっているので、次のように補填して読み下した。

（釋古磻、前住、洛陽報恩寺。次住、郡山西岸寺。後に地藏院に於いて閑居す。

若許破壊せしを修補し、住むこと凡そ三年。其の間、藥師經の意を檢じ、自ら大曼荼羅に畫くこと一幅。

及び藥師寺緣起四軸を圖し、並びにこれを寶藏に安ず。またしばしば淨土の法を敷演し、以って有縁に利す。終いに享保二年西（丁酉（一七一七））五月廿三日寂す。壽、六十五歲。）

この銘文によって、古磻の前住が京都の報恩寺であり、次住が郡山の西岸寺であり、その後、薬師寺の塔頭である地藏院に閑居したことが分かる。その地藏院が、多少破損していたらしく、それを修復して、そこに三年ほど住したというのである。その間に薬師経を調べて大曼荼羅を描いたり、薬師寺縁起絵巻を描いたりして宝蔵に残したこと。また、しばしば浄土の教理に基づいた法座を多くの有縁の衆生のために説いたりしたが、終いに、

享保二年五月二十三日に、六十五歳で寂したということである。

位牌という象徴的存在であるので、いたずらに事実が装飾されるものではないと考えるが、いつ頃のものであるのか特定できる資料があれば、さらに銘文の内容の評価価値が上がるものと思われる。

次に、大谷氏の今回の古磡研究の最大の成果は、『薬師寺日記』の翻刻であると考ええる。

『薬師寺日記』を直接展観することのできない一般の者に取って、翻刻された貴重な資料は、古磡研究の発展に多大な貢献をするものであろう。

ここには、正徳四年から享保元年における条下に、古磡の作品にかかわる内容が掲げられているので、参考のために再掲してみたい。

正徳四年	四月	十三日	薬師曼茶羅の下絵完成
	五月	四日	薬師曼茶羅京都より届く
	五月	六日	薬師曼茶羅表具完成
	六月	二十三日	富士山の襖絵を描く
	七月	十四日	曼茶羅供養の準備完了
	七月	十九日	この日まで曼茶羅開眼法要勤められる
	七月	二十日	大黒天像二千枚寄進
正徳五年	四月	十九日	圓光大師出来、円福寺に渡す
	十二月	五日	十六羅漢寄進
正徳六年	一月	十四日	東照権現様寄進
	二月	廿日	守大黒之儀、貳百枚遣る
	四月	二十八日	如意輪観音出来、古磡より来り

四月二十九日 円成院の床識図書く

享保元年 七月 三日 襖絵を書く

七月二十三日 薬師寺縁起完成

この、『薬師寺日記』から、「薬師曼荼羅」の下絵完成の時期、搬送先が京都であること、表具の完成までに一ヶ月弱であること。また、開眼法要の準備、開眼法要の日取り。さらに大黒天像の寄進が二千枚。「圓光大師」の何ができて円福寺に渡したのか。円城寺との関係。襖絵（富士図か）。薬師寺縁起絵巻の完成時期等の貴重な事実を時系列で知ることができることである。

かなうことなら、『薬師寺日記』の提示された該当部分の影印や、条下の文言の原文があれば、さらに研究の発展が図られるのではないかと思われる。

三つ目は、報恩寺時代の項で、「圓光大師贈號繪詞」三巻の奥書である。
この絵巻の巻末に、次のように記されているのが読み取れる。

皆 元禄十禩龍飛丁丑中春穀旦

雒陽門中 報恩寺前住証譽湛澄草之

同寺當代 明譽古礪圖之

洛下 西方行者 僧 雲竹書之

（皆に、元禄十禩^{まつ}龍飛、丁丑^{ひのとうし}へ一六九七、中春（二月）、穀旦（吉日）、雒陽門中 報恩寺前住、証譽湛澄、之れを草す。

同寺當代、明譽古礪、之れを図す。

洛下 西方行者、僧、雲竹、之れを書す。）

この「圓光大師贈號繪詞」について、新纂浄土宗大辞典には、

三卷、『贈号絵巻』とも称す。紙本著色の萌黄金欄表具仕立て。知恩院蔵。元祿十年（一六九七）一月十八日に、東山天皇から法然に圓光大師の諡號が勅賜されたときの知恩院での慶讃法要の様子について、湛澄が撰文し、それを雲竹が詞書として浄写し、古礪が情景を絵に描いた絵詞伝。（以下、略）

とあるように、報恩寺の湛澄と古礪と雲竹の三人の連携によって描かれたものであることが確認できる。

また、この三人には、良照義山とのつながりもみえる。

その例として、右の①藤堂祐範「法然上人行狀畫圖の弘傳に努めし人々―殊に横井金谷について―」の論考のところでふれたが、『円光大師行狀画図』（二十四冊本）の「圓光大師御傳後跋」に、

達人隱士遊_ニ乎翰海_一 獻于墨池者往々其材不_レ乏唯足_ニ以悦_レ目而未_レ見_下其功管_ニ於佛事_一者_上爲_ニ甚可_レ借焉會應_ニ圓智上人之需御伝四十八卷書畫並進二手奏_レ功竟刻_レ梓播_ニ于四方_一以爲_ニ佛事_一焉翼使_ニ四海衆生成見景仰化益與_ニ天地而無_レ窮

元祿十三年春佛涅槃日

雫北報恩寺前住 古礪畫

證蓮社 明譽

雫西 林觀 雲竹書

林觀 雲竹

（達人隱士、翰海_{かんかい}に遊び、墨池の者の往々に其の材、乏しからず。唯、以って目を悦しむるに足りて、未だ其の功、佛事に於いて管_{あづ}かる者を見ず。甚だ借む可き為り。會_{たま}たま、圓智上人の需に応じ、御伝四十八卷の書畫、並べ進め、二手の功奏し竟_{きわ}るに、梓に刻み、于_こに四方に播き、以って佛事と爲す。翼くるは、四海衆生をして咸_{みな}く見て、景仰を使い、化益、天地に窮すること無し。

元祿十三年春佛涅槃日

雫北報恩寺前住 古礪畫

證蓮社 明譽

とあるように、義山と圓智は同門であり、師の聞証の命により、貞享の頃から『法然上人行狀絵図』の注釈や考証を行い、その本文に古欄が画を付し、雲竹が詞書きを書いて袋綴本にしたのが、右の『円光大師行狀画図』（二十四冊本）（元禄十三年刊）であり、さらに、義山が詞書きを校訂し、注釈を施したものが、『円光大師行狀画図翼賛』（六十巻、元禄十六年（一七〇三））として編纂印行されたのである。その序^(注6)には、

即賜^二御題^一曰^二法然上人行狀畫圖^一今現在^二本山知恩之藏^一實是淨家之美玉而末葉之氷鑑也始從^二降誕^一終至^二示寂^一自利利他之蹟昭^二昭乎數百歲之後^一有^二斯全傳在^一也淨家者流宜^二加^二珍敬^一者也哉然此傳雖^二已梓^一行于世^二魚魯字誤畫圖亦闕汝等參^二訂之知恩之傳^一又附之以^二畫圖^一且註^二釋文義^一考^二覈事實^一以便^二來裔^一我志^二于茲^一久而未^二果今屬^二汝等^一相謀勿^レ忽^二諸智也予也已受^二嚴命^一銘^二肝徹^一膈從^二爾以來頻登^二本山^一懇到求請弘通微志不^二扈背^一寶藏開^レ鎖全傳落^レ掌於^レ是盡^二力參訂^一事已成矣法師雲竹報恩礪上人相共隨喜書^レ之畫^レ之獅谷澄上人喜^二捨白銀百兩^一爲^二之興基^一智也

（即ち御題を賜りて、法然上人行狀畫圖と曰く。今、現に本山知恩の藏に在り。實に是れ淨家の美玉、末葉の氷鑑なり。始め降誕從り、終わり示寂に至るまで、自利利他の蹟、數百歳の後に昭々たるは、斯の全傳の在ること有ればなり。淨家は、宜しく珍敬を加うべし。然るに此の傳、已に于^この世に梓行すと雖も、魚魯字の誤り、畫圖また闕^かけり。汝等、之れを知恩の傳に參訂し、また附するに之の畫圖を以ってし、且つ文義を註釋し、事實を考覈^{こうかく}して、以って來裔に便せよ。我れ茲に志すとも久しくして未だ果たせず。今、汝等に屬す。相い謀つて諸々を智すること^{おろそかに}忽^{おろそかに}すること勿れ。

予、已に嚴命を受けて肝に銘じ、膈に徹す。爾^これ從り以來、頻りに本山に登りて懇到求請す。弘通の微志、扈^こ背せず。寶藏、鎖を開きて、全傳、掌に落つ。ここに於いて參訂に力を盡す。事、已に成れり。

法師雲竹、報恩の磧上人、相い共に随喜して、之れを書し、之を畫す。獅谷の澄上人、白銀百兩を喜捨して、之が興す基を爲す智なり。」

と記され、圓智と義山が、その師、聞証から、法然上人の行狀画図の魚魯を補正し、画図の欠けているところを補い、文義を注釈し、事実を調べ直し、後世の衆生のために役立てよという敎命を受けていたが、なかなか思うようには行かなかつたけれども、本山知恩院に何度も足を運んで懇請し、弘通の志を失わずに取り組んだことにより、全伝を把握することができたのである。

法師雲竹と報恩寺の古磧上人は、互に随喜して、雲竹は之れに詞書し、古磧は画を描いたのである。さらに、獅谷の忍激上人は、この行業に賛同して、白銀百兩を喜捨したことにより、この『法然上人行狀画図』を上梓する支えとなったという経緯を知ることができるのである。

このようにみると、湛澄、古磧、雲竹、聞証、圓智、義山、忍微、それぞれが絵巻や画図の制作を通して、互に深いつながりを持っていたことを知ることができるのである。

㊦ 古川攝一「画僧古磧の仏画について」（特別展没後三〇〇年『画僧古磧』一六四頁 二〇一七年 大和文華館）

古川攝一氏の論考の中で注目したいのは、高田敬輔との関連性がある「無量寿経曼荼羅図」についての項で、次のよう記されているところである。

古磧に絵を学んだという伝承のある高田敬輔（一六七四―一七五五）が正徳四年（一七一四）に描いた「無量寿経曼荼羅図」⁷⁾を、延享二年（一七四五）に版刻した作例が参考となる。ただ、縦長の画面に描かれた図像で、中央部は楼閣や宝地のある浄土図であり、古磧の手がけた「無量寿経曼荼羅図」⁸⁾とは関連が認められない。古磧の場合は四角い画面で、中央に主題となる場面を大きく描き、周辺部に細かい区分けを設定し經典の内容を表現するという全体的な構図は、当麻曼荼羅図と共通する。また、諸尊が主尊を囲むように

参集する様を表現する点は、法隆寺金堂壁画の浄土变相図、「四修釈迦如来説法図」（奈良国立博物館）や「俱舍曼荼羅図」（東大寺蔵）などにみられる群像圍繞形式で、南都ゆかりの作例に着想を得た可能性がある。ちなみに、水墨で描かれた薬師寺所蔵「釈迦十六羅漢図」も同様の構図を取る。

一方、「薬師浄土曼荼羅図」も同様に、同じ図像構成を取る作例を見出せないが、薬師浄土の表現は「智光曼荼羅図」や「青海曼荼羅図」と類似する。ただ、全体的な構図はやはり当麻曼荼羅図と共通しており、古磴の浄土図の特質として、当麻曼荼羅図を基軸に、各經典の内容を明快に視覚化した独自の図像の創出が挙げられる。何れの作例も大画面であり、観者を絵画空間に引き込む工夫が見られる。例えば、「阿弥陀経曼荼羅図」や「無量寿経曼荼羅図」のように、観者に背を向けた僧侶の存在や、画面下部に伽藍や火事という現実的な場面、あるいは地獄の描写といった観者に馴染みやすい場面を配する点が指摘できる。こうした画面構成を考慮すると、これらの作例は民衆への「絵解き」に用いられたことが想定される。（以下、略）と述べられているように、高田敬輔版は、縦長の掛け幅の図像で、中台が極楽浄土の莊嚴を表し、虚空段、宝池段、宝樓段、宝樹段、宝地段が描かれ、その向かって左側に、法蔵菩薩の發願と修行の様子が七区画、上縁が三輩往生段、天下和順、此土修善となり、右縁は貪瞋愚過の三悪段、そして下縁が五悪痛燒段、その下が三途無量苦惱段という構成になっている。

一方の古磴の「無量寿経曼荼羅図」は、^(注7)と^(注8)を見比べれば明らかに違いがあるように、ほぼ方形に近い四角い画面である。その対角線の交点である中央に、後ろ向きの僧侶姿の法蔵比丘が、世自在王如来の前に坐し、四十八願の誓願を成就して阿弥陀仏となり、衆生を救済して極楽浄土に往生する法が説かれている場面である。その周りには、十六大弟子、八部衆、諸菩薩、比丘等の多数の会衆が描かれていて、経文に基づいた極楽浄土の莊嚴や三悪段、五悪段は周りを取り囲むように区分けされて描かれている。

このように、古磴の「無量寿経曼荼羅図」は、古川氏が指摘しているように、四角い画面の中央に主題を大き

く描き、周辺部に經典の内容を細かく区分けして表現する方法は、一見すれば「当麻曼荼羅」と共通していることから、「当麻曼荼羅」の全体構成の影響を受けているということができると考えられる。

また、高田敬輔版の「無量寿経曼荼羅」と古磡の「無量寿経曼荼羅図」の大きな違いの特徴として、高田敬輔は市井の在俗の町絵師の立場で『無量寿経』を捉え、衆生に極楽浄土の莊嚴を目の当たりにすることを主眼に、それには三輩往生があり、三悪段、五悪段、三途苦惱段を厭い、念佛往生を願うことを強調しているが、片や古磡は、浄土宗の出家者の立場としての『無量寿経』、つまり法蔵比丘の四十八願誓願成就、衆生救済、極楽浄土往生の法が説かれる場面を強調したかったのではないかと考えられる。

(三) 曇譽忍海との関わり

右のように、高田敬輔と良照義山と画僧古磡との関わりをみてきたが、ともに重要なのは、画僧忍海の存在である。どのような関わりがあるか考察を加えることにする。

① 「忍海上人伝」にみる忍海

画僧忍海の業績については『古文化研究』第十四号六十一頁、杉本欣久「増上寺の学僧・忍海の作画と復古思想―江戸中期の徂徠学派にみる文化潮流―」の論考を参考にし、その行業を考察する。

忍海の伝記については「忍海上人伝」^(注9)によって、その概要を読み取ることができる。

法諱は忍海、字を海雲、号を寶蓮社曇譽、また自号を白華無礙子といい、江戸の人で姓氏は詳らかではないこと。幼い頃から画が得意な忍海が、ある画家の所に入門するが、その娘との恋愛感情のもつれから愛欲のもたらす苦しみの深さを厭い、出家を決意し、増上寺の学寮に入る。だが、才智や容貌が優れた二十歳過ぎの忍海を訝しがり何処も入学を許可しなかったのである。最後に訪ねた鐵仙和尚が一見して優れた器であると判断し、それまでの由来を尋ね、その志を無にすることなく出家剃髪を許し、忍海と名づけたということである。

その後、肥後熊本侯の嫡母清涼院の庇護を受けながら、才智と氣力に溢れるままに仏教関連ばかりか儒教や道教等の章疏の類を十年程で概見して会得したのである。中でも後に生涯の仏道の師となる敬首きようしゅ和上（一六八三～一七四八）の『光明眞言儀軌辯妄』を読み、その卓識に服して座下に投じて学んだということである。和上も忍海の器量を重んじ、面倒を良くみて育て、その後の事を委せられる程になったということである。特に律に関して「六物諸書」「教誡儀」「天台戒疏」等を講じたということである。

また、画業については、丹青に巧みで、墨蘭や墨梅を描くのが最も得意であるとともに、仏画も極めて巧みに描き、特に浄土変相や諸尊の曼荼羅を描くこと千余鋪に及び総べて彩りが鮮やかであったということである。ことに翰墨に優れ、篆書や印章が巧みであったということである。

忍海の性格は、方直志尚で、人には寛容だが決して迎合するようなことは無く、一時の輩でも敬懼して大事にしたということである。そして、決して安請け合いをすることなく、例えば、縁山の方丈で、酒に酔ったある大名から、即興で絵を描く席画を求められたが、貧道とはいえ法服を身につけた沙門である以上、市肆の画工のように見世物で絵を描くことはしないときっぱりと拒絶したという話が伝わっているほどの人物であったということである。

② 「當麻曼陀羅」に関わる忍海

右の伝記の中にも記されている浄土変相、特に「當麻曼陀羅」に関わる忍海の業績は多大なものがある。

師と仰ぐ敬首が延享元年（一七四四）に當麻曼陀羅の講義をしたことにより、「當麻曼陀羅」と大きく関わっていくことが、忍海の著述である『當麻曼陀羅正義隨聞記』及び『當麻變相考』によって知ることができる。ともに、良照義山や古欄とのつながりも知ることができるのである。

忍海が「當麻曼陀羅」とどのような関わりを持ったか概略的にみることにする。

＊忍海、寛保三年（一七四三）、七百年程前（平安時代頃のものか）の古曼荼羅【楞嚴先徳（恵心）筆の

真筆】を入手。

* 師の敬首の覽に供す。敬首、稽首礼拝、過去に洛陽の古変相を見たが禅林寺の変相が第一と見ていたが、この変相と相似している。

* これを契機に、敬首が「當麻曼陀羅」の講説を延享元年（一七四四）四月廿一日より延享二年（一七四五）二月十五日まで、三會三十二席行う。

* 忍海、この講説を随聞して『當麻曼陀羅正義講聽書』四卷^(注10)（宝暦九年（一七五九））を著す。その間、実に十五年経過。さらにこの四巻を講本として、宝暦九年六月五日より七月十日まで講説する。

* 忍海、敬首の説を受け、近畿一円の「當麻曼陀羅」を現地調査を行う。結果を『當麻變相考』^(注11)（延享三年（一七四六））として著す。

* 特に、延享三年（一七四六）五月、八月、當麻寺の「當麻曼陀羅」について調査を行い、問題を発見、復元工作に取り組む。

【當麻曼陀羅】《文亀本（文亀三年（一五〇三））の問題点

● すべての諸尊が白肉色（黄土色）で彩られなければならないが、下縁の「散善義」の上品上生・上品中生・上品下生と中品上生の来迎が座像であり、金泥で彩色されていること。

* 忍海、當麻寺に提案。

㊦ 文亀本が損傷が激しいので、貞享本^(注12)《貞享四年（一六八七）》に懸け替えることを提案する。

㊧ ところが、貞享本は諸尊が、皆、金泥で彩られている。

㊨ 山僧（特に眞言宗の北宝院、不動院、明王院）から、仏像を、皆、金色に彩色すれば、古変相の黄土色と相違するので、補処は成し難いと反論される。

㊩ そこで、再度、忍海が、古変相の如く黄土色の変相を一鋪新画して奉納することを提案する。

㊦ 再提案に、山僧等は、稍々、許諾した。

㊧ さらに、同行していた入信院の実道が、貞享本は、義山や称求が深く関わり、特に称求が一代をかけて成したものであるから、その旨を考慮して欲しいと申し入れた。

㊨ そして、いろいろ話し合った結果、貞享本の諸尊の金泥を黄土色に塗り改めるのが最善の策であるという結論に達した。

㊩ 延享二年（一七四六）十月、貞享の正図を京の入信院に迎え入れて、画師洞玄に塗り直しをさせた。

㊪ 延享三年（一七四七）一月十八日、知恩院の鸞宿上人が開眼供養し、二月に當麻寺に送り帰した。

㊫ 當麻寺では、文亀本を宝庫に納め、貞享本を曼荼羅堂の御厨子に安置した。

このような経過をたどり、やや強引な面も窺えるが、忍海による「當麻曼陀羅」復元工作が成るのである。

さらに、もう一点、古碕の「當麻曼陀羅」に関わりがある条下^(注13)があり、それは、古碕が新写したもので、京の小川、報恩寺にあって諸像が、皆、黄土色であり、全図が良照義山の『當麻曼陀羅述獎記』の説の通りであることが述べられている。

③ 『圖画和字選擇集』と忍海

法然浄土教の根本聖典である『選択本願念仏集』について、関通^(注14)（諱が関通、字が無礙、号は一蓮社向誉。元禄九年（一六九六）～明和七年（一七七〇））。忍海と同じく敬首に師事。）が仮名交じり文に直し、それに忍海が二十四枚の挿絵を入れたものである。

この『圖画和字選擇集』と同年に同じように仮名交じり文に挿絵の入った『通俗圖選擇本願念佛集』が刊行されている。両書の共通点は、本文が仮名交じり文であるが、『圖画和字選擇集』の挿絵は忍海、『通俗圖選擇本願念佛集』の挿絵は高田敬輔の「選択集十六章之図」の絵相と思われる原版とほぼ同様の絵相が使われている。この比較対照は、第二章第一節で考察するので、参考にされたい。

第二項 高田敬輔・良照義山・明誉古磧・曇誉忍海との関連

(一)

敬輔・義山・古磧・忍海の関係図

高田敬輔と良照義山と明誉古磧と曇誉忍海の四者の関係について、種々の行業の中から一部であるが、相互に影響を与え合っている事柄を確認すると次のようなことを指摘できる。

① 敬輔と義山：敬輔にとって、義山は浄土教の教理を学んだ師であり、その在俗門弟である。その成果が「選択集十六章之図」「無量寿経曼陀羅」となり、賞賛を受けている。

② 敬輔と古磧：古磧は大画や雪舟風の画法を学んだ絵の師でもあり、仏法の師でもある。その影響で敬輔が江戸在住時に大衆の前で大涅槃図を描いたという逸話がある。

③ 敬輔と忍海：仮名書き「選択集」の挿絵として「選択集十六章之図」の絵相が反映された《二尊院本》とあえて和様の挿絵にした「和字選択集」《関通本》で相違点を明らかにしている。

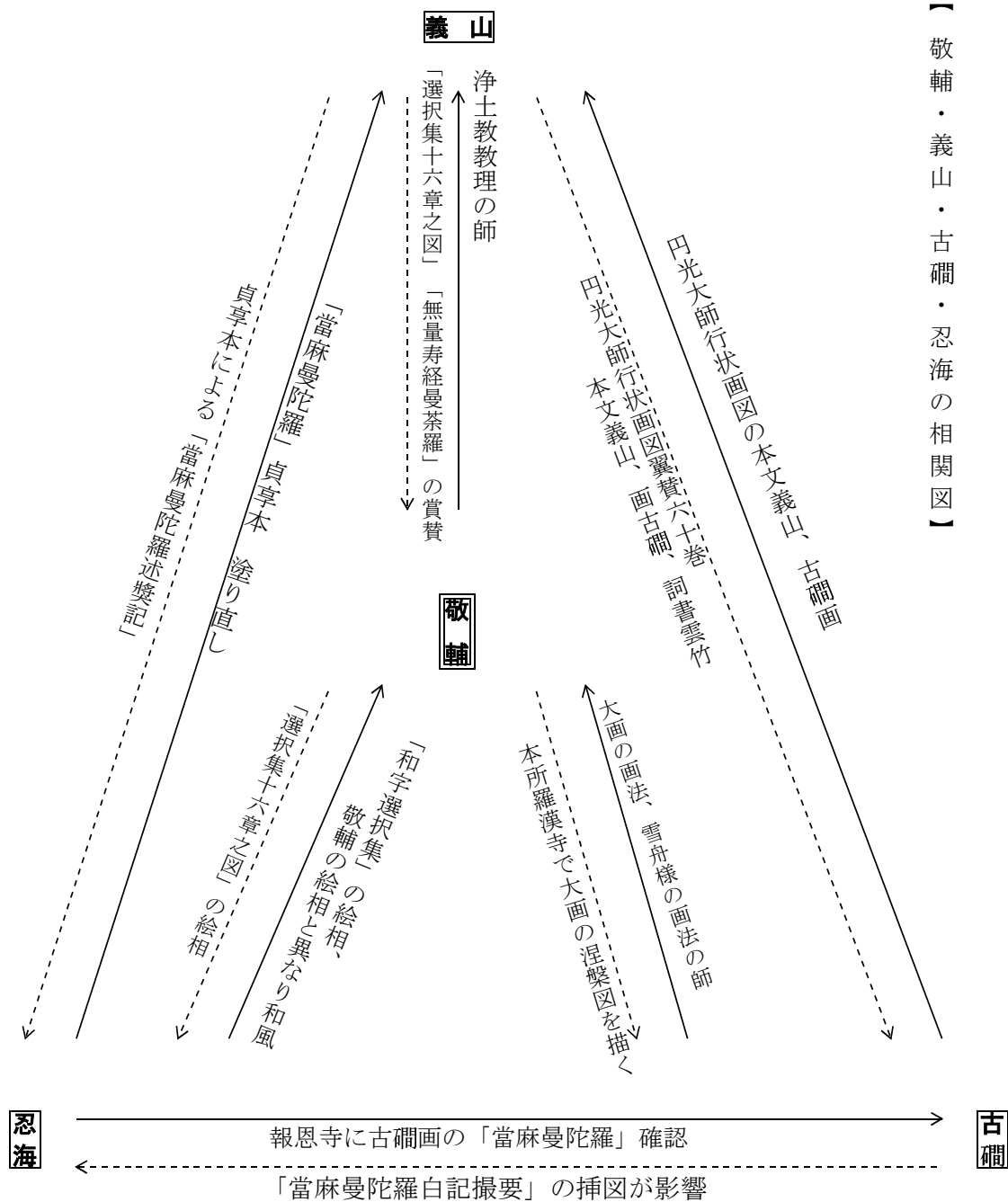
④ 義山と古磧：法然上人の行状画面の制作にあたり、本文義山、画古磧、詞書雲竹の協同体制のもとに「円光大師行状画面」「円光大師行状画面翼賛」が編纂印行された。

⑤ 義山と忍海：「當麻曼陀羅」をめぐり、義山は称求と貞享本を基に「當麻曼陀羅述獎記」《諸尊座像》を刊行、忍海は現地調査《諸尊立像》を踏まえ、貞享本の諸尊の塗り直しをする。

⑥ 古磧と忍海：報恩寺に古磧画の「當麻曼陀羅」を確認《諸像黄土色だが図は義山の述獎記の説》。古磧の『當麻曼陀羅白記撮要』の挿図が「當麻曼陀羅」研究に影響を与えたと思われる。

以上のような相互の関連を図示したのが、次頁の【敬輔・義山・古磧・忍海の相関図】である。

【敬輔・義山・古磧・忍海の相関図】



(二) 高田敬輔・良照義山・明誉古磧・曇誉忍海の四者関係年譜

西 暦	和 暦	干支	高田敬輔	年齢	良照義山	年齢	明 誉 古 磧	年齢	曇 誉 忍 海（宝連社）	年齢
一六三二	寛永九	壬申							・北向雲竹（圓光大師行狀畫圖翼賛の書担当）生まれる。	
一六四八	慶安一	戊子			・良照義山、京都に生まれる。	一				
一六五三	承応二	癸巳					・明誉古磧生まれる。	一		
一六六二	寛文二	壬寅			・良照義山、大和郡山の光傳寺において剃髪。	十五				
一六六三	寛文三	癸卯			・良照義山、江戸の増上寺に赴く。吞誉の室に入る。	十六				
一六七四	延宝二	甲寅	・高田敬輔、近江日野町に生まれる。	一						
一六八三	天和三	癸亥			・良照義山、東国より京都に帰り、華頂山麓入信院に住す。	三六				
一六八四	貞享一	甲子					・大和郡山の西岸寺の僧であった明誉古磧「敬神の証しとして自ら大黒天を千体描くことにした」という。	三二		
一六八六	貞享三	丙寅	・敬輔の師、京狩野派、四代目狩野永敬、父永納より家督相続。				・増上寺伽藍図を描く。	三四		
一六八八	貞享五 元禄一	戊辰					・『當麻曼荼羅白記撮要』（刊本、二巻）の挿図（木版画）を描く。 ・『浄土十六祖傳』（刊本）の挿図（木版画）を描く。この時「虚舟」の銘を使う。	三六		
一六九一	元禄四	辛未	・七月二二日、狩野永敬弟子として仁和寺『御記』に初出。	十八	・『浄土三部経』四巻刊『佛説無量壽経』二巻・『佛説観無量壽経』一卷・『阿弥陀経』一卷』①	四四	・『續傳佛道論衡図』（刊本、出版人は京都の茨城方道）の挿図を描く。	三九		
一六九三	元禄六	癸酉	・（狩野永納、父狩野山雪の草稿を編集・増補し、父の没後四〇年かけて『本朝画史』を完成。）	二十						
一六九四	元禄七	甲戌			・善導撰『観経疏』四巻刊。② ・善導撰四部五巻刊。『法事讃』二巻・『観念法門』一卷・『往生禮讃偈』一卷・『般舟讃』一卷』③	四七				
一六九六	元禄九	丙子			・『選擇本願念佛集』二巻刊。（采賢堂 古藤春正監刻）④ ・『選擇本願念佛集』二巻刊。（享保乙卯中春求版 今井七郎兵衛 井上忠兵衛合刻）⑤	四九			・忍海、生まれる。	一
一六九七	元禄一〇	丁丑	・（狩野永敬の父、狩野永納没。）	二四	・『往生論』二巻刊。⑥	五十	・『圓光大師贈號繪詞』（三巻）（知恩院蔵）を描く（撰文は湛澄、書は北向雲竹、絵は明誉古磧）。 ・西翁院の「観経曼荼羅」版木彫られる。報恩寺蔵の『観経曼荼羅（當麻曼陀羅）』も、この年。	四五		
一六九八	元禄十一	戊寅			・釋道綽撰『安樂集』二巻刊。⑦	五一				
一七〇〇	元禄十三 庚辰				・『圓光大師行狀画図』二十四冊印行。	五三	・二月一五日『法然上人四十八巻傳』（刊	四八		

第三項 小結

絵師高田敬輔の宗教的環境を整えた主な人材として、良照義山、明誉古礪、雲誉忍海の三者について、その関係性を考察した結果、高田敬輔を中心にみて、次のようなことを改めて知ることができる。

① 良照義山との関係については、浄土教の教理の教授者であり、高田敬輔の描いた「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」を賞賛を与えた良き理解者であったこと。

② 明誉古礪との関係については、大画や雪舟様の画法の師であり、その一例として東都本所羅漢寺で大画の涅槃図を描いたという記録が残っていること。

また、第五章第二節で詳細を記すが、『無量寿経』を共通の画題として両者が絵画表現した、敬輔の「無量寿経曼荼羅」と古礪の「大経曼荼羅図」があるが、敬輔は町絵師として、古礪は画僧としての立場の違いを読み取ることができること。

③ 雲誉忍海との関係については、共通点として、同じ年（延享元年）に仮名書きの『選択本願念仏集』が出版されているが、敬輔の「選択集十六章之図」の絵相と類似した挿絵の『通俗圖繪選擇本願念佛集』と、関通著、忍海挿絵の『和字選択集』では、忍海の挿絵が和様で明らかに敬輔とは異なる独自性があること。

④ 敬輔、義山、古礪、忍海の四者関係年譜をみると、義山は敬輔の二十六歳年上、古礪も二十一歳年上、忍海は二十二歳年下であり、敬輔が四者の年齢の中間に位置する。本論文で取り上げる「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」を描いた頃は、敬輔四十歳、義山が「五部九卷」や『円光大師行状画図翼賛』等の大仕事を終え、亡くなる四年前の六十六歳。古礪は前年（正徳二年）に「大経曼荼羅図」を描き終えた六十一歳、薬師寺地藏院に居住する前年の事で、敬輔、義山、古礪、それぞれに業績を上げている時である。この頃、忍海はまだ十八歳で、これからの活躍が期待される頃のことである。

(注7)(注6)(注5)((注4)(注3)(注2)(注1)

前掲書『敬輔画譜』「高田敬輔翁畧傳」(『敬輔画譜』寛政十二年 老泉戒如)

『高田敬輔と小泉斐』(二〇〇五年 滋賀県立近代美術館)

『近江湖東・湖南の画人たち』(一九九九年 栗東歴史民俗博物館)

松永知海「書師岡村元春と義山版」(『法然浄土教の総合的研究』佛教大学総合研究所記要 別冊 二一六頁 二〇〇二年)

「2修学方法」(『大本山増上寺史』二二六頁平成十一年(一九九九) 刊大本山増上寺)

『円光大師行状画図翼賛』(六十巻、元禄十六年(一七〇三)) 【国立国会図書館デジタルコレクションより】

高田敬輔「無量寿経曼荼羅」(紙本描印著色 一五三・二×六九・〇 正徳四年(一七一四) 林個人蔵)



(注8)

古蹟「大経曼荼羅図」(紙本着色 二五〇・五×二〇四・五 正徳二年(一七一二) 浄国院)《特別展没後三〇〇年『画僧古蹟』十二頁より転載》

【解説欄には「無量寿経曼荼羅」とあり、太宗寺本を指すが、《大経》は《無量寿経》のことであり、太宗寺本と浄国院本は、構図も同様であるので、年紀・署名・印象があり、色彩が鮮明な浄国院本を添付した。右(注23)の高田敬輔版とは、構成・配置等が異なる】



忍海上人伝『浄土宗全書』第十八卷 四八七頁

(注10)(注9) 忍海『當麻曼陀羅正義講聴書』(宝暦九巳卯年(一七五九)九月 写本 佛教大学図書館蔵)

一 當麻曼陀羅正義隨聞記ノ初二書

此當麻曼陀羅正義四卷ハ延享甲子年、先師瓔珞菴ノ敬首ノ講説スル処ニシテ、予所聞ニ隨ヒテ、席上ニ記セルモノ也。咏上(和尚)嘗此ノ變相ヲ講談セント欲スル^{こと}數年ナリシニ、其圖相正トスヘキモノ無キ故ニ、歲月ヲ空ク過サル。然ニ予寛保三癸亥穉、所感アリテ古變相一舖を得タリ。傳テ云咏上(和尚)ノ古刹ニ鎮藏セル變相ニ^{して}、楞嚴先德ノ手澤也ト。予是ヲ得テ熟々拜視スルニ、素練金碧、凡ソ六七百歳前ノ古物ニ^べ、其画精妙ニ^べ、凡筆ニアラズ。楞嚴先德ノ眞筆疑フヘカラス。即是ヲ咏上ノ覽ニ供ス。咏上一觀^べ、稽首礼拜シ、歎^べ云。予昔年洛陽ニ在シ時、諸刹ニ藏スル模写ノ古變相ヲ見ル^に數幅、就中禪林寺ノ變相特ニ第一也。然今此ノ變相、全ク彼ニ相似シテ、予所傳及ヒ思フ処ニ合セリ。眞ニ寶トスヘシト云云。於是咏上自發起^べ、變相を講説セラル。甲子(延享元年(一七四四))四月廿一日ヨリ講説シ、乙丑(延享二年(一七四五))二月十五日ニ至リテ、前後三會三十二席ニ^べ、講已レリ。爾ノ時予隨^に聞ニ筆記セルモノ、即此ノ四冊ナリ。《以下、略》

(注11) 『當麻變相考』《貞享ノ正図ヲ曼陀羅ヘ掛ケ初ル事【十九丁表、廿丁表】》(延享三年丙寅(一七四六)四月 写本 佛教大学図書館蔵)

一 ○貞享ノ正図ヲ曼陀羅ヘ掛ケ初ル事

○去ル延享二年丑年マテハ、曼陀羅堂ノ本尊ニハ、文龜ノ尊像カカリマシ^{タリ}。タリ。
但シ秘藏者ノ貞享年間此等ニ詣セラレシ頃迄ハ第二ノ變相
カカリテ然リト見ヘタリ其後秘藏ノ序ニテアリ
然ルニ此文龜ノ變相モ、稍々損壞シ玉ヒナントス。然レハ大切ノ宝物ノ滅シ玉ヒナン^にヲ愁ヘテ、予、當麻ノ山僧に告り。如此ノ秘藏ノ變相壞滅セン^に実ニ口惜キ^にナリ。願クハ貞享ノ正図ヲ正殿ヘ移シ、懸ケラレテ文龜ノ變相ハ宝藏ニ籠モラレテンヤト云ニ、山僧^{明北山院 不動院}等ノ云ク。実ニ尔カナレ^に痛ム^に処ハ貞享ノ図写ハ至テ妙絶ナレ^に佛像ヲ皆金色ニ彩色セラレヌレハ古變相ノ黄土色ナルニ相違セリ。故ニ本尊ノ補処ニ成シ難シト云。於是、予、新タニ發願シ、然ラハ古變相ノ如ク黄土色ノ像ノ變相一舖新画シテ、奉納セント云フニ、山僧モ稍、許諾ス。時ニ入信院ノ実道公モ同ク、予ト此度當麻ニ詣セラレシニ、此挙ヲ聞キ歎^べ云ク。義山上人モ深ク貞享ノ正図ニハ心ヲ用ヒ玉ヒ、且ツ大雲ノ称求和尚ノ一代ノ大切ナレハ、同シクハ貞享ノ正図ヲ以テ、正殿ノ補処

ニセンヲ歎ストナリ。於是テ相媒リ、山僧ト擬シテ貞享ノ正図仏像ノ金色ナルヲ皆黄土色ニシテ本殿ノ補処ニセンハ如何ント云ニ、山僧何レモ同シ、許諾テ、於是、延享二丑ノ年十月ノ頃、貞享ノ正図ヲ京入信院ニ迎ヘテ、画師洞玄ニ命ヅ、貞享変相ノ金色ヲ塗埋シテ黄土色ニナス。即チ其ノ年臘ヨリ明ル寅ノ正月初メ迄ニ其□□。即チ延享三寅正月十八日ヨリ花頂山御忌ノ中、於入信院□□ニ拝瞻セシメ、本山大和尚鸞宿上人開光供養ナシ玉ヒ、同シ二月當麻寺ヘ送り、即チ文亀ノ変相ヲ卷キテ宝庫ニ納メ、貞享ノ図ヲ以テ曼陀羅堂ノ御厨子ニ納所奉ル。是レ今日ノ當麻変相ナリ。実ニ貞享ノ変相ヲ不朽トセシハ入信ノ実道公及ヒ予カ志願ノ□ス処ナリ。故ニ其ノ始末ヲ爰ニ記シ畢

延享三年丙寅年四月記シ縁山学僧忍海

(注 12) 前掲書、忍海『當麻変相考』【八丁表】

「○第四貞享正図

宝蔵ニ鎮ス。延享年中称求ノ造立ノ変相ナリ。ノ但シ山後ハ其ノ新曼陀羅ト云云図ト云ハ称求及縁山上人ノ名目ナリ

諺此変相ハ青木七禪大夫力画ナリ。」

(注 13) 前掲書、忍海『當麻変相考』【十八丁表】

「○又正図 方一丈五尺キヌ地

京小川報恩寺ニ在リ。古澗マヤノ新寫。諸佛皆白肉色但シ黄土色ナリ

此図全ク述獎記ノ説ノ如シ。」

(注 14) 『関通和尚行業記』卷之中（浄土宗全書十八卷 二四九頁）

「師。あるときおもへらく。夫選擇集は。實にこれ開宗の根基。行者の明鏡なり。しかるに此書。初發心の僧尼清信の士女。讀み得るに便ならずとて。淨業の暇國字に釋して刊刻せらる。たま／＼筆工に乏しかりければ。門人に命じて。雲行法師の書せる。和語燈錄などの文字を。切わかち。選擇十六章の。文文句句に植えつらねらる。三縁山の忍海上人隨喜して。畫圖をそへ喜頭縮紳序跋を選述し給ひ。修飾となり。延享元年版にちりばめ世に行はれ。和字選擇集といふ。」

第二章 「選択集十六章之図」の概要

第一節「選択集十六章之図」の全体構成と諸本との対比

第一項 「選択集十六章之図」の全体構成

「選択集十六章之図」は十六章の章立てがされ、中央上段部に中心となる第七章の阿弥陀仏が配され、光明を十方に放ち、念仏する衆生を摂取不捨している姿が描かれている。阿弥陀仏に向かって右側の上段に第一章、そして左側に第二章と、以下、左図のように、周りに各章それぞれを象徴する教義が絵画表現されている。

＊高田敬輔原版「選択集十六章之図」（紙本刷印着色 一・一五・八×五一・五）個人蔵



* 高田敬輔 原版「選択集十六章之図」の各章の標章と位置

選 集 十 六 章 之 圖	
<div>第一 捨聖道歸淨土章</div> <div>第五 念佛現當利益章</div> <div>第十一 約對雜善讚歎念佛章</div> <div>第十六 弥陀名号付屬舍利弗章</div> <div>第六 末法之後特留念佛章</div> <div>第十二 唯以念佛付屬阿難章</div> <div>第七 弥陀光明唯攝念佛行者章</div> <div>第十 來迎化佛唯讚念佛章</div> <div>第十五 六方諸佛護念念佛行者章</div> <div>第四 三輩念佛往生章</div> <div>第十三 念佛多善雜善小善章</div> <div>第八 念佛行者必具三心章</div> <div>第十四 六方諸佛證誠念佛章</div> <div>第二 捨雜行歸正行章</div> <div>第三 唯念佛往生本願章</div> <div>第九 念佛行者行用四修法章</div>	<div>款記</div> <div>【制作の経緯記載】</div>

それぞれの章を、概観すると、

＊ 第一章「第一 捨聖道歸淨土章」《道綽禪師、聖道・浄土の二門を立てて、しかも聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文》では、聖道門の難行を険しい山登りで表し、峯まで登れる者は智慧や能力が勝れているが、一般衆生には難しく、浄土門の易行は、出家者も在家者も、本願を信じて往生を願い、念仏することはあたかも船に乗っている様子で表わし、乗船者の念仏行者それぞれに、阿弥陀仏から摂取不捨の光明が注がれている。

＊ 第二章「第二 捨難行歸正行章」《善導和尚、正雑二行を立てて、難行を捨てて正行に帰するの文》では、上下二段に五人の出家者が正行と難行を行なう姿を対比的に描き、上段は読誦・觀察・礼拝・称名・讚歎供養の五つの正行で、称名正行が正定業であることから摂取不捨の光明が引かれ、他は助業であることが描かれている。

＊ 第三章「第三 唯念佛往生本願章」《弥陀如来、余行をもつて往生の本願としたまはず。ただ念仏をもつて往生の本願としたまへるの文》では、阿弥陀仏が仏になる前に法蔵菩薩だった時、世自在王仏の前で二百一十億の諸仏を見、難行を捨てただだ念仏の一行を選んだ様子が描かれている。

＊ 第四章「第四 三輩念佛往生章」《三輩念仏往生の文》では、出家者の姿をして念仏を称えて坐す上輩、宮殿や堂塔を建立し、念仏を称える在家者の中輩、命終に近い在家者が善知識とともに十念を称えている臥した下輩の者それぞれが、様々な功德を修して、その上で念仏を相続して往生する様子が描かれている。

＊ 第五章「第五 念佛現當利益章」《念仏利益の文》では、念仏には現在と未来とにおいて利益があることを、無量寿経を説く釈迦如来の前で弥勒菩薩が聞いている姿を描いている。この第五章の標章について第二章第三節第五項で詳述するが、「念佛現當利益章」と第十一章の内容である【現當利益】の文言を入れているのは、高田敬輔独自の解釈によるものである。

＊ 第六章「第六 末法之後特留念佛章」《末法万年の後に余行ことごとく滅し、特に念仏を留むるの文》では、末法の世になって全てのものが衰えるが、無量寿経が留め置かれて永遠に救うという様子を、あばら家の前でやせ衰えた出家者・在家者が念仏を唱えれば極楽浄土に往生できるという姿を描いている。

＊ 第七章「第七 弥陀光明唯攝念佛行者章」《弥陀の光明、余行者の者を照らしたまはず、ただ念仏行者を撰取るの文》では、「選択集十六章之図」の中心となる上段中央に描かれた阿弥陀仏であり、その光明はただ念仏する者全てに放ち、摂取したまうことを描いている。

＊ 第八章「第八 念佛行者必具三心章」《念仏の行者必ず三心を具足すべきの文》では、念仏の行者は、必ず至誠心・深心・回向発願心の三心を具えるべきことを表している。至誠心は在家者が名号の前で合掌して偽りの心が無いことを描き、深心は手に經典を持って一心に念仏している姿を描くとともに、回向発願心は「二河白道」の図絵に譬えられている。

＊ 第九章「第九 念佛行者行用四修法章」《念仏の行者四修の法を行用すべきの文》では、阿弥陀三尊像の軸の前に五色の袋に入れた阿弥陀経を奉り、出家者・在家者が敬い、念仏を唱えている様子を描いている。念仏の行者は、一に恭敬修、二に無余修、三に無間修、四に長時修の四修を行なわなければならないことを示唆している。

＊ 第十章「第十 來迎化佛唯讚念佛章」《阿弥陀仏來迎して聞經の善を讚歎せず、ただ念仏の行を讚歎したまふの文》では、如意をもつ出家者を臨終の善知識の姿に描き、臥した在家者を念仏行者の臨終の姿とし、名号を唱えれば三尊の化仏來迎があることを描いている。

＊ 第十一章「第十一 約對雜善讚歎念佛章」《雜善に約對して念仏を讚歎するの文》では、念仏の行者である出家者・在家者が蓮池の白蓮華の美しさを見て、五種（好人・妙好人・上々人・希有人・最勝人）に譬えられ、仏にほめられているのが描かれている。

＊ 第十二章「第十二 唯以念佛付屬阿難章」《釈尊、定散の諸行を付属したまわず、ただ念仏を以って阿難に付属したまふの文》では、釈迦如来が阿難に対して、観無量寿経では定散の諸善と念仏の行とを説いたが、この経を付属する時には、諸善をさしおいて念仏の一行だけを付属したことを明らかにしている。

＊ 第十三章「第十三 念佛多善雜善小善章」《念仏を以って多善根とし、雜善を以って少善根としたまふの文》では、出家者が墨を摺って仏像を描き、在家者が六字の名号に手を合せて多善根の念仏を修している。念仏を修している在家者には阿弥陀仏の攝取不捨の光明が引かれているが、出家者の少善根には引かれていない。

＊ 第十四章「第十四 六方諸佛證誠念佛章」《六方恒河沙の諸仏余行を証誠したまはず、ただ念仏を証誠したまふの文》では、釈迦如来が舍利弗尊者に阿弥陀経を説き、六方の恒河沙ほどの諸仏が、念仏の衆生が阿弥陀仏を念ずれば極樂往生できるといふ証誠のために立ち現われている様子が描かれている。

＊ 第十五章「第十五 六方諸佛護念念佛行者章」《六方の諸仏、念仏の行者を護念したまふの文》では、念仏の行者を示す男女の周りに六方恒河沙の諸仏が常に護って取り囲んでいる様子と、黒雲とともに鬼神が恐れおののいて逃げ去る様子が描かれている。

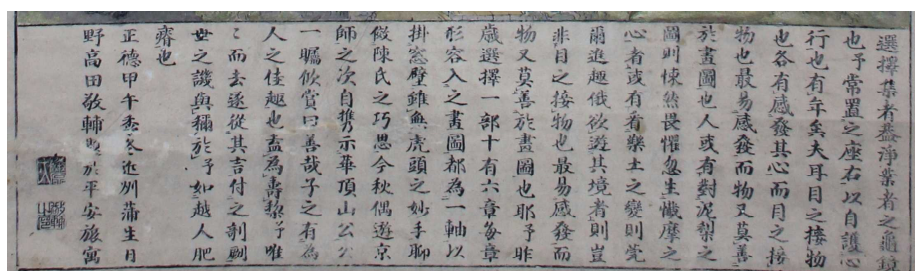
＊ 第十六章「第十六 弥陀名号付屬舍利弗章」《釈迦如来、弥陀の名号をもつて慇懃に舍利弗等に付属したまふの文》では、釈迦如来が舍利弗に阿弥陀経を説き終えると、舍利弗や諸々の比丘や一切世間の諸天人や阿修羅等が、仏の説法を聞いて喜び、よく理解できたので、礼拝して立ち去ろうとする姿が描かれている。以上、十六章各章の概略である。

次に、この「選択集十六章之図」がどのような経緯によって制作されたか、次項でみることにする。

第二項 「選択集十六章之図」作成の背景と経緯

前節でみた「選択集十六章之図」を絵師高田敬輔がどのような背景のもとに、正徳三年（一七一三）に絵画化し、翌年に開版したのか、掛け幅下部の款記に明らかである。

【下段の款記】



選擇集者蓋淨業者之龜鏡也 予常置之座右以自護心行也有年矣夫耳目之接物也各有感發其心而目之接物也最易感發而物又莫善於畫圖也人或有對泥梨之圖則悚然畏懼忽生懺摩之心者或有看樂土之變則莞爾進趣俄欲遊其境者則豈非目之接物也最易感發而物又莫善於畫圖也耶予昨歲選擇一部十有六章每章形容入之畫圖都為一軸以掛窓壁雖無虎頭之妙手聊倣陳氏之巧思今秋偶遊京師之次自携示華頂山公一囑欣賞曰善哉子之有為人之佳趣也蓋為壽黎予唯々而去遂從其言付之剞劂世之譏與稱於予如越人肥瘠也

正徳甲午季冬近州蒲生日野高田敬輔 題於平安旅寓

（選擇集は、蓋し淨業者の龜鏡なり。予、常に之を座右に置く。以つて自ら心行を護るに年有り。

夫れ、耳目の物に接するや、おのおの其の心を感じ發することあり。目の物に接するや、最も感發しやすき。物また畫圖より善きものは莫し。

人、或るは泥梨ないりの圖に對すれば、則ち悚然しやうねん畏懼いぐして、忽ちたちま懺摩さんまの心を生ずる者あり。或るいは樂土の變を看れば、則ち莞爾進趣して、俄に其の境に遊ばんと欲する者有り。則ちあに目の物に接するや最も感發しやすく、物また畫圖より善きもの莫しにあらずや。

予、昨歳、選擇一部十有六章、每章形容してこれを畫圖に入れ、都て一軸と為す。以つて窓壁に掛く。虎頭の妙手無しと雖も、聊いささか陳氏の巧思に倣ならう。

今秋、たまたま京師に遊ぶの次に、自ら携えて華頂山公に示す。公、一瞬し欣賞して曰く、善き哉、子、これ為人の佳趣あり、盍んぞ梨りを壽くとせんと。

予、唯々として去る。遂に其の言に従い、これを劖劖きけつに付す。

世の譏そしりと稱ほむとは、予において越人えつひとの肥瘠ひせきのごとし。

正徳甲午（一七一四）季冬近州蒲生日野高田敬輔 平安旅寓において題す。）

とあるように、選択集は、まさに浄業者の亀鏡であるので、私（高田敬輔）は常にこれを座右に置き、自らの心行を何年も護ってきた。ものを見たり聞いたりすることはその心を感じさせることがある。特に、目にするものほど感發しやすいものであり、実物や画図より善いものは無い。人は或いは泥梨の圖（地獄）を見ればたちまち悚然畏懼して懺摩（懺悔）の心を生ずる者があり、或いは極楽浄土の変を看れば、すぐに莞爾進趣して、にわか其の境に入ろうとする者がある。つまり、見て目の物に接することが最も感發しやすく、物や画図より善いものはない。

私（高田敬輔）は昨年（正徳三年（一七一三））、選択集の一部十六章を每章形容し、これを画図にして全てを一軸とした。そしてそれを窓壁に掛けて置いた。虎頭のような妙手が無いものであるが、いささか陳氏の巧思に見習ったものである。

今秋、たまたま京都に出かけた時に、自ら携えて華頂山（良照義山）公に見ていただいたところ、公は一瞬して欣賞し、「善いものだ、これは為人の佳趣があるものなので、版にした方が良いだろう。」と言われたので、私はいわれるままに戻った。

そして、遂にその言われたことに従って版行したものである。世のそしりと賞讃は、私にとって越人の肥瘠（越の人は遠く離れている秦の人の見ても何とも思わないように自分とは関わりが無いこと）のようなものである。という意味のことが記されている。

このように制作の過程を款記からたどると、高田敬輔の「選択集十六章之図」は、敬輔が独自の判断によって開版したというよりも、むしろ、当時から面識があり、日頃から様々な浄土教の教理について教示を受けていたと思われる浄土宗の碩学、華頂山良照義山から、多大な賞賛と許諾を得て世に出されたものだということが窺える。

この「選択集十六章之図」開版以前に、同じような選擇集曼陀羅の体裁のものが見当たらないことから、高田敬輔の「選択集十六章之図」が『選擇本願念仏集』の教義を的確にとらえ、象徴的に絵画表現した最初のものであり、基本的な構成を成したものであるということが言える。

第三項 「選択集十六章之図」の諸本

高田敬輔原版の「選択集十六章之図」（正徳四年（一七一四））をもとに、掛け幅中央最上段の第七章のみが異なり、他の十五章の絵相が同じである普及版ともいうべき、いわゆる町版と称される今井重左衛門が刊行した「選択集十六章之図」や、敬輔の原版を絵事の巧みな百万遍知恩寺の住持が模写した「選擇曼陀羅尊像」、明治期になって注釈書と供に銅版面によって版行された代表的な「選択集十六章之図」の諸本を次に提示する。

選集十六卷之圖



① 高田敬輔原版「選集十六卷之圖」正徳四年（一七一四）刊

（紙本摺印着色 一一五・八×五一・五 個人蔵）

選擇者蓋淨素者之通鏡也予常置之座右以自護心行也亦有年矣夫耳目之接物也各有感發其心而目之接物也最易感發而物又最善於畫圖也人或謂泥塑之圖則懷然畏懼急生厭廢之心者或有者然土之變則荒闕趣俄微遊其境者則豈非目之接物也最易感發而物又最善於畫圖也耶予昨歲選擇一部十有六章每章形容入之畫圖都為一軸以掛窓壁雖無虎頭之妙手聊假陳氏之巧思今秋偶遊京師之次自携示華頂山公一鵬欣賞曰善哉子之有為人之佳趣也蓋為善報予唯而士遂從其言付之刻刻世之識與彌於予如越人肥瘠也

正徳甲午冬月池田蒲生日野高田敬輔也於平安旅寓



② 高田敬輔原版「選集十六章之図」の款記段無し

(紙本摺印着色 九八・二×四九・六 個人蔵)

【敬輔原版の制作経緯を記す最下段の款記段が無い形状をとる。『選集』の十六章の絵相のみで、一般大衆向けと考えられ、印本をもとに各絵師それぞれの彩色により、多様な色調がみられる。】

③ 今井重左衛門版「選択集十六章之図」（紙本摺印 一二一・五×五五・八 個人蔵）

「いわゆる町版と称されるもので、今井重左衛門が高田敬輔原版をもとに版行したものの。大きな特徴は、中央最上段の第七章の阿弥陀仏が偏袒右肩で後背に外円三十七仏・内円三十八仏が、描かれ、他の章は、敬輔の原版と同様である。」



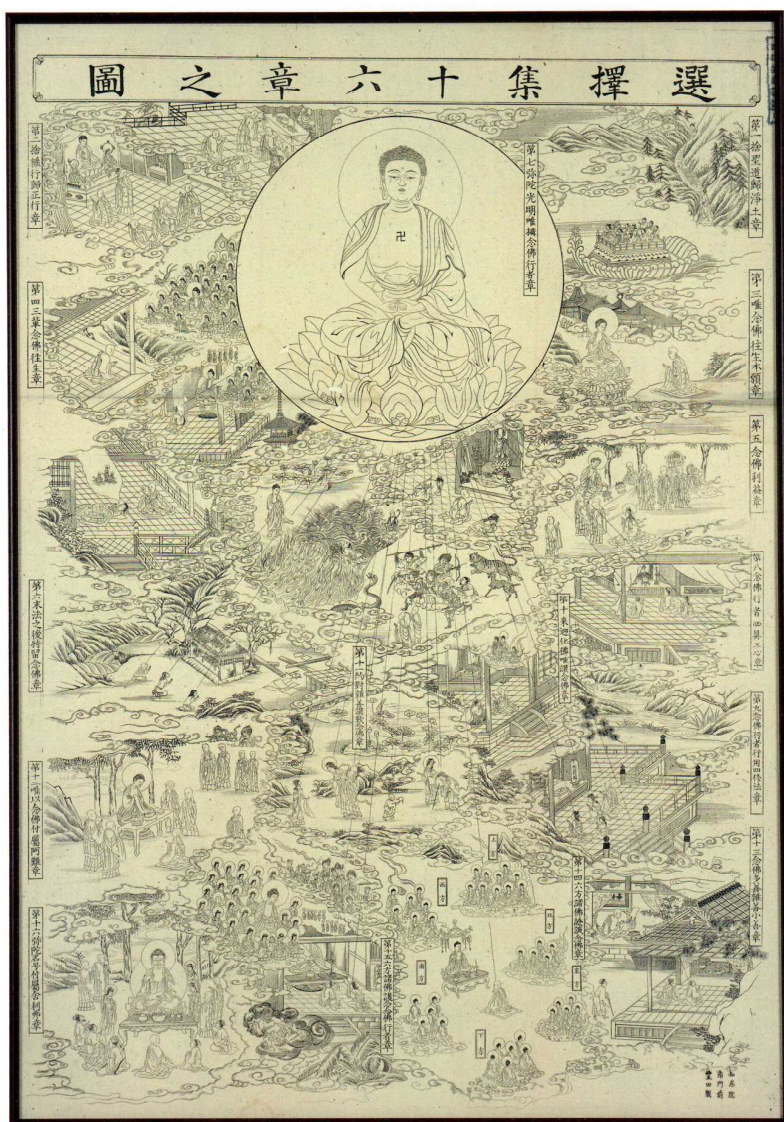
④ 慈尊「選擇曼陀羅尊像」（絹本着色 一三七・〇×六八・〇 知恩寺蔵）

【最下段に「賜紫光慈尊拜寫」とあり、百万遍知恩寺第五十八世大連社光誉慈尊（天保十三年（一八四〇）〜安政三年（一八五六）知恩寺住持。万延元年（一八六〇）没。生年不詳。）が、敬輔の原版を拝写し、「選擇曼陀羅尊像」と命名したもの。】



⑤ 銅版画「選択集十六章之図」（銅版印刷 六四・二×四四・六 個人蔵）

【堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』（明治三十六年六月十五日刊）の内容に合わせ、構図、配置等を替え、一具として、明治二十三年四月、銅版画によって「知恩院南門前 豊田製」として刊行されたもの。】



《※明治廿四年刊行の『円光大師御繪傳略解』の末尾広告に「選擇集十六章圖并二略解 全」とあることから『図』と『略解』が一具のものとして開版されたことを知ることができる。》

明治廿四年三月廿四日刻成
全 年三月廿四日出版

● 圓光大師行狀 畫 縮 圖	全
● 選擇集十六章圖 并 略 解	全
● 專 修 念 佛 四 要 篇	全
● 浄土日用勅行式 并 教會行儀式	其他

出書者 京都府平民 豊田熊太郎
印刷者 下京區八坂鳥居前東久 圓山町壺番戸

第四項 「選撰集十六章之図」の注釈書

① 湖月『選撰集十六章之図説』

高田敬輔の「選撰集十六章之図」の注釈書として、『撰撰集十六章圖説』（湖月 延享二年（一七四五））
『選撰集十六章之図略解』（堀尾貫務 明治二十三年（一八九〇））^(注2)の二書がある。
^(注1)と

初めに、湖月の注釈書『撰撰集十六章圖説』について、その「序」みることにする。

選撰集十六章圖説 序

夫耳目の物にふるること鏡に影のうつるがごとし法に

難易ありて人をゑらぶ其難行道は愚癡の輩

の依怙と成がたし易行道の教のみ悪人女の

人の煩惱の海をわたす船筏なり爰に

大祖聖人の選撰集はその船筏の順風たり

章十六有といへども目やすく見がたしある人

愚盲の者のために十六段のしなじなを圖画と

なす是即千聞も一見にしかざるの義か然るに予

此一書をたくはへ侍りしかれども圖絵の品多く

して見わけがたしよつて此圖説を乞求むるに

洛隱湖月先師の筆跡をたづねもとめて其

意を見わけて自行化他のためこれを書写し

一卷となすことしかなり

正月廿五日

この「序」には、次のような内容が記されている。

見たたり聞いたりものにふれることは、鏡に姿が映るようなものである。教法には難易があつて、人を選ぶものである。難行道は愚癡のものにとつては頼りにならないものである。易行道の教えだけが、悪人や女人であつても、煩惱の海を渡す船や筏のようなものである。ここに大祖聖人（法然）の選擇集は、その船筏に吹く順風のようなものである。章が十六有るというものの、よく見てもわからない人や愚かな者のために、十六段の内容をそれぞれ図画にしたものがある。これは千聞も一見にしかずの義のようなものである。だから、私はこの一書を手元においたのである。しかし、図絵の内容が多くて見極めるのが難しかったのであるが、この図説をさらに追究することにしたのである。そこで、洛陽の湖月が、先師達の筆跡を訊ね求めて、その本意を見極め、自行化他のために書写し、一卷にまとめたものである。

正月廿五日は、卷末に「延享二年丑正月廿五日 浄土宗 総本山 書籍發賣所 製本 京都知恩院南門前 豊

田熊太郎」とあり、敬輔原版が成つた三十一年後の延享二年（一七四五年）に豊田熊太郎が刊行したものである。

つまり、『選擇本願念仏集』には、念仏は易行道の教えであり、まるで愚癡の人々を煩惱の苦海を渡す船筏のようなものである。その教えを説いた『選擇集』はまさに帆に当たる順風のようなものである。この「選擇集十六章之図」は十六章立てになつていて、読んでも解らない者や愚かな者のために、十六段の図絵に表したものである。だから、それについて注釈をすることにしたが、内容が奥深く難しいので、洛陽（京都左京）の湖月が、先師達の書物等に学んで書きまとめ、その本意を見極めるとともに、さらに自行化他のためにもこれを書写して一卷に著したものであるということが述べられている。

高田敬輔の「選擇集十六章之図」の各章について、仮名書きで簡潔に概要が記された最初の書である。

② 堀尾貫務『選択集十六章之図略解』

次に、もう一点、明治に入ってから堀尾貫務（明治二十三年七月より知恩寺六十三世）による『選択集十六章之図略解』があり、その制作意図が「選擇集略縁起」として、次のように記されている。

選擇集略縁起

元祖圓光大師御歳六十六。建久九

年正月一日より。草庵にとちこもりて

別請に。をもむきたまハざりければ。

月輪殿下兼実公ハ。藤右衛門尉重經

を。御使として。浄土の法門年来教

誠を承といえども。心腑におさめがたし。

要文を。しるしたまはりて。且ハ面談に

なずらへ。且ハ後の御かたミにもそなへん

と。仰入られければ。安樂房。真觀房

等を。執筆として。選擇集を。撰述せ

らる。其後幾程なくして。第二祖鎮西

大紹正宗國師に。此書を授らる。大師の

御言にいはく。これ月輪殿の仰により

てえらべる所なり。いまだ披露に及はず

といえども。汝ハ法器なり。伝持にたへ

たり。はやく此書をうつし。末代にひ

ろむへしと。仰られければ。國師かたじけなく頂戴してうけたまひぬ。同年五月一日大師の夢の中に。善導大師来應して。元祖大師に對し。汝專修念佛を弘通するゆへに。殊更に來れるなりと。此書冥慮にかなへること。しりぬべし。信受するにたれり。委敷事ハ行狀画圖及び翼贊等に載せられたり。暇ある方々ハ。披きて拝見したまへ。選擇集十六章を。圖画となしたるを見て。其大意を。しり。やすからしめんがために略して解釋をなしぬ。

明治廿三年四月廿三日

淨業隱衲貫務謹識

とあり、選択集が、法然六十六歳の時、月輪殿下兼実公の要請によつて、浄土の法門を年来教えてもらっているがなかなか心に修まらないものがあるので、せめて要門だけでも後の形見にも供えるためにも記して欲しいと言われたので、安樂房や真觀房を書き手として撰述したものである。そして、その後間もなく第二祖の正宗國師にこの書が授けられたものである。法然の言う事に、これは月輪殿の仰せで撰述したもので披露するに及ばないが、汝は優れていて法器であるので伝持に値する、はやく書写して末代に弘めなさいと仰せられたので頂戴したものである。同年の五月一日に法然の夢の中に善導大師が來往して、法然に對して、汝は專修念佛を弘通しているの

で特別に來たと言った。この書は冥慮にかなうものだから信受にふさわしいものである。くわしいことは行狀画

図や翼賛に載せてあるので、時間がある方々は開いて拝見したほうがいい。選択集十六章を図画にしたのを見て、その大意を知り、その意図するものをしつかりと弘通するためにも、この図に合わせて簡略に解釋したものであるという旨が述べられている。

第五項 小結

「選択集十六章之図」の全体構成や諸本、注釈書について考察した結果、次のようなことを知ることができる。

① 「選択集十六章之図」の全体構成は、「第七章 弥陀光明唯攝念佛行者章」を最上段中央に位置づけ、残りの十五章各章の念仏行者に、阿弥陀仏から光明が降り注ぎ、摂取する様相を呈している。

この図を観る者の視線が、先ず初めに阿弥陀仏に注目し、その摂取不捨の光明の先に残りの十五章の各章の念仏行者が描かれていることにより、その行者の行業と観る者との一体化が図られていること。

② 「選択集十六章之図」下段の款記のある制作意図の最重要点は、「目の物に接するや最も感發しやすく、物また畫圖より善きもの莫し」の文言が示すように、難しい内容も絵によって提示することによって容易に受け入れられるという意図のもとに制作されたことを知ることができること。

③ 高田敬輔の原版「選択集十六章之図」は版木による印本のため、多量に印施することができたことや、町版と称されるものも刊行されており、各地に普及し、現存するものも多数あること。

④ 「選択集十六章之図」の注釈書があり、敬輔原版の「選択集十六章之図」が版行されてから、約三十年後に湖月が、そして約二百五十年後の明治期に堀尾貫務が著している。尚、明治期のものは、原版が再構成され、新に銅版画として作り直され注釈書と一具として庶民の手に渡ったことを知ることができる。

第二節「選撰集十六章之図」の原版・注釈書・刊本（七資料）の対比

第一項 「選撰集十六章之図」の原版・注釈書・刊本の七資料

比較対照する資料として、次のものをあげることができる。

- ① 高田敬輔開版、木版「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）
《高田敬輔の開版したもので、本論文の基盤とするもの。》
- ② 洛隠湖月『選撰集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）
《高田敬輔開版三十年後に、十六章各章の絵相を註釈した書。》
- ③ 銅版「選撰集十六章之図」知恩院南門前豊田製 明治二十三年（一八九〇）
《明治期に高田敬輔開版をもとに銅版が開版され、左記④『選撰集十六章圖略解』と一具として刊行。》
- ④ 堀尾貫務『選撰集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）
《明治開版の銅版「選撰集十六章之図」の各絵相を註釈。湖月の『選撰集十六章圖説』を基にしたものらしく、表現が類似している。》
- ⑤ 慈門專阿『通俗圖繪選撰本願念佛集』小倉山二尊院足曳堂藏 延享元年（一七四四）
《尾張名古屋橋町、栄国寺第十一世英空素俊慈門專阿が、師の庭空素碩から「仮名書き選撰集」を託されたものを成就。挿絵は高田敬輔開版と類似している。》
- ⑥ 關通『圖画和字選擇集』武江浅草引接室關通開版 同三縁山北谿忍海雲畫圖版藏 洛陽京極向西軒 延享元年（一七四四）
《捨世派の關通が和字の選撰集を著し、画僧忍海が、挿絵を高田敬輔とは異なる和様に描いている。》
- ⑦ 『雲介子關通全集第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）
《關通の行業についての伝記。『圖画和字選擇集』の記載あり。》

以上の七点をその形態・内容から三つに大別すると、掛け幅状に絵画表現したもの《絵画表現①③》、選択集を和字本にして各章の挿絵に高田敬輔の原画が取り入れられているもの《絵画表現及び文書表現⑤⑥》、絵相を註釈しているもの《文書表現②④⑦》について、それぞれを対照し、その特色を一覧表にする。

尚、右の①、②、③、④については、前節第一節で考察しているので、ここでは⑤、⑥、⑦について考察を加える。

「⑤ 慈門專阿『通俗圖繪選擇本願念佛集』（小倉山二尊院足曳堂藏 延享元年（一七四四））について、その「序」には次のようなことが記されている。

先師庭空和尚命余元祖大師選擇一書可謂西方公據也 只憾其文漢而和俗難得通曉翻以國字而垂之將來是我夙志也 余受命已來恒事講說未果 因而託之隱公隱公不敢辭勞對譯告竣 嗟乎此舉也 出於先師姑息婆心而余所當從事于慈也 而隱公代余贊成是事雀躍可堪乎 於是相與校讎又從而會之圖画意欲令覽者易解也 殺昔功就藏于俄山祖堂

甲子正月二十五日

慈門專阿謹識

（先師庭空和尚、余に命じ、元祖大師の選擇は西方公據の一書と謂うべきなり。只し憾んが其の文、漢にして、和俗に通曉得難し。國字を以って翻すはこれ將來に垂れり。是れ我が夙志なり。余、命を受け、已來、恒事、講說未だ果せず。因ってこれを隱公に託す。隱公敢えて對譯の勞を辞せず。竣を告げる。嗟乎、これを挙げるなり。出すに於いて、先師、姑息婆心あれば余所に當て從事するなり。

隱公に代つて、余、贊を成す。この事、雀躍に堪えるべし。ここに於いて校讎相与え、また會之圖画に従い觀るは、意欲を令し解き易きなり。音功を殺し俄山祖堂に就藏す。

甲子正月二十五日

慈門專阿謹識

とあるように、庭空^(注3)和尚の師である素俊^(注4)上人が、平素から選擇集の大切さを説いていた。しかし、それが漢

文で書かれているために、一般大衆には理解しがたいものであったので、平仮名で翻訳すれば、将来、役に立つ
と思ひ、若い頃からいつも変わらず講説したいと思つていたが未だに成し遂げる事ができなかった。そこで、隠
公という良き理解者に頼むことにした。隠公は対訳の労を厭わずに遂に成し遂げたのである。刊行するにあたり、
先師が、もし姑息だったり老婆心からであれば他所に任せたであらう。だから隠公に代わつて私が賛を書いた。
このことは小躍りするほどの喜びである。これは著述したものと絵図を合わせて観ることによつて、意欲が湧き、
理解しやすくなるものである。世間の風評をさける意味においても俄山祖堂に収めたものである。という内容が
述べられている。

『選択本願念仏集』は優れた一書であるが、漢文体のため一般庶民には理解困難なので、和字で書き、中の画
図を見ながら読めば、益々意欲が湧いて解りやすいものになるので出版したという旨を読み取ることができる。

また、「⑥ 關通『圖画和字選擇集』(武江浅草引接室關通開版 同三縁山北谿忍海雲畫圖版藏 洛陽京極向
西軒 延享元年へ一七四四)について発刊年を見ると、右の⑤『通俗圖繪選擇本願念佛集』と同年の延享元年
へ一七四四である。

ただ、【⑤『通俗圖繪選擇本願念佛集』】には、《延享改元甲子三月廿五日》とある。

また、【⑥ 關通『圖画和字選擇集』】^(注5)の刊記には、《延享紀元載旅甲子／建壬戌月佛感應日》とあり、壬戌
月(九月)のことであり、卷末の跋には、《延享紀元歳次甲子孟夏穀旦》とあり、延享元年の孟夏(四月)穀旦
(吉日)となっている。このことから、【⑥ 關通『圖画和字選擇集』】は、【⑤『通俗圖繪選擇本願念佛集』】よ
り、遅れること一月であることを知ることができる。

その『圖画和字選擇集』であるが、これには「前景愛大聖寺宮賜紫禪尼公大寂和尚」「少納言菅原家長」「平
朝臣基親」の三本の序と「東寺觀智院僧正賢賀」の識語があり、その一つ「少納言菅家」の著した、『和字選
擇集序』の一部に、次のように和字による刊行の背景が記されている。

そのころ月輪の禪間のいとねむころにもとめられしを 辞しもいとはいなしと 念佛の利益を選択し集め
たもふ しかあれど真名書すさミ 尼女 無智の輩さとし可からむことをおもひ 引接室の関通上人 こ
こに假名にやはらけ 三縁山の忍海上人そのころを繪にかきて世にあまねくひろめんと まことに済度
弘誓の津梁なる

（そのころ月輪の禪間へ摂政関白が入道して受ける尊称【九条兼実】が、大変懇ろにして招聘するもの
の、それを辞退するのもしきよくないので、念佛のご利益を選択して集めたが、しかし真名書きへ漢
字であるために、尼女や無知の者達には理解が困難であるために、引接室の関通上人が平仮名に和ら
げ、三縁山の忍海上人がその意を図絵に描き表わし、広く世間に行き渡らせ、真から多くの人々を救い、
願いがかなえられるように橋渡しをしたものである。）

というように、これも平仮名で書き表し、絵画を挿入することによって、一般の衆生が済度、弘誓されることを
願って開版されたものであることが述べられている。

また、この『和字選択集』は、画僧忍海による挿絵が、完全な和様の画風で描かれていることも注目値する。
さらに、翌年の延享二年（一七四五）には、② 洛隠湖月『選擇集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向
松堂刊」が出版されるが、これには挿絵は無く、掛け幅の内容を和字で注釈する書という形態が取られている。
このようにみてくると、高田敬輔の開版から三十年を経た「選択集十六章之図」が、三著に与えた影響として、
目に映る絵画表現に加え、さらに読める『選択集』の国字表現化が進められることになったのである。

『選択本願念仏集』が浄土宗の重要な根本教義であることは言うまでも無いが、これをいかにして、一般衆生
に教化するかが現実的な課題だったことは間違いないであろう。そこには、視覚に訴える『選択集』に加え、そ
の教義内容を自らが読みこなすという理解可能な『選択集』へと変容する姿をみることができるのである。

次の第二項、第三項では、①⑦の諸資料を各章ごとに対比し、考察することにする。

第二項 「選択集十六章之図」 原版・注釈書・刊本（七資料）各章諸相の対比

「選択集十六章之図」《銘文及び序文》諸相の対照①

高田敬輔「選択集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》

選擇集者蓋淨業者之龜鏡也

予常置_二之座右_一以自護_二心行_一也 有_二年矣

夫耳目之接_レ物也 各有_レ感_レ發其心_一 而目之接_レ物也

最易_二感發_一而物又莫_レ善_二於畫圖_一也

人或_{有_下對_二泥梨之圖_一}則悚然畏懼忽生_二懺摩之心_一者_上

或有_下看_二樂土之變_一則莞爾進趣俄欲_レ遊_二其境_一者_上

則豈非_下目之接_レ物也最易_二感發_一而物又莫_レ善_二於畫圖_一也耶

予昨歲選擇一部十有六章每章形容入_二之畫圖_一都為_二一軸_一

以掛_二窓壁_一 雖_二無_二虎頭之妙手_一聊倣_二陳氏之巧思_一

今秋偶遊_二京師_一之次自携示_二華頂山公_一 公一瞬欣賞曰

善哉 子之有_二為人之佳趣_一也 盍_レ為_二壽_一梨

予唯々而去 遂從_二其言_一付_二之劖劖_一世之譏與_レ稱

於_レ予如_二越人肥瘠_一也

正徳甲午季冬近州蒲生日野高田敬輔 題於平安旅寓

選擇集は、蓋し淨業者の龜鏡なり。

予、常に之を座右に置く。以つて自ら心行を護るに年有り。

夫れ、耳目の物に接するや、おのおの其の心を感發することあり。目の物に接するや、最も感發しやすき。

物また畫圖より善きものは莫し。人、或るは泥梨の圖に對すれば 則ち悚然畏懼して忽ち懺摩の心を生ずる者あり。或るは樂土の變を看れば、則ち莞爾進趣して、俄に其の境に遊ばんと欲する者有り。

則ちあに目の物に接するや最も感發しやすく、物また畫圖より善きものは莫しにあらずや。

予、昨歳、選擇一部十有六章、每章形容してこれを畫圖に入れ、都て一軸と為す。以つて窓壁に掛く。

虎頭の妙手無しと雖も、聊か陳氏の巧思に倣う。今秋、たまたま京師に遊ぶの次に、自ら携えて華頂山公に示す。公、一瞬し欣賞して曰く、善き哉、子、これ為人の佳趣あり、盍んぞ梨を壽くとせんと。

予、唯々として去る。

遂に其の言に従い、これを劖劖に付す。

世の譏りと稱とは、予において越人の肥瘠のごとし。

正徳甲午季冬 近州蒲生日野高田敬輔
平安旅寓において題す。

洛隱湖月『選擇集十六章圖說』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

選擇集十六章圖說 序

夫耳目の物にふるゝこと鏡に影のうつるがごとし。

法に難易ありて人を多らぶ。

其難行道は愚癡の輩の依怙と成がたし。

易行道の教のミ、悪人女人の煩惱の海をわたす船筏なり。

爰に大祖聖人の選擇集ハ、その船筏の順風たり、

章十六有といへども目やすく見がたし、

ある人、愚盲の者のために十六段の志なぐを圖画となす。

然るに、予、此一書をたくハへ侍り。

志かれども圖絵の品多くして見わけがたし。

よつて此圖説を乞求むるに、洛隱湖月先師の筆跡をたづねもとめて其意を見わけ、自行化他のため、これを書写し、一卷となすこと志るなり

正月廿五日

銅版「選擇集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）

【掛け幅状であり、特に制作の経緯等に関わる款記無し。右縁最下部に、知恩院、南門前、豊田製と三行記載。】

堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

選擇集略縁起

元祖圓光大師御歳六十六。建久九年正月一日より。草庵にとちこもりて別請に。をもむきたまハざりければ。

月輪殿下兼実公ハ。藤右衛門尉重経を。御使として。浄土の法門年来教誡を承といへども。心腑におさめ

がたし。要文を。しるしたまはりて。且ハ面談になすらへ。且ハ後の御かたミにもそなへんと。仰入れられ

ば。安樂房。真観房等を。執筆として。選擇集を。選述せらる。

其後幾程なくして。第二祖鎮西大紹正宗國師に。此書を授らる。大師の御言にいはく。これ月輪殿の仰せに

よりてえらべる所なり。いまだ披露に及バズといへども。汝ハ法器なり。伝持にたへたり。はやく此書を

うつし。末代にひろむへしと。仰られければ。國師かたじけなく頂戴してうけたまひぬ。

同年五月一日大師の夢の中に。善導大師来應して。元祖大師に對し。汝専修念佛を弘通するゆへに。

殊更に來れるなりと。此書冥慮にかなへること。しりぬべし。信受するにたれり。

委敷事ハ行状画圖及び翼替等に載せられたり。暇ある方々ハ。披きて拝見したまへ。

選擇集十六章を。圖画となしたるを見て。其大意を。しり。やすからしめんがために略して解釋をなしぬ。

淨業隱衲貫務謹識

慈門專阿『通俗圖繪選擇本願念仏集』小倉山二尊院足曳堂藏
延享元年（一七四四）正月二十五日

通俗圖繪選擇本願念仏集 序

先師庭空和尚命余元祖大師選擇一書可謂西方公據也
只憾其文漢而和俗難得通曉 翻以國字而垂之將來 是我夙志也
余受命已來恒事講説未果 因而託之隱公隱公不敢辭勞對譯告竣 嗟乎此举也
出於先師姑息婆心而余所當從事于慈也 而隱公代余贊成是事雀躍可堪乎
於是相與校讎 又從而會之圖画意欲令覽者易解也
殺昔功就藏于俄山祖堂

甲子正月二十五日

慈門專阿謹識

先師庭空和尚、余に命じ、元祖大師の選擇は西方公據の一書と謂うべきなり。
只し憾むらくは其の文、漢にして、和俗に通曉すること得難し。國字を以つて翻し、
これを将来に垂るは、是れ我が夙志なり。
余、命を受け、已來、恒に、講説を事とするも未だ果せず。
因りてこれを隱公に託す。隱公敢えて勞を辞せず、對譯し、竣を告ぐ。
嗟乎、この举たるや。

先師の姑息婆心に出でてあれば、余所に當て從事するなり。
隱公、余に代わり、贊を成す。この事、雀躍に堪えるべきか。
ここに於いて相い校讎を与え、また従いて圖画の意欲に会せば、
覽る者をして解し易からしむるなり。
昔功を殺し俄山祖堂に就藏す。

甲子正月二十五日

慈門專阿謹識

關通『圖画和字選擇集』武江淺草引接室關通開版・同三緣山北谿忍海雲畫圖 版藏洛陽京極向西軒
延享元年（一七四四）

和字選擇集序

夫 願生淨土の一法ハ、苦海を渡す乃ち慈航、業雲をひらくの慧光とかや。
觀念すきやうの行人はさらなり。たゞ道俗貴賤もろ／＼の衆生ハ、行住坐臥、
佛名をとなへて、輒く無漏不退の位にすゝみのほらんことを説。
般若のうてなの媒として、吉水大師、世に殊勝にいとたふとけれハ、
五千餘卷をあまねくそらんじ、一旦、此さとりを開き、淨土門の鼻祖となりぬ。
そのころ月輪の禪閣の、いと、ねむころにもとめられしを辞しも、いとほいなしと、
念佛の利益を選擇し集めたもふ。しかあれと、真名書すさミ、尼女、無智の輩、
さとしかたからむことをおもひ、引接室の關通上人、ここに假名にやはらけ、
三緣山の忍海上人、そのころを繪にかきて世にあまねくひろめんと、
まことに濟度弘誓の津梁ならむかし。此ころ兩上人、しきりに卷のはしめに、
かふむりせよとこふ。みたりにもとめに應することしかり。

寛保癸亥の冬

少納言菅家

『雲介子關通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

一、和字選擇集印彫成就の事

其頃上人の講談は、選擇集なりしと。上人深く
此集をして、廣く道俗の人に拜見せしめんと年頃
日頃願在す
爾しながら、漢字にして讀に勞せざるにあらず。
是に依つて、上人此集全編國字を以つて、梓に攝
して世に流通し、元祖の随自意をして四輩にさと
しめん。

專修勸導の龜鏡に備へんと思召し、皇都紫雲窟の
大起上人再治し給ひ、既に寛保年中に成就せり。

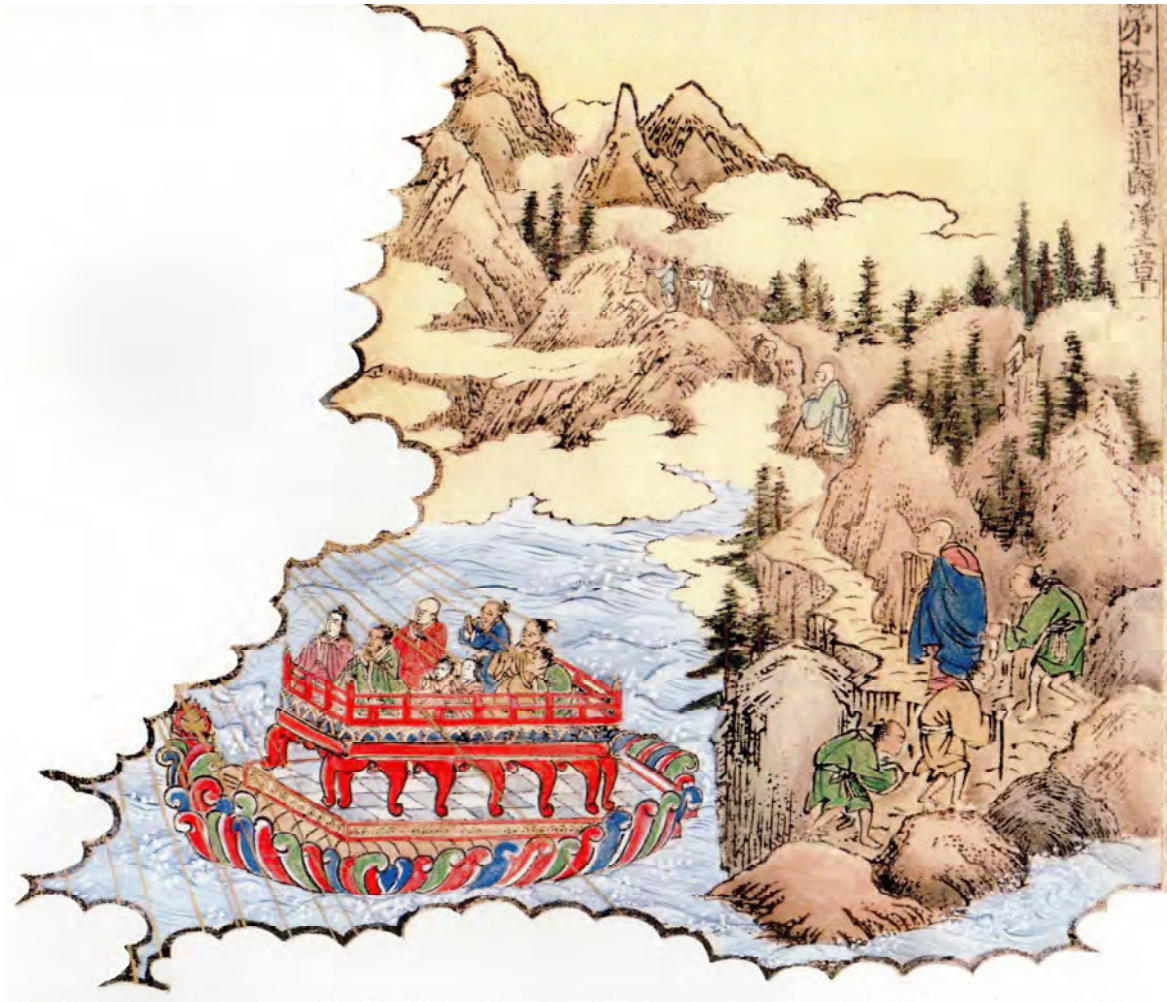
一、書圖發明甚深の條々有る事

爾るに、上人思惟し給ふには、國字を以つて讀まん人は、
是を知るといへども、尚讀めざる人々も此法を悟らさしめ
ん為め、畫圖を以つて是を指南せんと、種々案じ給ふに、
去る正徳甲午年、此集の圖有り。是や江州蒲生日野敬輔の
畫にして、爾も華頂の義山上人へ尊覽に備へ御随喜ありし
とぞ。委敷は彼十六章圖に讀して、世に残せり。

此畫を依據として上人亦圖を顯し給ふ。爾るに三緣山北谷忍
海上人も上人の專修弘法を随喜有つて、同志まし／＼て、
十六章の畫を成し給ふ。忍海上人は敬首和上の
高弟にして名畫なり。

此頃西山に、慈門上人といふ有つて、同じく此編を國字と
し給ふ事あり。上人是を見給ふに、畫圖集意を得ず。
尚上人慇懃に其圖に、指示し給ふ。其發明古今未曾有、
超倫の奇事にして、三昧發得の人師にあらずして、何ぞ
此事を考へ給ふべけん、貴く繁わも顧ず、今爰に上人の
感事を載するものなり。

高田敬輔「選擇集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選擇集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第一、 聖道浄土の二門を立て聖道を捨て浄土に帰する章

およそ此段にハ、自力聖道門と他力浄土門とをならべ舉て、其自力のかたを捨て、他力の道にすすめ入しめたまふとするべし。

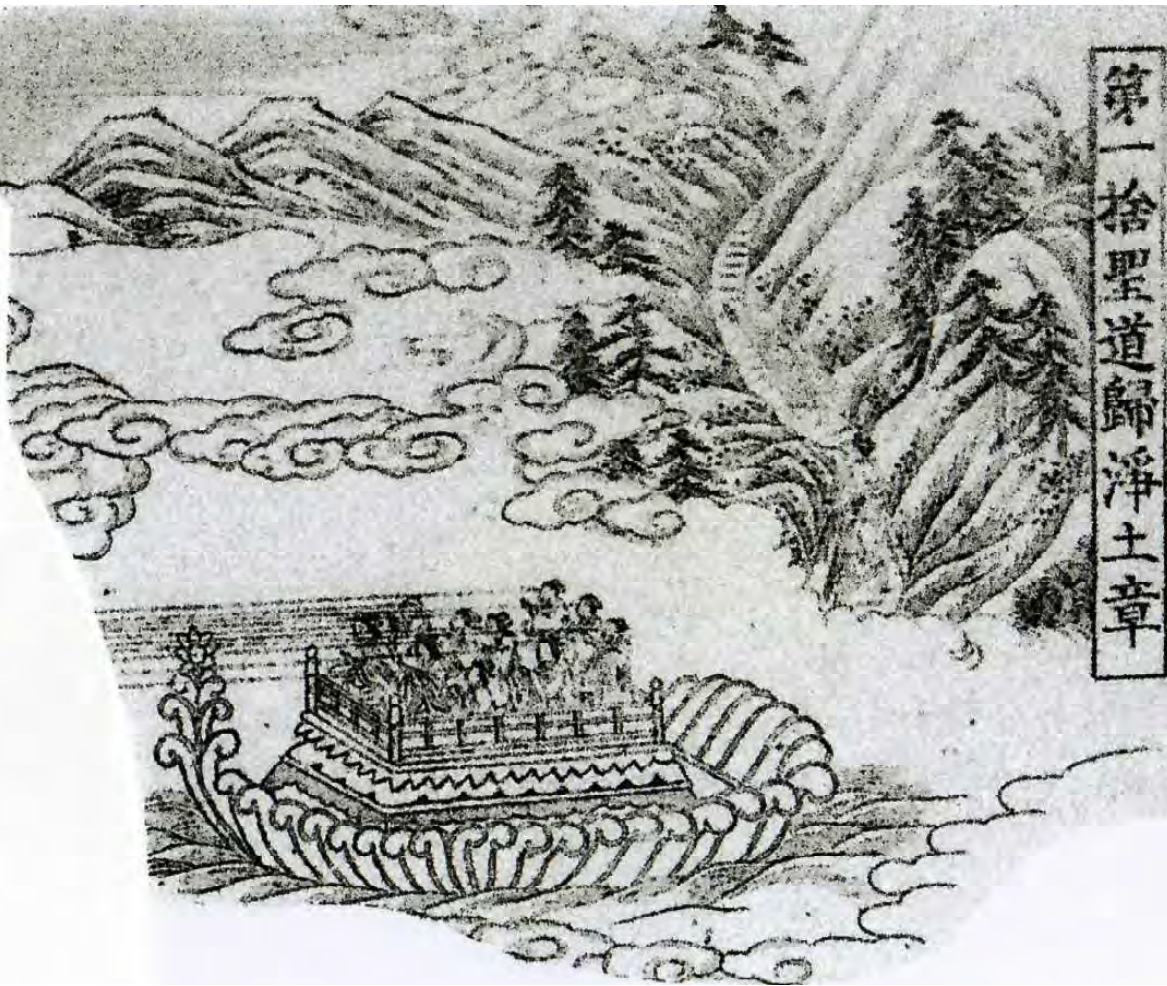
嶮岨なる山の形ハ、聖道の修行の成就しがたきを人のさかしき山にのぼるに喩たるなり。

山家のひとの先にすすみとりたるハ、上根上智の人ハ、自力にても稀にハ修行成就することもあることをしらせたり。

老たる足よハき人の登りかねたる躰は、下根下智の人の自力成就しがたきことをおしへたるなり。

舟のミゆるハ、他力易行の御法を舟にたとへたり。乗たる在家出家ミな浄土をねがひ、本ぐはんを信じたる行者のすがたを願したり。七人ともにミだ如来より筋ひきたるハ、撰取の御ひかりにおさまりたる儀なり。これより末に至りても、総てこの筋ハ撰取の光明のりやくをおしへたるところすべし。

銅版「選擇集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第一。 聖道浄土の二門を立て。 聖道を捨て。 浄土に帰する章

此章ハ。 聖道門の難行と。 浄土門の易行とを。 ならべ舉て。 其難行を捨て。 易行をすすめたまふとするべし。

嶮岨なる山へ。 人の登りゆくは。 聖道修行のなしがたきに喩たるなり。

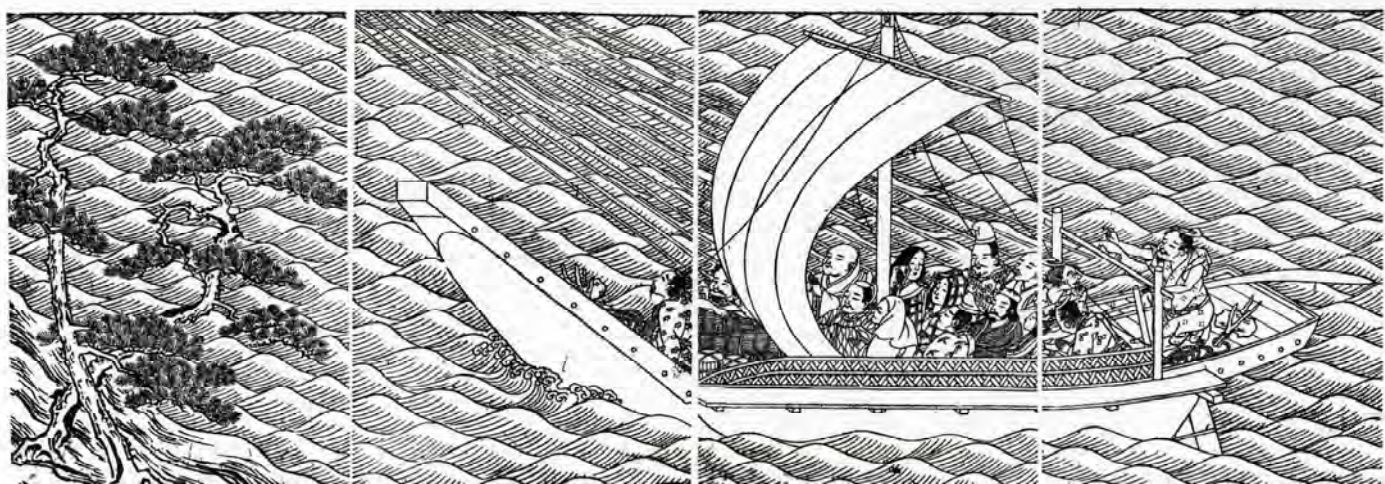
高峯に人のすすみたるハ。 上根上智の人なれば。 稀には修行成就することもあるをしらせたり。

老たる足よハき人の登りかねたる躰は。 下根下智の人の成就しがたきことをしめしたるなり。

船ハ浄土易行の法にたとへたり。 乗たるは。 出家在家ミな往生をねかひ。 本願を信じ。

念佛するすがたを願したり。 十人ともに。 阿弥陀佛より筋ひきたるハ。

撰取不捨の光明なり。 又此外に。 筋の引きたるハ。 撰取の光明を。 おしへたることと。 知るべし。



『雲介子關通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

先づ第一章、聖道を捨て浄土に歸する其の圖は、高山に登るを以つて畫して、聖道の難行を顯はす。爾るに、上人の畫に、坂の中邊に老人登る事不叶、下る人壹人あり。是敬輔門公の畫に缺く處にして、領納安からしめんとなり。

他力の乗舟は日本の舟を書き給ふ。是此集は、和國著述の謂なり。敬門二に異なり、尚乗船の諸人攝取の光明を拜するを畫し給ふ。是上人の感得にして、念佛衆生攝取不捨の利益を顯し給ふ。敬門の二に缺く處なり。

章毎に念佛者は、皆、光明攝取を顯し給ふ。愚なる文字も知らざる輩も、如来の光明攝取の利益を、思ひ付せんとの太廣なる方便にして、上人の老婆心、思惟して貴むべし。

高田敬輔「選択集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選擇集十六章圖說』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第二 雑行をすてて正行に帰する章

此段にハ、雑行正行専修雑修といふことを顕して、雑行をすて、正行に帰し、雑修を離て専修の行者となるべきことを勧給へり。下の段則五種の雑行のありさまなり。出家の姿五人あり。前に机をひかへたるハ、讀誦雑行の躰なり。椅子にのりたるハ、觀察雑行なり。座具の上に伏たるハ、禮拜雑行なり。掌を合たるハ、称名雑行なり。片手に灯をもち、かた手に指さしたるハ、讃歎供養雑行なり。中尊ハ弥陀如来、右ハ地藏菩薩、左ハ四天王の中一人とミへたり。今一佛ハ、則余佛なり。ミだを念じ、極樂をねがひながら余佛余ぼさつ并二四天等を供養し、その御名をとなへ禮拜し、こゝろに觀察し、余經をよみなどして極樂往生の因にあてがふを雑行とハいふなり。かるがゆへに撰取の筋のつりなし。上の段に佛像あり。すなハちミだによらいなり。又山家のすがた五人あり。手に經をもち立たるハ、讀誦正行の躰なり。椅子に乘たるハ、觀察正行なり。座具のうへに伏たるハ、禮拜正行なり。手をあはせ如来にむかひ居ハ、称名正行なり。手に華をもち立たるハ、讃歎供養正行なり。此五の正行の中に、第四の称名正行といふ。是則正定業のゆへに撰取不捨の糸筋あるなり。此五種の正行の中、前の三と後の一とを第四の称名正行と同様にこゝろへて修するを雑修といふなり。前の三、後の一を念佛の助と意得、また前三後一は、第四の称名正行よりあらはるとこゝろへたる人を専修の行者とハ申ことなり。

銅版「選擇集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第二 雑行を捨て。正行に帰する章

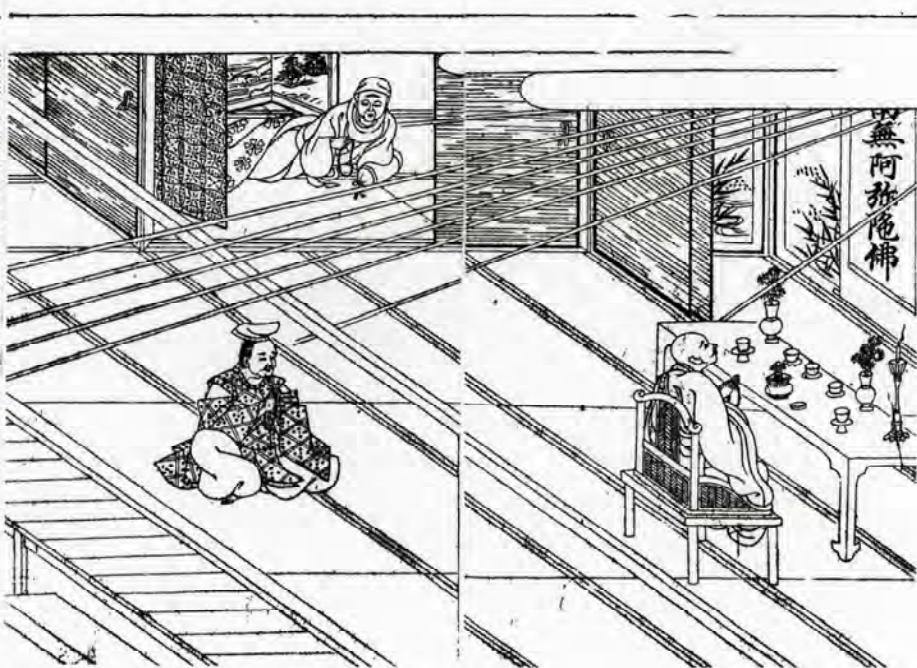
此章ハ。雑行正行といふことを顕して。雑行をすてて。正行に帰し。一向専修の行者となるべきことを。示したまへり。上の段の佛像ハ。阿弥陀佛なり。又出家のすがた五人あり。手に經をもちて立たるハ讀誦正行の躰なり。椅子にかりたるハ觀察正行。坐具のうへに伏たるハ禮拜正行。手をあはせて佛にむかひ居ハ称名正行。手に華をもちて立たるハ讃嘆供養正行なり。此五の正行の中の第四を。称名正行といふ。是則正定業のゆへに。撰取不捨の筋あるなり。此五種の前の三と後の一とハ。念佛の助業と意得べし。下の段ハ。五種雑行のありさまなり。出家の姿五人あり。前に机をひかへたるハ讀誦雑行。椅子にかりたるハ觀察雑行。座具の上に伏たるハ禮拜雑行。手をあはせたるは称名雑行。片手に燈をもち、かた手に指さしたるハ讃嘆供養雑行なり。中尊ハ弥陀如来。右ハ地藏菩薩。左ハ四天王の中一人とみへたり。外の一佛ハ則餘佛なり。弥陀を念じ極樂をねがひ或ひハ。余佛余菩薩四天等を供養し。その名をとなへ。禮拜し。觀察し。余經を。よみなどするを。雑行とハ。いふなり。故に撰取の筋なし。正行にハ十三の得あり。雑行にハ十三の失あるなり。



第二章 雑行を捨てて正行に歸るといふ圖

『雲介子関通全集 第五卷』關通上人全集刊行會
頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第二、雑行を捨てて正行に歸する門に至りては、敬門の二つは、五種の勤行の消息を畫すといへども、今上人は、雑行たる世天諸菩薩の行法を、捨てたるを題して庭上に置く。正行に歸して勤に行住座臥の消息を畫して、稱名易修にして爾も光明の利益有り、勝易の二義をぞ畫し給ふ。是導師の釋文行住座臥久近念念不捨者是名正定之業順彼佛願故の文を畫し、安心決定せしめ給ふ慈愍なり。



無阿弥他佛

「選撰集十六章之図」《第三章》諸相の対照④

高田敬輔「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選撰集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

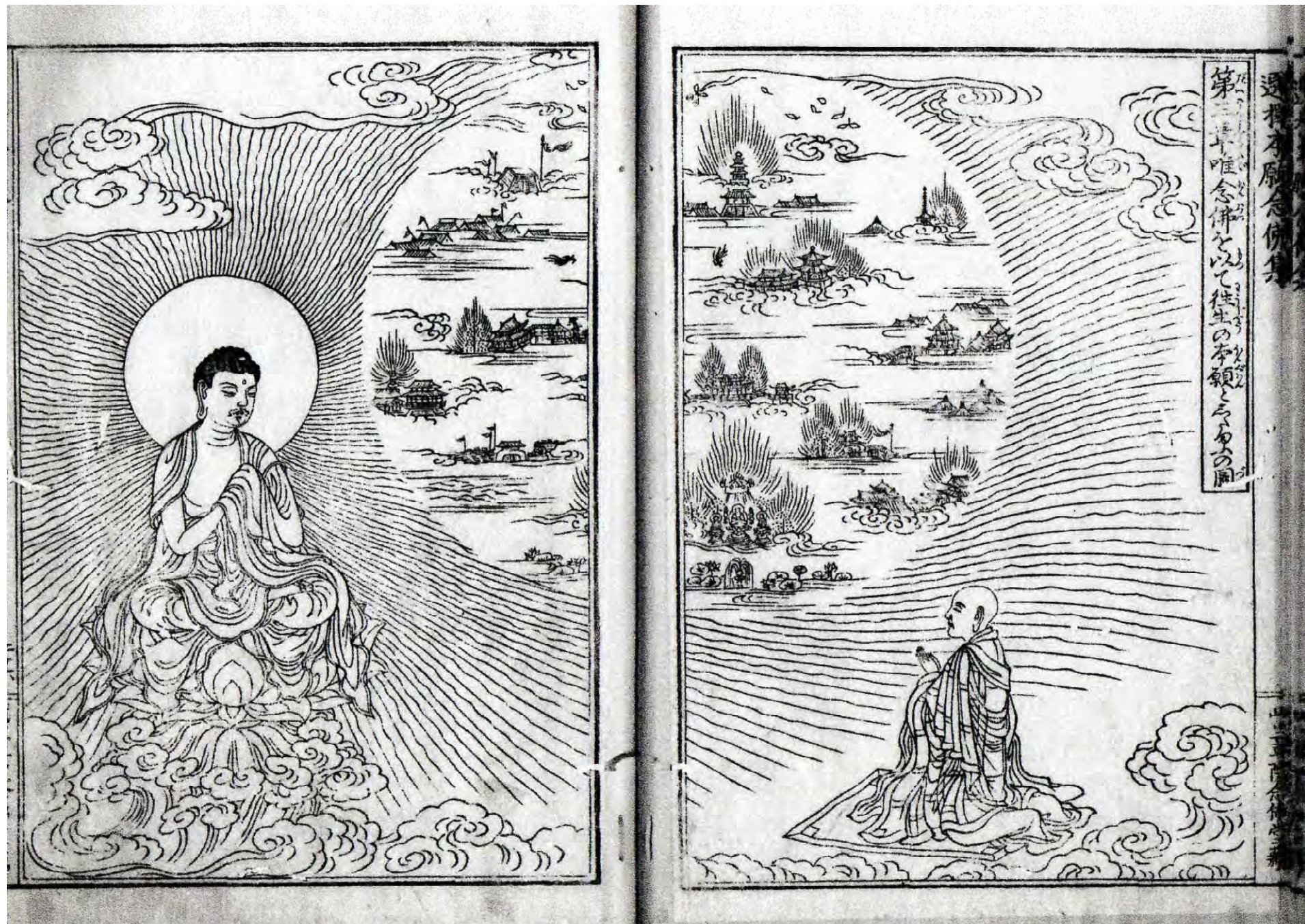
第三、ミだ如来余行をもつて本願としたまはず念佛をもつて往生のほんぐはんとしたまふ章
上輩繪の事。此段ハ、あミだ如来因位法藏ぼさつと申せしとき、世自在王佛の御もとにて二百一十億のもろくのほとけの浄土をミたまひて、もろくの浄土の因行難行にして凡夫のうへに調がたきゆへに、念佛の一行をもつて悪人往生の行とさだめたまふことをあらはせり。
座像の本尊ハ、世自在王佛なり。僧形の座したまふハ、則法藏比丘なり。後にあミだによらいと成まします。ちいさき家のかずく見ゆるハ、すなはち二百一十億の諸佛の浄土を世自在王佛のあらはして、法藏ぼさつにミせしめたまふ躰なり。其中に、或ハ布施の行をつとめて往生する浄土もあり。あるひハ戒行を持て往生する浄土もあり。その外種々の自力修行の力にて往生する浄土あり。これミな悪人凡夫の根機にかなひがたきゆへ、ことく御置て、たゞ念佛の一行をあらひて、ほんぐ往生の行とさだめたまへり。

銅版「選撰集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



堀尾貫務『選撰集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第三、弥陀如来。餘行をもちて本願となしたまはず。念佛をもちて往生の本願と。なしたまふ章
此章ハ、阿ミだ佛。因位法藏菩薩と申せし時。世自在王佛の御もとにて二百一十億のもろもの佛の浄土をミたまひて。諸の浄土の因行の難行をえらびすて。念佛の一行を。もちて。往生の本願とさだめたまふことを。あらはせり。
ちさき家のかずかす見ゆるハ。二百一十億の諸佛の浄土を。世自在王佛のあらはして。法藏菩薩に見せしめたまふ躰なり。其中に或ハ布施の行をつとめて往生する浄土もあり。或ハ戒行を持て。生する浄土もあり。其外種々の修行の力にて往生する浄土あり。是皆下根の機にハ修しがたきがゆへに。悉さし置てただ念佛の一行をあらびて。往生の行と。さだめたまへり。



『雲介子關通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第三、本願念佛章は世自在王佛の御所にして、法藏菩薩二百一十億の淨土を撰捨し、安樂淨刹建立の願意、衆生稱名を業として西方に至らしむ誓願を起し給ふ、消息を畫し給ふ。

高田敬輔「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》

洛陽湖月『選撰集十六章圖説』豊田熊太郎製本
京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第四、三輩念佛往生の文

此段にハ、上輩、中輩、下輩の三種の衆生もろ／＼の功德を修して、そのうへ念佛相續して往生する事をあらはしたまへり。僧形の座したるハ、則上輩の人なり。捨家棄欲而作、沙門とて家をして欲をすて髪をそり、衣をそめて沙門の姿となり、一向に弥陀如来を念じて、臨終にほとけの来迎を得て、極楽世界の七寶の花の中に自然に化生することを得るなり。中輩の繪のこと。宮殿の中に在家のすがたあり。すなはち中輩の人なり。強に沙門ならずといへども、ミだによらいを安置し、幡をかけ、香を煙、燈明をかゝげ供養す。これによりて臨終に化佛あらはれたまふ。その佛にしたがひて極樂に往生する躰なり。下輩繪のこと。塔のミゆるハ、經文に起立塔像をときたまふを画り。俗人の臥たるハ、下輩の人なり。このひともしの功徳をなさずといへども一向にミだぶつを念ずれば、夢のごとくミだ如来をミたてまつるときたまへり。傍に出家の人、如意をもつて座したる。此人のために、ふかきみのりをときて、きかしむるていなり。



堀尾貫務『選撰集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第四、三輩念佛往生の章

此章ハ、上輩、中輩、下輩の。衆生もろもろの功德を修して、そのうへ念佛相續して、往生することを。あらはしたまへり。僧の坐したるハ上輩の人なり。家をすて、欲をすて、髪をそり、衣をそめて、沙門の姿となり。一向に阿弥陀佛の名号をとなへて、臨終に佛の来迎を拝し、往生を得ることを。あらはせり。中輩のこと。宮殿の中に在家のすがたあり。即中輩の人なり。強に沙門ならずといへども、一向に専ら阿弥陀佛を念じ、幡をかけ、香を焼燈をかかけ、供養す。これに依て、臨終に、来迎の佛、あらはれたまふ。其佛に、したがひて、極樂に往生する躰なり。塔のミゆるハ經文に、起立塔像をときたまふを画り。下輩のこと。俗人の臥たるハ、下輩の人なり。此人もろもろの功德をなさずといへども、一向に阿弥陀佛を念じ、名号をとなふ。臨終に夢のごとく阿弥陀佛を見たてまつり、往生を得ると。きたまへり。傍に出家の如意をもちて、坐したるハ此人のために、ふかき御法をときてきかしむる。ていなり。

銅版「選撰集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）

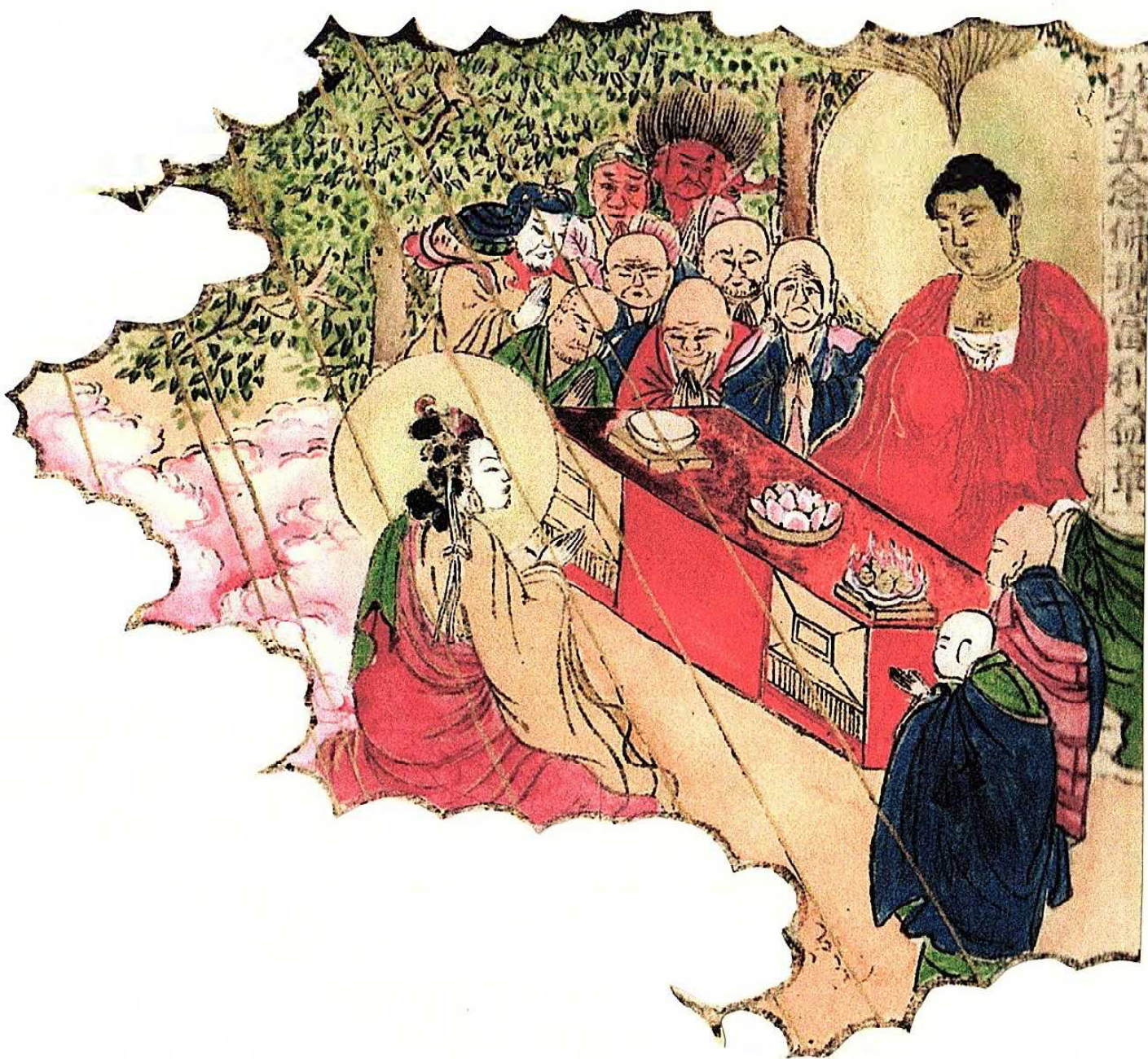


『雲介子関通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第四、三輩念佛往生章は、上品來迎、中品に、起立塔像を顯し寶塔あり、來迎下品は、夢のごとく來迎を拜する事を明し給ふ。

「選撰集十六章之図」《第五章》諸相の対照⑥

高田敬輔「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選撰集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第五、念佛現當利益の章

このだんにハ、ねんぶつのげんぜみらいのりやくあることをのべたまへり。
 佛ハ釈迦如来なり。浄土の大無量壽經をときたまふていなり。
 ほとけの御前に座したまへるハ、弥勒菩薩御聴聞の躰なり。
 傍なる御弟子たち、あるいはハ、四天王聴もんのていなり。

銅版「選撰集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



堀尾貫務『選撰集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第五、念佛利益章

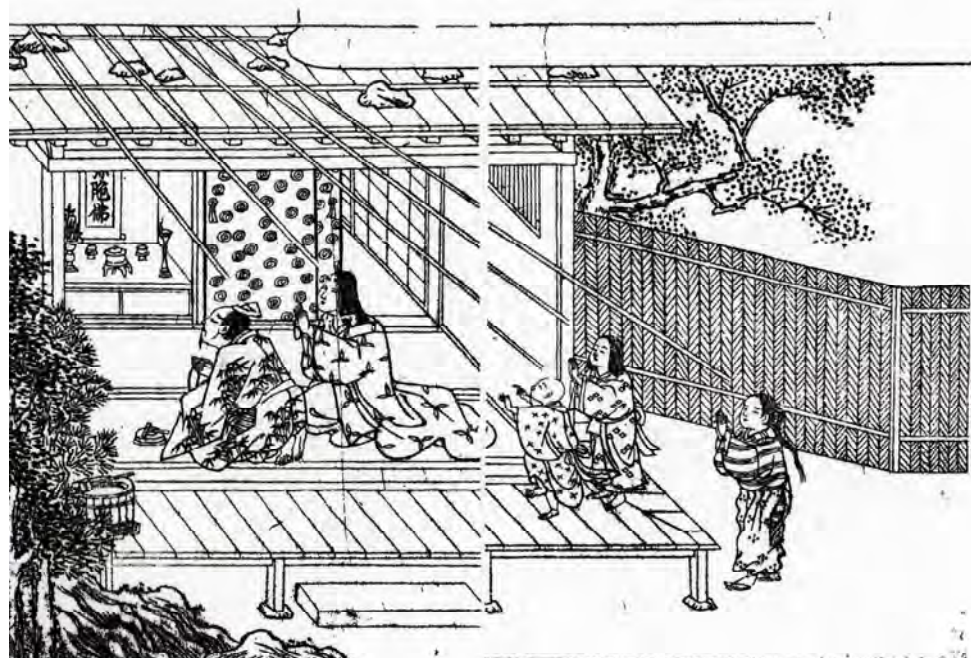
此章ハ。念佛に。現世未来の。両益あることをのべたまへり。
 佛ハ釈迦如来。則無量壽經を。ときたまふていなり。
 傍なるハ御弟子方。或は四天王。聴聞のていなり。

慈門專阿『通俗圖繪選擇本願念仏集』小倉山二尊院足曳堂藏
延享元年（一七四四）正月二十五日

第五章念佛利益の圖



關通『圖画和字選擇集』武江浅草引接室關通開版・同三縁山北谿忍海雲畫圖 版藏洛陽京極向西軒
延享元年（一七四四）



『雲介子関通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第五、念佛利益章、彌勒菩薩に一念大利を告げ給ふを明し、兒に三人念佛すれば光明を蒙る事を顯す。

高田敬輔「選択集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》

銅版「選択集十六章之圖」知恩院南門前豐田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



洛隱湖月『選択集十六章圖說』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第六、末法の後ひとり念佛をとどむる章

此段にハ、末の世にハ、釈迦如来の説おきたまふ御法も、ミナ龍宮におさまりて人間世に御法絶たるときにも、釈迦によらいの慈悲をもつて、百年の間ハ浄土の大經を世にとどめて、そのときの衆生をたすけたまふことのべたまへり。

くずやのていハ、すへのよのおとろへたることをしらせたり。机のうへに御經三卷ミゆるハ、浄土の三部經なり。

在家出家男子女人のやせおとろへ、すがたにいさくかきたるハ、末のよのなりくだる躰をあらハせり。

かかる衆生もなむあミだぶつのいはれをききて一念もよろこびを生ずれば、極樂に往生するなり。これによりて撰取のひかりの筋あり。見たまふべし、いかに況や今さかりにねんぶつの御法のひろまる時に生あひ、宿善ひらけ、ミだによらいをたのミまいらせ、信心歡喜のぎやうじやのわうぜうに、なにうたがひのあるべきや。



堀尾貫務『選択集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

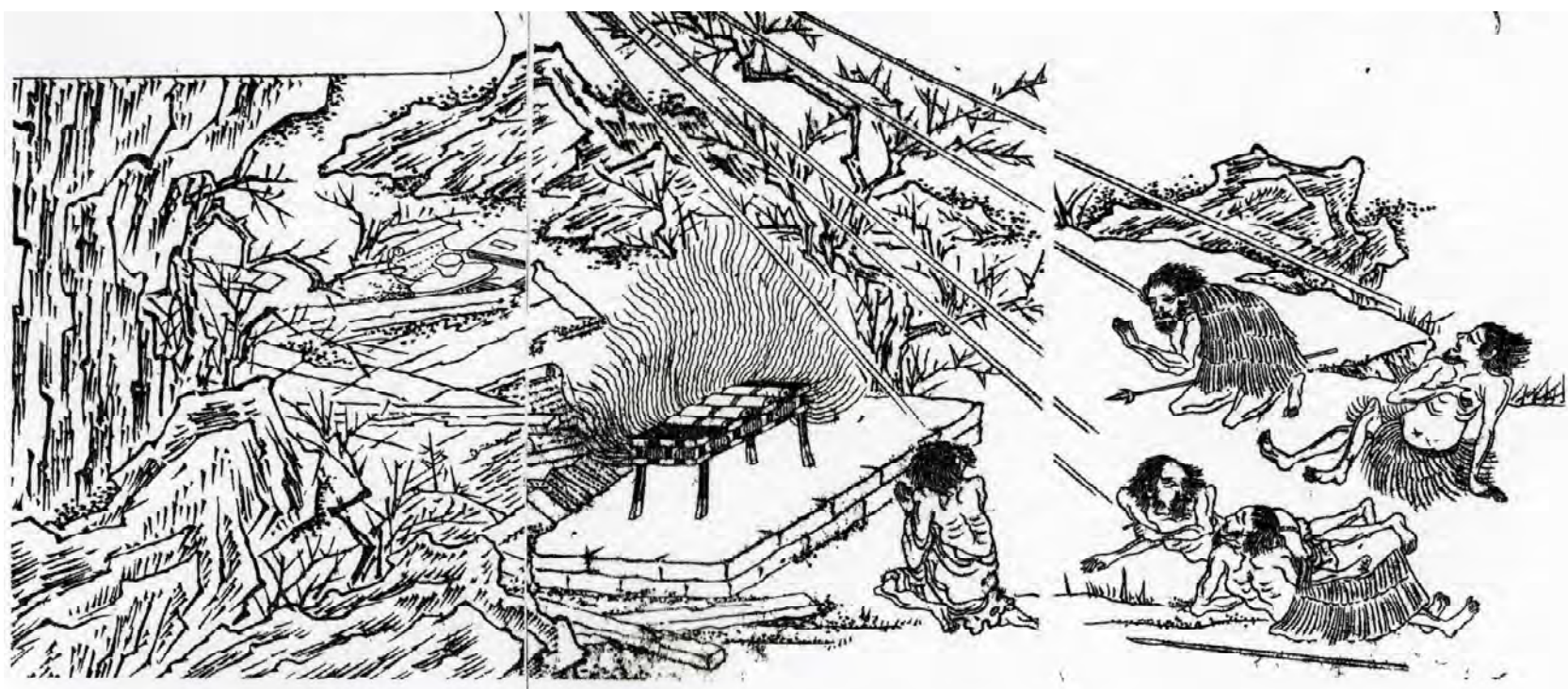
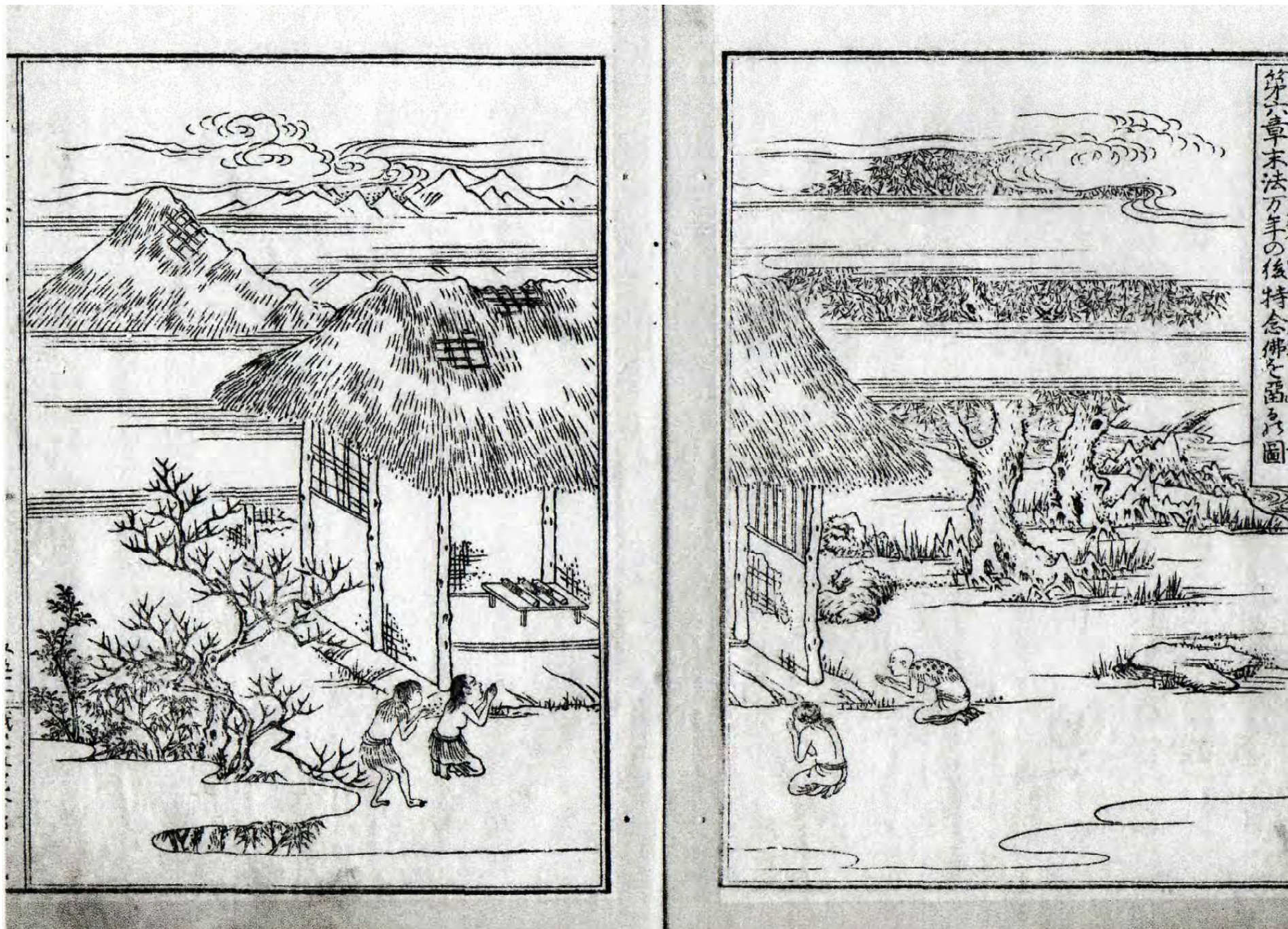
第六、末法の後ひとり念佛をとどむる章

此章は。末の世にハ。釈迦如来の説をきたまふ御法も。みな龍宮に。おさまりて。人間の世に。經法絶たるときにも。釈迦佛の慈悲をもちて。百年の間ハ。浄土の大經を世にとどめて。其時の衆生までも。たすけたまふことを。のべたまへり。

くずやの。ていハ。末のよの。おとろへたることを。しらせたり。机のうへに經文の三卷あるハ。浄土の三部經なり。

出家。在家。男子。女子。女人の。やせ。おとろへ。姿ちさく。かきたるハ。末のよの。なりくだる躰を。あらハせり。かかる衆生も。南無阿弥陀佛と。となふれば。佛の来迎にあづかりて。極樂に往生するなり。

これによりて。撰取のひかりの筋あり。いかに況や。念佛のさかりなる。今の世に生て。念佛相續する人におひてをや。いかに悪人なりとも。法滅以後の人にハ。おとるまじ。勇て念佛すべし。



『雲介子關通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第六、特留念佛章に、人壽十歳の三災の時も、念佛して往生する事を顯し餘經殿堂滅盡の相を明す。

「選撰集十六章之図」《第七章》諸相の対照⑧

高田敬輔「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選擇集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第七 弥陀の光 明たゞねんぶつの行者をせつしゆしたまふ章
このだんハ、観 經に光 明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とときたまひて、ミだによらいの光 明たゞねんぶつの衆生ばかりをせつしゆしたまふことをのべたまへり。
ほとけの御すがたハ、すなハちミだによらいのせつしゆ不捨のていなり。あなたこなたに筋つりたるハ、ミな念ぶつの衆生なり。しかれどもこのねんぶつ衆生といふに付て祖師／＼又ハ人々の心得よう甚深の理あることなり。
よく／＼聞わけたまふべきものなり。

銅版「選擇集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第七 弥陀の光 明。ただ念佛の衆生を。攝取したまふ章
此章ハ。観經に。光明遍照。十方世界。念佛衆生。攝取不捨と。ときたまひて。阿弥陀仏の光明。ただ念佛の衆生ばかりを。攝取したまふことを。のべたまへり。
佛の御姿ハ則阿弥陀仏の攝取不捨の躰なり。あなたこなたに。筋のつりたるハ。みな念佛衆生の不捨の益を蒙ることを。頭たるなり



第七章弥陀の光明唯念佛行者と攝取佛の圖



『雲介子関通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第七、光明攝取章には、上品の本尊光明十方に照し給ふを明し、爾も如来の無見頂相を心付くべし。凡夫拜見の尊像にして、肉髪を顯さず。隱没せり。是上人の發明にして、古今未曾有なり。先徳の畫木像皆肉髪を顯すは、眞の肉髪を拜することならざる凡夫に、結縁せしめんとの科なるべし。此上人は、經釋に基き、十地の菩薩ならでは此相を拜する事あたはず。爾らば、經釋の依處壹つ爾のみならず、我門は機法二種の安心最も大切なり。今此編は、念佛衆生を攝取し給ふ事を明せば、念佛の安心は自身現に是罪惡生死の凡夫なり。凡夫ならば豈無見頂相を拜すべけん。此像を拜して、自身凡夫たる事を決信せしめん善巧方便なるべし。再往いはば、上人所々に殿宇建立ありて、大佛を安置すといへども、皆肉髪を隱没して如此し。是は是れ上人勢州越坂の草庵にて、三昧發得し給ひて、尋常に閉目開目に、如来を拜し給ふ。其時の如来皆如此なるべし。豈凡眼を以つて、此相を拜せんや。併し、機感佛應一偏に有るべからずといへども、今此章の本尊の無見頂相は此義なるべし。

「選撰集十六章之図」《第八章》諸相の対照⑨

高田敬輔「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選擇集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第八、念佛の行者必三心を具する章

此段にハ、念佛の行者ハ必三心を具する章。深心。回向發願心。の三心を具することを願したまへり。

深心繪の事、六字の名号をかけて在家の合掌禮拜の躰、すなはちねんぶつのぎやうじやなり。ほとけの御姿ハ報佛化佛なり。如意を持たる出家のすがたハ、初地より十地のぼさつなり。手に御經をもちたる出家ハ、地前のぼさつ阿羅漢、辟支佛等余の經論をひく躰なり。かくのごとく報佛化佛諸の菩薩羅漢辟支佛異學異見の學者達、經論證據を引て愚痴無智の衆生たとひ念佛すとも往生すべからずとさまたげをなすとも、此行者ただ一心に決定してねんぶつすれば、おのづから三心を具して攝取の光明にてらされて往生するていなり。

回向發願心繪のこと。火と水とあり。すなはち二河白道のていなり。善導大師三心を釈したまふに就て、此二河白道のたとへをあらはしたまへり。黒くミゆるハ、すなはちこのしやばせかいなり。虎狼毒蛇群賊の躰ハ、すなはち異學異見のひとをとたとへたる繪相なり。水の河ハ、則衆生のおしやほしやいとおしやかあいやとおりにとんよくをたとへたるなり。火の河ハ、衆生の、にくやはらだちやとおもふ瞋恚を喩るなり。火と水の中間に、しろき道のあるハ、淨土へ往生をとげんとおりに一心にたとへたり。黒き方に如意をもちたる出家の姿は、則釈迦如来。此娑婆に出世ましくて、譬ひ貪欲瞋恚ありとも念佛すれば往生するとおしへたまふ。此方の岸より人のすすめて火にも水にもおち入ことをかへりミず、一心にその道をゆき、我よく汝をまもるとすすむる聲なり。むかふは紫雲の棚びき、ほとけの立たまふハ、すなはち極樂世界阿彌陀如来なり。水火に墮することをおそれず、一心に道をたづねて来れ、我よく汝をまもるとのたまふ躰なり。釈迦の發遣、弥陀の招喚と申す此事なり。此二尊のおしへによりて、此人むかふのきしにいたれば、善友たがひに相見よろこぶことかぎりなし。

銅版「選撰集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）

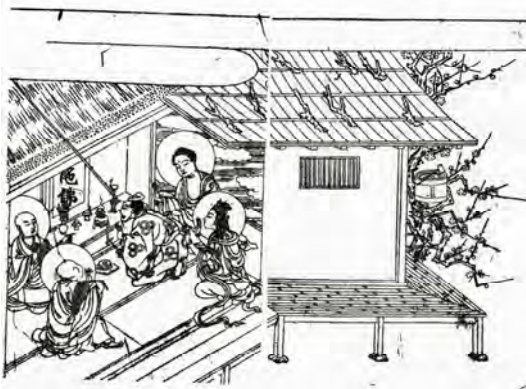


堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第八、念佛の行者必三心を具すべき章

此章ハ、念佛の行者ハ必三心を具する章。深心。回向發願心の三心を具すべきことを。願はしたまへり。三心を。かさねて。いへば。助たまへといふ意なり。是故に。心に助たまへとおもひて。口に南無阿彌陀佛と。となふるを。三心具足の念佛といふ。則佛の本願の念佛なり。在家の合掌して。名号の。かけものにむかひ。たる偽心なき。至誠心を願せり。佛の前に。出家の手を合せ左右に男女の手を合せ。坐したるは。深心能の躰。

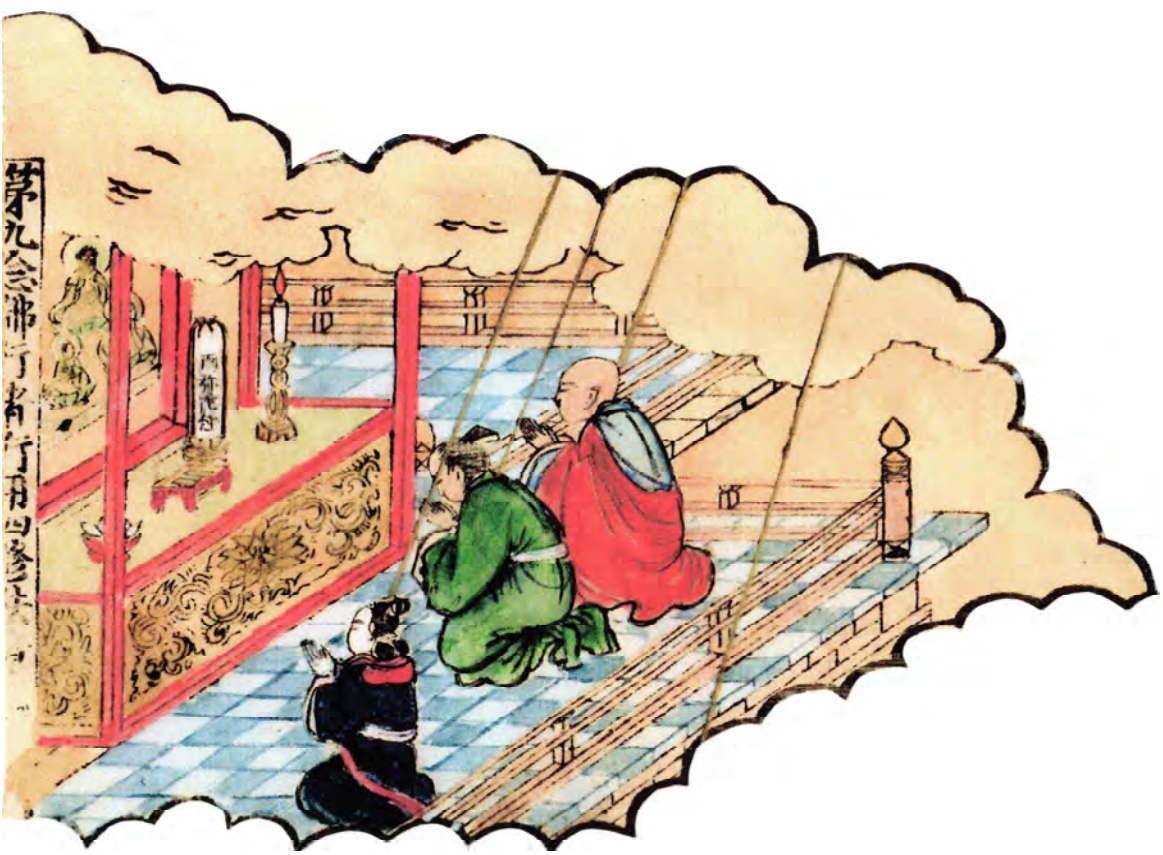
なり。深心とハ深く信ずる心なり。異學異見の學者たち。又羅漢辟支佛等。餘の經論を証拠に引て往生をささへ。又もろもろの菩薩。報仏化仏等も。愚痴無智の衆生ハ。たとひ念佛すとも。往生すべからずと。妨をなすとも。此行者ただ一心に。決定して。念佛すれば。おのづから。三心を具して。必ず往生を得ると信じて少し疑ぬなり。二河白道のことハ。回向發願心を。釈したまふに就て。此たとへを願たまへり。虎。狼。毒蛇。群賊の體ハ。衆生の眼耳鼻舌身意等の。煩惱にたとへ。又別解別行惡見人の。よびかへすにたとへたるなり。水の河ハ。則衆生の。おしや。ほしや。いとをしや。可愛やと。おもふ貪欲に。たとへたるなり。火の河ハ。衆生の。にくみ。腹立の。瞋恚にたとふ。水と火との中間に。白道のあるハ。衆生の往生をとげんと。おもふ願心に。たとへたり。東の方に。如意をもちたる。出家の姿ハ。則釈迦如来。此娑婆に出世ましまして。たとひ。貪欲。瞋恚。愚痴。ありとも。念佛すれば。往生すると。をしへ。たまひて。火をも。水をも。かへりミず。一心に西にむかひて。その道をゆけと。經文に。すすめたまふなり。むかふに。紫雲。雲たなびき。佛の立たまふハ。則極樂世界。阿彌陀如来なり。ただ其道を。たづねて来れ。我よく汝をまもり。水火の河へは。おとすまじきぞとのたまふ體なり。此二尊の。おしへによりて。此人。むかふの岸にいたれば。善友たがひに相見。よろこぶこと限なし。



『雲介子関通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第八、三心章は、二河の向に淨土の變相を顯し給ふ。敬門二に異なり、爾も八功德池より、如意寶珠を顯し、光明四方に流出せる事を明し給ふ。是は是、上人の發解にして、今此三心は法藏菩薩の因願にして、十方衆生引導の安心門、廣して易く、易くして其利三祇の修行に越ゆ。此法藏の誓願、畫圖に何とも筆記盡しがたく、譬は、如意寶珠の流水、能く稱名の蓮を増上せしむるがごとしとの心にて、是を顯し給ふ。二河の譬喩に至つては、眷属の親しみまねく處を顯し給ふ。是は東岸なり。西岸と思ふことなかれ。紙少ふして畫圖迷ひ易し、是も又敬門の二に缺く所にして、上人の指示なるべし。其次には、佛菩薩聲聞凡夫僧の四重の破人出て、專修の行者を障といへども、金剛心に住して念佛するを、深心の消息を顯し給ふ。此畫に僧二人、同じく輪光あり。是れ壹人は凡夫僧なれば、輪光なきなるべし。是は板工のあやまる處なるべし。

高田敬輔「選擇集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》

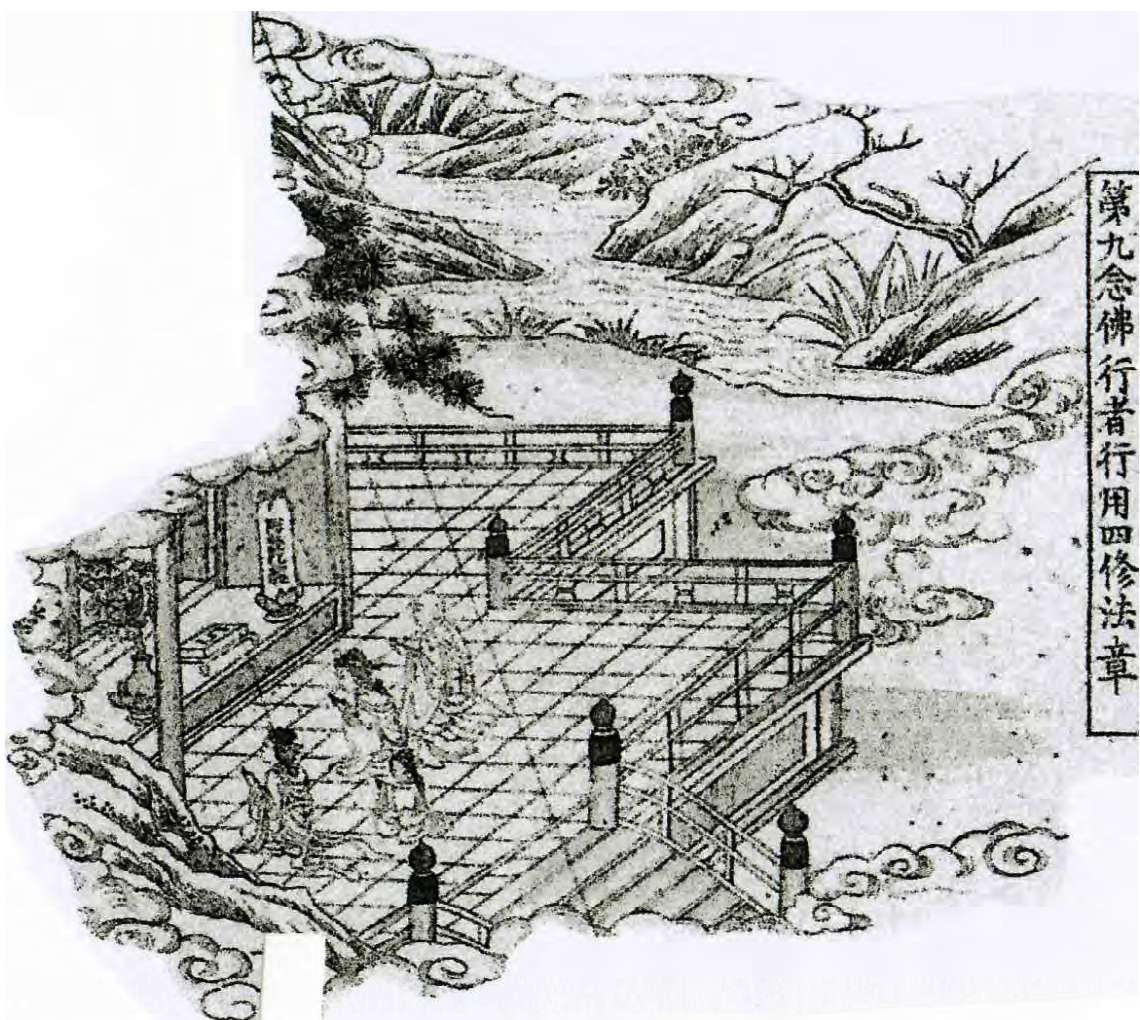


洛隠湖月『選擇集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第九 念佛の行者四修の法をぎやう用すべき章

このだんハ、ねんぶつの行者たるものハ、一には恭敬修とてあミだ如来并に極樂世界のもろくの聖衆等を
うやまふべきなり。ふたつにハ、無余修とてただひとすじに名号をとなへ、一筋に極樂世界のあミだ如来にもろ
くの聖衆等をころろにつねに觀察するなり。しかも余のつとめをまじへぬなり。三にハ、無間修とてよるひる
つねにあミだ如来を敬礼拝して、称名相續にすぎ間もなく餘のつとめをまじへぬなり。四つにハ、長時修とて前
の三修を初發心より臨終の乃至極らくへまいりさとりを得まで、おこたらずつとむるなり。此儀をあらハせるなり。
三尊をかけたるハ、多の佛菩薩を作り敬ことならねば一佛二ぼさつの像を安置し、うやまふ躰なり。
あミだ經を五色の袋に入れたるハ、これも敬のひとつなり。則念佛の行者に御縁ふかき像と經となり。
在家出家男子女人光 明摂取の筋のつりたるハ、みなおなじく念佛を行じてたがひにもろきをすくひ、あやふき
をたすけて友にうやまひ、ともにいさめてねんぶつ相ぞくのていなり。

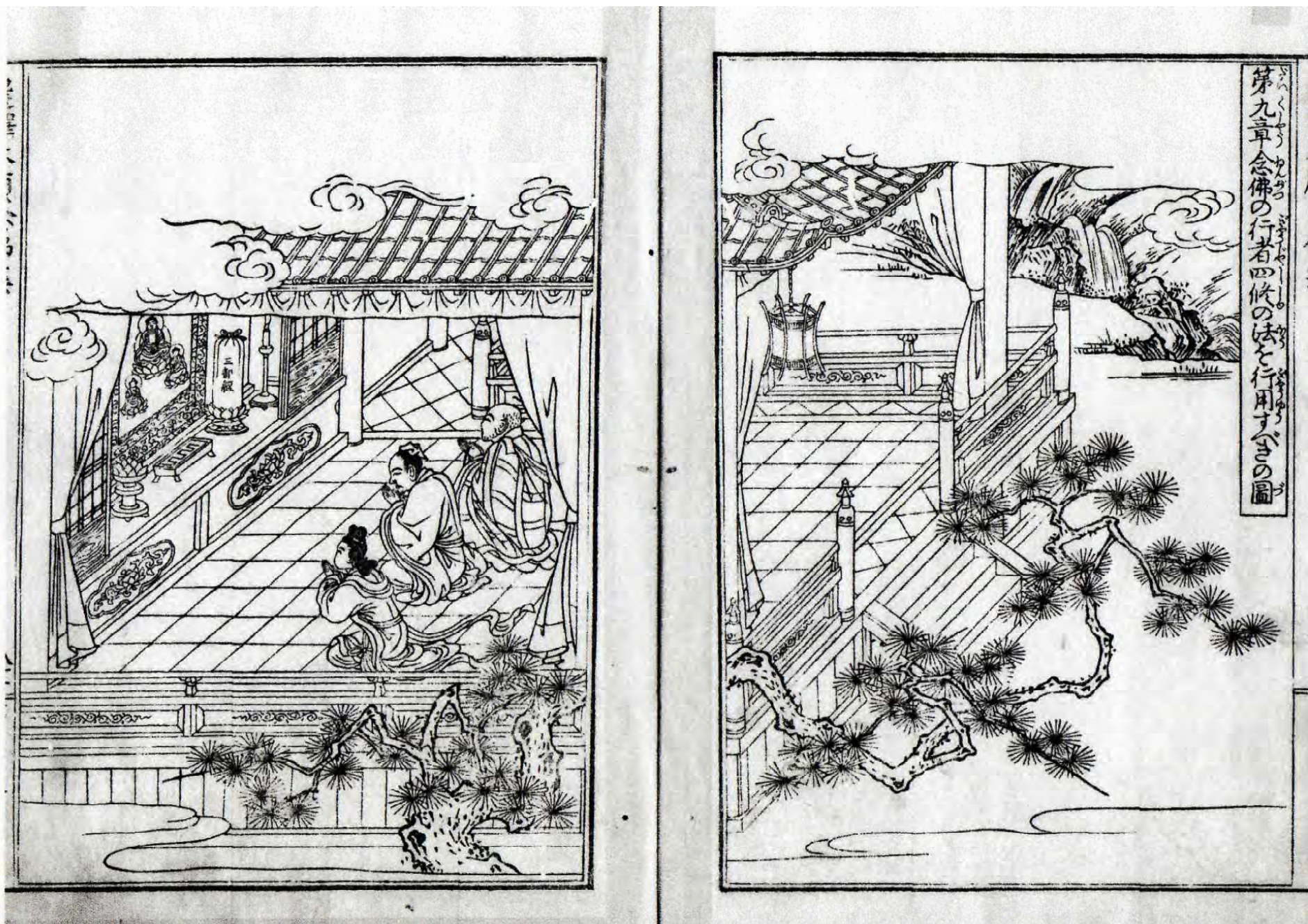
銅版「選擇集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第九 念佛の行者 四修の法を行用すべき章

此章ハ、念佛行者たるものハ、一にハ恭敬修とて、阿弥陀佛并に極樂世界の。もろもろの聖衆等を。常々。
うやまふべきなり。二にハ無余修とて。ただ専名号をとなへて。餘のつとめを。まじへぬなり。三にハ。無間修
とて。懈怠なく称名相續するなり。四にハ長時修とて。日課念佛を誓て。臨終のときまで。となふるなり。
三尊を。かけたるハ。一佛二菩薩の像を安置して。うやまふ躰なり。
阿弥陀經を。五色の袋に盛たるは。これも敬なり。則念佛の行者に。因縁ふかき像と經となり。
出家。在家。男子。女人に。光明摂取の筋の。つりたるハ。みな同じく念佛をとなへて。たがひに。わろきを。
すくひ。あやふきを。たすけて。ともに。うやまひ。ともに。いさめて。念佛相續の。ていなり。



第九章念佛の行者四修の法を行用するの圖

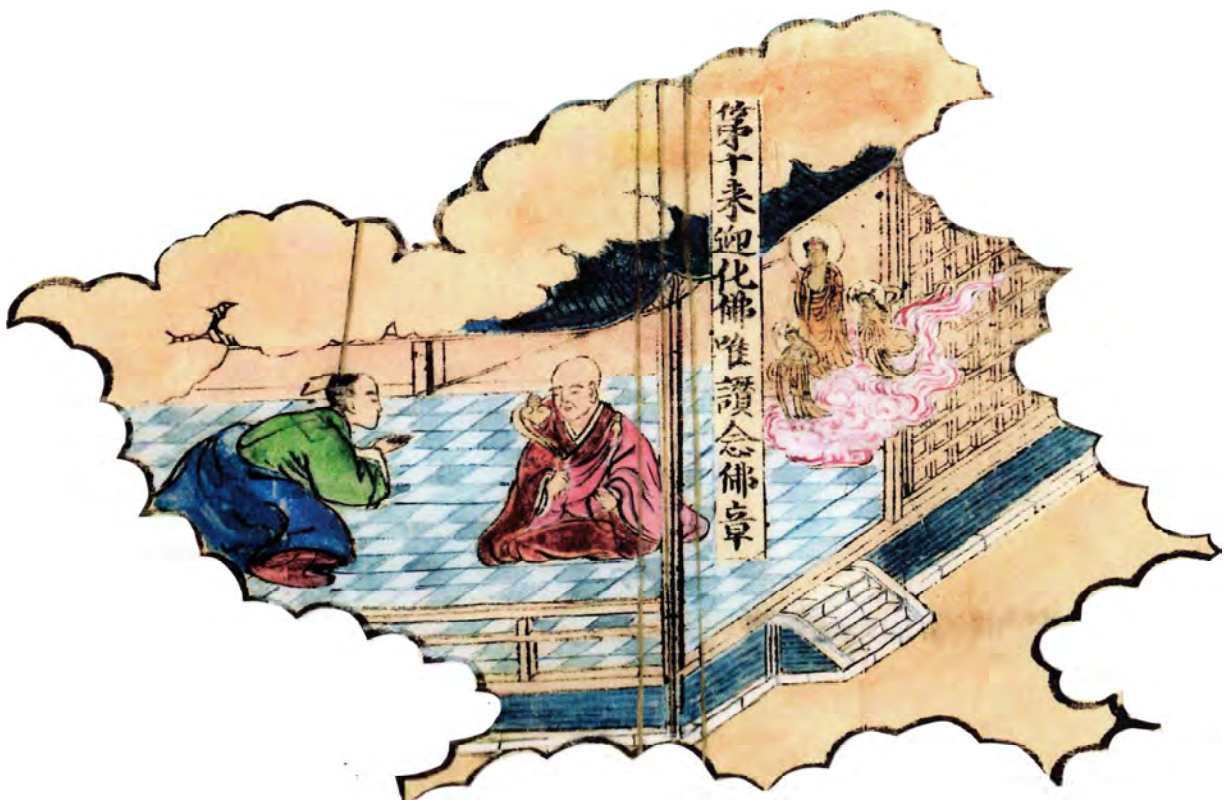


『雲介子関通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第九、四修の章には、佛法僧の三寶を安置し稱名す。光明有り、尚其餘に佛像を本尊とせずして、只名號を安置す。

是又上人の、唯口稱名號は選擇壹部の肝文なれば、南無阿彌陀佛往生の業には、念佛を以つて先とすと書き給ふゆへ、上人も又本尊に、只名號の六字をぞ掛けし深々く。

高田敬輔「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選撰集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第十、来迎の化佛ただ念佛の行ばかりをほめたまふ章

此段ハ、觀無量壽經の下品上生の經文に、衆生ありてもろくの悪業をつくりてさんげすることなく、臨終に善知識ありて大乘經の首題名字を教によりて、千劫のおもきつミほろび、念佛せしむるに五十億劫の生死の罪のぞかる。

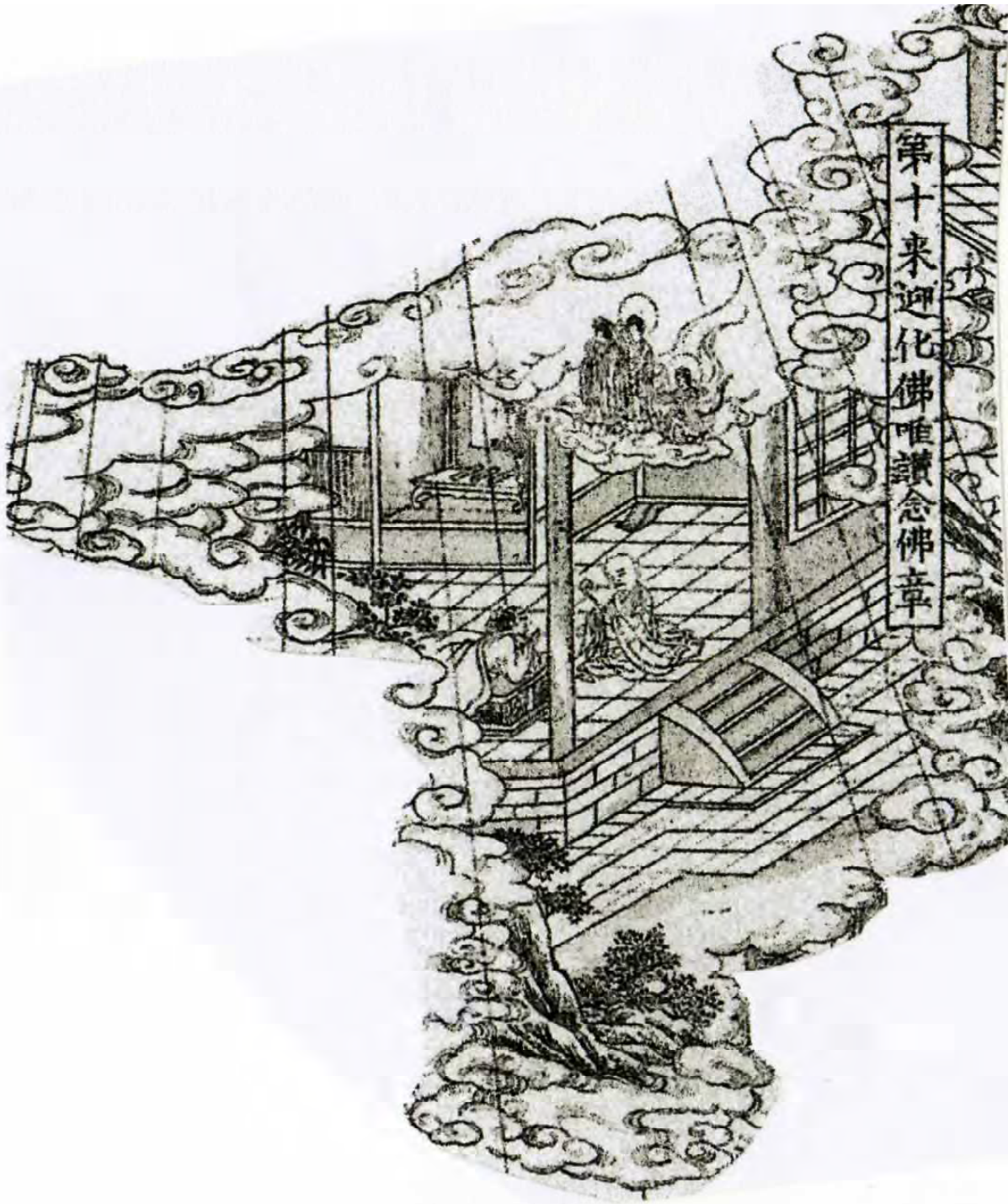
其ときあミだ如来極らく世界より化佛化觀音化大勢至をつかハして、大乘經を聞きたる徳を誉たまハず。

たゞねんぶつの徳をほめたまひてなんじ佛名をとなふるかゆへにつミめつし、われきたりてなんじをむかふと

ほめたまふことをのべたまへり。如意を持たる出家ハ、りんじうの善しきなり。在家の臥たるハ、すなハち念佛の行者の臨終の躰也。三尊ハすなハち化ぶつ、らいかうのていなり。

化佛より筋つりたるハ、来迎引接なり。いまひとすじの糸ハ、念佛衆生撰取不捨のしるしなり。

銅版「選撰集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



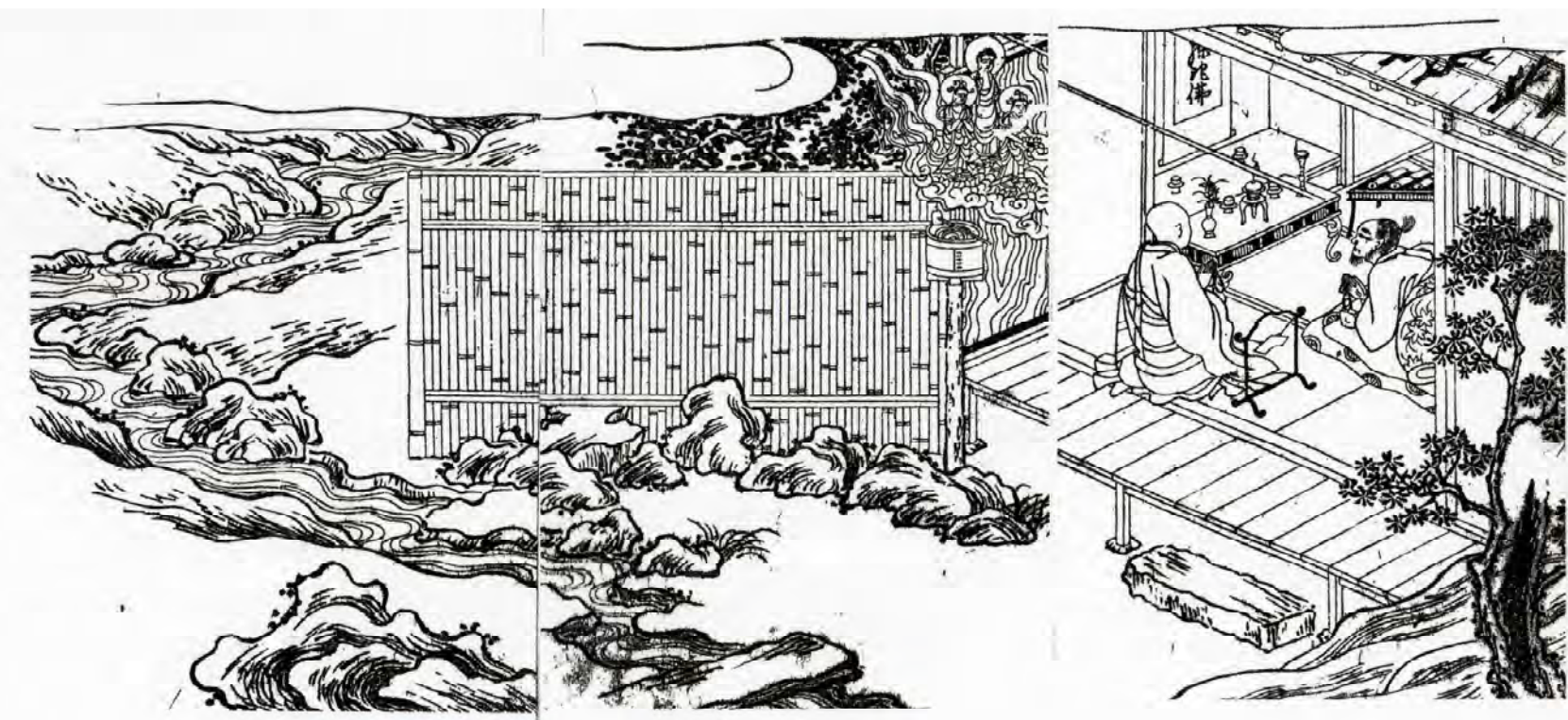
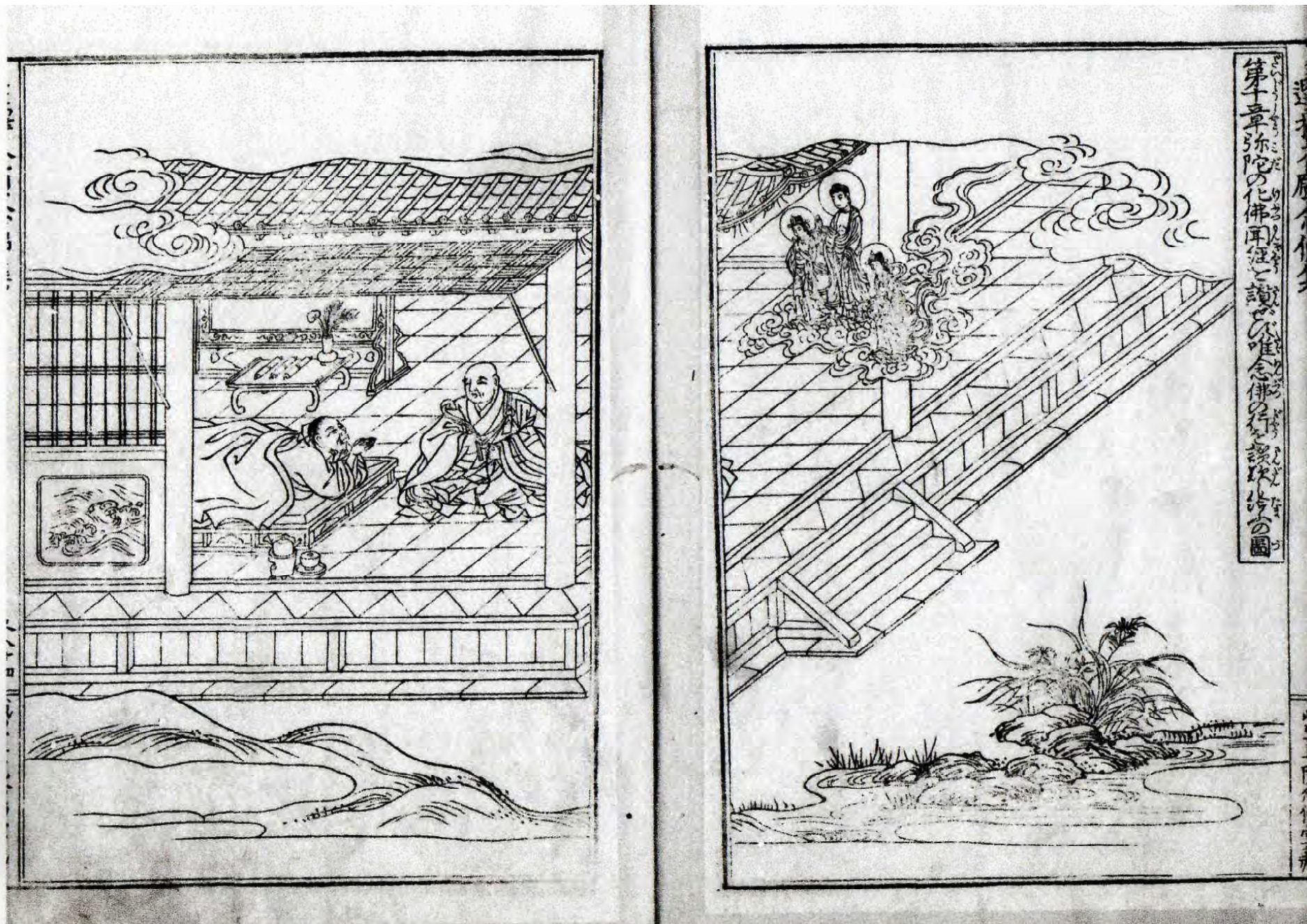
堀尾貫務『選撰集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第十、来迎の化佛。ただ念佛の行を。ほめ。たまふ章

此章ハ、觀無量壽經の下品上生の經文に、衆生ありて。もろもろの悪業をつくりて。さんげすることなく。臨終に。善知識ありて。大乘十二部經の首題の名字を讃するを。ききて。千劫の。つみほろび。又となふる念佛の一聲に。五十億劫の。生死の罪を。のぞく。其時。阿弥陀佛極樂世界より。化佛。化觀世音。化大勢至を。つかハして。大乘十二部經を。聞きたる徳を。誉たまハず。

ただ一聲の念佛の徳を。ほめたまひて。汝佛名を。となふるが故に。もろもろの罪滅す。我きたりて。汝を迎と。ほめたまふことを。のべたまへり。

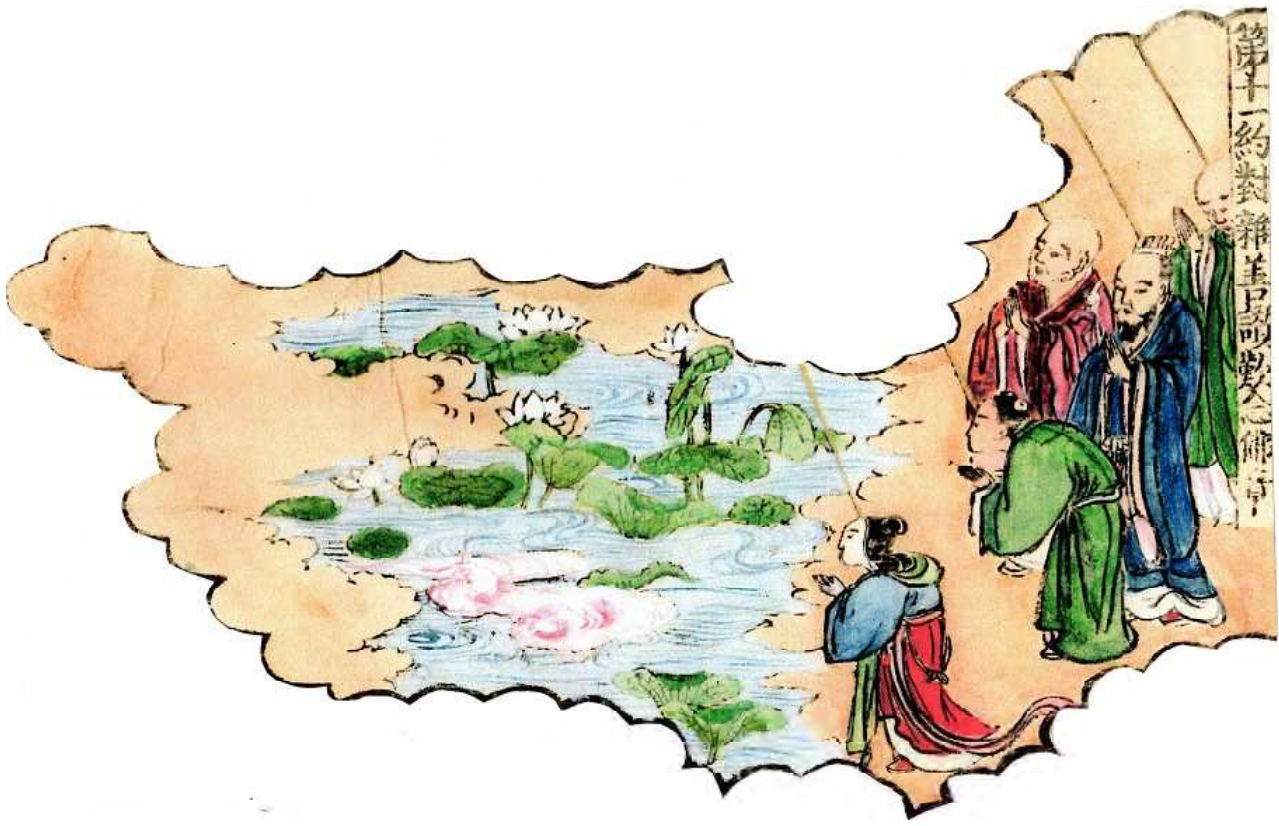
如意を持たる出家ハ。臨終の善知識なり。在家の臥たるハ。則念佛行者の。臨終の躰なり。三尊ハ。則来迎の。ていなり。筋のつりたるハ。念佛衆生撰取不捨の。しるしなり。



『雲介子關通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第十、化佛稱名贊嘆章とは、觀經に十二部經の結縁は、纔に千劫の罪を滅し、名號を稱して八百萬劫の重罪を滅し、爾も來迎有つて行者を佛の贊し給ふなり。

高田敬輔「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選撰集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第十一、雜善に約對してねんぶつを譽る章
此だんハ、もろ／＼の善にくらべて念佛の徳をほめたまふことをあらハせり。
在家出家男子女人のすがたあり。ミな念佛の行者なり。この娑婆世界にてハ蓮華にたとへてほとけのほめたまひぬ。
蓮池のていハ、すなハち極らくへ参り、さとの果ととのひすがたをしらせたり。またれんげのうるハしきをミ
て、それにたとへられたることをよろこぶていなり。

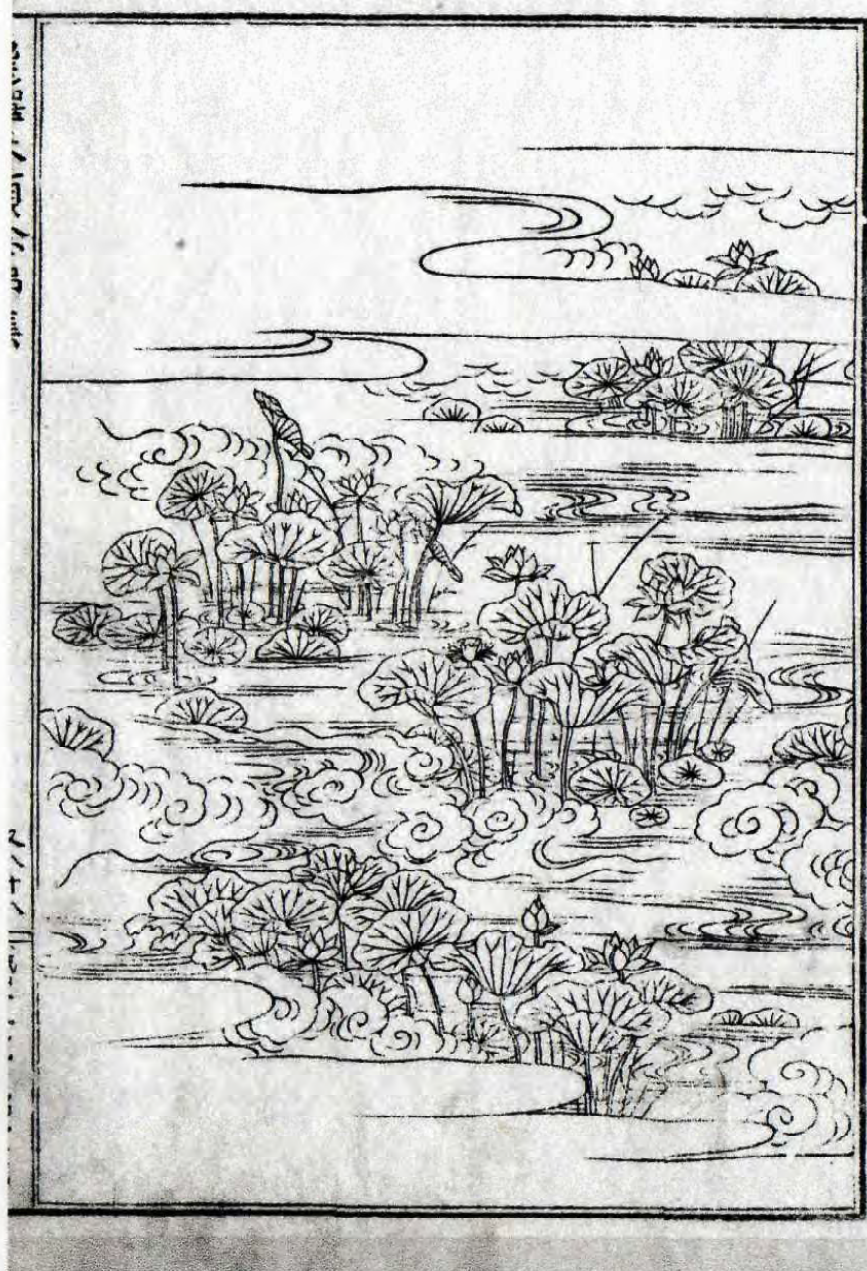
銅版「選撰集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



堀尾貫務『選撰集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第十一、雜善に約對して。念佛を譽る章
此章は、もろもろの善にくらべて。念仏の徳を。ほめたまふことを。あらハせり。
出家。在家。男子。女子。女人の姿あり。みな念佛者なり。蓮華に。たとへて。
五種に。ほめたまふ。ていなり。
五種とハ。人中の好人。人中の妙好人。人中の上上人。人中の希有人。人中の最勝人なり。
觀音。勢至。常隨影護したまふなり。

慈門專阿『通俗圖繪選擇本願念仏集』小倉山二尊院足曳堂藏
延享元年（一七四四）正月二十五日



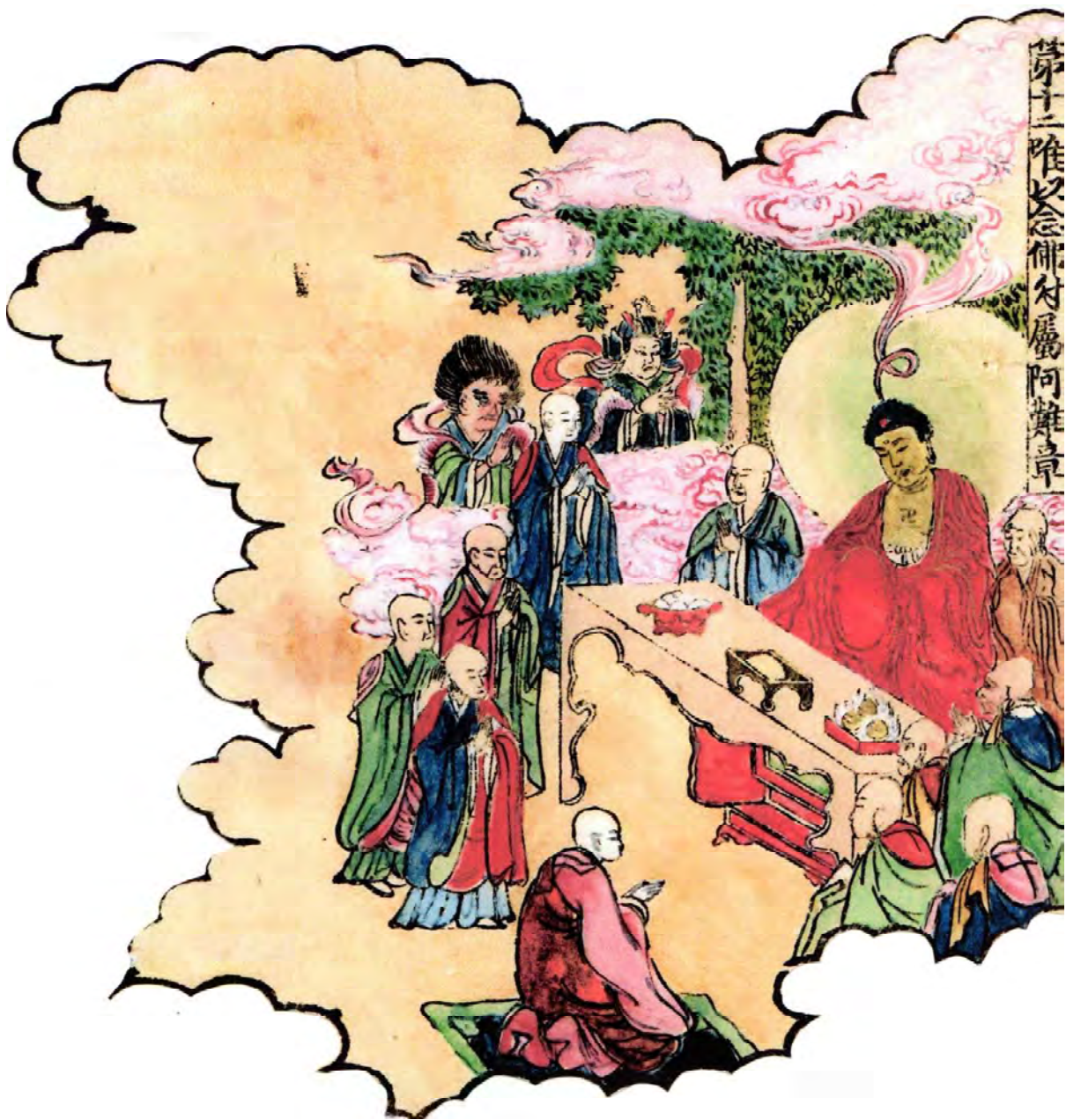
關通『圖画和字選擇集』武江浅草引接室關通開版・同三縁山北谿忍海雲畫圖 版藏洛陽京極向西軒
延享元年（一七四四）



『雲介子関通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第十一、雜善に約對して、稱名を嘆じ給ふ。畫に、觀音勢至常に、念佛する人には、勝友となり、兒童も同じく護念し給ふ。消息至つて上人の老婆心を以つて顯し給ふ。心なき人も此像を拜して、豈三縁の思ひ起こらんや。實池寶華は、念佛者を蓮に譬へ給ふ事を明し、尚上人の發明は、念佛者終には成佛する消息を顯し、經文當座道場生諸佛家の當益の大ひなる事を盡に顯し給ふ。

高田敬輔「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選撰集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第十二、ただねんぶつをもつて阿難に付属したまふ章
 このだんハ、観經に定散の諸善と念佛の行とをときたまふといへども、阿難に對して定散の諸行をさしおきて、ねんぶつの行を付属したまふことをのべたまへり。
 佛はすなハち釈迦如来なり。観經を説たまふ躰なり。
 傍なるハ、ほとけの御弟子聲聞衆なり。四天王等あり。ほとけの御前に座したるハ、阿難ふぞくをうけたまふ躰なり。

銅版「選撰集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）

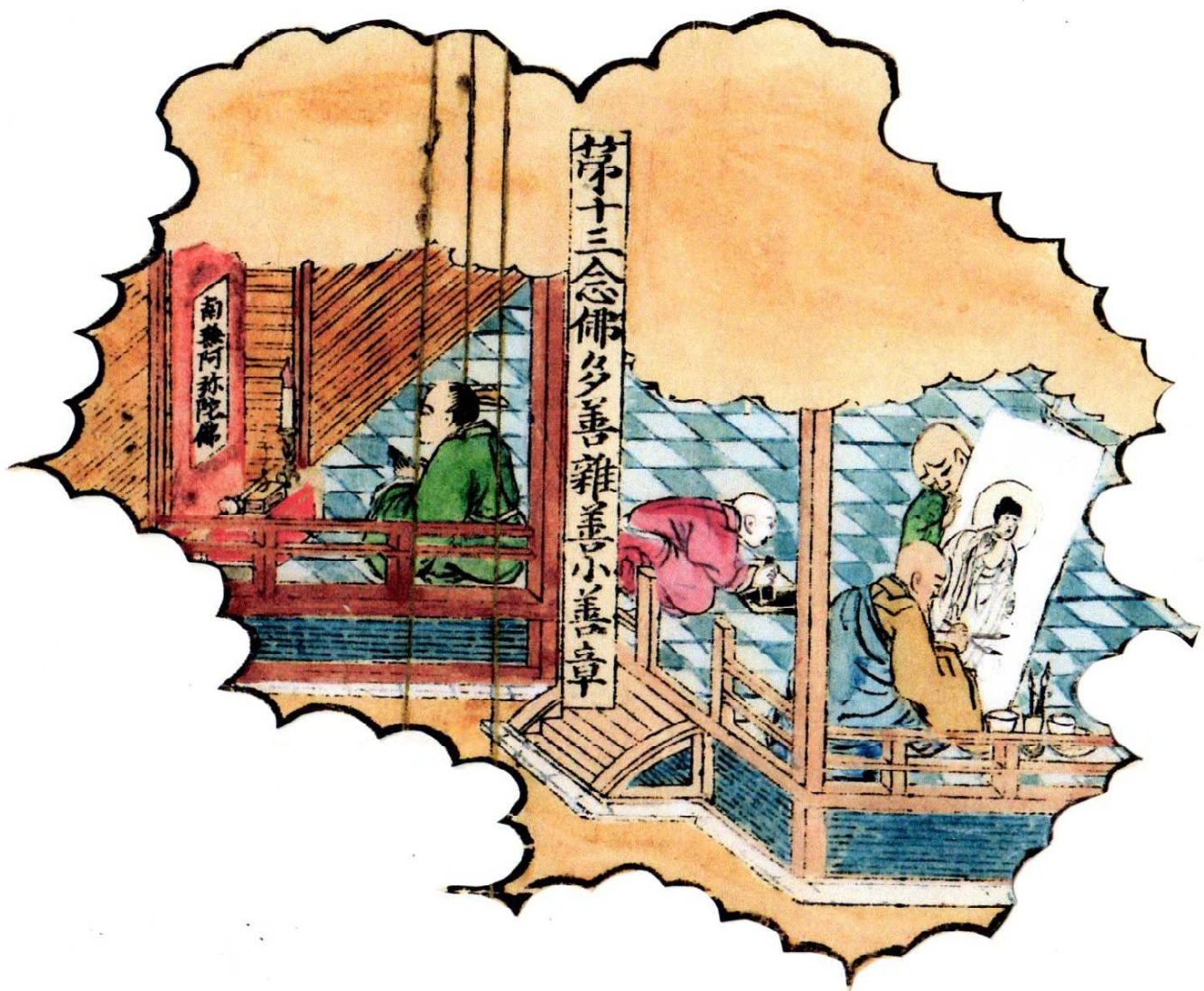


堀尾貫務『選撰集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第十二、ただ念佛をもちて。阿難に。付属したまふ章
 此章ハ。観經に。定散の諸善と。念佛の行とを。ときたまふと。いへども。阿難に對して。定散の諸行を。さしおきて。ただ念佛の一行を。付属したまふことを。のべたまへり。
 佛ハ釈迦如来。則観經を。ときたまふ躰なり。
 傍なるハ。御弟子。聲聞衆なり。四天王等あり。佛の前に。坐したるハ。阿難付属を。うけたまふ体なり。



高田敬輔「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選撰集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第十三 佛念仏の行をもつて多善根とし雑善をもつて小善根とする章

此段は諸善ハ小善根にして極らくにむまれがたく、ねんぶつハ多善根なるによりて淨土に生じやすきことをおしへたまへり。

出家の墨をすり、佛像をゑがくていハ、則ぜんごんをいとなむことをあらハせり。

ざいけの六字の名号にむかひて手をあハせたる躰は、多善根のねんぶつを修して撰取の利益を得たるしぐさなり。

銅版「選撰集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



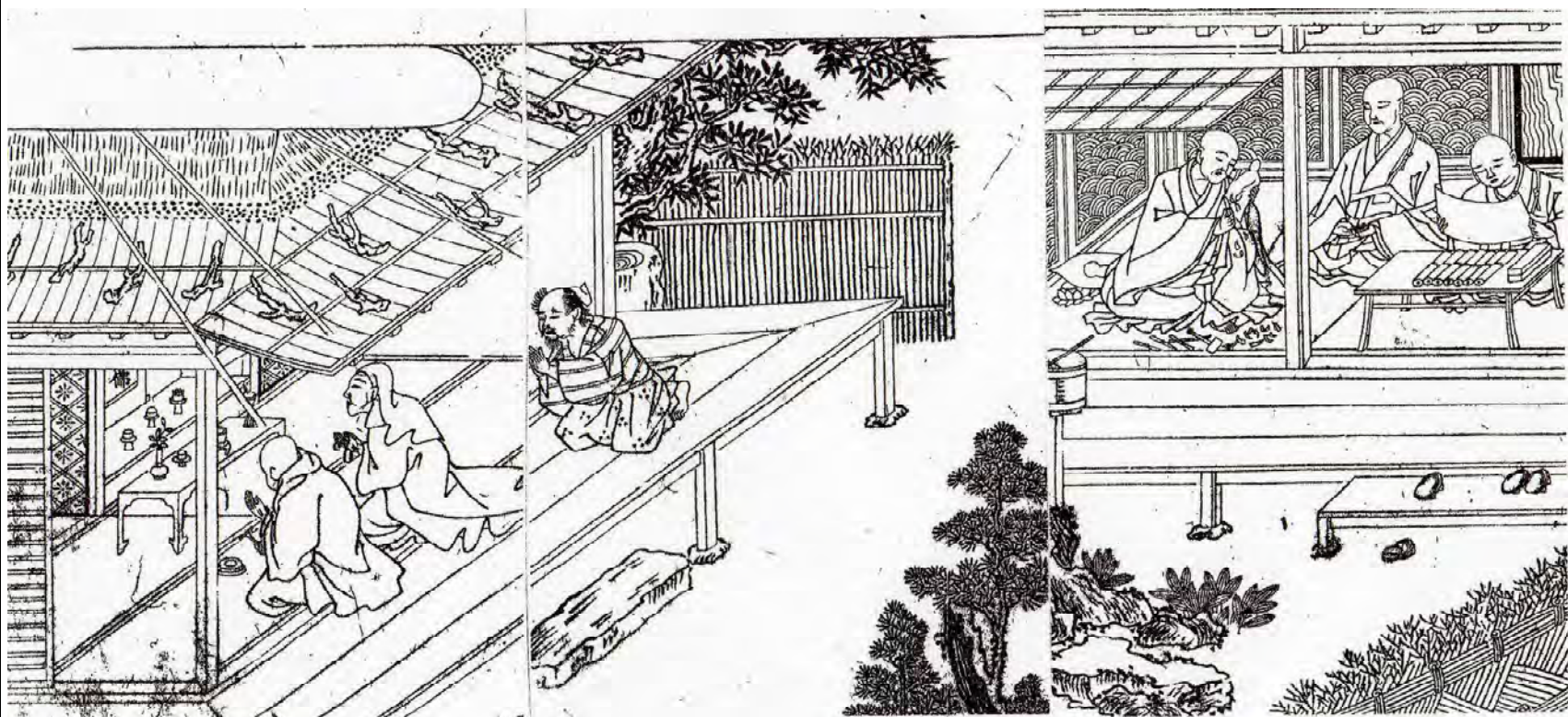
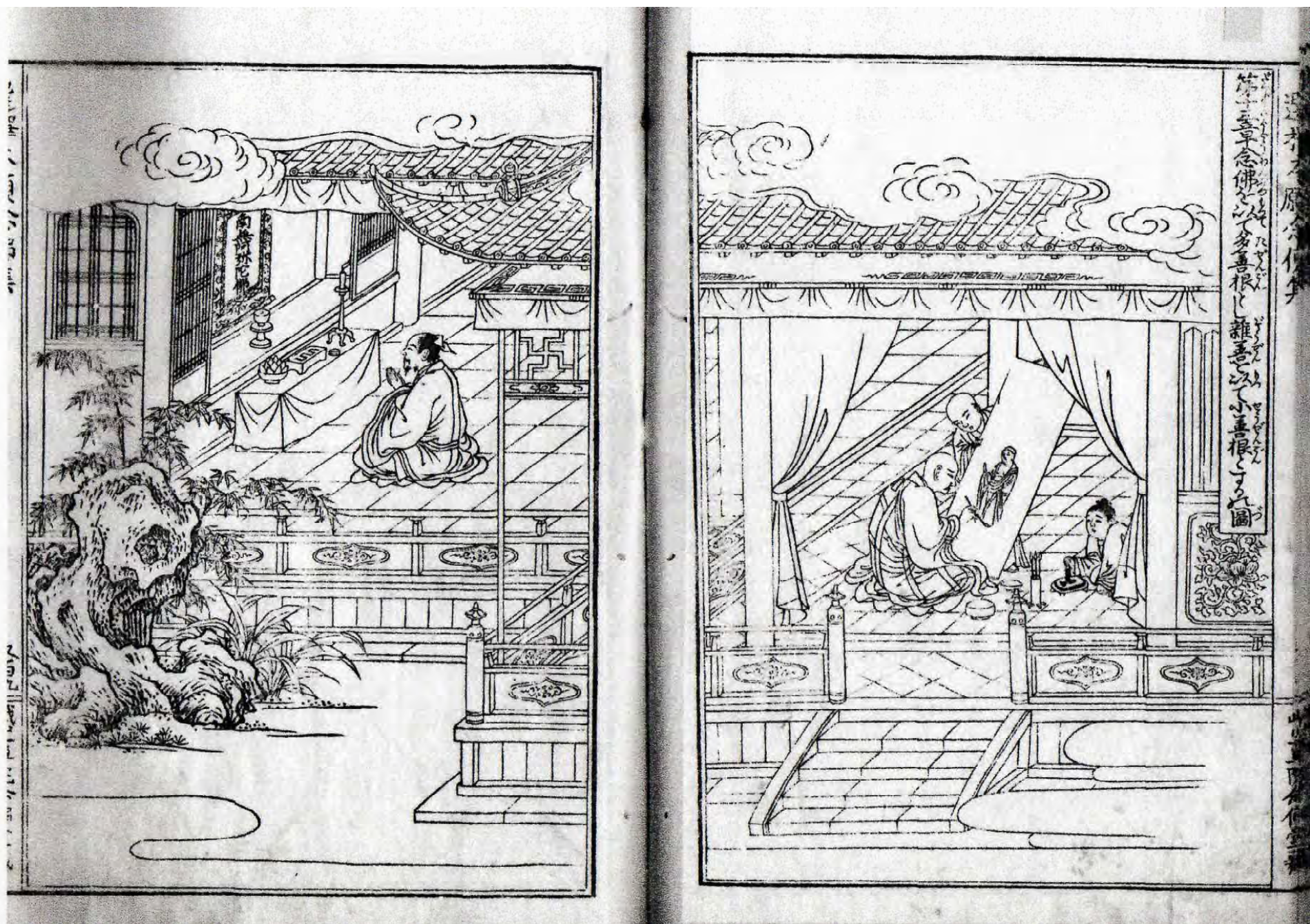
堀尾貫務『選撰集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第十三 佛念仏をもちて多善根とし雑善をもちて小善根としたまふ章

此章ハ諸善ハ小善根にして極楽にむまれがたく、念佛ハ多善根なるによりて淨土に生じやすきことをおしえたまへり。

出家の墨をすり、佛像をゑがくていハ、則善根をいとなむことをあらハせり。

在家の名号にむかひて手をあハせたるは、多善根の念佛を修して撰取の益を得たるすがたなり。



『雲介子關通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第十三、念佛多善根にして、餘善を小善根と劣しめ、一向専修に決定せしめんと、木像を彫り讀經する人は、光明を蒙らざりし消息を明かす。

高田敬輔「選撰集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選撰集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第十四 六方恒沙の諸佛餘行を証誠せず唯念佛を証誠したまふ章

此だんハ、あミだ經に釈迦如来ねんぶつの法をときたまふに、六方におのゝ恒河の砂の数とのほとけましゝて、念佛往生の證據に立給ふことをあらはせり。黒きハ、すなハち五濁惡世のなごりを標したり。佛ハ、釈迦如来、弥陀經をときたまふ躰なり。座したる出家ハ、すなハち舍利弗尊者なり。

東方五佛あり。阿閼鞞佛。須弥相佛。大須弥佛。須弥光佛。妙音佛。南方五佛あり。日月燈佛。名聞光佛。大燄肩佛。須弥燈佛。無量精進佛。西方七佛あり。無量壽佛。無量相佛。無量幢佛。大光佛。大明佛。宝相佛。淨光佛。北方五佛あり。焰肩佛。最勝音佛。難沮佛。日生佛。網明佛。下方六佛あり。獅子佛。名聞佛。名光佛。達摩佛。法幢佛。持法佛。上方十仏あり。梵音佛。宿王佛。香上佛。香光佛。大焰肩佛。雜色華嚴身佛。娑羅樹王佛。寶華德佛。見一切義佛。如須弥山佛也。

かくのごとくもろゝの佛の御名をときたまふといへども、実ハ恒河の砂のかずゝのほとけ、惡人女人の往生の證據にたちたまへり。

銅版「選撰集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）

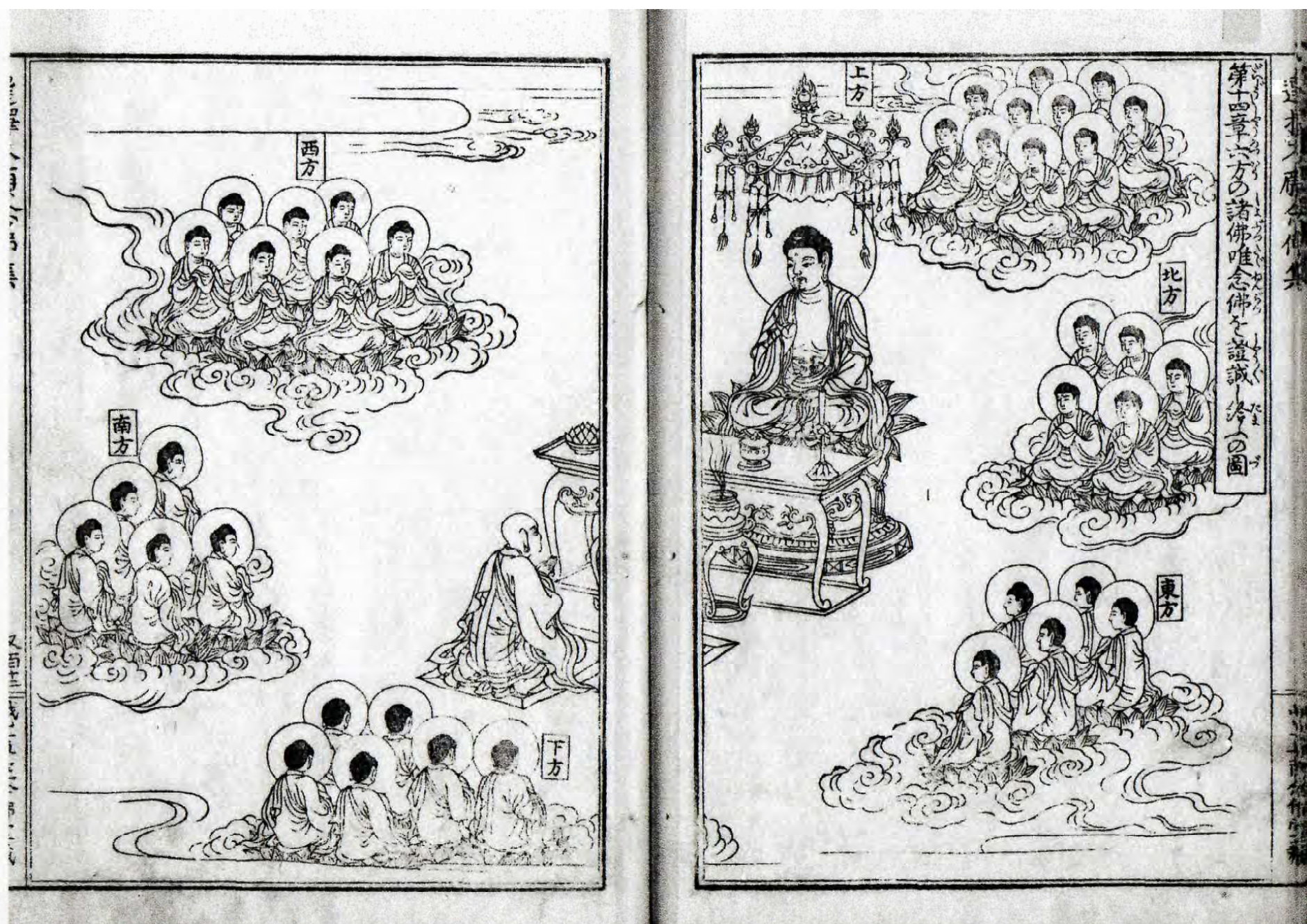


堀尾貫務『選撰集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第十四 六方恒沙の諸佛。餘行を證誠せず。ただ念佛を。證誠したまふ章

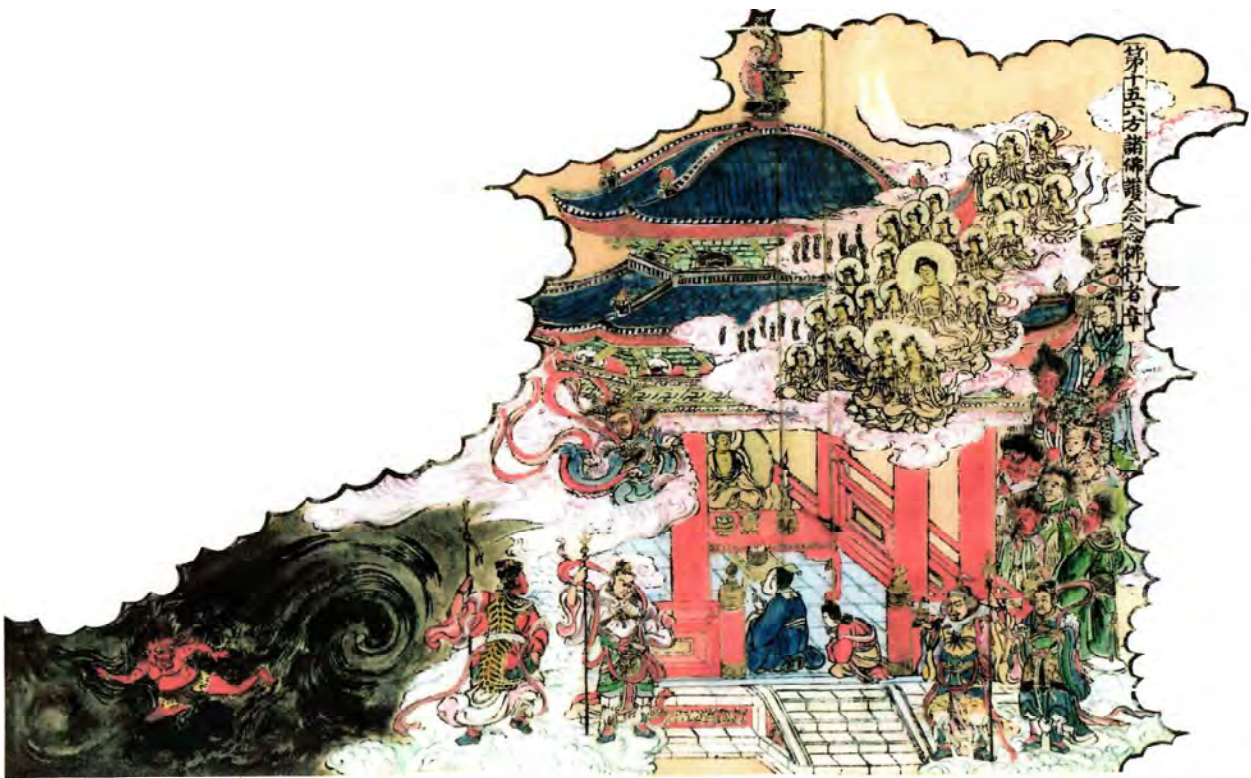
此章は。釈迦如来。阿彌陀經に。念佛の法をときたまふに。六方に。をのをの恒河の砂の。かずかずの佛。まして。念佛往生の。證據に立たまふことを。あらはせり。

佛ハ釈迦如来。弥陀經を。ときたまふ体なり。坐したる出家ハ。舍利弗尊者なり。東方に五佛南方に五佛西方に七佛。北方に五佛。下方に六佛。上方に十佛の。御名を。ときたまふ。かくのごとき等の。恒河の砂の。かずかずの佛。念佛の衆生の。往生の証拠に。たちたまへり。



「選択集十六章之図」《第十五章》諸相の対照⑯

高田敬輔「選擇集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選擇集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊

延享二年（一七四五）正月廿五日

第十五 六方の諸佛ねんぶつの行者を護念したまふ章

此段ハ六方のもろ／＼のほとけ、ねんぶつの行者を影のかたちに加へて

夜昼つねにまもりたまふことをのべたまへり。

男子女人のすがたミへしハ、すなハちねんぶつのぎやうじやなり。

むかうにおハしますほとけハ、則 恆沙のほとけなり。

左右にもろ／＼の天神地神のまもりたまふていあり。

黒き雲のうちに鬼神のすがたにて 通るハ、則 惡鬼の念佛の行者をおそれおのゝき、にげ去れをあらハすなり。

これすなハち諸佛に守らるゝゆへなり。

銅版「選擇集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）



堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊

明治二十三年（一八九〇）六月

第十五 六方の諸佛。念佛の行者を。護念したまふ章

此章は。六方の。もろもろの佛。ねんぶつ行者を。影のかたちに従がごとく。夜昼つねに。まも

りたまふことを。のべたまへり。

男女のすがた。見へたるハ。則念佛の行者なり。むかふに。おはします仏は。則恆沙の佛なり。

又多の天神地神おハしましてまもりたまふ。ていなり。

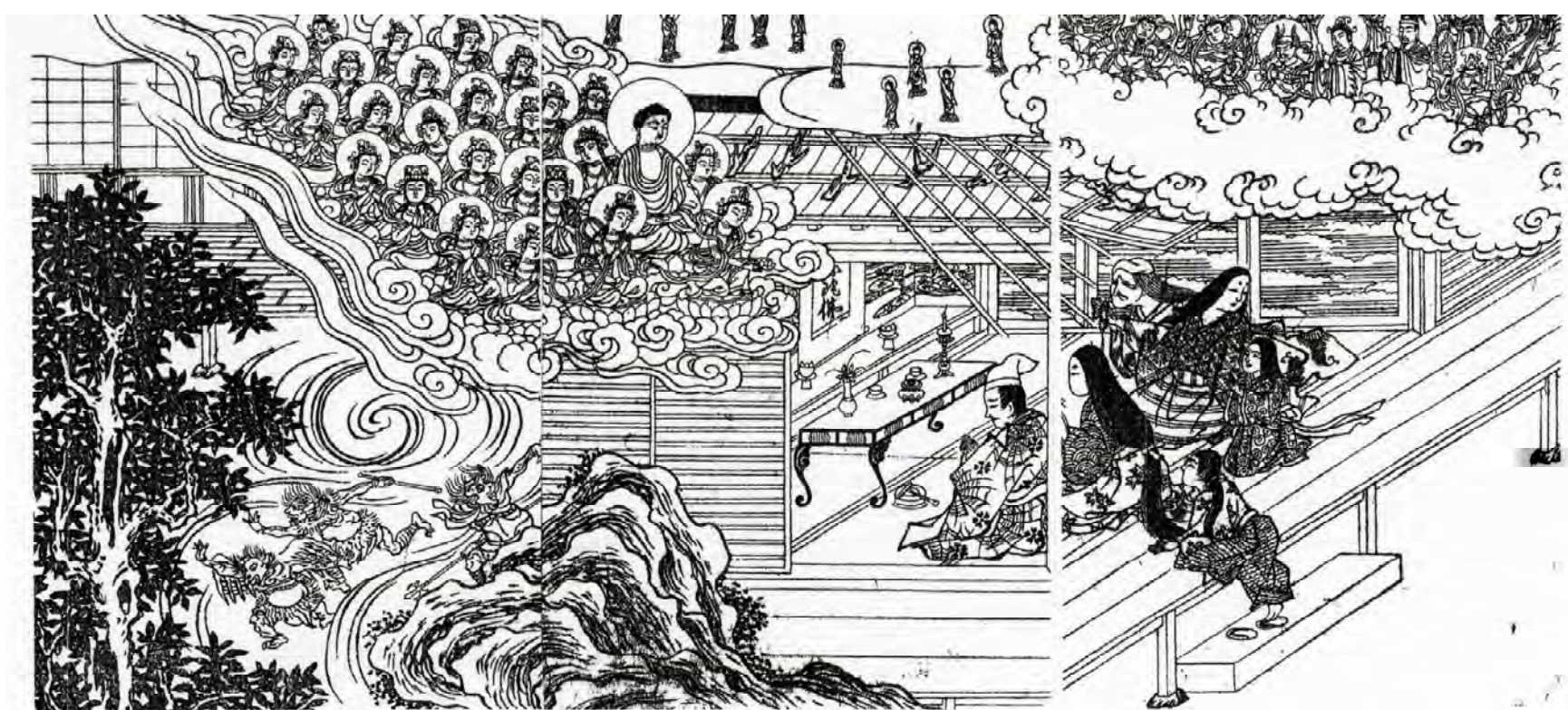
黒雲のうちの鬼神ハ。則念佛の行者を。諸佛善神の。まもり。たまふ故に。おそれ。おののき。にげさる。体

をあらハせり。

慈門專阿『通俗圖繪選擇本願念仏集』小倉山二尊院足曳堂藏
延享元年（一七四四）正月二十五日



關通『圖画和字選擇集』武江浅草引接室關通開版・同三縁山北谿忍海雲畫圖 版藏洛陽京極向西軒
延享元年（一七四四）



『雲介子関通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）
第十五、諸佛諸天龍神八部念佛者を護念し給へば、惡魔退散の消息なり。

高田敬輔「選擇集十六章之図」正徳四年（一七一四）《下段銘文より》



洛隠湖月『選擇集十六章圖説』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年（一七四五）正月廿五日

第十六 釈迦如来ミだの名号をもつてねんごろに舍利弗にふぞくしたまふ章

此段ハ釈迦如来あミだ經を説おはりたまふに、舍利弗およびもろ／＼の比丘一切世間の天人阿修羅等、佛の御説法を聴聞してよろこぶことのかぎりなし。よりて末のよの衆生のためにねんぶつをもつて舍利弗にさづけたまふ。佛の御姿ハ、すなハち釈迦如来、弥陀經を説たまふ躰なり。

左右にハ、諸のぼさつ聲聞衆、諸の人民、佛の御説法をきゝて歡ぶていあり。前に座したる出家のすがたハ、舍利弗、佛のふぞくをうけたまふ躰なり。是則五濁惡世の我等衆生に、この法をさづけたまふところへたまふべし。穴賢とこ。

銅版「選擇集十六章之圖」知恩院南門前豊田製（左記「圖」と左記「圖略解」を一具として刊行）

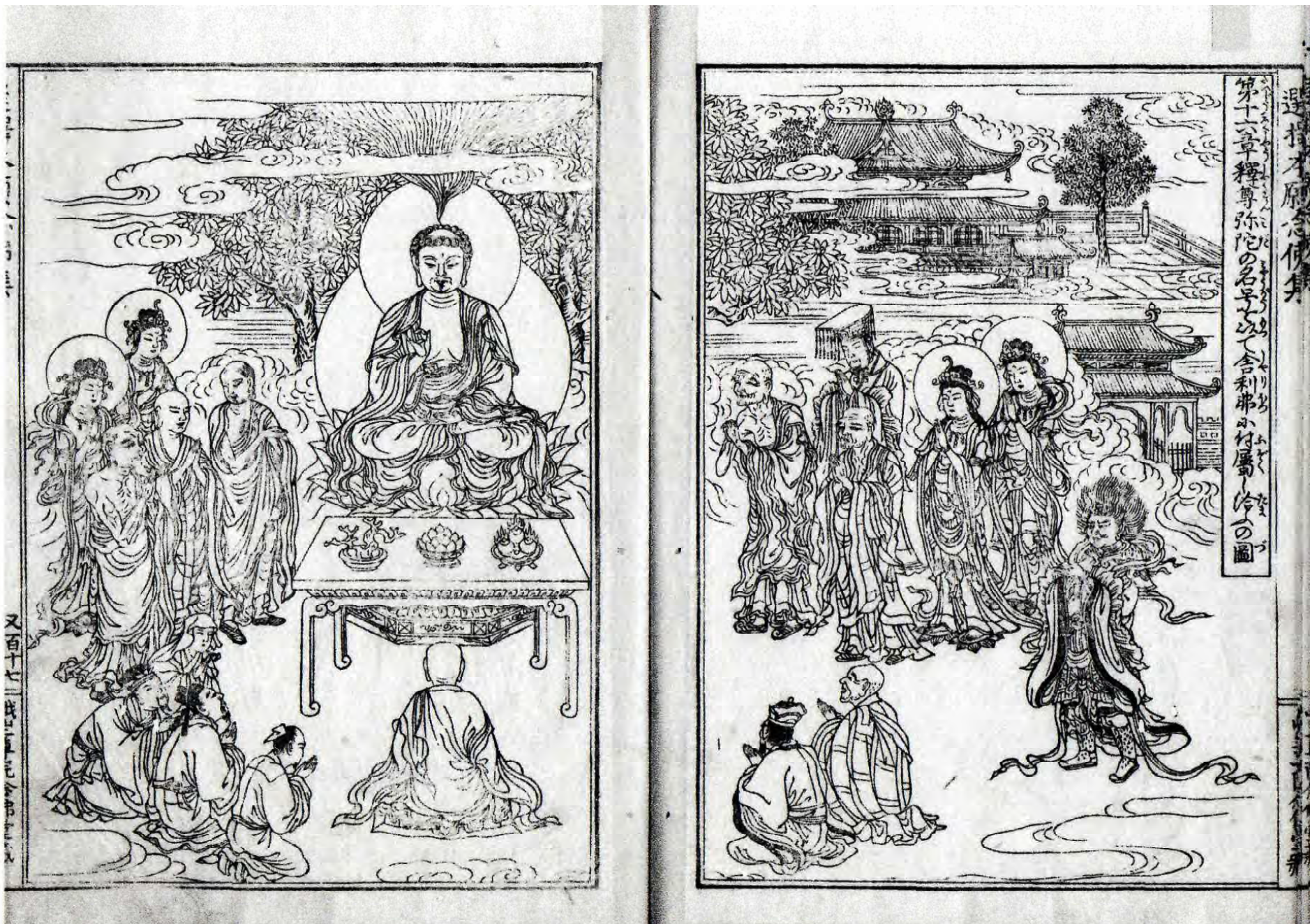


堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』京都豊田熊太郎刊 明治二十三年（一八九〇）六月

第十六。釈迦如来。弥陀の名号をもちて。ねんごろに。舍利弗にふぞく。したまふ章

此章ハ。釈迦如来。阿弥陀經を説。おはりたまふに。舍利弗。および。もろもろの比丘。一切世間の。天人阿修羅等。佛の説法を聴聞してよろこび信受せられたり。よりて。末の世の衆生のために。念佛もちて。舍利弗に。さづけ。たまふ。

仏の御姿ハ。釈迦如来。弥陀經を。とき。たまふ体なり。左右にハ。諸のぼさつ。聲聞衆。諸の人民。佛の説法をききて。信受のすがたなり。前に坐したる。出家のすがたハ。舍利弗。佛のふぞくを。うけ。たまふ体なり。これすなハち。五濁惡世の。我等衆生に。念佛往生の法を。さづけ。たまふと。ところへ。たまふべし。



『雲介子関通全集 第五卷』關通上人全集刊行會 頒布所轉法輪寺 昭和十二年（一九三七）

第十六、舍利弗へ念佛付属し給ふ章、畫圖のごとし。^{上巳}
五卷の圖畫、忍海上人の眞筆にして、上人發明の指示異して如此。依つて公卿にも随喜少からず。卷題御染筆ありし。其芳名第一卷は、從三位權中將藤原尚實卿、是は是れ九條家なり。第二卷は、林丘禪寺宮松嶺尼和尚なり。寺は洛の東北修学寺にあり。第三卷は、圓照禪寺宮大寂尼和尚なり。大聖寺宮御兼帶寺は、南都にあり。第四卷從二位權大納言源長忠卿なり。廣幡家なり。第五卷には、寶鏡禪寺宮本覺院德嚴尼和尚、寺は洛陽にあり。叙跋御撰述芳名、序の第一首は、前景愛大聖公主賜紫禪尼大寂和尚、同第二首は、從四位下少納言侍從文章博士菅原家長朝臣高辻家、同第三首は、從三位藏人頭行左大辨兼兵部卿平基親卿なり。跋は從二位前參議式部權太輔菅原在廉卿唐橋家、第一は延享元、第二は寛保三、第三の序は、東寺觀智院僧正賢賀の御筆。延享元年なり。其年梓に上し給ふ。卷を畫として後世の重寶なり。人々拜見して専修に入るもの、枚舉しがたく、尚小本三卷外に梓し給ふ事、懇懃の御勸導見ん人、元祖の本懷の思召と、上人の勸化と符号する事を信ずべし。

第三項 「選択集十六章之図」 原版・注釈書・刊本（七資料）各章諸相の特色

（注…第一章～第十六章の絵画表現①③⑤⑥の特色は概略を記し、文書表現②④⑦は原文を抽出。太字は筆者による。）

銘文及び序文		章段
くあり子賞示ら師・す入容部・莫・最・目 とせ、これ為く、善一、公、遊、今、れ、十、予、し、も、の んと。蓋んぞ人の佳、一、華、の、秋、都、有、昨、画、感、物 と。これ、一、公、の、次、ま、一、を、選、より、接 と。これ、一、公、の、次、ま、一、を、選、より、接	里。となすこと志るな	①高田敬輔 「選擇集十六章之圖」
		②洛陽湖月 「選擇集十六章圖說」
		③銅版 「選擇集十六章之圖」
		④堀尾貫務 「選擇集十六章之圖」
		⑤慈門專阿 「選擇集十六章之圖」
		⑥關通 「選擇集十六章之圖」
		⑦「雲介子關通全集」

第四項 小結

以上、①～⑦の七資料を各章ごとに諸相を対比し、さらにその特色を比較検討した結果、次のようなことを知ることができる。

① 目に見える敬輔の「選択集十六章之図」を契機に、読める注釈書（湖月）や、挿絵で見、国字で読む『選択集』（『通俗圖繪選択本願念仏集』・『圖画和字選擇集』）へと進展したことは、それまでの第三者からの講説を受けるという受身の形から、各自が読みやすい刊本を手にとり、各章を象徴する絵相を見ながら解釈するという、『選択本願念仏集』への主体的・能動的な姿勢の転換が図られたこと。

② 敬輔原版出版後、三十年ほど経過した頃（延享元年）、東西の都で同時期に、関通、慈門専阿が、それぞれ単独に開版し、挿絵入り国字『選択本願念仏集』が版行されるとともに、翌年（延享二年）、注釈書（湖月）が出版されたことにより、一般庶民にとって『選択本願念仏集』が身近なものになり、利便性と大衆性を具えることになったこと。

③ 関通譯・画僧忍海の『和字選択集』は、国字での開版に意義がおかれ、挿絵が高田敬輔原版と大きく異なる和風（和船、烏帽子、直衣、打ち掛け、和服等）の絵画表現になっており、一般庶民の日常の姿を描くことにより、さらに現実性をもたらそうとした意図が読み取れる独自性を表出したものであること。

④ 明治期に堀尾貫務が銅版画「選択集十六章之図」と『選択集十六章之図略解』を一具として著したが、【図】は銅版画で敬輔原版とは構成・配置・表現が大きく異なり、【図略解】は湖月の『選択集十六章之図説』の記述の域を超えていないものの、高田敬輔開版の意図が約百八十年後まで踏襲されていること。

(注1) 湖月『撰擇集十六章圖說』(延享二年丑正月廿五日 淨土宗總本山書籍發賣所 製本 京都知恩院南門前 豊田熊太郎)

(注2) 堀尾貫務『撰擇集十六章圖略解』(明治廿三年六月十五日刻成 全年全月全日出版 著述者 愛知縣士族 堀尾貫務 出版者兼印刷者)

京都府平民 豊田熊太郎)

(注3) 鷲津清静「通俗圖繪選擇本願念佛集について」四四七頁(『西山学会年報』第十四号 平成十六年 西山学会)

庭空素磧上人月峯大和尚は、西光院の第十二世であり、栄国寺開山の可信上人の孫弟子である。そんな因縁で、弟子の素俊上人が栄国寺の招請をうけ、第十一世の住職となられたのである。

(注4) 前掲書「通俗圖繪選擇本願念佛集について」四四五頁

慈門専阿とは、尾張名古屋の橘町、栄国寺の第十一世、英空素俊上人慈門専阿大和尚のことである。

《貞享元年(一六八四)〜寛延四年(一七五一) 世寿六十八歳》

(注5) 『圖画 和字選擇集』

選擇集跋…延享紀元歳次甲子孟夏穀旦 式部權太輔菅原在廉

刊記「延享紀元載旅甲子／建壬戌月佛感應日」

「武江淺艸引接室關通開版／同三縁山北篋忍海雲画圖／皇都城乾紫雲窟大起再治／印刻施主武江橋場水野平八」

「書肆／大坂岡田三郎右衛門／京師川勝五郎右衛門／武州江戸淺倉久兵衛」「版藏 洛陽京極向西軒」

第三節 「選択集十六章之図」の部分構成と作成の背景

第一項 「第一 捨聖道歸淨土章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第一 捨聖道歸淨土章

二 『選択本願念仏集』^(注1)の篇目

道綽禪師立_二聖道淨土二門_一而捨_二聖道_一正歸_二淨土_一之文

(道綽禪師聖道淨土の二門を立てて、しかも聖道を捨てて正しく淨土に歸するの文。)

* 道綽の聖道門、淨土門の二門論を引いて、自らの力で悟りを目指す聖道門を捨て、淨土門に帰すべきであることを述べた章である。

三 『選択本願念仏集』の引文

(一) 『安樂集』卷上^(注2)にみる道綽禪師の二門判

安樂集上云問曰一切衆生皆有_レ佛性_二遠劫以來應_レ值_二多佛_一何因至_レ今仍自輪_二廻生死_一不_レ出_二火宅_一

(安樂集の上に云わく。問うて曰く、一切衆生、皆、佛性有り。遠劫よりこのかた、まさに多佛に値_あえるなるべし。何によりてか、今に至るまで、なお自ら生死に輪廻して、火宅を出でざるや。)

* 『安樂集』の第三大門の第三の料簡の五番目に説かれるように、一切の衆生には、皆、仏になるべき本性がある。また遙か昔から今まで多くの仏の教えを受けてきたにも拘わらず、いまだに生死の苦海に輪廻

して、まさに火宅のような苦しみから逃れられないのはどうしてなのか教えて欲しいと問いかけている。

答曰依^二大乘聖教^一良由^レ不^下得^二二種勝法^一以^中排^上生死是以不^レ出^二火宅^一何者爲^レ二一謂聖道二謂往生淨土

(答えて曰わく、大乘の聖教に依るに、良^{まこと}に二種の勝法を得て、以つて生死を排^{はら}わざるによる。ここを以つて火宅を出でざるなり。何ものをか二と爲す。一には謂わく聖道、二には謂わく往生淨土なり。)

* それに答えるならば、大乘の聖典によれば二種の勝れた教えがあり、その教えに依つても生死の苦海から逃れられず、火宅を出ることができないでいる。その二種の勝れた教えとは、一つには聖道門であり、二つには往生淨土門であることが述べられている。

其聖道一種今時難^レ證一由^下去^二大聖^一遙遠^上二由^二理深解微^一

(その聖道の一種は、今の時、證し難し。一には大聖を去ること遙遠なるによる。二つには理は深く解^げは微なるによる。)

* その聖道門の教えは、今時には証し難いのである。その一つの理由は、釈尊の時代から遙かに年月を経ていることと、二つにはその真理があまりにも深く、今の衆生にはそれを理解することが乏しく、無理なのである。

(二) 『大修月藏經』^(注3)に説かれる通入路

是故大修月藏經云我末法時中億億衆生起^レ行修^レ道未^レ有^二一人得者^一當今末法現是五濁惡世唯有^二淨土一門^一可^二通入^一路

(この故に大修月藏經に云わく、我が末法の時の中に、億億の衆生、行を起し、道を修せんに、いまだ一人も得るもの有らじと。當今は末法、現にこれ五濁惡世なり。ただ淨土の一門のみ有りて通入すべき路なり。)

* だから、『大修月藏經』に、末法の時代にはあらゆる衆生が悟りを得ようと修行しても、だれ一人としてできないであらう。まして、今の時代は末法に入り、五濁惡世の世であるので、ただ淨土の一門だけが

仏の世界へ入るための要路であると説かれている。

(三) 大經に説く弥陀の救済

是故大經云若有衆生縱令一生造惡臨命終時十念相續稱我名字若不生者不取正覺又復一切衆生都不自量若據大乘眞如實相第一義空曾未措心若論小乘修入見諦修道乃至那含羅漢斷五下除五上無問道俗未有其分縱有人天果報皆爲五戒十善能招此報然持得者甚希若論起惡造罪何異暴風駛雨是以諸佛大慈勸歸淨土縱使一形造惡但能繁意專精常能念佛一切諸障自然消除定得往生何不思量都無去心也

(この故に大經に云わく、もし衆生有つて、たとい一生惡を造るとも、命終の時に臨んで、十念相續して、我が名字を稱せんに、もし生ぜずば正覺を取らじと。

またまた一切の衆生は、すべて自ら量らず。もし大乘に據らば、眞如實相、第一義空、かつていまだ心を惜かず。もし小乘を論ぜば、見諦、修道に修入し、ないし那含、羅漢に五下を斷じ、五上を除くこと、道俗を問うことなく、いまだその分有らず、たとい人天の果報あれども、皆、五戒十善によりて、能くこの報を招く。然るに持し得る者、甚だ希なり。もし起惡造罪を論ぜば、何んぞ暴風駛雨に異ならん。

ここを以つて諸佛の大慈、勸めて淨土に歸せしむ。たとい一形惡を造るとも、ただ能く意を繁けて、專精に常に能く念佛すれば、一切の諸障、自然に消除して、定んで往生を得。何んぞ思量せずして、すべて去る心無きや。)

* なぜならば、『無量壽經』に、「もし衆生が、たとい一生の間、惡を造つたとしても、命終の時に臨んで、十念を相續し、我が名字(南無阿彌陀仏)を称えるならば必ず往生する。もし、往生しなかったら仏にはならない。」とある。

しかし、注意しなければならないことは、この文は、『無量壽經』第十八願の「願設我得佛十方衆生至

心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺唯除五逆誹謗正法」と『觀無量壽經』下品下生の「或有衆生作不善業五逆十惡具諸不善」《中略》臨命終時《中略》具足十念稱南無阿彌陀仏《以下略》」の二つの經典の經文を併せ、弥陀の本願を説いたものと考えられる。これが、「惡人正機の本願論」^(注4)といわれている。

㊦ 大乘の教えについて

また重ねて言うならば、一切の衆生は、自らの器量を省みることがない。もし大乘の教えによるならば、真如（あらゆる存在の根源になる本体）や実相（真実のすがた）や第一義空（すべての執着を離れた絶対的境地）を説かれるのであるが、これを体現するには時間（三大阿僧祇劫）がかかり、厳しい修行（十三住の修道過程を経て、四信五行を実践体験し、真如体験の境地に達すること。）を積まなければならず、いまだかつて心がけている者はない。

㊧ 小乗の教えについて

もし小乗の教えをみるならば、見諦修道（声聞乗の修道階位である見道へ見諦・修道・無学道）の三道のうちの前二のこと。見諦は四諦の道理を明瞭に觀察する段階、修道はさらにそれを繰り返して修習してゆく段階）の修行に入り、那含（声聞の四向四果の第三位。欲界の迷いを断じ終わって、再び欲界に戻ることがなくなった状態）羅漢（阿羅漢に到達した境地。迷いの世界を流転することなく涅槃に入ることができる）に、五下（貪欲・瞋恚・有身見・戒禁取見・疑）を断ち、五上（色貪・無色貪・掉挙・慢・無明）を除くことは道俗を問わず、その修行は困難でいまだにできないのである。

また、たとえば人天（人間界や天上界に生まれる）の果報を得るとされる五戒（不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒）や十善（不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不綺語・不両舌・不惡口・不貪欲・不瞋恚・不邪見）すら実践することは難しく希なことである。もし、惡を犯し罪を造っている今の現状をみれば、まさに暴風が荒れ狂う様や激しいにわか雨が降りしきるとなんなら違いが無いだろうと説

かれている。

⑨ 仏の大慈悲について

そして、このことから多くの仏が大慈悲の心によって、阿弥陀仏の浄土に往生することを勧めているのである。たとい一生の間に悪を造った者でも、ただよく心を集中して念仏を称えるならば、一切の煩惱の障りは自然に消除され、決定して浄土往生を得ることができるのである。

それなのにどうして深く考えもせず、このような濁世から去り、すべて浄土へ往生しようとする心を起こさないのでしょうかと歎いている。

四 『選択本願念仏集』の私釈

ここで、法然は、浄土宗の教学的立場を明らかにするため、まず諸宗（有相宗・無相宗・華嚴宗・法華宗・真言宗）がどのような經典に基づいて教えを説いているかを概観し、その次に浄土宗の教相判釈を説いていくのである。

(一) 他宗の教相判釈について

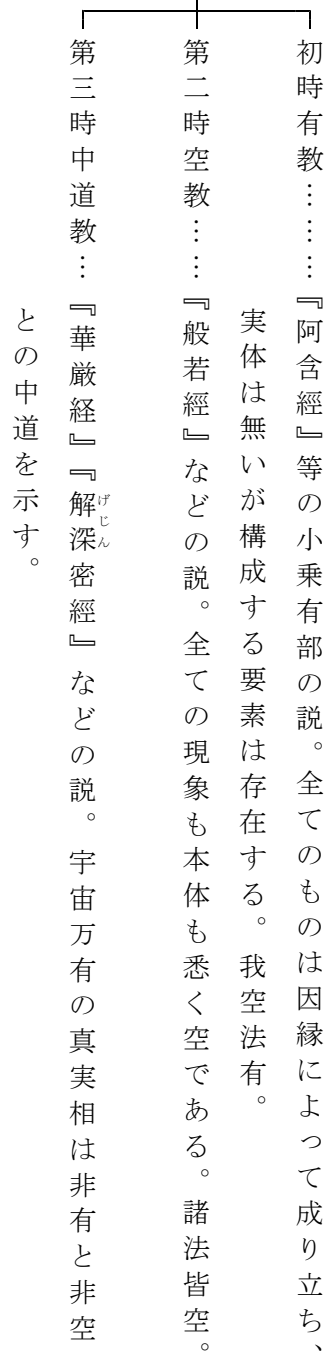
私云竊計夫立教多少隨_レ宗不_レ同且如_二有相宗_一立_二三時教_一而判_二一代聖教_一所謂有空中是也如_二無相宗_一立_二二藏教_一以判_二一代聖教_一所謂菩薩藏聲聞藏是也如_二華嚴宗_一立_二五教_一而攝_二一切佛教_一所謂小乘教始教終教頓教圓教是也如_二法華宗_一立_二四教五味_一以攝_二一切佛教_一四教者所謂藏通別圓是也五味者所謂乳酪生熟醍醐是也如_二眞言宗_一立_二二教_一而攝_二一切_一所謂顯教密教是也

（私に云わく、竊_{ひそ}に計_{おも}れば、それ立教の多少は宗に随つて不同なり。且_{しば}く有相宗のごときは、三時教を立てて一代の聖教を判ず。いわゆる有・空・中これなり。無相宗のごときは、二藏教を立てて以って一代の聖教を判ず。いわゆる菩薩藏・聲聞藏これなり。華嚴宗のごときは、五教を立てて一切の佛教を攝す。

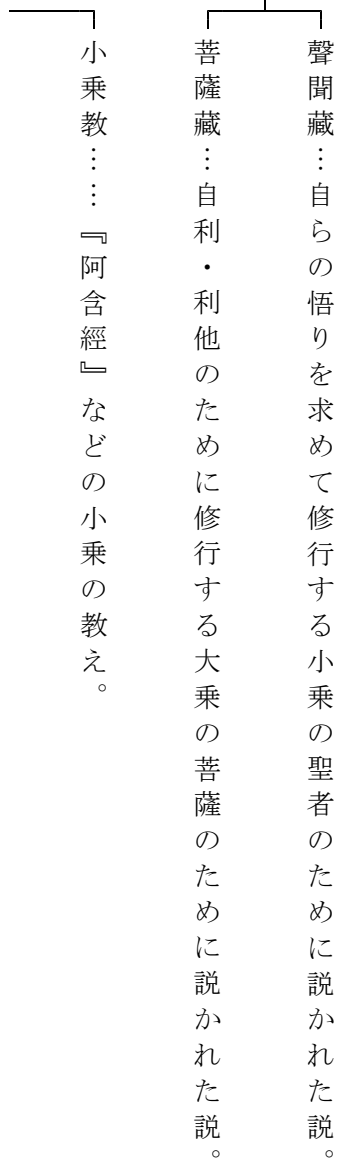
いわゆる小乗教・始教・終教・頓教・圓教これなり。法華宗のごときは、四教五味を立てて以って一切の佛教を攝す。四教とはいわゆる藏・通・別・圓これなり。五味とはいわゆる乳・酪・生・熟・醍醐これなり。眞言宗のごときは、二教を立てて一切を攝す。いわゆる顯教・密教これなり。）

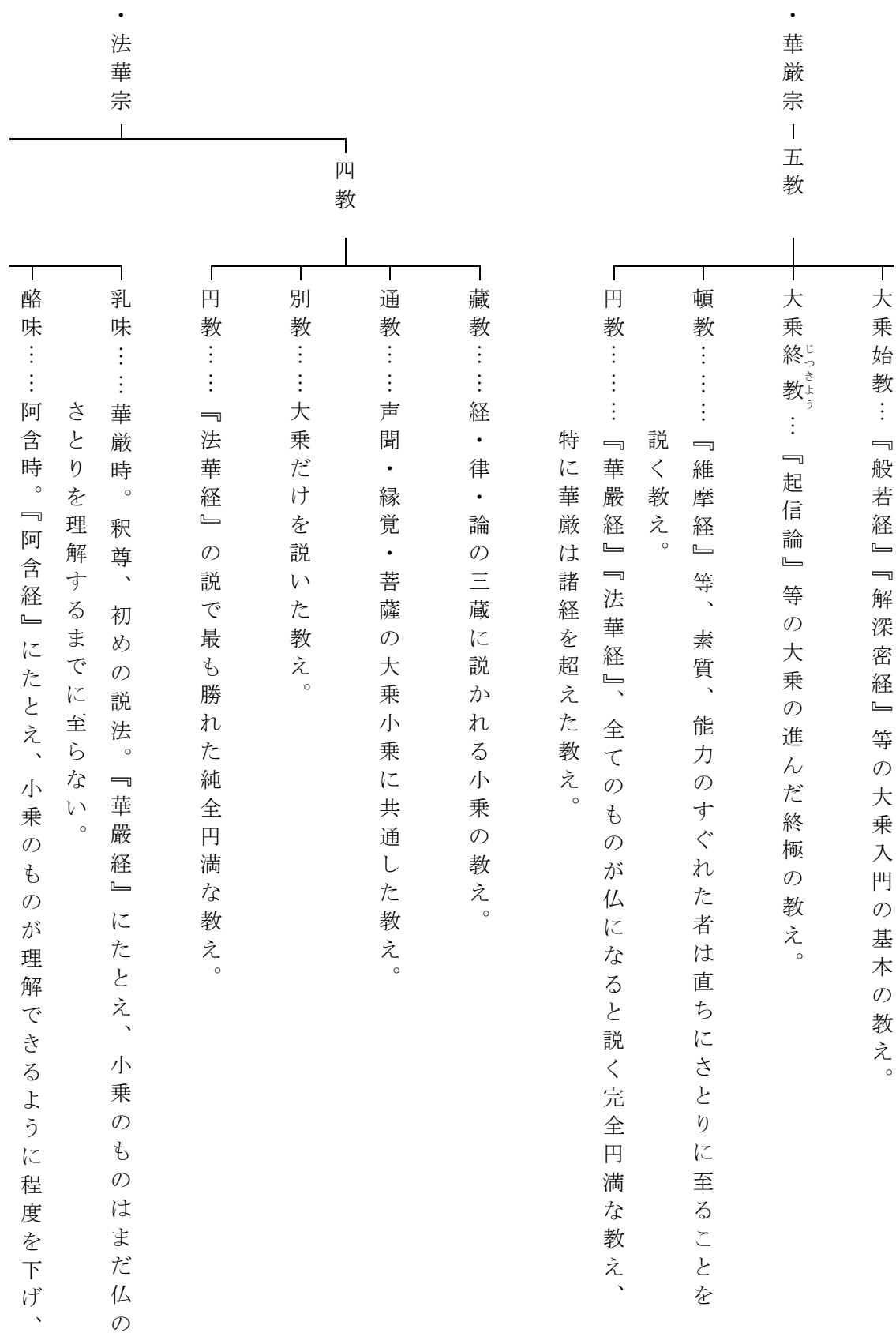
* 淨土宗の教相判釈（教学的立場を明らかにするため、種々の經典を形式や時期、意味の深淺などによって分類・判定し、依拠する經典を体系的に位置づけること）を立てるため、五宗の教相判釈を論じ、分類している。五宗の教相判釈の概要は、おおよそ次のようになっている。

・有相宗―三時教
(法相宗)



・無相宗―二藏判
(三論宗)





誘引するために説かれた。

五味

生酥味…方等時。阿含の後に『方等經』を説かれ、通教まで進んだものにたとえる。

熟酥味…般若時。一切法、皆これ大乘なりと『般若經』を説かれ、別教にまで進んだことをたとえる。

醍醐味…法華涅槃時。極上味のもので最後に『法華經』『涅槃經』を説かれ、円教にまで達したことにたとえる。

・眞言宗
― 顯密

顯教…… 釈尊が相手に応じてだれでも解るような顯らかな教え。

密教…… 自身の仏、大日如来がさとりそのままを説かれ、仏のみが知る秘密の教え。

(二) 淨土宗の教相判釈

今此淨土宗者若依道綽禪師意立二門而攝一切所謂聖道門淨土門是也

(今この淨土宗は、もし道綽禪師の意に依らば、二門を立てて一切を攝す。

いわゆる、聖道門、淨土門これなり。)

* 淨土宗の教相判釈について、道綽の二門論^(注5)を引いて、初めに淨土宗の宗名、次に聖道門と淨土門の二門を明かしている。

① 淨土宗の宗名について

問曰夫立宗名本在華嚴天台等八宗九宗未聞於淨土之家立其宗名然今號淨土宗有何證據也答曰

淨土宗名其證非^レ「元曉遊心安樂道云淨土宗意本爲^二凡夫^一兼爲^二聖人^一」又慈恩西方要決云依^二此一宗^一又迦才淨土論云此之一宗竊爲^二要路^一其證如^レ此不^レ足^二疑端^一

（問うて曰わく、それ宗名を立てることは、もと、華嚴・天台等八宗九宗に在り。いまだ淨土の家において、その宗名を立てることを聞かず。然るに、今、淨土宗と號すること何の證據が有るや。

答えて曰わく、淨土宗の名、その證、一に非ず。元曉の遊心安樂道に云わく、淨土宗の意は、もと、凡夫の爲にし、兼ねて聖人の爲にす、と。

また慈恩の西方要決に云わく、この一宗に依る、と。

また迦才の淨土論に云わく、この一宗、竊^{ひそ}かに要路とすと、その證かくのごとし。疑端に足らず。）

* それでは問うが、宗名を立てることは、今まで華嚴・天台等の八宗九宗でされているが、淨土宗の立宗はなされていないので、淨土宗という名の根拠を明らかにしてほしい。

それに答えるならば、華嚴宗の元曉の『遊心安樂道』^(注6)には、「淨土宗の意は、本、凡夫の爲にして、兼ねて聖人の爲にする」とある。

唯識宗の慈恩の『西方要決』^(注7)には、「この一宗に依る」とある。

三論宗の迦才の『淨土論』^(注8)には、「この一宗、竊かに要路とす」と示されている。

このように、元曉は勿論、慈恩や迦才の説く「一宗」はその前後の文意から淨土宗のことであり、なんら疑いをもたれるようなものでは無いと述べている。

② 聖道門、淨土門の二門論

但諸宗立教正非^二今意^一且就^二淨土宗^一略明^二二門^一者一者聖道門二者淨土門

（ただし、諸宗の立教は正しく今の意に非ず。且く淨土宗に就いて、略して二門を明かさば、一には聖道門、二には淨土門なり。）

* ただし、今は諸宗の教判を明かすのが本意ではなく、浄土宗について聖道門と浄土門の二門を略解していくことを目的としたい。

㊦ 聖道門とは

初聖道門者就_レ之有_二一者大乘二者小乘就_二大乘中_一雖_レ有_二顯密權實等不同_一今此集意唯存_二顯大及び權大_一故當_二曆劫迂廻之行_一准_レ之思_レ之應_レ存_二密大及び實大_一然則今眞言佛心天台華嚴三論法相地論攝論此等八家之意正在_レ此也應_レ知

（初めに聖道門とは、これに就いて二つ有り。一には大乘、二には小乗なり。大乘の中に就いて顯密、權實等の不同有りといえども、今、この集の意は、ただ顯大及び權大を存す。故に曆劫迂廻の行に當る。

これに准じてこれを思うに、まさに密大および實大を存すべし。然れば則ち、今、眞言・佛心・天台・華嚴・三論・法相・地論・攝論_{（しょうろん）}これらの八家の意、正しくここに在り。まさに知るべし。）

* 初めに、聖道門とは、これについて二つ有る。一つは大乘、二つに小乗である。

その大乘の中をみると、眞言宗では、顯教と密教の二つに分け、天台宗では、權大乘（眞実の教えに導くための權_{かり}の教え）と実大乘（仏の悟りである永久不変の眞実の教え）に区分けしている。

だが『安樂集』でいう聖道門とは、道綽の頃に行われていた顯教の大乘と權教の大乘だけであり、三大阿僧祇劫という長い時間をかけて仏果を成就するという遠回りの行である。当時としては他に密教があり、実の大乘もあるが、いずれも悟りの道であり、難しい行であるといえることができるのである。

だから、眞言・佛心・天台・華嚴・三論・法相・地論・攝論の八宗は、聖道門であるといえる。このことは知っておくべきである。と説いている。

次小乗者總是小乘經律論之中所_レ明聲聞緣覺斷惑證理入聖得果之道也准_レ上思_レ之亦可_レ攝_二俱舍成實諸部律宗_一而已凡此聖道門大意者不_レ論_二大乘及以小乘_一於_二此娑婆世界之中_一修_二四乘道_一得_二四乘果_一也四乘者三乘之外加_二

佛乘

（次に小乗とは、すべて、これ小乗の經律論の中に明す所の聲聞・緣覺・斷惑證理・入聖得果の道なり。上に准じてこれを思うに、また俱舍・成實・諸部の律宗を攝すべきのみ。およそこの聖道門の大意は、大乘及び小乗を論ぜず、この娑婆世界の中に於いて、四乗の道を修して、四乗の果を得るなり。四乗とは、三乗の外に佛乗を加う。）

* 次に小乗というのは、すべて小乗の經・律・論の三藏に明らかにされている教えである

聲聞は、仏の説法を聞いて四諦（苦諦・集諦・滅諦・道諦）：仏教の実践上の四つの真理、釈尊が最初の説法で示された）の理を觀じ、阿羅漢のさとりに至ろうとするもの。

緣覺は、仏の教えによらず、独りで十二因縁を觀じてさとりを得ようとするもの。

斷惑證理は、煩惱を捨て去り、涅槃の真理を悟ること。

入聖得果は、聖者の位に入つて証果を得ること。

これらのことは、いずれもこの世の煩惱を断じて真理の悟りを求める道である。このようなことから俱舍宗・成實宗・諸部の律宗も聖道門に入れることができるのである。

だから、聖道門の大意は、大乘や小乗の區別をすることなく、この娑婆世界で修行を重ね、悟りを求める法門なのである。

聲聞・緣覺・菩薩の三乗と仏乗を加えた四乗それぞれが、四種の修行を通して悟りを目指すのである。

① 淨土門とは

次往生淨土門者就「此有」二一者正明「往生淨土」之教二者傍明「往生淨土」之教初正明「往生淨土」之教者謂三經一論是也三經者一無量壽經二觀無量壽經三阿彌陀經也一論者天親往生論是也或指「此三經」號「淨土三部經」也（次に往生淨土門とは、これに就いて二有り。一には正に往生淨土を明せるの教、二には傍らに往生淨土を

明せる教なり。

初めに正に往生淨土を明せる教とは、謂わく三經一論これなり。三經とは一には無量壽經、二には觀無量壽經、三には阿彌陀經なり。一論とは天親の往生論これなり。あるいはこの三經を指して淨土の三部經と號す。）

＊ 次に往生淨土門とは、二つの教えが有り、一つは正しく往生淨土を明らかにする教え（正明往生淨土教）と、二つ目に、別な目的をもちながら、傍らに往生淨土を明らかにする教え（傍明往生淨土教）がある。初めに、正明往生淨土教として、三經一論がある。三經とは、一に『無量壽經』、二に『觀無量壽經』、三に『阿彌陀經』であり、一論とは天親の『往生論』である。

そして、この三經を淨土三部經と名づけるのである。ただ、このように三經を選定して淨土三部經と名づけるのは、法然上人が最初であるので、他にも三部經と称する例があることを次にあげている。

問曰三部經名亦有其例乎答曰三部經名其例非一者法華三部謂無量義經・法華經・普賢觀經是也二者大日三部謂大日經・金剛頂經・蘇悉地經是也三者鎮護國家三部謂法華經・仁王經・金光明經是也四者彌勒三部謂上生經・下生經・成佛經是也今者唯是彌陀三部故名淨土三部經也彌陀三部者是淨土正依經也次傍明往生淨土之教者華嚴・法華・隨求・尊勝等明諸往生淨土之諸經是也又起信論・寶性論・十住毘婆沙論・攝大乘論等明諸往生淨土之諸論是也

（問うて曰わく。三部經の名、またその例有りや。

答えて曰わく、三部經の名、その例一に非ず。一には法華の三部、謂わく無量義經・法華經・普賢觀經これなり。二には大日の三部、謂わく大日經・金剛頂經・蘇悉地經これなり。三には鎮護國家の三部、謂わく法華經・仁王經・金光明經これなり。四には彌勒の三部、謂わく上生經・下生經・成佛經これなり。今はただこれ彌陀の三部なり。故に淨土の三部經と名づく。彌陀の三部とはこれ淨土正依の經なり。

次に、傍らに往生淨土を明すの教とは、華嚴・法華・隨求・尊勝等の、諸々の往生淨土を明せる諸經これなり。また起信論・實性論・十住毘婆沙論・攝大乘論等の、諸々の往生淨土を明すの諸論これなり。）

* 他にも三部經と称する例があるのかという問いに、次のように答えている。

- ・法華の三部經：『無量義經』・『法華經』・『普賢觀經』
- ・大日の三部經：『大日經』・『金剛頂經』・『蘇悉地經』
- ・鎮護國家の三部經：『法華經』・『仁王經』・『金光明經』
- ・弥勒の三部經：『上生經』・『下生經』・『成佛經』

しかし、今はただ阿弥陀仏の教えを説き明かす三部經なので、淨土三部經と名づけるのである。そして、これは、淨土宗の正依の經典である。

次に、傍明往生淨土教の教えを説いている經典には、『華嚴經』・『法華經』・『隨求陀羅尼經』・『尊勝陀羅尼經』など諸々のものがあり、淨土往生の行が説かれている。

また、『大乘起信論』・『究竟一乘實性論』・『十住毘婆沙論』・『攝大乘論』等の諸々の往生淨土を明す論も説かれている。

(三) 淨土門への歸入のすすめ

①道綽『安樂集』の二門論

凡此集中立^二聖道淨土二門^一意者爲^レ令^下捨^二聖道^一入^中淨土門^上也就^レ此有^二二由^一一由^下去^二大聖^一遙遠^上二由^二理深解微^一此宗之中立^二二門^一者獨非^二道綽^一曇鸞天台迦才慈恩等諸師皆有^二此意^一

(およそ、この集の中に、聖道淨土の二門を立てる意は、聖道を捨てて、淨土門に入らしめんが爲なり。これに就いて二つの由有り。一には大聖を去ること遙遠なるに由る。二には理深く、解微なるに由る。)

この宗の中に二門を立てることは獨り道綽のみに非ず。曇鸞・天台・迦才・慈恩等の諸師皆この意有り。)* 道綽が『安樂集』の中で聖道、浄土の二門を立てた趣意は、聖道のさとりへの門を捨てて浄土の救いの門に帰入することを勧めるためである。

これに就いて二つの理由があり、一つは釈尊が入滅してから時代が遠く隔たり、すでに末法の世になっていること。二つには、聖道門で説く真理があまりにも深遠で、今時、末法の世の者には、智力が劣っており、理解できないからであると、道綽の『安樂集』卷上の、

「答曰依_二大乘聖教_一良由_レ不得_二二種勝法_一以排_下生死_上是以不_レ出_二火宅_一何者爲_二二一謂聖道二謂往生淨土其聖道一種今時難_レ證一由_下去_二大聖_一遙遠_上二由_二理深解微_一」(注2)の文を引用し、聖道門が相応しくない法門であることを述べている。

また、浄土宗の中に二門を立てるのは、単に道綽ばかりではなく、曇鸞・天台・迦才・慈恩等の諸師達も、皆、同じ考えであるとして、次に、曇鸞『往生論註』、慈恩『西方要決』が引かれる。

②曇鸞『往生論註』(注9)にみる龍樹『十住毗婆沙論』二道論

且曇鸞法師往生論注云謹案龍樹菩薩十住毗婆沙云菩薩求_二阿毗跋致_一有二種道一者難行道二者易行道難行道者謂於_二五濁之世於無佛時_一求_二阿毗跋致_一爲_レ難此難乃有_二多途_一粗言_二五三_一以示_二義意_一一者外道相善亂_二菩薩法_一二者聲聞自利障_二大慈悲_一三者無顧惡人破_二他勝德_一四者顛倒善果能壞_二梵行_一五者唯是自力無_二他力持_一如_レ斯等事觸_レ目皆是譬如_二陸路步行則苦_一易行道者謂但以_二信佛因緣_一願_レ生_二淨土_一乘_二佛願力_一便得_レ住_二生彼清淨土_一佛力住持即入_二大乘正定之聚_一正定即是阿毗跋致譬如_二水路乘船則樂_上已

此中難行道者即是聖道門也易行道者即是浄土門也難行易行聖道浄土其言雖_レ異其意是同天台迦才同_レ之應_レ知(且_レく、曇鸞法師の往生論の注に云わく。

謹んで案ずるに、龍樹菩薩の十住毘婆沙に云わく、菩薩、阿毗跋致を求めるに、二種の道有り。

一には難行道、二には易行道なり。難行道とは、謂わく五濁の世、無佛の時に於いて、阿毘跋致を求めるを難とす。この難にすなわち多途有り。ほぼ五三を言いて、以つて義意を示さん。

一には外道の相善、菩薩の法を亂る。二には聲聞の自利、大慈悲を障う。三には無顧の惡人、他の勝德を破す。四には顛倒の善果、能く梵行を壞す。五にはただこれ自力にして他力の持無し。

かくのごとき等の事、目に觸れて、皆、是なり。譬えば、陸路の歩行は則ち苦しきがごとし。易行道とは、謂わく、ただ信佛の因縁を以つて、淨土に生ぜんと願すれば、佛の願力に乗じて、すなわち彼の清淨の土に往生することを得。佛力住持して、すなわち大乘正定の聚に入らしむ。正定はすなわちこれ阿毘跋致なり。譬えば水路の乗船は則ち樂しきがごとし。(已上)

この中に難行道とは、即ちこれ聖道門なり。易行道とは、即ちこれ淨土門なり。難行、易行と、聖道、淨土と、その言は異なりといえども、その意これ同じ。天台迦才これに同じ。まさに知るべし。

* そして、曇鸞は『往生論註』に、龍樹の『十住毘婆沙論』易行品を引き、菩薩が阿毘跋致(仏果を求める修行をして、再び迷いの世界や自利、利己の惡道に退転することない堅固な心)を持つには二種の方法があり、一つは難行道であり、二つに易行道であることを説いている。

その難行道について、この五濁惡世の無仏の時に、自力で阿毘跋致を求めることは大変困難なことである。その困難さについて五種の理由をあげてみると、

・ 第一に、外道の相善、菩薩の法を亂る。(仏教に似た他の宗教の教説や善行は、根本的に煩惱に執われた善に過ぎないが、菩薩の修行と紛らわしいものもあるので、混亂を起こすことがある。)

・ 第二に、聲聞の自利、大慈悲を障う。(小乗の自利の修行をする聲聞たちのために、すべてを救う大乘の利他の大慈悲をさまたげることがある。)

・ 第三に、無顧の惡人、他の勝德を破す。(善惡を顧みない無思慮や無反省な者によって、世のために

勝れた徳行を積んでいる人々を傷つけるため、菩薩行に励む人々に差し障りが出ることがある。」

・第四に、顛倒の善果、能く梵行を壊す。(誤った修行によつて名利にとらわれ、善い果報を得ようとするような考えが、菩薩の清浄な修行を打ち壊すことがある。)

・第五に、ただこれ自力にして、他力の持無し。(自らのか弱い力で修行に励むばかりでは、仏の大慈悲の力である他力に救われることがないからである。)

このようなことは現に多く目にしたり経験することである。だから、難行道は陸路を歩いて行くような困難な苦しい修行である。

それに対して易行道とは、ただ阿弥陀仏を信じることによつて、浄土に生まれたいと願えば、阿弥陀仏の願力によつて極楽浄土に往生することができる。そして仏の本願力によつて再び凡夫の苦しみに落ちることなく、仏のさとりを約束された地位を得、成仏できるのである。それは正定聚という不退轉の阿毗跋致の境地であり、この道を譬えれば、まさに水路を船に乗って行くようなもので、誰にでも向いている修行方法であると述べている。

このように、龍樹のいう難行道というのは聖道門のことであり、易行道というのは浄土門のことなのである。難行道と易行道、聖道門と浄土門は、それぞれ言葉は違うが、修行の道と理想の法門について述べていることなので、その趣旨は変わらないと説いているのである。

そして、天台智顗の『浄土十疑論』^(注10)には、龍樹の『十住毘婆沙論』^(注11)が引用され、さらに、迦才も『浄土論』卷下^(注12)で、龍樹の『智度論』^(注13)を引き、難行道と易行道の二道について、同様に引用されていると述べている。

尚、このことについては、後の項目「五『選択本願念仏集』(義山校訂本)第一章の教義の論理展開と絵師高田敬輔の絵相表現の視点」の項で、さらに検討を加えることにする。

(四) 慈恩『西方要決』の三乘（聖道門）・淨土（淨土門）二門論

又西方要決云仰惟釋迦啓運弘益有緣教闡隨方竝霑法潤親逢聖化道悟三乘福薄因疎勸歸淨土作斯業者專念彌陀一切善根廻生彼國彌陀本願誓度娑婆上盡現生一形下至臨終十念俱能決定皆得往生又同後序云夫以生居像季去聖斯遙道預三乘無方契悟人天兩位躁動不安智博情弘能堪久處也若識癡行淺恐溺幽途必須遠跡娑婆栖心淨域此中三乘者即是聖道門意也淨土者即是淨土門意也三乘淨土聖道淨土其名雖異其意亦同淨土宗學者先須知此旨設雖先學聖道門人若於淨土門有其志者須棄聖道歸於淨土例如彼曇鸞法師捨四論講說一向歸淨土道綽禪師閣涅槃廣業偏弘西方行上古賢哲猶以如此末代愚魯寧不遵之哉

（また西方要決に云わく。仰ぎ惟れば、釋迦、運を啓きて、弘く有縁を益す。教え、隨方に聞けて、ならびに法潤に霑う。親子聖化に逢えるは、道、三乘を悟りき。福薄く因疎なるは、勸めて淨土に歸せしむ。この業を作すものは、専ら彌陀を念じ、一切の善根、廻して彼の國に生ず。彌陀の本願、誓つて娑婆を度したまう。上、現生の一形を盡し、下、臨終の十念に至るまで、ともに能く決定して、皆、往生を得と。へ已上）

また同じき後序に云わく。それ以れば、生れて像季に居して、聖を去ることこれ遙かなり。道、三乘に預かれども、契悟するに方無し。人天の兩位は、躁動にして安からず。智博く、情弘きは、能く久しく處するに堪えたり。もし識癡に、行淺きは、恐らく幽途に溺れん。必ずすべからく跡を娑婆に遠ざけ、心を淨域に栖ましむべし（へ已上）

この中に三乘とは、即ちこれ聖道門の意なり。淨土とは即ちこれ淨土門の意なり。三乘淨土と、聖道淨土とは、その名異なりといえども、その意また同じ。淨土宗の學者、まず須くこの旨を知るべし。たとい先に聖道門を學せる人といえども、もし淨土門において、その志有らば、須く聖道を棄てて、淨土

に歸すべし。例せば、彼の曇鸞法師は、四論の講説を捨てて一向に淨土に歸し、道綽禪師は、涅槃の廣業をさしお閣さしおいて、偏に西方の行を弘めしがごとし。上古の賢哲なお以ってかくのごとし。末代の愚魯ぐろ、むしろこれにしたが遵したがわざらんや。」

＊
さらに、慈恩の『西方要決』には、

「謹んで思うに、釈尊が教えを説く時機が熟したと考えられて広く縁のある人々を教化されたが、その教えは、十方衆生の資質に応じて説かれたので、大地に慈雨が注ぐように仏法の潤いに恵まれたのである。親しく教えを聞いた声聞は煩惱を滅して羅漢となり、縁覚は因縁の理を悟って聖者になり、菩薩は自利利他の法門を学んで慈悲の行に励み、三乗それぞれが悟りの道に達することができたのである。」

しかし、釈尊の滅後の末世では、親しく教えを受けられず、福德が薄く、宿因が疎い者達のために、極樂淨土に往生できる法門をのこし、その行を修めることを勧めているのである。その淨土へ生まれることを願う者は、専ら阿弥陀仏を念じ、一切の善根を振り向けるならば、その者は仏の本願力によって、この娑婆世界から離れて往生することができる。その行は、生涯を通して念佛に励む者はもちろん、臨終の時に十念する者に至るまで、すべて疑い無く決定して淨土に往生できるのである。已上」

と釈尊滅後の三乗（聖道門）のさとの会得の困難さが述べられ、極樂往生のためには、専ら阿弥陀仏を念じ、一切の善根を振り向けることを勧めているのである。

そして、さらに『西方要決』の後序を取り上げ、

「思えば今は釈尊滅後、遙かに時が経ち、像法の末期になっている。仏道修行の道を、三乗（声聞・縁覚・菩薩）それぞれが相応しい法門を学ぶことができて、悟りの境地にまで至ることができないのである。人間界や天上界に生まれることは果報であるが、煩惱に苛まれることには変わりなく、心の動揺は免れず、安らぎを得ることができないものである。」

もし知恵が博く、慈悲心の深い者がいたとして、久しくこの世にとどまり、修行に耐え、さとりを開くこともできるであろうが、知恵が劣り、修行に耐えられない者は、おそらく三惡道に沈むであろう。だから必ず、この迷いの世界を遠く逃れ、心を仏の淨土に棲まわせるように、往生を願わなければならないのである。」

と前段に引き続き、『像法』の時機の三乘（聖道門）の修行の困難さを述べている。

そして、「三乗とはすなわちこれ聖道門の意」「淨土とはすなわちこれ淨土門の意」であること、さらに「三乘淨土と、聖道淨土とは、その名が異なっている、その意は同じ」であることを念を押すように説いている。

また、たとい先に聖道門を学んだ師でも、志があれば聖道を捨て、淨土に帰していると、曇鸞、道綽の例を次のように取り上げ、

・曇鸞法師は、四論の講説を捨てて、一向に淨土に歸し、

・道綽禪師は、涅槃の廣業をさしお閑いて、偏に西方の行を弘めし、

このように昔の賢哲の例があるので、後の愚かな我々は、むしろこれにしたがって学ぶべきである。だから、聖道門を捨てて淨土門に歸すべきであると強調しているのである。

(五) 淨土宗師資相承の血脈

問曰聖道家諸宗各有「師資相承」謂如「天台宗」者慧文南岳天台章安智威慧威玄朗湛然次第相承如「眞言宗」者大日如来金剛薩埵龍樹龍智金智不空次第相承自餘諸宗又各有「相承血脈」而今所言淨土宗有「師資相承血脈」乎答曰如「聖道家血脈」淨土宗亦有「血脈」但於「淨土一宗」諸家不「同所謂廬山慧遠法師慈愍三藏道綽善導等是也今且依「道綽善導之一家」論「師資相承血脈」者此亦有「兩說」一者菩提流支三藏・慧寵法師・道場法師・曇鸞法

師・大海禪師・法上法師已上出安樂集 二者菩提流支三藏・曇鸞法師・道綽禪師・善導禪師・懷感法師・小康法師已上出宋南傳唐

(問うて曰わく、聖道家の諸宗おのの師資相承有り。

謂わく、天台宗の如きは、慧文・南岳・天台・章安・智威・慧威・玄朗・湛然、次第相承す。

眞言宗の如きは、大日如来・金剛薩埵・龍樹・龍智・金智・不空、次第相承す。

自餘の諸宗、また各々相承の血脈有り。而るに今言う所の淨土宗に師資相承血脈の譜有りや。

答えて曰く。聖道家の血脈のごとく、淨土宗にもまた血脈有り。ただし淨土一宗において、諸家同じから

ず。いわゆる廬山の慧遠法師と、慈愍三藏と、道綽・善導等とこれなり。今しばらく道綽・善導の一家に依

て師資相承の血脈を論ぜば、これにまた兩説有り。

一には菩提流支三藏・慧えちよう寵法師・道場法師・曇鸞法師・大海禪師・法上法師なり。へ已上『安樂集』に出づ。へ

二には菩提流支三藏・曇鸞法師・道綽禪師・善導禪師・懷感法師・小康法師なり。へ已上『唐宋兩傳』に出づ。へ)

* 聖道家の諸宗の師資相承の例をあげると、

・天台宗：慧文・南岳・天台・章安・智威・慧威・玄朗・湛然。

・眞言宗：大日如来・金剛薩埵・龍樹・龍智・金智・不空。

・自餘の諸宗、各々相承の血脈有り。

右のようになるが、淨土宗の師資相承の血脈についても同じようにあり、その流れは三流あり、さらに道綽・善導の流れから二流がある。図示すれば、

* 廬山慧遠流

* 慈愍三藏流

『安樂集』による五祖

「*道綽・善導流

・菩提流支三藏・慧えちよう寵法師・道場法師・曇鸞法師・大海禪師・法上法師
『唐宋両伝』による五祖

のように、『安樂集』と『唐・宋両高僧伝』による二説を掲げているが、ここではいずれをとるか明言していない。

だが、『類聚浄土五祖』^(注14)及び『浄土五祖傳』^(注15)では、曇鸞・道綽・善導・懷感・小康の五祖を血脈系譜として明らかにしている。

五 『選択本願念仏集』（義山校訂本）第一章の教義の論理展開と絵師高田敬輔の絵相表現の視点

前項では『選択本願念仏集』（義山校訂本）第一章を読み下し、その教義の論理展開にふれることができたが、内容が複雑なこともあり、ここではさらに、簡略的に論理の重要項目を取り上げ、どこに高田敬輔が注目して絵相を制作したか、その根拠を追究する。

（一）『選択本願念仏集』（義山校訂本）第一章の教義の論理展開

① 標章《篇目》

道綽禪師立_二聖道浄土二門_一而捨_二聖道_一正歸_二浄土_一之文

② 道綽『安樂集』卷上第五の引文

*一切衆生皆有_二佛性_一遠劫以來應_レ值_二多佛_一、何因至_レ今仍自輪_二廻生死_一不_レ出_二火宅_一

③ 出離の要道、二門

*一謂聖道、二謂往生浄土

④ 聖道門、不相応

＊其聖道一種今時難證

・一由_下去_二大聖_一遙遠_上、二由_二理深解微_一

⑤ 今時末法、通入路は浄土門

『大集月藏經』（当今末法現是五濁惡世唯有_二浄土一門_一可_二通入路_一）

⑥ 大經に説く、弥陀の救済

＊大經云若有_二衆生_一縱令一生造_レ惡臨_二命終時_一十念相續稱_二我名字_一若不_レ生者不_レ取_二正覺_一

・大乘：眞如實相第一義空曾未_レ惜心。小乘：未_レ有_二其分_一中略）是以諸佛大慈勸歸_二浄土_一。

⑦ 他宗の教相判釈《私釈段》

・有相宗・無相宗・華嚴宗・法華宗・真言宗、五宗の教相判釈を例示。

⑧ 浄土宗の教相判釈

＊今此浄土宗者若依_二道綽禪師意_一立_二二門_一而攝_二一切_一所謂聖道門浄土門是也

ア 浄土宗の宗名

・華嚴宗元曉『遊心安樂道』、唯識宗慈恩『西方要決』、三論宗迦才『浄土論』に浄土宗あり。

イ 聖道門、浄土門の二門論

(i) 聖道門とは

・大乘——眞言佛心天台華嚴三論法相地論攝論此等八家之意

・小乗——聲聞緣覺斷惡證理入聖得果之道也

四乗者三乗之外加_二佛乗_一也

(ii) 浄土門とは

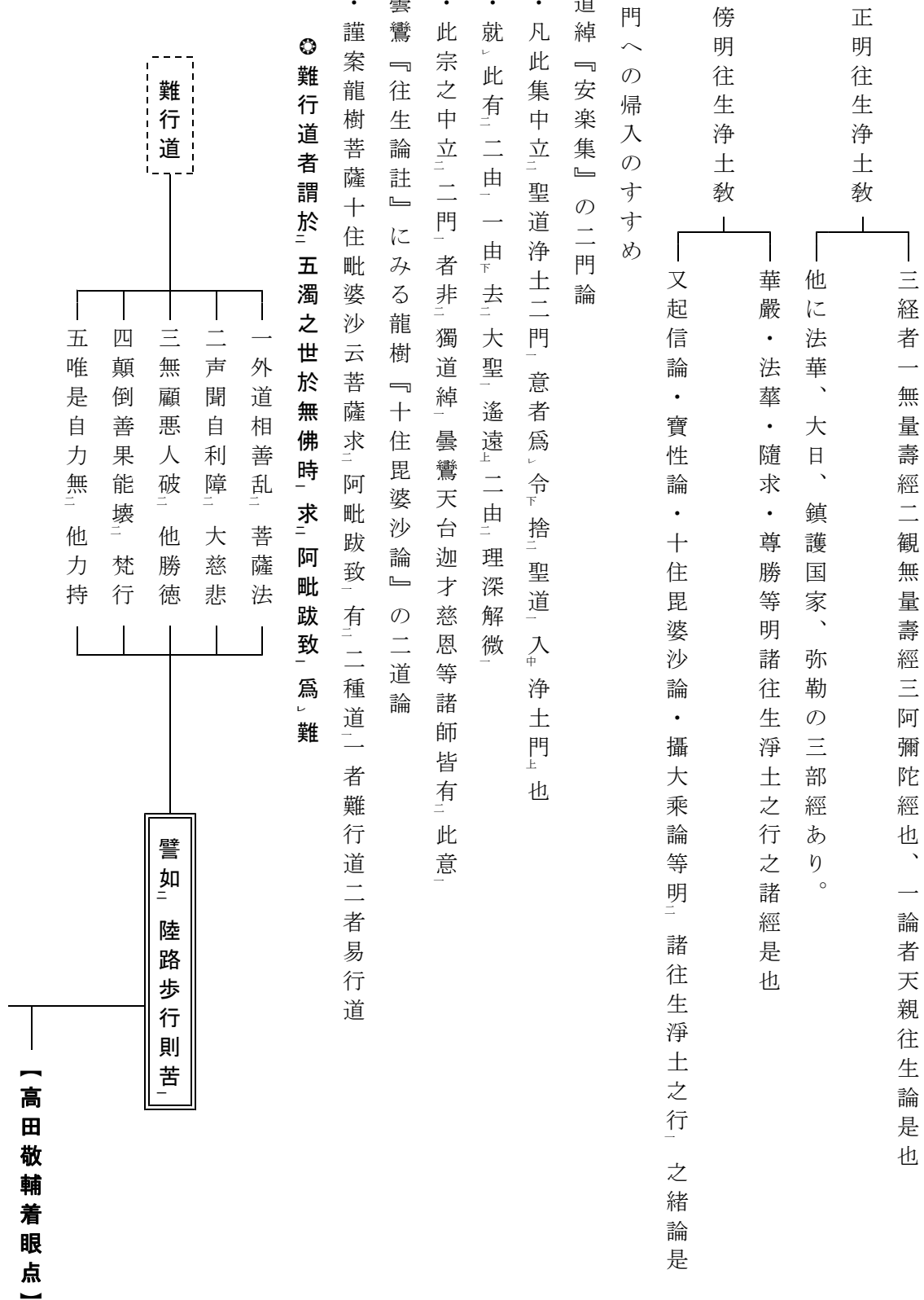
《謂三經一論是也》

⑨ 浄土門への帰入のすすめ

㊦ 道綽『安樂集』の二門論

- ・凡此集中立_二聖道浄土二門_一意者爲_レ令_下捨_二聖道_一入_中浄土門_上也
- ・就_レ此有_二二由_一一由_下去_二大聖_一遙遠_上二由_二理深解微_一
- ・此宗之中立_二二門_一者非_二獨道綽_一曇鸞天台迦才慈恩等諸師皆有_二此意_一
- ① 曇鸞『往生論註』にみる龍樹『十住毘婆沙論』の二道論

・謹案龍樹菩薩十住毗婆沙云菩薩求_二阿毗跋致_一有_二二種道_一一者難行道二者易行道



● 易行道者謂但以信佛因緣願生淨土乘佛願力便得往生彼清淨土

易行道

譬如水路乘船則樂

・難行道者則是聖道門也、易行道者則是淨土門也

・難行易行聖道淨土其言雖異其意是同天台迦才同之應知

⑩ 慈恩『西方要決』の三乘（聖道門）・淨土（淨土門）二門論

＊慈恩『西方要決』

・仰惟釋迦啓運弘益有緣教闡隨方竝霑法潤親逢聖化道悟三乘福薄因疎勤歸淨土

＊さらに『西方要決』の後序

・夫以生居像季去聖斯遙道預三乘無方契悟

・三乘者即是聖道門意也、淨土者即是淨土門意也

・三乘淨土聖道淨土其名雖異其意亦同淨土宗學者先須知此旨

＊賢哲の例

・設雖先學聖道門人若於淨土門有其志者須棄聖道歸於淨土

・例如下彼曇鸞法師捨四論講說一向歸淨土

・道綽禪師閣涅槃廣業偏弘西方行

⑪ 淨土宗師資相承の血脈

＊聖道家諸宗各有師資相承：天台宗、眞言宗、自餘の諸宗、又各有相承血脈あり。

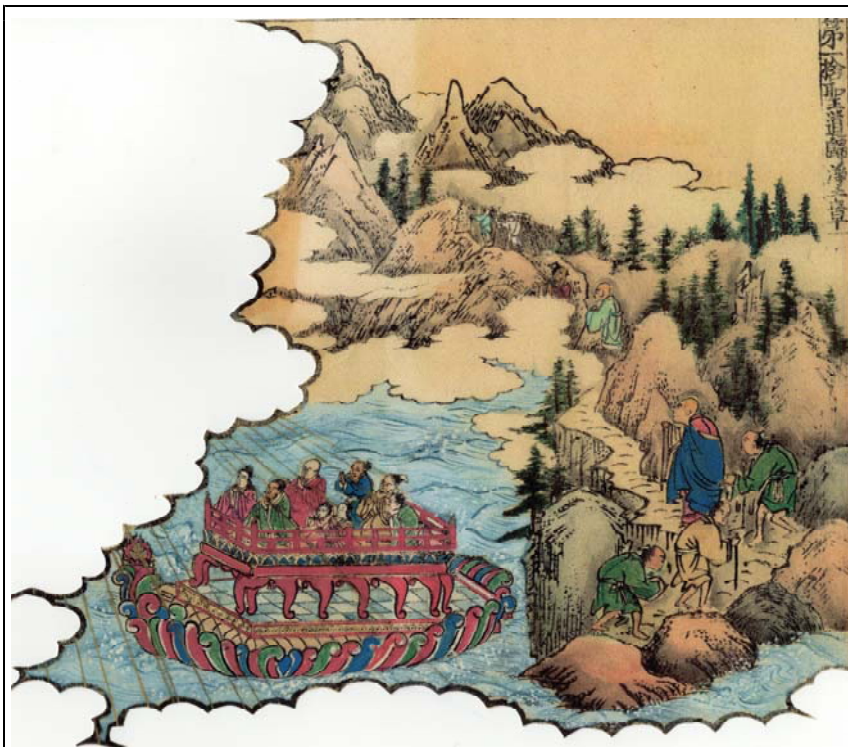
● 淨土宗亦有血脈：道綽善導流から両説。

・『唐宋両伝』の五祖、菩提流支三藏、曇鸞法師、道綽禪師、善導禪師、懷感法師、少康法師。

(二) 高田敬輔が描く絵相の着眼点

右の第一章の教義の論理展開の中で、高田敬輔が特に着目したのが、曇鸞が『往生論註』に引いた龍樹の『十住毘婆沙論』の二道論の「譬如「陸路歩行則苦」「譬如「水路乗船則樂」」である。それを象徴的に対照しながら描いたのが左図である。

高田敬輔「選択集十六章之図」(第一 捨聖道歸淨土章)の絵相



* 標章

第一 捨聖道歸淨土章

* 捨聖道の絵相

・ 険阻な山道を登る二人の出家者、六人の在家者の計八人。

* 歸淨土の絵相

・ 水路を渡る唐様の「寶船」に、合掌する出家者一人、在家者五人、子供二人の計八人。

【登山者、乗船者がともに八人であることは、九品往生の考え方からすれば、九人目はこの《図》を見る者本人に委ねているとする考え方もできる。】

* 「寶船」の八人の乗船者に、第七章の阿弥陀仏から摂取不捨の光明が降り注いでいる。

難行道は、険阻な山道を登る衆生。易行道は、寶船で水路を渡る衆生が描かれる。

難行道聖道門は、自力によつて悟りを求める修行であるが、この五濁惡世、無佛の時に、阿毗跋致を求めることは至難の業である。そればかりでなく修行を困難にさせる理由が五つ程あり、譬えれば陸路を苦しみながら登つて行くようなものである。

それに比べて、易行道淨土門は、ひたすら仏の誓願を信じ、それを心の支えに往生淨土を願えば、仏が成就した第十八願の願力に導かれて清淨な極樂淨土へ往生できるのである。それを譬えれば、水路を船に乗って楽しみながら渡るようなものである。

この第一章の絵相に関連して、注目したいのが、『選択本願念仏集』に龍樹の『十住毘婆沙論』を引いて述べた、最後の一行の文言である。

難行易行聖道淨土其言雖異其意是同天台迦才同之應知

（難行易行と、聖道淨土と、其の言は異なると雖も、その意是れ同じ。天台迦才之に同じ。応に知るべし。）と「天台、迦才」の意は同じであるとしながら、引文は記載されていない。

この部分について、石井教道氏は『選擇集全講』^(注16)で、

かく曇鸞の上に同一分類批判があるばかりではなく、天台智者大師は十疑論の中に正しく曇鸞の二道判そのまゝを援引して淨土への歸命を勧められ、迦才もまた淨土論の中に（中略）二道を援引されているなどに依れば、何れも同一立場であつたことが判明するのである。

また、小澤勇貫氏も『選擇集講述』^(注17)で、

以上が論註に説かれる難行易行の二道説である。（中略）論註のこの説は天台の『十疑論』・迦才の『淨土論』にも引用されてあつて、同一の考えであることが知られる。

と石井、小澤両氏も天台『淨土十疑論』と迦才『淨土論』は同じ考えであるということを述べている。

ここで改めて、最も基本となる龍樹の『十住毘婆沙論』には、どのように記されているか、そして、それを曇鸞の『往生論註』、次に天台智顗の『浄土十疑論』、さらに迦才『浄土論』にどのように引用されているのか、四師の論述を対比してみる。(以下、傍線・読み下し、筆者。)

* 龍樹『十住毘婆沙論』卷第五易行品第九^(注11)には、

佛法有_二無量門_一如_二世間道有_一難有_一易_二陸道步行則苦水道乘船則樂_一菩薩道亦如_一是或有_二勤行精進_一或有_下以_二信方便_一易行疾至_二阿惟越致_一者_上

(佛法に無量の門有り。世間の道に難有り、易有り。陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しが如し。菩薩の道も亦、是の如し。或は勤行精進する有り、或は信方便を以つて、易行にして疾く阿惟越致に至る者有り。)

* 曇鸞『往生論註』卷上引用部分^(注9)は、

謹案龍樹菩薩十住毘婆沙云(中略)

譬如_二陸路步行則苦_一易行道者謂但以_二信佛因緣_一願_二生_一淨土_一乘_二佛願力_一便得_二住_一生彼清淨土_一佛力住持即入_二大乘正定之聚_一正定即是阿鞞跋致譬如_二水路乘船則樂_一

(譬えば陸路の歩行は則ち苦しが如し、(中略)譬えば水路の乗船は則ち樂しが如し。)

* 天台智顗『浄土十疑論』引用部分^(注10)は、

是故十住婆沙論云於_二此世界_一修_二道有_一二種_一一者難行道二者易行道難行者在_二於五濁惡世_一於_二無量佛時_一求_二阿鞞跋致_一甚難_一可_レ得此難無數塵沙說不_レ可_レ盡略陳有_二五_一一者外道相善亂_二菩薩法_一二者無賴惡人破_二他勝德_一三者顛倒善果能壞_二梵行_一四者聲聞自利障_二於大慈_一五者唯有_二自力_一無_二他力持_一譬如_下跛人步行一日不_レ過數里_一極大辛苦_上謂_二自力_一也易行道者謂_二信_一佛語_一教_二念佛三昧_一願_二生_一淨土_一乘_二彌陀佛願力_一攝時決定往生不_レ疑也如_下人水路行籍_二船力_一故須臾即至_中千里_上謂_二他力_一也

(浄土宗全書第六卷五七三頁)

（譬えば跛人の歩行は、一日、數里に過ぎず、極めて大辛苦の如し、自力と謂うなり。〈中略〉
人が水路を行く船力を籍る故に、須臾にして即ち千里に至る如し、他力と謂うなり。）

＊迦才『淨土論』引用部分^(注12)は、

故智度論云行者求_二阿毗跋致_一有_二二種道_一一者難行道二者易行道如_二水陸兩路_一此方修_レ道則難猶如_二陸路_一
生_二淨土_一修_レ道則易猶如_二水路_一也

（水陸兩路の如し。此方の道を修すは則ち難し、なお陸路の如し。淨土に生ず道を修すは則ち易く、なお水路のごとくなり。）

のように、難行道と易行道の二道について引用している。ところが、ここで特に注目しなければならないのは、曇鸞、天台智顗は龍樹の『十住毘婆沙論』を引用しているが、迦才は同じ龍樹のものであるが『大智度論』をふまえての引用である。

ちなみにそれについて、桑門秀我氏は『選擇集大意』^(注18)で、

「若し自ら定慧の分無しとしらは須らく淨土の行を修して淨土の中に於て無上菩提を求むべし、故に智度論に不退を求むるに難易二道を明かし水陸兩路に譬へたり。（智度論恐くは十住論なるべし俱に龍樹の所造なるを以て誤るのみ）」

と『智度論』とあるのは恐らく『十住毘婆沙論』で、ともに龍樹の所造なので間違いであろうとしている。

しかし、『大智度論』^(注13)を詳細に検討すると、左に掲げるように、

菩薩未_レ得_二無生法忍_一深著_二世間法_一諸煩惱厚雖_レ有_二福德_一善心軟薄不_レ進故爲_二煩惱_一所_レ遮得_二無生忍法_一無_二復是事_一未_レ得_二無生忍法_一用力艱難譬如_二陸行_一得_二無生法忍_一已用_レ力甚易譬如_二乘_レ船是故無生法忍諸菩薩所_レ貴以_二是貴_一故須菩提問_二世尊_一得_二無生法_一故受_レ歸佛言不也。

（未だ無生忍法を得ざれば、力を用うること艱難なり、譬えば陸を行くが如し。無生法忍を得已れば、力

を用うることに甚だ易きなり、譬えば船に乗る如し。）

となっており、明らかに『大智度論』を典拠としていることを知ることができるのである。

つまり、龍樹の『十住毘婆沙論』から曇鸞が『往生論註』に、天台智顗が『浄土十疑論』に引用し、『大智度論』から迦才が『浄土論』へ引用し、具体的な譬喩の内容が四師四様に用いられ、同一の難行道陸路、易行道水路の二道論が述べられているものの、表現には異なりがみられることを知ることができるのである。

また、もう一点、高田敬輔が師と仰ぐ良照義山が難易二道をどのように捉えていたかみることにする。

義山は、法然の『黒谷上人語燈録』巻第一 十七丁の『往生大要鈔』の、

又聖道浄土ヲハ難行道易行道ト名付タリ。喩ヲ取テ是ヲ云ニハ、難行道トハ、サカシキ道ヲカチヨリユカンカ如シ。易行道トハ海路ヲ船ヨリ往カ如シト云ヘリ。然ニ目シ井足ナヘタラン者ハ陸路ニハ向フヘカラス、只船ニ乗リテノミ向ノ岸ニツクヘキ也。

と記されている部分について、『和語燈録日講私記』第一卷^(注19)で、

難行道とは十住毘婆沙論云謂く五濁之世於^ニ無佛時^ニ求^ニ阿毘跋致^ニ爲^レ難此難乃有^ニ多途^ニ乃至五者唯是自力無^ニ他力持^ニ譬如^ニ陸路歩行則苦^ニと云ヘリ或は木曾^(マヅ)海^ノ道などの嶮しき道を馬駕籠にも不^レ乗岩につたひなとして行くは苦しきと也

易行道とは同論云謂く但以^ニ信佛因縁^ニ願^レ生^ニ浄土^ニ乘^ニ佛願力^ニ便得^レ往^ニ生彼清浄土^ニ佛力住持即入^ニ大乘正定之聚^ニ譬如^ニ水路乗船則楽^トと云ヘリ或は大坂へ下るに天氣の好き日伏見より船に乗るか如し陸路十三里行くとは大なる違ひ也

目しゐ足なへとは智慧の眼もつふれ行法の足もなへたる也たゞふねにのりてのみとはのみは船に乗って計り也このころとは末法の今時也

（難行道とは十住毘婆沙論に云謂く。五濁の世、無佛の時に於いて、阿毘跋致を求むるを難と為す。

此の難に乃ち多途有り。乃至五は唯是れ自力にして他力の持無し。譬えば陸路の歩行は則ち苦が如しと云えり。或は木曾海^(マヅ)道などの險しき道を馬駕籠にも乗らずして、岩につたいなどして行くは苦しきとなり。易行道とは同論に云う。謂く但だ信佛の因縁を以って淨土に生ぜんと願ずれば、佛願力に乗じて便ち彼の清淨の土に往生することを得。佛力住持して即ち大乘正定の聚に入る。譬えば水路の乗船は則ち樂しきが如しと云へり。或は大坂へ下るに天氣の好き日、伏見より船に乗るが如し。陸路十三里行くとは大なる違いなり。目しい、足なえとは、智恵の眼もつぶれ、行法の足もなえたるなり。ただふねにのりてのみとは、のみは船に乗ってばかりなり。このころとは、末法の今時なり。

と記し、難行易行二道について、「木曾街道」「險しき道を馬駕籠にも乗らず」「大坂へ」「天氣の好き日」「伏見より」等と具体例をあげて説示している。ここでは、難しい淨土教理を衆生の身近な親しみのある事柄を引いて解くという義山の姿勢の一端を知ることができるのである。このような義山から教授を受け、親交があったとする高田敬輔も何らかの良い影響を受けていたものと思われる。

(三) 《淨土の乗船》にみる「當麻曼荼羅」との関連性

また、高田敬輔の第一章の易行道の絵相に描かれる「寶船」についてである。

この「寶船」が、良照義山の『當麻曼陀羅述獎記卷三』(元禄十六年(一七〇三))「三池中寶船」の絵相と類似点が多いことから、参考までに見ることにする。

『當麻曼陀羅述獎記卷三』二十七丁一行目、

左右寶船俱以^二華葉^一爲船舳艫有^二寶珠^一右船向^レ左船中有^二飛雲^一上有^二三尊^一俱坐^二蓮華^一向^レ左但觀勢座隱^二欄杆^一不^レ見(以下略)

左船向^レ右船中有^二一華樓一飛雲^一右華樓低而大柱脚屈曲如^レ雲左飛雲高而小下張^二流蘇^一右華樓上有^二三尊^一俱坐^二

蓮華「向」右但觀勢座隱「欄杆」不見（以下略）

吳都賦注銑曰飛雲船上樓名甚高者善曰江表傳曰孫權乘「飛雲大船」賦曰暈「華樓」而島峙銑曰船上華樓重暈如「島之峻峙」劉曰流蕪謂「剪」繪彩「垂」於彫文之樓「向曰流蕪五色羽飾」帷而垂「之問淨土亦有」船乎答報恩經說「喜王如來淨土」云有「流泉浴池」有「七寶船」衆生遊戲他界既有之樂邦何無乎故般舟讚云「害樹飛」華汎「德水童子捉取已為」船又如「綽禪師」親見「西方寶船」（以下略）

とあるように、左右の「寶船」については、

・華葉ででき、舳と艫に《寶珠》があること。船中の《華樓》は低くして大きく、《柱脚》は屈曲して雲の如く、《飛雲》は高くして小さく、下に《流蘇（絹糸を束ねた飾り房）》を張っていること。

・船上の樓を《飛雲》と呼び甚だ高いこと。三国時代の呉の初代皇帝孫権も《飛雲の大船》に乗ったこと。

・《華樓》は島のように峙ち畳み重なるようであり、彩り良く繪や彫文が剪まれ、五色の羽で飾られた樓であること。

・《寶船》は、流泉浴池にある七寶船で、衆生が遊戲していること。

・『般舟讚』には、寶樹から飛んだ華が徳水に汎れ、童子がそれを捉えて船にしていると記されていること。

・道綽禪師は、親しく西方の寶船を見たということ。

等が記されている。

そして、その「寶船」に乗る八人の衆生には、第七章に描く阿弥陀仏から、攝取不捨の光明が降り注ぐ絵相として描かれているのである。

この「寶船」について【参考資料】《本論文二〇二頁》を参照すれば類似しているが解ることから、良照義山から『當麻曼陀羅述獎記』についての教授を受けたか、もしくは、淨土三曼荼羅の中心的存在である「當麻曼陀羅」について講説を受ける機会があった可能性を推測することができるのである。

六 まとめ

以上、第一章の絵相が生まれた背景を、元祖法然上人の教理の論理展開をもとに考察した結果、次のようなことを知ることができる。

① 高田敬輔は、曇鸞引用の龍樹の二道論をふまえ、難行道は聖道門、易行道は浄土門、それを象徴する標章を「第一捨聖道歸浄土章」とし、捨聖道の絵相は、険阻な山道を登る二人の出家者と六人の在家者、歸浄土の絵相は、水路を渡る唐様の寶船に、合掌する出家者一人、在家者五人、子供二人の八人を描いていること。

② 第一章の絵相には、浄土宗の教相判釈が反映され、難行・易行二道の譬えを、龍樹、曇鸞、天台智顗、迦才、法然上人、義山の六師それぞれが、龍樹の原典『十住毘婆沙論』『大智度論』をもとに、二門・二道論の具体的な譬喩を展開していること。

③ 高田敬輔と特に親交があった良照義山の難行・易行二道の注釈が、「木曾街道」「馬駕籠に乗らず」「岩につたい」「天氣の良い日」「大坂へ」「伏見より」「陸路十三里」等と京都周辺の、より身近な具体的事例を挙げ、迷える凡夫に二門・二道の教えを説こうとする意図を知ることができることに、そのような義山の影響を多分に受けていた可能性が高いこと。

④ 高田敬輔が第一章で描いている「水路の乗船」は、唐様の「寶船」を呈しているが、この「寶船」が、良照義山の『當麻曼陀羅述獎記卷三』『流泉浴池の七寶船』の絵相や「當麻曼陀羅」と類似していることから、間接的な影響を受け、易行道の「水路の乗船」として、描かれたと推測されること。

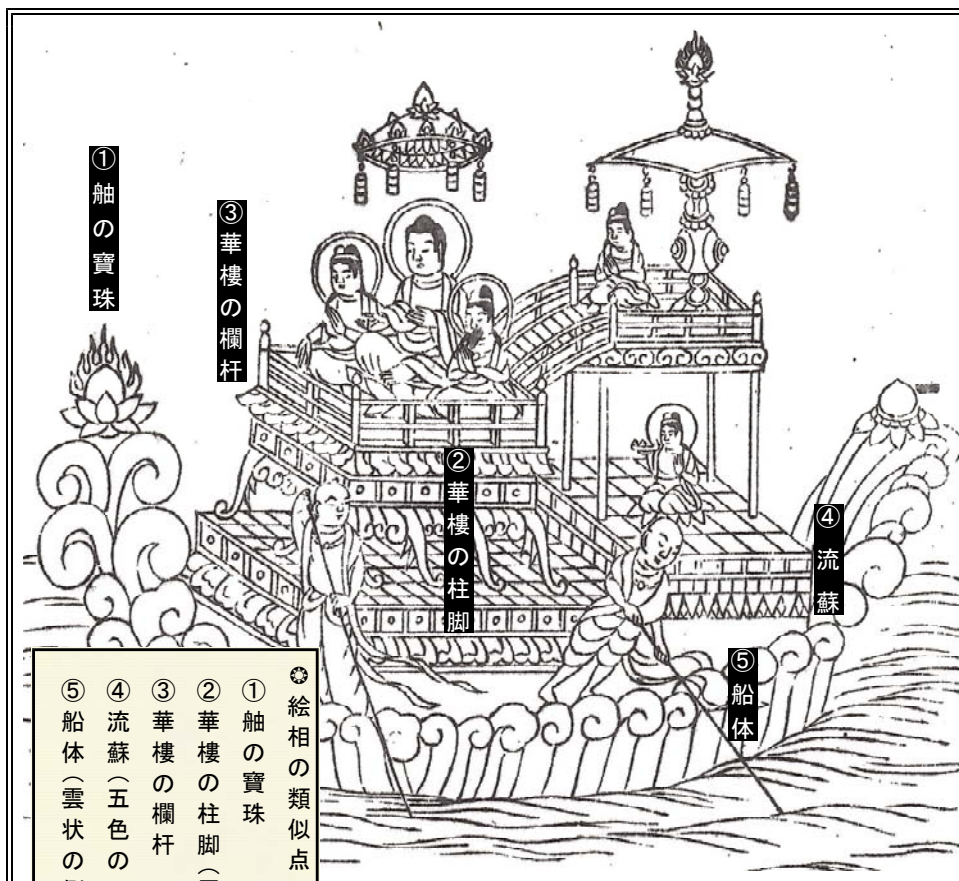
【初出『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四十三号十七～三十四頁掲載二〇一五年三月一日発行一部改稿】

- (注1) 良照義山 重鐫『選擇本願念佛集』元禄九年義山開版本 嘉永二年再刻 芝峯 昇安室藏版 西山堂總兵衛
- (注2) 道綽『安樂集』卷上（浄土宗全書第一卷六七三頁）
- (注3) 『大集月藏經』《『方等大集經』卷第五十五 月藏分第十二分布閻浮提品第十七（大正新脩大藏經第十三卷三六二頁）》
- (注4) 石井教道『選擇集全講』二十八頁 平樂寺書店 昭和五十四年刊
- (注5) 道綽『安樂集』の二門判（浄土宗全書第一卷六九〇頁）
- (注6) 元曉『遊心安樂道』（浄土宗全書第六卷六二五頁）
- (注7) 慈恩『西方要決』（浄土宗全書第六卷六〇五頁）
- (注8) 迦才『浄土論』（浄土宗全書第六卷六二七頁）
- (注9) 曇鸞『無量壽經優婆提舍願生偈婆藪槃頭菩薩造竝註』（『往生論註』）卷上（浄土宗全書第一卷二一九頁）
- (注10) 智顗『浄土十疑論』（浄土宗全書第六卷五七三頁）
- (注11) 龍樹『十住毘婆沙論』卷第五易行品第九（大正新脩大藏經第二十六卷四一頁b02）
- (注12) 迦才『浄土論』卷下（浄土宗全書第六卷六六四頁）
- (注13) 龍樹『大智度論』釋夢中不證品第六十一之餘 卷第七十七（大正新脩大藏經第二十五卷六〇二頁a20）
- (注14) 〈『昭和 new 纂國譯大藏經』論律部第七卷大智度論第五 二二三八頁〉
- (注15) 『類聚浄土五祖傳』（石井教道『昭和新修法然上人全集』八四三頁 平樂寺書店 一九五五年）
- (注16) 『浄土五祖傳』（前掲書 石井教道『昭和新修法然上人全集』八五七頁）
- (注17) 前掲書、石井教道『選擇集全講』七二頁
- (注18) 小澤勇幹『選擇集講述』二七頁 浄土宗 昭和四六年
- (注19) 桑門秀我『選擇集大意・出雲宗要』三六、三七頁 国書刊行会 昭和五九年
- 『和語燈録日講私記』第一卷《享保三年（一七一九）義山述 見阿素中誌》（浄土全書第九卷七一六、七一七頁）

【参考資料】

●良照義山『當麻曼陀羅述獎記卷三』二十六丁「池中寶船」の絵相と高田敬輔「選擇集十六章之図」第一章「水路の乗船」の絵相の対比

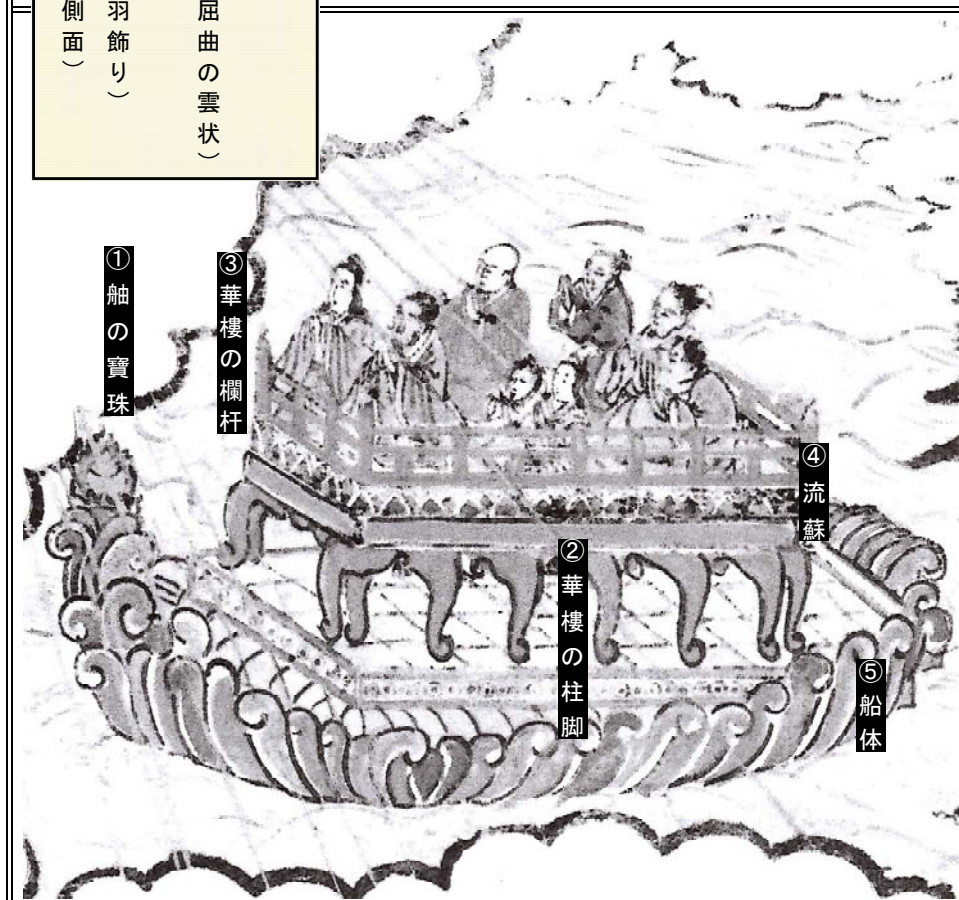
良照義山『當麻曼陀羅述獎記卷三』二十六丁「池中寶船」の絵相



●絵相の類似点

- ① 舳の寶珠
- ② 華樓の柱脚(屈曲の雲状)
- ③ 華樓の欄杆
- ④ 流蘇(五色の羽飾り)
- ⑤ 船体(雲状の側面)

高田敬輔「選擇集十六章之図」第一章「水路の乗船」の絵相



第二項 「第二 捨雜行歸正行章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第二 捨雜行歸正行章

二 『選択本願念仏集』の篇目

善導和尚立「正雜二行」而捨「雜行」歸「正行」之文

（善導和尚、正雜二行を立てて、雜行を捨てて正行に歸するの文）

＊ 先の第一章では、二種勝法の聖道門・淨土門から難行道の聖道門を捨て、ただ淨土の一門のみありて通入すべき路なり、として淨土門を選択した。

そして、第一章の絵相は、捨聖道は險阻な山道を登る出家者二人、在家者六人を描き、歸淨土は水路を渡る唐様の寶船に乗る出家者一人、在家者七人が描かれ、八人の乗船者には、第七章の阿弥陀仏から攝取不捨の光明が注がれる場面が描かれている。

今章では、その淨土門でいかなる実践行を修するのか、善導の『觀經疏』及び『往生礼讃』の文を引いて、正行雜行の中から正行を選び取ることが説かれる。

三 『選択本願念仏集』の引文①（『觀經正宗分散善義』）

冒頭から「觀經疏第四に云わく」という文言で始まり、善導の『觀經正宗分散善義』卷第四（注1）にみる正行・雜行二行論が説かれていく。

觀經疏第四云就「行立」信者然行有「二種」一者正行二者雜行言「正行」者專依「往生經」行「行者是名」正行「何者

是也一心專讀誦此觀經・彌陀經・無量壽經等一心專注思想觀察臆念彼國二報莊嚴若禮即一心專禮被佛若口稱即一心專稱被佛若讚歎供養即一心專讚歎供養是名爲正又就此正中復有二種一者一心專念彌陀名號一行住坐臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業順被佛願故若依禮誦等即名爲助業除此正助二行已外自餘諸善悉名雜行若修前正助二行心常親近臆念不斷名爲無間也若行後雜行即心常間斷雖可廻向得生衆名疎雜之行也

（觀經の疏の第四に云わく。行に就いて信を立つとは、然るに行に二種有り。一には正行。二には雜行なり。正行と言うは、専ら往生經に依りて行を行ずる者、是を正行と名づく。何にものかはなる。

一心に専らこの觀經、彌陀經、無量壽經等を讀誦し、一心に彼の國の二報莊嚴を專注して、思想し、觀察し、臆念し、もし禮するには、即ち一心に専ら彼の佛を禮し、もし口に稱するには、即ち一心に専ら彼の佛を稱し、若し讚歎供養するには、即ち一心に専ら讚歎供養す。是を名づけて正となす。

またこの正の中に就いて、また二種有り。一には、一心に専ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥に、時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。彼の佛の願に順ずるが故に。もし禮誦等に依るをば、即ち名づけて助業とす。

この正助二行を除いて已外、自餘の諸善を、悉く雜行と名づく。もし前の正助二行を修すれば、心、常に親近して、臆念斷えざれば、名づけて無間とす。もし後の雜行を行ずれば、即ち心、常に間斷す。廻向して生ずることを得べしと雖も、衆て疎雜の行と名づく。）

* 善導の觀經疏（觀經正宗分散善義卷第四）に説かれる三心（第八章に説かれる至誠心・深心・回向發願心）の第二の深心の就行立信で説かれる二行論である。

- ・ 就人立信（人に就いて信を立つ）…《第八章で詳述。》
- ・ 就行立信（行に就いて信を立つ）…行に二種有り。一には正行、二には雜行。

この就行立信というのは、数多い仏教の修行の中でも、どのようなことを修行すれば極樂浄土に往生できるかを明らかにすることで、行に就いて信を立てるというのである。

この修行には、正行と雑行の二種類がある。

正行は、往生經（『無量寿經』『觀無量寿經』『阿弥陀經』）に説かれているような極樂浄土に往生することが出来る修行である。それには五種ある。

一つは、一心に専ら、『無量寿經』『觀無量寿經』『阿弥陀經』を誦する【誦正行】である。

二つには、一心に極樂浄土の二報（正報：仏身、依報：仏国土）の莊嚴を専注、思想、觀察、臆念する【觀察正行】である。

三つには、一心に専ら阿弥陀仏を礼拝する【礼拝正行】である。

四つには、一心に専ら阿弥陀仏の名を称える【称名正行】である。

五つには、一心に専ら阿弥陀仏を讃歎供養する【讃歎供養正行】である。

この五種正行は、さらに極樂浄土往生ができる正定業とそれを助ける助業に分けられる。

正定業は、一心に専ら南無阿弥陀仏と称え、行住坐臥のいずれの時も、時間の長短にかかわらずに常に念仏を相続すれば、必ず極樂浄土に往生することができるのである。なぜなら、阿弥陀仏は第十八願で念仏往生の願を成就されているからである。

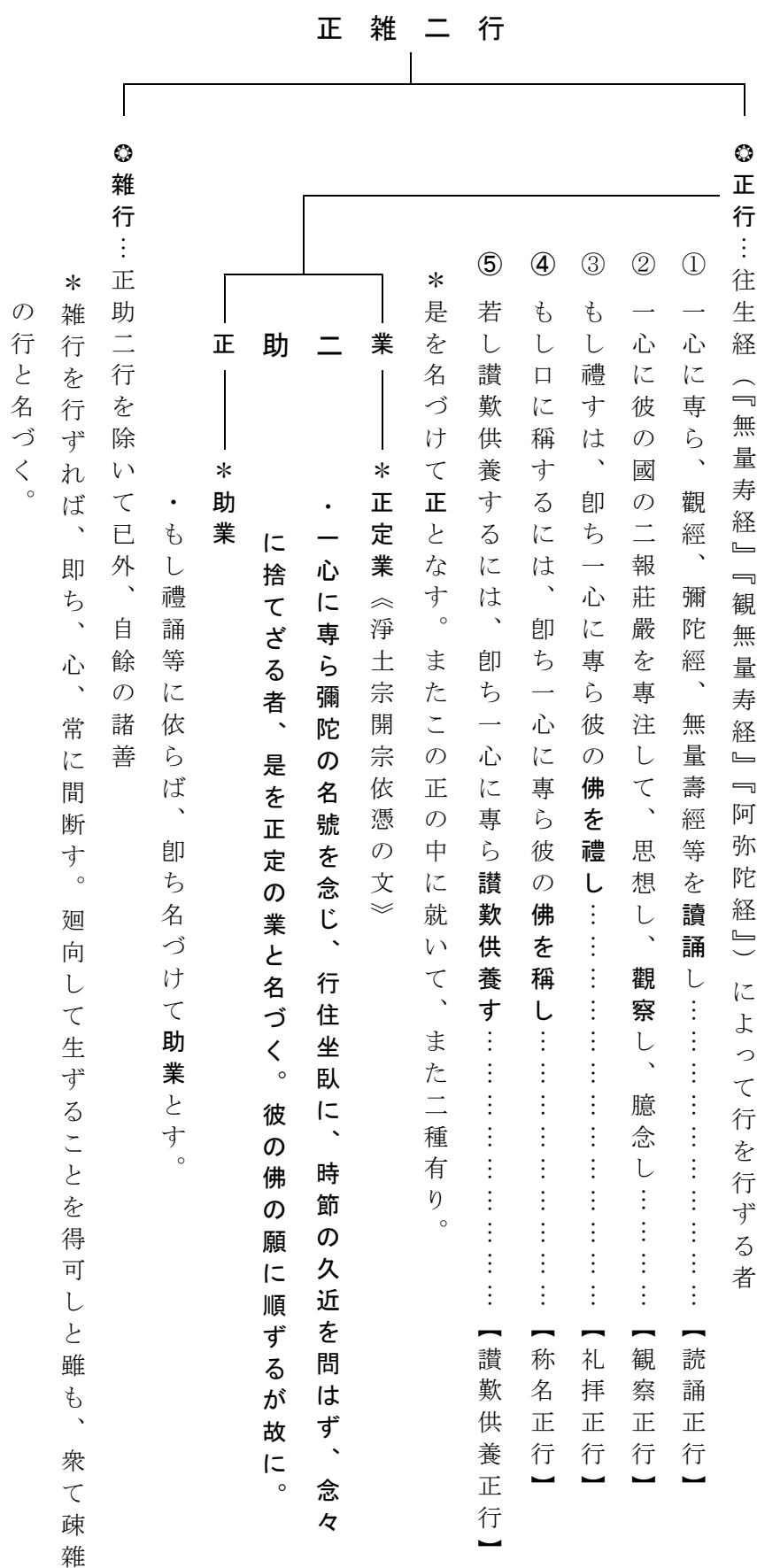
そして、称名正行以外の四種の正行を、称名正行を助け励ます助業というのである。

この正助二行を修める者の心は、常に阿弥陀仏と親近の關係にあり、阿弥陀仏を憶念することが絶えないので、阿弥陀仏とのつながりが間断しない無間の關係にある。

また、この五種正行以外の修行は、すべて雑行であるので、浄土往生はかなわず、その心は間断しているので、もし雑行によって往生できたとしても阿弥陀仏とのつながりは疎遠になることから、疎雑の行と

いうことになる。

この正雑二行について、簡略的に図示すると次のようになる。



四 『選択本願念仏集』の私釈①

ここで法然は、前段に掲げた善導の『観經疏』に説く二行論を詳細に検討し、初めに往生の行相と、次に二行の得失について私見を述べることになる。

私云就此文有二意 一明往生行相 二判二行得失

（私に云わく、この文に就いて二意有り。一には往生の行相を明し、二には二行の得失を判ず。）

* 正雜二行が説かれる『観經疏』の文言について、再度、検討が加えられるが、一には往生の行相を明きらかにし、二には二行の得失を説くことになる。

(一) 往生の行相について

初明「往生行相」者依「善導和尚意」往生行雖「多大分爲」二一正行二雜行初正行者付「之有」開合二義「初開爲」五種「後合爲」二種「初開爲」五種「者一讀誦正行二觀察正行三禮拜正行四稱名正行五讚歎供養正行也第一讀誦正行者專讀「誦觀經等」也即文云一心專讀「誦此觀經・彌陀經・無量壽經等」是也第二觀察正行者專觀「察彼國依正二報」也即文云「一心專注思」想觀察臆念彼國二報莊嚴「是也第三禮拜正行者專禮「彌陀」也即文云「若禮即一心專禮」被佛「是也第四稱名正行者專稱「彌陀名號」也即文云「若口稱即一心專稱」被佛「是也第五讚歎供養正行者專讚「歎供養彌陀」也即文云「若讚歎供養即一心專讚歎供養是名爲」正是也若開「讚歎與「供養」而爲「二者可」名「六種正行」也今依「合義」故云「五種」

（初めに往生の行相を明すとは、善導和尚の意に依るに、往生の行多しと雖も、大いに分ちて二とす。

一には正行。二には雜行なり。初めに正行とは、これに就いて開合の二義有り。初めには開して五種とし、後には合して二種とす。

初めに開して五種とすとは、一には讀誦正行、二には觀察正行、三には禮拜正行、四には稱名正行、五には讚歎供養正行なり。

第一に讀誦正行とは、専ら觀經等を讀誦す。即ち文に、一心に専らこの觀經・彌陀經・無量壽經等を讀誦すと云えるこれなり。

第二に觀察正行とは、専ら彼の國の依正二報を觀察す。即ち文に、一心に專注して彼の國の二報莊嚴を思想、觀察、臆念すと云えるこれなり。

第三に禮拜正行とは、専ら彌陀を禮す。即ち文にもし禮するには、即ち一心に専ら彼の佛を禮すと云えるこれなり。

第四に稱名正行とは、専ら彌陀の名號を稱す。即ち文に、もし口に稱するには、即ち一心に専ら彼の佛を稱すと云えるこれなり。

第五に讚歎供養正行とは、専ら彌陀を讚歎供養す。即ち文に、もし讚歎供養するには、即ち一心に専ら讚歎供養す、これを名づけて正とすと云えるこれなり。もし讚歎と供養とを開して、二となせば、六種正行と名づくべし。今、合の義に依る故に、五種と云う。）

＊ 往生の行相というのは、善導和尚によれば、往生行は数多くあるけれども、大きく分けて二つあり、一つは正行であり、もう一つが雜行ということである。

初めに正行についてであるが、これについては開合の二義があり、開すれば五種になり、合すれば二種になる。

初めに開して、五種正行というのは、

- ・ 第一に讀誦正行とは、一心に専らこの觀經・彌陀經・無量壽經等を讀誦すること。
- ・ 第二に觀察正行とは、一心に專注して彼の國の二報莊嚴を、思想、觀察、臆念すること。
- ・ 第三に禮拜正行とは、一心に専ら彼の佛を禮すること。
- ・ 第四に稱名正行とは、一心に専ら彼の佛を稱すること。

・第五には讃歎供養正行とは、一心に専ら讃歎供養すること。もし讃歎と供養とを開して、二とすれば、六種正行と名づけられるが、今は合の義であるので、五種ということである。

(二) 正定業・助業と雑行について

次合爲二種一者一者正業二者助業初正業者以三上五種之中第四稱名爲正定之業即文云_下一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業順彼佛願故_上是也次助業者除第四口稱之外以讀誦等四種而爲助業即文云_下若依禮誦等即名爲助業是也問曰何故五種之中獨以稱名念佛爲正定業乎答曰順彼佛願故意云稱名念佛是彼佛本願行也故修之者乘彼佛願必得往生也其本願義至下可知次雜行者即文云_下除此正助二行已外自餘諸善悉名雜行是也意云雜行無量不遑具述也但今且翻對五種正行以明五種雜行也一讀誦雜行二觀察雜行三禮拜雜行四稱名雜行五讃歎供養雜行也第一讀誦雜行者除上觀經等往生淨土經已外於大小乘顯密諸經受持讀誦悉名讀誦雜行第二觀察雜行者除上極樂依正已外大小顯密事理觀行皆悉名觀察雜行第三禮拜雜行者除上禮拜彌陀已外於一切諸餘佛菩薩等及諸世天等禮拜恭敬悉名禮拜雜行第四稱名雜行者除上稱彌陀名號已外稱自餘一切佛菩薩等及諸世天等名號悉名稱名雜行第五讃歎供養雜行者除上彌陀佛已外於一切諸餘佛菩薩等及諸世天等讃歎供養悉名讃歎供養雜行此外亦有布施持戒等無量之行皆可攝盡雜行之言

(次に合して二種となすとは、一には正業、二には助業なり。

初めに正業とは、上の五種の中の、第四の稱名を以って正定の業とす。即ち文に、一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に、時節の久近を問わず、念念に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。彼の佛の願に順ずるが故にと云えるこれなり。

次に助業とは、第四の口稱を除きての外、讀誦等の四種を以って、助業とす。即ち文に、もし禮誦等に依

るをば、即ち名づけて助業となすと云えるこれなり。

問うて曰わく、何故ぞ五種の中に、獨り稱名念佛を以って、正定業とするや。

答えて曰わく、彼の佛の願に順ずるが故に。意の云わく、稱名念佛は、これ彼の佛の本願の行なり。故に之を修するものは、彼の佛願に乗じて、必ず往生を得。その本願の義は、下に至りて知るべし。

次に雜行とは、即ち文に、この正助二行を除く已外、自餘の諸善を、悉く雜行と名づくと云えるこれなり。意の云わく、雜行無量なれば、具に述ぶるに^{いとま}違^{いとま}あらずとなり。但し、今、且く五種正行に翻對して、以つて五種の雜行を明さん。

一には讀誦雜行、二には觀察雜行、三には禮拜雜行、四には稱名雜行、五には讚歎供養雜行なり。

第一に讀誦雜行とは、上の觀經等の、往生淨土の經を除いて已外、大小乗、顯密の諸經において、受持し、讀誦するを、悉く讀誦雜行と名づく。

第二に觀察雜行とは、上の極樂の依正を除いて已外、大小、顯密、事理の觀行を、皆、悉く觀察雜行と名づく。

第三に禮拜雜行とは、上の彌陀を禮拜するを除いて已外、一切諸餘の佛、菩薩等、及び諸々の世天等に於いて、禮拜恭敬するを、悉く禮拜雜行と名づく。

第四に稱名雜行とは、上の彌陀の名號を稱するを除いて已外、自餘の一切の佛、菩薩等、及び諸々の世天の名號を稱するを、悉く稱名雜行と名づく。

第五に讚歎供養雜行とは、上の彌陀佛を除きて已外、一切の諸餘の佛、菩薩等、及び諸々の世天等に於いて、讚歎供養するを、悉く讚歎供養雜行と名づく。此の外にまた布施持戒等の、無量の行、皆雜行の言に攝盡すべし。）

＊ 次に合して二種あるというのは、一つは正業であり、二つに助業である。

初めに正業というのは、五種正行の中の第四の称名正行のことであり、正定業といい次の文である。

《一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に、時節の久近を問わず、念念に捨てざる者、これを正定の業と名づく。彼の佛の願に順ずるが故にと云えるこれなり。》

次に助業とは、第四の口称を除いた外の正行をいい、次の文である。

《讀誦等の四種を以って、助業とす。即ち文に、もし禮誦等に依るをば、即ち名づけて助業とすと云えるこれなり。》

ここでいう助業は、念仏を助成したり、助発する意味であり、念仏に励むための縁となる働きをすることをいうのである。

一つ聞きたいことがあるが、五種正行の中で、なぜ称名念仏一つだけを取り上げて正定業とするのか教えて欲しい。

それに答えるならば、念仏を称えることが、阿弥陀仏が立てた念仏往生の本願に合致した行であるからである。だからこの念仏を称えるものは、その仏の本願力に乗じて必ず往生することができるのである。その仏の本願については、次の章で述べるので、そこで知って欲しい。

次に雑行についてである。

《正助二行を除く已外、自餘の諸善を、悉く雑行と名づくと云へるこれなり。》

とあるように、正助二行以外の諸行をすべて雑行といい、浄土往生の行は多種多様にあるが、それを詳しく述べている訳にはいかなないので、取りあえず五種正行に相對する五種の雑行について述べることにする。五種の雑行とは、一に讀誦雑行、二に觀察雑行、三に禮拜雑行、四に稱名雑行、五に讚歎供養雑行である。

・第一の讀誦雑行とは、往生浄土を説いた浄土三部經以外の經典を讀誦すること、大乘小乗の經典や

顕教密教等の諸經の經典を誦誦することである。

- ・ 第二の觀察雜行とは、極樂淨土の仏と莊嚴を觀察する以外の觀察で、大乘小乗の觀察や顕教密教の觀察や現象界の觀察や真如の觀察等を行うことである。

- ・ 第三の礼拝雜行とは、阿弥陀仏以外の仏を礼拝すること、他の一切の仏や菩薩や諸天等を礼拝したり恭敬することである。

- ・ 第四の称名正行とは、阿弥陀仏以外の仏の名号を称えることで、他の一切の仏や菩薩や諸天等の名号を称えることである。

- ・ 第五に讃嘆供養雜行とは、阿弥陀仏以外の仏を讃嘆供養すること、他の一切の仏や菩薩や諸天等を讃嘆供養することである。

この他にも布施や持戒などの多くの勝れた行があるが、極樂淨土往生の行としては、皆、雜行という言葉に収められるのであると説かれている。

(三) 正行雜行、二行の得失について

次判「二行得失」者若修「前正助二行」心常親近憶念不斷名爲「無間」也若行「後雜行」即心常間斷雖「可」回向得生衆名「疎雜之行」即其文也案「此文意」就「正雜二行」有「五番相對」一親疎對二近遠對三有間無間對四不回向回向對五純雜對也

第一親疎對者先親者修「正助二行」者於「阿彌陀佛」甚以爲「親昵」故疏上文云衆生起「行」口常稱「佛」佛即聞「之」身常禮「敬」佛即見「之」心常念「佛」佛即知「之」衆生憶「念」佛者佛亦憶「念」衆生彼此三業不「相捨離」故名「親縁」也次疎者雜行也衆生口不「稱」佛佛即不「聞」之身不「禮」佛佛即不「見」之心不「念」佛佛即不「知」之衆生不「憶」念佛者佛不「憶」念衆生彼此三業常捨離故名「疎行」也

第二近遠對者先近者修「正助二行」者於「阿彌陀佛」甚爲「隣近」故疏上文云衆生願「見」佛佛卽應「念現」在目前「故名」近緣也次遠者雜行也衆生不「願」見「佛佛卽不應」念不「現」目前故名「遠也」但親近義是雖「似」一善導之意分而爲「二其旨見」疏文「故今所」引釋也

第三無間有間對者先無間者修「正助二行」者於「阿彌陀佛」憶念不「問斷」故云「名爲」無間是也次有間者修「雜行」者於「阿彌陀佛」憶念常間斷故云「心常間斷」是也

第四不同向回向對者修「正助二行」者縱令不別用「回向」自然成「往生業」故疏上文云今此觀經中十聲稱佛卽有「十願十行」具足云何具足言「南無」者卽是歸命亦是發願回向之義言「阿彌陀佛」者卽是其行以「斯義」故必得「往生」次回向者修「雜行」者必用「回向」之時成「往生之因」若不用「回向」之時不「成」得往生之因故云「雖」可回向得「生是也」

第五純雜對者先純者修「正助二行」者純是極樂之行也次雜者是「非」純極樂之行「通」於人天及三乘「亦通」於十方淨土故云「雜也」然者西方行者須「捨」雜行「修」正行也

（次に二行の得失を判ずとは、若し前の正助二行を修すれば、心、常に親近して、臆念斷えざるを、名づけて無間とす。もし後の雜行を行すれば、即ち、心、常に間斷す。回向して生ずることを得べしと雖も、衆て疎雜の行と名づく。即ちその文なり。この文の意を案ずるに、正雜二行に就いて五番の相對有り。

一には親疎對、二には近遠對、三には有間無間對、四には不回向回向對、五には純雜對なり。

第一に親疎對とは、まず親とは、正助二行を修するものは、阿彌陀佛に於いて甚だ親昵とす。故に疏の上の文に云わく、衆生、行を起して、口、常に佛を稱すれば、佛、即ちこれを聞きたまう。身、常に佛を禮敬すれば、佛、即ちこれを見たまう。心、常に佛を念すれば、佛、即ちこれを知りたまう。衆生、佛を憶念すれば、佛、また衆生を憶念したまう。彼此の三業、あい捨離せず。故に親縁と名づく。

次に疎とは、雜行なり。衆生、口に佛を稱せざれば、佛、即ちこれを聞きたまわず。身、佛を禮せざれば、

佛、即ちこれを見たまわす。心、佛を念ぜざれば、佛、即ちこれを知りたまわす。衆生、佛を憶念せざれば、佛、衆生を憶念したまわす。彼此の三業、常にあい捨離す。故に疎行と名づく。

第二に近遠對とは、まず近こんとは、正助二行を修するものは、阿彌陀佛に於いて甚だ隣近となす。故に疏の上の文に云わく、衆生、佛を見んと願ずれば、佛、即ち念に應じて、目前に現在す。故に近縁こんねんと名づく。次に遠おんとは、雜行也。衆生、佛を見んと願ぜざれば、佛、即ち念に應ぜず。目前に現ぜず。故に遠と名づく。ただし親近の義、是れ一なるに似たりと雖も、善導の意こころ分ちて二とす。その旨、疏の文に見えたり。故に、今、引釋する所なり。

第三に無間有間對とは、まず無間とは、正助二行を修するものは、彌陀佛に於いて、憶念間斷せず。故に名づけて無間とすと云えるこれなり。

次に有間とは、雜行を修するものは、阿彌陀佛に於いて、憶念、常に間斷す。故に、心、常に間斷すと云えるこれなり。

第四に不return回向對とは、正助二行を修するものは、たとい別に回向を用いざれども、自然に往生の業と成る。故に疏の上の文に云わく、今この觀經の中の十聲稱佛は、即ち十願十行有りて具足す。いかんが具足する。南無と言うは、即ちこれ歸命、またこれ發願回向の義。阿彌陀佛と言うは、即ちこれその行なり。この義を以つての故に、必ず往生を得。へ已上

次に回向とは、雜行を修する者は必ず回向を用うるの時、往生の因と成る。もし回向を用いざるの時は、往生の因と成らず。故に回向して生ずることを得べしと雖もと云えるこれなり。

第五に純雜對とは、まず純とは正助二行を修するものは、これ純もつぱら極樂の行なり。

次に雜とは、これ純ら極樂の行に非ず。人天及び三乘に通じ、また十方の淨土に通ず。故に雜と云うなり。然れば西方の行者、須く雜行を捨てて正行を修すべし。）

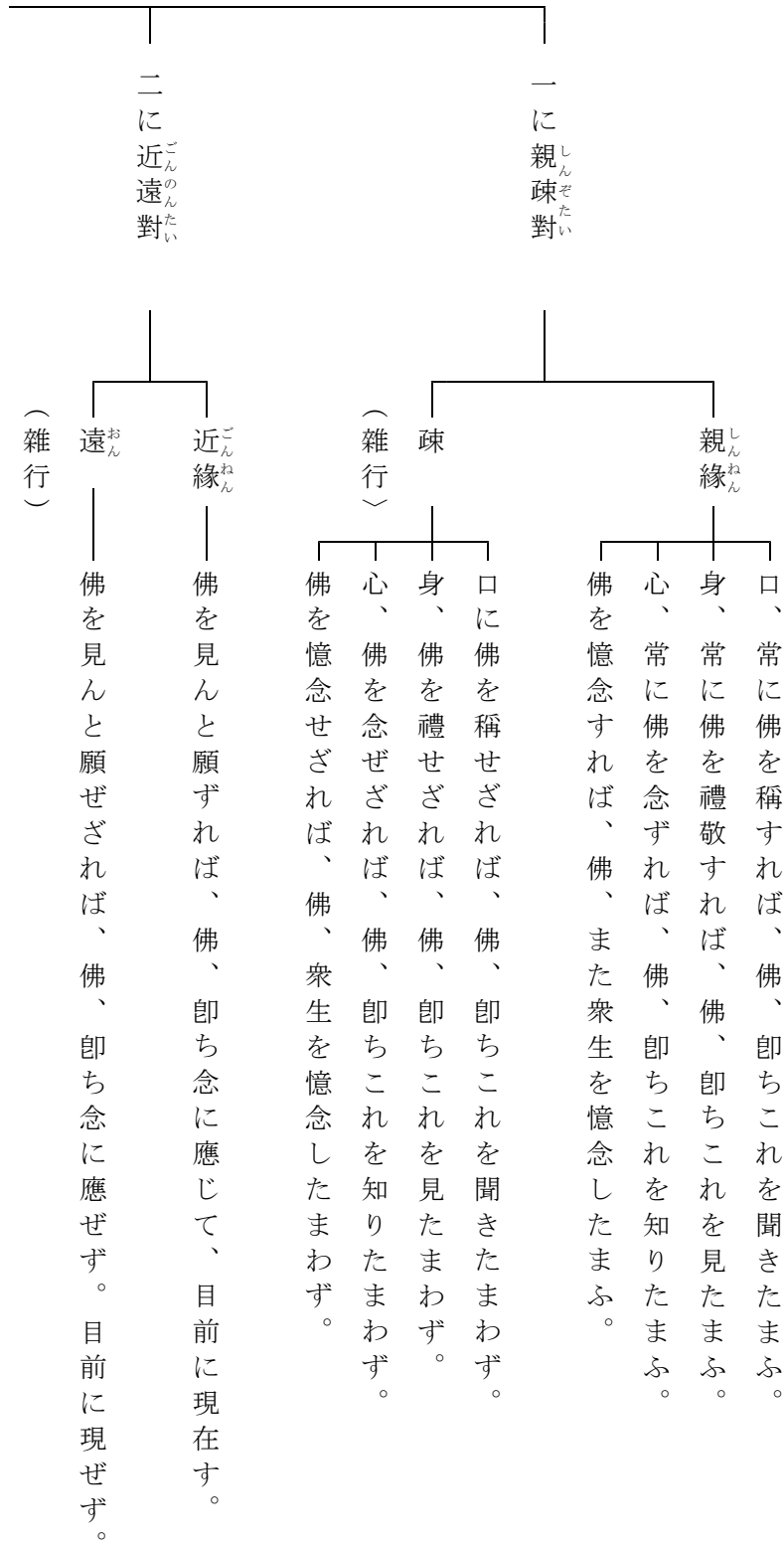
＊

次に二行の得失をみることにする。

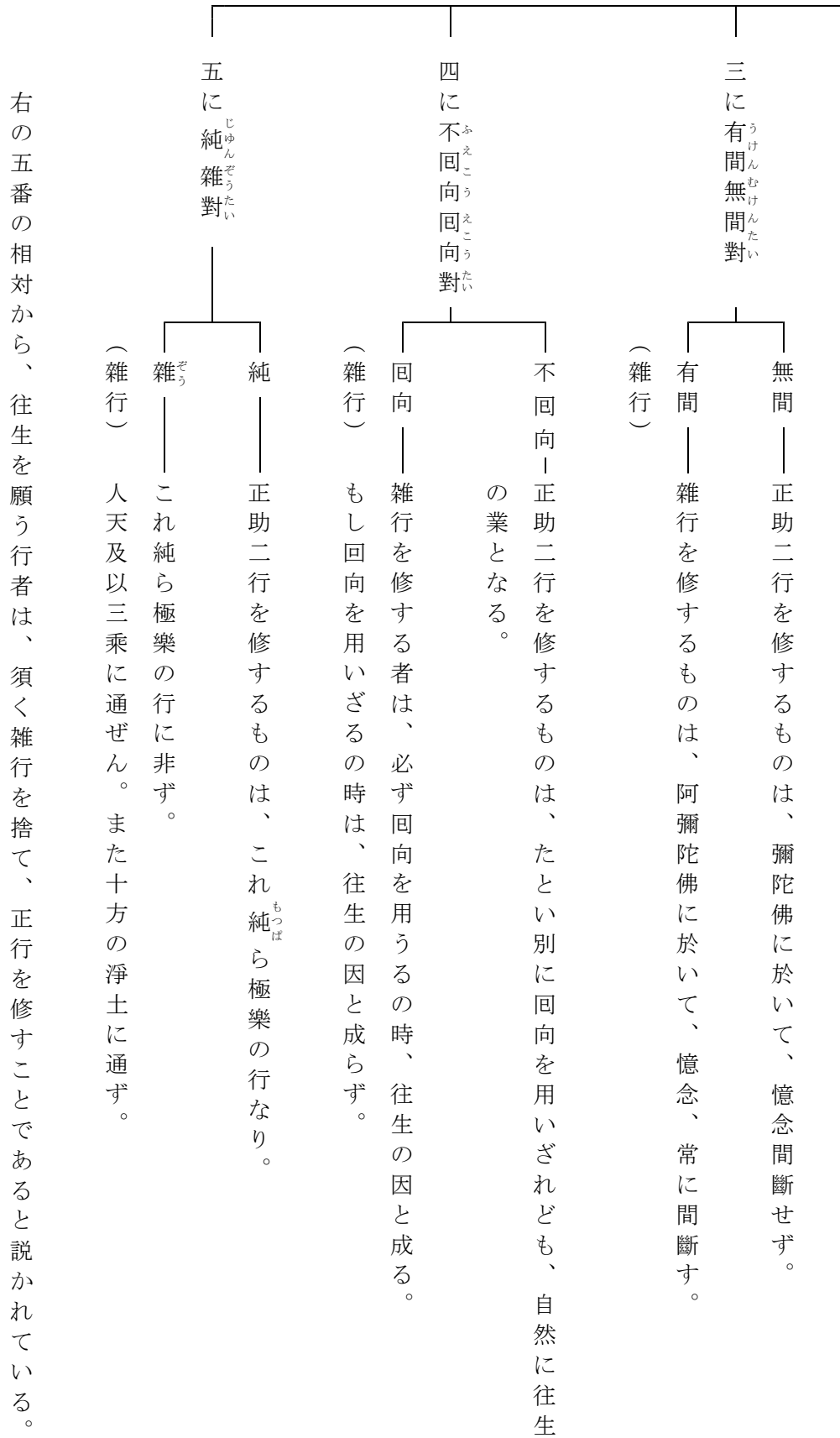
≪もし前の正助二行を修すれば、心、常に親近して、臆念斷えざるを、名づけて無間という。

もし後の雜行を行ずれば、即ち、心、常に間斷す。回向して生ずることを得べしと雖も、衆て疎雜の行と名づく。即ちその文なり。≫

という文にあるように、その意味を考えれば、正雜の二行について、五番の相對する得失がある。これを図示すれば、次のようになる。



五 番 の 相 對



(四) 純雜の義について

問曰此純雜義於經論中有其證據乎答曰於大小乘經律論之中立純雜二門其例非一大乘即於八藏之中而立雜藏當知七藏是純一藏是雜小乘即於四含之中而立雜含當知三含是純一含是雜律即立二十犍度以明戒行其中前十九是純後一是雜犍度也論則立八犍度明諸法性相前七犍度是純後一是雜犍度也賢聖集中唐宋兩傳立十科法明高僧行德其中前九是純後一是雜科也乃至大乘義章有五聚法門前四聚是純後一是雜聚也亦非畜顯教密教之中有純雜法謂山家佛法血脈譜云一胎藏界曼陀羅血脈譜一首二金剛界曼陀羅血脈譜一首三雜曼陀羅血脈譜一首前二首是純後一首是雜純雜之例雖多今略舉小分而已當知純雜之義隨法不定因茲今善導和尚意且於淨土行論純雜也亦此純雜名不局內典外典之中其例甚多恐繁不出矣但於往生行而分二行不限善導一師若依道綽禪師意者往生行雖多束而爲二一謂念佛往生二謂萬行往生若依懷感禪師意往生行雖多束而爲二一謂念佛往生二謂諸行往生同惠之心如是三師各立二行攝往生行甚得其旨自餘諸師不然行者應思之

(問うて曰わく、この純雜の義、經論の中に於いて、その證據有りや。

答えて曰わく、大小乗の經律論の中に於いて、純雜の二門を立つること、その例一に非ず。

大乘には、即ち八藏の中に於いて、雜藏を立つ。當に知るべし。七藏はこれ純。一藏は是れ雜なり。

小乘には、即ち四含の中に於いて、雜含を立つ。當に知るべし。三含はこれ純。一含はこれ雜なり。

律には、即ち二十犍度を立てて、以つて戒行を明す。その中に前の十九はこれ純。後の一はこれ雜犍度なり。

論には、則ち八犍度を立てて、諸法の性相を明す。前の七犍度はこれ純。後の一はこれ雜犍度なり。

賢聖集の中に、唐宋兩傳に、十科の法を立てて、高僧の行徳を明かす。その中に前の九はこれ純。後の一はこれ雜科なり。

ないし大乘義章に、五聚の法門有り。前の四聚はこれ純。後の一はこれ雜聚なり。

またただ顯教のみに非ず。密教の中にも、純雜の法有り。謂わく、山家の佛法血脈の譜に云わく、一に胎藏界の曼陀羅血脈の譜一首。二に金剛界の曼陀羅血脈の譜一首。三に雜曼陀羅の血脈の譜一首と。前の二首は是れ純。後の一首は是れ雜なり。

純雜の例多しと雖も、今、略して小分を擧るのみ。當に知るべし、純雜の義、法に隨いて不定なることを。

これに因りて、今、善導和尚の意、且く淨土の行に於いて純雜を論ぜるなり。またこの純雜の名、内典に局らず。外典の中に、その例、甚だ多し。繁を恐れて出さず。

但し往生の行に於いて、二行を分つこと、善導一師に限らず。

もし道綽禪師の意に依らば、往生の行多しと雖も、束^{つか}ねて二とす。

一には謂わく、念佛往生、二には謂わく、万行往生なり。

もし懷感禪師の意に依らば、往生の行多しと雖も、束^{つか}ねて二とす。

一には謂わく、念佛往生。二には謂わく、諸行往生なり。へ恵心これに同じへ

かくのごときの三師、各々二行を立てて、往生の行を攝すること、甚だその旨を得たり。自餘の諸師は然らず。行者、應にこれを思ふべし。）

＊ 聞きたいことであるが、純雜の義について、經論の中に於いて、その証拠があるのだろうか。

それについて答えるならば、大乘や小乗の經律論には、純雜の二門を立てることが、その例は一つでは無く、非常に多いのである。

それを挙げてみると、

- ・ 大乘經典は、八藏に分かれていて、その中の雜藏を立てて雜としているので、他の七藏が純である。
- ・ 小乗經典は、四阿含經があるが、その中の雜阿含經が雜で、他の三阿含經が純である。

・律は、二十犍度の戒律の領域があり、その中の雜犍度が雜で、他の十九犍度が純である。
・論は、八犍度を立てて、雜犍度が雜で、他の七犍度が純である。
・賢聖集（高僧伝）には、高僧の行徳を十科に立てて明かしているが、雜科が雜で、他の九科が純である。

・大乘義章には、法門を五聚に分類しているが、雜聚が雜であり、その他の四聚が純である。
・密教では、天台の山家佛法血脈譜を三つに分け、一に胎藏界の曼陀羅血脈の譜一首、二に金剛界の曼陀羅血脈の譜一首があり、三に雜曼陀羅の血脈の譜一首がある中、胎藏界、金剛界の二首は純であり、雜曼茶羅は雜である。

このように純雜の例は多いのであるが、ここではその一例を挙げたに過ぎないのである。しかもその法門によって純雜の立て方やその内容が異なり、多種多様であるが、ここでは、善導和尚の御意によって浄土往生の行について純雜の相對を考えるものである。

尚、この純雜の義については、仏教関係ばかりでなく、儒教や道教等の他の書物にもその例がみられるが、今は繁雜になる恐れがあるので省略する。

ただし、往生の行について、正行と雜行との二行の區別があることを説いたのは、善導一師に限らないのである。

例えば、道綽禪師^(注2)に依れば、往生の行が多いというものの、一には念仏往生であり、二には万行往生であるとしている。

また、懷感禪師^(注3)の意に依れば、往生の行が多いのにもかかわらず、まとめれば二つの行に行き着き、その一つは念仏往生であり、二つには諸行往生ということができるのである。

このことは恵心僧都^(注4)も同じ説を立てているのである。

以上のように、三師がそれぞれ二行を立てて、往生の行をまとめしていると述べられている。

このことについて、良忠が、その著『選擇傳弘決疑鈔』^(注5)で述べているので、参考までにみることにする。

言異者大師正行雜行綽公念佛万行感師念佛諸行也

(言、異るとは、大師の正行雜行と、綽公の念佛万行と、感師の念佛諸行となり。)

とあるように、善導大師が往生の行について正行と雜行の二行を立てたが、これは善導大師ばかりでなく、道綽禪師も念仏往生、万行往生であるとし、懷感禪師も念仏往生、諸行往生とし、さらに、恵心源信僧都も往生の行を、念仏証拠と往生諸行とに分けて説いている。

このように、三師がいうところの念仏往生の行が正行で、万行往生や諸行往生というのが雜行である。だから、多くの往生行を二分して、正行と他の諸行とを区分していることは、念仏の意義を説くに当たって、まさに要を得て妥当な説である。

しかし、その他の諸師は、善導、道綽、懷感、恵心の四師とは、比べることができないほど念仏について、その意義を明確に説いているものはいないのである。だから、念仏の行者は、そのことをよく考え、念仏を称えることを心得なければしないと説かれている。

五 『選択本願念仏集』の引文②(『往生礼讃』)

この第二章に限り、私釈段の次に重ねて引文があり、善導の『往生礼讃』^(注6)の文が引かれ、専修と雜修の十三の得失が説かれるのである。

往生禮讃云若能如_レ上念念相續畢命爲_レ期者十即十生百即百生何以故無_二外雜緣_一得_二正念_一故與_二佛本願_一得_二相應_一故不_レ違_二教故隨_二順佛語_一故若欲_二捨_一專修_二雜業_一者百時希得_二一一_一千時希得_二五三_一何以故乃由_二雜緣亂動失_二正

念「故與」佛本願「不」相應「故與」教相違故不「順」佛語「故係念不」相續「故憶想間斷故廻願不」慙重眞實故貪瞋諸見煩惱來間斷故無「有」慚愧懺悔心「故又不」相續念「報彼佛恩」故心生「輕慢」雖「作」業行「常與」名利「相應故人我自覆不」親「近同行善知識」故樂近「雜緣」自「障障」他往生正行「故何以故余比日自見」聞諸方道俗「解行不同專雜有」異但使「專」意作「者十即十生修」雜不「至心」者千中無「一此二行得失如」前已辨「仰願一切往生人等善自思量已能今身願」生「彼國」者行住坐臥必須「勵」心剋「己晝夜莫」廢畢命爲「期上在」一形「似」如少苦「前念命終後念即生」彼國「長時永劫常受」無爲法樂「乃至成佛不」經「生死」豈非「快哉應」知
私云見「此文」彌須「捨」雜修「專豈捨」百即百生專修正行「而堅執」千中無一雜修雜行「乎行者能思」量之

（往生禮讚に云わく、もし能く上の如く、念念に相續して、畢命を期とする者は、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず。何を以つての故に。外の雜縁無く、正念を得るが故に。佛の本願と相應することを得るが故に。教に違せざるが故に。佛語に隨順するが故なり。

もし專を捨てて雜業を修せんと欲する者は、百時希に一二を得、千時希に五三を得。何を以つての故に。乃ち雜縁亂動して、正念を失するに由るが故に、佛の本願と相應せざるが故に。教と相違するが故に。佛語に順ぜざるが故に。係念相續せざるが故に。憶想間斷するが故に。廻願慙重眞實ならざるが故に。貪瞋諸見の煩惱來りて間斷するが故に。慚愧懺悔の心有ること無きが故に。また相續して彼の佛恩を念報せざるが故に。心に輕慢きようまんを生じて業行を作すと雖も、常に名利と相應するが故に。人我自ら覆いて、同行善知識に親近せざるが故に。樂ねうて雜縁に近づき、往生の正行を自障障他するが故なり。

何を以つての故に。余、このごろ自ら諸方の道俗を見聞するに、解行同じからざれば、專雜異なること有り。但し意を專らにして作さ使むる者は、十は即ち十生ず。雜を修して至心ならざる者は、千が中に一も無し。此の二行の得失、前に已に辨ずるが如し。

仰ぎ願わくは一切の往生人等、善く自ら思量せよ。已に能く今身に彼の國に生ぜんと願ずる者は、行住坐

臥、必ず須く心を勵まし、己を剋して、晝夜廢すること莫く、畢命を期とすべし。上一形に在るは、少苦なるに似たれども、前念に命終して、後念に即ち彼の國に生じ、長時永劫ようこくに常に無爲の法樂を受け、乃至成佛まで生死を経ず。豈に快きに非ずや。應に知るべし。）

＊ 『往生礼讃』に記される、

「もし能く上の如く、念念に相續して、畢命を期とする者は、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず。」
というのは、もし生涯を通してよく念仏を相續するものは、十人が十人ながら、百人が百人ながら、すべて極樂浄土に往生することができるのである。

これを《專修の四得》といい、

①念仏は、外からの様々な煩惱や悪業によって妨げられることがなく、心を乱さずに正念のままに深く信じ、純粹に称えられるものであること。

②念仏は、阿弥陀仏の念仏往生の本願にかなった行であること。

③念仏は、釈尊が後世にまで、特留するように阿難に付属した教えであること。

④念仏は、諸仏が念仏を称えるものが浄土往生することを証明し、護念する言葉に随うものであること。
によるものである。

また、もし、專修念仏を捨てて雑行を修めるものがあれば、おそらく百人の中で往生できるものは、まれに一人か二人に過ぎないであろうし、千人の中でも往生できるのは、せいぜい五人や三人程度に過ぎないであろう。

なぜならば、《雑修の十三の失》といい、

①雑行は、様々な煩惱や悪業によって妨げられ、心が乱れて正念を失うことによる。

②雑行は、阿弥陀仏の本願にかなわないことによる。

③ 雑行は、釈尊が後世まで留めおかなかった行であることによる。

④ 雑行は、諸仏が真実の行であると証明しなかったことによる。

⑤ 雑行は、阿弥陀仏に継続して心をかけなかったことによる。

⑥ 雑行は、阿弥陀仏を憶想することが途切れることによる。

⑦ 雑行は、往生を願う心が真心がこもらず、真実で無いことによる。

⑧ 雑行は、貪り、怒り、様々な見解の煩惱によって、修行が途切れることによる。

⑨ 雑行は、罪の意識が薄く、悔いあらためる心がないことによる。

⑩ 雑行は、阿弥陀仏に対する継続した報恩の心が無いことによる。

⑪ 雑行は、想い上がりの心を生じて他人を軽んじ、修行をしても名誉と利益を求め易いことによる。

⑫ 雑行は、我見を生じて自己に優越感を覚え、仏道修行の同行や指導の者と親しまないことによる。

⑬ 雑行は、様々な煩惱や悪業に近づく、自らも他人のためにも往生の正行を妨げることによる。

以上のような雑行の様相は、日頃から見聞するところである。このような現状をみると、僧俗問わず、人々の修行は様々に分かれ、その考え方や実践方法もまちまちであり、専ら念仏を称える修行につとめるものもあれば、雑行を修すものもある。

しかし、その中であって、一心に専ら念仏を称えるものは、十人が十人、極楽浄土に往生することができ、雑行を修めて真実心を欠いているものは、千人の中で一人も往生できないのである。

この正行と雑行の二行についての得益と損失については、右に述べた通りである。

願わくは、極楽浄土に往生したいと願う人々は、どうかこのことをよくよく考えて、念仏の一行に専念して欲しいものである。

幸いなことに、今、この身に彼の極楽浄土往生を願うものは、行住座臥に自らの心を励まし、己に打ち

勝って怠けることなく、昼となく夜となく念仏を相續し、生涯を通して念仏を称えなければならない。生涯を通して行を修めるということは、苦勞するようにみえるが、寿命が終わり、一念する間に彼の極樂浄土に往生し、仏の護念によつて、限りなく長い間、常に仏の眞実の法を受けて喜び、やがて仏になる悟りを得ることができるのである。だから、生死の苦に満ちた現世に戻ることも無く、これ以上の喜びは他には無いのである。

六 『選択本願念仏集』の私釈②

右のように重ねて引用した『往生礼讃』の文について、私釈も重ねて述べる形になっていて、特に「百即百生」「千中無一」の文に注目した解釈になっている。

私云見「此文」彌須「捨」雜修「專」豈捨「百即百生專修正行」而堅執「千中無一雜修雜行」乎行者能思「量之」
（私に云わく、此の文を見るに、いよいよ須く雜を捨てて專を修すべし。豈に百即百生の專修正行を捨てて、堅く千中無一の、雜修雜行を執せんや。行者能く之を思量せよ。）

＊ このように、『往生礼讃』の文をみると、やはり、雜行を捨てて專修念仏の一行に精進すべきであることが勧められている。

それなのにどうして、百人いれば百人が、すべて往生できる專修念仏を捨てて、千人のうち一人も往生できない雜修雜行を頑なに修そうとする必要がどこにあるであろうか。

念仏の行者は、善導が説くところのこの意を大いに思量して、その上で、どのような修行が浄土往生のための正行であるかを認識しなければならないのである。このことは、それぞれの行者がしかと肝に銘じておくべきことであると重ねて強調しているのである。

七 高田敬輔「選択集十六章之図」(第二 捨雜行歸正行章)の絵相について

高田敬輔が描く第二章の絵相について、どのような構成になっているか、湖月の注釈書との関連を見るとともに、絵相の占有率を通して考察を加え、描かれた背景を探ることにする。

(一) 絵相の構成について

前項でみたように高田敬輔が『選択本願念仏集』の第二章の論理の展開において着目したのは、五種正行と五種雜行である。

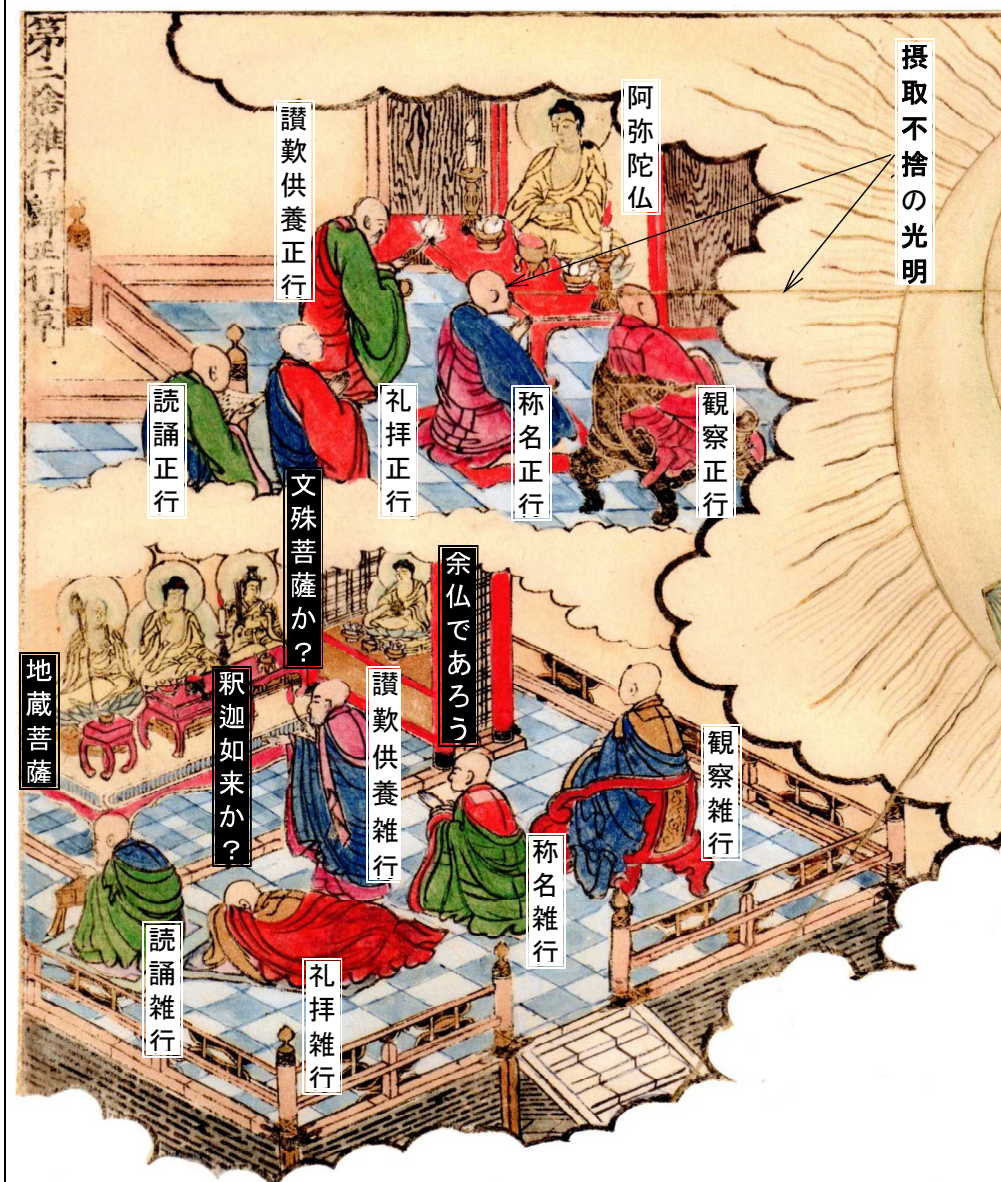
それを左図のように、上段に五種正行、下段に五種雜行を二段配置し、その五種正行の中の称名正行の出家者のみに「第七弥陀光明唯攝念佛行者章」の阿弥陀仏からの光明が注がれる絵相として描いている。

左図の上段は、五種正行の絵相である。阿弥陀仏の前で、左端の手に經典を持つ出家者は読誦正行、倚子に座す出家者は觀察正行、左から二番目の合掌する出家者は礼拝正行、坐具の上で合掌し如来に向かう出家者は称名正行、手に華を持って立つ出家者は讃歎供養正行であり、四番目の正定業の称名正行の出家者の頭部のみに、右隣の「第七弥陀光明唯攝念佛行者章」の阿弥陀仏から、摂取不捨の光明が注がれている。この五種のうち前三後一は助業である。

下段の絵相は「五種雜行」を表し、正面の中尊は阿彌陀如来、向かって左隣は地藏菩薩、向かって右隣に宝剣を持った菩薩様の一尊、さらに向かつて右脇の設えの一仏は、なんらかの余仏と思われる。

左端の机の前の出家者は読誦雜行、倚子に座す出家者は觀察雜行、座具に臥す出家者は礼拝雜行、合掌し如来に向かう出家者は称名雜行、右手に燈明、左手に香合を持つ出家者は讃歎供養雜行として描かれている。

この絵相の注目点は、やはり修行の対象となる仏が、阿弥陀仏であるか、他の仏であるかということである。まさしく現世で迷い苦しむ凡夫を西方極樂浄土へ往生させてくれるのは、阿弥陀仏であるということを対比的に強調した絵相であるということを知ることができるのである。



第二 雜行をすてて正行に帰する章

此段にハ、雜行正行專修雜修といふことを顕して、雜行をすてて正行に歸し、雜修を離て專修の行者となるべきことを勸給へり。

下の段則五種の雜行のありさまなり。出家の姿五人あり。前に机をひかへたるハ、讀誦雜行の躰なり。倚子にのりたるハ、觀察雜行なり。座具の上に伏たるハ、禮拜雜行なり。

掌を合たるハ、稱名雜行なり。片手に灯をもち、かた手に指さしたるハ、讚歎供養雜行なり。

中尊ハ弥陀如来、右ハ地藏菩薩、左ハ四天王の中一人とミへたり。今一佛ハ、則余佛なり。ミだを念じ、極樂をねがひながら余佛余ぼさつ并二四天等を供養し、その御名をとなへ禮拜し、こゝろに觀察し、余經

をよみなどして極樂往生の因にあてがふを雜行といふなり。かるがゆへに撰取の筋のつりなし。

上の段に佛像あり。すなハちミだによらいなり。又山家のすがた五人あり。手に經をもち立たるハ、讀誦正行の躰なり。倚子に乘たるハ、觀察正行なり。座具のうへに伏たるハ、禮拜正行なり。手をあはせ如来

にむかひ居ハ、稱名正行なり。手に華をもち立たるハ、讚歎供養正行なり。此五の正行の中に、第四

の稱名正行といふ。

是則正定業のゆへに撰取不捨の糸筋あるなり。此五種の正行の中、前の三と後の一とを第四の稱名

正行と同様にこころへて修するを雜修といふなり。

前の三、後の一を念佛の助と意得、また前三後一は、第四の稱名正行よりあらはるところへたる人を專修の行者とハ申ことなり。

(二) 洛隠湖月の注釈と絵相との関連性について

㊦ 「称名正行」の絵相の注釈

上段の「五種正行」の注釈の中で、

「座具ざぐのうへに伏ふしたるハ、礼拝らいはい正行せいぎやうなり。手てをあハせ如来にょらいにむかひ居いるハ、称名正行しょうみょうせいぎやうなり。」

と注釈しているが、下段の「五種雑行」の「礼拝雑行」では確かに座具に臥して礼拝している様相を呈しているが、上段の座具に臥している出家者は居らず、座している出家者は合掌しており、しかも「摂取不捨」の光明が注いでいる。よって上段の座具に座している出家者は「称名正行」としなければならぬ。

また、上段の礼拝正行は、下段の礼拝雑行のように座具に臥している様子は見られず、しかも座具が敷かれているかどうかとも雲気に覆われていて確認することができない。おそらく、下段の礼拝雑行が座具に臥していることから、上段の礼拝正行も座具に臥しているだろうという先入観のもとに未確認のまま、

「座具ざぐのうへに伏ふしたるハ、礼拝らいはい正行せいぎやうなり。」

と記したと考えられる。

㊧ 「中尊ハ弥陀如来」か「左ハ四天王の中一人」か

上段の「五種正行」の礼拝の対象となっている仏像は、

「上じやうの段だんに佛像ぶつざうあり。すなハちミだによらいなり。」

と記されているように、まさしく「阿弥陀如来」で間違いがないだろう。印相が阿弥陀仏特有の「上品上生」の印を結んでいるからである。

下段の「五種雑行」の仏像については、

「中尊ちゆうぞんハ弥陀みだ如来にょらい、右みぎハ地藏菩薩ぢざうぼさつ、左ひだりハ四天王してんわうの中一人うちいちにんとミへたり。今いま一佛いちぶつハ、則すなハち余佛よぶつなり。」

の注釈で、中尊を弥陀如来としているが、印相が右手を施無畏印、左手を与願印としていることから釈迦

如来と思われる。

＊第二章下段の「五種雜行」の三尊



(イ) 「中尊ハ弥陀如来」か「左ハ四天王の中一人」か

・中尊は、阿弥陀如来よりも釈迦如来ではないか。

・右（向かって左）は、地藏菩薩。

・左は、四天王よりは、むしろ文殊菩薩か虚空蔵菩薩のように見える。

持物の様子から、虚空蔵菩薩ではないだろうか。

(ウ) 「かた手に指さしたるハ」について

・出家者の右手には灯、左手には香炉が持たれているように見える。

なぜなら高田敬輔の伝記と画業を伝える『竹隠画譜』^(注8)に、敬輔の描いた画図の縮図集があるが、その中の「釈迦三尊像」、そしてその『竹隠画譜』に掲載の原画である滋賀県日野町大聖寺に現存する「釈迦三尊像」の中尊も、右手を施無畏印、左手を与願印としているので、第二章の下段の三尊のうち、中尊は「釈迦如来」であろう。



* 『竹隠画譜』(文化元年(一八〇四))



* 「釈迦三尊像」(注9) (滋賀県日野町 大聖寺所蔵)

《寛保二年(一七四二)・寛保四年(一七四四) 款記加筆 紙本墨面淡彩
二三六・五×一四三・〇》

また、左の一尊を「左ひだりハ四天王しってんわうの中一人うちいちにん」としているが、持国天等の甲冑を着け忿怒形の武人姿とは異なり、穏やかな行相で持物が寶劍であることから、むしろ釈迦三尊像の左脇侍の文殊菩薩に近いが、虚空蔵菩薩に見て取れる。

参考までに『佛像圖彙』^(注10)の図像は次のようになっている。

【文殊師利菩薩】

右手に寶劍、左手に經卷を持物としている。



《増補諸宗『佛像圖彙』貳 六丁表》

【虚空蔵菩薩】

右手に寶劍、右手に如意寶珠を持物としている。



《増補諸宗『佛像圖彙』参 三丁表》

ただし、釈迦三尊像の左脇侍に文殊菩薩となれば、当然のこととして右脇侍は普賢菩薩になるべきであるが、この第二章の絵相は、一見してわかるように地藏菩薩である。

だから、結局、なんら統一性のない、仏をただ並べて配置したに過ぎない、雑行の札拝仏であるといえるのではないだろうか。

また、向かって右の設えに座す仏は、手に寶珠のような持物があるが、印相が不明であるので、

「今いま一佛いちぶつハ、則余佛よぶつなり。」

と釈すように、何という仏か、判断がつかないことから、余仏であろうという注釈の通りである。

㊦ 「かた手に指ゆびさしたるハ」について

下段「讚嘆供養雜行」の、

「片手かたてに灯をもち、かた手に指ゆびさしたるハ」

とある出家者の右手には確かに灯明が持たれているが、左手にも香炉と思われる物を持っているので「指ゆびさしたるハ」という釈は妥当ではないと思われる。

(三) 絵相の占有率について

絵相の占有率から、思想的ものを探ろうとすることは非論理的であろうが、絵師高田敬輔が表現しようとする意志や意図の表出が、自ずと占有率に反映されたものと推測できるのである。

試みに「選択集十六章之図」の各章ごとの絵相の占有率(注11)を計測すると、第二章の絵相は、掛け幅全体からみた絵相の占有率が六・七％であり、上段の中心を占める第七章が六・七％、第二章と並んで向かって右側の最上段に位置する第一章は七・八％となっていて、掛け幅最上段を占める第七、第一、第二の三つの章の占有率は全体の二一・二％と高い比率を示している。

この「選択集十六章之図」が《撰取不捨曼荼羅》様の形式で描かれる性質上、全体的な位置付けとして、第七章の阿弥陀仏が最上段中央に位置し、その阿弥陀仏から残りの各章の念仏行者に光明が注がれる構成になっている。その第七章の阿弥陀仏の左に位置づけられた第一章は、「捨聖道帰浄土章」で浄土門に帰入すべきことが描かれ、右に位置づけられた第二章では、「捨雑行帰正行章」として何を具体的に修行すべきかが描かれていて、観る者にとって是非常に印象が強く、象徴的な構図になっている。

このことは、まさに、阿弥陀仏が頭部とすれば、その左肩に「帰浄土」、右肩に「帰正行」を掲げて、極楽浄土往生を願う者に救いの手を差しのべているような構成になっていると解釈しても差し支えないようになっている。

さらに、第二章は、標章「第二 捨雑行帰正行章」が示すように、「捨雑行」して「帰正行」することが描かれている。「雑行」を捨て、「正行」に歸するのであれば、当然のこととして「雑行」よりは「正行」の方に重きを置くべきであろう。

ところが、第二章の上段・下段の絵相占有率を計測すると、「五種正行」と「五種雑行」の比率は、一〇〇対一四五で、「五種正行」より「五種雑行」の絵相が、一・五倍に近いほど広く占有しているのである。

その「雑行」の占有率が高いということは、あえて「五種雑行」の画面を広く取ることににより、観る者に「雑行」では極楽往生がかなわないという否定的な見解を印象づける意図があり、正行の価値を高める効果が得られると考えられる。

また、もう一方では、善導の『観経疏』に説かれる「正雑二行ともに往生す」ことが前提になっていることから、「五種雑行」を無視できず、往生のためには何らかの手立て、つまり、回向しなければ往生がかなわないということを示唆するために、場面を広く用いて描いているのかも知れないのである。

その疑問のため、高田敬輔と親交が深い義山が、どのような説示をしているか、次項で注目することにする。

八 良照義山の「正雑二行」の捉え方

さて、善導が『観経疏』で説く「正雑二行」について、高田敬輔が師と仰ぐ良照義山は、どのような捉え方をしているかみると、その書『和語燈録日講私記』第一卷^(注12)に、次のように記されている。

扱往生行の中に正雑二行有り 正雑二行ともに往生す 爾るに念仏は正中の正也

又名號も諸佛の名號も一同なりと心得て申す人は設ひ念佛すとも是は雑行也

唯本願を信して一筋に彌陀の名號を称するのは正中の正也 是れは百人は百人なから生ずる也 此の旨を能々心得ておくへき也

のように「往生行の中には、正雑二行有り、正雑二行ともに往生す」と、往生の行には、正雑の二行があつて、ともに往生することができるが、その中でも念仏は、「正中の正」であることを強調しているのである。

つまり、世の中には、多種多様な往生行があるけれども、念仏こそが、最も正しく、必ず往生できる行であるということである。

これは、法然が私釈段で往生の行相を明かす文にあるように、

初明「往生行相」者依「善導和尚意」往生行雖「多大分爲」二一正行二雑行

（初めに往生の行相を明かすとは、善導和尚の意によるに往生の行多しと雖も、大いに分かつて二とす。

一には正行、二には雑行。）

を根拠に記したもので、正行も雑行も往生できるという前提に立っていることを述べたものである。

しかし、その念仏だけが「正中の正」であり、必ず往生がかなうのは、この第二章で述べられているように、五種正行の第四の称名正行が正定業で、前三後一の正行は助業であること。そして、正定業や助業を除いたものは全て雑行であること。さらに、正雑二行については五番の相対があり、加えて専修の四得や雑修の十三失があ

ること等によって、念仏の勝れた価値をみてきたのである。

それはまさに、義山が述べるように、

・「爾るに念仏は正中の正也」とは、正定業の第四称名正行を行ずることが、最も正しいことであり、大事なことである。

・「又名號も諸佛の名號も一同なりと心得て申す人は設ひ念佛すとも是は雜行也」とは、阿弥陀仏の名号も諸仏の名号も同じであると心得ている人は、たとい念仏を称えたとしても、それは、雜行ということになる。専ら一心に阿弥陀仏の名号のみを称えなければならぬということである。

阿弥陀仏以外の諸仏の名号も称えるということは、阿弥陀仏の本願力を信じ、決定往生を願う心が確立されていない姿であり、廻向されるべき真実深心の場合がまだ確立されていない姿である。だから、まず、それらを確立した上で修すべきである。

・「唯本願を信して一筋に彌陀の名號を称するのは正中の正也」とは、一心に阿弥陀仏の名号を称えるということは、本願に適合した称名正行であるので、「一筋に彌陀の名號を称す」ことでなければならないということである。

そして、これらのことは、まぎれもなく、

・「是れは百人は百人ながら生ずる也」と、念仏することにより、百人が百人、必ず往生がかなう行であること。

だから、

・「此の旨を能々心得ておくへき也」と、このような念仏を称えることの意義をよく理解し、心新たに心得なければならないのである。

と説いているのである。

また、法然の『三心義』^(注13)の「就行立信」のところで説かれる正雑二行については、つぎに行につきて信をたつといふは、往生極樂の行まち／＼なりといへども、二種をばいはず。

一には正行、二には雑行也。正行といふは阿彌陀佛におきてしたしき行なり。雑行といふは阿彌陀佛におきてうとき行なり。

(次に、行につきて信を立つというは、往生極樂の行、まちまちなりといえども、二種をば出ず。

一には正行、二には雑行なり。

正行というは、阿彌陀佛におきて、したしき行なり。雑行というは、阿彌陀佛におきて、うとき行なり。とあるが、これについて、良照義山は、次のように記している。^(注14)

依_レ之元祖大師も選擇集に第一章には立_二二門章_一捨_二聖道_一歸_二淨土_一直第二章に立_二正雑二行章_一捨_二雜行_一歸_二正行_一具に此義を釋出し玉へり爾れは歸_二淨土門_一人は先つ此正雑二行の義を能分別して正定業の念佛を稱すへき也尤も甘心すへき事也

・正行といふは等とは已下は選擇第二章の下を以て辨すへき也先つ選擇を辨して次に此釋をよむへし自ら分明なる也

・したしき行なりとは疏に云_下若修_二前正助二行_一心常親近憶念不_レ斷名爲_二無間_一也_上是也

・うとき行なりとは疏云_下若行_二後雜行_一即心常間斷雖_レ可_二廻向得_レ生衆名_二疎雜之行_一也_上是也

(これに依るに、元祖大師も選擇集に、第一章には、二門の章を立て、聖道を捨て淨土に歸せしめ、直ぐに第二章に正雑二行章を立てて雑行を捨てて正行に歸せしめたまい、具に此の義を釋出し玉えり。

爾れば、淨土門に歸する人は、先ず此の正雑二行の義を能く能く分別して正定業の念佛を稱すべきなり。尤も甘心すべき事なり。

・正行というは等とは、已下は選擇第二章の下を以て辨すべきなり。先ず選擇を辨じて、次に此の釋を

よむべし。自ら分明なるなり。

・したしき行なりとは、疏に、もし前の正助二行を修すれば、心常に親近して憶念は斷えざれば、名づけ
て無間となす。是なり。

・うとき行なりとは、疏に、もし後の雜行を行ずれば、即ち心は常に間斷す。回向して生ずることを得べ
しと雖も、すべて疎雜の行と名づくなりと曰く、是なり。）

＊

元祖法然大師は、選択集の第一章には、二門章を立て、聖道を捨てて浄土に帰すことを説き、すぐに第
二章で正雜二行章を立て、雜行を捨てて正行に帰すことを説いて、その教義の内容を注釈されている。

だから、浄土門に帰す人は、まずこの正雜二行の教理をよくよく理解し、分別して正定業の念仏を称え
るべきである。このことは肝に銘じておかなければならない大事なことである。

「正行というは」というのは、『選択本願念仏集』の第二章に述べられているので、それに随って考え
るべきであるので、まず『選択集』を理解してから、その次にこの注釈を読めば、自ずと理解ができるこ
とになる。

「したしき行なり」というのは、『観經疏』に記されているように、もし前の正助二行を修せば、心が
常に親近し、憶念が絶えることがないので、無間と名づけられる、ということである。

「うとき行なり」というのは、これも『観經疏』にあるように、もし後の雜行を行ずれば、心が常に間
斷し、たとい回向して浄土に往生したとしても、それは疎雜の行と名づけられる。

と述べられている。

このように、法然がいうところの、正行は、阿弥陀仏において親しき行であり、雜行は、阿弥陀仏において疎
い行であるということを善導の『観經疏』の説示をもとに注釈をしているのである。

さらにもう一点、繰り返すようであるが、正雜二行と行相について良照義山は、次のように述べている。

(注 15)

・ つきに行につきてとは就行立信也

・ 一には正行等とは正行には五種正行有り 雑行とは念佛と餘行とを雑ゆる故に雑行と云ふには非ず 直に餘行を指して云「雑行」也 雑とは通の義にて餘行は通「人天」行なるか故に云「雑也」選擇集の意也 畢竟雑とは果まじはること也^{六十四}

・ 行相とは五種正行のありさまなり 一心に専ら讀「誦三部經」或は一心に専ら彼國の依正二報の莊嚴を觀察する等是れ行相也

・ 得失とは前の正行を修すれば心常に親近して憶念不_レ斷名て爲「無間」若し後の雑行を行すれば心常に間斷して雖_レ可_下回向得_上生名「疎雑行」也_{意疏}

* ここでいう行は就行立信のことであること。そして、正行とは五種正行、雑行は念仏と余行を混同することではなく、余行そのものを雑行ということ。そして、雑とは、通の義のことで、人天界に通じる行なので雑というのである。だから、結局、雑とは、往生の果が得られないことなのである。

行相というのは、五種正行のことである。そして、一心に専ら三部經を誦誦することや、極樂浄土の阿弥陀仏や諸菩薩及び極樂浄土を觀察することを行相というのである。

また、正雑二行の得失については、正行を修すれば、心が常に阿弥陀仏に親近し、憶念して間斷することが無いし、もし雑行を行すれば、心が常に間斷し、たとい回向して極樂浄土に往生できたとしても、雑の行というものであると『觀經疏』に説かれているとしている。

このことは、就行立信というのは、あくまでも正行を修することであり、雑行は疎雑行であり、その価値を疎んじることが強調されているのである。

この第二章が、いかに重要であるか、石井教道氏の『選擇集の研究』総論篇の選擇集主章論^(注16)に、
一、二行章為主説。これは浄土宗並に眞宗學匠の一部の見方である。即ち良忠が（決疑鈔一、九〇淨）が「初的一篇

は是れ判教の大綱、後の十五篇は起行の綱目なり」と云へるもので、正に第二正雜二行章を主章とする意と云ふことが出来る。深勵も（講義一、廿八）亦、「十六章の中にも二行章を以て肝要とす」と云ひ、文献をあげ、二行章こそ選擇本願念佛の正體を表すものとして力説しているのである。即ち念佛爲本とあり、題號も念佛集であり、選擇本願念佛は念佛の本願價值を示すものであり、又疏文に念佛の要文を集むとあり、總結の文は二行章で終つてゐる等の文献をあげて之を證明し、第三章爲主説を否定している。

と第二章の「二行論」が『選択本願念仏集』の中心であることを第一に取り上げ、以下、二に本願章爲主説（第三章）、三に二章爲主説（二、三章折衷説）を記し、その存在価値を取り上げているのである。

ちなみに右記の「總結の文は二行章で終つてゐる」という文言からも第二章の存在価値が説かれているので、参考までに上げると、第十六章（注17）に記される、いわゆる「略選択」または「三選の文」、「三選択」と呼ばれる左記の文章のことである。

夫欲_三速離_二生死_一二種勝法中且闍_二聖道門_一選入_二淨土門_一欲_レ入_二淨土門_一正雜二行中且抛_二諸雜行_一選應_レ歸_二正行_一欲_レ修_二於正行_一正助二業中猶傍_二於助業_一選應_レ專_二正定正定之業者即是稱_二佛名_一稱_レ名必得_二生依_一佛本願_一故（夫れ速やかに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には、且くしばら聖道門を闍さしおきて、選びて淨土門に入れ。

淨土門に入らんと欲せば、正雜二行の中には、且く諸の雜行を抛なげうつて、選びて正行に歸す応し。

正行を修せんと欲せば、正助二業の中には、猶を助業を傍かたわらにし、選びて正定を専らにす応し。

正定の業とは、即ち是れ佛名を称するなり。名を称すれば必ず生ずることを得。佛の本願に依るが故なり。）とあるように、明らかに「選択本願念仏集の要義」を示し、「選択本願念仏集の総結の文」となっている。ここに、第二章と第十六章の呼応がなされていることを（詳細は第十六章検証時）を知ることができるのである。

このようにみてくると、第二章に描かれる高田敬輔の絵相の中には『選択本願念仏集』の要である「就行立信」の重要な教義内容が盛り込まれているといっても過言ではないだろう。

九 まとめ

「五種正行」と「五種雑行」の二場面を描いた絵相を考察した結果、次のようなことを知ることができる。

① 高田敬輔の絵相について注釈している洛隠湖月の『選擇集十六章圖説』の記述の齟齬を契機に、五種雑行の余仏を考察した結果、五種正行の阿弥陀仏とはかけ離れた、釈迦仏、地藏菩薩、虚空蔵菩薩らしき余仏が描かれていて、称名正行の価値を大いに高める要素が含まれていたこと。

② 絵相の占有率から、「選擇集十六章之図」が『撰取不捨曼荼羅』様の形式で描かれ、第七章の阿弥陀仏が最上段中央に位置し、その左の第一章「捨聖道歸淨土章」では淨土門に歸入すべきこと、その右の第二章「捨雑行歸正行章」では具体的な修行の在り方を示す正雑二行が描かれ、第七、第一、第二章は全体の二一・二%を占めている。まさに、阿弥陀仏を頭部とすれば、その双肩としての教義としての位置付けができること。

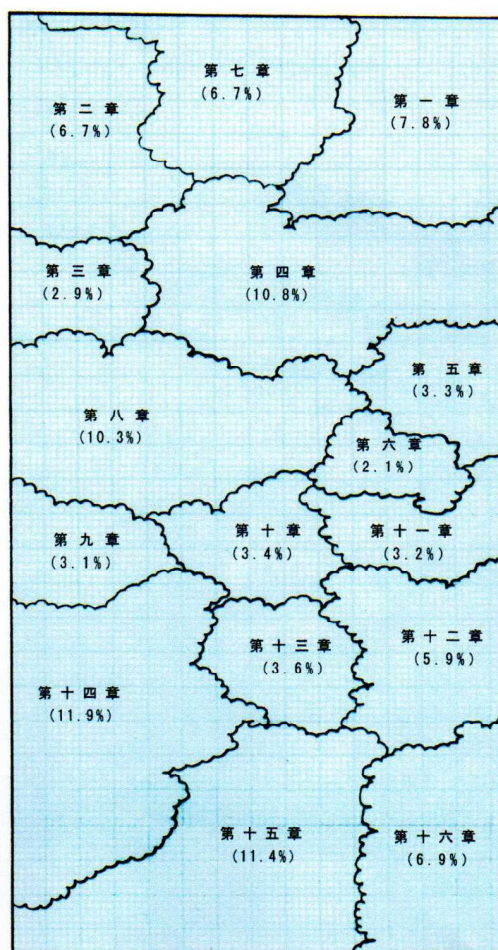
③ 第二章は、標章「第二 捨雑行歸正行章」が示すように、雑行を捨て正行に歸すのであれば、当然のこととして正行に重きを置くべきであろうが、「五修雑行」の絵相が、一・五倍広く占有している。あえて五種雑行の画面を広く取ることににより、観る者に雑行は極楽往生ができないという否定的な見解を印象づける意図があり、正行の価値を高める効果の表れであると考えられること。

④ 第二章は、『選擇本願念仏集』の要義である「略選択」といわれ、高田敬輔が師と仰ぐ良照義山も、法然の『三心義』を注釈する中で、正行は阿弥陀仏に親しき行であり、雑行は阿弥陀仏に疎き行であることが重ねて説かれていることから、高田敬輔もこれをふまえて作画をしたことが想定されること。

【初出『佛教大学大学院紀要』文学研究科篇（第四十三号 十七、三四頁掲載 二〇一五年三月一日発行）
を一部改稿】

- (注 1) 善導『觀經正宗分散善義』卷第四(浄土宗全書第二卷五八頁)
- (注 2) 道綽『安樂集』卷下(浄土宗全書第一卷六九六頁)
- (注 3) 懷感『釋淨土群疑論』卷第五(浄土宗全書第六卷七〇頁)
- (注 4) 源信『往生要集』卷下本
- (注 5) 良忠『選擇傳弘決疑鈔』卷第二(浄土宗全書第七卷二二三頁)
- (注 6) 善導『往生礼讃』(浄土宗全書第四卷三五六頁)
- (注 7) 洛隱湖月『選擇集十六章圖說』豊田熊太郎製本 京師書房向松堂刊 延享二年(一七四五)
- (注 8) 『竹陰画譜』
- (注 9) 高田敬輔画「釈迦三尊像」(滋賀県日野町 大聖寺所蔵) 《寛保二年(一七四二)・寛保四年(一七四四) 款記加筆 紙本墨画 淡彩
二三六・五×一四三・〇》
- (注 10) 紀秀信(浪華土佐將曹紀秀信畫圖) 増補諸宗『佛像圖彙』東都書肆 元禄三年(一六九〇)

(注 11) 高田敬輔「選択集十六章之図」各章の占有率



第一章	7.8
第二章	6.7
第三章	2.9
第四章	10.8
第五章	3.3
第六章	2.1
第七章	6.7
第八章	10.3
第九章	3.1
第十章	3.4
第十一章	3.2
第十二章	5.9
第十三章	3.6
第十四章	11.9
第十五章	11.4
第十六章	6.9
(%)	100.0



(注 12) 良照義山の『和語燈録日講私記第一卷』(浄土宗全書第九卷七一六頁)

(注 13) 法然『三心義』(石井教道編『昭和新修法然上人全集』四五六頁 昭和三十年刊 平楽書店)

(注 14) 良照義山の『和語燈録日講私記第二卷』(浄土宗全書第九卷七四六頁)

(注 15) 良照義山の『和語燈録日講私記第二卷』(浄土宗全書第九卷七三七頁)

(注 16) 石井教道『選擇集の研究』総論篇 第四章第二節 選擇集主章論(二八五頁、二九二頁) 昭和二十六年 平楽寺書店

(注 17) 『新彫選擇本願念佛集』卷末三十三丁 元禄九年義山開版本 嘉永二年再刻 芝峯 昇安室藏版 調進所 西山堂總兵衛

第三項 「第三 唯念佛往生本願章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第三 唯念佛往生本願章

二 『選択本願念仏集』の篇目

弥陀如来_下以_二餘行_一爲_中往生本願_上唯以_二念佛_一爲_二往生本願_一之文

（弥陀如来、餘行を以って往生の本願となしたまわず、唯念佛を以って往生の本願と爲したまえるの文。）

* 先の第一章、第二章では、易行道の浄土門を選択し、五種正行の中からただ称名正行の一行のみが往生の行であることを理解したので、今章では具体的に浄土三部經を通して、阿弥陀仏の本願の意義や種類や内容を明らかにし、さらにその主体について述べられていく。

三 『選択本願念仏集』の引文

念仏往生の本願の典拠として、『無量寿經』、善導の『觀念法門』・『往生礼讃』のそれぞれの中から引用されている。

(一) 『無量寿經』に説かれる第十八願

まず初めに、『無量寿經』の第十八願が引かれる。

無量壽經上云設我得_レ佛十方衆生至心信樂欲_レ生_二我國_一乃至十念若不_レ生者不_レ取_二正覺_一

（設_もし、我、佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信_{しんぎよう}樂して、我國に生ぜんと欲して乃_{ないし}至十念せんに、若_もし生ぜずんば正覺をとらじ。）と説かれる。

＊ 『無量寿經』の上巻には、阿弥陀仏が法蔵比丘として修行し、四十八願の誓願を立てた中の第十八願^(注1)、

の「設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺」の部分引用され、

「もし、自分が成仏したならば、十方世界のあらゆる衆生が、真実の心をもって、深く信じて浄土往生を願い、生涯を通じて念仏を称えるものや命終の十念に至るものまで、必ず往生させるであろう。

もし、これができないようであれば、自分は仏にはならない。」

と誓われたことが記されているのである。

(二) 『觀念法門』にみる攝生増上縁

次に、善導の『觀念法門』から、次の文が引用される。

觀念法門引上文云若我成佛十方衆生願生我國稱我名字下至十聲乘我願力若不生者不取正覺
(『觀念法門』に上の文を引いて云わく、もし我れ成佛せんに、十方の衆生、我が國に生ぜんと願じて、我が名字を稱すること、下十聲に至るまで、我が願力に乗じて、もし生ぜずば正覺を取らじ。)

＊ この引文は、善導の『觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門』(觀念法門)一卷に挙げられる五種増上利益因縁^(注2)に説かれる部分である。

答曰現生及捨報決定有大功德利益準依佛教顯明五種増上利益因縁

一者滅罪増上縁二者護念得長命増上縁三者見佛増上縁四者攝生増上縁五者證生増上縁

その五種の増上縁とは、

① 滅罪増上縁 (罪を滅ぼす増上縁)

② 護念得長命増上縁 (護念されて長命を得る増上縁)

③ 見佛増上縁 (仏をみたてまつる増上縁)

④ 攝生増上縁（摂め^{おさ}めとつて往生させる増上縁）

⑤ 證生増上縁（往生を証明する増上縁）

であり、その中の四番目に挙げられる攝生増上縁^(注3)のことである。

その内容は、次のようになっており、

又言「攝生増上縁」者

即如「無量壽經四十八願中說」佛言若我成佛十方衆生願「生我國稱我名字」下至「十聲」乘「我願力」若不「生者不取正覺」此即是願往生行人命欲終時願力攝得「往生」故名「攝生増上縁」

ここでは、『無量壽經』四十八願の第十八願（念仏往生願）に説かれる、淨土に往生を願う行者が命終にあたつて、阿弥陀仏の願力が行者を摂め^{おさ}めとつて淨土に往生させてくれるという攝生増上縁が説かれる。

この攝生増上縁には、他に『無量壽經』第十九願（聖衆來迎願）・第二十願（三生果遂願）・第三十五願（女人往生願）、『觀經』第十一觀・散善九品、『阿弥陀經』等からの文を引き、重ねて、臨終時に、仏の願力が摂取して、往生人を迎接するということが説かれている。

（三）『往生禮讃』の引文

そして、『往生禮讃』からは、次の文が引かれる。

往生禮讃同引「上文」云若我成佛十方衆生稱「我名號」下至「十聲」若不「生者不取正覺」彼佛今現在「世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生」

（『往生禮讃』に同じく上の文を引いて云わく、もし我れ成佛せんに、十方の衆生、我が名號を稱すること、下十聲に至るまで、もし生ぜずば正覺を取らじ。彼の佛、今に世に在^{まし}して成佛したまえり。まさに知るべし。本誓の重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生することを得。）

＊『往生礼讃』^(注4)からは、

又如「無量壽經」云「若我成佛十方衆生稱我名號」下至「十聲」若不「生者不取正覺」彼佛今現在「世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生」

の『無量壽經』^(注5)の引用であるが、この四十八文字のうち、前半は、第十八願の、

設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不「生者不取正覺」唯除「五逆誹謗正法」

の意を引用し、後半は、本誓重願の成就について述べられた重要な語句であることが強調されている。

特にこの四十八文字について、法然上人は「示或人詞第二」^(注6)で、

此文ヲ常ニ、口ニモ唱ヘ、心ニモウカヘ、眼ニモアテヨ。弥陀ノ本願ハ、決定成就シテ、極樂世界ヲ莊嚴シタテ、御目ヲ見マハシテ、我名ヲ唱ル人ヤ有ルト御覽シ、御耳ヅ傾ケテ、我名ヲ稱スル物ヤ有ルト、夜晝ル、キコシメサルナリ。サレハ一稱モ一念モ、阿弥陀ニ、知ラレマイラセスト、云事ナシ。去レハ、攝取ノ光明ハ、我身ヲ捨給フ事ナク、臨終ノ来迎ハ虚事無キ也。

此文ハ四十八願ノ、眼コ也。肝^{キモ}也。神^{タマシ}也。四十八字ニ、結ヒタル事ハ、是故也。

と記され、四十八願の眼であり、肝であり、神であると説いている。

また、記主は『選擇傳弘決疑鈔』第二卷^(注7)で、

上人毎^レ對^ニ爲^ニ已成佛等文^一數有^ニ感涙之氣^一道心顯^レ色随喜至深^{云云}

(上人、爲已成佛等文に對する毎に、數々、感涙の氣有り。道心は色に顯われて随喜至つて深し。云々。)

法然が「爲已成佛等の文」^(注8)に対する毎に感涙したことを述べ、いかに重要なものであったか記している。

四 『選択本願念仏集』の私釈

(一) 総願と別願

仏には、一般的な共通の本願である総願と、仏それぞれに特有な本願である別願がある。これについて、次に述べられていく。

私云一切諸佛各有^二總別二種之願^一總者四弘誓願是也別者如^二釋迦五百大願藥師十二上願等^一是也今此四十八願者是彌陀別願也

(私に云わく、一切の諸佛、各々總別二種の願有り。總とは四弘誓願これなり。別とは釋迦の五百の大願、藥師の十二の上願等のごときこれなり。今この四十八願は、これ彌陀の別願なり。)

* 諸々の仏には堅固な意思のもとにたてられた誓願のもとに、これを実現するために修行を積まれののであるが、これには総願と別願の二種有り、一般的な総願というのは四弘誓願のことであり、別願として釈迦には五百大願(釈迦牟尼仏五百大願)、藥師如來の十二の上願(玄奘訳『藥師瑠璃光如來本願功德經』(藥師經))等があげられる。今、阿彌陀仏の四十八願というのは、阿彌陀仏の別願のことである。

《一般的な総願である四弘誓願についてみると(『新浄土宗辞典』(注9)、

四弘誓願 諸の菩薩が度・断・知・証の四について立てる四種の広弘の誓願。《中略》

すべての菩薩が因位に於いてかならず起こすところの誓願にして、浄土門にては別安心たる三心に対して総安心と称する。

- (1) 衆生無辺誓願度とは、無尽無辺の衆生を苦界より救わんと誓うこと
- (2) 煩惱無尽誓願断とは、無数の煩惱を断除し尽さんと誓うこと
- (3) 法門無尽誓願知とは、無尽の法門を悉く学知せんと誓うこと
- (4) 仏道菩提誓願証とは、無上至極の仏果を証せんと誓うこと

前三句は情・意・智の完成であり、後のひとつはこの三者完成して仏果菩提に向かうをいう。浄土宗にては、往生要集の説に従って、

衆生無辺誓願度 煩惱無辺誓願斷 法門無尽誓願知
無上菩提誓願証 自他法界同利益 共生極樂成仏道

の文句を誦持するものとし、自他ともに淨土に往生し仏道を成ぜんことを願うをいう。》

尚、『往生要集』^(注10)には、「大文第四 正修念仏 第三 作願文 初 行相」に記される。

(二) 阿弥陀仏の別願

次に、阿弥陀仏の別願である四十八願が、どのような経過でたてられ、その内容がどのようなものであるか、問答の形式をとって明かされていく。

問曰彌陀如來於何時何佛所發此願乎答曰壽經云佛告阿難乃往過去久遠無量不可思議無央數劫錠光如來興出於世教化度脫無量衆生皆令得乃取滅度次有如來名曰光遠^{至乃}次名處世^{佛也}如此諸佛皆悉已過爾時次有佛名世自在王如來時有國王聞佛說法心懷悅豫尋發無上正眞道意棄國損王行作沙門號曰法藏高才勇哲與世超異詣世自在王如來所於^{至乃}是世自在王佛即爲廣說二百一十億諸佛刹土天人之善惡國土之羸妙應其心願悉現與之時彼比丘聞佛所說嚴淨國土皆悉覩見超發無上殊勝之願其心寂靜志無所著一切世間無能及者具足五劫思惟攝取莊嚴佛國清淨之行阿難白佛彼佛國土壽量幾何佛言其佛壽命四十二劫時法藏比丘攝取二百一十億諸佛妙土清淨之行^{上已}

(問うて曰く、彌陀如來、何れの時、何れの佛の^{みもと}所において、この願を發したまえるや。

答えて曰く、壽經に云わく、佛、阿難に告げたまわく、乃往過去久遠無量不可思議無央數劫に錠光如來、世に興出して、無量の衆生を教化し、度脱して、皆、道を得せしめて、すなわち滅度を取りたまえり。

次に如來有^{まし}ます。名づけて光遠と曰う。(乃至)次を處世と名づく。かくのごときの諸佛(五十三佛なり)皆ことごとくすでに過ぎたまえり。

その時、次に佛有ります。世自在王如来と名づく。時に國王有り。佛の説法を聞いて、心に悦豫^{えつちよ}を懐いて、ついで無上正眞の道意を發^{おこ}し、國を棄て王を損^すて、行じて沙門と作り、號して法藏と曰う。高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如来の所に詣で（乃至）ここにおいて世自在王佛、即ち爲に廣く二百一十億の諸佛刹土の天人の善惡國土の麤妙^そを説いて、その心願に應じて、ことごとく現じてこれを與えたまう。時に彼の比丘、佛の所説の嚴淨の國土を聞き、皆ことごとく覩見^{とけん}して、無上殊勝之願を超發す。その心寂靜にして、志、所著^{しよじやく}無く、一切世間に能く及ぶ者無し。五劫を具足して、莊嚴佛國清淨の行を思惟し攝取す。

阿難、佛に白さく、彼の佛の國土の壽量幾何^{いくばく}ぞや。佛の言わく、その佛の壽命四十二劫なり。時に法藏比丘二百一十億の諸佛の妙土の清淨の行を攝取す。（已上）

* 阿弥陀仏が四十八願を立てた因縁について、いつ、何という仏のところ、このような願をおこしたのか教えて欲しい。

それについて答えるならば、『無量寿經』上卷^{（注11）}に、「乃往過去久遠無量不可思議無央數劫」ほどの計り知れない昔に、錠光如来がこの世に出、無量の衆生を教化して迷いの世界から済度し、解脱させ、仏道を得させて、自らは滅度（入涅槃）された。

次に、光遠如来が現れ、その後、処世如来まで五十三仏が同じように衆生を済度して涅槃に入られた。その次に、世自在王如来が現れた時、一人の國王がいて、この仏の説法を聞いて心から満足し、すぐに絶対至上の仏果を求める無上菩提心を起こし、国も王位も捨てて出家修行者となつて、法藏と号された。この法藏比丘は、高い才智と堅固な意志をもち、世に比べるものが無いほど優れていた。その法藏比丘は、世自在王如来の前に詣で、自らの所懐を述べられたのである。

世自在王如来は、法藏比丘の深く広い意志を知ってこれを励まし、広く二百一十億という無量の諸仏の

世界の一つ一つについて、そこにいる人々の善し悪しや、国土の莊嚴の優劣などを詳しく説き、法蔵比丘の願いに応じてことごとく目前に現わされたのである。

法蔵比丘は、世自在王如来の説かれた嚴淨の国土のことを聞き、また目のあたりにして、至上最高の殊勝の本願を立てられたのである。その心は全ての煩惱を超えて本来の静けさを保ち、その志は何ものにもとらわれるものではなく、一切世間で発せられる如何なる本願もそれに及ぶものではなかった。

そしてそれは、五劫という計り知れない長い時間にわたって深く思考され、尊い仏国を建立するための清淨な行を撰め取られたのである。

ここで阿難は、法蔵比丘が五劫の間、思惟したと説かれたことに疑問を抱き、もし世自在王如来が釈尊入滅八十年のような仏であれば五劫思惟の間に入涅槃するのではないかと思ひ、世自在王如来の国土では寿命がどのくらいなのかを尋ねた。すると釈尊は、世自在王如来の寿命は四十二劫であると答えられた。このようにして法蔵比丘は、二百一十億という無量の諸仏の妙土の中から、至高至上の淨土建立のための清淨な行を撰取したと述べられている。

(三) 『大阿彌陀經』の選択

『大阿彌陀經』に説かれる国土の選択について、次のように説かれている。

大阿彌陀經云其佛即選^二擇二百一十億佛國土中諸天人民之善惡國土之好醜^一爲選^二擇心中所欲願^一樓夷互羅佛

此云世自在佛

説^レ經畢曇摩迦^{此云法藏}便^一一^二其心^一即得^二天眼^一徹視悉自見^二二百一十億諸佛國土中諸天人民之善惡國土之好醜^一

即選^二擇心中所欲願^一便結^二得是廿四願經^一平等覺經亦復同之

(大阿彌陀經に云わく、その佛すなわち二百一十億の佛國土の中の諸天人民の善惡國土の好醜を選択し、爲に心中所欲の願を選択す。樓夷互羅佛へここに世自在王佛と云う)。經を説き畢つて曇摩迦へここに法

藏と云う。すなわちその心をもつば一らにして、すなわち天眼を得、徹視してことごとく自ら二百一十億の諸佛の國土の中の諸天人民の善惡國土の好醜を見て、すなわち心中の所願を選択して、すなわちこの二十四願の經を結得す。(『平等覺經』またまたこれに同じ。)

* 『大阿彌陀經』には、樓夷るい互羅佛いごらぶつ(世自在王如来)は二百一十億の諸仏の國土の中の諸天人民の善惡、國土の好醜を選び分け、曇摩迦どんまか(法藏比丘)のために心中に願うところを選択したとある。

このようにして世自在王如来は、法藏比丘のために種々の國土や人々の善し惡しや國土の莊嚴の優劣を説き終えると、法藏比丘はそれを一心に聞いて、天眼によつて二百一十億の諸佛の國土の中を徹底的に透視して比較検討した結果、心中に望む事だけをその中から選択して抜き出されたものが二十四願であると説かれている。

また、異本の『平等覺經』もこれと同じであると述べられている。

そして、その選択したものについては、

此中选择者即取捨義也謂於二百一十億諸佛淨土中捨人天之惡取人天之善捨國土之醜取國土之好也
大阿彌陀經選擇義如是雙觀經意亦有選擇義謂云攝取二百一十億諸佛妙土清淨之行是也選擇與攝取其
言雖異其意是同然者捨不清淨行取清淨之行也上天人之善惡國土之羸妙其義亦然准之應知

(この中の選擇とは、すなわちこれ取捨の義なり。謂わく、二百一十億の諸佛の淨土において、人天の惡を捨て、人天の善を取り、國土の醜を捨て、國土の好を取るなり。

大阿彌陀經の選擇の義かくのごとし。

雙觀經の意また選擇の義有り。謂わく、二百一十億の諸佛の妙土の清淨の行を攝取すと云えるこれなり。選擇と攝取とその言は異なりといえども、その意これ同じ。然れば不清淨の行を捨てて、清淨の行を取るなり。上の天人の善惡、國土の羸妙その義また然なり。これに准じてまさに知るべし。)

* この中の選択というのは、一方を取り、他方を捨てることである。二百一十億の無量の諸仏の浄土について人間・天人の悪を捨てて善を取り、国土の醜を捨て好を取ることをいうのである。

『大阿弥陀経』の選択とあるのと、『双卷経』に攝取とあるのとは表現は違うが意味は同じである。

「二百一十億の諸佛の妙土の清浄の行を攝取す」とあるのは、まさにその意味である。だから煩惱に根ざす不清浄の行を捨てて煩惱に汚されない清浄の行を取るのである。「天人の善悪、国土の僂妙」とあるのも善と妙を取って、悪と僂を捨てるということであると記されている。

(四) 四十八願にみる選択攝取

このように、阿弥陀仏の四十八願は、あらゆる浄土の中から選択し、攝取したものである。具体的に四つの願についてみていくことにする。

夫約_二四十八願_一一往各論_二選擇攝取之義_一者第一無_三惡趣願者_二於_下所_二觀見_一之_二二百一十億土中_上或有有_下三惡趣_一之國土_上或有_下無_三惡趣_一之國土_上即選_下捨其有_三惡趣_一羸惡國土_上選_下取其無_三惡趣_一善妙國土_上故云_二選擇_一也
第二不更惡趣願者於_二彼諸佛土中_一或有_下縱雖_三國中無_二三惡道_一其國人天壽終之後從_二其國_一去更_三惡趣_一之土_上或有_下不_レ更_三惡道_一之土_上即選_下捨其更_三惡道_一羸惡國土_上選_下取其不_レ更_三惡道_一善妙國土_上故云_二選擇_一也
第三悉皆金色願者於_二彼諸佛土中_一或有_下一土之中有_三黃白二類人天_一之國土_上或有_二純黃金色之國土_一即選_下捨黃白二類羸惡國土_上選_下取黃金一色善妙國土_上故云_二選擇_一也
第四無有好醜願者於_二彼諸佛土中_一或有_二人天形色好醜不同之國土_一或有_下形色一類無_レ有_三好醜_一之國土_上即選_下捨好醜不同羸惡國土_上選_下取無_レ有_三好醜_一善妙國土_上故云_二選擇_一也
(それ四十八願に約して、一往各選擇攝取の義を論ぜば、

第一に無三惡趣の願とは、觀見する所の二百一十億の土の中において、あるいは三惡趣有るの國土有り、

あるいは三惡趣無きの國土有り。すなわち、その三惡趣有る羸惡の國土を選捨して、その三惡趣無き善妙の國土を選取するが故に選擇と云うなり。

第二に不更惡趣の願とは、彼の諸佛の土において、あるいはたとい國の中に三惡道無しといえども、その國の人天壽終の後、その國より去って、また三惡趣に更るのに土有り。あるいは惡道に更らざるの土有り。すなわちその惡道に更る羸惡の國土を選捨して、その惡道に更らざる善妙の國土を選取するが故に選擇と云うなり。

第三に悉皆金色の願とは、彼の諸々の佛の土において、あるいは一土の中に黄白二類の人天有るの國土有り。あるいは純黄金色の國土有り。すなわち黄白二類の羸惡の國土を選捨して、黄金一色の善妙の國土を選取するが故に選擇と云うなり。

第四に無有好醜の願とは、彼の諸佛の土において、あるいは人天の形色好醜不同の國土有り。あるいは形色一類にして好醜有ること無きの國土有り。すなわち好醜不同の羸惡の國土を選捨して、好醜有ること無き善妙の國土を選取するが故に選擇というなり。

＊

そこで、四十八願について、一通りそれぞれの選択摂取の意味するところをみると、
法藏比丘が見た所の二百一十億の國土の中において、

第一、無三惡趣（地獄・餓鬼・畜生の無い國）の願

・ 三惡趣が有る國土：羸惡の國土：選捨。

・ 三惡趣が無い國土：善妙の國土：選取するが故に選択。

第二、不更惡趣（人天壽終の後、三惡道に生まれ変わらない）の願

・ 三惡趣に更る國土：羸惡の國土：選捨。

・ 惡道に更らざる國土：善妙の國土：選取するが故に選択。

第三、悉皆金色（全てのものに差別無く皆金色でありたい）の願

・ 黄白二類の人天有る国土：黄白二類の麤惡の国土：選捨。

・ 純黄金色の国土：黄金一色の善妙の國土：選取するが故に選取。

第四に無有好醜（人々の形容に好醜の別の無い）の願

・ 人天の形色好醜不同の国土：麤惡の国土：選捨。

・ 形色一類にして好醜無き国土：善妙の國土：選取するが故に選取。

と第一願から第四願までの選捨、選取選取について述べられている。

(五) 第十八願「念仏往生願」の選取選取

① 第十八願の選捨と選取

第五願から第十七願までは、途中省略して、第十八願「念仏往生願」について、何を選捨して何を選取して選取としたのか、次のように記されているので、特に注目すると、

乃至第十八念佛往生願者於彼諸佛土中或有_下以_二布施_一爲_二往生行_一之土_上或有_下以_二持戒_一爲_二往生行_一之土_上或有_下以_二忍辱_一爲_二往生行_一之土_上或有_下以_二清進_一爲_二往生行_一之土_上或有_下以_二禪定_一爲_二往生行_一之土_上或有_下以_二般若_一爲_二往生行_一之土_上或有_下以_二菩提心_一爲_二往生行_一之土_上或有_下以_二六念_一爲_二往生行_一之土_上或有_下以_二持經_一爲_二往生行_一之土_上或有_下以_二持呪_一爲_二往生行_一之土_上或有_下以_二起立塔像飯食沙門及以孝養父母奉事師長等種種之行_一各爲_二往生行_一之國土等_上或有_下專稱_二其國佛名_一爲_二往生行_一之土_上如_レ此以_二一行_一配_二一佛土_一者是且一往之義也再往論_レ之其義不定或有_下一佛土中以_二多行_一爲_二往生行_一之土_上或有_下多佛土中以_二一行_一通爲_二往生行_一之土_上如_レ是往生行種種不同不可_レ具述也即今選_二捨前布施持戒乃至孝養父母等諸行_一選_二取專稱佛號_一故云_二選捨_一也且約_二五願_一略論_二選擇_一其義如_レ是自餘諸願准_レ之應_レ知

（乃至第十八の念佛往生の願とは、彼の諸佛の土において、あるいは布施を以って往生の行とするの土有り。あるいは持戒を以って往生の行とするの土有り。あるいは忍辱を以って往生の行とするの土有り。

あるいは清進を以って往生の行とするの土有り。あるいは禪定を以って往生の行とするの土有り。

あるいは般若を以って（第一義を信ずる等これなり）、往生の行とするの土有り。あるいは菩提心を以って往生の行とするの土有り。あるいは六念を以って往生の行とするの土有り。あるいは持經を以って往生の行とするの土有り。あるいは持呪を以って往生の行とするの土有り。

あるいは起立塔像、飯食沙門および孝養父母、奉事師長等の種種の行を以って各々往生の行とするの國土等有り。あるいは専らその國の佛名を稱して往生の行とするの土有り。かくのごとく一行を以って一佛の土に配することは、これ且く一往の義なり。再往これを論ぜばその義不定なり。

あるいは一佛の土の中に、多行を以って往生の行とするの土有り。あるいは多佛の土の中に、一行を以って通じて往生の行とするの土有り。かくのごとく往生の行種種不同なり。つぶさに述べべからず。

即ち今は前の布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選捨て専稱佛號を選取す。故に選擇と云うなり。且く五の願に約して、略して選擇を論ずることその義かくのごとし。

自餘の諸願はこれに准じてまさに知るべし。）

＊ 第十八願「念仏往生」願の念仏するものを浄土に往生させたいという誓願を考えると、諸仏の国々には、様々な行をもって往生の行としている國土があるので、それを見ると、

・ 布施（施し）を以って往生の行とする國土。

・ 持戒（戒をまもる）を以って往生の行とする國土。

・ 忍辱（苦を耐え忍ぶ）を以って往生の行とする國土。

・ 清進（努力を惜しまぬ）を以って往生の行とする國土。

- ・ 禪定（心をしずめ統一）を以って往生の行とする国土。
- ・ 般若（根本真理を信じ）を以って往生の行とする国土。
- ・ 菩提心（さとりを求める心をおこす）を以って往生の行とする国土。
- ・ 六念（念仏・念法・念僧・念施・念戒・念天を願う）を以って往生の行とする国土。
- ・ 持経（經典を誦む）を以って往生の行とする国土。
- ・ 持呪（真言・陀羅尼等を称える）を以って往生の行とする国土。
- ・ 起立塔像（堂塔を建て、仏像を造る）、飯食沙門（出家を供養し）および孝養父母（父母に孝養し）、奉事師長（師や長につかえる）等の種々の行を以って各々往生の行とする国土。
- ・ 専らその国の仏名を称して往生の行とする国土。

このように一行を一仏国土に当てはめたのは一応のことであって、さらにくわしくは難しいことである。なぜなら、一仏国土で多くの行を以って往生行とするところもあり、あるいは多くの仏国土で一行を往生行としている国土もあり、往生行は種々不同なので詳しく述べることは難しいのである。

結局、第十八願は、布施、持戒及び孝養父母等の諸行を選捨て、唯ひたすら阿弥陀仏の名号を称えることを選取して本願としたので選択というのである。

以上は五つの誓願について簡略に選択の意を述べたが、他の四十三願についても同様に取捨があることは推して知るべきであると述べている。

② 念仏一行選取には、勝劣・難易の二義

続いて、このように、選捨て、選取された第十八願が、なぜ念仏の一行のみを選取したのか、説かれていく。

問曰普約^二諸願^一選^二捨麤惡^一選^二取善妙^一其理可^レ然何故第十八願選^二捨一切諸行^一唯偏選^二取念佛一行^一爲^二往生本

願「乎答曰聖意難」測不能「たやすく」輒「解」雖「然今試以二義」解「之一者勝劣義二者難易義

（問うて曰わく、普く諸願に約するに麤惡を選捨し、善妙を選取すること、その理、然るべし。

何が故ぞ、第十八願に一切の諸行を選捨し、ただ偏に念佛の一行を選取して往生の本願とするや。

答えて曰わく、聖意測り難し、輒「たやすく」解「すること能はず。然りといえども、今試みに二義を以ってこれを解せば、一には勝劣の義、二には難易の義なり。」

＊ 諸願の麤惡を選捨し、善妙を選取することは理解できるが、どうして第十八願に一切の諸行を選捨して、ただひとえに念佛の一行を選取して往生の本願としたのか教えてほしい。

それについて応えるならば、仏の聖意は深く、我々には推しはかることはできないし、たやすく理解されるものではない。

しかし、今試みに二つの意義を以ってこれを解釈するならば、一には勝劣の義があり、二には難易の義があると述べられている。

さらに、勝劣について説かれていく。

初勝劣者念佛是勝餘行是劣所以者何名號是萬德之所歸也然則彌陀一佛所有四智・三身・十力・四無畏等一切内證功德相好・光明・說法・利生等一切外用功德皆悉攝「在阿彌陀佛名號之中」故名號功德最爲勝也餘行不「然各守一隅」是以爲劣也譬如「世間屋舍」其屋舍名字之中攝「棟梁椽柱等一切家具」棟梁等一名字中不能攝「一切」以之應知然則佛名號功德勝「餘一切功德」故捨「劣取勝」以爲「本願」歟

（初めに勝劣とは、念佛はこれ勝、餘行はこれ劣なり。

所以は何となれば、名號はこれ萬德の歸する所なり。然ればすなわち彌陀一佛の所有あらず四智・三身・十力・四無畏等の一切の内證の功德、相好・光明・說法・利生等の一切の外用げゆうの功德、皆ことごとく阿彌陀佛の名號の中に攝しやうざい在ざいせり。故に名號の功德最も勝とす。

餘行は然らず、各々一隅を守る。ここを以って劣とす。

譬へば世間の屋舎のごとし。その屋舎の名字の中には、棟梁椽柱等の一切の家具を攝すれども、棟梁等の一一の名字の中には一切を攝すること能わず。これを以ってまさに知るべし。然ればすなわち佛の名號の功德は餘の一切の功德に勝れたり。故に劣を捨て、勝を取って、以って本願としたまうか。)

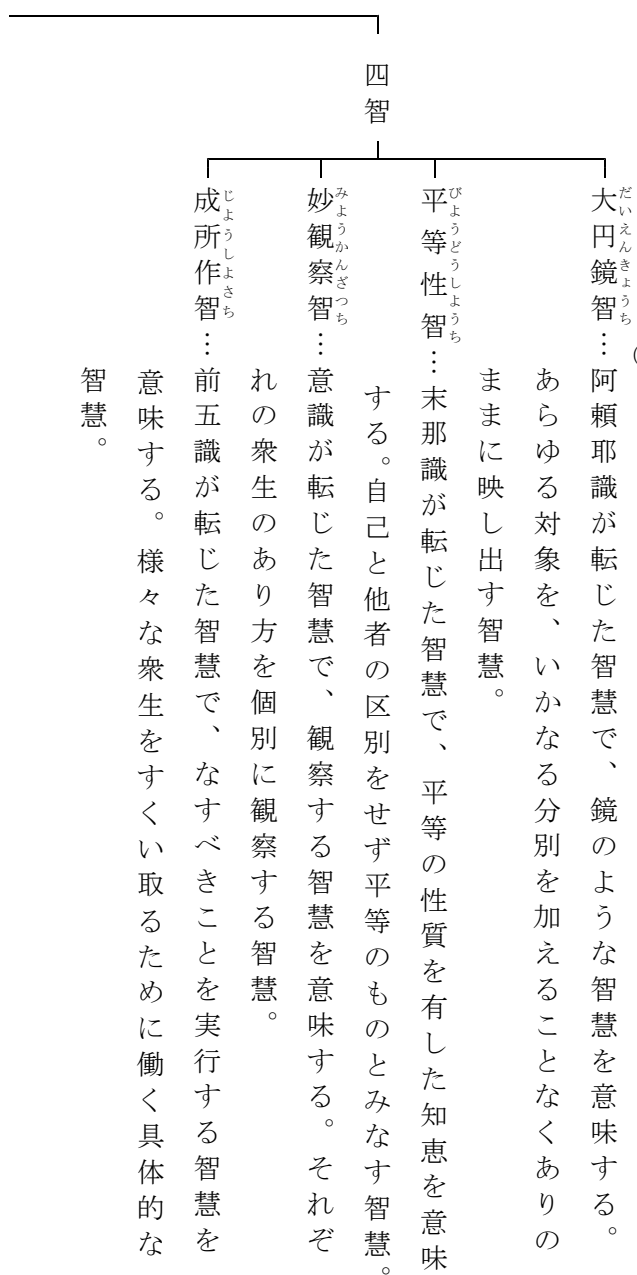
* 勝劣というのは、

・念仏：勝

・諸行：劣

その所依は、「名号是万德之所_レ帰也」であり、形式的に図示すると左図のようになる。

【尚、語句の解説は、『新纂浄土宗大辞典』(注12)を参考にした。】



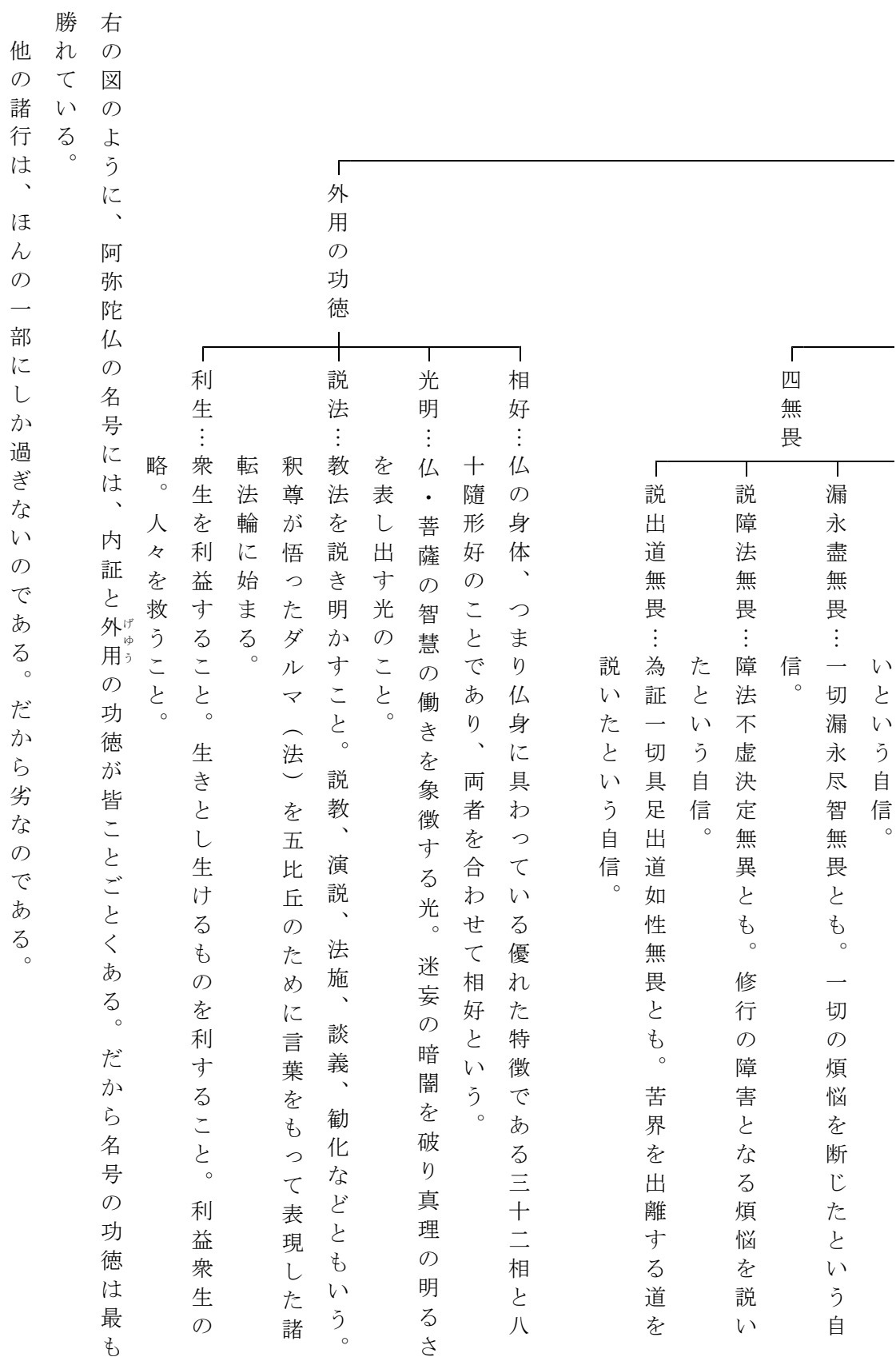
三身

法身：永遠不変にして色も形も有さない真理・真如そのもののこと。
報身：本願を建立し修行によってそれを成就した仏のこと。
応身：衆生済度のために機に応じて現れる仏のこと。

十力

処非処智力：道理にかなうこととかなわないことについて如実に知る力。
業異熟智力：正しく三世の業とその結果との因果関係について如実に知る力。
静慮解脱等持等至智力：あらゆる三昧や解脱について如実に知る力。
根上下智力：あらゆる衆生の能力の優劣について如実に知る力。
種々勝解智力：世間における様々な理解について如実に知る力。
種々界智力：様々な衆生が有する本質について如実に知る力。
遍趣行智力：様々な所に赴く道について如実に知る力。
宿住随念智力：様々な過去世の生涯について如実に知る力。
死生智力：様々な衆生の死生の時や来世の境遇について如実に知る力。
漏盡智力：自らの煩惱が尽きて次に生まれ変わることなく、また他の者の煩惱が尽きたことについて如実に知る力。

正等覺無畏：諸法現等覺無畏とも。一切を覺り、知らないことはな



それを譬えれば、世間で言う家と柱との関係をいうようなものであり、家には、棟、梁、椽、柱等のそれぞれの材料すべてが含まれるが、棟や梁のそれぞれの名に全ての材料を含ませることができないのと同じである。だからこのように仏の名号の功德は他の諸行の功德よりも勝れているのである。

このようなことから劣る諸行を捨て、勝れた念仏を取って本願としたのであろうと説かれている。

＊ 次に難易については、

次難易義者念佛易^レ修諸行難^レ修是故往生禮讚云問曰何故不^レ令^レ作^レ觀直遣^三專稱^二名字^一者有^二何意^一也答曰乃由^三衆生障重境細心麤識颺神飛觀難^二成就^一也是以大聖悲憐直勸專稱^二名字^一正由^二稱名易故相續卽生^一^{上巳}

（次に難易の義とは、念佛は修し易く、諸行は修し難し。
この故に往生禮讚に云わく、問うて曰く、何が故ぞ觀を作さしめずして、ただちに専ら名字を稱せしむるは何の意有るや。

答えて曰わく、すなわち衆生^{さわり}障重く、境細かく、心^{あら}麤く、識^{あが}颺り、神^{たましい}飛びて觀、成就し難きに由ってなり。ここを以って大聖悲憐して、ただちに勸めて、専ら名字を稱せしむ。

正しく稱名の易きが故に相續して、即ち生ずるに由る。已上）

とあるように、「念仏は修し易く、諸行は修し難し。」なのである。

この善導の『往生禮讚偈』一卷^(注13)には、

問曰何故不^レ令^レ作^レ觀直遣^三專稱^二名字^一者有^二何意^一也

答曰乃由^三衆生障重境細心麤識颺神飛觀難^二成就^一也是以大聖悲憐直勸專稱^二名字^一正由^二稱名易^一故相續卽生

とあり、仏や淨土を觀察せずに、専ら名字を称えるのはなぜなのかという問いに対して、衆生は煩惱の障りが重く、仏の境界は極めて微細であるのに心は落ち着きがなく、常に他の影響を受けて動揺しているの

で、甚深微細な觀法の行を成就することは難しいのである。

だから釈尊は、このような衆生を憐れ悲しんで、難しい修行よりも阿弥陀仏の名字を称えることを直に勧めたのである。実に称名の行は誰もががとめ易いので相續して浄土に往生できるのであると答えている。

③ 『往生要集』にみる念仏

＊ 『往生要集』に説かれる念仏の勧め

又往生要集問曰一切善業各有利益各得往生何故唯勸念佛一門答曰今勸念佛非是遮餘種種妙行只是男女貴賤不簡行住坐臥不論時處諸緣修之不难乃至臨終願求往生得其便宜不如念佛上已故知念佛易故通於一切諸行難故不通諸機然則爲令一切衆生平等往生捨難取易爲本願歟
(また往生要集に、

問うて曰く、一切の善業各々利益有つて、各々往生を得。何が故ぞ、ただ念佛の一門を勧むるや。

答えて曰く、今、念佛を勧めることは、これ餘の種々の妙行を遮するには非ず。ただこれ男女貴賤行住坐臥を簡えらばず。時處諸緣を論ぜず。これを修するに難からず。乃至、臨終に往生を願求するに、その便宜を得ること念佛に如かず。へ已上

故に知んぬ、念佛は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然ればすなわち、一切衆生をして平等に往生せしめんが爲に、難を捨て易を取つて本願としたまうか。

また、『往生要集』卷下の「大文第八 念仏証拠」(注14)に、

大文第八念佛證據者

問一切善業各有利益各得往生何故唯勸念佛一門

答今勸念佛非是遮餘種種妙行只是男女貴賤不簡行住坐臥不論時處諸緣修之不难乃至臨終

願_二求往生_一得_二其便宜_一不_レ如_二念佛_一

とあり、一切の善行は、それぞれ利益があつてそれぞれによつて往生できるが、どうして念仏の一門の実践だけを勧めるのかという問いに対し、今、念仏を勧めるのは、種々の勝れた行を否定するものではない。ただこの念仏の一行は、男女貴賤の別なく、行住座臥のどのような時やいかなる場所をも選ばず、容易な行である。また、命終に往生を願う時でも、念仏は適切に便宜を図るものであると答えられている。

つまり、念仏は修し易い行であるから、すべての人びとに通じる法門で有り、他の諸行は修し難く誰にでもできないので、すべての人々には通じない法門である。

だから、阿弥陀仏は、すべての人々を遍く平等に救おうとする大慈悲の心から、難行を捨てて、修し易い念仏の行を選び取つて本願とされたのでなからうかと説かれている。

④ 諸行と『五會法事讃』の念仏選択

* 諸行にみる念仏の選択と『五會法事讃』の念仏の選択

さらに付け加えて、諸行を本願として選択しなかった事由と、法照『五會法事讃』に説かれる念仏誓願の内容が述べられる。

若夫以_二造像起塔_一而爲_二本願_一者貧窮困乏類定絶_二往生望_一然富貴者少貧賤者甚多若以_二智慧高才_一而爲_二本願_一者愚鈍下智者定絶_二往生望_一然智慧者少愚癡者甚多若以_二多聞多見_一而爲_二本願_一者少聞少見輩定絶_二往生望_一然多聞者少少聞者甚多若以_二持戒持律_一而爲_二本願_一者破壞無戒人定絶_二往生望_一然持戒者少破戒者甚多自餘諸行准_レ之應_レ知當_レ知以_二上諸行等_一而爲_二本願_一者得_二往生_一者少不_二往生_一者多然則彌陀如來法藏比丘之昔被_レ催_二平等慈悲_一普爲_レ攝_二於一切_一不_レ以_二造像起塔等諸行_一爲_二往生本願_一唯以_二稱名念佛一行_一爲_二其本願_一也故法照禪師五會法事讃云彼佛因中立_二弘誓_一聞_レ名念_レ我總迎來不_レ簡貧窮將_二富貴_一不_レ簡_二下智與_二高才_一不_レ簡_二多聞持_二淨戒_一不_レ簡_二破

戒罪根深「但使^二廻^レ心多念佛」能令^二瓦礫變成^レ金^{上巳}

（もしそれ造像起塔を以って、本願としたまわば、貧窮困乏^{びんぐこんぼう}の類は定んで往生の望を絶たん。然るに富貴の者は少なく、貧賤の者ははなはだ多し。

もし智慧高才を以って本願としたまわば、愚鈍下智の者は定んで往生の望を絶たん。然るに智慧ある者は少なく、愚癡なる者ははなはだ多し。

もし多聞多見を以って本願としたまわば、少聞少見の輩は定んで往生の望を絶たん。然るに多聞の者は少なく、少聞の者ははなはだ多し。

もし持戒持律を以って本願としたまわば、破壊無戒の人は定んで往生の望を絶たん。然るに持戒の者は少なく、破戒の者ははなはだ多し。自餘の諸行これに准じて知るべし。

まさに知るべし、上の諸行等を以って本願としたまわば、往生を得る者は少なく、往生せざる者は多からん。然ればすなわち彌陀如來、法藏比丘の昔、平等の慈悲に催され、普く一切を攝せんが爲に、造像起塔等の諸行を以って往生の本願としたまわず、ただ稱名念佛の一行を以って、その本願としたまえる。

故に法照禪師の五會法事讃に云わく、彼の佛の因中に弘誓を立つ。名を聞いて我れを念ぜば、すべて迎來せん。貧窮と富貴とを簡^{えら}ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞と淨戒を持つとを簡ばず、破戒と罪根の深きとを簡ばず、ただ心を廻して多く念佛せしむれば、能く瓦礫をして變じて成金と成さしむ。（已上）とあるように、

たとえば、

- ・ 造像起塔を本願としたならば、貧窮困乏^{びんぐこんぼう}の類は往生の望を断たなければならぬ。
- ・ なぜなら富貴の者は少なく、貧賤の者ははなはだ多いからである。
- ・ 智慧高才を以て本願としたならば、愚鈍下智の者は往生の望を断たなければならぬ。

なぜなら智慧ある者は少なく、愚癡^{ぐち}なる者ははなはだ多いからである。

・多聞多見を本願としたならば、少聞少見の輩は往生の望を断たなければならぬ。

なぜならば多聞の者は少なく、少聞の者ははなはだ多いからである。

・持戒持律を本願としたならば、破壊無戒の人は往生の望を絶たなければならぬ。

なぜならば持戒の者は少なく、破戒の者ははなはだ多いからである。

このような諸行をもって本願としたならば、往生を得るものは少なく、往生出来ないものがはなはだ多いことになる。

だから、阿弥陀如来が、昔、法藏比丘として修行された時に、一切の衆生を平等に救わんがために大慈悲心をもって、造像起塔等の諸行を往生の本願とせずに、ただ称名念仏の一行を本願としたのである。

また、法照禪師は『五會法事讃』（『浄土五會念佛略法事儀讃』一卷）^{（注15）}に、

彼佛因中立弘誓 聞名念我摠迎來 般舟三昧樂願往生 專心念佛見彌陀无量樂は各項とも略

（彼の佛の因中に弘誓を立つ。名を聞いて我れを念ぜばすべて迎來せん。）

不簡^レ貧窮將^二富貴^一 不簡^二下智與^二高才^一 （貧窮と富貴とを簡^{えち}ばず、下智と高才とを簡^{えち}ばず）

不簡^二无非浄土業^一 不簡^二外道闡堤人^一 （无非浄土業を簡^{えち}ばず、外道闡堤人を簡^{えち}ばず。）

不簡^二長時修^二苦行^一 不簡^二今日始生^二心^一 （苦行長時修を簡^{えち}ばず、今日始めに心を生ずを簡^{えち}ばず）

不簡^二多聞持^二淨戒^一 不簡^二破れた戒罪根深^一 （浄戒を持し多聞を簡^{えち}ばず、破戒と罪根の深きとを簡^{えち}ばず）

但使^二廻^二心多念佛^一 能令^二瓦礫變成^二金^一 （ただ心を廻して多く念佛せしむれば、能く瓦礫をして變じて成金と成さしむ）

と説いてあるように、阿弥陀仏が因位の時に誓願されたその本願は、

・名号を聞いて称名念仏する者のためには、來迎する。

・貧窮と富貴も問わず、下智と高才も選ばない。

・無非浄土業も外道闡提人も選ばない。

・苦行を長時修するものも、今日始めて心に決めたものも選ばない。

・浄戒を保ち多聞するものも、また破戒と罪根の深いものも選ばない。

・ひたすら心を傾けて多くの念仏をすれば、まさに瓦礫のような凡夫を浄化して金と成すように、往生浄土の菩薩とするようなものである。

と述べられている。

⑤ 本願、已に成就したまえり

＊ 法藏菩薩の四十八願は、すでに成就したものか、それともいまだに成就していないのか、問答される。

問曰一切菩薩雖立其願或有已成就亦有未成就未審法藏菩薩四十八願已爲成就將爲未成就也

答曰法藏誓願一成就何者極樂界中既無三惡趣當知是則成就無三惡趣之願也何以得知卽願成就文云亦

無地獄餓鬼畜生諸難之趣是也又彼國人天壽終之後無更三惡趣當知是則成就就不更惡趣之願也以何得

知卽願成就文云又彼菩薩乃至成佛不更惡趣是也又極樂人天無有一人不具三十二相當知是則成就

具三十二相願也以何得知卽願成就文云生彼國者皆悉具足三十二相是也如是初自無三惡趣願終至

得三法忍願一一誓願皆以成就第十八念佛往生願豈孤以不成就乎然則念佛之人皆以往生以何得知卽念佛

往生願成就文云諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國卽得往生住不退轉是也凡四

十八願莊嚴淨土華池寶閣無非願力何於其中獨可疑惑念佛往生願乎加之一願終云若不爾者不

取正覺而阿彌陀佛成佛已來於今十劫成佛之誓既以成就當知一一之願不可虛設故善導云彼佛今現在世

成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生^{上巳}

(問うて曰わく、一切の菩薩はその願を立つといえども、あるいはすでに成就せる有り、またいまだ成就せざる有り。未^{いぶか}審し、法藏菩薩の四十八願はすでに成就したまうとやせん、はたいまだ成就したまわずとやせん。

答えて曰わく、法藏の誓願一一に成就したまえり。何となれば、極樂界の中にすでに三惡趣無し。まさに知るべし。これ則ち無三惡の願を成就するなり。何を以つてか知ることを得たる。

即ち願成就の文に、また地獄、餓鬼、畜生諸難の趣無しと云えるこれなり。また彼の國の人天^{いのち}壽終つて後、三惡趣に更^{かえ}ること無し。まさに知るべし、これすなわち不更惡趣の願を成就するなり。何を以つてか知ることを得たる。即ち願成就の文に、また彼の菩薩乃至成佛まで惡趣に更らずと云えるこれなり。

また極樂の人天、一人として三十二相を具さざること有ること無し。まさに知るべし。これ則ち具三十二相の願を成就せることを。何を以つてか知ることを得たる。即ち願成就の文に、彼の國に生ずる者は皆悉く三十二相を具足すと云えるこれなり。

かくのごとく、初め無三惡趣の願より、終り得三法忍の願に至るまで、一一の誓願、皆以つて成就せり。第十八の念佛往生の願、あに孤^{ひと}り以つて成就したまわざらんや。然れば則ち念佛の人、皆以つて往生す。何を以つてか知ることを得たる。即ち念佛往生の願成就の文に、あらゆる衆生、その名號を聞いて信心歡喜して、乃至一念、至心に廻向し、彼の國に生ぜんと願すれば、即ち往生を得て不退轉に住すと云えるこれなり。およそ四十八願、淨土を莊嚴す。華池寶閣、願力に非ずということ無し。何ぞその中において獨り念佛往生の願を疑惑すべきや。しかのみならず、一一の願の終りに、もし爾らずば正覺を取らじと云えり。而るに阿彌陀佛成佛したまいてより已^{この}來、今において十劫なり。成佛の誓いすでに以つて成就せり。まさに知るべし、一一の願虚しく設^{もう}くべからず。

故に善導の云わく、彼の佛、今現に世に在^{ましま}して成佛したまえり。まさに知るべし、本誓の重願虚しから

ず、衆生稱念すれば必ず往生を得。(已上)

とあるように、一切の菩薩は、自ら本願を立て、その本願が成就するように修行に励むのであるが、すでに成就されて仏になっているものも有り、いまだに成就せず修行に励んでいる菩薩もいる。

今、この法藏菩薩の四十八願はすでに成就したものであるのか、それともいまだに成就していないものだろうかという問いに対して、法藏比丘の誓願の一つ一つは成就していると答えている。

なぜならば、

・第一願の無三惡趣の願^(注16)について、「極樂界の中にすでに三惡趣無し。まさにこれすなわち無三惡の願を成就せることを知るべし。」とあり、三惡趣願成就の文に「亦無^二地獄餓鬼畜生諸難之趣^一」(また地獄・餓鬼・畜生、諸難の趣無く、)とある。

・第二願の不更惡趣の願^(注17)について、「彼の國の人天、壽^{いのち}終つて後、三惡趣に更^{かえ}ること無し。これすなわち不更惡趣の願を成就するなり。」とあり、不更惡趣願成就の文に「又彼菩薩乃至成佛不^レ更^二惡趣^一」(またかの菩薩、乃至成佛まで、惡趣に更らず)とある。

・第二十一願の具三十二相の願^(注18)について、「また極樂の人天、一人として三十二相を具さざること有ること無し。まさに知るべし。これ則ち具三十二相の願を成就せることを。」とあり、具三十二相願成就の文に、「生^二被國^一者皆悉具^二足三十二相^一」(かの國に生ずる者は、皆悉く三十二相を具足す)とある。

このように、第一願の無三惡趣の願から、第四十八願の得三法忍の願に至るまで、一つ一つの誓願は、皆、成就しているのである。どうして第十八の「念佛往生の願」だけが成就していないということが出来るであろうか。だから念仏するものは、皆、往生できるのである。

それは、念佛往生の願成就の文^(注19)に、

諸有衆生聞^二其名號^一信心歡喜乃至一念至心廻向願^レ生^三彼國^一即得^二往生^一住^中不退轉^上

（あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜して、乃至一念、至心に廻向して、かの国に生ぜんと願すれば、すなわち往生を得て、不退轉に住す）

とあるからである。

このように四十八願がすべて成就しており、その本願の成就によって、極樂浄土は莊嚴されているといふことができるのである。寶蓮華や寶池や寶樓閣も、すべて仏の願力によって出来ているのである。

どうしてその中から「念仏往生の願」だけに疑惑をもつのだろうか。

そればかりか、一つ一つの願の終わりに^(注20)

若不^レ爾者不^レ取^二正覺^一

（もししからずんば、正覺をとらじ）

と誓われているのである。

さらに、『阿彌陀經』^(注21)にも、

阿彌陀佛成佛已來於^レ今十劫

（阿彌陀佛、成佛より已來、今において十劫なり。）

と、今からすでに十劫も前に、成仏の誓願は成就していることがわかるのである。だから一つ一つの願は決して虚しく設けられたものではないのである。

だから、善導は、『往生礼讃』^(注22)で『如無量寿經云』として取り上げ、

彼佛今現在^レ世成佛當^レ知本誓重願不^レ虚衆生稱念必得^二往生^一

（彼の佛、今、現に世に在^{ましま}して成佛したまえり。まさに知るべし。本誓の重願虚しからず。衆生稱念すれば、必ず往生することを得。）

と説き、阿弥陀仏は、今、現に成佛されて浄土におられるので、深重の大悲からおこされた誓願は決して虚事ではなく、すべての人が名号を称えれば必ず浄土に生まれることができる、と述べているのである。

⑥ 「念声は一」と「乃至十念と下至十声」

『無量寿経』には「十念」、『観経疏』には「十声」とあり、また『無量寿経』に「乃至十念」とある。『往生礼讃』には「下至十声」とあるのは、どのような解釈をすればよいのか、問答によって述べられる。問曰経云「十念」釋云「十聲」念聲之義如何答曰念聲是一何以得「知觀經下品下生云令「聲不絶具」足十念」稱「南無阿彌陀佛」稱「佛名」故於「念念中」除「八十億劫生死之罪」今依「此文」聲是念念即是聲其意明矣加之大集月藏經云大念見「大佛」小念見「小佛」感師釋云大念者大聲念佛小念者小聲念佛故知念即是唱也問曰經云「乃至」釋云「下至」其意如何答曰乃至與「下至」其意是一經云「乃至」者從「多向」小之言也多者上盡「一形」也少者「下至」十聲一聲等」也釋云「下至」者下者對「上之言」也下者下至「十聲一聲等」也上者上盡「一形」也上下相對之文其例惟多宿命通願云設我得「佛國中」人天不「識」宿命「下至」不「知」百千億那由他諸劫事「者」不「取」正覺「如」是五神通及以光明壽命等願中一一置「下至之言」是則從「多至」少以「下對」上之義也例「上八種之願」今此願乃至者即是下至也是故今善導所「引釋」下至之言其意不「相違」

（問うて曰わく。經に十念と云い、釋に十聲と云う。念聲の義、如何。

答えて曰わく、念聲はこれ一なり。何を以ってか知ることを得たる。觀經の下品下生に云わく、聲をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するが故に念念の中に於いて八十億劫の生死の罪を除くと。今、この文に依るに、聲はこれ念なり、念は即ちこれ聲なること、その意明らけし。しかのみならず、大集月藏經に云わく、大念は大佛を見、小念は小佛を見ると。

感師釋して云わく、大念とは大聲の念佛、小念とは小聲の念佛なりと。故に知んぬ、念はすなわちこれ唱

なり。

問うて曰わく、經に乃至と云い、釋に下至と云う。その意、如何。

答えて曰わく、乃至と下至とその意これ一なり。經に乃至と云えるは、多より少に向かう言なり。

多とは上一形を盡す。少とは下十聲一聲等に至るなり。釋に下至と云えるは、下とは上に對するの言なり。下とは下十聲一聲等に至るなり。上とは上一形を盡すなり。上下相對の文、その例これ多し。

宿命通の願に云わく、もし我れ佛を得たらんに、國中の人天宿命を識らずして、下百千億那由他諸劫の事を知らざるに至らば、正覺を取らじと。

かくのごとく五神通および光明、壽命等の願の中に、一一に下至の言を置く。これ則ち多より少に至り、下を以って上に對するの義なり。上の八種の願に例するに、今この願の乃至とは、即ちこれ下至なり。

この故に、今、善導の引釋する所の下至の言、その意、相違せず。）

* 「念声は一」について

右のように、『無量寿經』には「十念」^(注23)といい、善導の『觀經疏』の解釈には「十声」^(注24)とあるが、

この「念」と「声」の意義はどのようなかという問いに對して、「念声はこれ一なり」と答えている。

それはなぜかという、觀經の下品下生^(注25)に、

如^レ是至心^下聲不^レ絶具^二足十念^一稱^二南無阿彌陀佛^一稱^二佛名^一故於^二念念中^一除^二八十億劫生死之罪^一

(かくの如く至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿彌陀仏と稱す。佛名を稱するが故に、念念の中に於いて、八十億劫の生死の罪を除く。)

とあるように、心の底から信じて南無阿彌陀仏と十念を称えれば、仏名を称えたことによって、その一念一念の中に、八十億劫もの長い間に犯した深い生死の罪を除くことができるというこの經文にあるように、「声」は「念」であり、「念」はすなわち「声」であることが明らかであると述べられている。

また『大集月藏經』^(注26)【本文の大集月藏經は大集日藏經の誤り】の、

乃至見佛小念見小大念見大

を引き、大念は大仏を見、小念は小仏を見るということを述べている。

さらに、これを引いた懷感は『釈淨土群疑論』^(注27)で、

故大修日藏分經言大念見_レ大佛_二少念見_二小佛_一大念者大聲稱_レ佛也小念者小聲稱_レ佛也

（故に大修日藏分の經に言わく。大念は大佛を見、小念とは小佛を見ると。大念とは大聲に佛を稱するなり。小念とは小聲に佛を稱するなり。）

と解釈していることから、「念」とは称えることであると説いている。

* また、經には「乃至」といい、その釈には「下至」といつているが、その意はどうかという問いに答えて、「乃至」と「下至」とは、その意は同一であると述べられている。

『無量壽經』に「乃至十念」というのは、多より少に向かうときの言葉で、多とは生涯を終えるまで念仏を称えるものから、少とは命終のときの十声一声に至るまでということである。

善導の釈した『觀念法門』や『往生礼讃』に「下至十声」とあるのは、下とは上に対する言葉であり、下は命終のときの十声一声等に至るまでのことである。これに対して上とは生涯を尽くすまで念佛に励むものをいうのである。

このような上下相對の文の例は他にも多くある。

『無量壽經』第五願の宿命智通の願^(注28)、

設我得_レ佛國中人天不_レ識_二宿命_一下至_二不知_二百千億那由他諸劫事_一者不_レ取_二正覺_一

（もし我れ佛を得たらんに、国中の人天、宿命を識らず、下、百千億那由他諸劫の事を知らざるに至らば、正覺をとらじ。）

をはじめ、第六願の天眼智通てんげんちつうの願、第七願の天耳智通てんにちつうの願、第八願の他心智通たしんちつうの願、第九願の神境智通じんきょうちつうの願〔各願の呼称は『新纂浄土宗大辞典』六〇四頁による。〕の「五神通」の願や第十二願の光明無量の願や第十三願の寿命無量の願それぞれに「下至」と置かれており、これはいずれも多い方から少ない方に向かい、上に對する下の意味に使われているものである。

だから、第五、第六、第七、第八、第九、第十二、第十三、第十四の八種の願の例からすれば、今の第十八願の「乃至」は「下至」と同じなのである。

このようなことから、善導が經文を引き、「下至」と解釈した意味は相違するものではないということが述べられている。

⑦ 第十八願の願名

＊ 第十八願の願名について、他の諸師と異なり善導が「念仏往生」としている理由について述べられる。但善導與諸師其意不同諸師之釋別云「十念往生願」善導獨總云「念佛往生願」諸師別云「十念往生願」者其意即不周也所「以然」者上捨「一形」不捨「一念」之故也善導總言「念佛往生願」者其意即周也所「以然」者上取「一形」下取「一念」之故也

（ただし善導と諸師とその意不同なり。諸師の釋には別して十念往生の願と云う。善導獨り總じて念佛往生の願と云えり。諸師の別して十念往生の願と云えるは、その意すなわち周あまねからず。然る所以は、上一形を捨て、下一念を捨つるが故。善導の總じて念佛往生の願と云えるは、その意すなわち周し。然る所以は、上一形を取り、下一念を取るが故。）

のように、第十八願の願名については、善導と他の諸師とは同じではなく、諸師の解釈は「十念往生」の願というが、善導だけは十念と限定しないで広い意味の「念仏往生」の願と名付けている。

なぜならば、第十八願文に「乃至」とあることによって、多いものは、生涯を通して念仏を行い、少ないものは、臨終の時の一声の念仏を称えるという幅の広いとらえ方ができるのである。ところが、「十念」と限定することによって、多いものと少ないものを捨てることになり、一生涯の念仏者や命終の十声や一声の念仏者が漏れることになってしまうのである。

だから、善導は、第十八願の願意は、一生涯の念仏者も命終の一声の念仏者も含まれるという意図のもとに「念仏往生」の願としたと述べられている。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第三 唯念佛往生本願章)の絵相について

高田敬輔が描く、第三章(第三 唯念佛往生本願章)の絵相は、

於^レ是世自在王佛即爲廣説^二二百一十億諸佛刹土天人之善惡國土之麤妙^一應^二其心願^一悉現與^レ之時彼比丘聞^二佛所説嚴淨國土^一皆悉覩見越發無上殊勝之願

と本文に記されるように、世自在王如来が、二百一十億諸佛の刹土の天人の善惡、國土の麤妙を説いて、法藏比丘の願いに応じて、多数の仏の世界を目の前に現わし給うたのである。それらを覩見した法藏比丘は、その中から最も勝れた点を選んで自分の世界を構えたいと願って、この上ない尊い誓願を立てられたのである。その様子を次頁のような絵相として描かれる。

ちなみに、高田敬輔は、世自在王如来が説いた二百一十億諸佛の刹土を、一樓閣を一十億の諸仏の刹土として、二十一の樓閣を画面上に象徴的に描いている。

また、この第三章のみに、最上段中心の第七章の阿弥陀仏からの攝取不捨世の光明が注がれていない。それは、当然のことであるが、第三章の出家者は、阿弥陀仏の前身である法藏比丘であることから、自らの光明を自らが受けることはないからである。

だから、その光明は、法蔵比丘の眼前を通過して、第三章の下段に位置する第八章の念仏の行者に注がれる構図になっている。

高田敬輔「選択集十六章之図」（第三 唯念佛往生本願章）の絵相



《絵相の部分構成》

* 標章……第三 唯念佛往生本願章

* 仏……世自在王仏。

* 出家者……法蔵比丘。

* 堂宇……世自在王仏の背後の堂宇は、二十一の樓閣。

二百一十億諸佛の刹土を、二十一の樓閣で表して、一樓閣を一十億の諸仏の刹土として描いている。

* 光明……第七章阿弥陀仏の攝取不捨の光明は、当然のこととして、阿弥陀仏の前身である法蔵比丘には注がれず、眼前を通過して、下段の第八章の念仏行者に注がれる。

六 まとめ

以上のように、阿弥陀仏が称名念仏を極樂浄土往生の本願往生行として選択選取し、他の諸行を選捨する様相をみたことにより、次のようなことを知ることができる。

① 高田敬輔の描いた第三章の絵相は、阿弥陀仏が因位の時に、世自在王仏から二百一十億諸佛の刹土を顕現され、その中から極樂浄土建立に相応しい莊嚴とそれを成就させる清浄の行を比較検討して選択選取し、四十八願の誓願を立てられた場面である。

② 絵相の場面構成は、世自在王仏とその御前に合掌して坐す法蔵比丘、世自在王仏の背後には、二百一十億諸佛の刹土を象徴する二十一の楼閣が描かれていること。

③ 標章に「唯念佛往生本願章」としたのは、一切の衆生を極樂浄土に往生させるために、数ある往生の行の中から、特に、ただ念仏を称える一行を選取して、往生の本願として立て給うたことを強調するために「唯念仏」とし、それが「往生本願」であることを述べた「章」であるとしたこと。

④ 四十八願の誓願を立て、中でも第十八願の念仏の一行を選取した願意は、「勝劣の義」であり、さらに「難易の義」であるということが、読み取れる場面であること。

『無量寿經』（浄土宗全書第一卷七頁）

善導『觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門』（『觀念法門』）一卷（浄土宗全書第四卷二二七頁）

前掲書 善導『觀念法門』一卷（浄土宗全書第四卷二三三頁）

善導『往生禮讃偈』一卷（浄土宗全書第四卷三七六頁）

『無量寿經』卷上（浄土宗全書第一卷七頁）

『拾遺黒谷語燈録』卷第六 十七丁表「示或人詞第二」

記主『選擇傳弘決疑鈔 卷第二』（浄土宗全書第七卷二四二頁）

「爲已成佛等の文」とは

*『無量寿經』「法藏菩薩今已成佛現在西方去此十萬億刹其佛世界名曰安樂」（浄土宗全書第一卷十二頁）

*『阿弥陀經』「阿彌陀佛成佛已來於今十劫」（浄土宗全書第一卷五三頁）

『新浄土宗辞典』二七八頁 昭和四十九年刊 隆文館

『源信 往生要集』（大文第四 正修念仏 第三 作願文 初 行相）二四八頁（一九七二年刊 徳間書店）

『無量寿經』卷上（浄土宗全書第一卷五頁）

『新纂 浄土宗大辞典』平成二十八年刊 浄土宗

善導『往生礼讃偈』一卷（浄土宗全書第四卷三五六頁）

源信『往生要集』卷下「大文第八念佛證據」（浄土宗全書第十五卷一二八頁）

法照『五會法事讃』（『浄土五會念佛略法事儀讃』一卷）（浄土宗全書第六卷六八六頁）

無三惡趣の願

《第一願…設我得佛國有地獄鬼畜生者不取正覺》

【第一願願成就の文】「亦無地獄餓鬼畜生諸難之趣」（『浄土宗全書』第一卷一二頁）

(注8)(注7)(注6)(注5)(注4)(注3)(注2)(注1)

(注16)(注15)(注14)(注13)(注12)(注11)(注10)(注9)

(注17) 不更惡趣の願

《第二願…設我得_レ佛國中人天壽終之後復更_二三惡道者不_レ取_二正覺_一》

【第二願願成就の文】「又彼菩薩乃至成佛不_レ更_二惡趣_一」（『浄土宗全書』第一卷二二頁）

(注18) 具三十二相の願

《第二十一願…設我得_レ佛國中人天不_二悉成_二滿三十二大人相者不_レ取_二正覺_一》

【第二十一願願成就の文】「生_二被國_一者皆悉具_二足三十二相_一」（『浄土宗全書』第一卷二二頁）

(注19) 念佛往生の願

《第十八願…設我得_レ佛十方衆生至心信樂欲_レ生_二我國_一乃至十念若不_レ生者不_レ取_二正覺_一唯除_二五逆誹謗正法_一》

【第十八願願成就の文】「諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向願_レ生_二彼國_一即得_二往生_一住_中不退轉_上」（『浄土宗全書』第一卷一九頁）

『無量壽經』（『浄土宗全書』第一卷七頁）

『阿弥陀經』（『浄土宗全書』第一卷五三頁）

前掲(注4)『往生礼讃』（『浄土宗全書』第四卷三七六頁）

『無量壽經』（『浄土宗全書』第一卷五〇頁）

『觀經玄義分』卷第一（『浄土宗全書』第二卷一〇頁）

『觀無量壽經』下品下生（『浄土宗全書』第一卷五〇頁）

『大集月藏經』（『大方等大修經』卷第四十三 日藏分送使品第九《『大正新脩大藏經』一三二八五頁c27》）

懷感『釋浄土群疑論』卷第七（『浄土宗全書』第六卷一〇六頁）

『無量壽經』第五願 宿命智通の願（『浄土宗全書』第一卷六頁）

(注20) (注21) (注22) (注23) (注24) (注25) (注26) (注27) (注28)

第四項 「第四 三輩念仏往生章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「無量寿経曼荼羅」の標章

第四 三輩念仏往生章

二 『選択本願念仏集』の篇目

三輩念仏往生之文

(三輩念仏往生の文)

* 前章では、浄土往生行には四十八願の誓願のもとに開かれた念仏の一行だけであることを認識したので、今章では、『無量寿経』に説かれる三輩の行をみることによって、改めて念仏往生の本義を深める章である。

三 『選択本願念仏集』の引文

浄土往生を願う念仏の行者の素質や修行から、上輩・中輩・下輩の三種に分けられることを『無量寿経』の経文を引いて説示している。

まず初めに、上輩^(注1)について、

無量寿経下云佛告阿難十方世界諸天人民其有至心願生彼國凡有三輩其上輩者捨家棄欲而作沙門發菩提心一向專念無量寿佛修諸功德願生彼國此等衆生臨壽終時無量寿佛與諸大衆現其人前即隨彼佛往生其國便於七寶華中自然化生住不退轉智慧勇猛神通自在是故阿難其有衆生欲於今世見無量寿佛應發無上菩提之心修行功德願生彼國

(無量壽經の下に云わく、佛、阿難に^{つげたま}告^{つげたま}わく、十方世界の諸天人民、それ至心有りて、彼の國に生ぜんと願ずるに、凡そ三輩有り。

その上輩とは、家を捨て欲を棄てて沙門と作り、菩提心を發こし、一向に専ら無量壽佛を念じ、諸々の功德を修して、彼の國に生ぜんと願ず。これらの衆生、壽終に臨む時、無量壽佛、諸々の大衆とともに、その人の前に現ず。即ち彼の佛に随いて、其の國に往生し、^{すなわ}便ち七寶の華の中に於いて、自然に化生し、不退轉に住す。智慧勇猛に、神通自在なり。この故に、阿難、それ衆生有りて、今世に無量壽佛を見奉らんと欲せば、まさに無上菩提の心を發こし、功德を修行して、彼の國に生ぜんと願ずべし。)

* 『無量壽經』に説かれる上輩は、家を捨て欲を棄てて出家修行者となり、菩提心を發こしてひたすらに阿弥陀仏を念じ、諸々の善根功德を積んで、彼の淨土に往生したいと願うものをいうのである。

阿弥陀仏は、これらの人々が命終を迎えた時に、淨土の諸々の聖衆とともに、その人の目前に來迎し給うので、その後随つて淨土に往生し、七寶の蓮華の中に自然に化生して、再び迷いの世界に墮ちこむことが無く、智慧もすぐれて勇猛に働き、神通自在の力が備わるのである。

だから、阿難、もしこの世において無量壽佛を見奉らんと願う人があれば、無上の菩提心を發こし、善根功德を修行して、淨土に往生したいという願いを發こすべきである、と説かれている。

次に、中輩^(注2)については、

佛語^二阿難^一其中輩者十方世界諸天人民其有^二至心^一願^レ生彼國^二雖^レ不^レ能^レ行作^二沙門^一大修^中功德^上當^下發^二無上菩
提之心^一一向專念^甲無量壽佛^上多少修^二善奉^二持齋戒^一起^二立塔像^一飯^二食沙門^一懸^レ繪然^二燈散^二華燒^二香以^レ此廻向願^レ
生^二彼國^一其人臨^レ終無量壽佛化^二現其身^一光明相好具如^二眞佛^一與^二諸大衆^一現^二其人前^一即隨^二化佛^一往^二生其國^一住^二
不退轉^一功德智慧次如^二上輩者^一也

(佛、阿難に^{つげたま}語^{つげたま}わく、其の中輩とは、十方世界の諸天人民、それ至心有りて、彼の國に生ぜんと願ずるに、

行じて沙門と作り、大いに功德を修すること能わずと雖も、當に無上菩提の心を發こし、一向に専ら無量壽佛を念ずべし。多少に善を修し、齋戒を奉事し、塔像を起立し、沙門に飯食し、繪を懸け、燈を然し、華を散し、香を焼き、これを以って廻向して彼の國に生ぜんと願ず。其の人終わりに臨みて、無量壽佛、その身を化現したまう。光明相好、具に眞佛の如し。諸々の大衆とともに、その人の前に現じ給う。即ち化佛に随いて其の國に往生して、不退轉に住す。功德智慧、次いで上輩の者の如し。

＊ 続いて中輩のものについては、十方世界の諸々の天人民であつて、眞實の心をもつて淨土に往生したいと願うが、上輩のもののように出家をして大いに善根功德を修すことはできなくても、無上の菩提心を發こしてひたすら阿弥陀仏を念ずるものをいうのである。

これらの人々は、自己の力量に依じて善行を修め、八齋戒を奉事し、塔像を造立し、出家修行者に飲食を施して供養し、仏前に幡蓋を懸け、燈明を灯し、散華、焼香につとめ、このような修善をして淨土に往生したいと願うならば、阿弥陀仏は、その人が命終の時にその身を化現して來迎し給うのである。

その化身の光明はすぐれ、相好も尊く、まさに眞仏のようであり、淨土の諸々の聖衆とともに行者の前に現れるのである。その化仏の後に随つて淨土に往生し、再び迷いの世界に墮ちこむことが無く、その勝れた功德や智慧は、上輩のものに次いで得られるのである。

さらに、下輩^(注3)については、

佛告阿難其下輩者十方世界諸天人民其有至心欲生我國暇使不能作諸功德當下發無上菩提之心一向專意乃至十念念無量壽佛願生其國若聞深法歡喜信樂不疑惑乃至一念念於彼佛以至誠心願生其國此人臨終夢見彼佛亦得往生功德智慧次如中輩者也

(佛、阿難に告わく、その下輩とは、十方世界の諸天人民、それ至心有りて、彼の國に生ぜんと欲せんに、たとい諸々の功德を作すこと能わずとも、當に無上菩提の心を發こし、一向に意を専らにして、乃至十念、

無量壽佛を念じて、その國に生ぜんと願ずべし。若し深法を聞きて歡喜信樂して、疑惑を生ぜず、乃至一念、彼の佛を念じ、至誠心を以つて、其の國に生ぜんと願すれば、此の人、終わりに臨みて、夢に彼の佛を見奉りて、また往生を得。功德智慧、次いで中輩の者の如し。」

* 仏が阿難に語るには、下輩のものとは、十方世界の諸々の天人民であつて、眞實の心をもつて淨土に往生したいと願うが、諸々の善根功德を行ずるまではいかないものの、常に無上の菩提心をおこして、ひたすらに生涯を通して、阿弥陀仏を念じて十念し、淨土に往生したいと願うものを用いのである。

もし、奥深い念仏の法を聞いて心から喜び、疑うことをせず、生涯、念仏を称えるものも、最後に一念するものも、命終の時には夢中に彼の仏を見奉り、往生することができるのである。そして、中輩のものに次いで、智恵や功德を得ることができる、と説かれている。

四 『選択本願念仏集』の私釈

前項の『無量壽經』の引文に続いて、法然の私釈が、次の三つの観点で述べられる。

初めに、三輩にそれぞれ余行が説かれるのに、なぜ、ただ念仏往生を明かすのか。次に、どうして、余行を棄てて、ただ念仏というのか、三つの事由が述べられる。

さらに、まとめとして、廃立、助正、傍正の三義が説かれる。

(一) 『無量壽經』三輩の文に説かれる余行

まず、初めに三輩の文に説かれる余行について述べられる。

私問曰上輩文中念佛之外亦有捨家棄欲等餘行中輩文中亦有起立塔像等餘行下輩文中亦有菩提心等餘行何故唯云念佛往生乎答曰善導和尚觀念法門云又此經下卷初云佛說一切衆生根性不同有上中下隨其根性佛皆勸專念無量壽佛名其人命欲終時佛與聖衆自來迎接盡得往生依此釋意三輩俱云念佛往生也

(私に問うて曰わく。上輩の文の中に、念佛の外にまた捨家棄欲等の餘行有り。中輩の文の中にまた起立塔像等の餘行有り。下輩の文の中に、また菩提心等の餘行有り。何が故ぞ、唯、念佛往生と云うや。

答えて曰わく。善導和尚の、觀念法門に云わく、またこの經の下巻の初めに云わく。

佛、説きたまう。一切衆生の根性不同にして、上中下有り。その根性に随いて、佛、みな勧めて専ら無量壽佛の名を念ぜしむ。その人、命終らんと欲する時、佛、聖衆とともに自ら來りて迎接して盡く往生を得せしむと。

この釋の意に依りて、三輩ともに念佛往生と云うなり。)

* 上輩の文には、念仏の他に捨家棄欲等の餘行が有り、中輩の文の中には、起立塔像等の餘行が有り、下輩の文には、菩提心等の餘行が有るのに、どうしてこの章には三輩はただ念仏往生を明かすと云うのか疑問であるという問いに対して、それは善導和尚の『觀念法門』に説かれているからであるという。

『觀念法門』^(注4)の攝生増上縁のところ、

又此經下巻初云佛說一切衆生根性不同有「上中下」隨「其根性」佛皆勸專念「無量壽佛名」其人命欲「終時佛與「聖衆」自來迎接盡得「往生」此亦是攝生増上縁

(またこの經の下巻の初めに云わく。佛、説きたまわく、一切衆生の根性、不同にして、上中下有り。

その根性に随いて、佛、みな勧めて専ら無量壽佛の名を念じせしむ。その人、命終わらんと欲する時、佛、聖衆とともに自ら來たりて迎接して、盡く往生を得しむと。これまた是れ攝生増上縁なり。)

と『無量壽經』の下巻の初めにあるように、衆生には生まれつき能力と素質に異なりが有り、上・中・下の三種に分けられるが、仏はいずれにも通じて専ら阿弥陀仏の名を念じることを勧められたのである。

そして、その人々が命終の時には、阿弥陀仏が聖衆とともに自ら來迎し給い、みなことごとく往生が得られるのであり、これを攝生増上縁というところから、三輩がともに念仏往生であるとい

うことが説かれている。

(二) 余行を棄てる三つの事由

しかし、このように三輩ともに念仏往生の典拠は明らかになったものの、なぜ『無量寿経』には余行が詳しく説かれる必要があるのかという疑問が生じ、次のような問いが発せられるのである。

問曰此釋未_レ遮_二前難_一何棄_二餘行_一唯云_二念佛_一乎答曰此有_二三意_一一爲_下廢_中諸行_上歸_中於念佛_上而說_二諸行_一也二爲助_二成念佛_一而說_二諸行_一也三約_二念佛諸行二門_一各爲_レ立_二三品_一而說_二諸行_一也一爲_下廢_中諸行_上歸_中於念佛_上而說_二諸行_一者準_下云_四善導觀經疏中上來雖_レ說_二定散兩門之益_一望_二佛本願_一意在_二衆生一向專稱_二彌陀佛名_一之釋意_上且解_レ之者上輩之中雖_レ說_二菩提心等餘行_一望_二上本願_一意唯在_二衆生專稱_二彌陀名_一而本願中更無_二餘行_一三輩共依_二上本願_一故云_二一向專念無量壽佛_一也一向者對_二一向三向等_一之言也例如_二彼五竺有_二三種寺_一一者一向大乘寺此寺之中無_レ學_二小乘_一二者一向小乘寺此寺之中無_レ學_二大乘_一三者大小兼行寺此寺之中大小兼學故云_二兼行寺_一當_レ知大小兩寺有_二一向之言_一兼行之寺無_二一向言_一今此經中一向亦然若念佛外亦加_二餘行_一即非_二一向_一若準_二寺者可_レ云_二兼行_一既云_二一向_一不_レ兼_二餘明矣雖_二先說_二餘行_一後云_二一向專念_一明知廢_二諸行_一唯用_二念佛_一故云_二一向_一若不_レ然者一向之言最以_レ匡_レ消_レ敷

(問うて曰わく、此の釋、未だ前の難を遮せず。何ぞ餘行を棄てて、ただ念佛と云うや。

答えて曰わく、これに三意有り。一には諸行を廢して、念佛に歸せんが爲に而も諸行を説く。二には念佛を助成せんが爲に、而も諸行を説く。三には念佛と諸行との二門に約して、おのおの三品を立てんが爲に、而も諸行を説く。

一に諸行を廢して念佛に歸せんが爲に諸行を説くとは、善導の觀經疏の中に、上來、定散兩門の益を説くと雖も、佛の本願に望むれば、意_{こころ}、衆生をして、一向に専ら彌陀佛の名を稱しむるに在りと云えるの釋

の意に準じて、且しばらく之を解せば、上輩の中に菩提心等の餘行を説くと雖も、上の本願に望むれば、意ただ衆生をして専ら彌陀の名を稱しむるに在り。而るに本願の中に更に餘行無し。三輩ともに上の本願に依る。故に一向專念無量壽佛と云うなり。

一向とは、二向三向等に對するの言なり。例せば彼の五竺に三種の寺有るが如き、一には一向大乘寺。この寺の中には小乗を學すること無し。二には一向小乗寺。この寺の中には、大乘を學すること無し。三には大小兼行寺。この寺の中には、大小兼學す。故に兼行寺と云う。當に知るべし、大小の兩寺には一向の言有り。兼行の寺には一向の言無し。今この經の中に一向もまた然なり。若し念佛の外に、また餘行を加えれば即ち一向に非ず。若し寺に準ぜば、兼行と云う可し。既に一向と云う。餘を兼ねざること明らかし。先に餘行を説くと雖も、後に一向專念と云う。明らかに知りぬ。諸行を廢して、ただ念佛を用いるが故に一向と云うことを。若し然らずば、一向の言、最も以つて消しがたし。）

＊

どうして余行を棄てて、ただ念仏というかという問いには、三つの意味がある。

一つ目は、諸行を廢して、念仏の一行に歸せしめるため。

二つ目は、念仏を助成するため。

三つ目に、念仏にも諸行にも、各々、三種の別があるため。

それぞれについて、

㊦ 念仏は立、諸行は廢

まず一つ目、諸行を廢して、念仏の一行に歸せしめることについては、善導の『觀經疏』(注5)の、

從_二佛告阿難汝好持是語_一已下正明_下付_二屬彌陀名號_一流_中通於遐代_上上來雖_レ說_二定散兩門之益_一望_二佛本願_一

意在_三衆生一向專稱_二彌陀佛名_一

(佛、阿難に告げたまわく、汝好持是語從り已下は、正しく彌陀の名號を付屬して遐代に流通せしめ

たまうことを明かす。上來、定散兩門の益を説きたまうと雖も、佛の本願に望むれば、意、衆生をして一向に専ら彌陀佛の名を稱しむるに在り。」

に明らかなように、『観無量寿經』の結論を説く「汝好持是語從り已下」の經文から、阿弥陀仏は、正しく弥陀の名号を付属して、はるかな未來まで流通することを説いており、それまでは十三觀の定善と三福九品の散善の利益を説き明かしているけれども、阿弥陀仏の本願に基づくならば、釈尊の本意は、淨土往生を願う人々に、あくまでも一向に南無阿弥陀仏と称えさせることであると説かれているという解釈である。

この善導の解釈に基づくならば、上輩の中に菩提心等の余行が説かれているものの、阿弥陀仏の本願に照らし合わせてみれば、やはり、釈尊の本意も、同じように専ら弥陀の名を称えることであると理解されるのである。しかも、四十八願の中には余行が誓われず、三輩の文のいずれにも、阿弥陀仏の本願によって、「一向專念無量寿仏」と説かれたのである。

ここで用いられる一向という言葉は、純粹に一つに向かうことで、多面的な二向や三向に対する語である。

例えば、五竺（インド）に三種の寺があるようなものである。

一は、一向大乘寺で、ここでは純粹に大乘を研究し、小乗を学ばない寺のこと。

二は、一向小乗寺で、ここでは純粹に小乗を研究し、大乘を学ばない寺のこと。

三は、大小兼行寺で、ここでは、大乘、小乗とともに並べて研究するから兼行という寺のこと。

のように、純粹に大乘、小乗を研究する寺は、一向という文字が用いられるが、兼行の寺には一向という文字が無いのである。

だから、今、『無量寿經』の中で一向と用いられているのもこれと同じ事で、もし念仏以外に余行を

説くのであれば、一向という文字は用いないのである。右に例示した寺でいえば、兼行寺ということになる。よって、經文にすでに一向と説いているので、余行を兼ねないのは明らかなことである。さらに、經文には、先に余行が説かれていても、後で「一向專念」とあるので明らかのように、諸々の余行を廢して、ただ念仏だけを称えることから、一向というのである。もしそうでなければ、一向という文字を用いる意味が無いのである、と説かれている。

④ 念仏を助成

そして、二つ目は、念仏を助成することについて二種有り、その一つは同類の善根を以って念仏を助成するものと、もう一つは異類の善根を以って念仏を助成するものがあるということである。

初めに同類の善根が、そして次に異類の善根が説かれる。

① 同類の善根

二爲_レ助_二成念佛_一説_二此諸行_一者此亦有_二二意_一一以_二同類善根_一助_二成念佛_一二以_二異類善根_一助_二成念佛_一初同類助成者善導和尚觀經疏中舉_二五種助行_一助_二成念佛一行_一是也具如_二上正雜二行之中説_一次異類助成者先就_二上輩_一而論_二正助_一者一向專念無量壽佛者是正行也亦是所助也捨家棄欲而作沙門發菩提心等者是助行也亦是能助也謂往生之業念佛爲_レ本故爲_二一向修_二念佛_一捨_レ家棄_レ欲而作_二沙門_一又發_二菩提心_一等也就_レ中出家發心等者且指_二初出及以初發_一念佛是長時不退之行寧容_レ妨_二礙念佛_一也中輩之中亦有_二起立塔像懸繪燃燈散華燒香等諸行_一是則助_二成念佛_一也其旨見_二往生要集_一謂助念方法中方處供具等是也下輩之中亦有_二發心_一亦有_二念佛_一助正之義準_レ前可_レ知

(二には念佛を助成せんが爲に、此の諸行を説くとは、此れまた二意有り。

一には同類の善根を以って、念佛を助成し。二には異類の善根を以って、念佛を助成す。

初めに同類の助成とは、善導和尚の觀經の疏の中に、五種の助行を擧げて、念佛の一行を助成す、これなり。具ぐには上の正雜二行の中に説くが如し。

次に異類の助成とは、先ず上輩に就いて正助を論ぜば、一向專念無量壽佛とは、これ正行なり。またこれ所助なり。捨家棄欲、而に作沙門、發菩提心等とは、これ助行なり。またこれ能助なり。謂わく往生の業には念佛を本もととす。故に一向に念佛を修せんが爲に家を捨て欲を棄て、沙門と作り。また菩提心を發すとなり。中に就いて出家發心とは、且しばく初出、及び初發を指す。念佛は是れ長時不退の行なり。寧ろ念佛を妨礙ぼうがいす容べけんや。中輩の中に、また起立塔像懸繪然燈散華燒香等の諸行有り。是れ則ち念佛を助成す。其の旨、往生要集に見えたり。謂わく助念方法の中の、方處供具等は是れなり。下輩の中にまた發心有り。また念佛有り。助正の義、前に準じて知るべし。同類の善根の助成とは、善導が『觀經疏』(注6)に五種の助行を擧げて、念仏の一行を助成する旨が説かれている。

次就「行立」信者然行有「二種」一者正行二者雜行言「正行」者專依「往生經」行「行者是名」正行「何者是也」一心專讀「誦此觀經彌陀經無量壽經等」一心專「注思」想觀四察憶五念彼國二報莊嚴「若禮即一心專禮」彼佛「若口稱即一心專稱」彼佛「若讚歎供養即一心專讚歎供養是名爲」正又就「此正中」復有「二種」一者一心專念「彌陀名號」行住坐臥不「問」時節久近「念念不捨者是名」正定之業「順」彼佛願「故若依」禮誦等「即名爲」助業「除」此正助二行「已外自餘諸善悉名」雜行

(次に行に就いて信を立てるとは、然るに行に二種あり。一には、正行。二には、雜行なり。

正行と言うは、専ら往生經に依りて行を行ずる者、これを正行と名づく。何者かこれなる。

一心に専らこの觀經、彌陀經、無量壽經等を讀誦し、一心に彼の國の二報の莊嚴を專注し、思想し、觀察し、憶念し、若し禮するには即ち一心に専ら彼の佛を禮し、若し口に稱するには即ち一

心に専ら彼の佛を稱し、若し讃歎供養するには、即ち一心に専ら讃歎供養す。

これを名づけて正と爲す。

またこの正の中に就いて、また二種有り。一には、一心に専ら彌陀の名號を念じて行住坐臥に時節の久近を問わず、念念に捨てざるもの、是れを正定の業と名づく。彼の佛の願に順ずるが故に。

若し禮誦等に依るをば、即ち名づけて助業と爲す。

この正助二行を除いて已外の自餘の諸善を悉く雜行と名づく。）

②異類の善根

そして、次に、異類の善根の助成というのは、先ず上輩についていえば、一向專念無量寿仏とは、正行であり、助成されるものである。

ところが、捨家棄欲、而作沙門、發菩提心等というのは、これは助行であり、能く念仏を助成するものである。

だから、往生の業というのは、念仏を根本とするものであって、一向に念仏を修するために家を捨て、欲を棄て、沙門となるものであり、また、菩提心を發することになるのである。その中でも出家發心等というのは、初めの頃の念仏を修すための發心であるのに対して、念仏は生涯に亘って長時不退に修すものであるから、このような諸行は念仏を妨げるようなものではないのである。

また、中輩の中に起立塔像、懸繪然燈、散華燒香等の諸行があげられるが、これも念仏を助成するものであり、その趣旨については『往生要集』「大文第五 助念方法」の「方處供具」^(注7)に、念仏の助けになるように何を用いて助念するか、場所や供物やその方法が詳しく説かれている。

第一方處供具者内外俱淨ト一閑處隨力辨於華香供具若有闕少華香等事但專念佛功德威神
若親對佛像須辨燈明若遙觀西方或須闍室

感禪師
許闍室

(第一に、方處供具とは、内外ともに淨くして一の閑處をトし、力に随つて華香供具を辯ぜよ。もし華香等の事を闕少すること有らば、ただ専ら佛の功德威神を念ぜよ。もし親り佛像に對せば、須く燈明を辯ぜべし。もし遙かに西方を觀ぜんには、或るは闇室を須いよ。へ感禪師闇室を許す)

そして、下輩の中に、菩提心を發すことと念仏が説かれているが、念仏を助成することについては、これまでの上輩、中輩に従つて知ることができる、と説いている。

㊦ 念仏は正、諸行は傍

さらに三つ目、念仏、諸行に各々三品を立てるために諸行を説くことについては、

三約「念佛諸行」各爲「立」三品「而説」諸行「者先約」念佛「立」三品「者謂此三輩中通皆云」一向專念無量壽佛「是則約」念佛門「立」其三品「也故往生要集念佛證據門云雙卷經三輩之業雖有淺深然通皆云」一向專念無量壽佛「次約」諸行門「立」三品「者謂此三輩中通皆有菩提心等諸行」是則約「諸行」立「其三品」也故往生要集諸行往生門云雙卷經三輩亦不出此上已

(三に念佛諸行に約して、各々三品を立てんが爲に、諸行を説くとは、先ず念佛に約して三品を立て、つとは、謂わくこの三輩の中に、通じて、皆、一向專念無量壽佛と云う。これ則ち念佛門に約して、その三品を立つ。故に往生要集の念佛證據門に云わく、雙卷經の、三輩の業、淺深有りと雖も、然も通じてみな一向專念無量壽佛と云うと。(感師之に同じ)
次に諸行門に約して、三品を立てつとは、謂わく此の三輩の中に、通じて、皆、菩提心等の諸行有り。是れ則ち諸行に約して、その三品を立て。故に往生要集の諸行往生門に云わく、雙卷經の三輩もまたこれを出でずと。(已上)

のように、念仏について三品を立てるのは、三輩を通じて、みな一向専念無量寿仏とあることから、念仏にも三種あることを示したもので、『往生要集』の「念佛證據門」^(注8)に、

二雙觀經三輩之業雖有淺深然通皆云一向專念無量壽佛

(二)には、雙觀經の三輩の業は淺深有りと雖も、然も通じて、皆、一向専念無量壽佛と云う。)とあるように、『無量寿經』の三輩の行業には、それぞれ浅いも深いもあるが、いずれにも、みな一向専念無量寿仏と説かれていることは、念仏にも三品があることを示すことに他ならないのである。

また、これについては、懷感も同じように『釋淨土群疑論』^(注9)で、次のように説いている。

又此三別即三品修上者説形中者説日下者説時於九品中各多種故雖並往生咸无苦惱花開悟道
早晚不同經説有殊由斯意也

(またこの三の別は、即ち三品の修なり。上の者には形を説き、中の者には日を説き、下の者には時を説く。九品の中に於いて、各々多種あるが故に、並びに往生すれば咸く苦惱無しと。

花開悟道、早晚同じからず。經説、殊に有ることこの意に由ればなり。)

また、諸行についても三品が立てられることについて、三輩を通して、みな菩提心等の諸行があげられていることから三種の諸行があることを示すものであり、これも『往生要集』の「諸行往生門」^(注10)を
引き、

雙觀經三輩業亦不出此

(雙觀經の三輩の業もまた此れを出でず。)

とあるところから、『無量寿經』の三輩の諸行が説かれているのである、と説かれている。

(三) 廃立、助正、傍正の三義

そして、まとめると、繰り返すようであるが、一向念仏の為に、廃立、助正、傍正という三つの義によることが、次のように説かれていく。

凡如「此三義雖有_二不同_一俱共是所_三以爲_二一向念仏_一也初義卽是爲_二廢立_一而説謂諸行爲_二廢而説念仏爲_二立而説次義卽是爲_二助正_一而説謂爲_二助_二念仏之正業_一而説_二諸行之助業_一後義卽是爲_二傍正_一而説謂雖_レ説_二念仏諸行二門_一以_二念仏_一而爲_二正_一以_二諸行_一而爲_二傍_一故云_二三輩通皆念仏_一也但此等三義殿最難_レ知請諸學者取捨在_二心_一今若依_二善導_一以_二初爲_二正耳_一

（凡そかくの如くの三義、不同有りと雖も、ともに是れ一向念仏の爲にする所以なり。

初めの義は、即ちこれ廢立の爲に説く。謂わく、諸行は廢の爲に説き、念仏は立の爲に説く。

次の義は、即ちこれ助正の爲に説く。謂わく、念仏の正業を助けんが爲に、諸行の助業を説く。

後の義は、即ちこれ傍正の爲に説く。謂わく、念仏、諸行の二門を説くと雖も、念仏を以って正と爲し、諸行を以って傍と爲す。

故に三輩通じて、皆、念仏なりと云う。但し此等の三義、殿最知り難し。

請う、諸々の學者、取捨、心に在るべし。今、もし、善導に依らば、初めを以って正と爲すのみ。）

* このように三義に不同が有るものの、ともにこれは一向念仏のためのものなのである。

初めの義は、廢立の爲に説くもので、諸行は廢の爲に、念仏は立の爲に説くのである。

次の義は、助正の爲に説くもので、念仏の正業を助ける爲に、諸行の助業を説くのである。

後の義は、傍正の爲に説くもので、念仏と諸行の二門を説くのであるが、念仏を以って正とし、諸行を以って傍とするものである。

だから、三輩を通じて、皆、念仏ということになる。

ただし、この三義については、殿最（どれが先でどれが後か）判断がつけ難いものなので、多くの学者

達は能く仏の意を得て、取捨しながら学んで欲しいものである。

今は、善導の説示に基づいて、初めの義を以って正とするものである、と述べている。

(四) 九品の念仏

そしてさらに、三輩については、一向念仏であることが明らかになったが、九品の念仏についてはどうか、一つは開合の異について、二つに定散二善の廃と念仏の付属について、次のような問いかけがされる。

問曰三輩之業皆云「念佛」其義可然但觀經九品與壽經三輩本是開合異也若爾者何壽經三輩之中皆云「念佛」至觀經九品上中二品不說「念佛」而至下品始說「念佛」也答曰此有二義一如問端云「雙卷三輩觀經九品開合異者以此應知九品中皆可」有「念佛」云何得知三輩之中皆有「念佛」九品之中何無「念佛」乎故往生要集云問念佛之行於九品中是何品攝答若如說行理當上上如是隨其勝劣應分九品然經所說九品行業是示一端「理實無量」故知念佛亦可通九品二觀經之意初廣說「定散之行」普逗衆機後廢「定散二善」歸「念佛一行」所謂汝好持是語等之文是也其義如下具述故九品之行唯在「念佛」矣

(問うて曰わく、三輩の業、皆、念佛と云う。その義、然るべし。

但し、觀經の九品と、壽經の三輩とは、もとこれ開合の異なり。若し爾らば、何ぞ壽經の三輩の中には、皆、念佛と云い、觀經の九品に至りては、上中二品に念佛を説かず、下品に至りて始めて念佛を説くや。答えて曰わく、此れに二義有り。

一には問端に云うが如く、雙卷の三輩と、觀經の九品と、開合の異なること、これを以って知る應し。九品の中に、皆、念佛有るべし。いかに知ることを得たる。三輩の中に、皆、念佛有り。九品の中、何ぞ念佛無からん。

故に往生要集に云わく。

問う。念佛の行は、九品の中に於いて、これ何れの品の攝ぞや。

答う。若し説の如く行ぜば、理、上上に當れり。かくの如く、その勝劣に隨いて九品を分つ應し。然るに、經に説く所の、九品の行業は、これ一端を示す。理實には無量なりと。へ已上へ

故に知りぬ。念佛、また九品に通ずべし。
二には觀經の意、初めには廣く定散の行を説きて、普く衆機に逗し、後には定散二善を廢して、念佛の一行に歸せしむ。所謂、汝好持是語等の文、これなり。その義、下につぶさに述ぶるが如し。故に知りぬ、九品の行、ただ念佛に在ることを。）

* ここでは、三輩の業は、皆、念仏であること。そして、『觀無量壽經』の九品と『無量壽經』の三輩は、開合の異であることも明らかになった。

だが、どうして『無量壽經』の三輩には、皆、念仏といい、『觀無量壽經』の九品では、上品、中品の二品には念仏を説かず、下品に至って初めて念仏を説くのかという問いかけがされている。

これに答えて、ここには二つの意があるとしている。

一つは、これまで右に述べたように、『無量壽經』の三輩と『觀無量壽經』の九品とは、開合の異であり、三輩の中に、皆、念仏があるので、九品の中にも、皆、念仏がなければならないということである。

だから、『往生要集』「大文第十問答料簡 第四尋常念相」^(注11)に、

問念佛之行於九品中是何品攝答若如説行理當上上如_レ是隨_二其勝劣_一應_レ分_二九品_一然經所_レ説九品行業是示_二一端_一理實無量

(問う。念佛の行は九品の中に於いて、是れ何れの品の攝なるや。

答う。若し説の如く行ぜば、理として、上上に當る。是くの如くその勝劣に隨いて、應に九品に分かつべし。然るに經に説く所の九品の行業は、是れ一端を示す。理は實に無量なり。)

とあるように、念仏行は九品はいずれの品に撰おさまるものであるかという問いに対して、もし經に説かれるように行ずれば、当然のこととして上品上生であるが、一般の衆生には勝劣があり、それに随えば、まさに九品に分けられるのである。だから經に説くところの九品の行業は、その一端を示したものであり、実際には九品に納まらず、実に無量にある、と述べられていることから、念仏は九品のいずれにも通ずるものであることを知ることができるのである。

二つ目に、『觀無量壽經』の意は、初めに広く定散の行を説いて、多くの人々の機根に合うように説き、後には定散二善を廃捨して、ただ念仏の一行に帰せしめるために^(注12)、

汝好持^二是語^一持^二是語^一者卽是持^二無量壽佛名^一

(汝、好く是の語を持せよ。是の語を持せよとは、即ち是れ無量壽佛の御名を持せよとなり。)

と『觀無量壽經』の結論というべき、念仏の一行のみを、最後に阿難に付属したことである。

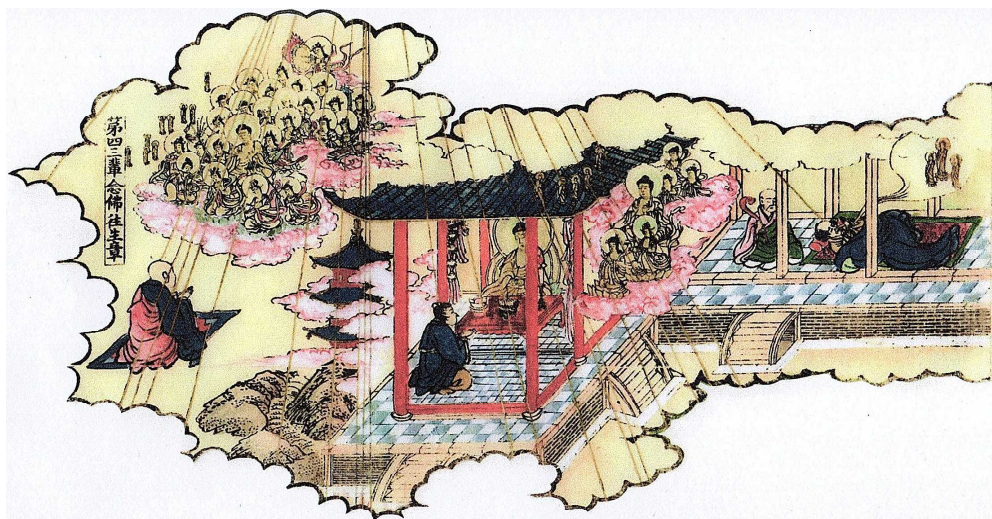
だから、九品の行は、ただ念仏にあることを知らなければならぬということである。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第四 三輩念仏往生章)の絵相

高田敬輔の描く、(第四 三輩念仏往生章)の絵相は、一つの画面に、向かつて左から上輩、中輩、下輩の順に描かれる。

まず、上輩は、出家が尼師壇の上で、合掌して念仏を称えている様相が描かれており、そこへ阿弥陀如来とそれぞれが樂器を持した二十五菩薩と九体の化仏が雲に乗り、来迎している場面であり、

「家を捨て欲を棄てて、沙門と作り。菩提心を發し、一向に専ら無量壽佛を念じ。諸々の功德を修して、彼の國に生ぜんと願ず。此等の衆生、壽終に臨む時、無量壽佛、諸の大衆と、その人の前に現ず。」
と、まさに『無量壽經』に説かれる場面である。



《絵相の部分構成》

* 全体は、区画が無いが、向かって左から上輩、中輩、下輩それぞれが念仏によって往生する時の来迎の様相が描かれる。

・ 上輩：出家者が尼師壇の上に合掌し、念仏して坐す。
阿弥陀如来と二十五菩薩が楽器を持し、九体の化仏とともに紫雲に乗り、来迎。

・ 中輩：三重の塔を備えた堂宇の中に阿弥陀仏を安置した在家者が、繪を掛け、燈を燃じ、華を散らし、香を焚いて合掌。

阿弥陀如来と五菩薩、五体の化仏が来迎。

・ 下輩：病臥の臨終の在家者。枕元に如意を持す出家者が見守る。

夢中に、三体の化仏が来迎。

尚、来迎後の、

「即ち彼の佛に随いて、其の國に往生し、便ち七寶の華の中に於いて、自然に化生し、不退轉に住す、智慧勇猛に、神通自在なり。」

の場面は一枚の絵相であるため、描かれていない。

次に、中輩は、

「行じて沙門と作り、大いに功德を修すること能わずと雖も、當に無上菩提の心を發し、一向に専ら無量壽佛を念ずべし。多少に善を修し、齋戒を奉事し、塔像を起立し、沙門に飯食し、繪を懸け、燈を然し、華を散らし、香を焼き、此を以って廻向して彼の國に生ぜんと願ず。」

と説かれるように、沙門にはならないけれども、菩提心を發し、三重塔や阿弥陀仏の像を起立し、その仏像の前に、繪を懸け、燈を然し、華を散し、香を焼いて念じている様相が描かれる。

そして

「其の人終わりに臨みて、無量壽佛、その身を化現したまう。光明相好、具に眞佛の如し。諸の大衆とともに、その人の前に現じたまう。」

とあるように、阿弥陀如来と五菩薩と五体の化仏が化現している絵相である。

さらに、下輩は、病臥して、まさに臨終を迎えようとしている枕元で、沙門が如意を手には法を説いていおり、「若し深法を聞きて歡喜信樂して、疑惑を生ぜず、乃至一念、彼の佛を念じ、至誠心を以って、其の國に生ぜんと願すれば、此の人、終わりに臨みて、夢に彼の佛を見たてまつりて、また往生を得。功德智慧、次いで中輩の者の如し。」

と記されているように、夢中に立ち化仏が三体现れている絵相である。

このように、「選択集十六章之図」（第四 三輩念佛往生章）の絵相は、『無量壽經』の三輩に関わる經文に説

かかれている部分に忠実な絵相であることには間違いない。

しかし、右の教理の展開の項でみたように、この三輩は念仏往生を目指すものであるが、上輩は捨家棄欲等をして沙門になること、中輩は起立塔像等をする事、下輩は菩提心等を挙げ、それぞれ余行を修すことが説かれているのである。

そこで法然の私積段に説かれる、念仏と余行についての説示を踏まえた上での絵相の見方が必要となる。

つまり、単純に絵相に描かれるように、沙門になり、起立塔像すること、菩提心を発すること、という捉え方だけにおさまらず、あくまでも、

・善導が『観念法門』に引く、衆生は能力と素質に異なりが有り、三種に分けられるが、仏はいずれにも通じて専ら阿弥陀仏の名を念じることを勧められたこと。

・善導が『観経疏』に説く、定散両門を捨て、念仏を勧めるのは、一つは廃立、二に助正、三に傍正のためであること。

・『無量寿経』三輩と『観無量寿経』九品は、開合の異であり、いずれも「一向専念無量寿仏」であることに挙げてきたように、衆生の気根が多種に亘る中から三種を例示していること、さらにはあくまでも余行を廃して念仏を立てることであり、本願の念仏が正業であり諸行は助業であること、そして念仏が正であり諸行が傍であることに他ならないことを忘れてはならないのである。

六 高田敬輔「選択集十六章之図」(第四 三輩念仏往生章)と「無量寿経曼荼羅」(三輩段)の関連性

本論文、第四章第四節「述所説彌陀行成攝三段」の第一項「所攝」の「凡夫往生」、(一)「三輩往生」、いわゆる三輩往生段の項に、高田敬輔が同時期に描いた「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」の両曼荼羅に、唯一、共通の「三輩往生」段があり、これについて対比的に考察した論考があるので参照にされたい。

七 まとめ

以上みてきたように、第四章の絵相は、上輩、中輩、下輩の三輩それぞれの来迎の場面であるが、次のようなことを知ることができる。

① 絵相の上輩は、沙門になり、菩提心を発こして一向専念無量寿仏の様相を、中輩は、斎戒奉事、起立塔像、飯食沙門、懸繪燃燈、散華焼香を施し、無上菩提心を発こし、一向専念無量寿仏の様相を、下輩は、無上菩提心を発こし、一向専意乃至十念念無量寿仏の様相を呈していて、いずれも余行であるが、その本意は、衆生の機に応じているものであり、結局は、一向専念無量寿仏であること。

② 絵相構成の背景には、諸行を棄てて一向専念無量寿仏の本意があり、念仏と諸行の関係を、廃立・助成・傍正の三義によると説くが、善導の意に基づき、念仏を立て諸行を廃することを正としていること。

③ 絵相は三輩の三場面を描くが、観經九品とは開合の異であり、九品のいずれにも一向専念無量寿仏が通ずるものであること。

(注12)(注11)(注10)(注9)(注8)(注7)(注6)(注5)(注4)(注3)(注2)(注1)

『無量寿経』（浄土宗全書第一卷一九頁）

前掲書『無量寿経』（浄土宗全書第一卷一九頁）

前掲書『無量寿経』（浄土宗全書第一卷一九頁）

善導『観念法門』（浄土宗全書第四卷二三三頁）

善導『観経散善義』巻第四（浄土宗全書第二卷七一頁）

前掲書『観経散善義』巻第四（浄土宗全書第二卷五八頁）

『往生要集』「大文第五 助念方法」の「方處供具」（浄土宗全書第十五卷八八頁）

『往生要集』「念佛證據門」（浄土宗全書第十五卷一二九頁）

懷感『釋浄土群疑論』（浄土宗全書第六卷六六頁）

『往生要集』「諸行往生門」（浄土宗全書第十五卷一三二頁）

『往生要集』「大文第十問答料簡 第四尋常念相」（浄土宗全書第十五卷一四一頁）

『観無量寿経』（浄土宗全書第一卷五一頁）

第五項 「第五 念佛現當利益章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第五 念佛現當利益章

二 『選択本願念仏集』の篇目

念佛利益之文

（念佛利益の文）

* 前章では『無量寿経』に説かれる三輩念仏往生の行業を通して、本願念仏の一行を立てて諸行を廃したことをみたが、さらに本章では、阿弥陀仏の名号を称えることにより、本願念仏は、一念大利、無上の功德が得られ、諸行は、小利、有上の功德に留まることが説かれる章である。

三 『選択本願念仏集』の引文

無量寿経下云佛語「彌勒」其有「得」聞「彼佛名號」歡喜踊躍乃至一念當「知此人爲」得「大利」則是具「足無上功德」善導禮讚云其有「得」聞「彼彌陀佛名號」歡喜至「一念」皆當「得」生「彼

（無量寿経の下に云わく。佛、彌勒に語げたまわく。それ彼の佛の名號を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍して、乃至一念せんに、當に知るべし。この人は大利を得と爲す。則ちこれ無上功德を具足す。善導の禮讚に云わく。それ彼の彌陀佛の名號を聞くことを得ること有りて、歡喜して一念に至るまで、皆、當に彼に生ずることを得べし。）

* 『無量寿経』下巻の流通分の初めに^(注1)、

佛語「彌勒」其有_レ得_レ聞_二彼佛名號_一歡喜踊躍乃至一念當_レ知此人爲_レ得_二大利_一則是具_二足無上功德_一

（佛、彌勒に語けたまわく。それ彼の佛の名號を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍して乃至一念せんに、當に知るべし。この人は大利を得と爲す。則ちこれ無上功德を具足す。）

とあるように、釈尊が彌勒に告げられるには、彼の阿弥陀仏の名号の功德を聞き、歡喜踊躍するほどまでに信心をおこし、生涯念仏を続けるものも、命終の時に一念するものも、まさにこの人は浄土に生まれるという大利益を得るのであり、しかもこの大利はこの上ないほどの功德があると説かれている。

さらに、善導の『往生礼讃』^(注2)に、

其有_レ得_レ聞_二彼彌陀佛名號_一歡喜至_二一念_一皆當_レ得_レ生_レ彼願求諸衆生往生安樂國

（それ彼の彌陀佛の名號を聞くことを得ること有りて、歡喜して一念に至るまで、皆、當に彼に生ずることを得べし。願わくは、諸々の衆生と共に安樂國に往生せん。）

とあり、善導は、彼の阿弥陀仏の名号の功德を聞くことが得られ、歡喜して生涯念仏を修する者も、臨終の一念をする者も、皆、彼の浄土に往生することができるのである、と念仏を讃歎していることが説かれている。

四 『選択本願念仏集』の私釈

次に、三輩の文に菩提心等の功德をあげているが、最後に念仏の功德を讃歎したのはなぜなのか問いかけがされ、法然の解釈が説かれる。

(一) 念仏功德の讃歎

私問曰準_二上三輩文_一念佛之外舉_二菩提心等功德_一何不_レ歎_二彼等功德_一唯獨讚_二念佛功德_一乎答曰聖意難_レ測定有_二深意_一且依_二善導一意_一而謂_レ之者原夫佛意雖_四唯欲_三正直説_二念佛之行_一而一往隨_レ機説_二菩提心等諸行_一分_二

別三輩淺深不同」然今於「諸行」者既捨而不_レ歎置而不_レ可_レ論者也唯就「念佛一行」既選而讚歎思而容「分別」者也

（私に問うて曰わく、上の三輩の文に准ずるに、念佛の外に、菩提心等の功德を擧ぐ。何んぞ彼等の功德を歎ぜずして、ただ獨り念佛の功德のみを讚ずるや。

答えて曰わく、聖意測り難し。定んで深意有らん。且く善導の一意に依りて之を謂わば、たすぬる原に夫れ佛意は、正直にただ念佛の行を説かんと欲すと雖も、機に隨いて、一往、菩提心等の諸行を説いて、三輩の淺深不同を分別せり。然るに、今、諸行に於いては、既に捨てて歎ぜず。置いて論ずべからざる者なり。

ただ念佛の一行に就いて、既に選びて讚歎したまう。思うて分別すべき者なり。）

＊

前章で説いた三輩の文には、念佛の他に菩提心等の功德をあげているが、結びになって、これらの諸行の功德を讚歎せずに、ただ念佛の功德だけを讚歎するのは何故なのかという問いを發している。

その問いに対して、釈尊の聖意を推し量ることは難しいが、そこには深い意味があるのであろう。

今は、善導の説くところに従って考えてみるならば、仏の意は、ただひたすら念佛の行を説き示そうとというのが本意であるだろうが、救おうとする多くの人々には、その素質や能力が様々あり、相手に応じて、一応、菩提心等の諸行が説かれ、三輩の淺深を區別されたのだと考えられる。

しかし、結びの經文になると、諸行についてはこれを捨てて讚えず、また捨て置いて論ずることも無かつたのである。そして、ただ念佛の一行だけをすでに選んで讚歎したのである。

まさに、仏の本願と非本願、本意と非本意を推し量って分別しなければならぬ、と説かれている。

（二） 三輩の分別

さらに、念佛について三輩の差が生ずるのはなぜなのか、という問いかけがされる。

若約念佛分、別三輩。此有二意。一隨觀念淺深、而分別之。二以念佛多少、而分別之。淺深者如上所引。若如説行理當上上、是也。次多少者、下輩文中既有十念、乃至一念數。上中兩輩準隨增觀念法門云、曰別念一萬偏佛、亦須依時禮讚淨土莊嚴事。大須精進、或得三萬六萬十萬者、皆是上品上生人當知。三萬已上、是上品上生業。三萬已去、是上品已下業。既隨念數多少、分別品位、是明矣。

(若し念佛に約して、三輩を分別せば、これに二の意有り。一には觀念の淺深に隨いてこれを分別し、二には念佛の多少を以つてこれを分別す。淺深とは、上に引く所の如し。もし説の如く行ぜば、理、上上に當るといふこれなり。次に多少とは、下輩の文の中に、既に十念、乃至一念の數有り。上中の兩輩、これに準じて隨つて増すべし。

觀念法門に云わく。曰別に一萬偏、佛を念じ。また須く時に依りて、淨土の莊嚴事を禮讚すべし。大いに精進すべし。或いは三萬六萬十萬を得る者は、皆、これ上品上生の人なりと。當に知るべし。三萬已上は、これ上品上生の業。三萬已去は、これ上品已下の業なり。既に念數の多少に隨いて品位を分別すること、これ明らけし。)

*

念仏について、三輩に區別するのには、二つの意がある。

その一つは、念仏を行ずる者の心の淺深によるものと、もう一つは、念仏の遍數の多少によつて分けられるのである。

觀念の淺深については、前章で説かれた『往生要集』^(注3)の、

若如説行理當上上、如是隨其勝劣、應分九品。然經所説九品行業、是示一端、理實無量。

(もし説の如く行ぜば、理として、上上に當れり。かくの如く、その勝劣に隨いて、應に九品を分かつべし。然れども經に説く所の九品の行業は、是れ一端を示せるのみ。理、實には無量なり。)

もし經説のように行ずるならば、當然のこととして上品上生であるが、一般の衆生には勝劣があるので、

それに従って九種に分けているが、經に説く所の九種の行業は、その一端を示しているので、実際は無量である、というところを引き、念仏を修する者の心の浅い深いによって、三種に區別されることを説いている。

また、念仏の多少については、『無量壽經』下輩の文の中に^(注4)、

其下輩者十方世界諸天人民其有^二至心^一欲^レ生^二彼國^一假使不^レ能^レ作^二諸功德^一當^レ發^二無上菩提之心^一一向專意乃至十念念^二無量壽佛^一願^レ生^二其國^一若聞^二深法^一歡喜信樂不^レ生^二疑惑^一乃至一念念^二於彼佛^一以^二至誠心^一願^レ生^二其國^一此人臨終夢見^二彼佛^一亦得^二往生^一功德智慧次如^二中輩者^一也

(其の下輩の者は、十方世界の諸天人民、それ至心有りて彼の國に生ぜんと欲し、たとい諸々の功德を作すこと能わずとも、當に無上菩提の心を發して、一向に意を専らにして、乃至十念、無量壽佛を念じて其の國に生ぜんと願ずべし。もし深法を聞きて、歡喜信樂して疑惑を生ぜず、乃至一念、彼の佛を念じて至誠心を以つて其の國に生ぜんと願ずれば、この人、臨終に夢の如くに彼の佛を見たとまつりて、また往生を得。功德智慧、次いで中輩の者の如し。)

とあるように、下輩のものは、十方世界の諸々の人々で、真実の心をもつて淨土に往生したいと念願とするものであるが、中輩のように諸々の功德ができないまでも、菩提心をおこし、一向に心ひたすら、生涯に亘つて十念し、阿弥陀仏を念じてその淨土に往生したいと願うものことであり、さらに、もし奥深い念仏の法を聞いて心から喜び、疑うことをせずに最後に一念するものでも、命終の時には夢中に彼の仏を見たとまつり、往生することができると説かれている。

このように、下輩に十念や一念の数が示されていることから、上輩や中輩はその下輩の数に準じて増やしていけば良いのであると述べられている。

そして、さらに、『觀念法門』^(注5)の、

日別念_二一萬遍佛_一亦須_二依_レ時禮_二讚淨土莊嚴事_一大須_二精進_一或得_二三萬六萬十萬_一者皆是上品上生人自與功德盡廻_二往生_一應_レ知

(日別に一萬遍の佛を念ぜよ。また時に依りて浄土の莊嚴の事を禮讚すべし。大いに精進なるべし。

或いは三萬六萬十萬を得る者は、皆、これ上品上生の人なりと。自餘の功德盡く往生に廻せよ。

應に知るべし。)

を引き、三万以上の念仏を称える者は上品上生の業であり、三万以下は上品以下の業であることを述べ、このことから念仏の多少によつて三輩九品に分けられることが明らかであると説かれている。

(三) 念仏一念、大利、一無上

そして、さらに、ここであるところの一念について、その意義が述べられるのである。

今此言_二一念_一者是指_二上念佛願成就之中所_一言一念與_二下輩之中所_一明一念也願成就文中雖_レ云_二一念_一未_レ說_二功德大利_一又下輩文中雖_レ云_二一念_一亦不_レ說_二功德大利_一至此一念說爲_二大利_一歎爲_二無上_一當_レ知是指_二上一念_一也此大利者是對_二小利_一之言也然則以_二菩提心等諸行_一而爲_二小利_一以_二乃至一念_一而爲_二大利也又無上功德者是對_二有上_一之言也以_二餘行_一而爲_二有上_一以_二念佛_一而爲_二無上_一也既以_二一念_一爲_二一無上_一當_レ知以_二十念_一爲_二十無上_一又以_二百念_一爲_二百無上_一又以_二千念_一爲_二千無上_一如是展轉從_レ少至_二多念佛恆沙無上功德復應_二恆沙_一如是應_二知然者諸願_一求往生_二之人何廢_一無上大利念佛強修_二有上小利餘行_一乎

(今ここに一念と言うは、これ上の念佛の願成就の中に言う所の一念と、下輩の中に明かす所の一念とを指すなり。

願成就の文の中に、一念と云うと雖も、未だ功德の大利を説かず。また下輩の文の中に、一念と云うと雖も、また功德の大利を説かず。この一念に至りて、説きて大利と爲し、歎じて無上と爲す。當に知る

べし、これ上の一念を指すなり。この大利とは、これ小利に對するの言なり。然れば則ち菩提心等の諸行を以つて小利と為し、乃至一念を以つて、大利と為す。

また無上功德とは、これ有上に對する言なり。餘行を以つて有上と為し、念佛を以つて無上と為す。既に一念を以つて、一の無上と為す。當に知るべし。十念を以つて十の無上と為し、また百念を以つて百の無上と為し、また千念を以つて、千の無上と為す。かくの如く展轉して、少より多に至り、念佛恆沙ならば、無上功德も、また恆沙なるべし。かくの如くまさに知るべし。

然れば諸々の往生を願求せん人、何ぞ無上大利の念佛を廢して、強いて有上小利の餘行を修せんや。

*
今ここに一念というのは、これは第三章にあげた第十八願成就の文^(注6)、

諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國即得往生住不退轉

(あらゆる衆生、其の名號を聞きて、信心歡喜して、乃至一念、至心に廻向して彼の國に生ぜんと願すれば、即ち往生を得て不退轉に住す。)

の中の一念と、第四章に引いた下輩の文^(注7)の中の一念と同じものである。しかし、どちらの文にも一念とあるものの、どのような功德の価値があるかについては示されず、結びの文に至って初めて大利と説き、無上功德と説かれたのである。この一念を大利と説くことは、相對的に菩提心等の余行は小利であり、さらに、一念を無上功德とすれば、余行は有上功德ということになる。

だから、一念が一つの無上功德を得るのであるから、十念の念仏は十の無上功德を、百念の念仏は百の無上功德を、千念の念仏は千の無上功德があることになる。このように少ない念仏から多くの念仏に進み、恆沙の数のように無限に念じれば、無上功德もまた恆沙の数のように無限に展開されるのである。

どうしてこのような無上大利の念仏をやめて、しいて有上小利の余行を修する必要があるのだろうか、と説かれている。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第五念佛現當利益章)の絵相について

(一) 「無量寿経曼荼羅」(流通説法之相)との類似性

高田敬輔が描く第五章の絵相は、翌年(正徳四年(一七一四年))制作の「無量寿経曼荼羅」(「流通説法之相」(名号付属))と共通性があり、類似しているので次に掲げてみる。

上段「選択集十六章之図」(第五念佛現當利益章)と下段「無量寿経曼荼羅」(流通分名号付属)の絵相



前頁にみるように、「選択集十六章之図」（第五念佛現當利益章）と「無量寿経曼荼羅」（「流通説法之相」（名号付属）の両曼荼羅の絵相は、高田敬輔が描いたもので、当然のことながら、非常に類似した絵相となっている。「選択集十六章之図」には、仏の右に五聲聞、三の八部衆、左に三聲聞が描かれ、「無量寿経曼荼羅」には、仏の右に、二菩薩、五聲聞、一天、一龍、左に、四声聞、夜叉、迦樓羅、緊那羅が描かれる。上段の「選択集十六章之図」の絵相は、法然が、この第五章の冒頭の引文として取り上げた『無量寿経』下巻の流通分の初めの文をそのままを絵画表現している。つまり、

無量寿経の下に云のたまわく。佛、彌勒に語つげたまわく、其れ彼の佛の名號を聞くことを得ること有りて、歡喜踊躍して、乃至一念せんに、當に知るべし此の人は大利を得と爲す。即ち是れ無上功德を具足す。の場面であり、まさに、仏前に坐す彌勒に対し、仏が、仏名を称えることは大利があり、無上の功德を具足できることを説き、念仏の功德を讃歎している場面である。

もう一方の下段の「無量寿経曼荼羅」の絵相は、「名號付属」の題字が示す通り、その内容は（注8）、其有衆生値斯經者随意所願皆可レ得度佛語彌勒如来興世難値難見諸佛經道難得難聞菩薩勝法諸波羅蜜得聞亦難遇善知識聞法能行此亦爲難若聞斯經信樂受持難中之難無過此難是故我法如是作如是説如是教應當信順如法修行

（それ衆生有りて、この經に値あう者は、意こころの所願に随つて、皆、得度すべし。

佛、彌勒に語げたまわく。如来の興世には、値あい難く見難し。諸佛の經道は、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し。善知識に遇いて法を聞きて能く行ずること、これまた難しとす。若しこの經を聞きて、信樂し受持することは難が中の難なり。この難に過ぎたるは無し。この故に我が法は、かくの如く作し、かくの如く説き、かくの如く教う。當に信順して如法に修行すべし。）

の部分である。参考までにいうならば、「無量寿経曼荼羅」の章段に、林丘寺宮松領元秀が書き入れた流通文の

文言^(注9)と呼応した絵相である。

(二) 第五章標章「第五念佛現當利益章」の【現當】とは

ここで注目したいのは、標章の「第五念佛【現當】利益章」という文言である。

第五章の標となるこの文言からすれば、第五章は、念仏には【現當二世始終の両益】があることになる。

しかし、この【現當利益】については、第十一章で詳細に考察するが、簡略的にいうならば、念仏の行者を觀音菩薩、勢至菩薩が影と形のごとく影護していることを現益、また、浄土に往生して成仏することを當益としている。さらに、始終の両益については、念仏の衆生を光明の中に救い取って一人も捨てず、この世を終われば必ず浄土に往生できるという始益と、阿弥陀仏が入滅した後も、觀音菩薩、勢至菩薩が浄土を守るものの、すでに入滅した仏を、その国の人々は拝することはできないのである。ところが、専ら念仏をして浄土に往生したもののだけは、常に阿弥陀仏が現にましまして拝することができるという終益の二つがあるというのである。この第十一章で説かれる【現當二世始終の両益】については、第五章では説かれていないのである。説かれるのは、念仏には、一念大利があり、無上の功德を具足できるということが説かれるだけである。

このようなことから、明らかに、高田敬輔が第五章と第十一章の内容を混同したのではないかと思われる。ちなみに第十一章の標章は、「約對雜善讚歎念佛章」と記され、法然が記した「約對雜善讚歎念佛之文」と、ほぼ同一である。

そこには、釈尊が様々な雜善を修する者に約對して、念仏をする者こそ最勝の芬陀利華（白蓮華）に譬えられと讚歎する章であり、『觀無量壽經』の結びの段の一文^(注10)が次のように記されているのである。

若念佛者當知此人是人中芬陀利華觀世音菩薩大勢至菩薩爲其勝友當坐道場生諸佛家

（もし念佛せん者は、當に知るべし。この人は、これ人中の芬陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩、その

勝友と爲る。當に道場に坐すべきを以って諸佛の家に生ずべし。」

とあり、この後、『觀經疏』を引き、念仏の功德が他の諸々の善根と比べて勝れていることが説かれていく流れになっている。そして、第十一章のまとめとして【現當二世始終の両益】があることが説かれるのである。

だから、第十一章の標章は、「約對雜善讚歎念佛章」で納得が得られるのである。

高田敬輔は、第五章の「念佛利益章」に、第十一章の「現當利益」の内容を加味することにより、念仏には無上の利益があることを知らしめる必要を覚え、【現當】を加えた「念佛【現當】利益章」としたのではないかと推測されるのである。

そうであれば、第五章の結論というべき一念大利、無上功德を具足するという【念佛の利益】に、【現當二世始終の両益】が含まれることになり、第五章本来の主張内容が希薄になるのである。

さらに、もう一点、師と仰ぐ良照義山が、この標章について高田敬輔に教示したとすれば、明らかに【現當】の二文字は削除されていたものと思われる。しかし、二文字が現存することは、良照義山もこの第五章の標章を細部に亘って検討しなかったか、あるいは見逃してしまったのではないかと思われる。なぜなら江戸中期の浄土宗の碩学の最たる良照義山が、第五章を象徴する標章に【現當】を入れることを領解する筈が無いからである。単純な見逃しであつたことが想定されるのである。

六 まとめ

以上の考察を通して、高田敬輔の描いた第五章の絵相の意図するところは、次のようなことが考えられる。

① 釈尊の前に坐す弥勒に対し、『無量寿經』の結語というべき、仏名を称えることは大利があり、無上の功德を具足できることを説き、念仏の功德を讚歎し、称名念仏の一行を末代にまで流通すべきことを説示している場面であること。

(注10)(注9)(注8)(注7)(注6)(注5)(注4)(注3)(注2)(注1)

② 「選択集十六章之図」の第五章の絵相が、高田敬輔が同時期に描いた「無量壽經寿經曼荼羅」の「明能説釋迦序正流三分」の（「流通説法之相」〈名号付属〉）、弥勒に名号を讃歎し、付属する場面と共通していること。

③ 法然の説示する第五章の篇目は「念佛利益之文」で、一念大利無上功德が結論であるが、高田敬輔は「念佛【現當】利益章」と記し、第十一章の結論である「現當二世始終の両益」の【現當】の二文字を誤って入れた可能性が高いこと。

また、師と仰ぐ良照義山も、標章の誤記を見逃したことが想定されること。

『無量壽經』卷下（浄土宗全書第一卷三五頁）

『往生礼讃』（浄土宗全書第四卷三六二頁）

『往生要集』（浄土宗全書第十五卷一四一頁）

『無量壽經』卷下（浄土宗全書第一卷一九頁）

『観念法門』（浄土宗全書第四卷二二四頁）

『無量壽經』卷下（浄土宗全書第一卷一九頁）

前掲（注4）
同じ

『無量壽經』卷下（浄土宗全書第一卷三六頁）

詳細は、本論文、【第三章「無量壽經曼荼羅」の概要 第三節第二項『無量壽經』流通文】を参照。

『観無量壽經』（浄土宗全書第一卷五一頁）

第六項 「第六 末法之後特留念佛章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第六 末法之後特留念佛章

二 『選択本願念仏集』の篇目

末法萬年後餘行悉滅特留「念佛」之文

（末法萬年の後に餘行悉く滅し、特^{ひと}り念佛を留むるの文）

* 前章第五章では、念仏には、一念大利無上の功德があることを明らかにしたが、今章では、末法萬年の後には他の全ての教法が滅尽するが、ひとり『無量寿経』だけは百年間留め置かれ、衆生を救済することが説かれる章である。

三 『選択本願念仏集』の引文

無量寿経下巻云當來之世經道滅盡我以「慈悲哀愍」特留「此經」止住百歲其有「衆生」値「此經」者隨「意所願」皆可「得度」

（無量寿経の下巻に云わく、當來の世に經道滅盡せんに、我れ慈悲哀愍を以つて、特りこの經を留めて、止住すること百歲ならん。それ衆生有りて、この經に値^あわんものは、意^{こころ}の所願に隨いて、皆、得度すべしと。）

* 『無量寿経』の下巻^(注1)には、はるか後になって末法の世になり、五濁惡世が進み、釈尊の尊い教えが滅盡するようなことがあっても、衆生を救うという慈悲の心と哀れみ慈しむ思いをもって、この經に説いた

念仏だけは、百年の間、留め置くであろう。もしこの經に巡り会い、念仏を修す衆生があるならば、必ず得度し、往生がかなえられるであろう、と説示している。

四 『選択本願念仏集』の私釈

私釈段は、初めに特留念仏、次に念仏と諸教の四重の相對、さらに特留此經止住百歳、そしてなぜ三時に普益か、の四つの観点で説かれる。

(一) 特留念仏について

まず、初めに、『無量壽經』には「特留此經」とあるのに、なぜ「特留念仏」であるのか、問答される。

私問曰經唯云「特留此經止住百歳」全未云「特留念佛止住百歳」然今何云「特留念佛」哉答曰此經所詮全在「念佛」其旨見「前不能」再出「善導懷感惠心等意亦復如」是然則此經止住者即念佛止住也所以然者此經雖有「菩提心之言」未說「菩提心之行相」又雖有「持戒之言」未說「持戒之行相」而說「菩提心行相」者廣在「菩提心經等」彼經先滅菩提心之行何因修之又說「持戒行相」者廣在「大小戒律」彼戒律先滅持戒之行何因修之自餘諸行準「是應」知故善導和尚往生禮讚釋此文云「万年三寶滅此經住百年爾時間一念皆當得生」彼

(私に問いて曰わく、經にただ特りこの經を留めて、止住すること百歳と云うて、全く未だ特り念佛を留めて止住すること百歳と云わず。然るに、今、何ぞ特り念佛を留むと云うや。

答えて曰わく、この經の所詮は、全く念佛に在り。その旨前に見えたり。再び出すこと能わず。

善導、懷感、惠心等の意、またまたかくの如し。然れば則ち此の經の止住は、即ち念佛の止住なり。

然る所以は、この經に菩提心の言有りと雖も、未だ菩提心の行相を説かず。また持戒の言有りと雖も、未だ持戒の行相を説かず。しかるに菩提心の行相を説くことは、廣く菩提心經等に在り。彼の經、先に滅しなば、菩提心の行、何に因りてかこれを修せん。また持戒の行相を説くことは、廣く大小の戒律に

在り。彼の戒律、先に滅しなば、持戒の行、何に因りてかこれを修せん。自餘の諸行これに準じて當に知る應し。

故に善導の往生禮讃に、この文を釋して云わく、萬年に三寶滅せん、この經、住すること百年ならん。その時、聞きて一念せば、みな當に彼かしこに生ずることを得べし。）

* 引文に続いて私釈の部分である。まず最初の問いかけは、『無量壽經』には、「特りこの經を留めて、止住すること百歳」とあつて、「特り念仏を留めて、止住すること百歳」とは説かれていない。それなのに、なぜ、今章の篇目に「特留念仏」としたのかという疑問である。

これについて答えるに、この經は、所詮、念仏の法門を説いた經典であることによるのであつて、これまで第三章では、念仏は往生の本願であること、念仏往生の願が成就されていることが説かれ、第四章では、三輩の文の中に、それぞれ一向專念無量壽仏とあることが説かれ、第五章では、本願念仏は、一念大利、無上の功德があることが説かれたので、繰り返さないが、善導、懷感、恵心の考えも全く同じである。

ちなみにそれぞれの説示をみると、

善導は『往生礼讃』(注2)で、

萬年三寶滅此經住百年爾時間一念皆當得生_レ彼願共諸衆生往生安樂國

（萬年に三寶滅すれども、この經、住すること百年ならん。その時に聞きて一念せんも、皆、當に彼に生ずることを得べし。願わくは諸々の衆生と共に安樂國に往生せん。）

懷感は『釋淨土群疑論』卷第五(注3)で、

无量壽經又言上中下輩行有淺深_二皆唯一向專念阿彌陀佛得_レ生_二極樂

（无量壽經にまた言わく、上、中、下輩行に淺深有れども、皆、ただ一向に専ら阿彌陀佛を念じて極樂に生ぜんことを得と。）

恵心は『往生要集』巻下の本^(注4)で、

雙觀經三輩之業雖有淺深然通皆云一向專念無量壽佛

(雙觀經の三輩の業は、淺深有りと雖も、然も通じて、皆、一向專念無量壽佛と云う。)

のようになっていて、三者ともども念仏に対する考え方は同じであることが分かるのである。だから、この『無量寿經』の止住百歳というのは、とりもなおさず念仏の止住百歳のことなのである。例えば、經文の中に、菩提心という文言があるが、その内容や実践の方法は説かれていないのである。また、持戒という文言があるが、同じように、その内容や実践法は説かれていないのである。

むしろ、菩提心についていうならば、『佛說莊嚴菩提心經』^(注5)に「發菩提心有十法」として説かれているが、末法を過ぎてそれらの經典が先に滅したならば、何をたよりに修行することができようか。

また、戒を保つことについては、広く大乘、小乗の戒律を説いた經律に説かれるが、これもまた滅してしまえば、何をたよりに持戒の修行をすることができようか。

さらに、その他の諸々の余行についても、同じことがいえるのである。

だから、善導は、右の『往生礼讃』で、末法の後に三宝が滅しても、この『無量寿經』だけは百年留まって衆生を利益するとしている。そして、その末法においても本願念仏の利益を聞いて、一念するならば、みな彼の浄土に往生することができると説いているのである。

このようなことから、まさに、特留此經止住百歳は特留念仏止住百歳ということができると述べられているのである。

(二) 念仏と諸教の四重の相對について

次に、この『無量寿經』の經文を解釈するのに四重の相對が取り上げられている。つまり、四つの法門につ

いて、いかに浄土門、念仏行が勝れているかが説かれるのである。

又釋此文略有四意一者聖道浄土二教住滅前後二者十方西方二教住滅前後三者兜率西方二教住滅前後四者念佛諸行二行住滅前後也一聖道浄土二教住滅前後者謂聖道門諸經先滅故云經道滅盡浄土門此經特留故云止住百歲也當知聖道機縁淺薄浄土機縁深厚也二十方西方二教住滅前後者謂十方浄土往生諸教先滅故云經道滅盡西方浄土往生此經特留故云止住百歲也當知十方浄土機縁淺薄西方浄土機縁深厚也三兜率西方二教住滅前後者謂上生心地等上生兜率諸教先滅故云經道滅盡往生西方此經特留故云止住百歲也當知兜率雖近縁淺極樂雖遠縁深也四念佛諸行二行住滅前後者謂諸行往生諸教先滅故云經道滅盡念佛往生此經特留故云止住百歲也當知諸行往生機縁最淺念佛往生機縁甚深也加之諸行往生縁少念佛往生縁多又諸行往生近局末法萬年之時念佛往生遠霑法滅百歲之代也

(又この文を釋するに略して四意有り。一には聖道・浄土の二教住滅の前後。二には十方・西方の二教住滅の前後。三には兜率・西方の二教住滅の前後。四には念佛・諸行の二行住滅の前後なり。

一に聖道・浄土の二教住滅の前後とは、謂わく聖道門の諸經先に滅す。故に經道滅盡と云う。浄土門のこの經特り留まる。故に止住百歲と云う。當に知るべし、聖道は機縁淺薄にして、浄土は機縁深厚なり。二に十方・西方の二教住滅の前後とは、謂わく十方浄土往生の諸教先に滅す。故に經道滅盡と云う。西方浄土往生のこの經特り留まる。故に止住百歲と云う。當に知るべし、十方の浄土は機縁淺薄にして、西方浄土は機縁深厚なり。

三に兜率・西方の二教住滅の前後とは、謂わく上生、心地等の上生兜率の諸教先に滅す。故に經道滅盡と云う。往生西方のこの經特り留まる。故に止住百歲と云う。當に知るべし、兜率は近しと雖も縁淺く、極樂は遠しと雖も縁深し。

四に念佛・諸行の二行住滅の前後とは、謂く諸行往生の諸教先に滅す。故に經道滅盡と云う。念佛往生

のこの經特り留まる。故に止住百歳と云う。當に知るべし、諸行往生は、機縁最も淺く、念佛往生は、機縁甚だ深し。しかのみならず諸行往生は縁少なく、念佛往生は縁多し。また諸行往生は、近く末法萬年の時に局^{かぎ}れり。念佛往生は、遠く法滅百歳の代を霑^{うるお}す。）

* 『無量寿經』の經文を解釈する上で、四重の相對がある。

それは、聖道・淨土・十方・西方、兜率・西方、念佛・諸行の四つの法門について、二つの教えを對比しながら説かれるものであり、具体的には、

① 聖道・淨土の二教住滅前後とは、聖道門の諸經は先に滅するので「經道滅尽」と説かれ、淨土門の『無量寿經』だけは、後までひとり留まるので「止住百歳」と示されている。

だから、聖道門は末法の凡夫との機縁が淺薄で、淨土門は末法の我々とは機縁が深く厚いのである。

② 十方・西方の二教住滅前後とは、十方淨土の諸教は先に滅するので「經道滅尽」と説かれ、西方淨土往生を説くこの『無量寿經』だけは、後までひとり留まるので「止住百歳」と示されている。

だから、十方淨土の諸教は末法の凡夫との機縁が淺薄で、西方淨土往生は末法の我々とは機縁が深く厚いのである。

③ 兜率・西方の二教住滅前後とは、弥勒の兜率天を説いた『弥勒上生經』や『心地觀經』等の諸教は先に滅するので「經道滅尽」と説かれ、西方淨土往生を説くこの『無量寿經』だけは、後までひとり留まるので「止住百歳」と示されている。

だから、兜率天は弥陀の淨土よりは近いとされて親しまれているが、末法の凡夫とのゆかりが淺薄で、西方淨土往生は末法の我々とはゆかりが深く厚いのである。

④ 念佛・諸行の二行住滅前後とは、念佛行以外の諸行は先に滅するので「經道滅尽」と説かれ、念佛の教えを説く『無量寿經』だけは、後までひとり留まるので「止住百歳」と示されている。

だから、諸行で往生できるものは少なく、機縁が最も浅く、念仏で往生できるものは多く、機縁が深く厚いのである。そればかりか、諸行往生は末法の世一万年に限られるのに対し、念仏往生は他の諸教が滅びた後も百年は人々を利益するのである。

というように、聖道・浄土、十方・西方、兜率・西方、念佛・諸行の四つの観点から、対比して『無量寿経』に説かれる念仏行が勝れていることが説かれるのである。

(三) 特留此経止住百歳について

そして、さらに、どうして『無量寿経』だけに「特留此経止住百歳」と説き、余経を留めないのかという疑問を呈するのである。

問曰既云「我以慈悲哀愍」特留此経「止住百歳」若爾者釋尊以慈悲而留經教何経何教而不留餘経唯留此経乎答曰縱令留何経別指一経則亦不避此難但特留此経有其深意歟若依善導和尚意者此経之中已説彌陀如來念佛往生本願釋迦慈悲爲留念佛殊留此経餘経之中未説彌陀如來念佛往生本願故釋尊慈悲而不留之也凡四十八願皆雖本願殊以念佛爲往生規故善導釋云弘誓多門四十八偏標念佛最爲親人能念佛佛還念專心想佛佛知人故知四十八願之中既以念佛往生之願而爲本願中之王也是以釋迦慈悲特以此経止住百歳也例如彼觀無量壽経中不付屬定散之行唯獨付屬念佛之行是卽順彼佛願故付屬念佛一行也

(問うて曰わく、既に我れ慈悲哀愍を以つて、特りこの経を留めて、止住すること百歳ならんと云う。もししからば、釋尊、慈悲を以つて、經教を留めたまわば、何れの經、何れの教か、留まらざらん。而るに何ぞ餘経を留めず、ただこの経を留めるや。

答えて曰わく、たとい何れの経を留むと雖も、別して一経を指せば、またこの難を避けず。但し、特り

この經を留める、その深意有るか。

もし善導和尚の意に依らば、この經の中に、すでに彌陀如來の念佛往生の本願を説けり。釋迦の慈悲、念佛を留めんがために、殊にこの經を留む。餘經の中には、いまだ彌陀如來の念佛往生の本願を説かず。故に釋尊の慈悲、以ってこれを留めたまわず。およそ四十八願、皆、本願なりと雖も、殊に念佛を以って往生の規と爲す。

故に善導の釋に云わく、弘誓多門にして四十八なり、偏えに念佛を標して、最も親しとす。人能く佛を念ずれば、佛、還りて念じたまう。專心に佛を想わば、佛、人を知りたまうと。(已上)

故に知りぬ、四十八願の中に、既に念佛往生の願を以って、本願の中の王と爲す。ここを以って釋迦の慈悲、特りこの經を以って、止住すること百歳なり。例せば彼の觀無量壽經の中に、定散の行を付屬せずして、ただ獨り念佛の行を付屬するが如し。これ即ち彼の佛願に順ずるが故に、念佛の一行を付屬するなり。)

＊

『無量壽經』の經文に「我れ慈悲哀愍を以って、特りこの經を留めて、止住すること百歳ならん」とあるが、もし、釈尊が慈悲の心をもって經典や教理を残そうとするなら、他のどの經典や教理でも留めることができる筈なのに、どうしてただ『無量壽經』だけを末世の後までも留めることにしたのか不思議なことである。

その疑問については、たとい何れの經を留めるとしても、特に一つの經典だけを指し示したなら、また同じような疑問が生じるであらう。しかし、この『無量壽經』のみを留められたということは、おそらく釈尊に深い御心があつたものと推測されるのである。

そこには、第三章で善導和尚の『觀念法門』^(注6)や『往生礼讃』^(注7)を引いたように、阿弥陀仏が称名念仏を浄土往生の唯一の本願往生行として選取し、他の諸行を選捨したことや、念仏行には勝劣難易の二義が

あることが説かれていることによるのである。

だから、釈尊は慈悲の心をもって、念仏を後世まで留まるように、特にこの『無量寿経』を残したのである。それに比して、余経には、いまだ阿弥陀如来の念仏往生が説かれていないので、従って、これも釈尊の慈悲の心によって、それらの経を留めなかったのである。

阿弥陀如来が、一切の衆生を救済するために誓った四十八願は、広大で多門であるが、その中で、特に第十八願の念仏往生の願が基本となる本願なのである。

だから、善導が『法事讃』^(注8)で、

弘誓多聞四十八偏標「念仏」最爲「親人能念」佛佛還念專心想「佛知」人

（弘誓多聞にして四十八なり、偏えに念佛を標して、最も親しとす。人能く佛を念ずれば、佛、還りて念じたまう。専心に佛を想わば、佛、人を知りたまう。）

と説くように、阿弥陀如来が一切の衆生のために誓った四十八願の中で、特に第十八願の念仏往生の願は、念仏の行者が仏と最も親しい関係をもつことになり、もし衆生が阿弥陀仏を心から念ずれば、仏もまた衆生を念じ給うのである。また、衆生が阿弥陀仏を専心に想うところに、仏も衆生を知り給うのである。

だから、特に第十八願の念仏往生の願が本願中の王、つまり王本願だということができるのである。

このようなことから、釈尊が慈悲の心をもって、ひとりこの『無量寿経』を永遠に残し留め給わったといえるのである。

例えば『観無量寿経』には、初めは心を静めて修する定善と、日常のままにつとめる散善の行を説きながらも、経の結びには、阿難にその定散を付属せず、念仏の一行だけを付属したことからも知ることができる。これは、つまり、念仏は阿弥陀仏の本願にかなう行であるから、念仏だけを後世に永く伝えるように付属したことなのである。

(四) 三時普益について

そしてさらに、この念仏行は末法の衆生にだけあてはまるのか、あるいは正・像・末の三時期にあてはまるものなのかという問いかけがなされる。

問曰百歳之間可^レ留^二念佛^一其理可^レ然此念佛行唯爲^レ被^二彼時機^一將爲通^二於正像末之機^一也答曰可^二廣通^二於正像末法^一舉^レ後勸^レ今其義應^レ知

(問いて曰わく、百歳の間、念佛を留むべきこと、その理然るべし。この念佛の行は、ただ彼の時機に被^{こおむ}るとやせん。將^はた正像末法の機に通ずとやせん。

答えて曰わく、廣く正像末法に通ずべし。後を舉げて今を勸む。その義知るべし。)

* 末法の後、百年の間、ただ念仏の一行を留められた釈尊の慈悲の御心は知ることができたが、ただ末法の時だけにあてはまるものなのか、それとも正法、像法、末法の三時のいずれの時代の衆生にも通じて利益が与えられるのか疑問が生じるのである。

その疑問に答えて、法然は、釈尊は広く正法の時代にこの経を説いたので、その時代の衆生に念仏を勧められ、さらに、像法となり、末法となつても念仏を勧めて無上の功德を与え、救われたのである。

今、経文には最後の末法の時代をあげて、念仏の弘通を説いているが、正法、像法、末法、三時のいずれの時代にも通じて永遠に一切の衆生を救済する法門であると説いているのである。

以上、四つの観点から第六章の教理展開をみてきたが、この特留念仏について、高田敬輔がどのような絵相を描いたか、「無量寿経曼荼羅」の(特留此經)とも関連付けて、次にみることにする。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第六末法之後特留念佛章)と「無量寿経曼荼羅」(特留此経)の絵相

上段「選択集十六章之図」(第六末法之後特留念佛章)と下段「無量寿経曼荼羅」(特留此経)の絵相



前頁のように、上段と下段の絵相は、同一人物である高田敬輔が描いた絵相である。高田敬輔が描く第六章の絵相は、当然のこととして「無量寿経」を曼荼羅にした「無量寿経曼荼羅」の（特留此經）と共通点が多くみられるのである。

上段の「選択集十六章之図」（第六末法之後特留念佛章）の絵相は、裸形の男女四人が、廃屋の中の台上の経巻を前に合掌して念仏を称えている様相を表した絵相である。

まさに末法の後に経巻だけは、特り留め置かれ、一切の衆生が念仏を称え、往生を願う姿である。

ただ一つ気にかかることは、台上の経巻が三巻に見えることである。もし、『無量寿経』であれば、別称『双卷経』と二巻であることから、計四巻描かれてもよいと思われるが、敢えて三巻として描かれている。

別な視点から考えれば、『浄土三部経』としての三巻かも知れない。また、この第六章は『無量寿経』のことが説かれる章であるが、浄土往生には念仏の一行が最もふさわしく、末法の後まで留めるのは『無量寿経』を含む『浄土三部経』であるという大きな捉え方をして、それを象徴するように、三巻の経典を描いたことも考えられる。いずれにしる第六章の教義展開からすれば『無量寿経』が描かれていることには間違いないのである。

下段の「無量寿経曼荼羅」（特留此經）の絵相^{注9)}は、衣服を身に着けない裸形の一組の男女が、劔のような樹林や刀のような険しい岩盤に取り囲まれた洞窟の中に安置された、巨大な象徴的な『無量寿経』の前で合掌し、念仏を称えている様相が描かれている。

この両者の絵相に共通なことは、末法の世の後の様相を表す、世が滅び、建物や衣服や食料等が滅尽して荒涼とした世になっても、廃屋や巖窟に留め置かれているのは『無量寿経』であり、それに救いを求め、合掌しながら念仏を称える衆生の姿である。

まさに『無量寿経』が末法の世の後、百年間も留められ、一切の衆生の救済と念仏の無上の利益を与えるということが描かれた絵相であるということができるのである。

六 まとめ

以上のように、第六章の絵相から、高田敬輔の意図するところは、次のようなことであると思われる。

① 「無量寿経曼荼羅」の標章は、【特留此經】であり、「選択集十六章之図」の標章は、「末法之後【特留念佛】章」である。この標章からどちらも内容的には同じようにみえるが、『無量寿経』の経文は【特留此經】であり、『選択本願念仏集』の私釈段で、法然が『無量寿経』は念仏の法門を説いた經典であるということから、【特留此經】は【特留念仏】、つまり、【此經〓念仏】であるという解釈をしている。

高田敬輔は、それを忠実に読み解き、「無量寿経曼荼羅」には【特留此經】の標章を、「選択集十六章之図」には【特留念佛】の標章を記し、正確に使い分けをしていること。

② 荒涼とした廃屋の前で、裸形のまま経巻に念じる姿を描くことによって、世の中のもの全てが滅尽しても、【此經〓念仏】は残り、一切衆生を救済することを描いていること。

③ 第三章からこの第六章までは『無量寿経』を抛り所としていて、高田敬輔はその標文と絵相に特色を強調しているが、集約すると、第三章【念仏〓本願】↓第四章【念仏〓廃立】↓第五章【念仏〓利益】という流れを踏まえ、帰結するところは、第六章【此經〓念仏】であり、【念仏〓特留】ということができること。

『無量壽經』(浄土宗全書第一卷三六頁)

善導『往生礼讃』(浄土宗全書第四卷三六二頁)

懷感『釋浄土群疑論』(浄土宗全書第六卷七〇頁)

惠心源信『往生要集』(浄土宗全書第一五卷一二九頁)

(注5)(注4)(注3)(注2)(注1)
『佛說莊嚴菩提心經』「發菩提心有十法」(大正新脩大藏經第十卷九六一頁)

所應說者吾今當說。菩薩發菩提心有十法。何等爲十。發第一心成就衆善本。譬若須彌山以衆寶莊嚴。發第二心行檀波羅蜜。譬若大地長養衆善法。發第三心行尸波羅蜜。喻若師子王能降伏衆獸。滅除邪見故。發第四心行羼提波羅蜜。喻若那羅延堅固不可壞。滅除煩惱故。發第五心行毘梨耶波羅蜜。現行衆善法。喻若天華如意說法故。發第六心行禪波羅蜜。喻若日光明滅除衆闇故。發第七心行般若波羅蜜。諸願得滿足。喻若商賈客得離衆難故。發第八心行方便波羅蜜。滅除諸障礙。喻若月盛滿清淨無穢故。發第九心欲滿足本願遊淨佛國土樂聽深妙法滅除貧窮故。發第十心喻若虛空其智無窮盡。譬如轉輪王成就一切種智故。善男子。

善導『觀念法門』(浄土宗全書第四卷二三三頁)

善導『往生礼讃』(浄土宗全書第四卷三七六頁)

善導『法事讃』(浄土宗全書第四卷八頁)

(注9)(注8)(注7)(注6)
拙稿、本論文【第四章「無量壽經曼荼羅」の概要 第一節第三項(二)「特留此經」】参照のこと

第七項 「第七 弥陀光明唯摄念佛行者章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第七 弥陀光明唯摄念佛行者章

二 『選択本願念仏集』の篇目

弥陀光明不_レ照_二餘行者_一唯攝_二取念佛行者_一之文

（弥陀の光明、餘行の者を照らさず、唯、念佛の行者を攝取したまうの文）

* 第三章から前章第六章までは、『無量寿経』を抛り所とする観無量寿経撮要として展開されるが、ここ第七章から第十二章までは、『観無量寿経』を抛り所とする観無量寿経撮要として展開される。

この第七章は、阿弥陀仏の光明が、本願念仏を称える者を照らすのに対し、諸行を修する者を照らさないことが説かれていく。

三 『選択本願念仏集』の引文

まず初めに、『観無量寿経』の一文^(注1)が引用される。

観無量寿経云無量寿佛有_二八万四千相_一一一相各有_二八万四千随形好_一一一好復有_二八万四千光明_一一一光明徧照_二十方世界_一念佛衆生攝取不_レ捨

（観無量寿経に云わく。無量寿佛に八万四千の相有り。一一の相に、各々八万四千の随形好有り。一一の好に、また八万四千の光明有り。一一の光明、徧く十方世界を照らして、念佛の衆生を攝取して捨てたまわず。）

* この経文は、『観無量寿経』に説かれる十三の定善の中の第九真身観の部分である。

無量寿仏にそなわる相好に八万四千の相があり、さらに一一の相に各々八万四千の隨形好があり、そしてその一一の隨形好に各々八万四千の光明があり、その一一の光明が遍く十方の世界を照らし、特に念仏を称する衆生を照らして護念することが明かされるとともに、何故に念仏者だけが照護されるのか説かれる。

その念仏者だけが光明攝取されることについて、善導の『観無量寿経疏』（定善義卷第三）（注2）が引用されるのである。

同經疏云從「無量壽佛」下至「攝取不捨」已來正明「觀」身別相「光益」有緣上即有「其五」一明「相多少」二明「好多少」三明「光多少」四明「光照遠近」五明「光所」及處偏蒙「攝益」問曰備修「衆行」但能廻向皆得「往生」何以佛光普照唯攝「念仏者」有「何意」也答曰此有「三義」一明「親緣」衆生起「行口常稱」佛佛即聞「之身常禮」敬佛「佛即見」之心常念「佛佛即知」之衆生憶「念佛」者佛亦憶「念衆生」彼此三業不「相捨離」故名「親緣」也二明「近緣」衆生願「見」佛佛即應「念現」在目前「故名」近緣「也三明」増上緣「衆生稱念即除」多劫罪「命欲」終時佛與「聖衆」自來迎接諸邪業繁無「能礙者」故名「増上緣」也自餘衆行雖「名」是善「若比」念佛「者全非」比校「也是故諸經中處處廣讚」念佛功能「如」無量壽經四十八願中「唯明」專念「彌陀名號」得「生」又如「彌陀經中」一日七日專念「彌陀名號」得「生」又十方恆沙諸佛證「誠不虛」也又此經定散文中唯標「專念」名號「得」生此例非「一也廣顯」念佛三昧「竟觀念法門云又如」前身相等光一一偏照「十方世界」但有「專念」阿彌陀佛「衆生」彼佛心光常照「是人」攝護不「捨總不」論「照」攝餘雜業行者

（同經の疏に云わく、無量壽佛従り下、攝取不捨に至る已來は、正しく身の別相を觀ずるに、光、有緣を益することゝ明す。即ち其の五有り。一には相の多少を明し。二には好の多少を明し。三には光の多少を明し。四には光照の遠近を明し。五には光の及ぶ所の處、偏に攝益を蒙ることを明す。

問うて曰く、備さに衆行を修して、ただ能く廻向すれば、皆、往生を得。何を以ってか、佛光普く照らすに、唯念佛の者のみを攝する。なに意有るや。

答えて曰わく、此れに三義あり。

一に親縁を明す。衆生、行を起して、口、常に佛を稱すれば、佛、即ちこれを聞きたまう。身、常に佛を禮敬すれば、佛、即ちこれを見たまう。心、常に佛を念ずれば、佛、即ちこれを知りたまう。衆生、佛を憶念すれば、佛、また衆生を憶念したまう。彼此の三業相い捨離せず。故に親縁と名づく。

二に近縁を明す。衆生、佛を見んと願すれば、佛、即ち念に應じて、目前に現在す、故に近縁と名づく。三に増上縁を明す。衆生、稱念すれば、即ち多劫の罪を除く。命終わらんと欲する時、佛、聖衆とともに、自ら來りて迎接したまう。諸々の邪業繁、能く礙うる者の無し。故に増上縁と名づく。

自餘の衆行も、是れ善と名づくとも、若し念佛に比すれば、全く比校に非らず。是の故に諸經の中に、處々に廣く念佛の機能を讃ず。

無量壽經の四十八願の中の如き、ただ専ら彌陀の名號を念じて生ずることを得ることを明せり。

また彌陀經の中の如き、一日七日、専ら彌陀の名號を念じて生ずることを得。また十方恆沙の諸佛、虚しからずと證、誠したまう。

また此の經の定散の文の中に、ただ専ら名號を念じて生ずることを得と標す。此の例一に非ず。廣く念佛三昧を顯し竟んぬ。

觀念法門に云わく、また前の如く、身相等の光、一一徧く十方世界を照すに、ただ専ら阿彌陀佛を念ずる衆生のみ有りて、彼の佛の心光常に是の人を照して、攝護して捨てたまわす。總て餘の雜業の行者を照攝すること論ぜず。

＊ 『觀無量壽經疏』（定善義卷第三）には、阿彌陀仏の相好から発せられる光明が、念仏を修する有縁の

行者を撰益する訳について、五つ述べられている。

一の相の多少とは、阿弥陀仏の相は八万四千あり、化仏の三十二相よりも多いこと。

二の好の多少とは、阿弥陀仏の一一の相に八万四千の隨形好があり、化仏の八十の隨形好より多いこと。

三の光の多少とは、阿弥陀仏の一一の好に八万四千の光明があり、化仏の光明より無量に多いこと。

四の光照の遠近とは、阿弥陀仏の一一の光明は、遍く十方世界を照らすこと。

五の念仏の撰益とは、阿弥陀仏の一一の光明は、その中でも特に念仏する行者のみを一人も漏らすことなく撰取し、往生浄土の益をもたらすこと。

そして、さらに、なぜ念仏の行者のみを撰するのかといえ、三義あることが説かれる。

第一に、親縁という仏と念仏の行者との親しい関係であるが、念仏の行者が本願によって救われるようにと常に口に「南無阿弥陀仏」と称えれば、仏はこれを聞きたまうのである。また、念仏の行者が身をもつて常に仏を礼拝して恭敬すれば、仏はこれを見たまうのである。さらに、念仏の行者が心に常に仏を思念すれば、仏はこれを知りたまうのである。まさに、念仏の行者が仏を憶い念ずれば、仏もまた念仏の行者を憶い念じたまうのである。

このように、仏と我々衆生とが、身・口・意の三業を行ずることによって、いつも離れず密接な関係を保つことができることを親縁と名づけることができるのである。

第二の、近縁というのは、仏と念仏の行者とが身近な関係にあるということである。我々衆生が、仏を見たてまつりたいと念願すれば、仏はその念に応じて、目前に姿を現わされることをいうのである。

第三に、増上縁というのは、仏が念仏の行者に多大な力添えをしてくれるということである。例えば、我々衆生が、仏の御名を称念すれば、永い年月の間に造った罪業も消除してくれたり、命終の間際には、仏自らが多くの聖衆を引き連れて来迎し、引接したまうことや、さらに、念仏を行ずれば仏の護念を受け

て諸々の悪業や煩惱からも妨げられることなく護ってくれることなどをいうのである。

だから、念仏以外の種々の行は、善行と名づけられるとしても、念仏の善に比べれば比較にならないのである。

このような念仏の功德や利益は多くの經典に挙げられているが、特に次の三經に明らかである。

『無量寿經』には、四十八願ある本願の中でも、第十八願の弥陀の名号を称念することが最も要となる本願であること。

『阿弥陀經』には、一日、七日、専ら弥陀の名号を称念して往生を願う者を、十方恆沙の諸仏が護念し、往生できることを証明していることが説かれていること。

『観無量寿經』には、広く、定善、散善の諸々の往生行が説かれるが、最後の結論として「汝好持是語持是語者即是持無量寿仏名」と念仏を付属せよと阿難に告げていること。

と説かれていて、念佛の行者を攝取したまうの文について、広く念仏三昧が説かれていることが明かされている。

また、『観念法門』^(注3)の「護念増上縁」に、

又如^二第九真身觀説云^一彌陀佛金色身毫相光明遍照^二十方衆生^一身毛孔光亦遍照^二衆生^一圓光亦遍照^二衆生^一八萬四千相好等光亦遍照^二衆生^一又如^レ前身相等光^一一^レ遍照^二十方世界^一但有^下專念^二阿彌陀佛^一衆生^上彼佛心光常照^二是人^一攝護不^レ捨總不^レ論^レ照^二攝餘雜業行者^一此亦是現生護念増上縁

(また第九の真身觀に説きて云うが如し。彌陀佛の金色身の毫相の光明、遍く十方の衆生を照らす。身の毛孔の光、また遍く衆生を照らす。圓光また遍く衆生を照らす。八萬四千の相好等の光、また遍く衆生を照らす。また前の如きの身相等の光、一一に遍く十方世界を照らす。但し専ら阿彌陀佛を念ずる衆生有れば、彼の佛の心光、常に是の人を照らして攝護して捨てたまわず。總じて餘の雜

業の行者を照攝するをば論ぜず。此れまた是れ現生護念増上縁なり。）

とあるように、第九真身觀に説かれている阿弥陀仏の金色身の白毫相から輝き出る光明は、遍く十方の衆生を照らしている。また身の毛孔から出る光も、遍く衆生を照らしている。さらに圓光もまた遍く衆生を照らしている。そして八万四千の相好等の光もまた遍く衆生を照らすのである。このように身相等の光の一つ一つが遍く十方世界を照らすのである。

ただし、そこに専ら阿弥陀仏を念ずる衆生がいれば、彼の仏の心光はいつもその念仏の行者だけを照らし、摂護して捨てることはないのである。

このように、念仏以外の雑業の行者について、照攝することは論じられていないのである。

則ち、これが念仏の行者のみを照攝するところの現生護念増上縁というのであると述べられている。

四 『選択本願念仏集』の私釈

次に、なぜ仏の光明が念仏の行者のみを照攝して、余行の者を照らさないのかについて説かれる。

私問曰佛光明唯照念仏者不照餘行者有何意乎答曰解有二義一者親縁等三義如文二者本願義謂餘行非本願故不照攝之念仏是本願故照攝之故善導和尚六時禮讚云彌陀身色如金山相好光明照十方唯念仏蒙光攝當知本願最爲強又所引文中言自餘衆善雖名是善若比念仏者全非比校也者意云是約淨土門諸行而所比論也念仏是既二百一十億中所選取妙行也諸行是既二百一十億中所選捨麤行也故云全非比校也又念仏是本願行諸行非本願故云全非比校也

（私に問うて曰わく、佛の光明、ただ念仏の者のみを照して、餘行の者を照らさざるは、なに意有るや。答えて曰わく、解するに二義有り。

一には親縁等の三義、文の如し。

二には本願の義。謂わく餘行は本願に非ず。故にこれを照攝しょうしやうせず。念佛は是れ本願なり。故に之を照攝す。故に善導和尚の、六時禮讃に云わく、彌陀の身色金山の如し。相好の光明十方を照す。ただ念佛の有りて光攝こうしやうを蒙こうむる。當に知るべし。本願最も強しとす。(已上)

また引く所の文の中に、自餘の衆善しゆぜんは、是れ善と名づくとも雖も、若し念佛に比すれば、全く比校に非ずと言は、意こころの云わく、是れ淨土門の諸行に約して、比論ひろんする所なり。念佛は、是れ既に二百一十億の中に、選取する所の妙行なり。諸行は是れ既に二百一十億の中に、選捨する所の麤行そぎやうなり。故に全く比校に非ずと云う。また念佛は是れ本願の行、諸行はこれ本願に非ず。故に全く比校に非ずと云う。(

* なぜ「佛の光明、ただ念佛の者のみを照して、餘行の者を照らさざる」という仏の御意について、その訳を述べるならば、二つの意義が考えられるというのである。

その一つは、善導が『觀經定善義』で説いているように、仏と念佛の行者との親しい關係等の三縁「親縁・近縁・増上縁」が、念佛に備わっていること。

二つ目は、念仏は本願の義であることによるもので、余行は本願の行でないから照摂されないのである。一つ目の三縁の義というのも、念仏が本願行であるから三縁の徳が念仏に備えられていることによるのである。

善導の『往生禮讃』「六時禮讃の日中禮讃」(注4)に、

彌陀身色如_二金山_一相好光明照_二十方_一唯有_二念佛_一蒙_二光攝_一當_レ知本願最爲_レ強

(彌陀の身色、金山の如し。相好の光明、十方を照らす。ただ念佛のみ有りて光攝を蒙る。當に知るべし、本願、最も強しとす。)

また、これまでに引いた『觀經定善義』(注5)の中に、

自餘衆行雖_レ名_二是善_一若比_二念佛_一者全非_二比校_一也

（自余の衆行は、これ善と名づくといえども、もし念佛に比すれば、全く比較にあらず。）とあるが、この御意は、浄土門の諸行に約して比論するものである。

念仏は、これは既に二百一十億の中から選り取られた妙行であり、これに対して諸行は、二百一十億の中で選り捨てられた粗末な行であるので、全く比較にならないといわれたものである。

さらに、念仏は本願の行であり、諸行は非本願の行である。だから「全く比較に非ず」というのであると重ねて強調されている。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」（第七 弥陀光明唯攝念佛行者章）の絵相

高田敬輔は第七章の絵相を、左図のように曼荼羅掛け幅の上部の中央に位置付け、残りの各章の念仏の行者に、

阿弥陀仏からの光明が放射状に注がれるような描き方をしている。





第一章…：光明八本。浄土門の寶船に乗船の八人の念仏行者。

第二章…：光明一本。五種正行の称名正行の出家者。

第三章…：光明無し。

第四章…：光明三本。上輩の出家者、中輩の仏前の念仏行者、下輩の臨終の念仏行者。

第五章…：光明無し。

第六章…：光明四本。裸形の四人の念仏行者。

第八章…：光明二本。二河白道を進む念仏行者、阿弥陀仏の名号軸の前の念仏行者。

第九章…：光明三本。出家者、男女の念仏行者。

第十章…：光明一本。仏前の念仏行者。

第十一章…：光明五本。二人の出家者、三人の念仏行者。

第十二章…：光明無し。

第十三章…：光明一本。阿弥陀仏の名号軸の前の念仏行者。

第十四章…：光明一本。仏前の出家者。

第十五章…：光明二本。男女の念仏行者。

第十六章…：光明無し。

合計十一章に亘り、三十一本の光明の筋がそれぞれ注がれる。

このような「攝取不捨曼荼羅」といわれる曼荼羅が、具体的にどのような形式のものであったかは、法然が念仏の弾圧を受けた当時の史料に残されているので参考までにみることにする。

まず、初めに、「興福寺奏状」である。

これは、元久二年（一二〇五年）十月に南都興福寺の衆徒が、後鳥羽院に念仏禁断の奏状に、法然教団の過失を九カ条にわたって列挙し、上奏したものである。

その第二条に^(注6)、

第二図「新像」失。近来諸所翫「一画図」。世号「攝取不捨曼陀羅」。弥陀如来之前有「衆多人」。仏放「光明」、其種々光、或枉而横照、或来而返「本」。是顕宗学生真言行者為「本」、其外持「諸経」誦「神呪」、造「自余善根」之人也。其光所「照」、唯専修念仏一類也。見「地獄絵像」之者恐「作」罪障、「見」此曼陀羅「之者悔」修「諸善」。教化之趣多以比類也。上人云、念仏衆生攝取不捨者経文也、我全無「過」云々。比理不「然」、偏修「余善」全不「念」弥陀「者」、实可「漏」攝取光「」。既欣「西方」亦念「弥陀」、寧以「余行」故隔「大悲光明」哉。

（第二に新像を図する失。近来、諸所に一の画図を翫ぶ。世に攝取不捨曼陀羅と号す。弥陀如来の前に衆多の人有り。仏、光明を放ち、其の種々の光、或いは枉げて横に照らし、或いは来たりて本に返す。

是れ顕宗の学生、真言の行者を本とし、其の外に諸経を持し、神呪を誦して、自余の善根を造すの人なり。其の光の照らす所、ただ専修念仏の一類なり。地獄の絵像を見るの者は、罪障を作すことを恐れ、此の曼陀羅を見る者は、諸善を修することを悔ゆ。教化の趣、多く以って比の類なり。

上人云わく、念仏衆生攝取不捨は経文なり。我、全く過なし。云々。比の理然らず、偏に余善を修して、全く弥陀を念ぜざれば、実に攝取の光に漏れるべし。既に西方を欣び、また弥陀を念ず、寧ぞ余行を以つての故に、大悲の光明を隔てんや。）

とあり、第二条に「新像を図する失」として、近頃、諸所に「攝取不捨曼荼羅」と号する画図を翫ぶことがある。

その画図は、阿弥陀如来の前に多くの人が有り、その阿弥陀仏の光明が種々の者を照らしているが、顕宗の学生、真言の行者を本として、諸経を持つ者、神呪を誦す者、様々な善根を修する者には、横に曲がったり、はね返っている。その光の中でただ一つ、専修念仏の者だけには照射し、攝取不捨するようになっていたので、過失があるということである。

さらに明恵は、法然が没した建暦二年（一二二二年）十一月二十三日に、『選択本願念仏集』を批判した『於一向専修宗選択集中摧邪輪』^{（注7）}を著したが、その下巻に「攝取不捨曼荼羅」について、次のように述べている。然汝集出此等文、令身光不照十方衆生、亦不分身心二光。若如汝所解者、令弥陀如来有大悲不遍之過。又令四十八願無称性之徳。汝非造書述此義、仮図像顯此意趣、名攝取不捨曼荼羅。中央図阿弥陀如来。光明照十方、周匝図在家出家諸人、在家称名諸人受光照、出家雜善行人、不蒙照触。此像处处遍満。無情愚人等、悉皆信状之。称名行不専一、不法過日熾盛。以此為往生淨業、以此為深信至極。非唯輕聖道仏法、還亦黷淨土門行。

（然るに汝の集には此れ等の文を出し、身光をして十方衆生を照らさずして、また身心の二光を分かつた。若し汝の解く所の如くは、弥陀如来に大悲不遍の過、有らしむ。

また、四十八願に称性の徳、無さしむ。

汝、書に造らず此の義述せず、図像を仮りて此の意趣を顯し、攝取不捨曼荼羅と名づく。

中央に阿弥陀如来を図す。光明、十方を照らし、周匝に、在家、出家の諸人を図す。在家の称名の諸人、光照を受け、出家の雜善の行人は照触を蒙らず。

此の像、处处に遍満す。無情愚人等、悉く、皆、これを信状す。称名行を専一にせず、不法の過は日に熾盛なり。以って此れを往生の淨業と為す。以って此れを深信至極と為す。ただ聖道の仏法を輕んずるにあらず、還つてまた淨土門行を黷す。）

この『摧邪輪』にも、『興福寺奏状』と同じように、中央に阿弥陀如来が描かれ、その仏の光明が十方を照らし、周りに在家や出家の諸人が描かれている。其の中で在家の称名の諸人だけが光照を受け、出家の雑善の行人は光照を受けていないというのである。この像は所々に遍満して、無上の者や愚人の者等も悉くこれを信状している。称名行を専らにせず、不法の過は日に日に盛んになっていると記されている。

また、無住が弘安六年（一二八三年）に著した『沙石集』巻第一「^(十)浄土門ノ人神明ヲ軽テ蒙^レ罰事[」]」^(注8)にも次のように記されている。

又中^{なか}比^{ころ}、都ニ念佛門流布シテ、惡人ノ往生スベキヨシヒタテ、戒ヲモタモチ、經ヲモ^よ讀^む人ハ、往生スマジキ様ヲ、曼陀羅ニ圖シテ、貴ゲナル僧ノ經ヨミテ居タルニハ、光明サ^ムズシテ、殺生スルモノニ、接取ノ光明サシ給ヘルヤウヲ書テ、世間ニモテ遊^{あそ}ケル比^{ころ}、南都ヨリ公家へ奏状を奉ル事アリケリ。

其狀ノ中ニ云ク、「彼地獄ノ繪ヲ留ル者ハ、惡ヲ作シ事ヲ悔、此曼陀羅ヲ拜スル者ハ、善ヲ修セシ事ヲ悲ム」トイヒケリ。

以上が、「撰取不捨曼荼羅」に関わる文書に表現された三点の史料であるが、次に、文書表現ではなく絵画表現されたものが取り上げられている『融通念仏縁起絵巻』をみることにする。

この『融通念仏縁起絵巻』は、融通念仏の教えを説いた良忍（一〇七三年―一一三二年）の伝記と融通念仏の弘通の歴史や靈驗記を描く絵巻物で、二巻の卷子本からなるものである。

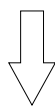
この融通念仏の結縁に加わり、名帳（勸進帳）に名を記せば、今生において一切の災難から逃れることができ、また、後生には必ず往生が遂げられることを詞書きと絵相に描き、絵巻にしているものである。

この絵巻物の中に、いわゆる念仏行者以外には阿弥陀仏の光明が降り注がない「撰取不捨曼荼羅」の絵相が描かれている。

※ 『融通念仏縁起絵巻』に描かれる「撰取不捨曼荼羅」の古様式本と新様式本

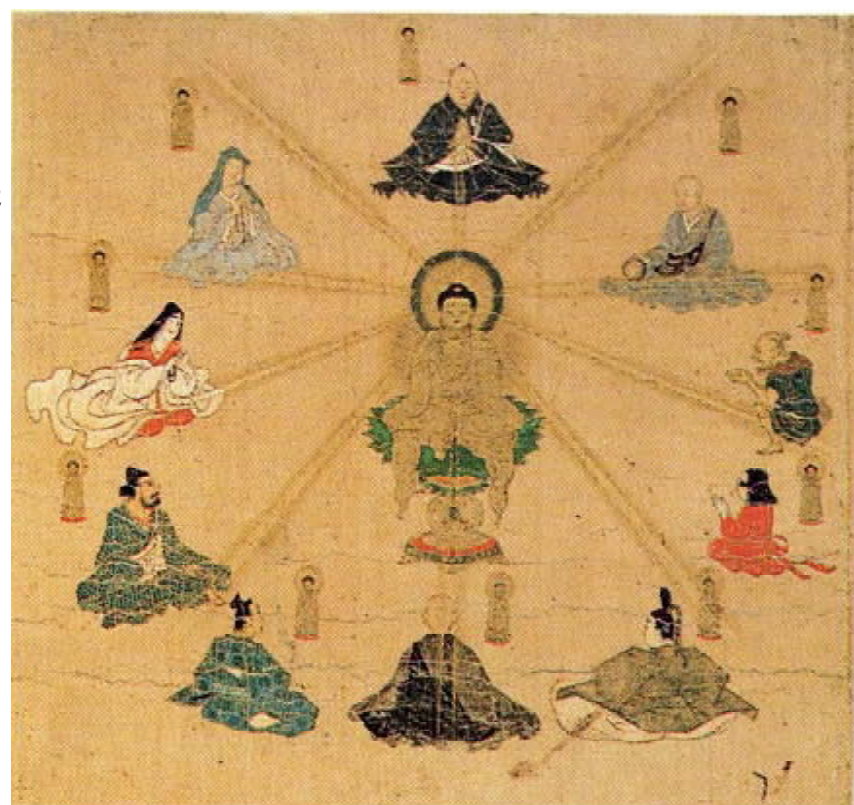
● 『融通念仏縁起絵巻』クリーブランド美術館所蔵

* 正和三年（一三一四年）



● 『融通念仏縁起絵巻』清涼寺本

* 応永二十四年（一四一七年）



【続日本の絵巻 21 融通念仏縁起 八六頁より転載】

【日本の美術 302 絵巻融通念仏縁起 裏表紙より転載】

前頁でみたように、この「撰取不捨曼荼羅」の最も古い様式をとどめる、いわゆる正和三年（一三一四年）の二巻本成立期のものに忠実な伝本である^(注9)クリーブランド美術館所蔵『融通念仏縁起絵巻』下巻第十段の絵相がある。

ここには、阿弥陀如来の座像を中心に八本の光明が描かれ、時計回りに十二時方向から、僧、「讀誦大乘行人」へ「…」は、絵巻に記載の名称）、尼、「真言大阿闍梨」、中・下流貴族、「致施行人」と施しを受ける貧人、童子、上流貴族、「跋陀和菩薩」、「在家入道」、「律僧」、武士、「五百戒比丘尼」、女房、「一陀羅尼行者」、稚児の順に、十七人が描かれている。その光明を受け、その先に化仏が現れるのは、僧、尼、中・下流貴族、童子、「在家入道」、武士、女房、稚児の八名だけであり、「真言大阿闍梨」、「致施行人」、上流貴族、「跋陀和菩薩」、「律僧」は、阿弥陀如来坐像に背を向けているのである。勿論、光明は照触されていない。

一方、およそ百年後の応永二十四年（一四一七年）^(注10)の制作と思われる新様式の『融通念仏縁起絵巻』清涼寺本をみると、まさに十方の衆生（僧、僧、貧者、童子、貴族、僧、武士、行者、女房、尼）に光明が万遍なく注がれ、各者に化仏が化現している。

ここで一つ注目したいのが、大原嘉豊氏^(注11)が指摘しているように、

＊念仏を奉じる「在家入道」・僧・尼・稚児・尼・女房・武士・貴族には化仏が現れ、中央の阿弥陀如来が放つ光明が射すが、「真言大阿闍梨」・「讀誦大乘行人」・「一陀羅尼行者」・「五百戒比丘尼」・「律僧」・「跋陀和菩薩」・「致施行人」の自力作善を修する顯密諸行者には光明が射さないこと。

＊化仏が照らしだす念仏者は、中央の阿弥陀仏に向かつて礼拝するのに対して、「真言大阿闍梨」「律僧」・「跋陀和菩薩」・「致施行人」は阿弥陀に対して背を向けていること。また、俗人の中でも衣冠姿の上流貴族階級のみが光が射さずに阿弥陀に背を向けているが、他の狩衣の中・下流貴族、女房、武士、「在家入道」、稚児、童子は阿弥陀仏の光明に浴していること。これらのことは、明らかに初期法然浄土宗教団

が、政治と密接な関係があった顕密仏教の行の価値体系を否定して、世俗的身分秩序を排除するような絵相であること。

＊クリーブランド美術館本は、貴重地位にある者を意識的に下賤の者の下に置いているが、これは本来阿彌陀の救済の問題に限定されたものであるはずなのに、造形化されたことにより、為政者にとっては都合の悪いものであること。

＊クリーブランド美術館本の後の諸本は、清涼寺本のように、表現されているあらゆる人物に均等に光明が射しており、かつまたその人物の表現も、単なる老若男女、則ち人間一般を象徴的に表しているに過ぎず、その後、これが普通の形態となること。

ということから、クリーブランド美術館本には、法然在世時に、初期浄土宗教団が教化手段として用いた顕密諸行の徹底的排除の意図が図示されているため、「興福寺奏状」「摧邪輪」等で取り上げられているように、顕密仏教側から糾弾されたことから、排除の対象になったと考えられる。さらに、その後の清涼寺本に見られるように、光明が十方世界を遍く照らし、衆生を摂取不捨する絵相に変容することを知ることができるのである。

そこで高田敬輔の第七章の絵相は、この中世に描かれた『融通念仏縁起絵巻』の「摂取不捨曼荼羅」の絵相や念仏弾圧の史料に記される内容との関連性があるかどうかということである。

おそらく、それは不可能だったと考えられる。

中世の千三百〜千四百年頃の作品である『融通念仏縁起絵巻』の絵相を、敬輔が手に取ることや「興福寺奏状」「摧邪輪」「沙石集」等の諸史料を読み解くことは、かなり困難を伴うものであったと思われる。

しかも、中世の「摂取不捨曼荼羅」の絵相は第七章だけの図案化であり、高田敬輔の描く「選択集十六章之図」は『選択本願念仏集』全体を描く中での第七章の「摂取不捨曼荼羅」の描き方である。このことは、まさに、高田敬輔ならではの、絵師としての独創性にあふれた絵画表現であるといえるのである。

六 まとめ

以上、みてきたように、高田敬輔の描く「選択集十六章之図」第七章の絵相は、どのような形態の「摂取不捨曼荼羅」であるのか、初期法然浄土教集団の用いた『融通念仏縁起絵巻』の「摂取不捨曼荼羅」と比較検討した結果、次のようなことを知ることができる。

① 高田敬輔の描く「選択集十六章之図」第七章の絵相は、中央最上段に位置し、その阿弥陀仏からの三十一本の光明の筋が、放射状に、残りの十五章各章の出家者や念仏行者にそれぞれ注がれていて「摂取不捨曼荼羅」の形態をとること。

② 中世の『融通念仏縁起絵巻』や念仏弾圧の史料に記される「摂取不捨曼荼羅」は第七章のみのもので、関連性が希薄である。また、高田敬輔の描く「選択集十六章之図」は、『選択本願念仏集』全体を描く中で第七章の「摂取不捨曼荼羅」の位置づけである。まさに、構図や各章の配置は、高田敬輔ならではの絵師として独創性に富んだ絵画表現であること。

③ 『融通念仏縁起絵巻』の「摂取不捨曼荼羅」は、顕密諸行者を否定し、身分的秩序を排除する目的として受け取られたため、『興福寺奏状』や『摧邪輪』等で批難され、弾圧を受けることになり、後の清涼寺本は、光明が十方世界を遍く照らし、衆生を摂取不捨する絵相に変容することができると。

- (注1) 『観無量寿経』(浄土宗全書第一卷四四頁)
- (注2) 『観無量寿経疏』(浄土宗全書第二卷四八頁)
- (注3) 『観念法門』(浄土宗全書第四卷二二八頁)
- (注4) 『往生礼讃』(浄土宗全書第四卷三七二頁)
- (注5) 『観経定善義卷第三』(浄土宗全書第二卷四九頁)
- (注6) 日本思想大系 15 『鎌倉旧仏教』岩波書店 一九七一年
「興福寺奏状」原文三一―二頁、読み下し文三二頁
- (注7) 日本思想大系 15 『鎌倉旧仏教』岩波書店 一九七一年
「摧邪輪」原文三七〇頁
- (注8) 日本古典文学大系 85 『沙石集』八七頁 岩波書店 一九六六年
- (注9) 松原茂 『日本の美術 302 絵巻Ⅱ 融通念仏縁起』二四頁 至文堂 一九九一年
- (注10) 前掲書、松原茂 『日本の美術 302 絵巻Ⅱ 融通念仏縁起』七五頁
- (注11) 『法然 生涯と美術』 大原嘉豊 『浄土宗美術論』「第三章 摂取不捨曼荼羅」二五―二六頁 京都国立博物館 二〇一一年

第八項 「第八 念佛行者必具三心章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第八 念佛行者必具三心章

二 『選択本願念仏集』の篇目

念佛行者必可具三心之文

（念佛の行者は、必ず三心を具足すべきの文）

* 前章第七章から第十二章までが『観無量寿経』に基づく観無量寿経撮要である。

前章は、「選択集十六章之図」の中で最も特徴的な、上段中央の阿弥陀仏から光明が各章の念仏行者に降り注ぐ「摂取不捨曼荼羅」の様相を呈した絵相の背景を考察したが、本章は、本願念仏行者が具足しなければならぬ三心について、「二河白道」の譬えもふまえながら説かれていく章である。

三 『選択本願念仏集』の引文

(一) 『観無量寿経』の三種の心

初めに、『観無量寿経』第十四観（上品上生）の文が引かれ、念仏の行者に必要な心構えを三種の心としてあげている。

観無量寿経云若有衆生願生彼國者發三種心即便往生何等爲三
一者至誠心二者深心三者廻向發願心
具三心者必生彼國

（観無量寿経に云わく、もし衆生有りて彼の國に生ぜんと願う者は、三種の心を發して、すなわち往生す。

何等をか三とす。

一は至誠心、二は深心、三は廻向發願心なり。三心を具する者は、必ず彼の國に生ず。

* 『觀無量壽經』に説かれるように^(注1)、もし衆生が上品上生として極樂淨土に往生したいと願う場合には、

三種の心を發さなければならない。その三種の心とは、一には至誠心であり、二には深心であり、三には、
廻向發願心である。

この三種の心について、次の段から具体的に説かれることになる。

(二) 『觀經疏』の三心

次に、『觀經疏』（觀經正宗分散善義卷第四）を引き、三心について説かれるが、初めに、身・口・意の三業での学も行も、真実心で行われなければならないことが説かれる。

㊦ 至誠心について

同經疏云經云「一者至誠心」至者眞誠者實欲^レ明^三一切衆生身口意業所^レ修解行必須^二眞實心中作^一不得^下外現^二賢善精進之相^一内懷^中虛假^上貪嗔邪僞^レ奸詐百端惡性難^レ侵事同^二蛇蝎^一雖^レ起^二三業^一名爲^二雜毒之善^一亦名^二虛假之行^一不^レ名^二眞實業^一也

若作^二如^レ此安心起行^一者縱使苦^二勵身心^一日夜十二時急走急作如^レ灸^二頭然^一者衆名^二雜毒之善^一欲^下迴^二此雜毒之行^一求^上生^二彼佛淨土^一者此必不可也何以故正由^下彼阿彌陀佛因中行^二菩薩行^一時乃至一念一刹那三業所^レ修皆是眞實心中作凡所^二施爲趣求^一亦皆眞實^上

（同經の疏に云わく。經に、一には至誠心と云うは、至は眞なり。誠は実なり。一切衆生の、身、口、意業に修する所の解行、必ず真実心の中に作^なすべきことを明さんと欲す。外に賢善精進^{けんぜんしやうじん}の相を現じて、内に虚仮^{こけ}を懷くことを得ざれ。貪嗔邪僞^{こんじんじやぎ}、奸詐百端^{かんさひやくたん}にして、惡性侵め難く、事、蛇蝎^{だかつ}に同じきは、三

業を起こすと雖も、名づけて雑毒の善となし、また虚假の行と名づけ、眞實の業と名づけず。

もしかくの如きの安心起行あんじんきぎょうを作す者は、たとい身心を苦勵して、日夜十二時、急に走り、急に作すと頭然ずねんを灸すくうが如くなるも、すべて雑毒の善と名づく。この雑毒の行を迴えして、彼の佛の淨土に生ぜんことを求めんと欲する者は、これ必ず不可なり。何を以つての故に、正しく彼の阿彌陀佛の因中に、菩薩の行を行じ給いし時に、乃至一念一刹那も、三業に修する所、みなこれ眞實心の中に作し、凡そ施爲せゐ趣求しゆぐし給う所、またみな眞實なるによつてなり。)

＊

『觀經疏』に説かれる『觀無量壽經』の第十四觀上品上生の三心の第一は、至誠心である。

その至誠心の至は、眞のことであり、誠は実である。だから、至誠心は、眞実心ということである。

すべての人々は、仏を礼拝し供養する時にも、口に念仏を称えるにも、心で仏を憶う、いわゆる身・口・意の行いは、すべて眞実の心でなされなければならないのである。

外見では賢人、善人らしく、精進を惜しまぬように見えても、内心に少しでも偽る気持ちを持った人であれば、その人は虚仮の人である。貪り、怒り、邪偽、奸計、姦通等の多くの邪惡な行いを起こそうとする煩惱があり、本性のようになっていて止めようがないのである。それはまるで人の嫌がる蛇や蝸さそりのよくなものであり、いくら身・口・意の三業に励んでいるようにしても、その行は雑毒の善で虚仮の行と名づけられるものであつて、眞實の業とはいえないのである。

もし、このような状態で往生のための心を構え、行を起すのであれば、たとい身心を苦しめて励まし、昼夜を分かつたずに駆け回つて努め、また頭髮に降りかかる火の粉を払い除ける時のように懸命に念仏に励んだとしても、それはすべて煩惱交じりの雑毒の善と名づけられるべきものである。このような雑毒の善をもつて廻向して彼の阿彌陀仏の淨土に往生したいと願つても、それは決してできるものではない。なぜかといえ、昔、阿彌陀仏が法蔵菩薩として菩薩行を修された時、一念一刹那たりとも、身で行い、

口に称え、心に憶われた身・口・意の三業すべてが、みな真実の心で行われたものであり、施爲（下化衆生：衆生の為に施主に為り教化して仏道に導くこと。）趣求（上求菩提：成仏を希求し悟りの境地を高く求めること。）の菩薩の修行をするのにも真実心をもって行じたことにより本願が成就したのである。

ちなみに、高田敬輔が師と仰ぐ良照義山^{（注2）}は、眞實心について次のような解釈をしている。

其眞實心之分齊者住「往生思」起行不「飾名」眞實心也所詮眞實心者眞有様心ナリ喩如「咽渴則乞」湯水「咽不」渴湯水乞フト云コトハ無也此心往生フリムケル也何事疑無慮無眞心勤也讀誦スレハ其二慮無禮拜スルモ亦然念佛スルモ往生シタサニ念佛スル也不「欲」往生「念佛スルハ虚假也

（その眞實心の分齊は、往生の思いに住して起行を飾らざるを眞實心と名づくるなり。いわゆる眞實心とは、眞と有り様の心なり。喩えば、咽、渴くときは、則ち湯水を乞い、咽、渴かざるざるに湯水を乞うと云うことは無きなり。この心を往生にふりむけるなり。何事も疑い無く、慮^{おもんば}り無く、眞心に勤むるなり。讀誦すればそれに慮り無く、禮拜するもまた然り。念佛するも往生したさに念佛するなり。往生を欲せずして念佛するは虚假なり。）

このように、良照義山は、往生したいと思つて行を起こすのが眞實心であり、いわゆる眞の心の有り様なのである。譬えば、咽が渴いた時には湯水を欲しがり、咽が渴いていない時には湯水を欲しがることはないのである。だから、心が浄土往生を求めるならば、何の疑いも無く余計なことを考えることなく、眞心をもつて往生を願えば良いのである。經典を讀誦する時も、仏を礼拝する時も、眞實の心で行じ、念仏する時には往生することを願ひながら、念仏を称えなければならぬ。もし往生することを願わずに念仏を称えることはうわべだけの愚かなことである。

だから、眞實心は、心の底から極樂浄土に往生したいという願ひの許に、眞心をもつて念仏を称えることだということができるのであると良照義山は説いている。

そして、身・口・意の業での学も行も、真実心で行われなければならないが、その真実が二種（自利真実・利他真実）として説かれる。

自ら阿弥陀仏に救われたいと願う真実心の自利真実について、最初に述べられる二種について、全体の総括的に止悪と修善という視点で方向づけがされ、それに基づいて八種の厭うものと欣ぶべきものとして、身、口、意、三業という流れで続き、十重の厭欣として述べられるのである。

又眞實有^二二種^一 一者自利眞實二者利他眞實言^二自利眞實^一者復有^二二種^一 一者眞實心中制^二捨自他諸惡及穢國等^一行住坐臥想^下同^三一切菩薩制^二捨諸惡^一我復如^も是也二者眞實心中勤^二修自他凡聖善^一

（また眞實に二種あり。一には自利眞實、二には利他眞實なり。

自利眞實と言うは、また二種あり。一には眞實心中に自他の諸惡および穢國等を制捨して、行住坐臥に、一切の菩薩の諸惡を制捨するに同じく、我もまたかくのごとくならんと想う。二には眞實心中に、自他凡聖等の善を勤修す。）

* また眞實には二種類有る。一には自らが眞實心をそなえる自利の眞實、二には他を導いて眞實心をそなえさせる利他の眞實である。

自利の眞實にも二種類ある。

①一つは、眞實心の中に、自他の惡業を廢し、穢れた世間を捨て、すべての菩薩が諸々の惡業を捨てたように、行住座臥、自らも同じようにありたいと願う止惡の心のことである。

②二つ目は、眞實心の中に、自ら善を行い、他人の善事も俱に喜び、聖者や菩薩があらゆる善根を行じたように、自らもそのようにありたいと願う修善の心のことである。

このように一つ目の止惡と二つ目の修善は、全体の総括的な眞實心であり、方向付けをなすものである。さらに、身、口、意、三業についての八種の厭欣が説かれ、合わせて十種（十重）の厭欣が解かれていくことに

なる。

眞實心中口業讚_二歎彼阿彌陀佛及依正二報_一又眞實心中口業毀_二厭三界六道等自他依正二報苦惡之事_一亦讚_二歎一切衆生三業所爲善_一若非_二善業_一者敬而遠_レ之亦不_二隨喜_一也又眞實心中身業合掌禮敬四事等供_二養彼阿彌陀佛及依正二報_一又眞實心中身業輕_二慢厭捨此生生死三界等自他依正二報_一又眞實心中意業思_二想觀察憶念彼阿彌陀佛及依正二報_一如_レ現目前又眞實心中意業輕_二賤厭捨此生生死三界等自他依正二報_一不善三業必須_二眞實心中捨_一又若起_二善三業_一者必須_二眞實心中作_一不_レ簡_二内外明闇_一皆須_二眞實_一故名_二至誠心_一

（眞實心中の口業に彼の阿彌陀佛及び依正二報を讚歎し、また眞實心中の口業に三界六道等の自他の依正二報の苦惡の事を毀厭し、また一切衆生の三業になす所の善を讚歎す。もし善業にあらざるをば敬してこれを遠ざけ、また隨喜せざるなり。

また眞實心中の身業に合掌禮敬して、四事等を彼の阿彌陀佛及び依正二報を供養す。また眞實心中の身業にこの生死三界等の自他の依正二報を輕慢し、厭捨す。

また眞實心中の意業に、彼の阿彌陀佛及び依正の二報を思想し、觀察し、憶念して、目前に現ずるが如くすべし。

また眞實心中の意業に、この生死三界等の自他の依正二報を輕賤し、厭捨す。

不善の三業をば、必ず須く眞實心中に捨すべし。またもし善の三業を起こせば、必ず須く眞實心中に作すべし。

内外明闇を簡_{えら}ばず。みな須く眞實なるべし。故に至誠心と名づく。）

＊
③眞實心中の口業をもって、彼の阿彌陀仏やその国土（依報）や仏・菩薩（正報）の莊嚴を讚歎すること。

④眞實心中の口業をもって、三界六道の迷いの世界に惡報として受けた自己や他人の身の上や環境など

にまつわる悪業や苦業を口でいうばかりでなく、真に厭い謗ること。また一切の衆生が三業（身業・口業・意業をもつて行う全人格）による善事には心から讃歎して、もし善業でなく悪業であれば遠ざけ、随喜するようなことはしないこと。

⑤ 真実心中の身業をもつて、彼の阿弥陀仏やその国土（依報）や仏・菩薩（正報）の莊嚴に対して合掌し、礼敬し、四事（三宝に対する飲食・衣服・臥具・湯薬の四種の供養）の供養をすること。

⑥ 真実心中の身業をもつて、生死の苦悩の多い三界の諸々の三途八難を受けている自己や他人の身の上や環境などにまつわる悪業や苦業を身をもつて厭い謗り、執着しないこと。

⑦ 眞實心中の意業をもつて、彼の阿弥陀仏やその国土（依報）や仏・菩薩（正報）の莊嚴に対して思念し、観察し、憶念して、眼前に現ずるように真実心をもつて観相をすること。

⑧ 真実心中の意業をもつて、生死の苦悩の多い三悪の苦業を受けている自己や他人の身の上や環境に対して心から厭い謗ること。

⑨ 不善の三業については、必ず、悉く真実心をもつて厭い捨てること。

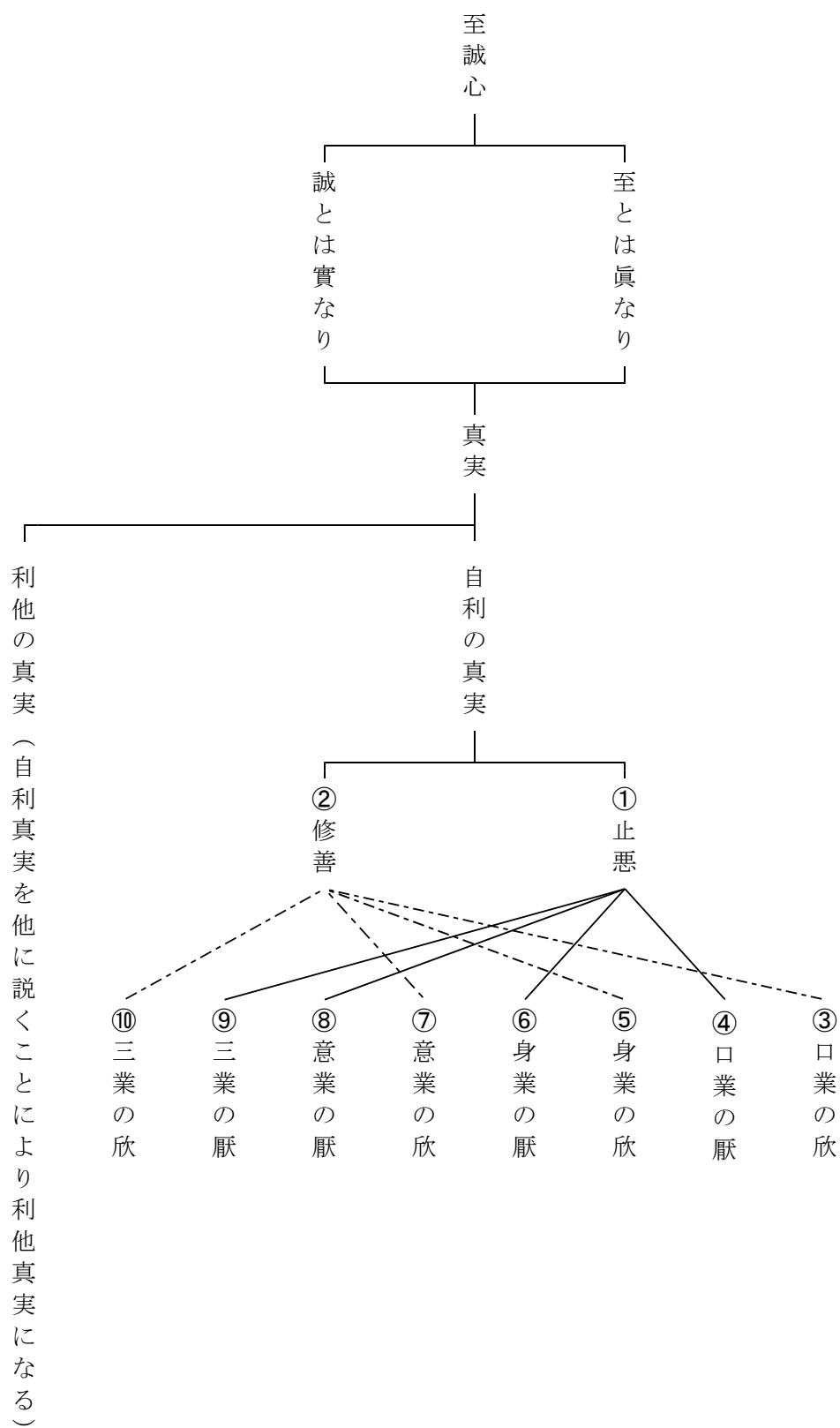
⑩ 善の三業については、必ず、悉く真実心をもつてなされるべきであること。

以上のように、真実心とは、極楽浄土往生を願う内なる心と、口称念仏、礼拝讃歎、憶念観察等の外なる一切の姿とが一致したところの真の心を至誠心というのである。

このように自利真実について十重の厭欣（①～⑩）が説かれるが、もう一点の重要な利他真実については説かれていない。このことは、自利真実に対応する利他真実というものがあるのではなく、自利真実の内容を他人にふり向けて教えることが、いわゆる利他真実であることから、重複して利他真実を説かなかったものと考えられる。

このことを解りやすく図示すると次のようになる。

❁ 自利真実について十重の厭欣



《十重の厭欣^{えんこん}》

① 深心について

二者深心言「深心」者卽是深心之心也

(二には深心。深心と言うは、すなわちこれ深く信ずるの心なり。)

① 信機・信法について

(i) 信機とは

亦有「二種」一者決定深信「自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常没常流轉無」有「出離之縁」

(また二種有り。一には決定して、深く信ず。自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し、常に流轉して、出離の縁有ること無しと。)

*

現実の自分自身を見れば、罪惡生死の迷界をさまよう凡夫であり、今世ばかりかはるかな過去から常に生死の海に沈み、そして、六道に流轉し、出離解脱もままならない無力な者であることを深く自覚しなければならぬのである。

つまり、自分自身の価値を把握する意味から、信機と云うことができる。

(ii) 信法とは

二者決定深信彼阿彌陀佛四十八願攝「受衆生」無「疑無」慮乘「彼願力」定得「往生」又決定深信釋迦佛説「此觀經三福九品定散二善」證「讚彼佛依正二報」使「人欣慕」又決定深信彌陀經中十方恆沙諸佛證「勤一切凡夫決定得」生

(二には決定して、深く彼の阿彌陀佛は四十八願をもつて、衆生を攝受したまう。疑い無く、慮うらおもい無く、彼の願力に乗じて、定めて往生を得と。また決定して、深く信ず。釈迦佛は、この觀經の三福九品、定散二善を説いて、彼の佛の依正二報を證讚して、人をして欣慕せしめたまうことを。また決定して深く信ず。彌陀經の中に、十方恆沙の諸佛は一切の凡夫決定して生ずることを得ることを證勸したまうこと

を。)

* 信法とは、三経によつて三仏を信じることととらえられる。

まず『無量寿経』には、阿弥陀仏は四十八願を成就し、全ての生きとし生けるものを摂受するというこ
とに、疑う心(無疑)やためらう心(無慮)なく、本願の力によつて決定し、往生することを深く信じる
ことであると説かれている。

また、釈尊は、『観無量寿経』に三福九品の散善と定善十三観の定散二善を説き、阿弥陀仏とその浄土
(依報：過去の業の報いとして受ける心身の拠り所としての国土等の環境)を讃え、仏・菩薩(正報：過
去世で行った善惡の報いとして受ける衆生の心身)との依正二報(正報(仏身)と依報(仏の国土))
の莊嚴を証讃し、浄土往生を欣び慕い、深く信ずることを心にかたく決めることであると説かれている。
そして、『阿弥陀経』には、十方の諸仏が必ず浄土往生がかなうことを証明し、勧めていることを深く
信ずることであると説かれている。

つまり、具体的に何を信じるのかといえば、『無量寿経』の阿弥陀仏の本願、『観無量寿経』の釈迦に
よる仏名の付属、『阿弥陀経』の六方諸仏の證誠である。これらの浄土往生の真理(法)を深く信じるこ
とを信法ということが出来る。

このような、信機、信法の立場に立つて、深心の深く信じるということはどういうことであるのか、次にみ
ていくことにする。

② 深信について

又深信者仰願一切行者等一心唯信_レ佛語不_レ顧_レ身命_一決定依行佛遣_レ捨者即捨佛遣_レ行者即行佛遣_レ去處即去
是名_下隨_二順佛教_一隨_中順佛意_上是名_レ隨_二順佛願_一是名_二眞佛弟子_一又一切行者但能依_レ此經_一深信行者必不_レ悞_二衆

生_一也

（また深信とは、仰ぎ願わくは一切の行者等、一心にただ佛語を信じて身命を顧みず、決定して依行せよ。

佛の捨てしめ給うものをば即ち捨て、佛の行ぜしめ給うものをば即ち行じ、佛の去らしめ給う處をば即ち去れ。

これを佛教に隨順し、佛意に隨順すと名づけ、これを佛願に隨順すると名づけ、眞の佛弟子と名づく。）
* このように、深信というのは、淨土往生を願う一切の行者達に申すならば、一心にただ仏の言葉を信じ、身命を惜しむことなく、その教えに従って念仏を称えることである。

仏が、現今の衆生には測り難い法であるから捨てよといわれるのであれば、それに従って捨て、仏が念仏の一行を行ぜよといわれるのであれば、そのまま行じ、仏が五濁惡世の穢土から去って淨土往生を願えといわれるのであれば、速やかに穢土から去らなければならない。

このことを、仏の教え（釈迦の教え）に隨順し、仏の意（諸仏の證誠）に隨順し、仏の願（阿彌陀仏の本願）に隨順すると名づけ、このように隨順する者こそ眞の仏弟子と名づけられると説かれている。

又一切行者但能依_二此經_一深信行者必不_レ悞_二衆生_一也何以故佛是滿_二足大悲_一人故實語故除_レ佛已還智行未_レ滿在_二其學地_一由有_二正習_一二障_一未_レ除果願未_レ圓此等凡聖縱使測_二量諸佛教意_一未_レ能_レ決了_一雖_レ有_二平章_一要須_下請_二佛證_一爲_レ定也若稱_二佛意_一即印可言_二如是如是_一若不_レ可_二佛意_一者即言_二汝等所_レ說是義不如是不_レ印者即同_二無記無利無益之語_一佛印可者即隨_二順佛之正教_一若佛所有言說即是正教正義正行正解正業正智若多若少衆不_下問_二菩薩人天等_一定_中其是非_上也若佛所說即是了教菩薩等說盡名_二不了教_一也應_レ知是故今時仰勸一切有緣往生人等唯可_下深信_二佛語_一專注奉行_上不_レ可_下信_二用菩薩等不相應教_一以爲_二疑礙_一抱惑自迷廢_中失往生之大益_上也又深信深信者決定建_二立自心_一順_レ教修行永除_二疑錯_一不_下爲_二一切別解別行異學異見異執_一之所_中退失傾動_上也

（また一切の行者、ただ能くこの經に依って深く信じて行ずるものは、必ず衆生を悞_{あやま}らざるなり。

何を以つての故に。佛はこれ大悲を満足せる人が故に。實語したまうが故に。佛を除きて已還いげんは、智行、未だ滿せず。其の學地に在りて、なお正しょうじゅう習二障有りて未だ除かず。果願、未だ圓まじかならず。これらの凡聖は、たとい諸佛の教意を測量するとも、未だ決了すること能わず。平章すること有りと雖も、要かならず須く佛の證を請うて定とすべきなり。

もし佛意ぶついちに稱かなえば、即ち印可して如是如是と言ひ給う。もし佛意にかなわざれば、即ち汝等が説く所、この義、不如是と言ひ給う。印せざるものは、即ち無記、無利、無益の語に同じ。佛の印可したまうものは、即ち佛の正教に隨順す。

もし佛のあらゆる言説は、即ちこれ正教、正義、正行、正解、正業、正智なり。

もしは多、もしは少、衆すべて菩薩人天等に問うて、その是非を定め給わず。

もし佛の所説は、即ちこれ了教なり。菩薩等の説をば、盡く不了教と名づく。

應に知るべし。この故に、今時、仰いで勸む。一切有縁の往生人等、ただ深く佛語を信じて、專注奉行すべし。菩薩等の不相應の教を信用して、以つて疑礙を爲し、惑を抱きて自ら迷い、往生の大益を廢失すべからざるなり。

また深心とは、深信なりとは、決定して自心を建立して教に順じて修行して、永く疑錯を除きて、一切の別解、別行、異學、異見、異執の爲に、退失傾動せられざるなり。)

*
すべての浄土往生を願う行者は、この『觀無量寿經』によつて深く信じ、念仏を称えるものは、必ず往生できるし、他の衆生も往生させることができるのであり、進むべき道を誤らせることはないのである。

なぜならば、仏は限りない大慈悲をもたれ、その言葉は常に眞実をもつて語られるからである。

修行を完成して悟りを開いた仏を除いた菩薩等は、布施、持戒、忍辱、精進、禪定の六波羅蜜の修行をするが、未だに智慧も不完全であり、悟りに至らないのである。だから、まだ学ぶべき地位にあり、正使しょうじ

（煩惱の実体）と習氣（煩惱を断じても残る影響）の二つの障りも滅し切れず、仏果を求める願も円満に完成してないのである。

このような修行の浅い凡夫や正しく学んでいる聖者が、諸仏の教意を推し量ってみることはできても、その真実の全容を断定的に決定できないのである。たとえ教意を正しく明らかにしたとしても、それは、正しい悟りを開いたという仏の証明である印可を得なければならぬのである。

もし、それが仏意にかなったものであれば、如是如是というお許しの言葉の許に印可されるものであり、それが仏意にかなわないものであれば、汝の説く所の教説は不如是という不許可の言葉を言い給うのである。だから、印可されない教説は、法の本質を欠いた無記の教えであり、人々を利益することのない無利、無益の言葉のようなものに過ぎないのである。それに反して、仏の印可したものであれば、それは、仏の正教に随順したものである。

だから、仏が金口から説かれた全てのお言葉は、そのまま正しい教えであり、正しい意義をもつものであり、正しい行であり、正しい解であり、正しい業であり、正しい智恵であるということができる。

そして、仏が説き給う所の教説の表現の多少に関わらず、すべての菩薩や人間や天などの不完全なものに対して問い、その是非を定めたものではない。仏の説く所の教えであるならば、それはまさしく完全円満に説き明かした了教であり、菩薩達の説くものは、不完全で未決定の不了教と名づけられるものである。

このようなことから、今こそ仰いで一切の往生を願う人々に勧めたいことは、仏と菩薩の価値をよく理解して、ただひたすらに深く仏のお言葉を信じ、仏の勧める念仏を専ら称えなければならないのである。菩薩達の不相応の教えを信じて、經文に疑いと惑いを起こして迷い、浄土に往生するという大きな利益を失ってしまうのである。

また、深心とは、深く信じることであり、念仏往生の法門を疑い無く信じ、仏の教えに随順して修行す

べきであり、疑いや誤った教えにとらわれることがあつてはならないことをいうのである。

世の中には、異なった安心起行によって修行している者が多く、異なった教学、違った見解、様々なことに固執する者も少なくないものである。しかし、念仏の行者は、それらのものから異なった見解であるとか、心を動揺させられることがあつてはならないことであり、念仏の一行が勝れた利益をもたらすということを中心に決めて修行を確立していくことが深心であると説かれているのである。

このような深信について確固たる信念を持つべきことを、次に具体的に破難する四類（四重の破人）を説き、それぞれの心構えについて順に述べ、人に就いて信を立てる就人立信がどのようなものであるかが説かれているのである。

③ 四重の破人について

(i) 第一重の破人

問曰凡夫智淺惑障處深若逢_下解行不同人多引_二經論_一來相妨難證云_中一切罪障凡夫不_レ得_二往生_一者云何對_二治被難_一成_二就信心_一決定直進不_レ生_二怯退_一也

（問うて曰わく、凡夫は智淺く、惑障ことわり深し。もし解行不同的人、多く經論を引き來つて相い妨難し、證して一切罪障の凡夫、往生を得ずと云うに逢わば、いかんが彼の難を對治して、信心を成就し、決定して直ちに進んで、怯退_{こたい}生ぜざらんや。）

答曰若有_レ人多引_二經論_一證云_レ不_レ生者行者即報云仁者雖_下將_二經論_一來證導_レ不_レ生如_二我意_一者決定不_レ受_二汝破_一何以故然我亦不_二是不_レ信_一彼諸經論_一盡皆仰信然佛說_二被經_一時處別・時別・對機別・利益別又說_二被經_一時即非_下說_二觀經彌陀經等_一時_上然佛說_レ教備_レ機時亦不同彼即通說_二人天菩薩之解行_一今說_二觀經定散二善_一唯爲_二韋提及佛滅後五濁五苦等一切凡夫_一證言_レ得_二生爲_一此因緣_一我今一心依_二此佛教_一決定奉行縱使汝等百千萬億導_レ

不生者唯增「長成就我往生信心」也

（答えて曰わく、もし人有つて、多く經論を引いて、證して生ぜずと云わば、行者すなわち報えて云え。仁者、經論を持ち來つて證して生ぜずというといえども、我が意のごときは決定して汝が破を受けず。何を以つての故に。然るに、我れ、またこれ、彼の諸經論を信ぜざるにはあらず。盡く皆仰いで信ず。然れども、佛、彼の經を説きたまう時は、處別に、特別に、對機別に、利益別なり。

また彼の經を説きたまう時は、すなわち觀經彌陀經等を説きたまう時に非ず。然るに、佛、教えを説きて機に備う。時また同じからず。

彼はすなわち通じて人天菩薩の解行を説き、今は觀經の定散二善を説いて、ただ韋提及び佛滅後の五濁、五苦等の一切凡夫の爲に、證して生ずることを得とのたまえり。この因縁の爲に、我れ今、一心にこの佛教に依りて決定して奉行す。たとい汝等百千萬億あつて生ぜずということも、ただ我が往生の信心を増長し、成就せん。）

＊

問きたいことであるが、我々凡夫は智慧が浅く煩惱の障害が深い者であるが、もし別解別行のものが多くの諸々の經論を引いて妨難し、一切罪障の凡夫は往生できないと云うのに出逢った場合は、どのようにして彼の妨難を対治して、さらに自らの信心を成就して決定し、怯退しないようにすれば良いだろうか。

答えていうならば、もしそのような別解別行の人が多くの經論を引いて往生できないと云ったとしても、念仏の行者は報えて云いなさい。汝がいくら經論を引いて往生できないと云つても、我が意は決定していて汝の破は受けない。なぜなら、我はそれらの諸々の經論を信じていないのではなく、全てを皆敬つて信じているからである。

しかし、彼の聖道の諸經を説いた時は、場所も時間も別で、相手も異なり受ける利益も別なのである。

また『觀無量壽經』や『阿彌陀經』を説いた時でもない。仏の教えは常に相手のことや時のことを考えたうえ

で説かれるものなのである。

彼の聖道の諸経は、人天菩薩の悟りを得るための自力成仏の解行を説いたもので、今この『観無量寿経』の定散二善の行は、韋提希夫人や釈尊滅後の五濁惡世に、五苦（生・老・病・死・愛別離苦）等（求不得苦・五蘊盛苦・怨憎会苦）で悩む一切の凡夫の為に、特に浄土往生の法を説かれたのである。

このような因縁による自分であるから、今はただ一心に『観無量寿経』の教えのもとに、決定の信心をもつて、念仏行を貫いているのである。たとえ汝らが百千萬億人出て来て往生できないと云ったとしても、ただ自分が往生するという堅く信ずる心をさらに深め、増長させ、成就することになるのである。

（ii）第二重の破人

又行者更向説言仁者善聽我今爲_レ汝更説_二決定信相_一縱使地前菩薩・羅漢・辟支等若一若多乃至遍_二滿十方_一皆引_二經論證言_一不_レ生者我亦未_レ起_二一念疑心_一唯增_二長成就我清淨信心_一何以故由佛語決定成就了義不_中爲_二一切_一所_レ破壞_二故_一

（また、行者、更に向つて説いて言え。仁者、善く聽け、我、今、汝が爲に、更に決定の信相を説かん。たとい地前の菩薩、羅漢、辟支等、もしは一、もしは多、乃至十方に徧滿して、皆、經論を引いて證して生ぜずと言ふとも、我、またいまだ一念の疑心を起さじ。

ただ我が清淨の信心を増長し、成就せん。何を以つての故に。佛語は決定して成就の了義にして、一切の爲に破壊せられざるに由るが故に。）

＊

また、念仏の行者は、批難するもの達にさらに向かつて説いて言わなければならない。

汝ら善く聞きなさい。我は、今、汝らのために、さらに決定した信心について説き聞かせよう。たとい今ここに十地以前（十住・十行・十回向）の三賢の菩薩や阿羅漢（小乗仏教の最高の悟りに達した聖者）や辟支仏（十二因縁を觀じて理法をさとり、さまざまな外縁によつて悟ることから縁覺ともいう。）などの聖者が、

もし一人、もしくは多数、あるいは十方の国に遍満して、皆、經論を引いて念仏によって往生はできないと言つても、我れはいまだに一念の疑心も起こしてはいない。

そればかりか、我が清浄な信心の心は増長し、成就するばかりである。なぜならば、仏が語られることは、完全円満な真理の言葉であり、いかなるものにも破壊されるものではないからである。

(iii) 第三重の破人

又行者善聽縱使初地已上十地已來若一若多乃至遍滿十方異口同音皆云釋迦佛指讚彌陀毀_二皆三界六道_一勸_二勵衆生_一專心念佛及修餘善_二畢_一此一身_二後必定生_二彼國_一者此必虛妄不_レ可_二依信_一也我雖_レ聞_二此等所說_一亦不_レ生_二一念疑心_一唯增_二長成就我決定上上信心_一何以故乃由_二佛語眞實決了義_一故佛是實知實解實見實證非_二是疑惑心中語_一故又不_下爲_二一切菩薩異見異解_一之所_中破壞_上若實是菩薩者衆不_レ違_二佛教_一也

(また行者善く聽け。たとい初地已上、十地已來、もしは一、もしは多、乃至十方に徧満して、異口同音に、皆、釋迦佛は彌陀を指讚し、三界六道を毀_きし、衆生を勸_{かん}勵_{れい}して、專心に念佛し、および餘善を修し、此の一身を畢_おえて後、必定して彼の國に生ずというは、これ必ず虚_こ妄_{もう}なり。依信すべからずと云わんに、我、これらの所説を聞くといいども、また一念の疑心を生ぜず。ただ、我れ、決定して上上の信心を増長し、成就せん。

何を以つての故に。すなわち佛語は、眞實決了の義なるに由るが故に。佛はこれ實知、實_{じつ}解_げ、實見、實證にして、これ疑惑心中の語に非ざるが故に。また一切の菩薩、異見、異解の爲に破壊せられず。もし實にこれ菩薩ならば、すべて佛教に違せざるなり。)

* また、念仏の行者は善く聞きなさい。

たとい初地へ十地の第一位。菩薩の十地では歡喜地。へから十地へ菩薩五十二位の中、第四十一位から第五十位までの聖者、これを経て仏果に到る。へまでの高い位の聖者が一人、または多数、さらには十方

に遍満するほど現れて、異口同音に、皆、釈尊が阿弥陀仏の浄土を指し示して誉め讃え、三界六道を責めそしり、専心に念仏し、及び余善を修すことによつて、この身が終わつて後には必ず浄土に往生すると衆生に勧め励ますことは妄想であり、信じてはならないと云うのを聞いても、また、一念の疑心も起こさず、ただ自ら決定して上上の信心を増長させ、念仏を称えて往生を成就するばかりである。

何故かという、仏の語る言葉は真実であつて、その義をはつきりと顯したものである。そして、仏は真実の悟りを開き、真実を知り、真実の知見をもち、真実の修行を完成させ、それを実証するものであり、疑惑を抱かせるようなものではない。だから、どのような菩薩らの異なつた見解や異つた解釈によつて、信ずる心が破壊されるようなことは断じてないのである。

もし本当の十地の菩薩であれば、仏の教えと違わない筈である。

(iv) 第四重の破人

又置_二此事_一行者當_レ知縱使化佛報佛若一若多乃至遍_二滿十方_一各各輝_レ光吐_レ舌遍覆_二十方_一一一說言_下釋迦所說相讚勸_二發一切凡夫_一專心念佛及修_二餘善_一廻願得_レ生_二彼淨土_一者此是虛妄定無_中此事_上也我雖_レ聞_二此等諸佛所說_一畢竟不_下起_二一念疑退之心_一畏_レ不_レ得_レ生_二彼佛國_一也何以故一佛一切佛所有知見解行證悟果位大悲等同無_二少差別_一是故一佛所_レ制即一切佛同制如_下似前佛制_二斷殺生十惡等罪_一畢竟不_レ犯不_レ行者即名_中十善十行隨順六度之義_上若有_二後佛出世_一豈可_下改_二前十善_一令_レ行_二十惡_一也

以_二此道理_一推驗明知諸佛言行不_二相遺失_一縱令釋迦指_二勸一切凡夫_一盡_二此一身_一專念專修捨_レ命已後定生_二彼國_一者即十方諸佛悉皆同讚同勸同證何以故同體大悲故一佛所化即是一切佛化一切佛化即是一佛所化

(またこの事をば置く。行者まさに知るべし。たとい化佛、報佛、もしは一、もしは多、乃至十方に遍満して、各々に光を輝かし、舌を吐いて、遍く十方に覆つて、一一に説いて、釋迦の所説相い讃じて、一切の凡夫を勸發して、専心に念佛し、及び餘善を修し、廻願すれば彼の浄土に生ずることを得というは、

これはこれ虚妄なり。定んでこの事無しと言えども、我れこれ等の諸佛の所説を聞くといえども、畢竟じて一念疑退の心を起こして、彼の佛國に生ずることを得ざらんことを畏れず。おそ

何を以つての故に。一佛は一切佛なり。あらゆる知見、解行、證悟、果位、大悲等同じにして、少しの差別無し。この故に一佛の制する所は、すなわち一切の佛、同じく制したまう。

前佛の殺生十惡等の罪を制斷したまうに、畢竟じて犯ぜず。行ぜざるは、すなわち十善、十行、随順六度の義と名づくるがごとき。もし、後佛、出世すること有らん、あに前の十善を改めて、十惡を行ぜしむべけんや。

この道理を以つて推驗するに、明らかに知んぬ。諸佛の言行は相い遺失せざることを。たとい、釋迦、一切の凡夫を指勸して、この一身を盡すまでに專念專修すれば、命を捨てて已後、定んで彼の國に生ずとのたまわば、すなわち十方の諸佛も、ことごとく、皆、同じく讃じ、同じく勸め、同じく證し給わん。何を以つての故に。同體の大悲なるが故に。一佛の所化は、すなわちこれ一切佛の化、一切佛の化は、すなわちこれ一佛の所化なり。

＊

また、たとい化仏へ衆生を救うために人の姿となつて姿を現した仏へや報仏へ仏陀となるための因としての行を積み、その報いとしての完全な功德を備えた仏身へ等が一佛や多佛、もしくは十方に遍満して各々が光明を耀かし、舌相を示して、釈尊が説く、いかなる凡夫も勸んで念仏し、余善を修行し、それを淨土に廻向すれば往生できるという尊い教えは虚妄であり、そのようなことは絶対に無いと言つたとしても、我は一念の疑いや退轉する心を起こして彼の仏國に往生できないと思うことは決して無い。

なぜなら、一仏と一切仏は、あらゆる知見へ仏が衆生の願いを知ることへ、解行へ仏教の教理の理解と実践的な修行へ、証悟へ修行によつて真理を体得することへ、果位へ仏道修行によつて得られた悟りの位。仏果へ、大悲へ衆生の苦しみを救う仏・菩薩の大きな慈悲へ等は皆同じで少しも差別が無い。だ

から、もし一仏がしてはならないと制したら、一切の仏も制する筈である。

たとえば、前の仏が殺生や十悪等の罪惡を犯すなと制断したならば、それを守り、徹底してこれを犯さなければ十善十行になり、布施などの菩薩の六度の行にかなうことになる」と説けば、後の仏が出世しても同じように説くはずであり、前の十善を改めて十惡を勧めることは決してあり得ないことなのである。

このような道理に基づいて推し量ってみれば、諸仏の実語と行為とは相違が無いことが明らかである。かりに釈尊が全ての凡夫に、生涯ひたすら念仏に専念すれば命終の後に必ず浄土に往生できると説き勧めれば、十方の諸仏も皆ことごとく同じように讃えて勧め、その言葉が真実であることを証明するのである。なぜならば、仏の大慈悲は一切の衆生と団体として起こされるからで、一仏の化益されるところのもは一切仏の化益されるところであり、一切仏の化益はそのまま一仏の化益であるからであると述べられている。

次に、人に就いて信を立てる就人立信とは、どのようなものであるか説かれていく。

④ 就人立信とは

即彌陀經中說釋迦讚_二歎極樂種種莊嚴_一又勸_下一切凡夫一日七日一心專念_二彌陀名號_一定得_中往生_上次下文云十方各有_二恒河沙等諸佛_一同讚_下釋迦能於_二五濁惡時惡世界惡衆生惡見惡煩惱惡邪無信盛時_一指_二讚彌陀名號_一勸_中勵衆生稱念必得_上往生即其證也又十方佛等恐_二畏衆生不_レ信_一釋迦一佛所說_一即共同心同時各出_二舌相_一遍覆_二三千世界_一說_二誠實言_一汝等衆生皆應_二信_一是釋迦所說所讚所證一切凡夫不_レ問_二罪福多少時節久近_一但能上盡_二百年_一下至_二一日七日_一一心專念_二彌陀名號_一定得_二往生_一必無_レ疑也

是故一佛所說即一切佛同證_二誠其事_一也此名_二就_レ人立_レ信也

次就_レ行立_レ信者然行有_二二種_一一者正行二者雜行

云云如前二行之中所引
恐繁不載見人得意

（すなわち彌陀經の中に説く。釋迦極樂の種種の莊嚴を讚歎したまえり。また一切の凡夫、一日七日、一心に専ら彌陀の名號を念ずれば、定んで往生を得と勧めたまう。

次下の文に云わく、十方におのおの恒河沙等の諸佛有つて、同じく釋迦能く五濁惡時、惡世界、惡衆生、惡見、惡煩惱、惡邪無信の盛んなる時において、彌陀の名號を指讚して、衆生稱念すれば、必ず往生を得と勧めたまうを讚じたまうと。すなわち、その證なり。

また十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所説を信ぜざらんことを畏怖れて、すなわちともに同心同時に、おのおの舌相を出して、遍く三千世界に覆いて、誠實の言を説きたまう。汝等衆生、皆まさにこの釋迦の所説、所讚、所證を信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近を問わず、ただ能く上百年を盡し、下一日七日に至るまで、一心に専ら、彌陀の名號を念ずれば、定んで往生を得ること、必ず疑うこと無かれと。この故に一佛の所説は、すなわち一切佛、同じくその事を證誠したまうなり。これを人に就いて信を立つと名づく。

次に行に就いて信を立つとは、然るに行に二種あり。一には正行、二つには雜行なり。へ云云、前の二行の中に引く所のごとし。繁を恐れて載せず。見ん人、意を得よ。へ）

* このようなことは『阿彌陀經』に説かれている。釈尊は、阿彌陀仏の極樂淨土の様々な莊嚴を讚歎し、いかなる凡夫も、一日七日、一心に専ら彌陀の名號を念じれば、決定して淨土往生ができると勧め給うていたのである。

さらに同じように、經文には、十方に各々恒河沙ほどの多くの諸仏があらわれて、同じように釈尊がこの五濁惡時（劫濁）、惡世界（五濁の世）、惡衆生（衆生濁）、惡見（見濁）、惡煩惱（煩惱濁）、惡邪無信（見濁）の盛んな時に、彌陀の名號を指讚して、衆生が稱念すれば必ず往生が得られると勧め励ましたことを賞讃していることから解ることである。

また十方の仏等が、衆生が釈尊一仏だけの所説では信じないことを恐れて、同心同時に各々が舌をのべて三千世界を覆い、虚言の無い誠実な教えを説いたことを証明しているので、衆生は、皆、この釈尊の説く所、讃える所、証明する所を堅く信じなければならない。

一切の凡夫の罪悪や福德の多少にかかわらず、また修行の長短を問わずに、ただ能く、上は百年の生涯を尽くし、下は一日七日に至るまで、一心に専ら弥陀の名号を念ずれば、決定して必ず往生を得ることができるのは疑いの無いことである。

だから、一仏の説かれた教えは、そのまま一切の仏が同じように真実の教えであることを証明しているのである。

このように、見解も異なり修行も違う人々からの妨難があっても、惑わされることなく、ますます信心の念を確立をしていくことを就人立信（人に就いて信を立つ）と名づけるのである。

⑤ 就行立信とは

次に、往生の行についての信心（就行立信：行に就いて信を立つ）の確立をするには二種ある。

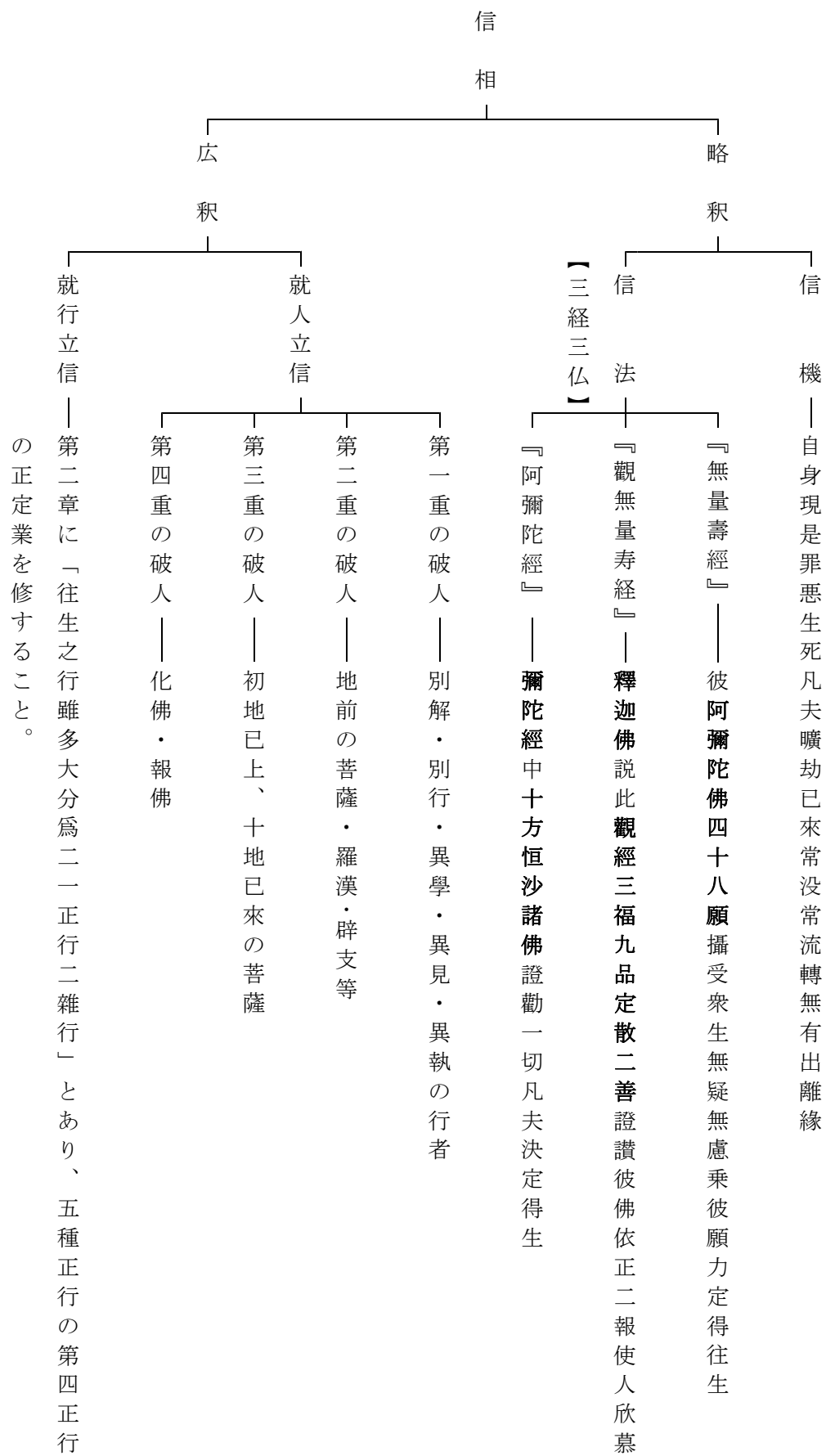
一つには正行であり、二つには雑行である。

《云云。前の第二章に二行のことを引いてある。繁雑になるのでここでは引かない。もし見るなら、その意を得なければならない。》

以上のように、深信には、自己がどのような立場にあるかその価値を把握する信機、そして、具体的に三仏の御教えを決定して信じる心を深心ということができるのである。

簡略化して図示すると次頁のようになる。

❁【信機・信法、就人立信・就行立信の概要】



次に、三心のうちの回向発願心について、二河白道の比喻をもとに考察を加えていくことにする。

(ウ) 回向発願心について

① 往相回向

三者回向發願心言^二回向發願心^一者過去及以今生身口意業所^レ修世出世善根及隨^二喜佗一切凡聖身口意業所^レ修世出世善根^一以^二此自佗所修善根^一悉皆眞實深信心中回向願^レ生^二彼國^一故名^二回向發願心^一也

又回向發願願^レ生者必須^二決定眞實心中回向願作^二得生想^一此心深信由若^二金剛^一不^下爲^二一切異見異學別解別行人等^一之所^中動亂破壞^上唯是決定一心投正直進不^レ得^下聞^二彼人語^一即有^二進退心生^一怯弱^一迴顧落道即失^中往生之大益^上也

(三)には回向發願心。回向發願心と言うは、過去及び今生く身、口、意業に修する所の世、出世の善根及び他の一切の凡聖の身、口、意業に修する所の世、出世の善根を隨喜せると、この自佗の所修の善根を以つて悉く、皆、眞實深信の心中に回向して、彼の國に生ぜんと願ず。故に回向發願心と名づくるなり。

また回向發願して、生ぜんと願ずる者は、必ず須く決定して眞實心中に回向して得生の想を作すべし。この心、深く信じること由^{なほ}し金剛のごとく。一切の異見、異學、別解、別行の人等の爲に動亂破壊せられず。ただこれ決定して一心に投じ、正直に進んで彼の人の語を聞きて即ち進退し、心に怯弱を生ずること有りて、迴顧落道して、即ち往生の大益を失することを得ざれ。)

* 三つ目の回向發願心というのは、過去より今生に至るまで、身・口・意に修めたすべての善根や、他の凡夫や聖者のすべての身・口・意に修めた善根を俱に喜び、自分と他人の修めた善根もすべて、眞實の心、深く信じる心で振り向けて、彼の淨土に往生したいと願う心のことを回向發願心ということが出来る。

また、すべての善根を振り向けて往生を願うものを、特に往相回向といい、必ず往生することを心に決めて、眞實の心をもって願わなくてはならない。そして、この深く信じるということは、まさに金剛のよ

うに堅固な信心の心で一筋に進まなければならないのである。

さらに、どのような異見、異学、別解、別行の人々のために、信心の心構えを崩したり、惑わされないように、心に堅く決めて一心に進まなければならない。たとえ妨難の言葉があつたとしても、退いたり、怯む気を起こしたり、道を迷うことがあつてはならない。なぜなら、それは迷いの道に堕ちることであり、浄土へ往生するという大きな利益を失うことになつてはならないからであると述べられている。

そして、次に、

問曰若有_二解行不同邪雜人等_一來相惑亂或說_二種種疑難_一導_レ不_レ得_二往生_一或云汝等衆生曠劫已來及以今生身口意業於_二一切凡聖身上_一具造_二十惡五逆四重謗法闡提破戒破見等罪_一未_レ能_二除盡_一然此等之罪繫_二屬三界惡道_一云何一生修福念佛卽入_二彼無漏無生之國_一永得_レ證_二悟不退位_一也

答曰諸佛教行數越_二塵沙_一稟識機緣隨情非_レ一譬如_二世間人眼可_レ見可_レ信者如明能破_レ闇空能含_レ有地能載養水能生潤火能成壞_一如_レ此等事悉名_二待對之法_一卽_レ目可_レ見千差萬別何況佛法不思議之力豈無_二種種益_一也隨出_二一門_一者卽出_二一煩惱門_一也隨入_二一門_一者卽入_二一解脫智慧門_一也爲_レ此隨_レ緣起_レ行各求_二解脫_一汝何以乃將_レ非_二有緣_一之要行_上障_二惑於我_一然我之所_レ愛卽是我有緣之行卽非_二汝所_一求汝之所_レ愛卽是汝有緣之行亦非_二我所_一求是故各隨_レ所_レ樂而修_二其行_一者必疾得_二解脫_一也行者當_レ知若欲_レ學_レ解從_レ凡至_レ聖乃至佛果一切無礙皆得_レ學也若欲_レ學_レ行者必藉_二有緣之法_一少用_二功勞_一多得_レ益也

(問うて曰わく。もし解行不同、邪雜の人等有りて、來たりて相い惑亂し、或るは種種の疑難を説きて往生を得ずといわん。或るは云わん、汝等衆生、曠劫よりこのかた、及び今生の身、口、意業に一切凡聖の身上に於いて具さに十惡、五逆、四重、謗法、闡提、破戒、破見等の罪を造りて、未だ除き盡すこと能わず。然るにこれの罪は、三界の惡道に繫_け屬_ぞす。いかんぞ一生修福の念佛をもつて、卽ち彼の無漏無生の國に入りて永く不退の位を證悟することを得んやとなり。

答えて曰わく。諸佛の教行、數、塵沙を越え、稟識ほんじきの機縁、隨情、一に非ず。譬えば世間の人の眼に見つべく信ずべきが如きは、明能く闇を破し、空能く有を含し、地能く載養し、水能く生潤し、火能く成壞するが如き。かくの如き等の事、悉く待對の法と名づく。目に即して見つべし。千差萬別なり。いかに況んや佛法不思議の力、あに種種の益なからんや。随って一門を出づれば、即ち一煩惱門を出づ。随って一門に入れば、即ち一解脱智慧門に入るなり。これによりて縁に随って行を起して、おのおの解脱を求む。

汝、何を以ってか、乃ち有縁に有らざる要行をもつて、我を障惑するや。然るに我が愛する所は、即ちこれ我が有縁の行なり。即ち汝が求める所に非ず。汝が愛する所は即ちこれ汝が有縁の行なり。また我が求める所に非ず。この故におのおの樂ねがう所に随つて、その行を修すれば、必ず疾く解脱を得るなり。

行者、當に知るべし。もし解を學せんと欲せば、凡從り聖に至り、乃至佛果まで一切無礙に、皆、學することを得よ。もし行を學せんと欲せば、必ず有縁の法に藉よれ。少しく功勞を用いるに多く益を得る。)

＊

聞きたいことがある。もし、見解や修行が異なり、誤った考え方が来て戸惑わせようとして、様々な疑惑を持たせたり非難をして、浄土往生を得ることはできないと言い、あるいは、汝等衆生は遠い過去世から今世まで、一切の凡夫や聖者の身・口・意の業を通して、十悪や五逆や四重の罪惡を犯し、さらに仏法を謗り、全く信じることもせず、戒律を破り、正しい教えに背く等の罪を造り、いまだに取り除くことができていないのはなぜなのかと聞かれたらどのように答えれば良いだろうか。

また、それらの罪によつて三界の惡道に堕ちているのではないか。それなのにどうして、わずかな一生の修善や念仏をもつて、彼の極樂浄土に往生し、煩惱の汚れから逃れ、消滅の変化のない清浄な土に生まれ、退転することない位を悟ることなどできる訳がないと問われたらどう答えれば良いのだろうか。

それに答えるならば、諸仏の教えや修行は塵沙のように数限りない程あり、それを受ける人々の能力や機根も様々である。だから、それに応じて教えも一つではなく数多くあるのである。

たとえば、世間の人々が良く見て分かるように、信すべき事柄というものは、光がよく闇を明るくし、空が何ものをも受け容れ、大地は万物を載せて草木などを育て、水は生き物を潤して成長させ、火はよく物を成熟させたり焼き尽くしたりするようなものである。

このようなことは、事物の本性が結びついて相対的に働くもので、人にも各人それぞれに素質や環境が異なり、一人として同じ人がいないように、その様相は千差万別でよく目にし経験するところである。だから、仏が説く所の教法や修行の方法も同じように数限りなくあるのである。だからこそ仏の不思議な力によつて、それぞれがそれぞれにあった利益を受けることができるのである。

だから、衆生の煩惱の数は八万四千あるといわれているが、それに応じて八万四千の法門があるということになるのである。一つの法門を出ることによつて一つの煩惱が除かれ、一つの煩惱が断たれることによつて一つの解脱の智慧の門に入ることができるのである。そこで、人々は八万四千の中から自らに縁のある法門を選び、その法門を修行することによつて初めて解脱を目指すことができることになるのである。

つまり、自らに縁のない法門を選んでいかに修行したとしても、何も利益を得ることがないのである。

我々が求めるべき教法は、自らに縁のある法門であつて、縁のない法門を修行している者から、とやかく非難されても仕方のないことであり、縁のある法門を修行してこそ、自らが願ひ求める解脱を速やかに得ることができるのである。随つて仏道を修するものは、もし教義を学ぼうと思うならば、凡夫が学べる易しいところから学び始めて徐々に程度の高い聖者が学ぶ程の高いものを目指し、そして、仏の悟りの境地にまで、すべて自由に何事にも妨げられないように学ぶべきである。

また、もし行について学ぼうとするならば、あれこれ迷ふことなく、必ず自らに合った法門によつて修行しなければならない。そうすることによつて少しの努力で大きな利益が得られることを知るべきであると述べられている。

そして、往生を願う一切の行者に対して、様々な他からの異見、異学の者等から、邪見によって妨害されても決して信心をまげることが無いように二尊の導きがあることを、次の「二河白道」の譬えによって語られていくのである。

又白一切往生人等今更爲行者説一譬喻守護信心以防外邪異見之難何者是也譬如有人欲向西行百千之里忽然中路見有二河一是火河在南二是水河在北二河各闊百步各深無底南北無邊正水火中間有一白道可闊四五寸許此道從東岸至西岸亦長百步其水波浪交過濕道其火燄亦來燒道水火相交常無休息此人既至空曠迥處更無人物多有羣賊惡獸見此人單獨競來欲殺此人怖死直走向西忽然見此大河卽自念言此河南北不見邊畔中間見一白道極是狹小二岸相去雖近何由可行今日定死不疑正欲到迴羣賊惡獸漸漸來逼正欲南北避走惡獸毒蟲競來向我正欲向西尋道而去復恐墮此水火二河當時惶怖不復可言卽自思念我今迴亦死住亦死去亦死一種不免死者我寧尋此道向前而去既有此道必應可度作此念時東岸忽聞人勸聲仁者但決定尋此道行必無死難若住卽死又西岸上有入喚言汝一心正念直來我能護汝衆不畏墮於水火之難此人既聞此遣彼喚卽自正當身心決定尋道直進不疑生疑怯退心或行一分二分東岸羣賊等喚言仁者迴來此道嶮惡不得過必死不疑我等衆無惡心相向此人雖聞喚聲亦不迴顧一心直進念道而行須臾卽到西岸永離諸難善友相見慶樂無已此是喻也

（また一切の往生人等にもうす。今更に行者の爲に一譬喻を説きて信心を守護して以つて外邪異見の難を防がん。何ものか是なるや。

譬えば人有りて西に向かい、百千の里を行かんと欲するが如し。忽然として中路に二河有るを見る。一はこれ火の河、南に在り。二はこれ水の河、北に在り。二河おのおの闊さ百歩、おのおの深くして底無く、南北、邊り無し。正しく水火の中間に一つの白道有り。闊さ四五寸許りなり。この道、東岸從り西岸に至るまで、また長さ百歩なり。その水の波浪こもこもに過ぎて道を濕し、その火の燄また來つて道を焼く。

水火相い交わりて常に休息すること無し。この人、既に空曠くわうくわうの迥はるかなる處に至るに、更に人物無し。

多く羣賊、惡獸有りて、この人の單獨なるを見て、競い來たりて殺さんと欲す。この人、死を怖れて直ちに走りて西に向えば、忽然としてこの大河を見る。即ち自ら念言すらく、この河、南北に邊畔を見ず。

中間に一つの白道を見るも極めてこれ狹小なり。二岸相い去ること近しと雖も何に由りてか行く可き。

今日定めて死せんこと疑わず。正に到り迴かえらんと欲すれば、羣賊、惡獸、漸漸せに來たり逼む。正に南北に避け、走らんと欲すれば、惡獸、毒蟲、競い來たりて我に向かう。正に西に向かいて道を尋ねて去らんと欲すれば、また恐らくはこの水火の二河を墮せんことを、その時の惶怖、また言うべからず。即ち自ら思念すらく、我、今、廻るともまた死なん。住とどまるとも死なん。去るともまた死なん。一種として死を免れざれば、我、寧ろこの道を尋ねて前に向かいて去らん。既にこの道有り。必ず應にわたるべし。

この念を作す時、東岸に忽ち人の勸むる聲を聞く。

仁者なんじ、ただ決定して、この道を尋ねて行け。必ず死の難無けん。もし住まらば、即ち死なんと。

また西岸の上に人有りて喚よびて言わく。

汝、一心正念にして、直ちに來たれ。我、能く汝を護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれと。

この人、既にここに遣り、彼に喚ぶを聞きて、即ち自ら身心を正當にして、決定して道を尋ねて、直ちに進んで疑怯退の心を生ぜず。

或いは行くこと一分二分するに、東岸の羣賊等、喚びて言わく。

仁者、迴り來たれ、この道、嶮惡なり。過ぐることを得じ。必ず死なんこと疑わず。我等すべて惡心をもつて、相い向かうこと無しと。

この人、喚ぶ聲を聞くと雖も、また迴り顧ず。一心に直ちに進んで道を念じて行けば、須臾にして、即ち西岸に到り、永く諸難を離る。善友、相い見えて慶樂やむこと無し。これは是れ喻なり。〕

＊ 「二河白道」の譬えは、おおよそ次のようである。

ここに一人の旅人がいて、百千里もある遠い西方に行こうとした時、忽然としてその路の中頃に二つの大きな河が流れているのを見たのである。その一つは南側に流れる、炎が燃え盛る火の河である。もう一つは北側に流れる、怒濤のような浪に荒れ狂う水の河である。その二つの河の広さは百歩ほどあり、それぞれの深さも果てしないほど深く、底が無いようであり、南北の長さも際限がないほど岸边が見えないのである。

ところが、不思議なことに、水の河と火の河の中間に、幅が四五寸ばかりの一本の白道が架かっていたのである。その白道は、東の岸から西の岸に架けられており、長さが百歩ほどであった。しかし、その白道には水火の波浪が交互に、水は覆い被さるように浸し、火は焼き付けるように焦がし、休む間がないのである。この旅人は、果てしない広野に来て、頼るべき人や物もないのである。

そこにあるのは、後を追う盗賊の群れや恐ろしい悪獣ばかりで、この旅人が一人であることを知ると競って来て殺そうとするのである。あまりの恐ろしさに死ぬのではないかと思い、西に向かって走ると、この大河が忽然と現れたのである。

この旅人は考えた。この河の南北は果てしが無い。中間に一本の白道があるがこれは極めて狭く、東岸と西岸は百歩ほどの近さだけれども、渡るのに何もたよりにするものがない。このまま渡れば火か水の河へ堕ち、死を免れない。言いしれぬ恐ろしさで、行くも止まるも、さりとて後戻りもできない絶体絶命の危機である。であるならば、危うく狭いながらも道がある。むしろこの白道を渡るのが最善ではないかと心に決めた時、東岸から人の勧める声があり、

「汝、心を堅く決めてこの道をたどって行け。必ず死の難を逃れることができるだろう。もし止まったらまななら死ぬことになる。」

すると、西岸からも喚ぶ声があり、

「汝、一心に念仏を称え、白道を渡ってくるがよい。我は汝をよく護るであろう。決して水の河や火の河に堕ちることを畏れてはならない。」

というのである。

旅人は、東岸からは、迷わず白道を行けという勧めの声を聞き、西岸からは速やかに来るように勧められるのを聞き、身も心も落ち着いて、心を決して白道を渡り、疑いや怯む気や退くような心も起きずに白道を歩み始めて一分二分ほど進んだのである。

すると、東岸の盗賊達が、呼び掛けるのであった。

「汝、戻って来るがよい。この道は陰悪な道で陰しくて危ないから渡ることはできない。必ず水火の二河に堕ちて命を落とすことになる。我々には、決して悪心が無く、危害を加えることなどしないから、安心して戻りなさい。」

と言われたが、この旅人は、その呼び掛ける声を聞いても振り返ることもせず、一心に白道を真っ直ぐに進み、間もなく西岸に辿り着き、盗賊や悪獸からの厄難から逃れることができたのである。

その西岸には多くの善友達が待ち受けていて、白道を渡りきった旅人を限りない喜びをもって迎えてくれたのである。

このように「二河白道」が喩えられるが、さらに次の段では、それぞれが何に喩えられているのか 具体的に説かれていくのである。

次合^レ喩者言^二東岸^一者即喩^二此娑婆之火宅^一也言^二西岸^一者即喩^二極樂寶國^一也言^二群賊惡獸詐親^一者即喩^二衆生六根六識六塵五陰四大^一也言^二無人空迴澤^一者即喩^二常隨^二惡友^一不值^中眞善知識^上也言^二水火二河^一者即喩^二衆生貪愛如水瞋憎如^レ火也言^二中間白道四五寸^一者即喩^二衆生貪瞋煩惱中能生^二清淨願往生心^一也乃由^二貪瞋強^一故即喩^レ如^二水

火「善心微故喻」如「白道」又水波常濕「道者即喻」愛心常起能染「汚善心」也又火焰常燒「道者即喻」瞋嫌之心能燒「功德之方財」也言「人行」道上「直向」西者即喻「廻」諸行業「直向」西方也言「東岸聞」人聲勸遣「尋」道直西進「者即喻」釋迦已滅後人不「見由有」教法「可」尋即喻「之如」聲也言「或行一分二分群賊等喚廻」者即喻「別解別行惡見人等妄說」見解「迭相惑亂及自造」罪退失也言「西岸上有」人喚「者即喻」彌陀願意也言「須臾到」西岸「善友相見喜」者即喻「衆生久沈」生死「曠劫輪廻迷倒自纏無」由「解脫」仰蒙「釋迦發遣指」向西方「藉」彌陀悲心召喚「今信」順二尊之意「不」顧「水火二河」念念無「遺乘」彼願力之道「捨」命已後得「生」彼國「與」佛相見慶喜何極也
又一切行者行住坐臥三業所「修無」問「晝夜時節」常作「此解」常作「此想」故名迴向發願心
(次に喩えを合わせば、

東岸と言うは、即ちこの娑婆の火宅に喩う。

西岸と言うは、すなわち極樂の寶國に喩う。

群賊、惡獸いつわ詐り親しむと言うは、即ち衆生の六根、六識、六塵、五陰、四大に喩う。

人無き空迥の澤と言うは、即ち常に惡友に随つて、眞の善知識に値わざるに喩う。

水火の二河と言うは、即ち衆生の貪愛は水のごとく、瞋憎は火の如くなるに喩う。

中間の白道四五寸と言うは、即ち衆生の貪瞋煩惱の中に、能く清淨の願往生の心を生ずるに喩う。

乃ち貪瞋強きに由るが故に即ち水火の如しと喩う。善心は微なるが故に白道の如しと喩う。

また水波常に道を濕すとは、即ち愛心常に起こつて、能く善心を染汚するに喩う。

また火焰常に道を焼くとは、すなわち瞋嫌の心、能く功德の方財を焼くに喩う。

人、道の上を行きて直ちに西に向かうと言うは、即ち諸々の行業を廻して、直ちに西方に向かうに喩う。

東岸に人の聲あつて、勸め遣るを聞いて、道を尋ねて直ちに西に進むと言うは、即ち、釋迦すでに滅し給うて後の人見ざれども、なお教法の尋ぬべき有るに喩う。即ちこれを喩えるに聲の如し。

或るいは行くこと一分二分するに、群賊等喚び廻かえすと言うは、すなわち別解、別行、惡見人等の妄みだりに見解を説いて、迭たがいに相い惑亂し、及び自らを罪を造りて退失するに喩う。

西岸の上に人有つて喚ぶと言うは、即ち彌陀の願意に喩う。

須臾に西岸に到れば、善友相い見えて喜ぶと言うは、即ち衆生久しく生死に沈んで、曠劫こうじょうに輪廻し、迷倒めいとう自纏じけんして、解脱するに由し無し。仰ぎて釋迦發遣して、指して西方に向かわしむることを蒙り、また彌陀の悲心をもつて、召喚したまうに藉よつて、今、二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず。念念に遺わするること無く、彼の願力の道に乗じて、命を捨てて已後、彼の國に生ずることを得て、佛と相見えて、慶喜何んぞ極まらんというに喩う。

また一切の行者、行住坐臥、三業に修する所、晝夜時節を問うこと無く、常にこの解を作し、常にこの想おもひを作す。故に迴向發願心と名づく。）

* この譬えは、旅人の行く先に立ちはだかる二河が忽然と現れる。一つは貪り愛着する心の水河、もう一つは怒り憎しむ心の火河であり、この二河は容易には乗り越えられるものではない。

だが、中間に白道がある。微少であるが、まさしく往生を願う清浄心。白道は水波で浸され、善根の功德も火焰で焼き焦がされる。渡るか否か悩む旅人に、東岸から釈迦の念仏を勧める發遣の聲がかけられる。さらに西岸からも阿弥陀仏の大悲の召喚の聲がかけられる。意を決して白道を一、二分進む旅人に、背後から盜賊惡獸の惑亂の聲が降り注ぐ。

二尊の意を信じ、命をかけて水火の二河を顧みること無く白道を渡る旅人。ようやく辿り着いた西岸には、待ち受ける善友達。俱に往生を喜び合うことができたのである。

まさに、二尊の御心に応え、水火の煩惱を畏れず決定し、念仏往生を遂げる姿を喩えたものといえる。この「二河白道」の譬えを高田敬輔の第八章の絵相に当てはめてみると次頁のようになる。

② 高田敬輔 「選択集十六章之図」 (第八

高田敬輔「選訳集十六章之図」(第八

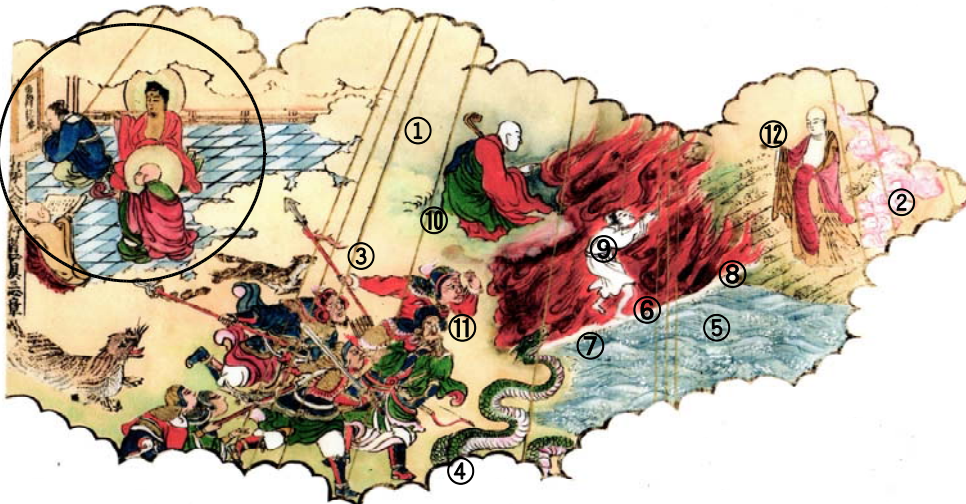
《至誠心・深心の図》（上図の左上の円で囲まれた部分）

《至誠心》在家者が《南無阿彌陀仏》の掛け軸の前で合掌し、ただ一心に念仏を称えている姿は、偽りの心の無い至誠心をあらわし、背に第七章の阿彌陀仏からの攝取不捨の光明が降り注いでいる。

* ≪深心≫ 頭光を顕し、如意を持つ出家者は、初地より十地の菩薩を表し、手に經典をもつ出家者は、地前の菩薩・阿羅漢・辟支佛等が他の経論を引いて念仏の行者を妨難し、さらに、頭光を顕す仏は、阿弥陀仏以外の報仏・化仏を表している。このような別解・別行・異学・異見・異執の破人≪四重の破人≫に惑わされることなく、深心を具足する念仏行者は、人に就いて信を立てる就人立信と、行に就いて信を立てる就行立信を確立している姿が表現されている。

《廻向発願心の図》（二河白道の譬喩）

- ① 東岸
② 西岸
③ 群賊、悪獸
④ 人無き空廻の澤
⑤ 水火の二河
⑥ 中間の白道
⑦ 水波常に道を濕す
⑧ 火焰常に道を焼く
⑨ 白道を行き西方に向かう
⑩ 東岸の声
⑪ 群賊喚び廻す
⑫ 西岸の声



＊

右の高田敬輔の第八章の絵相に付した番号（①～⑫）に、簡略的にその内容を記すと次のようになる。

① 東岸：娑婆世界。

② 西岸：極樂世界。

③ 群賊、惡獸：衆生の六根、六識、六塵、五陰、四大。

④ 人無き空迥の澤：惡友に染まって眞の善知識に逢わないこと。

⑤ 水火の二河：衆生の貪愛が水河、瞋憎が火河。

⑥ 中間の白道：清淨な願往生心。

⑦ 水波常に道を濕す：貪愛心が善心を汚すこと。

⑧ 火焰常に道を焼く：瞋恚嫌惡の心が善根功德を焼くこと。

⑨ 白道を行き西方に向かう：西方極樂淨土に生ずることを願うこと。

⑩ 東岸の声：釈迦の教え、發遣の声。

⑪ 群賊喚び廻す：別解、別行、惡見人等の惑亂、退失の誘惑の声。

⑫ 西岸の声：阿弥陀仏の本願、召喚の声。

このような状況の下、二河の煩惱を振り切り、直に白道を渡り、西岸の極樂淨土に辿り着くのである。そこには善友達が待ち受けており、相見えて俱に歡喜することができたのである。

これはまさに、釈尊と阿弥陀仏の二尊の發遣と召喚に随って、阿弥陀仏の本願力に身を任せ、全ての功德を振り向けて往生したいと願うことによって、往生の後には阿弥陀仏を見奉ることができ、菩薩達と俱に一处に会し、限り無い法悦にひたることができ、現世で得られる全ての善根を往生のために回向する、往相の立場の廻向發願心ということが出来る。

次の段は、淨土に往生した後に生死の世界に還って、衆生を教化する還相回向について述べられる。

③還相回向について

又言「^二迴向^一者生^二彼國^一已還起^二大悲^一迴^二入生死^一教^二化衆生^一亦名^二迴向^一也三心既具無^二行不^レ成願行既成若不^レ生者無^レ有^二是處^一也又此^二三心亦通攝^二定善^一之義應^レ知

(また迴向と言うは、彼の國に生じ已って、還って大悲を起こし、生死に迴入^{えにゆう}して、衆生を教化するをまた迴向と名づく。

三心既に具すれば、行として成ぜずということ無し。願行既に成じて、もし生ぜずといわば、この處^{ことわり}の有ること無し。

またこの三心、また通じて定善を攝するの義まさに知るべし。)

* これまで迴向發願心について、往相回向^{おうそうえこう}のことを述べてきたが、まだ他に別な意味の迴向がある。

それは、彼の極樂浄土に往生して、大慈悲の智慧の心を起こし、再びこの生死の世界に還えり、利他の心で迷える衆生を迎えることをいうものである。このように、往相回向によって、自らの往生を願うと同時に、多くの衆生にも同じように往生がかなえられることを願って還り、教化することを還相回向^{げんそうえこう}と云うのである。

そして、この三心が具わったならば、往生行として完全なものになり、成就しないことはないのである。もし、往生を願う心と往生の行とが兼ね具わっても往生できないというものがあるとしても、そのものの道理は偽りであり、何ら根拠を持たない虚説にすぎないのである。

また、この三心は、上品上生に説かれているが、九品全てに通じた日常の心構えである安心として、心得なければならぬものである。加えて、この三心は散善行ばかりではなく、定善十三観にも全て通じることなので、ことさらに心得ておくことが必要であると述べられている。

(三)

『往生礼讃』に説かれる三心

往生礼讃云問曰今欲_レ勸_レ人往生_二者未_レ知若爲安心起行作業定得_レ往_二生彼國土_一也

答曰必欲_レ生_二彼國土_一者如_二觀經說_一者具_二三心_一必得_二往生_一何等爲_二三

一者至誠心所_レ謂身業禮_二拜彼佛_一口業讚_二歎稱_一揚彼佛_一意業專_二念觀_一察彼佛_一凡起_二三業_一必須_二眞實_一故名_二至誠心_一

二者深心卽是眞實信心信_下知自身是具足煩惱凡夫善根薄少流_二轉三界_一不_レ出_中火宅_上今信_下知彌陀本弘誓願及稱_二名號_一下至_二十聲一聲等_一定得_中往生_上乃至一念無_レ有_二疑心_一故名_二深心_一

三者迴向發願心所作一切善根悉皆迴願_二往生_一故名_二迴向發願心_一

具_二此三心_一必得_レ生也若少_二一心_一卽不_レ得_レ生如_二觀經具說_一應_レ知

(往生礼讃に云わく。問うて曰わく。今、人を勸めて往生せしめんと欲せば、未だ知らず。いかんが安心し、起行し、作業して、定んで彼の國土に往生することを得んや。

答えて曰わく。必ず彼の國土に生ぜんと欲せば、觀經に説くが如きは、三心を具すれば、必ず往生を得。何等をか三とす。

一には、至誠心。いわゆる身業に彼の佛を禮拜し、口業に彼の佛を讚歎し稱揚し、意業に彼の佛を專念し、觀察す。凡そ三業を起こすに必ず須く眞實なるべし。故に至誠心と名づく。

二には、深心。卽ちこれ眞實の信心なり。自身はこれ具足煩惱の凡夫、善根薄少にして、三界に流轉して、火宅を出でずと信知し、今、彌陀の本弘誓願及び名號を稱すること、下十聲一聲等に至るまで、定んで往生することを信知し、乃至一念も疑心あること無し。故に深心と名づく。

三には、迴向發願心。所作の一切の善根、悉く、皆、迴して往生を願ず。故に迴向發願心と名づく。この三心を具すれば、必ず生ずることを得。もし一心をも少_かけぬれば、卽ち生ずることを得ず。

觀經に具に説くが如し。まさに知るべし。)

* ここでは重ねて『往生礼讃』^(注3)の文を引用して、三心について述べられる。

今、人々に極樂浄土に往生できる法門を勧めるためには、安心、起行、作業の三つについてどのようなことを心がければ良いのか教えて欲しい。

「尚、この安心、起行、作業について、起行は、往生行の実践について第二章で述べたように、五種正行のことで、その第四称名正行を正定業とすることである。作業は、修行の実践方法であり第九章で説かれるように四修（恭敬修・無余修・無間修・長時修）のことである。だから、ここ第八章では、安心についてのみ述べられる。」

そのことについて答えるなら、それは、安心とはどのようなものかというと、三心のことであり、『觀無量寿經』に説かれているように、彼の國土に往生したいと願うならば、三心を具足すれば、必ず往生することができると説かれていることである。

その三種の心というのは、一には至誠心である。念仏の行者は、身業として阿弥陀仏を礼拝し、口業に阿弥陀仏の仏徳を讃歎称揚し、意業には阿弥陀仏を憶念觀察することであり、この身・口・意の三業のいずれに於いても真実心をもって行じなければならない。この内外相應の真実心を至誠心というのである。

二には深心である。これは真実の信心のことである。まさに自身は、煩惱具足の凡夫であり、善根も極めて少ないことから三界の迷いの世界に生死を重ね、いまだに煩惱の炎に包まれた火宅の娑婆世界から解脱できないことを自覚しなければならぬ。今、この三界の火宅から救おうとする阿弥陀仏が四十八願を立て、我が名号を称えるものは、たとえ僅かに十声一声であっても、必ず全てのものを往生させると誓ったことを堅く信じ念仏を称えることである。このことについて一念たりとも疑いの念を持つことがないことを深心というのである。

三には廻向發願心である。過去から現在に至るまでに自ら積んだ全ての善根を振り向けて、極樂浄土に

往生したいと願う心を廻向發願心というのである。まさに『觀無量壽經』に説かれている通りである。このような三心を具足すれば、必ず淨土往生が得られるのである。もしそのうちの一つでも欠けるようなことがあれば、往生することができないのであると説かれている。

四 『選択本願念仏集』の私釈

第八章最後の段は、法然の私釈段で、これまでの三心論は、善導の『觀經疏』『往生礼讃』を手がかりに論じられたものであるが、以下の文は、元祖法然が、これまで説かれていた三心について、さらに注釈を加えて説かれる。

私云所引三心者は行者至要也所以者何經則云具三心者必生彼國明知具三必應得生釋則云若少一心即不得生明知一少是更不可因茲欲生極樂之人可全具足三心也

其中至誠心者は眞實心也其相如彼文但外現賢善精進相内懷虛假者外者對内之辭也謂外相與内心不調之意即是外智内愚也賢者對愚之辭也謂外是賢内即愚也善者對惡之辭也謂外是善内即惡也精進者對懈怠之辭也謂外示精進相内即懷懈怠心也若夫翻外蓄内者祇應備出要内懷虛假等者内者對外之辭也謂内心與外相不調之意即是内虛外實也虛者對實之辭也謂内虛外實者也假者對眞之辭也謂内假外眞也若夫翻内播外者亦可足出要

次深心者謂深信之心當知生死之家以疑爲所止涅槃之城以信爲能入故今建立二種信心決定九品往生者也又此中言一切別解別行異學異見等者是指聖道門解行學見也其餘即是淨土門意在文可見明知善導之意亦不出此二門也

廻向發願心之義不可俟別釋行者應知

此三心者總而言之通諸行法別而言之在往生行今舉通攝別意即周矣行者能用心敢勿忽緒

(私に云わく。引く所の三心は、是れ行者の至要なり。所以はいかん。經には則ち三心を具する者は、必ず彼の國に生ずという。明らかに知んぬ。三を具すれば、必ず生ずることを得べし。釋には則ちもし一心をも少^かけぬれば、即ち生ずることを得ずと云う。明らかに知んぬ。一も少^かけぬれば、これ更に不可なることを。これによりて極樂に生ぜんと欲せん人は、全て三心を具足すべし。

其の中に至誠心とは、これ眞實の心なり。その相、彼の文の如し。但し外に賢善精進の相を現じ、内に虚假を懷くというは、外は内に對する辭^{ことば}なり。謂わく外相と内心と調^{ととの}わざる意^{こころ}なり。即ちこれ外は智にして、内は愚なり。賢は愚に對する辭なり。謂わく外はこれ賢にして内は即ち愚なり。善は惡に對する辭なり。謂わく外はこれ善にして、内は即ち惡なり。

精進は、懈怠に對する辭なり。謂わく外には精進の相を示し、内には即ち懈怠の心を懷くなり。もしそれ外を翻^{ひるがえ}して内に蓄^{たま}えば、祇^{まこと}に出要に備うべし。

内懷^{ないえ}虚假^{こけ}等とは、内は外に對する辭なり。謂わく内心と外相と調わざる意なり。即ちこれ内虚外實なり。虚は實に對する辭なり。謂わく内虚外實の者なり。假は眞に對する辭なり。謂わく内假外眞なり。もしそれ内を翻^{ひるがえ}して外に播^ほさば、また出要に足りぬべし。

次に深心とは、謂わく深く信ずるの心なり。まさに知るべし。生死の家には、疑を以つて所止となし、涅槃の城には、信を以つて能入となす。故に今、二種の信心を建立して、九品の往生を決定するものなり。またこの中に、一切の別解、別行、異學、異見等と言うは、これ聖道門の解行、學見を指す。その餘は即ちこれ淨土門の意なり。文に在りて見るべし。明らかに知んぬ。善導の意、またこの二門を出でざるなり。廻向發願心の義、別釋を俟^まつべからず。行者まさに知るべし。

この三心は、總じてこれを言わば、諸々の行法に通じ、別してこれを言わば、往生の行に在り。今、通を擧げて別を攝す。意、即ち周^{あまね}し。行者、能く用心して、敢^あえて忽^{ゆるがせ}緒^せにすること勿れ。)

＊ 私が思うには、これまで引いた善導和尚が説くところの三心は、極楽浄土往生を願う念仏行者にとって、極めて大切な心構えである。なぜならば、『観無量寿経』には、三心の具わったものは、必ず彼の浄土に往生できると説示されている。また、『往生礼讃』で、もし一心でも欠け、三心が円具しなかったら往生ができないと説かれている。だから極楽に往生したいと願うものは、三心すべてを具足しなければならぬということである。

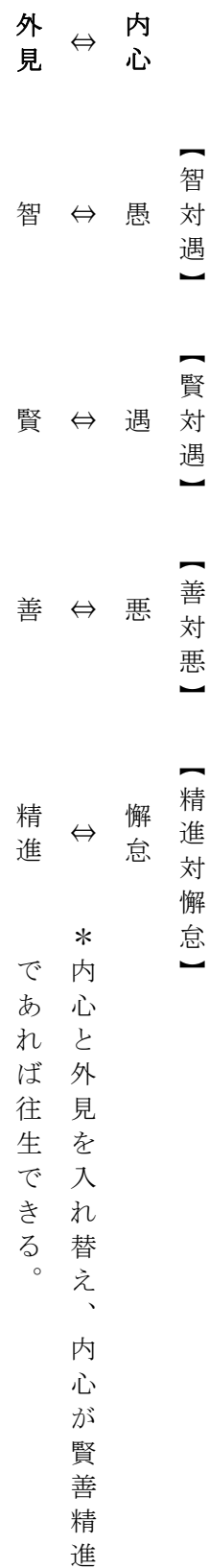
その中の至誠心とは、真実の心のことであって『観經疏』に説かれる通りである。ただし、「外に賢善精進の相を現じ、内に虚假を懷く」とあるのは、外は内に対する言葉であり、外に表れた相と心の内とが調和しないということである。

つまり、外見は高い学識があり智者のように見えても、内心に信仰心ももたず修行をしない人のことである。賢は愚に対する言葉であり、外見は才智に勝れた賢者のように見えても、内心に迷いの多い愚者のことである。善は悪に対する言葉であり、外見は清浄な善者のように見えても、内心は不浄な悪者のようなものである。さらに、精進とは懈怠に対する言葉であり、外見には修行に精進して努力しているように見えても、内心は怠惰で修行に励まない人のことである。もし、外見と内心を入れ替え、外見が愚悪懈怠の人のように見えても、内心が賢善精進の人であれば、その人は往生できるのである。

また、内に虚假を懷いてはならないと説いている。内は外に対する言葉あり、内心と外見が調わないことをいうのである。内心に偽りの心を持っていながら、外見は真実らしくふるまうことである。虚は実に対する言葉であり、内心に空虚な偽りの心をもっていながら、外見は真実の心をもって信仰しているようにみせることである。假は真に対する言葉である。内心に空虚な信仰心しかないのに、外見は真実な信仰心をもって修行しているように見せかけていることである。もしこの内心と外見を入れ替え、内心に真実の信仰心をもって外見が空虚な愚人に見える人であれば、それはまさに往生できる人なのである。

これを図示すれば、次のようになる。

●外に賢善精進とは



●内懷虚假とは



次に、深心というのは、深く信ずる心のことである。この生死の世界は、互に疑心暗鬼の中で暮らしているようなものであるが、極楽浄土に往生するには、疑うことなく信ずる心が大切である。

何を信じるかといえ、自らの愚かさや無力さを見きわめて、念仏往生の法門以外に救われる道が無い凡夫であることを深く信じる信機と、阿弥陀仏が全ての凡夫を救うために大悲をもって本願を立て給ったことを信じる信法の二種の深心である。

この二種の深心を堅く信じる心をもつことにより、上品上生ばかりでなく九品の往生全てに通じる安心であることから往生が決定されるのである。

また、一切の別解、別行、異学、異見等というのは、別な解釈や認識や修行、異なった学問や見解をいうものであり、これは聖道門の人々を指したものである。これ以外のものは浄土門の意で解釈されるものである。詳しいことは『観經疏』の文を読めば解ることである。

善導和尚の御意は、仏教を聖道門と浄土門の悟りの門と救いの門との二門を立てていることが明らかなのである。

そして、廻向発願心については、善導和尚の『観經疏』や『往生礼讃』に説示されているところで明白なので、ことさら別釈を述べるまでもないことである。

さらに、三心は、諸々の行法に通じるもので、浄土門ばかりでなく、広く聖道門にも通じるものであるが、しかし、ここでは、特に、浄土往生について説かれたものであることを心得なければならない。

今、広く一般に通じる至誠心、深心、廻向発願心の三心を挙げ、それとともに浄土往生についての信心の持ち方、在り方を説示したものであり、浄土往生を願う念仏行者は、心して他の三心とは区別しなければならないということである。

つまり、浄土門が説くところの三心は、三心を具足することによって、往生の行となるのであり、これは決して疎かにしてはならない大事なことであるということを最後に強調して結んでいる。

五 まとめ

高田敬輔の第八章の三心の絵相は、《至誠心・深心の図》と《廻向発願心（二河白道の譬喩）》の大きく二場面に分けられて描かれるが、三心に関わる様々な視点を考察した結果、三心のそれぞれの絵相には、次のような意図があることを把握することができる。

① 至誠心については、念仏の行者が《南無阿弥陀仏》の掛け幅の前で合掌し、ただ一心に念仏を称えている姿が描かれ、偽りの心の無い至誠心を顕しており、背に第七章の阿弥陀仏からの摂取不捨の光明が降り注がれる様相が表現されていること。

② 深心については、頭光を顕し、如意を持つ出家者は、初地より十地の菩薩を表し、手に經典をもつ出家者は、地前の菩薩・阿羅漢・辟支佛等が他の経論を引いて念仏の行者を妨難し、さらに、頭光を顕す仏は、阿弥陀仏以外の報仏・化仏を表している。このような別解・別行・異学・異見・異執の破人《四重の破人》に惑わされることなく、深心を具足する念仏行者は、人に就いて信を立てる就人立信と、行に就いて信を立てる就行立信を確立した姿として表現されていること。

③ 廻向発願心については、「二河白道の譬喩」の絵相により、釈迦の発遣、阿弥陀仏の召喚によって、念仏の行者が白道を西に向かって渡る様相が描かれ、別解、別行、悪見人等の惑乱、退失等の誘惑に負けず、全ての善根を浄土往生に振り向ける往相廻向の姿が表現されていること。

④ 第八章三心の絵相の左上部の《南無阿弥陀仏》の掛け幅の前で一心に念仏を称える念仏行者の姿は、三心の至誠心・深心それぞれ単独の信心の様相ごとに捉えることもできるが、至誠心・深心・廻向発願心の三心全てを具足した究極の姿を顕していると捉えられること。

(注3)(注2)(注1)

『観無量寿経』(浄土宗全書第一卷四六頁)に説かれる三心
良照義山『観無量寿経随聞講録』卷下之一(浄土宗全書第十四卷六四九頁)
善導『往生礼讃』偈一卷(浄土宗全書第四卷三五四頁)

第九項 「第九 念佛行者行用四修法章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第九 念佛行者行用四修法章

二 『選択本願念仏集』の篇目

念佛行者可^レ行^二用四修法^一之文

(念佛の行者四修の法を行^{ぎようよう}用すべきの文)

* 『往生礼讃』^(注1)の、

今欲^二勸^レ人往生^一者未^レ知若爲安心起行作業定得^レ往^二生彼國土^一也

(今、人を勧めて往生せしめんと欲するは、未だ知らず。いかんが安心して起行し作業して、定んで彼の國土に往生することを得るや。)

の文に基づき、往生を得るには、安心は三心、起行は五念門、作業は四修であると説くところの、第八章の三心章の安心に続いて、作業にあたる四修の法について説示される章である。

三 『選択本願念仏集』の引文

引文は二文あり、善導の『往生礼讃』と大慈恩寺沙門基撰の『西方要決釋疑通規』である。

(一) 『往生礼讃』の四修

まず初めに『往生礼讃』^(注2)からみることにする。

善導往生禮讃云又勸行^二四修法^一何者爲^レ四一者恭敬修所謂恭^二敬禮拜彼佛及彼一切聖衆等^一故名^二恭敬修^一畢命

爲^レ期誓不^レ中止^二即是長時修二者無餘修所謂專稱^二彼佛名^一專^二念專想專禮專讚彼佛及一切聖衆等^一不^レ雜^二餘業^一故名^二無餘修^一畢命爲^レ期誓不^二中止^一即是長時修三者無間修所謂相續恭敬禮拜稱名讚歎憶念觀察迴向發願心心相續不^下以^二餘業^一來間^上故名^二無間修^一又不^下以^二貪瞋煩惱^一來間^上隨犯隨懺不^レ令^二隔^一念隔^レ時隔^レ日常使^二清淨^一亦名^二無間修^一畢命爲^レ期誓不^二中止^一即是長時修

（善導の往生禮讚に云わく、又勸めて四修の法を行ぜしむ。何者をか四とす。

一には恭敬修。所謂る彼の佛及び彼の一切の聖衆等を恭敬禮拜す。故に恭敬修と名づく。畢命を期と爲して誓つて中止せざる。即ち是れ長時修なり。

二には無餘修。所謂る専ら彼の佛名を稱して、彼の佛及び一切の聖衆等を專念專想專禮專讚して、餘業を雜えず。故に無餘修と名づく。畢命を期と爲して誓つて中止せざる。即ち是れ長時修なり。

三には無間修。所謂る相續して恭敬禮拜し、稱名讚歎し、憶念觀察し、迴向發願し、心心に相續して、餘業を以つて來し間^{へだて}ず。故に無間修と名づく。又貪瞋煩惱を以つて來し間^{へだて}ず。隨犯隨懺して、念を隔て、時を隔て、日を隔てしめず。常に清淨なら使^しむるを、また無間修と名づく。畢命を期^にと爲し、誓つて中止せざる。即ち是れ長時修なり。）

* 善導は、『往生禮讚』で、念仏行者が念仏を相續しながら心がけるべき修行の方法に四修の法があることを説いている。それは、

一に恭敬修：阿弥陀仏や淨土の一切の聖衆等を恭敬禮拜すること。この恭敬修を生涯に亘つて中断することなく常にもち続けられ長時修となる。

二に無餘修：専ら念仏を称え、彼の阿弥陀仏や淨土の一切の聖衆等を専ら念じ、専ら想い、専らに禮拜して讚え、余行をまじえることなく専らに念仏を称えること。この無餘修を生涯に亘つて中断することなく常にもち続けられ長時修となる。

三に無間修：常に絶え間なく念仏往生行を相続することであり、彼の阿弥陀仏や浄土の一切の聖衆等を恭敬礼拝し、御名を称え、讃歎し、憶念し、觀察し、廻向し、発願し、一念一念すべての善根をかたむけて心に相続するように勤め、余行によって間断してはならないのである。また、貪瞋癡等の煩惱によっても間断されることがなく、もし、煩惱によつて中断された時には、その都度直ちに懺悔し、時が経過したり、日が改まつてから懺悔するのではなく、直ちに懺悔して常に心身を清浄に保つように心がけなければならないのである。この無間修を生涯に亘つて中断することなく常にもち続けられれば長時修となる。

このように、恭敬修・無餘修・無間修の三修の法を中断することなく、一生涯に亘つて常に保ち続けることが長時修であり、合わせて、恭敬修・無餘修・無間修・長時修の四修の法ということになるのである。

(二) 『西方要決』の四修

次に、大慈恩寺沙門基撰の『西方要決釋疑通規』(『西方要決』)^(注3)についてみることにする。

西方要決云但修四修以爲正業一者長時修從初發心乃至菩提恆作淨因終無退轉二者恭敬修此復有五敬一敬有緣聖人謂行住坐臥不背西方涕唾便痢不向西方也二敬有緣像教謂造西方彌陀像變不能廣作但作一佛二菩薩亦得教者彌陀經等五色帛盛自讀教佗此之經像安置室中六時禮懺香華供養特生尊重三敬有緣善知識謂宣淨土教者若千由旬十由旬已來並須敬重親近供養別學之者總起敬心與己不同但知深敬也若生輕慢得罪無窮故須總敬即除行障四敬同緣伴謂同修業者自雖障重獨業不成要藉良朋方能作行扶危救厄助力相資同伴善緣深相保重五敬三寶同體別相並合深敬不能具錄爲淺行者不果依修住持三寶者與今淺識作大因緣今粗料簡言佛寶者謂雕檀繡綺素質金容鏤玉圖繪磨石削土此之靈像特可尊承暫爾觀形罪消增福若生少慢長惡善亡但想尊容當見眞佛言法寶者三乘教旨法界所流名句所詮能生解緣故須珍仰以發慧基鈔寫尊經恒安淨室箱篋盛貯並合嚴敬讀誦之時

身手清潔言「僧寶」者聖僧菩薩破戒之流等心起「敬勿」生「慢想」三者無間修謂常念佛作「往生心」於「一切時」心恒
想巧譬若有「人被」佗抄掠「身爲」下賤「備受」艱辛「忽思」父母「欲」走歸「國行裝未辦由在」佗鄉「日夜思惟苦不」堪
忍「無」時暫捨不「念」耶孃「爲」計既成便歸得「達親」近父母「縱任歡娛行者亦然往因」煩惱「壞」亂善心「福智珍財
竝皆散失久流」生死「制不」自由「恒與」魔王「而作」僕使「驅」馳六道「苦」切身心「今遇」善緣「忽聞」彌陀慈父不「違」
弘願「濟」拔羣生「日夜驚忙發心願」往所以精勤不「倦當」念「佛恩」報盡爲「期心恒計念」四者無餘修謂專求「極樂」
禮「念彌陀」但諸餘業行不「令」雜起「所作之業日別須」修「念佛誦經」不「留」餘課耳

（西方要決に云わく。ただ四修を修するを以つて正業とす。

一には長時修。初發心より乃至菩提まで、恆に淨因を作して、終に退轉すること無し。

二には恭敬修。此れにまた五有り。

一には有縁の聖人を敬う。謂わく行住坐臥、西方に背かず。涕唾便痢西方に向かわず。

二には有縁の像教を敬う。謂わく西方の彌陀の像變を造る。廣く作ること能わざれば、ただ一佛二菩薩を

作るもまた得たり。教とは、彌陀經等を五色の帛に盛て、自ら讀み、佗に教え、この經像を、室中に安

置して、六時に禮懺し、香華供養して、特に尊重を生ぜ。

三には有縁の善知識を敬う。謂わく淨土の教えを宣る者は、若しは千由旬、十由旬より已來、竝びに須

く敬重し、親近し、供養すべし。別學の者にも、總て敬心を起し、己と同じからざるをも、ただ深く

敬うことを知れ。若し輕慢を生ずれば、罪を得ること窮り無し。故に須く總て敬うべし。即ち行障を

除く。

四には同縁の伴を敬う。謂わく同修業の者なり。自ら障重くして獨業成ぜずと雖も、要らず良朋に藉り

て、方に能く行を作す。危を扶け、厄を救い、力を助けて相資く。同伴の善縁深く相い保重せよ。

五には三寶を敬う。同體別相、竝びに深く敬うべし。具に録すること能わず。淺行の者の、依修すること

を果さざるによりてなり。住持の三寶とは、今の淺識のために、大因縁と作る。今粗ば料簡せば、佛寶と
言うは、謂わく檀を彫り、綺に繡い、素質金容、玉を鏤め、繪に圖し、石を磨き、土を削る、此の靈像、
特に尊承すべし。しばらくも形を觀れば、罪消し福を増す。若し少慢を生ずれば、惡を長じ、善を亡ば
す。但し尊容を想うこと、當に眞佛を見るがごとくすべし。

法寶と言うは、三乗の教旨、法界所流の名句の所詮なり。能く解を生ずるの縁なり。故に須く珍仰すべし。
慧を發するの基なるを以てなり。尊經を鈔寫して、恒に淨室に安じ、箱篋に盛れ貯えて、並びに嚴敬
すべし。讀誦の時は、身手清潔にせよ。

僧寶と言うは、聖僧と、菩薩と、破戒との流、等心に敬を起こせ。慢想を生じることなかれ。

三には無間修。謂わく常に念佛して、往生の心をなす。一切の時に於いて、心に恒に想巧すべし。譬え
ば若し人有りて、佗に抄掠せられて、身、下賤となりて、備に艱辛を受く。忽ち父母を思いて、走り
て國に歸らんと欲すれども、行裝未だ辦ぜず。なお佗郷に在つて、日夜思惟して、苦しみ堪え忍びず。
時として暫くも捨てて、爺嬢を念ぜざること無し。計をなすこと既に成りて、便ち歸りて達するこ
とを得て、父母に親近し、ほしいままにに歡娛す。行者もまた然なり。往し煩惱に因りて、善心を壞亂し、
福智の珍財、並びに、皆、散失す。久しく生死に流れて、制するに自由ならず。恒に魔王のために、僕使
となつて、六道に驅馳せられて、身心を苦切す。今、善縁に遇いて、忽ち彌陀慈父の弘願に違せず。羣生
を濟拔したまうを聞きて、日夜に驚忙し、發心して往くことを願ず。所以に精勤して倦まず。當に佛恩
を念じて、報の盡くるを期となして、心恒に計念すべし。

四には無餘修。謂わく専ら極樂を求めて、彌陀を禮念す。ただ諸餘の業行を雜起せしめざれ。所作の業
には、日別に須く念佛誦經を修して餘課を留めざるべきのみ。

* このように、慈恩寺の基の『西方要決』の「作業方軌」には、四修の法が次のように説かれている。

(一) 長時修：初めて仏道に志してから極樂浄土に往生するまで、常に浄土往生の行因である念仏行につとめ、退転することがないこと。

(二) 恭敬修：念仏の行者が恭敬するものに、次の五種がある。

① 有縁の聖人を敬う：ゆかりの深い阿弥陀仏、観音・勢至両菩薩を敬うこと。仏、菩薩は西方におわすので、常に敬い、行住坐臥においても西方に背を向けたり、涙や唾や大小便を流す等の不浄をしてはならない。

② 有縁の像教を敬う：ゆかりの深い阿弥陀仏、観音・勢至両菩薩の尊像や經典を敬うこと。阿弥陀仏の像は、木像、銅像、画像等の何れでも良く、多くの仏像を造ることができなければ、一仏二菩薩だけでも良いので奉って崇敬すること。經典は『阿弥陀經』等の『浄土三部經』を五色の袋に入れて奉り、自らも読誦し、さらに他にも教えて念誦させなければならない。そして、この尊像や經典を一室に安置し、香華を捧げ、香を焚き、晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六時に礼拝し、懺悔し、特に尊重に敬わなければならない。

③ 有縁の善知識を敬う：教えと信仰の先達を敬うこと。もし浄土門の教えを説く善知識がいると知つたなら近くても遠くても訪ねて行って親しみ、近づいて、敬って供養しなければならない。また、たとえ浄土門以外の者であっても、同じ仏法を説く者として尊重し、敬うべきである。もし、それらの人を輕蔑したり、自ら慢心を懷くようなことがあれば、限らない罪を犯したことになる。どのような信仰の人でも、同じように仏法を説くすべての人達を敬うことによって、自らの修行の障害を取り除くことができるのである。

④ 同縁の伴を敬う：浄土門の同行の伴を敬うこと。自らは煩惱の障りが重く、独力では修行が容易に成就し難いので、必ず良い朋友を得て、その力添えがあれば益々信仰が深まるのである。また、も

し危険や災難に出逢っても、互に救い合い、助け合うことができるのである。まして信仰を同じくする同伴者が得られれば、得難い善縁を得たものとして互に尊重し逢うことが大切なことである。

⑤ **三寶を敬う**：仏・法・僧の三寶を敬うこと。三寶には同体三寶（仏・法・僧の三つが本性として等しく異ならない理想上の三寶）と別体三寶（仏・法・僧がそれぞれ別々の自性をもっと理解する事実上の三寶）があるが、みな深く敬わなければならない。しかし、これらは浅行の者に取っては修行し難いし、理解しがたいものであるので、ここでは説かず、その他に住持の三寶（後世に仏教を伝え弘めるための三寶）という、今の末世の智慧の浅い者に最も大切な因縁となる三寶について説くことにする。

㊦ **仏宝**：仏宝とは、仏像や仏画のことである。栴檀や白檀等の香木で彫刻し、絹地に刺繍したり、様々な素材で飾られた金容の仏像や宝玉を嵌めたものや、かとり繪に描いたり、石像にしたり、土で造つたり、仏の姿を表した霊像のことであるので、特に尊重に礼拝しなければならないのである。しばらくでも尊像を觀奉れば罪が消え、福德を増すことになる。たとえ粗末な仏像でも、もし慢心を起こして敬わないことがあれば、必ず悪を増長し、善根を亡ぼすことになるであろう。だから仏像に対するときには、真仏を拝している想いで敬わなければならないのである。

① **法宝**：法宝とは、經典のことである。經典は三乗（声聞・緣覺・菩薩）の教えが説かれていて、その教えは釈尊が人々を救うために説かれた法門であり、究極の真理から流れ出た章句字句であり、さとり智慧を發こす基となるものである。だから、仰ぎ敬い、深く尊重しなければならないものである。また、教典を書写して受持したならば、必ず箱に納めて常に清浄な仏間の中央に安置し、尊重しなければならない。そして、読誦する場合は、身も手も清潔にして修さなければならないのである。

㊦ 僧宝：僧宝とは、聖僧や菩薩のことである。もし破戒の僧であっても、仏法を説く身であるならば、同じように敬い、慢心を起こして輕蔑するようなことがあってはならない。

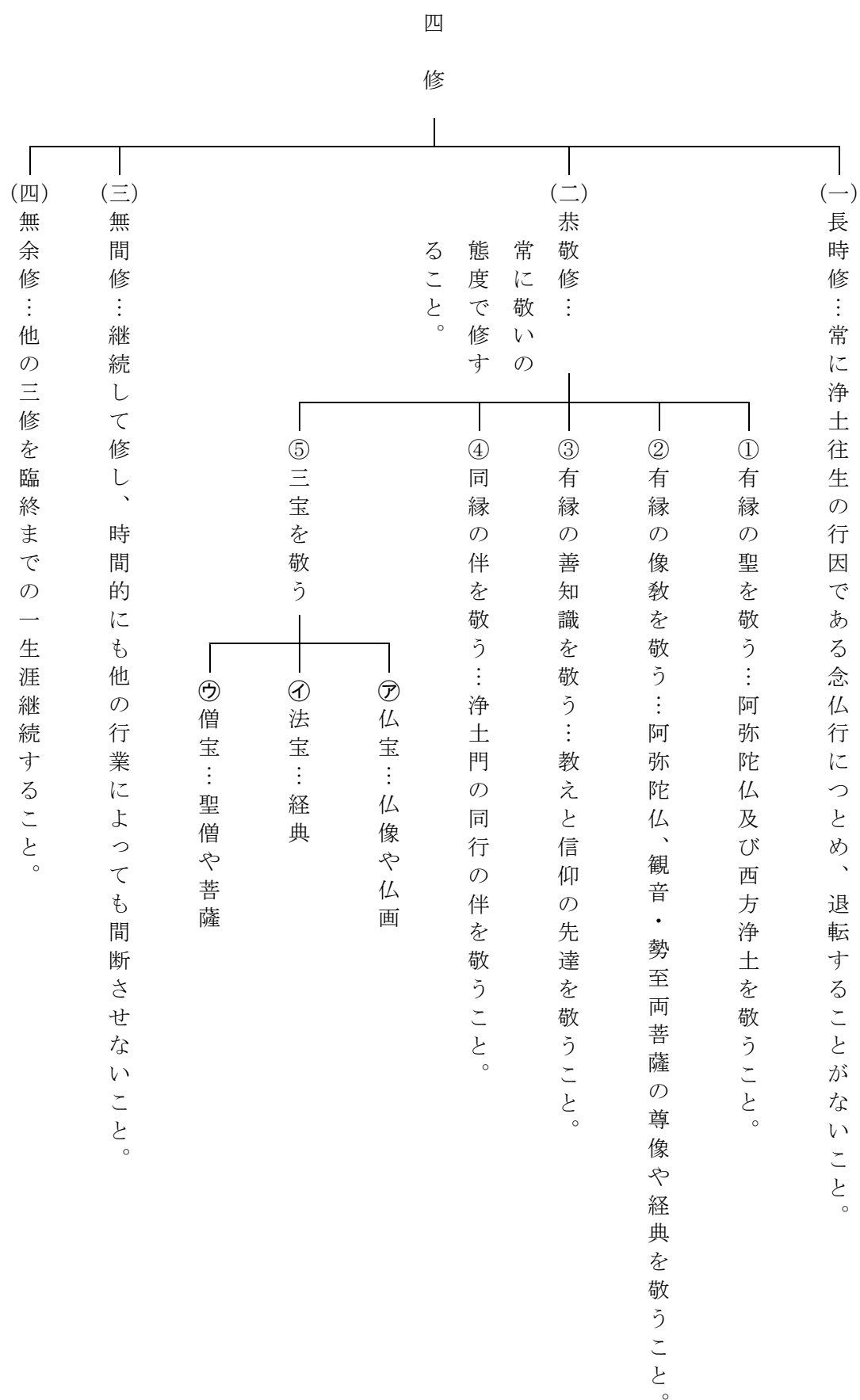
(三) 無間修：常に念仏をして往生を願い続けることである。行住座臥、いついかなる時も、絶えず極樂淨土往生を想い、常に心に向けて想い廻らすことである。

例えば、ある一人の子供がいて、悪人のために脅かされ、すべての財を奪われ、遠い他人の家の下僕となつてあらゆる艱難辛苦を受けたとする。その子供は、情け深い父母のことを想い出しては、急いで故郷に帰りたいと願ったが、旅費など準備が整わず、他国で日夜思案に暮れ、耐えがたい苦しみを味わわなければならなかった。その内ようやく計画が整い、他郷を抜け出し、懐かしい父母の許へ帰ることができ、子供は父母から慰められ、心から喜びを味わうことができたのである。

この話のように、念仏行者もこの子供と同じことなのである。人々は初めから煩惱によって善心が打ち壊されて六波羅蜜の福德も智慧も失われ、久しく生死の苦海に流され、欲界の魔王のために苦惱を重ね、その下僕となつて、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人界、天界の六道の間を彷徨わされ、心身ともに責め苛まされているのである。しかし、今、仏法を説く善知識と巡り会う縁を得て、慈悲深い阿弥陀仏が本願を成就し、すべての衆生を救済することを聞いて、日夜驚くように絶えることがないほど念仏し、往生を願う心を発したのである。だから、この行者のように精進努力して勤めを怠らず、阿弥陀仏の慈恩を念じ、この身の終わりまで絶え間なく往生を願わなければならないのである。

(四) 無余修：専ら極樂淨土に往生を願つて念仏を称え、阿弥陀仏を礼拝すること。ただし、その他の余行を混じえてはいけない。また、日々為すべきことは、念仏を称え、淨土三部經を讀誦し、その他のものは日課の中に入れないことである。

以上のことを簡略的に図示すると、次のようになる。



四 『選択本願念仏集』の私釈

次に、なぜ四修を明かすといいいながら、実際に三修しか説かれないのか、私釈が説かれる。

私云四修之文可_レ見恐_レ繁而不_レ解但前文中既云_二四修_一唯有_二三修_一若脱_二其文_一若有_二其意_一也更非_二脱文_一有_二其深意_一也何以得_レ知四修者一長時修二慳重修三無餘修四無間修也而以_二初長時只是通_一用後三修_一也謂慳重若退慳重之行即不_レ可_レ成無餘若退無餘之行即不_レ可_レ成無間若退無間之行即不_レ可_レ成爲_レ使_レ成_二就此三修行_一皆以_二長時_一屬_二於三修_一所_レ令_二通修_一也故三修之下皆結云_下畢命爲_レ期誓不_二中止_一即是長時修_上是也例如_二彼精進通_一於餘五度_一而已

(私に云わく、四修の文見つべし。繁_{しげき}を恐れて解_げせず。但し前の文中に、既に四修と云うて、ただ三修有り。もしはその文を脱せるか。もしはその意有りや。さらに脱文に非ず。その深意有り。何を以ってか知ることを得る。

四修とは、一には長時修、二には慳_{おんじゅうしめ}重修、三には無餘修、四には無間修なり。

しかるに初めの長時は、ただ是れ後の三修に通用するを以ってなり。謂わく、慳重もし退せば、慳重の行、即ち成ずべからず。無餘、もし退せば、無餘の行、即ち成ずべからず。無間もし退せば、無間の行、即ち成ずべからず。

この三修の行を成就せしめんがために、皆、長時を以って、三修に属して、通じて修せしめる所なり。故に三修の下に、皆、結して畢命を期とす、誓って中止せざる、即ちこれ長時修なりと云う是れなり。例せば彼の精進、餘の五度に通ずるが如きのみ。)

* 四修の法については、『往生礼讃』と『西方要決』で明らかになったように、改めて解釈を述べるまでもないが、ただ留意しておきたい点がある。それは、『往生礼讃』の初めの文に、

又勸行「四修法」用策「三心五念之行」速得「往生」何者爲「四

（また勧めて四修の法を行じ、用いて三心五念の行を策して、速やかに往生することを得せしむ。何者か四と爲す。）

とあり、四修を明かすといいながら、実際には三修しか説かれずに一修欠けているが、これは一修の文が脱落しているのか、何か理由があるのかという問題である。

これは、決して第四修を書き落としたのではなく、深い意味があるのである。

四修とは、一には長時修、二には懇重修、三には無餘修、四には無間修である。

この中で、第一の長時修は、後の三修の何れにも通用するものである。なぜなら、懇重修をもし中途で止めてしまえば、懇重修の行は成就しないことになり、無余修も、もし途中で止めて種々の行を修することになれば、無余修の行が成り立たなくなり、無間修も、もし途中で相續することを止めてしまえば、無間修の行は成就しなくなるからである。このように三修の行を成就させようとするには、何れも生涯を通して長時に継続しなければならないのである。

だから、長時修は、他の三修に通じたものであり、「皆、結して畢命を期とす、誓って中止せざる、即ち是れ長時修なり（命終わるまで、誓って中断することがないことを長時修とする）」と説かれているのである。

例えば、菩薩の六波羅蜜行（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）の中で、いずれの行も精進努力無しで成就できる行は一つも無いので、精進が他の五度に共通した行であることが説かれている。だから念仏行者も同じことで、生涯を通して中断すること無く、一心に専ら念仏を継続しなければ、懇重修も無余修も無間修も成り立たないということなのである。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第九念仏行者行用四修法章)の絵相

以上のように、『選択本願念仏集』の篇目、引文、私釈の解釈を通して、改めて高田敬輔「選択集十六章之図」の「第九念仏行者行用四修法章」の絵相をみると、特に目を引くのは、『西方要決』の恭敬修に引かれている「有縁の像教を敬う」という文言にかなう絵相であることがわかるのである。

それは、

「ゆかりの深い阿弥陀仏、観音・勢至両菩薩の尊像や經典を敬うこと。

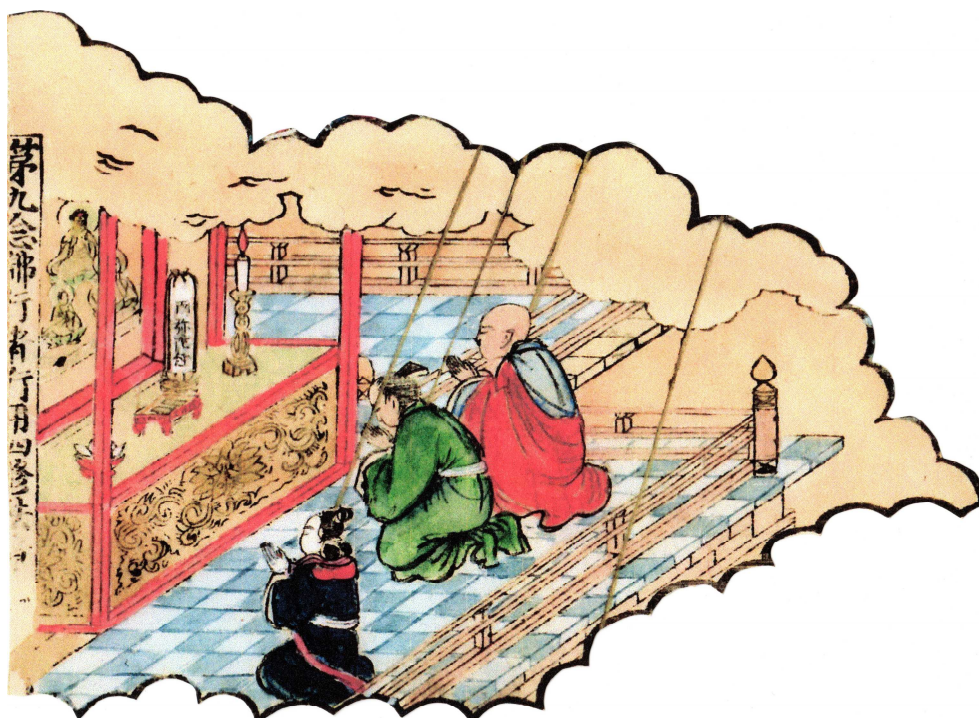
阿弥陀仏の像は、木像、銅像、画像等の何れでも良く、多くの仏像を造ることができなければ、一仏二菩薩だけでも良いので奉って崇敬すること。

經典は『阿弥陀經』等の『浄土三部經』を五色の袋に入れて奉り、自らも読誦し、さらに他にも教えて念誦させなければならない。

そして、この尊像や經典を一室に安置し、香華を捧げ、香を焚き、晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六時に礼拝し、懺悔し、特に尊重に敬わなければならない。」

と説かれている太字の部分(太字、筆者。)が、まさに描かれているのである。

つまり、出家者と男女の在家者が、一室の仏壇に、阿弥陀三尊が描かれた掛け幅を掲げ、五色の袋に『阿弥陀經』と記された経本を奉り、燈明を燃じ、香を焚き、蓮華を奉じ、礼讃し、懺悔し、ひたすらに念仏を称えている姿を、行用四修の法の象徴的絵相として描いている。



《絵相の部分構成》

* 標章……第九 念佛行者行用四修法章

* 掛け幅……阿弥陀三尊像。

* 經典……五色の袋に入った『阿弥陀経』等の『浄土三部経』。

* 燈明……蠟燭に燃燈。

* 焼香台……薫香。

* 華香……蓮華。

* 出家者……合掌称念、礼拝、懺悔。

* 在家者……男女二人、合掌称念、礼拝、懺悔。

* 光明……出家者、男女の在家者の頭部にそれぞれ注がれる。

六 まとめ

以上、高田敬輔の描く「選択集十六章之図」の（第九 念仏行者行用四修法章）の絵相の考察を通して、次のようなことを知ることができる。

① 高田敬輔は、四修の法の中から、特に恭敬修を選択し、三尊の掛け幅を掲げ、五色の袋に入った阿弥陀經を奉り、香華、焼香、礼拝、懺悔をして、専ら念仏を称える出家者と男女二人の在家者を描いていること。

② 第九章の絵相は、四修の法の中から、恭敬修を選択して描かれるが、善導の『往生礼讃』では、第一番目に説かれているものであり、慈恩寺の基の『西方要決』の「作業方軌」の中では、特に、注釈する内容が多岐にわたり詳細に説かれている部分でもあり、他の三修よりも重点化されていることによって、四修の中でも特に、恭敬修を選択したものと考えられること。

③ 一見すれば、常に敬い念仏する恭敬修を表現した絵相といえるが、それはとりもなおさず一生涯念仏を修する無余修であり、間断せず念仏する無間修であり、退転すること無く念仏を修す長時修の四修の法を象徴的に描いた絵相であること。

(注1)(注2)(注3)

善導『往生礼讃』（浄土宗全書第四卷三五四頁）

前掲書『往生礼讃』（浄土宗全書第四卷三五五頁）

大慈恩寺沙門基撰『西方要決釋疑通規』（『西方要決』（浄土宗全書第六卷六〇四頁）

第十項 「第十 來迎化佛唯讚念佛章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選釈集十六章之図」の標章

第十 來迎化佛唯讚念佛章

二 『選釈本願念仏集』の篇目

彌陀化佛來迎不_レ讚_二歎聞經之善_一唯讚_二歎念佛之行_一之文

（彌陀化佛の來迎、聞經の善を讚歎せず、唯念佛の行を讚歎したまうの文）

* この章は、『觀無量壽經』の下品上生に説かれる、種々の惡業を作した凡夫が命終の時に聞經の功德を積み、次に念仏を称えたことにより阿彌陀仏の化仏が來迎するが、それは經典の名を聞く功德よりも、ただ称名念仏の行の功德が大きいことを讚歎することが説かれている。

三 『選釈本願念仏集』の引文

引文は二文で、『觀無量壽經』下品上生の文と『觀經散善義』卷第四の下品上生を解釈する文である。

(一) 『觀無量壽經』下品上生の文

初めに、『觀無量壽經』下品上生の引文^(注1)が説かれるが、そこには、これまで種々の惡業を重ねてきた下品上生の者が命終を迎えた時に、善知識と巡り逢い、その聞經を受け、さらに阿彌陀仏の御名を称えることによる功德によって、生死の罪業が消滅され、さらに阿彌陀三尊の化仏の來迎が得られるということが述べられている。

觀無量壽經云或有_二衆生_一作_二衆惡業_一雖_レ不_レ誹_二謗方等經典_一如_レ此愚人多造_二衆惡_一無_レ有_二慚愧_一命欲_レ終時遇_二善

知識爲讃_二大乘十二部經首題名字_一以_レ聞_二如是諸經名_一故除_二卻千劫極重惡業_一智者復教合掌叉手稱_二南無阿彌陀佛_一稱_二佛名_一故除_二五十億劫生死之罪_一爾時彼佛即遣_二化佛化觀世音化大勢至_一至_二行者前_一讃言善男子汝稱_二佛名_一故諸罪消滅我來迎_レ汝

(觀無量壽經に云わく、あるいは衆生有りて、衆の惡業を作りて。方等經典を誹謗せずといえども、かくの如き愚人、多く衆惡を造りて、慚愧有ること無し。命終わらんと欲する時、善知識の、爲に大乘十二部經の首題名字を讃ずるに遇えり。かくの如くの諸經の名を聞くを以つての故に、千劫の極重の惡業を除卻す。智者また教えて、合掌叉手して、南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するが故に、五十億劫生死の罪を除く。その時、彼の佛、即ち化佛、化觀世音、化大勢至を遣わし、行者の前に至らしめ、讃じて言わく。善男子。汝、佛名を稱するが故に、諸罪消滅すれば、我れ來りて汝を迎うと。)

* 右の引文は『觀無量壽經』下品上生の文の前半部分の引用であり、その全文は、次の通りである。

佛告_二阿難及韋提希_一下品上生者或有_二衆生_一作_二衆惡業_一雖_レ不_レ誹謗方等經典_二如_レ此愚人多造_二衆惡_一無_レ有_二慚愧_一命欲_レ終時遇_レ善知識爲_中讃大乘十二部經首題名字_上以_レ聞_二如是諸經名_一故除_二卻千劫極重惡業_一智者復教合掌叉手稱_二南無阿彌陀佛_一稱_二佛名_一故除_二五十億劫生死之罪_一爾時彼佛即遣_二化佛化觀世音化大勢至_一至_二至_二行者前_一讃言善男子汝稱_二佛名_一故諸罪消滅我來迎_レ汝作_二是語_一已行者即見_二化佛光明徧_二滿其室_一見已歡喜即便命終乘_二寶蓮華_一隨_二化佛後_一生_二寶池中_一經_二七七_一日_一蓮華乃敷當_二華敷時_一大悲觀世音菩薩及大勢至放_二大光明_一住_二其人前_一爲說_二甚深十二部經_一聞已信解發_二無上道心_一經_二十小劫_一具_二百法明門_一得_レ入_二初地_一是名_二下品上生者_一得_下聞_二佛名法名_一及聞_中僧名_上聞_二三寶名_一即得_二往生_一

(佛、阿難及び韋提希に告げたまわく。下品上生の者とは、或いは衆生ありて、衆もろの惡業を作る。方等經典を誹謗せずといえども、かくの如き愚人、多く衆惡を造りて慚愧あることなし。

命、終わらんと欲する時、善知識の、爲に大乘十二部經^(注2)の首題の名字を讃ずるに遇えり。かくのご

とき諸經の名を聞くを以つての故に、千劫の極重の惡業を除卻す。

智者また教えて、合掌叉手して南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するが故に、五十億劫生死の罪を除く。

その時、彼の佛、即ち化佛、化觀世音、化大勢至を遣わして、行者の前に至らしめて、讃じて言わく。善男子。汝、佛名を稱するが故に、諸罪消滅せり。我れ來りて汝を迎うと。

この語を作し已りたまうに、行者、即ち化佛の光明の其の室に徧滿するを見る。見已りて歡喜して即ち命終す。寶蓮華に乗じて、化佛の後に隨いて、寶池の中に生ず。七七日を経て、蓮華すなわち敷く。華の敷く時に當りて、大悲觀世音菩薩及び大勢至、大光明を放つて其の人の前に住して、爲に甚深の十二部經を説きたまう。聞き已りて信解して、無上道心を發こし、十小劫を経て百法明門を具して初地に入ることを得。是れを下品上生の者と名づく。佛名、法名を聞き、及び僧名を聞くことを得、三寶の名を聞きて即ち往生を得。

この『觀無量壽經』下品上生の引用は、大乘經典を謗ることをしないまでも、種々の惡業を重ね、その罪惡の深さを悔いることもしない愚かな者のことであるが、この者が命終の時に、仏法を説く善知識に巡り逢い、大乘十二部の教典の經題を讃える教えを受けることができたので、この者は一千劫もの長い間に犯した極重の罪業を取り除くことができたのである。

そして、その善知識がさらに教えるに、合掌叉手させ、南無阿彌陀仏と称えさせたのである。その念仏を称えた功德によつて、この者の五十億劫に亘る生死の罪業を取り除くことができたのである。

この念仏を称えたことにより、阿彌陀仏は、化仏、化觀世音菩薩、化大勢至菩薩をこの者の前に遣わして來迎してほめ讃え、

「善男子、汝は念仏を称えたことによつて諸罪が消滅したのである。そこで我々がここに来て、汝を迎え

たまうのである。」

と説かれたのである。

この言葉を聞き終わった念仏の行者は、その室に化仏の光明が偏満するのを見、その光明を見終わると歓喜して命が尽きたのである。そして、宝蓮華に乗り、化仏の後に随って、宝池の中に往生したのである。七七四十九日が経って、蓮華が敷いたのである。その華の敷く時にあたって、慈悲深い觀世音菩薩や大勢至菩薩が多大な光明を放って、その人の前にお出でになり、その人の為に意義深い大乘十二部經を説き給わったのである。その人は聞き終わって心から感動してその教理を信じ、無上の道心を発こし、十小劫で百法明門を身につけ、初地の境地に入ることができたのである。これを下品上生の者と名づけるのである。仏名、法名を聞き、さらに僧名を聞くことを得て、三宝の名を聞いて往生を得たのである。と説かれている。

(二) 『觀經疏』下品上生の文

次に、右の『觀無量壽經』下品上生の文について、善導が『觀經散善義』卷第四に、その内容を九つに区分して注釈を加えている。

同經疏云所「聞化讚但述」稱佛之功「我來迎」汝不「論」聞經之事「然望」佛願意「者唯勸」正念稱「名往生義疾不」同「雜散之業」如「此經及諸部中」處處廣歎勸令「稱」名將爲「要益」也應「知」

(同經の疏に云わく、聞く所の化讚、ただ稱佛の功を述べて、我れ來りて汝を迎うといいて、聞經の事を論ぜず。然るに佛の願と意に望むれば、ただ正念に名を稱することを勸む。往生の義疾きこと、雜散の業に同じからず。この經及び諸部の中の如き、處處に廣歎して、勸めて名を稱せ令むるを、將に要益とす。應に知るべし。)

＊ 善導は、右の『觀經散善義』の下品上生の引文^(注3)を九つの文に分けて分析し、解釈をしている。

この文は引文にも私釈段（次項）にも引用されているので、その内容を次にあげ、全体の概要をとらえるとともに、その位置付けを確認する。

次就_二下品上生位中_一亦先舉次辨後結即有_二其九_一一從_二佛告阿難_一已下正明_二告命_一二從_二下品上生者_一正明_二辨_二定其位_一即是造_二十惡_一輕罪凡夫人也三從_二或有衆生_一下至_二無有慚愧_一已來正明_二第五門中簡機舉_二出一生已來造惡輕重之相_一即有_二其五_一一明_二總舉_一造惡之機二明_二造_一作衆惡三明_二雖_一作衆罪於_二諸大乘_一不_レ生_中誹謗_上四明_下重牒_二造惡之人_一非_中智者之類_上也五明_下此等愚人雖_レ造衆罪總不_レ生_中愧心_上四從_二命欲終時_一下至_二生死之罪_一已來正明_二造惡人等臨終遇_一善聞_レ法即有_二其六_一一明_二命延不_レ久_一二明_二忽遇_一往生善知識三明_二善人爲讚_一衆經四明_二已聞經功力除_一罪千劫五明_二智者轉教_一稱_二念彌陀之號_一六明_下以_レ稱_二彌陀名_一故除_レ罪五百萬劫_上問曰何故聞_レ經十二部但除_レ罪千劫稱_レ佛一聲即除_レ罪五百萬劫者何意也答曰造罪之人障重加以_二死苦來逼_一善人雖_レ說_二多經_一貪受之心浮散由_二心散_一故除_レ罪稍輕又佛名是一即能攝_レ散以住心復教令_二正念稱_レ名由_二心重_一故即能除_レ罪多劫也五從_二爾時彼佛_一下至_二生寶池中_一已來正明_二第九門中終時化衆來迎去時遲疾_一即有_二其六_一一明_二行者正稱_一名時彼彌陀即遣_二化衆應_一聲來現二明_二化衆既已身現即同讚_一行人三明_下所聞化讚但述_二稱佛之功_一我來迎汝不_レ論_中聞經之事_上然望_二佛願意_一者唯勸_二正念稱_一名往生義疾不_レ同_二雜散之業_一如_二此經及諸部中_一處處廣歎勸令_レ稱_二名將爲_一要益也應_レ知四明_下既蒙_二化衆告_一及即見_中光明徧_上室五明_下既蒙_二光照_一報命尋終_上六明_二乘_一華從_二佛生_一寶池中六從_二經七日_一已下正明_二第十門中到_一彼華開遲疾不同七從_二當華敷時_一下至_二得入初地_一已來正明_二第十一門中華開已後得益有_レ異即有_二其五_一一明_二觀音等先放_一神光二明_二身赴_一行者寶華之側三明_二爲說_一前生所聞之教四明_二行者聞已領解發心_一五明_二遠逕_一多劫_一證_中臨百法之位_上也八從_二是名_一已下總結九從_二得聞佛名_一已下重舉_二行者之益_一非_二但念佛獨得_一往生_二法僧通念亦得_一去也上來雖_レ有_二九句不同_一廣解_二下品上生_一竟

（次に下品上生の位の中に就いて、また先ず舉し、次に辨じ、後に結す。即ち其の九有り。

一に、「佛、阿難に告げたまわく」從り已下は、正しく告命を明かす。

二に、「下品上生の者」從りは、正しく其の位を辯定することを明かす。即ち是れ十惡を造れる輕罪の凡夫人なり。

三に、「或るいは衆生有りて」從り下「慚愧の有ること無し」に至る已來は、正しく第五門の中の簡機に、一生已來の造惡の輕重の相を舉出することを明かす。即ち其の五有り。

一に、總じて造惡の機を擧ぐることを明かす。

二に、衆惡を造作することを明かす。

三に、衆罪を作ると雖も、諸もろの大乘に於いて誹謗を生ぜざることを明かす。

四に、重ねて造惡の人を牒して智者の類に非ざることを明かす。

五に、此等の愚人は衆罪を造ると雖も、總べて愧心を生ぜざることを明かす。

四に、「命の終らんと欲する時」從り下「生死の罪」に至る已來は、正しく造惡の人等は臨終に善に遇い、法を聞くことを明かす。即ち其の六有り。

一に、命延の久しからざることを明かす。

二に、忽ちに往生の善知識に遇うことを明かす。

三に、善人は爲に衆經を讚ずることを明かす。

四に、已に聞經の功力は罪を除くこと千劫なることを明かす。

五に、智者は轉教し、彌陀の號を稱念せしむることを明かす。

六に、彌陀の名を稱するを以つての故に、罪を除くこと五百萬劫なることを明かす。

②問うて曰わく。何が故ぞ、經を聞くこと十二部なるに、ただ罪を除くこと千劫にして、佛を稱すること一聲なるに、即ち罪を除くこと五百萬劫なるは、何の意ぞや。

答えて曰わく。造罪の人は障り重く、加うるに死苦の來逼するを以つて、善人の多經を説くと雖も、飡受の心は浮散す。心の散ずるに由るが故に、罪を除くことやや輕し。また佛名は是れ一なれば、即ち能く散を攝して、以つて心を住せしむ。また敎えて正念に名を稱せしむれば、心の重きに由るが故に、即ち能く罪を除くこと多劫なり。

五に、「爾の時、彼の佛は」從り下「寶池の中に生ず」に至る已來は、正しく第九門の中の終時に、化衆の來迎し給うと、去る時の遲疾とを明かす。即ち其の六有り。

一に、行者の正しく名を稱する時、彼の彌陀は、即ち化衆をして聲に應じて來現せしめ給うことを明かす。

二に、化衆は既に身を現じ、即ち同じく行人を讃ずることを明かす。

三に、^①聞く所の化讃は、ただ稱佛の功を述べ、我れは來つて汝を迎うといい、聞經の事を論ぜざることを明かす。然るに佛の願意に望むれば、ただ正念に名を稱することを勸む。往生の義の疾きことは、雜散の業に同じからず。此の經及び諸部の中の如きは、處處に廣く歎じ、勸めて名を稱せしむるを以つて要益と爲す。應に知るべし。

四に、既に化衆の告を蒙り、及び即ち光明の室に徧ずるを見ることを明かす。

五に、既に光照を蒙り、報命は尋ち終ることを明かす。

六に、華に乗じ、佛に從つて寶池の中に生ずることを明かす。

六に、「七日を経て」從り已下は、正しく第十門の中のかしこに到り、華の開く遲疾の不同を明かす。

七に、「華の敷らく時に當り」從り下「初地に入ることを得る」に至る已來は、正しく第十一門の中の華の開く已後の得益に異り有ることを明かす。即ち其の五有り。

一に、觀音等は先ず神光を放つことを明かす。

二に、身は行者の寶華の側に赴き給うことを明かす。

三に、爲に前生に聞く所の教を説くことを明かす。

四に、行者は聞き已りて領解し、發心することを明かす。

五に、遠く多劫を逕て、百法の位に證臨することを明かす。

八に、「是れを名づく」従り已下は、總じて結す。

九に、「佛名を聞くを得て」より已下は、重ねて行者の益を擧ぐ。ただ念佛のみ獨り往生を得るに非ずして、法僧を通念するもまた去ることを得る。

上來、九句の不同有りと雖も、廣く下品上生を解し竟んぬ。）
となっている。

この善導の『觀經散善義』の下品上生の文から引用される文は、右の①~~~~~線部分である。
つまり、下品上生の五番目の「命終時の化衆の來迎と去る時の遲疾」が述べられる六つの根拠を明かす所の三番目の箇所である。

一、正しく称念する時、仏はその声に応じて來現すること。

二、化衆が身を現し、行人を讚歎すること。

三、念仏を称えた功德によって來迎したが、化仏が讚歎するのは、念仏の功德であつて聞經の功德ではないこと。また、仏の御意は眞実の心をもつて念仏を称えれば、本願に乗じて往生できると勧めていること。

そして、速やかに往生するための念仏の功德は、他の雜行と異なり勝れていること。

さらに、この『觀無量壽經』を初め、多くの經典に広く念仏の功德が説かれ、念仏が讚歎され、最も肝要な法門であることが説かれていること。

四、化仏の言葉が終わると同時に、部屋中に化仏が放つ光明によって満たされていること。

五、光明をみて喜び、命を終えること。

六、命を終え、宝蓮華に乗って化仏に随い、極楽浄土の宝池に往生すること。

のように、三（太字部分）の、化仏が来迎するのは、念仏を称えた功德によるもので、念仏に勝るものが無いことが強調されているのである。

四 『選択本願念仏集』の私釈

『観経疏』の引文によって、化仏が讃歎するのは念仏の功德であり聞経の功德ではないことを知ることができたが、なぜそのように違いがあるのか、この私釈段ではさらに称仏の功德が勝ることが説かれる。

私云聞経之善非_レ是本願_レ 雑業故化佛不_レ 讃念佛之行是本願正業故化佛讃歎加之聞経與_レ 念佛_レ 滅罪多少不_レ 同也
観経疏云問曰何故聞経十二部但除_レ 罪千劫稱佛一聲即除_レ 罪五百万劫者何意也答曰造罪之人障重加以_レ 死苦來
逼_レ 善人雖_レ 説_レ 多經_レ 飡受之心浮散由_レ 心散_レ 故除_レ 罪稍輕又佛名是一即能攝_レ 散以住_レ 心復教令_レ 正念稱_レ 名由_レ 心
重_レ 故即能除_レ 罪多劫也

（私に云わく。聞経の善は、是れ本願に非ず。雑業なるが故に、化佛讃ぜず。

念佛の行は、是れ本願の正業なるが故に、化佛讃歎す。

しかのみならず聞経と念佛と、滅罪の多少同じからず。

観経の疏に云わく。問うて曰わく、何が故ぞ聞経は十二部、但し罪を除くこと千劫。稱佛は一聲、即ち罪を除くこと五百万劫なるは、何の意ぞや。

答えて曰わく、造罪の人障り重く、加うるに死苦來逼を以つてす。善人多経を説くと雖も、飡受の心浮散す。心散ずるに由るが故に、罪を除くこと稍輕し。また佛名は是れ一なり。即ち能く散を攝して以つて心

を住せしむ。また教えて正念に名を稱せ令む。心重きに由るが故に、即ち能く罪を除くこと多劫なり。）私釈段に引かれる文は、前項の『觀經散善義』と同じように、下品上生の文の第四番目、その第六項目の所で、前項にあげた、②——線部分にあたり、次のように述べられる。

問曰何故聞經十二部但除罪千劫稱佛一聲即除罪五百萬劫者何意也

答曰造罪之人障重加以死苦來逼善人雖說多經飡受之心浮散由心散故除罪稍輕又佛名是一即能攝散以住心復教令正念稱名由心重故即能除罪多劫也

（問て曰わく、何が故ぞ聞經は十二部、但し罪を除くこと千劫。稱佛は一聲、即ち罪を除くこと五百万劫なるは、何の意ぞや。

答えて曰わく、造罪の人障り重く、加うるに死苦來逼を以つてす。善人多經を説くと雖も、飡受の心、浮散す。心散ずるに由るが故に、罪を除くこと稍輕し。また佛名は是れ一なり。即ち能く散を攝して以つて心を住せしむ。また教えて正念に名を稱せ令む。心重きに由るが故に、即ち能く罪を除くこと多劫なり。）

のように、どうして聞經は十二部もあるのに罪業を除くのが千劫で、稱仏は一声であるにもかかわらず、五百万劫の間の罪が消えるのだという問いに対して、下品上生の造罪の凡人は、惡業の障りが重く、その上、臨終の死苦が迫って一層激しい苦難に責められている時、善知識が十二部經という多くの經題を説いても、心が錯乱していてその教えを受け入れられる状態ではなかったので、千劫に限られたのである。

それに対して仏名は、わずか一声にすぎなかったが、錯乱する心をしずめて専心して念仏を稱えることができたため、經題を聞いた功德よりも遙かに大きな功德を得ることができ、五百万劫の間の罪業が取り除かれるのである。

つまり、聞經は聞くだけであるが、念仏は心を正念にして稱名を行じたので、その念仏する心は重い

で、罪業を除くことも多く、多劫に亘るということであると説かれている。

このように、第十章に引かれる引文も私釈段も、善導の『観経疏』の下品上生の文に着目し、称仏の功德の勝れていることが説示されていることを知ることができるのである。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第十 來迎化佛唯讚念佛章)の絵相

次頁のように、高田敬輔「選択集十六章之図」(第十 來迎化佛唯讚念佛章)の絵相は、如意を持った出家者の前で、生死の罪業をもつ在家者が聞經を受けているところである。

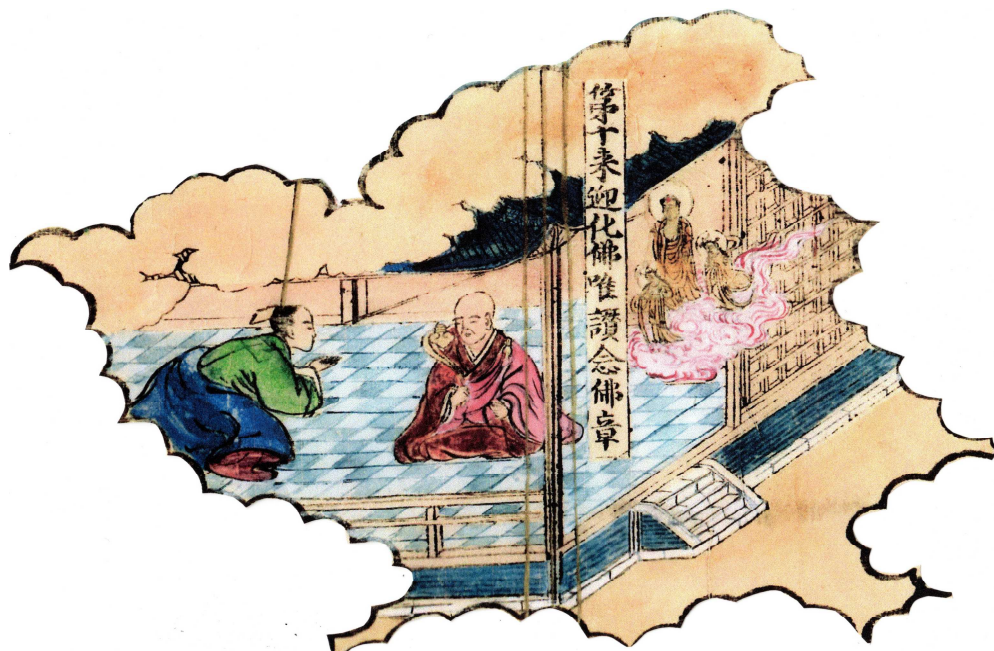
そして、聞經の後に、さらに善知識が教えるに、合掌叉手させ、正念による阿弥陀仏の仏名を称えさせたのである。

その阿弥陀仏の仏名を一声称えた功德によって、この在家者の五百万劫の生死の罪業が取り除かれるのである。その合掌称念する在家者の頭部には、第七章の絵相の阿弥陀仏からの撰取不捨の光明が、降り注いでいるのである。

そして、出家者の背後には、紫雲に乗った阿弥陀三尊の化仏が來迎しているのである。

なぜなら、聞經は本願ではなく、雑業であるから化仏が讚歎しないのである。

まさに、下品上生の造罪の凡人が、善知識に逢い、十二部經の聞經を受けるものの、さらに正念による称仏の功德を得ることにより、化仏が來迎して讚歎している様相が象徴的に表現されているのである。



《絵相の部分構成》

- * 標章……第十 来迎化佛唯讃念佛章
- * 出家者……如意を持ち、称仏の功德の勝れていることを説く。
- * 在家者……称仏の功德の勝れていることの説示を受け、合掌称念し、五百万劫生死の罪業が除かれ、化仏の来迎を得る。
- * 来迎……阿弥陀三尊の化仏が紫雲に乗り、来迎している。
- * 光明……阿弥陀からの光明が、在家者の頭部に降り注ぐ。

六 まとめ

以上、高田敬輔の描く「選択集十六章之図」の（第十 來迎化佛唯讚念佛章）の絵相の考察から、次のようなことを知ることができる。

① 高田敬輔が描く第十章來迎化佛唯讚念佛章の絵相は、下品上生の造罪の凡夫が、善知識に逢い、十二部經の聞經を受けるものの、さらに正念による称仏の功德を得ることにより、化仏が來迎して讚歎し、往生を得る場面が表現されていること。

② 標章に強調されているように、化仏が來迎して讚歎するのは、念仏の行は阿弥陀仏の本願の正業であるからであり、聞經は本願ではなく雑業であることによることを描いた絵相であること。

③ 引文にも私釈にも、ともに善導の『觀經散善義』下品上生の文が引かれ、聞經より称仏の功德が多劫の罪業を除却させ、來迎して往生を得るという理論的な裏付けとして、絵相表現の背景にあること。

(注2)(注1)

『観無量寿経』（浄土宗全書第一卷四九頁）

『新纂浄土宗大辞典』六八〇頁【十二分教】浄土宗 平成二十八年刊

① 契かいき経きょう：教えを散文でまとめたもの。

② 応頌：①の散文を韻文で重ねて説くもの。

③ 記別：問答形式のもの。

④ 諷頌：教えを韻文でまとめたもの。

⑤ 自説：釈尊が自ら説法をはじめた形式のもの。

⑥ 本事：如是語「このように世尊によって説かれた」とはじまる形式のもの。

⑦ 本ほん生じょう：釈尊の前世の善行の物語。

⑧ 方広：智恵と喜びを得ながらの問答。

⑨ 希法：ブツダや仏弟子の奇跡の功德をまとめたもの。

⑩ 因縁：諸経の因縁を説くもの。

⑪ 譬喩：譬え話となるべき過去の物語。

⑫ 論議：経法の説明解釈という三つの分類を加えたもの。

(注3)

『観経散善義』巻第四【下品上生の引文】（『観経疏』（浄土宗全書第二卷六七頁）

第十一項 「第十一 約對雜善讚歎念佛章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第十一 約對雜善讚歎念佛章

二 『選択本願念仏集』の篇目

約「對雜善」讚歎念佛之文

（雜善に約對して念佛を讚歎するの文）

* 前章では、阿弥陀仏が化仏として念仏の行者の前に來迎し、聞經よりも称仏は本願にかなうものであり、その功德は何にもまして勝れていると讚歎し、往生を得ることが説かれたが、今章では、釈尊が、本願念仏を称えた者を人中の白蓮華に譬えて最勝の人と讚歎するのに対して、念仏以外の様々な善根を修する者は讚歎しないことを『觀無量壽經』及び『觀經散善義』からの引文によって明かされる章である。

三 『選択本願念仏集』の引文

今章で引かれる引文は、『觀無量壽經』の流通文^(注1)と、それを注釈した善導の『觀經疏』である。

(一) 『觀無量壽經』流通文

まず初めに、『觀無量壽經』の引文である。

觀無量壽經云若念佛者當知此人是人中芬陀利華觀世音菩薩大勢至菩薩爲其勝友當坐道場生諸佛家
(觀無量壽經に云わく、若し念佛せん者は、當に知るべし此の人は是れ人中の芬陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩、其の勝友と爲る。當に道場に坐すを以って諸佛の家に生ずべし。)

* この引用文は、『観無量寿経』の流通文であり、本経の結語でもある。

ここでは、阿難が釈尊に、今説かれた御経にどのような題を付けたらよいか尋ねたところ、「極楽国土及び無量寿仏、観世音菩薩、大勢至菩薩を觀する經」と名付け、また「業障を淨除し、諸仏の前に生ずる經」と名付けよと仰せられたのである。そして、阿難にこの經を受持し、亡失することが無いようにつとめること。さらに、この觀仏三昧を修する者は、現身に阿弥陀仏や觀世音、大勢至を見仏することができること。また、もし善男子、善女人があつて、仏の御名や觀世音、大勢至の二菩薩の御名を聞くだけでも無量劫の生死の罪障を除くことができるのでありと説かれる部分である。

この次に説かれる文は、念仏を行ずる者を芬陀利華（白蓮華）に譬える部分である。

若念佛者當知此人是人中芬陀利華觀世音菩薩大勢至菩薩爲其勝友當坐道場生諸佛家

（もし念佛せん者は、當に知るべし。この人はこれ人中の芬陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩、その勝友と爲る。當に道場に坐すを以て諸佛の家に生ずべし。）

ここでは、もし念仏する者があれば、この人は人間の中でも泥中に咲く芬陀利華のように清らかで誇り高き勝れた存在であること。しかも觀世音菩薩と大勢至菩薩が常に影護し、親しく道友として、その心身を護り、さらに仏のさとりが得られる道場でもあり、諸仏の家である極樂浄土に往生することができるのであることが述べられている。

そして、最後のまとめの文は、

佛告阿難汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名佛說此語時尊者目犍連阿難及韋提希等聞佛所說皆大歡喜

爾時世尊足步虚空還者闍崛山爾時阿難廣爲大衆說如上事無量諸天及龍夜叉聞佛所說皆大歡喜禮佛而退

（佛、阿難に告げたまわく。汝、好く是の語を持せよ、是の語を持せよとは、即ち無量壽佛の名を持せよとなりと。

佛、この語を説きたまう時、尊者目犍連、阿難及び韋提希等、佛の所説を聞きたてまつりて、皆、大いに歡喜す。

爾の時、世尊、足、虚空を歩みて、耆闍崛山に還りたまう。爾の時、阿難、廣く大衆の爲に、上の如き事を説く。無量の諸天及び龍、夜叉、佛の所説を聞きたてまつりて、皆、大いに歡喜して、佛を禮したてまつりて退きぬ。）

のようになり、『觀無量壽經』の最終章の説示は、釈尊が阿難に【無量壽仏の御名をたもて】と阿弥陀仏の御名を保ち、これまで定善散善の兩門を説いてきたが、阿弥陀仏の本意は、本願による称名念仏往生の法門だけであるので、これを末代まで流通させることを委嘱して終わるのである。

（二）『觀經疏』の念仏三昧の功德

次に、善導の『觀經散善義』卷第四^{（注2）}には、次のように説かれている。

同經疏云從^二若念佛者^一下至^三生諸佛家^二已來正顯念佛三昧功能超絕實非^三雜善得^レ爲^二比類^一即有^二其五^一一明^三專念^二彌陀佛名^一二明^三指^二讚能念之人^一三明^下若能相續念佛者此人甚爲^二希有^一更無^三物可^レ以方^レ之故引^二分陀利^一爲^上喻言^二分陀利^一者名^二人中好華^一亦名^二希有華^一亦名^二人中上上華^一亦名^二人中妙好華^一此華相傳名^二蔡華^一是若念佛者即是人中好人人中妙好人人中上上人人中希有人人中最勝人也四明^下專念^二彌陀名^一者即觀音勢至常隨影護亦如^中親友知識^上五明^下今生既蒙^二此益^一捨^レ命即入^二諸佛之家^一即淨土是也到^レ彼長時間^レ法歷事供養因圓果滿道場之座豈^上賒^上

（同經の疏に云わく、若念佛者、より下^{しも}、生諸佛家に至る已來は、正しく念佛三昧の功能超絶して、實に雜

善をもつて比類と爲すことを得るに非ざることを顯す。即ちその五有り。

一には、専ら彌陀佛の名を念ずることを明かし。

二には、能念の人を指讚することを明し。

三には、もし能く相續して念佛する者は、この人、甚だ希有なりとす。更に物の以つて之に方ぶ可き無し、故に分陀利を引きて喩えと爲すことを明す。分陀利と言うは、人中好華と名づけ、また希有華と名づけ、また人中上上華と名づけ、また人中妙好華と名づく。この華相傳う、蔡華と名づくる是なりと。もし念佛する者は、即ちこれ人中の好人、人中の妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の最勝人なり。

四には、専ら彌陀の名を念ずる者は、即ち觀音勢至、常に隨いて影護したまう。また親友知識の如くなることを明す。

五には、今生、既に此の益を蒙る、命を捨てて即ち諸佛の家に入る。即ち淨土これなり。彼に到れば長時に法を聞き、歷事供養して。因圓にして果滿ず。道場の座は豈に餘ならんやということを明す。

＊ この『觀經散善義』の文は、念仏三昧のもたらす功德が他の雜善と比べられないほど勝れていることを五項目に亘つて説かれている。

その一つは、専ら阿弥陀仏の名を称えることを明かすこと。

二つ目は、能く念仏をする人を誉め讃えることを明かすこと。

三番目に、もし生涯を通して繼續して念仏を称える人は、甚だ希なことであり、他のものと比べるものがないほど勝れていることである。だから、ここでは分陀利（白蓮華）の譬えを引いて明らかにする。

分陀利というのは、泥中に清浄な華を咲かせる白蓮華のように尊い人である。白蓮華はこの世の中において好華であり、希有な華であり、上上の華であり、妙好の華であり、この華は言い伝えによる

と蔡さいけ華(注3)と名付けられ、蔡とは靈龜の号で、この龜が千歳にして蓮華の上に遊ぶといわれる尊い希有な蓮華のことで、念仏を称える人を讃歎する言葉である。

だから、念仏を称える人は、この世において、好人であり、妙好人であり、上上人であり、希有人であり、最勝人なのである。

四番目に、専ら阿弥陀仏の御名を念ずる人は、觀世音、大勢至両菩薩が常に影の形に随うように寄り添って護り、念仏行者の親友となり善知識として指針を与えてくれることを明かすこと。

五番目には、現生ですでにこのような多大な利益を蒙っているから、命終の時は諸仏の家ともいえる極樂浄土にすぐに往生することができるのである。その極樂浄土では、常に諸仏の説く教えや仏法を聞き、諸仏を歴訪して供養することによつて、やがて成仏の因果が満ち、無上の悟りを開き、仏となるのである。まさに、この道場の場合、どうして遙かなものであろうか、いや、念仏行者にとつてはそうではないということを明かすこと。

というように、念仏三昧の五つの勝れた功德が説かれるのである。

四 『選択本願念仏集』の私釋

私釈段は、初めに念仏の功德を五種の嘉誉で説き、次になぜ念仏を下下品で説くのか、『往生要集』及び弘法大師の『二教論』が引用されて勝れた行であることが明かされ、さらに念仏三昧は王三昧であること、そして念仏には現当二世始終の両益があることが、順次説かれていくのである。

(一) 念仏の功德、五種の嘉誉

まず初めに、念仏の功德が五種の嘉誉の譬えによつて説かれる。

私問曰經云「若念佛者當知此人等」唯約「念佛者」而讚「歎之」釋家有「何意」云實非「雜善得」爲「比類」相「對雜善」

獨歎念佛乎答曰文中雖隱義意是明所以知者此經既說定散諸善并念佛行而於其中獨標念佛喻分陀利非待雜善云何能顯念佛功超餘善諸行然則念佛者即是人中好人者是待惡而所美也言人中妙好人者是待羸惡而所稱也言人中上上人者是待下下而所讚也言人中希有人者是待常有而所歎也言人中最勝人者是待最劣而所褒也

(私に問うて曰わく、經に「若念佛者、當知此人等」と云うは、唯念佛の者に約して、これを讚歎す。

釋家何の意有りて、實に雜善をもつて比類と爲すことを得るに非ずと云いて、雜善に相對して、獨り念佛を歎ずるや。

答えて曰わく、文の中に隠れたりと雖も、義意は明かなり。知る所以は、此の經既に定散の諸善、并びに念佛の行を説く。而るに其の中に於いて、獨り念佛を標して分陀利に喩う。雜善に待するに非ずば、いかんぞ能く念佛の功の餘善の諸行に超えたることを顯さん。然れば則ち念佛する者は、即ちこれ人中の好人とは、これ惡に待して美る所なり。人中の妙好人と言うは、これ羸惡に待して稱する所なり。人中の上上人と言うは、是れ下下に待して讚ずる所なり。人中の希有人と言うは、これ常有に待して歎ずる所なり。人中の最勝人と言うは、これ最劣に待して褒ずる所なり。)

* ここでは念仏と雜行を比較して、その根拠が説かれるのである。

『觀無量壽經』に、「もし念仏せん者は、まさに知るべし。此の人等」というのは、ただ念仏を行ずる者のみについて讚歎されるのに、どうして善導は、「実に雜善をもつて比類となすことを得るに非ず」といつて、ことさら雜善に相對して、念仏だけを讃えているのだろうか、と法然は自らに問いかけている。それに対して、このことは經文に表れないけれども、その意味は暗に読み取ることができるのである。なぜならば、『觀無量壽經』には広く定善十三觀、散善三觀の諸々の善行と念仏の行が取りあげられているが、經の結びの流通分のところで、ひとり念仏を行ずる者だけを取り上げて、華の中の王たる分陀利

華に譬えられたのである。

つまり、様々な定散諸行と相對してみなければ、念仏の功德が他のものより遙かに勝れていることをあらわすことが難しいのである。

だから、善導は、念仏する者に、次のような五種の讃辭【五種の嘉^か譽^よ】を与え、誉め讃えている。

一に、人間の中の好人と言われたのは、雜行等の劣惡な行をする劣る者に対して誉め讃えたのである。

次に、人間の中の妙好人と言われたのは、雜行の麤惡な行を修する者に対して稱讃したものである。

三に、人間の中の上上人と言われたのは、下下の雜行を修する者に対して贊美したものである。

四に、人間の中の希有人と言われたのは、種々の雜行を修しているありふれた者に対して讃歎したものである。

五に、人間の中の最勝人と言われたのは、往生行として最劣な行を修している者に対して褒めたものである。

このように五種の嘉譽が説かれ、「惡に待して美^{ほむ}る所なり」「麤惡に待して稱する所なり」「下下に待して讃ずる所なり」「常有に待して歎ずる所なり」「最劣に待して褒ずる所なり」とあり、念仏の功德が説かれるのである。

(二) 下品下生に説かれる念仏

次に、下下品に至って念仏が説かれることについて『往生要集』と『二教論』が引かれて説かれている。

問曰既以^二念佛^一名^二上上^一者何故不^レ説^二於上上品中^一至^二下下品^一而説^二念佛^一乎答曰豈前不^レ云念佛之行廣互^二九品^一即前所^レ引往生要集云^下隨^二其勝劣^一應^レ分^二九品^一是也加之下品下生是五逆重罪之人也而能除^二滅逆罪^一餘行所^レ不堪唯有^二念佛之力^一堪^二能滅^二於重罪^一故爲^二極惡最下之人^一而説^二極善最上之法^一例如^下彼無明淵源之病非^二中道

府藏之藥_一即不_レ能_レ治今此五逆重病淵源亦此念佛靈藥府藏非_二此藥_一者何治_二此病_一故弘法大師_二教論引_二六波羅蜜經_一云第三法寶者所謂過去無量諸佛所說正法及我今所說所謂八萬四千諸妙法蘊乃至調_二伏純熟有緣衆生_一而令_下阿難陀等諸大弟子一聞_二於耳_一皆悉憶持_上攝爲_二五分_一一素咀纒_二毗奈耶三阿毗達磨四般若波羅蜜多五陀羅尼門此五種藏教_二化有情_一隨_レ所應_レ度而爲說_レ之若彼有情樂_下處_二山林_一常居_二閑寂_一修_中靜慮_上者而爲_レ彼說_二素咀纒藏_一若彼有情樂_中習_二威儀_一護_二持正法_一一味和合令_レ得_二久住_一而爲_レ彼說_二毗奈耶藏_一若彼有情樂_中說_二正法_一分別性相_二循環研覈究_中竟甚深_上而爲_レ彼說_二阿毘達磨藏_一若彼有情樂_下習_二大乘眞實智慧_一離_中於我法執著分別_上而爲_レ彼說_二般若波羅蜜多藏_一若彼有情不_レ能_レ受_二持契經調伏對法般若_一或復有情造_二諸惡業四重八重五無間罪謗方等經一闡提等種種重罪_一使_下得_二銷滅_一速疾解脫頓悟_中涅槃_上而爲_レ彼說_二諸陀羅尼藏_一此五法藏譬如_二乳酪生酥熟酥及妙醍醐契經如_レ乳調伏如_レ酪對法教者如_二彼生酥_一大乘般若猶如_二熟酥_一總持門者譬如_二醍醐_一醍醐之味乳酪酥中微妙第一能除_二諸病_一令_二諸有情身心安樂_一總持門者契經等中最爲_二第一_一能除_二重罪_一令_下諸衆生解_二脫生死_一速證_中涅槃安樂法身_上此中五無間罪者是五逆罪也即非_二醍醐妙藥_一者五無間病甚爲難_レ療念佛亦然往生教中念佛三昧是如_二總持_一亦如_二醍醐_一若非_二念佛三昧醍醐之藥_一者五逆深重病甚爲難_レ治應_レ知

（問うて曰わく、既に念佛を以つて上上と名づけば、何が故ぞ上上品の中に説かずして、下下品に至りて、念佛を説くや。

答えて曰わく、豈に前に云わずや、念佛の行は、廣く九品に亙ると。即ち前に引く所の往生要集に、其の勝劣に随つて、九品を分つべしと云う、是なり。しかのみならず、下品下生は是れ五逆重罪の人なり。しかるに、能く逆罪を除滅すること、餘行の堪えざる所、ただ念佛の力のみ有りて、能く重罪を滅するに堪えたり。故に極惡最下の人の爲に、しかも極善最上の法を説く。例せば彼の無明淵源の病は、中道府藏の藥にあらざれば、即ち治すること能わざるが如し。今、この五逆は、重病の淵源なり。またこの念佛は、靈藥府藏なり。此の藥にあらざれば、何ぞ此の病を治せん。

故に弘法大師の二教論に、六波羅蜜經を引いて云わく。

第三に法寶とは、いわゆる過去無量の諸佛所説の正法と及び我が今の所説となり。いわゆる八萬四千の諸々の妙法蘊みよほうんなり。ないし有縁の衆生を調伏し、純熟す。しかも阿難陀等の、諸大弟子をして、一たび耳に聞きて、皆悉く憶持おくじせしむ。攝して五分となす。

一には素咀纒そたらん、二には毗奈耶びなや、三には阿毗達磨あびだま、四には般若波羅蜜多、五には陀羅尼門だらになり。

この五種の藏ぞうをもつて、有情を教化し、度すべき所に随つて、ために之を説く。

若し彼の有情、山林に處し、常に閑寂げんじやくに居して、靜慮じようりよを修せんと樂ねがう者には、しかも彼が爲に素咀纒藏そたらんぞうを説く。

若し彼の有情、威儀を習い正法を護持し、一味和合して久住くじゆうすることを得せしめんと樂うには、しかも彼が爲に毗奈耶藏びなやぞうを説く。

若し彼の有情、正法を説き性相しやうざうを分別し、循環じゆんかん研覈けんかくして、甚深じんじんを究竟くきやうせんと樂うには、しかも彼が爲に阿毘達磨藏あびだまぞうを説く。

若し彼の有情、大乘眞實の智慧を習いて、我法執がほうしゆうじやく著やくの分別を離れんと樂うには、しかも彼が爲に般若波羅蜜多藏ぼらみつだぞうを説く。

若し彼の有情、契經かいきやうと調伏じやうふくと對法たいほうと般若はんやを受持すること能わず。或いはまた有情ありて諸々の惡業たる四重、八重、五無間罪ごむけんざい、謗方等經ぼうほうとうきやう、一闡提等いつせんたいとうの種々の重罪を造りて、銷滅しやうめつすることを得て、速疾に解脱し、頓とみに涅槃を悟らしめんには、しかも彼が爲に諸々の陀羅尼藏だらにぞうを説く。

此の五法藏は、譬へば、乳、酪、生蘇、熟蘇及び妙醍醐だいごの如し。

契經は乳の如く、調伏は酪の如く、對法教は彼の生酥の如く、大乗般若は猶なほし熟酥の如く。總持門は、譬へば醍醐の如し。醍醐の味は、乳酪酥の中に、微妙第一なり。能く諸病を除きて、諸々の有情をして、身

心安樂ならしむ。總持門は、契經等の中に最も第一とす。能く重罪を除きて、諸々の衆生をして、生死を解脱して、速やかに涅槃安樂の法身を證せしむ。(已上)

此の中の五無間罪とは、是れ五逆罪なり。即ち醍醐の妙藥に非ざれば、五無間の病、はなはだ療し難しとなす。

念佛もまた然なり。往生教の中には、念佛三昧は、是れ總持の如く、また醍醐の如し。若し念佛三昧の醍醐の藥に非ざれば、五逆深重の病、はなはだ治し難しとなす。まさに知るべし。

* ここでは、念仏を上上の最勝の行とするならば、なぜ『觀無量壽經』の上品上生に説かないで、下品上生と下品下生に至ってから称名念仏を説くのかという問いかけである。

この問いかけに対して、このことはすでに第四章の「三輩念仏往生之文」で明らかにしたように、三輩と九品は開合の異であり、念仏の行は広く九品に通ずるのである。

そして、このことは『往生要集』^(注4)に、

問念佛之行於九品中是何品攝答若如説行理當上上如^レ是隨其勝劣應分九品然經所説九品行業是示一端理實無量

(問う。念仏の行は、九品の中に於いて、これいずれの品の摂なるや。

答う。もし説の如く行ぜば、理として上上に当れり。かくの如く、その勝劣に随いて、まさに九品を分かつべし。然れども經に説く所の九品の行業は、これ一端を示せるのみ。理実には無量なり。)

とあって、念仏の行は九種の資質のうち、どの種類に属するののかという問いに対して、説かれているように行ずるとすれば、理論的には上の上に当るのである。だから、このような勝劣に随って九種に分けるべきであるが、經典で説く所の九種の人々の行は、ほんの一部にすぎず、実際には無量なのであると述べられている。

つまり、『無量寿經』の三輩も『觀無量寿經』の九品も念仏が説かれるのであるが、なぜ『觀無量寿經』は下品にだけ念仏が説かれるのかということである。

それは、下品下生の者は、五逆重罪を犯した者であり、この重罪を除滅するには、余行ではとうてい及ばず、阿弥陀仏の本願に誓われた念仏の行だけが可能なのである。だから、極悪最下の者に極善最上の念仏の法を説き示されたのである。

例えを天台の説にとれば、煩惱の根源である無明の病には、最も勝れた法が中道であるごとく、例えば人の体ならば五臓六腑に効くような薬でなければ治すことができないのである。今、この五逆の重罪を犯す病源には、念仏という靈薬でなければ治療がかなわないのである。

このようなことを、弘法大師は『弁頭密二教論』の中の「六波羅蜜經」^(注5)で、次のように引いて説いている。

六波羅蜜經云

法寶自性恒清淨 諸佛世尊如是説

客塵煩惱之所_レ覆 如_二雲能翳日光明_一

無垢法寶衆徳備 常樂我淨悉圓滿

法性清淨云何求 無分別智而能證

第一法寶即是摩訶般若解脫法身。

第二法寶謂戒定智慧諸妙功德。所_レ謂三十七菩提分法。乃至以_レ修_二此法_一而能證_二彼清淨法身_一。

第三法寶者所_レ謂過去無量諸佛所説正法及我今所説。所_レ謂八萬四千諸妙法蘊。乃至調_二伏純_一熟有縁衆生_一。而令_下阿難陀等諸大弟子一聞_二於耳_一皆悉憶持_上。攝爲_二五分_一。

一素咀纚。二毘奈耶。三阿毘達磨。四般若波羅蜜多。五陀羅尼門。此五種藏教_二化有情_一。隨_レ所_レ應_レ

度而爲説_レ之。若彼有情樂_下處_二山林_一常居_二閑寂_一修_レ靜慮_上者。而爲_レ彼説_二素咀纒藏_一。若彼有情樂_下習_二威儀_一護_二持正法_一。一味和合令_レ得_二久住_一。而爲_レ彼説_二毘奈耶藏_一。若彼有情樂_下説_二正法_一分_二別性相_一。循環研覈究_中竟甚深_上。而爲_レ彼説_二阿毘達磨藏_一。若彼有情樂_下習_二大乘眞實智慧_一離_中於我法執著分別_上。而爲_レ彼説_二般若波羅蜜多藏_一。若彼有情不_レ能受_二持契經調伏對法般若_一。或復有情造_二諸惡業四重八重_一五無間罪謗方等經一闡提等種種重罪_一使_レ得_二銷滅_一。速疾解脫頓悟涅槃。而爲_レ彼説_二諸陀羅尼藏_一。此五法藏譬如_二乳酪生蘇熟蘇及妙醍醐_一。契經如_レ乳調伏如_レ酪。對法教者如_二彼生蘇_一。大乘般若猶如_二熟蘇_一。總持門者譬如_二醍醐_一。醍醐之味乳酪蘇中微妙第一。

能除_二諸病_一令_二諸有情身心安樂_一。總持門者契經等中最爲_二第一_一。能除_二重罪_一令_下諸衆生解_二脫生死_一速證_中涅槃安樂法身_上。

復次慈氏我滅度後。令_二阿難陀受_二持所説素咀纒藏_一。其鄔波離受_二持所説毘奈耶藏_一。迦多衍那受_二持所説阿毘達磨藏_一。曼殊室利菩薩受_二持所説大乘般若波羅蜜多_一。其金剛手菩薩受_二持所説甚深微妙諸總持門_一。

喩曰。今依_二斯經文_一。佛以_二五味_一配_二當五藏_一。總持稱_二醍醐_一四味譬_二四藏_一。振旦人師等。爭_二盜醍醐_一各名_二自宗_一。若鑒_二斯經_一則掩耳之智不_レ待_二剖割_一。

右の「六波羅蜜經」の概略は、第一法宝の「摩訶般若解脫法身」、第二法宝の「戒定智慧諸妙功德」、第三法宝の「過去無量諸佛所説正法及我今所説」と三つの法宝が説かれるが、その中の第三法宝の「過去の無量諸仏が説く所の正法」と「今、我（釈尊）が説く所の正法」というすべての正法について説かれている部分が取り上げられている。

その正法には八万四千の法門があり、その中にすべての妙法が収められているが、我々衆生にとって縁の深い法門を選び、その教えに従って修行することによって、内外の惡を排除して善業に励み、心身を整

えて精進することによって、やがて成道に至る悟りに到達することができるのである。

釈尊は、阿難陀等の諸大弟子を初め、多くの人々に法を説いたが、この弟子達はひとたび聴聞すれば、皆、悉く深く心に念じて忘れることなく受持することができたのである。

この釈尊の説法を分類すると、五種にすることができる。

それは、一には素咀纒そたらん（経蔵）、二には毗奈耶びなや（律蔵）、三には阿毗達磨あびだま（論蔵）、四には般若波羅蜜多（智恵波羅蜜多蔵：智恵の完成）、五には陀羅尼門だらに（密教陀羅尼蔵：真理や意義を含み、罪業を消滅解脱させ、悟りを開かせる呪文（真言））である。

釈尊は、この五種の法をもって、衆生のそれぞれの能力や資質に応じて説かれ、広く教化したので、多くの衆生が悟りを開くことができたのである。

もし山林に入って閑寂な所に居し、精神統一をして熟慮を重ねたいと修行する者のために経蔵を説いた。もし日常の威儀を重んじ、正法を護持し、他者とも和合し、仲良く暮らすことを願う者のために律蔵が説かれた。

もし正法を説き、すべてのものの真理と現象について探求し、しだいに研鑽を積んで本質にせまり、究極の真理を悟りたいと願う者のために論蔵が説かれた。

もし大乘に説く真実の智恵を学び、自我の意識と所有觀念から生まれる執着にとらわれることから逃れたいと願う者のために智恵波羅蜜多蔵が説かれた。

もしこれまでに挙げた四蔵を身につけない者や殺生・偷盜・邪淫・妄語の四重、比丘尼のためにさらに四戒を加えた八重、殺父・殺母・殺阿羅漢・出仏身血・破法輪僧の五無間罪、大乘經典を誹謗する者、仏法を信ぜず成仏の素質を欠く者等の種々の重罪を造って到底救い難いとされる衆生も、速やかに解脱し、はやく悟りを得たいと願う者には密教陀羅尼蔵が説かれたのである。

このように、釈尊が説かれた五法藏は、あたかも牛乳の精製されて美味が増していく、乳・酪・生蘇・熟蘇・醍醐の熟成の過程とよく似ているのである。

まさに、契経は乳の如く、調伏は酪の如く、對法教は生酥の如く、大乘般若は熟酥の如く。総持門（真言密教）は、譬えば醍醐のようなものである。この醍醐の味は、乳・酪・酥の中で微妙で極上の味を持ち、よく諸病を治して衆生の心身を安樂にすることができると同様に、密教はすべての法門の中で第一の教えなのである。そして、この総持門（真言密教）は、諸々の衆生の重罪を除滅し、生死の苦海から解脱して速やかに悟りを開き、即身成仏させることができるのであると説かれている。

また、此の中の五無間罪というのは五逆を犯した極悪な罪人のことである。この五無間の病は醍醐の妙薬ならば治すことができるが、他の薬では甚だ難しいのである。

このことは、弘法大師が真言密教（聖道門）で説かれたことであるが、これと同じように念仏についても同じことがいえるのである。極樂浄土に往生したいと願う者にとっては、ひたすら念仏を称える念仏三昧こそが、真言宗でいう総持であり、天台宗でいう醍醐のごとく、最も勝れた行なのである。

だから、下品下生に念仏を説いたのは、念仏三昧がまさに醍醐の妙薬のごとくに、念仏の功德によつて五逆深重の重悪人の罪業も除滅されることを明かしたのである、と述べられている。

（三） 念仏三昧は王三昧

さらに、次の段は、下品下生の五逆深重の重悪人の者について、念仏三昧の功德が説かれるのは理解ができるが、十悪輕罪の下品上生に、どうして念仏が説かれるか問いかけがなされ、九品の行法についても述べられる。

問曰若爾者下品上生是十惡輕罪之人何故説「念佛」乎答曰念佛三昧重罪尚滅何況輕罪哉餘行不_レ然或有_二滅_レ輕而

不滅^レ重或有消^レ一而不消^レ二念佛不^レ然輕重兼滅一切徧治譬如^三阿伽陀藥徧治^二一切病^一故以^二念佛^一爲^二王三昧^一

(問うて曰わく、若ししからば、下品上生は、是れ十惡輕罪の人なり。何が故ぞ念佛を説くや。

答えて曰わく、念佛三昧は、重罪なお滅す。いかにいわんや輕罪をや。餘行は然らず。或いは輕を滅して、重を滅せざるあり。或いは一を消して、二を消ざるあり。念佛は然らず。輕重兼ね滅し、一切徧く治す。譬えば阿伽陀藥の、徧く一切の病を治するが如し。故に念佛を以つて王三昧とす。)

* その問いに対して、念仏三昧は重罪を除滅させるのであるから輕罪はなおさら滅せられる筈である。

しかし、余行はそうではなく、輕罪を滅しても重罪を滅することができないものもあり、また、一つの罪を除滅したとしても二つの罪を除きれないのである。

ところが、念仏はそうではなく、輕罪も重罪も合わせて除滅し、一切の罪障を残すことなく取り除くのである。例えば靈藥の阿伽陀藥が万病を悉く治すようなものである。

だから、經典の中で念仏三昧をもつて王三昧であると讃歎しているのである。

そして、さらに九品についてどのような行が配当されているかが説かれるのである。

凡九品配當は一往義五逆迴心通^二於上上^一讀誦妙行亦通^二下下^一十惡輕罪破戒次罪各通^二上下^一解第一義發菩提心亦通^二上下^一一法各有^二九品^一若約^レ品即九九八十一品也加之迦才云衆生起行既有^二千殊^一往生見^レ土亦有^二萬別^一也莫^下見^二一往文^一而起^中封執^上

(およそ九品の配當は、是れ一往の義なり。五逆の迴心、上上に通じ、讀誦の妙行、また下下に通ず。

十惡輕罪、破戒次罪、各々上下に通じ、解第一義、發菩提心、また上下に通ず。

一法に各々九品あり。若し品に約せば、即ち九九八十一品なり。

しかのみならず、迦才の云わく、衆生の行を起すに既に千殊有り。往生して土^くを見ること、また萬

別有るなりと。一往の文を見て、封執ふうしゅうを起こすこと莫れ。）

＊ 九品の行法は、一応の分け方にあてはめられたものである。五逆罪の極悪の凡夫でも、廻心して往生を願うことにより上品上生の往生を遂げることもあるし、經典の読誦をする勝れた行を修した者でも、その内容いかんによつて下品下生に往生となることもあるかも知れない。

また、十悪の軽罪を犯した者、破戒とそれ以下の罪を犯した者も、それぞれ上位や下位になったり、大乘の根本理論を理解した者も、菩提心をおこした者も同じことがいえるのである。

このように行を修する者の心の持ち方や行の深淺によつて、一つの法に各々九種の別が生ずることから九品に九品を乗じた八十一種の行法になるのである。

迦才は、『浄土論』⁽⁶⁾注で、

衆生起行既有「千殊」往生見「土亦有」萬別「也

（衆生の行を起すに既に千殊有り。往生して土くにを見ること、また萬別有るなりと。）

と説き、衆生が同じ修行をしても、その素質や環境によつて種々の異なりがあるように、往生してみる土も無量の差別がみられると述べている。だから、九品の往生も一応の区分であるので、經文に固執して拘った考え方をしてはいけなさと説いている。

(四) 念仏の現当二世始終の両益

そしてさらに、念仏は勝行なので、現当二世、始終の両益があることを道綽の『安樂集』を引きながら説いていくのである。

其中念佛是即勝行故引「分陀利」以爲「其喻」譬意應「知加之念佛行者觀音勢至如「影與」形暫不「捨離」餘行不「爾又念佛者捨」命已後決定往「生極樂世界」餘行不定凡流「五種嘉譽」蒙「二尊影護」此是現益也亦往「生淨土」乃至

成佛此是當益也又道綽禪師於念佛一行立始終兩益安樂集云念佛衆生攝取不捨壽盡必生此名始益言終益者依觀音授記經云阿彌陀佛住世長久兆載永劫亦有滅度般涅槃時唯有觀音勢至住持安樂接引十方其佛滅度亦與住世時節等同然彼國衆生一切無有觀見佛者唯有一向專念阿彌陀佛往生者常見彌陀現在不滅此即是其終益也當知念佛有如此等現當二世始終兩益應知

（其の中に念佛は是れ即ち勝行なり。故に分陀利を引きて、以つてその喩とす。譬の意知るべし。

しかのみならず、念佛の行者をば、觀音勢至、影と形との如く、暫くも捨離せず。餘行はしからず。また念佛する者は、命を捨てて已後、決定して極樂世界に往生す。餘行は不定なり。およそ五種の嘉譽を流え。

二尊の影護を蒙る。此は是れ現益なり。また淨土に往生して、ないし成佛す。此れは是れ當益なり。

また道綽禪師、念佛の一行に於いて、始終の兩益を立つ。

安樂集に云わく、念佛の衆生は、攝取して捨てたまわす。壽盡すれば必ず生ず。此れを始益と名づく。

終益と言うは、觀音授記經に依るに、云わく阿彌陀佛の、住世長久、兆載永劫にして、また滅度したま

うこと有り。般涅槃の時、ただ觀音勢至有りて、安樂を住持して、十方を接引す。その佛の滅度、また住世

の時節と等同なり。然るに彼の國の衆生、一切、佛を觀見したてまつる者の有ること無し。ただ一向に專

ら阿彌陀佛を念じて往生する者のみ有りて、常に彌陀現在して、滅したまわざるを見る。此れ即ち是れそ

の終益なり。（已上）

まさに知るべし。念佛は、かくの如き等の、現當二世、始終の兩益有り、まさに知るべし。）

* このように、九品の淨土往生行について種々の行が説かれる中で、念仏は最勝の行であり、それを称える者を華中の王である芬陀利華に喩えて尊い人と称賛した仏の深意を知らねばならないのである。

また、勝れていることのみならず、觀音、勢至の二大菩薩が、影の形に寄り添うように、常に念仏する行者から離れずに護って下さるのである。念仏以外の余行には、両菩薩の影護のような利益はないのであ

る。そして、念仏の行者が命終すれば、必ず決定して極樂浄土に往生することができるが、しかし、余行を修する者は必ずしも往生できるとは限らないのである。

前述したように、善導は、念仏の行者は、人中好人、人中妙好人、人中上上人、人中希有人、人中最勝人という五種の嘉誉という褒め言葉が与えられ、さらに観音、勢至二尊の影護を蒙るという現世における利益である現益を受け、さらには極樂浄土に往生してやがて成仏できるという来世の利益である当益という、現世と来世で受ける現当二益を得ることができるのである。

また、道綽禪師は『安樂集』^(注7)で、念仏の一行には始終の両益があることを次のように説いている。

第四依「觀經及餘諸部」所修萬行但能迴願莫不皆生然念佛一行將爲「要路」何者審量聖教有「始終兩益」若欲「生善起行則普該諸度」若滅「惡消災則總治諸難」故下經云念佛衆生攝取不捨壽盡必生此名「始益」言「終益」者依「觀音授記經云」阿彌陀佛住世長久兆載永劫亦有「滅度」般涅槃時唯有「觀音勢至」住持安樂「接引十方」其佛滅度亦與「住世時節」等同然彼國衆生一切無有「觀見佛」者唯有「一向專念」阿彌陀佛「往生者」常見「彌陀現在不滅」此即是其終時益也所修餘行迴向皆生世尊滅度有「觀不觀勸」後代「審量使沾遠益」也

（第四に觀經及び餘の諸部に依るに、所修の萬行、ただ能く迴願するに、皆、生ぜざることなし。然も念佛の一行を將に要路と爲す。何ぞや聖教を審量するに、始終の兩益有り。若し善を生じ、行を起こさんと欲せば、則ち普く諸度を該ねる。若し惡を滅し、災いを消するときは、則ち總じて諸難を治すと。

故に下の經に云わく。念佛の衆生を攝取して捨てたまわず。壽盡くれば必ず生ず。此れを始益と名づく。

終益と言うは、觀音授記經に云うに依れば、阿彌陀佛、住世長久にして兆載永劫にまた滅度したまう

こと有り。般涅槃はつねはんの時、ただ観音勢至のみ有りて、安樂を住持して十方を接引したまう。其の佛の滅度また住世の時節と等なり。然るに彼の國の衆生、一切の佛を覩見する者有ること無し。

ただ一向に阿彌陀佛を專念して往生する者のみ有りて、常に彌陀は現在にして滅したまわざるを見る。此れ即ち是れ其の終時の益なり。修する所の餘行も迴向して、皆、生ずれども世尊の滅度に覩ると覩ざると有り。後代を勧め審量して遠益うろおに沾うるさしむるなり。）

右の『安樂集』の概要は、次のようになっている。

第四に、『觀無量壽經』及びそのほかの經によれば、万行を修めてこれを回向し、淨土を願えば、皆、往生せぬことはない。そればかりか、念仏一行をもつて最善の要路とするのである。なぜならば、聖教を調べてみると、始終の両益があるからである。

もし善を生じ、行を起こそうと思うならば、念仏は広く万行を摂めており、もし惡を滅し、災いを消そうとするならば、念仏は総じて一切の障りをなおすとある。

それゆえに、下の經文（『觀無量壽經』）に、念仏を称える衆生を一人も漏らさず摂め取つて捨てるよなことはない。命が終われば、仏の光明に収められ、必ず淨土に往生することができると説かれている。これを始益と名づけるのである。

終益というのは『觀音授記經』に説かれているのによれば、阿彌陀仏が、淨土におられることは無限といえる程に続くけれども、長い時代が過ぎ去れば、いつかは仏も入滅されるのである。その後においては、観音、勢至両菩薩が極樂淨土を預かつて維持し、十方の衆生を導かれる。その阿彌陀仏の入滅後も、法の留まることは在住の時と少しも変わらないのであるが、ただ一つ異なることは、その時に往生した者は阿彌陀仏を見たてまつることができないのである。

しかし、一向に阿彌陀仏をただひたすらに念じて往生した者だけは、阿彌陀仏が入滅せずに現にましま

すごとくに、その姿を見奉ることができるのである。これがすなわち終時の益である。

他の行を修めて回向しても、皆、往生するのであるが、仏の入滅を見ると見ないとの別があるのである。

後代の人に勧め、聖教を調べ、遠く利益を潤おさしめるのである。

となっており、このように念仏には、現当二世、始終の両益があると結論付けているのである。

ここで注目したいのは、第五章でも述べたが、第五章の標章の「第五念佛現當利益章」と第十一章の内容との関係である。

第十一章の内容は、基本的には、念仏と雑善を対比して、念仏法門こそが最勝であることが強調されるが、その論理展開は、おおそ次のような内容で説かれている。

①『観無量寿経』の流通分から、釈尊が阿難に未来の衆生に伝える法門として教示するのは、定善・散善の雑善の法門よりも、念仏三昧の法門であること。

②『観無量寿経』の流通文の引文から、念仏の行者を華王の芬陀利華に譬え、最善であると讃歎すること。

③善導『観経疏』の芬陀利華の解釈から、雑善と相對して、念仏三昧には五種の嘉譽が与えられること。

④なぜ最下の下品下生の者に最勝の念仏を説くかは、弘法大師が『弁顯密二教論』の『六波羅蜜經』を引き、総持門が醍醐であるように、念仏も醍醐薬のように、五逆十惡の重病を治す最上の法であること。

⑤念仏三昧は、伽陀薬のように下品上生の輕罪の者も、重罪の者と同じように滅する王三昧であること。

⑥九品の行法は一応の區別で、行ずる者の心得や行の深淺等で融通、變動があり、迦才の『淨土論』によれば、衆生の行に千種あり、往生してみる土も無量の差別がみられると説かれていること。

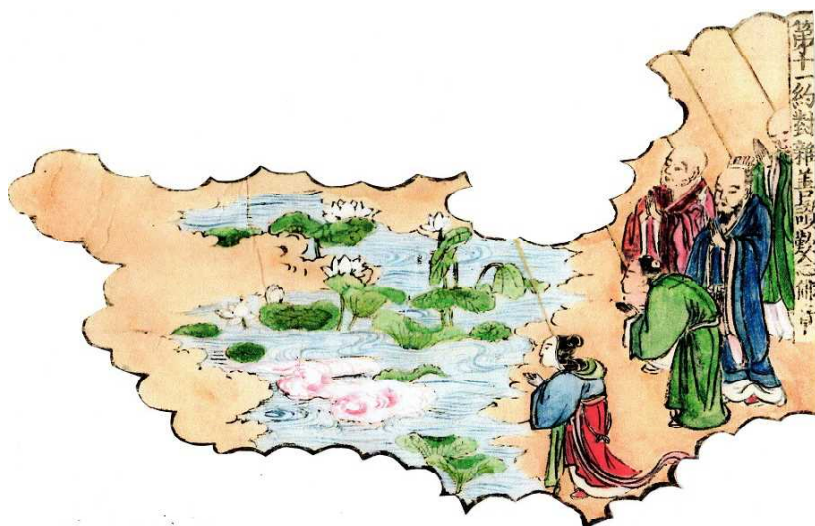
⑦道綽の『安樂集』を引き、念仏には現当二世、始終の両益があること。

この論理展開の中で、いずれも重要であるが、やはり中心となるべき事項は、②念仏の行者を芬陀利華に譬えて讃歎することと、この第十一章のまとめとなる⑦の現当二世、始終の両益に重点が注がれるのではなからうか。

そこで、高田敬輔がどのような理解のもとに絵画表現したか、第十一章の絵相を見ながら考察を加えることにする。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第十一 約對雜善讚歎念佛章)の絵相

高田敬輔「選択集十六章之図」(第十一 約對雜善讚歎念佛章)の絵相



《絵相の部分構成》

* 標章……第十一 約對雜善讚歎念佛章

* 出家者……二人

* 在家者……三人(二人の優婆塞、一人の優婆夷)

* 蓮池……五本の芬陀利華

* 光明……二人の出家者、三人の在家者それぞれの

頭部に第七章の阿弥陀仏からの攝取不捨の光明が降り注ぐ。

標章は、「約對雜善讚歎念佛章」である。

この標章の文言は、法然の記すところの「約對雜善讚歎念佛之文」（雜善に約對して念仏を讚歎するの文）と同じである。

第十一章の絵相は、二人の出家者と三人の在家者（二人の優婆塞、一人の優婆夷）が、蓮池に咲き誇る五本の芬陀利華に念仏を称えながら合掌している場面である。五本の芬陀利華は、あたかも五種の嘉誉を象徴しているようである。

この標章と絵相について、第五章でも述べたが、第十一章の内容（前頁の⑥道綽の『安樂集』を引き、念仏には現当二世、始終の両益があること。）の現当二世、始終の両益の内容である【現當】の二文字が、第十一章の標章ではなく、第五章の標章に、《念佛【現當】利益章》と記されていることである。

なぜ、高田敬輔が、本来、第十一章の内容である《【現當】二世、始終の両益》を、第五章の標章に記したかという疑問点である。

これについては、第五章と第十一章の内容を混同したものと考えられる。

第十一章の結論というべき《【現當】二世、始終の両益》の内容を絵画表現することは困難であり、限られた一面面に表現したとしても、見る者に理解が得られないことが想定される。だから、第十一章冒頭の『觀無量寿經』の流通文に説かれる、芬陀利華の經文に着目し、五種の嘉誉を象徴する五本の白蓮華と念仏を称える五人の出家者・在家者の場面を描くことにしたものであろう。

一步譲って、第五章の《念佛利益之文》に、《念佛【現當】利益章》として、第十一章の重要な内容である念佛三昧の《【現當】二世、始終の両益》を【現當】の二文字に託したとすれば、第十一章の標章と絵相からは、芬陀利華の譬喩は見て取れるものの、直接的に、《【現當】二世、始終の両益》を読み取ることが難しい。

そればかりか、重要な内容である念仏三昧の利益をそのまま消滅させるわけにもいかず、第五章の結論という

べき一念大利、無上の功德を具足するということを主張したいがために、念仏大利、無上の功德を、第五章だけに限定せず、第十一章も含めた『選択本願念仏集』全体の枠組みの中で捉えて絵画表現したかったとも考えられるが、これはあくまでも想定に過ぎず、敬輔に好意的な捉え方としか言いようが無いのである。従って、高田敬輔が、明らかに第五章と第十一章の「念仏の利益」の混同があり、第五章の【現當】の二文字挿入は誤記であつたものと考えられるのである。

六 まとめ

以上のことを通して、高田敬輔の描いた第十一章の絵相から、次のようなことが考えられる。

① 第十一章の絵相は、『観無量寿経』流通文の、念仏の行者を芬陀利華に譬える場面で、五人の出家者・在家者、さらに蓮池に咲く五本の白蓮華が、あたかも五種の嘉誉として讃歎されている場面であること。

② 高田敬輔が、第十一章の要点である、念仏三昧がもたらす《現當二世、始終の両益》のことを、第五章の標章に【現當】の二文字を付け加えて記している。

それはあたかも、念仏利益の大利を『選択本願念仏集』全体の枠組みの中で捉え、構成したとも考えられるが、明らかに第五章と第十一章の混同であり、第五章の【現當】の二文字挿入は誤記であるとするのが妥当であると思われること。

- (注 3)(注 2)(注 1)
- 『觀無量壽經』流通分（浄土宗全書第一卷五十頁）
- 『觀經散善義』卷第四（浄土宗全書第二卷七一頁）
- 新纂浄土宗大辞典 五一頁 平成二十八年三月刊 浄土宗
- 良忠『觀經散善義伝通記』卷第三（浄土宗全書第二卷四三五頁～四三六頁）
- (注 7)(注 6)(注 5)(注 4)
- 『往生要集』卷下末（浄土宗全書第十五卷一四一頁）
- 『辨顯密二教論』「六波羅蜜經」（大正新脩大藏經第七十七卷三七八頁 b25）
- 『浄土論』卷上（浄土宗全書第六卷六三〇頁）
- 『安樂集』卷下 六九五頁（浄土宗全書第一卷六九五頁）

第十二項 「第十二 唯以念佛付屬阿難章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第十二 唯以念佛付屬阿難章

二 『選択本願念仏集』の篇目

釋尊不_レ付_二屬定散諸行_一唯以_二念佛_一付_二屬阿難_一之文

(釋尊定散諸行を付屬せず、ただ念佛を以つて阿難に付屬したまうの文)

* 前章では、念仏の行者が華中の王の芬陀利華に譬えられて最勝の人と讃歎されるのに対して、念仏以外の雑善は讃歎しないことや、弘法大師の『二教論』から念仏は醍醐のように罪障を治す最上の法であることや、最下の者に最上の念仏の法が説かれることや、念仏三昧には、現當二世、始終の両益があることが説かれたが、今章では、『觀無量壽經』の流通文、結びの一段の、釈尊が阿難に、阿弥陀仏の御名を後世まで伝えるように託されることから、釈尊の本意が明かされることになる。

三 『選択本願念仏集』の引文

今章で引用される経文は、前章の『觀無量壽經』の流通分で引用された次の経文である。

觀無量壽經云佛告_二阿難_一汝好持_二是語_一持_二是語_一者卽是持_二無量壽佛名_一

(觀無量壽經に云く、佛阿難に告げたまわく、汝、好く是の語を持せよ。是の語を持すとは、卽ち是れ無量壽佛の名を持するなり。)

* 『觀無量壽經』の結論といふべき流通分で、釈尊が阿難に、「汝は、好く是の語をたもち、忘れること

無く、後の世まで伝えよ。この語をたもてというのは、阿弥陀仏の御名を伝えよということである。」と時代がどのように変わったとしても後世にまで必ず伝え、弘通させるように託した法門は、定散二善の諸行ではなく、ただ念仏の一行であることが説かれている。

(一) 『観經疏』による『観無量壽經』の概観

この經文を具体的に解釈した善導の『観無量壽經疏』によって、さらに詳細に分析されている。

尚、引用部分が多様に展開され、分量も多いので分割しながら考察を加える。【原文の意味内容で段落を変更。】

同經疏云從_レ佛告阿難汝好持是語已下正明_下付_二屬彌陀名號_一流通_中於遐代_上上來雖_レ說定散兩門之益望_二佛本願_一意在_二衆生一向專稱_二彌陀佛名_一

私云案_二疏文_一有_二二行_一一定散二念佛

初言_二定散_一者又分爲_二二一定善二散善_一

初就_二定善_一有_二其十三_一一者日想觀二者水想觀三者地想觀四者寶樹觀五者寶池觀六者寶樓閣觀七者華座觀八者像想觀九者阿彌陀佛觀十者觀音觀十一者勢至觀十二者普往生觀十三者雜想觀具如_二經說_一縱令無_二餘行_一或一或多隨_二其所堪_一修_二十三觀_一可得_二往生_一其旨見_レ經敢莫_二疑慮_一

(同經の疏に云わく、佛告阿難汝好持是語従り已下は、正しく彌陀の名號を付屬して、遐代に流通したまうことを明かす。上來定散兩門の益を説くと雖も、佛の本願に望むれば、意、衆生をして、一向に専ら彌陀佛の名を稱せしむるに在り。

私に云わく、疏の文を案ずるに二行有り。一には定散。二には念佛なり。

初めに定散と言うは、また分かちて二とす。一には定善。二には散善なり。

初めに定善に就いて、その十三有り。

一には。日想觀。二には水想觀。三には地想觀。四には寶樹觀。五には寶池觀。六には寶樓閣觀。七には

華座觀。八には像想觀。九には阿彌陀佛觀。十には觀音觀。十一には勢至觀。十二には普往生觀。十三には雜想觀。具には經に説くが如し。たとい餘の行無くとも、或いは一、或いは多、その堪ゆる所に隨いて、十三觀を修して、往生を得べし。その旨經に見えたり。敢て疑慮することなかれ。)

* この段は、『觀無量壽經』全体を概観している。

その概要をみると大きく二つに分けられ、一つは定散二善の諸行ともう一つは念仏である。

そして、さらに、定散二善は、定善と散善に分けられる。

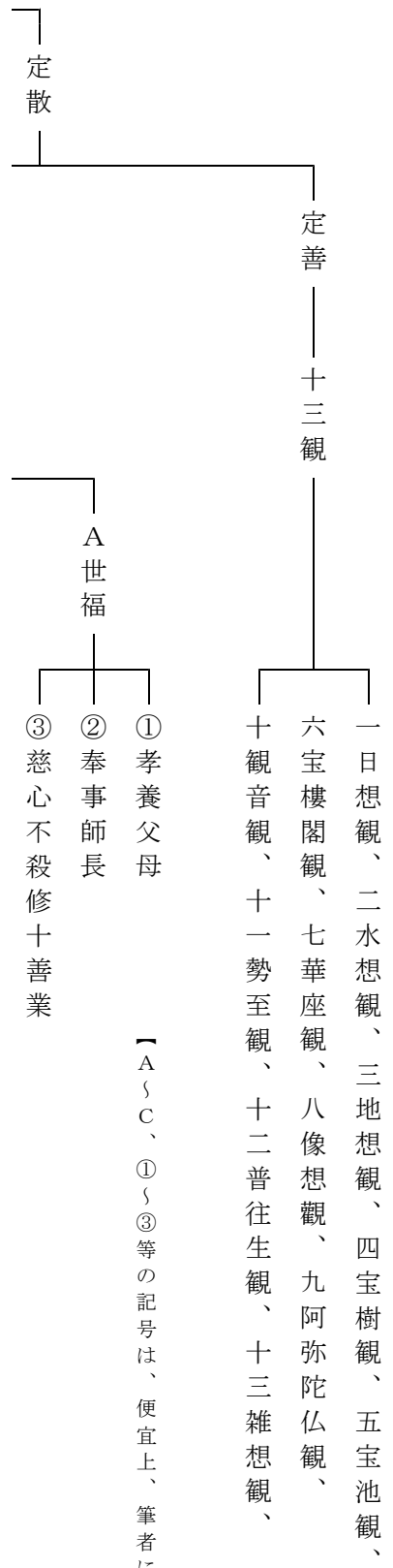
その定善は、第一日想觀に始まり、第十三雜想觀で終わる。

さらに散善は三福と九品に分けられ、三福は、世福に三行《慈心不殺と修十善業を分ければ四行》、戒福に三行、行福に四行、説かれる。

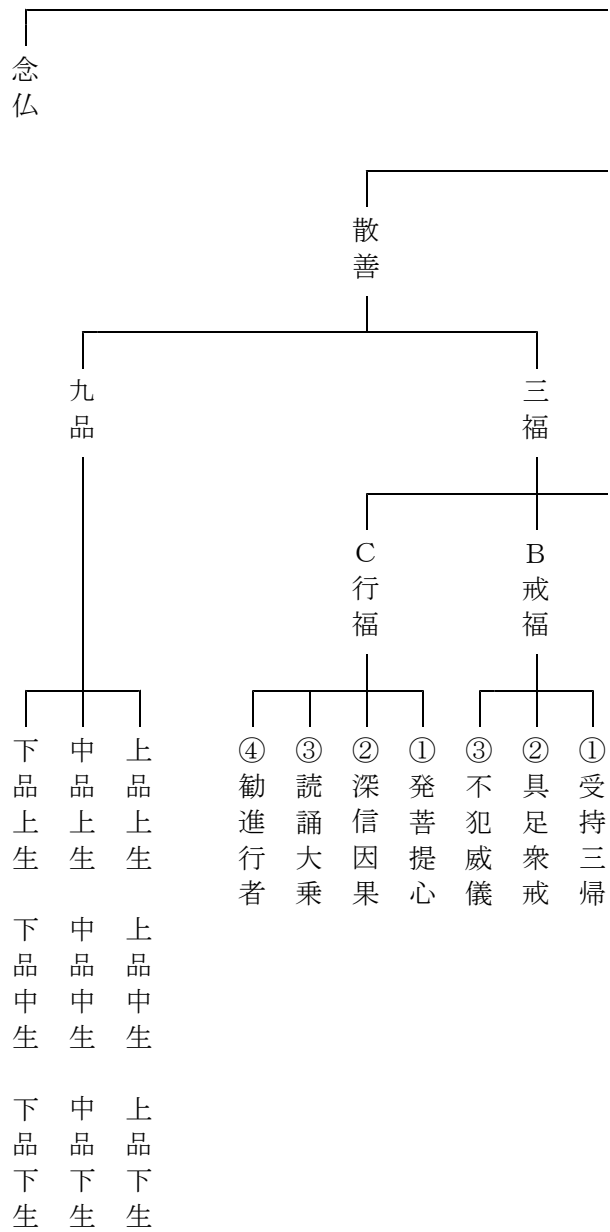
そして、九品が説かれるが、三福と九品は開合の異なるので、行が重複して説かれる。

最後は、念仏が説かれるという構成になっている。これを図示すれば次のようになる。

【『觀無量壽經』全体概要】



【A、C、①、②、③等の記号は、便宜上、筆者による。】



(二) 散善の三福

(ア) 散善の三福の世幅

定散二善の散善の三福について具体的に説かれる。

次就「散善」有「一」者三福「二」者九品初三福者經曰「一」者孝「二」養父母「三」奉事師長「慈心不殺修十善業」二者受持三歸「具足衆戒」不犯威儀「三者發菩提心深信因果讀誦大乘勸進行者」孝養父母者就「此有」二一世間孝養二世出世孝養也世間孝養者如「孝經等說」出世孝養者如「律中生緣奉仕法」奉事師長者就「此有」二一世間師長二世出世師長也世間師長者教「仁義禮智信等」師也出世師長者教「聖道淨土二門等」師也縱令無餘行以「孝養奉事」爲「往生業」也慈心不殺修十善業者就「此有」二義「一」者初慈心不殺者是四無量心中初慈無量也即舉「初一」攝「後

三「也縱令無餘行」以「四無量心」爲「往生業」也次修十善業者一不殺生二不偷盜三不邪淫四不妄語五不綺語六不惡口七不兩舌八不貪九不瞋十不邪見也

二者合「慈心不殺修十善業二句」而爲「一句」謂初慈心不殺者此非「四無量之中慈無量」是「指十善之初不殺故知正是十善一句也縱令無餘行」以「十善業」爲「往生業」也

(次に散善に就て二有り。一には三福。二には九品なり。)

初めに三福とは、經に曰わく、一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず十善業を修す。

二には、三歸を受持し、衆戒を具足して、威儀を犯ぜず。

三には、菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す。(已上經文)

孝養父母とは、これに就いて二有り。一には世間の孝養。二には出世の孝養なり。

世間の孝養とは、孝經等の説の如し。

出世の孝養とは、律の中の生緣奉仕の法の如し。

奉事師長とは、これに就いてまた二有り。一には世間の師長。二には出世の師長なり。

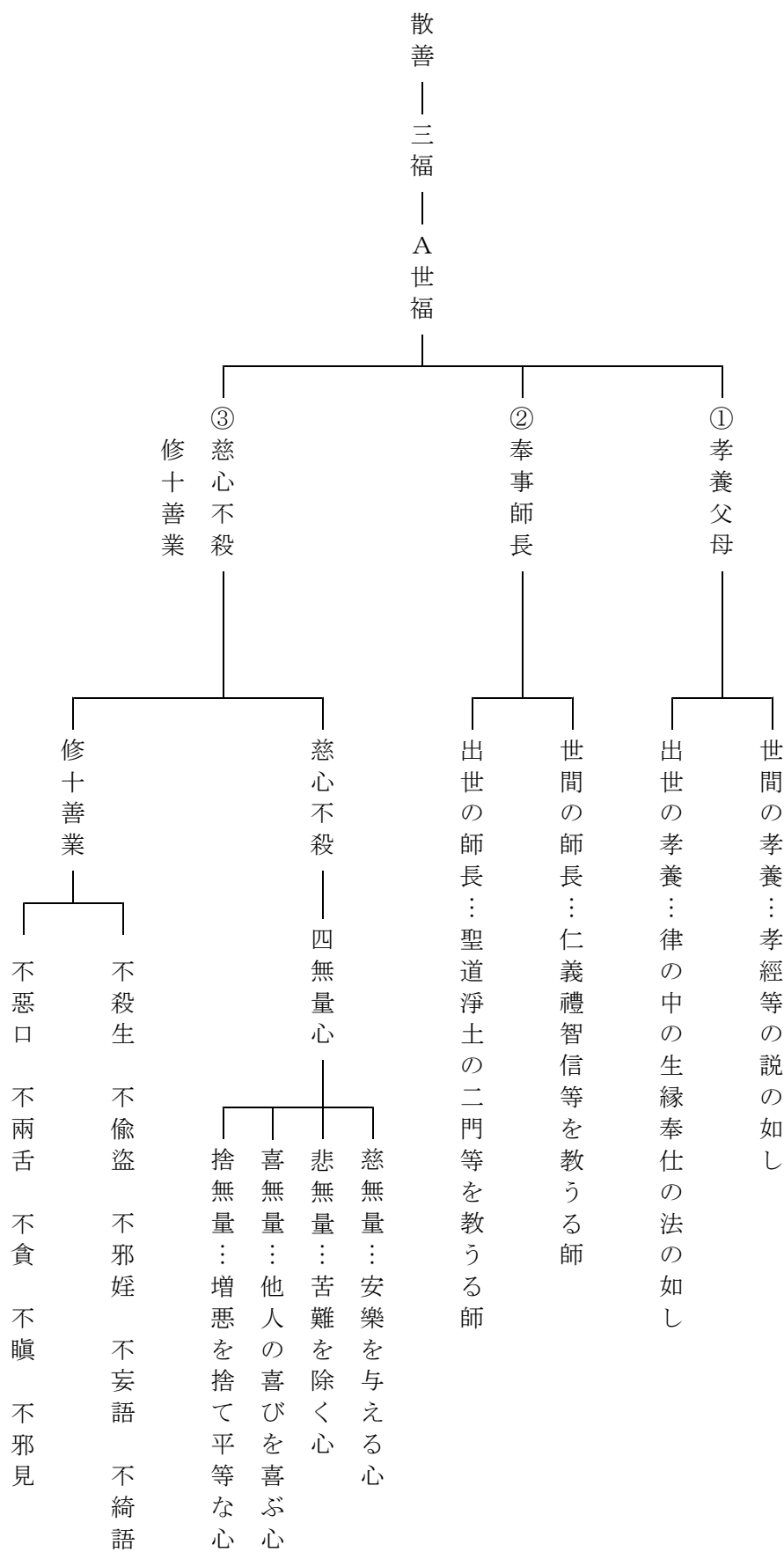
世間の師とは、仁義禮智信等を教うる師なり。

出世の師とは、聖道淨土の二門等を教うる師なり。たとい餘の行無くとも、孝養奉事を以って往生の業とするなり。

慈心不殺修十善業とは、これに就いて二義有り。一には初めに慈心不殺とは、これ四無量心の中の初めの慈無量なり。即ち初めの一を擧げて、後の三を攝す。たとい餘の行無くとも、四無量を以って、往生の業とするなり。

次に修十善業とは、一には不殺生。二には不偷盜。三には不邪淫。四には不妄語。五には不綺語。六には不惡口。七には不兩舌。八には不貪。九には不瞋。十には不邪見なり。

二には慈心不殺、修十善業二句を合して一句となす。
 謂わく、初めに慈心不殺とは、此れ四無量の中の慈無量には非ず。これ十善の初めの不殺を指す。故に知
 んぬ。正しくこれ十善の一句なることを。たとい餘の行無くとも十善業を以って往生の業とするなり。一
 * まず初めに【A世福】の、①孝養父母、②奉事師長、③慈心不殺修十善業の位置づけである。



(イ) 散善の三福の戒福

次に【B 戒福】については、次のように述べられる。

受持三歸者歸「依佛法僧」也就「此有」二一者大乘三歸二者小乘三歸也具足衆戒者此亦有「二一者大乘戒二者小乘戒也不犯威儀者此亦有」二一者大乘謂有「八万」二者小乘謂有「三千」

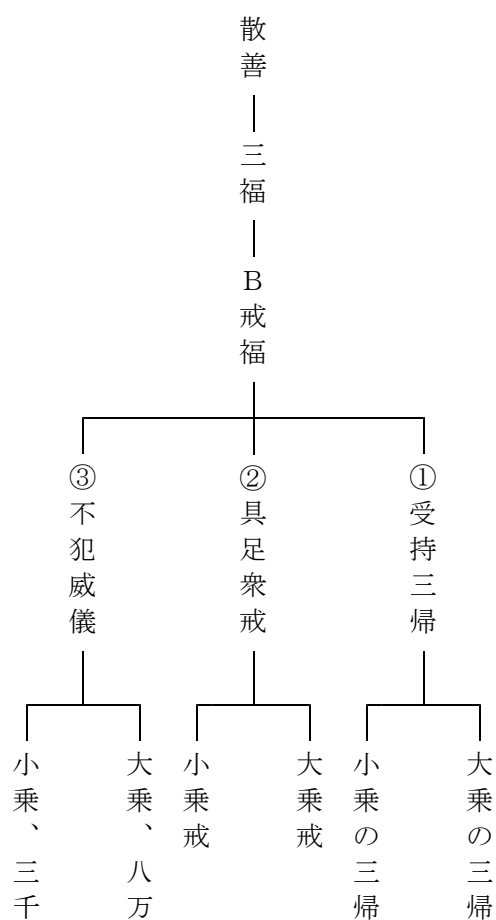
(受持三歸とは、佛・法・僧に歸依するなり。

これに就いて二有り。一には大乘の三歸。二には小乗の三歸なり。

具足衆戒とは、これにまた二有り、一には大乘戒、二には小乗戒なり。

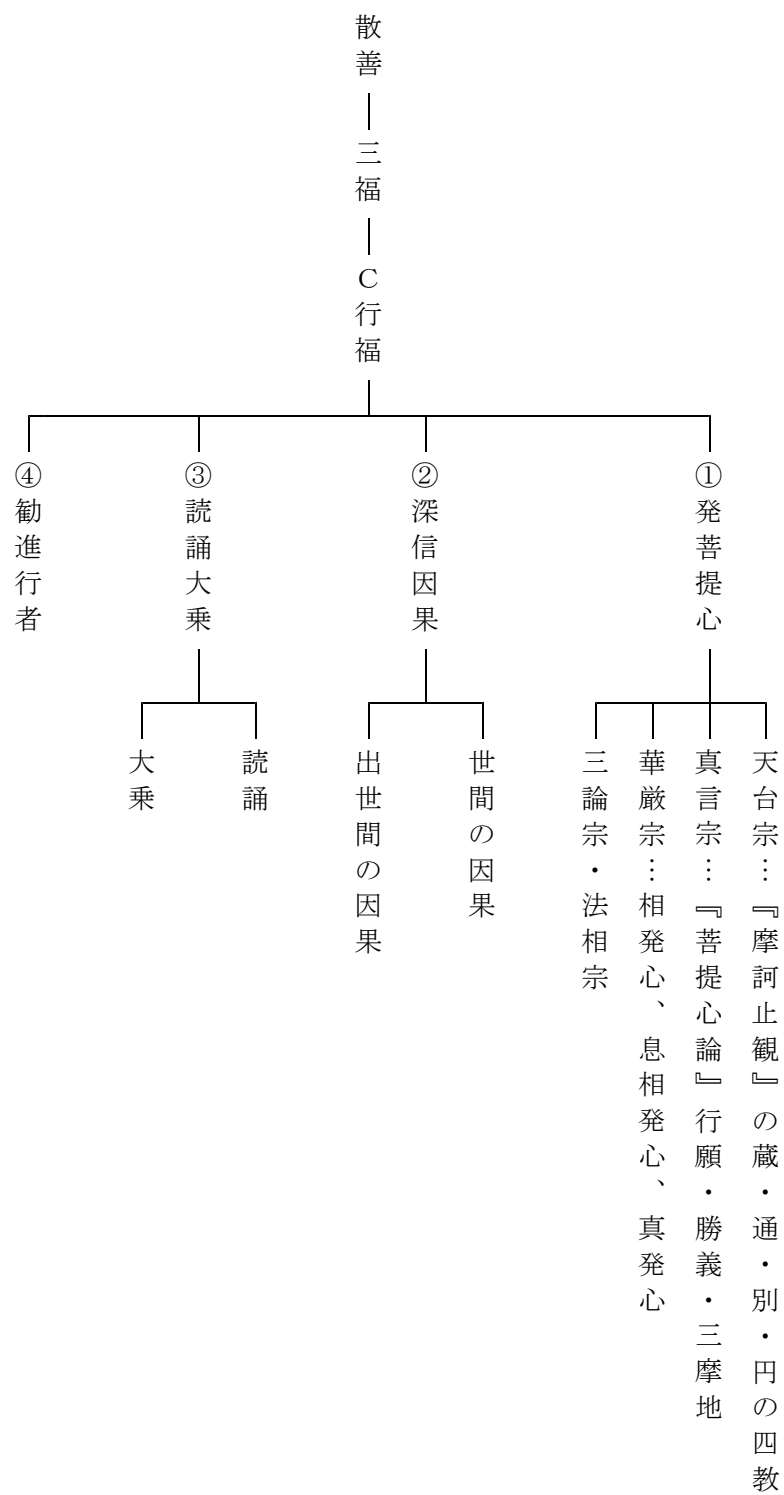
不犯威儀とは、これにまた二有り、一には大乘、謂く八万有り。二には小乗、謂く三千有り。

* この【B 戒福の①受持三歸】については、仏・法・僧の三宝に歸依するとあり、それぞれ大乘と小乗の三歸がある。【②具足衆戒】【③不犯威儀】にも同じように大乘と小乗があり、次のように図示できる。



(ウ) 散善の三福の行福

さらに【C行福】については、次のように述べられる。



* 散善の三福の【C行福】については、①發菩提心、②深信因果、③読誦大乘、④勸進行者とさらに細分化されて説かれていく。

(i) 散善三福の【C行福の①發菩提心】

右の行福がさらに詳しく説かれていく。この【C行福の①發菩提心】については、

發菩提心者諸師意不同也天台即有「四教菩提心」謂藏通別圓是也具如「止觀說」眞言即有「三種菩提心」謂行願勝義三摩地是也具如「菩提心論說」華嚴亦有「菩提心」如「彼菩提心義及遊心安樂道等說」三論法相各有「菩提心」具如「彼宗章疏等說」又有「善導所釋菩提心」具如「疏述」發菩提心其言雖「一各隨」其宗「其義不」同然則菩提心之一句廣亘「諸經」徧該「顯密」意氣博遠詮測冲邈願諸行者莫「執」一遮「万諸求」往生「之人各須」發「自宗菩提心」縱令無「餘行」以「菩提心」爲「往生業」也

（發菩提心とは、諸師の意不同なり。）

天台には即ち四教の菩提心有り。謂わく藏・通・別・圓これなり。具には『止觀』に説くが如し。

眞言には即ち三種の菩提心有り。謂わく行願と勝義と三摩地とこれなり。具には『菩提心論』に説くが如し。

華嚴にまた菩提心有り。彼の『菩提心義』及び『遊心安樂道』等に説くが如し。

三論、法相、おのおの菩提心有り。具には彼の宗の章疏等に説くが如し。

また善導所釋の菩提心有り。具には疏に述するが如し。發菩提心、其の言一なりと雖も、おのおのの其の宗に随つて、其の義同じからず。然れば則ち菩提心の一句、廣く諸經に亘り、徧く顯密を該ぬ。意氣博遠（意味するところが広く深いこと）にして詮測冲邈（推し測かろうとしても広大で漠然としているので把握しがたいこと）なり。願わくは諸々の行者、一を執して万を遮することなかれ。諸々の往生を求めん人、おのおのすべからく自宗の菩提心を發すべし。たとい餘行無くとも、菩提心を以つて往生の業とす。）

❁ 三福の【C行福の①発菩提心】については、各宗の諸師によって見解が同一ではない。

天台宗：『摩訶止観』^(注1)の藏・通・別・円の四教に基づく。

・「十種発菩提心」

(諸經論に種種の契機を縁として起こる菩提心)

- (一) 種種の理を推して菩提心を發す。
 - (二) 種種の相をみて菩提心を發す。
 - (三) 種種の神通をみて菩提心を發す。
 - (四) 種種の法を聞いて菩提心を發す。
 - (五) 種種の土に遊んで菩提心を發す。
 - (六) 種種の衆をみて菩提心を發す。
 - (七) 種種の行を修するをみて菩提心を發す。
 - (八) 種種の法の滅するをみて菩提心を發す。
 - (九) 種種の過をみて菩提心を發す。
 - (十) 他の種種の苦を受けるのをみて菩提心を發す。
- ・そしてさらに右の十種發菩提心の發る形態を生滅(藏經)、無生(通教)、無量(別教)、無作(円教)の四諦(真理)に分別する。

真言宗：『菩提心論』^(注2)の行願・勝義・三摩地に基づく。

・行願……自らの悟りを求めると同時に他を悟らせたいと願う

大悲化他心のこと。

・勝義……一切法に自性なしと見きわめて悟りを得る智慧を持つこと。

・三摩地……身口意三密の行法を修め仏と同じ境地に達する生仏一如、凡聖不二を悟ること。

華嚴宗…『大方廣佛華嚴經』^(注3)の十種の發菩提心の因縁。

三論宗・法相宗…宗の章疏等

【善導所釋の菩提心について】

『觀經疏』散善義^(注4)

唯發^二一念^一厭^レ苦樂^下生^二諸佛境界^一速滿^二菩薩大悲願行^一還入^二生死^一普度^中衆生^上故名^二菩提心^一也

(ただ一念を發して苦を厭い、諸佛の境界に生じて、速やかに菩薩の大悲願を滿たし、還つて生死に入り、普く衆生を度せんことを樂う。故に菩提心と名づく。)

このように、各宗各師によつて發菩提心の捉え方は様々であるが、菩提心の一句は広く顯教にも密教にも諸經にわたつて説かれ深遠広大なもので、容易に詮索したりせず、一つの解釈に固執しないようにしなければならぬ。菩提心は自宗の立場で理解し、發すべきものであり、余行を修めなくても往生の業となると説かれている。

(ii) 散善三福の【C行福の②深信因果】

次に【C行福の②深信因果】について、

深信因果者就_レ此有_二一_一者世間因果二者出世因果世間因果者即六道因果也如_二正法念經說_一出世因果者即四聖因果也如_二諸大小乘經說_一若以_二此因果二法_一偏攝_二諸經_一者諸家不_レ同且依_二天台_一謂華嚴者說_二佛菩薩二種因果_一阿含者說_二聲聞緣覺二乘因果_一方等諸經者說_二四乘因果_一也般若諸經者說_二通別圓因果_一法華者說_二佛因佛果_一涅槃者復說_二四乘因果_一也然則深信因果之言偏普該_二羅於一代_一矣諸求_二往生_一之人縱令無_二餘行_一以_二深信因果_一爲_二往生業_一也

(深信因果とは、これに就いて二有り。一には世間の因果。二には出世の因果なり。

世間の因果とは、即ち六道の因果なり。『正法念經』に説くが如し。

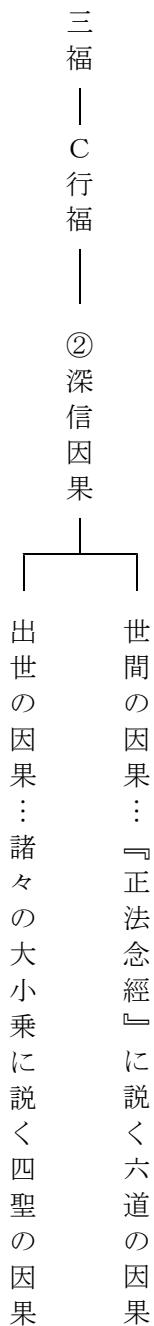
出世の因果とは、即ち四聖の因果なり。諸々の大小乗經に説くが如し。

もしこの因果の二法を以って、偏く諸經を攝せば、諸家同じからず。

しばらく天台に依らば、謂わく華嚴には、佛、菩薩二種の因果を説き、阿含には、聲聞緣覺二乗の因果を説き、方等の諸經には四乗の因果を説くなり。

般若の諸經には、通別圓の因果を説く。法華には、佛因佛果を説く。涅槃には、また四乗の因果を説く。然れば則ち深信因果の言、あまねく一代を該羅_{がいら}せり。諸々の往生を求めんの人、たとい餘行無しといえども、深信因果を以って往生の業となすべし。)

● 【C行福の②深信因果】は、



* 天台によれば、華嚴には、佛、菩薩二種の因果

阿含には、聲聞緣覺二乗の因果

方等の諸經には、四乗の因果

般若の諸經には、通別圓の因果

法華には、佛因佛果

涅槃には、また四乗の因果

(iii) 散善三福の【C行福の③誦誦大乘】

さらに、【C行福の③誦誦大乘】の段は、次のようになっている。

讀誦大乘者分而爲二一者讀誦二者大乘讀誦者卽是五種法師之中舉轉讀諷誦二師顯受持等三師若約十種法行者卽是舉披讀諷誦二種法行顯書寫供養等八種法行也大乗者簡小乗之言也非別指一經通於一切諸大乘經謂一切者佛意廣指一代所說諸大乘經而於一代所說有已結集經有未結集經又於已結集經或有隱龍宮不流布人間之經或有留天竺未來到漢地之經而今就翻譯將來之經而論之者貞元入藏錄中始自大般若經六百卷終于法常住經顯密大乘經總六百三十七部二千八百八十三卷也皆須攝讀誦大乘之一句

願西方行者各隨其意樂或讀誦法華以爲往生業或讀誦華嚴以爲往生業或受持讀誦遮那教王及以諸尊法等以爲往生業或解說書寫般若方等及以涅槃經等以爲往生業是則淨土宗觀無量壽經意也

(讀誦大乘とは、分ちて二とす。一には讀誦、二には大乘なり。

讀誦とは、卽ちこれ五種法師の中に、轉讀、諷誦の二師を舉げて、受持等の三師を顯す。若し十種法行に約せば、卽ちこれ披讀、諷誦の二種の法行を舉げて、書寫供養等の八種の法行を顯す。

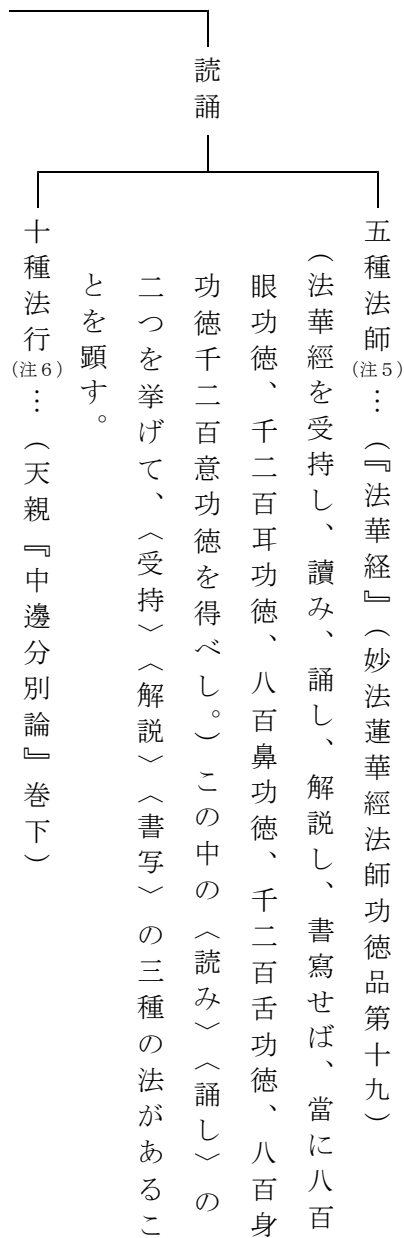
大乘とは、小乗を簡^{えら}ぶ言^{ことば}なり。別に一經を指すに非ず。一切の諸大乘經に通ず。謂わく一切とは、佛意^{ぶつち}廣く一代所説の諸大乘經を指す。しかるに一代の所説において、已^い結集^{けつじゅう}の經有り。未結集の經有り。また已結集の經において、あるいは龍宮に隠れて、人間に流布せざる經有り。あるいは天竺に留まりて、いまだ漢地に來到せざるの經有り。しかるに、今、翻譯將來の經について、これを論ぜば、貞元^{ていげん}入藏錄の中に、始め『大般若經』六百卷より、『法常住經』に終るまで、顯密の大乘經、すべて六百三十七部、二千八百八十三卷なり。

皆、すべからく讀誦大乘の一句に攝すべし。

西方を願う行者、おのおのその意樂^{いぎよう}に随いて、あるいは法華を讀誦して、以って往生の業となし、あるいは華嚴を讀誦して、以って往生の業となし、あるいは遮那、教王、および諸尊法等を受持讀誦して、以って往生の業となし、あるいは般若、方等、および涅槃經等を解説し、書寫して、以って往生の業となす。

これ則ち淨土宗の觀無量壽經の意^{こころ}なり。

❁ 【C 行福の③讀誦大乘】をみると、次のように表すことができる。



大乘

（一書寫、二供養、三施與、四聽聞、五自讀、六憶持、七顯說、八聞誦、九思量、十修習）この中の〈五自讀〉〈八聞誦〉を挙げて、〈一書寫、二供養〉等の八種法行を顕す。

・ 大乘とは、小乗を除いた經典で、特定の一經を指すのではなく、釈尊が説いたすべての經典。

・ 現存の經典は、釈尊滅後に弟子が編纂したものであり、まだ編纂されていないものもある。

・ 結集された經典でも、龍王が宮殿に隠され人間界に弘められなかったものもある。

・ あるいは、印度に留まって中国へ伝わらなかった經典もある。

・ 中国に伝訳された經典は、円照の『貞元新定釋教目錄』によれば『大般若經』六百卷に始まり、『法常住經』まで、総計六百三十七部二千八百八十三卷ある。『觀無量壽經』にいう「読誦大乘」という一句には、これらの經典が全て含まれている。

・ 西方極樂浄土往生を願う者は、それぞれの信仰に適した經典、例えば『法華經』『華嚴經』を読誦し、『大日經』『金剛頂經』、密教諸尊の『真言』を受持読誦し、『般若經』『方等經』『涅槃經』を解説、書写して往生業とする。

そして、行福の①發菩提心、②深信因果、③読誦大乘によって浄土往生の行とするというのは、浄土宗の拠り所である『観無量寿経』の立場からの解釈であって、他宗の教判で説く經典の取り扱いとは必ずしも同じではないことを知ることができるのである。

そこでさらに疑問となるのが、『観無量寿経』は顕教の經典であるのに、この經の中にある読誦大乘の語の中に密教の經典である『法華経』を入れるのは不当であるという問答である。

問曰顯密旨異何顯中攝_レ密乎答曰此非_レ云_レ攝_二顯密之旨_一貞元入藏錄中同編_レ之盡入_二大乘經限_一故攝_二讀誦大乘一句_一也問曰爾前經中何攝_二法華_一乎答曰今所_レ言攝者非_レ論_二權實偏圓等義_一讀誦大乘之言普通_二前後大乘諸經_一前者觀經已前諸大乘經是也後者王宮已後諸大乘經是也唯云_二大乘_一而無_レ選_二權實_一然則正當_二華嚴方等般若法華涅槃等諸大乘經_一也

(問うて曰わく、顯密の旨異なるなり。何んぞ顯の中に密を攝するや。

答えて曰わく、これ顯密の旨を攝すと云うには非ず。貞元入藏錄の中に、同じく之を編て盡く大乘經の限りに入る。故に讀誦大乘の一句に攝す。

問うて曰わく、爾前の經の中に、何ぞ法華を攝するや。

答えて曰わく、今言う所の攝とは、權實偏圓等の義を論ずるに非ず。讀誦大乘の言は、普く前後大乘の諸經に通ず。前とは觀經已前の、諸大乘經是なり。後とは王宮已後の、諸大乘經是なり。唯大乘と云うて、權實を選ぶこと無し。然れば則ち正しく華嚴、方等、般若、法華、涅槃等の諸大乘經に當れり。)

● 顕教と密教は主旨が異なるのに、なぜ『観無量寿経』の中に『法華経』という密教の經典を撰ずるのかという疑問に対して、真言宗の經典を二教に分け、釈尊が相手に応じて説いた顕教と大日如来の悟った真理そのものを密教という立場から論じるのではない。『貞元入藏錄』の中に編纂された全ての大乘經典が、今いうところの『観無量寿経』の行福に説く【読誦大乘】の一句に相当するということこ

とである。

そしてさらに、天台宗では、釈尊が最後に説いた『法華經』が最高真実の教えであり、それ以前に説かれた『觀無量壽經』は爾前の經であり、權かりの經典である。それなのになぜ『觀無量壽經』の「誦大乘」に『法華經』が撰おさまるのかという問いかけである。

それに対して、ここでは、天台宗のいう、權の大乗、実の大乗、偏った教え、円満な教えを論じているのではなく、「誦大乘」の一句は、『觀無量壽經』前後の大乗の諸經のことで、釈尊が説いた全ての大乘經典のことである。だから天台宗のいうところの華嚴、方等、般若、法華、涅槃等の諸大乘經は、悉く行福の「誦大乘」という大乘經典に含められるのである。

このように『觀無量壽經』の三福の行福に示される①發菩提心、②深信因果、③誦大乘の往生行は、自ら味わう自利の行である。

(iv) 散善三福の【C行福の④勸進行者】

そして、次の段に述べられる【C行福の④勸進行者】で利他の行が明かされるのである。

勸進行者謂勸進定散諸善及念佛三昧等^二也

（行者を勸進すとは、謂わく定散の諸善及び念佛三昧等を勸進するなり。）

❁ 【C行福の④勸進行者】とは、これまでの①發菩提心、②深信因果、③誦大乘の往生行は、自分の自利の行であったが、④勸進行者は、他の行者に『觀無量壽經』の定善と散善に説かれる善行を勧めることであり、さらに、後で説かれる念仏を特に広く勧め、共に浄土往生を願うという利他の行を説示している段である。

(三) 散善の九品

さらに、散善は三福と九品であるが、三福は序分に凡夫の往生行として説かれ、これが正宗分において九品往生行として再び開かれることをこの段で示している。

次九品者開「前三福」爲「九品業」謂上品上生中言「慈心不殺」者即當「上世福中第三句」次具諸戒行者即當「上戒福中第二句具足衆戒」次讀誦大乘者即當「上行福中第三句讀誦大乘」次修行六念者即上第三福中第三句之意也上品中生中言「善解義趣等」者即是上第三福中第二第三意也上品下生中言「深信因果發道心等」者即是上第三福第一第二意也中品上生中言「受持五戒等」者即上第二福中第二句意也中品中生中言「或一日一夜受持八戒齋等」者又同「上第二福之意」也中品下生中言「孝養父母行世仁慈等」者即上初福第一第二句意也・下品上生者是十惡罪人也臨終一念罪滅得「生下品中生者是破戒罪人也臨終聞「佛依正功德」罪滅得「生下品下生者是五逆罪人也臨終十念罪滅得」生此之三品尋常之時唯造「惡業」雖「不求」往生「臨終之時始遇「善知識」即得「往生」若準「上三福」者第三福大乘意也定善散善大槩如「此文即云」上來雖説定散兩門之益「是也」

(次に九品とは、前の三福を開して、九品の業となす。

謂わく上品上生の中に、慈心にして殺さずと言うは、即ち上の世福の中の、第三の句に當れり。

次にもろもろの戒行を具すとは、即ち上の戒福の中の第二の句の具足衆戒に當れり。

次に大乘を讀誦すとは、即ち上の行福の中の第三の句の讀誦大乘に當たれり。

次に六念を修行すとは、即ち上の第三の福の中の第三の句の意なり。

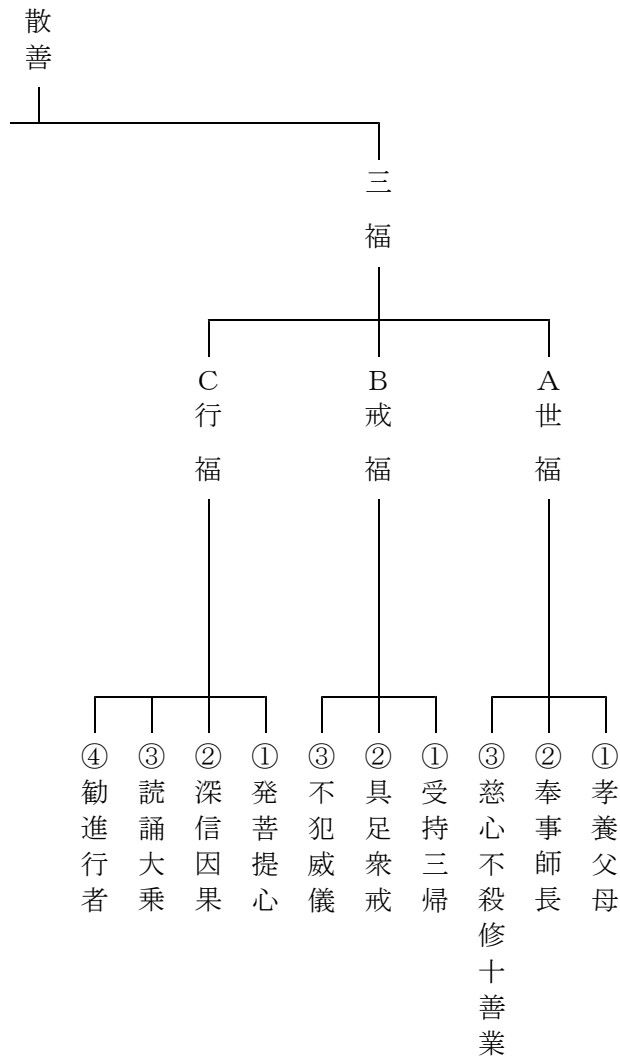
上品中生の中に、善く義趣を解す等と言うは、即ちこれ上の第三の福の中の第二、第三の意なり。

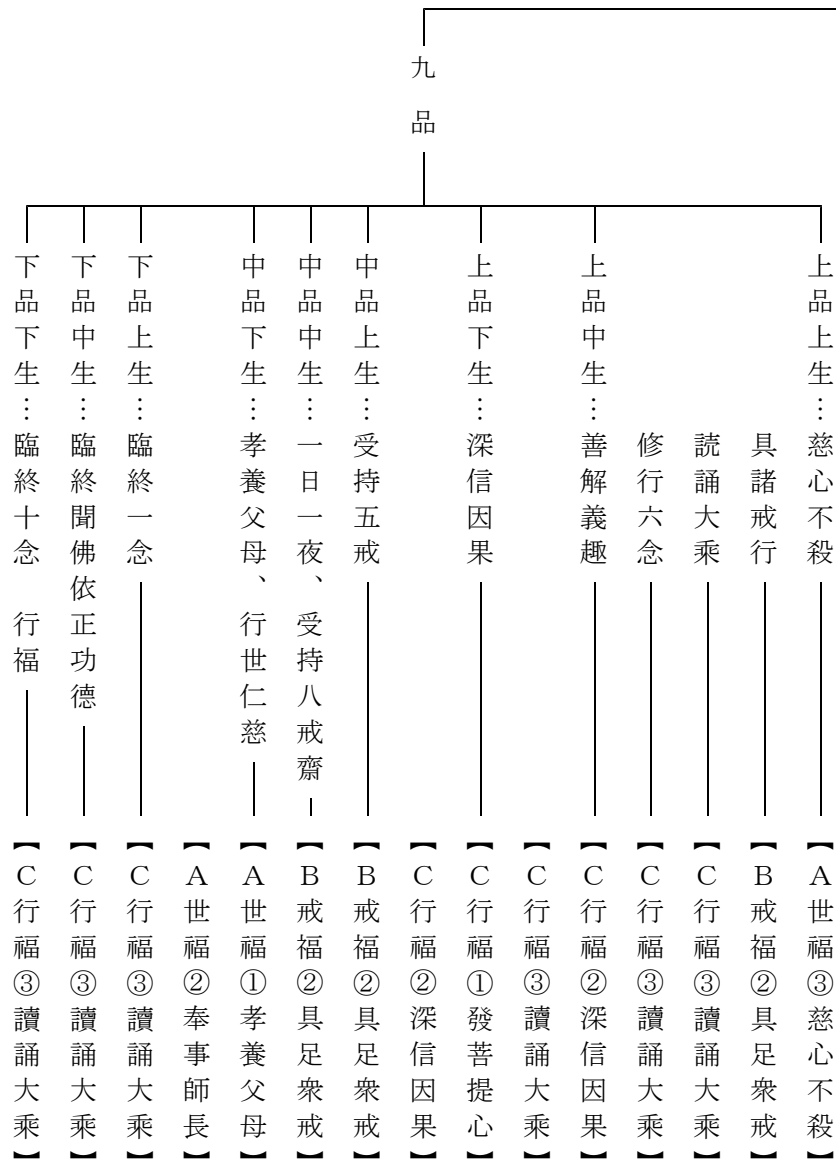
上品下生の中に、深く因果を信じ道心を発す等と言うは、即ちこれ上の第三の福の、第一第二の意なり。

中品上生の中に、五戒を受持す等と言うは、即ち上の第二の福の中の第二の句の意なり。

中品中生の中に、或いは一日一夜、八戒齋を受持す等と言うは、また上の第二の福の意に同じ。

中品下生の中に、父母に孝養し、世の仁慈を行う等と言うは、即ち上の初めの福の第一第二の句の意なり。
 下品上生は、これ十惡の罪人なり。臨終の一念に、罪滅して生ずることを得。
 下品中生は、これ破戒の罪人なり。臨終に佛の依正の功德を聞きて、罪滅して生ずることを得。
 下品下生は、これ五逆の罪人なり。臨終の十念に、罪滅して生ずることを得。
 この三品は、尋常の時、ただ惡業を造りて往生を求めずと雖も、臨終の時、始めて善知識に遇いて即ち往生を得。若し上の三福に準ぜば、第三福の大乘の意なり。定善散善、大槩たいがいかくの如し。
 文に即ち上來定散兩門の益を説くと雖もと云うはこれなり。
 このように、三福は序分に、九品は正宗分に説かれるが、これは開合の異であり、次頁の図のようになる。





以上が定善・散善兩門の利益の概要である。

まさに善導が、『觀經散善義』卷第四^(注7)で、

六從^二佛告阿難汝好持是語^一已下正明^下付^二屬彌陀名號^一流通於遐代^上上來雖^レ說^二定散兩門之益^一望^二佛本願^一意在^三衆生一向專稱^二彌陀佛名^一

(六に、佛は阿難に告げたまわく。汝、好くこの語をたもてより已下は、正しく彌陀の名號を付屬して、遐

代に流通せしめたまうことを明かす。上來、定散兩門の益を説くと雖も、佛の本願に望むれば、意は衆生をして一向に専ら阿彌陀佛の名を稱せしむるにあり。）

と説くように、これまでみたように定散兩門の利益の概要は以上のものであるが仏の本願に望むところは、衆生が一向に専ら阿彌陀仏の御名を称えることにあるのである。

(四) 念仏

(ア) 念仏は浄土往生行

そこで、次の段は、念仏について説かれていくのである。

次念佛者專稱_二彌陀佛名_一是也念佛義如_レ常而今言_下正明_下付_二屬彌陀名號_一流通_上於_レ者凡此經中既雖_三廣說_二定散諸行_一即不_レ令_下以_二定散_一付_二屬阿難_一流通_中後世_上唯以_二念佛三昧一行_一即使_下付_二屬阿難_一流通_中退代_上也問曰何故以_二定散諸行_一而不_二付屬流通_一乎若夫依_二業淺深_一嫌不_二付屬_一三福業中有_レ淺有_レ深其淺業者孝養父母奉事師長也其深業者具足衆戒發菩提心深信因果讀誦大乘也須_下捨_二淺業_一付_中屬深業_上若依_二觀淺深_一嫌不_二付屬_一十三觀中有_レ淺有_レ深其淺觀者日想水想是也其深觀者始自_二地觀_一終_二于雜想觀_一總十一觀是也須_下捨_二淺觀_一付_中屬深觀_上就_レ中第九觀是阿彌陀佛觀也即是觀佛三昧也須_下捨_二十二觀_一付_中屬觀佛三昧_上也就_レ中同疏玄義分中云此經觀佛三昧爲_レ宗亦念佛三昧爲_レ宗既以_二二行_一爲_二一經宗_一何廢_二觀佛三昧_一而付_二屬念佛三昧_一哉答曰既云_四望_二佛本願_一意在_三衆生一向專稱_二彌陀佛名_一定散諸行非_二本願_一故不_二付屬_一亦於_二其中_一觀佛三昧雖_二殊勝行_一非_二佛本願_一故不_二付屬_一念佛三昧是佛本願故以付屬言_二望佛本願_一者指_二雙卷經四十八願中第十八願_一也言_二一向專稱_一者指_二同經三輩之中一向專念_一也本願之義具如_二前辨_一

(次に念佛とは、専ら彌陀佛の名を稱するこれなり。念佛の義、常の如し。

しかるに今正しく彌陀の名號を付屬して、退代に流通することを明すと言うは、凡そ此の經の中に、既に

廣く定散の諸行を説くと雖も、即ち定散を以って、阿難に付屬して、後世に流通せしめず。ただ念佛三味の一行を以って、即ち阿難に付屬して、遐代に流通せしむるなり。

問うて曰わく、何が故ぞ定散の諸行を以って、付屬流通せざるや。もしそれ業の淺深に依って、嫌いて付屬せずば、三福の業の中に、淺あり、深あり。その淺業は、孝養父母、奉事師長なり。その深業は、具足衆戒、發菩提心、深信因果、讀誦大乘なり。すべからく淺業を捨てて、深業を付屬すべし。

もし觀の淺深に依りて、嫌うて付屬せずば、十三觀の中に、淺あり深あり。その淺觀は、日想、水想これなり。その深觀は、始め地觀より、雜想觀を終るまで、總て十一觀これなり。すべからく淺觀を捨て、深觀を付屬すべし。

中に就いて第九の觀は、是れ阿彌陀佛觀なり。即ち是れ觀佛三昧なり。すべからく十二觀を捨て、觀佛三昧を付屬すべし。

中に就いて同疏の玄義分の中に云わく、この經は觀佛三昧を宗となし、また念佛三昧を宗となすと。

すでに二行を以って、一經の宗とす。何ぞ觀佛三昧を廢して、念佛三昧を付屬するや。

答えて曰わく、すでに佛の本願に望むるに、意、衆生をして、一向に専ら彌陀佛の名を稱せしむるにありという。

定散の諸行は本願に非ず。故に付屬せず。またその中において、觀佛三昧は、殊勝の行なりと雖も、佛の本願に非ず。故に付屬せず。念佛三昧は、これ佛の本願なり。故に以って付屬す。

望佛本願というは、雙卷經の四十八願の中の、第十八願を指すなり。

一向專稱というは、同經の三輩の中の、一向專念を指すなり。本願の義、具には前に辨ずるが如し。)

* 『觀無量壽經』に説かれる淨土往生行は、大きく分けて定善の諸行と念仏行であるが、いまここである念仏行は、仏の本願を深く信じて淨土往生を願ひ、口に専ら阿彌陀仏の御名を称えることで、これまで幾

度となく説いてきたことである。

また、善導の『観經疏散善義』の文の中で、「阿弥陀仏の名号を、遙か後の世まで流通することを託した」とあるのは、釈尊がこの『観無量寿經』で、定善散善の諸行があることを明かしたにも拘わらず、定散両善を後世に永く流通させることを託さず、ただ念仏三昧の一行だけを阿難に託したのである。

なぜ釈尊が念仏の一行だけを阿難に託し、定散両善の諸行を託さなかったのかといえ、それは、もし行業の浅深によって、嫌って付屬しないとすれば、三福の行業の中にも浅深があることになる。

三福の中の孝養父母、奉事師長は浅業になり、具足衆戒、發菩提心、深信因果、讀誦大乘は深業になる。もし、浅深の苦別をするならば、当然のこととして浅業を捨てて深業を付屬することになる。

さらに、定善十三觀の中に浅深があるとすれば、第一の日想觀、第二の水想觀は浅觀であり、第三地想觀から第十三雜想觀までの十一觀は深觀ということになり、当然のこととして浅觀を捨てて深觀を付屬することになる。

また、十一觀のうち、第九阿弥陀仏觀は、仏の真身を觀想する最も深い行業であるので、他の十二觀を捨て、觀仏三昧を付屬しなければならない筈である。

そしてさらに、善導の『観經玄義分』卷第一^(注8)に、

今此觀經卽以「觀佛三昧」爲「宗」亦以「念佛三昧」爲「宗」一心廻願往「生淨土」爲「體」

(今、この觀經は、即ち觀佛三昧をもって宗となし、また念佛三昧をもって宗となす。一心に廻願して淨土に往生するを體となす。)

とあり、『観無量寿經』は二つの根本的な主旨のもとに説かれている經典で、その一つは觀仏三昧であり、他の一つは念仏三昧であるとしているのに、どうして觀仏三昧を廢して念仏三昧を付屬するのかという疑問である。

この疑問に対して、すでに『觀經疏散善義』で説いたように、阿弥陀仏の本願からすれば、この經を説いたその御心は、衆生に一向に専ら阿弥陀仏の名を称すことであるが、定散の諸行は本願ではないので付属しなかったのである。

また、觀仏三昧も殊勝な行であるけれども、仏の本願でないので、やはり付属されず、念仏三昧は仏の本願であるために付属されたのである。

さらに、善導が「望佛本願」と説いたことについても、先に説かれた、

上來雖_レ説_二定散兩門之益_一望_二佛本願_一意在_二衆生一向專稱_二彌陀佛名_一

（上來、定散兩門の益を説くと雖も、佛の本願に望むれば、意は衆生をして一向に専ら彌陀佛の名を稱せしむるにあり。）

の「佛の本願に望むれば、意は衆生をして一向に専ら彌陀佛の名を稱せしむるにあり」を指し、その本願とは、『無量壽經』の四十八願の、第十八願念仏往生願を指しているのである。

また、「一向專稱」というのも、『無量壽經』の三輩段に説かれる「一向專念無量壽仏」を指すのであり、詳細については、『選択本願念仏集』第三章念仏往生本願篇で説いた通りであると述べている。

(イ) 念仏は本願の往生行

そして、次の段は、念仏が本願の往生行であり、それだけが付属されるほど重要であるなら、煩わしく『觀無量壽經』に非本願の定散兩善を説かず、直ちに本願念仏だけを説くべきではないかという疑問に対する答えが述べられるのである。

問曰若爾者何故不_二直説_二本願念仏行_一煩説_二非本願定散諸善_一乎答曰本願念仏行雙卷經中委既説_レ之故不_二重説_一耳又説_二定散爲_レ顯_二念佛超_二過餘善_一若無_二定散_一何顯_二念佛特秀_一例如_二法華秀_二三説上_一若無_二三説_一何顯_二法華第一_一故今定散爲_レ廢而説念佛三昧爲_レ立而説

(問うて曰わく、もししからば何が故ぞ直ちに本願念佛の行を説かずして、煩わしく非本願の定散の諸善を説くや。

答えて曰わく、本願念佛の行は、雙卷經の中に、くわしく既にこれを説く。故に重ねて説かざるのみ。また定散を説くことは、念佛の餘善に超過することを顯さんがためなり。もし定散無くば、何ぞ念佛の特^{ひと}り秀でたることを顯さん。例せば法華の三説の上に秀でたるが如し。若し三説無くんば、何ぞ法華第一なることを顯さん。故に、今、定散は、廢の爲にしかも説き、念佛三昧は立の爲にしかも説く。)

* なぜ、非本願の定散両善の諸行が『觀無量壽經』に説かれるかといえ、本願念佛の行については『無量壽經』に詳しく説かれていたので、重ねて説かないだけなのである。

また、定散両善の諸行を煩わしく説くことは、念佛の行が他の諸行に比べて特に勝れていることを明かすためである。もし定散両善が説かれなければ、どうして念佛がひとり特別秀でていることを顯すことができるであろうか、それは難しいことなのである。

例えば、天台学では、『法華經』が最も勝れた經典であることを顯すために、三説^(注9)(已説・今説・當説)といつて、法華經以前に已に説かれた『大品般若經』等の諸説、今説くところの『法華經』、これから後に説かれるであろう『涅槃經』等と比較するようなものである。もし、三説がなければ、どうして『法華經』が第一であるということが顯されるであろうか。

だから、今、定散両善の諸行は、廢される法門であるにも拘わらず、敢えて説かれた諸行であり、これに対して念仏の一行は、最も勝れた法門として永遠に立てるために説かれた行である、ということが述べられている。

(ウ) 定散諸善の功德

續けて次の段からは、右のように廢されるために説かれた定散両善について、その諸善にも勝れた功德があ

ることを認識し、あらためて念仏が付屬されることが述べられる。

但定散諸善皆以難^レ測凡定善者夫依正之觀懸^レ鏡而照臨往生之願指^レ掌而速疾或一觀之力能祛^二多劫之罪慳^一或具憶之功終得^二三昧之勝利^一然則求^二往生之人^一宜^レ修^二行定觀^一就^レ中第九眞身觀是觀佛三昧之法也行若成就者即見^二彌陀身^一見^二彌陀^一故得^レ見^二諸佛^一見^二諸佛^一故現前授記此觀利益最甚深也然今至^下觀經流通分釋迦如來告^二命阿難^一使^レ付^二屬流通往生要法^一嫌^二觀佛法^一而不^レ付^二屬阿難^一而選^二念佛法^一即以付^二屬阿難^一觀佛三昧之法尚以不^二付屬^一何況於^二日想水想等觀^一乎然則十三定觀皆是所^レ不^二付屬^一之行也然世人若樂^二觀佛等^一不^レ修^二念佛^一此非^二唯遠乖^一彌陀本願^一亦是近違^二釋尊付屬^一行者宜^二商量^一

（但し定散の諸善、皆以つて測り難し。凡そ定善とは、夫れ依正の觀、鏡を懸けて照臨し、往生の願、^{たなごころ}掌を指して速疾なり。或いは一觀の力、能く祛^{ざいけん}多劫の罪慳^{しりぞ}を祛^レけ、或いは具憶^{ぐおく}の功、終に三昧の勝利を得。然れば則ち往生を求めん人、宜しく定觀を修行すべし。

中に就いて第九の眞身觀は、是れ觀佛三昧の法なり。行若し成就すれば、即ち彌陀の身を見る。彌陀を見るが故に、諸佛を見ることを得。諸佛を見るが故に、現前に授記せらる。此の觀の利益、最も甚深なり。然るに、今、觀經の流通分に、釋迦如來、阿難に告^{ごうみょう}命して、往生の要法を付屬し、流通せしむるに至りて、觀佛の法を嫌いて阿難に付屬せず。念佛の法を選びて即ち以て阿難に付屬す。

觀佛三昧の法、尚以つて付屬せず。何^{いかにい}況や日想、水想等の觀に於いてをや。然れば則ち十三定觀は、皆、是れ付屬せざる所の行なり。然るに世人^{せにん}もし觀佛等を樂^{ねが}いて、念佛を修せざるは、これただ遠く彌陀の本願に乖^{そむ}くのに非ず。またこれ近く釋尊の付屬に違す。行者宜しく商量すべし。）

＊ このように廢のために説かれた定散の諸善にも、勝れた功德があるし、修行によつて得られる広大な利益は計り知れないのである。

先ず、定善であるが、經典に説かれるように宝地、宝樹、宝池、宝楼等の極樂淨土の依報と阿彌陀仏

や観音勢至両菩薩等の正報を觀想することによって、鏡に種々の姿形を照らすように明らかに觀ることができれば、その功德によつて、自らの掌を指すように、速やかに浄土往生の願いが間違ひなく達成されるのである。

定善十三觀の中の一つを觀想しても、過去に重ねた計り知れない程の罪業を除滅することができ、さらに、十三觀を悉く觀想するならば、その功德によつて觀仏三昧の境地に至り、勝利を得ることができるのである。だから、浄土往生を願求する人は、よろしくこの定善の觀法を修すべきである。

特に其の中でも、第九真身觀は、まさしく觀仏三昧の究極の觀法であり、もしこの三昧が成就すれば、阿弥陀仏の真身を見奉ることができるのである。阿弥陀仏を見奉ることができれば、阿弥陀仏は諸仏の法王であるので、一切の諸仏を見奉ることになるのである。諸仏を見奉ることができれば、仏から目の前で成仏できるという現前授記（仏から将来成仏するであろうと予言を授かること）の証を得ることができるのである。だから、この第九真身觀の功德は、最も深い利益があるのである。

それにもかかわらず、今、この『觀無量壽經』の結論である流通分において、釈尊は、往生のための肝要な法門を付属し、後世に永く流通することを阿難に対して命じて告げるには、觀仏三昧の法にはふれず、念仏三昧の法を選んだのである。

この定善で最も勝れた觀仏三昧の法を授けなかったくらいなので、まして日想觀や水想觀等は勿論、他の觀法等は授けられる筈もないのである。よつて、この定善十三觀は、みな悉く付属されなかったのである。

だから、もしも世の人々が觀仏その他の觀想を務めて修し、念仏を称えなかったとすれば、その人は遠くは阿弥陀仏の本願に背くのみならず、近くは釈尊が選んで付属した法門に違背することになる、と述べられている。

(エ) 散善の四箇の行

そしてさらに、散善について、大乘、小乗の持戒等の四箇の行の視点から述べられる。

次散善中有^二大小持戒行^一世皆以爲持戒行者是入眞要也破戒之者不^レ可^二往生^一又有^二菩提心行^一人皆以爲菩提心是淨土綱要若無^二菩提心^一者即不^レ可^二往生^一又有^二解第一義行^一此是理觀也人亦以爲理是佛源不^レ可^二離^レ理求^二佛土^一若無^二理觀^一者不^レ可^二往生^一又有^二讀誦大乘行^一人皆以爲讀^二誦大乘經^一即可^二往生^一若無^二讀誦行^一者不^レ可^二往生^一就^レ此有^二二一者持經二者持呪持經者持^二般若法華等諸大乘經^一也持呪者持^二隨求尊勝光明阿彌陀等諸神呪^一也凡散善十一人皆雖^二是貴^一而於^二其中^一此四箇行當世之人殊所^レ欲之行也以^二此等行^一殆抑^二念佛^一情尋^二經意^一者不^レ以^二此諸行^一付屬流通^上唯以^二念佛一行^一即使^四付^二屬流^三通後世^一應^レ知釋尊所^二以不^レ付^二屬諸行^一者即是非^二彌陀本願^一故也亦所^三以付^二屬念佛^一者即是彌陀本願故也今又善導和尚所^下以廢^二諸行^一歸^中念佛^上者即爲^二彌陀本願^一之行亦是釋尊付屬之行也

(次に散善の中に、大小の持戒の行有り。世、皆おもえらく、持戒の行はこれ入眞の要なり。破戒の者は、往生すべからずと。

また菩提心の行有り。人、皆おもえらく、菩提心はこれ淨土の綱要なり。もし菩提心無き者は、即ち往生すべからずと。

また解第一義の行有り。これはこれ理觀なり。人、またおもえらく、理はこれ佛の源なり。理を離れて佛土を求むべからず。もし理觀無き者は往生すべからずと。

また讀誦大乘の行有り。人、皆おもえらく、大乘經を讀誦せば、即ち往生すべし。もし讀誦の行無き者は、往生すべからずと。これについて二有り。一には持經。二には持呪なり。

持經とは、般若、法華等の諸々の大乘經を持するなり。

持呪とは、隨求、尊勝、光明、阿彌陀等の、諸々の神呪を持するなり。

凡そ散善の十一人、皆これ貴しと雖も、しかも其の中に於いて、この四箇の行は、當世の人、殊に欲する所の行なり。此等の行を以って、殆ど念佛を抑おさう。つらつら經の意を尋ねれば、この諸行を以って、付屬し、流通せず。ただ念佛の一行を以って、即ち後世に付屬し、流通せしむ。

應に知るべし、釋尊の諸行を付屬したまわざるゆえんは、即ちこれ彌陀の本願に非ざるが故なり。また念佛を付屬したまうゆえんは、即ちこれ彌陀の本願なるが故なり。

今また善導和尚、諸行を廢して、念佛に歸せしむるゆえんは、即ち彌陀の本願たるの上、またこれ釈尊付屬の行なればなり。）

＊ 次に散善について述べるならば、散善の中にも様々な行が説かれ、まず、大乘戒や小乘戒を保つ行がある。世間の人々は、戒を保つことが悟りを開くために無くてはならない肝要な法門であるとし、破戒の者は浄土往生がかなわないと考えられている。

また、菩提心を發こして悟りを求める行がある。世間の人々は、この菩提心を發こすことが浄土往生の肝要な大綱になるという法門であつて、これが無くては浄土往生が不可能であると考えられている。

そして、究極の真如の理を悟るための行がある。世間の人々は、真理は仏の本体であるから、真理を悟るための觀法は全ての法の中心となるものであるもので、もしその真理を觀ずる行から離れては浄土往生が望めないと考えられている。

またさらに、大乘經典を讀誦する讀誦大乘の行がある。世間の人々は、經典を讀誦して仏法を学ぶことから、浄土往生のためには讀誦大乘の行がなければならぬと考えられている。

この讀誦大乘には、持經と持呪の二種があり、持經とは、『般若經』『法華經』等の種々の大乘經典を受持し讀誦することであり、持呪とは、『隨求陀羅尼』『尊勝陀羅尼』『光明真言』『阿彌陀陀羅尼』等の總持の呪文を称えることである。

その他に散善行には、散善三福で説いたように十一の行が挙げられているが、それらの行はいずれもみな貴いものであるが、今、挙げている、一に持戒行、二に発菩提心行、三に解第一義行、四に読誦大乘行の四箇の行は、この頃の世間の人々から最も尊重され流行している行である。そのためこの四箇の行が仏法修行の基本であるかのごとく、念仏よりも重んじ、さらには抑制までしているのが現状である。ところが、よくよく『観無量寿經』の聖旨を窺ってみれば、この定散二善の諸行を捨て、付属流通せず、ただ念仏の一行を以って、後世に永久に伝えるようにと阿難に託したのである。

なぜ釈尊が定散二善の諸行を付属しなかったのかは、阿弥陀仏の本願ではなかったからであり、念仏を付属したのは阿弥陀仏の本願であつたからなのである。

さらに、今また善導和尚が、『観經散善義』で諸行を廃して念仏を勧めるのも、阿弥陀仏がたてた本願行であるばかりではなく、釈尊が阿難に付属した行であるということが述べられている。

(才) 念仏付属の理由

そして、次の段は、仏の随他意、随自意の視点から念仏付属の理由が説き明かされる。

故知諸行非_レ機失_レ時念佛往生當_レ機得_レ時感應豈唐捐哉當_レ知隨佗之前雖_三暫開_二定散門_一隨自之後還閉_二定散門_一一開以後永不_レ閉者唯是念佛一門彌陀本願釋尊付屬意在_レ此矣行者應_レ知亦此中退代者依_二雙卷經意_一遠指_二末法萬年後之百歲之時_一也是_レ則舉_レ遐攝_レ邇也然則法滅之後猶以然也何況末法哉末法已然何況正法像法哉故知念佛往生道通_二正像末之三時及法滅百歲之時_一焉

(故に知んぬ。諸行は、機に非ず時を失えり。念佛往生は、機に當り時を得たり。感應豈に唐捐ならんや。當に知るべし。隨佗の前には、暫く定散の門を開くと雖も、隨自の後には、還つて定散の門を閉づ。

一たび開きて以後、永く閉じざるは、ただこれ念佛の一門なり。彌陀の本願、釋尊の付属、意ここに在り。行者應に知るべし。

またこの中に遐代^{かだい}とは、『雙卷經』の意に依るに、遠く末法萬年の後の百歳の時を指すなり。
これ則ち遐^{とおき}を擧^あて遷^{ちかき}を攝す。然れば則ち法滅の後、猶以って然^{しか}なり。いかにいわんや末法をや。末法已に然り。いかにいわんや正法、像法をや。故に知んぬ、念佛往生の道は、正像末の三時、及び法滅百歳の時に通ずることを。

* このように、定散両善の諸行は、人々の資質や能力に合わない行となり、末法という時期にそぐわない行なのである。それに対して念仏は、五濁惡世の末法の凡夫にとつては時を得た法門で、まさに、衆生の感と仏との応とが互に交融する感應道交であり、どうしてこれがむなしく捨てられるという唐捐^{とうえん}になるであらうか。だから、釈尊が相手の求めに応じて説いた隨他意の定散二善の法門を開いたものの、末法の世の衆生を救うために仏が自ら慈悲をもつて救済しようとした隨自意の念仏が時を得て開かれたために、定散二善の門は閉じられたのである。

そして、念仏の一門だけは、一度開かれた後、末法萬年の世まで閉じることなく永久に残される法門なのである。それは、阿弥陀仏の念仏往生の本願によるものであり、釈尊が念仏を末世の凡夫の為に後世に永久に残るように託し、付属したものであるので、行者はその聖意をよく知らねばならないのである。

また、善導和尚が、「遐代」^(注7)といっているのは、『無量壽經』の趣旨によれば、遠く末法萬年の後の百年の時を示したものである。だからそのような遠い末世まで伝えられて救う力のある念仏であるから、まして釈尊に近いところの現代ならなおさらのことである。

であるから、仏法が亡くなる法滅の世までも伝えられるのであるから、末法の今日はいうまでもなく利益があるのである。したがって、念仏往生の道は、正法・像法・末法の三時は勿論のこと、他の仏法が滅尽しても、悩める衆生を解脱の世界に通入する功德があるということが述べられている。

四 法然私釈段の論理展開の概要

右の【三 『選択本願念仏集』の私釈】段が『選択本願念仏集』中、最長の二十三丁に及ぶ長文であり、その論理展開が細分化され複雑であることから、法然の『観無量寿経』解釈の全体像を把握するためにも、ここでは、再度、簡条書きにして概略を捉え、理解を深めることにする。

● 篇目

＊ 釈尊不付属定散諸行唯以念仏付属阿難之文

● 引文

＊ 『観無量寿経』流通分、念仏を阿難に付属する文。

＊ 『観経疏』散善義の釈文。

● 私釈

＊ 善導の『観無量寿経疏』の釈を通して、定散二善の法門と念仏の法門の二門が説かれ、初めに定散二善の法門が説かれる。

＊ 定散二善の、定善の十三観が説かれる。

① 日想観、② 水想観、③ 地想観、④ 宝樹観、⑤ 宝池観、⑥ 宝樓閣、⑦ 華座観、⑧ 像想観、⑨ 阿弥陀仏観、⑩ 観音観、⑪ 勢至観、⑫ 普往生観、⑬ 雜想観

＊ 定散二善の散善の中の三福が説かれる。

・ 散善三福の世福が説かれる。

① 孝養父母、② 奉事師長、③ 慈心不殺・修十善業

・ 散善三福の戒福が説かれる。

① 受持三帰、② 具足衆戒、③ 不犯威儀

・散善三福の行福が説かれる。

① 發菩提心、② 深信因果、③ 讀誦大乘、④ 勸進行者

* 散善の九品について、それぞれ三福との関連を踏まえて説かれる。

・ 上品上生、上品中生、上品下生

・ 中品上生、中品中生、中品下生

・ 下品上生、下品中生、下品下生

* 散善は三福と九品であるが、三福は序分で凡夫の往生行として説かれ、これが正宗分では、九品往生行として再び説かれ、開合の異であることが説かれる。

* 念仏行とは、専ら阿弥陀仏の御名を称えることであり、『観無量寿経』に説く定散二善は流通せず、念仏三昧の一行のみを遐代に流通するよう阿難に付属する。

* 『観無量寿経』には観仏三昧と念仏三昧の二つの主旨があるが、なぜ観仏三昧を廃して念仏三昧を付属するのか、その理由が説かれる。

* 阿弥陀仏の本願とは、『無量寿経』の四十八願の第十八願念仏往生願を指している。詳細は、『選択本願念仏集』第三章念仏往生本願篇で説いた通りである。

* 念仏が本願の往生行であり、付属されるほど重要ならば、『観無量寿経』に非本願の定散二善を説かず、直ちに本願念仏を説くべきではないかという問いに、すでに『無量寿経』に本願について詳細に説かれているので、『観無量寿経』では重ねて説かないのである。

* 廃の為に説かれた定散の諸善にも勝れた功德があり、その利益は量りがたいものがあるが、釈尊は観仏三昧の法にはふれず、念仏三昧の法を立の為に選んだのである。

* 特に観仏三昧の第九真身観は、その利益に量りがたいものがあるが、衆生には堪えられない行であり、

釈尊が『観無量寿経』の結論として選び取らず、付属しなかったのである。もし、観仏等の行法を願って念仏を称えないことになれば、阿弥陀仏の本願に乖くばかりか、釈尊の付属した御意に違背することになるからである。

＊散善に挙げる持戒行・発菩提心行・解第一義行・読誦大乘行の四箇の行が、仏教修行の基本のようにとらえられているが、念仏こそが阿弥陀仏の本願であるから、釈尊が阿難に付属したのである。

＊釈尊が隨他意の定散二門を開いたが、末法世の衆生救済の為に説かれた隨自意の念仏が、時を得て開かれたので、定散二善は閉じられたのである。

＊念仏往生の道は、正・像・末の三時は勿論、他の仏法が滅尽しても解脱通入の功德があることから、未来永劫まで伝える唯一の法門であることを阿難に付属したのである。

右のように、善導の『観経疏』の釈をもとに、『観無量寿経』の定散二善の法門が示され、定善の十三観、散善の三福がそれぞれ説かれるのである。

そして、続いて散善の九品が散善の三福との関係を踏まえながら説かれていくのである。

さらに、その三福は序分で凡夫の往生行として説かれるが、これが正宗分では、九品往生行として再び説かれ、開合の異であることが述べられるのである。

また、観仏三昧と念仏三昧が説かれているが、なぜ念仏三昧だけが、正・像・末の三時及び仏法滅尽後の未来永劫まで伝えなければならない法門であるかが説かれ、釈尊が阿難に付属したことが述べられる流れになっている。

このような流れを踏まえ、高田敬輔は最終局面である念仏を阿難に付属する場面を次頁のような絵相として表現しているのである。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第十二 唯以念佛付屬阿難章)の絵相

高田敬輔「選択集十六章之図」(第十二 唯以念佛付屬阿難章)の絵相



《絵相の部分構成》

* 標章……第十二 唯以念佛付屬阿難章

* 釈迦仏……念仏を阿難に付属する。

* 阿難……仏前の尼師壇の上で、合掌長
跪し、念仏の付属を賜る。

* 十代弟子

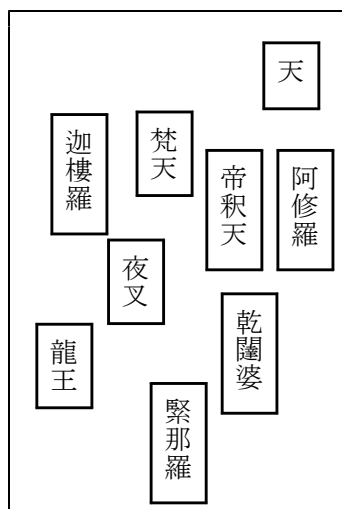
* 天龍八部衆

【参考画図】高田敬輔画 信楽院本堂天井画 外陣北室「八大龍王」

*高田敬輔の菩提寺である滋賀県日野町信楽院本堂の外陣北室の天井に描かれる「八大龍王」図。
前頁の阿難付属の場面で、釈尊説法の会衆として、十大弟子と二体の天竜八部衆が描かれるが、二体の存在を特定するために参考にしたい高田敬輔作品である。



*天竜八部衆の配置



國賀氏は、「八大龍王」を右図のように配置し、特定した上で、「八大龍王」とされてきた圖像が九體なもの、あるいは韋駄天と併せて、計十體を描くという意識が働いていたのかもしれない。」と外陣南室の「韋駄天」画と併せて考察している。

【國賀由美子「研究資料 高田敬輔筆 信楽院天井畫」三十四～三十六頁

（『國華』千三百六十八號 平成二十一年）

右のように、第十二章の絵相は、「釈尊」「阿難」「出家者十人」「八大龍王のうち二体」で構成されている。「八大龍王のうち二体」は、【参考画図】信楽院本堂天井画と照らし合わせれば、一体は髪が逆立っている様相から「夜叉」、もう一体は兜を付けて人に似た形貌から「緊那羅」と思われる。

また、もう一点、「出家者十人」は、釈迦説法の会衆、十代弟子（舍利弗・摩訶目犍連・摩訶迦葉・須菩提・富楼那・大迦旃延・阿那律・優波離・羅睺羅・阿難陀）を象徴的に描いたものと思われる。だが、十代弟子には阿難も含まれ、阿難は仏前に合掌長跪しているので一人足りないことになる。そこで、おそらく『無量寿経』発起序に説かれる三十一人の大弟子の中から選ばれた十人が描かれたのではないかと考えられる。

六 まとめ

以上の考察を通して、第十二章の絵相は、次のような内容を包含して表現されたと考えられる。

① 「第十二 唯以念佛付屬阿難章」の絵相は、釈尊が念仏を遐代まで伝持することを阿難に付属している場面である。仏前に尼師壇を敷き、その上に合掌・長跪する阿難。それを取りまく十大弟子と二体の八大龍王が、構成内容として象徴的に描かれていること。

② 釈尊が阿難に付属する内容は、定善十三観、散善三福（世福・戒福・行福）、散善九品、念仏の随自意・隨他意、観仏三昧第九真身観の利益等の重要な教義が多数盛り込まれたもので、その上に立って念仏往生は正・像・末の三時及び法滅百歳に通ずるという意図のもとに描かれていること。

③ 第十二章の私釈段は、『選択本願念仏集』中、最長の長文であるが、法然の『観無量寿経』観が反映され、結論として標章「唯以念佛付屬阿難章」にあるように、念仏の一行に帰着し、遐代まで付属することが阿難に託されることを強調した絵相であること。

(注1) 天台宗の菩提心について

『摩訶止観』巻第一上

【原文】『摩訶止観』巻第一上（大正新脩大蔵経第四十六巻六頁 a07）

【書き下し文】『國譯一切經』諸宗部三 三十頁（岩野真雄 昭和三十三年刊 大東出版社）

(注2) 真言宗の菩提心について

『金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論』《菩提心論》

【原文】『眞言宗全書』第八 三頁（續眞言宗全書刊行會 昭和五十三年發行〈復刊〉同朋舎出版）

【書き下し文】『昭和新纂國譯大蔵経』宗典部第二巻 眞言聖典 七十四頁（昭和新纂國譯大蔵経編輯部 昭和四年刊 東方書院）

(注3) 華嚴宗の菩提心について

『大方廣佛華嚴経』巻第三十七 離世間品第三十三之二（大正新脩大蔵経第九巻六三三頁 c06）

(注4) 善導の菩提心について

『観経疏』散善義巻第四（浄土宗全書第二巻六四頁）

(注5) 五種法師について

『妙法蓮華経』法師功德品第十九（大正新脩大蔵経第九巻四十七頁 c02）

(注6) 十種法行について

『中邊分別論』巻下（大正新脩大蔵経第三十一巻四六一頁 a23）

善導『観経散善義』巻第四（浄土宗全書第二巻七十一頁）

(注8) 善導『観経玄義分』巻第一（浄土宗全書第二巻三頁）

(注9) 三説について

『妙法蓮華経』法師品第十（大正新脩大蔵経第九巻三十一頁 b16）

第十三項 「第十三 念佛多善雜善小善章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第十三 念佛多善雜善小善章

二 『選択本願念仏集』の篇目

以「念佛」爲「多善根」以「雜善」爲「小善根」之文

（念佛を以つて多善根とし、雜善を以つて小善根とするの文）

* 前章は、『觀無量壽經』、『觀經疏』の引文に基づいて、『觀無量壽經』の結論部分の「汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名」を巡り、定散二善よりも念仏の一行を遐代まで伝持することを阿難に付属する場面が描かれた。

今章は、『阿弥陀經』の説示に基づいて、『阿弥陀經』『法事讃』の引文から念仏が多善根であり、大善根であり、勝善根であることが説かれる。

尚、第七章から、前章第十二章までは、『觀無量壽經』をもとに説示されているので、觀無量壽經撮要とされているが、今章第十三章より第十六章までは『阿弥陀經』に基づいた説示なので、阿弥陀經撮要といわれている。

三 『選択本願念仏集』の引文

(一) 『阿弥陀經』

今章から引用される經文は『阿彌陀經』^(注1)である。

阿彌陀經云不_レ可_下以_二少善根福德因緣_一得_レ生_二彼國_一舍利弗若有_二善男子善女人_一聞_レ說_二阿彌陀佛_一執_二持名號_一若一日若二日若三日若四日若五日若六日若七日一心不亂其人臨_二命終_一時阿彌陀佛與_二諸聖衆_一現_二在其前_一是人終時心不_二顛倒_一即得_レ往_二生阿彌陀佛極樂國土_一

(阿彌陀經に云_{のたま}わく、少善根、福德の因縁を以って、彼の國に生ずることを得べからず。

舍利弗、もし善男子善女人有りて、阿彌陀佛を説くを聞きて、名號を執_{しゅうじ}持_じすること、もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日、一心不亂なれば、その人、命終の時に臨みて、阿彌陀佛、もろもろの聖衆とともに、その前に現在したまう。この人終る時、心顛倒せずして、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生を得と。)

* 『阿彌陀經』には、善根の功德が少ない少善根の福德による因縁では、浄土往生が困難であると説く。釈尊が舍利弗に告げるには、

「もし浄土を願求する善男子、善女人があつて、阿彌陀仏の説く本願の名号を称えるものが、もしは一日、もしは二日、もしは三日、若しは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日と、一心不亂に念仏を称えるならば、その人が命終の時に臨んで、阿彌陀仏は觀音・勢至両菩薩をはじめ諸々の聖衆とともに現前したまうのである。

その人は、心が顛倒することも無く、速やかに阿彌陀仏の極樂國土に往生することができるのである」と。

つまり、少善根では浄土往生が困難であるが、阿彌陀仏が説く本願念仏を、一日でも二日でも三日でも四日でも五日でも六日でも七日でも、その人の資質によって一心不亂に称えることによって、その人が命終の時に、阿彌陀仏は諸々の聖衆を引き連れて現前するのである。だから、その人は、心が乱れることなく速やかに浄土往生がかなうのであると述べられている。

(二) 『法事讃』

この『阿弥陀経』の経文を、善導は『法事讃』^(注2)で、次のような解釈をしている。

善導釋「此文」云極樂無爲涅槃界隨緣雜善恐難「生故使」如來選「要法」教念「彌陀」專復專「七日夜心無間長時起行倍皆然臨終聖衆持」華現身心踊躍坐「金蓮」坐時即得「無生忍」一念迎將至「佛前」法侶將「衣競來著證」得不退「入」三賢

(善導此の文を釋して云わく、極樂は無爲涅槃の界なれば、隨緣の雜善は恐らくは生じ難し。故に如來要法を選びて、教えて彌陀を念ずること專にしてまた專なら使む。七日夜、心、無間に、長時の起行もます、皆、然なり。臨終に聖衆、華を持して現ず。身心踊躍して金蓮に坐す。坐する時、即ち無生忍を得。一念に迎將して佛前に至る。法侶、衣を將つて競い來りて著せしむ。不退を證得して三賢に入る。)

* 右の『阿弥陀経』の経文について、善導は『法事讃』で次のように解釈している。

極樂は、煩惱による消滅のない無為の世界であり、一切の煩惱が生滅した涅槃の世界である。

釈尊が、衆生の求めるところに隨つて説かれた隨他意の説法である隨緣の雜善は、恐らくは淨土往生は難しいと思われる。

だから、釈尊は、一切の行法の中から最も肝要な念仏を称えるという法門を選択して教示したのである。それはすなわち、阿弥陀仏を専らに称念することであり、一向專修の法門である。

七日夜にわたって間斷なく念仏を称え、ひいては生涯を通じて長時に念仏を相続することである。

そうすれば、このように念仏を称えたものの臨終には、阿弥陀仏が諸々の聖衆を從えながら、蓮華台を持って來迎するのである。それをみる念仏の行者は、身も心も歡喜し、踊躍して金蓮台に坐するのである。坐しおわればたちまち不生不滅の真理を悟って、再び迷界に戻ることのない安らぎを得るのである。そしてわずか一念という瞬く間に來迎引接され、仏の前に到ることができるのである。

すると、観音、勢至などの菩薩達は、様々な法衣を持って競って集まり、その念仏の行者に清浄な法衣を着せてくれるのである。

このようにして菩薩達の仲間に入ることにより、二度と迷界に戻ることのない不退の世界を得ることができ、そしてさらに、貴い説法を聞いて、三賢という菩薩の位につくことができる。と述べられている。

四 『選択本願念仏集』の私釋

私云不_レ可_下以_二少善根福德因縁_一得_レ生_二彼國_一者諸餘雜行者難_レ生_二彼國_一故云_二隨縁雜善恐難_レ生_二少善根者對_二多善根_一之言也然則雜善是少善根也念佛是多善根也故龍舒淨土文云襄陽石刻阿彌陀經乃隋陳仁稜所_レ書字畫清婉人多慕玩自_二一心不亂_一而下云_下專持_二名號_一以_レ稱_レ名故諸罪消滅即是多善根福德因縁_上今世傳本脱_二此二十一_一字_上非_三啻有_二多少義_一亦有_二大小義_一謂雜善是小善根也念佛是大善根也亦有_二勝劣義_一謂雜善是劣善根也念佛是勝善根也其義應_レ知

（私に云わく、少善根福德の因縁を以って、彼の國に生ずることを得べからずとは、諸餘の雜行は、彼の國に生じ難し。故に隨縁の雜善は恐らくは生じ難しと云う。

少善根とは、多善根に對する言なり。然れば則ち雜善は是れ少善根なり。念佛は是れ多善根なり。

故に龍舒_{りゅうじよ}の淨土文に云わく、襄陽_{じやうよう}の石に刻む阿彌陀經は、乃ち隋の陳仁稜_{ちんじんりよう}が書ける所なり。字畫_{がかく}清婉_{しやうおん}にして、人多く慕玩す。

一心不亂より下に、専ら名號を持すれば、名を稱するを以っての故に、諸罪消滅す。即ちこれ多善根福德の因縁なりと云えり。今世に傳うる本、此の二十一字を脱す。（已上）

ただ多少の義有るのみに非ず。また大小の義有り。謂わく雜善はこれ小善根なり。念佛は是れ大善根なり。また勝劣の義あり。謂わく雜善は是れ劣善根なり。念佛は是れ勝善根なり。その義まさに知るべし。）

＊

『阿弥陀経』には、「念仏を称えること以外の種々の修行による雑善や小さな福德の修行によつては、浄土往生はかなわない」と説かれているので、念仏以外の雑行では往生できないのである。

このことについて善導は、釈尊が、衆生の求めによつて、それに適応するように説かれた隨他意の説法である隨縁の雑善では、恐らく浄土往生することは難しいと述べているのである。

少善根は多善根に対する言葉である。

雑善は少善根であり、だから念佛は多善根ということになる。

現に流通している『阿弥陀経』には多善根という言葉がないが、龍舒の浄土文に引かれている中国湖北省襄陽にある『石刻阿弥陀経』^(注3)をみると、明らかに念仏多善根という明文が残されている。

これについて王日休の龍舒浄土文によれば、

「襄陽に石刻の阿弥陀経がある。文は隋の陳仁稜が書いたもので、字体や書風ともに清雅で達筆であるので、多くの人々がこれを慕つて讃えられているものである。その文には、「一心不乱」の次に、

『専ら名号を持すれば、名を称するを以つての故に諸罪消滅す、即ちこれ多善根福德の因縁なり』という二十一文字がある。」と脱落した経文があることが指摘されている。

この文によれば、『石刻阿弥陀経』には念仏が多善根であると説かれているように、念仏は多善根であり、雑善は少善根であるということが出来る。

さらに、ただ多善根少善根の多小の義ばかりでなく、勝劣の義もある。

念仏は勝善根であり、雑行は劣善根である。

つまり、

念仏：多善根・大善根・勝善根

雑善：少善根・小善根・劣善根　ということができると説かれている。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第十三 念佛多善雜善小善章)の絵相

高田敬輔「選択集十六章之図」(第十三 念佛多善雜善小善章)の絵相



《絵相の部分構成》

* 標章……第十三 念佛多善雜善小善章

* 在家者……南無阿弥陀仏の六字名号の掛け幅の
前に合掌称念の念仏行者。

仏壇には、燃燈、焼香。

念仏の多善根を表す。

* 出家者……三人の仏画を描く出家者。

一人は筆を執り、白紙に仏を描く。

一人は面紙を支え、描くものに注目。

一人は屈んで、硯で、墨をする。

雑善の少善根を表す。

* 光明……念仏の行者に阿弥陀仏からの三本の
摂取不捨の光明が降り注ぐ。

一本は、念仏行者の頭上に、他の二
本は通過し、第十五章の男女の念仏
行者に降り注ぐ。

右の高田敬輔が描く、第十三章「念仏多善雑善小善章」の絵相は、念仏の多善根を象徴する絵相として、南無阿弥陀仏の六字の名号の掛け軸の前に坐し、香を焚き、燈を灯し、合掌称念する一人の在家者を描いている。

一方、雑善の少善根を象徴する絵相は、三人の出家者が、一人は背を屈めて墨を擦り、もう一人は白紙に仏を描き、さらにもう一人がその描かれる画紙を支えている絵相である。

仏を描く三人の出家者の行為は、いくら尊い仏を描くとしても、それは雑善の少善根に過ぎず、まさに小善根であり、劣善根である。

それと対比するように、六字の名号の前で南無阿弥陀仏と称える姿は、念仏が多善根であり、大善根であり、勝善根であることが強調された、一目で念仏の尊さが理解できる絵相である。

六 まとめ

高田敬輔の第十三章「念仏多善雑善小善章」について、考察した結果、次のようなことを知ることができる。

① 第十三章「念仏多善雑善小善章」の絵相は、本願念仏が多善根・大善根・勝善根であることの証として、「南無阿弥陀仏」の六字の名号の掛け軸の前で、燃燈、焼香して合掌しながら称念する在家者を描き、雑善は少善根・小善根・劣善根であることを象徴するように三人の出家者による仏画を描く様相が対比的に表現されていること。

② 第十三章は、『阿弥陀経』とそれを釈す善導の『法事讃』が引文として用いられるが、いずれも雑善が小善根であり、本願念仏が多善根であることを、釈尊が選り取った要法として教示していること。

③ 法然は私釈段において、王日休の『龍舒増廣淨土文』の「阿弥陀経脱文」の文から、『石刻阿弥陀経』二十一字脱字の例を引き、本願念仏は多善根福德の因縁があることを説示していること。

(注3)(注2)(注1)

『阿弥陀經』（浄土宗全書第一卷五十三頁）

善導『法事讃』（浄土宗全書第四卷二十一頁）

王日休『龍舒增廣浄土文』卷第一（浄土全書第六卷八四四頁）

阿彌陀經脱文

襄陽石刻阿彌陀經乃隋陳仁稜所書字畫清婉人多慕玩自一心不亂而下云專持名號以稱名故諸罪消滅即是多善根福德因緣今世傳本脱此二十一字又藏本此經亦名諸佛攝受經乃十方佛在養字號今本脱四方佛

（阿彌陀經脱文）

襄陽の石刻阿彌陀經、乃ち隋の陳仁稜の書ける所なり。字畫清婉にして、人多く慕玩す。一心不亂より下に、専ら名號を持すれば、名を稱するを以つての故に諸罪消滅す。即ちこれ多善根福德の因縁なりと云えり。今世の傳えたる本に、此の二十一字を脱せり。また藏本の此の經、諸佛攝受經と名づく。乃ち十方佛在養の字號、今本より四方佛を脱す。）

第十四項 「第十四 六方諸佛證誠念佛章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第十四 六方諸佛證誠念佛章

二 『選択本願念仏集』の篇目

六方恆沙諸佛不_レ證_二誠餘行_一唯證_二誠念佛_一之文

(六方恆沙の諸佛、餘行を證誠せず、ただ念佛を證誠したまうの文)

* 前章では、『阿弥陀經』『法事讃』の引文や王日休『龍舒増廣淨土文』の『石刻阿弥陀經』から、本願念仏が、多善根・大善根・勝善根であり、雑善は少善根・小善根・劣善根であることが説かれた。

今章では、六方の諸仏が、余行については誠実の証明をしないが、本願念仏を行ずる者は間違ひなく淨土往生できることを、五種の引文に基づき、証誠することが説かれる。

三 『選択本願念仏集』の引文

第十四章の引文は、『觀念法門』『往生礼讃』『觀經疏』『法事讃』『五会法事讃』と五つあり、順次みていくことにする。

(一) 善導『觀念法門』の引文について

善導觀念法門云又如_二彌陀經云_一六方各有_二恒河沙等諸佛_一皆舒_レ舌徧覆_二三千世界_一說_二誠實言_一若佛在世若佛滅後一切造罪凡夫但迴心念_二阿彌陀佛_一願_レ生_二淨土_一上盡_二百年_一下至_二七日一日十聲三聲一聲等_一命欲_レ終時佛與_二聖衆_一自來迎接即得_二往生_一如_レ上六方等佛舒舌定爲_二凡夫_一作_レ證罪滅得_レ生若不_レ依_二此證_一得_レ生者六方諸佛舒舌

一出^レ口已後終不^レ還^ニ入口^一自然壞爛此亦是證生増上縁

（善導の觀念法門に云わく、また彌陀經に云うが如き、六方におのおの恒河沙等の諸佛ましまして、皆、舌を舒^{のべ}て徧^{あまね}く三千世界に覆^{おほ}いて、誠實^{じょうじつ}の言^{ことば}を説きたまう。もしは佛の在世、もしは佛の滅後の一切の造罪の凡夫、ただ迴心して阿彌陀佛を念じ、淨土に生ぜんと願すれば、上百^{かみ}年を盡し、下^{しも}七日一日、十聲三聲一聲等に至るまで、命終わらんと欲する時、佛、聖衆とともに、自ら來りて迎接^{こうしょう}し、即ち往生を得しむ。

上の如きの六方等の佛の舒舌は、定んで凡夫の爲に證を作し、罪滅して生ずることを得せしむ。もしこの證に依りて生ずることを得ざれば、六方諸佛の舒舌、一たび口を出でて已後、終に口に還り入らずして、自然に壞爛^{えらん}せんと。此れまた是れ證生増上縁なり。）

* この善導の『觀念法門』^(注1)の引文は、五種増上縁＝滅罪増上縁・護念得長命増上縁・見佛増上縁・攝生増上縁・證生増上縁のうちの證生増上縁に説かれる一節である。

『阿彌陀經』に説かれるように、六方におのおの恒河沙の数ほどの多くの諸仏が、みな同じように広くて長い舌相を示して全世界を覆いながら、釈尊が説かれた念仏往生の法門は眞實の法門であると証明されたのである。

このことは、釈尊がご在世の時は勿論、もしくはご入滅後の一切の造罪の凡夫でも、ただ心を淨土に振り向け、阿彌陀仏の淨土への往生を願ひ、念仏を称えるものは必ず往生できるのである。上は百年もの生涯を通して念仏を相續するものから、下はわずかに七日ないし一日、あるいは十声、三声、一声だけの念仏を称えるものでも、臨終には阿彌陀仏が菩薩達を随えて自ら來たつて來迎し、即座に往生することができるのである。

このように六方の諸仏が舌を舒べられるのは、明らかに罪深い凡夫のために証明されるのであるから、

罪も消えて往生することができるのである。もし、この証明があっても往生を得なければ、諸仏は不実を説いたことになり、一たび出された広くて長い舌相は、再び口に還り入らずに自然に爛れ腐ってしまうことになる。これもまた證生増上縁であると説かれている。

(二) 善導『往生禮讚』の引文について

同往生禮讚引『阿彌陀經』云東方如恒河沙等諸佛南西北方及上下一一方如恒河沙等諸佛各於『本國』出『其舌相』徧覆『三千大千世界』說『誠實言』汝等衆生皆應『信』是一切諸佛所護念經『云何名』護念『若有』衆生『稱』念阿彌陀佛『若七日及一日下至十聲乃至一聲一念等』必得『往生』證『誠此事』故名『護念經』又云六方如來舒『舌證』專稱『名號』至『西方』到『彼華開聞』妙法『十地願行自然彰』

(同じく往生禮讚に、阿彌陀經を引いて云わく、東方の恒河沙の如き等の諸佛、南西北方及び上下一一の方の恒河沙の如き等の諸佛は、おのおの本國に於いて、その舌相を出して、徧く三千大千世界に覆いて、誠實の言を説きたまう。汝等衆生、皆、應にこの一切諸佛所護念經を信ずべし。

いかんが護念と名づく。もし衆生有りて、阿彌陀佛を稱念すること、もしは七日及び一日、下十聲、乃至一聲、一念等に至るまで、必ず往生を得。此の事を證誠するが故に護念經と名づく。

また云わく、六方の如來、舌を舒べて證す。専ら名號を稱すれば西方に至る。彼に到りて華開いて妙法を聞けば、十地の願行自然に彰あらわると。)

* 同じように『往生禮讚』から二ヶ所の引文がある。

先ず初めは、『阿彌陀經』^(注2)を引いて、東方にまします恒河沙ほどの数多くの諸仏をはじめ、南方、西方、北方及び上方、下方のそれぞれの世界にも数え切れないほどの無数の仏たちが、それぞれの仏の世界で、全世界を覆うほどの広くて長い舌相をのべて、念仏往生の法門が真実であることを証明し、汝等、皆、

まさにこの一切諸仏所護念經（『阿彌陀經』）を信ぜよと勧められたのである。

どうして護念經と名づけたかというところ、もし衆生が、阿彌陀仏を称念するのに、たとえ七日でも一日でも、または、臨終時に初めて称える十声や一声や一念の念仏にしても、その人は必ず浄土に往生できるところを諸仏が證誠しているからである。

また次に、『日中礼讃』^(注3)の中から、六方にまします如来は、舌相を舒べて、専ら阿彌陀仏の名号を称えるものは必ず西方極樂浄土に往生できると證誠されている。

その念仏を称えたものが命終の時、蓮華台に坐して往生し、そして彼の浄土に往生してから蓮華が開き、自然に阿彌陀仏の法を説く声を聞くことができるのである。そうすれば、やがて修行が進み、無明を断つことができ、やがて十地という高い位の菩薩として真如を得、人々の苦を除き、樂を与えることができる徳^(注4)《第二十二願へ必至補處の願》を備えることになるのである。

(三) 善導『觀經疏』の引文について

同觀經疏引「阿彌陀經」云又十方佛等恐^ニ畏衆生不^レ信^ニ釋迦一佛所說^一即共同心同時各出^ニ舌相^一徧覆^ニ三千世界^一說^ニ誠實言^一汝等衆生皆應^ニ信^ニ是釋迦所說所讚所證^一一切凡夫不^レ問^ニ罪福多少時節久近^一但能上盡^ニ百年^一下至^ニ一日七日^一一心專念^ニ彌陀名號^一定得^ニ往生^一必無^レ疑也

（同じく觀經疏に阿彌陀經を引きて云わく、また十方の佛等、衆生の釋迦一佛の所説を信ぜざらんことを恐れして、即ち共に同心同時におのおの舌相を出して、徧く三千世界に覆いて、誠實の言を説きたまう。汝等衆生、皆まさにこの釋迦の所説、所讚、所證を信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近^{くこん}を問わす。ただ能く上百年を盡し、下一日七日に至るまで、一心に専ら彌陀の名號を念ずれば、定んで往生を得ること、必ず疑い無しと。）

＊ 同じように善導は、『観經疏』散善義^(注5)に『阿弥陀經』を引いていることを取り上げ、十方の多くの諸

仏は、衆生の中に釈迦一仏の所説では確信を得られないというものがあつてはならないとの配慮から、すべての仏たちが同じ気持ちで同じ時に、それぞれの仏が全世界を覆うほど長く広い舌相で、阿弥陀仏が説くところの本願念仏往生の法門が真実であることを証誠されたのである。

そして、汝等衆生は、皆まさに、釈尊が説きたまう所、讃歎したまう所、証明したまう所の『阿弥陀經』を信ずべしとして念仏を勧めているのである。

さらに、すべての凡夫は、罪障や福德の多少や、それらをつとめる時間の長短に関わりなく、多いものは百年に及ぶほどの生涯に亘って念仏を尽くし、少ないものは一日ないし七日にわたって一心に専ら阿弥陀仏の名号を念ずるものに至るまで、必ず浄土に往生できることは疑いのないことであると述べられている。

(四) 善導『法事讃』の引文について

同法事讃云心心念佛莫^レ生^レ疑六方如來證^二不虛^一三業專心^二無雜亂^一百寶蓮華應^レ時見

(同じく法事讃に云わく、心心念佛して疑いを生ずることなかれ。六方の如來、不虛^{ふこ}を證す。三業專心^{さんごう}にして雜亂無ければ、百寶の蓮華、時に應じて見^{あら}わる。)

＊ さらに、善導は『法事讃』^(注6)で、念仏を専ら相續するものがあれば、そのものは必ず浄土へ往生できるという法門について、些かでも疑いを持つてはならないと説いている。

それは、六方の如來が、念仏によって浄土往生がかなう法門であるということを、決して虚説ではないことを証明しているからである。もし專心に阿弥陀仏を礼拝し、念仏を称え、往生を願う心の身・口・意の三業に乱れがなければ、そのものは必ず往生ができるのである。

そして、それはまさに百宝の蓮華が華開くように、あらゆる法門に通達し、真理に通ずる智慧を会得することになり、やがて菩薩になることができるのであると説いている。

(五) 法照『淨土五會法事讚』の引文について

法照禪師法事讚云萬行之中爲「急要」迅速無「過」淨土門「不」但本師金口説十方諸佛共傳證

(法照禪師の淨土五會法事讚に云わく、萬行の中に急要たり。迅速なること淨土門に過ぎたるは無し。ただ本師金口の説のみにあらず。十方の諸佛、共に傳證すと。)

* また、法照は、『淨土五會法事讚』^(注7)で、悟りを求めるためには多くの法門があり、それぞれに修行があるが、しかし、今のこの五濁惡世の凡夫にとって急を要する肝要な法門は、淨土門以外に勝れているものはない。それはただ本師である釈尊の金口の説示だけではなく、十方の諸仏もそれぞれの国で真実の法門であることを証明されていることであるので、後の世まで伝えて行くことに間違いがないことであると説かれている。

四 『選択本願念仏集』の私釋

私問曰何故六方諸佛證誠唯局「念佛一行」乎答曰若依「善導意」念佛是彌陀本願故證「誠之」餘行不「爾故無」之也問曰若依「本願」證「誠念佛」者雙卷觀經等説「念佛」時何不「證誠」乎答曰解有「二義」一解云雙卷觀經等中雖「説」本願念佛「而兼明」餘行「故不」證誠「此經一向純説」念佛「故證」誠之「二解云彼雙卷等中雖」無「證誠之言」此經已有「證誠」例「此思」彼於「彼等經中」所「説念佛亦應」有「證誠之義」文在「於此經」義通「於彼經」故天台十疑論云又阿彌陀經大無量壽經鼓音聲陀羅尼經等云釋迦佛説「此經」時有「十方世界各恒河沙諸佛」舒「其舌相」徧覆「三千世界」證「誠一切衆生念」阿彌陀佛「乘」佛本願大悲願力「故決定得」生「極樂世界」

（私に問うて曰わく、何が故ぞ六方諸佛の證誠、ただ念佛の一行に局かぎるや。

答えて曰わく、若し善導の意に依らば、念佛はこれ彌陀の本願なり。故に之を證誠す。餘行は爾しからず。故にこれ無きなり。

問うて曰わく、若し本願に依りて念佛を證誠せば、雙卷、觀經等に、念佛を説く時、何ぞ證誠せざるや。答えて曰わく、解するに二義有り。

一に解して云わく、雙卷、觀經等の中に、本願念佛を説くと雖も兼ねて餘行を明す。故に證誠せず。この經は、一向に純もっぱら念佛を説く。故に之を證誠す。

二に解して云わく、彼の雙卷等の中に、證誠の言無しと雖も、此の經已に證誠有り。これに例して彼を思うに、彼等の經の中に於いて説く所の念佛、また證誠の義あるべし。文はこの經にありといえども、義は彼の經に通ず。

故に天台の十疑論に云わく、また阿彌陀經、大無量壽經、鼓音聲陀羅尼經等に云わく、釋迦佛、この經を説きたまう時、みな十方世界におのおの恒河沙の諸佛ましまして、その舌相を舒のべて、徧く三千世界に覆うて、一切衆生、阿彌陀佛を念ずれば、佛の本願大悲の願力に乗ずるが故に、決定けつじようして極樂世界に生ずること得ると證誠す。）

***** 法然の私積段である。

先ず初めに、釈尊が説いた尊い多くの法門があるが、どうして六方の諸仏は念佛の一行に限って真実の法門であると証明されたのかという問いかけから始まる。

それに答えるならば、もし善導の説によれば、念佛は阿彌陀仏の本願であるので證誠したまい、余行はそうではなく、阿彌陀仏の本願によらないので證誠したまわぬのである。

さらに問うならば、もし阿彌陀仏の本願行であるから證誠されたというのであれば、『阿彌陀經』だけ

ではなく、本願念仏によって往生をとげることが説かれる『無量寿経』や『観無量寿経』にも諸仏の證誠の文が説かれるべきであるが、どうして説かれないのだろうか。

それには二通りの意義をもつて解釈をすることができ。

一つ目は、『無量寿経』にも『観無量寿経』にも本願念仏が説かれているけれども、併せて余行も往生行として明かしてあるので、もし諸仏が證誠すれば、念仏以外の余行も證誠するかのように捉えられかねないので證誠の文はないのである。それに反して『阿弥陀経』は、純粹に一向専念本願念仏を説いている經典であるので、混乱することはないからである。

さらに二つ目の理由として、確かに『無量寿経』等には證誠の文はないけれども、この『阿弥陀経』にはすでに證誠の文があるので、この『阿弥陀経』の例をもつて『無量寿経』『観無量寿経』にも念仏を證誠する意図があるということである。だから、念仏を證誠する文は『阿弥陀経』のみにあるが、その意義は、二経にも通ずるのである。

このことについて、天台智顗の『淨土十疑論』^(注8)には、

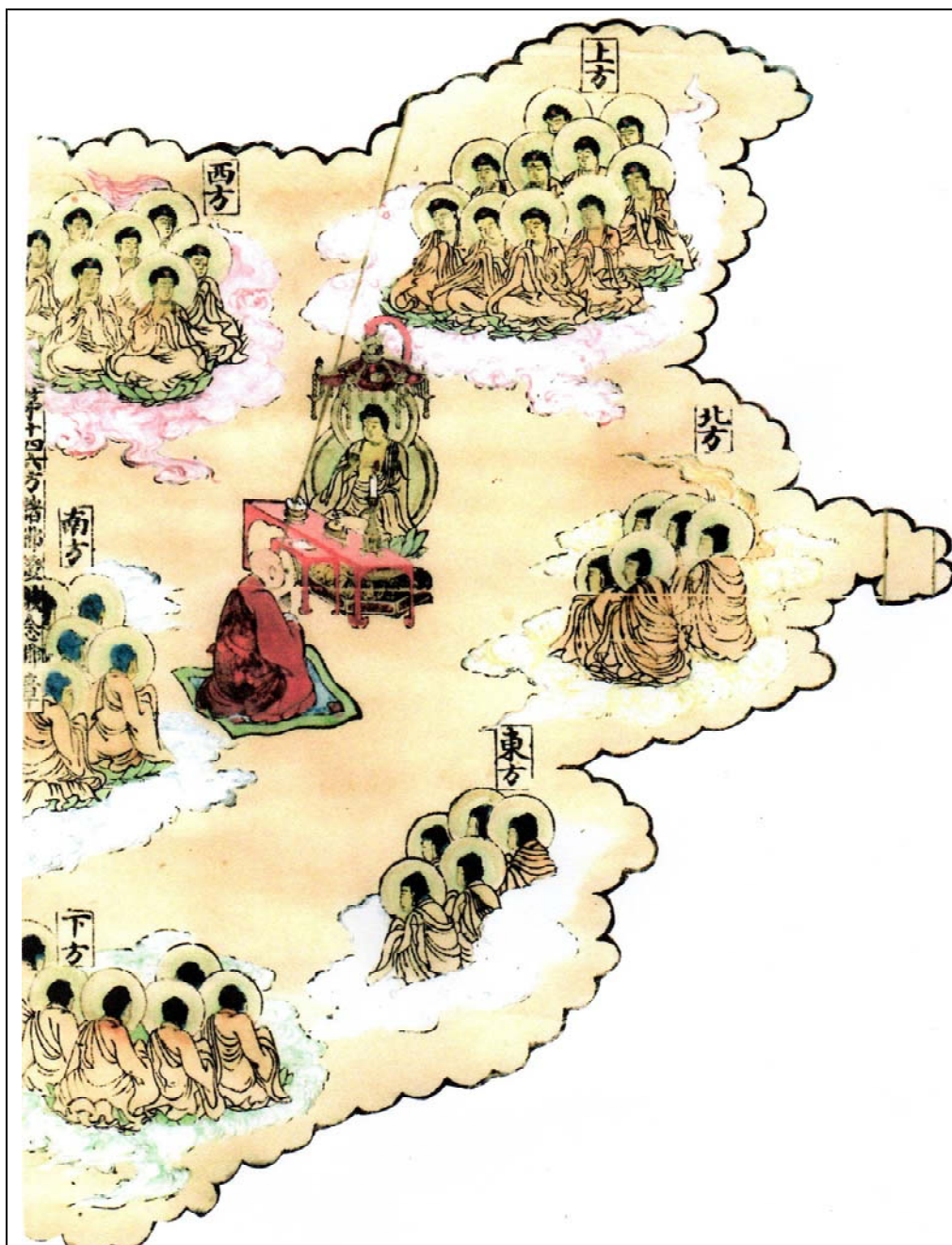
「また『阿弥陀経』、『大無量寿経』、『鼓音王陀羅尼經』^{くおんじやうだらにきやう}等には、釈尊がこれらの經を説かれた時、十方の世界にまします恒河沙の数ほどの多くの諸仏が、それぞれ広く長い舌相で三千大世界を覆い、一切の衆生が阿弥陀仏を念ずるならば、仏の大悲本願力に乗じて決定し、極樂世界に往生することができる」と證誠している。」

のように説かれている。

このようなことから、『無量寿経』『観無量寿経』には證誠の文は無いけれども、『阿弥陀経』の意義により、本願念仏を六方の諸仏が證誠されているということが理解できるのである。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第十四 六方諸佛證誠念佛章)の絵相

高田敬輔「選択集十六章之図」(第十四 六方諸佛證誠念佛章)の絵相



《絵相の部分構成》

* 標章 …… 第十四 六方

諸佛證誠念佛

章

* 仏 …… 釈尊。

* 出家者 …… 尼師壇上に坐す舍利弗。

* 東方仏 …… 五仏。

* 南方仏 …… 五仏。

* 西方仏 …… 七仏。

* 北方仏 …… 五仏。

* 下方仏 …… 六仏。

* 上方仏 …… 十仏。

* 光明 …… 阿弥陀仏からの撰取不捨の光明が舍利弗に降り注ぐ。

右図のように、高田敬輔「選択集十六章之図」の「第十四 六方諸佛證誠念佛章」の絵相は、釈尊の前に舍利弗が合掌しながら坐して法を聞き、六方の諸仏が念仏を證誠しているように取り囲む様相が描かれている。

これを『阿弥陀經』の經文と照らし合わせると次のような仏名があてはまる。

・中央（釈尊と舍利弗）

釈尊の御前で、尼師壇に坐し、合掌しながら聞き入る姿である。仏前の前机には香爐、燭台、華籠、供物が供えられている。

・東方諸佛（五仏）

阿閼鞞佛、須彌相佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛の五仏が描かれる。

・南方諸佛（五仏）

日月燈佛、名聞光佛、大焰肩佛、須彌燈佛、無量精進佛の五仏が描かれる。

・西方諸佛（七仏）

無量壽佛、無量相佛、無量幢佛、大光佛、大明佛、寶相佛、淨光佛の七仏が描かれる。

・北方諸佛（五仏）

焰肩佛、最勝音佛、難沮佛、日生佛、網明佛の五仏が描かれる。

・下方諸佛（六仏）

師子佛、名聞佛、名光佛、達摩佛、法幢佛、持法佛の六仏が描かれる。

・上方諸佛（十仏）

梵音佛、宿王佛、香上佛、香光佛、大焰肩佛、雜色寶華嚴身佛、娑羅樹王佛、寶華德佛、見一切義佛、如須彌山佛の十仏が描かれる。

六 まとめ

以上のように、高田敬輔の「選択集十六章之図」第十四章の絵相について検証することによって、次のような要素が含まれた絵相であるということを知ることができる。

① 「第十四 六方諸佛證誠念佛章」の絵相は、中央の釈尊が舍利弗に説示している様相を中心に、『阿弥陀經』に説かれるように、東方諸佛（五仏）・南方諸佛（五仏）・西方諸佛（七仏）・北方諸佛（五仏）・下方諸佛（六仏）・上方諸佛（十仏）が忠実に描かれていること。

② 釈尊が舍利弗に『阿弥陀經』には六方の諸仏が念仏を證誠していることを説く絵相には、直接的には表現されないものの、その背景には、『觀念法門』『往生礼讃』『觀經疏』『法事讃』『五会法事讃』に説かれる六方諸仏の念仏證誠の意義に支えられ、表現されていることが推測されること。

③ 六方諸仏の念仏證誠は、『阿弥陀經』のみであるが、『無量寿經』『觀無量寿經』に證誠の文がないのは、二經には念仏以外の余行が説かれているため、そこで證誠すれば混乱をきたす恐れがあるので證誠されないこと。

- (注8)(注7)(注6)(注5)(注4)(注3)(注2)(注1)
- 善導『觀念法門』(浄土宗全書第四卷二三五頁)
- 善導『往生礼讃』(浄土宗全書第四卷三七六頁)
- 善導『往生礼讃』(浄土宗全書第四卷三七二頁)
- 『無量寿経』《第二十二願(必至補處の願)》(浄土宗全書第一卷八頁)
- 善導『觀經疏』散善義卷第四(浄土宗全書第二卷五八頁)
- 善導『法事讃』(浄土宗全書第四卷三十頁)
- 法照『浄土五會法事讃』(浄土宗全書第六卷六八三頁)
- 天台智顗『浄土十疑論』(浄土宗全書第六卷五七三頁)

第十五項 「第十五 六方諸佛護念念佛行者章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選択集十六章之図」の標章

第十五 六方諸佛護念念佛行者章

二 『選択本願念仏集』の篇目

六方諸佛護念念佛行者之文

(六方の諸佛、念佛の行者を護念したまうの文)

* 前章では、六方の諸仏が念仏を證誠し、余行は誠実の証明をしないことを『觀念法門』『往生礼讃』『觀經疏』『法事讃』『五会法事讃』の引文を通して考察したが、今章では、『觀念法門』『往生礼讃』の引文をもとに、六方の諸仏に限らず、阿彌陀の諸仏も念仏の行者を護念することが説かれるのである。

三 『選択本願念仏集』の引文

この章の引文は、善導の『觀念法門』と『往生礼讃』の一節が引かれている。

(一) 善導『觀念法門』の引文

觀念法門云又如彌陀經說若有男子女人七日七夜及盡一生一心專念阿彌陀佛願往生者此人常得六
方恒河沙等佛共來護念故名護念經護念經意者亦不令諸惡鬼神得便亦無橫病橫死橫有厄難一切灾鄣
自然消散除不至心

(觀念法門に云わく、また彌陀經に説くが如く、若し男子女人有りて、七日七夜及び一生を盡くして、一心
に専ら阿彌陀佛を念じて、往生を願すれば、この人、常に六方恒河沙等の佛、共に來たりて護念したまう

ことを得るが故に護念經と名づく。

護念經と云う意は、また諸々の惡鬼神をしてたより便を得せしめず。また横病横死、横に厄難有ること無く、一切の灾さい鄣しょう、自然に消散す。不至ふし心しんを除く。）

* この引文は、善導の『觀念法門』(注1)に説かれる五種増上縁の第二の現生護念増上縁の一節で、次のように引かれている。

また、『阿弥陀經』に説かれているように、もし男子でも女子でも、七日七夜、あるいは一生涯を尽くして一心に専ら阿弥陀仏を念じて極樂淨土へ往生したいと願えば、常に六方にまします恒河沙の数ほどの無数の諸仏が共に來たつて、此の人を護念したまうのである。だからこの經を護念經と名づけるのである。この護念經という意味は、惡鬼邪神が隙を狙つて惡道に貶めないように、また不慮の病や死やその他の災難に遭わないように、一切の厄難を消散するように取り除いて護つてくれるのである。ただし、眞實の心が無いものはこの限りではないと述べられている。

(二) 善導『往生禮讚』の引文

往生禮讚云若稱レ佛往生者常爲三六方恒河沙等諸佛之所二護念一故名二護念經一今既有二此増上誓願可レ憑諸佛子等何不二勵レ意去一也

（往生禮讚に云わく、若し佛を稱して往生する者は、常に六方恒河沙等の諸佛に護念せらるるが故に護念經と名づく。）

今すでにこの増上の誓願の憑たのむべきあり。諸々の佛子等、何ぞ意こころを勵まして去らざるや。）

* この『往生禮讚』(注2)の一節は、もし念仏を称えて極樂往生を願うものは、常に六方の恒河沙ほどの無数の諸仏に護念されているので、護念經と名づけられているのである。

このように念仏の行者を護念するという誓願を立てられているので、諸仏の言葉に随って念仏を称えれば、現世では大きな利益を蒙り、来世には極樂浄土に往生ができるのである。

それなのに諸々の人々は、どうして仏の子として、心を励まして浄土往生を求めないのだろうか。より一層、意を新たにしなければならぬと説かれている。

四 『選択本願念仏集』の私釋

私問曰唯有三六方如來護念行者如何答曰不限六方如來彌陀觀音等亦來護念故往生禮讚云十往生經云若有衆生念阿彌陀佛願往生者彼佛即遣二十五菩薩擁護行者若行若坐若住若臥若晝若夜一切時一切處不令惡鬼惡神得其便也又如觀經云若稱禮念阿彌陀佛願往生彼國者彼佛即遣無數化觀音勢至菩薩護念行者復與前二十五菩薩等百重千重圍繞行者不問行住坐臥一切時處若晝若夜常不離行者今既有斯勝益可憑願諸行者各須至心求往又觀念法門云又如觀經下文若有入至心常念阿彌陀佛及二菩薩觀音勢至常與行人作勝友知識隨逐影護又云又如般舟三昧經行品中說云佛言若人專行此念彌陀佛三昧者常得一切諸天及四天王龍神八部隨逐影護愛樂相見永無諸惡鬼神災障厄難橫加惱亂具如護持品中說又云除入三昧道場日別念彌陀佛一萬畢命相續者即蒙彌陀加念得除罪障又蒙佛與聖衆常來護念既蒙護念即得延年轉壽

（私に問うて曰わく、ただ六方の如來のみありて、行者を護念するや、いかん。

答えて曰わく、六方の如來に限らず、彌陀、觀音等、また來りて護念したまう。

故に往生禮讚に云わく、十往生經に云わく、若し衆生有りて、阿彌陀佛を念じて、往生を願すれば、彼の佛は即ち二十五の菩薩を遣して、行者を擁護せしむ。若しは行、若しは坐、若しは住、若しは臥、若しは晝、若しは夜、一切の時、一切の處に、惡鬼惡神をして、其の便を得せしめざるなりと。

また觀經に云うが如き、若し念阿彌陀佛を稱禮して、彼の國に往生せんと願すれば、彼の佛、即ち無數の化佛、無數の化觀音、勢至菩薩を遣わして、行者を護念す。また前の二十五の菩薩等とともに、百重千重に行者を圍繞して、行住坐臥、一切の時處を問わず、若しは晝、若しは夜、常に行者を離れたまわす。

今すでにこの勝益の憑たのむべきある。願わくは諸々の行者、おのおの須すべからく至心に往くことを求むべし。

また觀念法門に云わく、また觀經の下の文の如き、若し人有りて至心に常に阿彌陀佛及び二菩薩を念ずれば、觀音勢至、常に行人のために、勝友知識しょうゆうちしきと作りて、隨逐影護ずいちよくごす。

また云わく、また般舟三昧經の行品の中に説きて云うが如き、佛の言わく、若し人専ら此の念彌陀佛三昧を行ずれば、常に一切の諸天、及び四大天王、龍神八部、隨逐影護し、愛樂相見あいぎようすることを得て、永く諸惡鬼神、災障厄難、横おうに惱亂のうらんを加うることを無し。具さには護持品の中に説くが如し。

また云わく、三昧の道場に入るを除きて、日別にちべつに彌陀佛を念ずること一萬して、畢命相續する者は、即ち彌陀の加念を蒙り、罪障を除くことを得。また佛と聖衆と、常に來りて護念したまうことを蒙る。既に護念を蒙むれば、即ち延年轉壽を得と。）

＊法然は、私積段で『往生礼讃』『觀念法門』を引いて問答をする。

初めは、『阿彌陀經』にいうように、六方の諸仏だけが本願念仏の行者を護念するのはどうしてなのかという問いかけである。

それに答えて、本願念仏の行者を護念したまうのは、六方の諸仏に限られるのではなく、阿彌陀仏や觀音菩薩や勢至菩薩等、多くの仏、菩薩もこの行者のもとに來たつて護念したまうということである。

これについて、善導は『往生礼讃』(注3)で次のように説いている。

『十往生阿彌陀佛國經』によれば、もし衆生が阿彌陀仏の御名を称えて極樂淨土に往生したいと願うならば、阿彌陀仏は、そのもとへ二十五菩薩を遣わして擁護したまうと説かれている。

そして、その行者の行住座臥を問わず、夜でも昼でもあらゆる時間や場所において、常に離れることなく、悪鬼鬼神等から身を護ってくれるのである。

また『観無量寿経』にも同じように説かれていることによれば、もし阿弥陀仏の御名を称え、礼拝し、心に念じて極樂浄土往生を願えば、阿弥陀仏は、たちまち無数の化仏、無数の化観音菩薩、化勢至菩薩を遣わして、念仏の行者を護念してくれるのである。そしてさらに、前の『十往生経』で説くところの二十五菩薩とともに、百重にも千重にも念仏の行者を取り囲み、行住座臥、あらゆる時、処で、夜も昼も常に行者から離れることなく擁護してくれるというのである。

今、このように優れた利益を受けていることは、『観無量寿経』にも、善導の『往生礼讃』にも説かれていることなので、願わくは仏道を修するものはすべて、真実心をもって、極樂浄土往生を求めなければならぬのである。

また、『観念法門』^(注4)には、次のように説かれている。

『観無量寿経』の流通文にあるように、もし行者がいて、真実心をもって常に阿弥陀仏や観音勢至二菩薩を念ずれば、この二菩薩は勝れた善き友となり、また善き導き手として、影の形のように寄り添って護ってくださると説かれている。

そして、同じく『観念法門』^(注5)には、『般舟三昧経』の行品と護持品の中の意を取り上げて次のように説いている。

釈尊が説くには、もし衆生が専ら阿弥陀仏を念ずる念仏三昧を行ずるならば、仏法を守護するすべての諸天や四天王や八部衆が、常に影の形に寄り添うように慈しみの心で擁護するので、諸々の悪鬼鬼神がもたらす災障や厄難を受けることも無く、心を乱されることも無いのである。詳しいことは、護持品（『般舟三昧経』には「擁護品」とある。）に説かれている通りである。

さらに、同じように『観念法門』^(注6)の「現生護念増上縁」の一節を引き、道場に入って念仏三昧の修行をする時は別として、毎日の日課として一万遍の念仏を称え、生涯に亘って念仏を相続する者は、阿弥陀仏の加護を蒙り、罪障を除くことができるのである。また、阿弥陀仏は菩薩達を随え、念仏の行者のもとに來たつて、常に護念したまうのである。

このように、阿弥陀仏から護念されることによって、本願念仏の行者は身も心も穏やかにすごすことができ、病気になることも無く、延年転寿することができると説かれているのである。

五 高田敬輔「選択集十六章之図」(第十五 六方諸佛護念念佛行者章)の絵相

高田敬輔が描く第十五章(第十五 六方諸佛護念念佛行者章)の絵相は、六方の諸仏が本願念仏の行者を護念する様相を表し、仏、二十五菩薩、念仏行者、諸天、四天王、八部衆、惡鬼等全ての姿が表現されている。

* 仏・菩薩：阿弥陀仏と二十五菩薩。化仏十五体。

* 念仏行者：堂内の阿弥陀如来座像前に、燃燈、焼香、華籠、供物を供え、長跪合掌称念の男の在家者と礼拝する女の在家者。

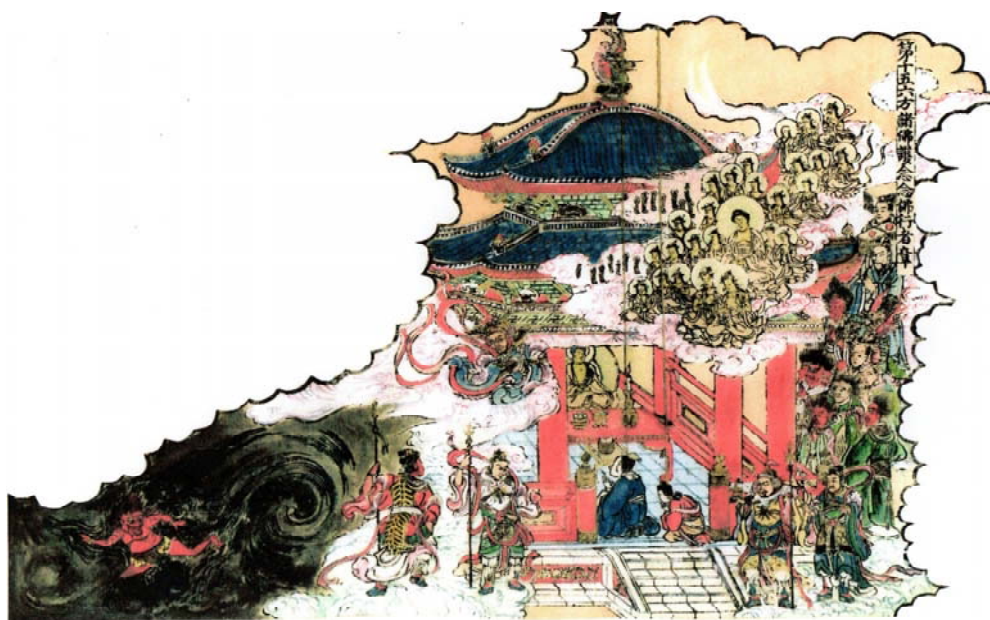
* 諸天……諸天が二体。

* 四天王……三体が仁王立ちで矛等の武器を携え、頑強な様相で守護。一体が風雲を呼び、まるで惡鬼を吹き飛ばすような行相で追い払う。

* 八部衆……八部衆が八体。

* 惡鬼……護念される念仏行者に、立入る隙が無いため、惡鬼が逃げ出す様相。

このように、第十五章の絵相は、仏・菩薩をはじめ六方の諸仏、諸天、四天王、八部衆等に護念されている本願念仏の行者の様相が描かれ、惡鬼がいたたまれず逃げ出す様相が象徴的に描かれている。



《絵相の部分構成》

- * 標章……………第十五 六方諸佛護念念佛行者章
- * 仏殿……………阿弥陀如来が配され、仏前に燃燈、焼香、
華籠、供物が供えられている。
- * 在家者……………長跪合掌称念の男性念仏行者、礼拝する
女性念仏行者。
- * 仏・菩薩……………阿弥陀仏と二十五菩薩の来迎。
十五体の化仏。
- * 諸天……………二体の諸天。
- * 四天王……………三体が仁王立ちで念仏行者を守護。
一体が悪鬼を撃退。
- * 八部衆……………八体の八部衆。
- * 悪鬼……………這々の体で逃げ出す悪鬼。
- * 光明……………男女の念仏行者それぞれの頭部に、阿弥
陀仏からの攝取不捨の光明が降り注ぐ。

六 まとめ

高田敬輔の描く第十五章の絵相について考察した結果、次のようなことを知ることができる。

① 念仏の行者を護念する、阿弥陀仏や二十五菩薩、化仏、諸天、四天王、八部衆等が百重千重に擁護している様相を描き、厄難をもたらす悪鬼が這々の体で逃げ去る様子が象徴的に描かれていること。

② 善導の『往生礼讃』『観念法門』の引文に基づいて、本願念仏の行者が護念されていることを繰り返し、「現生護念増上縁」の利益があることが説かれていること。

③ 六方の諸仏ばかりか、阿弥陀仏、観音菩薩、勢至菩薩も護念し、二菩薩は特に勝友知識として擁護してくれること。また護念されていることにより延年転寿があることから念仏三昧を勧めていること。

(注1) 善導『観念法門』（浄土宗全書第四卷二二九頁）

(注2) 善導『往生礼讃』（浄土宗全書第四卷三七六頁）

(注3) 善導『往生礼讃』（浄土宗全書第四卷三七五頁）

(注4) 善導『観念法門』（浄土宗全書第四卷二二八頁）

(注5) 善導『観念法門』（浄土宗全書第四卷二二九頁）

【尚、石井教道氏は、『選択集全講』（六四一頁）において、「『般舟三昧経』の行品と擁護品をとり合せて念佛三昧に現世利益のあることを示された。」と記し、さらに、文中の《護持品》について、「経には擁護品という」と指摘している。】

《護持品》を大正新脩大藏經（第十三卷九一二頁）で確認したところ《擁護品》である。

(注6) 善導『観念法門』（浄土宗全書第四卷二二九頁）

第十六項 「第十六 弥陀名号付屬舍利弗章」の絵相とその背景

一 高田敬輔「選撰集十六章之図」の標章

第十六 弥陀名号付屬舍利弗章

二 『選撰本願念仏集』の篇目

釋迦如來以「彌陀名號」慇懃付屬「舍利弗等」之文

（釋迦如來彌陀の名號を以って慇懃に舍利弗等に付屬したまうの文）

* 前章では、『往生礼讃』及び『觀念法門』の一節を引き、六方の諸仏をはじめ、阿弥陀仏、觀音勢至二菩薩、さらには二十五菩薩、諸天、四天王、八部衆等が、本願念仏の行者を護念していること、また影護されていることにより、悪鬼鬼神、罪障、厄難からまぬがれ、延年轉寿があることから念仏三昧を勧めることが説かれた。

今章は、『選撰本願念仏集』の最終章であり、『阿弥陀經』『法事讃』の引文を手がかりに、釈尊が本願念仏を後世に流通させることを付屬するが、諸行は付屬しないことが説かれる。

また、三仏の四經に基づいた「八選撰」、「略選撰」、「偏依善導一師」、「善導是彌陀化身」と重要な説示を次々と展開し、総結を迎えるのである。

三 『選撰本願念仏集』の引文

引文は、『阿弥陀經』と『法事讃』の二文である。

(一) 『阿弥陀經』の引文

初めに、『阿弥陀経』の結語が引用される。

阿弥陀経云佛説^二此經^一已舍利弗及諸比丘一切世間天人阿脩羅等聞^二佛所説^一歡喜信受作^レ禮而去

(阿弥陀経に云わく。佛は此の經を説きおわりましたまうに、舍利弗及び諸々の比丘、一切世間の天人、阿脩羅等は、仏の所説を聞きて歡喜信受し、禮を作して去りぬ。)

* この『阿弥陀経』^(注1)の一節は、流通分の結語にあたる最終の文である。

釈尊が、この『阿弥陀経』を説き終わり給うた時、舍利弗をはじめその会座にいた諸々の比丘、一切世間の天人、阿脩羅等の会衆は、みな釈尊の説法を聞いて心から歡喜し、その教えを信受し、深く礼拝して退去したと、説法後の様相が説かれているのである。

(二) 善導『法事讃』の引文

次に、右の『阿弥陀経』の結語を注釈した善導の『法事讃』の一文が引用され、その真意が説かれる。

善導法事讃釋^二此文^一云世尊説法時將^レ了慇懃付^二屬彌陀名^一五濁増時多^二疑謗^一道俗相嫌不^レ用^レ聞見^二有^二修行^一起^二瞋毒^一方便破壞競生^レ怨如^レ此生盲闡提輩毀^二滅頓教^一永沈淪超^二過大地微塵劫^一未^レ可得^レ離^二三途身^一大衆同心皆懺悔所有破法罪因縁^一

(善導の法事讃に此の文を釋して云わく、世尊説法の時まさに了らんとす、慇懃に彌陀の名を付屬したまう。

五濁増の時、疑謗多く、道俗相い嫌いて聞くことを用いず。修行すること有るを見ては、瞋毒を起こし、方便破壊して競いて怨を生ず。かくの如きの生盲闡提の輩は、頓教を毀滅して永く沈淪せん。

大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身を離るることを得べからず。大衆同心に、皆あらゆる破法罪の因縁を懺悔せよ。)

* この『阿弥陀経』の結語を、善導は『法事讃』^(注2)で次のように解釈している。

釈尊が『阿弥陀経』の説法をまさに終わろうとした時、舍利弗をはじめとして多くのものに、阿弥陀仏の御名を称える念仏往生の法門を末永く後世に伝えるように、懇ろに付属したのである。

今、まさに五濁悪世の末法の世であり、穢れが益々はびこり、本願念仏の法門を疑い謗り、僧侶も俗人も嫌って聞こうともしないのである。もし念仏を修行する者をみれば、怒りや嫉みを起こし、様々な方法を講じて信心の意を破滅しようとし、遺恨を起こして批難するのである。

このように誹謗をする者は、まさに明き盲のような者であり、正しい教えを見る眼を持たない無信の輩は、速やかに悟りが得られる浄土往生の法門を滅ぼそうとする罪によつて、永く苦海に沈み、大地が砕かれて微塵になって、その一粒ずつを数えるほどの永い時間が過ぎても、なお三悪趣の道から逃れることができないのである。

だから、人々は心を一つにして、もし正法を誹謗するようなことがあれば、その罪のあらゆる因縁を懺悔して、称名念仏の一行に精進しなければならないのであると説かれている。

四 『選択本願念仏集』の選択の典拠

なぜ、念仏を選択するのか、その根拠たる『浄土三部経』及び『般舟三昧経』について、三仏による四経に基づいた「八選択」が説かれていく。

そして、『選択本願念仏集』の趣旨を説いた「略選択」、なぜ偏に善導和尚であるのか「偏依善導一師」の根拠、さらに『観経疏』叙述の背景、また、なぜ善導和尚が「弥陀化身」であるのか、そして、この『選択本願念仏集』述作の経緯というものが、順次説かれていくのである。

(一) 三仏四経の「八選択」

まず初めに、三仏四経の八選択について述べられる。

私云凡案^二三經意^一諸行之中選擇念佛^一以爲^二旨歸^一

(私に云わく、凡そ三經の意を案ずるに、諸行の中に、念佛を選択して、以って旨歸^{しき}となす。)

* 私が思うには、浄土三部經の根幹であり、帰結とする法門は、多くの諸々の行の中から念仏を選択し、浄土往生を明かしたところにあると考える。

選択とは、諸行の中から雜行を選び捨てて正行を選び取ることであるが、以下、『浄土三部經』の三經と、加えて『般舟三昧經』について、それぞれの經に基づいた観点で、選択の趣旨が展開される。

①『無量壽經』の三選択

先雙卷經中有^二三選擇^一一選擇本願二選擇讚歎三選擇留教一選擇本願者念佛是法藏比丘於^二二百一十億土中^一所^二選擇^一往生之行也細旨見^一上故云^二選擇本願^一也二選擇讚歎者上三輩中雖^レ舉^二菩提心等餘行^一釋迦卽不^レ讚^二歎餘行^一唯於^二念佛^一而讚歎云^二當知一念無上功德^一故云^二選擇讚歎也三選擇留教者又上雖^レ舉^二餘行諸善^一釋迦選擇唯留^二念佛一法^一故云^二選擇留教^一也

(先ず、雙卷經の中に、三の選擇有り。一に選擇本願、二に選擇讚歎、三に選擇留教なり。

一に選擇本願とは、念佛は是れ法藏比丘、二百一十億の土^{くに}の中に於いて、選擇したまう所の往生の行なり。細^{くわ}き旨^{むね}、上^{かみ}に見えたり。故に選擇本願と云う。

二に選擇讚歎とは、上の三輩の中に、菩提心等の餘行を擧ぐると雖も、釋迦卽ち餘行を讚歎せず。ただ念佛に於いて、讚歎して當に知るべし、一念の無上功德と云う。故に選擇讚歎と云う。

三に選擇留教とは、また上に餘行諸善を擧ぐると雖も、釋迦選擇して、ただ念佛の一法を留む。故に選擇留教と云う。)

* 先ず『無量壽經』についてみると、三つの観点から選択が行われている。

一に選択本願、二に選択讚歎、三に選擇留教である。

初めの選択本願というのは、阿弥陀仏が諸行の中から念仏の一行を選択して本願とされたことをいうのである。阿弥陀仏が、かつて法蔵比丘として修行していた時に、二百一十億という多数の仏国土の往生行を比較検討した結果、念仏往生行が最善の一行であるとして選び取り、本願とし給うたものである。

詳しくは、上の第三章「念仏往生本願篇」《今章で扱われる各章の章標は、良忠『選擇傳弘決疑鈔』による》に述べた通りである。

次に選択讃歎というのは、上の第五章「念仏利益篇」で説いたように、三輩往生の文の中に念仏ばかりでなく菩提心や解第一義や持戒等の余行を挙げながら、経の終わりに、念仏には一念大利無上功德があると讃歎されていることである。つまり、釈尊が、念仏の一行だけを讃歎し、余行を讃歎し給わぬことをいうのである。

三に選択留教というのは、上の第六章「末法萬年特留念佛篇」に説くように、釈尊は、善根功德を備えた多くの諸行を挙げられたけれども、念仏一行の法門だけを選択し、末法萬年の末の世まで留めおき、衆生を救うべき法門として弥勒に付属したことによることをいうのである。

②『觀無量壽經』の三選択

次觀經中又有三選擇一選擇攝取二選擇化讚三選擇付屬一選擇攝取者觀經之中雖明定散諸行彌陀光明唯照念佛衆生攝取不捨故云選擇攝取也二選擇化讚者下品上生人雖有聞經稱佛二行彌陀化佛選擇念佛云汝稱佛名故諸罪消滅我來迎汝故云選擇化讚也三選擇付屬者又雖明定散諸行唯獨付屬念佛一行故云選擇付屬也

（次に、觀經の中に、また三の選擇有り、一に選擇攝取、二に選擇化讚、三に選擇付屬なり。

一に選擇攝取とは、觀經の中に、定散の諸行を明かすと雖も、彌陀の光明、ただ念佛の衆生を照らして、攝取して捨てたまわず。故に選擇攝取と云うなり。

二に選擇化讃とは、下品上生の人、聞經と稱佛との二行有りと雖も、彌陀の化佛、念佛を選擇して、
「汝稱佛名故諸罪消滅我來迎汝」（汝、仏の名を稱するが故に諸罪生滅す。我來たりて汝を迎う）
と云う。故に選擇化讃と云う。

三に選擇付屬とは、また定散の諸行を明かすと雖も、ただ獨り念佛の一行を付屬す。故に選擇付屬と云うなり。）

＊次に『觀無量壽經』についてみると、同じように三つの観点から選択が行われている。一に選択摂取、二に選択化讃、三に選択付屬である。

初めの選択摂取とは、上の第七章「光明唯攝念佛行者篇」でも説いたように、『觀無量壽經』の中には広く定散二善の諸行について説かれるが、阿弥陀仏の光明は十方の世界を照らし、念仏を称える者だけを一人も漏らさずに照らして摂取して捨てたまないことをいうのである。

次の選択化讃とは、上の第十章「化仏讚歎篇」で説いたように、阿弥陀仏の化仏は、念仏の功德だけを選択して讚歎したまうことである。『觀無量壽經』の下品上生に説くところによれば、下品上生の者が、臨終に聞經の功德を積み、次いで念仏を称えたので、阿弥陀仏は化仏を遣わして來迎したまうが、「汝稱佛名故諸罪消滅我來迎汝」というように、化仏は聞經の功德を讚歎することなく、ただ念仏を称えた功德が大きいことを讚歎したことによって、選択化讃というのである。

三の選択付屬とは、上の第十二章「付屬仏名篇」にあるように、釈尊は『觀無量壽經』において、定善散善の両善を説いて広く隨他の法門を示したが、經の結びに、永遠に弘通させる法門は、阿弥陀仏の本願念仏の一行だけであることを阿難に付屬したことによって、付屬仏名というのである。

③『阿弥陀經』の一選択

次阿彌陀經中有「一選擇」所謂選擇證誠也已於「諸經中」雖「多說」往生之諸行「六方諸佛於」彼諸行「而不」證

誠^一至^三此經中說^二念佛往生^一六方恆沙諸佛各舒^レ舌覆^二大千^一說^二誠實語^一而證^二誠之^一故云^二選擇證誠^一也

(次に、阿彌陀經の中に、一の選擇有り。いわゆる選擇證誠なり。)

すでに諸經の中に、多く往生の諸行を説くと雖も、六方の諸佛、彼の諸行に於て、證誠せず。此の經の中に、念佛往生を説きたまうに至りて、六方恆沙の諸佛、おのおの舌を舒べて大千に覆い、誠實の語を説きて、之を證誠したまう。故に選擇證誠と云うなり。)

* 次に『阿彌陀經』についてみてみると、これにも一つの選択がある。いわゆる選択證誠である。

上の第十四章「六方諸佛唯證誠念佛篇」で説いたように、すでに諸々の經典には、多くの往生の諸行が説かれているにもかかわらず、六方の諸仏は、これらの諸行については証明せず、念佛往生の一行だけが眞實の教えであり虚偽ではないことを、各々の舌を大千世界に広く長く舒べて証明したもうたことから選擇證誠というのである。

④『般舟三昧經』の一選択

加之般舟三昧經中又有^二一選擇^一所謂選擇我名也彌陀自說言欲^レ來^二生我國^一者常念^二我名^一莫^レ有^二休息^一故云^二選擇我名^一也

(しかのみならず『般舟三昧經』の中に、また一の選擇有り。いわゆる選擇我名なり。)

彌陀自ら説きて言わく、我が國に來生せんと欲せん者は、常に我が名を念じて、休息有ること莫れと。故に選擇我名と云う。)

* そればかりか、『般舟三昧經』の中に、また一つの選択がある。それは、いわゆる選擇我名である。

『般舟三昧經』^(注3)には、

即問。持何法得生此國。阿彌陀佛報言。欲來生者當念我名。莫有休息則得來生。佛言。專念故得往生。
(即ち問う。何れの法を持すれば、この國に生ずることを得るや。阿彌陀佛、報じて言^{のたま}わく。來生せ

んと欲する者は、當に我が名を念じて休息あることなければ、則ち來生することを得る。佛、言わく。專念するが故に往生を得。」

とあり、どうすれば阿弥陀仏の淨土に往生できるのかという問いかけに、常に休むこと無く、我が名を念じることにより往生できる。また、専らに我が名を念じることによって往生できるのだと説いていることから、選択我名というのであると述べられている。

⑤ 釈迦、弥陀、十方諸仏、同心に念仏の一行を選択

本願攝取我名化讚此之四者是彌陀選擇也讚歎留教付屬此之三者是釋迦選擇也證誠者六方恆沙諸佛之選擇也然則釋迦彌陀及十方各恆沙等諸佛同心選擇念佛一行餘行不爾故知三經俱選念佛以爲宗致耳（本願と、攝取と、我名と、化讚と、この四は、これ彌陀の選擇なり。

讚歎と、留教と、付屬と、この三は、これ釋迦の選擇なり。

證誠は、六方恆沙諸佛の選擇なり。

然れば則ち釋迦彌陀、及び十方のおの恆沙等の諸佛、心を同じくして念佛の一行を選択したまう。

餘行はしからず。故に知りぬ。三經ともに念佛を選びて、以って宗致とするのみ。）

＊ 本願と攝取と我名と化讚の四つは、これは弥陀の選擇である。

讚歎と留教と付屬の三つは、これ釋迦の選擇である。

證誠は、六方恆沙諸佛の選擇である。

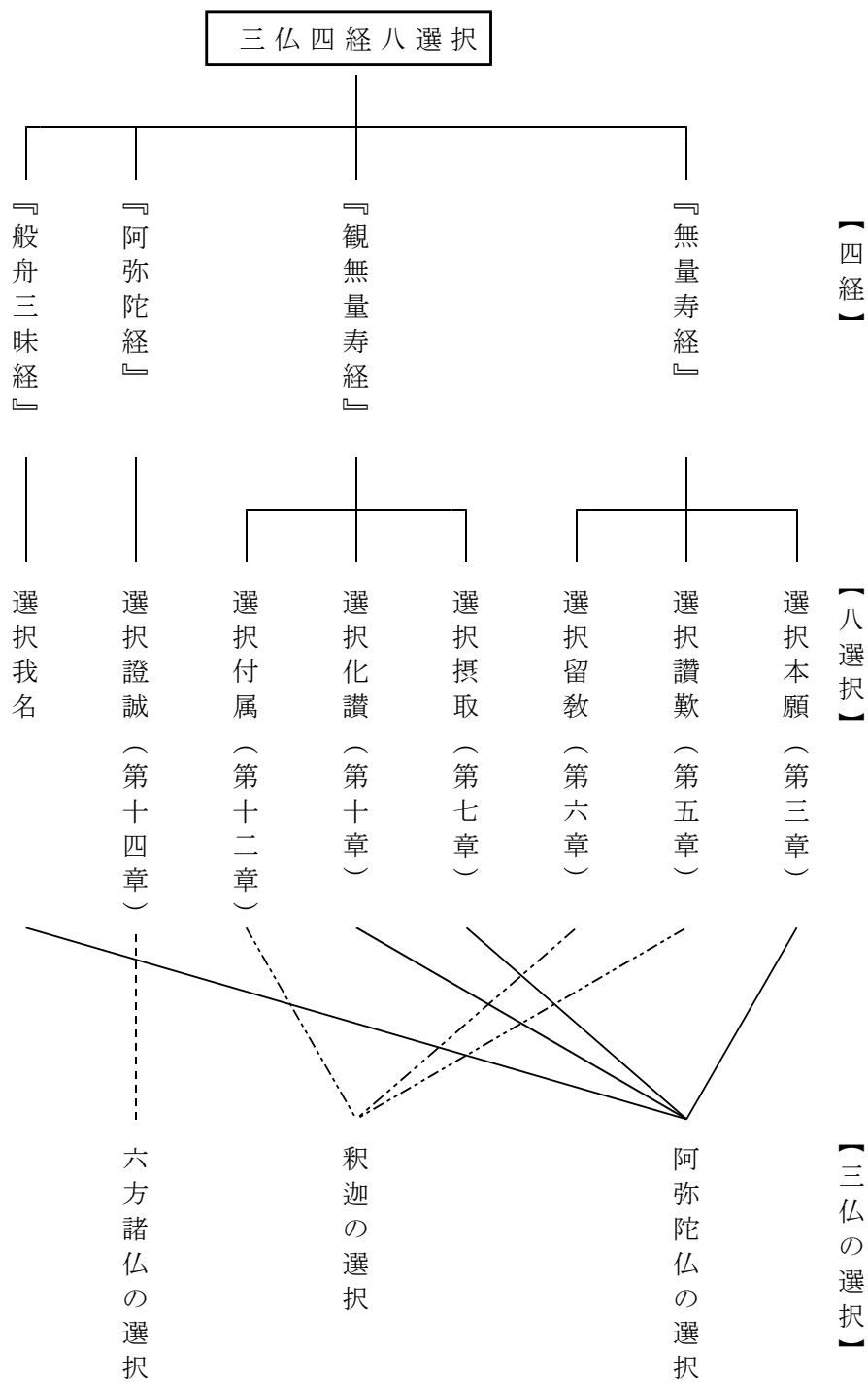
このように、釈迦は三つの選択、阿弥陀仏は四つの選択、そして十方恆沙の諸仏は一つの選択をして、心を同じくして念仏の一行を選択したことになるのである。

だから念仏の選択は、一切諸仏の総意であるということができるのである。

しかし、余行はそうではなく、釈尊や阿弥陀仏や一切の諸仏が選び捨てた行である。

だから、この三經のいずれも念仏のみを選んで究極的主旨として、『選択本願念仏集』として【選択】という文言を題字に入れてあり、浄土宗の最も根本的な提要であるということができるのである。

このような、三仏による四經に基づいた八選択について、簡略的に図示すると次のようになる。



このように『浄土三部経』の結論について、石井教道氏は、『選擇集全講』^(注4)で、三部経の結論は、俱に念佛のみを選んで独尊^{どくそん}帰趣^{きしゅ}統攝^{とうしやう}（宗）の實體としたもうたことが味得されようと記している。

この独尊、帰趣、統攝について、吉永岳彦氏^(注5)は、宋代浄土教者の元照の『観経新疏』を注釈した戒度の『正観記』に提示されている注釈を提示して、次のように記している。

・一つ目の独尊の義とは、天に二つの太陽はなく、国に二人の王がいないように、その世界の主にして、唯一無二の存在の意である。

・二つ目の統攝の義とは、網の綱、皮衣（裘）のえりのように、その主となるところを引けば、周りがすべてついてくる意である。

・三つ目の帰趣とは、多くの星が北辰を尊び取り巻き、西高東低の中国の地において水が必ず東へ流れていくように、主たるものに多くのものが集中していく意である。

とあるように、独尊、帰趣、統攝について、《その世界の主にして、唯一無二の存在の意》《その主となるところを引けば、周りがすべてついてくる意》《主たるものに多くのものが集中していく意》という三義それぞれが、主（宗）の義として解釈されていることを取り上げて、念仏のみが宗の主たる実体であることを述べている。まさに、石井氏が三部経の結論として取り上げた、独尊、帰趣、統攝、について、明快な意味づけということができるのである。

（二） 「略選択」

次に、『選択本願念仏集』全体の結びの一段というべき「略選択」が述べられる。
計也夫速欲^レ速離^ニ生死^ニ二種勝法中且闍^ニ聖道門^ニ選入^ニ浄土門^ニ欲^レ入^ニ浄土門^ニ正雜二行中且抛^ニ諸雜行^ニ選應^レ

歸「正行」欲「修」於正行「正助二業中猶傍」於助業「選應」專「正定」正定之業者即是稱「佛名」稱「名必得」生依「佛本願」故

（おもんみれば、夫れ速やかに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には、且しばらく聖道門をさしお閣さしおきて、選んで淨土門に入れ。淨土門に入んと欲せば、正雜二行の中には、且く諸々の雜行をなげう抛なげうつて、選んで正行に歸すべし。正行を修せんと欲せば、正助二業の中には、なお助業を傍にし、選んで正定を専らにすべし。正定の業とは、即ち是れ佛名を稱するなり。名みなを稱すれば必ず生ずることを得。佛の本願に依るが故なり。）

＊ 『選択本願念仏集』の要旨といふべき「略選択」の段である。

考えてみるに、この迷いと苦惱の多い生死の世界から速やかに離れ、極樂淨土に往生したいと願うならば、それには聖道門と淨土門の二種の勝法があるが、聖道門の修行に堪えられない者は、まずは自ら悟りを開く聖道門の修行をさしおいて、阿弥陀仏の救いの道である淨土門を選んで入らなければならない。

その救いの道の淨土門に入ろうと思うならば、解脱の法門として正行と雜行の二種の行があるが、まずは諸々の雜行をなげうつて、正行を選んで帰入しなければならないのである。

そして、正行を修めようとするならば、正行には五種の行があり、阿弥陀仏の本願にかなう正業とそれを助成する助業があるので、それらの中からまずは助業を傍らにおいて、まさに阿弥陀仏が選定した、ただひたすらに念仏を称える正定業を修めなくてはならない。

この正定業というのは、専らに阿弥陀仏の御名を称えることであり、御名を称えれば必ず極樂淨土に往生することができるのである。なぜなら、念仏は阿弥陀仏が選択して、衆生が淨土に往生するための道筋である生因を本願として成就した行であることによるからである。

（三） 「偏依善導一師」の根拠

なぜ「偏依善導一師」であるのか、順次、説かれていく。

① 多くの諸師の中から、なぜ善導か

問曰華嚴天台眞言禪門三論法相諸師各造「淨土法門章疏」何不_レ依_二彼等師_一唯用_二善導一師_一乎答曰彼等諸師各皆雖_レ造「淨土章疏」而不_下以_二淨土_一爲_レ宗唯以_二聖道_一而爲_二其宗_一故不_レ依_二彼等諸師_一也善導和尚偏以_二淨土_一而爲_レ宗而不_下以_二聖道_一爲_レ宗故偏依_二善導一師_一也

（問うて曰わく、華嚴、天台、眞言、禪門、三論、法相の諸師、おのおの淨土法門の章疏を造る。なんぞ彼等の師に依らずして、ただ善導一師を用いるや。

答えて曰わく、彼等の諸師、おのおの、皆、淨土の章疏を造ると雖も、而も淨土を以って宗となさず。ただ聖道を以って、その宗となす。故に彼等の諸師に依らざるなり。

善導和尚は、偏えに淨土を以って宗となし、聖道を以って宗となさず。故に偏えに善導一師に依る。）
*ここでは、華嚴、天台、眞言、禪門、三論、法相の諸師はそれぞれ淨土の法門に関する章疏(注6)を造っているのに、なぜ偏に善導一師によるのかという問いかけから始まる。

それに答えて、それらの各宗の諸師は、それぞれ淨土に関する章疏を造っているものの、淨土往生をもつて宗旨とするものでなく、聖道門の教説の上に立って解釈しているもので、彼等に依らないのである。

ところが、善導和尚は、ひとえに淨土往生を宗とし、淨土法門を絶対価値のある法門としており、悟りの道を自ら切り開く聖道門については選捨しているのである。

このようなことから、善導和尚の疏文を依り所に、念仏の法門を明らかにしてきているのである。

② 善導は、三昧発得の人

問曰淨土祖師其數又多謂弘法寺迦才慈愍三藏等是也何不_レ依_二彼等諸師_一唯用_二善導一師_一哉答曰此等諸師雖_レ

宗「浄土」未「發」三昧「善導和尚是三昧發得之人也於」道既有「其證」故且用「之」

（問うて曰わく、浄土の祖師、其の數、また多し。謂わく弘法寺くわほうじの迦才かさい、慈愍三藏等じみんさんぞうこれなり。何ぞ彼等の諸師に依らず、ただ善導一師を用いるや。

答えて曰わく、これらの諸師、浄土を宗とすと雖も、未だ三昧おこを發さず。善導和尚は、これ三昧發得の人なり。道に於いて既に其の證有り、故に且しばらくこれを用ゆ。）

* さらに問うが、浄土門の立場に立った祖師方の數は、結構、多いと思われる。例えば弘法寺の迦才や慈愍三藏等がいるのに、どうして彼等に依らずに、ただ善導一師の教説を用いるのはなぜなのだろうか。

答えていうならば、これらの諸師は浄土門を宗とする尊い方々であるものの、未だに念仏の修行によって定心を得、仏を憑依するに至る念仏三昧を發得するところまで実践されていないのである。

ところが、善導和尚は、念仏三昧を發得された方であり、深い体験によつて種々の不思議な瑞相があったことが伝えられていることから明らかなので、その教説を用いるのである。

③ 懷感も三昧發得の人であるのに、なぜ

問曰若依「三昧發得」者懷感禪師亦是三昧發得之人也何不「用」之答曰善導是師也懷感是弟子也故依「師而不」依「弟子」也況師資之釋其相違甚多故不「用」之

（問うて曰わく、若し三昧發得に依らば、懷感禪師も、またこれ三昧發得の人なり。何ぞこれを用いざる。答えて曰わく、善導はこれ師なり。懷感はこれ弟子なり。故に師に依りて弟子に依らず。いわんや師資の釋、その相違はなはだ多し。故に之を用いず。）

* また問うが、もし三昧發得に依るのであれば、懷感禪師もまたこれ三昧發得の人であるが、どうしてこの方の教説を用いないのか。

答えていうならば、善導和尚は懷感の師であり、懷感は弟子であるから、師に依つて弟子には依らなか

ったのである。

また、そればかりか、師匠と弟子との間には種々の見解の相違があり、懷感禪師の教説には依らず、善導和尚に依ったということである。

④ 道綽は、善導の師であるが

問曰若依_レ師而不_レ依_二弟子_一者道綽禪師者是善導和尚之師也抑又淨土祖師也何不用_レ之答曰道綽禪師者雖_二是師_一未_レ發_二三昧_一故自不_レ知_二往生得否_一

問_二善導_一曰道綽念佛得_二往生_一否導令_下辨_一一莖蓮華_一置_中之佛前_上行道七日不_二萎悴_一即得_二往生_一依_レ之七日果然華不_二萎黃_一綽歎_二其深詣_一因請_二入定觀_一當_レ得_二生否_一導即入_レ定須臾報曰師當_レ懺_二三罪_一方可_二往生_一一者師嘗安_二佛尊像_一在_二檐牖下_一自處_二深房_一二者驅_二使策_一役出家人_一三者營_二造屋宇_一損_二傷蟲命_一

師宜_下於_二十方佛前_一懺_二第一罪_一於_二四方僧前_一懺_二第二罪_一於_二一切衆生前_一懺_二第三罪_一綽公靜思_二往咎_一皆曰不_レ虛於_レ是洗心悔謝訖而見_レ導即曰師罪滅矣後當_下有_二白光_一照燭_上是師往生之相也已上新修往生傳

爰知善導和尚者行發_二三昧_一力堪_二師位_一解行非_レ凡將是曉矣況又時人諺曰佛法東行已來未_レ有_二禪師盛德_一矣絶倫之譽不_レ可_二得而稱_一者歟

(問うて曰わく、若し師に依りて弟子に依らずば、道綽禪師は、是れ善導和尚の師なり。抑も、また淨土の祖師なり。何ぞこれを用いざる。

答えて曰わく、道綽禪師は、これ師なりと雖も未だ三昧を發_{おこ}さず。故に自ら往生の得否を知らず。

善導に問うて曰わく、道綽念佛す、往生を得んや否や。導、一莖_{いつきよう}の蓮華を辨ぜしめ、これを佛前に置き、行道七日せんに萎悴_{いすい}せずんば、即ち往生を得んと。これに依りて七日するに、果然として華萎黃_{いおう}せず。綽その深詣_{じんけい}を歎ず。因つて定に入りて生ずることを得べきや否かを觀ぜんことを請うに、導、即ち定に入りて、須臾に報じて曰わく。師まさに三罪を懺_{さん}すべし、まさに往生すべし。

一には、師かつて佛の尊像を安じて、檐牖えんようの下に在おき、自らは深房に處おれり。

二には出家の人を驅使し、策役す。

三には屋宇を營造して、虫命を損傷す。

師、宜しく十方佛の前に於いて、第一の罪を懺じ、四方僧の前に於いて第二の罪を懺じ、一切衆生の前に於いて第三の罪を懺ずべし。綽公、靜かに往咎おうくを思うに、皆いうこと虚しからず。ここに於いて心を洗いて悔謝し訖おむりて、導に見まゆ。即ち曰わく、師の罪滅しぬ。後まさに白光ありて照燭しょうそくすべし。是れ師の往生の相なり。（已上新修往生傳）

ここに知んぬ。善導和尚は、行三昧を發して、力、師位に堪えたり。解行げぎょう、凡に非あらざること、まさにこれ曉あきらけし。いわんやまた時の人の諺ことわざに曰わく、佛法東行とうぎようしてよりこのかた、いまだ禪師の如き盛德せいとくあらず。

絶倫ぜつりんの譽ほまれ、得て稱すべからざるものか。）

＊

そこでさらに問うが、師に依って弟子に依らないのであれば、道綽禪師は善導和尚の師であり、そもそも浄土教の祖師であるのに、どうしてこれを依用しないのか。

それに答えるならば、道綽禪師は師であるけれども、三昧發得をしていないので、自ら往生の得否を知り得ないのである。その経緯については、『新修往生傳』(注に次のように記されている。)

道綽禪師が、善導和尚に、自分は念仏を称えて修行しているが、果たして浄土に往生できるのだろうかと訪ねた。

すると、善導は、一本の蓮華を持って来て、それを仏前に置き、もし道綽禪師が、七日間、仏の周りを行道して供養される間に、この蓮華が萎んで枯れなかったら、必ず往生できるでしょうと告げられたのである。

道綽禪師は、言われた通りに行道供養七日間の行をおこなったところ、果たせるかな蓮華は萎んだり枯れたりしなかったのである。

道綽禪師は、大いに喜ぶとともに、善導和尚の造詣の深さに感歎されたのである。

さらに、道綽禪師は、当来必ず往生が得られるかどうか、今一度、定心に入って見きわめて欲しいと請われたのである。

そこで善導和尚は、直ちに定心に入って見きわめ、間もなく定心から戻り、道綽禪師に次のようなとを告げたのである。

それは、道綽禪師には、三つの罪を犯したことがあるので、この罪を懺悔しなければならぬ。この罪を懺悔すれば、必ず往生できるであろうということだった。その三つの罪とは、

一つは、かつて道綽禪師が、堂宇を造営された時、仏の尊像を軒先の窓の下に安じ、自らは奥深い座敷に居住したこと。

二つには、修行中の僧侶を、造営工事に労役させたこと。

三つには、堂宇を造営した時、多くの地上の虫類の命を損傷したこと。

があるので、道綽禪師は、第一の罪を十方の諸仏の前で懺悔し、第二の罪を四方にいるすべての僧の前で懺悔し、第三の罪は一切衆生の前で懺悔しなければならぬことを勧められたのである。

道綽禪師は、静かにこれまでの罪を振り返って見たところ、確かに三罪を犯していることに気が付いたのである。そこで、心の汚れを洗い清め、懺悔し、再び善導和尚に逢われた。すると、善導和尚は、道綽禪師の三罪はすべて消滅している、いずれ後になって白光が輝き照らすであろうが、それは師のまさしく決定往生の相であると語られたということである。《以上、新修往生傳による。》

とこの挿話にあるように、善導和尚は、念仏修行によって三昧発得の境地まで達し、師の道綽禪師よりも

勝れていたことが解るのである。解にしる行にしる、並の者には理解し難いほどの勝れたものであり、まさに暁天に旭光をみるようなものである。

また当時の人々の諺（『瑞應傳』）^{（注8）}にあるように、

佛法東行。未有禪師之盛矣

（仏法がこの中国に東行して渡って以来、善導和尚のような高德の人はかつてない。）

ということが記され、善導和尚のその高德は、まさに絶倫の譽とすべき、讃えてもたたえきれぬものではないと評されているということが述べられている。

（四） 善導『観経疏』（観経正宗分散善義卷第四）叙述の背景

さらに、善導が『観経疏』を叙述するに至った背景が述べられる。

加之條_二錄_二觀_二經_二文_二義_一之刻頗感_二靈瑞_一屢預_二聖化_一既蒙_二聖冥加_一然造_二經_二科_二文_一舉_レ世而稱_二證定疏_一人貴_レ之如_二佛_一經法_一即彼疏第四卷奥云敬白_二一切有緣知識等_一余既是生死凡夫知慧淺短然佛教幽微不_二敢輒生_一異解_二遂即標_レ心結_レ願請_二求靈驗_一方可_レ造_レ心南無歸命盡虛空徧法界一切三寶釋迦牟尼佛阿彌陀佛觀音勢至彼土諸菩薩大海衆及一切莊嚴相等某今欲_下出_二此觀經要義_一楷_中定古今_上若稱_二三世諸佛釋迦佛阿彌陀佛等大悲願意_一者願於_二夢中_一得_レ見_下如_二上所願_一一切境界諸相_上於_二佛像前_一結_レ願已日別誦_二阿彌陀經_一三徧念_二阿彌陀佛_一三萬徧至心發願即於_二當夜_一見西方空中如_二上諸相境界悉皆顯現雜色寶山百重千重・種種光明下照_二於地_一地如_二金色_一中有_二諸佛菩薩_一或坐或立或語或嘿或動_二身手_一或住不_レ動者既見_二此相_一合掌立觀量久乃覺覺已不_レ勝_二欣喜_一於即條_二錄義門_一自_レ此已後每夜夢中常有_二一僧_一而來指_二授義科文_一既了更不_二復見_一後時脫本竟已復更至心要_二期七日_一日別誦_二阿彌陀經_一十徧念_二阿彌陀佛_一三萬徧初夜後夜觀_二想彼佛國土莊嚴等相_一誠心歸命一如_二上法_一當夜即見_二三具磴輪道邊_一獨轉忽有_二一人乘_二白駱駝_一來前見_レ勸師當_二努力決定往生_一莫_レ作_二退轉_一此界穢惡多_レ苦不_レ勞_二貪樂_一答言大蒙_二賢

者好心視誨「某畢命爲」期不「敢生」於懈慢之心云云第二夜見阿彌陀佛身眞金色在「七寶樹下金蓮華上」坐十僧圍繞亦各坐「一寶樹下」佛樹上乃有「天衣」挂繞正「面向」西合掌坐觀第三夜見兩幢杆極大高顯旛懸五色道路縱橫人觀無「礙」既得「此相」已即便休止不「至七日」上來所有靈相者本心爲「物不」爲「己身」既蒙「此相」不「敢隱藏」謹以申「呈義後」被「聞於末代」願使「含靈聞」之生「信有識觀者西歸」以「此功德」迴「施衆生」悉發「菩提心」慈心相向佛眼相看菩提眷屬作「眞善知識」同歸「淨國」共成「佛道」此義已請「證定竟一句一字不」可「加減」欲「寫者一如」經法「應」知上已

（しかのみならず觀經の文義を條録するの刻、頗る靈瑞を感じ、しばしば聖化に預れり。既に聖の冥加を蒙りて、然も經の科文を造る。世を擧げて證定の疏と稱し。人これを貴ぶこと佛の經法の如くし。即ち彼の疏の第四卷の奥に云わく、敬つて一切有縁の知識等に白す、余は既に是れ生死の凡夫、智慧淺短なり。然るに佛教幽微なれば、敢て輒く異解を生ぜず。遂に即ち心を標し願を結んで、靈驗を請求して、まさに心を造すべし。

南無歸命、盡虛空徧法界の、一切の三寶、釋迦牟尼佛、阿彌陀佛、觀音勢至、彼の土の諸菩薩大海衆、及び一切の莊嚴相等、某し、今、この觀經の要義を出して、古今を楷かい定じようせんと欲す。若し三世の諸佛、釋迦佛、阿彌陀佛等の、大悲の願意に稱かなわば、願わくは夢中に於いて、上の所願の如きの一切境界の諸相を見ることを得んと。佛像の前に於いて願を結し已おひつて、日別に阿彌陀經を誦すること三徧、阿彌陀佛を念ずること三萬徧。至心に發願す。

即ち當夜に於いて見らく、西方の空中に、上の如く諸相の境界、悉く皆顯現す。雜色の寶山、百重千重。種種の光明、下地を照して、地、金色の如し。中に諸佛菩薩有り。或いは坐し、或いは立し、或いは語し、或いは嘿もくし、或いは身手を動かし、或いは住して動ぜざる者あり。既に此の相を見て、合掌立りゆう觀かんす。量やう久しくして乃ち覺む。覺め已つて欣喜ごんきに勝たえず。ここに即ち義門を條録す。これより已後、毎夜夢中に、

常に一僧有りて來りて、玄義の科文を指授す。既に了りぬれば、更に復た見たまわず。後時、脱本し竟つて、また更に至心に七日を要期して、日別に阿彌陀經を誦すること十遍。阿彌陀佛を念ずること三萬遍。初夜後夜に、彼の佛の國土の莊嚴等の相を觀相し、誠心に歸命すること、一ら上の法の如くす。當夜に即ち見る、三具の磴輪、道の邊りに獨り轉ず。忽ち一人の白き駱駝に乗ずる有り。來り前んで勸め見る。師、當に努力で決定往生すべし、退轉を作すこと莫れ。此の界は穢惡にして苦多し、貪樂を勞せざれと。

答えて言わく、大いに賢者好心の視誨を蒙る。某し畢命を期として、敢て懈怠の心を生ぜずと。(云云) 第二の夜に見らく、阿彌陀佛の身、眞金色にして、七寶樹の下、金蓮華の上に在て坐したまう。十僧圍遶して、またおのおの一つの寶樹の下に坐せり。佛樹の上に乃ち天衣有りて挂り繞れり。面を正し、西に向かつて、合掌して坐して觀る。

第三の夜に見らく、兩の幢杆極めて大いに高く顯れ、旛懸りて五色なり。道路縱横にして、人觀るに礙り無し。既に此の相を得已りて、すなわち休止して、七日に至らず。上來所有の靈相は、本心物の爲にして、己身の爲にせず。既に此の相を蒙れり、敢て隱藏せず。謹みて以て義の後に申呈して、聞を末代に被しむ。願くは含靈これを聞きて信を生じ、有識の觀る者をして西に歸せしめんことを。此の功德を以つて、衆生に迴施す。悉く菩提心を發して、慈心をもつて相向い、佛眼をもつて相見て、菩提まで眷屬し、眞の善知識と作つて、同じく淨國に歸して、共に佛道を成ぜん。この義すでに證を請うて定め竟んぬ。一句一字、加減すべからず。寫さんと欲せん者は、一ら經法のごとくすべし。まさに知るべし。(已上) *

これまでのように所伝に伝えられるばかりではなく、『觀無量壽經』の文義を書き綴っている時、何度も不思議な瑞相を感じ、時々、聖者が現れ、仏の導きを受けたのである。その聖者によって、いつも護られたお陰で、『觀無量壽經』の科文を造ることができたので、世の中の人々は、この『觀經疏』を聖者の

証明を得て成し遂げたという意味の『証定疏』と称し、仏の經法のように尊んだのである。

この仏の証明を得られたということについて、『觀經疏』第四卷^(注9)の最終段に次のように記されている。

慎んで因縁のある一切の善知識に申し上げたいことがある。

自分は、まさしく生死の世界の凡夫であり、智慧も極めて浅はかで思慮も乏しい。それに引き替え仏教は、幽遠で微妙である。今、敢えて、ここに『觀無量壽經』について、仏の教えに対して異なった理解を示すものではない。しかし、今、心に期するものがあり、自分が考える所見について、諸仏に誓願を立てるとともに、何らかの靈驗が得られることを念じて、次のように意を決して述べてみたいと思う。

『虚空法界に偏満したまう一切の三宝、釈迦牟尼仏、阿弥陀仏、觀音、勢至、彼の土の諸々の多くの菩薩たち、及び極樂淨土の一切の莊嚴相等に南無歸命し奉る。』

自分は、今この『觀無量壽經』の要義を著して、古今にわたる諸師方の見解をただし、後世に伝えたいと考えている。

もし、この願いが、三世の諸仏、釈迦仏、阿弥陀仏等の大悲の願意にかなうものであれば、願うことなら夢中において、上に述べた所願のような極樂淨土の一切の莊嚴の諸相を見せしめ給えと、仏像の前において誓願を立ててから、毎日、阿弥陀經を三遍、阿弥陀仏の御名を念ずること三万遍称え、至心に発願したのである。

すると、ある夜、夢の中で、西方の空中に、これまで念願していた極樂淨土の諸相が顕れて悉く見ることができたのである。それは、色様々な宝山が百重千重に重なり、その山々から放たれる種々の光明が宝地を照らして金色に耀き、その光の中に、諸仏、諸菩薩がましまして、或るは坐し、或るは立し、或るは語り、或るは黙し、或るは身体や手足を動かし、或るは動かぬものもあつた。この様子を

見て合掌し、立観しているうちに目が覚めたのである。

この靈驗あらたかな夢を見、その喜びはひとしおであった。このような靈驗は、『観無量寿経』について、自分の考えを支えてくれていることだと信じ、順をおって解明していくことにしたのである。それから後は、毎夜の夢の中にいつも同じ僧侶が現れ、『観無量寿経』の玄義分をはじめ、それぞれの科文についての法義を指南し、示授したもうたのである。

そして『観経疏』を完了し終えたとその僧侶は再び顕れなかったのである。

このようにして『観経疏』を脱稿し、またさらに七日間を限って、毎日、阿弥陀経を十遍、阿弥陀仏の名号を称すること三万遍、さらに、初夜、後夜に極楽浄土の莊嚴を觀想し、一心に誠の心を尽くし、以前のように専らに一切の三宝、釈迦牟尼仏、阿弥陀仏、觀音、勢至に帰命することを念じたのである。

すると、その夜の夢に、馬の調教に使われる三個の石臼が道にひとりでに転がっていて、そして、忽然と白い駱駝に乗った人が自分の前に来て勧めることに、

「師よ、貴方は『観経疏』を成す努力をしたことにより、必ず極楽浄土に往生するであろうから、今の志から退転してはならない。この苦しみの多い五濁惡世で、ただ貪り楽しみ、世事に流されるようなことがあつてはならない。（云々）」

というので、

「このように賢者の懇切な教訓をいただいたことに感謝するとともに、生涯を通して念仏を怠ることは無く、或いは驕り昂ぶる心を起こしたりは致しません。」

と答えたのであった。

そして、第二の夜、身を真金色に光輝かせた阿弥陀仏が、七宝の樹の下に金蓮華の台上に坐し給い、

その周りを十人の僧侶がそれぞれ一本の宝樹の下に座し給うのを見奉ったのである。その仏の宝樹の上には天人の着る衣が掛かり廻らされていた。それを見て、思わず身を正し、西方に向かって合掌して坐し、その姿を拝観したのである。

さらに、第三の夜には、二つの大きな幢杆が高く掲げら、そこに五色の旛が懸かっているのを見奉ったのである。そして、道路は縦横に走り、見渡す限り続いていたのである。

このようにして、数多くの霊相を見たのは、初夜、第二夜、第三夜と続いて終わり、残りの四日は夢を見ることはなかったのである。このような霊相があったことは、『観経疏』のためばかりでなく、広く多くの人々にこの疏を勧め、多くの信仰を起こさせ、利益を得させるためであり、決して自らの誇りとするものではないのである。だから、霊験の事実を隠さずこの疏の末尾に書き添えることによって、後世の人々が、これを繙いて同じような利益を得て貰いたいからなのである。

願わくは、この霊験を知ることによって信心を発こし、さらに識者でこれを読めるものがあるならば、西方浄土に心を寄せて浄土往生を願って欲しいものである。

また、この霊験の功德を広く多くの人々に回向して、すべての人々に菩提心を発こさせ、さらに慈しみの心で互に交わり、仏のような平等な眼差しで見つめ、仏の悟りに至るまで助け合う朋友眷屬として真の善知識になり、同じ極樂浄土に往生して仏になることを成就したいものである。

このようにして、この『観経疏』は、仏の証明を得て『観無量寿経』の経意を読み解いたものなので、一句一字たりとも増減したり、変更することがあってはならない。この疏を写そうと志すならば、経法と同じように心得て取り扱わなければならないことを知らなければならないのである。

とあるように、善導和尚は、三夜に亘って夢の中に顕現した僧侶によって、『観無量寿経』の法義を指南、指授されるという自らの貴重な体験に基づいた念仏三昧の境地の中で、この『観経疏』が纏められたとい

うことである。

それは、まさに善導和尚の一人の利益や誇りとするものではなく、広く多くの人々にもこの『観經疏』を勧め、信仰が深まることを願うものであることから、敢えて巻末に記したということなのである。

(五) 「善導是彌陀化身也」の背景

続いて、善導がなぜ弥陀の化身であるのか、『観經疏』の叙述に至った背景に基づいて、阿弥陀仏の直説であり、化身であることが説かれていく。

靜以善導觀經疏者是西方指南行者目足也然則西方行人必須珍敬^二矣就^レ中每夜夢中有^レ僧指^二授玄義^一僧者恐是彌陀應現爾者可^レ謂此疏是彌陀傳說何況大唐相傳云善導是彌陀化身也爾者可^レ謂又此文是彌陀直説既云^三欲^レ寫者一如^二經法^一此言誠乎仰討^二本地^一者四十八願之法王也十劫正覺之唱有^レ憑^二于念佛^一俯訪^二垂迹^一者專修念佛之導師也三昧正受之語無^レ疑^二于往生^一本迹雖^レ異化導是一也

(靜かにおもんみれば、善導の觀經疏は、是れ西方の指南、行者の目足なり。然れば則ち西方の行人、必ず須く珍敬^{ちんきやう}すべし。中に就いて毎夜夢中に僧有りて、玄義を指授す。僧は恐らくは、これ彌陀の應現ならん。爾らば謂つべし。この疏は、これ彌陀の傳說なりと。

いかにいわんや、大唐、相い傳えて云わく、善導は是れ彌陀の化身なりと。爾らば謂う可し。またこの文はこれ彌陀の直説^{じきせつ}なりと。

既に寫さんと欲する者は、一^{もつぱ}ら經法の如くせよと。この言は誠なるか。仰いで本地を討めれば、四十八願の法王なり。十劫正覺の唱え、念佛に憑^{たの}み有り。俯して垂迹^{すいじやく}を訪^とえば、專修念佛の導師なり。

三昧正受の語は、往生に疑い無し。本迹^{ほんじやく}異なりと雖も、化導^{いづ}はれ一なり。)

* 靜かに考えてみれば、善導和尚の『観經疏』は、西方極樂淨土往生の指南書であり、淨土往生を願う行

者にとって、目となり足となる大切なものである。

だから、西方浄土往生を願う行者は、必ずこの疏を尊び、敬わなければならない。

中でも、この疏の巻末に記されている毎夜の夢中に顯現する僧侶は、『觀無量寿經』の奥義を直接指授されたということである。

この聖僧とは、恐らく、善導和尚の願いによつて、阿弥陀仏が応現したお姿ではないかと思われる。

もしそうであれば、この疏は阿弥陀仏が直接伝えた仏説というべきである。そればかりか、大唐以来、古くから、善導和尚は、阿弥陀仏の化身^(注10)であると云い伝えられているのである。

つまり、阿弥陀仏は十劫の昔に念仏往生の本願を成就して仏になったのであるから、念仏を称えれば疑い無く必ず極樂浄土に往生できることは確かなことなのである。そして、善導和尚は、阿弥陀仏の専修念仏を説かれ、宗教的最高の境地を念仏三昧で発得し、阿弥陀仏を感得して、直接、その教えを受け伝えられているのである。

だから、阿弥陀仏が本地であり、その阿弥陀仏がこの世に顯れた垂迹した姿が、善導和尚であるということができるのである。

このようなことから、善導和尚は、弥陀の化身であり垂迹された姿であり、その『觀經疏』は、弥陀の直説ということができるのである。

だから、『觀經疏』の最後に、「この疏を写そうとする時には、必ず写経する時と同じ法式に則つて書き写しなければならない」と記されているのである。

(六)

「集念佛要文」剰述「念佛要義」にみる『選択本願念仏集』叙述の意図

そして、最後に総まとめとして、この『選択本願念仏集』がどのような経過を経て編まれることになったの

か記され、後の世に念仏の法門が謗られないことを願う一段が綴られるのである。

於是貧道昔披_二閱茲典_一粗識_二素意_一立舍_二餘行_一云歸_二念佛_一自_レ其已來至_二于今日_一自行化佗唯緯_二念佛_一然則希問_レ津者示以_二西方通津_一適尋_レ行者誨以_二念佛別行_一信_レ之者多不_レ信者尠當_レ知淨土之教叩_二時機_一而當_二行運_一也念佛之行感_二水月_一而得_二昇降_一也而今不_レ圖蒙_レ仰辭謝無_レ地仍今愁集_二念佛要文_一剩述_二念佛要義_一唯願_二命旨_一不_レ顧_二不敏_一是即無慚無愧之甚也庶幾一經_二高覽_一之後埋_二于壁底_一莫_レ遺_二窓前_一恐令_二破法之人墮_二於惡道_一也

選擇本願念佛集

(ここに於いて貧道、昔この典を披閱して、ほぼ素意を識_レり、たちどころに餘行を捨てて、ここに念佛に歸す。それよりこのかた今日に至るまで、自行化佗、ただ念佛を緯_レとす。然れば則ちまれに津を問う者には、示すに西方の通津_二を以つてし、たまたま行を尋ぬる者には、誨_レうるに念佛の別行を以つてす。

これを信ずる者は多く、信ぜざる者は尠_レし。當_レに知るべし。淨土の教、時機を叩きて行運に當るなり。念佛の行、水月を感じて、昇降を得たり。

しかるに、今、圖らざるに仰せを蒙る。辭謝するに地無_レし。仍_レつて、今、愁_レいに念佛の要文を集め、剩_レえ念佛の要義を述べ。ただ命旨_二を顧みて、不敏_一を顧みず。これ即ち無慚無愧_二の甚だしきなり。

庶_二幾くは一たび高覽を経て後、壁底に埋めて窓前に遺すことなかれ。恐らくは破法の人をして、惡道に墮せしめんことを。

選擇本願念佛集

* 貧道（法然上人が自分をへりくだって云うに）は、昔、この『觀經疏』を繙いて大きな感動を得て何度も熟読し、およそ善導和尚の説く念仏の法門の真意をさとることができたので、たちどころに余行を捨てて念仏法門に帰したのである。

それ以来、今日にいたるまで、自らは、専ら念仏を称えて相續し、他の人々には念仏の功德を説いてき

た。時には、煩惱と穢れに満ちた生死の苦海から抜け出す出離の法門を尋ねる人があれば、西方極樂浄土こそ往生できる法門であると説き、また、たまたまその往生をするためにはどのような行を修すれば良いかと問う人には、余行を捨ててただひたすらに念仏を称えて往生を願う、本願念仏の一行を説いてきた。すると殆どの人々はこの本願念仏行を信じ、信ぜぬ人は極めて希であった。このようなことから、浄土の教えは、いかに今日の時代に適した教えであり、末代の人々の願いに叶った法門であるということが出来るのである。

まさに、天上に皎々と耀く月が、あらゆる水面に照り映ることと同じように、月が地上に降りたわけでもなく、水が天上に昇ったわけでもないのに、月と水が一体となって水面に清らかな輝きを宿す水月感応の譬えのように、念仏を月とし、今日の衆生を水とすれば、まさに念仏と衆生が一体となって、念仏本願力に乗じて極樂浄土に往生できることと同じことなのである。

この度は、図らずも月輪殿兼実公より、念仏の要文をまとめるようにとの仰せをいただき、お断りするわけにもいかず、今、未熟ながら念仏に関する要文を集め、さらに念仏の肝要な意義について述べさせて頂いた次第である。ただ兼実公の仰せに順ったままで、自らの非才を省みることもせず、往生の大事を述べたことは、まさに無慚無愧の恥知らずの甚だしいものと自省している次第である。

どうか、一たびご高覧を賜った後は、壁の底に埋めて、窓前などに残すことがないように願いたいものである。

なぜならば、もし信心のない人が、この『選択本願念仏集』を読み、念仏の法門を謗ることがあれば、その罪によつて三惡趣道に墮ちる因縁をつくらせる恐れがあるからである。

と記され、この『選択本願念仏集』を閉じたのである。

五 高田敬輔の「選択集十六章之図」(第十六 弥陀名号付属舍利弗章)の絵相

高田敬輔が描く、最終章、第十六章の絵相は、釈尊が阿弥陀仏の名号を舍利弗に付属する場面である。

高田敬輔の「選択集十六章之図」(第十六 弥陀名号付属舍利弗章)の絵相



まさに、『阿弥陀経』の結語に「舍利弗及び諸々の比丘、一切世間の天人、阿修羅等…」と説かれるように、釈尊の前に尼師壇を敷いて坐す後ろ姿の舍利弗。それを取りまくように在家者五人、出家者一人が坐し、向かって右に、天が四人、頭髮を逆立てた阿修羅、比丘一人。向かって左に、天女二人、比丘三人の計十八人が会座している様相が描かれる。

「選択集十六章之図」には、章段を象徴する絵相が十六図あるが、そのうち『浄土三部経』に基づいた念仏の付属を、『無量寿経』については第五章で弥勒に、『観無量寿経』については第十二章で阿難に、そして、『阿弥陀経』については第十六章で舍利弗にと、それぞれ付属する様相で描かれている。

このことは、『選択本願念仏集』の論述の全体構成が、第一章が捨聖道歸浄土章、第二章が捨雜行歸正行章で、いわゆる略選択を述べ、浄土の法門に帰入すべきことを説き、第三章以降は『浄土三部経』と善導の著作『観經疏』『往生礼讃』『法事讃』『観念法門』等を有機的に統合しながら本願念仏行が説かれていくのである。

『無量寿経』に基づく本願念仏行は、第三章から第六章までで、これを無量寿経撮要というが、それを象徴するように、第五章念佛現當利益章で、念仏には無上大利の功德があることが弥勒に告げられている場面が描かれる。

次に、第七章から第十二章までは観無量寿経撮要であり、『観無量寿経』に基づき、本願念仏行を後世まで付属するように阿難に告げている場面が第十二章に描かれる。

そして、第十三章から第十六章までの阿弥陀経撮要は、『阿弥陀経』に基づき、弥陀の名号を永久に後世に伝えるように告げられる舍利弗の場面が最終章の第十六章に描かれる。

これを、次頁のように三章それぞれの絵相を順に並べみると、三場面とも構図が類似していることが解るのである。三場面ともに、釈尊の仏前であり、付属されるものは本願念仏の一行である。それぞれ告げる相手が、弥勒、阿難、舍利弗であり、『無量寿経』による三選択、『観無量寿経』による三選択、『阿弥陀経』による一選

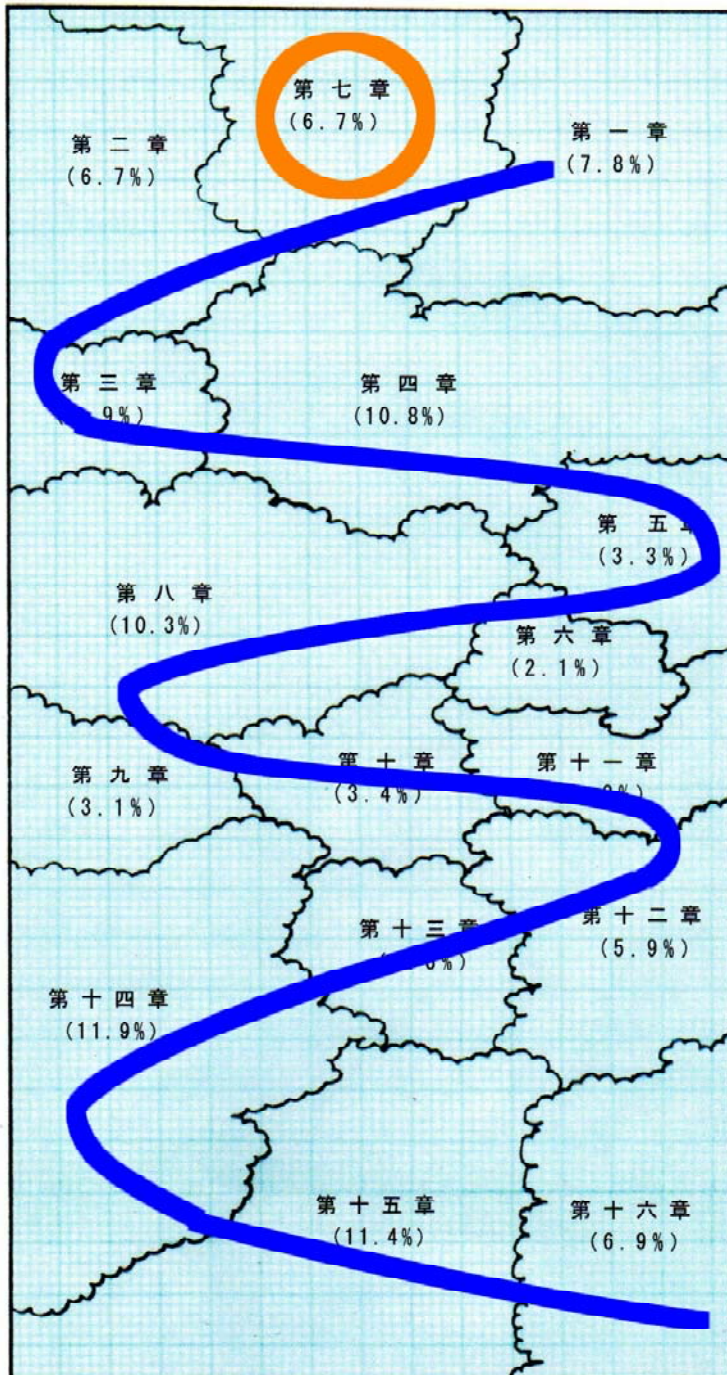
択の計七選択と、加えて『般舟三昧経』による一選択と、『選択本願念仏集』の根本的教理である三仏四経八選択の浄土宗の選択の流れが、高田敬輔の描く三場面の絵相に顕れているということができるのである。

◎第五章・第十二章・第十六章の絵相の対比

<p>第五章念佛現當利益章</p> <p>【『無量寿経』に基づき、念仏には無上大利があることを弥勒に告げる場面。】</p>	
<p>第十二章唯以念佛付属阿難章</p> <p>【『観無量寿経』に基づき、汝、無量寿仏の名を持てと阿難に告げる場面。】</p>	
<p>第十六章弥陀名号付属舍利弗章</p> <p>【『阿弥陀経』に基づき、名号を永久に流通するよう舍利弗に告げる場面。】</p>	

また、全十六章の掛け幅全体の配置をみると、第七章は画面最上段の中央に位置し、撰取不捨曼荼羅の様相を呈していることから、各章に撰取不捨の光明が降り注ぐ様子を執って特別に位置づけられるものであるが、その他の十五章の各絵相は、掛け幅に向かって右上から左に、そして、右、左と順を追い、さらに、右、左とうねるように流れ、まさに『撰取本願念仏集』の大河が緩やかに流れ下るような配置で描かれている。

この高田敬輔の絵画表現は、観る者が『撰取本願念仏集』の教義内容を自然の流れのままに体得し、本願念仏の利益を体得できるような配慮がされた、高度な技術の表出と考えることができるのである。



六 まとめ

以上のように、高田敬輔が描く第十六章の絵相を考察することにより、次のようなことがいえるのである。

① 第十六章の絵相は、第五章、第十二章の絵相と構図的に類似しており、それぞれが『浄土三部経』の三経の重要な主旨である「一念無上大利」・「即是持無量寿仏名」・「弥陀名号慇懃付属」を象徴し、最終章で『選択本願念仏集』の全容の結論を強調するように描かれていること。

② 第十六章の絵相は、『阿弥陀経』に基づき、名号を永久に流通するよう舍利弗に告げる場面であるが、その表現されている背景には、『選択本願念仏集』の総結である、三仏四経八選択・略選択・偏依善導一師・善導弥陀化身という最も重要な論拠が内包されていることを示唆するものであること。

③ 「選択集十六章之図」全体の絵画構成は、第七章は画面最上段の中央に配置し、摂取不捨曼荼羅の様相を呈し、その他の各章に摂取不捨の光明が降り注ぐ様式を執っているとともに、向かって右上から左右に、まさに『選択本願念仏集』の大河が緩やかに流れ下るように、各章が順次描かれている。観る者が『選択本願念仏集』の教義内容を自然の流れのままに体得し、本願念仏の利益を体得できるような、高田敬輔の高度な絵画表現技術の表出と考えることができること。

(注3)(注2)(注1)

『阿弥陀経』（浄土宗全書続第一卷五五頁）

『法事讃』（浄土宗全書続第四卷二五頁）

『佛説般舟三昧経』（大正新脩大藏経第十三卷八九九頁）

即問。持何法得生此國。阿彌陀佛報言。欲來生者當念我名。莫有休息則得來生。佛言。專念故得往生。

（即ち問う。何れの法を持すれば、この國に生ずることを得るや。阿彌陀佛、報じて言^{のたま}わく。來生せんと欲する者は、當に我が名を念じて休息あることなければ、則ち來生することを得る。佛、言わく。專念するが故に往生を得。）

(注5)(注4)

石井教道『選擇集全講』六六三頁（平樂寺書店 昭和五十四年刊）

吉水岳彦「宗」の三義説―独尊・統撰・帰趣―（1）（佛教論叢第五十四号二七八頁）

「近代の浄土宗僧侶の間では、独尊・統撰・帰趣という「宗」の三義説が広く使用されている。しかし、浄土宗におけるこの「宗」の三義説の使用は良忠上人の著作においてはじめてみられるものであり、善導大師や法然上人、聖光上人の言葉にはみられない。

《中略》

独尊・統撰・帰趣という「宗」の三義説は、中国宋代を代表する浄土教者にして、戒律の復興者として有名な靈芝元照（一〇四八―一一一六）の『観経新疏』の注釈書『正観記』においてはじめて提示される。すなわち「宗」の三義説は、『正観記』の著者拙菴戒度（生没年不詳）の創設といえる。《中略》

『観経新疏』経宗釈において、元照は「宗」を主の義であると解釈している。戒度が提示する「宗」の三義説は、元照が「宗」を主の義に解釈することの意義を、独尊・統撰・帰趣の義によつて説明するものである。

一つ目の独尊の義とは、天に二つの太陽はなく、国に二人の王がいないように、その世界の主にして、唯一無二の存在の意である。

二つ目の統撰の義とは、網の綱、皮衣（裘）のえりのように、その主となるとところを引けば、周りがすべてついてくる意である。

三つ目の帰趣とは、多くの星が北辰を尊び取り巻き、西高東低の中国の地において水が必ず東へ流れていくように、主たるものに多くのものが集中していく意である。《以下、省略》」

(注6) 前掲 石井教道『選擇集全講』六六八頁

「浄土教に關しては、彼の華嚴宗の元曉は遊心安樂道を、天台宗の智顗は觀經疏等を、眞言の不空は阿彌陀儀軌を、禪宗の智覺は萬善同歸集を、三論宗の嘉祥は大經疏、觀經疏を、法相宗の慈恩は西方要決等を造つて浄土法門を顯彰されている。然るに今はそれ等の人師に依らずして、唯善導一師を依用されたのはどういう理由であるかとの問である。」

(注7) 『新修往生傳』中卷佚文（浄土宗全書統第十六卷九〇頁）

【道綽伝】

釋道綽。并州人。棄_レ家已來歷_二訪名師_一。《中略》

每見_二佛在_二空中_一。天華下散大如_レ錢。其色鮮白遍滿_二虛空_一。大衆以_レ手承_レ花。人々皆得七日不_レ萎。

《以下、省略》

（釋道綽、并州の人。家を棄て、已來、名師を歴訪す。《中略》

空中に佛在るを見る毎に、天華下り散ること大きな錢のごとし。其の色、鮮白にして遍く虛空に滿つ。大衆、手に以つて花を承る。

人々、皆得るもの、七日、萎まず。

《以下、省略》

【善導第二伝】

唐往生高僧善導。臨淄人也。幼投密州明勝法師出家。誦_二法華維摩_一。《中略》

或問導曰。弟子念佛。得往生否。導令_レ辨_二一莖蓮花_一。置_二之佛前_一。行道七日花不_二萎悴_一。即得_二往生_一。依_レ之七日果然花不_二萎黃_一。綽歎_二其深詣_一。因請入_レ定觀_二當得_二生否_一。導即入_レ定須臾報曰師當_二懺_二三罪_一。方可_二往生_一。一者。師嘗安_二佛尊像_一。在_二檐牖下_一。自處_二深房_一。二者驅_二使策_二役出家人_一。三者營_二造屋宇_一。損_二傷蟲命_一。師宜_下於_二十方佛前_一懺_二第一罪_一。於_二四方僧前_一懺_二第二罪_一。於_二一切衆生前_一懺_二第三罪_一。綽公靜思_二往咎_一。皆曰不_レ虛。於_レ是洗心悔謝訖而見_レ導。即曰師罪滅矣。後當_レ有_二白光照燭_一。是師往生之相也。

（唐の往生の高僧善導、臨淄の人なり。幼くして密州の明勝法師に投_{いた}つて出家して、法華、維摩を誦す。《中略》

(注8)

『往生西方淨土瑞應刪傳』(『瑞應傳』)(浄土宗全書続十六卷卷五頁)

道綽禪師第十一

或るは導に問うて曰わく。弟子念佛す。往生を得んや否や。導、一莖の蓮華を辨ぜしめ、これを佛前に置き、行道七日せんに萎悴いすいせずんば、即ち往生を得んと。これに依りて七日するに、果然として華萎いおう黄せず。綽、その深じんけい詣を歎ず。因つて定に入りて生ずることを得べきや否かを觀ぜんことを請うに、導、即ち定に入りて、須臾に報じて曰わく。師まさに三罪を懺さんすべし、まさに往生すべし。

一には、師かつて佛の尊像を安じて、檐えん牖ようの下に在おき、自らは深房に處おれり。

二には出家の人を驅く使しし、策役さくやくす。

三には屋宇を營造して、虫命を損傷す。

師、宜しく十方佛の前に於いて、第一の罪を懺じ、四方僧の前に於いて第二の罪を懺じ、一切衆生の前に於いて第三の罪を懺ずべし。綽公、靜かに往咎を思うに、皆いうこと虚しからず。ここに於いて心を洗いて悔謝し訖りて、導に見ゆ。即ち曰わく、師の罪滅しぬ。後まさに白光ありて照燭すべし。是れ師の往生の相なり。

唐朝綽禪師。并州人。玄忠寺講觀經二百遍。三縣七歲並解念佛。自穿樓(考)樓字一本作樓珠。勸人念佛。語常含笑。不曾面背西。語善導曰。道綽恐不往生。願師入定。爲佛得否。善導入定。見佛百餘尺。曰。道綽現修念佛三昧。不知捨此報身。得往生否。又問。何年月得生。答曰。伐樹連下斧。無緣莫共語。還家莫辭苦。又令綽懺悔。一者安居經像於淺處。自居安穩房中。(考)中下一本有對佛懺悔四字二者作功德使出家人。對十方僧懺悔。三者因修建傷損舍生。對衆生懺悔。又問。終時有何瑞相。令

人見聞。答曰。亡日我放白毫。遠照東方。此光現時。來生我國。果至亡日。三道光。白毫照於房內。又見曇鸞法師光。七寶池中語曰。淨土已成。餘報未盡。紫雲境(考)境字一本作境上三度現。

*《太字部分のみ読み下し》

(また、綽、懺悔せしむ。一は、經像を淺處に安居し、自らは安穩房中に居す。二は、功德を作すと出家人を使い、十方の僧に對し

て懺悔す。三は修建に因り含生を傷損し、衆生に對して懺悔す。）

善導禪師第十二

唐朝善導禪師。姓朱。泗州人也。少出家。時見西方變相。嘆曰。何當託質蓮臺。棲神淨土。及受具戒。妙開律師共。看觀經。喜交嘆乃曰。修餘行業。逆僻難成。唯此觀門。定超生死。遂至綽禪師所。問曰。念佛實得往生否。師答曰。各辦一蓮華。行道七日。不棄者即得往生。又東都英法師。講華嚴經四十遍。入綽禪師道場。遊三昧而嘆曰。自恨多年空尋文疏。勞身心耳。何期念佛不可思議。禪師曰。經有誠言。佛豈妄語。禪師平生常樂乞食。每自責曰。釋迦尚乃分衛。善導何人。端居索供養。乃至沙彌。竝不受禮。寫彌陀經十萬卷。畫淨土變相二百鋪。所見塔廟。無不修葺。

＊《太字部分のみ読み下し》

（遂に綽禪師の所に至り、【善導が】問うて曰わく。念佛すれば實に往生を得るや否や。

師【道綽が】、答えて曰わく。各一蓮華を辯じて、行道七日して萎まざれば、即ち往生を得。）

【注】右のように所伝の内容が、例えば『瑞應傳』の場合は、「道綽伝」の引用は、ほぼ内容的に合致しているが、「善導伝」の内容は、善導が問い、道綽が答えるという形であり、法然上人が『選択本願念仏集』に引用した部分に相違がみられる。

このことについて石井教道氏は『選擇集全講』六七七頁に次のように記している。

「而してかく諸傳を類聚淨土五祖傳として時代順にまとめられた元祖は、十分に右の相違を承知したもうていた事と思われる。然も敢てこの新修往生傳の一説を提示された所以については、恐らくそれは唯人をして信を生ぜしめるための善導鑽仰の文献を提示されたのに外ならなかったのではないかと思われる。」

と記していることから解るように、法然が引用した善導と道綽の師弟関係を伝える『新修往生伝』の挿話は、あくまでも善導鑽仰のための文献であることを指摘している。

また、本文中にある、

「況やまた時の人の諺に曰わく。仏法東行してよりこのかた、未だ禪師の如き盛徳あらず。

絶倫の譽れ、得て稱すべからざるものか。」

の文言の根拠は、この『瑞應傳』善導禪師第十二の最終行の「佛法東行。未^レ有^二禪師之盛^一矣」を指すものと考えられる。

善導『觀經正宗分散善義』卷第四（浄土宗全書第二卷七二頁）

善導弥陀化身の諸史料

(注10)(注9)

①『佛祖統紀』（大正新脩大藏經第四十六卷二六三頁）

慈雲浄土略傳。阿彌陀佛化身。至^二長安^一聞^二湍水聲^一。曰。可^下教^二念佛^一三年滿。長安城皆念佛^上。後有^二法照法師^一。即善導和上也

（慈雲の浄土略傳にいう。阿彌陀佛の化身。長安に至り、湍水聲に聞いて曰わく。念佛の教え三年に滿つ。長安城、皆、念佛なるべし。後に法照法師有り。即ち善導和上なり。）

②『往生集』卷之一（浄土宗全書続十六卷二二〇頁）

善導和尚

唐善導。貞觀中見^二西河綽禪師九品道場^一。喜曰。此眞入^レ佛之津要。脩^二餘行業^一。迂僻難^レ成。惟此法門。速超^二生死^一。

《中略》

贊曰。善導和尚。世傳^二彌陀化身^一。觀^二其自行之精嚴。利生之廣博^一。萬代而下。猶能感^二發人之信心^一。脫非^二彌陀^一。必觀音普賢之儔也。猗歟大哉。

（善導和尚

唐の善導。貞觀中に、西河、綽禪師の九品道場を見て喜びて曰わく。これ眞に佛に入るの津要なり。餘の行業を脩すれども、迂僻^{うへき}にして成し難し。ただこの法門、速やかに生死を超ゆ。

《中略》

贊じて曰わく。善導和尚、世に彌陀化身と傳う。その自行の精嚴、利生の廣博を観るに、萬代より下、なお能く人の信心を感發す。脱^もし彌陀にあらずんば、必ず觀音、普賢の儔^{ともがら}なり。猗なるや大かな。）

③『龍舒增廣淨土文』卷第五（淨土宗全書第六卷八六六頁）

唐京師僧善導

善導貞觀中見_二西河綽禪師淨土九品道場_一於_レ是篤勤精苦若_レ救_二頭然_一每入_二佛堂_一合掌胡跪一心念佛非_二力竭_一不_レ休雖_二寒冰_一亦須_二流汗_一以表_二至誠_一出即爲_レ衆說_二淨土法門_一

《中略》

本朝慈雲式懺主略傳云**阿彌陀佛化_レ身至_二長安_一**聞_二澆水聲_一乃曰可_レ教_二念佛_一三年後滿_二長安城中念佛_一後有_二法照大師_一即善導後身也

（唐京師僧善導

善導、貞觀中に西河の綽禪師の淨土九品道場に見える。ここに於いて篤勤精苦す。頭然、救うごとし。毎_{つね}に佛堂に入るに、合掌、胡跪し、一心に念佛す。力、竭_つくすに非ざれば休まず。寒氷と雖もまた須く汗を流し、以つて至誠を表すべし。出て即ち衆の爲に淨土の法門を説く。

《中略》

本朝の慈雲、式懺主略傳に云わく。阿彌陀佛の身に化す。長安に至り澆水の聲を聞く。乃ち曰わく。念佛を教えるべし。三年後、長安の城中に念佛滿つ。後に法照大師有り。即ち善導の後身なり。）

④『樂邦文類』卷第三（淨土宗全書第六卷一〇一七頁）

蓮社繼祖五大法師傳

《中略》

一善導師者不_レ知_二何許人_一唐貞觀中見_二西河綽禪師九品道場講_一誦觀經導大喜曰此眞入佛之津要修_二餘行業_一迂僻難_レ成唯此觀門速超_二生死_一於_レ是篤勤精苦若_レ救_二頭然_一續至_二京師_一擊_二發四部_一每入_二佛室_一胡跪念佛非_二力竭_一不_レ休雖_二寒冰_一亦須流_レ汗出即爲_レ人說_二淨土法_一

《中略》

天竺往生略傳曰**阿彌陀佛化身至_二長安_一**聞_二澆水聲_一和尚乃曰可_レ教_二念佛_一遂廣行勸化三年後滿_二長安城_一皆悉念佛後有_二法照大師即善導

後身也

（蓮社繼祖五大法師傳

《中略》

一、善導師は何許の人か知れず。唐の貞觀中、西河の綽禪師の九品道場の觀經を講誦す。導、大いに喜びて曰わく。これ眞に入佛の津要なり。餘の行業を修するは迂僻にして成し難し。ただこの觀門のみ、生死を速やかに超えんと云いて、ここに於いて篤く勤め、精苦して頭然ずねん救うべし。

續いて京師に至り、四部を擊發し、毎つねに佛室に入り、胡跪し念佛す。力、竭つくすに非ざれば、休まず。寒かん氷ひょうと雖もまた須く汗を流し、即ち人の爲に淨土の法を説く。

《中略》

天竺の往生略傳に曰わく、阿彌陀佛の化身。自ら長安に至り澆さんすい水の聲を聞く。和尚、乃ち曰わく、念佛を教えるべし。遂に廣行し、勸化す。三年後、長安城に滿つ。皆、悉く念佛す。後に法照大師有り。即ち善導の後身なり。）

第三章 「無量寿経曼荼羅」の概要

第一節 「無量寿経曼荼羅」の全体構成

第一項 「無量寿経曼荼羅」制作の背景と経緯

「無量寿経曼荼羅」作成の背景や経緯を知るには、「無量寿経曼荼羅」を詳細に解説した東武牛門光照寺沙門随天が著した『大経曼荼羅開壇記』が重要な役割を果たしている。

『大経曼荼羅開壇記』は、縁山大僧正豊譽靈應による「大経曼荼羅開壇記序」、縁山大僧正妙定月による「序」、そして、筆者東武牛門光照寺沙門随天の「無量寿経曼荼羅開壇記卷第一并序」の三つの序に続き、「大経曼荼羅總科」という目次に続き、増上寺大僧正連察敬賛という「無量寿経曼荼羅」最上段に掲げられている賛が続いている。

そして、卷第一は四十五丁、卷第二は五十三丁、卷第三は五十丁、卷第四は六十四丁に及ぶ大作で、卷末に、

大経曼荼羅開壇記全部四卷彫刻浄財寄 捨主 安蓮社前大僧正豊譽上人靈應大和尚 随喜助刻主 心蓮社漸譽上人知湛和尚 莊嚴浄土悲智圓満 安永九年庚子孟夏日

と記され、さらに、

安永九年庚子春

寺町綾小路下ル町

赤井長兵衛

京師書林

知恩院古門前

澤田吉左衛門

と安永九年へ一七八〇年へ京都書林から刊行されたことを知ることができる。

この『大經曼茶羅開壇記』の刊行の経緯については、縁山大僧正豊誉靈應の「大經曼茶羅開壇記序」、縁山大僧正妙定月の「序」、東武牛門光照寺沙門随天による「無量寿經曼茶羅開壇記卷第一并序」の三者の「序」に詳らかである。

第二項 『大經曼茶羅開壇記』の靈應の「序」

まず初めに、縁山大僧正豊誉靈應の「序」をみることにする。

＊縁山大僧正豊誉靈應による「大經曼茶羅開壇記序」

余嘗住水府常福蘭若。道友光照随天持其所著大經曼茶羅開壇記。手以相示。余乃循覽。以為新臨機杼柚自施。緯之經之。意亦甚勤矣。変相潤色。不可以無斯書也。因從與公之。歡譽大僧正亟相賞譽。亦獎上木。嗚呼。隙駟乃奄忽也。乃歳俄而随天逝矣。僧正尋亦遷化矣。是以不果。惜也稿本。久乃散落。及余移縁山。乃得所

轉寫本於林下。而甚耄焉。然錯脫寫誤。幾不可讀。屢命校正。寢復舊觀矣。即以授梓人。及刻成。題其首曰。蓋今經敷演彌陀因願果成之德。而使人欣慕不已。巧說濁世三毒五惡之相。其若眎諸掌然。見聞者莫不內省厭痛燒苦。而思戒善因也。蓋勸戒莫要於此。厭欣莫善於此矣。而今以吾之祖範論之。当今却末。無問道俗。五戒十善持得者甚希矣。若論起惡造罪。何異焦風駛雨也。是故彌陀五劫思惟超世悲願。釋迦慇懃勸讚歸入淨土。縱使一生造惡。但能繫意向專念無量壽佛。罪障自除。必得往生也。濁世之出離。智愚貴賤。唯有此一門耳。此釋迦大悲所以出興於五濁世。而彌陀名願。所由特留於萬年後也。則欲使人々今所說厭欣境界。當萬目前。出入必由此門。所以有此變相也。變相金文所陶成也。則欲一々萬當經文。以釋畫圖。旁引衆書。以助要義。所以有此記作也。斯舉也。余初從與之。而今復相扶。終成道朋之志也。不亦說乎。冀變相與記文雙行。而有利益於遐代也。

安永六年春二月

緣山大僧正 豐譽靈應

（余、嘗て水府常福蘭若に住す。道友の光照随天、其の所著大經曼荼羅開壇記を持す。手を以て相示す。余、乃ち循覽す。以て新たに杼柚ちよじく自施に臨機す。之を緯し之を経す。意また甚だ勤む。変相潤色。以て斯の書を無にすべからず。因に従り與しばちく之を公にす。歡譽大僧正、亟めて相い賞譽し、また上木を獎む。嗚呼ああ、隙駟げきしの奄忽えんこつ。乃ち歳俄にわか、而して随天、逝く。僧正、尋いつでまた遷化す。是れを以て果むぐわれず。惜しいなり。稿本、久しく乃ち散落す。及び余、緣山に移る。乃ち得る所の轉寫本、林下に於いて甚だ耄おいる。然るに錯脱、寫誤し、幾ばくか讀すべからず。屢しばしば校正に命し、また舊觀に寢そぐ。即ち以て梓人に授く。及び刻成る。

題、其の首に曰く。蓋し今經、彌陀因願果成の德を敷演す。使人、欽慕して已やまず。巧說濁世三毒五惡の相。其れ若し眎みるは諸これ掌然。見聞は、内省、厭痛燒苦せざるなし。思戒善因なり。蓋し勸戒は此の厭欣

に於いて要になかれ。此に於いて善になけれ。而るに、今、以って、吾れの祖、之の論を範す。当今却末。道俗問う無く、五戒十善持得は甚だ希なり。若し論ぜば起惡造罪、何ぞ焦風駛雨に異なるや。是の故に彌陀五劫思惟超世の悲願、釋迦慇懃し、歸入淨土を勧讚す。縱使一生造惡すとも、但し繫意し、一向專念無量壽佛を能くせば、罪障自除、必得往生するなり。濁世の出離。智愚貴賤、唯だ此の一門に有るのみ。此の釋迦大悲、所以に五濁世より出興す。彌陀名願の所由、万年後に於いて特留するなり。則ち欲使の及びと今所説の厭欣境界、當に目前に萬すべし。出入、必ず此の門に由る。所以は此の變相にあるなり。變相、金文、陶成する所なり。則ち欲す一々は當に經文に萬す。以って画圖を釋す。旁に衆書を引く。以って要義を助く。所以に此の記作有り。斯の挙なり。余、初め従り之に與まる。今また相い扶つ。終成、道朋の志なり。また説かんや。變相翼^{たす}けて記文を与え雙行す。而して退代^{かだい}に於いて利益有り。

安永六年春二月

緣山大僧正 豐譽靈應)

とあるように、靈應が水戸の常福寺に住持していた時、道友の随天が記した『大經曼荼羅開壇記』を拝覽したところ、その内容が変相と經文と合致し、注釈は衆書を引いて要義を得たものであった。それは変相が優れたものであることによるもので、増上寺第四十七代歡譽辯秀上人も極めて賞誉し、上梓することを勧めたのである。しかし、時の經つのは速いもので、隨天が亡くなり、次いで歡譽上人も逝き、梓行されなかった。

その後、靈應は安永二年に増上寺第四十九世として昇住した。『大經曼荼羅開壇記』の転写本は古びていたものの、それを錯脱、写誤して校正し、ついに梓行するに至ったということである。

その内容は、彌陀因願果成の徳を敷演するもので、彌陀五劫思惟超世の悲願、釋迦慇懃勧讚に依って、一向專念無量壽仏の一門を能くすることにより、濁世から出離をし、必得往生することが説かれた変相に基づいて注釈されたものである。私は初めからこの記に惹かれ、今も変わることが無いのは、道朋の志であるからで、今更言

うまでも無いことである。まさに変相を翼^{たす}け、記文が双行するようなものであり、遐代までの利益があるということが記されている。

第三項 『大經曼荼羅開壇記』の定月の「序」

続いて、増上寺第四十六代妙譽定月は、

＊縁山大僧正妙定月の「序」

大經曼荼羅。華頂義山之刻營。法眼敬輔之所図貌也。山公嘗講經口授。則敬輔隨而画成焉。說之與畫。互為郢匠。可謂奇遇矣。即經中之說相。所有之境界。具然罄於目前。所謂芥子須彌。包容無碍者乎。何其巧說妙画之相得矣哉。光照随天就圖作記。援引經論諸釋。以便於講習者也。其敷演之者。講經而及圖。對圖而及記。則自他之益。不亦大乎。且夫萬年之後。特留此經。則變相與記。相與不朽者可知己。余随喜為序爾。

明和丙戌之春 縁山大僧正妙定月

（大經曼荼羅は華頂義山の刻營、法眼敬輔の図貌する所なり。山公嘗て經を講じ口授す。則ち敬輔隨いて画を成さん。說これ畫に與う。互いに郢匠^{えいしょう}と為る。奇遇と謂うべし。即ち經中の說相、所有の境界、具に然り、目前に於いて罄^{けい}す。

所謂、芥子須彌、無碍^{むげ}の者を包容す。何ぞ其の巧說妙画の相を得んかな。光照随天、圖に就いて記を作す。經論を援引し諸もろを釋す。以って便^{すなわ}ち於いて講習する者なり。其の敷演の者、經を講じ圖に及ぶ。對圖して記に及ぶ。則ち自他の益、また大ならずや。且つ夫れ萬年の後、特留此經す。則ち變相に與える記、相い與え不朽のものと知るべきのみ。余、随喜して序を為すこと爾り。

明和丙戌之春 縁山大僧正妙定月

ここでは、定月が「大経曼荼羅」は華頂義山の刻當であり、法眼高田敬輔が図貌したものであること、そして、画と注釈とは、『観経疏』に次のように郢人えいひとと匠石しょうせきの二人の名人が釈迦・彌陀の二尊の意に譬えられるように、斯乃二尊許應無異直以隱顯有殊正由器朴之類萬差致使互爲郢匠(注1)（斯れ乃ち二尊の許應こおう異なること無し、直ただ以こ隱顯殊おんけんことなること有り、正しく器朴の類、萬差まんじやなるに由つて互に郢匠えいしょうたらしむることを致す。）

互に呼応しているものであり、まさに芥子の中に須弥山をみるような巧説妙画であり、勝れており、自他の益になるものであるということが記されている。

第四項 『大経曼荼羅開壇記』の隨天の「序」

さらに、「無量寿経曼荼羅」に注釈を加え『大経曼荼羅開壇記』を著した隨天は、

＊ 東武牛門光照寺沙門隨天による「無量寿経曼荼羅開壇記卷第一并序」

江中日野法眼敬輔以「善画」聞きこ于四方しやうほう矣。素有「奉佛之好」。然東諮南詢心行未決。晚謁「華頂義山上人」。上人解行卓絶。德風高振。敬輔深歸しんき之。親灸彌年。安心斯決。淨業日進矣。上人嘗自教「授無量壽經」。使し其圖「画於曼荼羅」也。乃金口之所陳。師意之所由相。得而應。乃授筆以居于營矣。嗟何爾繪事之特妙也。即菩薩因願果成之德相願王悲化所攝之境界。粲然容よう在于一舖之中。猶如「明鏡觀」其面相「寬大経曼荼羅之權輿也。如「彼法如所感變相」者。即聖手自出。冥應顯益。固勿論已。今此曼荼羅者。因「修多羅」所「縁起」。則亦至心拜瞻之徒。西刹之華報。道場之妙果。豈為「餘乎。敬輔珍藏者。蓋有年矣。没後其嗣三敬。欲「彫鐫以施」有信之輩」也。京師林丘寺宮元秀尊尼隨喜賜「手書題額」。東都三縁山蔡華大僧正唱嘆為贊「上方」。延享乙丑之歲。刻既成矣。置於日野信樂院「以為「依藏」也。眞是濁世之明幢淨業者之標準者也。信樂淳公遠命

余為^二其注解^一。余何幸值^二其勝緣^一耶。淳公固已知^レ我。則豈以^二才學文辭^一望^レ我者哉。蓋公意但欲^レ使^二其種^一善苗^一耳。亦何得辭。輒忘^二固陋^一敢述^二斯記^一。而取^二笑於大方^一。安得^レ無^二赧愧^一乎。請後之君子。為正^二謬妄^一云爾。

明和丙戌之春 東武牛門光照寺沙門隨天謹叙

（江中日野の法眼敬輔は善面を以って四方に聞こう。素より奉佛の好有り。然るに東谿南詢心行して未だ決まらず。晩くに華頂義山上人に謁す。上人、解行卓絶、徳風高く振るう。敬輔深く之に歸し、親灸年を彌る。安心斯れに決す。浄業日々に進む。上人曾て自ら無量壽經を教授して其れをして曼茶羅を圖画せしむ。乃ち金口の珍する所、師意の由る所、相得て應ず。乃ち筆を授けて以って經を營ず。嗟、何ぞ爾り、繪事の特妙なるや。

即ち、菩薩因願果成の徳相、願王悲化所攝の境界、粲然として一鋪の中に容在す。なお明鏡其の面相を觀るが如し。實に大經曼茶羅の權輿なり。彼の法如所感の變相のごときは、聖手の自出なり。冥應顯益、固より論勿きのみ。今、此の曼茶羅は修多羅に因つて緣起する所。則ちまた至心拜瞻の徒、西刹の華報、道場の妙果、豈餘るなりとせんや。敬輔珍藏する。蓋し年有り。没後、其の嗣、三敬、彫鑄しに、以って有信の輩に施さんと欲すなり。

京師林丘寺の元秀尊尼、隨喜して手書き題額を賜ひ、東都三緣山の蔡華大僧正唱嘆して、為に上方に賛ず。延享乙丑の歳、刻、既に成る。日野信樂院に置きて以って永藏とす。眞に是れ濁世の明幢、淨業者の標に準るものなり。信樂の淳公遠く余に命の其の注解を爲らしむ。余、何の幸せぞ。斯の勝縁に値へるや。淳公固より已に我を知らずんば、則ち豈才學文辭を以つに我を望むならんや。蓋し公の意、但だ其れを久しく善苗を種へ使めんと欲するのみ。また何ぞ辭することを得ん。輒ち固陋を忘れて敢えて斯の記を述す。而して笑を大方に取らんは、安んぞ赧愧無きことを得んや。請ふ、後の君子、為に謬妄を正せと云ふ

のみ。

明和丙戌の春 東武牛門光照寺沙門隨天謹叙

と隨天が記している内容から、江州日野の法眼敬輔は、善画を以って四方に聞こえ、素から奉佛の好が有る人物である。ただ、東谿南詢して未だに定まらないでいたが、年老いてから華頂義山に謁することができた。上人は解行卓絶で徳風の高い方であった。敬輔は深く敬服して親灸を得ることができ、浄業も日々進んだ。ある時、上人が自ら無量寿経を教授し、それを曼荼羅に為すように勧めた。それはまさに師の尊い言葉であり、意思であると受けとめ、筆を取って無量寿経を描くことになったのである。

その描かれた絵相は、菩薩因願果成の徳相であり、願王悲化所攝の境界を顕すものであった。それは燦然と一軸の中に耀き、優れた手本を観るようなものであった。実に大経曼陀羅の最初のもので基本となるものである。彼の法の如く感ずる所の変相は、仏の聖なる尊い聖手から自出したようなものであり、冥應顯益（信心の功德がはつきりと顕れる《顯益》と目に見えない《冥益》）で元からいいようのないものである。今この曼荼羅が修多羅（経）によって縁起するところは、至心拝瞻の徒、西刹の華報、道場の妙果となるもので、非常に価値の高いものである。敬輔はこれを描き、珍藏したのである。そして、年を経、敬輔の没後（敬輔七十二歳で生存中）に息子の三敬（竹隠二世）が版を起こし、有信の方々へ施そうとしたのである。

京都の林丘寺の元秀尊尼がこれを大いに随喜して、手書題額を施し、増上寺の第四十三世走誉連察大僧正が唱嘆して上部に賛を与えてくれたのである。

延享乙丑歳（延享二年へ一七四五年）、ついに梓行され、それを日野の信樂院に置いて永蔵としたのである。これは真に濁世の明幢であり、浄業の標となるものである。

信樂院の淳公が、かつて私に仰せの注釈を為すことができたのである。私は幸せなことである。この勝縁は価値のあるものである。淳公はもともと私を知らず、どうして才学文辞のない私を望んだのであろうか。多分、淳

公の意図は、種を植え、長い時を経て良い苗に育てようとしたのだろう。だからどうして断ることが出来るだろうか。古い考えに固執することを忘れて、この記を述べたのである。だから大方の方々から笑をとることになり、どうして赤面しないことがあるのか。後の人々、もし誤謬があったら正して欲しいと願うばかりである。と随天は記している。

第五項 小結

右のように、三点の「序」と『敬輔画譜』（第一章第二節〇〇頁参照）を踏まえ、「無量寿経曼荼羅」制作の経緯をまとめてみると、

① 「選択集十六章之図」は、正徳三年（一七一三年）に、華頂良照義山の奨めで高田敬輔が描き、正徳四年（一七一四年）に版行されたこと。

② 「無量寿経曼荼羅」は、正徳四年（一七一四年）に、同じく良照義山が高田敬輔に『無量寿経』を教授し、曼荼羅に描かせたこと。

③ 「無量寿経曼荼羅」が延享二年（一七四五年）に梓行されたこと。その流れは、

ア 嫡子三敬が、東都に願い上げ、御免の上、梓行したこと。《高田敬輔七十二歳》

イ 皇女林丘寺二世松領元秀尊尼が、「無量寿経曼荼羅」を重んじたことにより、題額を賜わることができたこと。

ウ 増上寺第四十三世入蓮社走誉一阿連察大僧正が唱嘆したことにより、題賛を賜わることができたこと。

エ 梓行された「無量寿経曼荼羅」は、高田敬輔の菩提寺、江州日野の信楽院、淳公（十二世定蓮社淳誉上人必得生阿龍山和尚、明和九年（一七七二年）四月十一日没）に預けられたこと。

④ 随天《光照寺一五世、増上寺の知藏（延享二年（一七四五年）～寛延二年（一七四九年）》が、『大経曼茶羅開壇記』を著すに至った経緯は、

ア 信楽院の淳公より註釈を依頼されたこと。

イ 曼茶羅の注釈を諸経・註釈書等を引用して『大経曼茶羅開壇記』（明和三年（一七六六年））として著すが、梓行されなかったこと。

ウ 随天の道友、靈應が拝覧し、増上寺四十七世心蓮社観誉喜受天阿辨秀（元禄十年（一六九七年）～明和九年（一七七二年））が賞賛し、梓行を薦めたこと。

⑤ 随天、辨秀ともに遷化のため、刊行されなかったこと。

⑥ 靈應（安蓮社豊誉民阿。水戸瓜連常福寺四十六世から小石川伝通院三十六世を経て、安永二年（一七七三年）増上寺四十九世に転昇。）が未刊の『大経曼茶羅開壇記』を錯脱、写誤を校正し、安永九年（一七八〇年）に梓行したこと。

となり、高田敬輔が良照義山の『無量寿経』の教授のもとに「無量寿経曼茶羅」を作成し、嫡子の三敬が梓行し、地元の信楽院の淳公に預けた。その淳公が、随天に「無量寿経曼茶羅」の注釈を依頼し、『大経曼茶羅開壇記』が著されたが、梓行されなかった。随天の道友の靈應が賞讃し、辨秀も上梓を勧めた。が、随天、辨秀ともに遷化し、刊行されなかった。それを増上寺に昇住した靈應が校正し、梓行したという経緯である。

以上が、『大経曼茶羅開壇記』刊行までの経緯である。

(注1) 善導『観経疏』（定善義）浄土宗全書第二卷四四頁

第二節 「無量寿経曼荼羅」の各絵相の配置とその概要

第一項 「無量寿経曼荼羅」の連察の題賛及び右下部の款記

「無量寿経曼荼羅」という題字の上段に、増上寺大僧正連察による次のような題賛がある。

印

稽首西方朝宗處
爛然後素聞靈知
河沙聖凡休分辨升降
莊嚴各々奇到頭只勸
蓮華藏趣向阿堵返照時
即象珍重見無象事在
至勲那有涯

（稽首す、西方朝宗の處、
爛然として後素より靈知を聞く。
河沙の聖凡、辯を休分して升降す。
莊嚴各々奇到にして頭只だ勸む。
蓮華藏の趣向、阿堵は返照の時。
即ち象珍し、重ねて見る無し、象事^{かたち}在たり。
勲那^{うがい}有涯に至る。

増上寺大僧正

連察敬賛

印 印

于時延享乙丑冬十月

増上寺大僧正

連察敬賛

延享二年十月



とあるように、増上寺大僧正連察による題賛があり、そこには、稽首して西方の拝謁するところの後素（画図）は、爛然^{らんぜん}として靈知を聞くようなものであり、恒河の沙ほどの聖者や凡人も、言葉を休分するほど莊嚴は勝れ、頭が下がる思いである。蓮華藏の趣向を省るのにふさわしく、絵相は珍重で自在である。その功績は生涯に亘るものである。とその存在が多分に評価されている旨を知ることができる。

この増上寺大僧正連察とは、入蓮社走誉一阿と号し、字は不如^{（注1）}。生没年は、寛文十二年（一六七二）～宝暦五年（一七五五）。元文三年（一七三八）に小石川伝通院。延享二年（一七七四）八月十一日増上寺に転昇し、四十三世の法燈をつぎ、大僧正に任じられたということから、この題賛の揮毫は、住職に就いて間もなくの頃のものであることを知ることができる。

また、その経緯については、『敬輔画譜』^{（注2）}に次のような一文があり、

又請縁山察公題賛其上遂白官印頒于世

（また縁山察公に題賛を請い、其の上、遂に白官し、世に印頒す）

息子の高田三敬が梓行の際に願ひ出て、賛を賜ったことを知ることができるのである。

さらに、「無量寿経曼荼羅」の向かって右下部の款記には、



無量壽経曼荼羅并流通文者林丘寺宮松領元秀尊尼御筆

（無量壽経曼荼羅并びに流通文は林丘寺宮松領元秀尊尼の御筆なり。）

とあり、京都林丘寺二世の皇女松領元秀尊尼から、題字の「無量寿経曼荼羅」や図間の章段に流通文の書き入れを賜ったということが記されている。

第二項「無量壽經曼荼羅」の各絵相の配置

高田敬輔の「無量壽經曼荼羅」について、詳細に注釈した隨天の『大經曼荼羅開壇記』をもとに、各絵相の配置とその概要を具体的にみることにする。

その冒頭には次のように記されている。（『大經曼荼羅開壇記』卷一 一丁表）

將_レ解_二此曼荼羅_一大分爲_二二初釋_二題額_一次辯_二變相_一初釋_二題額_一者無量壽經曼荼羅七字是也於_レ中初之四字所依經名次之三字能依變相（中略）

（將に此の曼荼羅を解せんと大いに分かちて二とす。初めに題額を釋し次に變相を辯ず。初に題額を釋すとは、無量壽經曼荼羅七字是れなり。中に於いて初めの四字は所依の經名、次の三字は能依の變相なり。）で始まり、その全体構成については、次のように記されている。（『大經曼荼羅開壇記』卷一 二十六丁裏、二十七丁表）

第二述_二所說彌陀行成攝_一者此有三段一所行二所成三所攝右邊爲_二所行_一中央爲_二所成_一上邊左邊及下邊爲_二所攝_一初所行段亦分爲_二三一勝因二勝行三勝果初勝因四一出家修道二現諸佛土三五劫思惟四成滿大願（第二、所說彌陀の行、成、攝を述べば、此れに三段有り。一に所行、二に所成、三に所攝。右邊を所行と爲す。中央を所成と爲す。上邊と左邊及び下邊を所攝と爲す。

初めの所行段、また分ちて三と爲す。一に勝因、二に勝行、三に勝果。

初めに勝因に四つ。一に出家修道、二に現諸佛土、三に五劫思惟、四に成滿大願）

とあるように、大きく所行、所成、所攝の三段に分割され、それぞれがさらに細分化され、『無量壽經』の内容に沿った大小二十の絵相が描かれ、一幅の掛け幅にしたものである。

この掛け幅の最重要部分の中台で、極楽浄土の様相が描かれるのである。

中台部分の最下段は、「諸根悦豫」（靈鷲山での説法の様相。）を表し、向かって右から順に、「序分説法」、「正宗説法」、「流通説法」の様相が描かれている。

その上部は《害地段》の「舞楽会」（七喜合成地で八菩薩が天樂を奏じる中で二菩薩が歓喜踊躍と舞う姿。）や「華衣壇」（妙衣布地の二菩薩・吹華満国の二菩薩）が描かれ、左右は《害樹段》（左右純樹・左右雜樹・左右岸樹）が囲み、さらにその上部には、《害池段》が表され、三輩生相・池中三化佛・池中右二菩薩、池中左二菩薩、池中二聲聞、そして、池中蓮華や荷葉、池中化鳥が描かれ、第一宮殿、第二宮殿の前後左右の含華宮殿には、辺地胎生が表されている。

そして、最も象徴的なのは《害樓段》で、第一宮殿・第二宮殿・第三宮殿が左右に聳えるように立ち並び、その中央には大樓閣の中央宮殿が構えられ、弥陀法王・観音菩薩・勢至菩薩・右二十四聖・左二十四聖の《五十一尊》が坐しているのである。

そして最上段は、《虚空段》で、三尊から立ち昇る三尊光変や虚空飛物として、左右にそれぞれ天人・化鳥・菩薩・化仏・楽器・雨華が飛び交い、さらに極楽鳥が飛び、琵琶、琴、簫等の楽器が奏でるように降り、十四佛國菩薩・三十六百千億佛等が往来し、四人の飛天が如来莊嚴のために天華を降らす様子をみせ、大きく五層に分けられて描かれる。

この中台部分の上縁には「上輩往生」、「中輩往生」、「下輩往生」、の三輩往生の様子が描かれ、さらに右側には「天下和順」（釈尊の教えにより人々が和し、平穏な暮らしを営む様相。）、「此土修善」（この世で「忍辱精進一心智慧轉相教化為徳立善」と善を行うことを勧める様相。）の五図が続いている。

右縁には「貪瞋愚過」とし、『無量寿経』の「三毒段」が描かれ、「貪欲」「瞋恚」「愚癡」のもたらす悪業を示し、「非常水火」「劫奪」「怨家」「盜賊」「債主」「坐摧碎身亡命終」「焚漂劫奪消散摩滅」「有田憂田」「有宅

憂宅」「無田亦欲有田」「無宅亦憂」「衣食」「有是少是思有齋等」「牛馬六畜奴婢錢財衣食什物復共憂之」「或時心諍有所悲怒」「或父哭子或子哭父兄弟夫婦更相哭泣」「父餘教令先人祖父素不為善」「矇冥抵突不信經法」の各標文に基づいた絵相が続き、最下段には「坐摧碎身亡命終棄損之去」の標文のもとに、土葬、野葬、火葬の絵相が続き、諸行無常であることが説かれている。

また、左縁には、下段から、「特留此經」（無量寿經が末法の世になっても留められること。）、「出家修道」（世自在王の説法を聞いた法藏菩薩が比丘になるため出家する姿。）、「現諸佛土」（世自在王が法藏菩薩のために二百十一億の諸仏国土を示したこと。）、「五劫思惟」（法藏菩薩が五劫の間思惟したこと。）、「成滿大願」（五劫思惟の末に四十八願が成満したこと。）「積功累德」（法藏菩薩が菩薩行の実践を行い、徳を積んだこと。）「妙土莊嚴」（法藏菩薩の願行が達成し、阿弥陀如来になったこと。）と続いている。

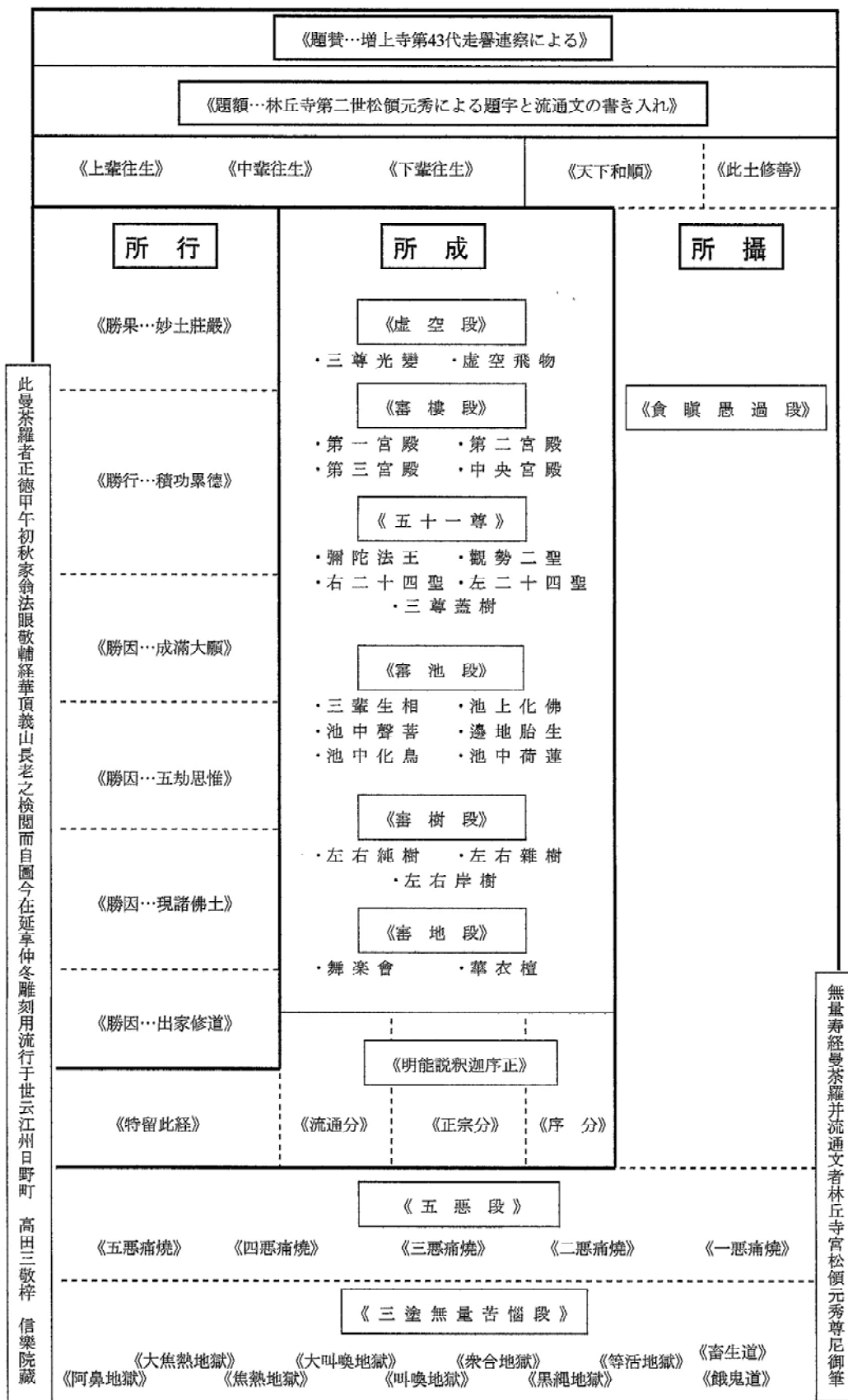
そして、下縁には「五惡段」の「一惡痛燒（不殺生）」、「二惡痛燒（不偷盜）」、「三惡痛燒（不邪淫）」、「四惡痛燒（不妄語）」、「五惡痛燒（不飲酒）」の五大惡が描かれている。

さらに、最下段には「五段惡」を受けて、「三塗無量苦惱」の段があり、その右から順に「畜生道」「餓鬼道」「地獄道」が描かれ、さらに地獄の様相が「等活地獄」「黑繩地獄」「衆合地獄」「叫喚地獄」「大叫喚獄」「焦熱地獄」「大焦熱獄」「阿鼻地獄」の八大地獄の様子が表されている。

尚、高田敬輔は、この段に、《三途》（三途の川の三瀬へ生前の惡業の度合いによる三種の渡り方）よりは、むしろ《三塗》（塗炭の苦しみを表す、火塗（猛火に焼き尽くされる地獄道）・刀塗（刀杖で迫害される餓鬼道）・血塗（互いに相食む畜生道）の意味合いの文言を用い、三惡道を表現している）。

以上が「無量寿經曼荼羅」の各絵相のおおよその配置である。

これまでの概要を図に表すと、概ね次頁のようになる。



此曼荼羅者正徳甲午初秋家翁法眼敬輔経華頂義山長老之檢閲而自圖今在延享仲冬雕刻用流行于世云江州日野町 高田三敬梓 信樂院藏

無量壽經曼荼羅并流通文者林丘寺宮松領元秀尊尼御筆

* 題贊・款記・各絵相の配置概要図

第三項 随天『大經曼荼羅開壇記』の総科と高田敬輔「無量寿經曼荼羅」の標文との関連

このように『無量寿經』を、所行、所成、所攝と大きく三つに分けることについて、高田敬輔の師である良照義山は、その著『無量壽經隨聞講録』（浄土宗全書第十四卷二八七頁）に、

自下大文第二正宗分依_二淨影疏_一大分爲_レ三初明_二所行_一^{彌陀因位願行}二明_二所成_一^{彌陀果上ノ身土}三明_二所攝_一^{彌陀現在ノ利物}又依_二宗家_一細分爲_レ七初明_二勝因_一二明_二勝行_一三明_二勝果_一^{上來淨影所行文也}四明_二勝報_一五明_二極樂_一^{上來淨影所成文也}六明_二悲化_一七明_二智慧_一^{上來淨影所攝文也}三七兩科開合雖_レ異其義是同今須_下以_レ三爲_二其大科_一七爲_中小科_上科勝因者序文義曰彌陀本國四十八願願皆發_二増上勝因_一糅鈔三十一_紙云永劫修行亦是雖_レ因五劫發願是因本故從_レ初從_二本願_一且名_二因

（自下、大文第二正宗分。淨影の疏に依れば、大に分ちて三と爲す。初めに所行を明かす（彌陀因位の願行）。二に所成を明かし（彌陀果上の身土）三に所攝を明かす（彌陀現在の利物）。

又、宗家に依れば、細分して七と爲す。初めに勝因を明かし、二に勝行を明かし、三に勝果を明かす。

（上來淨影所行の文なり）。四に勝報を明かし、五に極樂を明かす（上來淨影所成の文なり）。六に悲化を明かし、七に智慧を明かす（上來淨影所攝の文なり）。三七の兩科、開合の異なると雖も、其の義、是れ同じ。今、須く三を以って其の大科と爲し、七を以って小科と爲すべし。科に勝因とは、序文義に曰わく。彌陀の本國は四十八願より願ず。みな増上の勝因を發す。糅鈔三十一（卅八紙）に云う。永劫の修行、また是れ因なりと雖も、五劫發願は是れ因のものとなるが故に、初に従い本願に依りて且く因と名づく。）

と記し、淨影の疏《『無量寿經義疏』（浄土宗全書第五卷二二頁）》は、

第六阿難奉_レ教聽受文顯可_レ知上來序竟就_二正宗中_一文別有_レ三一明_二所行_一二阿難白佛法藏比丘爲已成佛而取滅下明_二其所成_一三告阿難其有衆生生彼國者住正定下明_二其所攝_一此三對皆就_二彌陀佛_一説言_二所行_一者彰_二彼如來本

昔所修無量行願^一言^二所成^三者彰^四彼如來現今所得身土之果^五言^六所攝^七者彰^八彼如來現今攝^九取十方國土無量衆生^{一〇}同往^{一一}被國^{一二}教化利益^{一三}此三即是經之大宗

（第六、阿難、教を奉り聽受の文を顯すは、知る可し、上來序竟は、正宗の中に就いての文なり。

別して三つ有り。一に所行を明かす。二に阿難白佛法藏比丘爲已成佛而取滅の下、其の所成を明かす。

三に告阿難其有衆生生彼國者住正定の下、其の所攝を明かす。此の三對は、みな彌陀佛に就いて説く。

所行と言うは、彼の如來、本昔、所修の無量行願を彰す。

所成と言うは、彼の如來、現今、所得の身土の果を彰す。

所攝と言うは、彼の如來、現今、十方國土の無量衆生を攝取し、同じく彼の國に住し、教化利益を彰す。

此の三つ、即ち是れ經の大宗なり。）

とあるように、所行・所成・所攝の三科に分けられている。所行は、本昔、所修の無量行願。所成は、現今、所得の身土の果。所攝は、現今、十方國土の無量衆生を攝取、彼國に住し教化利益を得るとしている。

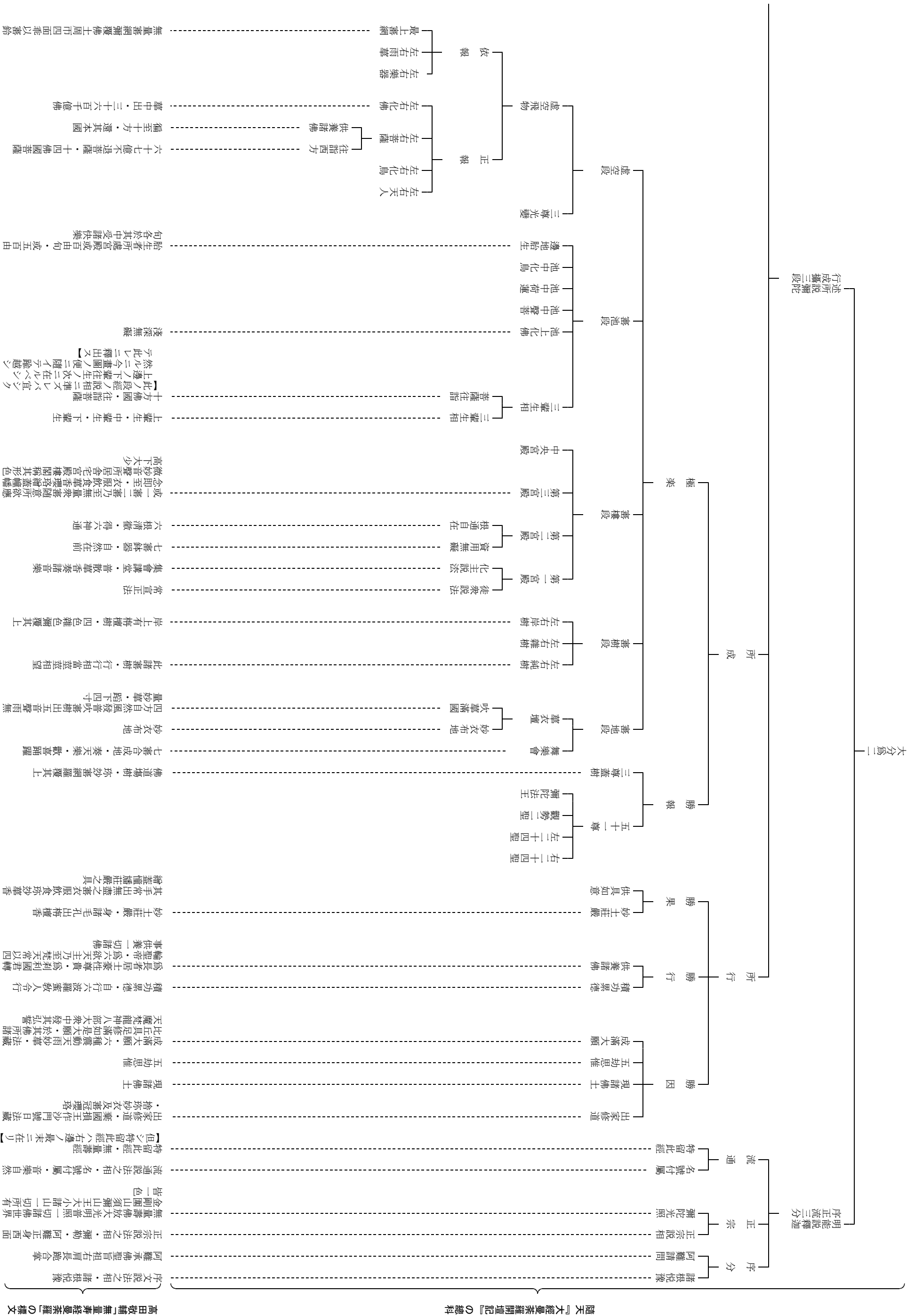
宗家の善導は、勝因・勝行・勝果・勝報・極樂・悲化・智慧（『觀經疏』序分義）^{（注3）}の七科にわけているが、

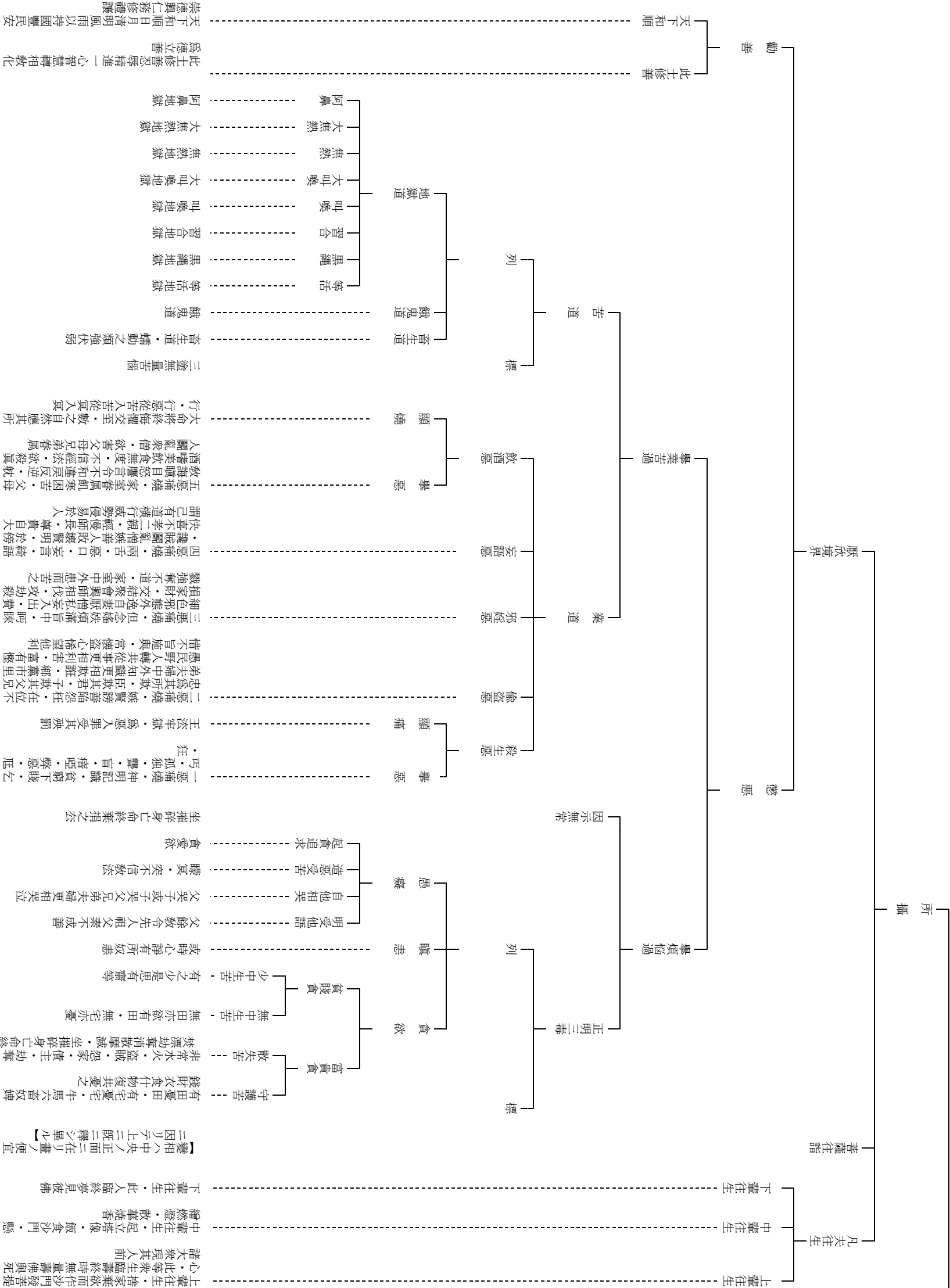
これは開合の異で、その義は同じであると述べている。

このようなことから、良照義山及び隨天は、淨影寺慧遠の所行・所成・所攝の三科及び善導の七科に分けることを基本に据え、『無量寿經』を解釈していることを知ることができるのである。

そこで、この所行・所成・所攝の三科にそった隨天の『大經曼荼羅開壇記』の総科を図示し、さらに高田敬輔が絵相の内容の標とした標文を付け加えたのが、次頁の関連図である。

尚、隨天の『大經曼荼羅開壇記』の総科の扱いは、別項『貪瞋愚過段』で取り扱った『科図 無量寿經』へ良照義山が改訂した『浄土三部經』（元禄四年刊）を底本に成っている浄土宗の基本的經典理解書であることから、良照義山、高田敬輔、隨天の三者の関連が深いことを知ることができるのである。





第四 小結

以上のように、高田敬輔の描いた「無量寿経曼荼羅」の《釋迦序正流三分》《彌陀行成攝三段》の絵相と標文は、良照義山の『無量寿経随聞講録』・『科図 無量寿経』、淨影寺慧遠の『無量寿経義疏』、善導の『觀經疏』（序文義）、隨天の『大経曼荼羅開壇記』と一連の繋がりのもとに作成されたものであり、次のようなことを知ることができるのである。

- ① 最上段の連察の題賛、林丘寺宮松領元秀による題字と『無量寿経』流通文、左右下部の款記が、「無量寿経曼荼羅」制作までの経緯やそれに関わる人物との関連性を探る糸口になっていること。
- ② 各絵相の配置は、所成の極楽段を中台に、所行を右縁（向かって左）、そして、所攝を上縁から左縁、下縁へと時計回りに取り囲むように、計二十の絵相が配置されていること。
- ③ 『大経曼荼羅開壇記』の注釈の総科は、良照義山の改訂に基づいた『科図 無量寿経』を踏まえた上で成り、高田敬輔の「無量寿経曼荼羅」の標文との整合性がみられること。

(注3)(注2)(注1)

大橋俊雄『浄土宗人名辞典』四九六頁 双樹舎 二〇〇一年

『敬輔画譜』巻之一 二丁裏 文化元年（一八〇四）刊

善導『觀經疏』（定善義）浄土宗全書第二卷二八頁

第三節 「無量寿経曼荼羅」の題字及び流通文

第一項 題字「無量寿経曼荼羅」

対象とする「無量寿経曼荼羅」の制作年が明らかなものは、延享二年版と天保六年版（いずれも佛敎大学図書館蔵）である。両曼荼羅とも二十の絵相は同じ版が使われているが、題賛や款記、流通文は異なりがみられることから、その相違点を考察することにより「無量寿経曼荼羅」の制作の背景にせまることにしたい。

※題字「無量寿経曼荼羅」の延享二年版と天保六年版の対比

＊延享二年（一七四五）版（江州日野信樂院蔵版） 《佛敎大学図書館蔵》

《題字》

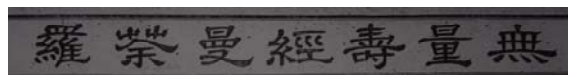


《全体図》

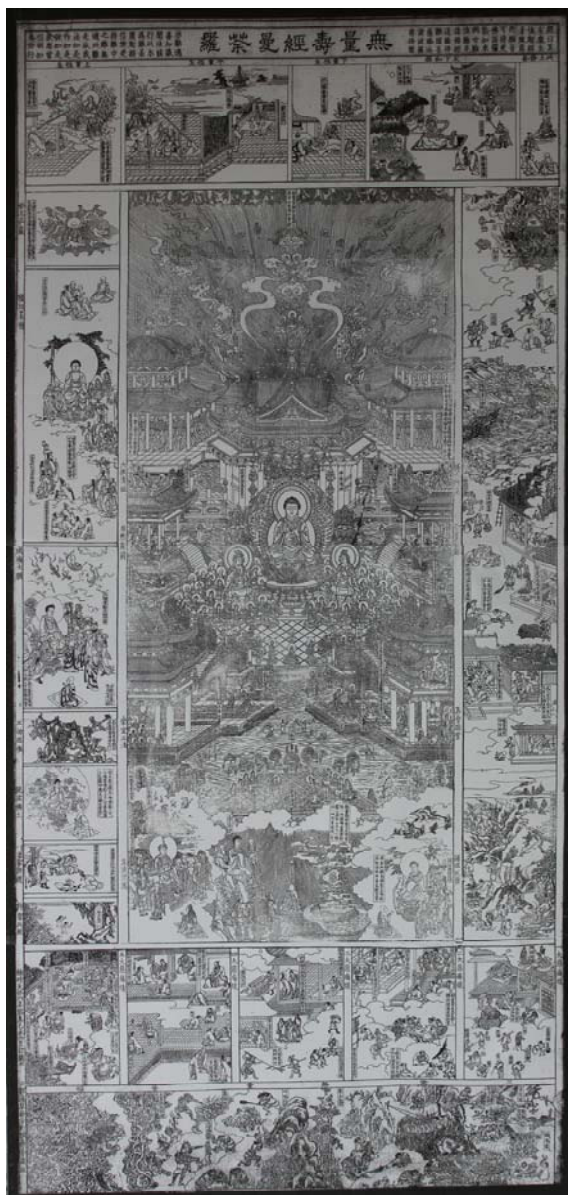


＊天保六年（一八三五）版（江都浅草願壽寺藏版）《佛教大学図書館蔵》

《題字》》



《全体図》



右のように「無量壽經曼荼羅」の延享二年版と天保六年版を対比してみると、延享二年版には、最上段に連察の題賛があり、右下縁の款記がみられる。しかし、天保六年版は、連察の題賛と、右縁下の第二節第一項で考察した「無量壽經曼荼羅并流通文者林丘寺宮松領元秀尊尼御筆」の款記も削除されている。

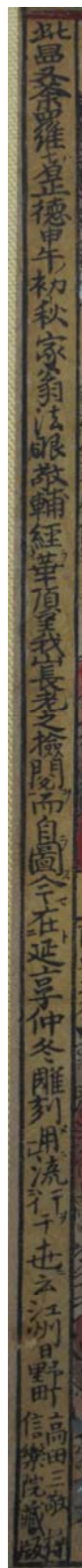
また、「無量壽經曼荼羅」の題字は明らかに、楷書体と隸書体で字体が異なり、開版の延享版の「林丘寺宮」が書いたものと天保版は別の人物によるものであることを知ることができるのである。

さらに、題字・題賛・款記を除いた曼荼羅そのものの絵相は、高田敬輔原版（延享二年版）と同じ版が使われていることも明らかである。

第二項 左下縁の款記

また、両曼荼羅の制作年と所蔵を表す款記は、それぞれ次のように左縁下に記され、その出処を知ることができる。

延享二年（一七四五）版（江州日野信樂院藏）



「此曼荼羅者正徳甲午^ハ初秋家翁法眼敬輔^テ經^ニ華頂義山長老之檢閱^ヲ而自^ラ圖^ス今在^マ延享仲冬雕刻^メ用^ヒ流行^リ于世^ニ云
江州日野町 高田三敬梓 信樂院藏」

（此の曼荼羅は正徳甲午の初秋、家翁の法眼敬輔が華頂義山長老の檢閲を経て、而して自ら圖す。
今、延享仲冬に雕刻して、流行を用いて在りと世に云う。江州日野町 高田三敬梓す。信樂院藏版）

天保六年（一八三五）版（江都淺草願壽寺藏版）



「維持天保六年龍集乙未六月訂鐫之 江都淺草新寺町願壽寺藏版」

尚、天保版所蔵寺院の東京淺草新寺町願壽寺は、当時、真宗高田派唯念寺塔頭の一つ^{（注1）}願壽寺として存在し、現在は、台東区元淺草二丁目七の四に真宗高田派願壽寺として現存している。

第三項 『無量壽經』流通文

林丘寺宮松領元秀によつて書き入れられた『無量壽經』の流通文をみると、この部分は『無量壽經』卷下の卷末の最終二段落にあり、(『浄土宗全書』第一卷三十五頁)

佛語彌勒其有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一念當知此人爲得大利則是具足無上功德是故彌勒設有大火充滿三千大千世界要當過此聞是經法歡喜信樂受持讀誦如說修行所以者何多有菩薩欲聞此經而不能得若有衆生聞此經者於無上道終不退轉是故應當專心信受持誦說行佛言吾今爲諸衆生說此經法令見無量壽佛及其國土一切所有所當爲者皆可求之無得以我滅度之後復生疑惑當來之世經道滅盡我以慈悲哀愍特留此經止住百歲其有衆生值斯經者隨意所願皆可得度佛語彌勒如來興世難值難見諸佛經道難得難聞菩薩勝法諸波羅蜜得聞亦難遇善知識聞法能行此亦爲難若聞斯經信樂受持難中之難無過此難是故我法如是作如是說如是教應當信順如法修行

爾時世尊說此經法無量衆生皆發無上正覺之心萬二千那由佗人得清淨法眼二十二億諸天人民得阿那含果八十萬比丘漏盡意解四十億菩薩得不退轉以弘誓功德而自莊嚴於將來世當成正覺爾時三千大千世界六種震動大光普照十方國土百千音樂自然而作無量妙華紛紛而降佛說經已彌勒菩薩及十方來諸菩薩衆長老阿難諸大聲聞一切大衆聞佛所說靡不歡喜

佛說無量壽經 卷下

(佛、彌勒に語げたまわく。其れ彼の佛の名號を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍して乃至一念せんに、當に知るべし、此の人、大利を得たりとす。則ち是れ無上の功德を具足す。是の故に彌勒。たとい大火、三千大千世界に充滿することありとも、要かならず當に此れを過ぎて是の經法を聞きて、歡喜信樂し、受持し

讀誦し、説の如く修行すべし。所以は何ん。多く菩薩ありて此の經を聞かんと欲すれども、得ること能わず。若し衆生有りて此の經を聞く者は、無上道に於いて終に退轉せず。是の故に當に專心に信受し、持誦し説行すべし。

佛、言わく、吾れ今、諸々の衆生の爲に此の經法を説き、無量壽佛及び其の國土の一切の所有を見せしむ。當に爲すべき所の者をば、皆これを求む可し。我が滅度の後を以つて、復た疑惑を生ずることを得ること無かれ。當來の世、經道滅盡せんに、我れ慈悲を以つて哀愍して、特り此の經を留めて、止住すること百歳ならん。

其れ衆生有りて、斯の經に値う者は、意の所願に随つて、皆、得度すべし。

佛、彌勒に語げたまわく。如來の興世には、値い難く見難し。諸佛の經道は、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し。善知識に遇いて法を聞きて能く行ずること此れまた難しとす。若し斯の經を聞きて、信樂し受持すること難が中の難なり。此の難に過ぎたるは無し。是の故に我が法は、是くの如く作し、是くの如く説き、是くの如く教う。當に信順して如法に修行すべし。

爾の時、世尊、此の經法を説きたまうに、無量の衆生、皆、無上正覺の心を發せり。萬二千那由陀の人、清淨法眼を得たり。二十二億の諸天、人民、阿那含果を得たり。八十萬の比丘、漏盡意解し、四十億の菩薩、不退轉を得たり。弘誓の功德を以つて、自ら莊嚴す。將來の世に於いて、當に正覺を成ずべし。

爾の時、三千大千世界、六種に震動す。大光、普く十方の國土を照らし、百千の音樂、自然に作し、無量の妙華、紛紛として降る。

佛、經を説きたまうこと已りて、彌勒菩薩及び十方來の諸々の菩薩衆、長老阿難、諸々の大聲聞、一切の大衆、佛の所説を聞きて、歡喜せずということなかりき。

のようになっている、右の太字部分に着目して【經曰其有衆生 ……如法修行】と引用し、「無量寿經曼荼羅」に書き入れている。

この引用部分は、おおよそ次のような内容の經文であり、『無量寿經』の総結ともいえる重要な部分である。

【もし衆生が、この「無量寿經」の教えにあい、聞くことができれば、その心の願いに応じて浄土に往生できるのである。

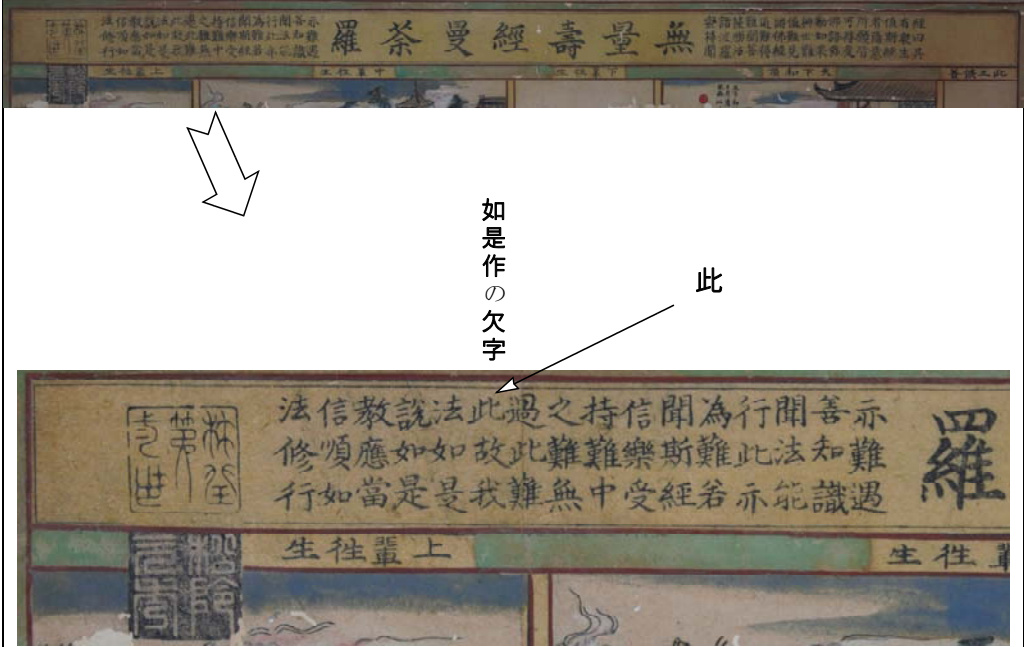
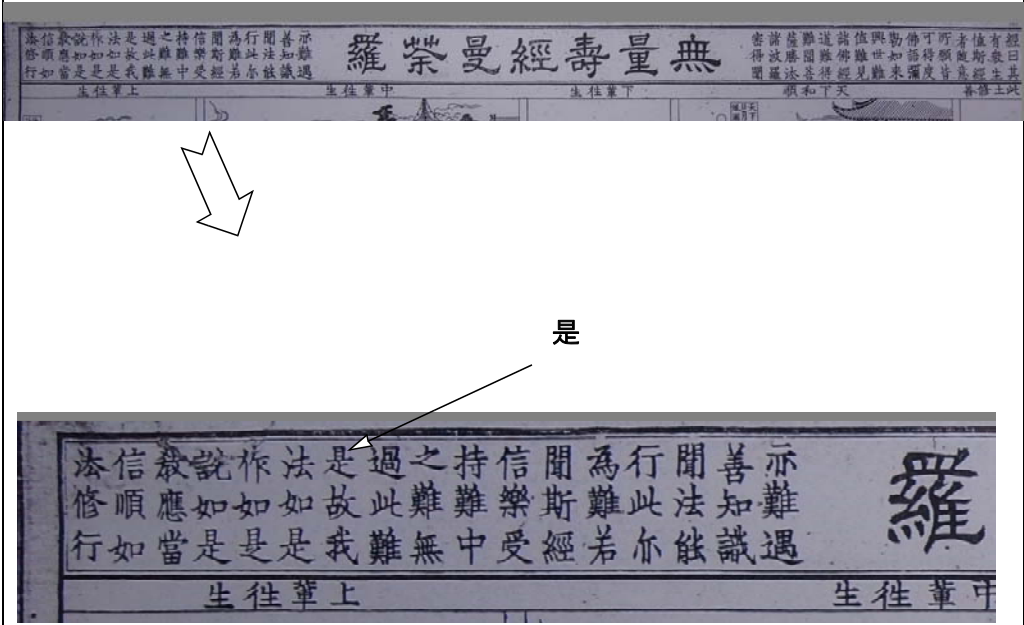
さらに仏が弥勒に語るには、如来が世にお出での時に遇うことは難しく、また得難いことである。そして、諸仏の教道を聞くことも容易ではない。菩薩の勝れた法や諸々の波羅蜜を聞くことも難事である。また善知識に遇って法を聞き、自ら進んで行ずることも難しいことである。もしこの經を聞いたうえで、信樂して受持することは、難中の難であり、この困難に過ぎた困難はないのである。

だから、今まで述べてきたように（阿弥陀仏が四十八願の大願を成就し、西方極樂浄土の莊嚴をみせ、そこへ往生する衆生のために、名号を称える念仏の一行）を、このように作し、このように説き、このように教えたのである。まさにこれを信順し、修行しなければならないのである。】

ところが、その經文をよく読むと、

【此 <small>（異字）</small> 故我法	□ <small>（三文字欠字）</small> □ <small>（三文字欠字）</small> □	如是說	如是教	應當信順	如法修行】	《延享二年（一七四五）江州日野信樂院藏版》
【是 <small>（正字）</small> 故我法	如 <small>（三文字正字）</small> 是作	如是說	如是教	應當信順	如法修行】	《天保六年（一八三五）江都淺草願壽寺藏版》

と『無量寿經』の經文が、【是】とあるべき文字が【此】と異字になり、【如是作】の三文字が欠字になっているのである。

 <p>延享二年（一七四五）版</p>	
 <p>天保六年（一八三五）版</p>	

右記のように「無量寿経曼荼羅」の題字の左右に書き入れられた流通文は、開版である延享二年（一七四五）版の林丘寺宮松領元秀による『無量寿経』流通文引用の経文は、一字異字、三字欠字がみられるが、天保六年（一八三五）版の「浅草新寺町願壽寺藏版」の『無量寿経』流通文には、『浄土宗全書』第一卷三十六頁と同様であり、異字や欠字はみられないのである。

さらに、もう一点、流通文書き入れの間隔が、延享版は前後に空間があり、文末に二つの落款印がみられる。天保版は前後の空間が無く、全面的に書き入れられ、落款印が無く、誰が書いたのか知ることができない。

なぜこのように、初版であり、さらに林丘寺二世という門跡が引用し、しかも《林丘寺二世（朱文方印）》《松領元秀（白文方印）》の二つの落款が押してある『無量寿経』流通文の経文に、異字と欠字があるのか謎である。

参考までに、『無量寿経』の経文の整合性を探るために、まず第一に、基本資料（『大正新修大藏経』第十二卷二七九頁上段一二〜一八行）によって確認すると、間違いなく書き入れ部分の経文が、

其有衆生值斯經者。随意所願皆可得度。佛語彌勒。如来興世難值難見。諸佛經道難得難聞。菩薩勝法諸波羅蜜。得聞亦難。遇善知識聞法能行。此亦爲難。若聞斯經信樂受持。難中之難無過此難。是故我法如是作如是說如是教。應當信順如法修行。

のように記されている。

さらに、『大阿弥陀経』、『平等覚経』、『無量寿経』、『如来会』、『莊嚴経』の五本の『無量寿経』を対照した、『漢訳五本梵本蔵訳対照 無量寿経』^(注2)を著した太田利生氏、同じく五本の漢文諸本の無量寿経を対照し『無量寿経の諸本対照研究』^(注3)を著した香川孝雄氏の引用經典のいずれにも右記『無量寿経』ようになっており、林丘寺宮松領元秀が引用した経文は存在しないのである。

第四項 小結

「無量寿経曼荼羅」の開版延享版と真宗高田派系で使用されていたことが想定される九十年後の天保版で、題額、款記、流通文を対比的に考察した結果、次のようなことを知ることができる。

① 開版延享版になぜ異字や欠字が生じたのか、考えられることは、林丘寺門跡が手にした『無量寿経』そのものに、元から異字と欠字があったのではないかということ。あるいは、引用した『無量寿経』が、『大正新修大藏経』や『浄土宗全書』にあるように正確なものであったが、版刻を依頼する段階で、林丘寺に仕える僧侶の手違いがあったか、あるいは、直接版刻にあたる版元や彫師等の段階で手違いがあり、誤ったままとなったこと等が考えられること。

② 真宗高田派系で使用されていたと想定される天保版には、明確に「維持天保六年龍集乙未六月訂鐫之」と【訂鐫之】の文字が記され、明らかに原版を改訂したものであることがわかること。

③ 「無量寿経曼荼羅」天保版の二十の絵相部分は、開版延享版と共通のものであるが、題額や款記、流通文の相違点や欠如から、時間的経過とともに浄土宗系とは異なる真宗高田派系の「無量寿経曼荼羅」という異なった場での使用目的の為に改訂されたことを知ることができること。

(注1) 東京都寺社案内（至心山唯念寺 真宗高田派觸頭）《https://tesshow.jp/taito/temple_basa_yuinen.html》

大江戸古今マップ 一一二頁（新人物往来社 二〇一一年）

(注2) 太田利生編『漢訳五本梵本蔵訳対照 無量寿経』二八二頁 永田文昌堂 二〇〇五年

(注3) 香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』三六七頁 永田文昌堂 一九八四年

第四節 「無量壽經曼荼羅」の款記書き入れの背景

第一項 林丘寺の概要

(一) 林丘寺の創建、寺名

款記にみられる林丘寺の創建について、後水尾天皇の存在が重要な役割を果たしている。

第一〇八代後水尾天皇は、歴代の天皇の中でも学問を好み^(注1)、特に和歌については、叔父の八条宮智仁親王から古今伝授^(注2)を相伝され、各種の著述も多く^(注3)、他にも立花、茶の湯、和漢聯句等、様々な文芸に練達しているのである。また、上皇の出家や林丘寺に関わる仏道に注目するならば、直接的に影響を及ぼしたとされる二人の僧、一糸文守^(注4)（慶長一三年（一六〇八）〜正保三年（一六四六））と龍溪性潜^(注5)（文禄元年（一五九二）〜延宝元年（一六七三））の存在を忘れることはできない。特に、龍溪性潜は、林丘寺開基の照山元瑤に菩薩戒を授け、法皇の勅願寺である江州日野町の法林山正明寺の中興開山として迎えられている。

また、後水尾法皇が創建した林丘寺と、修学院離宮とは大いに関わりがある^(注6)。この修学院山荘造営の真の祖いは、後水尾院を取りまく宮廷文芸サロンの構築^(注7)であり、もう一つの大きな要素は、嵯峨天皇における大覚寺のように、将来、修学院を仏祖をまつる霊地のようにしたかったということである^(注8)。後者の確かな証として、後水尾院が第五皇子の青蓮院宮尊敬法親王に宛てた置文（遺言）が残されている。

その内容は、後水尾院自身が修学院を門跡寺院とすることはできないから、「修学院を譲るについて嵯峨の大覚寺のごとく門跡寺院に発展させるように、もし一代でできないなら何代にもわたってゆくゆくは門跡寺院としてほしい。その方一代でことが成就すれば（本懐合い叶ふ）ところだが、もし成就せざれば禁裏に返すように^(注9)」

と命じている。

この修学院造営の時期、尊敬法親王は天台座主をつとめ、その後、輪王寺門跡（比叡山・東叡山・日光山の三山を管領する長）となり、門跡寺院に発展させるに最もふさわしい任にあったが、延宝八年（一六八〇）法皇より先に歿し、その願いは叶わなかった^(注10)ということである。

この修学院の構成上の特徴は、上、中、下の三つ茶屋が小径で結ばれる類例のない独創的な山荘の形式を取っていることであるが、この中の茶屋で最初に造られたのが「楽只軒^{らくしけん}」で、寛文七、八年（一六六七、六八）頃の造営とみられるもので、後水尾院の第八皇女朱宮^{あけのみや}（緋宮）が出家の希望を持っていたので、そのために御所を建てて朱宮に贈ったということである^(注11)。そして、天和二年（一六八二）二月、楽只軒の境内に本堂が建立され、翌月、入仏供養が営まれて、ここに林丘寺が誕生するのである^(注12)。

林丘寺の寺名については、是澤恭三氏の『後水尾天皇の禪學御留書』^(注13)（京都御所東山文庫勅封）に明らかのように、後水尾天皇に龍溪性潜が進講した禅籍の注釈や經典の句、諸僧の語、偈、賛、頌、著名な詩句等を覚え書きのように記した『禪學留書』の中にみられるものである。

その中に盛唐の詩人で塞外詩人^(注14)としてその名を知られる岑参^{しんしん}（開元三年（七一五）～大暦五年（七七〇））の詩集「岑嘉州詩」^(注15)卷三の五言律の中に、「宿關西客舍寄山東嚴許二山人時天寶高道舉徵」と題し、

雲送關西雨 風傳渭北秋 孤燈然客夢 寒杵搗鄉愁

灘上思嚴子 山中憶許由 蒼生今有望 飛詔下林丘

（舉徴即ち登用試験を諷し、今日世の中が望んでゐる人材は試験などで徴せられる人物ではない、速に詔を下して嚴子陵や許由の如き隠れたる聖賢を招かるべきであるといふのである。林丘は嚴許の如き聖賢の居所竝にその人を指してゐるが、この句を御書留あり、且つ寺號として内親王に賜うた： 是澤恭三氏釈^(注16)）とあるように、結句の「林丘」を留め書き、「聖賢の居所竝にその人」を指しているということなので、知識や

人格に優れた人物の居住するところであり、またそのような人材を指すところから、寺名にふさわしい文言であり、「林丘寺」となったということである。

「聖明山林丘寺」という山号寺号は、『林丘寺歴代録』^(注17)には、

後水尾院様新規一寺御建立之叡慮ニ而則山號寺號勅號ニ御坐候

(後水尾院様、新規一寺建立の叡慮に而して、即ち山号寺号は、勅号に御坐候)

とあり、法皇が在世中に寺号を定めておいたものであるということである。

(二) 林丘寺開基

林丘寺開基は照山元瑤で、第一〇八代後水尾天皇の第八皇女(母は櫛笥隆子(逢春門院))である。本来であれば女官を生母としているので内親王宣下を受ける事もなく比丘尼御所で生涯を終えるのが通例であるが、寛永十五年(一六三八)に、父、後水尾天皇の中宮(當時は女院)徳川和子(東福門院)の養女になり、内親王宣下を受けて光子内親王(緋宮、朱宮、照山元瑤)の名を賜った。幕府からの申し入れにより四代將軍徳川家綱との縁談も持ち上がったが、父後水尾法皇の反対により成立せず^(注18)、法皇の許に残った。そして、法皇の影響を受けて仏教に深く傾倒し、三十二歳で黄檗僧龍溪性潜から菩薩戒を受けている。

また法皇は、修学院の楽只軒を緋宮に贈り、将来の比丘尼御所にする意図のもとに、法皇と東福門院との奥対面所を移築したり、客殿も建てている。ただ、緋宮の落飾は、法皇の身近にいる娘として法皇とともに過ごす時間大切にされたせいaka法皇在任中には行われず、法皇没二ヶ月後の延宝八年(一六八〇)緋宮四十七歳の時、大覚寺(門跡は同母弟、性眞法親王)で行われ、法号が照山元瑤と定められたのである。この時、林丘寺寺領として法皇の旧御料から三百石が贈られ、さらに天和二年(一六八二)楽只軒の境内に本堂が建立され、入仏供養が営まれて聖明山林丘寺が誕生するのである。そして、照山元瑤が林丘寺の開基となったのである。

照山元瑤は、画人としても名を知られ、画技を狩野安信^(注19)に学び、さらに黄檗第五代高泉性^{こうせんしやうとん}激に師事した西本願寺の絵所の徳力善雪の長子画僧卓峯道秀(承応元年(一六五二)～正徳四年(一七一四))を師としたとされている。元瑤は、観音像を描くことを日課修行とし、千点以上の観音像を描き、三千点という^{しきみば}栴葉観音像(乾燥させた^{しきみ}栴葉の葉に経文等を書いて粉末にし、膠や香料等を混ぜた塑像)を創り、檀家や寺社がこれを求めたといわれている。

(三) 林丘寺二世松領元秀

款記にみられる「林丘寺宮松領元秀尊尼」とは、第一一二代靈元天皇(第一〇八代後水尾天皇と内大臣園基音の娘で後水尾典侍の藤原国子(新広義門院)を母とする第十六皇子)の第十皇女で、元秀皇女(元禄九年(一六九六)～宝暦二年(一七五二))のことである。

林丘寺開基の照山元瑤が宝永四年(一七〇七)に林丘寺門跡門主を退き^(注20)、普明院と号し、松領元秀が二世を継ぐことになったが、この元瑤のもとでの正明寺の仏事をみると、その一つに、『正明寺小志』^(注21)にみられる法華塔の建立がある。

享保三年三月普明院宮は法華讀誦の數一萬一千部に満ちたので當山に寶塔を建て供養せられ、侍尼榮春代参焼香した

とあり、享保三年(一七一八)八十五歳を迎えた普明院は、写経を二世松領元秀とともに宝塔に奉納している。またその他に、享保十二年(一七二七)に普明院(照山元瑤)が死期が近づいたことを機に、存命の内に後水尾院の五十回忌を前にした千佛法會を八月に修している。なお、普明院はその二ヶ月後に遷化している。そして、翌年(享保十三年)十月には、門跡を継いだ二世の松領元秀が普明院の一周忌法要を行い、享保十四年八月には後水尾院五十回聖諱、十月には普明三回忌を滞りなく行い、着実に林丘寺二世の役割を果たしていることを知ることができる。

さらに、この林丘寺宮松領元秀が「無量寿経曼荼羅」にその題字と無量寿経流通文を書き入れをするほど高田敬輔と関係が深かった要素の一つとして、仁和寺の存在を上げることができる。

つまり当時の仁和寺の二十三世寛隆法親王は、靈元天皇の第二皇子^(注22)であり、林丘寺宮松領元秀も、母は菅原(五条)経子(菅中納言局・五条為庸女)と異なるものの、前述のように靈元天皇の第十皇女であり、異母兄妹の関係である。このことから仁和寺に出入りしていたことは十二分に考えられることで、寛隆法親王に仕えていた高田敬輔と面識があったとしても不思議なことではない。

だから、仁和寺での人的交流の中で、何らかの機会を得て、敬輔の作品(「無量寿経曼荼羅」)に書き入れを行うことになったことは間違いないと判断されるのである。

そこで、敬輔と仁和寺のつながりについては次項でみることにする。

第二項 高田敬輔と皇室との関係

(一) 高田敬輔と仁和寺

國賀由美子氏によれば、『御室御記』^(注23)の元禄四年の条に、

元禄四年七月二十二日 御対面狩野縫殿敬甫^(輔)安□^(虫損) 盆御礼来ル

(元禄四年七月二十二日、御対面、狩野縫殿と敬甫と安□^(虫損)が盆の御礼に来たる。)

とあり、この「御対面」とは、当時の仁和寺二十三代後金剛定院御室、覺観法親王^(注24)門主との対面のことである。この御対面した狩野縫殿とは、敬輔の絵の師、京狩野派四代目狩野永敬^(注25)の京狩野家当主名「縫殿助」のことである。そして、敬甫は敬輔、安□(虫損の□を國賀氏は明と推測し、永敬の男、永伯、五歳とみている。)の三人が連れ立って盆御礼に来たということである。尚、二歳年長の覺観法親王のもとへ出入りしていた敬輔は、こ

の時、十八歳、同世代である。

さらに、その様子を伝える史料として『敬輔画譜』^(注26)の『高田敬輔翁畧傳』があるが、その中に、

名隆久初稱徳左衛門後」號敬輔少小好繪事長而師狩野永敬稱得」其家法後仕 仁和寺法親王稱高田豊前」大目有故始改藤原許數年致仕

（名は隆久、初め徳左衛門と稱しのち敬輔と號す。少小より繪事を好み、長じて狩野永敬を師としてややその家法を得たり。のちに仁和寺法親王に仕え、高田豊前大目と稱す。ゆえに始めて藤原に改むることあり。居すこと數年にして致仕す。）

と記され、仁和寺への出入りを許され、數年間居して法親王に仕え、「藤原」の姓を賜ったり、「從八位下豊前大目」の位階を叙されるに及んでいるのである。

さらに、『御室御記』の享保二十年（一七三五）三月十五日の条^(注27)には、法橋位が仁和寺から叙任されたこと、そして元文四年（一七三九）十月三日の条には、同じように法眼叙任の願書の提出がされたことが記されている。そして、後に敬輔の菩提寺信樂院の天井画の款記に見られるように、寛保三年（一七四三）には法眼位の僧位が叙され、仁和寺との深い関わりをもっていたことを知ることができるのである。

さらにもう一人、高田敬輔とつながりのある人物として、皇太後の存在を見逃すことができないのである。

（二） 高田敬輔と皇太后

皇太后とは、前項に示した『高田敬輔翁畧傳』に、

君素愛佛理謁峨」山鳳潭師又見華頂義山師深通淨理正徳」中作選擇集十六章圖山師一觀而謂之曰」善哉是舉也深得集中之趣又作無量壽經」曼荼羅^{是圖區別彰一經始末宛然如對經文} 山師揭之壁間」拱手嘆曰公以画作佛時者耶

皇太后亦命作十六章之圖圖成獻之厚加褒賞由是世」人益知君之非庸流也 仁和寺法親王特」召為天下和順圖

是亦壽經中事具狀天下和順日月清明
國富民安崇德興仁務修禮讓之

親書章段於圖間」又請緣山察公題贊其上遂白官印頒于世」是圖併十六章圖延享中
鑄于梓令現藏鄉信樂院時人榮之

（君、素より佛理を愛し、峨山鳳潭師に謁す。又、華頂義山師に見え、深く淨理に通ず。正徳中に選擇集十六章圖を作る。山師一觀して之を謂いて曰わく。善きかな是の擧なり。深く集中の趣を得る、と。

また無量壽經曼荼羅へ是の圖を彰一經と區別す。始末宛然、經文に対するがごとし。山師これを壁間に掲げ、拱手して嘆じて曰わく。公、画作をもつて佛時すといえるや、と。

皇太后また命じて十六章之圖を作る。圖成りてこれを獻ず。厚く褒賞を加える由、これ世の人の益、君の庸流に非ざるを知るなり。

仁和寺法親王特に召し、天下和順圖へこれまた壽經中の事を具狀す。天下和順にして日月清明なる國の豊民崇徳を安じ、仁務を興し、修禮讓態す。をなす。賞を賜うるに尤も渥し。命じて法橋位に叙し、幾ばくも無くしてまた法眼に轉ず。自後高田法眼と稱す。これに先だち皇女林丘尼公尤も壽經曼荼羅を重んじ、因りて親しく章段を圖間に書く。また縁山の察公に、その上に題贊するを請う。遂に官に白して印頒す。へこの圖と十六章圖を併せて延享中鑄むに、梓は郷の信樂院に現藏せしむ。時の人これを榮とす。）

とあるように、ここで絵師高田敬輔に関わり、最も重要な文言を三カ所指摘することができる。

一つ目は、「皇太后また命じて十六章之圖を作る。」

二つ目は、「仁和寺法親王特に召し、天下和順圖をなす。」

三つ目は、「皇女林丘尼公尤も壽經曼荼羅を重んじ、因りて親しく章段を圖間に書く。」
というところである。

初めの「選択集十六章之図」を作るのを命じた「皇太后」というのは、第一一三代東山天皇の中宮であり第一一四代中御門天皇の義母である承秋門院幸子女王であると考えられる。なぜなら高田敬輔の浄土宗の師である華

頂良照義山との関わりを『義山和尚行業記要解』^(注28)でみると、良照義山から円頓戒を受け、弟子の礼をとったことが記されているからである。師の良照義山を通して高田敬輔が描いた「選択集十六章之図」の情報を得、出版させたことは間違いないであろう。

二つ目の「仁和寺法親王」とは、十代後半に仁和寺に出入りしていた頃の第二十三世覺觀法親王とは代がかわり、「天下和順図」をなすと記されていることから、仁和寺第二十五世寶莊嚴御室慈仁法親王^(注29)（享保八年（一七二三）〜享保二十年（一七三五））のことであろう。なぜなら「天下和順図」の高田敬輔の款記に「□□初夏行年六十翁 敬輔墨書 湖東竹隱齋居」となっていることから享保十八年（一七三三）と推測される作品で、中御門天皇の第四皇子の慈仁法親王が門主を務めていた時の期間と合致するからである。

そして、三つ目の「皇女林丘尼公」とは、これまで再三述べてきたように林丘寺二世の松領元秀のことである。「無量寿経曼荼羅」を重んじ、章段に書き入れを行っているのである。

まさにここには、三者三様につながりがあり^(注30)、絵師高田敬輔の描いた浄土の世界、「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」「天下和順図」を褒め讃え、厚く褒賞を加えていることを知ることができるのである。

第三項 小結

「無量寿経曼荼羅」の右縁下部の二十四文字の款記を手がかりに、書き入れされた『無量寿経』流通文の経文を考察した結果、一字の異字と三字の欠字があること。

また、書き入れをした林丘寺宮松領元秀に関わり、林丘寺に関わる諸人の動静をみることにより、高田敬輔と皇室関係者との接点を知ることができる。

① 林丘寺の創設に関わって、後水尾院の理想的な文芸サロンの山荘構築の陰で、嵯峨院の大覚寺のような

仏地建立のために第五皇子に託したが夢がかなわなかったこと。その結果、山莊の一部を皇女のための門跡寺院林丘寺としたこと。

② 林丘寺の寺名は、後水尾院の黄檗禪へ傾倒させる影響を与えた龍溪性潜から学んだ、様々な印象的な語や偈や賛等を書き留めておいた覚え書きの中にあった、唐の詩人岑参の詩からの引用であること。さらに、林丘寺の開基には第八皇女光子内親王があてられたこと。その開基は、後水尾院の黄檗禪帰依の影響から仏道に深く傾倒し、仏画、仏像の制作に生涯をかけたこと。

③ 林丘寺開基から門跡を譲られた二世の松領元秀について、後水尾院の勅願寺正明寺で法華塔を建立したり、年回法要を滞りなく勤めるなど仏道へのたゆまない帰依の姿勢をみることができること。

④ 林丘寺二世、松領元秀の真摯な仏門への姿が、高田敬輔の描いた浄土の世界「無量寿経曼荼羅」への題額や流通文の書き入れであったと思われること。

⑤ 高田敬輔の浄業の師である良照義山、画業の師である狩野永敬を背景にした、仁和寺門主、皇太后、林丘寺門跡等の皇族との接点が重要な役割を果たし、その繋がりと拡がり「無量寿経曼荼羅」の存在を確かなものにしたこと。

(注1) 久保貴子『後水尾天皇』九二頁 ミネルヴァ書房 二〇〇八年

(注2) 久保貴子前掲書 九五頁

(注3) 熊倉功夫『後水尾天皇』二〇〇〇二〇一頁 中公文庫 二〇一〇年

(注4) 久保貴子前掲書 一一三頁

(注5) 『企画展 隠元禪師生誕四百年記念 近江と黄檗宗の美術』七二〇八二頁 栗東歴史民俗博物館一九九二年

(注6) 久保貴子前掲書 一〇六〇一一〇頁

(注7) 熊倉功夫前掲書 二六九頁

(注8) 熊倉功夫前掲書 二五九頁

(注9) 是澤恭三『後水尾天皇の禪學御留書』二十四頁 『歴史と國文學』第二十四卷第四号 太洋社 昭和十六年(一九四一)四月

「修学院山庄事、内々思ひまうけ候子細も候へども、御所望候程に、愚老一世の後には譲與申為候、此所は嵯峨の大覺寺に御宇多院皇居の御跡を残され候事うら山しく覺候ほどに、禁裏へゆづりまいらせ候て、つゐには門室をもとりたてられ候て、寺になさせおはしまし候へ、御一代の内に、事行候はずば、次々へゆづりをかれて候て、いつにても、次節到其を期せられ候やうにと思給候つる事候、根本叡山の境内にて候へば、其方ちからにて門室をとりたてられ候事成就候へば、愚意の本懐相叶事候條近比に候、若又不成就候時は、其方一世の後には禁裏へかへしまいらせられ候て可給候、禁裏へも其とをり申置候事候、相かまへて／＼、右の旨趣たかひ候はねやうに、御付かられ憐存計に候也

寛文六年十月二十五日 (御花押)

(注10) 久保貴子前掲書 一一一頁

(注11) 久保貴子前掲書 一五七頁

(注12) 久保貴子前掲書 一五八頁

(注13) 是澤恭三前掲書 二十七頁

(注 14) 森野繁夫・新免恵子「岑参の生涯」『唐代詩人 岑参の辺塞詩』十一頁～五十二頁 溪水社 一九八八年

(注 15) 「岑嘉州詩」卷三 三十四頁 『岑嘉州詩』四部叢刊初編集部 三七

(注 16) 是澤恭三前掲書 二十八頁

(注 17) 是澤恭三前掲書 二十七頁

(注 18) 久保貴子前掲書 一五六頁

(注 19) 『黄檗文華』第一一八号 八五頁 黄檗文化研究所 一九九九年

(注 20) 『尼門跡と尼僧の美術』図録 二七頁 中世日本研究所 二〇〇三年

(注 21) 『正明寺小志』四十六～四十八頁 溪道元 一九二九年

(注 22) 『仁和寺史料（寺誌編二）』 一九八頁

「後金剛定院御室 寛隆、初寛澄、覺助、覺如、覺蓮

靈元院第二皇子、御母源内侍局通子青陸院松嶽壽貞、天和元年十月十三日死、薨五位山、愛宕大納言通福卿女、御乳母信愛院妙行日持、名民部卿、寶永二年一月八日死、七十才

寛文十二壬子年九月十二日、誕生、号二宮、

延寶六戊午年六月十六日、入御里坊、七才、

天和三癸亥年八月十七日、入室、御得度、十二才、戒師眞乘院前法務前大僧正孝源、供奉着座公卿五人、殿上人三人、

元禄二己巳年十二月廿六日、直叙二品、十八才、（以下、略）

(注 23) 國賀由美子「近江の画人高田敬輔再考―仁和寺藏『御記』による知見を手がかりとして―」『研究紀要第4号』 一七頁 滋賀県立近代美術館

二〇〇二年

(注 24) 『仁和寺史料』前掲書（寺誌編二） 一九八頁

(注 25) 五十嵐公一「狩野永敬の研究」『鹿島美術研究 年報別冊第一八号』十一頁 二〇〇一年

(注 26) 『敬輔画譜』卷之一 一丁表 文化元年（一八〇四）刊

(注 27) 國賀由美子前掲書 十七頁

「享保二十年三月十一日 絵師 高田敬輔位階願之事

十三日 高田敬輔法橋奉願之事

右無別条也

十五日 法橋 免許 江州絵師高田敬輔

御目見得御口祝被下之

元文四年九月二十三日 高田敬輔法眼之願書出之、則添一札等も被出之也

十月 三日 高田敬輔法眼願之事無別条京都へ致言上事

四日 高田敬輔願之事追而從是可申入候、尤明日二も大岡春卜法眼 御免之年月日等書

差出可申旨御申渡候也」

付

(注 28) 珂然『洛東華頂義山和尚行業記并要解』 十二丁 寛保元年（一七四一）

復承秋門 門號字讀應壽寺之

院 東山帝之皇后中御門帝母聖太后院是舊式也
諱幸子乃有續川一品左衛門卿藤原朝臣仁親之忌女也

聞「師德風」屢召接見問「出離要」奏對稱「旨深歸」宗門「乃與」內親王 皇太后 及左右侍女「誓」約盡形「

日課「稱佛」且受「圓戒」又更請作「得度法式」 謂剃染

因崇「重師」執弟子禮師亦爲「之立」法嘉號「之曰」良弘普照玉英禪定尼「每」至「椒宮」

滿官儀后臨殿房取就寶曼延盤
升又以經樂言誦遍殿除惡氣

慰勞丁寧恩實繁茂 書文侯之命
註實賜也

(注 29) 『仁和寺史料（寺誌編二）』 二〇一頁

「寶莊嚴御室 慈仁

中御門院第四皇子、御母中臈左衛門佐局 見性院
明和七年九月十日
明和七年九月十日
死尼

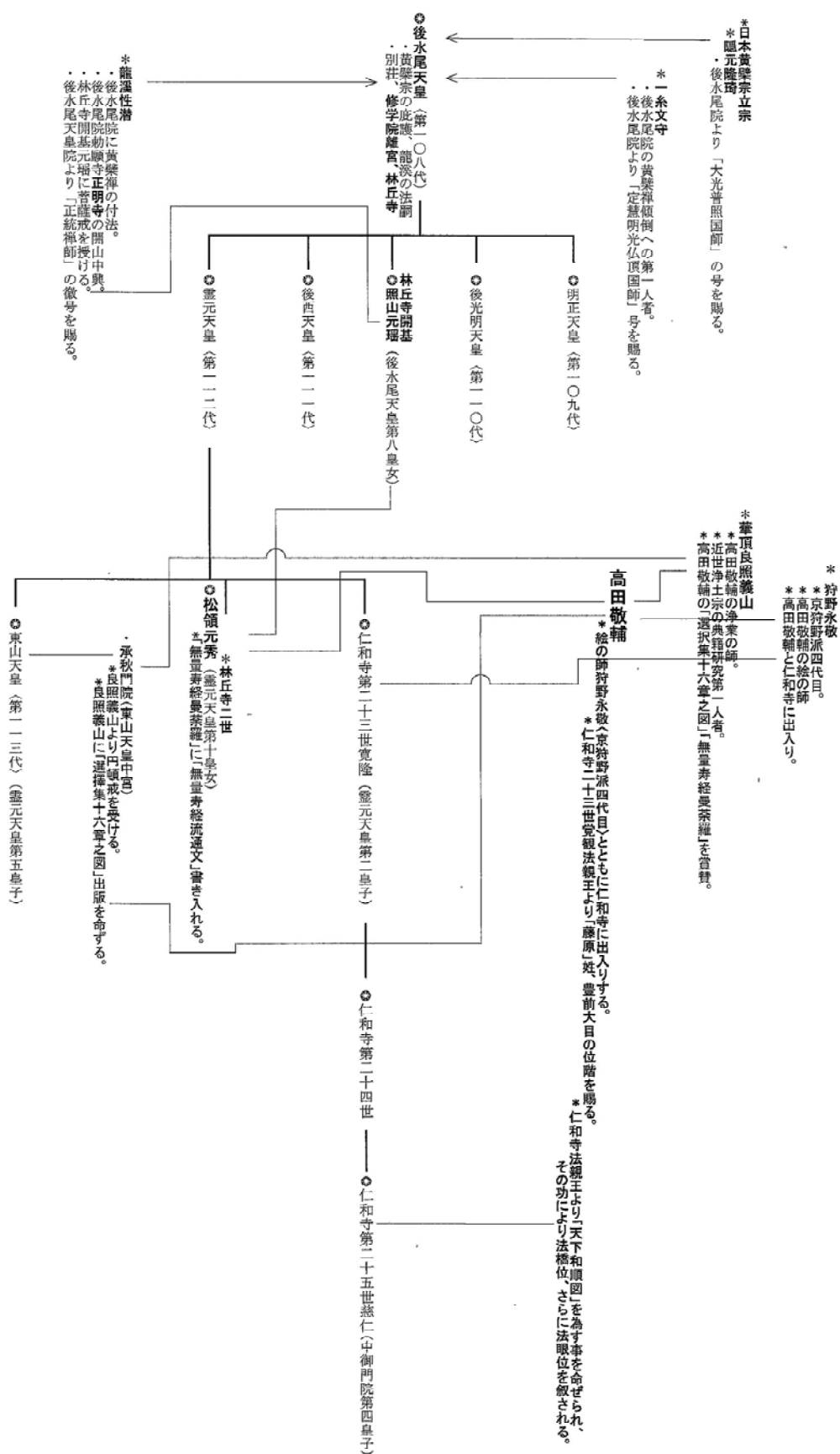
又藤原小森局關丹
內權輔女
云云

享保八癸卯年五月二十五日、誕生、稱四宮」（以下、略）

(注 30)

資料 絵師高田敬輔を取りまく皇族関係者

* 絵師高田敬輔を取りまく皇族関係者



第四章

「無量壽經曼荼羅」の部分構成

第一節 「明能說釋迦序正流三分」について

第一項 「序分說法之相」

「無量寿經曼荼羅」の「序分說法之相」の「諸根悦豫」の「阿難請問」の絵相は、次のように描かれる。

「無量寿經曼荼羅」の「序分說法之相」の絵相



隨天は、『大經曼荼羅開壇記』【以下、『開壇記』と略す】で「序分說法之相」段の「序分說法之相」と「諸根悦豫」と「阿難請問」について、それぞれ詳細に注釈を加えている。まず、「序分說法之相」についてみてみる。

(一) 「序分說法之相」

『開壇記』(卷一 八丁裏)は、まず「序分說法之相」の耆闍崛山の注釈から始まる。

耆山面^レ右菩提樹三株釋迦世尊向^レ右坐^三蓮華臺^一攝^二兩手於衣内^一身相儼然光明昱燁佛左二菩薩六聲聞一天一龍皆向^レ右立^二菩薩俱合掌聲聞其一合掌其二拱手其三合掌其五六拱手天龍共拱手佛右一聲聞向^レ右拱手而立

(耆山、右を面^{おもて}にす。菩提樹三株あり。釋迦世尊、右に向きて蓮華臺に坐し、兩手を衣内に攝す。身相儼然として光明昱燁^{いくよう}たり。佛の左に二菩薩、六聲聞、一天、一龍あり。皆、右に向きて立つ。二菩薩は俱に合掌し、聲聞の其の一は合掌し、其の二は拱手し、其の三、四は合掌し、其の五、六は拱手す。天、龍、共に拱手す。佛の右に一聲聞右に向きて拱手して立つ。)

ここでは、耆闍崛山の菩提樹の下で、釋迦が儼然と光り耀く姿で蓮華臺に坐し、周りには菩薩・聲聞・天・龍の十者が随い、阿難が偏袒右肩で合掌し、正対している様子が描かれている。

そこで、それぞれについて注釈がされる。

隨天は、耆闍崛山について、

耆山西域記九云宮城東北行十四五里至^三結果陀羅矩咤山^一接^二北山之陽^一孤標特起既棲^二鷲鳥^一又類^二高

臺^一空翠相映濃淡分^レ色如來御^レ世垂^二五十年^一多居^二此山^一廣說^二妙法^一〈中略〉

玄應音義七云靈者案^二梵本^一無^二靈之義^一此鳥有^レ靈知^二人死活^一故號^二靈鷲^一或云佛滅後阿育王見^二其山頭似^レ鷲使^二人鑿^レ之作^二兩翅兩足及尾^一故全似^二鷲鳥^一

(耆山は西域記の九に云う。宮城の東北に行くこと十四五里にして、結果、陀羅矩咤山に至る。〈唐に鷲峰と云う。また鷲臺と謂う。舊に耆闍崛山と曰うは訛なり。〉北山の陽に接し、孤標特起して既に鷲鳥の棲ましむ。また高臺に類して空翠相映し、濃淡色を分つ。如來世に御すること五十年に^{なんなん}垂^なとして、此の山

に居しめ、廣く妙法を説く。(中略)

玄應音義七に云う。靈は梵本を案ずるに靈の義無し。此の鳥、靈有りて人の死活を知る。故に靈鷲と號すと。或るが云う。佛滅後、阿育王、其の山頭の鷲に似るを見て、人これを鑿ちて兩翅兩足及び尾を作さしめ、故に全く鷲鳥に似たり。

と解き、

また、義山は王舎城の注釈と共に耆山について次のように述べている。(『無量寿経随聞講録』【以下、『隨聞講録』と略す】卷上之一淨土宗全書第十四卷二五五頁)

王舎城者此明^二起化之處^一即魔訶陀國都城名也王舎城事如常扱王舎城耆闍崛山者隣近釋也謂王舎城耆闍崛山云事ナリ

喻如^レ云^二京比叡山^一雖^レ非^二京内^一約^二人易^一知言^レ之也扱中字五方中央見非也只耆闍崛山内マシマスト可^レ知

但台家法華觀心釋意ニテ中字解亦各別彼意佛住^二中道^一等義非^二今意^一不^レ可^レ混耆闍崛山者此翻^二靈鷲^一常如

王舎城東北方行十四五里而有^二此山^一日本九十多丁程即二里半計也西域記九卷八紙法華一如科注一上二紙

(王舎城は、此れ起化の處を明かす。即ち摩訶陀國の都城の名なり。(王舎城の事、常の如し。)扱て王舎城耆闍崛山とは、隣近の釋なり。謂わく王舎城の耆闍崛山と云う事なり。喻えば京の比叡山と云うが如し。京の内には非ずと雖も、人の知り易きに約してこれを言うなり。扱と中の字を五方の中央と見るに非ず。ただ耆闍崛山の内にましますと知る可し。但し台家の法華觀心釋の意にて、中の字を解ることまた各別なり。彼の意は、佛は中道に住たまう等の義、今の意に非ず。混すべからず。耆闍崛山とは此には靈鷲と翻す。(常の如し。)

王舎城の東北の方に行くこと十四五里にして此の山有り。(日本の九十丁程、即ち二里半計りなり。西域記九卷八紙、法華一科注一上二紙の如し。)

と記し、王舎城は魔訶陀國の都の城であること。耆闍崛山は近くにあり、譬えれば京の比叡山のようなもので、

京内ではないが人に知られている山で靈鷲と訳されること。そして、隨天同様、出典は西域記からで、王舍城の東北十四五里の所にあるとしている。

また、隨天は、菩提樹については、

菩提樹卽畢鉢羅樹佛坐_二其下_一成_二菩提_一故云_二菩提樹_一莖幹黃白枝葉青翠冬夏不凋光鮮無_レ異亦曰_二佛樹_一憬興云寄_レ樹成_レ覺故云_二佛樹_一

（菩提樹は、卽ち畢鉢羅樹なり。佛、其の下に坐して菩提を成するが故に菩提樹と云う。莖幹黃白にして枝葉青翠なり。冬夏、凋_{しほ}まず。光鮮異なること無し。または佛樹と曰う。憬興の云う。樹に寄りて覺成す。故に佛樹と云う。）

佛が、其の下に坐して菩提を成したので菩提樹といい、幹や莖は黃白、枝葉は青翠で光沢があり、冬も夏も萎まない。憬興は、佛が樹に寄つて覺成したから佛樹というとしている。

さらに、釋迦については、

釋迦具云_二釋迦牟尼_一靈芝釋云釋迦翻_二能仁_一卽應身牟尼翻_二寂默_一卽法身上冥下契報在_二其中_一問今經教主是何佛身答三身相卽之應身也故經云以_二一_レ養之力_一能住_二壽命_一億百千劫無數無量復過_二於此_一又云於_二此中下_一而現_二滅度_一亦無_二所作亦無_一所有_二不起不滅得_二平等法_一一家釋云三身同證悲智果圓又云三身化用法體無殊

（釋迦は、具には釋迦牟尼と云う。靈芝の釋に云う。釋迦を能仁と翻す。卽ち應身なり。牟尼を寂默と翻す。卽ち法身なり。上冥下契の報は其の中に在りと。

問う。今經の教主は是れ何れの佛身ぞや。

答う。三身相卽の應身なり。故に經に云く。一_{いっさん}養の力を以つて能く壽命を住す。億百千劫無數無量にして復た過ぎたり。此に於いてまた云う。此の中下に於いて而かも滅度を現ず。また所作無く、また所有無し。不起不滅にして平等法を得んと。一家の釋に云う。三身同證して悲智果圓なり。また云う。三身化用、法

體、無殊と。)

ここでは、釈迦が釈迦牟尼であり、三身相即の応身であることと、三身同證、悲智果圓で、三身化用、法体、無殊の仏身であることが述べられている。

この三身相即の仏身について、義山も、(『隨聞講錄』卷上之一淨土宗全書第十四卷二五五頁)

佛者序分義紙四云言佛者此即標定化主簡異餘佛獨顯釋迦意也言一佛主領國界佛云へハ今佛釋迦ナルコ

ト自顯ナリ佛具佛陀云此名爲覺三覺義
如常今所言佛者三身相即之應身佛也委序記二
卷卅四紙

(佛とは、序分義(四紙)に云う。佛と言うは、此れ即ち化主を標定す。餘佛に簡異す。獨り釋迦を顯す意なり。言は一佛主領の國界にて佛と云えば今の佛は釋迦なること自ら顯るなり。佛、具には佛陀と云う。

此には名づけて覺とす(三覺の義常の如し)。今、言う所の佛とは、三身相即の應身佛なり(委は序記二

卷卅四紙)。

と隨天同様に『觀經疏』序分義卷第二に依つて、三身相即の應身仏であることを説いている。

また、隨天は、蓮華臺については、

坐蓮華臺准觀經應是百害蓮華諸佛坐蓮華者智論八云是梵天坐蓮華上是故諸佛隨世俗故於蓮華上結跏趺坐說六波羅蜜攝兩手於衣内者是名普印謂内印手於衣中而當胸也今准經文彰於定慧自在德經云如來定慧究暢無極於一切法而得自在

(蓮華臺に坐すとは、觀經に准ずるに應に是れ百害蓮華なるべし。諸佛、蓮華に坐することは、智論八に云う。是れ、梵天、蓮華の上に坐す。是の故に、諸佛、世俗に隨うが故に、蓮華の上に於いて結跏趺坐して六波羅蜜を説く。

兩手を衣内に攝するは、是れを普印と名づく。謂わく印の手を衣中に内れて胸に當てる。

今、經文に准ずるに定慧自在の德を彰す。經に云う。如來は定慧究暢にして極まり無し。一切の法に於い

て自在を得たり。)

このように蓮華臺に坐すとは、百宝蓮華の上に結跏趺坐して六波羅蜜を説いている姿であり、両手を衣の内にに入れて胸に当てているのは普印といい、經文にあるように定慧自在の徳を表している様相が描かれていると述べている。

(二) 「諸根悦豫」

隨天は、「諸根悦豫」について、(『開壇記』卷一 十丁表、十一丁表)

序分證信發起二序之中發起序也淨影云佛將説經先託時處神力集衆起發所説名爲發起與説爲由名發起序又云如來現相而爲發起今謂如法華六瑞維摩現病等是也諸根悦豫豫宜作豫經云爾時世尊諸根悦豫姿色清淨光顏巍巍諸根眼等五根悦豫者希麟音義第八云悦豫上翼雪反玉篇云樂也孝經云敬一人則天下人悦下羊茹反爾雅云豫樂也尚書云王有疾弗豫孔傳云伐紂明年武王有疾不悦豫也靜法華嚴音義云豫余據切珠叢曰心安和悦謂之豫望西云如來實無歎感爲顯本意示現悦豫釋尊大悲仁偏愍常沒常沒出離唯在往生往生佛願今將宣説出世本懷時亦已至何不悦豫今謂釋尊大悲出世本懷正在今經經云如來以無盡大悲矜哀三界所以出興於世光闡道教欲拯群萌惠以眞實之利

(序分は證信、發起、二序の中には發起序なり。淨影の云う。佛、將に經を説かんとす。先ず、時處に託す。神力を以つて衆を集め、所説を起發するを名づけて發起とす。説の與に由と爲るを發起序と名づく。

また云う。如來相を現じて而も發起とすと。今謂う、法華六瑞維摩現病等の如きは是れなり。

諸根悦豫とは、豫は豫に作す宜く經に云う。爾時世尊諸根悦豫姿色清淨にして光顏巍巍たり。諸根とは、眼等の五根なり。悦豫とは希麟音義第八に云う。上は翼雪の反玉篇に云う樂なり。孝經に云う。一人を敬すれば則ち天下の人、悦ぶ。下は羊茹反爾雅に云う。豫は樂なり。尚書に云う。王、疾有りて弗豫なり。

孔傳に云う。紂を伐つ明くる年、武王、疾有り、悦豫せず。靜法の華嚴音義に云う。豫は余據の切。珠叢に曰く。心安和悦を之れを豫と謂う。

望西の云う。如來は實に歎感無し。本意を顯さんが爲、悦豫を示現す。釋尊の大悲、偏に常没を愍む。常没の出離は、ただ往生に在り。往生の佛願、今、將に宣說せんとす。出世の本懷、時また已に至れり。何んぞ悦豫せん。今、謂う。釋尊の大悲、出世の本懷は正しく今經に在り。經に云う。如來、無盡大悲を以つて三界を矜哀す。所以に世に出興して道教を光闡し、群萌を拯すくわんと恵むに、眞實の利を以つてす。と述べ、

義山は、「諸根悦豫」の様相を（『隨聞講錄』卷上之一 淨土宗全書第十四卷二八一頁）、

爾時者約_レ文解者師資合會爾時也謂无量大衆集_二此會_一如_二衆星遶_レ月圍_二遶世尊_一爾時也又就_二佛意_一解者最初成道已來佛本意偏欲_レ救_二常没衆生_一爲_レ懷聖道上機雖_レ非_レ不_レ蒙_二佛大悲_一殊大悲重目ガクル所只是常没機也譬如_下世間父母於_二其子_一雖_二同愍念_一多子中別悲_中憐病子_上佛亦爾耳雖_レ然時機未_レ至故先說_下漸頓空有教_上令_レ度_二脱上根_一爾今可_レ說_二淨教_一時機熟既至說_レ之機亦定可_レ受_レ之故佛意甚快意欣然内悦斯乃時至機熟爾時也扱淨土教發起正依_二阿難問_一起應_レ知

（爾時とは、文に約して解せば、師資合會の爾時なり。謂わく无量の大衆此の會に集まり、衆星の月を遶ぐるが、世尊を圍遶する如く爾時なり。また佛意に就いて、解は最初成道已來、佛の本意は偏に常没の衆生を救わんと欲するを懷と爲す。聖道の上機も佛の大悲を蒙らざるに非ずと雖も、殊に大悲の重く目がくる所は、ただ是れ常没の機なり。譬えば世間の父母、其の子に於ける同じく愍念すと雖も、多子の中に別に病子を悲憐するが如し。佛もまた爾なるのみ。然りと雖も時機未だ至らず。故に先ず漸頓空有の教えを説いて上根を度脱せしむ。爾るに、今、淨教を説くべき時機熟して既に至る。これを説くは、機また定んで之を受くべし。故に佛意甚だ快意欣然として内悦す。斯れ乃ち時至り、機熟する爾の時なり。

扱て浄土教の發起は、正しく阿難の間に依りて起こる。應に知るべし。）

と記されるように、爾時とは、まさに佛の本意は常没の衆生を救うために、浄教を説くべき時機が熟し、欣然として内悦している、まさに時至り、機熟したその時であるといふのである。

そして、ここで注目すべきは、この爾時に阿難が問いを發したことににより、浄土教が發起したということを義山が強調していることである。

さらに、その時の世尊の様相を、諸根悦豫、姿色清淨、光顔巍巍の文言を取り上げ、絶妙な譬喩を用いて注釈している。

まず、諸根悦豫は、

諸根悦豫者眼等五根同現^二喜相^一名^二根悦豫^一言五根ウルハシクユツタリト悦相顯悦喜樂貌豫安也

（諸根悦豫とは、眼等の五根同じく喜相を現るを根悦豫と名づく。言^{こころ}は五根うるわしくゆつたりと悦ぶ相顯れるなり。悦は喜樂の貌、豫は安らぎなり。）

次に、姿色清淨については、

姿色清淨者上諸根悦豫形色此顯色ナリ姿色清淨上五根喜相上ツヤナリ瞋怒スレハ色赤愁憂スレハ色青今此等氣色无クシテ只ツヤ、カナル喜色顯ル、ヲ云^二清淨^一

（姿色清淨とは、上の諸根悦豫は形色、此れは顯色なり。姿色清淨は、上は五根喜相の上のつやなり。

瞋怒すれば色赤く、愁憂すれば色青し。今、此等の氣色无くして只つややかなる喜色顯るるを清淨と云う。）

さらに、光顔巍巍については、

光顔巍巍者淨影與^レ鈔其意別影意光巍巍重顯^二上姿色清淨^一顏巍巍者佛身尊特超^二世倫^一也^{偶如是儀明}是故次下云^二威容顯曜超絶无量^一或云^二何故威神光光乃爾^一故上二句顯^二其其喜相^一次一句顯^二色身勝^一也學者思擇爾賢人喜怒不^レ出^レ色

大人猶爾況如來住^二三念住^一於^二違順境^一不^レ生^二憂喜^一爾者不^レ可^レ有^二如^一是之相^一乎謂今尋^二佛意^一如來實雖^レ无^二歡戚爲^レ顯^二本意^一且現^二此相^一釋尊大悲偏愍^二常沒衆生^一常沒出離唯在^二往生^一時至機熟往生佛願今將^二宣說^一世尊出世爲^レ令^下唯說^二此法^一勸歸^中淨土^上出世本懷亦已至故現^二此相^一宗家釋^{分義}云諸佛大悲於^二苦者^一心偏愍^二念常沒衆生^一是以勸歸^二淨土^一又觀經說^二即便微笑^一散善義行緣大師釋^{序分義卅三紙}云因^二此二請^一廣開^二淨土之門^一非^二直韋提得^レ去有識聞^レ之皆往有^二其益^一故所以如來微笑也然无^二悲喜^一據^二自行^一示^二喜相^一約^二化他^一也

（光顏巍巍とは、淨影と鈔と其の意は別なり。影の意は、光巍巍は重ねて上の姿色清淨を顯し、顏巍巍は重ねて上の諸根悅豫を顯す。巍巍は高勝の貌（興師これ同じ）。鈔の意は、下の法藏嘆佛の偈に準ぜば、光巍巍は、佛光炎明なること與に等しき者の无きなり（偈、是くの如し。燄明、與に等しき者の无きなり）。顏巍巍とは、佛身、尊特にして世倫に超えたり（偈に如來の容顏、世を超え倫無しと）。是の故に次下に威容顯曜にして超絶なること无量なりと云う。或るは何が故ぞ威神光光たること乃ち爾りなるやと。故に上の二句は其の喜相を顯し、次の一句は色身の勝ぐるる顯すなり。學者、思擇せよと。）

爾るに賢人は喜怒、色に出でず。大人なお爾り。況んや如來は三念住に住して違順の境に於いて憂喜を生ぜず。爾らば是くの如くの相、有るべからざるや。謂わく、今、佛意を尋ぬるに、如來は實に歡戚無しと雖も、本意を顯さんが爲に且く此の相を現す。釋尊の大悲、偏に常沒の衆生を愍れむ。常沒の出離はただ往生に在り。時至り機熟して往生の佛願、今、將に宣說せんと。世尊の出世、ただ此の法を説きて勸めて淨土に歸せしめんが爲なり。出世の本懷、また已に至れり。故に此の相を現す。宗家、釋して（玄義分）に云う。諸佛の大悲は苦に於いて心偏えに常沒の衆生を愍念す。是れを以って勸めて淨土に歸せしむ。また觀經に即便微笑と説く（散善顯行緣）。大師釋して（序分義卅三紙）に云う。此の二請に因つて廣く淨土の門を開く。直に、韋提、去ることを得るのみに非ず。有識これを聞きて皆往まん。其の益有るが故に。所以に如來微笑したまうとなり。然らば悲喜无きは自行に據る。喜相を示すは化他に約するなり。）

とあり、ここではなぜ世尊が光顔巍巍としているかについて、本来であれば賢人は喜怒哀樂を外に出さないものであるが、釈尊の本意は、常没の衆生を愍念し、浄土に帰させるために、時が至り、機が熟したから喜相を顕したのだと記している。

まさに釈尊の諸根悦豫、姿色清浄、光顔巍巍の様相を肌で感じた阿難が、満を持して請問するのである。

(三) 「阿難請問」

「阿難請問」について、隨天は、『開壇記』（卷一 十一丁表）に、

尊者阿難向_二佛世尊_一展_二尼師壇_一偏袒右肩長跪合掌

科阿難請問經云尊者阿難承_二佛聖旨_一即從_レ座起偏袒_二右肩_一長跪合掌而白_レ佛言等阿難親見_二如來現相_一以_二加被力_一故今致_二請問_一今經發起正在_二于茲_一

（尊者阿難、佛、世尊に向き、尼師壇_{にしだん}を展べ、偏袒_{へんだん}右肩_{うけん}、長跪合掌す。

科の阿難請問は、經に云う。尊者阿難、佛の聖旨を承りて即ち座從り起ちて、偏_{へん}えに右肩_{うけん}を袒_{はだぬ}ぎ、長跪合掌して佛に白して言さくと。阿難_{まのあた}親_{まのあた}りに如來の現相を見たてまつり、加_か被_び力を以つての故に、今、請問を致す。今經の發起は正に茲に在り。）

と記すように、阿難が世尊に向き、尼師壇をのべて偏袒右肩、長跪合掌し、如來の加被力（衆生を救うために慈悲を被ること）の現相を見て、請問をする場面である。まさに『無量壽經』の發起である。

この場面について、義山は、『隨聞講錄』卷上之一 浄土宗全書第十四卷二八二頁）、

承佛聖旨有_二一解_一佛以_二妙智力_一加_二被阿難_一令_レ起_二此問_一阿難有學故不_レ知_二佛加_一起_二問_一是偏如來冥加故也
或阿難不_レ知_二微笑由_一故欲_レ問_レ之白_レ佛爾時佛汝何尋ヌベシト佛許給受_二其佛許_一掃曰_二承佛聖旨_一初義通途文模様後義可也

（承佛聖旨とは、二解有り。佛の妙智力を以って、阿難に加被して此の問いを起こさしむ。阿難有學の故に佛の加することを知らずして問いを起こす。是れ偏えに、如來に冥加したまうが故なり。

或るは、阿難、微笑の由を知らざるが故に、これを問いたまわんと欲して佛に白す。爾時、佛、汝、何んでも尋ぬべしと、佛、許し給う。其の佛の許を受けるを承佛聖旨と曰わく。

初の義は通途なり。文の模様は後の義という可きなり。）

承佛聖旨には二通りの理解の仕方があり、その一つは、仏の妙智力によって阿難に加被して問いを起こさせたのであるが、阿難は学問があるので仏が加被することを知らないようにして問いを起こしたもので、如來の加護に冥加するからであるということである。

もう一つは、仏が微笑している由を知らないから、何故なのか問いたくて申したのであるが、これは仏が、何でも問うて良いという許しを与えたからであつて、その許しのことを承佛聖旨というのである。

この一つ目の理解は、一般に通ずることであり、二つ目は文章の流れの彩りで後の理解であらうとしている。そして、

即從座起者凡天竺儀式大人白言必從座起是禮也如禮云請益則起更端則起也

（即從座起とは、凡そ天竺の儀式なり。大人に言を白すは、必ず座從り起つ。是れ禮なり。禮に益を請けたまわば則ち起つ。端を更れば則ち起つと云うが如し。）

座起は、天竺の儀式であり、大人に言を申す時は必ず座から立つのが礼儀であるとしている。

また、偏袒右肩については、

偏袒右肩者袒肉袒也此事師人之法也西方俗儀見王者必肉袒示非敢有犯佛教又且隨之謂著衣右肩ヌイデ若御用事有承ラント云意也惣右キ、ウデナレハナリ此天竺ニテ貴人啓言時禮儀也律曰一切供養皆偏袒示

有便於執作也論語

郷黨篇

藝裘短右袂

集註長欲其溫短右袂所以便作事

（偏袒右肩とは、袒は肉袒なり。此れは師に事^{つか}える人の法なり。西方の俗儀、王者に見^まゆるには必ず肉袒し、敢えて犯有るに非ざることを示す。佛教もまた且^{しば}くこれに随う。謂わく衣を著^{つけ}るに右の肩をぬいで、若し御用の事も有らば承けたまわらんと云う意なり。惣じて右はききうでなればなり。此れ天竺にて貴人へ言を啓す時の礼儀なり。律に曰わく一切供養、皆、偏袒の執作に便り、有ることを示すなり。論語（郷黨篇）に藝の裘^{かわしろも}は右の袂を短くす。（集註に長ずることは其の温かなることを欲すなり。右を短くするは、以つて事を作すに便ずる。）

とあり、右肩を脱ぐのは、師事する者の決まりであり、王者に見える時は、必ず脱いで随うことを示し、貴人へ言を申す時の礼儀であるとしている。

なお、長跪、合掌については、それぞれ、

長跪者兩膝著^レ地兩腰翹^レ空兩足指^レ地翹^レ身立者是也

（長跪とは、兩膝を地に著け、兩腰を空に翹げ、兩足地を指し、身を翹げて立つは是れなり。）

合掌者則表^二心一^一是亦身威儀耳法華義疏十二卷十三紙同三卷四十紙言惣大事義言心散亂シテハナラス故形亦散亂セヌ様合掌也

（合掌とは、則ち心の一つなることを表す。是れまた身の威儀のみ（法華義疏十二卷十三紙同三卷四十紙）。

言は惣じて大事の義を言うには、心散亂してはならず故に形もまた散亂せぬ様合掌するなり。）

とあり、長跪合掌は、兩膝、兩足指、兩腰を立て、心一つにして形も散亂せぬように掌を合わせることでありと記されている。

ここで一つ大きな問題は、阿難が請問している姿が描かれた絵相で、【尼師壇】（坐具）を展べ、その上に坐していることについて、真言宗の尾張八事山興正寺の諦忍律師が、『坐具顯正録』を著し、坐具は坐臥に用い、礼拝には用いないことを経律論を引いて批判したのである。これに対し、浄土宗の隨天が『大経曼荼羅開壇記』で、さらに震純が『彈坐具顯正録』で論争を引き起こすことになるのである。

この部分の記述が『開壇記』（卷一 十一丁表）に記されている。

近頃^{人有}以南山戒壇圖經爲附會之說確執坐具穢物而斥禮時敷展之儀嘗謂我今揭四墨印打破千歲膠固之妄習今謂坐具制緣具如律文然西土衆僧於樹下石上修行者多故恐損身損衣故須敷之支那本邦此事希也故或禮時敷之律中無文據事用之無違者也（後略）

この「近頃有る人」というのが諦忍律師のこと、この論争については、別項（第五章第二節第二項「震純・隨天と諦忍との論争」で考察しているので、ここでは割愛する。

第二項 「正宗說法之相」

「無量寿經曼荼羅」の「正宗說法之相」段の絵相について、「正宗說法之相」「弥勒」「阿難正身西向」と「陀光照」との二場面に分けて考察を進める。

（一） 「正宗說法之相」

まず初めに、「正宗說法之相」段の注釈は、『開壇記』（卷一 十五丁表）に、

釋尊向_レ左座_二審蓮臺_一攝印手於衣内_一阿難彌勒展具袒_レ右長跪合掌阿難正身西向彌勒左顧佛右一菩薩七聲聞皆向_レ左立菩薩印隱不_レ見聲聞其一合掌其二拱手其三四合掌其五拱手其六七印隱不_レ見又一比丘尼一優婆塞二優婆夷皆共向_レ左比丘尼互跪拱手優婆塞跪坐合掌二優婆夷曲躬合掌八部衆各各向_レ左合掌而立佛左二聲聞俱立其一又手二合掌

（釋尊、左に向き、審蓮臺に座す。印手を衣内に攝す。阿難、彌勒、展具して右を袒ぎ、長跪合掌す。阿難、正身西向す。彌勒は左に顧^{かえり}みる。佛の右に一菩薩、七聲聞あり。皆、左を向きて立つ。菩薩の印、隠れ

て見えず。聲聞の其の一は合掌し、其の二は拱手、其の三、四は合掌、其の五は拱手、其の六、七は印、隠れて見えず。また一比丘尼、一優婆塞、二優婆夷あり。皆、共に左に向かい、比丘尼は互跪拱手。優婆塞は跪坐合掌。二優婆夷は曲躬合掌。八部衆は各々左に向きて合掌して立つ。佛の左に二聲聞、俱に立つ。其の一は又手、二は合掌。）

釈尊が、印手を衣の内にし宝蓮台に坐している。その前に阿難と弥勒が展具の上に坐し、阿難は身を正し西を向き、弥勒はそれを顧みている。仏の右に一菩薩、七聲聞、一比丘尼、一優婆塞、二優婆夷、八部衆がおり、左に二聲聞がいる様相が描かれている。

「無量寿経曼荼羅」の「正宗説法之相」の絵相



そして、釈尊について、

釋尊右坐向_レ左發遣之相無_二光蓋_一者今經會末正是彌陀光照之時也則釋尊光明皆所_二隱蔽_一而不_レ現也經云譬如_下劫水彌_二滿世界_一其中萬物沈沒不_レ現渾濊浩汗唯見_中大水_上彼佛光明亦復如是

（釋尊右に坐して左に向くは、發遣の相なり。光蓋無きことは、今經の會末は正しく是れ彌陀の光照の時なり。則ち釋尊の光明、皆、隱蔽して現れざるなり。經に云う。譬えば劫水_{こうずい}の世界に彌滿_{みまん}して其の中の萬物沈沒して現れず、渾濊_{こんよう}、浩汗_{こうかん}にして、ただ大水_{だいすい}を見るが如し。彼の佛の光明もまた是くの如し。）

その釈尊の姿は、發遣の相であり、光蓋が無いのは、阿弥陀仏の光照の時であつて、釈尊の光明も隱蔽されているのである。その阿弥陀仏の光明の様相は、無量壽經（淨土宗全書第一卷三三頁）にあるように、まるで劫末の水災の時、世界中の一切の万物が水没し、ただ広々と深い大水に蔽われたものを見るような、全てを照らす耀きをもったものであつたと記されている。

そして、釈尊を取り囲む八部衆については、

八部天龍等八部也總別竝舉乃云_二天龍八部_一如_二四禪八定等_一一天謂十六天二十天等二龍須彌藏經下云一切龍總有_二五種形類_一一象形二蛇形三馬形四魚形五蝦蟇形三夜叉此云_二輕捷_一飛空速疾故四乾闥婆此云_二尋香_一天樂神也五阿修羅此云_二無酒_一採_二四天下華_一醞_二於大海_一龍魚業力其味不_レ變瞋妒誓斷故云_二無酒神_一六迦樓羅昔云_二金翅_一正云_二妙翅_一此就_レ狀翻若敵對翻此云_二大嚙頂_一以_三常著_二龍於嚙中_一故日食_二一龍王五百小龍_一繞_二四天下_一周而復始次第取食七緊那羅此云_二疑神_一謂頂有_二一角_一形乃似_二人面極端正見者生_レ疑爲_二是人_一耶爲_二非人_一耶因_レ此立_レ稱八摩睺羅伽此云_二大腹行_一卽蟒之類梵語新舊訛正如_二琳音第二十一等_一若言_二人非人_一者八部皆非人也出_二於舍利弗問經_一若來聞_レ法則化爲_レ人維摩經云八部皆有_二神力_一能自變_レ形在_レ座聽_レ法問今經何無_二雜衆_一答覺經流通云諸天帝王人民皆大歡喜莊嚴經云天龍八部一切大衆今經無略也

（八部は天龍等の八部なり。總別竝べて舉げしめ、乃ち天龍八部と云う。四禪八定等の如し。）

一には天、謂わく十六天二十天等なり。

二には龍、須彌藏經の下に云わく。一切の龍に總じて五種の形類有り。一には象形、二には蛇形、三には馬形、四には魚形、五には蝦蟇形なり。

三に夜叉、此に輕捷と云う。空を飛ぶ速疾なるが故に。

四に乾闥婆、此には尋香と云う。天の樂神なり。

五に阿修羅、此には無酒と云う。四天下の華を採り、大海に醞す。龍魚の業力、其の味わい變せず。瞋妒して誓つて斷つ。故に無酒神と云う。

六に迦樓羅、昔は金翅と云う。正しくは妙翅と云う。此れ狀に就いて翻す。若し敵對して翻せば、此には大嗔頂と云う。常に龍を嗔中に著すを以つての故に。日に一龍王、五百の小龍を食す。四天下を繞り周してまた始む。次第に取り食らう。

七に緊那羅、此に疑神と云う。謂わく頂に一角有り。形、乃ち人に似たり。面、極めて端正なり。見る者疑いを生じ、是れ人と爲さんや、非人と爲さんや。此れに因りて稱を立つ。

八に摩睺羅伽、此に大腹行と云う。即ち蟒うわばみの類なり。梵語の新舊訛正は琳音第二十一等の如し。

人非人と言うは、八部、皆、非人なり。舍利弗問經に出たり。若し來りて法を聞くには、則ち化して人と爲す。維摩經に云う。八部、皆、神力有り。能く自ら形を變じて座に在りて法を聽く。

問う。今經に何んぞ雜衆無し。

答う。覺經の流通に云う。諸天、帝王、人民、皆、大いに歡喜す。莊嚴經に云う。天龍八部、一切大衆と。

今經に無きは略なり。

と天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽の八部衆についてその特徴を記し、それぞれが神力を持ち、人非人であるが、法を聞く時には人の姿に形を変えたと述べられている。

この「正宗説法之相」の絵相では、彌勒、阿難、そして宝蓮台に坐す釈尊を取り囲む、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆や八部衆、菩薩、聲聞について描かれていることを知ることができるのである。

(二) 「彌勒」「阿難正身西面」

次に、「彌勒」と「阿難正身西面」について次のような注釈がされている。

「彌勒」については、

彌勒西域記七云梅怛麗耶唐言慈氏一即姓也舊曰彌勒二訛也昔者如来在王舍城鷲峰山一告諸苾芻二當來之世此瞻部州土地平正人壽八萬歲有婆羅門一有子慈氏者二身皆金色光明照朗當捨家成三正覺一廣爲衆生二三會説法上其濟度者皆我遺法下植福衆生也

(彌勒は、西域記の七に云う梅怛麗耶。唐には慈氏と言う。即ち姓なり。舊に曰う彌勒と。訛なり。

昔、如来、王舍城鷲峰山に在しめ、諸もろの苾芻びっしゅに告げたまわく。當來の世、此の瞻部州、土地平正にして人壽八萬歲ならん。婆羅門有り。子を慈氏と云う。身、皆、金色光明照朗なり。當に家を捨て正覺を成し、廣く衆生の爲に三會に説法すべし。其の濟度の者は、皆、我が遺法に福を植えし衆生なり。)

「彌勒」は姓で、唐では慈氏と言ひ、昔、如来が王舍城鷲峰山で諸々の比丘に、来世に閻浮州が平正になった時に、廣く衆生の爲に三會に説法し、遺法に福を植えてくれる者であることを告げたと述べている。

また、「阿難正身西面」は、

正身西面麗本經作二西向一明本亦同

(正身西面とは、麗本の經には西向に作す明本亦同。)

さらに、「阿難」については、

阿難今經當機彌勒今經付屬故別舉之

（阿難は、今經の當機。彌勒は今經の付屬。故に別して之を擧げる。）
 とあり、「正身西面」とは、西方浄土に正面することであり、「阿難」は、『無量寿經』の仏の說法にかなった素質のある當機（相手の能力素質に応じた導き方）の者であり、「彌勒」は、『無量寿經』の仏の教えを世に伝えることを託された付屬の者である事が記されている。

（三）「彌陀光照」

「無量寿經曼荼羅」の「正宗說法之相」の「彌陀光照」の絵相



「彌陀光照」の絵相は、(一)の「正宗説法之相」の絵相の向かって右側の半分にあり、浄土と穢土の様相が描かれている。

この「彌陀光照」について、随天は次のように注釈を加えている。

彌陀光明照_二淨穢土_一言淨土者上有_二八宮殿_一七殿閉_レ戸一殿開_レ扉言_二穢土_一者下有_二九山八海_一第一須彌山有_二四層級_一
第四層級四王天中東南二天顯彰西北二天不見

山頂四角各有_二一峰_一頂上有_二忉利宮_一
東北有圓生樹西南善法堂隱而不見

七金山外鉄圍山内有_二大鹹海_一
四洲之中南洲爲表故東洲傍見西北二洲隱而不見

彌陀光明實照_二十方淨刹_一而今示_二八殿_一者東方下方隱而不_レ見也閉戸卽示_二他方淨土凡夫難_レ生但有_二一殿開扉_一者諸土之中乃開_二一土_一以表_二稱讚彌陀軌式_一也九山八海今此一世界中也且圖_二出水已上_一金水風輪非_レ要不_レ圖九山者妙高持雙持軸擔木善見馬耳象鼻持邊鐵圍也八海在九山中際
前七水海是名内海第八鹹海是名外海 〈中略〉

(彌陀の光明、淨穢の土を照らす。浄土と言うは、上に八宮殿有り。七殿は戸を閉じ、一殿は扉を開く。穢土と言うは、下に九山八海有り。第一の須彌山に四層級有り(第四層級四王天の中、東南の二天は顯彰し、西北の二天は見えず)。

山頂の四つの角に各々一峰有り。頂上に忉利宮有り(東北に圓生樹有り。西南に善法堂隠れて見えず)。七金山の外、鉄圍山の内に大鹹海有り(四洲の中に南洲を表すとす。故に東洲は傍らに見え、西北の二洲は隠れて見えず)。

彌陀の光明、實に十方淨刹を照らす。而るに、今、八殿を示すは、東方と下方との隠れて見えざるなり。閉戸は、即ち他方の浄土は凡夫の生き難きことを示す。ただ一殿開扉すること有るは、諸土の中の乃ち一土を開けしめ以って稱讚彌陀の軌式を表すなり。

九山八海は、今、此の一世界の中なり。且く出水已上を圖す。金水風輪は要に非ざれば圖せず。

九山は、妙高、持雙、持軸、擔木、善見、馬耳、象鼻、持邊、鐵圍なり。

八海は九山の中際に在り（前の七水海、是れを内海と名づく。第八鹹海、是を外海と名づく。）

とあるように、右の絵相は、弥陀の光明が浄土、穢土を普く照らしている様相を示しており、上部に描かれる浄土の八宮殿のうち、凡夫には生じ難い七殿の扉は閉じられ、一殿開かれているのは稱讃彌陀の軌式（阿弥陀仏の極樂浄土）を表している。

穢土の絵相は、下部にあるように須弥山を中心とした九山八海の世界として描かれている。

さらに、四州については、

四洲俱舍頌云南瞻部如^レ車三邊各二千南邊有^二三半^一東毘提訶洲其相如^二半月^一三邊如瞻部東邊三百半西瞿陀尼洲其相圓無^レ缺徑二千五百周圍此三倍北俱盧界方面各二千等中洲復有^レ八四洲邊各二具如^二頌疏等^一

（四洲は、俱舍頌に云う。南瞻部は車の如し。三邊各々二千。南邊は三半有り。

東毘提訶洲は、其の相、半月の如し。三邊は瞻部のごとし。東邊は三百半。

西瞿陀尼洲は、其の相、圓にして缺けること無し。徑り二千五百。周圍は此の三倍。

北俱盧界は、方面各々二千、等じ。

中洲に復た八有り。四洲の邊、各二。具には頌疏等の如し。）

とあり、阿毘達磨俱舍論卷十一（大正新脩大藏經第二九卷五七頁）の頌が取り上げられている。

そして、「彌陀光照」の標文は、次のように記され、

無量壽佛放大光明普照一切諸佛世界金剛圍山須彌山王大小諸山一切所有皆一色

（無量壽佛の放つ大光明は、普く一切諸佛の世界を照らす。金剛圍山、須彌山王、大小諸山、一切の所有、皆、一色。）

その注釈が、

放大光明普照一切彼佛無礙光故無_レ所_レ不_レ照又非_二但見土_一亦聽_二法故經釋尊問_二阿難_一云復聞_下無量壽佛大音宣_二布一切世界_中化_中衆生_上不阿難對曰唯然已聞問覺經大阿彌陀經但云_二見光_一審積經云_二化鳥說_一莊嚴經云_二聖衆說法_一相違如何答傳譯不同非_レ適_レ今也諸佛世界是指_二淨土_一金剛圍山須彌山王大小諸山是指_二穢土_一須彌爲_レ大金剛圍爲_レ小皆一色今略_二同字_一准_二觀經說_一同一金色華座觀云光明熾盛不_レ可_二具見百千閻浮檀金色不_レ得_レ爲_レ比

(放大光明普照一切は、彼の佛は無礙光の故に照らさざる所無し。但だ見土のみに非ず。また聽_二法故_一の故に。經に、釋尊、阿難に問うて云わく。また無量壽佛の大音、一切世界に宣布して衆生を化したまうを聞きたてまつるやいなや。阿難、對_二えて_一曰さく。ただ然り、已に聞きたてまつる。

問う。覺經と大阿彌陀經には但だ見光と云う。審積經には化鳥說法と云う。莊嚴經には聖衆說法と云う。相違いかん。

答う。傳譯、不同、今に適するに非ず。諸佛世界は是れ淨土を指す。

金剛圍山須彌山王大小諸山は、是れ穢土を指す。須彌を大とす。金剛圍を小とす。

皆一色とは、今、同字を略す。觀經の説に准ずるに同一金色なり。華座觀に云わく、光明熾盛_二にして具_一に見るべからず。百千の閻浮檀金の色も比_二と爲_一すことを得ず。(

とあるように、『無量壽經』には、釈尊が、無量壽仏の大音が一切世界に宣布して衆生を化導するのを聞いたかどうかを問い、阿難が已に聞いたと応えていること。また、阿彌陀仏の光明は無礙光で、金剛圍山も須彌山王も諸山も照らさない所が無く、『觀經』の華座觀に説かれるように、まさに火が燃え盛り、仰ぎみることも出来ないほど光り耀き、百千の最も勝れた閻浮檀金の色さえ比べられない程のものであることが説かれている。

第三項 「流通說法之相」

(一) 「名號付屬」

「無量壽經曼荼羅」の流通分の「名號付屬」の絵相は、次のように描かれる。

「無量壽經曼荼羅」の「流通說法之相」の絵相



「無量寿經曼荼羅」の「流通説法之相」の「名號付屬」の絵相について、隨天の『開壇記』（卷一 二十二丁表）には次のような注釈がされている。

耆山表_レ右菩提樹四株世尊向_レ左坐_二審蓮臺_一舉_二右手_一外_レ掌左手仰_二開膝上_一於_二佛正面_一彌勒菩薩展_二尼師壇_一長跪合掌佛右二菩薩五聲聞一天一龍皆向_レ左立菩薩其一持_レ珠其二合掌聲聞其一秉_レ拂其二合掌其三拱手其四五印不_レ見一天拱手一龍捧_レ珠佛左四聲聞夜叉迦樓羅緊那羅皆立聲聞其一向_レ右合掌其二正面持_二如意_一其三向_レ左叉手其四向_レ左拱手夜叉向_レ右叉手迦樓羅緊那羅向_レ右合掌如來頂光照灼十方亦有_下一天人持_二華籠_一向右而下雨

華_二八_一葩_二二十_一

繽紛而降樂器_二琵琶_一

羯鼓_二二_一

飄搖而降_上

（耆山右を表にす。菩提樹四株あり。世尊左に向かい審蓮臺に坐し、右手を舉げ掌を外にし、左手、開膝の上に仰ぐ。佛の正面に於いて彌勒菩薩、尼師壇を展べて長跪合掌す。

佛の右に二菩薩、五聲聞、一天、一龍、皆、左に向きて立つ。菩薩の其の一は珠を持す。其の二は合掌す。聲聞其の一は拂を乗り、其の二は合掌す。其の三は拱手、其の四、五は印見えず。一天は拱手。一龍は珠を捧ぐ。佛の左に四聲聞、夜叉、迦樓羅、緊那羅、皆、立つ。聲聞其の一は右に向き、合掌す。其の二は正面にして如意を持す。其の三は左に向きて叉手。其の四は左に向きて拱手。夜叉は右に向きて叉手。迦樓羅、緊那羅は右に向きて合掌す。

如來の頂光、十方を照灼す。また一天人、華籠を持し、右に向かしめ雨華を下らす（二十八葩）、繽紛として樂器（琵琶一羯鼓二）降る、飄搖として降る有り。）

右に説かれるように、耆闍崛山の麓、菩提樹四株の下で宝蓮台に坐した仏の前に、彌勒が尼師壇の上で長跪合掌している。仏の傍には二菩薩、九聲聞、一天、一龍、夜叉、迦樓羅、緊那羅が控えている様相が描かれている。

そして、これは、世尊が流通説法している様相で、彌勒に付属している儀式であると記している。

世尊向_レ左舉_二右手_一外_レ掌左仰_二開膝上_一者流通説法相也

（世尊左に向き右手を挙げ、掌を外にし、左掌を膝の上に仰ぎ開くは、流通説法の相なり。）

彌勒正面者付屬儀式也

（彌勒、正面なることは、付屬の儀式なり。）

また、周りを取り囲む聲聞達の乗り物について、

乗拂祖庭事苑云佛在_二廣嚴城彌猴池側高閣堂_一中時諸比丘爲_二蚊蟲_一所_レ食體患_レ痒抓搔不_レ休俗人見已問曰聖者何故如_レ是以_レ事具言彼言聖者何故不_レ持_下佛_二蚊子_一物_上答言世尊不_レ許以_レ緣白_レ佛佛言我今聽諸苾芻畜_中拂_二蚊子_一佛等今謂拂子豈啻拂_レ蚊物亦應_下是拂_二除煩惱_一之表示_上

（乗拂は、祖庭事苑に云う。佛、廣嚴城彌猴池の側の高閣堂の中に在す時に、諸々の比丘、蚊蟲に食わるる。食體、痒を患い、抓搔して休まず。俗人、見已って問うて曰わく。聖者、何故に是くの如くなる事を以つて具に言う。彼の言う。聖者何が故に蚊子を拂う物を持たざる。

答えて言わく。世尊、許したまわず。縁を以つて佛に白す。佛の言わく、我れ今、聽す。諸々の苾芻_{びしゅ}に蚊子を拂う物を蓄_{たくわえ}ることをと。今、謂う、拂子。豈_あにただ蚊を拂う物ならんや。また當に是れ煩惱を拂除するの表示なるべし。）

拂子は、蚊を払う物だけでなく、まさに煩惱を払い除くことを表すものであると述べられている。さらに、

如意有云亦搔_レ痒之器者輕卒之甚也夫如意之制乃心之装也故菩薩皆執_レ之形如_二雲蓋_一

（如意は有が云う。また痒を搔くの器は輕卒の甚だしなり。夫れ如意的制は乃ち心の装いなり。故に菩薩、皆、これを執り、形、雲蓋の如し。）

如意についても、ただ痒いところを搔く物ではなく、意の如く、心の装いにより思いのままになることを意味するものであるとしている。

そして、如來の頂光については、

如來頂光等者現瑞表實也經云爾時三千大千世界六種震動大光普照_二十方國土_一百千音樂自然而作無量妙華紛紛而降

（如來頂光とは、現瑞表實なり。經に云う。爾の時、三千大千世界六種震動し、大光普く十方國土を照らす。百千音樂、自然に作り、無量の妙華紛紛として降る。）

遍く十方國土を照らすもので、まさに三千大千世界が六種震動し、百千の音樂が奏でられ、無量の妙なる華が入り混じって降り注ぐと記している。

さらに、流通說法之相、名號付屬、音樂自然のそれぞれについては、次のように注釈を加えている。まず、流通說法之相については、

流通光明文句一云流名_二下注_一通名_二不壅_一欲_レ使_二正法之水從_レ今以注_レ當聖教筌罫不_レ壅_二來世_一雖有_二勸持付屬二種_一今乃付屬流通所以者何觀經小經既有_二付屬_一今經何無既命_二彌勒_一云_二設有大火聞經受持_一豈非_二付屬_一故慧成大師釋_二於付屬_一其義揭焉意云上來雖_レ說_二但念佛及助念諸行_一順_二佛本願_一故以_二但念佛_一付_二屬彌勒_一如一家大師云_中上來雖_レ設_二定散兩門之益_一望_二佛本願_一意在_下衆生一向專稱_中彌陀佛名_上問若然可_二直說_一但念佛何說_二助念及諸行_一耶答大師云上逗_二機緣_一雖_レ說_二助念往生諸行往生之旨_一順_二佛本願_一故至_二于流通_一而廢_二諸行_一歸_二但念佛_一也助行猶廢況但諸行哉稱揚諸佛功德經云其有_下不_レ信_四讚_二歎稱_一揚阿彌陀佛名號功德_一而謗毀者_上五劫之中當_下墮_二地獄_一具受_中衆苦_上

（流通は、光明文句の一に云う。流に下注に名づく。通は不壅に名づく。正法の水をして今従り以って、當に注ぎ聖教の筌罫、來世に壅がうざるを使せんと欲す。

勸持、付屬の二種有りと雖も、今は乃ち付屬流通。所以は、何となれば、觀經、小經に既に付屬有り。今經に何ぞ無ん。既に彌勒に命じて設有大火聞經受持と云う。豈に付屬にあらざらんや。

故に慧成大師、付属を釋すること、其の義、掲げたり。意の云う。上來、但念佛と及び助念と諸行とを説くと雖も、佛の本願に順ずるが故に、但念佛を以つて彌勒に付属す。

一家大師の云うが如し。上來、定散兩門の益を説くと雖も、佛の本願に望むれば、意、衆生をして一向に専ら彌陀佛の名を稱えしむるに在りと。

問う。若し然らば、直に但念佛を説く可し。何ぞ助念及び諸行を説くや。

答う。大師の云う。上には機縁に逗して助念往生諸行往生の旨を説くと雖も、佛の本願に順ずるが故に流通に至らしめ諸行を廢して但念佛に歸すなり。助行、なお廢す、況んや但諸行をや。稱揚諸佛功德經に云う。其れ阿彌陀佛の名號功德を稱揚することを讚歎し信ぜずして、しかも謗毀する者有れば、五劫の中に當に地獄に墮して、具に衆苦を受くべし。

とあるように、流通には、勸持（經典を保つことを勧めること）と付属（仏が教えを世に伝えるべき使命を付与すること）の二種類あるが、今は付属の流通である。なぜならば『觀經』、『阿彌陀經』に既に付属があるからである。それなのにどうして『無量壽經』には付属が無いのだろうか。彌勒に命じて「設有大火聞經受持」と云うのは、付属であると云えるのだろうかという疑問である。

それについて慧成大師（法然）は、「上來、但念仏と助念と諸行を説くと云つても、仏の本願に順ずれば、但念佛を以つて彌勒に付属」したという解釈をしている。

また、一家大師（善導）も同じように、「上來、定散兩門の益を説くと云つても、仏の本願に望むるところは、衆生が一向に専ら彌陀仏の名を稱えることに在る」と説いているからである。

それでは問うが、それならば、直に但念仏と説くべきであり、どうして助念や諸行を説くのだろうか。

答えよう。大師は、機縁に逗とどまって助念往生、諸行往生の旨を説くというけれども、仏の本願に順ずることから、流通に至って諸行を廢して但念佛に帰しているのであり、助行も諸行も廢しているのである。稱揚諸佛功德

經に云うように、「それ阿弥陀仏の名号の功德を称揚することを讃歎し、信ぜずに、しかも謗毀する者が有れば、五劫の中にまさに地獄に墮ちて、ことごとく衆苦を受けるべし」とある。

このように隨天は、法然も善導も、衆生の機縁によって助念や諸行を説いているが、窮極は仏の本願によって但念仏を説くのであり、この流通に至って弥勒に但念仏を付属していることを説いていると記している。

さらに、名号付属について、

名號付屬經云佛語_二彌勒_一其有_レ得_レ聞_二彼佛名號_一歡喜踊躍乃至一念當_レ知此人爲_レ得_二大利_一則是具_二足無上功德_一問次下經云設有_二大火_一充_二滿三千大千世界_一要當過此聞_二是經法_一經法之言何局_二稱名_一答經文約_二能詮_一而說一家釋云設滿_二大千_一火直過聞_二佛名_一是約_二所詮_一而說也

（名號付屬は經に云う。佛、彌勒に語_つげたまわく。其れ彼の佛の名號を聞くことを得ること有つて、歡喜踊躍して、乃至一念せんに當に知るべし。此の人大利を得たりとす。則ち是れ無上の功德を具足す。

問う。次下の經に云う。設_たい大火、三千大千世界に充滿すること有りと、要_{かな}らず當に此れを過ぎて、是の經法を聞く。經法の言_{ことば}は何ぞ稱名_{かぎ}に局らん。

答う。經文は、能詮_{のうせん}に約して説く。一家の釋に云う。設_たい大千に滿の火、直に過ぎて佛名を聞く。是れ所詮に約して説くなり。）

『無量寿經』には、彼の阿弥陀仏の名号の功德を聞いて往生を遂げたいと願つて歡喜踊躍し、生涯ただ念仏を相續することによつて、まさに限らない大利を得て、この上ない無量の功德を受けるのであると説かれている。

では、問うが、以下の經に、たとえ三千大千世界が大火で充滿しても、必ずこの中を通り過ぎて『無量寿經』を求めて聞かねばならないと云うが、なぜ經法に称名とかぎらないのか。

答えよう。經文は能詮（經典に説かれる意義内容を表す文句をいう）を説くもので、一家（善導）が解釈しているように、たとい大千世界が万の猛火に満ちても、直に通り過ぎて仏名を聞くことができるが、これは

所詮（經文の文句によってあらわされることわり、ことがら）によって説いていることであると述べている。

この流通分の名號付屬について、義山は『隨聞講錄』（浄土宗全書第十四卷五二二頁）で、

佛語彌勒等者上來正宗已下流通也上來雖說萬行往生望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名故但流通稱名一行也然二佛各有隨自隨他二意彌陀隨他前有攝機願隨自時廢諸行取念佛釋迦亦爾隨他前且隨機樂欲雖說諸行隨自時唯說念仏一行上說一向至斯言彼佛名號不說餘事爾經文始終合顯本意

此經上下兩卷體念佛也是故今至流通所爲本意以一向專念之稱名流通彌勒也元祖釋大經云廢助念及諸

行明但念佛者謂於第十八願及成就文明但念佛往生來迎等願及三輩文明助念往生諸行往生由此修

諸往生行者懷疑難決故至流通則廢助念諸行二門明但念佛往生也鈔於此處雖有今經付屬有無問答至次下聞經得益處可辨之

（佛語彌勒とは、上來、正宗、已下、流通なり。上來、萬行往生を説くと雖も、佛の本願に望むれば、意は、

衆生をして一向に専ら彌陀佛の名を稱しむるに在り。故に但だ稱名の一行を流通したまうなり。

然るに、二佛、各々隨自隨他の二意有り。彌陀、隨他の前には、攝機の願有り。隨自の時は諸行を廢して、念佛を取る。釋迦また爾り。隨他の前には且く機の樂欲に隨いて諸行を説きたまうと雖も、隨自の時は、ただ念仏の一行を説きたまう。上には一向と説き、斯に至って彼の佛名號と言いて餘事を説かず。

爾らば經文の始終に合して本意を顯す。されば此經上下兩卷の體は念佛なり。是の故に、今、流通に至りて本意と爲る所の一向專念の稱名を以って彌勒に流通したまうなり。

元祖（大經釋）に云う。助念及び諸行を廢して但念佛を明かすとは、第十八願及び成就の文に於いては但念佛往生を明かし、來迎等の願及び三輩の文に助念往生、諸行往生を明わす。此に由りて諸々の往生の行を修する者の疑を懷きて決し難し。故に流通に至りて、則ち助念諸行の二門を廢して但念佛往生を明かすなり（鈔に此の處に於いて今經付屬有無の問答有りと雖も、次下の聞經得益の處に至りて此を辯ずべし）。「仏語彌勒」までの前の部分は正宗分で、以下は流通分である。これまでは万行往生が説かれているが、仏の

本願の意は、衆生が一向に専念して阿弥陀仏の名を称えることである。だから称名の一行を流通するのである。

そして、二仏（阿弥陀仏・釈迦）は、それぞれ随自、隨他の二つの意をもっているのである。

阿弥陀仏は、隨他（仏が説法する場合、相手の考え・素質・能力に順応して説くこと）の時には、機（教えを受ける人の性質・力量）に攝つて教えを説き、随自（相手の素質いかんを問わず、自分の思いをありのままに説き聞かせること）の時には、諸行を廢してただ念仏の一行を説くのである。

さらに、釈迦も同じように、隨他の時には機の樂欲（願い求め）に随つて諸行を説くものの、隨自の時はただ念仏の一行を説くのである。これまでは一向と説いて、この流通分に至つて「彼の仏名号」と云つて、余事は説かないのである。このように經文の始終に合わせて本意を顯しているのである。

だから、此の經（『無量壽經』）上下両巻を通して、念仏なのである。このようなことから、今、流通に至つて、本意とするところの一向専念の称名をもつて、弥勒に流通したものである。

元祖法然が『大經釋』（無量壽經釈）に云うには、【漢語燈錄卷一『無量壽經釈』（浄土宗全書第九卷三三二頁）】

二廢_レ助念及諸行_一明_二但念佛_一者於第十八願成就文_一明_二但念佛往生_一來迎等願及三輩文明_二助念往生諸行往生_一由_レ此諸修_二往生行_一者懷_レ疑難_レ決故至_二流通_一則廢_二助念諸行二門_一明_二但念佛往生_一也

（二に、助念及び諸行を廢して、但念佛を明かすとは、第十八の願成就の文に於いては、但念佛往生を明かし、來迎等の願及び三輩の文には、助念往生、諸行往生を明かす。此れに由つて諸々の往生行を修する者、疑を懷きて決し難し。故に流通に至りて則ち助念、諸行の二門を廢して但念佛往生を明かすなり。）

とあるように、助念や諸行を廢して但念佛を明かすというのは、第十八願成就の文で、但念佛往生を明かし、來迎等の願や三輩の文では助念往生や諸行往生を明かしているから、諸々の往生行を修する者は疑問を持ち、決定するのが難しいのである。だから流通に至つて、助念や諸行の二門を廢し、但念佛往生を明かしているのと義山は元祖の『大經釋』を具体的に引いて注釈を加えているのである。

(二) 「特留此經」

「無量寿経曼荼羅」の流通分の「特留此經」の絵相は、次のように描かれる。

「無量寿経曼荼羅」の流通分の「特留此經」の絵相



特留此經どくろしきやうの絵相について、隨天は、次のように注釈をしている。（『開壇記』卷一 二十五丁表）

左有二巖窟一險巖似レ刃窟中安三無量壽經一右有二樹林一凜凜如レ劔大石爲レ刃前二有一男一女一向レ經跪坐合掌斯乃末法萬年後人壽十歲刀兵劫起時人也

（左に巖窟有り。險巖、刃に似たり。窟中に無量壽經を安ず。

右に樹林有り。凜凜として劔の如し。大石、刃を爲す。

前に一男一女有り。經に向いて跪坐して合掌す。斯れ乃ち末法萬年の後の人壽十歲刀兵とうびよう劫起こうきの時の人なり。）

右の絵相は、劔のような樹林や刃のように鋭い大石に囲まれた峻しい峰の巖窟の中に『無量壽經』が安置され、その前に一男一女が合掌跪坐しているが、これは末法萬年の後の人壽十歲刀兵劫起の時の人を描いたものであると述べられている。

そして、この絵相の内容である末法萬年や特留此經について、注釈が加えられている。

まず、末法萬年の刀疾飢については、

末法萬年等者正像末法異說紛紜略頌云大悲雜阿正法千大集賢劫智度論佛昇釋譜毘尼母涅槃正法念正五大乘三聚懺悔經正法像法竝五百悲華正千象五百末法萬年無二異說一今謂雖レ有二異說鸞綽導三師以正法五百像法千年之說爲レ正末法萬年者是約二大數一爲レ言刀兵劫非二水火風大三災一則是刀疾飢小三災攝也若依二婆沙評家一第一減人壽十歲時飢饉災起第二減疾第三減刀俱舍列二刀疾飢一刀限二七日一疾七月七日飢七年七月七日若依二大乘一每二一劫減一俱有二三災一謂三十歲尺三寸四飢饉災起二十歲疾二尺三寸十歲刀二尺時量同レ前問今時減劫是二十減劫中何乎答小乘有二二說一謂第二第九大乘偏云二第九劫一章頌云二十數中第九劫六萬四萬二萬時拘留那含迦葉興百歲釋迦牟尼出人壽三十方飢饉等

（末法萬年とは、正、像、末法、異說紛紜ふんうんたり。略頌に云う。大悲と雜阿とは、正法、千。大集と賢劫と智

度論と佛昇と釋譜と毘尼母と涅槃と正法念とは、正、五。大乘三聚懺悔經は、正法、像法並びに五百。悲華は、正、千。象五百、末法萬年異説無しと。今謂う、異説有りと雖も、鸞、綽、導の三師、正法五百、像法千年の説を以って正とす。

末法萬年は、是れ大數に約して言を爲す。

刀兵劫とは、水・火・風の大的三災に非ず。則ち是れ刀・疾・飢の小的三災の攝なり。

若し婆沙評家に依れば、第一の減、人壽十歳の時、飢饉災起り、第二の減に、疾。第三の減に、刀。

俱舍には、刀疾飢と列して、刀は七日に限り、疾は七月七日、飢は七年七月七日なり。

若し大乘に依れば、一劫の減ごとに俱に三災有り。謂わく三十歳にはへ人の長四尺三尺へ飢饉災起る。

十歳には疾へ三尺二尺へ。十歳には刀へ二尺一尺へ時量は前に同じ。

問う。今時の減劫は、是れ二十減劫の中には何ぞや。

答う。小乘に二説有り。謂わく。第二と第九と大乘には、偏に第九と云う。劫章頌に云う。二十數の中、第九劫に六萬と四萬と二萬との時に拘留と那含と迦葉と興る。百歳に釋迦牟尼、出づ。人壽三十にして、方に飢饉と。

と説かれているが、この中で瑜伽論の劫章頌が取り上げられているので、それをみると、

『瑜伽論』劫章頌 (漢籍リポジトリ www.kanripo.org/text/KR6n0014/) より転載)

大慈恩寺沙門 窺基撰

劫名次第及數量	成住壞空并始終	餘三無定不可準	故約住劫論多少	先所有情生瞻部	成劫終滿住劫初
爾時人壽命無量	至十歲時減劫終	及後百年減一年	八萬四千為最上	從彼子年倍父增	還登八萬四千歲
一増一減為一劫	數滿二十住劫終	即此住時稱賢劫	二十數中第九劫	六萬四萬二萬時	拘留那含迦葉興
百歲釋迦牟尼出	人壽三十萬飢饉	七年七月七日滿	聚骨運籌多滅亡	二十歲時疾病侵	七月七日災方畢

至十歲時刀兵起	七日七夜相殺傷	餘少人民不盡滅	怖災造福增延命	子年倍父增八萬	從彼滅劫慈氏興
至第十五滅劫中	九百九十四佛出	乃後住劫欲終時	樓志如來方出興	住中最後唯增劫	人多厭世樂修定
無間有情既不生	壞劫爾時初禪起				

とあるように、正法、像法、末法の末法思想の年数の捉え方は、諸經によつて様々であるが、曇鸞、道綽、善導の三師は、正法五百年、像法千年の説をとっていること。そして、刀兵劫というのは、戦争と疾病と飢餓の三災であり、『阿毘達磨大毘婆沙論』の四評家（世友・法救・妙音・覺天）によれば、第一滅の人寿十歳の時に飢饉が起こり、第二滅には疾病が、第三滅に戦争が起こるとされていること。また『俱舍論』（『阿毘達磨俱舍論』卷第十二（大正新脩大藏經二十九卷六六頁））には、刀疾飢について、刀は七日、疾は七ヶ月と七日、飢は七年七ヶ月と七日にわたること。さらに大乘によれば、一劫滅ごとに三災が起こり、人寿三十歳には人間の身長が三（四尺）になり飢饉が起こり、二十歳には身長が二（三尺）になり疾病に罹り、十歳には身長が一（二尺）になり戦争が起きると説かれていること。また、小乗には二説あり、今は第九番目の劫であること。『瑜伽論』の劫章頌には、第九劫の六萬に拘留、四萬に那含、二萬に迦葉が興り、百歳の時に釋迦牟尼が出現すること。そして人寿三十歳には飢饉が七年七ヶ月七日続き、二十歳には、疾病により七ヶ月七日災いを受け、十歳の時は刀兵（戦争）が起き七日七夜、殺傷が繰り返されるということが説かれていることを記している。

続いて、特留此經について、隨天は、

經云當來之世經道滅盡我以慈悲哀愍特留此經止住百歲西河禪師云釋迦牟尼一代正法五百年像法千年末法一萬年衆生滅盡諸經悉滅如來哀愍痛燒衆生特留此經止住百歲一家大師云萬年三審滅此經住百年爾時聞一念皆當得生彼如憬興者依法住記指增劫七萬歲後羅漢傳持佛法如感師者引二義而不判是非問大阿彌陀經及覺經云我般泥洹去後經道留止千歲千歲後經道斷絕我以慈悲特留此經止住百歲云何和會答所出經文恐是筆受誤歟若以千歲後經道斷絕文爲正者千歲後則不可有經卷今已二千七百餘歲既有經卷

何云「斷絶」^{已上} 無量壽經慧成大師云此經所詮全在「念佛」念佛往生此經特留故云「特留此經」又云問曰百歲之間可「留」念佛「其理可」然此念佛行為「唯被」彼時機「將爲」通「於正像末法之機」也答曰廣通「正像末法」舉「後攝」今私問特留此經爲「通」三經「答三經所詮同在」念佛「故文在」今經「而義通」觀小兩經「也」

（經に云う。當來の世、經道滅盡せんに、我、慈悲を以って哀愍して、特り此の經を留めて止住すること百歳ならん。

西河禪師（道綽）の云う。釋迦牟尼仏、一代、正法五百年、像法千年、末法一萬年、衆生滅盡し、諸經悉く滅せん。如來、痛燒の衆生を哀愍して、特り此の經を留め止住すること百歳ならん。

一家大師（善導）の云う。萬年に三害滅せんに、此の經、住すること百年。爾の時、聞きて一念せば、皆、當に彼に生ずるを得べし。

憬興の如きは、法住記（玄奘訳）に依りて、增劫七萬歳の後、羅漢傳持の佛法を指す。

感師（懷感）の如きは、二義を引きて是非を判ぜず。

問う。大阿彌陀經及び覺經に云う。我般泥洹し去りて後、經道留止すること千歳。千歳の後、經道斷絶せんに我れ慈悲を以って特り此の經を留め、止住することならんと言ふ。何が和會せん。

答う。出す所の經文は恐らくは是れ筆受の誤りか。若し千歳の後、經道の斷絶の文を以って正と爲すは、千歳の後には則ち經卷有るべからず。今、已に二千七百餘歳。既に經卷有り。何ぞ斷絶と云わんへ已上、問師へ。

無量壽經とは、慧成大師（法然）の云う。此の經の所詮は、全く念佛に在り。念佛往生の此の經、特り留るが故に特留此經と云う。又云く。問うて曰わく、百歳の間、念佛を留むべきこと、其の理、然るべし。此の念佛の行は、ただ彼の時機に被るとやせん。はた、正、像、末法の機に通ずとやせん。答えて曰わく。廣く正、像、末法に通ずべし。後を舉げて今を攝す。

私に問う。特留此經は三經に通ずとやせん。

答う。三經、所詮、同じく念佛に在り。故に文は今經に在りて、義は觀、小、兩經に通ずるなり。

ここでは、道綽・善導・憬興（新羅の法相宗の僧・著書『無量壽經連義述文贊』）・懷感・聖問・法然の各師それぞれの特留此經の捉え方を注釈しているが、重要なのは、やはり法然の捉え方であるので、あらためてみると、『無量壽經』は、所詮、全く念仏であること。念仏往生のこの經は、特^{ひと}り留まるから特留此經と云うということ。百年の間、念仏を留めるべきこと。その理は当然であること。この念仏の行は、末法だけで無く、正・像・末法に通ずるものであること。そして、特留此經は『無量壽經』だけでなく『觀經』『小經』の三經に通じ、同じように念仏であるということを隨天は述べているのである。

また、義山は、『隨聞講錄』卷下之二（浄土宗全書第十四卷五二六頁）

特留此經者就^レ此有^二經卷止住念佛止住二義^一俱元祖御義也初義意經云^二特留此經^一釋云^二此經住百年^一經釋共同云^二此經^一故選擇云爲^レ留^二念佛^一殊留^二此經^一明知留^二此經卷^一爲^レ留^二念佛^一經若不^レ留念佛何以得留^レ故云^二經卷止

住

直釋止住即義證之就選擇爲經卷止住證（云云）今私按此御答釋還可爲念佛止住證雖成經卷止住證既釋經所詮故然則選擇意以兩處釋經卷念佛二義止住俱含其意曰之私記應得共意又至西宗要釋其義意尚分明次下釋之上來愚案不知是非學者可思擇也

（特留此經とは、此に就いて經卷止住、念佛止住の二義有り。俱に元祖の御義なり。初義の意は、經には特留此經と云う。釋には此經住百年と云う。經、釋、共に同じく此の經と云う。故に選擇に云う。念佛を留めんが為に、殊に此の經を留めんと。明らかに知んぬ。此の經卷を留めるは、念佛を留めんが為なり。經に若し、留まらずんば、念佛何を以って留めることを得ん。故に經卷止住と云う。

（直牒に師仰せの義を止め、之を證するに選擇の篇目に特留念佛を標するに就いて、問答を施し答の中の直釋を引きて經卷止住の證とす（云云）。

今、私に按ずるに、此の御答の釋、還って念佛止住の證と爲すべし。經卷止住の證と成り難し。既に經の所詮を釋するが故に然り。則ち選擇の意、兩處の釋を以って、經卷、念佛二義の止住、俱に其の意を

含むなり。これを曰わく私記の意もまた二義を含むと。選擇及び私記、能く熟讀して應に其の意得べし。また西宗要の釋に至りて其の義意、尚、分明なり。次下にこれを辯じ、上來の愚案、是非を知らず。學者、思擇すべし。)

とあるように、特留此經は、經卷を止住するのか、念佛を止住するのかの二義があるが、それは、元祖法然の義である。初めの義の經卷止住というのは、『無量壽經』には特留此經とあり、『無量壽經釈』には此經住百年とあるが、『經』にも『釈』にも「此の經」とあるので、『選択集』には、「念仏を留めるために、ことに此の經を留める」とあることから解るように、「此の經を留める」ということは、念仏を留めるということ「なのである。もし、經に留まらなければ、念仏は何をもつて留めることができようか。だから〈經卷止住〉というまでなのであり、あくまで〈念仏止住〉であることを説いている。

そして、さらに、聖問の『選択伝弘決疑鈔直牒』の〈經卷止住〉の解釈について、〈念仏止住〉にすべきであると指摘している。

また、隨天も注釈を加えているように、元祖法然は、『選択本願念仏集』第六章で、

【私問曰經唯云^二特留此經止住百歲^一全不^レ云^二特留念佛止住百歲^一然今何云^二特留念佛^一哉答曰此經所詮全在^二念佛^一其旨見^レ前不^レ能^二再出^一善導・懷感・恵心等意亦復加是然則此經止住者即念佛止住也

(私に問うて曰く、經にただ特留此經止住百歲と云うて、全く未だ特留念佛止住百歲と云わず。然るに今何ぞ特留念佛と云うや。

答えて曰く、此の經の所詮は全く念佛に在り。其の旨、前に見えたり。再び出だす能わず。善導・懷感・恵心等の意も、またまたかくの如し。然れば則ち此の經の止住は、即ち念佛の止住なり。】

と「此の經の所詮は全く念仏にあり」「善導・懷感・恵心等の意も、またまたかくの如し。然れば則ち此の經の止住は、即ち念仏の止住なり」と説いていることから、〈念佛の止住〉であると強調しているのである。

第四項 小結

以上、第一項「序分説法之相」、第二項「正宗説法之相」、第三項「流通説法之相」の絵相について、隨天の注釈と義山の解釈を加えながらみたが、次のようなことを知ることができる。

① 「序分説法之相」では、耆闍崛山の菩提樹の下で、釈迦が蓮華台に坐し、その姿が諸根悦預し、姿色清淨にして光顔巍巍としているのを見て、阿難が尼師壇の上で偏袒右肩長跪合掌して請問する様相が描かれる。

② 阿難請問の際、尼師壇に坐す絵相について、真言宗尾張八事山興正寺の諦忍律師が、『坐具顯正録』で坐具は坐臥に用いるもので礼拝には用いないと義山、高田敬輔、隨天等を批判し、論争を引き起こすことになる。【詳細は別項（第五章第二節「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響）で考察】

③ 「正宗説法之相」では、八部衆や四衆が取りまく宝蓮台に坐す釈尊の前で、身を正し西面する阿難、弥勒が坐し、發遣の相が表された絵相である。また、釈尊の光蓋が無いのは、阿弥陀仏の光照の時であることを知ることができる。

④ 「流通説法之相」では、釈尊が弥勒に、たとえ経法が滅盡しても、阿弥陀仏の名号を称えることを末代に流通すべきことを付属している絵相である。

⑤ 「特留此經」の絵相については、その位置付けが弥陀の所行の勝因の最下段にあり、特異な存在にみえるが、内容としては流通分に含まれるものなので、あえて隣接した位置に念仏止住を強調するために配置されたと考えられる。

⑥ 「序分」「正宗分」「流通分」の一連の三絵相は、「無量寿経曼荼羅」で最も重要な中台部分の極楽浄土の絵相の下段に描かれており、見る者にとっては、『無量寿経』（序分・正宗分・流通分）から醸し出され、立ち上るように顕れる極楽浄土の絵相と一体化された構成になっていると考えられる。

第二節 「述所説彌陀行成攝三段」の「所行」について

第一項 「所行」の「勝因」

(一) 「出家修道」

「無量寿経曼荼羅」「所行」「勝因」の「出家修道」の絵相



「出家修道」の絵相について、隨天は次のように注釈をしている。（『開壇記』卷一 二十八丁表）

崇巖表^レ左瑞雲覆^レ上後有^二枯樹一株^一繫^二犍陟^一國王向^レ左手自雉髮即脱^二珍妙御服^一絶^二冠瓔珞^一前侍士一人向^レ右跪座涕泣後車匿二人向^レ左曲躬號哭

此乃彌陀因時發心出家之相也經云時有^二國王^一聞^二佛説法^一心懷^二悅豫^一尋發^二無上正眞道意^一棄^レ國捐^レ王行作^二沙門^一號曰^二法藏^一夫出家者爲^二無爲法^一出^二二死家^一方名^二出家^一若其剃髮不^下具^二足戒行^一離^中五欲等^上者非^二眞出家^一

（中略）

（崇巖、左を表とす。瑞雲、上に覆い、後に枯樹一株有り。犍陟^{けんちよく}へカンタカを繫ぐ。國王左に向き、手自ら雉髮^{ちほう}へ剃髮す。即ち珍妙御服を脱し、冠瓔珞^{ほうかんようらく}を絶す。前に侍士一人右に向きて跪座涕泣す。後に車匿^{しゃやく}（馭者）二人、左に向きて曲躬號哭す。

此れ乃ち彌陀因時發心出家の相なり。

經に云わく。時に國王有り。佛の説法を聞きて心に悦豫を懷き、尋^{すなわ}ち無上正眞の道意を發^おこし、國を棄て王を捐てて行じて沙門と作る。號して法藏と曰う。

夫れ出家とは、無爲の法の為に二死の家を出るを方^{まさ}に出家と名づく。若し其の剃髮するも戒行を具足し、五欲等を離れざる者は眞の出家に非ず。（中略）

とあるように、瑞雲が覆う崇巖な巖の傍で、貴重な御服を脱ぎ、宝冠や飾り物も取った國王が、自らの手で剃髮をしている。後ろには枯れた樹が一株あり、これまで同道した愛馬カンタカが繋がれている。前には侍士が一人、跪座して涕泣し、後ろには馬引きの二人が身体を曲げて号哭している様相を表した絵相である。

そして、これが弥陀が因時（修行の始め）に發心して出家をした姿を表した絵相であり、『無量寿經』^{（注1）}には、【時に國王有り。佛の説法を聞きて心に悦豫を懷き、尋^{すなわ}ち無上正眞の道意を發^おこし、國を棄て王を捐てて行じて沙門と作る。號して法藏と曰う。】とある。

また、出家というのは、無為法（消滅変化を離れた常住絶対の状態）のために、二死（迷いの世界にさまよう凡夫が受ける分段生死と迷いの世界を離れ輪廻を超えた聖者が受ける変易^{へんにやく}生死の二種の生死（佛教語大辞典より）の家を出ることを言い、もし剃髪しても戒行を具足して五欲等を離れない者は真の出家でないと述べられている。

さらに、御服、宝冠瓔珞、犍陟、車匿については、（『開壇記』巻一 二十八丁裏）

御服字書云天子所止謂^二之御^一前曰^二御前^一書曰^二御書^一服曰^二御服^一皆取^二統御之意^一

宝冠瓔珞皆頭上之飾也

犍陟上音乾下知力反太子所^レ乘朱鬘白馬名也

車匿琳音第十五云車匿悉達太子家人名也

大部補注十四引經音義云
車匿本是守馬奴之名也

今假借成語耳

（御服は、字書に云う。天子の所止を之を御と謂う。前を御前と曰わく。書を御書と曰わく。服を御服と曰わく。皆、統御^{とうぎよ}の意に取る。

宝冠瓔珞は、皆、頭上の飾りなり。

犍陟^{けんちよく}、上は音乾、下は知力。反太子の乗る所の朱鬘^{しゆりよう}白馬の名なり。

車匿^{しゃのく}は琳音第十五に云う。車匿は悉達^{しつたたいし}太子の家人の名なり（大部補注の十四に經を音義に云う。車匿はもと是れ馬を守る奴の名なり。今、假借して語と成るのみ）。

のように、御服のように御を付けるのは統御の意であり、宝冠瓔珞は頭上の飾り、犍陟^{けんちよく}（カンタカ）は悉達太子の乗った朱の鬘^{たてがみ}の白馬の名であり、車匿は太子の家人の名であり、もとをただせば馬守りの奴の名であることが述べられている。

義山は隨天の注釈部分について、次のような解釈（『隨聞講録』卷上之二（浄土宗全書第十四卷二八九頁））をしている。

時所有者自在王出世時也此時法王與^二俗王^一並出^二穢土^一皆爾也

（時有とは、世自在王出世の時なり。此の時、法王、俗王與り並びに穢土を出る。皆、爾りなり。）

國王者未^レ知^二王名^一若依^二覺經^一名^二世饒王^一又依^二大悲分陀利經^一稱^二離諍王^一玄一師云^二龍珍王^一爾未^レ知^二所據^一又劫國名號未^レ檢元祖大師名^二離垢諍王^一亦名^二无諍念王^一一體異號漢語燈卷四紙又准^二大宋觀音大悲論^一說云^二離垢諍王^一要註記八卷七紙未^レ知^二孰是^一

（國王とは、未だ王の名を知らず。若し覺經に依れば世饒王と名づく。また大悲分陀利經に依れば離諍王と稱す。玄一師は龍珍王と云う。爾るに未だ所據を知らず。また劫國名號未だ檢せず。元祖大師は離垢諍王と名づく。また无諍念王と名づく一體の異號なり（漢語燈一卷四紙）。また大宋の觀音大悲論說に准ずるに離垢諍王と云う（要註記八卷七紙）。未だ孰れが是なることを知らず。）

尋發无上等者尋其儘云コトナリ

（尋發无上とは、尋は其儘そのままと云うことなり。）

正眞道意者菩提心也道意以^レ同^二道心^一故爾就^二法藏發心^一淨影此經立^二二重發心^一義寂玄一亦同今三賢滿位發心也下發願初地發心從^下下斯義弘深非我境界與^二其心寂靜志无所著^一兩文^上見^二今此發心三賢滿見也此十向滿四善根位於^二其中^一煥頂忍アタリニテノ發心ナルヘシ法藏發心定多カラン今其中舉^一一說ナルヘシ爾今發心三賢滿凡位時下四十八願發時初地鸞師感師亦此意也但興師意唯存^二地前發心^一不^レ許^二地上^一通途依^二淨影^一經現文分明故又抄主地上一重發心存は一義也委如抄二四十一紙釋^一

（正眞道意とは、菩提心なり。道意は道心に同じを以つての故に、爾るに法藏の發心に就いて淨影は、此の經に二重の發心を立つ（義寂、玄一また同じ）。今は、三賢滿位の發心なり。下の發願は初地の發心なり。下の斯義弘深非我境界と其の心寂靜志无所著との兩文従り今を見るは、此の發心は三賢滿と見ゆるなり。此れ十向滿四善根の位なり。其の中に於いて煥頂忍のあたりにての發心なるべし。

法藏の發心は定んで多からん。今、其の中に一を舉げて説くなるべし。爾れば、今の發心は三賢滿凡位の

時なり。下の四十八願を發す時は、初地なり。

鸞師、感師もまた此の意なり。但し興師の意はただ地前發心を存す。地上を許さず。通途は淨影に依る。經の現文分明なるが故に、また抄主は、地上一重の發心を存す。是れ一義なり。委しくは抄の二に（四十紙）に釋すなり。）

行作沙門者凡沙門以^レ捨^二愛欲^一爲^二其行作^一在^二王宮^一時捨^二妻子眷屬等^一故曰^レ行上以^レ捨^二國王位^一見則此行可^レ妻子等^一

（行作沙門とは、凡そ沙門は、愛欲を捨てるを以つて、其の行作と爲す。王宮に在りし時、妻子眷屬等を捨てしが故に行と曰く。上に國王の位を捨てるを以つて見る。則ち此の行は、妻子等なるべし。）

以上のように、時有とは世自在王出世の時であり、国王とは覺經（佛說無量清淨平等覺經）によれば世^せ鏡王^{きやうおう}、大悲芬陀利經によれば離^り諍王^{じやうおう}、玄一師（新羅の僧で『無量壽經記』を著す）によれば龍珍王と名づけられており、元祖法然は離^り垢諍王^{かうじやうおう}、无^む諍念王^{じやうねんおう}とし、觀音大悲論說によれば離垢諍王と呼ばれ、いずれも訳者により異なるものであること。

さらに、正眞道意とは、菩提心のことであり、淨影によれば三賢滿位（三賢：聖位の十地以前の十住・十行・十回向の菩薩修行階位）の發心であり、煥^{だん}頂^{ちやう}忍^{にん}（煥・頂・忍・世第一法の四段階の小乗求道の過程）であり、四十八願を發した時は初地（十地の第一位）であるということ。

また、行作沙門とは、愛欲を捨て、王宮に在る時に妻子眷屬、王位を離れて修行に入つた沙門のことが述べられている。

そして、法藏という名については、

法藏者玄一云所聞法敎護持不^レ失故名^二法藏^一^{上巳} 梵曰^二曇摩迦^一 大阿彌陀經說^{漢語紙燈} 爾翻名不^レ同覺經云^二法寶藏^一寶積無量壽會云^二法處^一莊嚴經云^二作法^一大論云^二寶積^一又云^二藏^一是則譯者異稱而已

（法藏とは、玄一の云う所聞の法教護持して失せず。故に法藏と名づく（已上）。梵には曇摩迦と曰く。大阿彌陀經の説なり（漢語燈一卷五紙）。爾るに翻名同じからず。

覺經には法寶藏と云う。寶積无量壽會には法處と云う。莊嚴經には作法と云う。大論には寶積と云う。または法藏と云う。是れ則ち譯者の異稱のみ。）

玄一師は法藏、大阿彌陀經には曇摩迦、平等覺經には法寶藏、寶積无量寿会には法處、莊嚴經には作法、大智度論には寶積、法藏と釋されているということである。

参考までに各經論にどのように記されているかみてみると次のようになっている。

經 論 名	「法 藏」 名 の 関 連 箇 所
『佛說無量壽經』 康僧鎧譯 （浄土宗全書第一卷四頁）	爾時次有佛名世自在王如来應供等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊時有國王聞佛法心懷悅豫尋發無上正真道意棄國捐王行作沙門號曰法藏高才勇哲與世超異詣世自在王如来所稽首佛足右繞三匝長跪合掌以頌讚曰 乃爾劫時作佛天上天下人中之雄經道法中勇猛之將佛為諸天及世人民說經講道莫能過者世饒王聞經道歡喜開解便棄國位行作比丘名曇摩迦留發菩薩意為人高才智慧勇猛無能踰者與世絕異到世饒王佛所稽首為禮長跪叉手稱讚佛言（中略） 法寶藏菩薩聞世饒王佛說經如是則大歡喜踊躍其佛則為選擇二百一十億佛國中諸天人民善惡國土之好醜為選心中所願用與之世饒王佛說經竟法寶藏菩薩便壹其心則得天眼徹視悉自見二百一十億諸佛國中諸天人民之善惡國土之好醜則選心所欲願便結得是二十四願經乃爾時世有大國王王聞佛經道心即歡喜開解便棄國捐王行作沙門字曇摩迦作菩薩道為人高才智慧勇猛與世人絕異往到樓夷亘羅佛所前為佛作禮却長跪叉手白佛言我欲求
『佛說無量清淨平等覺經』 支婁迦讖譯 （浄土宗全書第一卷六〇頁）	
『佛說阿彌陀三耶三佛薩樓佛	

<p>檀過度人道經』 支謙譯 (淨土宗全書第一卷一〇 四頁)</p>	<p>佛爲「菩薩道」令「我後作」佛時於「八方上下諸無央數佛中」最尊智慧勇猛頭中光明如「佛光明」所「焰照」無「極所居國土自然七寶極自軟好</p>
<p>『大寶積經』 無量壽如來會 菩提流志譯 (淨土宗全書第一卷一四 四頁)</p>	<p>世主佛世主佛前無邊劫數有佛出世號世間自在王如來應正等覺明行圓滿善逝世間解無上丈夫調御士天人師佛世尊「阿難彼佛法中有「一比丘」名曰「法處」有「殊勝行願」及念「慧力」增上其心堅固不動福智殊勝人相端嚴阿難彼法處比丘往「詣世間自在王如來所」偏袒「左肩」頂「禮佛足」向「佛合掌以「頌讚曰</p>
<p>『佛說大乘無量壽莊嚴經』 法賢譯 (淨土宗全書第一卷一六 六頁)</p>	<p>又彼佛前有「佛出」世名「世自在王如來應正等覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊」而於「法中」有「一苾芻」名曰「作法」信解第一明記第一修行第一精進第一智慧第一大乘第一爾時苾芻離「自本處」來詣「佛前」頭面禮足於「一面」立即以「伽他」嘆「佛面色端嚴」復發「廣大誓願」頌曰</p>
<p>『大智度論』 卷第九 初品 中放光釋論之餘 龍樹造 鳩摩羅什譯 (大正新脩大藏經第二十</p>	<p>是中有「佛名」寶積。以「無漏根力覺道等法寶集」故。名為「寶積」。問曰。若爾者一切佛皆應「號」寶積。何以獨稱「彼佛」為「寶積」。答曰。雖「一切諸佛皆有此寶」。但彼佛即以「此寶」為「名」。如「彌勒名為慈氏」諸佛雖「皆有慈」。但彌勒即以「慈為」名。 復次如「寶華佛」。生時一切身邊有「種種華色光明」故。名「寶華太子」。如「燃燈佛」。生時一切身邊如「燈故」。名「燃燈太子」。作佛亦名「燃燈」。(丹注云舊名「定光佛」也)</p>

『無量壽經記』

玄一集

(新纂大日本續藏經第二十二卷五六頁)

案云前有二種。謂作爲止。作名所行。止名所在。言名曰**法藏**者。此出家名。所聞法教。護持不失。故名**法藏**。俗名龍珍王入山修道時。中臣之二女隨入學道。一名緣波那。二名洗濯河。法藏山南。二女山北。鈔然修行彼時國王成今彌陀。彼祿那今是觀世音是。洗濯河今是大勢至是也。

右のように、隨天、義山が指摘の通り、翻訳者により「法藏」の名が異なっている。

(二)「現諸佛土」

「現諸佛土」の絵相については、(『開壇記』卷一 三十丁裏)

世自在王佛向_レ右座_ニ喜蓮臺_ニ内_ニ手於衣中_ニ有_ニ大圓光_ニ光中現_ニ諸佛土_ニ法藏向_レ左布_ニ座具_ニ長跪合掌

(世自在王佛、右に向きて喜蓮臺に座し、手を衣の中に内れ、大圓光有り。光中に諸佛の土を現ず。法藏、左に向い座具を布き、長跪合掌す。)

のように、世自在王仏が手_ニ衣の中に入れ、宝蓮台に坐し、法藏のために大円光の中に諸々の仏土を現している様相をみせている。

そして、世自在王如来については、

世自在亦名_ニ世饒_ニ憬興云梵云_ニ樓夷亘羅_ニ此云_ニ世自在_ニ於_ニ一切法_ニ得_ニ自在_ニ故饒者即釋_ニ自在_ニ之言玄一云世間利益自在故言_ニ世自在_ニ亦云_ニ世饒_ニ即自在義名_ニ王問世自在王佛報應中何答云云問世饒王佛何故現_レ土答案_ニ今經鈎鎖次第_ニ法藏菩薩位在_ニ地前_ニ於_ニ饒王所_ニ發願已今請_ニ於地上之行_ニ於是饒王爲説爲現等言_ニ爲説_ニ者經云爾時世自在王佛知_ニ其高明志願深廣_ニ即爲_ニ法藏比丘_ニ而説_レ經言_{至乃}即爲廣説_ニ二百一十億諸佛刹土天人之善惡國

土之麤妙」是也言「爲現者應」其心願「悉現與」之是也世饒王佛光中所現如「觀經光臺現土」今圓光中有「二十一土」是乃二百一十億標識也問華嚴經云「八十四百千俱胝那由他佛刹」相違如何答與譯不正不「須」和會」

「無量壽經曼荼羅」「所行」「勝因」の「現諸佛土」の絵相



（世自在は、または世饒と名づく。憬興の云う。梵に樓夷亘羅ろういせんらと云う。此には世自在と云う。一切法に於いて自在を得るが故に。饒とは即ち自在を釋するの言葉なり。

玄一の云う。世間利益自在の故に世自在と言う。また世饒と云う。即ち自在の義を王と名づく。

問う。世自在王佛は報應の中には何ぞや。

答う。云々。

問う。世饒王佛、何が故に土を現ずるや。

答う。今經、鈎鎖次第を案ずるに、法藏菩薩位は地前に在り。饒王の所に於いて發願し已わって、今、地上の行を請う。是に於いて饒王、爲説爲現と。爲説と言うは、經に云う。爾時世自在王佛、其の高明の志願深廣なるを知る。即ち法藏比丘の為に經を説いて言わく（乃至）。即ち廣く説く爲に二百一十億諸佛刹土天人の善惡國土の麤妙を説く、是れなり。爲に現ず言は、其の心願に應じて悉く現じしめ、之を與う是れなり。

世饒王佛光中の所現、觀經光臺現土の如し。

今圓の光中に二十一土有り。是れ乃ち二百一十億の標識なり。

問う。華嚴經に八十四百千俱胝那由他佛刹と云う。相違如何に。

答う與譯不正、須く和會せず。）

ここで特に注目したいのは、世自在王如来の円光に二十一の仏土が描かれていることである。

高田敬輔は、円光内に丁寧に二十一の仏土の宮殿を描いている。これはいうまでもなく、經文にある【二百一十億諸佛妙土】^(注2)の仏土を象徴的に表現するものであり、法藏比丘が高明で、志願が深広であることから、二百一十億の仏土を現じてその良し悪しを説いている場面である。

(三) 「五劫思惟」

「無量壽經曼荼羅」「所行」「勝因」の「五劫思惟」の絵相



「五劫思惟」の絵相について、隨天は、（『開壇記』卷一 三十三丁表）

深山巖窟嵯峨崎嶇法藏比丘偏袒^二右肩^一結跏^二窟內^一歛^二印手衣裏^一思惟發願傳聞南都東大寺境內五劫院有五劫思惟尊像

（深山巖窟、嵯峨崎嶇。法藏比丘、偏に右肩を袒ぎ窟内に結跏し、印手を衣裏に斂め、思惟發願す（傳聞に南都東大寺の境内に五劫院に五劫思惟の尊像有り）。）

と記すように、険しい深山の巖窟の中で、法藏比丘が、偏に右肩を袒ぎ、印手を衣の裏に納め、結跏趺坐して思惟し、發願している様相が描かれている。

そして、何を思惟しているかというところ、

法藏菩薩既瞻^二禮佛土^一證^二得初地^一方今思^二惟於大誓願^一經云其心寂靜志無^二所著^一一切世間無^二能及者^一具^二足五劫^一思惟攝取莊嚴佛國清淨之行莊嚴經云作法苾芻聞^二佛所說八十四百千俱胝那由他佛刹功德莊嚴之事明了通達如^二一佛刹^一即時會中頭面禮^二足拜^一佛而退住^二一靜處^一獨坐思惟修^二習功德^一莊^二嚴佛刹^一發^二大誓願^一經^二於五劫^一（法藏菩薩、既に佛土を瞻禮し、初地を證得し、方に、今、大誓願を思惟す。

經に云う。其の心、寂靜にして、志、所著無く、一切世間に能く及ぶ者無し。五劫を具足して、莊嚴佛國清淨の行を思惟し攝取す。

莊嚴經に云う。作法苾芻、佛の所說、八十四百千俱胝那由他の佛刹の功德莊嚴の事を聞きて明了に通達すること一佛刹の如し。即時に會中にして頭面に足を禮し、佛を拜して退きて一靜處に住し、獨坐思惟し、功德を修習し、佛刹を莊嚴し、大誓願を發こし五劫を経る。）

右のように、法藏菩薩はすでに仏土を仰ぎみて礼拝し、菩薩道の十地の第一位の初地に達し、まさに、今、大誓願を思惟しているのである。『無量寿經』^(注3)に説くように、【その心は寂靜し、志は無心でとらわれることなく、一切世間に及ぶ者も無いほどである。こうして五劫の長い時を思惟し、莊嚴佛國清淨の行を攝取した】のであると述べられている。

また莊嚴經^(注4)には、作法苾芻（比丘）が、仏の所説である八十四百千俱胝那由他の仏刹の功德莊嚴の事を聞き、明確に一仏国土を即時に摂取し、頭面足礼して退席した。そして、静寂な処で五劫の長い時をかけて独坐思惟し、仏国土を莊嚴してその功德を修習して大誓願を起こしたと説かれている。

さらに、深山とは、

深山等者天台小止觀修禪明^一三處^一一者深山絶^レ人之處二者頭陀蘭若之處離^二于聚落^一極近三四里此則放牧聲絶無^二諸憤鬧^一三者遠^二白衣住處^一清淨伽藍中今當^二第一^一

（深山とは、天台の小止觀に修禪に三處を明かす。一には、深山人を絶するの處。二には、頭陀蘭若の處、聚落を離れて極めて近きは三四里、此れ則ち放牧の聲、絶して諸々の憤^{かい}鬧^{にやう}無し。三には、白衣住處遠く清淨伽藍の中と、今は當に第一とすべし。）

五劫思惟の場である深山は、近くても三・四里、人里から離れ、放牧の動物の鳴き声や諸々の煩惱を起こす悪しきものも無く、衣類が乾される人家も無く、極めて清淨な修行に相應しい第一の場所であると述べられている。そして、結跏については、

結跏亦名^二全跏^一觀念法門云左足安^二右脛上^一與^レ外齊^{是名降魔坐}右足安^二左脛上^一與^レ外齊^{是名吉祥坐}定善義云右足著^二左上^一與^レ外齊^{是名降魔坐}左上^二與^レ外齊^{是名吉祥坐}（以下省略）

（結跏または全跏と名づく。觀念法門に云う。左の足を右の脛の上に安じ、外にして齊^{ひとし}くし、右の足を左の脛の上に安じ、外に與して齊くす。へ是れ吉祥坐と名づく）

定善義に云う。右の足を左の脛の上に著し、外に與して齊くし、左の足を右の脛の上に安じ、外に與して齊くす。へ是れ降魔坐と名づく（以下省略）

このように、左の足を右の腿の上にのせ、右の足は左の腿の上にのせる、いわゆる結跏趺坐をしてまさに五劫思惟したことが窺われるのである。

(四) 「成滿大願」

「無量壽經曼荼羅」「所行」「勝因」の「成滿大願」の絵相



「成滿大願」の絵相については、『開壇記』卷一 三十五丁表)

世自在王佛現「圓光」向「右坐」蓮華臺「收」手於衣中「法藏薩埵當」前敷「尼師壇」長跪合掌佛右三聲聞八部衆四皆立三聲聞向「左印隱乾闥婆阿修羅印隱迦樓羅擊那羅合掌佛左一菩薩六聲聞轉輪聖王刹利國王八部衆四俱立菩薩正面合掌聲聞其一正面拱手其二向「右合掌其三正面合掌其四五六向」右合掌轉輪聖王正面合掌刹利國王向「右合掌天向」右龍向「左夜叉正面三皆合掌摩睺羅伽向」右拱手空中雲氣藹藹二蓮從「天而雨二天自」空而降右天向「左兩手執」蓮左天向「右左手持」蓮法螺琵琶羯鼓與琴空中飄揚

(世自在王佛、圓光を現じ、右に向き、蓮華臺に坐す。手を衣の中に収む。

法藏薩埵、前に當つて尼師壇を敷き、長跪合掌す。佛の右に三聲聞、八部衆の四とありて、皆、立つ。三聲聞は左に向き、印、隠る。乾闥婆と阿修羅と、印、隠る。迦樓羅と擊那羅とは合掌す。

佛の左に一菩薩と六聲聞と轉輪聖王と刹利國王と八部衆の四とあり。俱に立つ。菩薩は正面合掌し、聲聞の其の一は正面拱手す。其の二は右に向き、合掌す。其の三は正面合掌。其の四、五、六は右に向き、合掌。轉輪聖王は正面合掌。刹利國王は右に向き、合掌。天は右に向き、龍は左に向き、夜叉は正面、三、皆、合掌。摩睺羅伽は右に向き、拱手。

空中に雲氣藹藹たり。二蓮、天従り雨り、二天、空より降る。右天は左に向き、手に蓮を執る。左天は右に向き、左手に蓮を持す。法螺と琵琶と羯鼓と琴と空中に飄揚す。)

とあるように、法藏菩薩が、世自在王の前に尼師壇を敷き、長跪合掌して四十八願の大願の誓いを立て、さらに四誓偈の頌を説いたのである。その周りには諸天や魔(欲界の第六天の魔王)・梵(三千大千世界を支配する色界の梵天)・龍神(八部衆の一つ、八大龍王)・八部衆(天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・擊那羅・摩睺羅伽)や轉輪聖王や刹利國王・菩薩・聲聞等が侍し、聴聞している。

辺りには雲氣が湧き上がり、空からは二本の蓮華が降り、二天が舞い、法螺、琵琶、羯鼓、琴等の楽器がまる

で音楽を奏でるように、空に漂っている様子を描いた絵相である。

そして、さらに標文にある「成満大願」、「六種震動天雨妙華」、「法藏比丘具足修満如是大願」、「於其佛所諸天魔梵龍神八部大衆中發斯弘誓」について具体的に述べられるのである。

まず、「成満大願」については、

法藏大士五劫思^二惟攝^三取莊嚴佛國清淨之行^一已詣^二彼佛前^一陳^二其所願^一立誓請證是乃成満大願之時也經云如^レ是修已詣^二彼佛所^一稽首禮^レ足繞^レ佛三匝合掌而住白^レ佛言世尊我已攝^二取莊嚴佛土清淨之行等問誓願何別答願謂希求誓謂敷制賢首云隨^レ心求^レ義爲^レ願要契至誠爲^レ誓今六八所願爲願立誓清證爲誓也空中好相者現瑞清誠也

（法藏大士、五劫に莊嚴佛國清淨の行を思惟し攝取し已って、彼の佛前に詣でて其の所願を陳べ立誓請證す。是れ乃ち成満大願の時なり。

經に云う。是の如く修し已って彼の佛所に詣り、稽首して足を禮し、佛を繞り、三匝、合掌して住^{とじま}り、佛に白して言さく。世尊、我、已に莊嚴佛土清淨の行を攝取すると。

問う。誓と願と何の別ぞ。

答う。願は謂う、希求なり。誓は謂う敷制なり。

賢首の云う。心に隨い義を求むを願とす。要契至誠なるを誓とす。今、六八の所願を願とす。立誓清證を誓とすなり。

空中好相とは、現瑞清誠なり。）

法藏比丘が五劫もの永い間思惟し、莊嚴仏國清淨の行を攝取し終わって、世自在王にその大願を述べ、弘誓したのが、成満大願である。

その様子は、經文にあるように、【世自在王の前に詣で、拝礼して御足を頂き、三たび巡って合掌し、仏に申して言うに、『世尊、我、すでに莊嚴仏土の清淨の行を攝取す』^(注5)】というのであると述べられている。

そして、

成滿大願法藏菩薩既於「佛所」約誓清證故有「現瑞」於「是菩薩滿」足誓願「此云」成滿大願「經云法藏比丘具」足修滿如「是大願」問上經文云汝今可「說宜」知是時發「起悅」可「一切大衆」菩薩聞已修「行此法」緣致「滿」足無量大願「是何意耶答依」憬興意「饒王勸說也發起悅可一切大衆爲」益「凡夫二乘故說菩薩聞下爲」益「菩薩」故說了慧云故佛勸催一一令「說以益」五乘「說雖」在「今」聞傳「來際」故須「說」之私謂五乘齊入由漸蓋在「于茲」矣

（成滿大願は、法藏菩薩すでに佛所に於いて約誓清證す。故に現瑞有り。是れに於いて、菩薩、誓願を満足す。此れを成滿大願と云う。）

經に云う。法藏比丘、是の如く大願を具足し修滿す。

問う。上の經文に云う。汝、今、説く可し。宜しく知るべし。是の時なり。一切の大衆を發起し、悦えつ可かせしめよ。菩薩、聞き已らば、此の法を修行し、緣よりて無量の大願を満足することを致さん。是れ何の意ぞや。

答う。憬興の意に依るに、繞王の勸説なり。發起悦可一切大衆は、凡夫二乗を益せんが爲の故に説かれしめ、菩薩聞くの下は、菩薩を益せんが爲の故に説きしむ。了慧の云う。故に、佛、勸催して一一に説かため、以つて五乗を益す。説は今に在りと雖も聞くは來際に傳う。故に之れを須く説くべし。

私に謂う。五乘齊入の由、漸く蓋し茲に在り。）

とあるように、法藏菩薩が世自在王の御前で約誓清證したことにより、奇瑞の相が現れたのは誓願が満たされたことであるので、これを成滿大願というのである。

經文に、【法藏比丘、是の如く大願を具足し修滿す】^(注6)とある通りである。

さらに、經文に、【汝、今、選り取ったものを説くべきである。今まさにその時であると知るがいい。すべての人びとにこれを聞かせ、浄土願生の心を起こすように悦びを与えよ。また、菩薩等は汝の誓願を聞いたならば、

その教えのままに修行し、そのことによって、汝と同じような大願を数限りなく成就することになるだろう】
とある。これは、憬興がいうには、饒王（世自在王）の勸説（説き勧めること）であり、凡夫や二乗（声聞乗・縁覚乗）や菩薩等に利益を与えるためである。また、了慧は、仏が勧催して一つ一つ説き、五乗（人乗・天乗・声聞乗・縁覚乗・菩薩乗）を利益するためであると説いている。また、私、隨天も五乗齊入（人・天・声聞・縁覚・菩薩の五種の機根をもつ者が、みな極樂に生まれること）の由がここにあると記している。

さらに、「六種震動天雨妙華」については、

六種等者經具文云六種震動天雨^二妙華^一以散^二其上^一自然音樂空中讚言決^二定必^三定無上正覺^一

（六種とは、經の具文に云う。六種震動、天より妙華を雨らす。以って其の上に散らし、自然の音樂ありて空中に讚じて言わく。無上正覺を決定必定す。）

現瑞證誠中二初現瑞應請二發聲嘆記初中亦二初六種震動地神應請二天雨妙華天人應請^{圖但舉天人應請標具舉二}二發聲嘆記^{有標}故了慧云空中讚聲何物聲耶爲^二佛聲^一爲^二是樂音^一故舉^二樂音^一顯^二能讚體^一又嘉祥云地動表^二皆行因^一雨華表^二必得果^一自然音樂表^二妙樂土^一

（現瑞證誠の中に二つ。初めに現瑞應請。二に發聲嘆記。初の中にまた二。初めは六種震動地神の應請。二に天雨妙華は天人の應請（圖は但し天人應請を挙げ、標は具に二を挙げる。））

二に發聲嘆記（畫有りて標無し）。故に了慧の云う。空中の讚聲は何物の聲なるや。佛聲とや爲さん。是れ樂音とや爲さん。故に樂音を舉げて能讚の體を顯す。また嘉祥の云う。地動は皆、行因を表す。雨華は必得果を表す。自然音樂は妙樂土を表す。）

と經文にあるように、【六種震動（動・起・涌・覺・震・吼の仏が説法する時の瑞相）し、天から妙華が雨のように降り、空中には自然の樂音のように讚ずる声が流れ、まさに無上正覺（無上の完全なさと）が必然的に定まったようで疑いがない】というのである。

（注7）

その現瑞証誠には二つあり、

六種震動：地神の応請

現瑞応請

天雨妙華：天人の応請（この無量寿経曼荼羅には天人の應請が描かれている）

発声嘆記（この無量寿経曼荼羅には画があるが標文はない）

また、空中の讃声は何物の声かというところ、仏の声で、楽音として讃えているのである。

吉祥は、地動は、皆、修行によって起こるものであり、雨華は修行によって得た果であり、自然の音楽は浄土の樂を現すものであると説いているというのである。

さらに、「法藏比丘具足修滿如是大願」については、

具足修滿等當^二上六八願及四誓等^一此是總結誓願文也

（具足修滿とは、上の六八願及び四誓等に當る。此れは是れ總結誓願の文なり。）

四十八願の大願と四誓偈を修滿したことを表し、これは總結誓願の文であるということ。

そして、「於其佛所於其佛所諸天魔梵龍神八部大衆中發斯弘誓」は、

於其佛所等者緣山三藏其字作^レ彼雖^三此文在^二勝行段^一以^二牒前文^一故今標^二示於此^一諸天魔梵龍神舉^二八部中初二^一略^二餘六^一也有云諸天魔梵龍者八部衆中初二神謂八部中後六

（於其佛所とは、緣山三藏に其の字を彼に作る。此の文は勝行段に在ると雖も牒前文なるを以つての故に、今ここに標示す。

諸天魔梵と龍神とは、八部中の初の二を擧げて餘の六を略すなり。有るが云う。諸天魔梵と龍とは、八部衆の中の初めの二なり。神は謂わく、八部の中の後の六と。）

「於其佛所」の「其」は緣山の三藏の經典には「於被佛所」とあり、本来この文は勝行段にあるべきであるが牒

前文（後の得益の相を前もって書き表した）であることから、今ここに標示しているということである。
また、諸天魔梵と龍は、八部衆のことをいうのだと記されている。

第二項 「所行」の「勝行」

（一）「積功累徳」

「無量寿経曼荼羅」の「勝果」の「積功累徳」の絵相



「積功累徳」の上段の「自行六波羅蜜教人令行」の絵相について、隨天は、(『開壇記』卷一 三十九丁表)

法藏菩薩展_二尼師壇_一向_レ右半跏趺坐舉_二右手_一内_レ掌仰_二左掌_一安_二膝上_一前有_二四衆_一皆向_レ左合掌二比丘二優婆塞長跪一比丘尼一優婆夷互跪

(法藏菩薩、尼師壇を展べ、右に向かい半跏趺坐して右の手を舉げ、掌を内にし左掌を仰むけ膝上に安ず。前に四衆有り。皆、左に向きて合掌す。二比丘と二優婆塞と長跪す。一比丘尼と一優婆夷とは互跪す。)と、四衆(比丘：男の出家者、比丘尼：女の出家者、優婆塞：男の在家信者、優婆夷：女の在家信者)の前に尼師壇を展べ、その上に半跏趺坐し、自らが菩薩の六波羅の修行をなし得たことを、他の人にも行ずるように勧めている様子が描かれていると記している。

そして、さらに、

經云於_二不可思議兆載永劫_一積_二植菩薩無量徳行_一至_乃無央數劫積_レ功累_レ徳此乃法藏初地發願後經_二無數劫_一積功累徳法藏能化四輩所化也此勝行中准_二經文_一者積功累徳在_レ前而遠供養諸佛在後而近前_レ遠後_レ近後素法爾四衆希麟音云比丘梵語不_レ正應_レ言_二苾芻_一此言_二怖魔_一一乞士二淨命三淨階四破惡五也具_二此五義_一故存_二梵語_一不_レ譯也比丘尼五義如_レ前尼即女聲優婆塞古梵語也正云_二鄒波索迦_一鄒波此云_レ近迦此云_レ事索是男聲即近事男也謂受_二五戒_一親_二近承_一事於三審_一者也優婆夷正云_二鄒波斯迦_一鄒波迦_一如_二前釋_一斯是女聲

(經に云う。不可思議兆載永劫に於いて、菩薩無量の徳行を積植し(乃至)無央數劫に功を積み徳を累す。此れ乃ち法藏初地發願の後、無數劫を経て積功累徳す。法藏は能化、四輩は所化なり。

此の勝行の中、經文に准ぜば、積功累徳は前に在りて遠く、供養諸佛は後に在りて近し。遠を前にし、近を後にするは後素の法、爾り。四衆は希麟の音に云う。比丘は梵語、正しからず。應に苾芻(びっしゅ)と言うべし。此には怖魔と言う、一なり。乞士は二なり。淨命は三なり。淨戒は四なり。破惡は五なり。此の五義を具するが故に梵語を存じて譯せざるなり。比丘尼の五義、前の如し。尼は即ち女聲。優婆塞は古の梵語なり。

正しくは鄒波索迦と云う。鄒波、此には近と云う。迦、此には事と云う。索は是れ男聲、即ち近事男なり。謂わく五戒を受け、三害に親近し、承事し者なり。優婆夷、正しくは鄒波斯迦と云う。鄒波迦は前に釋するが如し。斯は是れ女聲。）

その修行は、不可思議兆載永劫という計り知れない程の永い年月にわたってなされ、数限りない功を積み、徳を累かさねたということが記されている。

そして、法藏は教えを説く能化であり、四輩は教えを乞う所化であること。また、比丘、優婆塞、優婆夷は梵語であるので正しくは苾芻びしゆ、鄒波索迦、鄒波斯迦と言う方が良いとも述べられている。

さらに、標文にある「積功累徳」と「自行六波羅蜜教人令行」については、

積功累徳淨影云功謂功能善有二資潤福利之功一故名爲レ功此功是其善行家徳名云二功德一

（積功累徳は、淨影の云う。功は謂く功能。善く資潤福利の功有り。故に名づけて功とす。此の功は、是れ其の善行が家の徳なるを名づけて功德と云う。）

自行等者自利利他如レ文萬行雖レ多皆攝二六度一六度所謂壇戒忍進禪慧波羅蜜者依二次第禪門一有二三翻一一者諸經論中多翻二到彼岸一二者大論中別翻爲二事究竟一三者瑞應經中翻云二度無極一

鈔略

（自行とは、自利利他、文の如し。萬行多しと雖も、皆、六度に攝す。六度は所謂、壇、戒、忍、進、禪、慧なり。波羅蜜とは、次第禪門に依るに三翻有り。一には諸經論の中に多く到彼岸と翻す。二には、大論の中に別して翻して事究竟とす。三には、瑞應經の中に翻して度無極と云う（略鈔）。）

と、自行は自利利他の修行であり、様々な行が多くあるといっても、窮極の修行は六度である。その六度とは、菩薩の六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・智慧）のことであり、波羅蜜（到彼岸、事究竟、度無極：彼岸に至ること）に至ることであると注釈を加えている。

(二) 「供養諸佛」

さらに「自行六波羅蜜教人令行」の絵相の下、「供養諸佛」の絵相について、(『開壇記』卷一 四十丁表)

道樹二株枝葉蓊茂一佛現光儼坐_二審臺_一印手斂衣裏右二聲聞拱手而立其一正面其二向左左二菩薩皆現圓光向_レ右合掌而立下雲氣雜起有_二三類九種_一一人類此有_二四種_一長者居士豪姓尊貴此中長者夫一向_レ右長跪合掌長者婦一向_レ右互跪拱手一居士向_レ左長跪合掌一豪姓向_レ右長跪持_二香爐_一一尊貴向_レ右兩手持_二蓮華_一二國王類此有_二二種_一刹利國君轉輪聖帝此中刹利向_レ左持_二笏_一而行侍士二人印隱不見輪王持_二笏_一向左而行侍士二人皆向_レ左行一持_二團扇_一一執_二香爐_一三天類此有_二二種_一六欲天王大梵天王此中帝釋持_二笏_一向_レ右而行侍天四人俱向_レ右行一天在_レ前持_二服_一進行三天在_レ後一持_二審蓋_一一持_二團扇_一一持_二湯器_一梵王持_二笏_一向_レ右而行侍天六人共向_レ右行一在_レ前持_二餉_一先行五天在_レ後二天持_二幡_一一天持_二蓋_一一天執_二繪_一一天拱手

(道樹二株、枝葉蓊茂せり。一佛、光を現じ、審臺に儼坐す。印手、衣裏に斂す。右に二聲聞あり。拱手して立つ。其の一は正面。其の二は左に向き、左に二菩薩あり。皆、圓光を現ず。右に向き合掌して立つ。下に、雲氣、雜起す。

三類九種有り。

一に人の類、此に四種有り。長者と居士と豪姓と尊貴となり。此の中に長者の夫、一は右に向き長跪合掌す。長者の婦、一は右に向き、互跪拱手す。一居士は左に向き、長跪合掌す。一豪姓は右に向き、長跪して香爐を持す。一尊貴は右に向き、兩手に蓮華を持す。

二に國王の類、此に二種有り。刹利國君と轉輪聖帝となり。此の中、刹利は左を向き、笏を持して行く。侍士二人、印隱れて見えず。輪王は笏を持し、左に向きて行く。侍士二人、皆、左に向かしめ行く。一は團扇を持し、一は香爐を執る。三に天の類、此に二種有り。六欲天王と大梵天王と。此の中、帝釋は笏を持し右に向かしめ、行く。

侍天四人、俱に右に向かい行く。一天は前に在り。服を持し進み行く。三天は後に在り。一は蓋を持し、一は團扇を持し、一は湯器を持す。

梵王は笏を持し、右に向しめ行く。侍天六人共に右に向き行く。一は前に在りて餉を持し、先に行く。五天は後に在り。二天は幡を持し、一天は蓋を持し、一天は繒を執り、一天は拱手す。

とあるように、枝葉がよく繁った道樹が二株ある前に仏が宝台に坐し、諸佛を供養している姿を表している。雲気が沸き立つ佛の脇には、二菩薩、二聲聞が侍している絵相である。

そして、三類九種【注…随天は三類九種とあるが、義山は三類八種^(注8)】の、

一、人の類……四種（長者〈富裕者〉・居士〈在家信者〉・豪姓〈婆羅門〉・尊貴〈宰相〉）

二、国王の類……二種（刹利國君〈国王〉・轉輪聖帝〈四洲の王〉）

三、天の類……二種（六欲天王〈欲界六天の王〉・大梵天王〈色界の梵天王〉）

等のあらゆる世界に、仮に生まれて主導者となつて、無量の衆生を教化し、無上正眞の悟りの世界へ導いたことを表現した絵相が描かれている。

さらに、

薩埵法藏無央數劫積功累德又供養諸佛經云常以四事供養恭敬一切諸佛如是功德不可稱說今圖所示有能所供一佛是所供也經既云一切諸佛可知不局一佛聲聞菩薩亦是所供彼佛補佐故三類九種能供也經云或爲長者居士豪姓尊貴或爲刹利國君轉輪聖帝或爲六欲天主乃至梵王雖能供正在勝果段菩薩願行齊感勝果所謂勝果唯是華報行果互通是故舉此

（薩埵法藏、無央數劫に積功累德し、また諸佛を供養す。

經に云わく。常に四事を以つて一切諸佛を供養し、恭敬す。是の如くの功德、稱説すべからず。今圖に示す所は、能所供に有り。

一佛は是れ所供なり。經に既に云う。一切諸佛と知るべし。一佛に局らざるなり。聲聞、菩薩もまた是れ所供なり。彼の佛の補佐なるが故に。

三類九種は能供なり。

經に云う。或は長者居士豪姓尊貴となり。或は刹利國君、轉輪聖帝となり。或は六欲天主ないし梵王となさしむ。

能供は正しく勝果段に在りと雖も、菩薩の願行、齊しく勝果を感ず。所謂、勝果はただ是れ華報なり。行果、互いに通ず。是の故に此に擧ぐ。）

にあるように、法藏菩薩は計り知れない長い時間、功を積み、徳をかさね、常に四事（飲食・衣服・臥具・医薬）をもつて、一切の諸仏を供養し、恭敬したのである。このような修行によつて積まれた功德は言葉で言い表せないほどのものであるというのである。

今、この曼荼羅に描かれたものは、能所供を表しているもので、仏は所供（拠りどころ）、その仏を補佐する聲聞、菩薩も所供であり一切諸仏である。また、三類九種の長者・居士・豪姓・尊貴・刹利國君・轉輪聖帝・六欲天主・梵王は、能供（依存するもの）であるということである。

このように法藏菩薩は、数え切れないほどの永い年月、六波羅蜜の修行を積み重ね、自らが願う心によつて無量の宝蔵を出し、その生まれるところのいたる場所において、無数の衆生を教化し、安立し、無上正眞の道に導いたのである。

そして、そのような願いを持ちながら浄土の建立を目指し、時には、長者・居士・豪姓・尊貴になり、ある時は、刹利國君・轉輪聖帝となり、また、六欲天主や梵王に生まれかわっても、常に四事をもつて一切の諸仏を供養し、恭敬したのである。このような功德は言葉で言い表すことの出来ない広大な功德であることが説かれている場面を描いた絵相であるといえるのである。

第三項 「所行」の「勝果」

(一) 「妙土莊嚴」

「無量寿経曼荼羅」の「所行」の「勝果」、「妙土莊嚴」「供具如意」の絵相



「無量寿經曼荼羅」の「所行」の「勝果」、「妙土莊嚴」の絵相について、隨天は、（『開壇記』卷一 四十四丁表）

法藏薩埵結跏趺坐合掌而住身相光明照_二曜十方_一

（法藏薩埵、結跏趺坐し、合掌して住す。身相光明にして十方を照曜す。）

法藏菩薩が結跏趺坐して合掌し、その身相は、光明が十方に光り輝いている様相の絵相である。その様相について、

上來一向專志莊嚴妙土願行已滿道場之果豈爲_レ賒耶今既分滿是云_二妙土莊嚴_一經云於_二一切法_一而得_二自在_一淨影憬興同以_二此文_一爲_二智德果_一内證朗則外用自在智圓滿故身相亦爾憬興科_二正報勝_一也又莊嚴經云作法苾芻行_二菩薩行_一時身相端嚴三十二相八十種好悉皆具足復以_二一切珍寔_一莊嚴

（上來、一向專志、莊嚴妙土の願行を已滿す。道場の果、豈に_{あに}賒_{おご}るなりと。

今、既に分滿なり。是れを妙土莊嚴と云う。

經に云う。一切の法に於いて、自在を得たり。

淨影、憬興、同じく此の文を以って智德の果と爲さん。内證朗らかなれば、則ち外用自在なり。智圓滿の故に身相もまた爾り。憬興、正報勝と科すなり。

また莊嚴經に云う。作法苾芻、菩薩行を行じたまう時、身相端嚴にして、三十二相八十種好悉く、皆、具足せり。復た一切の珍寔を以って莊嚴せり。）

とあるように、志を立て一向に專念して妙土を莊嚴する願行を満たしおわり、その道場の果がどうして無いことがあるのか。いや、今はすでに満ち足りているのである。このことを妙土莊嚴というのである。

經文にいうように、【一切の法を自由自在にする智恵も得られた】_(注9)のである。

淨影や憬興も同じようにこの文言から智德の果を得たとしている。つまり、内証_{ないしょう}（心の中に真理を悟る）が

明らかになれば、外用（外に現れた働き）も自在なのである。智慧が円満であるから、それが身相に現れるのである。憬興は正報勝と説いている。

また莊嚴經^(注10)には、作法苾芻が菩薩の行を行じた時に、色相端嚴にして三十二相八十種好（仏の身体に具える三十二の瑞相と八十種の優れた吉相）を具足して、全ての珍宝で浄土を莊嚴したということが記されている。

さらに、標文の「妙土莊嚴」「身諸毛孔出栴檀香」について、

莊嚴大論二十九云莊嚴物有^二内外^一禪定智慧諸功德等者是内莊嚴身相威儀持戒具足是外莊嚴身諸等者今略舉也
具文云口氣香潔如^二優鉢羅華^一身諸毛孔出^二栴檀香^一其香普薰^二十方世界^一栴檀玄應音二十四云栴檀那或作^二栴檀那^一外國香木也有赤白紫等諸種東春云赤謂牛頭栴檀黑是紫檀之類白是白檀

（莊嚴は、大論二十九に云う。莊嚴とは、物に内外有り。禪定、智慧、諸功德とは、是れ内の莊嚴なり。身相、威儀、持戒、具足は、是れ外の莊嚴なり。

身諸とは、今、略なり。具文に云う。口氣香潔にして優鉢羅華の如し。身の諸もろの毛孔より栴檀香を出す。其の香、普く十方世界に薰ず。

栴檀は玄應音二十四に云う。栴檀那或るは栴檀那に作す外國の香木なり。赤白紫等の諸種有り。東春に云う。赤は謂わく牛頭栴檀。黒は是れ紫檀の類。白は是れ白檀なり。）

莊嚴は、大智度論には内と外にあるという。禪定、智慧、諸功德は内面の莊嚴で、身相、威儀、持戒、具足は、外面の莊嚴であるという。

また、具文にあるように、その口氣は香潔で優鉢羅華（青蓮華）のようで、全身の諸々の化孔からは香しい栴檀（外国の香木で、赤色は牛頭栴檀、黒色は紫檀、白色は白檀）のような香を発し、遍く十方世界に薰じられるということである。

(二) 「供具如意」

そして、「供具如意」については、(『開壇記』卷一 四十四丁裏)

菩薩手中出_二於供具_一 右飲食幢幡及繪左妙華衣服及蓋

(菩薩、手中より供具を出す。右は、飲食、幢幡及び繪、左は妙華、衣服及び蓋。)

法藏菩薩が、手中から、右には、飲食、幢幡及び繪。左には妙華、衣服及び蓋の供具をそれぞれ出している絵相である。

畫_二六種_一者唯是一住實通_二依報一切資具_一是故害積經云得_二諸資具自在波羅蜜多_一一切服用周徧無_レ乏所_レ謂諸害香華幢幡繪蓋上妙衣服飲食湯藥及諸伏藏珍玩所須皆從_二菩薩掌中_一自然流出身諸毛孔流_二出一切人天音樂_一憬興科云_二依報勝_一

(六種を畫くは、ただ是れ一住なり。實には依報一切の資具に通ず。是の故に害積經に云う。諸々の資具、自在に波羅蜜多を得、一切の服用、周徧して乏しいこと無し。謂う所は、諸々の害、香、華、幢、幡、繪、蓋。上の妙の衣服、飲食、湯藥及び諸々の伏藏珍玩須_{もと}める所、皆、菩薩の掌中従り自然に流出す。

身の諸々の毛孔より一切人天の音楽を出す。憬興、科して依報勝と云う。)

その六種の供具が描かれているのはごく一部に過ぎず、実際はこの世のもの全てについて、豊富に、しかも自在に流れるように繰り出されるのである。例えば、宝、香、華、幢、幡、繪、蓋や豪華な衣服、飲食、湯藥等、様々な貴重な宝物や愛玩物が法藏菩薩の手中から自然に湧き出るのである。

さらに、「其手常出無盡之害衣服飲食珍妙華香繪蓋幢幡莊嚴之具」の標文については、

其手等者例如_二害手菩薩等_一維摩經云以_二施報_一故手出_二無盡害物_一如_二五河流_一了慧云准_二上四事供養之文_一應言_二供養一切諸佛_一文無略也故淨影云手出_二供具_一供_二養三害_一義寂云施_二諸有情_一供_二養三害_一繪蓋緣山三藏竝作_二諸蓋_一(其の手とは、例せば、害手菩薩等の如し。維摩經に云う。施報を以つての故に手より無盡の害物を出す。

五河の流の如し。

了慧の云う。上の四事供養の文に准じて、應に供養一切諸佛と言うべし。文に無きは略なり。故に淨影の云う。手、供具を出ししめ、三寔を供養す。義寂の云う。諸々の有情に施し、三寔に供養すと。

繪蓋は緣山三藏に並びに諸蓋に作す。

その手というのは、例えば宝手菩薩のようなもので、維摩經にいうように施すものであることから、五つの河の流れのように尽きない程の宝物を出すのである。了慧、淨影、義寂も、それぞれ一切諸仏や三宝を四事供養することによつて具わつたものであると説いているということがわかるのである。

第四項 小結

この第二節は、「所行」の絵相として、「勝因」が「出家修道」、「現諸仏土」、「五劫思惟」、「成滿大願」の四場面、「勝行」が「積功累徳」と「供養諸仏」を一場面に、「勝果」は「妙土莊嚴」と「供具如意」を一場面の計六場面の絵相として、構成されている。これらの絵相から次のような事を知ることができる。

- ① 「出家修道」の絵相は、侍士、車匿、愛馬犍陟が嘆き悲しむ中、宝冠瓔珞、珍妙御服を断ち、剃髪して法蔵比丘となる様相を表し、出家の決意がありありと表現されている。
- ② 「現諸仏土」の絵相は、世自在王の大円光の中に、二百一十億の諸佛妙土を象徴する二十一の仏土の宮殿が描かれ、その中の極めて大きい宮殿が西方極樂浄土を連想させる。
- ③ 「五劫思惟」の絵相は、人里遠く離れた深山の洞窟の中で、偏袒右肩の痩せ瘦けた法蔵比丘が、五劫もの永い間、思惟している様相が見られる。
- ④ 「成滿大願」の絵相は、諸天魔梵八部大衆の聴聞する中、世自在王に四十八願とさらに四誓偈を約誓清証

し、莊嚴仏国清浄の行を撰取したことを告げている場面で、天から瑞相が現れ、修満したことが見て取れる絵相である。

⑤ 「積功累徳」の絵相は、四種・国王・天の三類八種のあらゆる世界に生まれ変わり、数限りない人々を教化して無上正真の道に導き、さらに、常に四事をもってあらゆる仏を供養し恭敬したことにより、計り知れない程の功德を積み重ねたことを象徴している。

⑥ 「妙土莊嚴」の絵相は、莊嚴妙土の願行を已満し、一切法を身に着け、内外の莊嚴のために、供具を如意のままに、身諸毛孔や手中から繰り出す法蔵菩薩の様相が描かれる。

(注4) (注3) (注2) (注1)

『無量寿經』(浄土宗全書第一卷四頁)

『無量寿經』(浄土宗全書第一卷六頁)

『無量寿經』(浄土宗全書第一卷六頁)

『佛説大乘無量壽莊嚴經』法賢譯(浄土宗全書第一卷一六七頁)

作法苾芻聞佛所説八十四百千俱胝那由他佛刹功德莊嚴之事。明了通達如二佛刹即時會中頭面禮足辭佛而退往三静處獨座思惟修習功德莊嚴佛刹發大誓願經於五劫

(作法苾芻、佛の所説八十四百千俱胝那由他の佛刹の功德莊嚴の事を聞き、明了に通達すること一佛刹の如し。即時に會中にして頭面に禮足し、佛を辭して而して退き、一静處に往く。獨座思惟して功德を修習し、佛刹を莊嚴す。大誓願を發して五劫を経う。)

『無量寿經』(浄土宗全書第一卷六頁)

『無量寿經』(浄土宗全書第一卷十一頁)

『無量寿經』(浄土宗全書第一卷六頁)

義山の三類八種『無量壽經隨聞講録』卷上之四浄土宗全書第十四卷三六三頁

『無量寿經』(浄土宗全書第一卷十二頁)

『佛説大乘無量壽莊嚴經』法賢譯(浄土宗全書第一卷一七三頁)

復次阿難作法苾芻行菩薩行時色相瑞嚴三十二相八十種好悉皆具足復以一切珍寶莊嚴

(復次に、阿難、作法苾芻菩薩の行を行じたまう時、色相瑞嚴にして三十二相八十種好悉く皆、具足せり。復、一切の珍寶を以って莊嚴せり。)

(注10)(注9)(注8)(注7)(注6)(注5)

第三節 「述所説彌陀行成攝三段」の「所成」について

第一項 「所成」の「勝報」

「無量寿経曼荼羅」の「所成」の「勝報」のいわゆる中台部分に、曼荼羅の中核となる極楽浄土の様相が描かれる。

その極楽浄土について、「無量寿経曼荼羅」以前の浄土曼荼羅として、日本三大浄土曼荼羅の「當麻曼荼羅」「智光曼荼羅」「清海曼荼羅」が挙げられるが、隨天の『大経曼荼羅開壇記』の極楽浄土の注釈に「當麻の…」、「智清二曼は…」、「三曼同じく…」等の文言がみられることから、明らかに三曼曼荼羅との対比的検討がなされていることがわかる。

このことをふまえ、まず初めに、「無量寿経曼荼羅」と「當麻曼陀羅」の極楽浄土について、その論述構成がどのようなになっているか、『大経曼荼羅開壇記』の総科と『當麻曼陀羅述獎記』の標文《注：當麻曼陀羅には目次といふべき総科が記されていないので本文中の標文による。》から、資料Aのような論述構成表を作成し、全体像を探ること。

次に、極楽浄土の中で、特に中心となる、左右の菩薩（資料B・C）、観音・勢至菩薩（資料D）、弥陀法王（資料E）、三尊蓋樹（資料F）について、絵相と共に参考資料として『無量寿経』、義山『無量寿経随聞講録』、隨天『大経曼荼羅開壇記』、義山『當麻曼陀羅述獎記』の関連部分を挙げ、その特色をとらえること。

さらに、「喜地段」・「喜樹段」・「喜樓段」・「喜池段」・「虚空段」の五段については、資料Gのように、隨天の『大経曼荼羅開壇記』の主な注釈部分を読み下し、その内容を概観するために良照義山『當麻曼陀羅述獎記』、観徹『智光曼荼羅合讃』、観徹『清海曼荼羅合讃』の四資料を対照してその特色を検証することにする。

(一) 『大経曼荼羅開壇記』及び『當麻曼荼羅述獎記』の論述構成

次頁の資料Aに掲げたように、『大経曼荼羅開壇記』では、分科が慧遠の『無量寿経義疏』^(注1)に従っており、

㉞「所成」に二あり、その一が「勝報」に二、その二が「極樂」に五という分類になっていること。

㉟「勝報」を二つに分けたその一つが、五十一尊（右二十四聖・左二十四聖・觀勢二聖・弥陀法王の計五十尊）であり、もう一つが三尊蓋樹になっていること。

㊱「極樂」の五段の特徴として、一の「害地段」には、妙衣布地、吹華満国の華衣壇。二の「害樹段」には、純樹、雜樹、岸樹の三種の害樹。三の「害樓段」には、「當麻曼陀羅」より一宮殿少ないが、中央に大きく強調された中央宮殿。四の「害池段」には、三輩生相と辺地胎生。五の「虚空段」には、最上害網が描かれる五段構成になっていること。

それに対し、『當麻曼陀羅述獎記』は、

㉞中央に六とし、一に「害地段」、二に「害樹段」、三に「害池段」、四に「害樓段」、五に「華座段」、六に「虚空段」とし、六段構成になっていること。

㉟六段構成の五の「華座段」は、『觀無量寿経』の定善十三觀の第七「華座觀」^(注2)や『無量寿経』^(注3)との関連があること。

㊱その特徴は、一の「害地段」に新菩薩を迎える相迎會。二の「害樹段」には樹下說法を表す樹下會。三の「害池段」には害船、水浴する童子、『觀無量寿経』散善三觀の九品生相。四の「害樓段」には五宮殿。六の「虚空段」には中央光變が三重に象徴的に描かれることを挙げることができる。

このように同じ極樂浄土が描かれるものの、それぞれの特有の絵相や構成は、その典拠である『無量寿経』、『觀無量寿経』の内容をよりの確に反映したものであることを改めて知ることができるのである。

『大經曼荼羅開壇記』 中台部分の論述構成

外邊に三

(二) 右二十四聖

右の二十四聖については、次頁の資料Bにあるように、

㊦ 「無量寿経曼荼羅」(以下、「無曼」と略す)の右の二十四聖の内訳は、十五菩薩と九声聞である。「當麻曼陀羅」(以下、「當曼」と略す。尚、「智光曼荼羅」を「智曼」、「清海曼荼羅」を「清曼」と略す)は、十七聖すべてが菩薩である。

㊧ 義山は『無量寿経』に「たとい十方世界の無量の衆生、皆、人身を得て、悉く聲聞縁覺を成就せしめて、すべて共に集會し、禪思一心に其の智力をつくし、百千萬劫において、悉く、共に推算して、その壽命の長遠の数を計るとも、窮め尽くして限極を知ること能わず。聲聞菩薩天人の衆の壽命の長短もまた是くの如し。算数譬喩の能く知るところに非ず。また聲聞菩薩、その数量り難く稱説すべからず。神智洞達し、威力自在なり。能く掌中に於いて一切の世界を持せり。」とあり、この中の「たとい十方世界」というのは、第十三願壽命無量の願の成就であること。また「聲聞菩薩」は、第十五願眷属長寿の願成就であると説かれていると『無量寿経随聞講録』で述べていること。

㊨ 菩薩や聲聞の主な持物は、盛華、珠玉、未敷蓮、飯食、多羅葉、経等で、聲聞のその二は偏袒右肩で盛華を執っていること。これらの諸聖は、本尊の右に在って、頂光を現し、各々反華に坐していること。その反華については『大経曼荼羅開壇記』に「もし是れ佛ならば、謂わく當に八葉芬陀梨を作すべし白蓮華なり。その華開き敷め四もに布せしむ。もし是れ菩薩ならば、華半敷せしめ極開せしめること勿れ。へ其の華或るは黄、或るは白、或るは七喜蓮華に作すもまた得たり、但し赤色は是れ世間の華なり。」とあること。等とその様相を、義山、隨天それぞれが、『當麻曼陀羅述獎記』『無量寿経曼荼羅開壇記』で注釈をしている。

『當麻曼陀羅述獎記』の右十七聖の絵相

(卷四 一丁表)

其の初め、
 左手の二七十五聖
 其の二つは、右の
 其の三は、左の
 其の四は、右の
 其の五は、左の
 其の六は、右の
 其の七は、左の
 其の八は、右の
 其の九は、左の
 其の十は、右の
 其の十一は、左の
 其の十二は、右の
 其の十三は、左の
 其の十四は、右の
 其の十五は、左の
 其の十六は、右の
 其の十七は、左の
 其の十八は、右の
 其の十九は、左の
 其の二十は、右の
 其の二十一は、左の
 其の二十二は、右の
 其の二十三は、左の
 其の二十四は、右の
 其の二十五は、左の
 其の二十六は、右の
 其の二十七は、左の
 其の二十八は、右の
 其の二十九は、左の
 其の三十は、右の
 其の三十一は、左の
 其の三十二は、右の
 其の三十三は、左の
 其の三十四は、右の
 其の三十五は、左の
 其の三十六は、右の
 其の三十七は、左の
 其の三十八は、右の
 其の三十九は、左の
 其の四十は、右の
 其の四十一は、左の
 其の四十二は、右の
 其の四十三は、左の
 其の四十四は、右の
 其の四十五は、左の
 其の四十六は、右の
 其の四十七は、左の
 其の四十八は、右の
 其の四十九は、左の
 其の五十は、右の
 其の五十一は、左の
 其の五十二は、右の
 其の五十三は、左の
 其の五十四は、右の
 其の五十五は、左の
 其の五十六は、右の
 其の五十七は、左の
 其の五十八は、右の
 其の五十九は、左の
 其の六十は、右の
 其の六十一は、左の
 其の六十二は、右の
 其の六十三は、左の
 其の六十四は、右の
 其の六十五は、左の
 其の六十六は、右の
 其の六十七は、左の
 其の六十八は、右の
 其の六十九は、左の
 其の七十は、右の
 其の七十一は、左の
 其の七十二は、右の
 其の七十三は、左の
 其の七十四は、右の
 其の七十五は、左の
 其の七十六は、右の
 其の七十七は、左の
 其の七十八は、右の
 其の七十九は、左の
 其の八十は、右の
 其の八十一は、左の
 其の八十二は、右の
 其の八十三は、左の
 其の八十四は、右の
 其の八十五は、左の
 其の八十六は、右の
 其の八十七は、左の
 其の八十八は、右の
 其の八十九は、左の
 其の九十は、右の
 其の九十一は、左の
 其の九十二は、右の
 其の九十三は、左の
 其の九十四は、右の
 其の九十五は、左の
 其の九十六は、右の
 其の九十七は、左の
 其の九十八は、右の
 其の九十九は、左の
 其の百は、右の



命の長短のもまた是の如し。算の數も能く知る所にあら
ず。難した。聲聞の菩薩、其
洞に稱して、善い威、自ら
能く達し、中にて説く、一
持掌にして説き、於て力か
せり。

くべし。述記九卷上、合讀また順解脫決釋の事。委
●●●●
思禪師は謂わんと漢語。即ち思惟の梵義。名義集(四卷十
遠法師に云う。夫れ三昧と稱することは何ぞ思
專らなるに虚。則ち想を志むる之れを謂ふなり。思
の則ち言はるゝ。興師の云分けず。禪思想は寂する
る故なり。興師の意。禪は專なり。借音を用いる
今め。禪と言はれば、梵、漢并びに擧せり。心をし
静かに算用かば、禪に入りて云うことをし。心めて
●●●●
長聞菩薩とは、第十五の願成就なり。
言はると其の壽命のほどいと云うことなり。或
往々之れ有りと云う近きことなり。長短の語、經文に
今も壽命の能なき多少の数なれば、所詮ほごなりと
云ふことなり。又、意は長きを取る。また聲聞とは、十
凡そ報土の大乗の中に二乘を喩えて死屍とす。十
彌陀の悲た閉塞して到ること能はず。
●●●●
神智を得せしめ、即ち他心宿命説一切智得辨才智辨
洞自は洞然と願する所成なり。到達。
阿那律の中とは、楞嚴延得の上巻十六紙に曰う。
一之が如法華提を見るは百千界を見ざる。微塵虚空を含みて
大毛端卷廿廿に於いて、寶王刹を現じ、十方無盡虛空を生じて

[illegible][illegible]

(三) 左二十四聖

左の二十四聖については、次頁の資料Cにあるように、

㊦ 「無曼」は十七菩薩七聲聞であり、「當曼」は十七菩薩であること。

㊧ 『無量寿経』の経文にある「佛語^二阿難^一彼佛初會聲聞衆數不^レ可^二稱計^一菩薩亦然如^二（佛、阿難に語^レげたまわく。彼の佛の初會の聲聞衆の數、稱計すべからず。菩薩もまた然り。）^一」のように、彼の阿弥陀仏が成道して最初に法を説いた初會に集まった声聞の大衆は数え切れないほど沢山いて、また菩薩もそのようであったこと。

㊨ この初會というのは、例えば弥勒に三會あるのと同じで、弥勒の三會を借りて初會と説いているのである。成道最初の説法から、その願に酬い、声聞が無数に集まったのは、報身に十八圓成の徳が有り、その中でも眷屬補翼圓成の徳があるので来會したのである。このように声聞の数が多いのは、この仏の手柄であること。

㊩ 義山は、第十四願声聞無数願の成就であると説いていること。

㊪ 隨天は、左右の聖衆の數について、「智曼」は二十尊【『大經曼荼羅開壇記』には二十尊とあるが、『智光曼荼羅合讚』には右九菩薩と左八菩薩と觀勢二菩薩の計十九菩薩が記される】、「當曼」は三十七尊、「清曼」は二十七尊であるのは、隨機の応現であること。また、「無曼」が五十一尊であるのは、般舟讚^(注4)に「三華獨り迴^{はるか}かに衆坐に超えたり、三身対座して最も尊きなり。」の義から、三尊と衆聖を合わせて五十一尊あるということ。さらに、その衆聖が四十八尊であることは、超世別願の四十八願の數によるものであること。

㊫ 菩薩の四幢は、「無曼」には仏後に描かれるが、「當曼」、「智曼」、「清曼」には描かれないこと。等のことを知ることができるのである。

『當麻曼陀羅述獎記』の左十七聖の絵相

（卷四 二丁裏）



●佛語阿羅とは、是れ第十四願の成就なり。
●初會とは、彌陀の說法有るが如し。
●問曰、此の如きの別有り。何ぞ彼の土に於て此の如きの別有り。答曰、今、多くを顯しと欲するが故に、初づく。知る所に非ず。豈に況や後の兩會をお目連等の可んや。言は彌陀十劫の時、獨りすて初會と數えて知せる。爾るに彌陀十劫の時、獨りすて初會と成佛し給うと云ふ事はあらず。

●成道の最上の說法より、はや願に酬いて、聲聞無數の屬總じて身之德には十八圓成徳有り。其の數計圓成覺智圓覺成給うに今に至るまで聲聞無數と言はるるの如く、國の政令の數多きが、即ち此の佛の手柄なり。此の如く、極樂は、早作、佛の國なれば、四方上來りて來會す。是れ併せて、願力なり。

●實積經第卅七（廿二紙）に云

[illegible]

其の二は長七聖
頭指を捻は、左胸に擧げ、半面に佛に向かう。
其の指を捻は、餘趾並屈す。右に開き右手隠れて見えぬ。
少四屈し、左手指皆伸び、大指外、
其の向の上手に連て置く。右掌垂下し、
其の拈五勢。右膝を向うに、
其の六は髮無冠。近づけ合わせず。右手小指を伸持す。
とす中六は冠。指相屈し已開。手は一莖三葉蓮華を持
ば頭無名。指和屈し已開。手は一莖三葉蓮華を持
其の七は半面右に向かう。左膝を立てて右膝を伏す。
左手中指と左手に經を持す。右頭指、右手を擧げて大指
其の中八は合。左手に經を持す。右頭指、右手を助す。右に向
其の九は、兩手を以って盛華を捧ぐ。右に向く。左
其の十は、見えず顧みる。右手胸に擧げ、掌を外にす。左
其の十一は、左手胸に擧げ、四指を以って莖蓮華を持

得る。如來所謂「長老、大目犍連、最聞第一」の中に神通を
 う。今の意の云う。今日我が會坐の神通第一の目連、數
 集此の如し。神通第一の尊者の百千萬億無量無數、
 ひまゝり、其の上隨分時節長者の百千萬億無量無數、
 乃至滅度入て乃至滅度までと云ふことなり。
 乃至滅度入て乃至滅度までと云ふことなり。
 計校とは、校は謂わく考なり。
 不能了了とは、報身補翼圓成の徳の故に、因位の
 多うとは非ず。此まは、報身補翼圓成の徳の故に、因位の
 多少とは非ず。此まは、報身補翼圓成の徳の故に、因位の
 折は謂わく斷なり。分析にて少しのことなり。折者、

[illegible][illegible]

(四) 觀勢二聖

觀勢二聖については、次頁の資料Dにあるように、

㊦ 「無曼」の第四十九聖が大勢至菩薩、第五十聖が觀音菩薩であり、大勢至菩薩の頂光は赫赫として、天冠の中に一の宝瓶があり、後には四幢があること。また、觀音菩薩の頂光は燦燦として、天冠の中に一つの立ち化佛が有り、後ろに四幢が有るのは、勢至菩薩と同じであること。

㊧ 「當曼」は、第三十五に大勢至菩薩、第三十六に觀音菩薩であり、「無曼」と同様に、大勢至の天冠には宝瓶があり、その仏身の光明は十方無量の諸佛の淨妙の光明があることから無邊光と名づけられていること。また、觀音の天冠にも立ち化仏があり、この菩薩の弘慈は、一時に普く救い、皆、解脱させることから、觀世音、光世音、觀自在と名づけられているということ。

㊨ 後ろの四幢は、「當曼」、「智曼」、「清曼」にはみられないこと。

㊩ 『無量壽經』には、「二菩薩有り。最尊第一なり。威神の光明普く三千大千世界を照らす。阿難、佛に白く、彼の二菩薩、其の、號^な何ぞ云う。佛の言わく、一をば觀世音と名づけ、二をば大勢至と名づく。是の二菩薩、此の國土に於いて菩薩の行を修し、命終轉化して彼の佛國に生ず。」とあり、『觀無量壽經』の第七觀華座想には「觀世音、大勢至、是の二大士左右に侍立したまい光明熾盛にして、具見すべからず。」、また第十三觀雜想には「觀世音菩薩及び大勢至、一切處に於いて身同じ。衆生但だ首相を觀して是れ觀世音と知り、是れ大勢至と知る。此の二菩薩、阿弥陀佛を助けて、普く一切を化す。」とあること。

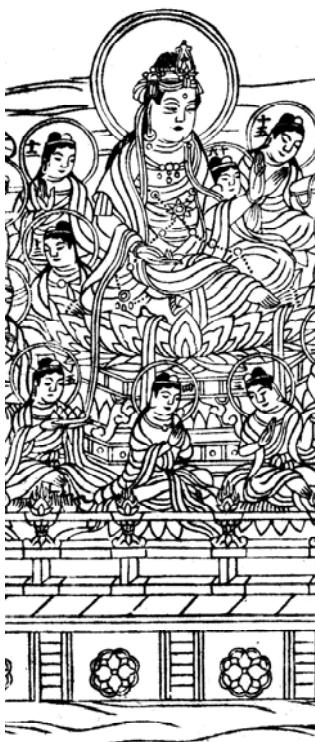
㊪ 觀勢二聖の印は、「無曼」、「當曼」ともに同じで、觀勢の二大士は法王の長子、衆聖の家兄としていること。

などがあげられ、共通点が多いことが『開壇記』『述獎記』の注釈から読み取ることができる。

資料D

『三 觀勢二聖』

『大經曼荼羅開壇記』の觀勢二聖の絵相



『當麻曼陀羅述獎記』の觀勢二聖の絵相

(五) 弥陀法王

次頁の資料Eにあるように、弥陀法王の主な特色は、

- ㊦ 「無曼」は、頂上に肉髻相を現し、「智曼」にもあるが、「當曼」「清曼」には無いこと。
- ㊧ 千輻輪の文は、「無曼」「當曼」「清曼」ともに両手や左右の足にあるが、「智曼」には無いこと。
- ㊨ 「無曼」の仏身は、法蔵六八（四十八）酬因の報身で、弥陀十劫成覺の妙相であり、今すでに成仏して、現に西方に在り、ここを去ること十萬億刹の安樂国に在ること。

㊩ 「無曼」が通肩衣であるのは、作事に便利であることや福田相を現すからである。なぜ「當曼」のように偏袒でないかといえ、仏境思い難く、隱彰宜しきに従って機に応じ、まさに一つではない。深秘にして凡の測るところではないこと。「清曼」は偏袒右肩で、印も「當曼」と同じであること。

㊪ 弥陀の印相は、義山の検得によると、弥陀の報身は、妙觀察智により千輻輪を現しているから、說法斷疑の印であること。また、その根拠は、嵯峨天皇が、「當曼」の中台の本尊の印は何かと弘法大師に問うたところ、報土の定軌、妙觀察智說法斷疑の印と答えたという極秘の言い伝えがあること。

㊫ 「當曼」「清曼」の仏の胸に卍字があるが、「無曼」には見えない。どうして顕わさないのかというと、機に従ってあるべきであり、卍字があるけれども、仏の手に蔽われているからである。「智曼」も同様であること。

㊬ 仏の背後の四幢は台上の宝幢であるが、「無曼」「當曼」ともにあり、仏の後ろに描かれるのは、もし座上であれば仏相を蔽うことになること。

などを挙げることで、「無曼」と「當曼」、「智曼」、「清曼」の四曼荼羅の主な共通点や相違点を、隨天の『開壇記』、義山の『述獎記』によって、その概要を把握することができるのである。

『大經曼荼羅開壇記』の彌陀法王の絵相



『當麻曼陀羅述獎記』の彌陀法王の絵相



『無量壽經』
(浄土宗全書一巻十二頁)

（浄土宗全書一卷十二頁）

今已成仏現在西方去此十萬億刹其佛世界名曰安樂（今已に成仏して、現に西方に在す。ここを去ること十萬億刹なり。其の佛の世界を名づけて安樂という。）

良照義山『無量壽經隨聞講錄』

（浄土宗全書十四卷三六五頁）

今已成佛現在西方。到鎮西常の語に云う。上人色此の對する毎に數かずの感涙の氣有り。上心禮讚に云う。彼の佛の今現（乃至）衆生稱念必得往生とは。嗚呼。今時の行者何ぞ善心無からんや。主領の士を此とは。百處の三千大千世界の釋迦佛を過ぐて、其の西に極樂世界有りと言ふ事なり。億萬土とすに、義寂殊宏は、一藏義下卷七紙八紙、小經疏抄三卷四十紙。一佛主領の一論註十卷八紙序記三卷十紙。天台は、恆沙世界を一佛利とす。（此の義取るべからず。二藏義同卷九紙）十萬億利とは、經々と異説は、今、且くこれを惜小經に、過十萬億佛土と。寶積經（上卷十萬紙）、稱揚諸佛功德經（下卷初紙）に同じく十萬と云う。

隨天『大經曼荼羅開壇記』

(卷二十八丁表)

第五卷 一 彌陀如來、中央正圓、通肩衣にして結跏趺坐す、
 兩光明、掌に胸囉指を合し、二指を皆合ふ。左手の掌を外にして結跏趺坐す、
 頂上無名肉指を合し、左手の端、右の内にしにして、大指に著く、大指指
 輪に肉指を現じ、兩掌並に左右の足下に各々千
 斯の四文蔵あり。八酬因の報身は、彌陀十劫成覺の妙相
 なり。法藏菩薩、今、已千萬億剎なり。現に西
 經に云り。ここに云。法藏菩薩、今、已千萬億剎なり。現に西
 其の佛の世界を名づけて、安樂と曰く。最尊第一に
 たの諸佛の如く。光明、能書け及ぶ所、光明第一に觀
 龍等の諸如く。云う。日月、善國淨にして滿月の如し。
 威光猶の謙に云う。我、量、大喜王微妙淨華臺。
 淨光論に云う。無量、大喜王微妙淨華臺。
 般舟論に云う。我、量、大喜王微妙淨華臺。
 際を徹窮して衆生を度し、身相光明、法界を照ら

良照義山『當麻曼茶羅述獎記』

（卷四 八丁裏）

[illegible]

の印相は、水空相ひの拈ず。
 今、相ひに王身相ひの拈ず。
 如何に、應覺に知る印相なり。
 然るに、蓋し本圖に別圖ならんや。
 答ふに、繭絲は本圖に別圖に違わらんや。
 清曼は中大の著に同じ。但し、彼の左の小指を
 智曼は智翽の印す。今に同じ。其の小異。
 （大いに今に異なる）

答ふべし。佛に肉髻有り。肉髻若し無くば、應に烏瑟無かるべし。烏瑟若し無ければ、應に相好を闕へし。然るに佛は勝肉髻を具せり。菩薩と異なるが故に。如在れは菩薩の不同を釋して云わく。此の相好に結髻の相を成す。故に佛の肉髻は螺髻の相に等し。經にただ頂上肉髻及び不同形異なり。是れを云う。佛に肉髻と佛の螺髻と不同なり。疏に云う。佛の肉髻は螺髻、菩薩の肉髻は結髻なり。故に知んぬ。螺髻即ち肉髻なり。但し、紺髮、之を覆いて肉髻露さざるのみ。

四柱寶幢は、按ずるに是れ經に説く所の臺上の寶幢なり。然るに今、佛の後ろに圖くことは、四幢若し座上に在らざるときは、則ち恐らくは佛相を蔽翳せん。故に從して佛後に在り。是れまた畫圖の法のみに。

また今、則ちただ經に佛座の四幢を説くに准ず。若し舟讃に依れば、則ち觀勢の座上にも四幢有るべし。讚に云う。觀音勢至、華を雙らべて坐す。一一の莊嚴、また佛の如し。四幢寶幢、皆、相似たり。寶羅寶網、殊に異なる無し。

[illegible]

(六) 三尊蓋樹

三尊蓋樹について、次頁の資料Fにあるように、

㊦ 『無量寿経』の「無量壽佛の其の道場樹は、高さ四百萬里、其の本の周圍、五十由旬なり。枝葉、四_よもに布けること二十萬里なり。」とあるように、無量寿仏が悟りをひらいた道場の樹は、高さが四百萬里、その根元の周圍が五十由旬、枝葉は四方に開くこと二十萬里あること。そして、此の道場樹の量と仏身の量と、互いに称えないのは、第二十八願、見道場樹の願の所に説かれていること。

㊧ 三尊の蓋樹は、月光摩尼持海輪寶によって莊嚴されているが、月光の勝ることから月光摩尼、大海の徳があることから持海輪寶摩尼と呼ばれ、龍王の脳中から出た物で大龍王の首飾りになっているように、衆害の王と言われる貴重な喜珠で莊嚴された寶網で覆われていること。

㊨ この蓋樹から微風にのって無量の妙法の音聲が演出されていて、それを聞く者は、深法忍を得て不退転に住すことができること。

㊩ この蓋樹を見る者が、一つは音響忍、二つに柔順忍、三つに無生法忍の三法忍を得ることができるのは、無量寿仏の威神力、本願力、満足願、明了願、堅固願、究竟願によるものであること。

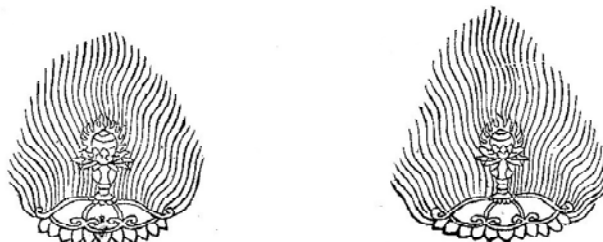
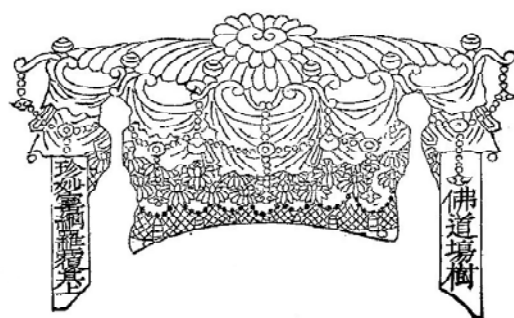
㊪ 深法忍とは、初地以上の忍をいうもので、初地忍とみるべきであるが、機に随って三賢の不退も有ること。もし上根の人の忍ならば、三賢位不退の中の第二忍の十回向か初地以上の行不退と見るべきであり、もし中、下根の人の忍ならば、三賢の中の初めの二忍の十住十行とみるべきであること。

㊫ 深法忍と三法忍との同異は、總別の異であるが、これは、大經聞書第三卷にあり、禮阿の門人の述であり、いまだに世に流布していないものであること。

等が記されていることを知ることができる。

資料 F
『五三尊蓋樹』

『大經曼荼羅開壇記』の三尊蓋樹の絵相



『當麻曼陀羅述獎記』の三尊蓋樹の絵相



[illegible]

願の故此三二
の故にれつつ
故に、皆にに
に、本、はは、
究明願無、
竟了力量無柔
願願の壽生順
のの故佛法忍。
の故にの忍。
なに、威なり。
り、満神り。
堅足力。
固願の

忍の十回向、或るは初地已上の三賢の中の見ゆるべし
 の若し十住根と見るに下す。其の下の巻の初紙へ
 に隨つて得んことを成すと就の計根云う。
 今を生じて法略を経ての面を初地忍なり故にばに深法忍と云う。
 回向の經文の例とし、其に意約せば知得たる忍と云う。
 甚しく深中法忍と云ふは、是れまた上如初地忍と見
 忍れば、一賢の下第三及び初地の忍なり時行無謂
 若し尤も一切皆得に非ざるべしと云うや行者け
 がれ托鉢も皆得に差別有るに取らん像えな修行者
 六無諍惱憚等とは、六根互用に障り無しと云う事なり
 扱場通徹と云ふは、初地已上に非ざれば此の如き彌陀
 從道樹途を見ること能はず然れども彼土の經力に陀
 若し二樹を見ること能はず然れども彼土の經力に陀
 通人八義順約せば、第八人の願成なり。若し得四忍
 義藏の觀七卷十一紙同廿二卷十一紙合見
 第二目親其顔色下經文鈔主未定穩や否かはら
 ず此樹に詳らかに釋す此の義、鈔主未定穩や否かはら
 一見此樹に眼見の知らぬ餘もまた餘を顯わ
 する音響忍等は、諸師異解あり。今は、興師で
 有るに依る。云うは、樹の音聲を尋ねるに風に従りて
 柔順空は、無垂角の義。順境の無生を悟り、有に違
 順觀するに、四句故に柔軟忍と云ふ。諸々の法の生
 位大觀するに、恵心得位の應を之れを名づけて忍と
 爲人事下に得んを絶するに云う。不退證得るべし
 賢問答入讀抄(下卷十四紙)に云う。不
 問上は總て深と此の三忍と同異と説く
 是れ總別の異なるか。へ此一問答に流布せず大經開書
 第三卷禮阿含門人の述なり。未だ世に流通せず
 今日忍心は甚く深は忍心と擧げて初地忍を擧げ、
 忍心は甚く深は忍心と擧げて初地忍を擧げ、
 忍心は甚く深は忍心と擧げて初地忍を擧げ、

第二項 「所成」の「極樂」

(一) 喜地段 (『開壇記』卷二 二十六丁表・裏、三十丁表、裏)

「無量寿経曼荼羅」
舞樂會の絵相



「無量寿経曼荼羅」
華衣壇の踏下四寸の絵相



「無量寿経曼荼羅」
華衣壇の妙衣布地の絵相



害地段の舞樂會は、中央正面害池の前に在り、（害地平正にして、掌の如し。金色の十菩薩、各自、袈を踏んで頂光を現ず。二菩薩が中に立つて天衣を持ち、折盤をす。右は左に傾きて右手を上^{うへ}に擧げ、左手前に在り。左は右に傾きて左手を挙げ、右手を低^{さげ}る。左右の八菩薩はみな坐して天樂を奏す。右の一は箏。二は琴。三は箏^{ひちりき}。四は笛。左の一は琵琶。二は笙。三は簫。四は篳篥^{くわく}。周廻に欄楯あり。絡に綸連を以ってし、垂るるに害鈴を以ってす。）と七害合成地で奏天樂をしながら歡喜踊躍する舞樂會が表現されている。

また、華衣壇は、妙衣布地（妙衣^{じょうじゅう}）として地に敷き、二菩薩有り。俱に頂光を現ず。一菩薩兩手に盛華捧げ、右に行く。一菩薩は左手に含華を持す。右手拳を爲さしめ左に顧みる。）と、吹華滿國（害華、繽紛として地に布く。二菩薩有り。共に頂光を現ず。一の菩薩は兩手に念珠を持して左に顧み、一菩薩は兩手に盛華を捧げて右に行く。）とあり、標文が「四方自然風發普吹害樹出五音聲雨無量妙華・踏下四寸（四方より自然に風發ち、普く吹く。害樹より五音聲出で、無量の妙華雨ふる。踏下四寸。）とある。

このように、害池の中央に突き出した害地は、菩薩達が天樂を演奏し、歡喜踊躍する舞樂會。また、華衣壇は、左右から突き出た舞台状の上に、妙衣や害華が、深々と四寸も沈み込むように敷き詰められた妙衣布地と吹華滿國が表され、四方からは自然の風にのつて、妙音とともに害華が降る様相が描かれている。

（二） 害樹段（『開壇記』卷二 三十三丁裏、三十四丁表）

害樹段の左右の純樹については、（左右に各々害樹七株有り。金樹、銀樹、瑠璃樹、玻瓈樹、珊瑚樹、瑪瑙樹、碑磔樹、皆、寶網^{あまね}彌く覆う。）とし、左右の雜樹については、（第一害樓の左右に雜害樹有り。二害、三害乃至七害共に合成せり。其の相、繪し難し。今且^{しばら}く左右に各々一藁林あり（経文照映）。當麻に七重害樹及び樹下會有り。智清二曼に害樹害草有り。）とし、左右の岸樹については、（第二害樓の左右の岸上に、梅檀樹有り。種々の華珠、池水に對映す。左の樹の標上に鸚鵡鳥有り。下に共命鳥あり（右樹に鳥無し）。

今謂う雑色とは、四色交錯するなり。當麻に岸上樹有り。清智兩曼俱に無し。」とある。

「無量寿経曼荼羅」の

右岸樹

右雑樹

右純樹

「無量寿経曼荼羅」の

左岸樹

左雑樹

左純樹



(三) 害樓段

宝樓段には、第一宮殿、第二宮殿、第三宮殿、中央宮殿があり、それぞれの特色をみることにする。

① 第一宮殿（『開壇記』巻二 三十八丁裏・三十九丁表）

「無量寿経曼荼羅」の第一宮殿の絵相



(7) 徒衆説法

右に二重の害樓あり。重宇、皆、飛檐。檐頭に玉を吐き、宇頂の露盤に光珠を承く。樓前に反り橋を飛架す。勢至菩薩、蓮臺に坐し、左に面し圓光を現じ、右手前に垂れ掌を仰ぎ五指皆伸ぶ。左手舉出し五指を豎て掌を外にす。十菩薩一聲聞有り。(中略)

＊常宣正法【標文】

經に云う。彼の佛國に生まれる諸々の菩薩等講説すべき所、常に正法を宣べ智慧を隨順し、違ふこと無く失まること無し。

問う。教主の説法音、一國に徧ねし。聽法無間なり。菩薩また説法するや。

答う。釋尊の在世すら、聲聞菩薩、處々に説法す。機縁定める事無し。佛また之れを許す。極樂もまた爾り。佛境思い難し。主従の説法互いに礙げず。随意に法を聞きて各自に益を得るなり。

④ 化主説法

左に二重害樓あり。飛檐、反り橋、珠玉の莊嚴右に對して知らすべし。化佛、中に坐し、胸に卍字を現じ、光を放ち殿を照らす。右手仰むけて膝に置き、左手を挙ぐ。兩手共に大指と頭指とを合し、餘指、皆伸ぶ。七菩薩三聲聞有り。(中略)

＊修會講堂、普散華香奏諸音樂【標文】

經に云う。無量壽佛、諸々の聲聞菩薩大衆の爲に法を班宣する時、すべて悉く七害講堂に集會すと。中に在りて説法する之れを講堂と謂う。講は習解なり。堂は當なり。正しく陽に向かう屋に當る。

普散とは、諸天往詣して願王に奉事するなり。

經に云う。普く華香を散らし諸々の音樂を奏し、前後に來往しむ、更に相い開避す。當に斯の時に熙怡快樂すること、勝げて言うべからず。)と述べられていること。

② 第二宮殿（『開壇記』卷二 四十五丁裏・四十六丁表）

「無量寿経曼荼羅」の第二宮殿の絵相



(7) 資用無礙

左右に宮殿あり。また、皆、飛檐なり。右殿に七鉢を安ず。各々は飲食を盛る。内に五菩薩二聲聞あり。みな、俱に合掌す。但し一の菩薩は、手相隠れる。前に反り橋有り。殿の側に階梯を設く。〔左殿聲聞此れに翻す〕

科に資用無礙とは、資は謂わく資具なり。今は飲食を指す。用は謂わく受用なり。論の受用功德の如し。當麻に無生法食會有り。今とただ同じ。光、海の兩曼には則ち無し。

* 七害鉢器

七鉢は七害鉢器を表す。菩薩聲聞は飲食受用の相なり。

問う。無漏の國界に段食有ること無し。論に云う。佛法味を愛樂し、禪三昧を食とす。讚に云う。飢えて九定食を喰らう。渴きしめば四禪の漿を飲むと云う。何んが和會せん。

答う。唯識攝論等に、四種の食を明かす。所謂、段食〔だんじき〕《實際の食物》と觸食〔そくじき〕《感覺》と思食〔しじき〕《思考・意志作用》と識食〔しじき〕《六識》となり。今謂わく、彼界に段等の四食有ることなし。ただ是れ淨土論に明かす所の禪等の三食是れなり。記主釋して云わく。一に法喜食〔論の佛法食〕、二に禪悅食〔禪定食〕、三に三昧食〔三昧力に依り百味等を示現す〕。

問う。若し爾らば、今、所現の食は三種の中には何んぞ。

答う。記主云わく。三昧食とは、百味現前す。具には大經の如し。私に謂わく。總じて三種に通ずると雖も、今の所現は正しく是れ三昧食なり。〔後略〕

* 七害鉢器、自然在前【標文】

經に云う。若し食せんと欲する時は、七害鉢器、自然に前に在り。金、銀、瑠璃、砗磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀、明月、真珠、是くの如き諸々の鉢、意に随つて至る。百味飲食自然にす。

問う。明月と真珠とは、七害器の外に別體有りとなさんや。

答う。次上の講堂清舎の文に准ずるに、七害の上に莊嚴する所の相なり。真珠、名月、摩尼の衆害を以て交露きょうろとなし、其の上に覆蓋ふがいすと説くが故に、今また例えして知れ。

④ 神通自在

左右の殿上に各々露臺有り。玉欄四もに廻る。右に四菩薩二聲聞あり。菩薩其の一は左に向き、右手は伏せ出し、左臂は欄に倚る。其の二は右に向き、右臂は欄に倚り、左手は見えぬ。其の三は左に向き、右手垂れ伸ぶ、左上上に擧ぐ。其の四は左に向きしめ合掌す。聲聞其の一は左に向き、手を衣裡に納む。其の二は左に向き、手、露われず。へ左陳の印契は右に翻すへ

科に神通自在とは、根とは、謂わく六根。眼、耳、鼻、舌、身、意なり。通は謂わく、六通。宿命、天眼、天耳、他心、神境、漏盡なり。斯れ乃ち、根と通、共に自在なるなり。へ後略へ

＊六根清徹・得六神通【標文】

六根清徹は經に云わく。目其の色を觀み、へ乃至へ心に法を以て緣ず。一切みな甚深の法忍を得て、不退轉に住す。成佛道に至ると。是れ則ち彼土の人天、道場樹を緣じて斯の益を獲るなり。若し、此の邊に約せば、第二十八の願成なり。へ後略へ

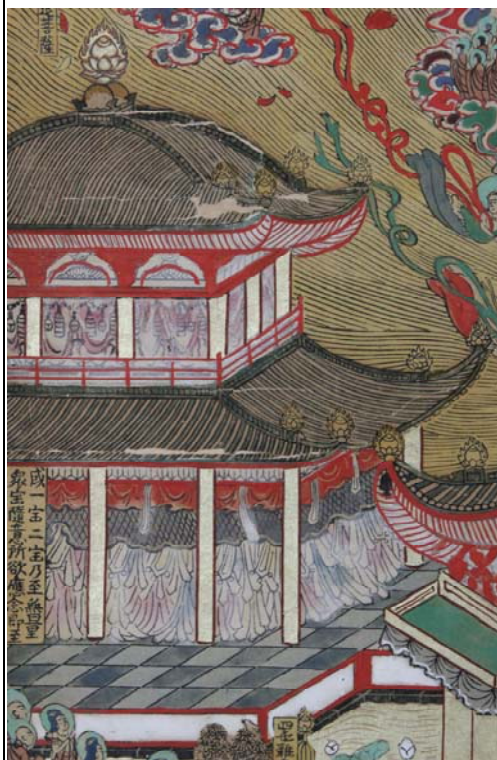
得六神通は、第五より第十に至る願成なり。經に云わく。それ衆生有りて彼の國に生ぜん者は、皆、悉く三十二相を具足す。智慧成滿して深く諸法に入り、要妙を窮暢し神通無礙にして諸根明利なり。また云う。彼の佛の國土の諸々の往生する者、是くの如きの清淨色身、諸々の妙音聲、神通の功德を具足す。

悲華經に云う。人天、別無く、皆、六通を得る。

法事讃に云う。三明自然に佛願に乗り、須臾、合掌ししめ神通を得る。へと記されていること。

③ 第三宮殿（『開壇記』卷二 五十丁表・裏）

「無量寿経曼荼羅」の第三宮殿の絵相



(左右に宮殿あり。二重の飛檐、衆寔莊嚴。一に前殿の如し。上の重は垂るに寔鈴縵幕を以つてす。下の重は、嚴おごそかに衣帛幢幡いはくどうばんを以つてす。二重、皆、閉戸に似たり。

此れ則ち資具身に稱かなうなり。資具は依報。身は是れ正報なり。依報の資具、一一、みな正報の身器に稱應するの譬えなり。

閉とは蓋し入禪の相を表すなり。一家の釋に云う。一一寔樓に佛會有り。恆沙の聖衆坐して思量す。思量とは、入禪思惟の義なり。

*或一寔二寔乃至無量衆寔随意所欲應念即到(或るは一寔、二寔ないし無量の衆寔、意の所欲に随い、念に應じて即到する)、衣服飲食華香伎樂繪蓋幢幡微妙音聲所居舍宅宮殿樓閣稱其形色高下大少(衣服、飲食、華香、伎樂、繪蓋、幢幡、微妙の音聲、所居の舍宅、宮殿、樓閣、其の形色に稱かなつて、高下、大少あり)【標文】

少は當に小に作るべし。繪蓋は緣峰の三藏、共に諸蓋に作る。並びに是れ第二十七の萬物嚴淨の願力なり。既に萬物嚴淨と云う。知るべし。依報一切の所須しよしゆを攝することを。但し飲食は通して第二殿の資用無礙を證す。

宮殿とは、總ての寔樓一段を證す。其餘へ應えるの如く知るべし。

三曼俱に此の段無し。)と三曼には無く、この「無曼」だけに見られる宮殿である。

④ 中央宮殿（『開壇記』卷二 五十二丁表・裏）

「無量寿経曼荼羅」の中央宮殿の絵相



(正中佛後に一大樓閣あり。層高壯麗、連甍、鉤陳、檐首、玉を吐き、隅角、鈴を垂る。屋脊要會の所處に玉を捧げ、下も露盤を設けて之を承く。軒前の三面に綺帳を懸け、聯ねるに金鈴を以つてす。兩旁に複道を通し、欄を施して左右に連ぬきぬ。

樓閣は、説文に云わく。樓は重屋なり。爾るに雅に云わく。狭して脩曲なるを樓と曰わく。疏に云う。凡そ臺上に屋有り。狭長屈曲なるを樓と曰わく。孫愐に云う。樓は閣なり。顓頊せんぎよく《史記に記される五帝の一人》の造る所の重屋なり。玉篇に云う。閣は樓なり。此れに准ずるに、或るは樓、閣と別なり。或るは樓、即ち閣なり。

經に云う。所居の舍宅、宮殿、樓閣、其の形色を稱かいて高下大小あり。

觀經に云う。衆壽國土の一一の界上に五百億の寶樓閣有り。また云う。樓閣千萬百壽を以つて合成す。

小經に云う。上に樓閣有り。また金、銀、瑠璃、玻瓈を以つて合成す。

淨土論に云う。宮殿諸樓閣、十方を觀して無礙なり。雜樹異香色あり。喜欄遍く圍繞す。

定善義に云う。喜樓喜閣、みな相い接し、光光相照として蔭無し。

五會讚に云う。淨國もと憂い無く、無數の化城樓あり。四面に鈴を懸けて匝めくり、六度華を散らして周れ。

また云う。第六に應に衆壽樓を觀ずべし。珠軒玉砌碧雲の秋。

また華嚴經に云う。此の大樓閣は、空無相無願を解する者々の住する所の處なり。是れ一切法無生と知る者々の住する所の處なり。是れ一切世間に著わせざる者々の住する所の處なりと。

鈴は淨土論に云う。種々の鈴、響きを發し、妙法音を宣吐す。

仁王般若義軌に云う。鈴音振擊して有情を覺悟す。般若を以つて群迷を驚かすを表す。と宮殿の中心的存在として、その概要が記されている。

(四) 喜池段

喜池段は、三輩生相と池上化佛と池中聲菩と池中荷蓮と池中化鳥と邊地胎生の六場面が説かれる。

① 三輩生相（『開壇記』卷三 一丁裏）

「無量寿経曼荼羅」の三輩生相の絵相



（中臺正面に一菩薩あり。金剛臺に坐し、頂光を現じ、跏趺して佛に向かう。左右に二菩薩あり。蓮を踏んで立つ。右の菩薩は合掌し、左の菩薩は右手を挙げ、掌を外にし、左手に天衣を執る。〔是れ上輩生〕
中臺前池の左に一菩薩あり。頂光を現じ、開華に坐す。左に向きて合掌す。傍らに一華九葉有り。〔是れ中輩生〕

中臺前池の右に一菩薩あり。頂光を現じ、開華に坐す。左に向きて合掌す。傍らに一華十三葉有り。〔是れ下輩生〕

科の審池段と云うは、經に曰わく。内外左右に諸々の浴池有り。或るは十由旬、或るは二十、三十ないし百千由旬なり。縦廣、深淺、各々みな一等なり。八功德水、湛然^{たんねん}として盈滿^{えいまん}す。〔八功德は定善及び記の如し〕池に純雜有り。純と云うは、經に曰わく。黄金の池には底に白銀の沙^{いさご}あり。〔乃至〕紫金の池には、底に白玉の沙あり。

小經に云う。池底に純^{もつぱ}ら金沙を以って地に布くと。

雜と云うは、經に云う。或るは二審ないし七審、轉^{うた}た共に成すと。

觀經に云う。一一の池水、七審を以って成する所。

問う。今經に、黄金池は底に白銀の沙とは、二審合成なり。應に是れ雜池なるべし。

答う。黄金池とは、池岸の色に約し、或るは底沙の色に約するなり。

三曼俱に審船及び童子有り。今無きは略なり。

三輩生相とは、今經の三輩、觀經の九品、諸師異解す。若し宗家に依れば、輩、品、全く同じ。故に選擇に云う。觀經の九品、大經の三輩、もと是れ開合の異なり。

當麻には九品を表勝す。今の圖には、三輩を標幟す。ただ是れ開合の異のみ。

智曼に託蓮の二童子有り。曼荼羅合讚に云う。問う。託蓮の童子、何んぞ、ただ二人なる。答う。此の圖

は是れ略。故にまた冥に小經に九品の相を説かず合す。

清曼の中臺佛前に二菩薩有り。また害池中に託蓮四菩薩有り。合讚に云う。佛前の二人を以って上品と爲す。次に池内に於いて上の二人を中品と爲す。下の二人を下品と爲す。斯れ乃ち略して九品を攝して以って三品と爲す。經旨に異せず。また能く大經の三輩に符合すなり。

上輩生の圖、勝報段に在り。而るに經文に云わく。七害華中、自然に化生すと。此れに準ずるに、宜しく中、下に相從して害池段に在るべし。

然るに法事讚に云わく。坐時即ち無生忍を得る。一念に迎將して佛前に至る。法侶、將に衣をせんとす。競い來て著ししめ、不退を證得して三賢に入ると。此れに依りて今の變相特に佛前に在るなり。

今は經文に順じて中、下に相從して害池に攝す。

左右の二菩薩は、應に是れ觀勢二士なるべし。迎接の後、佛前に誘引するなり。中、下二輩は、左右の池中に在り。應に知るべし。

＊上輩生、中輩生、下輩生【標文】

上輩は經に云う。即ち彼の佛に隨いて其の國に往生す。便ち七害華中に於いて自然に化生し、不退轉に住す。智慧勇猛神通自在なり。中、下兩輩、准知せよ。

問う。觀經になぞら准え、華開の遲疾有るべし。何が故に三輩の初生みな同じく開華なるや。

答う。實に然りなり。但し今は其の華開の後を勝す。勞つらく拒難すること勿れ。或るべし、今經の三輩は信者の往生なれば速疾に華開くならん。但し、邊地胎生は偏に疑者に約す。一鑰いちやく《鍵》を以って諸藏を開くこと莫かれ。

問う。佛前池中に九蓮華有り。各々光明を帶ぶ。是れ九品を表するに似たり。若し然らば輩品同じからず。如何。

答う。輩品別無し。蓋し、今、多生相を示さんが爲に、故に之れを圖するのみ。九品を表するに非ず。問う。輩品階位有りと爲さんや、無しと爲さんや。

答う。西山の意は、全く無し。當流に於いては輩品差降また有り、また無し。問禪師の云う。若しは初生、若しは教門の時は華品の差降有りと雖も、或るは後時、或るは實義の日わくは、平等無二なり。所謂、淨土は五乘齊入の故に遇大遇小の機、往生の後、華開の遅疾、得益の淺深有り。之れを名づけて九品の階位と爲す。是れ初生また教門の時なり。華開已後は遇大等の差無し。即ち上中下等の相を凶す。平等無二身等の法等なり。

＊菩薩往詣【此の段は、經の説相に準ずれば、宜しく上邊の下輩往生の次に在るべし。今、画圖の便に随つて踰越して此に釋出す。】

中臺佛前の左右に各々五菩薩有り。俱に頂光を現じ、反華に坐す。反華或るは隠れ或るは顯る。右の菩薩はみな左に向き、左の菩薩は共に右に向く。右陳の其の一は盛華。其の二は繪衣。其の三は幢幡。其の四は捧珠。其の五は香爐。左陳の其の一は瓔珞。其の二は衣服。其の三は害蓋。其の四は供物。其の五は獻華。

十方薩埵、西方に往詣するは、若し佛に約せば、本願有るがゆえに。若し機に約せば、自熟、熟他、本縁の三義有り。また釋迦説教の意に約せば、凡夫をして願生の心を發せ令めんが爲なり。故に憬興の云う。凡小をして欲生の意を増しめんと欲す。故に須く彼土の勝を顯すべしと。

＊十方佛國、往詣菩薩【標文】

經に云う。彼の東方の恆沙の佛國に於いて無量無數の諸々の菩薩衆みな悉く無量壽佛の所に往詣する。へ乃至へ南、西、北方、四惟、上、下もまた是くの如し。

また云う。東方の諸々の佛國、其の數、恆沙の如し。彼土の菩薩衆、無量覺に往觀す。南、西、北、

四維、上、下またまた然り。

龍樹の讃に云う。十方より所來する佛子、神通を顯現し、安樂に至る。また十四佛國菩薩の往詣有り。
粗、虚空段に見ゆ。^{ほぼ}と隨天により、注釈されている。

② 池上化佛（『開壇記』卷三 六丁裏・七丁表表）

「無量寿經曼荼羅」の池上化佛・池中聲菩・池中荷蓮の絵相



(中臺の前池に三の立ち化佛あり。各々蓮に坐し、光を現ず。其の中は脊を示す。其の右は右に向く。其の左は左に向き、印相みな見えず。

此れ則ち眞佛小身を化作して新生の者をして拝瞻を得せ令む。

經に云う。一一華の中に三十六百千億の光を出し、一一の光中より、三十六百千億の佛を出す。

觀經に云う。諸々の蓮華の上に、各々一佛二菩薩の像有り。彼の國に徧滿す。

また云う。一つの丈六の像、池水の上に在り。

疏に云う。或るは池水華上在り。或るは喜宮、喜閣の中に在り。或るは喜林、喜樹の下に在り。或るは喜臺、喜殿の中に在り。或るは虚空、喜雲、喜蓋の内に在り。

三曼、俱に無し。

問う。上の講堂の佛、今の池上の化佛及び中、下、来迎の佛は、第二身と爲すや、第三身と爲すや。

答う。當流白簾の意は、第三身なり。(後略)と述べられている。

㊦ 池中聲菩

(中央蓮池に右に二菩薩あり。左に二菩薩あり。二聲聞あり。右の菩薩其の一は、右に向き左臂に衣を掛け、右手を以って身頂に灌ぐ。其の二は左に向き合掌す。足、水に没す。左の菩薩の其の一は、右にかえ晒し、右手に蓮を捧げ、左手に拳を作す。水、膝に至る。其の二は右に向かう。合掌す。水、手頸に至る。

聲聞の其の一は、左右の手、臂共に伸ぶ。水、腰に至る。其の二は右に向く。合掌して而立す。

* 池中の聲菩、宜しきに随いて之れを示す。經に六相を説く。圖に合して看つべし。

當麻に十五童子あり。智曼には、二童。清曼には六童あり。廣略の別のみ。

* 淺深無礙【標文】

是れ科文に依りて標す。

經に云う。彼の諸々の菩薩及び聲聞衆、若し害池に入りて、意こころに水をして足を没しめんと欲すれば、水即ち足を没す。膝に至らしめんと欲すれば即ち膝に至る。腰に至らしめんと欲すれば即ち腰に至る。頸に至らしめんと欲すれば即ち頸に至る。灌身せしめんと欲すれば自然に身を灌ぐ。還復せしめんと欲すれば、水、輒すなわち還復す。

般舟讚に云う。或るは階きざはしを尋ねて害池に入る有り。或るは干沙に立ち、或るは膝に至り、或るは腰頭に没し、或るは懸け注ぎ、或るは金華、百害葉を取りて岸上の池を看る人に授與す。

禮讚に云う。彌陀心水、身頂に沐し、觀音、勢至、衣を與えて被りしめ、忽爾こつじとして空に騰うり、法界に遊ぶも須臾にして授記せられて無為と號す。と注釈されている。

④ 池上荷蓮

(池中に蓮華二十五、荷葉六十三有り。

右陳の害樹段の前池に二華六葉あり。害樓段の第一宮殿の下に、三華六葉あり。中臺の後池に二華三葉あり。左陳の害樹段の前池に二華九葉あり。害樓段の第一宮殿の下に、二華三葉あり。中臺の後池に二華三葉あり。中央の害池に十二華三十三葉あり。都計するに二十五華六十三葉なり。但し三輩所乗と及び胎生とを除く。

經に曰わく。また衆害蓮華、世界に周滿す。一一の害華に百千億葉あり。其の華の光明無量種の色あり。觀經に云わく一一の水中に六十億の七害蓮華有り。一一の蓮華、團圓正等にして十二由旬なり。

小經に云う。池中の蓮華、大きな車輪の如し。青、黄、赤、白、微妙香潔なり。

今、少分を圖示す。此れみな彌陀願力の所成、衆生誠心の所感なり。へ中央右邊一華萎衰す。想うに是れ此の界、念佛退墮の人ならんへ後略とあり、合計二十五華六十三葉の荷蓮が描かれており、その内、一華が萎れているのは念佛が怠惰な人を表しているという注釈も加えている。

「無量寿経曼荼羅」の左右の池中化鳥・邊地胎生の絵相



(『開壇記』卷三 十一丁表・裏)

㊦ 池中化鳥

(中臺の左右の害池の右側に、白鵠びやうこく一頭、孔雀一頭あり。左側に鴛鴦えんおう一雙、鳧雁ふがん一雙、舍利《九官鳥》一頭あり。水中に出没し、意に随つて逍遙す。

當麻と清海と池中に鳥有り。智曼は、化鳥、害地段に在り。

觀經に二鳥を説く。

小經は六鳥。

稱讚經は十一鳥。今、七鳥を畫く。みな是れ應に随つて現ずるなり。(後略)と記されている。

㊧ 邊地胎生

(害樓第一、第二の前後左右の池中に、各々含華宮殿有り。右に華二葉九、左に華二葉十三有り。邊地胎生は、異體を名づくる一つなり。

經に云う。疑惑し中悔して自ら過咎かぐを爲すは、彼の邊地の七害宮殿に生まれしめ、五百歳中、諸々の厄を受けるなり。また云う。此の諸々の智に於いて疑惑して不信なり。然れどもなお罪福を信じて善本を修習し、其の國に生まれんと願ず。此の諸々の衆生、彼の宮殿に生ず。壽いのち五百歳、常に佛を見られず。菩薩聲聞衆を見られず。是の故に彼の國土に於いて、之れを胎生と謂う。へ五百歳と言うは、此の間の五百歳へ十住論の五に云う。若し人、善根を修し、疑えば、即ち華開かず。

定善義に云う。修因正念にして疑を雜まぜることを得ざれ。華に含まれて未だ出でず。或るは邊界に生まれ、或るは宮胎に墮す。

問う。邊胎は殊に無ければ何故經文二處に之れを説く。また何ぞ邊と名づけ胎と名づける。

答う。略論に云う。三害を見聞せざれば安樂淨土に之れを邊地と謂う。また胎生と名づくと。二處に説くことは疑心の種類多きが故なり。謂わく、疑惑中悔を説きて邊地と名づく。疑惑修善を説きて胎生と

爲す。故に知んぬ、邊胎と名づく。異體と同じ。

問う。邊地胎生は三輩に攝するや。

答う。異説紛紛たり。覺經と大阿彌陀經とは、中、下、二輩の攝なり。今經は然らず。三輩の外に各別に説くが故に須く仰ぎて冥護の正本に憑くべし。諸師の解釋また同じからず。然るに鸞師の略論に云う。また一種の安樂に往生する有り。三輩に入らずと。夫れ信心往生は、世尊の勧める所、疑惑中悔は聖教の誠める所、信疑勸誠、天地水火せり。何んぞ類同を得ん。

問う。疑心の人、何んぞ往生を得ん。

答う。機類萬品、一概すべからず。謂わく、暫信暫不の者は、彌陀の本願最も強盛なるが故に暫信の因を攝して往生を得せしむ。譬えば大龍の若し小水を得れば洪に八挺に注ぐごとし。

問う。胎經の二に云う。西方、此の閻浮提を忖ること十二億那由他に懈慢界有り。國土快樂にして伎樂を作唱す。へ乃至時に一人有り。能く阿彌陀佛國に生ずと。此れと何んの別ぞや。

答う。永觀の云う。またただ邊地胎生有るのみに有らず。道中に於いてまた化城有り。謂わく懈慢國なり。

辯師の云う。彼の懈慢界は娑婆邊土と言うと雖も極樂の胎生に屬すべからず。故に知んぬ。邊胎と懈慢と殊に別なり。

*胎生者所處宮殿或百由旬（胎生の者の處る所の宮殿、或るは百由旬）、或五百由旬各於其中受諸快樂（或るは五百由旬、各々其の中に於いて諸々の快樂を受くる）【標文】

問う。覺經に七喜水池蓮華中に於いてと云う。相違如何。

答う。審積經に云う。彼等衆生、華胎の中に處してなお菌苑宮殿の相の如し。若し此の文に依れば、覺經は外相の蓮華を説く。此の經は、内相の宮殿を示す。彼此、互いに一邊を擧ぐ。由旬は新に踰繕那と

云う。西域記二に云う。舊傳は一踰繕那四十里。印度の國俗は乃ち三十里。聖教に載る所はただ十六里。と『無量寿經』だけにみられる、いわゆる疑城胎宮ぎじょうたいぐの辺地胎生について、詳細にわたり注釈されている。

(五) 虚空段 (『開壇記』卷三 十五丁裏)

「無量寿經曼荼羅」の三尊光變の絵相



① 三尊光變

（觀勢の光明は、もと頂上に起こる。其の初めは、纖微にして上に至りて暫く盛んに烟雲の起こるが如し。屈曲旋轉し雲卷き烟騰り、中尊最上雲聚の處に至る。

中尊の光明は、もと頂上に起こり、虚空中に至る。卓起亭立し、變じて雲臺と成る。臺中に三尊化現す。

（中尊は蓮に坐す。印幟一に中臺の如し。二士の坐印は並びに雲に入りて見えず）

上にまた轉じて華蓋と成る。形、仰むける盤の如し。上にまた變じて蓮盤と作り、左右に玉を吐く。上にまた變じて華輪と成る。形、蓋の如く。然り、中に三蓮有りて伊字の如く布く。光雲特起し、上にまた會して一聚と成す。また分かちて兩邊に傍布す。上にまた變じて一蓮と成り、左右に蔓布して各々一華を荅す。二士の光明は、蕨の如く巻屈して此れに至りて、中央最上の一雲聚を擎^{ささ}げて上に一蓮を現じて頂上に冠す。蔓、左右に布きて各々一華を銜^{くは}む。中尊の光明、ここに至りて収まる。

三尊の光變光明は別なりと雖も三身即一の故に一科と爲す。

當麻の中尊は二重の光變。脇士は一重の光變なり。

智清兩曼には、俱に光變無し。

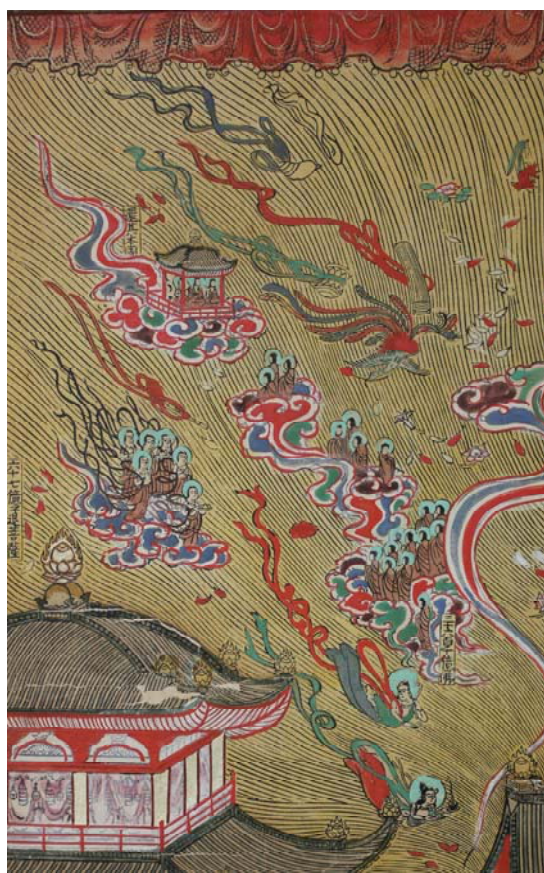
中尊は觀經に云う。一一の摩尼、千の光明を放ち、其の光、蓋の如し。

二大士とは、觀音觀に云う。眉間の白毫に七喜の色を備え、八萬四千種の光明を流出すと。

勢至觀に云う。此の菩薩の天冠に五百の喜華有り。一一の喜華に五百の喜臺有り。一一の臺中に十方諸佛、淨妙の國土、廣長の相、みな中に於いて現ず。

② 虚空飛物（『開壇記』卷三 十五丁裏）

「無量寿経曼荼羅」の左右天人・左右化鳥・左右菩薩・左右化佛・左右樂器・左右雨華・最上寶網の各絵相



㊦ 左右天人（『開壇記』卷三 十七丁表・裏）

左右の虚空飛行の天人二對あり。其の第一對に、右は左に向き、右手に盛華を執る。左手に香爐を持つ。左は右に向き、左手に盛華を持つ。右手に葩を乗る。其の第二對に、右は右に顧み、右手開き展べ、左手に含華を捧ぐ。左は左に眇し、右手に瓔珞を執る。左手に鼗鼓（とうこ）へふりつづみを持つ。

彼土は報刹なり。實の天、有ること無し。餘方に因順するのみ。

經に云う。一切の諸天、みな天上の百千の華香、萬種の伎樂を齎（もたら）して、其の佛及び諸々の菩薩、聲聞の大衆を供養す。

般舟讚に云う。化天、童子、無窮數、悉く是れ念佛往生の人。

㊧ 左右化鳥

虚空に二鳥あり。左は頻伽（びんが）、右手に未敷の蓮を持ち、徐（おもむろ）に左手を伸べ、飄然として飛下し、右は孔雀、藥蓮（ずいれん）を含み翩翩（へんぺん）として遊ぶ。

化鳥無量なり。且（しばしば）く一、二を示す。

當麻に三雙六鳥。智清二曼みな化鳥無し。

觀經に云う。其の光、化して百審色の鳥と爲す。和鳴哀雅（わみようあいげ）にして、常に念佛、念法、念僧を讚ず。

玄義分に云う。虚空莊嚴は、即ち一切審地、審宮、華網、審雲、化鳥、風光を動發する。聲樂等是れなり。

孔雀は前の如し。頻伽は琳音二十三に云う。此れには、美音鳥と云う。或るは妙聲鳥と曰わく。此の鳥もと雪山に出、鵲中に在り、能く鳴く。其の音、和雅にして聽く者厭がること無し。

㊨ 左右菩薩（『開壇記』卷三 十九丁表・裏）

* 往詣西方

左右の空中に座す二十の菩薩あり。雲中に住立す。座華みな蔽う。右に六菩薩あり。其の一は華を持つ。其の二、三は合掌。其の四は華を執る。其の五は印隠る。其の六は合掌す。左の十四菩薩あり。其の一は華を齎す。其の二は合掌。其の三は印隠る。其の四は衣を乗る。其の五は合掌。其の六、七、八、九は印相見え。其の十、十一は合掌。其の十二は華を執る。其の十三、十四は印隠る。

右の六菩薩は娑婆六十七億の菩薩の往生の大數を表す。此れ釋迦一化に限り前後佛に關かず。左の十四菩薩は十四佛國の總數を表す。

＊六十七億不退菩薩、十四佛國菩薩【標文】

經に云う。此の世界に於いて六十七億の不退の菩薩有り、彼の國に往生す。諸々の小行の菩薩及び少功德を修習する者は稱計すべからず。みな當に往生すべし。へ乃至へただ此の十四佛國中の諸々の菩薩等のみ、當に往生すべきにあらず。十方世界の無量佛國より其の往生する者またまた是くの如し。今、不退菩薩と言うは上位を挙げて下位を攝す。

＊供養諸佛

空中の左右に宮殿あり。害雲あいたい翬あいたい《たなびく》たり。殿中に各々三菩薩坐す。右の二は合掌。一は印隠る。左の一は合掌。一は盛華。一は印隠る。右の殿は面して還り、左の殿は脊して往く。

左殿は他國に歷事す。右殿は本國に還到す。三曼共に無し。但し當麻には、別に文殊、普賢の往詣有り。

＊遍至十方、還其本國【標文】

經に云う。十方無量世界に往詣し諸佛世尊を恭敬供養す。へ乃至へ其の本國に還える。また云う。また徧く無量無數の諸々の餘佛の處に至りて、諸々の功德を修すことを得ん。觀小二經またまた是くの如し。

㊦ 左右化佛（『開壇記』卷三 二十一丁裏・二十二丁表）

左右空中に各々十八の化佛有り。雲上に住立す。みな印手、衣に納む。右に十六佛は右に向き、一佛は左に向き左に眇みる。左の十佛は右に向く。八佛は左向く。

化佛無數、彼の國に徧滿す。今、且く華中の出佛を彰す。三十六佛は三十六百千億の文に准ずるなり。問う。言う所の化佛は、依正の中には何んぞや。

答う。一義に云う。是れ依報なり。非身相應化なるが故に一義に云う。是れ正報なり。經に普く十方の爲に微妙の法を説くと云う故。已上の二義は記主の相傳なり。問師潤色す。未學取捨し難し。當麻、智光とに兩雙の化佛菩薩有り。

清海に一雙の化佛菩薩有り。みな今と異なり。

＊華中出、三十六百千億佛【標文】

經に云う。衆喜蓮華、世界に周滿す。へ乃至へ一一の華中より三十六百千億の光を出す。一一の光中より三十六百千億の佛を出す。

問う。華光出佛の利益、如何。

答う。華光多佛を出し、多佛また光を放ちて説法利生す。故に經に云う。一一の諸仏また百千の光明へ乃至へ是くの如くの諸仏、各々無量の衆生を佛の正道に安立す。

㊧ 左右樂器（『開壇記』卷三 二十三丁裏・二十四丁表）

＊樂器

空中に樂器五雙あり。第一雙は、右は箏^{ひちりき}、左は龍笛。第二雙は、右は揩鼓^{かいこ}、左は、羯鼓^{かっこ}。第三雙は、右は琴、左は瑟^{しつ}。第四雙は、右は法螺^{ほら}、左は銅鈸^{どうばち}。第五雙は名相を知らず。智曼に九雙、當麻に七雙、清曼に四雙有り。宜しきに随いて畫く所なり。

經に云う。世間の帝王、百千の音樂あり。(乃至)第六天上の萬種の樂音は、無量壽國の諸々の七
喜樹の一種の音聲にしかざること千億倍なり。また自然の萬種の伎樂あり。

觀經に云う。また星月の虚空に懸處するに似たり、天の喜幢の鼓せず自ら鳴るが如し。

小經に云う。彼の佛の國土に常に天樂を作すと。

名相を知らずとは、願文に云う。能く明了に其の名數を辯ずる者有らば、正覺を取らず。
讚に云う。劫を窮めて算數するも名を知らず。

㊦左右雨華（『開壇記』卷三 二十五丁表・裏）

左右空中に雨華繽紛たり。或るは開華、莖葉を具する者有り。或るは具さざる者有り。總じて二十一
華、蓮葩一百八あり。

當麻に二十四華有り。また最頂に一莖二華二葉有り。(上來、當麻と同異を辯ずるは、述獎記に依る。
何んとなれば、述獎記は舊、新、正の三圖を對校して善美を盡す故)

智曼に雨華無し。清曼には則ち有り。

經に云う。風吹きて華を散らし、佛土に徧滿す。色の次第に随つて雜亂せず。柔軟にゅうなん光澤にして馨香きやうこう
芬烈す。また云う。無量の妙華を雨ふらし、風に随つて周徧し、自然に供養すること是くの如く絶せ
ず。

小經に云う。晝夜六時に曼陀羅華を雨ふらす。

淨土論に云う。華衣を雨ふらし莊嚴す。無量の香、普く薰ず。

㊧最上寶網

虚空最上に幔網彌覆し、喜鈴連なり垂れる。此れ乃ち蓮華藏界、因陀羅網いんだらもうの標幟なり。
當麻と智曼とに無し。清曼に則ち有り。

私に謂う。幔網は教門を表す。救済の義なり。故に華嚴經に曰わく。佛教の網を張り、法界の海を亘る。深玄七に云う。寶網覆うことは、徳、満つることを表すと。

害鈴は、淨土論に云う。種々の鈴、響きを發し、妙法音を宣吐す。

般舟讚に云う。重々の羅網あい映飾し、害繩交絡して鈴佩^{れいはい}垂る。

*無量害網彌覆佛土周帀四面乖以害鈴（無量の害網、彌く佛土に覆う。四面に周帀して乖るるに害鈴を以つてす）【標文】

乖は應に垂れるに作すべし。佛土の下に、經に、みな金縷、眞珠の百千の雜害、奇妙珍異なるを以つて莊嚴交飾すの句有り、今、省略す。

夫れ蓮華藏界は、光明充塞して遍せざる所無し。

經に云う。無量壽佛、威神光明、最尊第一にして諸佛の光明の能く及ばざる所なり。へ乃至へ無量壽佛を無量光佛等と號す。

然るに智光等の三變にみな空界の紺瑠璃色なるは、具に述奨及び智清合讚の會釋の如し。

以上のように極樂の五段についてみてきたが、主な特色をあげると次頁の資料Gのようになっている。

資料 G『大經曼荼羅開壇記』『當麻曼陀羅述獎記』の論述にみる「無量寿經曼荼羅」「當麻曼陀羅」「智光曼荼羅」「清海曼荼羅」の特色対照表

[illegible]

[illegible]

第三項 小結

以上、「述所説彌陀行成攝三段」の「所成」の「勝報」、いわゆる極樂段を見てきたが、高田敬輔の描いた「無量寿経曼荼羅」の極樂は、それまでの日本三大曼陀羅（當麻曼陀羅・智光曼荼羅・清海曼荼羅）とは、典拠とする經典が『無量寿経』と『觀無量寿経』と根本的な相違点があるものの、その大きな特色として次のようなことを挙げることができる。

① 宮殿の数は「無量寿経曼荼羅」が中央宮殿と三種六樓、「當麻曼陀羅」は中央宮殿無く三種六樓、空中二種二樓、「智光曼荼羅」は中央宮殿無く二種三樓、「清海曼荼羅」も中央宮殿無く二種三樓である。「無量寿経曼荼羅」と「當麻曼陀羅」では中央宮殿の有無に違いがあるが、構図的に共通点が多いこと。

② 「無量寿経曼荼羅」の三輩生相で、上輩は台上の仏前で、中輩、下輩は池中である。「當麻曼陀羅」九品生相で、上上品が台上、他の八品は池中であり、開合の異であるが、三輩生相と九品生相の違いがあること。

③ 三尊の左右の聖衆が、「無量寿経曼荼羅」は五十一尊、「當麻曼陀羅」は三十七尊、「智光曼荼羅」は二十尊、「清海曼荼羅」は二十七尊であり、それぞれの曼荼羅により相違があること。

④ 「無量寿経曼荼羅」は宝船が無く、宝樹に純樹・雜樹・岸樹があり、「當麻曼陀羅」に七重宝樹、父子相迎会、樹下会、宝船が有り、相違点がみられること。

⑤ 「無量寿経曼荼羅」に辺地胎生があるが、「當麻曼陀羅」、「智光曼荼羅」、「清海曼荼羅」には無いこと。

以上、「無量寿経曼荼羅」は『觀無量寿経』に基づく「當麻曼陀羅」とは異なり、『無量寿経』の特色をより鮮明に描き出そうとする意図が表れた、高田敬輔独自の曼荼羅であるということができるのである。

(注4)	(注3)	(注2)	(注1)
般舟讚（浄土宗全書第四卷五三七頁b11）	浄土宗全書第一卷二二頁	浄土宗全書第一卷四二頁	慧遠『無量寿經義疏』（浄土宗全書第五卷二頁）

第四節 「述所説彌陀行成攝三段」の「所攝」

第一項 「所攝」の「凡夫往生」

(一) 「三輩往生」

① 「無量寿経曼荼羅」と「選択集十六章之図」の対比

高田敬輔が描いた「無量寿経曼荼羅」と「選択集十六章之図」の両曼荼羅の中で、絵相が唯一共通しているのが、「無量寿経曼荼羅」の三輩往生段と「選択集十六章之図」の〈第四 三輩念佛往生章〉である。

上輩往生の絵相は、殿上で合掌称念している一僧の命終にあたり、阿弥陀仏が大光明を放ち、二十五菩薩とともに紫雲に乗り、来迎引接する場面である。

中輩往生の絵相は、優婆夷が終焉を迎える時、阿弥陀仏が七菩薩とともに来現する場面である。周囲には塔堂が起立し、沙門に飯食が施され、仏前には繪を懸け、燈を点し、香を焼き、華が散りばめられている場面である。

下輩往生の絵相は、病床に臥す在家者の元に一僧が数珠を取り、もう一僧が磬を鳴らして念仏を称えている場へ、立撮即現の三尊が夢見のごとく来迎する場面である。

そこで、このような両曼荼羅の三輩往生段を対比しながら、隨天がどのような視点で注釈を加えているか『大経曼荼羅開壇記』^(注1)に基づいてその背景を探ることにする。

さらに、高田敬輔の師である良照義山が、どのような三輩往生觀をもっていたのか、その著『無量寿経隨聞講録』^(注2)も参照にしながら、三輩往生段を検証する。

「無量寿経曼荼羅」と「選択集十六章之図」の三輩往生段の対比

高田敬輔「無量寿経曼荼羅

隨天『大經曼荼羅開壇記』卷三 二十七丁、《太字・書き下し文は筆者》

上輩往生

標文 此等衆生臨壽終時無量壽佛與諸大衆現其人前

捨家捨而作沙門發菩提心

上方右二重殿上重閉戸下重一僧向。左展具机上繙梵香供養合掌稱名臨命終時。紫雲變璽聖衆來迎。彌陀定印坐蓮向。右放一大光明。照行者頂。五五菩薩側塞雲中。觀音持金蓮臺。勢至合掌右三菩薩。其一持蓋其二執幡。其三合掌左三菩薩皆俱合掌。後十七菩薩二菩薩合掌其餘印隱上三立化佛三宮殿三畫樹一雨華。上方右に二重の殿あり。上重は戸を閉す。下重に一僧左に向きて展具し、机上に經を繙き、梵香供養して合掌稱名す。命終の時に臨みて紫雲變璽として聖衆來迎す。彌陀、定印、蓮に坐し、右に向き、大光明を放ち、行者の頂を照らす。五五の菩薩、雲中に側塞す。觀音は金蓮臺を持ち、勢至は合掌す。右に三菩薩。其の一は蓋を持ち、其の二は幡を執り、其の三は合掌す。左に三菩薩あり。皆俱に合掌す。後ろに十七菩薩あり。二菩薩は合掌、其餘は印隱る。上に三の立化佛と三宮殿と三畫樹と一つの雨華あり。

中輩往生

標文 起立塔像飯食沙門懸繒燃燈散華燒香

殿内一僧昇、坐乗乘二如意、向、右前一優婆夷向、右合掌一侍女向、左合掌優婆夷終焉迎相、彌陀定印坐、蓮來現、左右七菩薩侍立、左三其持蓮其二捧幡其三捧蓋右四其一二三合掌其四印隱（是持蓮）松林森鬱彩雲周廻中一浮圖（是燈籠）左一僧坊一僧臥坐向、右左手取鉢右手持匙案上五器優婆塞奉二器孟（是門食）立（是僧）殿内右壁安一彌陀像、右結一空風、左印不（見像前設案懸繪捲帳帳燈臺華別設小案焚香散二華葩香散草）（殿内に一僧座に昇り如意を乗りて右に向かう。前に一優婆夷あり右に向きて合掌す。一侍女左に向きて合掌す。優婆夷の終焉の迎相なり。彌陀、定印、蓮に坐して來現したまふ。左右に七菩薩侍立す。左に三。其の一は蓮を持し、其の二は幡を捧じ、其の三は蓋を捧ず。右に四あり。其の一と二と三とは合掌す。其の四は印隱る（是れ奉持齋戒）。松林森鬱として彩雲周廻す。中に一浮圖あり（是れ起立塔像）。左に一僧坊あり。一僧臥坐して右に向かい、左手に鉢を取り、右手に匙を持す。案上に五器あり。一優婆塞器孟を奉じて立つ（是れ飯食沙門）。殿内右壁に彌陀像を安ず。右は空風を結び、左印は見えず。像前に案を設け、繪を懸け、帳を捲き、燈を然じ、華を盛り、別に小案を設けて焚香し、前に華葩を散す（是れ然燈燒香散華）。

下輩往生

標文 此人臨終夢見彼佛

宅内壇上掛一畫像、焚香供養主人病牀合掌而眠枕上一僧鳴磬念佛側一僧右手取念珠、左手内収一婦人下坐奉湯羹、三尊乘雲立撮印現宛如夢見彌陀坐蓮臺、右手結空風、左手低同空風觀音持蓮勢至合掌、(宅内の壇上に一畫像を掛け、焚香供養す。主人病牀に合掌し、眠る。枕上に一僧あり。磬を鳴らし、立撮して側に一僧あり。右手に念珠を取り、左手内に収む。一婦人下坐にして湯羹を奉ず。三尊雲に乗じ、立撮して。即ち現れたまふ。宛として夢見の如く。彌陀蓮に坐し、右手を挙げ、空風を結ぶ。左手低くして同じく空風なり。觀音、蓮を持ち、勢至、掌を合わす。)



② 「無量寿経曼荼羅」三輩往生段の特色

前項で明らかなように、「無量寿経曼荼羅」三輩往生段の大きな特色の一つは、上輩往生、中輩往生、下輩往生それぞれが、一区画ずつに仕切られた往生相で描かれ、そして、その往生相の中に、標文が記されていることである。ちなみに「選択集十六章之図」は、章の題である章標しか記されず、絵相の細部を説明する標文は一切無い。

その往生相に記される標文は、左記のようになっている。

● 上輩往生

- ・ 捨家棄欲而作沙門發菩提心

● 中輩往生

- ・ 起立塔像
- ・ 飯食沙門
- ・ 懸繪燃燈
- ・ 散華焼香

● 下輩往生

- ・ 此人臨終夢見彼佛

この標文に再び着目すると、

- ・ 捨家棄欲：家を捨て、欲を棄て、
- ・ 而作沙門：沙門（出家者）に作り、
- ・ 發菩提心：菩提心を發す。
- ・ 起立塔像：堂塔を建て、仏像を造る。
- ・ 飯食沙門：沙門（出家者）に食事を捧げ、
- ・ 懸繪燃燈：繪かよりを懸け、燈を燃し、
- ・ 散華焼香：華を散らし、香を焼く。

とあり、この内容は、まさしく念仏往生行ではなく、いわゆる余行を記したものである。

下 輩 往 生	中 輩 往 生	上 輩 往 生	全 体	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 阿弥陀三尊、立撮即現して迎接。 ・ 一僧、磬を鳴らし、側に一僧、念珠を執り、念仏を称える。一婦人、下座で湯薬を奉ず。 ・ 宅内壇上に掛幅、焚香。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 繪を懸け、燈を燃じ、散華焼香。 ・ 浮圖を図し、起立塔像。 ・ 飯食沙門の絵相、優婆塞、器盂を持す。 ・ 弥陀、七菩薩を図し、奉持齋戒。 ・ 優婆夷の終焉の迎相。如意を乗る一僧。脇に一侍女。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他に三体の立化佛、三つの宮殿、一つの雨華、四本の寶樹。 ・ 二重殿の下重の境内で合掌称念の一僧。 ・ 阿弥陀仏と二十五菩薩が来迎。觀音の金蓮台、蓋、幡を持す二菩薩以外、他の菩薩の持物見えず。 <p>《『大経曼荼羅開壇記』には、三寶珠とあるが、絵相には四本の寶珠あり。》</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 上輩往生、中輩往生、下輩往生、それぞれの区画あり。 ・ 各往生の絵相に、標文の記述あり。 	「無量寿経曼荼羅」三輩往生段
<ul style="list-style-type: none"> ・ 阿弥陀三尊、立撮即現して迎接。 ・ 枕元に一僧、如意を乗る。 ・ 宅内、掛幅無し。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 繪を懸け、燈を燃し、散華、焼香。 ・ 一浮圖のみ。 ・ 飯食沙門の絵相無し。 ・ 弥陀、觀音、勢至。後に三菩薩。脇に五体の立化仏。 ・ 阿弥陀仏の前で優婆塞、合掌称念。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 宮殿、寶樹、雨華の表現なし。 ・ 二十五菩薩、樂器等の持物あり。他に九体の立化仏。 ・ 殿なし。坐具上で合掌称念の一僧。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 三輩往生それぞれを一つの絵相に描く。 ・ 章標《第四 三輩念仏往生章》のみ記述。 	「選択集十六章之図《第四 三輩往生章》」

この標文のままならば、上輩往生者は、《捨家棄欲》し、《而作沙門》になり、《發菩提心》することによって、《此等衆生》は、《臨壽終時》に《無量壽佛與諸大衆》が、《現其人前》して往生することになる。

中輩往生の者は、《起立塔像》し、《飯食沙門》して、《懸繪燃燈》、《散華燒香》することにより往生する。

さらに、下輩往生の者は、掛幅を懸け、香を焚き、僧の念仏により、《此人臨終夢見彼佛》することができるといことになる。

高田敬輔は、「無量寿経曼荼羅」三輩往生段に絵相を描き、右のような標文を記したことは、このような余行を行うことを「無量寿経曼荼羅」を観る者に望んだのだろうか、という大きな疑問が生じるのである。

なぜ、高田敬輔は「無量寿経曼荼羅」三輩往生段に、諸々の余行を示す標文を記したのか、まず初めに『無量寿経』の三輩往生行を、そして次に、三輩往生行と最も関連する『観無量寿経』の九品往生行を、さらに、法然が『無量寿経』の三輩往生行と『観無量寿経』の九品往生行をどのように捉えて『選択本願念仏集』で説いているかを改めて読み直し、加えて高田敬輔の師と称される良照義山が『無量寿経随聞講録』でどのような三輩往生観をもっていたか、考察をすることにする。

(二) 念仏往生行と余行往生行

① 「三輩俱云『念仏往生』」とは

『無量寿経』^(注3)の上輩、中輩には「一向専念『無量壽佛』」、下輩には「一向専意乃至十念念『無量壽佛』」とそれぞれに念仏行が説かれているが、問題となるのは、その念仏行の前後に、

- ・ 上輩…捨_レ家棄_レ欲而作_二沙門_一發_二菩提心_一
- ・ 中輩…多少修_二善奉_一持_二齋戒_一起_二立塔像_一飯_二食沙門_一懸_二繪然_一燈散_二華燒_一香
- ・ 下輩…發_二無上菩提之心_一

と念仏行とは異なる余行が説かれていることである。

一方の『観無量寿経』^(注4)の九品往生はどうだろうか。

- ・上品上生：一者慈心不殺具諸戒行二者讀誦大乘方等經典三者修行六念
- ・上品中生：善解義趣於第一義心不驚動深信因果不謗大乘
- ・上品下生：信因果不謗大乘但發無上道心
- ・中品上生：受持五戒持八戒齋修行諸戒不造五逆無衆過患
- ・中品中生：若一日一夜受持八戒齋若一日一夜持沙彌戒若一日一夜持具足戒威儀無缺
- ・中品下生：孝養父母行世仁慈

とあるように、上品の上生、中生、下生、中品の上生、中生、下生の六品は、いずれも種々の戒を受持したり、經典を誦誦したり、六念を修行したり、父母に孝養したり、世の仁愛を行じたりと、念佛行とは異なる余行が説かれているのである。

ただし、下品の上生、中生、下生の三品は、「遇善知識」とあるように、善知識と遇い、

- ・下品上生：遇善知識爲讚大乘十二部經首題名字以聞如_レ是諸經名故除_二卻千劫極重惡業_一智者復教合掌叉手

稱南阿彌陀佛

- ・下品中生：遇善知識以大慈悲爲說阿彌陀佛十力威德廣說_二彼佛光明神力_一亦讚_中戒定慧解脫解脫知見_上
- ・下品下生：遇善知識種種安慰爲說妙法教令念佛此人苦逼不遑念佛善友告言汝若不_レ能念佛者應稱無量

壽佛如_レ是至心令_下聲不_レ絕具足十念稱南無阿彌陀佛

と「稱南無阿彌陀佛」することにより、まさに念仏往生を行ずることになるのである。

このようにみてくると、『無量寿経』の三輩往生行には、いずれも念仏往生を説きながら余行が付加されていること、また、『観無量寿経』の九品往生行は、上品、中品の六品には余行が説かれ、下品に念仏往生行が説か

れているのである。

そこで新たな疑問として、なぜ三輩往生を説きながら、『無量寿経』と『観無量寿経』の教えに違いが生じることかという点である。

その疑問に、明快な回答を与えてくれるのが、法然の『選択本願念仏集』^(注5)である。

『選択本願念仏集』の十六章中、三輩往生を説くのが「第四 三輩念仏往生之文」である。この章は、引用文が「無量寿経下云」から始まり、『無量寿経』の三輩往生がそのまま引用された後、私釈段が説かれる構成になっている。

その法然の私釈段を検討すると、私釈段の初めに^(注6)、

私問曰上輩文中念佛之外亦有捨家棄欲等餘行中輩文中亦有起立塔像等餘行下輩文中亦有菩提心等餘行何故唯云念佛往生乎答曰善導和尚觀念法門云又此經下卷初云佛説一切衆生根性不同有上中下隨其根性佛皆勸專念無量壽佛名其人命欲終時佛與聖衆自來迎接盡得往生依此釋意三輩俱云念佛往生也

とあり、上輩に「念佛の外に亦捨家棄欲等の餘行有り」、中輩に「亦起立塔像等の餘行有り」、下輩に「亦菩提心等の餘行有り」と、それぞれに余行があるのになぜ唯念仏往生というのかという問いに対して、その答えに善導の『観念法門』の攝生増上縁^(注7)を引き、

又此經下卷初云佛説一切衆生根性不同有上中下隨其根性佛皆勸專念無量壽佛名其人命欲終時佛與聖衆自來迎接盡得往生此亦是攝生増上縁

と、一般衆生には、生まれつきの性質や気力は同じではなく、上中下と分けられるが、いずれの者にも、その根性に随って、仏は皆に無量寿仏の名を専ら念ずるように勧めているのであり、そうすれば^(注8)、

其人命欲終時佛與聖衆自來迎接盡得往生

その念じた人が命終の時に、仏が聖衆と俱に自ら来迎して、迎接し、尽く浄土に往生させてくれる、というので

ある。

だから^(注9)、

依^二此釋意^一三輩俱云^二念佛往生^一也

にあるように、法然は、この善導の釈した文を根拠にすれば、三輩俱に念佛往生と云うのである、と説いている。

② 「九品之行唯在^二念仏^一」とは

ところが、もう一点、どうして念仏往生行を勧めるのであれば、わざわざ余行を説く必要があるのか、そしてまた、その余行を説くにもかかわらず、棄てるといふ点はまだ解明されていないのである。

そこで、どうして余行を棄てて念仏といふのか、という問い^(注10)を發している。

問曰此釋未^レ遮^二前難^一何棄^二餘行^一唯云^二念佛^一乎

それに答えるように^(注11)、

答曰此有^二三意^一一爲^下廢^二諸行^一歸^中於念佛^上而説^二諸行^一也二爲^レ助^二成念佛^一而説^二諸行^一也三約^二念佛諸行二門^一各爲^レ立^二三品^一而説^二諸行^一也

と、三つの意があり、その一つは諸行を廢して念仏に歸すためであり、二つ目は念仏を助成するためであり、そして三つ目は念仏や諸行に、それぞれ三品を立てるためであると説いている。

そして、それぞれについてさらに詳しく、

一爲^下廢^二諸行^一歸^中於念佛^上而説^二諸行^一者準^下云^四善導觀經疏中上來雖^レ説^二定散兩門之益^一望^二佛本願^一意在^二衆生一向專稱^二彌陀佛名^一之釋意^上且解^レ之者上輩之中雖^レ説^二菩提心等餘行^一望^二上本願^一意唯在^二衆生專稱^二彌陀名^一而本願中更無^二餘行^一三輩俱依^二上本願^一故云^二一向專念無量壽佛^一也

〈中略〉

今此經中一向亦然若念佛外亦加餘行即非一向若準寺者可云兼行既云一向不兼餘明矣雖先說餘行後云一向專念明知廢諸行唯用念佛故云一向若不然者一向之言最以匡消歟

とあるように、初めの諸行を廢して念仏に歸せんがために諸行を説くというのは、善導が『觀經疏』^(注12)の中でいうように、定散兩門に益があるというものの、仏の本願にてらしてみれば「意在衆生一向專稱彌陀佛名」に他ならないというのである。しかも、一向というのは余を兼ねないから一向というのであつて、もし念仏の外に余行を加えれば一向ではなく兼行になる。だから、先に余行を説いていても、後で一向專念と云っているので、明らかに諸行を廢して、唯、念仏を用いるということなのである、このようなことから一向の文字は消しがたい、と述べている。

そして、さらに二つ目の念仏を助成せんがために、此の諸行を説くというのには、二つの意があり、

二爲助成念佛說此諸行者此亦有二意一以同類善根助成念佛二以異類善根助成念佛

その一つは同類の善根を以って念仏を助成するものと、もう一つは異類の善根を以って念仏を助成するものがあるというのである。

2

初同類助成者善導和尚觀經疏中舉五種助行助成念佛一行是也具如上正雜二行之中說次異類助成者先就上輩而論正助者一向專念無量壽佛者是正行也亦是所助也捨家棄欲而作沙門發菩提心等者是助行也亦是能助也謂往生之業念佛爲本故爲一向修念佛捨家棄欲而作沙門又發菩提心等也就中出家發心等者且指初出及以初發念佛是長時不退之行寧容妨礙念佛也中輩之中亦有起立塔像懸繪燃燈散華燒香等諸行是則助成念佛也其旨見往生要集謂助念方法中方處供具等是也下輩之中亦有發心亦有念佛助正之義準前可知其初めの同類の助成というのは、善導の『觀經疏』^(注13)に五種の助行を挙げているように、念佛の一行を助成するものである。

そして、次に異類の助成というのは、先ず上輩についていえば、一向專念無量壽佛とは、正行であり、助成

されるものである。捨家棄欲、而作沙門、發菩提心等というのは、これは助行であり、能く念仏を助けるものである。だから往生の業というのは、念仏を根本とするものであつて、一向に念仏を修するために、家を捨て、欲を棄て、沙門となるものなのであり、また、菩提心を發すことになるのである。その中でも出家發心等というのは、初めの頃の念仏を修するための發心であるのに対し、念仏は、生涯に亘つて長時不退に修すものであるから、このような諸行は念仏を妨げるようなものではないと述べている。

そして、中輩の中に、また起立塔像懸繒然燈散華燒香等の諸行があげられているが、これも念仏を助成するものであり、その趣旨については、『往生要集』の助念方法^(注14)の中の方處供具等に詳しく説かれているというのである。

また、下輩の中に、菩提心を發すことと、念仏が説かれているが、念仏を助正することについては、右の上輩、中輩に従つて知ることができるであらうと説いている。

さらに三つ目の、念仏諸行に約して、おのおの三品を立てんがために諸行を説く、というのは、

三約^二念佛諸行^一各爲^レ立^二三品^一而説^二諸行^一者先約^二念佛^一立^二三品^一者謂此三輩中通皆云^二一向專念無量壽佛^一是則約^二念佛門^一立^二其三品^一也故往生要集念佛證據門云雙卷經三輩之業雖^レ有^二淺深^一然通皆云^二一向專念無量壽佛^一同感之師

次約^二諸行門^一立^二三品^一者謂此三輩中通皆有^二菩提心等諸行^一是則約^二諸行^一立^二其三品^一也故往生要集諸行往生門云雙卷經三輩亦不^レ出^二此^一上已

まず、念佛について三品を立てるのは、三輩を通じて皆一向專念無量壽佛とあることから、念仏にも三種あることを示したもので、『往生要集』の念佛證據門^(注15)が示すように、『無量壽經』の三輩の行業にも淺深があり、しかも、皆、一向專念無量壽佛と云うところからも明らかであると説いている。そして、懷感師も『釋淨土群疑論』^(注16)で、これと同じことを述べていると記している。

次に諸行についても三品が立てられているのは、三輩を通して、皆、菩提心等の諸行があげられていることか

ら三種の諸行があることを示すものであり、これも『往生要集』の諸行往生門(注17)に『無量寿經』の三輩の諸行が引かれていることから明らかであるとしている。

そして、

凡如_レ此三義雖_レ有_二不同_一俱是所_三以爲_二一向念佛_一也初義卽是爲_二廢立_一而說謂諸行爲_レ廢而說念佛爲_レ立而說次義卽是爲_二助正_一而說謂爲_レ助念佛之正業而說_二諸行之助業_一後義卽是爲_二傍正_一而說謂雖_レ說_二念佛諸行二門_一以_二念佛而爲_レ正_一以_二諸行而爲_レ傍故云_二三輩通皆念佛_一也但此等三義殿最難_レ知請諸學者取捨在_レ心今若依_二善導_一以_レ初爲_レ正耳

このように三義に不同が有るものの、俱に是れは一向念佛の爲のものなのである。

初めの義は、廢立の為に説くもので、諸行は廢の為に、念佛は立の為に説くのである。

次の義は、助正の為に説くもので、念佛の正業を助ける為に諸行の助業を説くのである。

後の義は、傍正の為に説くもので、念佛と諸行の二門を説くのであるが、念佛を以て正とし、諸行を以て傍とするものである。

だから、三輩を通じて、皆、念佛ということになる。ただし、この三義については、殿最（どれが先でどれが後か）勝劣をつけ難いものなので、学ぶ者は良く仏の意を得て取捨して欲しいものである。今は、善導の教えに基づくならば、初めの義を以て正とするものであると述べている。

そしてさらに、三輩については一向念仏であることが明らかになったが、九品の念仏についてはどうなのか、ということについて、次のような問いかけをしている。

問曰三輩之業皆云_二念佛_一其義可_レ然但觀經九品與_二壽經三輩_一本是開合異也若爾者何壽經三輩之中皆云_二念佛_一至_二觀經九品_一上中二品不_レ說_二念佛_一而至_二下品_一始說_二念佛_一也答曰此有_二二義_一一如_二問端_一云_二雙卷三輩觀經九品開合異者以_レ此應_レ知九品中皆可_レ有_二念佛_一云何得_レ知三輩之中皆有_二念佛_一九品之中何無_二念佛_一乎故往生要集云問

念佛之行於_二九品中_一是何品攝答若如_レ說行理當_二上上_一如_レ是隨_二其勝劣_一應_二分_二九品_一然經所_レ說九品行業是示_二一端_一理實無量_{上_レ巳}故知念佛亦可_レ通_二九品_一觀經之意初廣說_二定散之行_一普逗_二衆機_一後廢_二定散_一二善歸_二念佛一行_一所謂汝好持是語等之文是也其義如下具述_二故知九品之行唯在_二念佛_一矣

ここでは、三輩の業は、皆、念佛であり、觀經の九品と、『無量壽經』の三輩とは開合の異であることが明らかになったが、どうして、三輩には、皆、念仏と云い、『觀無量壽經』の九品では、上品、中品に念仏が説かれず、下品だけに念仏が説かれるのかと、さらに問いかけがされている。

それに答えて、ここには二つの意義があるとしている。

その一つは、右に云うように、『無量壽經』の三輩と『觀無量壽經』の九品とは、開合の異であるので、三輩の中に、皆、念仏があることから、九品の中にも、皆、念仏がなければならぬということである。

だから『往生要集』_(注18)には、

問念佛之行於_二九品中_一是何品攝答若如_レ說行理當_二上上_一如_レ是隨_二其勝劣_一應_二分_二九品_一然經所_レ說九品行業是示_二

一端_一理實無量

とあるように、念仏行は九品のいずれの品に摂まれるものであるのかという問いに対し、もし經に説かれるように行ずれば、当然のこととして上品上生であるが、一般の衆生には勝劣があり、それに随って九品に分け、その一端を示したに過ぎない。実際には九品に納まらず分類も無数にある、と述べられていることから、念仏は九品のいずれにも通ずるものであることを知ることができるのである。

二つ目に、『觀無量壽經』の意は、初めには広く定散の行を説いて、多くの機根の人々にあうように説き、後にはその二善を廃捨して、ただ念仏の一行に帰せしめるため_(注19)、

汝好持_二是語_一持_二是語_一者即是持_二無量壽佛名_一

とあるように、『觀無量壽經』の結論といふべき、仏が念仏の一行のみを、最後に、阿難に付属したことである。

だから、九品の行は、唯、念仏にあることを知らねばならないと説かれているというのである。
このようなことについて、高田敬輔の師と仰がれる良照義山は、どのような解釈をしているのか、次にみることにする。

③ 良照義山の三輩往生観

義山は『無量寿経』の解釈を『無量寿経随聞講録』(注20)に著している。
その中で三輩往生について記しているのは(注21)、

凡有三輩等者第十九願之成就也上念佛餘行機就レ舉一具凡三輩爾三輩九品同異之義諸師不レ同鸞師嘉祥淨影
法位龍興憬興源清此七家共存二同義一天台義寂孤山靈芝此四家並云二不同一有二同不同一同義爲レ正鸞師略論云无
量壽經中唯有二三輩上中下一无量壽觀經中一品又分爲二上中下一三三而九也合爲二九品一選擇云觀經九品與二壽經

諸師ノ不同如選擇大綱鈔中十五紙四家
七家作圖示之文二藏義卅卷五紙委釋

とあるように、義山は、三輩往生は四十八願の第十九、来迎引接願の成就であるという前提のもとに、『選択本願念仏集』に説かれているように『観無量寿経』の九品と『無量寿経』の三輩は、開合の異であるとし、このことは元祖法然上人の伝授したものであることを強調している。

そして、さらに(注22)、

扱三輩去行通二念佛及餘行一皆悉往生行也然念佛本願行餘行非本願行先法藏比丘淨土建立給事第十八願十方衆
生誓所念佛衆生置處ナリ卽是所二以念佛爲一正因也雖然餘行者亦非不攝就之選擇集云念佛往生三輩篇此約二

二尊本意如斯書給事也依經文望機類見之時念佛及餘行之三輩也此義可得意置事也

三輩の去行は、念仏についても余行についても往生行であることに変わりが無い。しかし、念仏は本願の行であり、余行は非本願の行である。なぜならば、仏が法藏比丘の時、淨土を建立することを第十八願に誓ったこと

が、念仏衆生の心の置き所となり、念仏こそが正因となっていることによると述べている。

ただし、そうは云うものの余行もまた摂しないわけでもない。このことについて『選択集』には念仏往生三輩篇とあるが、これは二尊の本意を考慮に入れて書いたものであろう。經文によって機類を考慮するならば、念仏にも余行にも三輩があると考えられるので、このことは心得ておくべきであろうと記している。

このことから、念仏ばかりか余行にも、その機類によって三輩があることを説いていることがわかるのである。そして、さらに、なぜ一向専念無量寿仏と云うかについては^(注23)

然念佛本願行故勸云「一向」一向者對「二向三向等」之言不「兼」餘之意也然三輩文中念佛外說「諸行業」何故唯云「念佛往生乎就」之有「廢立助正傍生三義」

念佛は本願の行であるので勧めて一向と云うのである。二向や三向等に対する言葉で、余の行業を兼ねないことをいうのである。

また、三輩の文の中に、念佛の外に諸々の行業を説いているが、どうしてもただ念仏往生と云うのかという疑問については、廢立、助正、傍正の三義が有るからであると述べている。

そして^(注24)

一爲「廢」諸行「歸」於念佛「說」諸行「也」

（中略）

譬如「物兩方並置吟味是非得失若不」並則難「顯」是非勝劣「故今念佛特置」一向之言「然則三輩一向流通付屬一合其意顯然也觀經流通亦此規轍二經相合其旨著明也」

その第一の理由は、諸行を廢して念仏に帰すために諸行を説くものである。

譬えば、物を両方に並べ置いて、その是非得失を吟味するようなものである。もし、並べなければ、その是非勝劣を顕わすことは難しい。だから、念仏一つだけに一向の言を置くのである。三輩の一向流通を付属している

のは、その意図が顕かであるし、観經の流通分もまたその通りである。二經ともに相い合して、その趣旨は著明なのである、と余行を説くのは廢立のためで、念仏の一行を比較することによって際立たせるためであると説いている。

次に^(注 25)、

二爲^レ助^二成念佛^一而説^二諸行^一其中今説^二異類助業^一也要集意

第二の理由は、念仏を助成するために諸行を説くものであり、その中でも今は異類の助業を説くものであるとしている。

さらに^(注 26)、

三約^二念佛諸行^一二門^一各爲^レ立^二三品^一而説^二諸行^一是約^下兼^二餘行^一者明^二往生^一也謂所化衆生性習不同執法各異也是故如來隨^二其性欲廣説^一諸行及念佛其中念佛爲^二經正意^一故云^二一向^一自餘諸行非^二經正意^一是故不^レ置^二一向之言^一

上來漢語燈一卷三十五紙已下決疑鈔三卷卅紙大綱鈔中十一紙

也但此等三義取捨在^レ心今若依^二善導^一以^レ初爲^レ正耳尚委如^二選擇第四章^一とあるように、第三の理由は、念仏と諸行の二門について各々三品を立てるために諸行を説くものである。このことは余行を兼ねるものについて往生を説くもので、所化の衆生は性質が不同のため、執法もそれぞれ異なるものであるから、如來はその性欲に随って、広く諸行や念仏を説いたのである。

そして、念仏は經の正意であるから一向といい、自余の諸行は經の正意ではないので一向という言葉は用いないというのである。ただしこれらの三義について、その取捨は、心に留め置くべきである。今、もし善導の言によれば、初めを以って正とするだけである、尚、委しくは選択集の第四章にある如し、と義山は述べているのである。

「無量壽經曼荼羅」三輩往生段に、なぜ余行の絵相や標文を記し、「選択集十六章之図」には記されないかという疑問から、典拠となる『無量壽經』『觀無量壽經』『選択本願念仏集』を取り上げ、さらに講説書の『無量

寿経随聞講録』、そして曼荼羅の注釈書である『大経曼荼羅開壇記』を検証した結果、次のようなことが頭らかになった。

＊ 「無量寿経曼荼羅」の三輩往生の絵相に余行が描かれ、その標文が記されているが、三輩のいずれにも「一向専念無量寿仏」と経文に説かれていることから、念仏の一行によるということ。

＊ 『無量寿経』の三輩往生と『観無量寿経』の九品往生は、開合の異であること。また、念仏と余行を並べるのは、捨劣得勝し、廃立・助正・傍正するためであり、唯、念仏の一行に帰すためであること。

＊ 『観無量寿経』に余行が説かれてはいるが、後に定散二善が廃され、付属されるのは念仏だけであるので、ただ念仏の一行にあるということ。

＊ また、良照義山は、右の『選択本願念仏集』の説示を踏襲した上で、三輩往生は四十八願の第十九、来迎引接願の成就であることを前提に、三輩と九品は開合の異であり、元祖法然上人の伝授したものであることを強調していること。

＊ さらに、三輩の去行は、念仏も余行も往生行であるが、念仏は本願の行であることから一向といい、余行は非本願の行であるので一向ではないこと。また、経文によれば、機類によって念仏にも余行にも三輩があると考えられるということ。

等をあげることができ、なぜ余行を描き、標文にも取り上げたかは、ただ一向に専ら阿弥陀仏の御名を称えることが往生行であることを強調するためであったと考えられる。

(注1) 随天『大經曼荼羅開壇記』卷三 二七丁表、三八丁（安永九年刊 京師書林 赤井長兵衛 澤田吉左右衛門）

(注2) 良照義山『無量壽經隨聞講錄』卷下之一（浄土宗全書第十四卷四〇二頁）

(注3) 『無量壽經』（浄土宗全書第一卷一九、二〇頁）

(注4) 『觀無量壽經』（浄土宗全書第一卷四六、五〇頁）《太字は本文に引用部分》

(注5) 『重鑄選擇本願念佛集』卷本 二九丁表、三五丁裏（元禄九年刊 沙門義山募刻 嘉永二年再刻）

(注6) 前掲『選擇本願念佛集』卷本 三〇丁裏

(注7) 善導『觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門』（觀念法門）一卷（浄土宗全書第四卷二三三頁）

又此經下卷初云佛說一切衆生根性不同有「上中下」隨「其根性」佛皆勸專念「無量壽佛名」其人命欲終時佛與「聖衆」自來迎接盡得「往生」此亦是攝生増上緣

(注8) 前掲『選擇本願念佛集』卷本 三一丁表

(注9) 前掲『選擇本願念佛集』卷本 三一丁表

(注10) 前掲『選擇本願念佛集』卷本 三一丁表

(注11) 前掲『選擇本願念佛集』卷本 三一丁表

(注12) 善導『觀經正宗分散善義』卷第四（浄土宗全書第二卷七一頁）

(注13) 善導『觀經正宗分散善義』卷第四（浄土宗全書第二卷五八頁）

(注14) 源信『往生要集』大文第五助念方法 第一方處供具（浄土宗全書第十五卷八八頁）

(注15) 源信『往生要集』大文第八念佛証據（浄土宗全書第十五卷一二九頁）

(注16) 二雙卷經三輩之業雖「有淺深」然通云「一向專念無量壽佛」

懷感『釋浄土群疑論』卷第五（浄土宗全書第六卷七〇頁）

无量壽經又言上中下輩行有「淺深」皆唯一向專念「阿彌陀佛」

● 石井教道『選擇集全講』二四四頁【註】（二）群疑論卷五（浄全六ノ六六）は、（浄全六ノ七〇）の誤り。

(注 17) 源信『往生要集』大文第九往生諸行 第一諸經（淨土宗全書第十五卷一三二頁）

雙卷經三輩之業亦不出此

(注 18) 源信『往生要集』大文第十問答料簡 第四尋常念相（淨土宗全書第十五卷一四一頁）

(注 19) 『觀無量壽經』（淨土宗全書第一卷五一頁）

(注 20) 前掲『無量壽經隨聞講錄』卷下之一（淨土宗全書第十四卷二四八、五三〇頁）

(注 21) 前掲『無量壽經隨聞講錄』卷下之一（淨土宗全書第十四卷四〇二頁）

(注 22) 前掲『無量壽經隨聞講錄』卷下之一（淨土宗全書第十四卷四〇二、四〇三頁）

(注 23) 前掲『無量壽經隨聞講錄』卷下之一（淨土宗全書第十四卷四〇三頁）

(注 24) 前掲『無量壽經隨聞講錄』卷下之一（淨土宗全書第十四卷四〇三、四〇四頁）

(注 25) 前掲『無量壽經隨聞講錄』卷下之一（淨土宗全書第十四卷四〇四頁）

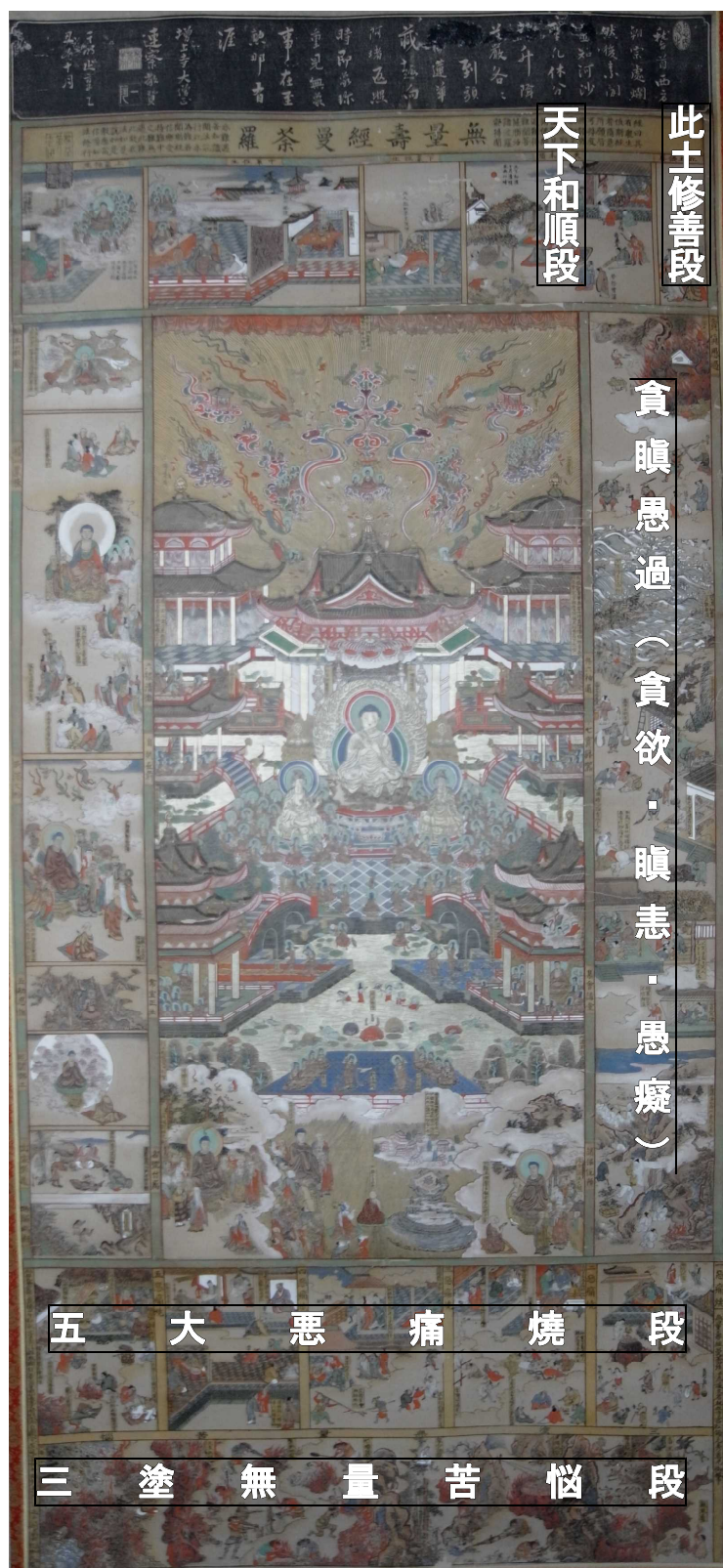
(注 26) 前掲『無量壽經隨聞講錄』卷下之一（淨土宗全書第十四卷四〇四頁）

第二項 「所攝」の「厭欣境界」

(一) 「懲惡」の「舉煩惱過」の「正明三毒」(三毒段)

「無量寿経曼荼羅」の明厭欣境界の絵相は、經典『無量寿経』に説かれる流れからみれば、左図のように、左縁に貪瞋愚過(貪欲・瞋恚・愚癡)段が配され、下段に五大惡痛燒(一惡痛燒・二惡痛燒・三惡痛燒・四惡痛燒・五惡痛燒)段、最下段に三塗無量苦惱段、そして、上段に移り、此土修善段、天下和順段と続いている。

《参考資料①「無量寿経曼荼羅」の明厭欣境界の絵相配置》



これは『科図 無量寿経』^(注1)によれば、左図のように、正宗分の後半部分「舉苦令厭」に位置し、

* 貪欲・瞋恚・愚癡の三煩惱の過を挙げる《舉煩惱過…a》【貪瞋愚の三毒段】

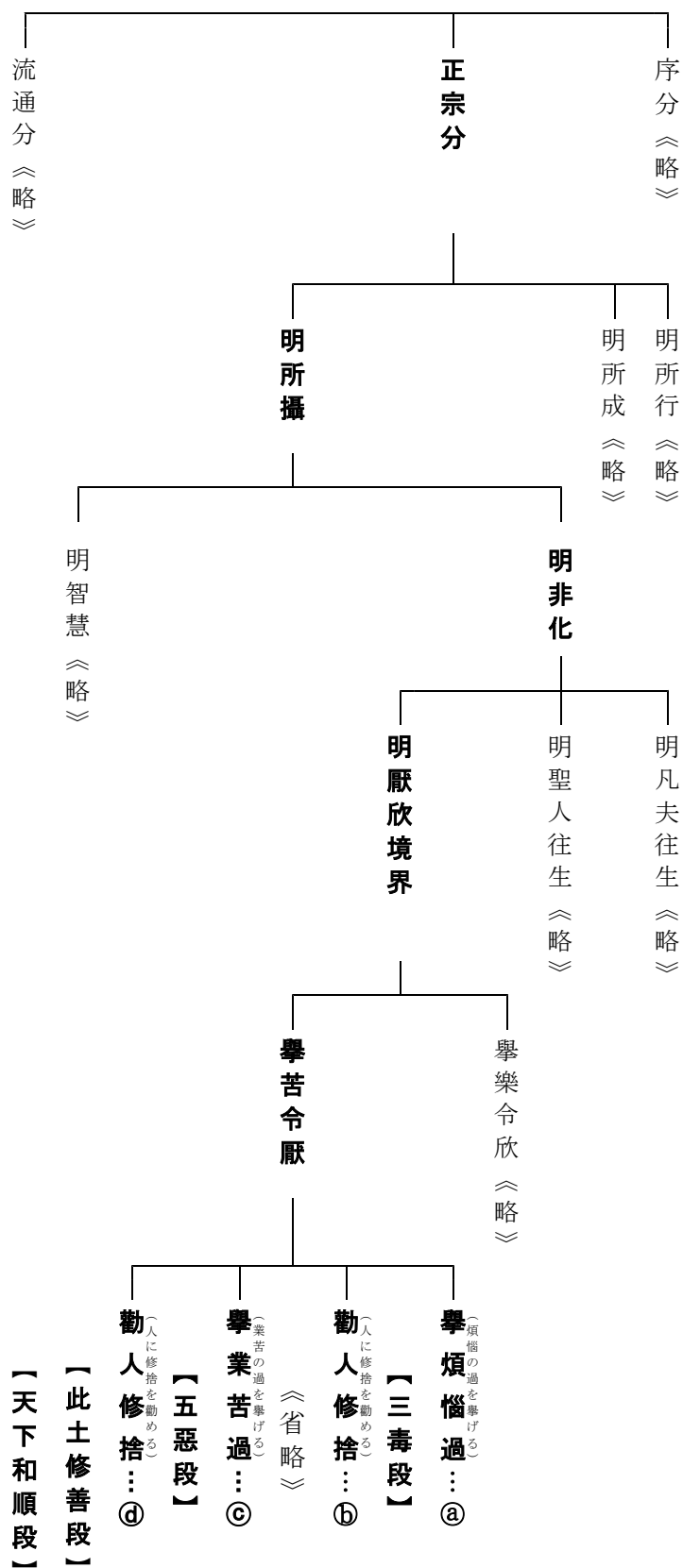
* 三煩惱を人に修捨することをお勧めする《勸人修捨…b》【絵相に反映されていないので省略】

* 五つの業苦の過により三塗無量の苦悩を挙げる《舉業苦過…c》【餓鬼道・畜生道・地獄道（八大地獄）】

* 五つの業苦の過を勧め修捨を勧める《勸人修捨…d》【此土修善段と天下和順段】

の科文に基づく位置付けがされている。

《参考資料②『科図 無量寿経』明厭欣境界 舉苦令厭の位置付け》



そして、さらに詳細に科文を分析し、系統図に図示すると、左図の《参考資料③》になる。
なお、この系統図には、高田敬輔が描いた絵相に記された各々の標文に、便宜上、番号を付し、どのような分類がされ、どういう科文が記されているか分析を試みた。

ちなみに標文を付した貪瞋愚過段は、①～②③の標文が、次のように配置されている。

* 三毒（貪欲）段：⑧ ⑨ ⑫ ⑭、① ② ③ ④ ⑤ ⑦、⑥ ②③、⑩ ⑪、⑮、⑬

* 三毒（瞋恚）段：無し。

* 三毒（愚癡）段：⑬、⑭、⑮、⑯

また、五大惡痛焼段では、①～④②の標文の配置が、

* 一惡痛焼段：① ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫、② ③

* 二惡痛焼段：⑬ ⑭ ⑮ ⑯、⑰ ⑱

* 三惡痛焼段：⑲ ⑳ ㉑ ㉒、㉓ ㉔ ㉕

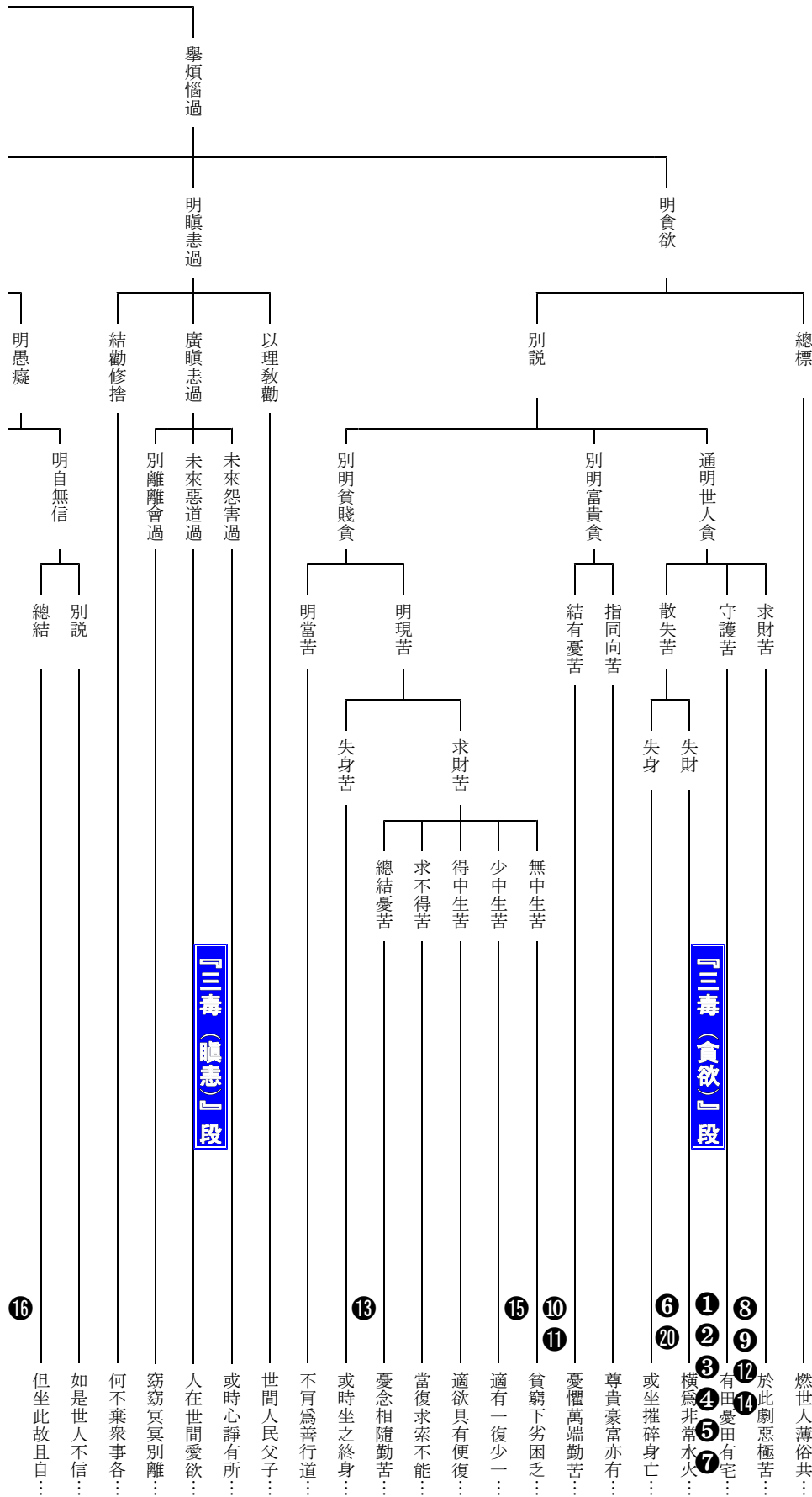
* 四惡痛焼段：㉖ ㉗ ㉘ ㉙、㉚ ㉛ ㉜ ㉝

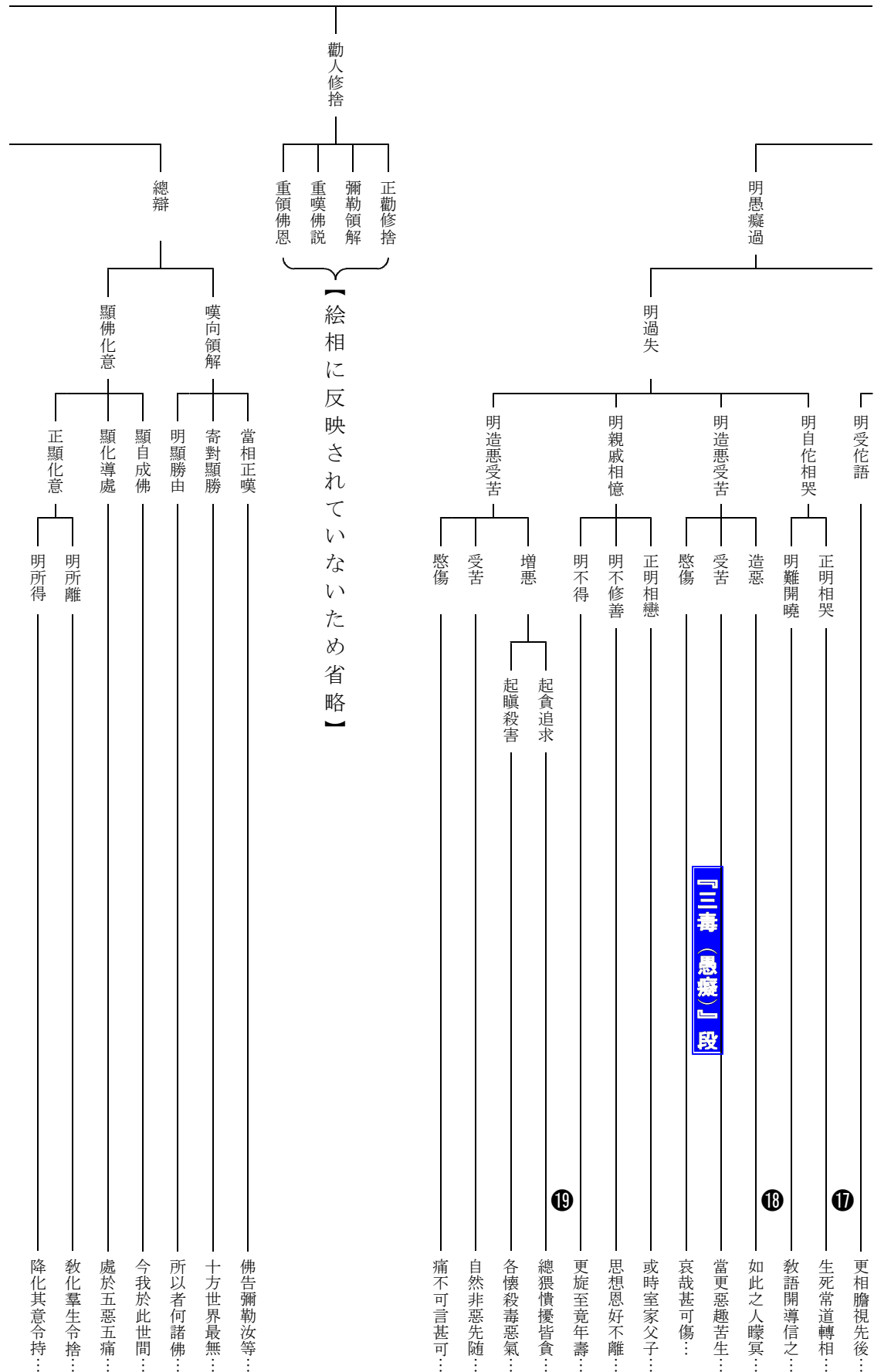
* 五惡痛焼段：㉞ ㉟ ㊱ ㊲、㊳ ㊴ ㊵、㊶ ㊷ ㊸ ㊹

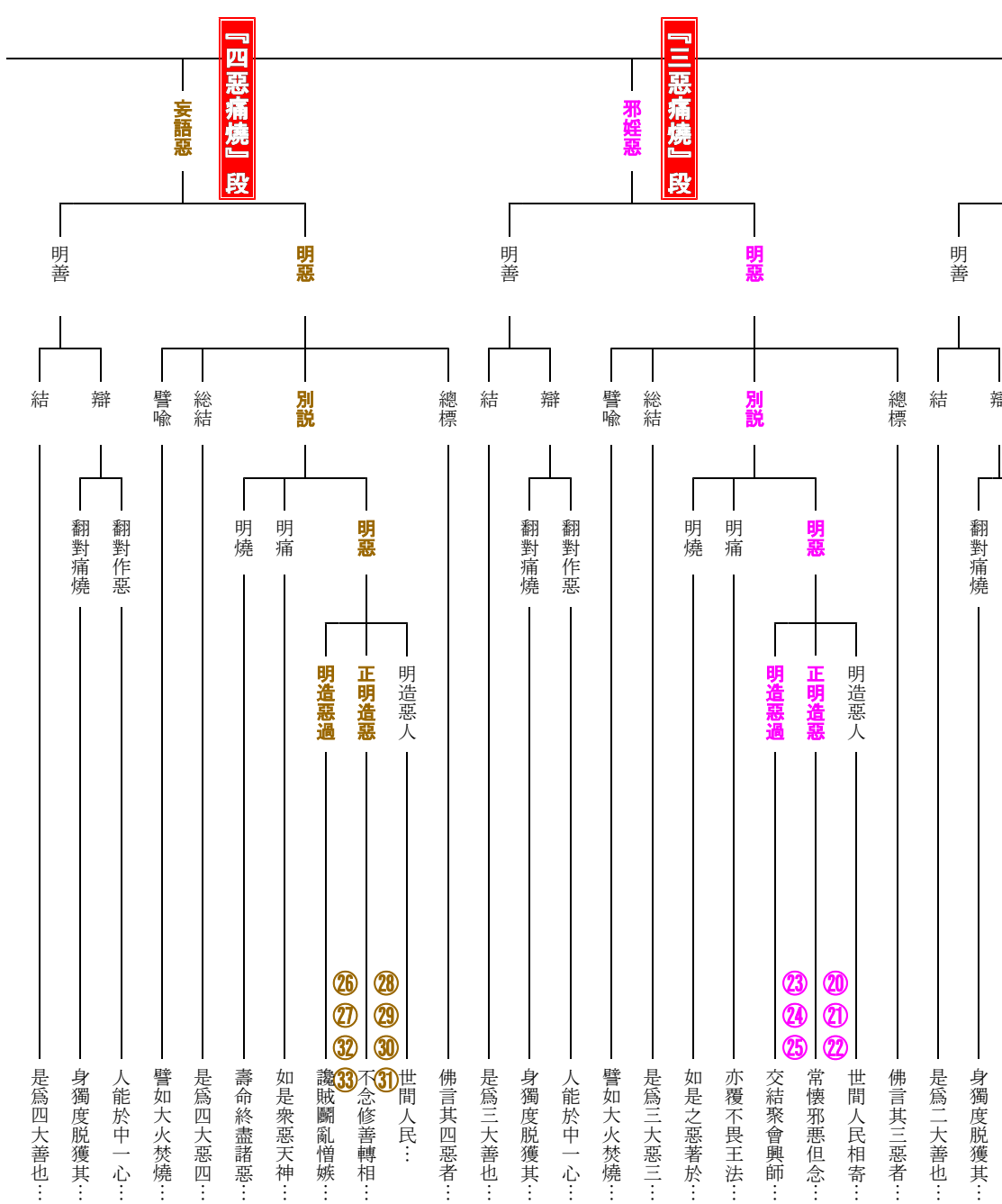
のようになっている。

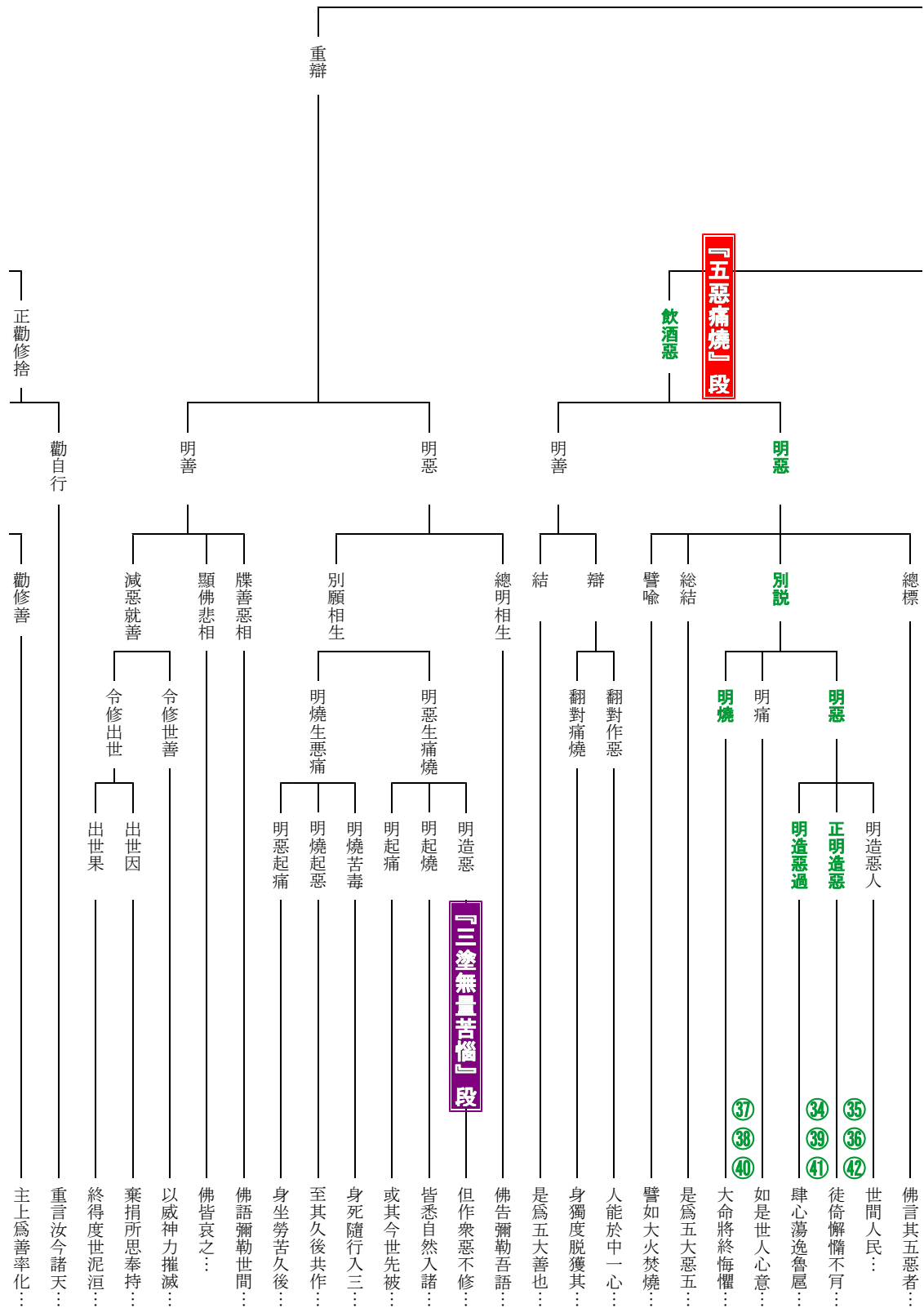
詳細な科図と対応する標文番号を挿入した図表は、次頁から図示したとおりである。

尚、この『科図 無量寿経』¹⁾は、良照義山の改訂した『浄土三部経』（元禄四年刊）を底本に成っていることと、寛政十一年（一七九九）に知恩院の蔵版として納められており、浄土宗の基本的經典理解書として位置づけられることから、高田敬輔の標文をあてはめたのが、《参考資料③『科図 無量寿経』擧苦令厭と標文》である。









具体的に、三煩惱による貪瞋愚過段から考察を加えていくことにする。

「無量寿経曼荼羅」の貪瞋愚過の三煩惱毒段を描いた部分は、左縁（向かって右）に連続した縦長の絵相として描かれる。その中に、二十ヶ所の絵相を解説する標しるべとしての標文が掲げられている。その標文を手がかりにみることにする。

標文の内容について、まず初めに、随天の『大経曼荼羅戒壇記』の注釈を参考に概要をとらえ、次に、高田敬輔が経典『無量寿経』のどこに着目しているか『科図 無量寿経』で検証し、さらに良照義山の『無量寿経随聞講録』、随天の『大経曼荼羅戒壇記』で留意すべき注釈を取り上げ、高田敬輔の描いた意図を考察する。

（便宜上、絵相の上部から順に①～②⑩の記号を付す。）

① 高田敬輔「無量寿経曼荼羅」三毒段の標文とその概要

高田敬輔の描いた「無量寿経曼荼羅」の標文に示す内容を、随天の『大経曼荼羅戒壇記』の注釈を参考に、その概要をみる。

具体的に三毒段が説かれる『無量寿経』の経文には、

然世人薄俗共諍^二不急之事^一於^二此劇惡極苦之中^一勤身營務以自給濟無尊無卑無貧無富少長男女共憂錢財有無同然憂思適等屏營愁苦累念積慮爲心走使無有安

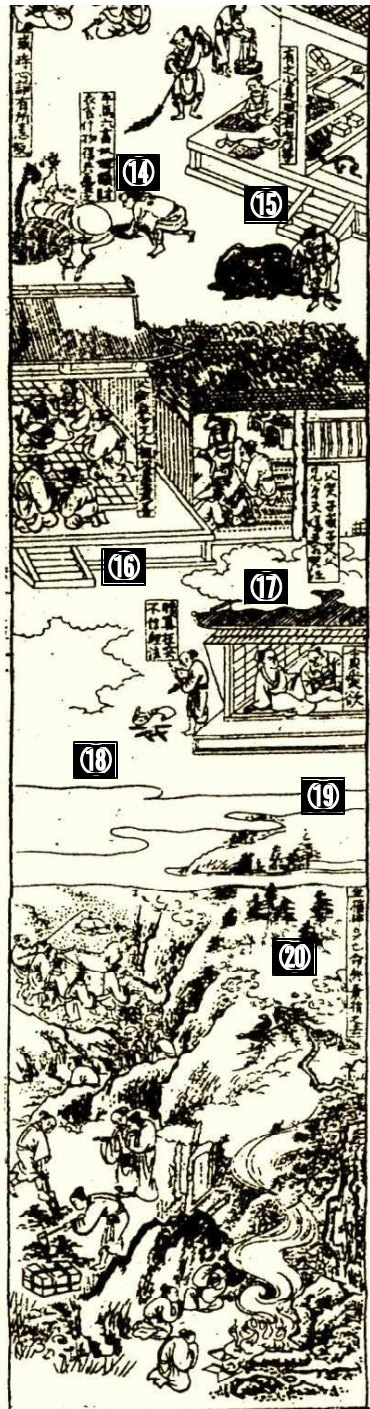
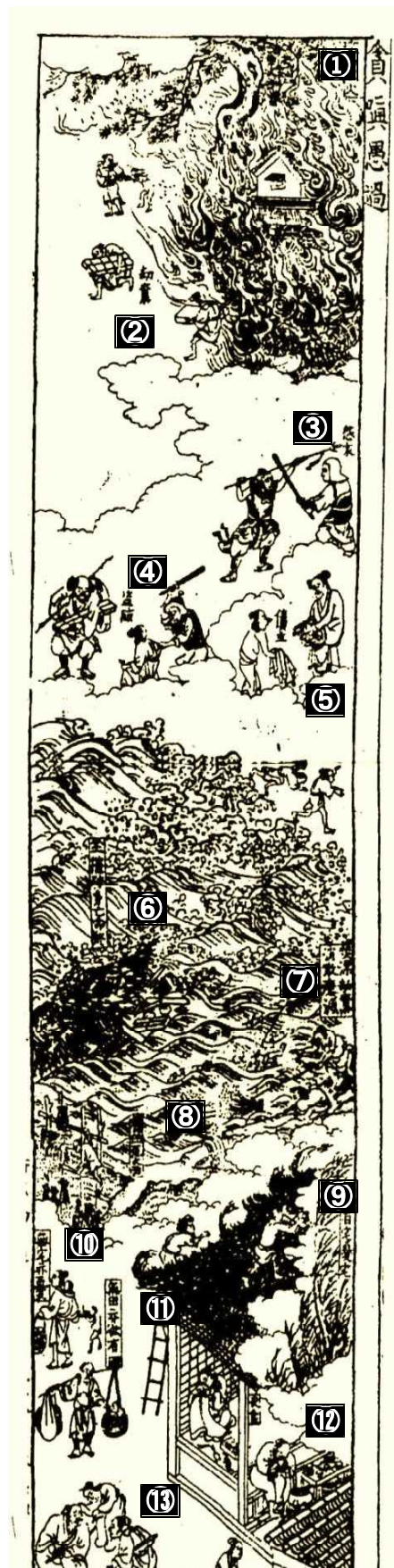
（然るに世人薄俗にして、共に不急の事を諍あらそう。この劇ぎやく惡極苦あくごくのにおいて、勤身營務ごんじんようむして、以って自ら給濟す。尊と無く卑と無く、貧と無く富と無く、少長男女共に錢財を憂うることに、有無同じく然り。憂思まさに等し。屏營びようようとして愁苦して念かきいを累ね慮おもんばかりを積む。心に走使せられて、安き時あることなし。）

とあり、世俗の者は輕薄で人情が薄く、共に世間の五欲にまみれている。この四苦八苦の世において、身をもつて仕事に勤め、自ら生計を立て世を渡っている。尊い者も卑しい者も、貧しい者も富む者も、年長の者も年少の

者も、男も女も、皆、金や財産を憂い、有無を同じように憂い悲しんでいる。そして不安であちこち立ち回り、愁い苦しむことをかさねて心配ばかりし、心が落ち着かず安らぐことが無いと、説かれている。

その原因がどこにあるのか、具体的に①～②⑦の番号を付した標文の内容が説かれていくのである。

《参考資料④高田敬輔画「貪瞋愚過」の絵相と標文番号》



【原図は絵相が繋がっている。

スペースの都合上、分断してある。】

そこで、①から②③までの、それぞれの絵相とそれにもなう經文から抽出した標文について、隨天の『大經曼陀羅開壇記』の注釈を参考にしながらみていくことにする。

① 非常水火へひじょうすいかへ〔注：以下、經文の読み方は浄土宗聖典第一巻に依る。〕

（非常の水火の様相は、大きな家や倉が炎上し、主人が驚いて家財を持ち出し、逃げ出そうとする姿を、家婦は二人の子を連れて避難の絵相。）

② 劫奪へこうだつへ

（劫奪の様相は、火災現場から、急に乘じて使用人が家財を奪い、逃走の絵相。）

③ 怨家へおんげへ

（怨家の様相は、互いに怨みをもつ者同士が、劍、戈を持ち、戦う絵相。）

④ 盜賊へとうぞくへ

（盜賊の様相は、盜賊が婦女の持ち物を奪おうと劍で脅し、他の一人は、賊達の錢を肩に函を抱え見ている絵相。）〔注：『開壇記』は、敬輔原版とは異なり、【②劫奪】と【④盜賊】の標文が入れ替わっている。〕

⑤ 債主へさいしゅへ

（債主の様相は、貸し主が買入券を手に催促するのに、家婦が着物を脱いで借金の支払いにあてている絵相。）

⑥ 坐摧碎身亡命終へざいさいい・しんもうみょうじゅうへ

（摧碎に坐って身が亡び、命が終わる様相は、大洪水の中に流される茅屋とともに、二人の男女が流されて行く絵相。）

⑦ 梵漂劫奪消散摩滅へぼんぴようこうだつ・しょうさんまめつへ

（焚漂し、劫奪され、消散し磨滅する様相は、大洪水の中に四人の農夫が、収穫した稲藁が流されていくのを争って救い取ろうとするが、流されている絵相。）

⑧ 有田憂田へうでんうでん

（田有れば田を憂う様相は、収穫した稲藁を、一人の農夫が稲架掛けをしている絵相。）

⑨ 有宅憂宅へうたくうたく

（宅有れば宅を憂う様相は、茅屋が風災で茅葺きが剥がれる屋根の上で、二人の農夫が、急いで防ごうとしている絵相。）

⑩ 無宅亦憂へむたくやくう

（宅無ければまた憂いている様相は、一人の婦女が一人の子を背負い、もう一人の子の手を引いてあてもなく歩いていく絵相。）

⑪ 無田亦憂欲有田へむでんやくうよくうでん

（田無ければまた憂いて田有らんことを欲している様相は、一人の農夫が天秤を担ぎ、一つの簀には幼児を入れ、もう一つの簀には穀物を入れ、あてもなく歩いて行く絵相。）

⑫ 衣食へえじき

（衣食の様相を、夫は^{うずくま}踞って竈の傍で粗食をむさぼり、婦は綴れを縫っている絵相。）

⑬ 或時心諍有所患奴へわくじしんじょう・うしよいぬ

（ある時は心^{あつそ}諍^{あつそ}つて、患^{いぬ}奴^{いぬ}する所有りの様相は、父子があい諍^{あつそ}つて、まさに剣に手を掛けているところへ主婦が中に入って止めている絵相。）

《注：敬輔原版の位置と異なり、「⑬ 蒙冥抵突不信教法」の絵相の隣に描かれている。》

⑭ 牛馬六畜奴婢錢財衣食什物復共憂之へごめろくちく・ぬびせんざい・えじきじゅうもつ・ぶぐうし

(牛馬・六畜・奴婢・錢財・衣食・什物また共に之を憂うの様相は、牛が誤って角を折った角を牧夫が取りあげて憂っている様相を、また馬が荷仕事の途上で倒れたのを、僕夫が力を窮めて助け起こそうとしている絵相。)

15 有之少是思有齋等へうぜしうぜ・しうざいとう

(是れ有ればこれを少く。齋等有らんことを思うの様相は、宅内に一人の夫が金錢、財産を算盤で弾き、富貴者に足らぬことを歎いて心身ともに疲弊し、坐起も不安な絵相。)

《注・敬輔原版は經文「有是少是思有齋等」と異なり、標文が「有之少是思有齋等」となっている。》

16 父餘教令先人祖父素不爲善へぶよきようりよう・ぜんにんそぶ・そふいぜん

(父、教令を餘す。先人祖父素より善を爲さずの様相は、宅内に、五人、環に座る。祖父の病いを邪教の邪人が呪術で治そうとする。父、子、孫ともに邪教を承習している絵相。)

17 父哭子或子哭父兄弟夫婦更相哭泣へぶこくし・わくしこくぶ・きようだいぶふ・きようそうこつきゅう

(父、子を哭し、或いは子、父を哭す。父兄弟夫婦、更にあい哭泣すの様相は、宅内に悲母が病死し、夫婦や子供達が周りを囲み、哭いて泣いている絵相。)

18 瞋冥挖突不信教恣へむみようたいとつ・ふしんきようぼう

(迷妄のために目がくらみ、是非邪正の区別もできずに突き当たり、經法を信じない様相は、宅外で一人の男が右手を挙げ、左手に經卷を取り、まさに地上に投げようとしている。すでに七軸は地上に棄てられている絵相。)

19 貪愛欲へとんあいよく

(愛欲を貪る様相は、母親が病氣の子を懷に抱き藥を与えている側で、父親が愛欲を求めている絵相。)

20 坐摧碎身亡命終棄損之恣へざざいさい・しんもうみようじゅう・きえんしこ

（盗賊や水火などの災難が身を打ち砕き、命が終われば棄てられる様相は、山野が荒涼とした樹上で寒鴞が啼き、石碑の碑文は消えて見え、巖辺の墓の塔婆は誰のものか解らない。）

葬殯の事は、一人が先進して炬を把り、次に三人の僧が、一僧は合掌、一僧は磬を鳴らし、もう一僧は拱手して続き、次に一人が炬を乗り、四人が龕棺がんかんをかつぎ、一人が蓋を持ち、しんがり殿を行く様子を表している。

そして、二人が左右に相對して鋤、鍬で地を穿ち、まさに斂おさめようとする傍らで二人が低頭して涕泣している土葬。四肢が分潰して骸骨が離散している野葬。茶毘の火光が燄燄と空に向かって昇り、傍らで二人の男、一人の女が號哭している火葬の三態の葬る姿を描いた絵相。）

のようになっている。

この高田敬輔の二十カ所の標文と絵相の中で特徴的なのは、一つは、**19 貪愛欲**の部分について、随天が指摘しているところである。

宅中母懷^二病子^一與^レ藥父在^レ側愛求問上畫圖既明^二六親哭^一今圖何更出^二親子愛^一答上則愛別離苦相也今乃愛欲貪求
狀也故非^二復重^一經云總猥憤擾皆貪愛欲惑^レ道者衆悟^レ之者寡又有^二瞋恚相應之癡^一

の場面で、母親が懷に病の子を抱えて藥を与える側で、父親が愛欲を求める姿を描いた絵相である。

これについて、すでに六親の哭きを描いている（**16** **17**）のに、なぜまた親子の愛情の絵相を描いたか問い、それに答えて、前の絵相は愛別離苦の相であり、今の絵相は愛欲貪求の状態を描いたもので重複ではない。經に云うように總猥憤擾そうゑふじょう（世の中が乱れ騒がしく、心がかき乱され煩わされること。）して、皆愛欲を貪るものである。まさに道に惑える者は衆おおく、これを悟る者は寡すくないものである。また瞋恚に相應の癡（おろかさ）である、と述べている。

ここでは、愛欲を貪る姿を強調するため、六親を哭する場面とは異なる絵相とした意図が読み取れるのである。

二つ目は、

② 劫奪

⑦ 梵漂劫奪消散摩滅

⑫ 衣食

⑭ 牛馬六畜奴婢餞財衣食什物復共憂之

と、

⑥ 坐摧碎身亡命終

⑳ 坐摧碎身亡命終棄損之姿

との三カ所に、標文が二重に記述されていることである。

②と⑦の劫奪は、②は自己の意志で直接的に物を奪うことを表し、⑦は間接的に自己の意志と関わらない自然の風水害等の力により財産が奪われる様相を描いている。

また、⑫と⑭の衣食については、⑫は、人間にとって何より大事な衣・食・住の生活の一つを象徴するように、居宅で綴れの裁縫や粗食をむさぼる生活の一場面が描かれ、後者の⑭は、六畜や錢財、什物等の財産の一つとして衣や食があるという描かれ方がされている。

そして、もう一組の【⑥坐摧碎身亡命終】は、まさに、何時どのような時に摧碎によって身が亡び命が終わるか解らないことを水災の場面に描き表している。

しかし、【⑳坐摧碎身亡命終棄損之姿】は、⑥の身が亡び命が終わった後のことを、荒涼とした墓場に寒鴉が啼き、葬送の行列、そして、土葬、野葬、火葬の三態の様子と、それを嘆く人々の姿が描かれている。

随天はこの場面を、

問上貪欲中已援^二此文^一今何重出答上就^二身亡命終句^一而明^二貪欲失身之苦^一今依^二棄損之姿句^一示^二無常迅速^一所

對不同各成二意。經云無常根本皆當過忤於平哀哉魂魄一忤弃之荒原雨灌日曝須臾爛壞燒即化灰焉見昔質則歸土誰思舊交隱山海仙未免無常之悲錮石室人終遭別離之歎八師經云人死四百四病同時俱作四大欲散魂神不安風忤息絕火滅身冷風先火次魂靈忤矣

(問う。上の貪欲の中に已に此の文を援く。今、何の重出するや。

答う。上は身亡命終の句に就いて、貪欲失身之苦を明かす。今は棄捐の忤の句に依りて、無常迅速を示す。所對不同にして各々一意を成す。

經に云う。無常根本、皆、當に過忤す。ああ哀しいかな。魂魄、一たび忤つて、これ荒原に弃つ。雨灌ぎ、日曝し、須臾に爛壞す。焼けば即ち灰に化す。焉んぞ昔の質を見ん。埋れば則ち土に歸す。誰か舊交を思わん。山海に隠れる仙も未だ無常の悲を免れず。石室に錮する人も終に別離の歎きに遭えり。

八師經に云う。人、死するに四百四病、同時に俱に作る。四大散らんと欲して魂神安からず。風、忤り、息、絶し、火、滅して、身、冷ややかなり。風は先んじ、次に魂靈忤る。)

とあり、なぜ前に貪欲の中ですでにこの文を引いているのに、今、また出すのかという問いに答え、前のものは身亡命終の句で、貪欲失身之苦を明かすものである。今は、棄捐の去の句によって無常迅速を示すものである。これは同じではなく、それぞれ一つの意味があるのである。

哀しいことに魂が去った後の骸は野に棄てられ、雨が濯ぎ、日に曝され、たちまちのうちに爛れ壞れてしまう。焼けば灰と化し、埋めれば土に戻り、昔の面影など何も残らない。山海に住む仙人さえもいまだに無常の悲を逃れられない。たとえ石室に閉じ込めようと、最後には別離の嘆きにあうものである。

八師經には、人が死ぬ時には四百四病を俱に作るとある。体が散り去らないようにと魂が安らかではないが、風が去り、息が絶え、火が消え、身が冷たくなっていくのである。風は先に、火は後を追ひ、靈魂が去って行く、と注釈をしている。

まさに、娑婆世界の人間の末路は無常迅速、虚無感溢れる三毒段の総まとめの絵相として、再度、掲げられたことが想定されるのである。

② 經典『無量寿経』にみる三毒段

高田敬輔が、原典の『無量寿経』のどこに着目して絵相を描いたか注目することにする。

『無量寿経』の、どの部分のどんな内容を把握するには、先に挙げた736～741頁の《参考資料③『科図 無量寿経』舉苦令厭と標文》の中の、736～737頁の『舉煩惱過』部分を参照すると特色が表れている。

『舉煩惱過』の図示のとおり、科文と高田敬輔の描いた絵相の標文とを対照すると、三毒の貪欲（むさぼり）・瞋恚（いかり）・愚癡（おろかさ）のうち、

貪欲では、*世人貪↓守護苦↓四つの標文

*世人貪↓散失苦↓失財↓六つの標文

*世人貪↓散失苦↓失身↓二つの標文

*貧賤貪↓現苦↓求財苦↓無中生苦↓二つの標文

*貧賤貪↓現苦↓求財苦↓少中生苦↓一つの標文

のように、世人貪が十二、貧賤貪三の計十五の標文が集中している。

瞋恚では、*瞋過↓未来怨害過↓一つの標文

愚癡では、*愚癡↓受他語↓一つの標文

*過失↓自他相哭↓相哭↓一つの標文

*過失↓造惡受苦↓造惡↓一つの標文

*過失↓造惡受苦↓起貪追求↓一つの標文

とあるように、愚癡が一、過失が三の計四の標文が掲げられている。

このことは、高田敬輔は、三毒の中でも、特に食欲の中の財産を守ろうとする守護苦、その財産をいくら守護しようとしても非常の風水火災、強奪、諍い等で失う散失苦、有ればあったでさらに欲しくなり、無ければないで欲しくなる求財苦が、最も食欲の根底をなしていることを強調したかったものと想定されるのである。

③ 良照義山の『無量寿経随聞講録』にみる三毒段

高田敬輔の師とする良照義山は、『無量寿経随聞講録』で『勸人修捨：⑥』について次のように述べている。

佛告彌勒菩薩等者已下世尊上來三毒煩惱有樣說就^二其三毒煩惱^一勸^二修捨^一給事也爾其三毒凡夫皆悉具足況淨土教意本是爲^二凡夫^一若聖人或伏或斷シモシツベシ何本爲凡夫教勸^二修捨^一似^三其理甚無^二所以^一謂三毒恣スレハ淨土心行障本凡夫爲淨土教此伏此斷セシムルニハ非サレトモ淨土往生安心障故是捨シムルコト也捨ヨト云テ此伏斷ヨトニハ非凡夫相應隨^レ分止ヨト云コト也惣三毒其儘打捨置フトル物喩病其儘置次第フトル様ナ物若凡夫在物煩惱ユルシテ置安心發安心不^レ發則行不^レ立其安心云三心其三心云ハ皆善心所『中略』

惡心ノ儘テ安心發ルモノテハナイソ苦シ安心力立テテハ行ノ念佛ハヒトリ申サル也

是故凡夫具足シタル三毒ナリトモ凡夫相應隨分可^レ止次下五惡即此意也

（佛告彌勒菩薩とは、已下は、世尊、上來三毒の煩惱の有様を説きたまう。其の三毒煩惱に就いて、修捨せよと勸め給う事なり。爾るに其の三毒は、凡夫、皆、悉く具足す。況んや淨土教の意は、本、是れ凡夫の爲なり。若し聖人ならば、或は伏し、或は斷じもしつべし。何ぞ本爲^なる凡夫の教えに修捨せよと勸む。其の理、甚だ所以無きに似たり。謂く三毒も恣^{ほしいまま}にすれば、淨土の心行の障りなり。

本より凡夫の爲の淨土教なれば、此を伏し、此を斷ぜしむるには非ざれども淨土往生の安心の障りとなる故に、是れを捨てしむることなり。捨よと云うて此を伏し、斷ぜよとは非ず。凡夫相應に分に隨うて止

めよと云うことなり。惣じて三毒も其の儘に打ち捨て置けば、ふとる物なり。喩えば、病も其の儘に置けば次第にふとる様な物なり。若し凡夫に在る物とて煩惱をゆるして置けば、安心が發らず。安心が發らざらずんば、則ち行が立たず。其の安心と云うは、三心なり。其の三心と云うは、皆、善の心所なり。

《中略》

爾らば縦い淨土教なりとも心行の障りとなるものは是をほしいまま恣しになすことを誠むるなり（惡心の儘で安心發るものではないぞ苦し。安心が立てば行の念佛はひとり申さるるなり）。是の故に凡夫に具足したる三毒なりとも凡夫相應に隨分止めるべきなり。

次下の五惡も即ち此の意なり。）

ここで義山は、これより以下は、これまで世尊が三毒の煩惱の有様を説いたものについて修捨せよと進める部分であると述べている。三毒は、凡夫の皆に身に付いているものである。淨土教の本意は凡夫のためにあるもので、もし聖人であれば、伏せたり断じたりすることができだろうが、どうして凡夫のための教えの中に修捨せよと勧めるのか、その道理に疑問を感じることであろう。

しかし、三毒をほしいままにすれば淨土の心行の障りとなり、もともと凡夫のための淨土教であるので、これを伏せたり断じたりせよというのではなく、淨土往生の安心の障りとなるので、捨てよというのであり、しかも、それは凡夫の能力に応じて止めよということである、と述べている。

さらに、三毒をそのままに捨てて置けば、太るもので、例えば、病もそのままにしておけば太るようなものである。そして、凡夫にあるものだからといって煩惱を許しておけば、安心あんじんがおこらない。この安心がおこらなければ、行が立たない事になる。安心とは三心（深心・至誠心・廻向發願心）のことで、善の心所しんじょである。

だから、たとい淨土教であっても心行の障りとなるものは、ほしいままにすることを誠めるべきであり、このようなことから凡夫に具わった三毒であっても凡夫に応じて大いに止めるべきである、次からの五惡段も同じよ

うな意図で述べられている、と説いている。

そして、さらに、

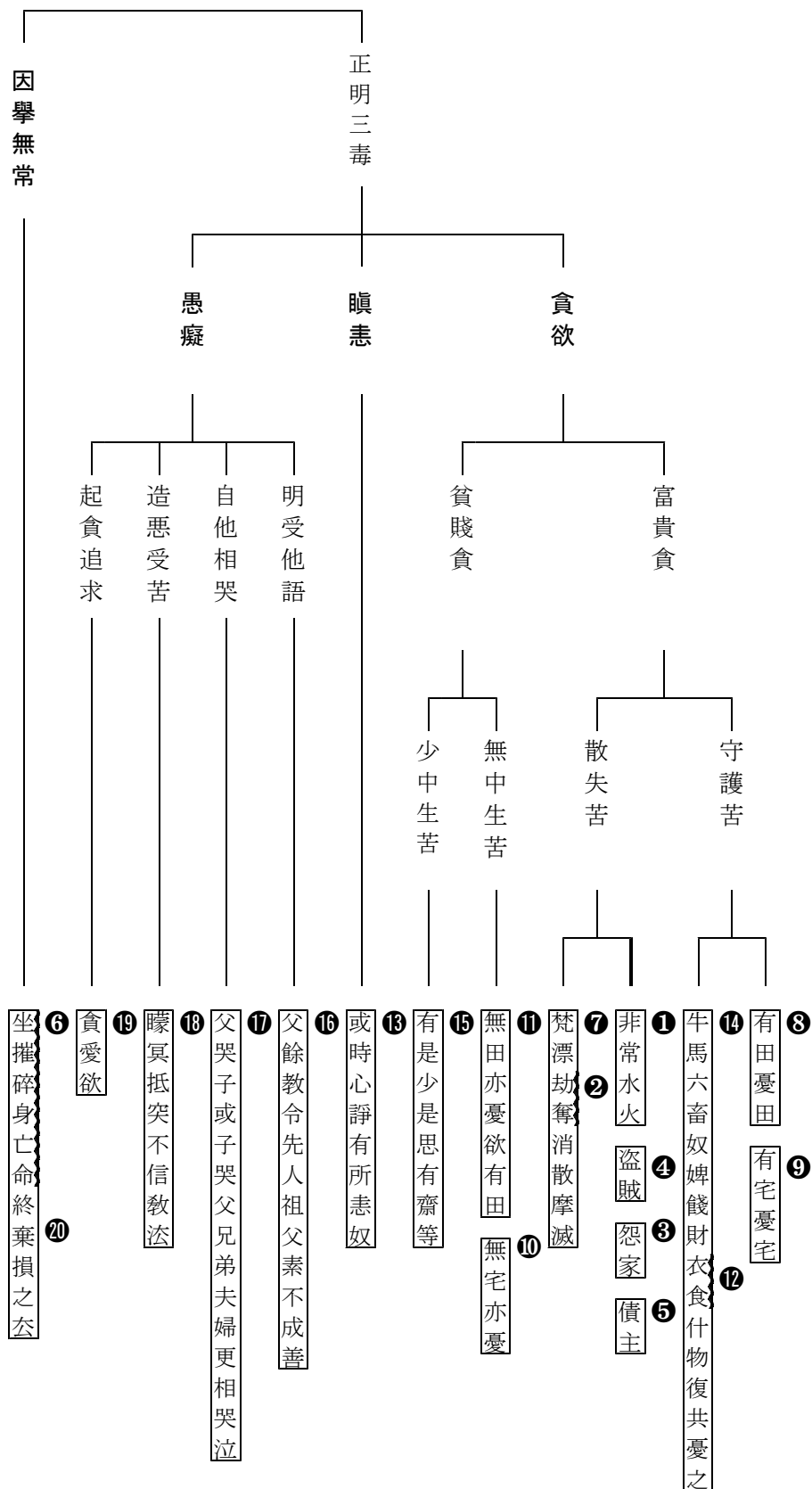
凡淨土往生スルニ惡ニテ生スルト云コトハ曾無コト也十惡人臨終時佛來迎罪人惡人名改善男善女トホメ玉フ此日比惡人ナリシカトモ念佛シテ惡滅シテ善人トナリテ往生此ニテ知ベシ惡儘ニテ生スルト云コトハ無惣惡ニテ善處得_レ生外道論ニモ未_レ見事以_レ此道理_レ得生淨土往生障トナル程三毒不_レ起様セヨト誠給事也此段能可_レ甘味_レ今時學者就_レ説_レ心行_レ雖_レ勸_レ修善_レ不_レ立_レ廢惡_レ未_レ知不_レ辨_レ經意_レ歟將爲_レ愚者_レ還恐_レ慮怯退_レ歟可_レ慚可_レ愼

（凡そ淨土に往生するに、惡にて生ずると云うことは、曾て無きことなり。十惡の人も臨終の時、佛、來迎して罪人惡人の名を改め、善男善女とほめ玉う。此れ日比は惡人なりしかども、念佛して惡を滅して善人となりて往生す。此れにて知るべし。惡の儘にて生ずると云うことは無きなり。惣じて、惡にて善處に生ずることを得ることは、外道の論にも未だ見えぬ事なり。此の道理を以って得生淨土にも往生の障りとなる程の三毒をば起さざる様にせよと誠め給う事なり。）

と記し、淨土に往生するのに惡のまままでということとは、いまだかつて無いことであり、十惡の人も臨終の時には佛が來迎して、罪人や惡人の名を改め、善男善女としてほめ讃えるのである。これは、日頃は惡人でも、念仏して惡を滅して善人となれば往生できるということなのである。惡のままでは往生することはできないので、得生淨土するために、往生の障りとなる三毒を起さないように誠めていることなのである、と説いている。

④ 随天の『大經曼荼羅開壇記』にみる三毒段

次に、随天が高田敬輔の「無量寿經曼荼羅」の三毒段の位置付けをどのようにみて注釈をしたか、『大經曼荼羅開壇記』の総科に、絵相の標文を対照してみると明らかである。



以上のように、随天があげる科文に標文をあてはめると、

貪欲とんよくでは、
*富貴貪↓守護苦↓四つの標文

*富貴貪↓散失苦↓六つの標文

*貧賤貪↓無中生苦↓二つの標文

*貧賤貪↓少中生苦↓一つの標文

のように、富貴貪が十、貧賤貪三の、計十三の標文が集中している。

瞋しん悲では、一つの標文。

愚癡ぐちでは、
*受他語↓一つの標文

*自他相哭↓一つの標文

*造惡受苦↓一つの標文

*起貪追求↓一つの標文

の四つの標文。

そして、*因舉いんきよ無常むじょうでは二つ標文が該当する。

このような科文と標文との合致点は、前にあげた(736～741頁)『科図 無量寿経』の科文と類似しているものが多く、《守護苦》《散失苦》《無中生苦》《少中生苦》《受他語》《自他相哭》《増悪受苦》《起貪追求》の科文は、『科図 無量寿経』と共通である。このことは、随天が『無量寿経』の論理的展開を明確に把握した上で、「無量寿経曼荼羅」の注釈の手順を『大経曼陀羅開壇記』に取り入れたと考えられる。

だから、經典『無量寿経』、高田敬輔制作「無量寿経曼荼羅」、良照義山の改訂本を底本にした『科図無量寿経』、随天の『大経曼荼羅開壇記』の總科とは整合性があると考えることができる。

高田敬輔の「無量寿経曼荼羅」の三毒段の絵相は、二十の標文による二十種の絵相である。この絵相がどのような意図のもとに描かれたのか、『無量寿経』『科図 無量寿経』『無量寿経随聞講録』『大經曼荼羅開壇記』を通して検証した結果、次のようなことを知ることができる。

* 三毒段の二十の絵相は、貪・瞋・痴の三毒の過の中の貪欲に比重がおかれ、特に貪欲の《守護苦》《散失苦》《求財苦》に集中していることから、凡夫が財産に固執し、それを守る、失う、求めるという苦の中にいることを強調して描かれていること。

* 二重に描かれる絵相について、随天の注釈をふまえると、貪愛欲は、愛別離苦と愛欲欣求の二つの様相を、また劫奪は、自らの意志で奪うことと意志とは関わらずに自然の力等で奪われることを、衣食については、一つに日常生活の苦と、もう一つは諸々の財産を守護する苦の一つを取り上げていること。

さらに坐摧碎身亡命終棄損之去については、一つは、いっどのような災難で身を亡ぼし命が終わるか分からない貪欲失身の苦と、もう一つは、命後の無常迅速の様相を描くことによって、三毒の末路を強調するために描かれたと考えられること。

* 高田敬輔は、『挙煩惱過』を描き、『勸人修捨』の絵相は描いていない。なぜなら二十の絵相を見る者が、煩惱の過を自覚し、認識することそれ自体が、煩惱を捨てることを勧めていることである、という意図のもとに描かれ、あえて『勸人修捨』の絵相を描かなかったことが想定されること。

* 良照義山は、『勸人修捨』にふれ、三毒は凡夫に具わったものであるが、たとえ浄土教が凡夫のためにあるとしても、煩惱を許しておけば安心がおこらず、行が立たない。だから、誠め、止めるべきで、念仏を修すことが大事であると説いていること。

* 随天の『大經曼荼羅開壇記』の三毒段の注釈は、『科図 無量寿経』とほぼ同様な捉え方であり、整合性があることから、原典の『無量寿経』に忠実であること。

等をあげることができ、「無量寿経曼荼羅」の三毒段は、貪・瞋・痴の三毒の過を説き、それを捨てるには、念仏により三毒の障りをおこさぬように誠めることが大事であることを説いた絵相であるということが出来る。

(注1) 良照義山が改訂し、四聲清濁を付した浄土三部経を底本にして『科図 無量寿経』が成っていることが知られる跋文と、知恩院の蔵版として宗定

というべき扱いであることを示す『科図 浄土三部経』の奥付。

※『科図 浄土三部経』の跋文

新鐫三經科本跋

三部之妙經計二萬數千餘言一言以敝之曰凡夫得_二不退_一而已矣大本願文普化_二十方_一焉觀經自說切救_二逆者_一焉小本持名證誠有_レ感焉釈迦勸讚也弥陀之本誓也諸佛之燈明也三聖之化門於_二乎此_一啓焉可_レ謂上衍之極致不退之風航者也本願之流通其來也淹矣刊行印施代々不_レ亦少_一矣成而壞_レ而成然未_レ曾聞_レ有_レ善本_一洛東良照師嚮采_二經本_一參考改正字簡_二眞俗陰陶_一旨審_二四聲清濁_一重刻之以賜_二誦持之人_一統東武觀上人再采_二彼本_一系之以_二旧科_一且事_二筆削_一剪_レ繁撮_レ略續_二之於梓_一以便_二講說之人_一其弘通之志可_レ謂深切也矣印成乃請_二以_一予浪言_二繁于其後坐客謂曰近世刊行滋多莫_レ不_レ皆以_二參訂_一名_レ之而歸_二其至當_一者也鮮矣今亦斯顯乎予曰噫子猶有_二蓮之心_一也夫曰何居乎曰予聞古人有_レ言讀_二諸葛孔明出師表_一不_レ下_レ淚者是人必不忠讀_二李密陳情表_一不_レ下_レ淚者是人必不孝以_二其無_一仁人之心_一也夫菩薩之歸_二佛如_一孝子之歸_二父母_一忠臣之歸_二君后_一今子見_二此舉_一不_レ遍_二其流轉不_レ博何晦及_一論_二其可否_一予恐子殆非_二至誠人_一也於_二吾佛_一不忠不孝之儔胡為乎好_レ毀之甚哉客翊而公予特感_二崑不_一己且期_二與_一衆證_二不退_一故以_二不敏_一而不_レ敢辭_二叨述_一數語_二塞_二于其需_一若夫白璧之微瑕非_二予所識更正_一之於高明_二云

皆維元祿龍飛丁丑佛誕日

宇水平等蘭若沙門圓照葵

盟薰拌手謹跋

觸響

心菴

(新鐫三經科本跋

三部の妙經計るに二萬數千餘言。一言を以つてこれを敵おほう。曰く凡夫にして不退を得るのみ。大本の願文、普く十方を化し。觀經の自說、切に逆者を救う。小本の持名、證誠、感有り。

釈迦の勸讚なり。弥陀の本誓なり。諸佛の證明なり。三聖の化門此に於いて啓く。謂う可し、上じやう衍えんの極致、不退の風航なる者なりと。本願の流通、其の來ること淹としまらじ。

刊行印施も代々、また少なからず。成つて壞し壞して成る。然れども、未だ曾つて善本有ることを聞かず。洛東の良照師、嚮さきに經本を采とつて參考改正し、字の眞俗陰陶を簡えらび、旨に四聲清濁を審つまらかにして重ねて刻みて、これを以つて誦持の人に賜す。続いて東武の觀上人、再び彼の本を采つて系つなるに、これに旧科を以つてし、且つ筆削を事として、繁きを剪り、略を撮らしてこれを於いて梓に繡して、以つて講說の人に便べんりす。其の弘通の志、謂いつべし、深切なりと。印成つて乃ち予が浪言を以つて其の後ろべに繫つなげんことを請う。

坐客謂いて曰く、近世の刊行、滋ますます多し。皆、參訂を以つてこれに名づけずと云うことなし。其の至當に歸する者、鮮なし。今もまた斯の顯あきらかならんや。

予、曰く。噫あ、子、なお蓮はらすの心有るかな。夫れ曰く、何ぞや。曰く、予、聞く。古人、言うこと有り。諸葛孔明が出師の表を讀みて、涙、下さざる者は、是の人必ず不忠ならん。李密が陳情の表を讀みて、涙を下さざる者は、是の人、必ず不孝ならん。其の仁人の心無きを以つてなりと。夫れ菩薩の佛に歸すること、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸するが如し。今、子、此の舉を見る。其の流轉ひろ、博ひろがらざることを遍あまからずして、何の晦かいあつてか其の可否を論ずるに及ばん。予れ恐らくは、子、殆んど至誠の人に非ず。吾が佛に於ける不忠不孝の儔ともがらならん。なんすれぞ毀きを好むことこれ甚だしきや。客、蚬こちて去る。

予、特に感こ念すること己やまず。且つ衆とともに不退を證せんことを期す。故に不敏を以つて敢えて辞さず。叨みだりに數語を述べしめ、其の需もとめに塞ふさぐ。若し夫れ白璧の微瑕かは予が識る所に非ず。更にこれを於いて高明に正せと云う。

皆維じい元祿龍飛ひのとうし丁丑佛誕日

宇水平等蘭若沙門圓照葵

盟薰拌手謹跋

觸ふ覺

心こ菴

（

※《『科図 淨土三部經』の奥付》

淨土三部經科圖 四卷

同科註 十卷

同合讚 七卷

右三版隱士了阿捐許多金購得而爲當山藏本願

爲令法久住且以擬本師明譽忍達大和尚冥福也

于寛政十一年巳未 華頂幹事識

華頂山知恩院藏鐫印

(淨土三部經科圖 四卷

同科註 十卷

同合讚 七卷

右三版、隱士了阿、捐許し、多金購得して、當山藏本の爲を願う。

法をして久しく住せしめん。且つ以つて擬^{なぞら}え、本師、明譽忍達大和尚の冥福を爲す。

于寛政十一年巳未 華頂幹事識

華頂山知恩院藏鐫印

)

(二) 「慳惡」の「舉業苦過」の「業道」(五惡痛燒段)

左縁の三毒段の考察に引き続き、下段の五惡段《參考資料①》〔733頁参照〕について考察する。

『科図 無量寿經』によれば、前述の「三毒段」は《參考資料②》『科図 無量寿經』五惡段 明厭欣境界 業苦過における標文の位置付け〔734頁参照〕にあるように、正宗分の後半部分「舉苦令厭」に位置し、次のようになっている。

* 貪欲・瞋恚・愚癡の三煩惱を挙げる《舉煩惱過：①》

* 三煩惱を人に修捨することを勧める《勸人修捨：②》〔無量寿經曼荼羅の絵相には反映されていない〕

* 五つの業苦の過を挙げる五惡段《舉業苦過：③》

* それを誠める《勸人修捨：④》〔此土修善段と天下和順段が無量寿經曼荼羅の絵相に反映されている〕

この五つ業苦の過を挙げる五惡段の絵相(一惡痛燒・二惡痛燒・三惡痛燒・四惡痛燒・五惡痛燒)に取り上げられた具体的な標文《①》《②》《③》《④》《⑤》《⑥》《⑦》《⑧》《⑨》《⑩》《⑪》《⑫》《⑬》《⑭》《⑮》《⑯》《⑰》《⑱》《⑲》《⑳》《㉑》《㉒》《㉓》《㉔》《㉕》《㉖》《㉗》《㉘》《㉙》《㉚》《㉛》《㉜》《㉝》《㉞》《㉟》《㊱》《㊲》《㊳》《㊴》《㊵》《㊶》《㊷》《㊸》《㊹》《㊺》《㊻》《㊼》《㊽》《㊾》《㊿》を『科図 無量寿經』の五惡段の業苦過に対比的に挿入したのが、《參考資料③》〔738頁参照〕の図である。

① 五惡痛燒段

この「五惡段」は、先の「三毒段」にみた人間の持つ根源的な煩惱惡を、より具体的に各論的に説くもので、『無量寿經』には例えば五惡と惡の名が取り上げられているが、具体的にはその内容が説かれない。

しかし、随天は、五惡の内容を、殺生惡・偷盜惡・邪淫惡・妄語惡・飲酒惡と捉え、『大經曼荼羅開壇記』の注釈をしている。そこで、順にその注釈を読むとともに、それぞれの絵相について考察していくことにする。

⑦ 一惡痛焼について

高田敬輔「無量寿経曼荼羅」一惡痛焼の絵相



一惡痛焼は、『科図 無量寿經』によれば、殺生惡である。その内容をみれば、殺生惡↓明惡↓別説↓明惡↓明造惡過↓正明過失の流れをとり、十の標文が取り上げられ、正に「造惡の過」による過失を明かし、それにもなう「痛」を明かす二つの標文が取り上げられているのが特徴である。

高田敬輔が、標文に取り上げた十二の内容をみると、

① 神明記識

（神明記識の様相は、宅内に主人が氈に坐し、團扇を執り、庖厨に命じて殺生を作している。一人の厨人が包丁を取り、まさに割鮮へ魚を切る）している。左右には生臭い魚、籠に捕らえた鳥等を並べている。砌下へ石だたみ）には一魁膾へ屠殺人）がいて兎を縛り、まさに爐火に投げようとしている。側に一婢がいて、鶏を捉えて鑊釜に入れようとしている殺生惡が描かれている。

その主人の肩の上に二神が影現している。俱生神である。左肩の男神は、同名で、善事を卷物に記し、右肩には女神の同生が惡事を劄へ手札）に記載している。）

② 王法牢獄

（王法牢獄の様相は、一囚人が牢獄に繋がれ、窶窮へ苦しみ困る）としている。）

③ 爲惡入罪受其殃罰

（惡を爲し、罪に入りて、その殃罰を受くの様相は、惡を爲して殃罰へ罪の報いの罰）を受け、官人から刑戮へ死刑）を宣告され投獄されている。）

④ 貧窮下賤

（貧窮下賤の様相は、貧窮は盜業の招くところであり、惠施へ恵みを施す）を好まず、偷盜に準ずるので貧窮の苦を受け、天秤棒に財産を縛り付け、所在なく歩行している。）

⑤ 乞匄

（乞^こ丐^{がい}の様相は、鰥^ぐの男が脛も露わに蓑を總角へ古代の少年の髪型。転じて未婚の男の蔑称）のように巻き込んで身を包み、右手に盃、左手に匙を持って孤行している。）

⑥ 孤^こ獨^{どく}

（孤獨の様相は、老いた男が、杖に囊を掛け、肩に担いで独りあてもなく歩いて往く。）

⑦ 𡵿^{おう}

（𡵿の様相は、車に乗り、右手で杖をついて漕ぎ、左手は囲いに凭れている。）

⑧ 弊^{へい}惡^{あく}

（弊惡の様相は、裸形の男が杖をもち、座している。）

⑨ 瘖^{おん}瘂^な

（瘖瘂の様相は、暗然として、腕を叩いて歩行している。）

⑩ 盲^{もう}

（盲の様相は、髪を剃り、杖をたよりにうらみ嘆くように、索行している。）

⑪ 聾^{りゆう}

（聾の様相は、惛然として座り込んでいる。）

⑫ 狂^{きやう}

（狂の様相は、裸形裸足で、両手を挙げ、扑^{ぺん}躍^{やく}へ手を打って踊るようにして進んでいる。）

のようになつていて、一悪痛焼の絵相全体からは、人間は生まれたときから男女二神の俱生神が両肩に存在し、善事・悪事の全てが記録されている。だから殺生をする者は、罪を犯せば牢獄に入れられ、さらに重い罪の者は刑戮を受けなければならない。そして、貧窮下賤、乞丐、孤獨、𡵿、弊惡、瘖瘂、盲、聾、狂等の身体の不具も、すべて殺生惡がもたらすという因果応報の思想が反映されている。

① 二惡痛焼について

高田敬輔「無量寿経曼荼羅」二惡痛焼の絵相



二惡痛焼は、『科図 無量寿經』によれば、偷盜惡である。

その内容をみれば、偷盜惡↓明惡↓別説↓明惡↓正明造惡↓明造惡↓正明劫盜の流れをとり、正に「劫盜」による惡について四つの標文が取り上げられ、それにともなう「造惡の過」を明かす七つの標文によって構成されている。

その内容は、

⑬ 在位不正爲其所欺（※高田敬輔原版では〈不正〉ではなく〈不忠〉の誤字。）

（位に在って正しからざれば、其れが爲に欺かるの様相は、施政の位に在りながら正しく政を行わなければ、そのために欺かれる様相を表している。殿内の主人が忿怒して剣に手を掛け、側に奸臣がいて、もう一人の臣下を指さし、おとし入れる様子が描かれる。）

⑭ 臣欺其君

（臣は其の君を欺くの様相は、右の主人の様子を見る臣下二人が君臣の義が無いことを知り、佞臣〈小賢しい部下〉は機をみて欺惑〈欺く〉し、賢士は勅諫〈誠める〉しようとしている。後ろに一小童がそれを見ている。）

⑮ 嫉賢傍善陷入冤枉（※高田敬輔原版では〈入〉が欠字。）

（賢を嫉み善を傍して冤枉に陥し入る様相は、賢良を嫉妬し、人を怨み、陥し入れようと二人で相談している。）

⑯ 富有慳惜不冝施與

（富裕者が家財、服食が豊饒でありながら、あえて施さない様相は、裕福な父子が豊富な食料財産等の前で悦に耽っている一方で、その前を裸の孤兒が碗を持ちながら物乞いをしている。）

⑰郷黨市里愚民野人轉共從事更相利害（※高田敬輔原版では〈利〉ではなく〈刹〉の誤字。）

（郷黨市里、愚民や野人が、さらに互いの利害のために徒党を組む様相は、郷（一万二千五百家）・黨（五百家）・市（交易の所居）・里（隣は五家。隣の五を里）いずれの愚民や野人も盗犯をしようと利害を企んでいる。絵相は、博打で諍いを起こしている二人を、一方は二人掛かりで、もう一方は一人が押さえ込んでいる。）

⑱子欺其父兄弟夫婦中外知識更相欺誑（※高田敬輔原版では〈誑〉ではなく〈誰〉の誤字。）

（子は父を欺き、兄弟、夫婦、内戚外戚の知人や朋友が互いに欺き誑かす様相は、老父母、嫡夫婦、同母の弟の五人が車座になり、互いに欺し、誑かしている。）

⑲常懷盜心悒望他利

（常に盗み心を懷いて利となる物は手に入れようとする様相は、盗賊が二人、一人は物干し場から衣類を奪い、もう一人は金品を盗み去ろうとしている。）

のように、七つの標文が記される絵相から、一つは、政を執る君主たる者が愚かであれば、奸臣によって思うままに欺かれ、忠良な臣下は蔑ろにされ、君主は臣の期待に応える事無く悪政をしき、臣下は君主を欺く事になり、国が成り立たなくなる。

国の政と同様に、家庭もそれぞれが皆、己の欲望のままにすれば、父子、夫婦、内外の知人、朋友に信頼関係が無くなり、それぞれが欺き誑かし、陥し入れることになる。

また、町や村の愚かな民や野人が、それぞれの欲望のために互いに徒党を組んで盗心を起こし、勝手気ままな行いをするために生活が荒むことになる。

そして、富める者も貧困なものに施すことをせず、家財に固執することにより、災いが起こることを強調している絵相である。

⑦ 三惡痛焼について

高田敬輔「無量寿経曼荼羅」三惡痛焼の絵相



三惡痛燒は、『科図 無量寿經』によれば、邪姪惡である。

その内容をみれば、邪姪惡↓明惡↓別説↓明惡↓正明造惡となり、「邪姪」がもたらす造惡に三つの標文が取り上げられ、その「造惡の過」として三つ標文が示されている。

その概要は、

㉔ 但念姪妬煩滿胸中

（他婦の美色を見て、ただ姪妬を念じ、寐ても覚めても思い煩い、胸中に満ちている様相は、男が他人の妻女に、その想いを文に書きとめ、思案している。階下に男が居て、密かにその想いを通介しようとして待ち構えている。）

㉕ 眄睐細色邪態外逸自妻厭憎私妄入出

（想いをかける他婦に、姪妬に働きかけ、人目につかぬように逢い引きをしている様相は、通介の男から、その想いを他婦が聞き、心が動き、期に及んで来応し、それを壮夫が起きて迎え、眄睐へ流し目を送り、懇ろに相い親しんでいる。）

それを見た妻は嫉妬し、哭泣して中庭に出、後に二人の下女が怨みを込めつつ従っている。）

㉖ 費損家財

（家財を費やす様相は、月下、後庭から二人の男が櫃一杯の財物を担ぎ出し、他婦のために家財を浪費する様を表している。）

㉗ 家室中外患而苦之

（姪樂のために、家室をはじめ、内外の親族までも愁い患い、困惑している様相は、男女三人が輪になり、歎き悲しんでいる。）

㊤ 攻劫殺戮強奪不道

（邪姪により、他の妻女を奪い、奪われ、金銀等の強奪等の非道が引き起こされている様相は、二人の男が財物を奪い、逃走するのを、男女二人が追いかけて捕らえようとしている。）

㊥ 交結聚會興師相伐

（邪姪によつて他の妻女を奪うとか想いが叶わぬ等の原因から、武器を取り、争い事が生じる様相を、二人の武士が戈を交わし闘う様に表している。）

とあるように邪姪がもたらす悪について取り上げられている。

さらに、『大経曼荼羅開壇記』（巻四 十五丁裏）の中で取り上げているのをみれば、

凡夫戀著不能自秣女色者世間之重患凡夫因之至死不免女色者世間之衰禍凡夫遭之無厄不至行者既得離若復顧念是爲地獄出還復思入女人之相其言如蜜其心如毒譬如清淵澄鏡而咬蛟龍居之金山害窟而獅子處之

（凡夫は戀に著しくして自ら秣うこと能わず。女色は世間の重患なり。凡夫これに因りて死に至るまで免れず。

女色は世間の衰禍なり。凡夫これに遭えば、厄として至らざること無し。行者、既にこれを離れることを得て、若しまた顧みて念ずれば、是れ地獄より出でて還りてまた入ることを思うと。

女人の相は、其の言、蜜の如し。其の心は、毒の如し。譬えば、清淵澄鏡にして蛟龍これに居り。金山害窟にして之に獅子處るが如し。）

とあり、凡夫にとつて女色は、世間の重患、死に至るまで免れえぬ、世間の衰禍であること。

さらに、女人の言は蜜のごとく、心は毒の如く、譬えれば、清く鏡のように澄んだ淵に蛟竜が居り、金山宝窟に獅子がいるような恐ろしいことであるので、すみやかに離れることを諭している。

① 四惡痛焼について

高田敬輔「無量寿経曼荼羅」四惡痛焼の絵相



四惡痛燒は、『科図 無量寿經』によれば、妄語惡である。

その内容をみれば、妄語惡↓明惡↓別說↓明惡↓正明造惡となり、「妄語」がもたらす造惡に四つの標文が取り上げられ、その造惡のもたらす「過」として四つの標文が記されている。

その概要は、

②⑥ 尊貴自大謂己有道橫行威勢侵易於人

（己を極めて尊く大きくみせるため、威勢をはって人を軽んずる様相は、主人が茵しとねに傲慢な態度で自重して座し、一僧がそれを見極めるように見、一童が茶を奉じている。）

②⑦ 於傍快喜不孝二親

（傍で快喜し、二親に孝行しない様相は、老いた二親が歎き泣く傍らで、夫婦と子が燭火を燃じ香を焚き、奢侈しゃしな振る舞いをしている。）

②⑧ 綺語

（言葉を飾り立てる綺語の様相は、綺語を用い、盛んに話している。）

②⑨ 惡口

（他を責め謗る惡口の様相は、綺語を言う者と対面し、互いに語り合っている。）

③⑩ 妄言

（嘘偽りを言い、相手を貶める妄言の様相は、両舌の者と対面し、語り合っている。）

③⑪ 兩舌

（二枚舌の兩舌の様相は、彼此を煽って禍をもたらすように、妄言の者と語り合っている。）

③⑫ 讒賊鬪亂憎嫉善人敗壞賢明

(人を譏^そり、混乱させ、善人を憎嫉し、賢明な者を追いやる様相は、賢善な一人が文筐を持ち進むのを、一人が指差しするのを、もう一人が衣を引いて告げ口して貶めようとしている。)

㊦ 輕慢師長^{きやうまんしじやう}

(年長者の師を輕んじている様相は、師長に対し、一門下生が褥に坐して対向し、団扇を把って尊敬の念も無く侮っている。)

のように、妄語による惡について注釈している。

さらに、隨天は『大經曼荼羅開壇記』(卷四 二十丁裏)で、

緣^ニ其妄語皆自貪欺^一 慳欺罪故復爲^ニ餓鬼^一 何故多被^ニ誹謗^一 以^ニ其妄語不^ニ誠實^一 故何故妄語爲^ニ人所^一 誑以^ニ其妄語欺^ニ誘人^一 故當^ニ知妄語四大苦也

(其れ妄語は、皆、自ら貪り欺くに緣る。慳欺の罪の故に復た餓鬼と爲る。何が故に多く誹謗せらる。

其れ妄語は誠實ならずを以つての故に。何故ぞ、妄語は人に爲し、誑すか。其れ妄語は、誘うる人を欺くを以つての故に。當に知るべし。妄語は四大苦なり。)

と記し、まさに、妄語がなぜ誹謗されるかは、誠實でないこと、そして、慳欺(けちで意地悪く人を欺く)で、餓鬼のように人から批難されるものである。

そして、誠實でないので、人をたぶらかすことになることから四大苦であると記されているのである

㊦ 五惡痛焼について

高田敬輔「無量寿経曼荼羅」五惡痛焼の絵相



五惡痛焼は、『科図 無量寿経』によれば、飲酒悪である。

その内容をみれば、飲酒悪↓明悪↓別説↓明悪↓正明造悪が三つの標文、そして、明造悪の過が三つの標文になっていて、飲酒がもたらす造悪と、その造悪による過が記されている。

また、別説↓明痛として三つの標文が示され、計九つの標文が記されている。

その内容を見ると、

㊦ 欲殺眞人鬪亂衆僧

（眞人（阿羅漢）を殺し、衆僧（多くの僧）を鬪亂させようとする様相は、主人が一僧を拘束しようとし、逃げようとするもう一僧を、武夫が剣に手を掛け、迫っている。）

㊧ 耽酒嗜美食無度

（酒に耽り美食を嗜んで、節度無く飲食している様相は、大きな家の中で、主人が大盃を口にし、周りには美食、美酒が散在し、側の奴が酩酊して顛倒している。）

㊨ 父母教誨瞋目怒謗言令不和違戾反逆

（父母が教え諭すと目を怒らし言うことに従わずに逆らう様相は、二親が長子に慇懃に教誨するのを聞かずに反逆し、家を飛び出すのを次子が止めるが、振り払っている。）

㊩ 行惡從苦入苦從冥入冥

（惡を行じて苦に従り苦に入り、冥より冥に入る様相は、惡夫が重病で身が炎熱し、まさに命が尽きようとする時、地獄の獄卒が火輪を引いて現前するのを見て発狂惑乱している。）

㊪ 大命將終悔懼交至

（まさに命が終わろうとする時、地獄の火輪をみて恐れ悔いている様相は、惡夫が惑乱するのを家婦も恐れ怯え号泣して、夫の手足を押さえようとしている。）

③⑨ 經法不信きやうぽうふしん

（經法を信じない様相は、宅外で一人の男が經卷を焼いている。一軸はすでに焼け、もう一軸は半ば焦げ、さらに一軸は手にある。）

④⑩ 數之自然應其所行しゆしじねんおうごしよぎやう

（数の自然であることによって、その所行に応ずる様相は、地獄の獄卒が火輪を引き、その惡の所行の数により地獄へ落とそうとしている。）

④⑪ 欲害父母兄弟眷属よくがいふもきやうだいけんぞく

（父母、兄弟、眷属を害す様相は、父母の教誨に怒って応ぜず、次子の止めるのも聞かず、子を置いて出ていき、家族に害をもたらしている。）

④⑫ 家室眷属飢寒困苦けしつけんぞくきかんこんく

（家室眷属が飢寒し困苦している様相は、長子が父母の教誨を聞かずに怒り、家を出たため、生活が困窮し、寒さや飢えに苦しんでいる。）

のように、美味美酒に耽る飲酒の過により、阿羅漢を殺傷したり、僧侶を闘乱させたり、經法を誹ることになるのである。

また、經法を信じないばかりか、父母の教誨も聞かず家庭内を混乱させることになり、そのため家庭崩壊をもたらすことになるのである。

そのような惡の所行の数の重さにより、死に際に獄卒が火輪で迎えに来たことに初めて気付き、発狂惑乱している絵相である。

以上が、五惡段（一惡痛燒①～⑫、二惡痛燒⑬～⑲、三惡痛燒⑳～㉕、四惡痛燒㉖～㉓、五惡痛燒㉔～㉔）それぞれの四十二の標文の概要である。

② 隨天の『大經曼荼羅開壇記』にみる五惡段

隨天が『大經曼荼羅開壇記』の中で、五惡段の各論というべき一惡痛燒、二惡痛燒、三惡痛燒、四惡痛燒、五惡痛燒に関わる四十二の標文について、その概要を前項でみたので、ここでは五惡段全体についてどのような捉え方をしているかみることにする。

まず、五惡、五痛、五燒について、(『開壇記』卷四 五丁裏)

科初中爲五卽是五惡經說「惡痛燒」五惡惡因五痛華報五燒果報淨影云五惡所謂殺盜邪婬妄語飲酒是其五惡造「此五惡」於「現世中」王法治「罪身遭」厄難「名爲」五痛「以」此五惡「於」未來世「三途受報說爲」五燒憊興同此問造惡何唯局「此五」耶答嘉祥云由「世人喜造」故偏彰又沍位云五攝「七支」身三爲「三口四爲」一及飲酒故義寂云身業三惡以爲「初三」口業四惡合爲「第四」意業三惡合爲「第五」至乃

(科の初の中に五と爲す。卽ち是れ五惡なり。經に惡・痛・燒を説く。

五惡は惡因。五痛は華報。五燒は果報。

淨影に云う。五惡は所謂る殺・盜・邪婬・妄語・飲酒、是れ其の五惡なり。此の五惡を造れば現世の中に於いて、王法、罪を治し、身厄難に遭うを名づけて五痛とす。此の五惡を以って未來世に於いて三途に報いを受けるを説きて五燒とす。(憬興此れ同じ。)

問う。造惡何ぞ唯だ此の五に局ざるや。

答う。嘉祥に云う。世人喜びて造るに由る。故に偏えに彰す。また沍位に云わく。五に七支を攝す。身、三を三とす。口、四を一とす。及び飲酒との故に義寂に云わく。身業の三惡を以って初三とす。

口業の四惡を合して第四とす。意業の三惡を合して第五とす。(乃至)

と述べ、五惡は惡因。五痛は華報。五燒は果報という捉え方をしており、現世では、殺・盜・邪婬・妄語・飲酒

の五惡を造れば王法の罪を受け、その身が厄難を受けることが五痛であり、未來世で三途に報いを受けることを五燒という認識を示している。そして、身業の三つの惡を一大惡・二大惡・三大惡とし、口業の四つの惡を合わせて四大惡、意業の三つの惡も合わせて五大惡としているのである。

さらに、その内容は、『開壇記』卷四 一丁表)

二舉業苦過爲二一業道二苦道初中爲五一殺生惡二偷盜惡三邪婬惡四妄語惡五飲酒惡五惡惣論夫世俗所尚仁義禮智信也道法所訓不殺盜婬酒也道俗雖異其所以勸懲之一矣故辨正論曰五戒者同世五常愍傷不殺曰仁防害不婬曰義故心禁酒曰禮清察不盜曰智非法不言曰信此五德者不可造次而虧不可須臾而廢王者履之以治國君子奉之以立身用無暫替故日常也内教五戒外典五常彼此之說如合符節是故隨順佛化而持五戒則國治民安如指掌也《中略》

故今經曰佛言我哀愍汝等諸天人民甚於父母念子今我於此世間作佛降化五惡消除五痛絶滅五燒以善改惡拔生死之苦昇無爲之安

(二に業苦の過を擧げ、二とす。一に業道、二に苦道。初の中に五とす。一に殺生惡。二に偷盜惡。三に邪婬惡。四に妄語惡。五に飲酒惡。五惡惣じて論じるは、夫れ世俗の尚ぶ所、仁・義・禮・智・信なり。

道法の訓ずる所は、不殺・盜・婬・妄・酒なり。道俗異なりと雖も其の之を勸懲する所以は、一なり。

故に辨正論に曰く。五戒は世の五常に同じ。愍傷不殺を仁と曰う。防害不婬を義と曰う。故心禁酒を禮と曰う。清察不盜を智と曰う。非法不言を信と曰う。此の五德は、造次にも虧くべからず。須臾も廢すべからず。王者は之を履きて以て國を治め、君子は之を奉じて以て身を立つ。用、暫く替え無ん。故に常と曰う。内教の五戒、外典の五常、彼此の説符節を合つするが如し。是の故に佛化に隨順して五戒を持せずんば、則ち國治り民安きこと掌を指すが如しなり。

《中略》

故に今經に曰く。佛の言わく、我れ汝等諸天人民を哀愍すること父母の子を念ずるよりも甚だし。

今、我れ此の世間に於いて作佛し、五惡を降化し、五痛を消除し、五燒を絶滅し、善を以って惡を改め、生死の苦を抜いて無爲の安に昇らんと。）

とあるように、隨天はこの五惡段について、一つ目は、

依「經說相」初明「淨土因果」使「人欽羨欣向」後示「三途因果」使「人自省厭背」也人人信而從「之内自恐懼而歸」出離之大道「外自戒慎而順」王法之治化「其能如是則雖欲不治而其可得乎

（經の説相に依るに、初めに淨土の因果を明かし、人をして欽羨欣向せしめ、後に三途の因果を示して、人をして自ら省みて厭背せしむなり。人人信じて之に従う。内に自ら恐懼して出離の大道に歸し、外に自ら戒慎して王法の治化に順ず。其れ能く是の如くんば則ち治まらんと欲すと雖も、其れ得べけんや。）

と述べ、『無量壽經』は、初めに淨土の因果を顯らかにして、衆生を欽羨させ、淨土に欣んで向かわせようとし、その後に三途の因果を示し、自らを反省させ、厭背するように説かれているものである。だから、人々はこれを信じ、内には自ら恐懼して出離の大道に歸し、外には自ら戒慎して王法の治化に順ずるのであると述べている。

二つ目は、經文にはどのような惡なのか名称が説かれてはいないが、その内容から、一に殺生惡、二に偷盜惡、三に邪婬惡、四に妄語惡、五に飲酒惡と明言している。このことは『科図 無量壽經』の科文でも同様であることから、共通の認識であると考えられる。

三つ目は、五戒「不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒」と五常「仁・義・礼・智・信」を結びつけ、慫慂不殺を仁、防害不婬を義、故心禁酒を禮、察不盜を智、非誑不言を信という捉え方をしていて、道教の思想と合致することが説かれている。

この道教の思想について、なぜ『無量壽經』に説かれるのか、望月信亨氏は『佛教經典成立史論』¹⁾で、又無量壽經の五惡段には、

今世爲「惡福德盡滅、諸善鬼神各去離」之。身獨空立無所「復依」。

と説いてゐるが、これは五善を持するものには善神の擁護があることを意味するもので、前引四天王經及び三品弟子經と同一趣旨であつて、多分に道教思想がとりいれられたものなることを認めなければならぬ。蓋し此の五惡の一段は無量壽經の異譯なる大寶積經無量壽如來會、大乘無量壽莊嚴經、并に現存の梵本及び西藏譯本には共にその文なく、唯だ上記大阿彌陀經等の三部にのみ存するのである。この中、大阿彌陀經は吳支謙の譯、平等覺經は曹魏帛延、若しくは西晉竺法護の譯で、若し此の二經に最初から彼の五惡段があつたとすれば、その文は既に三國時代に添加されたものといふべく、又無量壽經は劉宋寶雲の譯と認定されるのであるが、その中の五惡の文も大體この二經と同一であるから、即ち寶雲は被經に依遵してその文を複製したものと見るべきである。但し三品弟子經も三寶紀等に吳支謙譯と傳へてゐるのであるから、或は支謙が彼の五惡の文を作ったのかも知れぬが、それにしては時代が聊か早過ぎる觀がある。出三藏記集には三品弟子經を失譯としてゐる。されば今の五惡段も東晉代頃に或る好事者が制作し、之を前二經に追補したのではないかとおもはれる。

と記し、五惡段に道教思想が見られるのは、東晉代頃にある好事者が制作し、これを大阿彌陀經と平等覺經の二經に追補したのではないかと記し、五惡段が異質のものであることを指摘している。

また、坪井俊映氏は『淨土三部經概説』^(注2)で、

五惡とは、前の三煩惱につづいて世間の種々の惡業を五種に類別して説く章段であつて普通五惡段といわれている。この章段は本經の他に平等覺經、大阿彌陀經に存し、無量壽如來會、無量壽莊嚴經及び梵文藏文には存在しない。これ凡らく前の三毒煩惱章（假題）と共に本來なかつたものが、譯出後、志那で附加されたものであるう。

經に「今我れ此の世間に於て作佛して、五惡五痛五燒の中に處すること嚴も劇苦なりとなす。群生を教化し

て五惡を捨てしめ、五痛を去らしめて、五燒を離れしめ、其の意を降下して五善を持して、其の福德度世長壽泥洹の道を獲せしむ」とあり。

この五惡とは娑婆世間における五種の惡業をいうのであるが、この五惡について淨影寺慧遠無量壽經義疏卷下（淨全五・五〇頁）に「殺、盜、邪婬、妄語、婬酒はこれ五惡なり。この五惡を造つて現世において、王法罪身を治める厄難に遇うを名づけて五痛となし、此の五惡を以て未來世に於て三途の報を受くを五燒となす。」と説く。即ち五戒に反する行爲を五惡とし、これによつて現世において、刑罰を受けるを五痛と名づけ、未來世に三途の苦を被るを五燒とする。それでこの五惡による五痛五燒の苦果を離れ、五善たる五戒を持せしめて、現世において身安く、苦無く、後生は彌陀の淨土に往生して、涅槃を證得することをすすめるのが本章段の趣意である。《中略》

また志那佛教界に五戒の思想が輸入されてより、これを仁・義・禮・智・信の五常に配せんとする思想が起こり、隋の智顗、湛然の頃より唐宋時代に亘つて盛んに行われた。それは第一惡は不仁の惡を説くとし、不仁の至極は殺生であるから第一惡は殺生を主として明し、第二惡は義を缺く惡で、不義は偷盜に過ぐものがないから偷盜を説き、第三惡は禮に反する惡で、邪婬は禮に反する惡の最極のものであるから邪婬を主として説き、第四惡は信に背く惡で、口業の惡である「兩舌、惡口、妄語、綺語」等を束ねて明す。第五惡は智に反する惡で意業の三惡たる貪欲瞋恚邪見を束ねて説いたものとする。

かくのごとく五惡は或は五戒を犯す行爲とし、或は身口意三業の十惡とし、また人愉五常に反する惡の行爲とするが、要するところ、これは五戒または十戒の思想が基礎に考えられていて、これらに反する行爲をなしたものは世間の因果應報の道理によつて、現世にその報を受け、後世は三惡道の苦難を受けるといふのである。

と述べ、五戒に反する行爲を五惡、これによる現世の刑罰として五痛、そして未來世に三途の苦を被ることを五

焼とし、この五惡による五痛五燒の苦果を離れ、五善である五戒を持して、現世において身を安く、苦無く、後生は彌陀の淨土に往生して、涅槃を證得するのが本章段の趣意であるとしている。

また、五戒の思想が輸入されて、仁・義・禮・智・信と五惡が呼応し、世間の因果応報により、現世にその報いを受け、後世は三惡道の苦難を受けるという道理が、經に反映されていることを指摘している。

さらに、真野正順氏も『無量寿經講話』^(注3)で、

ある梵文学者は、この部分が梵文にはまったく欠けていることに目をつけ、この魏訳『無量寿經』は梵本や唐訳と多くの点において一致しており、同一の原典からの翻訳だと考えられるが、ただこの五惡段の部分だけは他の二經にはなくて、この經にだけあるのは、おそらく中国で偽作して挿入したからだろうというのです。またある学者は、この部分の文章や用語が以前ときわだって違っているばかりでなく、その中には「天神剋識してその名籍をわかつ」とか「福徳度世上天泥洹の道」とか、はなはだインドらしくない中国的な色彩の濃い思想が現れてくるのに着目して、おそらくこれはのちの人が中国人にしたしみやすいようにこういうものを作成し、挿入したのであらう。お話の相手が急に弥勒にかわったことなども、おそらくこういう風に經典に手を加えた一片の良心から、わざとこのところだけ弥勒をひっぱり出してきたのであらうということです。《中略》

しかし、それならば、この五惡段は後世の偽作だと断定してもよいのかというと、そうは簡単にはいいきれません。なるほど、梵本や唐訳にはありませんが、さらに初期の原典を伝えると推定される第一類の經典、後漢訳の『平等覺經』や呉訳の『大阿彌陀經』にはちゃんとついてあるばかりでなく、文章もまるで引き写したように同一であります。そうして内容が中国的だということも、この二經では初めからそうなので、別に不思議でもない。また、さきに問題となった弥勒菩薩にしても、阿逸菩薩としてちゃんと初めから出ている。阿逸多とは弥勒の名です。してみると、決して偽作挿入ではない。ただこの魏訳『無量寿經』には初め

なかったもので、後に第一類の經典から取ってきて挿入したものであることが推察せられるのです。

というように、右の望月、坪井、真野の三氏の論に共通していることは、魏訳『無量寿經』の五惡段は、中国的な色彩の濃い道教の思想が現れていて、後漢訳の『平等覺經』、吳訳の『大阿弥陀經』にも収められていることから、後に挿入されたことが想定されるという認識を示していることを知ることができるのである。

その挿入されたとされる五惡段について、隨天は、殺生惡・偷盜惡・邪淫惡・妄語惡・飲酒惡と明記し、道教の仁・義・禮・智・信の五常思想や五惡を五戒に反する行爲であるということや五善を持するものには善神の擁護がある俱生神などを取り上げていることから、高田敬輔が描いた絵相の注釈の視点として、道教の思想との関連性に重点をおいて記していることが分かる。

③ 良照義山の『無量寿經隨聞講録』にみる五惡段

良照義山は、その著『無量寿經隨聞講録』卷下之二（浄土宗全書第十四卷四六三頁）で、五惡段を次のように捉え、記している。

佛告彌勒等者上來厭離境中學_二三毒_一即能起煩惱已下明業是所起業道謂此五惡依_二彼三毒_一而所起業也今于斯說_二在家五惡_一此今經所被機故也亦所好在家別在_二五惡_一出家其次先說_二在家五惡_一此如_二上言浄土教意本爲凡夫兼爲聖人其中又本爲在家兼爲出家故扱諸師及鈔主捨_二五惡_一持_二此五善_一即爲五戒此義不契_二經意_一大非其由言_下以_二五戒_一制_中五惡_上則爲_二戒善衆生_一然本願中十方衆生之衆生更非_二戒善衆生_一先處中善人兼可_二通_一戒善若今善言_二戒善_一則無戒破戒皆悉所除若爾本願十方衆生内少々カケルホドニカケルホドニ百中稀得_二一二_一千中稀得_二三五_一是不契_二經意_一故不可存說_二五戒_一也宗家_{觀念法門 廿五紙}釋_二五善性人五惡性人_一是處中善人先違_二此意_一次西河意亦同_{安樂集上 四十紙}云_二五戒十善持得甚希_一又元祖選擇集中_{上卅八紙 特留念佛ノ下}釋_下此經雖有_二持戒之言_一未_レ說_二持戒之行相_一說_二持戒行相_一者在_中大小經律_上此經唯言_レ說_二念佛_一也若今斯言_レ說_二五戒_一者今經爲_レ說_二戒相_一故亦違_二此釋_一然則今經五

善是處中善可^レ定^二判之^一諸師聖道學者故謬可^レ釋^レ之鈔主亦准之一盲曳^三衆盲^一其過難^レ遁耳

（佛告彌勒とは、上來は厭離の境の中に三毒を擧げる。即ち能起の煩惱なり。已下は業を明かし、是れ所起の業道なり。）

謂わく此の五惡は、彼の三毒に依りて起こる所の業なり。今、斯れ在家の五惡を説く。今經、所被の機が故なり。

また好む所、在家は別して五惡に在り。出家は其の次なれば先ず在家の五惡を説く。此れ上に言うが如く。淨土教の意は、本爲凡夫、兼爲聖人なり。其の中に又、本爲在家、兼爲出家の故なり。

扱て諸師及び鈔主は、五惡を捨てて此の五善を持するを、即ち五戒とす。此の義、經意に契らず。

大いに非なり。其の由は、五戒を以って五惡を制すると言わずんば則ち戒善の衆生と爲る。然れども本願の中、十方衆生の衆生は、更に戒善の衆生に非ず。先ずは、處中善人兼ては戒善に通ずべし。

若し今の善を戒善と言うは、則ち無戒、破戒は皆悉く除からる。若し爾らば、本願の十方衆生のなか、少々かけるほどにかけるほどに、百が中に稀に一二を得、千が中に稀に三五を得べし。是れ經意に契らざる。故に五戒を説くとは存ずべからず。

宗家へ觀念法門廿五紙～五善性人、五惡性人を釋するも、是れ處中の善人なり。先ず此の意に違わず。

次に西河の意、また同じ。（安樂集上四十四紙）に云えり。五戒十善持し得る者の甚だ希なりと。

また元祖も選擇集の中に（上卅八紙特留念佛ノ下）此の經に持戒の言有りと雖も、持戒の行相を説かず。持戒の行相を説く事は大小經律に在りと釋す。此の經は唯だ念佛を説くと言えり。若し、今、斯れを五戒を説くと言わば、今經に戒相を説くとする。故にまた此の釋に違わず。然らば則ち今經の五善は、是れ處中の善なりと。これを定判すべし。諸師は聖道の學者なるが故に謬^{あやま}りてこれを釋すべし。

鈔主またこれに准ず。一盲、衆盲を曳く。その過、遁^{まぬが}れ難しのみ。）

のように、これまでは、厭離の境界の三毒段について述べてきたものであり、これは能起の煩惱である。これより以下は、業を明かすものであり、所起の業道である。この五悪は、彼の三毒によって起こるところの業である。今は在家の五悪について説くものである。なぜならこの経は、仏の救済の対象を説くものであるからである。

また、区別すれば在家には、五悪がある。出家はその次なので、まず在家の五悪を説く。

浄土教の本意は、本為凡夫、兼為聖人である。その中に、また本為在家、兼為出家がある。

さて、諸師や鈔主『良忠』は、五悪を捨てて、この五善を保つことを五戒としている。しかし、この義は経意にそわず、大いに異なるのである。その理由は、五戒をもつて五悪を制すると言わなければ、戒善の衆生ということになる。けれども、本願之中の十方衆生は、戒善の衆生ではない。まずは処中の善人であって、兼ねて戒善に通じるものである。もし今の善を戒善というならば、それは無戒、破戒であり、戒は皆ことごとく除かれなければならない。

もし、そうであれば、本願の十方衆生のなか、少々かけるほどにかけるほどに、百が中に希に一二を得、千が中に稀に三五を得ても、これは経意にそぐわないものである。だから五戒を説くとは言わないのである。宗家『善導』が『観念法門』^(注4)で、五善性人、五悪性人を釈しているものの、処中の善人であり、この本意とは異ならないのである。

西河『道綽』の意も同じで、『安樂集』^(注5)にいうように、五戒十善を保持し得る者は甚だ希である。

元祖も、『選擇本願念佛集』第六章「末法萬年後餘悉滅特留念仏之文」^(注6)の中で、「持戒の言有りと雖も、未だ持戒の行相を説かず。」「また持戒の行相を説くは、廣く大小の戒律に在り。」と記し、この経はただ念仏を説くものであると述べている。

そして、もし今、これを五戒と説くというならば、この経に戒相を説くことになり、この解釈とは異なる。だから、今経の五善は、「処中の善」であると定判すべきである。諸師は聖道の学者なので、謬って解釈して

いる。鈔主もこれに準ずるもので、一盲が衆盲を曳くようなもので、その過をまぬがれないものである、と記している。

さらに、「処中の善」について、

若處中善人進爲_二戒善人_一甚所_レ望非_レ限_二所論_一扱淨土教意本爲凡夫本爲在家本爲惡人爾今勸_二處中善_一似_レ違_二教意_一此義云何謂淨土行人雖_二極惡最下_一若作_レ惡則爲_二念佛_一作_レ障是故消_二化五惡_一不作即云_二五善_一必非_二作法受得_一縱淨土機極惡セヨ無_二處中善_一則不_レ得_二往生_一也若造_レ惡其誤亦本善立還悔者様ナルヲ云_二處中善_一此元來惡人ナレハ也ソレマテモナキ惡人ナラハ何得_二往生_一總惡人念佛申云事無一念慚愧處デコソ念佛申セサアレハ淨土往生人皆善人也善人ナレトモ處中善人非_二戒善之善人_一如_レ是得_レ意則不_レ違_二淨土教意_一也其上何ナル佛法ニカ有_下不_レ立_二廢惡修善_一之佛法耶若淨土宗佛法外ナラハ各別佛法内ナラハ諸惡莫作ハ諸佛通誠也七佛通誠之偈

(若し處中の善人、進んで戒善の人と爲るは、甚だ望む所、所論の限りにあらず。

さて淨土の教意は、本爲凡夫、本爲在家、本爲惡人なり。爾るに、今、處中の善を勧めるは、教意に違ふに似たり。此の義、云う、何と謂く。淨土の行人は、極惡最下と雖も、若し惡を作すは、則ち念佛の爲に障りを作す。是の故に五惡を消化して作さざるを、即ち五善と云う。必ず作法受得に非ず。たとい淨土の機は、極惡にもせよ、處中の善無かずんば、則ち往生を得ず。若し惡を造れば其れを誤りてはまた本の善に立ち還り、悔いる者の様なるを處中の善と云う。此れが元來惡人なればなり。それまでもなき惡人ならば、何ぞ往生を得ん。總じて惡人が念佛申すと云う事は無し。一念慚愧の處でこそ念佛申せ、さあらば淨土往生の人は、皆、善人なり。善人なれども處中の善人にして、戒善の善人には非ず。是の如く意を得れば、則ち淨土教の意に違わず。其の上何かなる佛法にか、廢惡修善を立てざるの佛法有りや。

若し淨土宗佛法の外ならば各別。佛法内ならば諸惡莫作は諸佛の通誠なり(七佛通誠之偈)。

のように述べ、處中の善人が進んで戒善の人となるのは望むところであるが、淨土教の本意は、本爲凡夫、本爲

在家、本爲惡人である。だが、今、処中の善を勧めるのは、教意と違うようにみえるけれども、その本義は、浄土の行人は、極悪最下の者であっても、もし悪を作るとしたら、それは念仏のために障りを作るようなものである。だから五悪を消して作さないようにすることを五善というのである。これは特に作法があるものではない。

たとい極悪の者でも、処中の善が無ければ、浄土への往生はできないのである。

もし悪を作ればそれを誤り、また本の善に立ち還り、悔いる者のようなことを処中の善と云うのである。

これは、元来、惡人だからである。それほどまでもない惡人ならばどうして往生を得られよう。

おおよそ惡人が念仏を申すということは無く、一念して深く反省して恥じるところで念仏を申すとしても、だからこそ浄土往生の人は、皆、善人なのである。

しかし、善人は処中の善人で、戒善の善人ではないのである。このようなことから考えれば浄土教の本意には違わないであろう。なにか仏法とは異なるものであるだろうか。

また、廢惡修善を立てない仏法があるだろうか。もし浄土宗の仏法の外ならば各別で、仏法内なら諸惡莫作は、七佛通誡の偈にあるように、諸仏の通誡であると述べている。

このようなことから、良照義山は、処中の善とは、もし悪を作ればそれを誤り、また本の善に立ち還り、悔い改めるようなことであり、戒律を守ることによって得られる善根をさすのではない、と述べ、あくまでも改善はなく、処中の善であることを主張しているのである。

高田敬輔の「無量寿経曼荼羅」の五惡段の絵相は、一惡痛燒が十二、二惡痛燒が七、三惡痛燒が六、四惡痛燒が八、五惡痛燒が九の、計四十二の標文によって構成され、絵相を読み解く視点が示されている。これをさらにもどのような意図の下に描かれたのか、『無量寿経』『科図 無量寿経』『無量寿経随聞講録』『大経曼荼羅開壇記』を通して検証した結果、

* 一惡痛燒の絵相は、人間は生まれたときから男女二神の俱生神が両肩に存在し、善事・悪事の全てが記録され、殺生による罪を犯せば牢獄に、さらに重罪は刑戮を受けなければならない。そして、貧窮下賤、乞匄、疋、聾等の身体不具や生活困窮も、全て殺生悪がもたらすという道教的因果応報の思想が反映されていること。

* 二惡痛燒の絵相は、君主が正しく国を治め、君臣の義を尊ばなければ、臣下は欺き、君主は悪政をしうことになる。同様に家庭内も己の欲望のままにすれば、父子、夫婦等の信賴關係が無く、各々が欺き陥し入れ、また、愚民や野人も欲望のために盗心を起こすという偷盜による信賴關係が強調されていること。

* 三惡痛燒の絵相は、邪姪による過による災いが夫婦間は勿論、家族、親族の内外までも困惑させ、さらに争い、強奪、散財等を引き起こすものであること。さらに凡夫にとって女色は、世間の重患、死に至るまで免れえぬ、世間の衰禍であることを表していること。

* 四惡痛燒の絵相は、口業の四過（兩舌・惡口・妄語・綺語）がもたらす妄言により、自ら威勢を張り、善人を憎嫉して賢者を追いやり、親をはじめ師長を尊敬せず、人間關係に信賴を欠くことの災いを表していること。

* 五惡痛燒の絵相は、美味美酒に耽る飲酒の過により、僧侶を鬪乱させ、父母の教誨も聞かず、挙げ句に經法を信ぜず、死に際に獄卒が火輪で迎えに来たことによって悔い改めようとするが、時すでに遅く、狂乱している様を表していること。

* 隨天は、五惡は、殺生惡・偷盜惡・邪姪惡・妄語惡・飲酒惡であり、五常や五善、善神の影護等、善因果、惡因果の因果応報の道教的思想との関連性に注目して注釈していること。

* 良照義山は、浄土教の本意の視点から、五惡を改めることは戒善ではなく、処中の善としてとらえ、もし惡を作ればそれを誤り、またもとの善に立ち還り、念仏を通して悔い改めるようなことであることを強調し

ていること。

等をあげることができ、「無量寿経曼荼羅」の五悪段の絵相は、道教的な思想がかなり色濃く盛り込まれているものの、念仏を通して五悪を離れ、五善とし、三途無量苦悩に堕ちること無く、極樂浄土に往生して涅槃の妙果を得さしめることを意図して描かれた絵相であるということが出来る。

- (注1) 望月信亨『佛教經典成立史論』三九九～四〇〇頁 法藏館 昭和二十一年
- (注2) 坪井俊映『浄土三部經概説』一二八～一二九頁 隆文館 昭和四〇年
- (注3) 真野正順『無量寿經講話』二八七～二八八頁 大法輪閣 昭和三八年
- (注4) 善導『観念法門』(浄土宗全書 第四卷 二三四頁)
- (注5) 道綽『安樂集』(浄土宗全書 第一卷 六九三頁)
- (注6) 『重镌選擇本願念佛集』卷本 三八丁裏 (元禄九年刊 沙門義山募刻 嘉永二年再刻)

(三) 「慳惡」の「學業苦過」の「苦道」(三塗無量苦惱段)

「無量寿經曼荼羅」の左縁の貪瞋愚過段、下段の五惡痛燒に引き続き、最下段の三塗無量苦惱段について考察する。

尚、考察にあたり、貪瞋愚過段、五惡痛燒段と同様に、高田敬輔の「無量寿經曼荼羅」、原典の『無量寿經』、その内容を科文にした『科図 無量寿經』、良照義山の『無量寿經隨聞講録』【以下、略して『隨聞講録』】、隨天の『大經曼陀羅開壇記』【以下、略して『開壇記』】、それぞれを通して、三塗無量苦惱段の絵相が描かれた意図を検証する。

① 三塗無量苦惱段の全体的な位置付け

『科図 無量寿經』(740頁)の科文から明らかのように、三塗無量苦惱段は、學業苦過の總辯、別説、重辯と続く、重辯の部分で、前項までこの世の五惡の苦しみに悩む様子を説き、この五惡によってもたらされる現世の五痛の苦しみや、後世には五燒の報いを受けて三惡道を展轉として解脱できないから、五惡・五痛・五燒の苦から離れることを、衆生に重ねて辯じ、勧める所である。

ここでは、『無量寿經』の經文の論理展開を『科図 無量寿經』の科文《……(……)》で表示を手がかりにみていくことにする。

まず、冒頭は、

佛告「彌勒」吾語「汝等」是世五惡勤苦若「此五痛五燒展轉相生」【總明相生(総じて相生を明かす)】

(佛、彌勒に告げたまわく。吾れ汝等に語る。是の世の五惡、勤苦することかくの如し。五痛・五燒、展轉して相生ず。)

とあるように、この世の五悪によって、人々が苦しみ悩むことは、これまで述べたとおりである。さらに、その結果として、現世では五痛の苦しみがあり、後世には五焼の報いを受け、三惡道を展転として相い生じ、解脱できないのである、と説かれている。

そして、

但作_レ衆惡_一不_レ修_二善本_一 【別願相生↓明惡生痛焼↓明造惡（惡を造るを明かす）】

（但だ、衆惡を作して善本を修せず。）

それは、ただ惡をなして、善根功徳を積まないからであり、

皆悉自然入_二諸惡趣_一 【明起焼（焼を起こすを明かす）】

（皆、悉く、自然に諸々の惡趣に入る。）

それによって、皆、悉く、自然に諸々の惡道に墮ち入るのである。

或其今世先被_二殃病_一求_レ死不_レ得求_二生不_レ得罪惡所_一招示衆見_レ之 【明起痛（痛を起こすを明かす）】

（或いは其の今世に、先ず殃病を被りて、死を求むるに得ず。生を求むるに得ず。罪惡の招く所、示_{あらわ}にして、衆、これを見る。）

或る者は、この世において難病を罹って、苦しみのあまり死のうとしても死ぬことができず、生きようとしても生きることができないのである。これも過去の五惡道の罪惡の招くところのもので、それが現れただけで、衆人がよくその姿を目にするところである。

そして、

身死隨_レ行入_二三惡道_一苦毒無量自相焦然 【明燒苦毒（燒の苦毒を明かす）】

（身、死すれば、行に随って三惡道に入る。苦毒無量にして自らあい焦_{しょうねん}然せらる。）

この身が死ねば、その行いによって三惡道に墮ち、無量の苦悩を受け、自ら焼け焦がされることになるのであ

る。

さらに、

至^二久後^一共作^二怨結^一從^二小微^一起遂成^二大惡^一皆由^下貪^二著財色^一不^レ能^二施惠^一癡欲所^レ迫隨^二心思想^一煩惱結縛無^レ有^二無^レ有^二解已^一厚^レ已諍^レ利無^レ所^二省錄^一富貴榮華當^レ時快意不^レ能^二忍辱^一不^二務修^一善威勢無^レ幾隨以磨滅

【明燒起惡（燒惡を起こすを明かす）】

（其の久しうして後に至りて共に怨結^{おんけつ}を作す。小微從り起こりて遂いに大惡と成る。皆、財色^{ざいしき}を貪^{とんじやく}著して施惠すること能わざるに由りてなり。癡欲に迫められ、心の思想に随つて煩惱結縛して解け已むことあること無し。己を厚うし利を諍いて省錄する所無し。富貴榮華^{ようけ}、時に當りて快意^{けい}して忍辱すること能わず。務めて善を修せず。威勢、幾ばくも無ければ、随つて以つて磨滅す。）

その後に永い時を経ても、怨みを結ぶ心は解かれず、少しの些細なことから起こる惡も次第に大きくなって大惡となるのである。それは、皆、財産や愛欲を貪り、執着し、他に恵みを施さないことによるのである。痴欲にかられて心の思いのままに、煩惱に身も心も結ばれて解けることがないからなのである。それは、ひたすら己のみを厚くし、利を争つて省みることが無いからであり、たまたま富貴榮華な身であっても、ただ快樂だけを求め、耐え忍ぶこともなく、務めて善を修することも無かったから、その身分や威勢は永く続かず、またたく間に摩滅してしまつたのである、と説かれている。

そしてさらに、

身坐^二勞苦^一久後大劇天道施張自然糺舉綱紀羅網上下相應熒熒^レ怱怱^レ當^レ入^二其中^一古今有^レ是痛哉可^レ傷

【明惡起痛（惡痛を起こすを明かす。）】

（身、勞苦を坐^うけて、久しうして、後、大いに劇^{はなはだ}し。天道施張して、自然に糺^く舉^こするに、綱紀羅網、上下相應す。熒^{きよう}熒^{きよう}怱^{しゆじゆ}怱^{しゆじゆ}として當に其の中に入るべし。古今、是れ有り。痛ましきかな、傷^{いた}むべし。）

その身は、労苦を受け、時が経つに連れて次第に激しさを増すものである。そして、天の公道は至る所に張り巡らされ、自然に善惡の跡をただし、嚴然とした綱紀は、上下の別なく相応して網に捕らわれるように漏らすことがないのである。だから、その身に五惡の覚えのある者は、孤独に陥り、頼る所もなく恐れを為してその中に入らなければならないのである。このことは、昔も今も変わらないことであり、痛ましくもあり、心の傷むことである。

そして、

佛語「彌勒」世間如^レ是 【牒前惡相（前の惡相を牒す）】

（佛、彌勒に語^つげたまわく。世間かくの如し。）

と、仏が弥勒に語られるには、この世はとかくこのようなものであると説き、

佛皆哀^レ之 【顯佛悲相（佛の悲相を顯わす）】

（佛、皆これを哀れむ。）

だから、仏は、皆、これを哀れみ、

以^二威神力^一摧^二滅衆惡^一悉令^レ就^レ善 【令修世善（世善を修せしむ）】

（威神力を以って、衆惡を摧滅して、悉く善に就^つか令む。）

威神力をもって衆惡を砕き、悉く善に就くように勧めるのである。

さらに、

棄^二捐所思^一奉^二持經戒^一受^二行道法^一無^レ所^二違失^一 【令修出世↓出世因（出世の因）】

（所思を棄捐して經戒を奉^ぶ持^じし、道法を受行して、違失する所無し。）

この五惡を為そうとする心を棄て、經文の戒めを奉持し、人の道の在り方を考え、法を守り、背くことがなければ、

終得^二度世泥洹之道^一 【令修出世↓出世果（出世の果）】

（終に度世泥洹の道を得しむ。）

その結果、終には、この迷いの世を渡り、浄土往生を遂げることができるのであると説いている。

以上が重辯に係わる経文の論理展開であるが、ここで特に注目したいのは、高田敬輔の絵相に描かれる三塗無量苦悩段について、具体的に三惡道の絵相に関わる論述が記されていないことである。

つまり、貪瞋愚過の三毒の煩惱により五惡が生じ、現世では五痛の苦痛を受け、後世では五燒の苦しみの中に陥るから、五惡を摧滅させて五善を為せと説示しているが、具体的な三惡道そのものの論拠は示されていないのである。

ところが、高田敬輔は「無量寿経曼荼羅」の最下段に、三塗無量苦悩と題し、具体的に、餓鬼道、畜生道の二場面、地獄道については、等活地獄、黒繩地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、阿鼻地獄の八大地獄がそれぞれ描かれている。

そこで、この三塗無量苦悩に関わり、高田敬輔が師とする良照義山はどのような捉え方をしているか、『無量寿経随聞講録』を手がかりにみることにする。

② 義山の『無量寿経随聞講録』との関わりについて

義山は、その書『無量寿経随聞講録』の中で、三塗無量苦悩について、（『随聞講録』卷上之四 三七四頁）

三塗者四解脱經曰地獄名^二火塗道^一餓鬼名^二刀塗道^一畜生名^二血塗道^一

名義集二卷五十二紙但開元祿十八日四事解脱經一卷入偽妄亂真中

（三塗とは四解脱經に曰わく。地獄を火塗道と名づく。餓鬼を刀塗道と名づく。畜生を血塗道と名づく。

（名義集二卷五十二紙、但し開元祿十八に曰わく。四事解脱經一卷、偽妄亂真中に入る。）

と三塗について、その名称と出典を挙げている。

また、四十八願の第一願と第二願について次のように記している。

第一願の「無三惡趣の願」〔設我得佛國有地獄餓鬼畜生者不取正覺〕^一については、（浄土宗全書第十四卷『隨聞講録』卷上之二 三〇一頁）

第一願下言「願意者六道雖苦三途最重法藏慈悲先緣重苦選擇此願攝衆生也雖就重者不捨人天舉重攝輕」

（第一願の下、願意を言わば、六道は苦なりと雖も三途最も重し。法藏の慈悲、先ず重苦を縁にして此の願を選択して衆生を攝する。重者に就くと雖も人天を捨てず。重きを舉げて輕を攝す。）

地獄等者は從五趣門取能居有情不取器界是故以此願爲攝衆生也選擇集^{章第三}言「極樂界中既无三惡趣當知是則成中就无三惡趣之願上加趣之字是謂也爾地獄餓鬼畜生趣趣字入見ベシ然彼土理實五趣共无經說橫截五惡趣論云勝過三界道^{釋意寂}今且舉重攝輕耳

（地獄とは、是れ五趣門に従り、能居^{のうご}の有情を取りて器界^{きがい}を取らず。是の故に此の願を以って攝衆生とす。選擇集（第三章）に、極樂界中、既に三惡趣無し、當に知るべし、是れ則ち无三惡趣の願を成就すと言いて、趣の字を加わうは是れを謂うなり。爾れば、地獄、餓鬼、畜生趣と趣の字を入れて見るべし。

然るに彼の土は理實に五趣共に無し。經に橫截五惡趣と説き、論には勝過三界道と云えり。（義寂の釋意）今は且らく重きを舉げて輕ろきを攝するのみ。）

とあり、六道の中でも三塗の苦が最も重いが、法藏菩薩はその重苦を縁に衆生を攝取しようとしたことと、極樂界には三惡趣がないこととその無三惡趣の願を成就したことについて講説している。

③ 源信『往生要集』における三塗無量苦惱段の位置付け

源信の『往生要集』（元禄二二年新版本）には、冒頭に、

夫往生極樂之教行濁世末代之目足也道俗貴賤誰不歸者但顯密教法其文非一事理業因其行惟多利智精進之人

未^レ爲^レ難如^レ予頑魯之者豈敢矣是故依^二念佛一門^一聊集^二經論要文^一披^レ之修^レ之易^レ覺易^レ行總有^二十門^一分爲^二三卷^一
一厭離穢土二欣求淨土三極樂證據四正修念佛五助念方法六別時念佛七念佛利益八念佛證據九往生諸業十問答
料簡置^二之座右^一備^二於廢忘^一矣

（夫れ往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、誰か歸せざらん者あらん。但し顯密の教法は、其の文、一に非ず。事理の業因、其の行、惟れ多し。利智精進の人は、未だ難しと為さざらんも、予が如き頑魯の者、豈に敢えてせんや。

是の故に、念佛の一門に依りて、聊か經論の要文を集む。これを披^{ひら}き、これを修するに、覺り易く行じ易すし。總じて十門有り。分ちて三卷と爲す。一には厭離穢土^{おんりえど}、二には欣求淨土^{こんぐじようど}、三には極樂の證據、四には正修念佛^{しやうじゆ}、五には助念の方法、六には別時念佛、七には念佛の利益^{りやく}、八には念佛の證據、九には往生の諸業、十には問答料簡なり。これを座右に置きて廢忘^{はいもう}に備えよ。）

とあり、極樂に往生するための教えと行いは、濁世の末代においては最も大事なことであり、出家、在家、貴族、賤しい身分の者もすべて頼りとすべきものである。ただ、顯教、密教の教えは、一つでなく数多く、具体的な理論や実践方法も複雑で多岐に亘るので、理智的で精進できるものであれば難しくはないだろうが、自分のような愚か者にはとうてい無理である。

そこで、念仏の一門に依って、經論の要文を集めた。これをこの通りに修行すれば、覺りやすく実践しやすいだろう。全体で十門有り、それを分けて三卷としている。一は、穢れたこの世から厭い離れること。二は、極樂淨土往生を願ひ求めること。三は、極樂とはどんなところかの証拠。四は、正しく念佛を修行すること。五に念仏を助ける方法。六に別時に念仏することについて。七に念佛にどのような利益があるか。八に念佛を勧める根拠。九に往生のための諸々の修行。十に問答による教義の解釈である。

これを常に座右に置いて、忘れることがないように備えよ、と述べられているのである。

そして、この第一の厭離穢土のところで次のように説かれている。

大文第一厭離穢土者夫三界無^レ安最可^ニ厭離^一今明^ニ其相^一總有^ニ七種^一一地獄二餓鬼三畜生四阿修羅五人六天七總結第一地獄亦分爲^レ八一等活二黑繩三衆合四叫喚五大叫喚六焦熱七大焦熱八無間

(大文第一に厭離穢土というは、夫れ三界は安きこと無く最も厭離すべし。

今、其の相を明かさば、總じて七種有り。一には地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人、六には天、七には總結なり。

第一の地獄はまた分ちて八と爲す。一には等活、二には黑繩、三には衆合、四には叫喚、五には大叫喚、六には焦熱、七には大焦熱、八には無間なり。)

と説かれる。

大文第一の厭離穢土は、我々の迷いの世界には安らぐことが無く、そこから厭い離れるべきである。

今、その様相を明らかにするならば七種ある。それは、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天・總結で有り、その第一の地獄をさらに分けるならば八つあり、第一は等活地獄、第二は黑繩地獄、第三は衆合地獄、第四は叫喚地獄、第五は大叫喚地獄、第六は焦熱地獄、第七は大焦熱地獄、第八は無間地獄となっていると説かれている。

その『往生要集』に説かれる地獄道、餓鬼道、畜生道を、高田敬輔は「無量壽經曼荼羅」の最下段の「三塗無量苦惱」段に、具体的に表現しているのである。「三塗無量苦惱」段の絵相は、畜生道、餓鬼道の二つの絵相が「三塗無量苦惱」段全体の一割程度に描かれ、それに比して、八つの地獄の絵相が全体の九割を占めていることから、明らかに地獄の様相が強調されていることを知ることができる。

そこで、次に、地獄道・餓鬼道・畜生道の根拠として『正法念處經』、『長阿含經卷十九「世紀經地獄品」』、『阿毘達磨順正理論卷三十一』、『孟蘭盆經疏卷下』、等の經典から関連部分を参考にする。

④ 「無量寿経曼荼羅」の絵相と『大経曼陀羅開壇記』と諸經典との関連

まず初めに、畜生道について、「無量寿経曼荼羅」の絵相と隨天が『開壇記』の注釈を踏まえ、検討を加える。

㊦ 畜生道

「無量寿経曼荼羅」 畜生道の絵相



「無量寿経曼荼羅」畜生道の絵相を、隨天が『開壇記』（卷四 三十三丁表）で、次のように記している。

狼將^レ捕^二狼^一 鷹將^レ擒^二鳩^一 鳩雀驚飛又蛇吞^二蝦蟇^一 驚竝攫^レ蛇

（狼、將に狐を捕^ほとす。鷹、將に鳩を擒^{とら}えんとす。鳥、雀、驚き飛ぶ。また、蛇、蝦蟇を吞む。驚、竝びに蛇を攫^{さら}う。）

ここでは、今、まさに、狼が、狐を捕らえようとし、鷹が鳩を捕らえるのを見て、小鳥や雀が驚いて飛び立つ様子が表されている。また、蛇が蝦蟇を呑み、その蛇を驚が攫^{さら}う様子が描かれ、まさに動物の弱肉強食、食物連鎖の世界が描かれているのである。

そして、さらに、標文には次のように記されている。

蠕動之類強伏弱

（蠕動の類、強きは弱きを伏す。）

この蠕動の類について、隨天は、

蠕動等者此說^二一惡殺罪^一 文也 具文云蠕動之類欲^レ爲^二衆惡^一 莫^レ不^二皆然^一 強者伏^レ弱者轉相剋賊雖^レ說^二人殺^一 兼通^二畜等^一 故今標舉蠕宜^レ作^レ蠕 惠林三十一云 閼尹反考聲云無^レ足 曰^レ蠕 莊子云 蠕喘之虫也 淮南子云 昆虫蠕動也 說文云 動也 從虫^二𧈧聲^一 經作^レ蠕 誤也

（蠕動とは、此れ一惡殺罪を説く文なり。具に文に云う。蠕動の類、衆惡を爲さんと欲す。皆、然らずということなし。強き者は弱きを伏し、轉^{うた}あい剋賊す。人殺を説くと雖も兼ねて畜等に通ず。

故に今、標に宜しく蠕に作るべし。惠林三十一に云う。閼尹の反考聲に云う。足無きを蠕と曰く。

莊子に云う。蠕喘の虫なり。淮南子に云う。昆虫蠕動なり。說文に云う。動なり。虫^{よわ}𧈧聲に従る。經に蠕を作る。誤りなり。）

とあるように、蠕動之類については、『無量寿経』の一惡殺罪を説く經文に説示されていると記している。

その『無量寿経』（浄土宗全書第一卷二七頁）の一惡痛燒の文には、

佛言其一惡者諸天人民蠕動之類欲爲衆惡莫不皆然強者伏弱轉相剋賊殘害殺戮迭相吞噬不知修善惡逆無道後受殃罰自然趣向

（佛の言わく。其の一惡とは、諸天、人民、蠕動の類、衆惡を爲さんと欲す。皆、然らずということなし。強き者は弱きを伏し、轉あい剋賊し、殘害殺戮して迭いにあい吞噬す。善を修することを知らず、惡逆無道なり。後に殃罰を受けて、自然に趣向す。）

とあり、仏の言うところの五惡痛燒の第一惡とは、この世の人々や蠕き生きる一切の生類は、皆、その内面に惡を為そうとする激しい衝動を持っているものであり、強者は弱者を伏せ、互に相手を攻め、殘忍な害を及ぼす殺戮を繰り返すのである。

まさに、呑み、咬み合いするようなものである。また、自ら善を修することもせず、惡逆無道なのである。だから、後に罪の報いとして、おのずから苦しい罰を受けることになるのであると説かれている。

さらに、この箇所の蠕動之類について、良照義山は、その書『隨聞講録』（浄土宗全書第十四卷四六七頁）に、諸天人民蠕動之類者此二句舉能殺體欲爲下出殺惡質殺惡之事通人畜等但今在戒人之殺惡故

曰諸天等

（諸天人民蠕動の類とは、此の二句は能殺の體を擧ぐ。欲爲の下は、殺惡の質を出す。殺惡の事、人畜等に通ず。但し今は、人の殺惡を戒めるに在り。故に諸天等と曰く。）

とあり、諸天人民蠕動の類とは、能殺の事を挙げている。欲爲から下の文言は、殺惡の本質を説いている。

殺惡の事は人と畜生に相通ずるものである。但し、今は人の殺惡を戒めるためなので諸天等と説かれていると述べられている。

さらに、隨天は『開壇記』（卷四 三十三丁表）で畜生道の絵相について注釈をしているが、そこには『正法念處經』と『正法念處經』を基にした『往生要集』の原文が引用されている。

畜生住處有_レ二根本住_二大海_一支末雜_二人天_一依正法念經別論有_二三十四億種類_一惣論不_レ出_二三種_一一者禽類二者獸類三者虫類或言水陸同要集云如_レ是等類強弱相害若飲若食未_二曾暫安_一晝夜之中常懷_二怖懼_一況復諸水性之屬爲_二漁者_一所害諸陸行之類爲_二獵者_一所害若如_二象馬牛驢駱駝驪等_一或鐵鈎斲_二其腦_一或穿_二鼻中_一或轡繫_二首身常負_レ重加_二諸杖捶_一但念_二水草_一餘無_レ所_レ知此等諸苦不_レ可_二勝計_一今圖_二二三_一餘可_二例知_一（畜生は住處に二有り。根本は大海に住し、支末は人天に雜まじわる。正法念經に依るに、別して論ずれば、三十四億の種類の有れども、惣じて論ずれば三種を出でず。一には禽類。二には獸類。三には虫類。へ或は言う。水陸空行、其の義、惟れ同じ。）

要集に云う。是の如き等の類、強弱相害_{あひ}し、若しは飲み、若しは食い、未だ曾て暫くも安からず。晝夜の中に常に怖懼_{ふぐ}を懷_{いだ}けり。況んやまた諸々の水性の屬_{ともがら}は、漁者の爲に害せられ、諸々の陸行の類は、獵者の爲に害せらる。若しは象・馬・牛・驢・駱駝・驪等の如きは、或いは鐵の鈎_{かぎ}にて其の腦を斲_きられ、或いは鼻の中を穿_{うが}たれ、或いは轡_{くつわ}を首に繋がれ、身に常に重きを負いて、諸々の杖捶_{じょうすい}を加えられる。但だ水草を念_{おも}いて餘は知る所なし。

此等の諸々の苦、勝_{あけ}て計_{かぞ}うべからず。今、二三を圖し、餘は例を知るべし。）

その内容を見ると、畜生の住む場所は二つ有り、主なものは海中に住み、その他のものは人間界や天界に住んでいる。『正法念處經』によれば、細かく分けければ三十四億の種類があり、大きく分けければ三種有り、一つに禽類、二つに獸類、三つに虫類である。あるいは、水行・陸行・空行とも分けられるがその意味は同じである。

さらに『往生要集』には、このような類のものは、強者弱者それぞれが互いに傷付け合い、殺し合い、飲み食いする時も、少しも心が休まらず、昼夜を分かつた恐れを懷いているのであると述べられている。まして、水中

に住む畜生は漁師に殺され、諸々の陸に住む畜生は狩人に殺されるのである。象・馬・牛・驢・駱駝・騾等は、鉄の鉤で脳天を割られたり、鼻に穴を穿たれたり、轡を首に繋がれたり、重い荷を背負わされ、鞭で打たれるのである。だから、ただ水や草を飲み、喰うことばかりを考え、他のことは分らないのである。このような諸々の苦は計り知れないものである。今、二、三を図しておくが、他は同じようなものであると注釈している。

そこで改めて『往生要集』の根拠と考えられる『正法念處經』の畜生道に関わる經文をみてみると、（大正新修大藏經【以下、略して大正藏】第十七卷『正法念處經卷第十八』「畜生品第五之一」一〇三頁b24）

觀諸畜生種類差別。三十四億。隨心自在。生於五道。於五道中。畜生種類。其數最多。種種相貌。種種色類。行食不同。群飛各異。憎愛違順。伴行雙隻。同生共遊。所謂飛禽。及諸走獸。鳥鵲鵝鴈。鴻鳥衆類。異群別遊。不相怨害。狐狗野干等。互相憎嫉。烏與角鵝。馬及水牛。虻蛇鼯等。共相殘害。形相不同。行食各異。（諸々の畜生の種類、差別を觀る。三十四億あり。心の自在なるに隨いて、五道に生まるるに、五道中に於いて畜生の種類は、其の數最も多く、種々の相貌、種々なる色類あり。行食同じからず。

群飛各々異なり、憎愛、違順し、伴行するあり。雙なるあり隻なるあり。同じく生まれて共に遊ぶあり。所謂、飛禽及び諸々の走獸にして、鳥、鵲、鵝、鴈、鴻鳥なる衆類は、群れを異にして別に遊び、相、怨害せず。

狐、狗、野干等は、互いに相憎嫉し、烏と角鵝、馬及び水牛、虻蛇と鼯等は、共に相殘害い、形相同じからず。行食、各々異なる。）

とあるように、畜生の種類は三十四億も有り、数が多く、姿も色も行動も食物も異なる。鳥類はそれぞれ異なり、群れを作るものや、番いや単独のものもあり、互いに害を加えないものである。走獸は、狐等が互いに争い、危害を加え合い、姿形も同じではなく、行動も食物もそれぞれ異なっていると述べられ、畜生の数の多いことや獸類は互いに殺害を与えていることを説いている。

また、（大正藏第十七卷『正法念處經卷第六十四』「身念處品第七之一」三八一頁b23）

復次修行者。隨順觀身。彼以聞慧。或以天眼。見畜生道。彼見無量種種畜生。略說三處。一者水行。所謂魚等。二者陸行。所謂象馬牛羊羴鹿猪等。三者空行。所謂無量衆飛鳥等。復次修行者。隨順觀身。彼以聞慧。或以天眼。觀於畜生。有幾種生。彼以聞慧。或以天眼。見諸畜生。有四種生。何等爲四。一者胎生。所謂象馬水牛牛羊之類。二者卵生。所謂蛇虵鵝鴨鷄雉種種衆鳥。三者濕生。蚤虱蚊子之類。四者化生。如長面龍等。是修行者。如實觀畜生已。若天若人。若地獄餓鬼畜生。不見一處不爲恩愛別離所惱。一切衆生。輪轉生死。或作怨家。或爲親友。無有一處不生不滅。如比丘。於生死處不生愛心。如是心不喜樂。如是厭離不隨。如是破壞。如是滅法。不可久住。一切衆生衆苦之處。是故比丘生死之中。多苦少味。無常破壞。當應厭離。厭離生死便得解脫。

（復次に修行者は、隨順して身を觀ず。彼、聞慧を以って、或いは天眼を以って畜生道を見るに、彼は無量の種種なる畜生を見る。略說するに三處あり。

一には水行。所謂、魚等なり。

二には陸行。所謂、象、馬、牛、羊、羴、鹿、猪等なり。

三には空行。所謂、無量の衆の飛鳥等なり。

復次に修行者は、隨順して身を觀ず。彼、聞慧を以って、或いは天眼を以って畜生を觀るに、幾種の生有りや。彼、聞慧を以って、或いは天眼を以って諸の畜生を見るに、四種の生有り。何等を四と爲すや。

一には胎生にして、所謂、象、馬、水牛、牛、羊の類なり。

二には卵生にして、所謂、蛇、虵、鵝、鴨、鷄、雉、種々の衆鳥なり。

三には濕生にして、蚤、虱、蚊の子の類なり。

四には化生にして、長面龍等の如し。

是の修行者、實の如くに畜生を觀已るに、若しは天、若しは人、若しは地獄・餓鬼・畜生にして、一處として恩愛別離の爲に悩まされざるを見ず。一切の衆生は、生死に輪轉し、或いは怨家を作し、或いは親友と爲り、一處として生ぜず、滅せざること有ること無し。是の如き比丘は、生死の處に於いて愛心を生ぜず、是の如きを心に喜樂せず。是の如きを厭離して隨わず。是の如きは破壊し、是の如きは滅する法にして、久しく住すべからず。一切衆生の衆苦の處なり。是の故に比丘、生死の中は、苦多くして味少なく、無常にて破壊すれば、當に厭離すべし。生死を厭離せんには便ち解脱を得ん。）

とあるように、畜生は無量にあるが、大きく分ければ三種有り、一つには水行の魚類、二つには陸行の獸類、三つには空行の鳥類である。

そして、その生まれ方にも四種有り、一に胎生、二に卵生、三に湿生、四に化生するものに分けられる。このような所には長く住むべきでなく、苦が多いので厭離すべきであると説かれている。

さらに、（大正蔵第十七卷『正法念處經卷第四』「生死品之二」一八頁 a26）

又復畜生。迭互相食。非理姪欲。不知所應。若生水中。水中而行。心燥常飢。常畏他取。鼃龜慳獸。及水獺等。魚則堤彌。堤彌宜羅。有名瓮魚。金毘羅魚。那迦羅魚。名大口魚。蛤等虫。常一切時大者食小。常畏網等。遮障而取。又陸地行。羣鹿水牛。猪象牛馬。驢及犂牛。麋熊犀等。種種苦縛。刀刃所殺。有病老死。迭相惱害。百千苦惱。如空中行。鳥鳥獾狐。鵝及孔雀。鸚鵡鷄雉。鳩鵲水鴈。青鳥護澤。百舌鸛雀。命命他養。是等諸鳥。如是无量。復有異鳥。殺縛飢渴。迭相食噉寒熱苦惱之所逼切。如是畜生。水陸空行三處皆畏。是長生死。緣彼相想。

（又復畜生は、迭互に相い食い、非理の姪欲にて應う所を知らず。

若しは水中に生まれて水中を行き、心燥き常に飢え、常に他の取らんことを畏れる。鼃、龜の慳獸、及び水獺等あり。魚には則ち堤彌、堤彌宜羅あり。瓮魚と名づくる有り。金毘羅魚あり。那迦羅魚を大口魚

と名づけ、蛤、蠶等の虫ありて、常に一切の時に大なる者は小を食い、常に網等の遮障りて取らんことを畏れる。

又陸地を行くに、麋^{のろじか}、鹿、水牛、猪、象、牛、馬、驢、及び犛牛^{やぐ}、麋^{おおじか}、熊、犀等あり。種々の苦に縛られ、刀刃に殺され、病老死有り。迭いに相い惱害し、百千の苦惱あり。

空中を行くが如きは、烏鳥、獾狐、鵝、及び孔雀、鸚鵡^{くよく}、鶏、雉、鳩、鳩^{どばと}、水鴈、青鳥、護澤、百舌、鸛^{こうのとり}、雀、命命、他養なる是等諸鳥ありて、是の如くに無量なり。復た異なる鳥有り。殺され縛られ、飢え渴き、迭いに相い食噉^くい、寒熱の苦惱に逼切^{せま}らる。

是の如き畜生の水・陸・空を行く三處は、皆、畏れ、是れ長き生死あり。彼の相を縁じて想う。

とし、畜生というものは互いに食らい合い、水中に生まれたものは常に飢え、他のものに捕らえられることを畏れ、大口魚等の大きな魚が住み、大なるものが小なるものを捕らえ、常に網等で捕らえられることを畏れるのである。また陸地を行く獸類は種々の苦に縛られ、刀刃で殺され、老・病・死が有り、互いに殺し合うなど百千もの苦惱があるのである。

さらに、空中では諸々の鳥が無数に有り、殺されたり縛られたり、飢えや渴きに苛まれり、互いに食らい合い、寒熱の苦にさらされるのである。このような畜生の水・陸・空の三處は、みな畏れ、長い間繰り返されるものであると説かれている。

以上のように、高田敬輔の描いた畜生道の（蠕動之類強伏弱）の弱肉強食の絵相の背景には、隨天が注釈で引用した『往生要集』と、その『往生要集』に述べられる無量の畜生の数や、水行の魚類、陸行の獸類、空行の鳥類等の三類それぞれが受ける苦を、さらに胎生、卵生、湿生、化生等の生死に関わる源信の説示は、明らかに『正法念處經』を一つの典拠としていることが裏付けられるのである。

① 餓鬼道

次に、三塗無量苦惱段の第二の絵相である餓鬼道について検証する。

「無量寿経曼荼羅」 餓鬼道の絵相



「無量壽經曼荼羅」餓鬼道の絵相について、隨天は『開壇記』（卷四 三十五丁表）で次のような注釈を加えている。

有^二餓鬼^一一鬼腹大咽小常口出^二燄火^一一鬼咽小形瘦欲^レ搏^二飯食^一化成^二火燃^一
へ二餓鬼有り。一鬼は、腹大に、咽小に、常に口より燄火を出す。一鬼は、咽小に、形、瘦す。飯食を搏らんと欲すれば、火燃と成る。へ

この餓鬼道の絵相は、二匹の餓鬼が描かれ、一匹は腹が大きく脹れ、咽喉が細くて常に口から燄火が出ている餓鬼を表し、もう一匹は、咽喉が細く姿形が痩せ細り、飯食を取ろうとすれば燃え上がってしまう様子が描かれている。

この描かれた餓鬼がどういう餓鬼なのか、そして、どのような業により、このような餓鬼道に堕ちるのか、典拠とする經典等を探ることにする。

隨天は『開壇記』（卷四 三十五丁表）に三十六種の餓鬼と記しているが、原典は、次のように『正法念處經』第十六「餓鬼品第四之一」（大正藏第十七卷九二頁^{a14}）によるものである。

復次比丘。知業果報。觀餓鬼道。餓鬼所住。在何等處。作是觀已。即以聞慧。觀諸餓鬼。略有二種。何等爲二。一者人中住。二者住於餓鬼世界。是人中鬼。若人夜行。則有見者。餓鬼世界者。住於閻浮提下五百由旬。長三萬六千由旬。及餘餓鬼惡道眷屬。其數無量惡業甚多。住閻浮提。有近有遠。

復次比丘。知業果報。觀諸餓鬼有無量種。彼以聞慧。略觀餓鬼三十六種。一切餓鬼皆爲慳貪嫉妬因縁。生於彼處。以種種心。造種種業。行種種行。種種住處。種種飢渴。自燒其身。如是略說三十六種。何等爲三十六種。一者迦婆離。鑊身餓鬼。二者甞支目佉。針口餓鬼。三者槃多婆叉。食吐餓鬼。四者毘師咤。食糞餓鬼。五者阿婆叉。無食餓鬼。六者捷陀。食氣餓鬼。七者達摩婆叉。食法餓鬼。八者婆利藍。食水餓鬼。九者阿除迦。惛望餓鬼。十者唵吒。食唾餓鬼。十一者摩羅婆叉。食鬘餓鬼。十二者囉訖吒。食血餓鬼。十三者瞢娑婆

又。食肉餓鬼。十四者蘇撻陀。食香烟餓鬼。十五者阿毘遮羅。疾行餓鬼。十六者蚩陀邏。伺便餓鬼。十七者波多羅。地下餓鬼。十八者矣利提。神通餓鬼。十九者闍婆隸。熾燃餓鬼。二十者蚩陀羅。伺嬰兒便餓鬼。二十一者迦摩。欲色餓鬼。二十二者三牟陀羅提波。海渚餓鬼。二十三者閻羅王使。執杖餓鬼。二十四者婆羅婆又。食小兒餓鬼。二十五者烏殊婆又。食人精氣餓鬼。二十六者婆羅門羅刹餓鬼。二十七者君茶火爐。燒食餓鬼。二十八者阿輸婆囉他。不淨巷陌餓鬼。二十九者婆移婆又。食風餓鬼。三十者鶩伽囉婆又。食火炭餓鬼。三十一者毘沙婆又。食毒餓鬼。三十二者阿吒毘。曠野餓鬼。三十三者餘摩舍羅。塚間住食熱灰土餓鬼。三十四者毘利差樹中住餓鬼。三十五者遮多波他。四交道餓鬼。三十六者魔羅迦耶。殺身餓鬼。是爲略說三十六種餓鬼。廣說則無量。重心造惡。業行各異。種種慳心。不行布施。貪心因緣。受種種身

（復次に比丘、業の果報を知りて餓鬼道を觀る。餓鬼の住する所は、何等の處に在りや。是の觀を作し已り、即ち聞慧を以て諸の餓鬼を觀るに、略二種有り。何等を二と爲す。一は人中に住し、二には餓鬼世界に住するなり。是の人中の鬼は、若し、人、夜行かば、則ち見る者有り。餓鬼世界は、閻浮提の下、五百由旬に住し、長さ三萬六千由旬、及餘の餓鬼なる惡道の眷屬は、其の數無量にして、惡業甚だ多く、閻浮提に住して近き有り、遠き有り。

復次に比丘、業の果報を知り、諸の餓鬼を觀るに無量種有り。彼、聞慧を以て、略餓鬼の三十六種を觀る。一切の餓鬼は、皆、慳貪、嫉妬の因縁の爲に彼處に生まれ、種々の心を以て種々の業を造り、種々の行を行い、種々の住處に有り、種々の飢渴にて自ら其の身を燒く。是の如くに三十六種を略說せり。何等を三十六種と爲すや。

一には迦婆離・鑊身餓鬼。二には甦支目佉・針口餓鬼。三には槃多婆又・食吐餓鬼。四には毘師咤・食糞餓鬼。五には阿婆叉・無食餓鬼。六には撻陀・食氣餓鬼。七には達摩婆又・食法餓鬼。八には婆利藍・食水餓鬼。九には阿睺迦・悽望餓鬼。十には唵吒・食唾餓鬼。十一には摩羅婆又・食鬚餓鬼。十二には囉訖吒

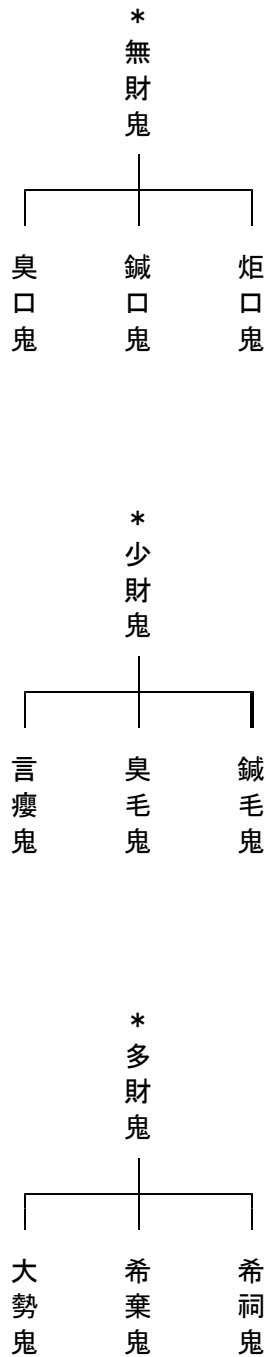
・食血餓鬼。十三には菴婆婆叉・食肉餓鬼。十四には蘇撻陀・食香烟餓鬼。十五には阿毘遮羅・疾行餓鬼。十六には蚩陀邏・伺便餓鬼。十七には波多羅・地下餓鬼。十八には矣利提・神通餓鬼。十九には閼婆隸・熾燃餓鬼。二十には蚩陀羅・伺嬰兒便餓鬼。二十一には迦摩・欲色餓鬼。二十二には三牟陀羅提波・海渚餓鬼。二十三には閼羅王使・執杖餓鬼。二十四には婆羅婆叉・食小兒餓鬼。二十五には烏殊婆叉・食人精氣餓鬼。二十六には婆羅門・羅刹餓鬼。二十七には君荼火爐・燒食餓鬼。二十八には阿輪婆囉他・不淨巷陌餓鬼。二十九には婆移婆叉・食風餓鬼。三十には鶩伽囉婆叉・食火炭餓鬼。三十一には毘沙婆叉・食毒餓鬼。三十二には阿吒毘・曠野餓鬼。三十三には賒摩舍羅・塚間住食熱灰土餓鬼。三十四には毘利差・樹中住餓鬼。三十五には遮多波他・四交道餓鬼。三十六には魔羅迦耶・殺身餓鬼。

是れを三十六種の餓鬼を略説すと爲す。廣く説かば則ち無量なり。重心にて惡を造り、業行各々異なり、種々の慳心あり。布施行わずして、貪心の因縁にて種々の身を受く。《『國譯一切經』教宗部八 二九二頁參照》とあり、餓鬼の居所と三十六種の餓鬼について示している。

さらに隨天は、『開壇記』（卷四 三十五丁裏）に、同様に『阿毘達磨順正理論』卷三十一「辯緣品第三之十一」（大正藏第二十九卷五一七頁b13）を引いているが、参考までにみてみると次のような内容である。

鬼有三种。謂無少多財。無財復三。謂炬鍼臭口。炬口鬼者。此鬼口中。常吐猛焰。熾然無絶。身如被燎多羅樹形。此受極慳所招苦果。鍼口鬼者。此鬼腹大量如山谷。口如鍼孔。雖見種種上妙飲食。不能受用。飢渴難忍。臭口鬼者。此鬼口中。恒出極惡腐爛臭氣。過於糞穢沸溢廁門。惡氣自熏。恒空歐逆。設遇飲食。亦不能受。飢渴所惱。狂叫亂奔。少財亦有三。謂鍼臭毛癭。鍼毛鬼者。此鬼身毛。堅剛鉅利。不可附近。内鑽自體。外射他身。如鹿箭中毒。晞狂走。時逢不淨。少濟飢渴。臭毛鬼者。此鬼身毛。臭甚常穢。熏爛肌骨。蒸全腸胃。衝喉變歐。荼毒難忍。攫體拔毛。傷裂皮膚。轉加劇苦。時逢不淨。少濟飢渴。言癭鬼者。謂此鬼咽。惡業力故。生於大癭。如大癰腫。熱晞酸疼。更相刺。臭膿涌出。爭共取食。少得充飢。多財亦有三。謂希詞希

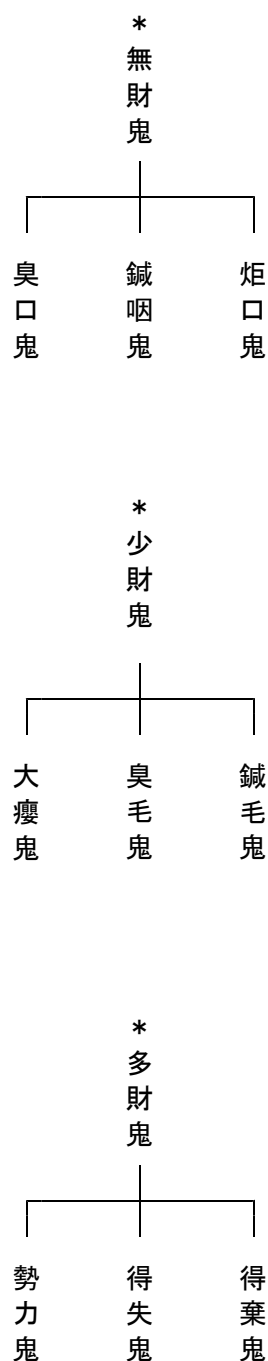
棄大勢。希祠鬼者。此鬼恒時。往祠祀中。饗受他祭。生處法爾。能歷異方。如鳥往還無礙。由先勝解。作是希望。我若命終。諸子孫等。必當祠我。資具飲食。由勝解力。生此鬼中。乘宿善因。感此祠祭。或有先世性愛親知。爲欲皆令豐足資具。不如法。積集珍財。慳吝居心。不能布施。乘斯惡業。生此鬼中。住本舍邊便穢等處。親知追念。爲請沙門梵志孤窮。供施崇福。彼鬼見已。於自親知及財物中。生已有想。又自明見慳果現前。於所施田。心生淨信。相續生長。捨相應思。由此便成順現法受。乘斯故得資具豐饒。希棄鬼者。此鬼恒欲收他所棄吐殘糞等。用充所食。亦得豐饒。謂彼宿生。慳過失故。有飲食處見穢。或空樂穢見。空樂淨見穢。亦由現福。如其所應。各得豐饒。飲食資具。生處法爾。所受不同。不可推徵。祠到所以。如地獄趣。異熟生色。斷已還續。餘趣則無。於人趣中。有勝念智。修梵行等。餘趣中無。天中隨欲。衆具皆現。如斯等事。生處法然。不可於中求其定量。大勢鬼者。謂諸藥叉。及邏利娑。恭畔茶等。所受富樂。與諸天同。或依樹林。或住靈廟。或居山谷。或處空宮。然諸鬼中。無威德者。唯三洲有。除北俱盧。若有威德。とあるように、餓鬼には無財鬼・少財鬼・多財鬼の三種が有り、またそれぞれに三種の餓鬼がいるので、計九種有ると述べている。



そしてさらに続けて、『孟蘭盆經疏』卷下（大正藏第三十九卷五〇八頁^{c22}）を引いている。

然鬼有三種。一無財鬼。以無福德不得食故。二少財鬼。少得淨妙飲食故。三多財鬼。多得淨妙飲食故。此三種鬼復各有三。無財三者。一炬口鬼。謂火炬炎熾常從口出。繇是前生燒壞村柵焚炙賢良。以此求財墮於地獄。從地獄出墮此鬼中。故正法念經云。若人貪嫉枉奪人財。破人城郭殺害抄掠得財。奉王大臣。轉增凶暴。墮熾然餓鬼中。二鍼咽鬼。謂頭大如山。咽如鍼孔。繇於破齋夜食盜竊衆僧之食故。故齋法清淨經云。目連路逢數百萬鬼。頭如大山等。三臭口鬼。謂口中腐臭自惡受苦。以多貪名利自是非他。讚歎惡人毀謗賢善故。據此三種。寧吞鐵丸不食信施。少財三者。一鍼毛鬼。毛利如鍼行便自刺。爲貪利故。妄行鍼炙及刺畜生。但爲求財不愈疾故。二臭毛鬼。毛利而臭自拔受苦。繇於販賣猪羊烹宰鵝鴨。湯爛刀剥楚痛難堪。地獄罪終墮斯鬼趣。三大癭鬼。咽垂大癭自決噉膿。繇嫉妬於人常懷瞋恨故。多財三者。一得棄鬼。謂常得祭祀所棄食故。繇於罪多福少少施多慳。棄擲之物方惠施故。二得失鬼。謂常得巷陌所遺食故。以於現財常生慳著。疑欲失者而方捨故。三勢力鬼。謂夜叉羅刹毘舍闍等。所受富樂類於人天。或依樹林。或住山谷。或居靈廟或處空宮。形豎而行。屬於鬼趣。此等變化多端者。繇於因地罪福不精苦樂之因相雜作故。

とあるように、やはり『阿毘達磨順正理論』と同じように、無財鬼・少財鬼・多財鬼の三種が有り、それぞれに三種、計九種が示されているが、餓鬼の名称が類似しているものの若干の相違が見られる。



そこで隨天は、高田敬輔の「無量寿經曼荼羅」に描かれる餓鬼道の絵相は、

今所^レ畫二鬼俱は無財中炬口針咽鬼也

(今、畫く所の二鬼は、俱に是れ無財の中の炬口と針咽との鬼なり。)

と述べ、無財鬼の中の炬口鬼と針咽鬼であると述べている。因みにそれぞれの餓鬼がどのような業因によるか、再度、『孟蘭盆經疏』卷下をみると、

一炬口鬼。謂火炬炎熾常從口出。是前生燒壞村柵焚炙賢良。以此求財墮於地獄。從地獄出墮此鬼中。故正法念經云。若人貪嫉枉奪人財。破人城郭殺害抄掠得財。奉王大臣。轉增凶暴。墮熾然餓鬼中。

(一に炬口鬼とは、火炬、炎熾、常に口從り出すと謂う。是れ、前生に村柵を燒壞し、賢良を焚炙するを以つて此の財を求めるに地獄に墮つ。地獄從り出でて此の鬼の中に墮つ。

故に正法念經に云う。若し人、貪嫉し、枉^{みだ}りに人の財を奪い、人の城郭を破り、人を殺害し、財を抄^{しょうりやく}掠して得ては、王、大臣に奉り、轉た凶暴を増し、熾然餓鬼中に墮ちる。)

二鍼咽鬼。謂腹大如山。咽如鍼孔。謂破齋夜食盜竊衆僧之食故。故齋法清淨經云。目連路逢數百萬鬼。頭如大山等。

(二に鍼咽鬼とは、腹大きく山の如し、咽、鍼の孔の如く。謂うに齋を破り、夜、食を盗み、衆僧の食を竊む故。故に齋法清淨經に云う。目連、路で數百萬の鬼に逢う。頭、大山の如し等。)

とあるように、炬口鬼は、常に口から火焰を出し、身を焼く餓鬼で、前世に村落を燒壞して賢良な民の命や財産を奪い、それを王や大臣に奉り、益々凶暴になったことによつて墮ちたとある。

また、鍼咽鬼は、腹が大きく山のようにあり、咽が針穴のように細くて物が咽を通らず、食べた物が炎になつて吹き出す餓鬼で、齋戒を破り、夜に食物を盗んだり衆僧の食物を盗んだことにより墮ちたとある。

さらに、『齋法清淨經』にも、目連が路で出逢つた餓鬼であると述べられている。

㊦ 地獄道

次に、三塗無量苦惱段の第三の絵相である地獄道について検証する。

尚、この高田敬輔の地獄道の絵相には、等活地獄、黒繩地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、阿鼻地獄の八つの地獄の名称が挙げられている。

そこで、まず初めに、この八つの地獄名の典拠について、主な經典にはどのように説かれているかみることにする。

地 獄 名									經 典
	6 阿鼻	8 大炎	7 炎 <small>えん</small>	5 大涕哭	4 涕哭 <small>たいこく</small>	3 等害 <small>とうがい</small>	2 黒繩	1 還活 <small>かんかつ</small>	増一阿含經 八難品 (大正藏二・ 七四七頁C)
	8 阿鼻	7 大熱	6 熱	5 大叫喚	4 叫喚	3 合會	2 黒繩	1 活	大智度論 卷十六 (大正藏二五・ 一七五頁C)
	8 無間	7 大燒炙	6 燒炙 <small>しょうしや</small>	5 大叫喚	4 叫喚	3 堆壓 <small>すいあつ</small>	2 黒繩	1 想	長阿含經 世記經地獄品 (大正藏一・ 一二一頁C)
	8 阿鼻摩訶	7 釜煮	6 燒炙	5 噉 <small>きようかん</small>	4 盧獺 <small>ろかつ</small>	3 僧乾	2 黒耳	1 想	大樓炭經 泥犁品第四之一 (大正藏一・ 二八三頁b)
	8 阿鼻至	7 大熱腦	6 熱腦	5 大叫喚	4 叫喚	3 合	2 黒	1 活	起世經 地獄品第四之一 (大正藏一・ 三二〇頁C)
	8 阿鼻	7 大焦熱	6 焦熱	5 大叫喚	4 叫喚	3 合	2 黒繩	1 活	正法念處經 生死品之二 (大正藏一七・ 一八頁b)
	8 無間	7 大熱	6 炎熱	5 大叫	4 號叫	3 衆合	2 黒繩	1 等活	俱舍論 分別世品第三之 一 (大正藏二九・ 四一頁b)
3 行	9 無缺 <small>むけつ</small>	6 鐵檻	8 炙	5 大叫	7 哭	4 衆合	2 黒繩	1 活	三法度論 卷下 (大正藏二五・ 二七頁C)

＊『正法念處經』にみる十六別處
 ≪活地獄は七處、黑繩地獄は三處で省略され、大叫喚地獄は十八處の小地獄が説かれている。≫

-813-

それでは具体的に、高田敬輔の描いた八つの地獄の絵相についてみることにする。

① 等活地獄地獄

まず初めに、等活地獄をみる。

「無量寿経曼荼羅」地獄道の等活地獄の絵相



地獄道の等活地獄は、隨天の『開壇記』（卷四 四一丁裏）の注釈によれば、

罪人互常懷_レ害心_一以_二鐵爪_一、_レ斷裂若適相見如_二獵者見_レ鹿今圖_二六人_一其餘血肉既盡唯有_二殘骨_一又右一獄卒手執_二鐵又_一打_二碎罪人_一形體分離猶如_二破瓦_一左一獄卒怒振_二鐵棒_一打_二翻罪人_一受罪四人悶絕躡_レ地又右熱湯沸_二釜中_一猛

火焰_二然於下_一獄卒投_二罪人於鑊中_一以_二鐵箸_一旋轉左側焰火向_レ空五罪人於_レ中熱苦顛惱

（罪人、互いに常に害心を懷き、鐵爪を以つて斷み裂く。若し適_{たまたま}相い見れば、獵者の鹿を見るが如し。今、六人を圖す。其餘は、血肉既に盡きて、唯だ殘骨のみ有り。又、右に一獄卒、手に鐵又を執して罪人を打碎す。形體、分離して、猶_{なほ}し破瓦の如し。左に一獄卒、怒りて鐵棒を振り、罪人を打翻す。受罪の四人、悶絶して地に躡_いる。又、右に熱湯、釜の中に沸き、猛火、下に焰然たり。獄卒罪人を鑊の中に投げ、鐵箸を以つて旋轉す。左側に、焰火、空に向き、五罪人、中に於いて熱苦顛惱す。）

とあるように、絵相は上部から五つの場面が連続して描かれている。

一は、一獄卒が鉄又で罪人を打ち砕いている場面。

二は、一獄卒が鉄棒で四人の罪人を打ち翻している場面。

三は、六人の罪人が敵愾心から互いに鉄の爪で掴み合い、引き裂き、既に他の者は骨となっている場面。

四は、一獄卒が熱湯が沸き立つ釜の中へ罪人を投げ込み、鉄の箸でかき回している場面。

五は、燃え盛る火の中で五人の罪人が熱火の苦に苛まれている様相を表している。

これらの様相は、源信が『往生要集』（浄土宗全書第十五卷三七頁 a 16）で次のように説くことを、そのまま絵画表現したものと思われる。

初等活地獄者在_二於此閻浮提之下一千由旬_一縱廣一萬由旬此中罪人互常懷_二害心_一若適相見如_二獵者逢_レ鹿_一各以_二鐵爪_一而互斷裂血肉既盡唯有_二殘骨_一或獄卒手執_二鐵杖鐵棒_一從_レ頭至_レ足遍皆打_二築身_一體破碎猶如_二沙揣_一或以_二利刀_一分分割_レ肉如_二厨者屠_二魚肉_一涼風來吹尋活如_レ故欬然復起如_レ前受_レ苦或云空中有_レ聲云此諸有情可_二還等活_一

或云獄卒以^二鐵叉^一打^レ地唱云^二活活^一如^レ是等苦不^レ可具述^一 已上依智度論、瑜伽論諸經要集撰之

(初めに等活地獄とは、此の閻浮提の下、一千由旬に在り。縦の廣さ一萬由旬なり。

此の中の罪人、互いに常に害心を懷き、若し適たま相見れば、獵者の鹿に逢うが如く。各おの鐵爪を以つて互いに齧み裂く。血肉既に盡きてただ殘骨のみ有り。或は獄卒、手に鐵杖、鐵棒を執り、頭従り足に至るまで、遍く皆打ち築くに、身體破れ、碎くること、猶し沙揣の如し。或は極めて利き刀を以つて分々に肉を割くこと、厨者の魚肉を屠^{ほふ}るが如し。涼風來たり吹き、尋^ついで活^{よみが}えること故^{もと}の如し。欸^{くつねん}然としてまた起き、前の如く苦を受く。或いは云わく。空中に聲有りて云わく。此の諸々の有情また等しく活えるべしと。或いは云わく、獄卒、鐵叉を以つて地を打ち、唱えて活きよ活きよと云うと。是の如き等の苦、具に述ぶべからず。(已上は智度論、瑜伽論、諸經要集に従りて之を撰ぶ。)

とあり、隨天が『開壇記』で注釈した内容は、『往生要集』の要文とほぼ一致することから、高田敬輔が『往生要集』で述べられる内容を忠実に絵相に反映したものと考えられる。

さらに、このような等活地獄に墮ちるのは、『正法念處經』(大正藏十七・二七頁b4)によれば、

何業生彼活地獄處。彼比丘。若見聞知。或天眼見。若有殺生。樂行多作此業普遍。殺業究竟。和合相應。墮活地獄根本之處。殺生之業。有上中下。地獄受苦。亦上中下。彼地獄業。何者爲上。彼殺生者。若殺善人。若受戒人。若善行人。有他衆生。有衆生想。有殺生心。斷其命根。此業究竟。心不生悔。向他讚說。而復更作。復教他殺。勸殺隨喜。讚歎殺生。若使他殺。如是癡人。自作教他。罪業成就。命終生於活地獄

(何の業にて彼の活地獄處に生まるや。彼の比丘、若しは見聞して知り、或いは天眼にて見るに、若し殺生すること有り。樂しみ行い多く作して此の業、普^{あまね}遍く殺業を究^き竟^わめて相應せば、活地獄根本の處に墮つ。殺生の業に上・中・下有りて、地獄の受苦もまた上・中・下あり。彼の地獄の業は何者を上と爲すや。彼の殺生者にして、若しは善人、若しは受戒人、若しは善行人を殺し、他の衆生有りて衆生の想有るに、殺

生の心を生じて其の命根を斷ち、此の業を究竟めて心に悔いを生ぜず。他に向い讃め説きまた更に作し、また他に殺を教え、殺を勧めて隨喜し、殺生を讃歎し、若しは他をして殺さしめ、是の如き癡人にして自ら作し、他に教えて罪業を成就せんに、命終りて活地獄の中に生まる。）

のように、善人や受戒人や善行人を殺したり、殺生を教え、勧めて隨喜し、讃歎した者は、活地獄に墮ちると説かれてゐる。

さらに、どのような責め苦に遭うかは、特に絵相の中の釜茹での様相は、第三の小地獄である瓮熱處が相応しているので、次にあげる。（『正法念處經』大正藏藏十七・二八頁 a 19）

又彼比丘。觀活地獄第三別處。名瓮熱處。彼業果報。衆生何業生於彼處。彼見聞知。彼殺生人。若殺駱駝。若殺猪羊。若殺衆鳥。若馬若兔。若羆若熊。有毛畜生。爲食其肉。欲令毛脫。活燒活煮。若置湯中。彼人以是惡業因緣。身壞命終。墮活地獄。生瓮熱處。惡業種子。相似果報。置鐵瓮中。煎煮極熱。猶如熟豆。如是無量百千年歲。在彼地獄大火煮之。

（又彼の比丘、活地獄第三の別處を瓮熱處おうじゆくじよと名づけ、彼の業の果報を觀る。衆生は何の業にて彼處かしこに生まれるや。彼、見聞して知るに、彼の殺生人の若しは駱駝を殺し、若しは猪、羊を殺し、若しは衆鳥を殺し、若しは馬、若しは兔、若しは羆、若しは熊なる有毛の畜生の其の肉を食うことを爲し、毛をして脱け令めんと欲し、活きながら燒き、活きながら煮、若しは湯中に置くに、彼の人、是の惡業の因緣を以つて、身壞れ、命終りて活地獄に墮ちて瓮熱處に生まれ、惡業の種子に相似せる果報あり。鐵瓮てつおうの中に置かれ、煎煮にんしゆられて極めて熱くして、猶し熟豆の如く。是の如く無量百千年歲、彼の地獄に在りて、大火、これを煮る。）と説かれるように、活地獄第三別處の瓮熱處と名付けられた小地獄は、駱駝や様々な動物を殺傷し、その肉を食すため、生きてゐるにもかかわらず、焼いたり、煮たりしたことによる罪によつて墮ちる地獄であると説かれる。その惡業そのままを、自らが地獄の釜の中で、無量の年月、煎り、茹でられることになると思はれてゐる。

② 黒縄地獄

次に、黒縄地獄をみることにする。

「無量寿経曼荼羅」地獄道の黒縄地獄の絵相



隨天は黒繩地獄について、次のように注釈をしている。（『開壇記』卷四 四一丁裏）

一獄卒縛^二執罪人^一以^二熱鐵繩^一縱橫畫^レ身亦一獄卒捉^二罪人^一以^二熱鐵鋸^一分^二割其身^一側三罪人悶絶顛覆又左右有大鐵山^一山上各建^二鐵幢^一幢頭張^二鐵繩^一繩下有^二大熱鑊^一一罪人^一令^下負^二鐵山^一行^中繩上^上鑊傍有^二一獄卒^一守（一獄卒、罪人を縛執し、熱鐵の繩を以つて縱横に身を畫す。また一獄卒、罪人を捉して熱鐵の鋸を以つて其の身を分割す。側に三罪人、悶絶して顛覆す。また左右に大鐵山有り。山の上に各おの鐵幢を建て、幢頭に鐵繩を張る。繩の下に大熱鑊有り。一罪人を駈して鐵山に負い、繩上を行かしめる。鑊の傍に一獄卒有りて守る。）

この黒繩地獄についても同様に『往生要集』（浄土宗全書第十五卷三八頁 a 13）をみると、

二黒繩地獄者在^二等活下^一縱廣同^レ前獄卒執^二罪人^一臥^二熱鐵地^一以^二熱鐵繩^一縱橫拼^レ身以^二熱鐵斧^一隨^レ繩切割或以^レ鋸解或以^レ刀屠作^二百千段^一處處散在又懸^二熱鐵繩^一交橫無數駈^二罪人^一令^レ入^二其中^一惡風暴吹交^二絡其身^一燒^レ肉焦^レ骨楚毒無^レ極^{已上瑜伽論智度論}又左右有^二大鐵山^一山上各建^二鐵幢^一幢頭張^二鐵繩^一繩下多有^二熱鑊^一駈^二罪人^一令^下負^二鐵山^一從^二繩上^一行^上遙落^二鐵鑊^一摧煮無^レ極^{昧觀佛三}

（二に黒繩地獄とは、等活の下に在り。縱廣、前に同じ。

獄卒、罪人を執^{とら}えて熱鐵の地に臥せ、熱鐵の繩を縱^{たてまよこぎま}横^横に身に拼^{すみう}ち、熱鐵の斧を以つて繩に隨いて切り割く。或るは鋸を以つて解^きり、或るは刀を以つて屠^{ほふ}り、百千段に作りて處々に散らし在く。

また熱鐵の繩を懸けて交え横たえること無數なり。罪人を駈りて其の中に入れしむるに、惡風暴^{にわか}に吹いて其の身に交わり絡まり、肉を燒き骨を焦がして楚毒極まり無し。（已上瑜伽論智度論。）

また左右に大鐵山有り。山上に各々鐵の幢を建て、幢の頭に鐵の繩を張り、繩の下には多く熱き鑊^{かま}有り。罪人を駈りて鐵の山を負わせて繩の上從り行かしめ、遙かに鐵の鑊に落とし、摧き煮ること極まり無し。

（觀佛三昧經。）

のように、罪人は熱鐵の地に臥せられ、熱鐵の縄で身体の縦横に墨付けされ、それに沿って斧や鋸や刀で切り刻まれる。また、左右の鐵山の山頂に立つ鐵幢の先端に張られた鐵繩に、鐵の山ほどの重荷を背負わされて綱を渡るように追いやられるが、渡りきれず、煮えたぎる真下の大釜に落ち、粉々に碎かれ煮られると説かれる。

このような黒繩地獄に落ちるのは、『往生要集』（浄土宗全書第十五卷三八頁b 07）に次のように説かれる。

以^二人間一百歳^一爲^二忉利天一日夜^一其壽一千歳以^二忉利天壽^一爲^二一日夜^一此地獄壽一千歳殺生偷盜者墮^二此中^一（人間の一百歳を以って忉利天の一日夜と爲して、其の壽、一千歳なり。忉利天の壽を以って一日夜と爲して、此の地獄の壽、一千歳なり。殺生、偷盜せる者、此の中に墮つ。）

また、人間世界の百年が忉利天の一昼夜であり、この忉利天の壽命一千年が、黒繩地獄の一昼夜に当たることになる。殺生や偷盜をした者は、この黒繩地獄に落ち、ここで一千年の長い間、苦しむことになると説かれる。このように、先の等活地獄は、殺生悪をした者が落ちる地獄であるが、この黒繩地獄は、殺生に加えて偷盜をした者が落ちる地獄で、罪が重なるごとに一段階深い地獄に落ち、責め苦も加増し、時間的にも長時間苦しまなければならぬことが説かれているのである。

『往生要集』には、十六別處のうちの「等換受苦處」と「畏熟處」の小地獄が説かれているが、直接的に高田敬輔の描く黒繩地獄の絵相とは異なるので、ここでは省略する。

尚、『正法念處經』にも、

又彼比丘。觀察黒繩大地獄處。普遍觀察十六別處。如活地獄。

（また彼の比丘、黒繩大地獄處を觀察し、普遍く十六別處を觀察すること活地獄の如し。）

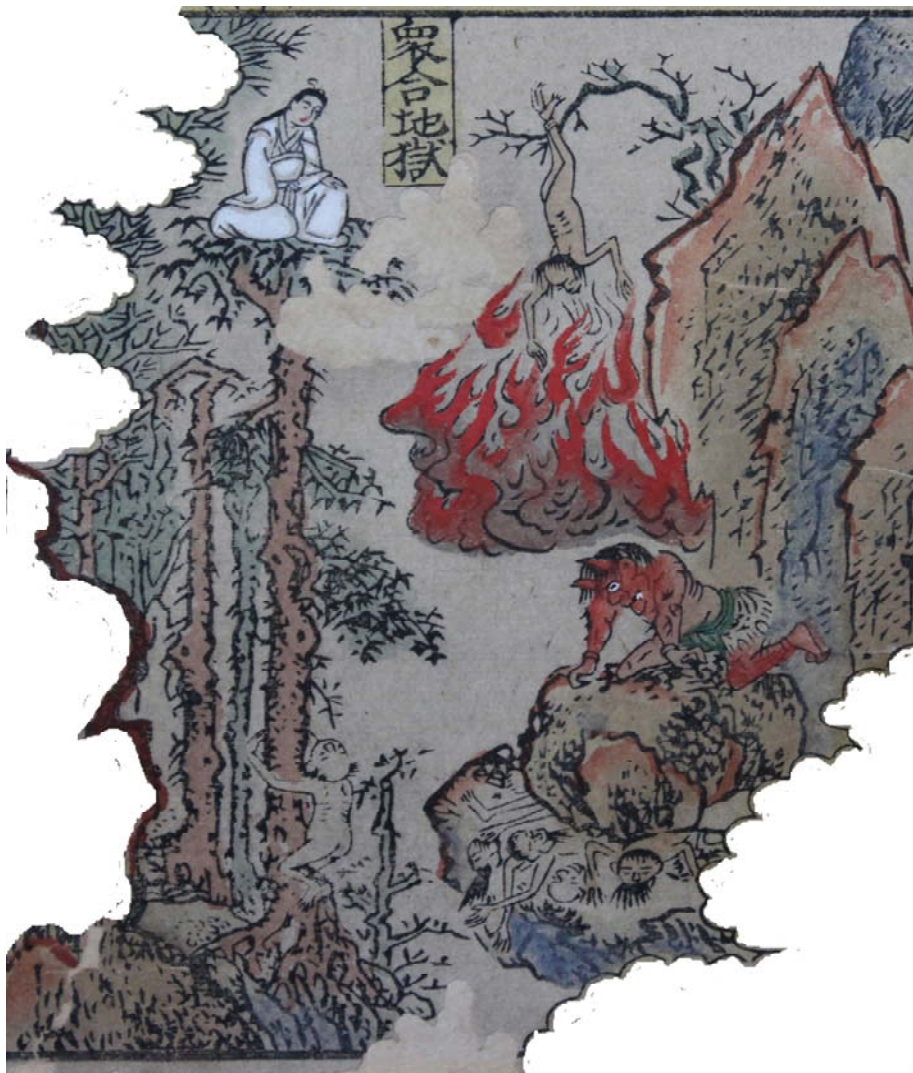
と十六別處があると説かれているが、經文には、「等換受苦處」と「旃茶處」と「畏驚處」の三處しか説かれず、四處以下の小地獄が省略されている。

また、源信『往生要集』では『正法念處經』の「畏驚處」を「畏熟處」と引用している。

③ 習合地獄

次に、衆合地獄をみることにする。

「無量寿経曼荼羅」地獄道の衆合地獄の絵相



習合地獄について、隨天は次のように注釈している。（『開壇記』卷四 四三丁表）

左一獄卒捉罪人於石上以磬石窄碎受罪五人碎身分骨泣血悶絕又右刀葉樹上有端嚴一婦男夫在下見已即上劍樹樹葉化刀割其身肉得是上樹已無婦女却在地又左受苦一人倒懸樹上將墮熾然猛火之中

（左に一獄卒、罪人を石上に捉して磬石を以って窄碎す。受罪の五人、碎身分骨し血に泣きて悶絶す。

又右の刀葉樹の上に端嚴たんげんの婦有り。男夫、下に在り。見已つて即ち劍樹に上る。樹葉、刀に化し、其の身を割く。へ樹に上つて得已れば彼の婦女、却しりぞいて地に在り。是の如く上下無量千百億歳。～

又左に受苦の一人、樹上に倒懸し、まさに熾然猛火の中に墮ちんとす。）

同様に、『往生要集』（浄土宗全書第十五卷三八頁b17）をみると、

三衆合地獄者在黑繩下縱廣同前多有鐵山兩山相對牛頭馬頭等諸獄卒手執器械驅令入山間是時兩山迫來合押身體摧碎血流滿地或有鐵山從空而落打於罪人碎如沙揣或置石上以巖押之或入鐵臼以鐵杵擣極惡獄鬼并熱鐵師子虎狼等諸獸鳥鷲等鳥競來食噉大論論

又鐵炎觜鷲取其腸已挂在樹頭而噉食之彼有大江中有鐵鉤皆悉火燃獄卒執罪人擲彼河中墮鐵

鉤上又彼江中有熱赤銅汁漂彼罪人或下身如日初出者有身沈沒如重石者有舉手向天而號哭者有共相近而號哭者久受大苦無主無救又復獄卒取地獄人置刀葉林見彼樹頭有好端正嚴飾婦女如

是見已即上彼樹樹葉如刀割其身肉次割其筋如是劈割一切處已得上樹已見彼婦女復在於地以欲媚眼上看罪人作如是言念汝因緣我到此處汝今何故不近來我何不抱我罪人見已欲心熾盛次第

復下刀葉向上利如剃刀如前遍割一切身分既到地已而彼婦女復在樹頭罪人見已而復上樹如是無量百千億歳自心所誑彼地獄中如是轉行如是被燒邪欲爲因獄卒呵嘖罪人説偈曰非異人作惡異人受

苦報念正經法自業自得果衆生皆如是

（三に衆合地獄とは、黑繩の下に在り。縱廣、前に同じ。

多く鐵山有り。兩の山、相對いに。牛頭、馬頭等の諸々の獄卒、手に器械を執りて駈りて山の間に入らしむ。是の時、兩つの山、迫り來たりて合せて押すに、身體、摧け碎け、血流れて地に滿つ。或るは鐵山有りて空從り落ち、罪人を打ちて碎くこと沙揣の如し。或るは石の上に置き、巖を以て之を押す。或るは鐵の臼に入れて鐵の杵を以て擣く。極惡の獄鬼、并に熱鐵の師子、虎、狼等の諸々の獸、鳥、鷲等の鳥、競い來て之を食噉す。〔瑜伽論大論〕

また鐵炎の觜ある鷲、其の腸を取り已りて樹頭に挂け在いて之を噉食す。

彼に大いなる江有り。中に鐵の鉤有り。皆、悉く火に燃ゆ。獄卒、罪人を執りて彼の河の中に擲げて鐵の鉤の上に墮す。また彼の江の中に熱き赤銅の汁有りて彼の罪人を漂わす。或るは身、日の初めて出づるが如き者有り。身、沈み没ること重き石の如くなる者有り。手を舉げて天に向いて號哭する者有り。共に相近づいて號哭する者有り。久しく大苦を受くるに主るもの無く救うもの無し。

また復び獄卒、地獄の人を取りて、刀葉林に置く。彼の樹の頭を見れば、好き端正嚴飾の婦女有り。是の如く見已りて、即ち彼の樹に上るに、樹の葉、刀の如く其の身の肉を割き、次に其の筋を割く。是の如く一切の處を劈き割いて、已に樹に上ることを得已りて彼の婦女を見れば、また地に在り。欲の媚たる眼を以て上ざまに罪人を看て是の如き言を作す。

「汝を念う因縁に我れ此處に到れり。汝、今何が故ぞ來りて我に近づかざる。何んぞ我を抱かざる。」と。罪人、見已りて欲心熾盛にして次第にまた下る。刀葉上に向うて利きこと剃刀の如し。前の如く遍く一切の身分を割く。既に地に到り已りて彼の婦女、また樹の頭に在り。罪人見已りてまた樹に上る。是の如く無量百千億歳、自心に誑かされて彼の地獄の中には是の如く轉り行き、是の如く焼かるること邪欲を因と爲す。〔乃至廣く説く。〕

獄卒、罪人を呵嘖して偈を説いて曰く。異人の作れる惡を作りて、異人苦の報を受くるに非ず。

自業自得の果なり。衆生、皆、是の如し。〔正法念經。〕

とあるように、習合地獄の絵相は、『往生要集』に説かれる二つの鐵山で押し潰される様相、樹の先に逆さ吊りの罪人が下からの大火焰に炙られる様相、美女が手招きする刀葉林の樹を何度も上下に行き来し、その利い葉で身を切り割られる様相の、三つの場面が描かれる。

さらに続けて『往生要集』には、「惡見處」と「多苦惱」と「忍苦處」の小地獄が説かれるが、右の三つの様相の中の、樹に逆さ吊りされている絵相は、まさに『正法念處經』第三合地獄の第七別處「忍苦處」の説くところ（『正法念處經』大正藏十七・三四頁c16）、

名忍苦處。是合地獄第七別處。衆生何業生於彼處。彼見有人殺盜邪行樂行多作。墮合地獄生忍苦處。殺生偷盜業及果報。如前所説。何者邪行。所謂有人。破他軍國。得婦女已。若或自行。若自取已。給與他人。若依道行。若不依道。彼人以是惡業因縁。身壞命終。墮於惡處合大地獄。生忍苦處。受大苦惱。所謂苦者。閻魔羅人。懸之在樹。頭面在下。足在於上。下燃大火。燒一切身。從面而起。彼地獄火。熱勢甚熾。

（忍苦處と名づけ、是れ合地獄第七の別處なり。衆生は何の業にて彼處かしこに生まるるや。彼見るに人有り。殺、盜、邪行を樂しみ行を多く作し、合地獄に墮ち忍苦處に生まるる。殺生、偷盜の業及び果報は、前に説く所の如し。何者は邪行なりや。

所謂、人有り。他の軍國を破りて婦女を得已わり、若しは自ら行ひ、若しは自ら取り已わりて他人に給與あたえ、若しは道に依り、若しは道に依らずして行う。彼の人、是の惡業の因縁を以って、身壞れ命終りて惡處の合大地獄に墮ち、忍苦處に生まれて大苦惱を受く。

所謂、苦とは、閻魔羅人、之を懸けて樹に在らしめ、頭面は下に在り。足は上に在り、下に燃えたる大火ありて一切の身を焼き、面従り起り、彼の地獄の火は、熱勢甚だ熾さかんなり。）

にあるように、ここに墮ちる者は、殺生、偷盜は勿論、邪行の者なのだが、その中でも敗戦国の婦女を陵辱した

り、犯した後他人に与えたり、道に外れた者が墮ちる地獄なのである。その悪業の因縁によって、樹の先端に逆さ吊りにされ、大火で火炙りにされ、全身くまなく焼かれる地獄であるということが説かれているのである。

④ 叫喚地獄

次に、叫喚地獄をみることにする。

「無量寿経曼荼羅」地獄道の叫喚地獄の絵相



続いて叫喚地獄について、隨天は次のような注釈をしている。（『開壇記』卷四 四五丁表）

有^二大猛火^一 一獄卒以^二鐵棒^一 追^二擊^二罪人^一 又左有^二猛炎鐵室^一 五罪人已^レ被^二駙入^一 一獄卒捧^二罪人^一 將^レ投^二焰中^一 又右有^二罪人^一 一卒以^レ鉗開^レ 口一卒灌^二洋銅於咽^一

（大猛火有り。一獄卒、鐵棒を以つて二罪人を追撃す。又左に猛炎鐵室有り。五罪人、已に駙り入れ被られ、一獄卒、一罪人を捧げて將に焰中に投げんとす。又右に一罪人有り。一卒、鉗を以つて口を開く、一卒洋銅を咽に灌ぐ。）

とあるように、高田敬輔の叫喚地獄の絵相は、一つは、一獄卒が二人の罪人を大猛火の中へ、鐵棒を以つて追い立てている場面。二つ目は、五人の罪人が猛火の鐵室で焼け炙られる所へ、さらに一罪人が一獄卒によつて投げ込まれようとしている場面。三つ目は、一獄卒が一罪人の口を鉗でこじ開けている所へ、もう一人の獄卒が洋銅を咽に注ぎ込んでいる場面の三場面によつて構成されている。

この叫喚地獄についても同様に『往生要集』（浄土宗全書第十五卷四十頁 a 04）をみると、

四叫喚地獄者在^二衆合下^一 縱廣同^レ 前獄卒頭黃如^レ 金眼中火出著^二赭色^一 衣手足長大疾走如^レ 風口出^二惡聲^一 而射^二罪人^一 罪人惶怖叩^レ 頭求^レ 哀願垂^二慈愍^一 少見^二放捨^一 雖^レ 有^二此言^一 彌增^二瞋怒^一 或以^二鐵棒^一 打^レ 頭從^二熱鐵地^一 令^レ 走或置^二熱熬反覆炙^一 之或擲^二熱鑊^一 而煎^二煮之^一 或駙入^二猛炎鐵室^一 或以^レ 鉗開^レ 口而灌^二洋銅^一 燒^二爛五藏^一 從^レ 下直出

大論加論

（四に叫喚地獄とは、衆合の下に在り。縱廣、前に同じ。

獄卒の頭、黄なること金の如し。眼の中より火出づ。赭色^{しやしき}の衣を著^きたり。手足長大なり。疾く走ること風の如し。口より惡聲出して罪人を射る。罪人、惶^{おそ}れ怖れて頭を叩きて哀れみを求む。

「願わくは、慈愍^{じみん}を垂れて少し放^{ゆる}し捨^おかれよ。」と。

此の言有りと雖も、いよいよ瞋怒を増す。〈大論〉

或るは鐵棒を以つて頭を打ちて熱鐵の地従り走らしめれば、或るは熱熬に置きて反覆して之を炙る。

或るは熱鑊に擲^なげて、之を煎じ煮る。或るは駢^なりて猛炎の鐵室に入らしめ、或るは鉗^{かなばさみ}を以つて口を開いて洋銅を灌^{そそ}ぎ、五藏を燒爛^{しょうらん}して下従り直に出す。〈瑜伽論大論。〉

とあり、高田敬輔が『往生要集』に説く内容を忠実に絵画表現したことを知ることができるのである。

また、どのような者が、この叫喚地獄に墮ちるかについては、『正法念處經』第四叫喚地獄に詳細に説かれるように、（大正藏十七・三九頁 a 19）

又彼比丘如是觀察三地獄已。次復觀察第四叫喚之大地獄。衆生何業生於彼中。彼見聞知。所謂有人殺生偷盜邪行飲酒樂行多作。如是四業普遍究竟。作而復集。身壞命終。則生如是叫喚大地獄。殺盜邪行業及果報如前所説。今説飲酒樂行多作。則生叫喚大地獄中。若人以酒與會僧衆。若與戒人出家比丘。若寂靜人。寂滅心人。禪定樂者。與其酒故心則濁亂。彼人以是惡業因縁。身壞命終。墮於惡處叫喚大地獄。彼中惡熱。受大苦惱。受何等苦。謂以鐵鉗強擘其口。洋赤銅汁。灌口令飲。〈中略〉

如是生藏。次燒熟藏。燒熟藏已。從下而出。如是彼人。酒不善業。得如是報。號啼吼喚。呼嗟大哭。彼人如是唱喚吼已。閻魔羅人。爲責疏之。而説偈言。

（また彼の比丘、是の如くに三地獄を觀察しおわり、次いでまた第四叫喚の大地獄を觀察す。衆生は何の業にて彼の中に生まるや。彼、見聞して知るに、所謂、人有り。殺生、偷盜、邪行、飲酒を樂しみ行い多く作し、是の如き四業を普遍^{あまね}く究竟^{きわ}め。作してまた集むるに、身壞れ命終わりて則ち是の如き叫喚大地獄に生る。殺、盜、邪行の業及び果報は、前に説く所の如し。今、飲酒を樂しみ行い多く作さば、則ち叫喚大地獄中に生ると説くは、若し人、酒を以つて與^{あた}えて僧衆と會し、若しは戒ある人、出家せる比丘、若しは寂靜の人、寂滅の心の人、禪定を樂しむ者に與へ、其の酒を與るが故に心を則ち濁亂^{じよくらん}せしむるにて、

彼の人、是の惡業の因縁を以つて、身壞れ命終りて惡處なる叫喚大地獄に墮ち、彼の中に惡熱ありて大苦惱を受く。

何等の苦を受くるや。謂はく、鐵鉗を以つて強く其の口を擘^ひき、洋たる赤銅の汁を口に灌ぎて飲ましめ、

〔中略〕

是の如く生藏にして、次いで熟藏を焼き、熟藏を焼き已りて下從り出ず。是の如くに彼の人、酒の不善の業にて是の如き報いを得、號啼^なき吼喚^{さけ}び呼嗟^{なげ}き大いに哭^なく。彼の人、是の如く唱喚^{しょうかん}して吼え已るに、閻魔羅人は爲にこれを責疏^せめ、偈を説きて言わく。

叫喚地獄は、殺生、偷盜、邪行に加え、飲酒を樂しみ、僧侶や受戒者、寂靜、禪定の境地の者を濁亂させた者が墮ち、その罰として口をこじ開けられ熱鉄の洋銅が注ぎ込まれる苦を受けると説かれている。

⑤ 大叫喚地獄

次に、大叫喚地獄をみることにする。

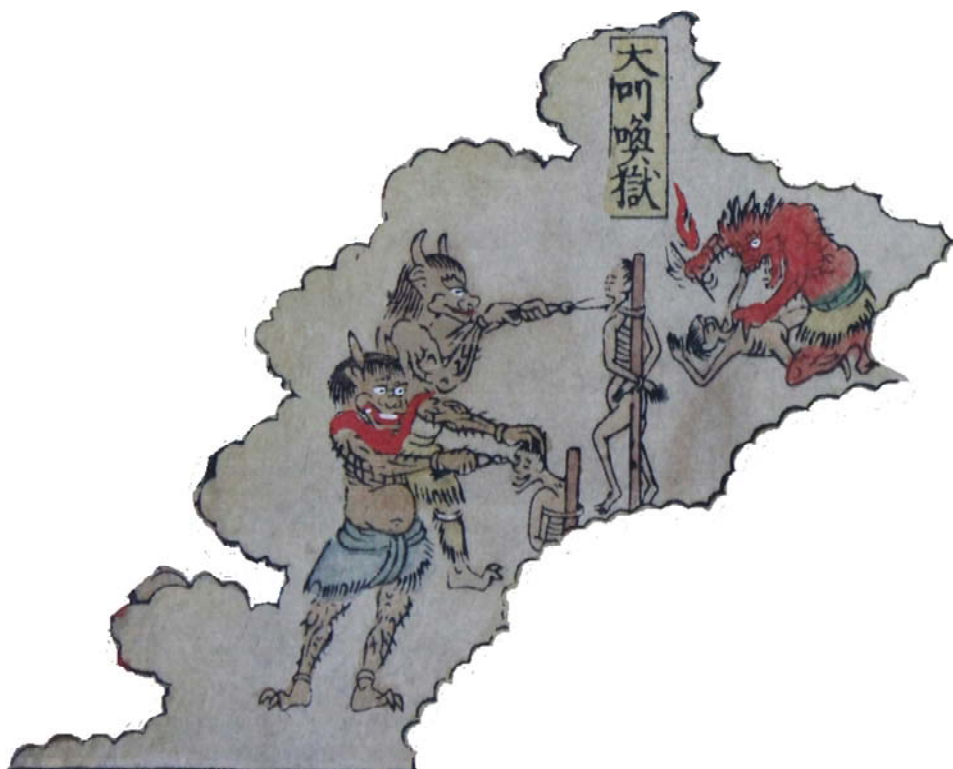
大叫喚地獄について、隨天は次のような注釈をしている。〔『開壇記』卷四 四七丁表〕

左獄卒執^ニ熱鐵利針^一仰^ニ一罪人^一口舌俱刺又右側有^ニ二罪人^一各各桎械^ニ獄卒一拔^ニ其舌^一一挑其眼

（左に獄卒、熱鐵利針を執り、一罪人を仰むかして口舌、俱に刺して、又右の側に二罪人有り。各おの桎械^{ぢうがい}し、二獄卒あり。一は其の舌を抜き、一は其の眼を挑^えくる。）

とあり、三人の罪人の様相が描かれている。

その一つは、一獄卒が仰むけに転がされた罪人の口を開け、熱鉄の鋭い針で、口、舌を貫く場面。二つ目は、二人の罪人がそれぞれ磔^{はりつけ}にされ、一人は鉗子で舌を抜かれ、もう一人は眼を抉^{えぐ}られる場面である。



「無量寿経曼荼羅」地獄道の大吽喚地獄の絵相

さらに、

要集云前四地獄及諸十六別處一切諸苦十倍重受至乃

復有十六別處今瑜伽俱舍意一大獄各有四園令爲三十六地獄故略言一十八處名相不同

其中一處名受鋒苦熱鐵針口舌俱刺不能啼哭復有別處名受無邊苦獄卒以熱鐵鉗拔出其舌拔已復生生則復拔拔二眼亦然復以刀削其身刀甚薄利如剃頭刀今略舉二種苦相可對見

（要集に云う。前の四地獄及び諸もろの十六別處の一切諸苦を十倍重受す。へ乃至）

また十六の別處有り。へ瑜伽並びに俱舍の意、一大獄に各おの四園有り、十六爲さしむ。正法念經の十六別處の名は相い同じからず。今の大叫喚に一十八を説く。然れども要集には、一百三十六地獄を成さん爲に故に略して一十六を言うのみ。）

其の中の一處を受鋒苦じゅほうくと名づけ、獄卒、熱鐵鉗を以って、其の舌を拔出す。抜き已われれば、また生ず。生ずれば則ちまた抜く。二眼を抜くことまた然り。刀を以って其の身を削る。刀、甚だ薄利にして剃頭刀の如し。今、略して二種の苦相を擧ぐ。へ對映して見る可し。）

というように、『往生要集』には、それぞれの地獄には、四門に四處ずつ十六の小地獄があることが説かれている。また、『正法念處經』には十六處それぞれに名があり、この大叫喚地獄だけは十八處説かれているが、『往生要集』は、合計、百三十六處の小地獄を説くために十六處と略していることが述べられている。そして、今は十六處の中の「受鋒苦」と「受無邊苦」の小地獄を描き表されていると説いている。

そこで『往生要集』をみると、『正法念處經』の第五大叫喚地獄の十八別處中、第十五處の「受鋒苦」と第十六處の「受無邊苦」の二つの小地獄の内容が詳細に説かれているため、それを要約した形で取り上げているので、繰り返しになるが、それを見ると、（浄土宗全書第十五卷四十頁b09）、

五大叫喚地獄者在「大叫喚下」縦廣同「前苦相亦同但前四地獄及諸十六別處一切諸苦十倍重受以「人間八百歳」爲「

化樂天一日夜^一其壽八千歲以^二彼天壽^一爲^二此獄一日夜^一其壽八千歲殺姪飲酒妄語者墮^三此中^一獄卒呵^二噴罪人^一說^レ偈云妄語第一火尚能燒^二大海^一況燒^二妄語人^一如^レ燒^二草木薪^一復有^二十六別處^一其中一處名受鋒苦^二熱鐵利針口舌俱刺不^レ能^二啼哭^一復有^二別處^一名^二受無邊苦^一獄卒以^二熱鐵鉗^一拔^二出其舌^一拔已復生生則復拔拔^二二眼亦然復以^レ刀削^二其身^一刀甚薄利如^二剃頭刀^一受^二如是等異類諸苦^一皆是妄語之果報也餘如^二經說^一正法念經略抄

(五に大叫喚地獄とは、叫喚の下に在り。縦廣、前と同じ。苦の相また同じ。

但し前の四つの地獄及び諸々の十六別處の、一切の諸々の苦を十倍して重く受く。

人間の八百歳を以って化樂天の一日夜となして、其の壽八千歳なり。彼の天の壽を以って、此の獄の一日夜となして、其の壽八千歳なり。殺、盜、姪、飲酒、妄語の者、此の中に墮つ。

獄卒、罪人を呵噴して偈を説いて云わく。妄語は第一の火なり。なお能く大海を焼く。況んや妄語の人を焼くこと草木の薪を焼くが如し。また十六の別處有り。其の中の一處を受鋒苦と名づく。熱鐵の利き針を以って口舌俱に刺し、啼き哭ぶこと能わず。

また別處有り。受無邊苦と名づく。獄卒、熱鐵の鉗を以って其の舌を抜き出す。抜き已ればまた生じ、生ずれば則ちまた抜く。二眼を抜くこともまた然りなり。また刀を以って其の身を削る。刀の甚だ薄く利なること剃頭刀の如し。是の如き等の異類の諸々の苦を受くること、皆これ妄語の果報なり。餘は經に説くが如し。(正法念經略抄。)

とあり、隨天は『大經曼陀羅開壇記』で注釈した大叫喚地獄の内容は、源信の『往生要集』の内容にあるように、これまでの殺生、偷盜、邪行、飲酒に加えて、妄語を楽しみ、その行爲をした者は、人を焼くことが草木の薪を焼くような地獄に墮ちること。また「受鋒苦」では、口舌を針で刺され、「受無邊苦」では二眼がくり抜かれることが取り上げられ、妄語による苦が、前の四つの地獄の十倍の重さがあることが説かれている。

⑥ 焦熱地獄

次に、焦熱地獄をみることにする。

「無量寿経曼荼羅」地獄道の焦熱地獄の絵相



焦熱地獄について、隨天は次のような注釈をしている。（『開壇記』卷四 四八丁表）

左獄卒置^二一罪人於熱鐵熬上^一貫^二鐵串^一炙^レ之又右側獄卒攫^二促一罪人^一入^二熱鑊中^一

（左に獄卒あり。一罪人を熱鐵の熬上に置いて、鐵串を貫いてこれを炙る。）

また右側に獄卒あり。一罪人を攫^{かく}促^せして熱鑊の中に入れる。）

そして、さらに『往生要集』の引用部分について、（『開壇記』卷四 四八丁裏）

要集云獄卒捉^二罪人^一臥^二熱鐵地上^一或仰或覆從^レ頭至^レ足以^二大熱鐵棒^一或打或築令^レ如^二肉搏^一或置^二極熱大鐵熬上^一猛火炙^レ之左右轉^レ之表裏燒薄或以^二大鐵串^一從^レ下貫^レ之徹^レ頭而出反覆炙^レ之令^二彼有情諸根毛孔及以口中悉皆炎起^一或入^二熱鐵^一或置^二鐵樓^一鐵火猛盛徹^二於骨髓^一今圖略出^二二種苦相^一對映

（要集に云う。獄卒、罪人を捉して熱鐵の地上に臥せ、或るは仰ぎ、或るは覆せ、頭從り足に至りて大熱鐵棒を以って、或るは打ち、或るは築き、肉搏の如くならしむ。或るは極熱大鐵の熬の上に以って、猛火を以って之を炙り、左右に之を轉がし、表裏に燒き薄^{せま}り、或るは大鐵串を以って下從り之を貫き、頭を徹して出ず。反覆して之を炙り、彼の有情の諸根毛孔および口中をして悉く、皆、炎起せしむ。或るは熱鐵に入れ、或るは鐵樓に置く。鐵火猛盛、骨髓に徹す。今の圖、略して二種の苦相を出す。へ同異を對映せよ。）とあり、この絵相は、獄卒が鉄串で貫かれた一人の罪人を、燃え盛る火焰上の熱鐵の五徳の上で炙る様相と、一人の罪人を攫^さうようにして捉え、熱鑊の中に入れようとする様相の二つの場面が描き表されていると述べている。

さらにその場면을『往生要集』（浄土宗全書第十五卷四一頁 a 02）にみると、

六焦熱地獄者在^二大叫喚之下^一縱廣同^二前獄卒捉^二罪人臥^二熱鐵地上^一或仰或覆從^レ頭至^レ足以^二大鐵棒^一或打或築令^レ如^二肉搏^一或置^二極大鐵熬上^一猛炎炙^レ之左右轉^レ之表裏燒薄或以^二大鐵串^一從^レ下貫^レ之徹^レ頭而出反覆炙^レ之令^二彼有情諸根毛孔及以口中悉皆炎起^一或入^二熱鑊^一或置^二鐵樓^一鐵火猛盛徹^二於骨髓^一大論加論

（六に焦熱地獄とは、大叫喚の下に在り、縱廣、前と同じ。）

獄卒、罪人を捉えて熱鐵の地の上に臥せ、或るは仰むけ、或るは覆せ、頭従り足に至るまで大熱鐵棒を以つて、或るは打ち、或るは築ついて肉搏にくたんの如くならしむ。或るは極熱大鐵の鑿の上に置き、猛炎に之を炙る。左右に之を轉がし、表裏より燒き薄うすむ。或るは大鐵の串を以つて下従り之を貫き、頭を徹とおして出し、反覆して之を炙り、彼の有情の諸根も、毛孔及び口の中をして悉くみな炎起らしむ。或るは熱鑊に入れ、或るは鐵の樓たかどのに置いて、鐵の火、猛盛にして骨髓に徹る。(瑜伽論大論。)

とある。尚、『往生要集』には、続いて、焦熱地獄の十六別處の「芬荼離迦」と「閻火風」が説かれているが、高田敬輔の描く焦熱地獄の絵相には直接反映されていないので、ここでは省略する。

また、どのような者がこの焦熱地獄に墮ちるか『正法念處經』(大正藏十七・五四頁c20)をみると、

衆生何業生彼地獄。彼見聞知。若人堅重殺生偷盜邪行飲酒妄語言說。復有邪見。樂行多作。惡業普遍。而復究竟。樂行多作。彼人以是惡業因緣。身壞命終墮在焦熱大地獄中。殺盜邪行飲酒妄語業及果報。如前所說。今說邪見。若人邪見樂行多作。向他人說。所謂世間。無施無會。無善無惡。及以果報。無此世間。無他世間。無父無母。如是斷說。自失業果。向他人說。安住他人。隨喜他人。自身增長。他人邪見。說言無因無業無道。如是之人。雖有形服而是大賊。彼人以是惡業因緣。身壞命終墮於惡處。在彼焦熱大地獄中。受大苦惱。

(衆生は何の業により彼の地獄に生るや。彼、見聞して知るに、若し人、堅重なる殺生、偷盜、邪行、飲酒、妄語を言説し、また邪見あり。樂しみ行い多く作し、惡業普遍く。また究竟め、樂しみ行い多く作さん。彼の人、是の惡業の因緣を以つて、身壞れ命終わりて、墮ちて焦熱大地獄の中に在り。殺、盜、邪行、飲酒、妄語の業及び果報は、前に説く所の如し。

今、邪見を説くに、若し、人、邪見を樂しみ行い多く作し、他の人に向かいて説くに、所謂世間に施無く會無く善無く惡無く、及び果報、此の世間無く、他の世間無く、父無く母無しとは是の如く斷説して自ら業果を失い、他人に向いて説き、他人を安住させ他人を隨喜せしめ、自身に他人の邪見を増長し、説きて

因無く業無く道無しと言う。是の如きの人は形服有りと雖も、是れ大賊にして、彼の人、是の悪業の因縁を以って、身壞れ命終わりて悪處に堕ち、彼の焦熱大地獄の中に在りて大苦惱を受く。）とあり、この焦熱地獄には、これまでの殺生、偷盜、邪行、飲酒、妄語に加えて、邪見の言説をした者が堕ちると説かれているのである。

⑦ 大焦熱地獄

次に、大焦熱地獄をみることにする。

「無量寿経曼荼羅」地獄道の大焦熱地獄の絵相



大焦熱地獄について、隨天は次のような注釈をしている。（『開壇記』卷四 四九丁裏）

有^二大火聚^一炎燃熾盛墮罪七人於^レ中二人從^レ空而墜落此新墮者

（大火聚^{かじゆ}有り。炎燃熾盛^{しじよう}なり。墮罪七人、中に於いて二人は空より墜落す。此れ新たに墮する者なり。）

と大きな火が燃え盛る中で七人の罪人が苛まれる様相が描かれており、その中の二人は、今まさに空中から墮とされている場面が表されている。

その様子について、『往生要集』（浄土宗全書第十五卷四一頁b 09）では、

七大焦地獄者在^二焦熱下^一縱廣同^レ前苦相亦同^{大論}

但前六地獄根本別處一切諸苦十倍具受不^レ可^二具說^一其壽半

中劫殺盜姪飲酒妄語邪見並汗^二淨戒尼^一者墮^二此中^一（中略）

如^レ是苦呵嘖已將向^二地獄^一有^二大火聚^一其聚舉高五百由旬其量寬廣二百由旬炎燃熾盛彼人所^レ作惡業勢力急擲^二

其身^二墮^二彼火聚^一如^二大山岸推在^二險岸^一^{已上正法念經略抄}

（七に大焦地獄とは、焦熱の下に在り。縱廣、前に同じ。

苦の相もまた同じ。へ大論瑜伽論。へ但し前の六の地獄の根本と別處との一切の諸苦を十倍して具さに受く。具に説くべからず。

其の壽、半中劫なり。殺、盜、姪、飲酒、妄語、邪見、並びに淨戒の尼を汗^{けが}せる者此の中に墮つ。（中略）

是の如く苦^{ねんごろ}に呵嘖し已りて、將^{ひき}いて地獄に向かうに大火聚有り。其の聚^{あつまり}、擧がりて高きこと五百由旬、

其の量、寬く廣きこと二百由旬なり。炎燃熾盛にして、彼の人の所作の惡業の勢力なり。急^{すみやか}に其の身を

擲げて彼の火聚に墮すこと、大いなる山の岸より推して險しき岸に在くが如し。（已上正法念經略抄。）

と淨戒の尼を汚した者が、大火聚に墮とされることが要約されて説かれている。

これをさらに詳しく『正法念處經』（大正藏十七・五四頁c 20）をみると、

又彼比丘。觀活。黑繩。合。喚。大喚。及焦熱等并別處已。復更觀察。爲當更有餘地獄不。彼見聞知。有大

地獄。名大焦熱。衆生何業。生彼地獄。彼見有人。殺生偷盜邪行飲酒妄語邪見。樂行多作。墮彼地獄。業及果報。如前所説。復於持戒不犯禁戒。具足不缺淨行童女。善比丘尼。未曾行欲。未曾犯戒。如來法中如法行者。令其退壞。如是之人。不信佛法。如是心言。佛者。則非一切智人。佛既非是一切智者。何況弟子比丘尼僧。有清淨行。如是一切。皆是妄語。虛誑不實。如是佛法。乃是惡處。非布施此。能生福德。非布施此。能得涅槃。此凡人僧。如是和合。比丘女尼毀破禁戒。則不得罪。彼人如是惡思惟已。壞彼童女。比丘尼戒。令退僧行。令其犯戒。彼人身業口業意業。惡不善行。身壞命終。墮於惡處。在大焦熱大地獄中受大苦惱。

（また彼の比丘、活、黒繩、合、喚、大喚及び焦熱等、並びに別處を觀おわりて、また更に觀察するに、當に更に餘の地獄有るべしと爲さんやいなや。彼、見聞して知るに、大地獄有りて大焦熱と名づく。衆生は何の業にて彼の地獄に生まるや。彼、見るに人有りて、殺生、偷盜、邪行、飲酒、妄語、邪見を樂しも行い多く作さば、彼の地獄に墮つ。業及び果報は前に説く所の如し。また持戒に於いて禁戒を犯さず、具足して缺かざる淨行の童女、善き比丘尼にして、未だ曾て戒を行わず、未だ曾て戒を犯さず、如來の法中にて法の如くに行える者なるに、其れをして退壞しりぞか令め、是の如き人は佛法を信ぜずして是の如き心にて言わく。佛は則ち一切智人に非ず。佛、既に是れ一切智者に非ず。何ぞ況んや弟子の比丘尼僧に清淨の行有らんや。是の如きの一切は皆是れ妄語なり。虚誑いつわりにして實ならず。是の如き佛法は是れ惡處にして、布施此れ能く福德を生ずるに非ず。布施此れ能く涅槃を得るに非ず。此れ凡人の僧にて是の如くに和合せるにて、比丘女尼の禁戒を毀破やぶるも則ち罪を得ずと。彼の人、是の如くに惡しく思惟しおわり、彼の童女、比丘尼の戒を壞りて僧行を退か令め、其れをして戒を犯さしめ、彼の人、身業、口業、意業に惡不善を行わんに、身壞れ命終わらば惡處に墮ち、大焦熱大地獄中に在りて大苦惱を受く。）

とあり、この大焦熱地獄は、殺生、偷盜、邪行、飲酒、妄語、邪見を多く樂しみ行つた他に、淨行の戒律を保つ尼を、禁戒を破つても罪にならないと妄語によつて欺き、犯した罪人が墮ちる地獄であることが説かれている。

⑧ 阿鼻地獄

次に、阿鼻地獄をみることにする。

「無量寿経曼荼羅」地獄道の阿鼻地獄の絵相



隨天の阿鼻地獄の注釈は、(『開壇記』卷四 四一丁裏)

大火炎聚六有情墮在其餘四支梢顯四隅有_二銅狗_一眼如_レ電牙如_レ劒齒如_二刀山_一舌如_二鐵刺_一有大獄卒_二頭如_二羅刹_一口如_二夜叉_一眼目迸_二散鐵丸_一狗牙上出牙頭火流頭有_二牛頭_一一一牛頭有_レ角其角皆出_二猛火_一右有_二鐵幢_一幢頭火涌亦右有_レ釜沸銅涌出亦右有_二鐵蟒大蛇_一吐_レ毒吐_レ火有_レ觜觜頭火流

(大火炎聚あり。六有情、墮在す。其餘は、四支、稍々顯わる。四隅に銅狗有り。眼は電_{いなづま}の如し。牙は劒の如し。齒は刀山_{とうせん}の如し。舌は鐵刺の如し。大獄卒有り。頭は羅刹_{らせつ}の如し。口は夜叉の如し。眼目より鐵丸を迸_{ほとばし}り散らし、狗牙、上に出て、牙頭より火流る。頭に牛頭有り。一一の牛頭に角有り。其の角、皆、猛火を出す。右に鐵の幢有り。幢頭より、火、涌く。また右に釜有り。沸銅、涌出す。また右に鐵の蟒_{うわばみだいじゃ}大蛇有り。毒を吐き、火を吐く。觜、有り。觜頭より、火、流る。)

と四隅の銅狗や、蟒、大蛇、大獄卒等によつて、五逆罪を犯した六人の者が大火炎聚が燃え盛る中へ墮とされ、苛まれる様相が表されている。

その様子について、『往生要集』(浄土宗全書第十五卷四二頁b 03)では、

八阿鼻地獄者在_二大焦之下欲界最底之處_一(中略)

彼阿鼻城縱廣八萬由旬七重鐵城七層鐵網下有_二十八隔_一刀林周匝四角有_二四銅狗_一身長四十由旬眼如_レ電牙如_レ劒齒如_二刀山_一舌如_二鐵刺_一一切毛孔皆出_二猛火_一其烟臭惡世間無_レ喻有_二十八獄卒_一頭如_二羅刹_一口如_二夜叉_一有_二六十四眼_一迸_二散鐵丸_一鉤牙上出高四由旬牙頭火流_二滿阿鼻城_一頭上有_二八牛頭_一一一牛頭有_二十八角_一一一角頭皆出_二猛火_一又七重城内有_二七鐵幢_一幢頭火踊猶如_二沸泉_一其炎流迸亦滿_二城内_一四門闔上有_二八十釜_一沸銅涌出亦滿_二城内_一一一隔間有_二八萬四千鐵蟒大蛇_一吐_レ毒吐_レ火身滿_二城内_一其蛇哮吼如_二百千雷_一雨_二大鐵丸_一亦滿_二城内_一有_二五百億蟲_一有_二八萬四千觜_一觜頭火流如_レ雨而下此蟲下時獄火彌盛遍照_二八萬四千由旬_一又八萬億千苦中苦者集在_二此中_一

觀佛三昧
經略抄

(八に阿鼻地獄とは、大焦熱の下、欲界の最底の處に在り。(中略))

彼の阿鼻城は縦廣、八萬由旬なり。七重の鐵城あり。七層の鐵網あり。下に十八の隔有り。刀林しゅうそう周匝せり。四角に四つの銅の狗有り。身の長たけ四十由旬なり。眼は電の如く、牙は劍の如く、齒は刀の山の如く、舌は鐵の荊いばらの如し。一切の毛孔より皆猛火を出す。其の烟り臭惡なること世間に喩え無し。十八の獄卒有り。頭は羅刹の如く、口は夜叉の如し。六十四の眼有り、鐵丸を迸散ほうさんす。鉤まがれる牙は上に出て高さ四由旬。牙の頭より火流れて阿鼻城に滿てり。頭の上に八の牛の頭有り。一一の牛頭に十八の角有り。一一の角の頭より皆猛火を出す。また七重の城の内に七の鐵の幢有り。幢の頭に火の踊ること猶し沸く泉の如し。其の炎、流れ迸ほとばしりてまた城内に滿つ。四門の閬しきみの上に八十の釜有り。沸銅涌き出て、また城内に滿つ。一一の隔の間に八萬四千の鐵の蟒、大蛇有り。毒を吐き火を吐いて、身、城の内に滿つ。其の蛇、哮吼すること百千の雷の如し。大鐵丸を雨りてまた城の内に滿てり。五百億の蟲有り。八萬四千の觜くちばし有り。觜の頭より火流ること雨の如くして下る。此の蟲の下る時、獄火いよく彌盛いよいよんにして遍く八萬四千由旬を照らす。また八萬億千の苦の中の苦なる者、集りて此の中に在り。〈觀佛三昧經略抄。〉

と、まさに高田敬輔が描いた絵相は、『往生要集』に説かれる内容そのものを絵画表現したものである。

ちなみに、この阿鼻地獄に墮ちる者は、次のように（浄土宗全書第十五卷四三頁b13）説かれている。

此無間獄壽一中劫論俱舍造二五逆罪一撥二無因果一誹謗大乘二犯二四重一虛食三信施二者墮二此中一觀佛三昧經

（此の無間獄は壽一中劫なり。〈俱舍論。〉五逆罪を造り、因果を撥無し、大乘を誹謗し、四重を犯し、虚しく信施を食う者、此の中へ墮つ。〈觀佛三昧經。〉）

つまり、五逆罪を犯し、因果の道理を否定し、大乘を誹謗し、四重禁戒を破り、信施を食した者が墮ちる最悪の地獄である。

尚、『往生要集』にはさらに続けて、十六別處のうち「鐵野干食處」「黒肚處」「雨山聚處」「閻婆度處」の小地獄が説かれるが、高田敬輔の阿鼻地獄の絵相とは直接繋がらないので、ここでは省略する。

以上、高田敬輔の描いた八大地獄の絵相と、それを注釈した隨天の『大經曼陀羅開壇記』や引用されている『往生要集』の要文、さらに『往生要集』が根拠とした經典『正法念處經』、『阿毘達磨大毘婆沙論』、『阿毘達磨俱舍論』等を参照し、概略をまとめると次の表のようになる。

※八大地獄の概要

受ける主な業苦	犯した罪状	等活地獄	黒繩地獄	衆合地獄	叫喚地獄	大叫喚地獄	焦熱地獄	大焦熱地獄	阿鼻地獄
・互いに鋭い鉄の爪で殺戮し合う。 ・鉄杖、鉄棒で粉碎される。 ・猛火で焼かれる。 ・熱湯の釜で煮られる。	・殺生	・殺生	・殺生 ・偷盜	・殺生 ・偷盜 ・邪行	・殺生 ・偷盜 ・邪行 ・飲酒	・殺生 ・偷盜 ・邪行 ・飲酒 ・妄語	・殺生 ・偷盜 ・邪行 ・飲酒 ・妄語 ・邪見	・殺生 ・偷盜 ・邪行 ・飲酒 ・妄語 ・邪見 ・犯持戒人	・殺生 ・偷盜 ・邪行 ・飲酒 ・妄語 ・邪見 ・犯持戒人 ・殺母殺父 ・殺阿羅漢
・身体に墨付けされ熱鉄の斧や鋸で切り刻まれる。 ・大熱鑊の上に張られた鉄繩を綱渡りさせられる。									
・鉄山で押し潰される。 ・刀葉林の樹を美女の招きで上下させられ身肉を割かれる。 ・樹上に逆さ吊り、下は大火焰。									
・大猛火に鉄棒で追い立てられたり、投げ込まれる。 ・鉗子で口をこじ開けられ、洋銅を注がれる。									
・熱鉄の鋭い針で口、舌を貫かれる。 ・磔られて鉗子で舌を抜かれたり、眼を抉られる。									
・鉄串で貫かれ熱鉄の熬上で炙られる。 ・肉団子のようにな焼かれる。 ・熱鉄の楼や鑊に入れられ焼かれる。									
・五百由旬の高さに燃え上がった大火聚で焼き焦がされる。									
・八大地獄中最悪の地獄。 ・四隅の身の丈四十由旬の銅狗や大獄卒、鉄の大蛇の猛火や毒。五百億の蟲、八萬四千の嘴等に苛まれる。									

＊『大毘婆沙論』に説かれる地獄の構造（大正蔵二七卷八六五頁c26）

問地獄在何處。答多分在此瞻部洲下。云何安立答有説。從此洲下四萬踰繕那至無間地獄底。無間地獄縱廣高下各二萬踰繕那。次上一萬九千踰繕那中。安立餘七地獄。謂次上有極熱地獄。次上有熱地獄。次上有大嚙叫地獄。次上有嚙叫地獄。次上有衆合地獄。次上有黑繩地獄。次上有等活地獄。此七地獄一一縱廣萬踰繕那。次上餘有一千踰繕那五百踰繕那是白塼。五百踰繕那是泥。

有説。從此洲下四萬踰繕那至無間地獄。此無間地獄縱廣高下各二萬踰繕那。次上有三萬五千踰繕那安立餘七地獄。一一縱廣高下各五千踰繕那。次上餘有五千踰繕那。千踰繕那青色土。千踰繕那黃色土。千踰繕那赤色土。千踰繕那白色土。五百踰繕那白塼。五百踰繕那是泥。

有説。無間地獄在於中央。餘七地獄周圍迴圍遶。如今聚落圍遶大城。問若爾者。施設論説當云何通。如説瞻部洲周圍六千踰繕那。三踰繕那半。一一地獄其量廣大。

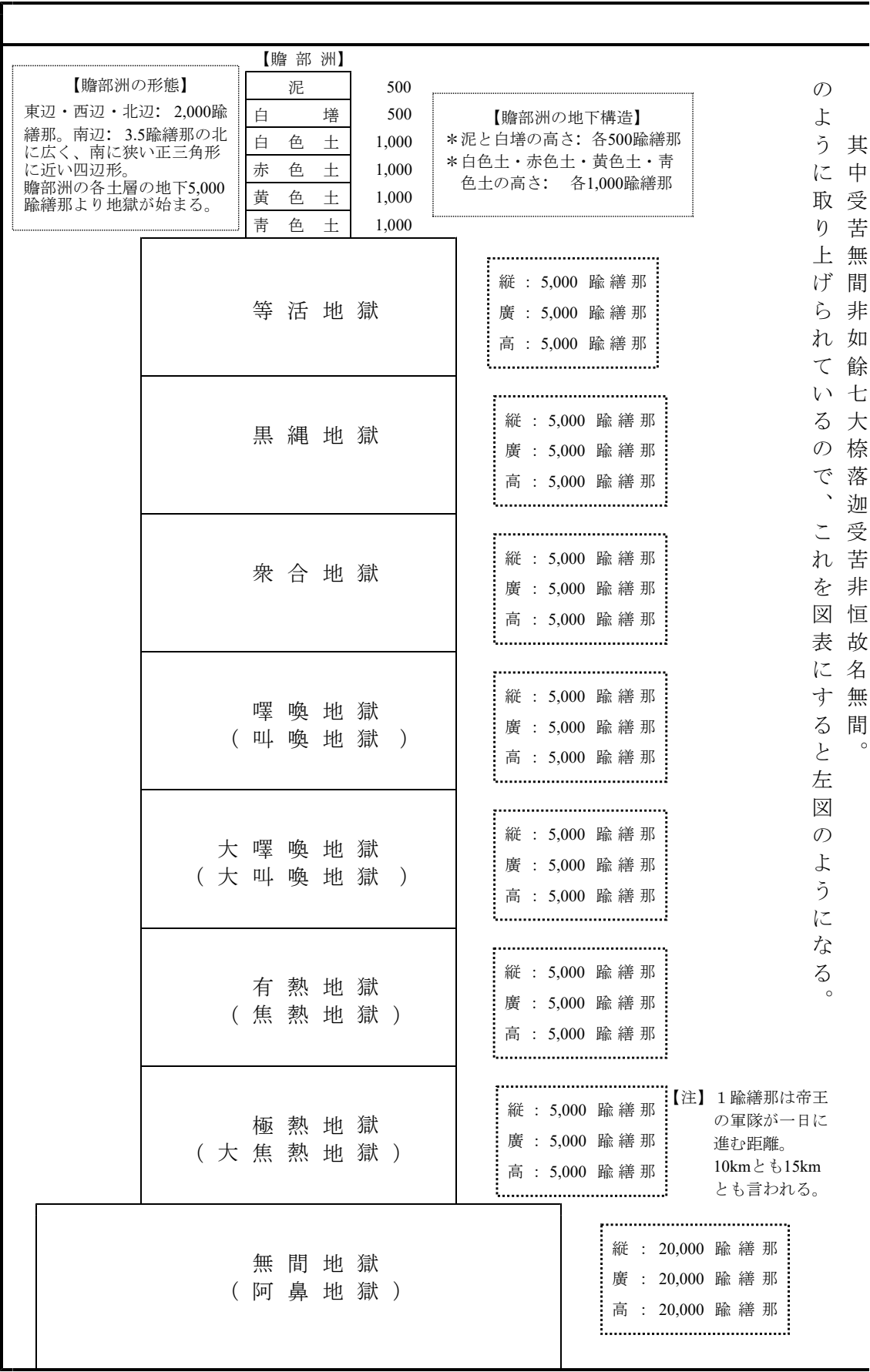
（問う。地獄は何處いずくに在りや。答う。多分、此の瞻部洲の下に在り。安くに云何いかに立つ。

答う。説有り。此の洲の下從り、四萬踰繕那至れば無間地獄の底あり。無間地獄の縱、廣、高下、各おの二萬踰繕那。次上に一萬九千踰繕那の中、安くに餘の七地獄を立つ。謂く次上に極熱地獄有り。次上に熱地獄有り。次上に大嚙叫地獄有り。次上に嚙叫地獄有り。次上に衆合地獄有り。次上に黑繩地獄有り。次上に等活地獄有り。此の七地獄の一一の縱、廣、萬踰繕那。次上餘の一千踰繕那有り。五百踰繕那、是れ白塼。五百踰繕那、是れ泥。

説有り。此の洲の下從り四萬踰繕那に無間地獄に至る。此の無間地獄の縱、廣、高下、各おの二萬踰繕那。次上に三萬五千踰繕那有り。安くに餘の七地獄を立つ。一一の縱、廣、高下、各おの五千踰繕那。次上に餘の五千踰繕那有り。千踰繕那是青色土。千踰繕那是黃色土。千踰繕那是赤色土。千踰繕那是白色土。五百踰繕那是白塼。五百踰繕那是是れ泥。

説有り。無間地獄は中央に在り。餘の七地獄は周圍迴して圍遶す。今、聚落の大城を圍遶する如し。問う若し爾れば、施設、論説、當に云何に通るべし。説の如く瞻部洲の周圍六千踰繕那。三踰繕那半。一一の地獄、其の量、廣大なり。）

尚、右の二説目が良くまとまり、『阿毘達磨俱舍論』卷第十一（大正蔵二九卷五八頁b03）にも、論曰。此瞻部洲下過二萬。有阿鼻旨大捺落迦。深廣同前。謂各二萬故。彼底去此四萬踰繕那。以於



以上みてきたように、原典の『無量寿経』には、直接的に「三塗無量苦惱」についての説示はみられない。しかし、四十八願の第一願、第二願にみられるように、筆頭に掲げられており、三惡趣の存在は重要である。その苦業から厭い離れることに關し、次のようなことを知ることができる。

＊ 三惡道へ堕ちないために現世をどう生きるか、窮めて重要な内容であることから、中台の極樂淨土と對照的に、あえて最下段に象徴的に絵画表現したと考えられる。

＊ 高田敬輔の三塗無量苦惱段の絵相は、『往生要集』の影響を多分に受けており、その『往生要集』が主な典拠とする、『正法念處經』の存在とその説示に裏付けられていることを知ることができる。

＊ 高田敬輔が描く八大地獄の標文は、源信が『往生要集』に引用するものがそのまま踏襲されている。その典拠とする『正法念處經』から、黒繩地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄・焦熱地獄・大焦熱地獄・阿鼻地獄の六地獄名、『俱舍論』からは、等活地獄・衆合地獄の二地獄名が引用されていることを知ることができる。

＊ 畜生道と餓鬼道はそれぞれ一つずつの絵相であるのに比し、地獄道は横長の一つの絵相に八大地獄の八種の様相が連続して描かれ、三塗無量苦惱段全体の約九割以上も占めて描かれていることから、三塗の中の地獄道を最も強調したかったと考えられる。

＊ 八大地獄の絵相は、『正法念處經』の説く一三六の地獄の存在の中から、その一部が表現されている。地獄道の絵相は、本来、閻浮提の地下へ八段階順次に深く堕ちるように描かれるべきであるが、本図は最下段の左縁（向かって右）から順に右縁へ、その罪業の深さによって責め苦の重度が増すように連続して描かれている。「無量寿経曼荼羅」全体の構成上、縦の深まりを横の拡がりに表現したものと考えられる。

等をあげることができ、『無量寿経』の経文には直接的に表れないものの、三惡趣の絵相の存在は、身に迫る苦業として一般衆生に受け入れられたと考えられる。

第三項 「所攝」の「勸善」

(一)

「此土修善」

「無量寿経曼荼羅」「所攝」「勸善」の「此土修善」の絵相



「此土修善」の絵相について、隨天は、（『開壇記』卷四 五十七丁裏）

能所六人能化向_レ右鋪_二坐具_一乘_二如意_一所化一比丘向_レ右展_レ具拱_レ手三近事男向_レ左合掌一近事女向_レ左拱_レ手
（能所六人あり。能化は右に向き坐具を鋪して如意を乗る。所化の一比丘は、右に向き具を展べ、手を拱す。
三の近事男は、左に向き、合掌す。一の近事女は左に向く。）

能化（教えを説く僧）、所化（教えを受ける者）の六人が描かれ、能化は坐具を鋪_レき、如意を乗_レっている。所化の一比丘は坐具を展べ、拱手し、三人の近事男（優婆塞）と一人の近事女（優婆夷）が描かれている。その六人の意味は、

能所俱六者示_二五福一智_一也智勝故當_二能化_一福劣故當_二所化_一所化男女隨_レ宜圖示爾

（能所、俱に六つのことは五福一智を示すなり。智は勝る故に能化に當る。福は劣る故に所化に當る。所化の男女は宜しきに随わしめ圖示するのみ。）

とあるように、五福一智を表し、智は勝るので能化のことで、福は劣るので所化のことを示すということである。そして、「此土修善」については、

此土娑婆界也修善如_レ下前來雖_レ有_二捨惡得戒金言_一今爲_下復滅_二惡痛燒_一而修_上持善法_一故佛語叮重問如_レ是修善是
何所期耶答經云奉_二事經戒_一受_二行道法_一無_レ所_二違失_一終得_二度世泥洹之道_一又云以_レ善攻_レ惡拔_二生死之苦_一令_下獲_二
五德_一昇_中無爲之安_上是爲_レ成_二往益_一也

（此土は娑婆界なり。修善は下の如く。前來、捨惡得戒の金言有りと雖も、今、復た惡痛燒を滅して善法を修持せんがために。故に佛語叮重なり。）

問う。是の如くの修善は是れ何の所期ぞや。

答う。經に云う。經戒を奉事し、道法を受行して遺失する所無ければ、終に度世泥洹の道を得んと。
また云わく。善を以って惡を攻め、生死の苦を抜く。五德を獲て無爲の安らぎに昇らしめんと。是れ往益

を成すがためなり。)

此土は娑婆界のこと、修善は悪を捨てて戒を得るといふ金言があるけれども、なかなか得難いものであることから、今またさらに悪・痛・焼を滅して善法を修持するようにと仏が丁寧に説いているのである。

さらに、修善はどういうことなのかという問いに対し、『無量寿経』にあるように、仏の教えや戒めを奉事し、覺りの道を求めることにつとめ、それに背くことが無ければ、終には生死の海を渡って浄土に往生し、覺りの境地に至ることができるのである。また、善によって悪を攻め立て、生死迷いの苦を取り除き、五善にともなう五徳を身に具えさせ、無為涅槃(覺り)の安らぎの境地に導こうとするものである。これは浄土往生の利益であると説かれている。

そして、「忍辱精進一心智慧轉相教化爲徳立善」については、

忍辱等者具文云布「恩施惠勿」犯「道禁」忍辱精進一心智慧布恩施惠檀度勿犯道禁戒度忍辱忍度精進進度一心禪度智慧智度問如「觀經説」三福者三世諸佛淨業正因引「聖勸」凡爲「淨土行」此經何故以「六度」爲「往因」耶答三福六度行相雖「異其法是同故鎮西師云六波羅蜜分爲「二前五名」福第六名」智此福智二嚴具足圓滿名爲「佛也」

(忍辱とは、具文に云う。恩を布き施恵し道禁を犯すこと勿れ。忍辱精進一心智慧と布施施恵は檀度なり。勿犯道禁は戒度なり。忍辱は忍度なり。精進は進度なり。一心は禪度なり。智慧は智度なり。

問う。觀經に説く如く三福は三世諸佛の淨業正因なり。聖を引きて凡を勵め淨土の行とす。此の經何故に六度を以て往因とするや。

答う。三福六度は行相は異なると雖も其の法は是れ同じ。故に鎮西師の云う。六波羅蜜を分ちて二とす。前の五を福と名づけ、第六を智と名づく。此の福智の二嚴、具足圓滿するを名づけて佛とす。)

忍辱とは、恩をあたえ、恵みを施し、仏の禁戒を犯さないことである。忍辱精進一心智慧と布施施恵は檀度(布施波羅蜜)、勿犯道禁は戒度(持戒波羅蜜)、忍辱は忍度(忍辱波羅蜜)、精進は進度(精進波羅蜜)、一心は禪

度（禪定波羅蜜）、智惠は智度（智慧波羅蜜）である。

そして、『觀經』には三福（世福・戒福・行福）が三世諸仏の淨業の正因であり、聖を引いて凡を励めて淨土の行としているのに、『無量壽經』はなぜ六度を以って往因とするのかという問いに対して、三福と六度は行相が異なるけれどもその法は同じであると答えている。だから、鎮西師（二祖聖光房弁長）は、六波羅蜜を二つに分けて、前の五つ（布施・持戒・忍辱・精進・禪定）を福、後の六番目を智（智慧）と名づけて福智の二嚴として、これを具足円満したのが仏であると述べている。

また六波羅蜜については、

亦六波羅蜜俱名_レ福俱名_レ智福即智智即福故也問禪師云以_二三福_一配_二當六度_一有_二二重_一前五名_レ福般若名_レ智_{重是}
亦六度惣名_レ福亦名_レ智_{重是}依_レ此或攝_二萬行於三福_一或攝_二於六度_一此即觀大兩經且對_二隨他機_一說_二諸行往生_一若
約_二隨自機_一偏勸_二念佛_一也問三經所詮專在_二念佛_一然於_二所捨行相_一三經區別何耶答隨_二機不同_一所說小異故宗家釋
云佛遣_レ捨者即捨佛遣_レ行者即行佛遣_レ空處即是空名_二隨順佛教隨順佛意_一是名_二隨順佛願_一是名_二眞佛弟子_一
（また六波羅蜜俱に福と名づけ、俱に智と名づく。福即ち智、智即ち福なるが故なり。

問禪師云わく。三福を以って六度に配當するに、二重有り。前五を福と名づけ般若を智と名づく（是れ一重）。また六度を惣じて福と名づけ、また智と名づく（是れ二重）。此に依るに或るは萬行を三福に攝し、或るは六度に攝す。此れ即ち觀大兩經且く隨他機に對して諸行往生を説くなり。若し隨自機に約せば、偏に念佛を勸むなり。

問う。三經の所詮、専ら念佛に在り。然るに所捨行相に於いて、三經區別なるは何ぞや。

答う。機の不同に隨いて所說小異なり。故に宗家釋して云わく。佛の捨て遣りたまうは即ち捨て、佛の行ぜ遣りしたまうは即ち行じ、佛の空を遣りしたまう處は即ち空る。是れを隨順佛教、隨順佛意と名づく。是れを隨順佛願と名づく。是れを眞佛弟子と名づけんと。）

六波羅蜜は俱に福とも名づけたり、俱に智とも名づけられるもので、福は智、智は福であるからである。罽禪師（七祖聖罔）は、三福を六度に配当するには二重の意味があり、一つは前の五つを福、般若波羅蜜（智慧波羅蜜）を智とし、二つ目は六度を総じて福としたり、智とするものである。これによれば、万行を三福、あるいは六度ということである。このことは、『觀經』『無量壽經』の両經は、隨他の機に従えば諸行往生を説くもので、隨自の機に従えば偏に念仏を勧めることなのである。

三經は、所謂、念仏である。けれども所捨の行相について三經がそれぞれ異なるのはなぜかという問いについて、それは、機に応じて所説が多少異なるだけである。

善導は、このことについて、『觀經散善義』卷第四（浄土宗全書第二卷五六頁）で次のように、

佛遣捨者即捨佛遣行者即行佛遣去處即去是名隨順佛教隨順佛意是名隨順佛願是名眞佛弟子

（佛の捨て遣めたまうものをば即ち捨て、佛の行ぜ遣めたまうものをば即ち行じ、佛の去ら遣めたまう處をば即ち去れ。是れを佛教に隨順し、佛意に隨順すと名づく。是れを佛願に隨順すと名づけ、是れを眞の佛弟子と名づく。）

と説き、仏が捨てよというものは捨て、行ぜよというものは行じ、去れというものは去ることを佛教隨順、佛意隨順、佛願隨順といい、眞の仏弟子であるというのである。

さらに記主禪師（三祖記主禪師良忠）について、

記主禪師云三經所說大同小異如大經中捨三毒及五惡令行三善五戒又捨諸行令行念佛即三輩中一向專念是也如觀經中捨九方淨土偏樂西方又捨亂想及以小心破戒不孝十惡五逆行定善及以大乘五八等戒敬上慈下廻心念佛又捨定散唯勸念佛付屬文云持無量壽佛名是也如彌陀經中捨小善根專行念佛此乃隨所化機宜致使其同異也

（記主禪師云わく。三經の所説、大同小異なり。大經中の如くは三毒及び五惡を捨て、三善五戒を行ぜ令む。

また諸行を捨て、念佛を行ぜ令む。即ち三輩中の一向専念、是れなり。

觀經の中の如きは、九方の淨土を捨て、偏に西方を樂しむ。また亂想及び小心、破戒、不孝、十惡、五逆を捨て、定善及び大乘五八等の戒、敬上慈下、廻心念佛を行じ、また定散を捨ててただ念佛を勸む。付屬の文に持無量壽佛名と云う是れなり。

彌陀經の中の如きは、小善根を捨てて専らに念佛を行ぜんと。此れ乃ち所化の機、宜しきに随いて、其の同異有りて使用することを致すなり。）

記主禪師がいうには、三經の所説は大同小異である。

『無量壽經』の場合、三毒や五惡を捨てて三善五戒を行じ、また諸行を捨てて念仏を行じさせていて、例えば、三輩往生にある一向専念がこれである。

『觀經』の場合は、九方の淨土を捨て、西方淨土を觀想させたのである。また、亂想、小心、破戒、不孝、十惡、五逆を捨て、定善及び大乘の五戒（不殺生戒・不偷盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒）、八戒（不殺生戒・不偷盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不兩舌戒・不惡口戒・不綺語戒・不邪命戒）、敬上慈下、廻心念佛を行じ、そして、定散を捨てて、ただ念佛を勧めているのである。付屬の文に「持無量壽佛名」とあるのがこれである。『阿弥陀經』には、少善根を捨てて専ら念仏を行ずることを勧めており、これは、所化の機に合わせているのであり、同異があつても差し支えないことであると説かれている。

さて、右のような隨天の注釈をみたが、同じように良照義山の注釈を『無量壽經隨聞講録』（淨土宗全書第十四卷五〇二頁）でみると、

忍辱等者忍辱精進進度一心禪度心住_二一境_一不_二散亂_一故智惠智度六波羅蜜通_二自他_一故以爲_二自行_一今云上來舉_二六度_一勸_レ之然今時凡夫勸_二五善_一有_二一分道理_一勸_二六波羅蜜_一凡夫何堪_レ修_レ之乎言時凡六度行所_レ括_二萬善_一行之本故凡夫十信十住十行十回向十地皆悉修_レ之事也但隨_レ位隨_レ分可_レ有_二其品_一譬如_下綾羅錦繡覆_レ形絹紬覆_レ形木

綿覆^レ形薦^レ筵覆^ト形初地已上菩薩六度如^レ著錦三賢如^レ著^二絹紬^一十信如^レ著^二木綿^一凡夫六度如^レ纏^二筵薦^一貧貧人著^二檻樓^一思^二著物^一也然佛道修行スル人隨^二分ソレソレ^一ニ可^レ有^二六度^一所謂誰誰有^二出離生死志^一自一分六度行スルモノ也但シ一向專修行者強請求ヨト云義ニハ非今經文自然六度ヲ説此義世間ニテ多ク人誤事也能應^レ思^レ之爾稱名行者自然六度有モノ也其由見^二貧窮乞人^一憐^レ之施^二一錢^一或亦他教^二稱名行^一即法施ニテ此檀波羅蜜念佛行人相應止惡此戒波羅蜜不^レ被妨^二違緣^一不^レ破^二壞別解別行異學異見^一等忍辱波羅蜜行^二日課三萬六萬^一不^二懈怠^一精進波羅蜜住^二一心一境^一一心稱名此等德定一分禪波羅蜜知^二因果^一思^二出離^一生^二厭欣心^一等智波羅蜜皆是分相應六度也淨土行人不^レ可^二謬解^一宜^二其思^一之

念佛行六度攝不攝事西宗
要五卷終同口筆下冊八紙

(忍辱とは、忍辱精進は進度、一心は禪度、心、一境に住して散亂せざるが故に智慧は智度なり。

六波羅蜜は自他に通ず。故に以つて自行とす。今、云う。上來、六度を擧げて之れを勧む。然るに今時の凡夫、五善を勧むることは一分の道理も有り。六波羅蜜を勧むること、凡夫、何ぞ之れを修するに堪えんやと。言の時、凡そ六度の行は萬善を括る所の行の本が故に、凡夫にも十信にも十住にも十行にも十回向にも十地にも、皆、悉く之れを修する事なり。但し、位に隨い、分に隨い、其の品、有るべし。

譬えば綾羅錦繡にて形を覆い、絹紬にて形を覆い、木綿にて形を覆い、薦^{こも}筵^{むしろ}にて形を覆う如し。

初地已上の菩薩の六度は、錦を著^きるが如し。三賢は絹紬を著るが如し。十信は木綿を著るが如し。凡夫の六度は筵薦を纏^{まと}うがごとし。貧人は檻樓^{ぼろ}を著ても著る物と思うなり。

然るに佛道を修行する人は、分に隨いてそれぞれに六度有るべし。所謂、誰も誰も出離生死の志有れば、自ら一分の六度は行ずるものなり。但し、一向專修の行者は強いて請い求めよと云う義にはあらず。

今、經文は自然の六度を説けり。此の義、世間にて多くの人の誤れる事なり。能く能く應に之れを思うべし。爾るに稱名の行者も、自然の六度は有るものなり。其の由は貧窮乞人を見て之れを憐れみ、一錢を施し、或るはまた他に稱名の行を教えるは、即ち法施にて此れ檀波羅蜜なり。念佛の行人も相應に止惡する

は、此れ戒波羅蜜なり。違縁に妨げられず。別解、別行、異學、異見に破壊せられずとは、忍辱波羅蜜なり。日課に三萬六萬を行じて懈怠せずは、精進波羅蜜なり。心、一境に住して、一心に稱名するは、此れとは徳定の一分なれば、禪波羅蜜なり。因果を知り、出離を思い、厭欣心を生ずるとは、智波羅蜜なり。皆、是れ分相應の六度なり。浄土の行人謬解すべからず。其れ此を思う宜しく（念佛の行、六度攝不攝の事。西宗要五卷終、同口筆下卅八紙。）

と右に述べるように、これまで六度を挙げて勧めるものの、凡夫にとっては五善を勧め、六波羅蜜を勧めるものの、それを修することは耐えられないことなのである。例えば、その修行の内容や身分やその品格によつて、その程度は、綾羅錦繡で体裁を保ち、絹紬で形を覆い、木綿で形を覆い、薦^{こも}_{むしろ}にて形を覆うようなものである。これは、初地以上の菩薩の六度は、錦を著^きるようなもので、三賢は絹紬を著、十信は木綿を、そして、凡夫の六度は筵薦^{まど}を纏^{まと}うようなものであり、貧人はたとえ檻樓^{ぼろ}を著るようなものでもそれを当たり前と思うものである。だから、仏道を修行するものは、その分に随つて、それぞれに合わせた六度を修すべきである。所謂、誰でも出離生死の志があれば、自ら少しでも六度を行じるものである。但し、一向専修の行者にだけ強いて求めるといふわけでは無いのである。

今、經文は自然の六度を説いているのである。困窮している者を見て憐れみ、一錢を施し、或いは、称名の行を教えるのは法施であり、檀波羅蜜である。念仏の行をする人もそれ相應に止惡することは、戒波羅蜜である。違縁に妨げられず、別解、別行、異學、異見に破壊されないのは、忍辱波羅蜜であり、日課に三萬六萬を行じて懈怠ないのは、精進波羅蜜である。心を一境に住して、一心に稱名するのは、此れは徳定の一分であるけれども、禪波羅蜜であり、因果を知り、出離を思い、厭欣心を生ずることは、智波羅蜜ということである。

皆、是れ分相應の六度である。浄土の行人は謬解してはいけない。これは宜しく心得なければならぬことであると述べている。

そして、「轉相教化」について、

轉相教化者六度通_二自他_一故以_二六度_一亦教_二化他_一也

（轉相教化とは、六度は自他に通ずるが故に六度を以ってまた他を教化すなり。）

六度は、自他に通ずるからこそ、六度を以って、他に教化しなければならないものであるということ。

また、「爲徳立善」については、

爲徳立善者徳五徳翻_二五惡_一爲_レ徳卽約_二現在世_一言_レ之善五善卽約_二未來_一言_レ之爾五善尙未來有故今取_二出離果_一方寄セテ云也科正比較者此對_二穢土_一比較文也故上云_二於是_一心付見ベシ

（爲徳立善とは、徳は五徳なり。五惡を翻して徳とす。卽ち現在世に約して之れを言う。善は五善なり。

卽ち未來に約して之れを言う。爾るに五善なお未來まで有る故に、今、出離の果を取る方に寄せて云うなり。科の正比較とは、此れは穢土に對し比較する文なり。故に上に是と云う。心を付けて見るべし。）

徳は五徳であり、五惡を翻して徳とするものである。これを現在世に約していうのであり、善は五善である。

また、未來についてもこれをいうのであるから、五善は未來まで有るのである。だから、今、出離の果を取る方に寄せて云うことであり、科（『科図 無量寿經』にある「正比較」というのは、此れは穢土に對して比較する文である。だから上に是と云うのである。気を付けて見るべきであると義山は述べている。

『無量寿經』のこの部分の意図するところをまとめていうならば、広く徳本を植えて恩を弘め、恵みを施し、道禁を犯してはならない。忍辱・精進・一心・智慧等の六波羅蜜の行につとめ、互いに教化しあい、功德を積んで善に励むことである。そして、心を正しくして邪惡な思いを捨て去り、一日一夜の八齋戒を修し、清淨の心身を保つならば、その功德は、無量寿仏の世界で百年の間、善行に励む功德よりも勝れているということができるのであると説かれている。

(二)

「天下和順」

「無量寿経曼荼羅」「所攝」「勸善」の「天下和順」の絵相



「天下和順」の絵相は、

初日輝^ニ東天^一織月照^ニ西海^一

是天下和順
日月清明

年登穀熟百姓相樂安^レ業力^レ田有^ニ一莊家^一奴婢歌樂豐^ニ收秋獲^一

是國

庭上置

酒老父銜^レ杯前陳^ニ佳肴^一老婦室內娛樂夫婦相和嬰兒在^レ側玩^ニ弄竹馬^一

是長安

武士二人一囊^レ弓一筒^レ矢^レ無用^{是兵戈}有^ニ一

廈屋^一右掛^ニ佛像^一焚香供養前有^ニ一僧^一誦經主人几上書寫家士三人坐^ニ于階下^一一人合掌二人相向揖讓^{是崇德}宅前

一人放^ニ籠鳥^一鳥向^レ空翱翔^{是興}

官吏二人左右相對曲躬謙讓^{是務修禮讓}

（初めに、日が東天に輝き、織月^{せんげつ}が西海を照らす（是れ天下和順日月清明）。年登り、穀、熟し、百姓相樂

しみて業を安じ田を力^{つと}む。一莊家有り。奴婢、歌樂して秋獲を豊收す（是れ國豊）。庭上に置酒し、老父、

杯を銜^{ふく}み前に佳肴を陳ぶ。老婦、室内に娛樂す。夫婦相い和し、嬰兒側に在りて竹馬を玩弄す（是れ民安）。

武士二人あり。一は弓を囊し、一は矢を筒にす（是れ兵戈無用）。一廈屋有り。右に佛像を掛け、焚香供

養す。前に一僧有りて誦經す。主人、几上に書寫す。家士三人、階下に坐す。一人は合掌し、二人は相い

向きて揖讓^{ゆうじょう}す（是れ崇德）。宅前に一人、籠鳥を放つ。鳥、空に向きて翱翔す（是れ興仁）官吏二人、

左右に相い對して曲躬謙讓す（是れ務修禮讓）。）

と隨天が注釈する絵相は、その標文が示しているように、（天下和順日月清明）は、日が東天に輝き、三日月が

西海を照らし、（國豊民安）は、平和な時が流れ、穀物が熟して百姓が楽しんで田の仕事に勤しみ、ある莊家で

は、働く奴婢達が歌いながら豊かな収穫を喜び、老いた父親は庭先で佳い肴で酒を飲み、老いた母親は室内で寛

いでいる。夫婦は相和し、その傍で子供が竹馬に興じている。（兵戈無用）は、二人の武士がいて、一人は弓を囊^{ふくろ}

にしまい、もう一人は矢を筒に戻し、戦の必要が無いことを表している。

さらに、（崇德）については、屋敷の中に仏像の掛け幅を掛け、焚香供養し、その脇で一人の僧が誦經してい

る。主人は几上で書寫し、家士が三人、階下で坐し、一人は合掌、二人は恭しく拱手してへりくだっている。

（興仁）は家の前で一人の男が籠の鳥を放っている。鳥は空に翱翔^{こうしょう}している。（務修禮讓）は、官吏が二人、

左右に相い対して曲^{きよく}躬^{きゆう}してお互いに謙讓している様相を表し、おおよそ六つの場面に分けられ、平和で穏やかな、民は豊かな稔りを喜び安らぎ、兵士は戦が無く、家の中では、仏を供養して誦経し、籠の鳥を放生し、官吏達も互いに礼をつくして謙讓の念を以て接している、実に平穩な世を送っている絵相である。

このような平穩な世を送られるのは、弥陀の護念の徳であることが、次に述べられるのである。

「天下和順」「天下和順日月清明風雨以時國豐民安兵弋無用崇德興仁務修禮讓」の標文について、

弋應^レ作^レ 戈天下和順等者念佛行者現生蒙^二護念益^一也問依^二經說相^一 苦心誨諭^{至乃} 務修禮讓者明^二釋迦現在利益^一何爲^二彌陀護念德^一 耶答釋迦說化所^レ及念佛之人獲^二如^レ斯益^一 此即彌陀有^二現生護念増上縁^一而令^三修者得^二治國安民穰災延壽^一也故鼓恩聲經云鬼魅毒藥刀杖水火咒咀怨敵一切所^レ不^レ能^レ侵

(弋は應に戈に作すべし。天下和順とは、念佛の行者、現生に護念益を蒙るなり。

問う。經の説相に依るに、苦心誨諭ないし務修禮讓は、釋迦現在の利益を明かす。何ぞ彌陀護念の徳と爲すや。

答う。釋迦説化の及ぶ所、念佛の人、斯の益の如くの獲^える。此即ち彌陀に現生護念の増上縁有りて修者をして治國安民穰災延壽を得せ令めるなり。故に鼓恩聲經に云う。鬼魅、毒藥、刀杖、水火、咒咀、怨敵、一切侵すこと能わざる所なり。)

とあるように、(天下和順)とは、念佛の行者が、現生に護念益を蒙るものであるというが、經には、苦心^{ねんごう}に誨諭^{けゆ}しから務修禮讓までは、釈迦現在の利益を明かすものであるのに、どうして弥陀の護念の徳とするのかという問いに対して、釈迦が説化するのは、念佛の人が益を獲^えることをいうのである。このことは、弥陀の現生護念の増上縁があるから、念仏の修者が治國安民穰災延壽を得ることになるということなので述べられている。

さらに、『觀念法門』を引いて、(『開壇記』卷四 六十一丁表)

觀念法門云稱念阿彌陀佛願生淨土者現生即得延年轉壽不遭九橫之難彼佛心光常照是人攝護不捨總不論照攝餘雜業行者此亦是現生護念増上縁專念西方阿彌陀佛願往生者我從今已常使二十五菩薩影護行者不令惡鬼惡神惱亂行者日夜常得安穩此亦是現生護念増上縁護念經意者亦不令諸惡鬼神得便亦無橫病横死横有厄難一切災障自然消散（中略）

（觀念法門に云う。阿彌陀佛を稱念して淨土に生ぜんと願する者は、現生に即ち延年轉壽を得て、九横の難に遭わず。彼の佛の心光、常に是の人を照らして攝護して捨てたまわず。總じて餘の雜業の行者を照攝することは論ぜず。此れまた是れ現生護念の増上縁なり。専ら西方阿彌陀佛を念じて往生を願する者は、我、今従り後、常に二十五菩薩をして行者を影護せしめ、惡鬼惡神をして行者を惱亂せ令めず。日夜常に安穩を得ん。此れまた是れ現生護念増上縁なり。護念經の意は、また諸惡鬼神をして便るを得せ令めず、また横病横死、横に厄難有ること無く、一切の災障自然に消散す。）（中略）

のように、阿彌陀仏を称念して淨土を願生する者は、現生に延年轉壽を得、九横の難に遭わないのである。なぜなら、仏の心光は、常にこの人を照らして摂護して捨てたまわず、他の雜業の行者を照摂することとは論じていないのである。これが現生護念の増上縁である。また、専ら西方阿彌陀仏を念じて往生を願うならば、私は今から後、常に二十五菩薩を影護させ、惡鬼惡神が悩亂することが無いように常に安穩が得られるようにする。これも現生護念増上縁である。

護念經の意は、また諸々の惡鬼神がして便ることをさせず、また横病横死や不意に厄難がないようにし、さらに、一切の災障が自然に消散することである。

そして、標文に取り上げられている句について、

今此標文初句總標私謂天下和順國豐民安兵戈無用崇德興仁務修禮讓四句順語即七福即生也何者天下和順三綱禮備則自有國家豐饒萬民安泰崇德興仁務修禮讓之德日月清明風雨以時灾厲不起兵戈無用四句反語乃七難即

滅也何者日月清明則自無^二星宿變恠日月薄蝕難^一風雨以時則自無^二非時過時難^一灾厲不起則自無^二人衆疾疫難^一兵戈無用則自無^二他國侵逼自界叛逆難^一也七種灾難如藥師經仁王經等（中略）

（今、此の標文の初句は、總標。私に謂わく。天下和順國豐民安兵戈無用崇德興仁務修禮讓の四句は順語にして、即ち七福即生なり。何となれば、天下和順して三綱禮備するずんば、則ち自ら國家豐饒萬民安泰崇德興仁務修禮讓之徳有るなり。日月清明風雨以時灾厲不起兵戈無用の四句は反語にして、乃ち七難即滅なり。何となれば、日月清明なれば、則ち自ら星宿變恠と日月薄蝕の難無く、風雨以時なれば、則ち自ら非時と過時との難無く、灾厲不起なれば、則ち自ら人衆疾疫の難無し。兵戈無用なれば、則ち自ら他國侵逼と自界叛逆との難無きなり（七種の灾難、藥師經仁王經等の如し）。（中略）

初句の（天下和順）は、總標であり、以下の句は、次のように順語と反語の関係になっていると注釈を加えている。

* 天下和順 國豐民安 崇德興仁 務修禮讓（順語）	……	七福即生
⇔		
* 日月清明 風雨以時 灾厲不起 兵戈無用（反語）	……	七難即滅

以上のような隨天の注釈と並んで、良照義山は「天下和順日月清明風雨以時國豐民安兵戈無用崇德興仁務修禮讓」について、その著『無量壽經隨聞講録』（浄土宗全書第十四卷五〇五頁）で、次のような注釈をしている。

天下和順等者君臣父子夫婦三綱有^二禮儀^一故覺經四卷十紙曰君承奉行教化爲^二善齋戒精思淨^一自居^二位嚴慄教敕率^一衆爲^二善奉^一行道禁^二令言令^一正臣事^二其君^一忠直受^二令不^一敢違負^一父子言令孝順承受兄弟夫婦宗親朋友上下相令順^二言和^一理尊卑大小轉相敬事以^二禮如^一義不^二相違負^一孝經曰天下和平災害不^二生禍亂不^一起故明王之以^二孝治^一天下^二如^一此詩曰有^二學^一德行^一四國順^一之

（天下和順とは、君臣、父子、夫婦の三綱の禮儀が有る故に覺經（四卷十一紙）に曰わく。君、承りて奉行し、改め化して善を爲し、齋戒精思し自らを淨め、位に居て嚴慄に教きょう 敕よくし、衆を率いて善を爲し、道禁を奉行し、令言正しから令めれば、其の君に臣事して、忠直に令を受けて敢えて違負せず。父子、言い令め、孝順に承受し、兄弟、夫婦、宗親、朋友、上下相い令し、言を順じ理に和し、尊卑大小、轉た相い敬事するに禮を以つてし、義の如くにして相い違負せずと。

孝經に曰わく。天下和平にして災害生ぜず。禍亂起こらず。故に明王の孝を以つて天下を治めること此の如し。詩に曰わく。德行を學ぶこと有れば、四國之れに順ずと。）

日月清明等者此明^三國無^二七難^一藥師本願經^{紙十一}說^二七難^一曰民衆疾疫難他方侵逼難自界反逆難星宿變怪難日月薄蝕難非時風雨難過時不雨難^{云云}日月清明者無^二第五難^一也此中攝^レ無^二第四難^一

（日月清明とは、此れ國に七難無きことを明かす。藥師本願經（十一紙）に七難を説いて曰わく。民衆疾疫の難、他方侵逼の難、自界反逆の難、星宿變怪の難、日月薄蝕の難、非時風雨の難、過時不雨の難と（云云）。

日月清明とは、第五の難無きなり。此の中に第四難無きことを攝^{おさ}む。）

風雨以時者無^二六七難^一也

（風雨以時とは、六七の難無きなり。）

風雨以時者周禮春官保章氏以^二十有二風^一察^二天地之和^一管衡曰太平之世五日一風十日一雨風不^レ鳴條雨不^レ破^レ

塊左傳^{公昭}曰春無^二淒風^一秋無^二苦雨^一京房易傳太平之時凡歲三十六雨此休徵時若^レ之應^{應有^二風^一七^二十二^一歲}今云日月清明風雨以

時四時應^レ節夏熱冬寒其序不^レ亂五穀成就則清明也總日月星國有^レ災則必生^二種種怪異^一無則清明也如^下智者大師

金光明文句
七本廿五紙
言^中五日一風十日一雨老者擊^レ壤小者騎^中竹馬^上者實日月清明風雨以時耳

（風雨以時とは、周禮の春官に、保章氏、十有二風を以つて天地の和を察す。管衡曰わく。太平の世には、

五日一風、十日一雨、風、條を鳴らさず。雨、塊を破らず。

左傳（昭公）に曰わく。春、凄風無く、秋、苦雨無し。京房易傳太平の時は、凡そ歳ごとに三十六雨あり。此れ休徴の時、之れ若し應ず（應に一歳に七十二風有るべし）。

今、云う。日月清明風雨以時とは、四時節に應じ、夏熱、冬寒、其の序、亂れず。五穀成就するは、則ち清明なり。總じて日月星の如き、國に災い有るときは、則ち必ず種種の怪異を生ず。無きときは則ち清明なり。智者大師（金光明文句七本廿五紙）、五日一風、十日一雨、老いは壤を撃ち、小は竹馬に騎ると言うが如きは、實に日月清明風雨以時なるのみ。）

風雨以時というのは、周礼の春官には、平和な太平の世には、十日に二度ほどの風が吹くもので、あるいは、五日に一風、十日に一雨、風は篠垣を鳴らさず、雨は堤の土塊を破らない程度のものであること。

また、左伝には、春には凄く強い風は無く、秋は苦しむような長雨も無く、およそ一年に三十六回、ほど良い雨が降り、七十二回の風が吹くのが良いとある。

今、經にいう日月清明風雨以時は、四季に應じて、夏は暑く、冬は寒く、その季節の彩りが乱れないことであり、それが五穀成就することにつながるので、清明というのである。おおよそ日、月、星の如くのようなもので、何か国に災いがある時は、必ず様々な怪奇な現象が起こるものであり、それが無いことが清明である。

天台智顗大師も、同じように、五日一風、十日一雨、老いた者は田畑を打ち、幼い者は竹馬に騎って遊ぶようなことを日月清明風雨以時と云うと記している。

そして、災厲不起についても、

災厲者説文並廣韻天火曰「災左傳亦同弘決五云洪範五行傳云凡有「害者皆名爲「災」上巳 彙災者禍害厲者左傳云厲惡鬼也興云疫厲也」上巳 釋名云病氣流行中」人也唐書「傳張巡 巡曰死當下爲「厲鬼」以殺賊

（災厲とは、説文並びに廣韻に天火を災いと曰わく。左傳また同じ。弘決の五に云う。洪範五行傳に云う。

凡そ害有るもの、皆、名づけて災とす（已上）。彙に災は禍害なり。

厲とは、左傳に云う。厲は惡鬼なり。興の云う疫厲なり（已上彙に同じ）。釋名に云う。病氣流行して人に中るなり。唐書（張巡傳）に巡が曰わく。死して當に厲鬼となりて以って賊を殺すべし。

災厲さいれいというのは、天災、火災などの害あるもの全てが災であり、厲れい（わざわい）は惡鬼であり、病氣が流行して人にあたる疫病のようなものであること。

兵戈無用については、

兵戈無用者漢吾丘壽王文體明辯 廿七卷 曰古者作二五兵一非二以相害一以禁レ暴討レ邪也安居則以制二猛獸一而備二非常一有事則

以設二守衛一而施二行陣一上巳 五兵者刀弓劒弩戟是也或弓殳戈戟（中略）

（兵戈無用とは、漢の吾丘壽王（文體明辯廿七卷）に曰わく。古いにしえは五兵を作して以って相い害するに非ず。

以って暴を禁じ、邪を討つなり。安居するときには則ち以って、猛獸を制し、非常に備え、事あるときは則ち以って守衛を設けて行陣に施すと（已上）。五兵とは、刀、弓、劒、弩、戟、是れなり。或るは、弓、殳、矛、戈、戟。（中略）

昔は、五兵（刀、弓、劒、弩おおゆみ、戟げきほこ（台座に横に弓を取り付け引き金を引く）、戟げきほこ（矛と戈の両方の機能を具えた穂先）または弓、殳しゆ（棒状の戈）、矛ほこ（両刃の劒状の穂先）、戈ほこ（ピッケル状の穂先）、戟げきほこ）を作り、互いに害する武器では無く、邪を討つ

ので、普段は猛獸を制し、非常時に備え、何か事ある時は守るためのものであったこと。

そして、崇徳については、

崇徳者論語顏淵曰子張問二崇一徳辯レ惑子曰主二忠信一徙レ義崇レ徳也注主忠信則本立徙義則日新（已上） 今則興レ仁修レ禮言爲二崇徳一

（崇徳とは、論語の顏淵に曰わく。子張、徳を崇たかうし惑を辯ぜんことを問う。子、曰わく。忠信を主とし、義に徙うつるは徳を崇するなり（注に忠信に主する。則は本立つ義に徙る。則は日新なり（已上））。今は、則ち仁を興こし禮を修するを言いて崇徳とす。）

論語の顔淵にいうように、徳を高くして惑わない、つまり、仁を興して礼を修することをいうのであること。興仁は、

興仁者又曰顔淵問「仁子曰克己復禮爲仁一日克己復禮天下歸仁焉」（中略）

（興仁とは、また曰わく。顔淵、仁を問う。子、曰わく。己に克って禮に復るを仁とす。一日、己に克って禮に復すれば、天下、仁に歸す。（中略））

自らを制して、礼に復かえることを仁というが、一日一日を自ら制し、礼に復えれば、天下も仁によつて治まることになる。

そして、務修禮讓については、

務修禮讓者禮讓言「禮儀穰推」讓者彙謙也退也先「人後」己謂「之讓」孟子註讓推以與「人也」論語里仁曰子曰能以「

禮讓」爲「國乎何有」下能以「禮讓」爲「國如「禮何」註讓者禮之實也何有言不難也言有禮之實以爲國則何難之有夫仁者本心之全徳而愛之理也禮者天理節文而

心之敬也讓者禮之實所謂恭敬辭讓之心也孟子曰辭讓之心禮之端也今云禮謂貴讓讓謂推「賢之言也」意鈔

上來崇徳興仁務修禮讓國有「道貌如」斯其功偏是佛遊履之徳也隨「順此經」亦有「此徳」誠天下人民不「作」五惡「

何差「堯舜之代」我今於「五常中」舉「仁禮」二攝餘即是佛家五善而已（以下略）

（務修禮讓とは、禮讓とは禮儀讓推を言う。讓とは彙に謙なり。退なり。人を先んじて己を後にする。之れを讓と謂う。）

孟子の註に、讓は推して以つて人に與たうなり。論語の里仁に曰わく。子の曰わく。能く禮讓を以つて國を爲さしめば何んが有らん。能く禮讓を以つて國を爲さしめずんば、禮をいかんが如く（註に讓は禮の實なり。何か有らんとは、こころは難しからず。こころは禮の實有りて以つて國を爲さしめば、則ち何の難しきこと之れ有らん）。夫れ仁は、本心の全徳にして愛の理なり。禮とは、天理節文にして心の敬なり。讓とは、禮の實、所謂る恭敬辭讓の心なり。

孟子曰わく。辭讓の心は、禮の端なり。今、云う禮は、謂わく貴みの讓なり。讓は謂わく賢を推すの言なり（鈔の意）。

上來、崇徳興仁務修禮讓とは、國に道有るの貌なり。斯の如く其の功、偏に是れ佛の遊履^{ゆうり}の徳なり。

此の經に隨順せば、また此の徳有るべし。誠に天下の人民、五惡を作らずんば、何ぞ堯^{ぎょう}舜^{しゆん}の代に差あらんや。我、今、五常の中に於いて仁と禮との二つを擧げて餘を攝す。即ち是れ佛家の五善なるのみ。（以下略）

とあるように、務修禮讓とは、礼儀を重んじ、人を先にして自分は後からするように謙讓の美德に務めることにより、国は平和になり、そして、孟子もいうように、讓は貴いものであり賢さをあらわすものなのである。

また、これまで崇徳興仁務修禮讓というのは、国家が歩むべき道であり、その功德は、仏が衆生の救済のために、国や村や赴く所すべてに教えが行き渡るようにした徳なのである。

この『無量寿經』にあるように、天下の人民が五惡を作らなければ、まさに堯^{ぎょう}舜^{しゆん}の治^ち（堯、舜の名君が徳をもって天下をおさめた理想的な政治）の時代に引けをとらないものである。今、五常（仁・義・礼・智・信）の中の仁と礼をあげ、残りも摂することになっている、これはすなわち仏家の五善（不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒）を守ること他にないことである。

元祖大師法然上人も、（『開壇記』卷四 六十三丁表）

元祖大師答^{こたへ}「二品禪尼及月輪室」書云現當之祈無^な過^{とが}専修念佛^{せんしゆねんぶつ}也又云傳教大師七難消滅之法勸^{すす}可^べ修念佛^{しゆねんぶつ}凡現世後生之務何行可^べ若^も念佛^{ねんぶつ}（中略）

（元祖大師、二品禪尼及び月輪室に答うる書に云う。現當の祈り専修念佛に過ぎたる無しと。

また云う。傳教大師の七難消滅の法にも念佛を修すべしと勧められたり。凡そ現世後生の務めに何の行か。念佛にしくべきと。（中略）

とあるように、「二品禪尼」や「月輪室」宛ての書簡に、次のように述べており、

＊鎌倉の二位の禪尼（北条政子）へ進ずる御返事（『昭和新修法然上人全集』五二八頁）

タタ念佛ハカリコソ、現當ノ祈禱トハナリ候へ

（ただ念佛ばかりこそ、現當の祈禱とはなり候え）

＊九條殿下の北政所へ進ずる御返事（『昭和新修法然上人全集』五三四頁）

御イノリノレウニモ、念佛カメテタク候。往生要集ニモ、餘行ノ中ニ、念佛スクレタルヨシミエタリ
マタ傳教大師ノ七難消滅ノ法ニモ、念佛ヲツトムヘシトミエテ候。オホヨソ十方ノ諸佛、三界ノ天衆
妄語シタマハヌ行ニテ候ヘハ、現世後世ノ御ツトメ、ナニ事カコレニスキ候ヘキヤ。イマタタ一向專
ノ但念佛者ニナラセオハシマスヘク候。

（御祈りの料にも、念佛が目出度く候。往生要集にも、餘行の中に、念佛勝れたる由みえたり。

また傳教大師の七難消滅の法にも、念佛をつとむべしとみえて候。おおよそ十方の諸佛、三界の天
衆妄語したまわぬ行にて候えば、現世後世の御つとめ、何事か是れに過ぎ候べきや。今、ただ一向
專修但念佛者にならせおわしますべく候。）

右のような文言から、念仏は、余行よりすぐれ、現當二世の利益があるが、その根拠は、伝教大師最澄の『七難消滅護国頌』の教えにもあるということである。

ちなみにその内容は、（『伝教大師全集』第四卷三一五頁）

七難消滅護国頌 亦名三部畧長講

（中略）

如來至心等正學 還念本誓悉護國 天災地變願消除

（如來至心等正學、本誓を還念して悉く國を護る。天災地變願わくは消除せん。）

我等歸_レ會佛乘教_一 一乘妙法蓮華經 金光明經三身法

（我れ等佛乘の教に歸會す。一乘妙法蓮華經。金光明經三身法。）

仁王般若五忍法 三部大乘爲_二根本_一 內證一切實相教

（仁王般若五忍法。三部の大乘を根本と爲し、內證一切、實相の教。）

法性六度無間修 如理如量無_二顛倒_一 大日本國一同法

（法性六度、無間に修し。如理如量、顛倒無く。大日本國一同の法。）

入_二如來室_一修_二慈悲_一着_二如來衣_一修_二忍辱_一坐_二如來座_一觀_二妙空_一

（如來の室に入りて慈悲を修し、如來の衣を着して忍辱を修し、如來の座に坐して妙空を觀ず。）

如_レ是功德盡廻_二向_一 二十八大梵釋衆 惡龍惡鬼惡瞋靈_一

（是の如きの功德、盡く二十八大梵釋衆、惡龍惡鬼惡瞋靈に廻向す。）

還發_二慈悲廣大心_一 皆悉一切護_二國土_一 天災地變七難等

（還りて慈悲廣大の心を發して、皆悉く一切、國土を護り、天災地變七難等、）

皆悉滅除更不_レ起 十方諸佛哀愍護 大日本國人依正

（皆悉く滅除して更に起こらず。十方諸佛哀愍して護らん。大日本國人依正、）

諸大菩薩慈悲護 大日本國人依正 一切賢聖慈悲護

（諸大菩薩、慈悲を以って護らん。大日本國人依正、一切賢聖、慈悲を以って護らん。）

大日本國人依正 一切持呪慈悲護 大日本國人依正

（大日本國人依正、一切持呪慈悲を以って護らん。大日本國人依正、）

百部鬼神常護_レ國 大日本國人依正 国家隆平人求_レ道

（百部鬼神、常に國を護る。大日本國人依正 国家隆平にして人道を求む。）

依正安穩修_二念佛_一

（依正安穩にして念佛を修す。）

（中略）

天下疫癘之時 山家大師作之令諷誦之 天下泰平人民安穩云

（天下疫癘の時、山家大師之れを作し、之れを諷誦令む。天下泰平、人民安穩と云う。）

とあり、『七難消滅護国頌』は、国土が疫癘（えきれい）（流行病）の時の為に、山家大師（伝教大師最澄）が、天下泰平、人民安穩を願って誦文を作り、諷誦したこと。またの名を『三部畧長講』としているのは、護国三部経（『法華経』『仁王経』『金光明経』）それぞれの長講を略して修するためにつくられたものであり、護国三部経を基本に据えて仏法に帰依することによって、天災地変等の七難が消滅することを祈念する内容のもので、その中に、「日本の国土人民は、国家隆平の道を求め、国土人民が安穩であるように、念仏を修す」ことを勧める文言があり、それを法然上人が取り上げ、「二品禪尼」や「月輪室」宛ての書簡に記したことを知ることができるのである。

そして、次の一行で『大経曼荼羅開壇記』全四巻は終わるのである。

冀願生行人不_レ惜_二身命_一 日課稱名終焉無_レ怠親蒙_二來現_一 入_二佛大會_一 顯佛聞法證_二悟無生_一 也

（冀_{こいねが}わくは、願生の行人、身命を惜しまず、日課稱名を終焉まで怠ること無く、親_{まのあた}り來現を蒙り、佛の大會に入りて見佛聞法し、無生を證悟せんことを。）

願以此功德 平等施一切

同發菩提心 往生安樂國

大経曼荼羅開壇記卷第四已 大尾

第四項 小結

「述所説彌陀行成攝三段」の「所攝」についてその概要を考察したが、次のようなことを知ることができる。

① 「凡夫往生」の「三輩往生」について、『無量寿経』の三輩往生と『観無量寿経』の九品往生は、開合の異であり、念仏と余行を並べるのは、捨劣得勝し、廃立・助正・傍正するためであり、唯、念仏の一行によること。

② 「所攝」の「厭欣境界」について、「三毒段」の二十の絵相は、貪・瞋・癡の三毒の中で、特に貪欲に比重がおかれ、中でも『守護苦』『散失苦』『求財苦』に集中していることから、凡夫が財産に固執し、それを守る、失う、求めるという苦の中に埋もれていることが強調されていること。そして、良照義山は、『勸人修捨』にふれ、三毒は凡夫に具わったものであるが、たとえ浄土教が凡夫のためにあるとしても煩惱を許しておけば安心が起こらず、行が立たないのである。だから、誠め、止めるべきであり、念仏を修すことが大事であると説いていること。

③ 「五惡段」については、「一惡痛燒」から「五惡痛燒」までの五場面に、四十二の標文と絵相が描かれ、殺生惡・偷盜惡・邪淫惡・妄語惡・飲酒惡の五惡がもとで惡因惡果がもたらされること。それを五常や五善、善神の影護等によって、善因善果になるように因果応報の道教的思想に裏付けられた絵相で構成されていること。

④ 「三塗無量苦惱段」は、『無量寿経』には具体的な内容の説示はみられないが、四十八願の筆頭に無三惡趣の願があげられ、その重要性が高く、中台の極樂浄土と対照的に最下段に象徴的に描かれる。

その絵相は、『往生要集』からの影響を受け、「畜生道」「餓鬼道」に比して、「地獄道」は、「八大地獄」

として八場面が大きく取り上げられ、衆生が「三塗無量の苦悩」から厭い離れることを示唆するように象徴的に描かれていること。

⑤ 「所攝」の「勸善」の「此土修善」について、『無量寿経』の意図するところは、広く善根功德を植えて恩を弘め、恵みを施し、道禁を犯すことなく、忍辱・精進・一心・智慧等の六波羅蜜の行につとめ、互いに教化しあい、功德を積んで善に励むことである。そして、心を正しくして邪悪な思いを捨て去り、一日一夜の八齋戒を修し、清浄の心身を保つならば、その功德は、無量寿仏の世界で百年の間、善行に励む功德よりも勝れているということができると説かれていること。

⑥ 「天下和順」の絵相は、「天下和順日月清明風雨以時國豐民安兵弋無用崇德興仁務修禮讓」の標文が示すように、天下は平和になり、太陽も月も清く明らかに照らし、風雨も時にかなって適度に潤い、災害や疫病等も起こらず、国は富んで栄え、国民は平和で安寧な日々を送り、武器や戦も必要とせず、人々は互いに徳を崇めて仁を尊び、礼儀や謙讓の美德を重んじる理想的な世を送る様相が描かれる。このような平和な世をおくることができるのも、弥陀の護念の徳であることが述べられていること。

以上のように、凡夫が三輩に应じてそれぞれに往生がかなうのも、念仏の一行によるものであるが、現世では、貪瞋癡の三毒によって五惡を起こし、五痛の苦を受け、来世では五燒の報を受けて三惡道を転々として廻って解脱できないのである。仏はこのような衆生を哀れんで威德神力をもって、五惡を作そうとする心を滅し、五善の行につとめることを重ねて勧めるのである。

まさに、隨天が『大經曼荼羅開壇記』の末尾に記しているように、念仏の行者は、身命を惜しまず日課称名を人生の終焉まで怠ることなく行ずる事によって、まのあた親りに来迎を蒙り、浄土で仏の大會に入って見仏聞法し、悟りを得ることができるといふ総結で結ばれているのである。

第五章 「選択集十六章之図」及び「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響

第五章では、「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」が印施された当時のもとより現代に至るまで、様々な形で各方面に影響を及ぼしていることを、それぞれ二事例ずつ取り上げて確認する。

第一節では、「選択集十六章之図」に関わり、大正期の資料から、浄土真宗系で秘密裏に催されていた「秘事法門」に使用されていた可能性があったことを検証する。

そして、平成期の現今においても、画僧忍海が敬輔の「選択集十六章之図」を模して描いたとする「彩色版・選択集十六章之図」が「浄土宗新聞」に誤報道されたことについて考察を加えることにする。

第二節では、「無量寿経曼荼羅」について、高田敬輔に浄土宗的宗教環境を与えた画僧古礪が、敬輔作成の二年前に「大経曼荼羅図」を作画しているが、敬輔は町絵師の立場から一般庶民向けに、片や古礪は、画僧として『無量寿経』を伝える僧侶の立場での制作意図があったと想定されることから両曼荼羅を比較しながら検討する。

さらに、高田敬輔の「無量寿経曼荼羅」について、随天が注釈した『大経曼荼羅開壇記』の内容を巡り、真言宗の八事山興正寺の諦忍が、《坐具》について批判したことから論争が起きたことを取り上げ、その真相を究明する。

「選択集十六章之図」、「無量寿経曼荼羅」それぞれが世に及ぼした影響を考察することにより、より一層、両曼荼羅が果たした役割の重要性を見い出すことができるものと考ええる。

第一節 「選択集十六章之図」の及ぼす影響

第一項 「秘事法門」に使用された「選択集十六章之図」

浄土真宗系の異義・異端とされる異安心^(注1)の一種で、「秘事法門」と呼ばれる宗教的秘蔵組織が行う秘蔵の法

座がある。この「秘事法門」に高田敬輔の描いた「選択集十六章之図」が使われた可能性が高い資料がある。

一つは、竜谷大学図書館蔵の「選択集十六章画図講義」^(注2)であり、もう一つは、菊池武氏の「東海地方における秘事法門について」^(注3)の論考である。

(一) 「秘事法門」の概要

「秘事法門」ではどのようなことが行われるのか、二、三、例をみることにする。

大原性實氏は、その著『眞宗異義異安心の研究』^(注4)の中で、形式的な特徴として次のようなことを指摘している。

＊秘密のうちに法門を伝授し、その教えを伝播流布し、一味に加わった者は、細胞の組織のようにされる。

＊儀礼の作法や、特に、頂かせる作法は、夜、土蔵等の密室で行われる。

＊在来の教団僧侶を罵倒し、形式を打破し、教権に反抗的態度を示すこと。

＊俗人の善知識を立て、これを絶対に信頼し、僧侶教師を無視すること。

＊入信の儀礼時に特別の作法を設け、行者を極度に陶醉させて精神錯乱状態に導き、様々な偽装を用いて見仏や光明礼拝を経験させて入信の証拠とすること。

また、山田文昭氏は、『眞宗史の研究』^(注5)の中で、宝暦年間に京都で発覚した「秘事法門」について、具体的にどのようなことが行われたのか記している。

＊宿願を願う・宿願をおろす：西方生身の弥陀を呼び出すため、行者が教えに従って、一日もしくは数日間、一心不乱に「たすけたまえ」と称念し、心底から助かりたい心が湧き起こる状態のこと。

＊御座を立つる：助かりたい心が極まった時、手引きの同行の者が、土蔵か若しくは麴室の中や山林の静寂な所の本尊の前に連れて行き、本尊の前に坐らせ、両肘を脇腹に付けて高い声で「たすけたまえ」と叫ばせ、

その度毎に身体を前後に屈伸させ、同行の者がそれを手助けする。

***頼み上げ：**「たすけたまえ」を頼み上げといい、その頼み上げが頂点に達すると、行者の声は嘎れ、咽が破れそうになり、心神が恍惚状態に陥る。

***取り上げ：**恍惚状態になるのを見定めて、知識が行者の首筋を押さえ「それ御助けぞ、称名、称名」という時、始めて南無阿弥陀仏と称え、「今こそ確かに決定往生なり、以後は報謝の称名を相続せよ」と教える。

***正覚日・往生日：**なぜ正覚なのかといえ、衆生往生せずば、我、正覚ならじと誓った如来だからである。

往生が定まらない人が、今、真の知識に遇って往生したことなので、今日は如来正覚の日であり、衆生の往生の日である。だから、この日を正覚日又は往生日と名づけて、終生精進させるのである。

***出立：**出立と称して酒を勧めることもある。そして、翌日には、必ず本山に参詣させる。礼拝の順序は必ず宗祖を先に、本尊を後にするということである。

このように、土蔵や密室の中で、身体を前後に揺すり「たすけたまえ」と絶叫しながら恍惚状態の極みに陥っている行者に、知識（俗人）と称する者が首筋を押さえ、南無阿弥陀仏と称えさせ、決定往生したとする、まさに秘密結社さながらのすさまじい様相が想像される法座である。

この「秘事法門」に高田敬輔の描いた「選択集十六章之図」が使われた可能性を示す資料があるので、次に考察を加えることにする。

(二) 「秘事法門」に使用された事例

① 竜谷大学図書館蔵『選択集十六章画图講義』^(注2)について

㊦ 第五章の標章

龍谷大学図書館蔵の『選択集十六章画図講義』が、なぜ高田敬輔の「選択集十六章之図」についての講義内容であるかというのは、第五章の標章が唯一の証明になる。

高田敬輔は、第五章の標章を【第五 念佛現當利益章】とし、第五章に第十一章の内容の【現當二世始終の両益】の文言を入れている。これは明らかに第十一章の内容を混同したことによる誤記である。第五章はあくまでも一念大利無上の功德が本質的内容である。だから第五章の標章は、高田敬輔独自のものである。

ちなみに『選択集十六章画図講義』の第五章は、次のように記されている。

第五章念佛現當利益のことを現し 《注… 線は筆者》

この本文は選択集に出たり

此画圖に釈迦あり 前に弥勒座すあり上には諸天

善神あり 下には羅漢あり此の画圖は釈迦如来が弥

勒菩薩に佛になる道を教へて居る處を現したる

こととして此説を諸天善神があらはれて拝聴に来て

をる諸天善神の中に鎧を着するは毘沙門天王なり

即ち三宝荒神と云釈迦如来何を云ふかと云ふに此 「(十丁表)

第五は念佛現當利益と云故に弥勒を現はした者に

して弥勒に説き聞しむるを弥勒と云は聖道門自力

の修行して五十六億七千万年を経て佛となると云

意にして此者を釈迦か弥勒に向かつて聞すに御佛とな

るには未だ早い道かある如何と云ふと念佛現當利

益と云て只これと修行をせぬとも唯一念の□□□捨

て佛となる事は出来る 弥勒菩薩は只これに修
行して佛となる事は出来ると雖一切世界の衆生を
助くる事か出来ぬ又何故なれば一切衆生は学問も
なく智恵もなく修行すべき道もなく根氣も寿命持

「（十丁裏）

つ事も出来ず故に弥勒一人は其修行出来る也唯助
くる事叶はず衆生佛になるには唯々一念の行を行
する時佛になるべき道あると云ふ事を説き明す事
を諸天善神や羅漢か扨聴に来て居るを現はすなり
弥勒菩薩は五十六億七千万年の修行を経て佛にな
ると云ふて覺悟して願う者なり然るに此弥勒菩薩
が世に出る迄ては無佛世界と云ふ釈迦が去りて弥
勒菩薩までは佛になる事は叶はぬと云て廣圓阿沙
利は遠江の桜か池に大蛇となりて弥勒菩薩の世を
待ち居るなり故に如何しても佛になる事は叶はぬ
菩薩の修行では逆も行けない只衆生ありてと云て
衆生が云て来て真実の法を聞て一念の行を行すれ
は五劫に於て速に佛になる事疑ひなし故に現当利
益を現すると云ふて弥勒に聞す所なり是画圖は弥
勒に佛となるには未だ早い近頃あるぞよと説き聞
かせる所なり 浄土和讃に曰

「（十一丁表）

阿弥陀佛の御名をき、 歓喜讃仰せしむれば

功德の宝を具足して 一念大利无上なり

たとひ大千世界を ミテラン火ヲモスキユキテ

仏ノ御名ヲキクヒトハ ナガク不退ニカナフナリ」(十一丁裏)

と云ふてある

とあるように、『選択集十六章画図講義』の第五章の講義内容は、『第五章念仏現当利益のこと』と記されている。このことは、高田敬輔が独自に第五章の標章に【第五 念佛現當利益章】と書き入れていることから、敬輔の「選択集十六章之図」そのものについての講義内容であることに相違ないのである。

① 卷末の覚え書き

この『選択集十六章画図講義』が「秘事法門」に使用された根拠の事例として、卷末の覚え書きが重要な役割を果たしている。

卷末には、次のように、

「福井県若狭内藤誠信氏

所藏ノ本ヨリ轉写ス

目下同地方ニ弘マル所ノ秘事法門ノ一種也

大正十四年十一月

と記されており、福井県の若狭の内藤誠信氏の所蔵する本から転写したものである。

これは、当時、この若狭地方に広まっていた「秘事法門」の一種に使用された「選択集十六章画図」について、それをもとに何か講座が開かれた際の講義記録か、もしくは、「秘事法門」の法座の中で、実際に「選択集十六

章画図」を使って講釈されたことを記録に残した物かも知れないのである。

ちなみに、時期は、大正十四年（一九二五）十一月と記されていることから、九十年ほど前の極近い年代である。にもかかわらず、江戸中期に制作された「選択集十六章之図」が、「秘事法門」に用いられていたことは注目し値することである。

② 「選択集十六章之図」の秘事法門での使用例

菊池武氏は、「東海地方における秘事法門について」^(注3)の論考で、秘事法門の法座が行われる部屋の様子について、次のように記している。

そこで法座の開かれる部屋の正面には阿弥陀三尊を掛け、両側に選択集十章^{マツ}の図・当麻曼荼羅・十界図・法然像が並び、仮設祭壇には仏足跡図・櫛・ローソク・小餅・香炉・燈明・仏飯・盥・法然伝来と称する巻物等が置かれる。

このように、「秘事法門」の法座の際に、正面に掛ける掛け物の一つとして、「選択集十六章之図」が使われていると記されている。菊池氏は、「選択集十章の図」と表記しているが、おそらく「選択集十六章画図」の誤記と推測される。なぜなら、周知の通り『選択本願念仏集』は全編十六章で構成されており、十章から成り立っていないからである。おそらく一字欠けたものか、「十六章之図」を「十章の図」と誤って認識した可能性が考えられる。

さらにもう一点、「選択集十六章之図」が使われていたということが確実な論考が「特殊念仏結社の説教と絵解」^(注6)の中に、次のように記されている。

そこで先づ、飛驒の事例では、法座の開かれる部屋には、説教台があり、そこには指し棒に種々の経本や説教本が存する。ここでは、新信者（彼等は、確固たる各宗派寺院の信者である）に対しての最も重要な加

入儀礼をはじめ、いくつかの儀式が行われ、其の相間に説教や絵解等が知識（先生）によってなされる。それは、当麻曼茶羅や十界図・選択集十六章の図の絵解である。例えば、当麻曼茶羅の場合、韋提希夫人が法に合う事が観經に説いてあり、彼女が身体を使つて礼拝をして念じている。あなた方も、此の様に礼拝をしないと曼茶羅の上に第十八願文ないし十念、十の功德の念仏が説かれてある如く、一心になれないと信者達に解説する。これ等は、浄土教の発展にともない、其の布教用に画かれた類の絵画で、浄土教美術の一つといえるもので、これが秘事の中に多く取り入れられている様相が判る。（以下略）

このように、秘事法門の法座では、いくつかの儀式が行われる合間に、当麻曼茶羅や十界図や選択集十六章之図を用いて絵解きがなされたのが明らかである。

その使用目的は、秘事法門の教義に都合の良い解釈による絵解きであることが見て取れるのである。

ちなみに、菊池氏は、「近世に於ける北陸地方の秘事法門について」^(注7)や「越後地方における秘事法門について」^(注8)や「地獄秘事の本源」^(注9)等の論考があり、東海地方、北陸地方、越後地方、芸備地方、飛騨地方等、各地における秘事法門について考察されているが、法座の際の法具として、掛け軸の名称に「選択集十六章之図」が挙げられて具体的に使われたことを知ることができるのは、右の「東海地方における秘事法門について」と「特殊念仏結社の説教と絵解」の論考である。

第二項 忍海画とされる「彩色版・選択集十六章之図」

浄土宗文化局発行の「浄土宗新聞」が、平成二十八年十一月号から、大正大学教授の林田康順氏が「心ゆくまで味わう 法然さまの『選択集』」と題して、『選択本願念仏集』の第一章から第十六章までを解説する連載を始めている。

しかし、高田敬輔の「選択集十六章之図」は、左図に示す通り、一見して分かるように全く異なる絵相をして



《※平成二十九年五月号四面掲載のコラム欄》



《※平成二十九年六月号四面掲載のコラム欄》

ところが、平成二十九年の「浄土宗新聞」五月号及び六月号のコラム欄に掲載された「選択集十六章之図」が、高田敬輔の描いたものであるという解説のもとに次のような図版が掲載されたのである。



* 高田敬輔「選集十六章之圖」(紙本摺印着色 一一五・八×五一・五 個人藏)

ちなみに「浄土宗新聞」に掲載された画図は、かつて「法然上人讃仰会」発行の『浄土』（平成十年五・六月合併特大号）掲載された左図の「彩色版・選択集十六章之図」である。



明らかに異なる絵相であるのにもかかわらず、高田敬輔作成の「選択集十六章之図」ということなので、浄土宗新聞発行元の浄土宗文化局に問い合わせたところ、担当者が言うには、

「新纂浄土宗大辞典の『選択集十六章之図』の項目の図版が、白黒で不鮮明のため、『浄土』掲載の『彩色版・選択集十六章之図』の画図を転載し、解説文は新纂浄土宗大辞典の項目の文言をそのまま引用した。」ということであった。

しかし、全国の「浄土宗新聞」読者が、『浄土』掲載の「彩色版・選択集十六章之図」を「高田敬輔画」の「選択集十六章之図」として認識してしまうことは、容認し難いことであつた。

そこで、引用された『浄土』掲載の「彩色版・選択集十六章之図」が、真に高田敬輔の描いた「選択集十六章之図」であるかどうか、確認する必要性に迫られた。そのためには、現地調査が第一と考え、実施することにした。

「彩色版・選択集十六章之図」の所在については、浄土宗文化局の紹介を得て、早速、現地調査を行った。

(一) 現地調査

この「彩色版・選択集十六章之図」の画図を細かく観察すると、画図の右辺・左辺に、曼荼羅の制作過程を示す、次のような款記があることが読み取れる。

特に、この款記に注目しながら、調査を行うことにした。

【注：「彩色版・選択集十六章之図」所蔵寺院の住職の依頼により、所蔵寺院名を明かさないという前提条件のもとに調査をした。寺院名が判明できるような箇所は■■■■のように伏字にした。

また曼荼羅名を以下「彩色版・選択集十六章之図」とする。】

① 「彩色版・選択集十六章之図」の款記について

* 画面向かって右辺の款記



選擇本願念佛集者蓮門之樞鍵西邁之直路淨業者添誰不奉持間有圖画其章段者舉世珍敬焉

(選擇本願念佛集は、蓮門の樞鍵、西邁の直路、淨業は添いて誰か奉事せざらんや。間て圖画有り。其の章段は世を舉げて珍敬す。)

予今茲爲衆講演此書因謀沙門忍海令與圖寫十六章段填彩已就

予、今、茲に衆の爲に此の書を講演せんとす。因つて、沙門忍海に謀り、圖寫の十六章段と與せ令む。填彩、已に就る。)

*画面向かって左辺の款記



變相儼然惟願傳之將來以令同業同修之人有所歸矣

(變相、儼然たり。惟、願わくは、之れを將來に傳え、以って同業同修の人をして、所歸有らしめん。)

于時天明己酉春

沙門超蓮社倫譽上人念阿弥陀佛海和南稽首題之

倫譽

念海

于時天明己酉の春。沙門超蓮社倫譽上人念阿弥陀佛海が、和南、稽首して、之を題す。

この「彩色版・選択集十六章之図」の右辺・左辺の款記によれば、

「選択本願念仏集は、浄土宗の最も肝要な鍵のようなものであり、浄土往生するためにひたすら進む道を示しているもので、誰にとっても大事である。

以前から、それを図画に顕したものが有り、その章段は、世を挙げて珍重すべきものである。私が、今ここに、衆生のために選択集を講演しようとして、沙門忍海と相談して、画図を十六章段と合

うように描かせ、ここに出来上がったものである。

変相は厳然として存在している。ただ願わくならば、これを将来に伝えて、同業同修の人とともに西方極樂往生を願いたいものである。

時に天明九年（一七八九）の春。沙門超蓮社倫譽上人念阿弥陀佛海が、和南^{わなん}、稽首^{けいしゅ}して、之を題す。」とある。

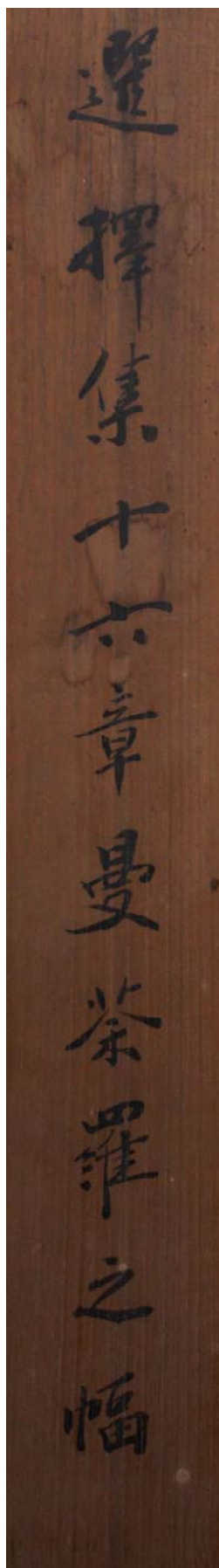
ここに出てくる沙門忍海^{（注10）}とは、関通上人^{（注11）}の訓訳の『和字選択集』（延享元年）に挿絵を施した著名な画僧である。また、この曼荼羅を描かせたのが、沙門超蓮社倫譽上人念阿弥陀佛海^{（注12）}ということである。

② 「彩色版・選択集十六章之図」の法量について

《絹本着色 一〇九・八×八〇・二》

③ 箱書きについて

* 【箱書き（表）】



《選擇集十六章曼荼羅之幅》

＊【箱書き（裏） 上段】

芝増上寺五十四世倫譽上人題字寶勝院初世忍海上人所畫選擇集十六章
曼荼羅爲吾家之舊藏今茲大正十一年一月十五日依於
山寺二十一世譽上人懇請藏納之於同寺之寶庫也
氏宗家十世 郡村 門之丞識

芝増上寺五十四世倫譽念海上人題字寶勝院初世忍海上人所畫選擇集十六章

曼荼羅爲吾家之舊藏今茲大正十一年一月十五日依於 郡村浄土宗

山寺二十一世 譽 上人之懇請藏納之於同寺之寶庫也

氏宗家十世 郡村 門之丞識

（芝、増上寺五十四世倫譽念海上人題字、寶勝（松）院初世忍海上人所画するところの選擇集十六章

曼荼羅、吾家の舊藏と爲す。今、茲に大正十一年一月十五日、 郡村浄土宗

山寺二十一世 譽 上人の懇請に依り、之れを同寺の寶庫に藏納す。

氏宗家十世 郡村 門之丞識

＊【箱書き（裏） 下段】

大正三甲寅年三月廿二日 郡村 門之丞識

大正三甲寅年三月廿二日 ■■■□□

南□□人釋宗□□花押

(二) 新井俊定氏の見解

右の「彩色版・選択集十六章之図」の左右の款記について、先に新井俊定氏が論考を発表されている(注13)ので、それを参考に挙げてみると、

また、彩色版の「選択集十六章之図」がある。(『浄土』(法然上人鑽仰会刊)一九九八年五、六月号に掲載)その写真によると絵の両側に、

(右側) 選択本願念仏集者蓮門之枢鍵西邁之直路浄業者誰(添)不奉持有図画其章段者举世珍敬焉(欠字)

予(欠字)今茲為衆清(講)演此書因謀沙門忍海令点(與)図者十六章段填彩已就

(左側) 変相儼然惟願伝之将来以令同業同修之人有所帰矣于時天明己酉春沙門超蓮社倫誉上人念阿彌陀佛

海知(和)南督首(稽首)題之

とあり、この図を作成するにあたり忍海がかかわっていたことが知られる。《中略》

敬輔の「十六章之図」と、先に述べた忍海の描かれたと思われる「十六章之図」とを比較すると、絵の構造(上段中央に阿弥陀如来が置かれ、第一章から第十六章に至る位置等)は全く同じであり、絵そのものも似ている点が多く見られる。敬輔のものが時代的に古いものであり、この絵が関通開版の『和字選択集』、忍海の「十六章之図」に何らかの影響を与えているものと思われる。《以下、略》

と述べられている。

【注】款記の翻刻が筆者と異なる部分が数カ所あり、《誰(添)》等の記入は筆者の読み取りである。文末の「督首」は、仏教用語には見当たらないので、書き入れをした人物が「稽首」と書き間

違ったことが想定される。」

新井氏は、「彩色版・選択集十六章之図」を写真で検証したとし、読下し文は記していない。

ただ、「彩色版・選択集十六章之図」は、忍海が関わりをもっているということと、その絵の構造が高田敬輔の「選択集十六章之図」と類似していることから、関通開版の『和字選択集』、や忍海画とされる「彩色版・選択集十六章之図」に何らかの影響を与えているものと指摘している。

(三) 考察

① 「彩色版・選択集十六章之図」所蔵に至るまでの経緯

「彩色版・選択集十六章之図」所蔵寺院住職の話による。

＊増上寺五十四世、超連社倫誉念海在阿恵学上人、念海が、忍海所画の「彩色版・選択集十六章之図」（「選擇十六章曼荼羅之幅」）を手に入れ、題字を書き、増上寺に宝物として保管していた。

＊念海の菩提寺が所蔵寺院の隣町に存在する。その菩提寺に、念海が増上寺の宝物として保管していた「彩色版・選択集十六章之図」を寄贈した。

その寄贈された菩提寺の檀家の中に、豪農がおり、菩提寺に多大な支援をしたので、お礼として「彩色版・選択集十六章之図」（「選擇十六章曼荼羅之幅」）が与えられ、長期間保管されていた。

＊大正十一年、当時の所蔵寺院住職が、豪農に懇請して「選擇十六章曼荼羅之幅」を譲り受け、所蔵寺院の宝物とした。

以上の経緯は、大正十一年に書かれた【箱書き（裏）上段】の内容とほとんど一致する。

② 高田敬輔、忍海上人、念海上人との関係

＊高田敬輔（延宝四（一六七四）～宝暦五（一七五五））【念海一〇歳の時、死去】

忍海上人（元禄九（一六九六）～宝暦十一（一七六一））【念海一六歳の時、死去】

念海上人（延享二（一七四五）～文化九（一八一二））

*念海が、忍海に敬輔の「選択集十六章之図」を描かせたとすれば、念海が十六歳の時であり、深川靈巖寺から増上寺に移って（寶暦十年（一七六〇））一年目で、修行が始まった頃の時期である。

*念海が、かつて忍海が敬輔の「選択集十六章之図」を模写したものを手に入れたか、もしくは増上寺の宝庫の中にあつたものを見出し、題字とともに、画の右辺、左辺に款記を入れた可能性がある。

*念海が款記を入れたとすれば【沙門超蓮社倫譽上人】と自らを上人と記すであろうか、甚だ疑問である。

*念海が款記を入れた【天明己酉春】は、天明九年（一七八九）一月一日より二十四日までの間の可能性がある。なぜならば、一月二十五日から元号が寛政に改元されているからである。【念海四十四歳】
ところが、念海は、

天明三年（一七八三）十一月十九日から滝山大善寺第二十九世住持、

寛政元年（一七八九）四月十九日から瓜連常福寺第五十二世住持、

寛政六年（一七九四）三月十四日から鎌倉光明寺第七十七世住持、

寛政十一年（一七九九）四月十五日から増上寺五十四世住持となり、文化五年（一八〇八）三月十日に隠退しているので、天明九年（一七八九）は大善寺の住持であり、款記と齟齬がある。

③高田敬輔「選択集十六章之図」との関連性

*高田敬輔の「選択集十六章之図」を模写したものでどうかは、第五章の標章を確認すれば理解しやすい。第一項の「秘事法門」の所でも述べたが、敬輔は、第五章の標章を【第五 念佛現當利益章】としてあるが、第五章の「一念大利無上の功德」の内容ににそぐわない誤記の可能性が あることから、【現當】挿入の第五章の標章は、高田敬輔独自のものである。

* 「彩色版・選択集十六章之図」の第五章の標章が【第五 念佛現當利益章】となっていることから、高田敬輔の「選択集十六章之図」を、誰かが模写したものと思われる。

ただし、「彩色版・選択集十六章之図」の右辺や左辺の款記や箱書きにあるように、忍海が描いたかどうかは確信がもてない。

ちなみに、忍海の挿絵の入った『和字選択集』の第五章の標章は「念佛利益の文」であり、絵相が全く異なる和風^(注14)であることから、忍海がえて高田敬輔の絵を模写したか確認できないのである。

④箱書きの「寶勝院初世忍海上人所畫選擇集十六章」

* 「寶勝院初世忍海上人」とあるが、寶勝^{マツ}（松）院の初世は良阿で、「三縁山志卷三」^(注15)の寶松院の項に、
△忍海上人當院九世なり名畫の芳聲高し^{後學匠傳の處に委く出す}

師の傳は『泉谷瓦礫集』に委詳なればこゝに略す 師畫にたくみのみならず歌も又好みよまれけるとある。

箱書きの寺名と歴世に明らかに齟齬がみられる。

第三項 小結

以上のような考察から、次のようなことを知ることができる。

第一項の「秘事法門」について

- ① 浄土真宗系の異義・異端とされる異安心の「秘事法門」において、一つは、一九二〇年代の若狭地方の「秘事法門」、二つに、一九七〇年代の東海地方の「秘事法門」の法座の場に、秘密信仰の法具の一部として高田敬輔原画の「選択集十六章之図」が用いられた事を知ることができたこと。

② 「秘事法門」は、浄土宗及び浄土真宗の教義から外れていることは言うまでも無いが、庶民の中には、誘われるままに信者になり、秘密裏に浄土往生の道を探る手立てを求めたことは事実であろう。その際に法具の一部として、高田敬輔原版「選択集十六章之図」が使用されたことは、敬輔本人も想定外であり、使用される事は望まなかったに違いない。

しかし、そのような場で使用されたからとして、無視し、非難することはできないことである。現実には、一部庶民の秘密信仰の痕跡を検証できたことにより、高田敬輔原版「選択集十六章之図」が、闇の信仰世界で存在し、その意義が求められていたという事実を見いだすことができたこと。

第二項の忍海画とされる「彩色版・選択集十六章之図」について

① 款記の天明九年は、念海が増上寺の住持ではなく、大善寺の住持であり、忍海没後二十八年を経ている。「選択集十六章之図」を描かせることは困難であること。

もし、忍海が描いたものに天明九年に款記を書き入れたとすれば、忍海の署名や落款がある筈だが、不明であり、忍海が描いたという確証がつかめないこと。

また、款記の自らの名に、上人と敬称をつけているが不可解であること。

箱書きの忍海の寺名と歴世に齟齬があり、所画の記載に信憑性が問われること。

② 高田敬輔の描いた「選択集十六章之図」が「浄土宗新聞」に誤った情報として掲載されるということは、高田敬輔といえど「選択集十六章之図」の制作者であるという先入的固定概念が定着し、世間に広く流布している証であることから、その存在価値が高く評価されるものであり、現代においても影響を及ぼしている一例であること。

(注1) 長 忠生『内信心念仏考』二三九頁（一九九九年刊 海鳥社）

「安心」とは、信心によって心が動揺しないこと、またその境地をいい、各宗派それぞれに「安心」を説いている。その宗祖の教えに違背した「安心」を主張することが「異安心」である。

浄土教ではとくに「安心」を重視し、なかでも信心正因を正義とする真宗では「阿弥陀仏の本願を疑わず、その救済によって極楽に往生することができると信ずる心」をいって「信心」の同義に使われる。このように「安心」はとくに真宗において重んじられ、必然に「異安心」は厳しく排斥される。このことから、「異安心」とはとくに「真宗における異端」をいう。

ところで、何が正統で何が異端なのか。それは時の権力者が決めるのではなく、宗旨の正義しようぎに照らして判定されるべきものである。真宗であれば「親鸞」を鏡とし、「蓮如」を物差ものさしとして論じられねばならない。ところで、その蓮如教学を相統する本願寺教団から、秘事法門は異端・異安心と極めつけられているのである。

にもかかわらず、秘事法門の徒は、われわれの信心こそ蓮如の教えであり真宗の正義と信じて疑わない。教化を生業とする寺僧にまことの信心を獲得している者が幾人いるのであろうか、『御文章』にも「坊主分は信心の次第を知らず」とあるではないか、在家の善知識こそ真宗の正義を相承しているのであって、その附属をうけたわれら信心仲間こそ真の念仏者である、と正統性をゆずらない。

(注2) 竜谷大学図書館蔵『選択集十六章画図講義』

【 龍谷大学図書館 貴重資料画像データベース 『選択集十有十六章画図講義』△真讃-472-1

http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/cont_15/15501.html?l=0&q=%E9%81%B8%E6%8A%9E%E9%9B%86 】

(注3) 菊池武「東海地方における秘事法門について」(『印度学佛教学研究』21巻一九七三年2号 p 697～p 698)

(注4) 大原性實『眞宗異義異安心の研究』一八七頁（眞宗教學史研究第三巻 一九六〇刊 永田文昌堂）

(注5) 山田文昭『眞宗史の研究』一八七頁（一九七九年刊 法蔵館）

(注6) 菊池武「特殊念仏結社の説教と絵解き」 p 174～p 175 (『宗教研究』二五〇 第55巻 第三輯 一九八二年 日本宗教学会)

(注7) 菊池武「近世に於ける北陸地方の秘事法門について」 p 237～p 238 (『宗教研究』二二六 第49巻 第三輯 一九七六年 日本宗教学会)

(注8)(注9)(注10)

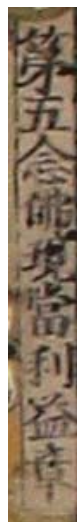
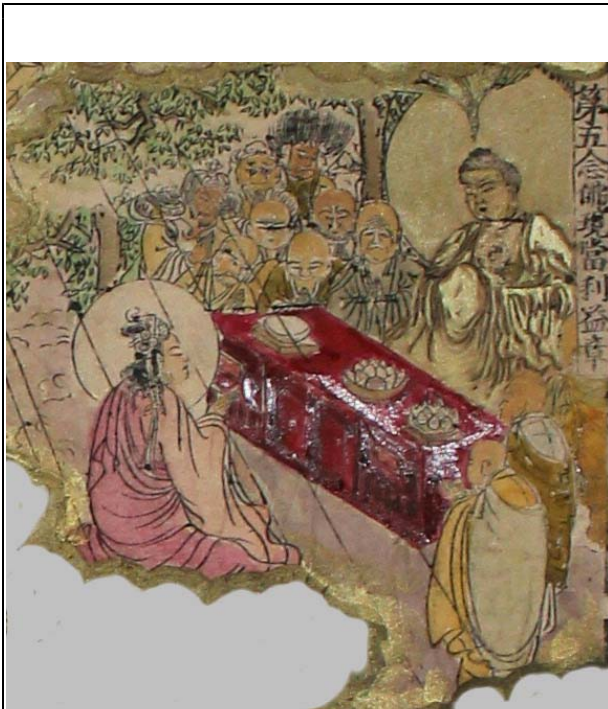
菊池武「越後地方における秘事法門について」p 202～p 203 (『宗教研究』二一四 第46巻 第三輯 一九七三年 日本宗教学会)
 菊池武「地獄秘事の本源」p 106～p 107 (『宗教研究』二二二 第48巻 第三輯 一九七五年 日本宗教学会)
 杉本欣久「増上寺の学僧・忍海の作画と復古思想―江戸中期の徂徠学派にみる文化潮流―」『古文化研究』第十四号 六五～七一頁 (平成二十

七年刊 黒川古文化研究所)

(注11)(注12)(注13)(注14)

『新纂浄土宗大辞典』二八二頁 (平成二十八年 (二〇一六) 刊 浄土宗)
 『大本山増上寺史』『歴代人誌』六二三頁 (平成十一年 (一九九九) 刊 大本山増上寺)
 新井俊定「和字選撰集について」(『阿川文正教授古稀記念論集 法然浄土教の思想と伝歴』四一九～四二一頁 二〇〇一年 山喜房佛書林刊)
 高田敬輔「選撰集十六章之図」第五章の絵相と忍海『和字選撰集』第五章の絵相の比較

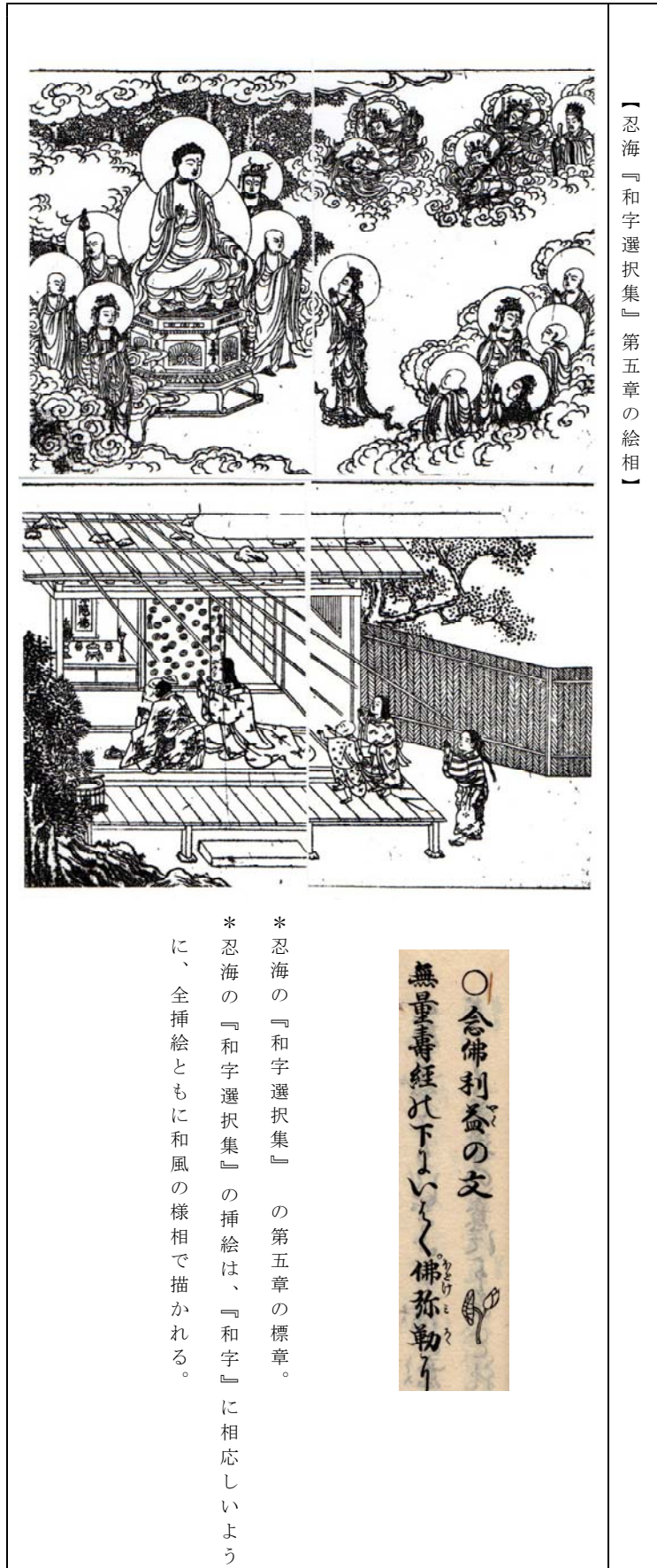
【高田敬輔「選撰集十六章之図」第五章の絵相】



* 敬輔第五章の標章は、「第五念佛現當利益章」である

(注15)

「三縁山志 卷三」(『浄土宗全書』第十九卷 三一七頁)



第二節 「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響

第一項 古碕「大経曼荼羅図」との関連

(一) 高田敬輔「無量寿経曼荼羅」と古碕「大経曼荼羅図」との対比

高田敬輔が「無量寿経曼荼羅」を描いたのは、正徳四年（一七一四）である。前年の正徳三年（一七一三）には、本論文第二章で考察した「選択集十六章之図」を描いている。一方、高田敬輔に大画の法や雪舟様の画法を教授したとされる古碕が、同時期の正徳二年（一七一一）、『無量寿経』を絵画表現した「大経曼荼羅図」浄国院本を制作^{（注1）}している。両曼荼羅ともに『無量寿経』の経義を説くために観者の視覚に訴えるように絵画表現され、その一つ一つの絵相が経文の内容を読み取れるような「絵解き」の体裁をとっている。

敬輔の「無量寿経曼荼羅」は、一般的な掛幅の体裁を取り、一見して何の曼荼羅か解るように、「無量寿経曼荼羅」と題字が書き入れられている。また、版木から刷り印され、量産が可能であることから、多数、普及されたものと思われる。しかも着脱も容易で携行し易いことから、檀信徒や僧侶の集う場所へ出向して布教するような大衆向けに流布されたことが想定される。ただ、掛幅様であることから、多人数や広範囲な場所には適さず、一般寺院の法話や講説の席に適したものではなかったかと思われる。

一方、古碕の「大経茶羅図」は、縦二m半、横二mの大判であることから、携行して絵解きをするには、懸ける場所や運搬等に困難をきたすことが想定されることから、移動を伴わない内陣等に本尊のように参拝の対象として懸けられたのではないかと思われる。

そこで、この項では、同じ『無量寿経』を基にしながら、どのような曼荼羅に表現されているか、対比的にみていくことにする。

(二) 両曼荼羅の特色

両曼荼羅について、法量、仕様、各絵相の配置及び絵相の内容を示す標章等を手がかりにみていくことにする。

① 高田敬輔「無量寿経曼荼羅」

(正徳四年(一七一四)作、

延享二年(一七四五年)版行、紙本木版彩色、

一五二・一cm×六八・四cm 個人蔵)



② 古碕「大経曼荼羅図」

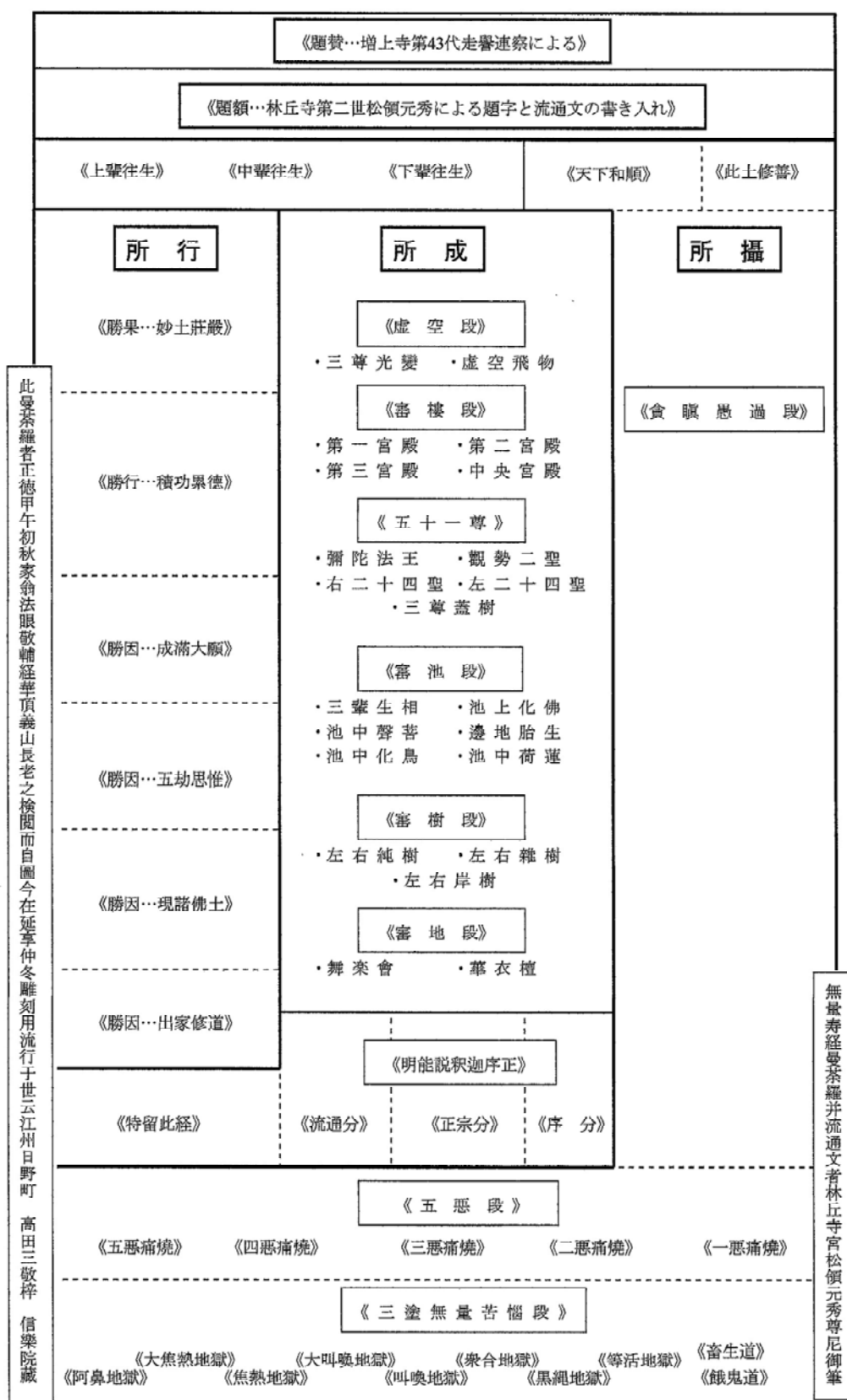
(正徳二年(一七一二)紙本着色二五〇・五cm×

二五〇・五cm×二〇四・五cm 浄国院)



※高田敬輔「無量寿経曼荼羅」

*題贊・款記・各絵相の配置概要図



此曼荼羅者正徳甲午初秋家翁法眼敬輔經畢頂義山長老之檢閱而自圖今在延享仲冬雕刻用流行于世云江州日野町 高田三敬梓 信樂院藏

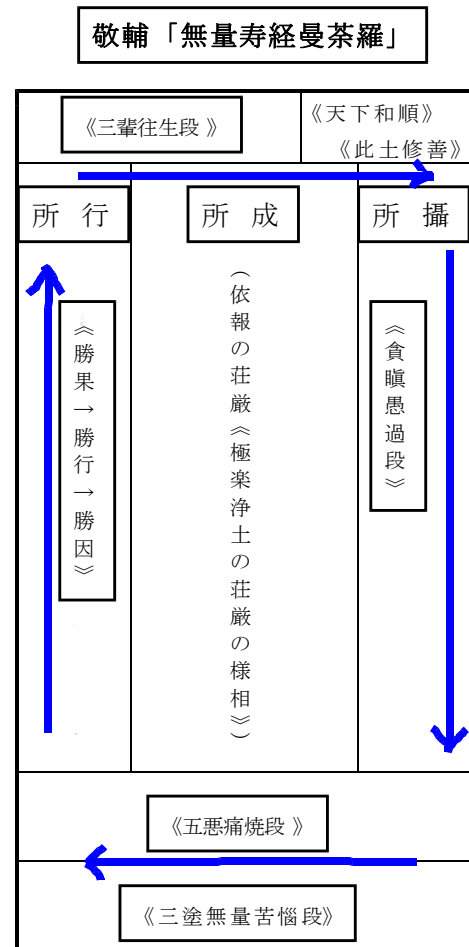
無量寿経曼荼羅并流通文者林丘寺宮松領元秀尊尼御筆

※古碕「大經曼荼羅圖」

*各絵相の配置と標章の概要図

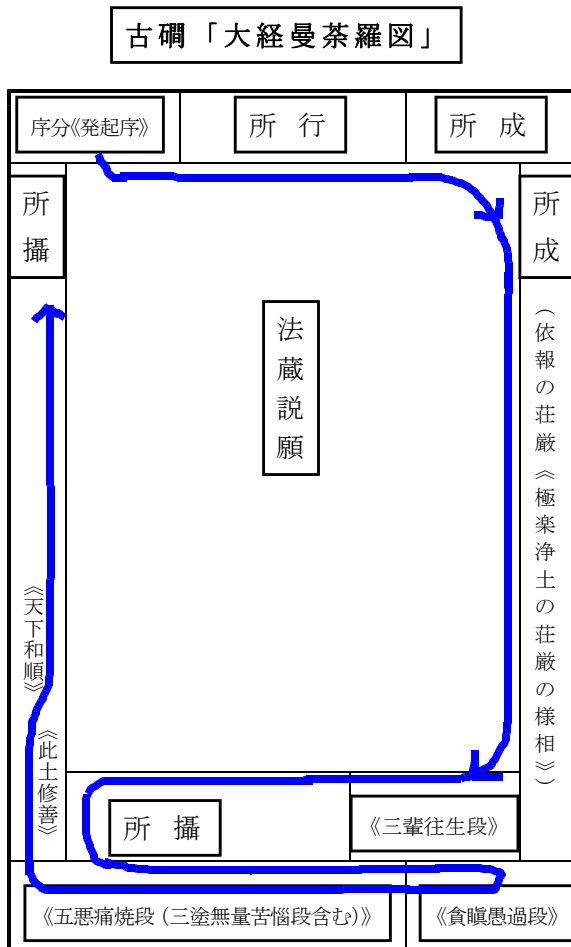
諸根悅豫	出家修道	現諸佛土	五劫思惟	永劫修行	勝依正果	淨土勝報	威神光明	徒衆無量
念佛付屬	法藏說願 世自在王如來 <							

③ 敬輔「無量寿経曼荼羅」と古碕「大経曼荼羅図」の特色



※敬輔「無量寿経曼荼羅」の特色

- ① 法量…一五二・一 cm × 六八・四 cm
《掛幅仕様で携行可能。個人及び少数対象。》
- ② 極樂浄土の莊嚴が中心（約四二％）。
- ③ 「無量寿経曼荼羅」の題字あり。所成を中心に、全体は時計回りであるが、各段ごとに直線的で、独立した絵相。



※古碕「大経曼荼羅図」の特色

- ① 法量…二五〇・五 cm × 二〇四・五 cm
《内陣等への揭示用大型版。多人数対象。》
- ② 法蔵説願の様相が中心（約五〇％）
- ③ 『無量寿経』の発起序から経文の順に従って時計回りに、上縁左端↓右端↓右縁上端↓下端↓下縁右端↓左端↓再度、右端↓左端↓左縁下端↓上端へと連続的に一巡。

(三) 考察

高田敬輔と大画や雪舟様の画法の師とする古磧の『無量寿経』に基づく曼荼羅を対比してみると次のようなことを指摘することができる。

① 敬輔が町絵師であることと古磧が画僧であるという立場の違いから、両者の曼荼羅の制作意図に明らかな違いがみられることである。

まず、高田敬輔は、一庶民の立場から、何の曼荼羅であるのか一見して解るように「無量寿経曼荼羅」と題字を書き入れていること。さらに、興味関心の高い極楽浄土の様相を中心に置いたことで、観る者に強烈な象徴を与えたかったと思われる。そして、そこへ往生するには、貪瞋癡の三毒を捨て、五悪痛焼の現世を厭い、三惡趣道に堕ちないように、法蔵比丘の説く極楽浄土へ、三輩それぞれに応じて念仏することによって往生できることを解り易く表現していること。

一方の古磧は、僧侶であるという立場から、『無量寿経』の教義内容を忠実に伝えることを主眼に、法蔵比丘が世自在王如来の前で説願する場面を、全面面の半分以上を占めて描き、その周囲を経文の内容の順を追って、最初に発起序の諸根悦豫から始め、念仏を付属するまでの流れを五十余りの標章を付けて説くように描いていること。

② 法量や形状の視点で比較したところ、敬輔の「無量寿経曼荼羅」は、一般的な掛幅様の体裁であり、刷り印であることから量産が可能であること。さらに、携行しやすく着脱も容易であることから、檀信徒や僧侶の集う場所へ出向して布教する等に好都合であり、一般大衆向けに流布されたことが想定されること。ただ、掛幅様であることから、多人数の所には適さず、ごく普通の寺院の法話や僧侶達への講説に向いていたのではないかと思われること。

一方、古磧の「大経曼荼羅図」は、題字の書き入れが無く、『無量寿経』を知らなければ何の曼荼羅か判

断がつかないことから僧侶や仏理に明るい者に向けた高度な内容のものであるといえること。また、縦二m半、横二mの大判であることから、携行して絵解きをするには、懸ける場所や運搬に支障をきたす恐れが想定されることから、「當麻曼陀羅」のように、内陣等に懸けられ、参拝の対象として固定化されていたことが想定されること。

③ 高田敬輔のものは、増上寺四十三世大僧正連察の題賛や林丘寺松領元秀尊尼の『無量寿経』流通文の書き入れが解る款記があり、高貴な人物による価値評価がある一方で、古碁のものには款記等は見えず、純粹に『無量寿経』の教理を絵画表現をする真摯な姿勢が窺えるものであり、両曼荼羅それぞれがその特徴を十二分に発揮した独自性の高い作品であるということ。

第二項 震純・随天と諦忍との論争

(一) 坐具を巡る随天と諦忍の主張

① 論争の発端

『大経曼荼羅開壇記』を巡って論争が繰り広げられる問題の発端になる箇所は、『大経曼陀羅開壇記』卷一、「二阿難請問二 初變相^{前在}」の「尊者阿難向佛世尊展尼師壇偏袒右肩長跪合掌」について記された十二丁表の中頃^(注2)、阿難が仏の聖旨を承る場面についての注釈をしている。

近頃^有人以南山戒壇圖經爲附會之說確執座具穢物而斥禮時敷展之儀嘗謂我今揭四墨印打破千載膠固之妄習今謂座具制緣具如律文然西土衆僧於樹下石上修行者多故恐損身損衣故須敷之支那本邦此事希也故或禮時敷之律中無文據事用之無違者也歸敬儀云今據事用理須座具既爲身衣明知前設律云爲身爲衣爲僧臥具歸敬儀除去爲僧臥具四字可知今據事用理須座具了然通眞記云義約制緣爲

身衣「故準」此禮拜理須「敷展」故云「前設」應「知南山云」今據「事用」理須「座具」者可「謂」制意「矣往昔底沙如來入」瑠璃龕「敷」尼師壇「結跏趺坐入」火界定出新婆娑百七十七況當麻欣淨緣中有「阿難向」佛展「座具」而合掌上豈乖「聖意」

（近頃、有る人、南山戒壇圖經を以つて、附會の説と為す。座具穢物を確執して禮時敷展之儀を斥きて、嘗て謂う。我、今、四墨印を掲げて、千歳膠固こうこの妄習を打破すと。今謂う、座具の制縁具つぶさに律文の如し。然るに西土の衆僧は、樹下石上に於いて修行する者多し。故に身を損し、衣を損なわんことを恐る。故に須く之を敷くべし。支那本邦は此の事希れなり。故に或は禮時に之を敷く。律の中に文無けれども事に抛りて之を用いるに違う者無し。

歸敬儀に云う。今、事用に抛るに理を以つて座具を須もちべし。既に身衣の為なり。明かに知んぬ。前に説けることを律に云う。身の為、衣の為、僧臥具の為と。

歸敬儀に為僧臥具の四字を除去す。知るべし。今、事用に抛りて座具を須もちることを。

了然の通眞記に云う。義を以つて制縁に約せば、身衣の為の故に、此れに準ずるに禮拜するに、理、須く敷展すべし。故に前説と云うと。知る應べし。南山、今の事用に抛りて、理を以つて、座具を須ると云う。制意なりと謂うべし。

往昔し、底沙如來、瑠璃龕がんに入り、尼師壇を敷き、結跏趺坐して火界定に入る。（新婆娑百七十七に出す）況んや當麻欣淨縁の中に、阿難、佛に向かいて座具を展べて合掌すること有り。豈あに聖意に乖そむなるや。）という十六行にわたる文言から論争が始まるのである。

ここでいう「近頃有る人」の、「有る人」とは『坐具顯正録』（注3）を著した諦忍（注4）その人である。ここに、随天の、諦忍『坐具顯正録』に対する批難の姿勢がみられるのである。

その内容は、近頃、有る人（諦忍）が、南山（道宣）の『関中創立戒壇圖經』をもつて、無理にこじつけた説を為している。坐具は穢物を確執して礼時に敷き展べる事を退けている。嘗つてなかったことだが、私は今、四

墨印を掲げて千歳膠固^{こうこ}を打破することを謂う。

今、取り上げて謂う坐具の制縁は、詳しく律文にある。それによると、印度の衆僧は樹下の上で修行する者が多いので、身体や衣を損ねないように坐具を敷いているのである。しかし、中国や日本ではこのようなことは希なので、礼拝の時にこれを敷くのである。律の中にはそのようなことが書かれていないけれども、事によってこれを用いるのは間違いでは無い。このことにより、今、用いられているのは身体や衣のためなのである。これは前に説いたように、律に云う所の身体のためや衣のためや僧の臥具のためなのである。

諦忍は『釈門歸敬儀』にある「為僧臥具」の四文字を除いて解釈しているが、事用によって坐具を使うことを知らなければならぬ。了然の『釈門歸敬儀通眞記』にも、義をもって制縁を約せば身衣のために坐具を敷き、これに準じて礼拝の時に敷いて展べるとあるので、前説と同じことである。

南山は、その時々に応じて坐具をもちいると謂っている、これは制意だといえる。

昔、底沙如来が瑠璃龕^{がん}に入った時、尼師壇を敷いて結跏趺坐をして火界定に入った、と新婆娑の百七十七に出ている。

さらに、言うまでも無いが、「當麻曼荼羅」の欣淨縁に、阿難が佛に向かって坐具を展べて合掌している姿があるが、どうしてそれが仏の聖意に背くことであろうか、と諦忍が『尼師壇顯正録』で取り上げている道宣の『戒壇圖經』の文言を取り上げて批判したのである。

② 諦忍の反論（その一）

そこで、随天が批判した諦忍の『尼師壇顯正録』では、何が主張されているのかみることにする。

諦忍の『尼師壇顯正録』は、宝暦三年（一七五三）五月に著され、十一年後の宝暦十四年（一七六四）九月に初版が版行され、さらにその十三年後の安永六年（一七七七）、『律苑行事問辨』巻十の後に附録の体裁で『坐

具顯正録』が付加されている。

その『坐具顯正録』の出版の意図は「序」に表れている。

坐具顯正録序

坐具者比丘六物随一而座臥所用也然中古以来誤做禮拜之具支那日本雷同不知其非却爲佛門好儀則足可悲矣今詳引經律論正文而爲龜鏡一洗千歲之紕繆以訓吾黨少子耳

尾陽興正空華叟題

（坐具顯正録序

坐具は、比丘六物の随一にして坐臥に用いる所なり。然るに、中古以来、誤りて禮拜の具と做す。

支那、日本、雷同して其の非を知らず。却て佛門の好儀則と爲す。悲しむ可きに足れり。

今、詳らかに經律論の正文を引きて龜鏡と爲し、千歳の紕繆を一洗す。以て吾が黨の小子に訓ずるのみ。

尾陽興正空華叟題

とあるように、坐具は、僧尼が常に所持すべき六種類の生活必需品（僧伽梨（九条乃至二十五条袈裟）・鬱多羅僧（七条袈裟）・安陀会（五条袈裟）の三衣と鉢（三衣一鉢）、坐具（尼師壇）と漉水囊）の一つであり、座臥に用いるものである。しかし、中古から誤って礼拝の道具として用いられてきた。支那や日本では、むやみに他人の考えに同調して、その誤りを知らないのである。むしろ仏門の好い儀礼の規則として用いられていて、悲しむべきことである。そこで今、詳細にわたって經律論の正しい文を引いて、手本となるように示し、長い間の誤りを一洗したいと考えている。そして吾が教えの弟子達に正しく伝えたいということである。

この序文のもとに、坐具は坐臥に用い、礼拝に用いないことを經律論を挙げて、

- ・礼拝に坐具を展べないし、不淨物を包むものであり、この坐具を礼仏に用いるのは不敬であること。
- ・坐臥に坐具を用いるのは印度の本義であり、礼拝に用いる説は無いこと。

を主張するのである。

③ 震純の諦忍批判

この諦忍の『坐具顯正録』に対する批判については、先の随天の『大経曼陀羅開壇記』巻一によるものと、もう一つ、明確に『坐具顯正録』を「弾」ずるという震純の『彈坐具顯正録』^(注5)がある。

震純（明和二年頃、浄土宗増上寺学寮袋谷の学頭を務める。蓮馨寺二十八世雄蓮社絃誉震純）^(注6)は、随天が著した『大経曼茶羅開壇記』明和三年（一七六六）より一年早い明和二年（一七六五）に『彈坐具顯正録』を著しているが、これは写本で伝わり、刊行されなかったものであるが、大谷大学図書館に現存する『彈諦忍破靈之章』『大衣重複辨料簡鈔』の合本の最後尾に附録的に掲載されているものである。その『彈坐具顯正録』は、冒頭で、

彈坐具顯正録

縁山南寓沙門震純撰

坐具之説随_二経律論_一非_レ一諸家章疏極博今且就_二南山所釈_一索_二義於群典_一後爲_レ説者紛然綱紀不治猥僻_二解南山之釋_一幔幢之妄不_レ足_レ評而已近尾州諦忍爲_二之断案_一號爲_二坐具顯正録_一反覆讀_レ之擾_二亂正義_一豈爲_二其制意之深_一乎今彈_二有_レ過者_一請諸学律宜_二通曉_一耳

（彈坐具顯正録

縁山南寓沙門震純撰

坐具の説、経律論に随い一つに非ず。諸家の章疏極めて博し。今、且つ南山所釈に就いて、義に於いて群典を索るに、後の説を爲すは、紛然として綱紀治まらず。猥^{みだ}りに南山の釋を僻解し、幔幢^{まんどう}の妄を評するに足らずのみ。

近尾州、諦忍、この断案を爲す。號して坐具顯正録とす。反覆してこれを讀めば、正義を擾^{じょうらん}亂するものなり。豈に其の制意の深を爲さんか。今、過有るを弾じ、諸々の学律に請う。通曉、宜しくするのみ。）と記し、坐具の説は、経律論にあるように一つではない。諸家の章疏も極めて博く、今、南山の所釈について、

多くの出典を探っても、様々な説が入り交じり、大元が定まらない状態である。勝手に南山の釈を曲解して、慢心の旗を掲げているような誤ったことは批評するに足らないだけである。近尾州の諦忍は、この誤った考えを記す『坐具頭正録』というものを著している。これを反覆して読むと、正義を乱すものである。どうしてその制意の深さを考えないのだろうか。今、過ちを弾じて、諸々の学律に請うものである。何事にも精通していなくてはならないことである、と震純が記し、諦忍の『坐具頭正録』を批判するために記されたものであることを知ることができる。

そして次のようなことを根拠に、指摘するのである。

今對_二映戒壇圖經所引別傳_一 礼時敷_二尼師壇_一者歸敬之當_二極誠_一 傳中敷_二坐具_一 可_レ知爲_二身衣_一 南山據_二事用_一 理須_二坐具_一 可_レ謂得_二制意_一 矣當今坐席此具似_二無用_一 雖_レ然既爲_二制物_一 誰人開_レ之若爾礼佛須_レ之於_レ理無害也然妄録謂我今高揭_二四墨印_一 十誦四墨 豈如是耶 打_二破千載膠固之妄習_一 鹵莽秦塞謾微_二古德_一 自不_レ解_二文儀_一 儀版敬 放言爲_二齟齬_一 爲_二無根蔓語_一 自断曰坐具包_二大便_一 裹_二腎精_一 此汗穢不淨物何可_レ得_レ展_二佛_一 僧上座前_一 乎礼佛之時用_レ之不敬之極無過之也亦曰敷_二包_一 己精穢_一 盛_二臭糞_一 之具_一 乎吁此鄙言真愚叢之妄作也若局_二坐臥具_一 固執爲_二穢物_一 未審妄録所出如_二阿育王經云_一 迦葉欲_レ結_二集法藏_一 共_二五百羅漢_一 往_二畢波羅延窟_一 五百阿羅漢次第坐_二其坐處_一 舖_二尼師壇_一 文不_二是礼拝_一 如_二妄録_一 執爲_二穢物_一 結_二集法藏_一 於_二坐處_一 豈須_レ之耶

(今、戒壇圖經所引の別傳を對映するに、礼時に尼師壇を敷くは、歸敬の極誠に當る。傳の中に坐具を敷くは、知る可し。身衣の爲ならん。南山、事用に據り、理、坐具を須_{もち}いるとは、制意を得たりと謂う可し。當今、坐席の此の具、無用に似て然ると雖も、既に制物と爲す。誰の人が之を開せん。若し爾るに礼佛に之を須ゆ。理に於いて無害なり。然るに妄録に謂わく。我、今、高く四墨印を掲ぐへ十誦四墨、豈に是の如く)。千載膠固の妄習を打破し、鹵莽秦塞し、謾に古徳を徴すと。自ら文儀を解せず(皈敬儀)。放言して齟齬を爲し、無根の蔓語と爲す。自ら断じて曰わく。坐具は大便を包み腎精を裹_{もつ}む。此の汗穢不

淨物、何ぞ佛僧の上座の前に展べ得る可し。礼佛の時、この用不敬の極、過無くこれなり。また曰わく。己が精穢を包み臭糞を盛るの具を敷かん。ああ、此の鄙言、真に愚叢の妄作なり。若し坐臥の具に固執して穢物と爲せば、未だ審らかに妄録所出の阿育王經に云う如し。迦葉、法藏を結集せんと欲し、五百の羅漢と共に畢波羅延窟に往く。五百の阿羅漢、次第に其の坐處に坐して尼師壇を舖く、の文。是れ礼拝にあらざるも妄録の如く執る穢物と爲すは、法藏、結集する坐處に於いて豈にこれを須えんや。）

今、道宣の『関中創立戒壇圖經』をみると、礼時に尼師壇を敷くのは、『釈門歸敬儀』の誠であり、坐具を敷くのは身と衣と僧の爲であることによつて、理論的に坐具を用いるのは制意を得ていると言ふべきである。今、坐席に坐具が無用ということに似ているけれども、これは既に制物として用いるので、誰がこれを否定できようか。これを礼仏に用いることは理論的に無害である。

だから妄録（『坐具顯正録』）に、「我、今、高く四墨印を掲ぐ。千載膠固の妄習を打破し、鹵莽秦塞し、謾に古徳を徴す」とあるのは、自らが文儀を理解していないことである。これは、諦忍の放言であり、食い違つた見方であり、無根の蔓語である。

坐具を大便や腎精を包む物であり、汗穢不淨物というのであれば、仏や僧の坐す上座の前に展べることができだろうか。もし礼仏の時これを敷いたら不敬の極みであるのに、実際は何も咎がないではないか。さらに、己の精穢を包み臭糞を盛つた坐具を敷くとも記しているが、鄙言であり、真に愚かな妄作である。

また、『阿育王經』の「迦葉が法藏を結集せんと欲して、五百人の羅漢と共に畢波羅延窟に往く。五百の阿羅漢、次第に其の坐處に坐して尼師壇を舖く」という文を引いているが、これは礼拝では無いが、妄録の引用するように穢物とするのであれば、法藏が結集する場にどうして用いるだろうか、用いるはずがないであろう、と震純は痛烈に批判しているのである。

さらに、

又賢愚經曰舍利弗以_二尼師壇_一著_二左肩上_一入_レ衆降_二邪道_一等僧祇并毘奈耶大同亦是爲_二穢物_一得_下長疊中疊著_二衣囊上_一左肩上擔_上依_レ是新作之者不_レ穢是亦不_レ然五分律曰須_二揲_二四角_一不_レ揲則已鼻奈耶云新尼師壇故者緣_二四邊_一上已へ中略

（また、賢愚經に曰わく。舍利弗、尼師壇を以つて左肩上に著け、衆に入りて邪道を降ろす等へ僧祇並びに毘奈耶、大いに同じ）。また是れ穢物と爲す。長く疊み中疊みに衣囊の上に著けて左肩の上に擔ぐを得。是れに依りて新作の者は穢せず、是れまた然らず。

五分律に曰わく。須く四角に揲すべし。揲せずんば則ち己ねと。

鼻奈耶に云わく。新尼師壇には故ち四邊の縁をもつへ已上）。

右のように『四分律刪繁補闕行事鈔』(注7)に引用されている『賢愚經』『僧祇』『五分律』『毘奈耶』の文をもとに、尼師壇を左肩上に著ける例等を挙げ、特に穢す物では無く礼仏に坐具を用いることは不敬ではないことを提示している。

我今施_二四說_一礼佛用_レ之不敬之制在_二何律_一耶礼佛須_レ之経律無_レ文南山既述何待_二汝警言_一乎因云先有鳳潭者迂曲之辨欲攀終南山今願妄録者潭家之奴隷而已
不_レ知_二本制所_一以由起_二唯執_二一事_一爲_二穢物_一汝爲_下包_二臭糞_一拭_二精穢_一之具_上曰行_レ之歟無_二諦忍正_一之則天下坐具之制無_二得而知_一矣吁附佛法之魔説至_レ此最可_レ悲哉古曰七曜羸_レ天盲者不_レ見雷霆震_レ地聾者不_レ聞焉今成_二較準_一一披_二條領_一負識高祿釋然大觀

日本明和乙酉年正月

彈諦忍破靈芝章

（我れ今、四説を施し、礼佛にこれを用いて不敬の制とするは、何の律に在るや。礼佛にこれを須_もいること経律に文無し。南山、既に述す。何ぞ、汝、警言_{ごうげん}を持さんへ因みに云う。先に鳳潭有り、迂曲の辨。終に南山に攀_{すが}らんと欲す。今、顧みて妄録は、潭家の奴隷のみ）。本制の由、起こる所以を知らず。唯、一事に執して穢物と爲す。

汝、臭糞を包み、精穢を拭うの具とすと曰わくに、これを行ずるか。諦忍これを正すこと無けんは、則ち天下坐具の制を得て、而も知ること無からん。ああ、ついに佛法の魔説、ここに至れり。最も悲しむ可きかな。

古に曰わく。七曜、天を轟^あす。盲者は、雷霆、地に震うを見えず、聾者は聞けずと。今、較準を成す。一つに條領を被るに負識の高潔、釋然として大觀ならん。

日本明和乙酉年（明和三年（一七六六）正月

彈諦忍破靈芝章

このように、『四部律行事鈔』『賢愚經』『五分律』『毘奈耶』等をみても、礼仏に坐具を用いることを不敬の制とするものは無い。何の律にあるのだろうか。南山も既に述べていることであり、どうして奢り高ぶった言葉を用いるのだろうか。因みに、鳳潭も以前に同じようなことを述べているというが、妄録はまさに鳳潭の奴隸といえるものである。坐具の本制の起った所以も知らずに、ただ一つの事に固執して穢物としているのである。

汝が、「臭糞を包み、精穢を拭うの具とす」というものであれば、礼仏を行ずることができるであろうか。

諦忍がこれを正すことが無いということは、坐具の制を知らないことである。ああ、ついに仏法の魔説がここに至り、最も悲しむべきことである。

いにしえに、七曜が天を乱すとある。まさに盲者は激しい雷が地を揺るがすのが見えず、聾者には聞こえないものである。今、これに較して、一つの愚説を被ることは、負の知識を高く掲げているようなものである。

今、ここに述べたことにより、釋然として大觀するようなものである。

この震純の『彈坐具顯正録』は写本で伝わったため、諦忍の眼に触れていなかったのではないかという川口高風氏の見解^(注8)があり、それによると「本書は写本で伝わり、刊行されなかったため、諦忍が拝覧したかどうかは明らかでなく、諦忍による反論はなかった」というのである。通常であれば、自著に『彈』と冠されて批判され

た書であれば、著者は黙認する筈は無く、まして論争を好むかにみえる諦忍が見過ごすことはないと思われる。

④ 諦忍の反論（その二）

次に、『坐具顯正録』を批難された諦忍が、随天に対し、『獅子林漫筆』^(注9)によって反駁する様子を見ることにする。

○東武^{問近年梓行ノ}光照寺^ノ随末所^ノ著ノ大經曼荼羅開壇^マ記ニ予カ坐具顯正録ヲ難^駁シテ曰西土衆僧於^ニ樹下石上^ニ修行者多故恐^ニ損^レ身損^レ衣故須^レ敷^レ之支那本邦此事希也故或礼時敷^レ之律中無^レ文據^レ事用^レ之無^レ違者也況當麻變相欣淨緣中有^下阿難向^レ仏展^ニ坐具^一而合掌^上豈乖^ニ聖意^一^{上巳}

（問う。近年梓行の大經曼荼羅開壇記に、予が坐具顯正録を駁して曰く。西土の衆僧は、樹下石上に於いて修行する者多し。故に身を損じ、衣を損ぜんことを恐る。故に須くこれを敷くべし。支那、本邦には、此の事、希なり。故に或るは礼時にこれを敷く。律の中に文無けれども、事に據りてこれを用うるに、異なること無きものなり。況んや當麻變相欣淨緣の中に、阿難、仏に向かい坐具を展べて合掌する有り。豈、

聖意に乖かんや。（以上）

此儀充當ナリヤ否^{答全ク充當ナラシム}
今案^{スル}ニ當麻の元圖年ヲ歴ルコト久シキ故ニ彷彿トシテ其相分明ナラスニ轉三轉展轉傳写して眞ヲ失スルコトモ亦多シ禁父縁ノ下ニ目連富樓那ノ二聖雲ニ乗シテ來ル處ニ今時世流布ノ直綴ニ画キ成リ禁母縁ノ處ニ目連阿難ヲ画クモ亦尔リ是大ナル紕謬ナリ^{ニシテ一}今阿難向仏展坐具モ亦大^{同前}紕謬ナリ是蓋シ指授ノ人ト画工ト皆不^レ知^レ法ガ所^レ致ニシテ一盲引^ニ衆盲^一ノ謂ナリ

（此の儀、充當なりや否や。答う、充當ならん。

それ当麻の元図、年を歴ること久しき故に、彷彿として、其の相、分明ならず。
二転、三転、展転、伝写して眞を失することもまた多し。

禁父縁の下に、目連、富楼那の二聖、雲に乗じて来る処に、今時、世に流布の直綴じきとつに画えがき成なせり。

禁母縁の処に、目連、阿難を画くもまた爾り。是れ大なる紕謬きびうにして、一笑に堪えたり。今、阿難、仏に向かいて坐具を展べるも、また同前なり。是れ、蓋し、指授の人と画工と、皆、法を知らざるが致す所に
して、一盲、衆盲を引くの謂いなり。）

今此大經曼荼羅マントラ華頂ノ義山指南シテ敬輔ニ画シムル所ナリ義山元來文盲ニシテ不レ知レ律故ニ如是ノ紕謬アリ随天若ル訣ヲ知ラス信二義山一泰山靠ガ如ニシテ却テ予カ正義ニ向テ觜ヲ弄スルハ絶倒ニ堪タリ居吾汝ニ正義ヲ開示セン諦聽諦聽

（今、此の大經曼荼羅は、華頂の義山指南して敬輔に画かしむる所なり。義山、元來、文盲にして律を知らず。故に是の如くの紕謬あり。随天、若わかる訣わけを知らず義山を信ずること泰山に靠よりかかるが如くにして、却つて予が正義に向いて觜くちばしを弄するは、絶倒に堪えたり居おけ。吾、汝に正義を開示せん。諦聽。諦聽。

ソレ世上ニ臣トシテ君ニ見ルニハ頭ヲ地ニ着テ極メテ礼敬ヲ尽スナリ此時毛氈或ハ蒲團ヲ敷テ傲倨スルモノアルベカラス若傲倨セバ不敬ニ坐セラレテ刑罪ニ逢ベシ世礼スラ既ニ尔リ況ンヤ出世間ノ無上法王ヲ礼スルニ於テヤ仍テ経律ニ五體投地ニ礼敬スル儀ヲ説リ此時何ソ座物ヲ敷ンヤ

（それ世上に臣として君に見まみえるには、頭を地に着けて、極めて礼敬を尽すなり。此時、毛氈或は蒲團を敷て傲倨するものあるべからず。若し傲倨せば、不敬に坐つせられて刑罪に逢うべし。世礼すら既に爾り。

況んや出世間の無上法王を礼するに於てをや。仍て経律に五体投地に礼敬する儀を説り。此時何ぞ座物を敷んや。）

若座物ヲ敷バ傲倨ノ甚シキナリ。不敬ノ罪ヲ鳴シテ法中ヲ擯出シテ可ナリ。

（若し座物を敷かば、傲倨の甚だしきなり。不敬の罪を鳴らして法中を擯出して可なり。）

予一代大藏ヲ拝見スルニ礼仏ノ時座物ヲ敷ノ事ナシ世礼ヲ以テ例スルニ爾アルヘキ筈ナリ況ンヤ坐具ハ元不

淨汚穢ノ物ナリ人前ニ出スヘキモノニ非ス況ヤ仏前ヲヤ

(予、一代の大蔵を拝見するに、礼仏の時、座物を敷くの事なし。世礼を以って例するに、爾あるべき筈なり。況んや坐具は、元、不淨汚穢の物なり。人前に出すべきものに非ず。況んや仏前をや。)

随天夢ニモ此事ヲ知ラス却テ不正義ヲ演口スルハ老耄ノ甚シキナリ今ハ意ヲ此留ムル者ナリ天下一等ノ弊ト成ル正法ノ衰微此極ニ至レリ痛哭流涕シ長大息ヲ発スルニ堪タリ仍テ顓正録一卷ヲ述テ其正義ヲ開示ス大厦ノ頹ハ一木所支ニ非ルコトヲ知ルトイヘトモ大施抒海ノ微志ヲ運コト爾リ

然今随天予ガ多年為法ノ苦心ヲ知ラズ却テ啄ヲ容非ヲ文ルヲ見テ婆心ヲ吐露シ畢ル者ナリ以後見述獎記開檀記人宜ク此意ヲ領會セラルヘシ

八事山獅子林五十八夏諦忍八十一歳書

(随天、夢にも此の事を知らず。却って不正義を演口するは、老耄の甚だしきなり。今は意を此に留むる者なり。天下一等の弊と成る正法の衰微、此の極に至れり。痛哭、流涕し、長大息を発するに堪えたり。仍って顓正録一卷を述べて其の正義を開示す。

大厦の頹るは、一木の支うる所に非ざることを知るといへども、大施、海を抒むの微志を運ぶこと爾り。然るに今、随天、予が多年為法の苦心を知らず。却って啄を容れ、非を文るを見て、婆心を吐露し畢る者なり。以後、述獎記、開檀記を見ん人、宜しく此の意を領會せらるべし。

八事山獅子林五十八夏諦忍八十一歳書

(注) 『獅子林漫筆』の草稿を加除訂正して再校後に『空華談叢』として刊行される。

棒線は、見せ消ち部分、その傍に書入れである。≡

随天に自書『坐具顓正録』を批難された諦忍は、その書『獅子林漫筆』で、痛烈な反駁をするのである。そこには浄土宗の高徳、華頂良照義山も絵師高田敬輔も、さらに随天も、「文盲」、「老耄」と齒に衣を着せぬ文言で反駁されるのである。

このように諦忍は、随天が良照義山の説をとって『大経曼荼羅開壇記』で『坐具顕正録』を批判し、良照義山に指南を受けた画工の高田敬輔の描いた「無量寿経曼荼羅」をもって、礼拝の道具とした画図を認めているので、良照義山もまた老耄と批難し、さらに良照義山の『當麻曼陀羅述獎記』や随天の『大経曼荼羅開壇記』も「痛哭流涕シ長大息ヲ發スル」ようなものだから心して理解して欲しい旨を記しているのである。

そして、『獅子林漫筆』を再校し、整理して刊行された『空華談叢』^(注10)では、

問近年梓行ノ大経曼荼羅開壇記ニ坐具顕正録ヲ駁シテ曰西土ノ衆僧於樹下石上修行者多故恐損身損衣故須敷之支那本邦此事希也故或礼時敷之律中無文據事用之無違者也況當麻變相欣淨緣中有阿難向佛展坐具而合掌豈乖聖意此義正理ニ契フヤ否 答是全ク邪説ナリ

(問う。近年梓行の大経曼荼羅開壇記に坐具顕正録を駁して曰わく。西土の衆僧は、樹下石上に於いて修行する者多し。故に身を損じ、衣を損ぜんことを恐る、故に須く之を敷くべし。支那本邦は、此の事希なり。故に、或るは礼時にこれを敷く。律中に文無けれども事に據りてこれを用うるに違する者無し。

況んや當麻變相欣淨緣の中に、阿難、佛に向いて坐具を展べて合掌する有り。豈、聖意に乖かん(已上)。この義、正理に契うや否や。

答う。是れ全く邪説なり。)

夫當麻ノ元圖年ヲ経ルコト久シキ故ニ其相彷彿トシテ分明ナラズニ轉三轉展轉傳寫シテ眞ヲ失スルコト亦多シ禁父縁ノ下ニ目連富樓那ノ二聖雲ニ乗ジテ來ル處ニ今時世僧ノ著用スル直綴ニ画キ作り禁母縁ノ處ニ目連阿難ヲ画モ亦尔リ是大紕繆ニシテ一笑スルニ堪タリ今亦阿難向佛展坐具同前ノ紕繆ナリ是蓋シ指授ノ人ト画工ト皆不知法ガ所致ニシテ一盲惹衆盲謂ナリ

(夫れ當麻の元圖、年を経ること久しき。故に其の相、彷彿として分明ならず。二轉、三轉、展轉、傳寫して眞を失することまた多し。禁父縁の下に、目連、富樓那の二聖、雲に乗じて來る處に、今時、世僧の著

用する直綴に画き作り。禁母縁の處に、目連、阿難を画もまた尔り。是れ大紕繆にして一笑するに堪たり。今、また阿難、佛に向かいて坐具を展るも同前の紕繆なり。是れ蓋し指授の人と画工と、皆、法を知らざるが致す所にして、一盲、衆盲を惹くの謂なり。」

夫世上二臣トシテ君ニ見ニハ頭ヲ地ニ著テ極テ礼敬ヲ盡スナリ此時毛氎或蒲團ヲ敷テ傲倨スルモノアルベカラズ若傲倨セバ不敬ニ坐セラレテ刑罪ニ逢ベシ世礼スラ既ニ尔リ況ンヤ出世間ノ無上法王ヲ礼スルニ於テヤ仍テ経緯ニ五體投地ニ礼敬スル儀ヲ説リ此時何ゾ座物ヲ敷テ傲倨センヤ義山随天文盲ニシテ不知律老耄ノ甚シキナリ《以下、略》

（夫れ世上に臣として君に見には、頭を地に著て極て礼敬を盡すなり。此の時、毛氎或るは蒲團を敷て傲倨するものあるべからず。若し傲倨せば、不敬に坐せられて刑罪に逢べし。世礼すら既に尔り。況んや出世間の無上法王を礼するに於てをや。仍て経緯に五體投地に礼敬する儀を説り。此の時、何ぞ座物を敷て傲倨せんや。義山、随天、文盲にして律を知らず。老耄の甚しきなり。【太字、筆者】）

というように、「是れ全く邪説なり」「是れ蓋し指授の人と画工と、皆、法を知らざるが致す所にして、一盲、衆盲を惹くの謂なり」「義山、随天、文盲にして律を知らず。老耄の甚しきなり」と述べ、良照義山や随天を名指しで非難し、「法を知らず、律を知らず」とまで断言しているのである。

(二) 考察

右の論争の経緯について、時系列で再度みれば、次のようになっている。

① 発端Ⅱ 諦忍が、坐具は坐臥に用いられ不淨物を包む物であり、礼仏に用るのは不敬である。

＊ 諦忍『坐具顕正録』【宝暦十四年（一七六四）九月】

② 震純の反論Ⅱ『坐具顕正録』を、道宣の説を曲解していると批判。

＊震純『彈坐具顛正錄』〈写本のため、諦忍の目に触れなかったか？〉【明和二年（一七六五）】

③随天の反論Ⅱ近頃有る人（諦忍）が、坐具を礼仏に用いることは不敬というが、聖意に乖くものではない。

＊随天『大経曼荼羅開壇記』【明和三年（一七六七）〜、刊行は十二年後の安永七年（一七七八）】

④諦忍の反論Ⅱ「華頂の義山指南して敬輔に画^かしむる所なり。義山、元來、文盲にして律を知らず」と反論。

＊諦忍『獅子林漫筆』【天明五年（一七八五）】

⑤諦忍の再反論Ⅱ『獅子林漫筆』を再校し、『空華談叢』でさらに反論。

＊諦忍『空華談叢』【天明六年（一七八六）】

なぜこのような論争が、宗派を越え、人を越え、卑しい文言を書き連ね、名指しで行われたのか。また、行われなければならなかったのか。

このことを考えた時、その一つの明確な答えは、高田敬輔の「無量寿経曼荼羅」が単なる一介の掛け幅ではなく、浄土宗の僧侶は勿論、真言宗の学僧をも巻き込み、互いに論点・視点をもとに主張しあうほどの大きな影響力を持ち、価値が高かったということではないだろうか。そのことを諦忍律師が、自ら証明したようなものだといえるのである。

さらに、論拠となっている「坐具」は一例に過ぎないが、その根拠となる経律論の出处と明確な解釈の背景には、両者の宗典に対する自己認識を再確認する姿勢と、改めて諸経論、註釈書、疏書類を学び直すという建設的な研鑽の姿勢をみることができるのである。

そして、諦忍律師が奇しくも明らかにしていることであるが、第三者の諦忍が「華頂義山指南シテ敬輔ニ画シムル所ナリ義山元來文盲ニシテ不^レ知^レ律」と記した文言は、すなわち良照義山と高田敬輔の両者の師弟関係、典籍研究者と絵師との連携無くしては産み出すことができなかったという、両者の関係性を明確に証明したということができるのである。

第三項 小結

以上、「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響として、一つは【忍海「大経曼荼羅図」】と、もう一つは、【震純・随天と諦忍の論争】という視点でみてきたが、次のようなことを知ることができる。

(一) 忍海「大経曼荼羅図」に関連して

① 高田敬輔と忍海が、ほぼ同時期に『無量寿経』を絵画表現した曼荼羅様の絵相を描いているが、明らかに異なる点は、絵師と画僧という立場の違いによって、それぞれ独自の様相を呈していることである。

絵師高田敬輔は、一般庶民や初学の僧侶に向けたと思われる極楽浄土の絵相を画面中央に大きく描き、耳目を集める画法を取り、その浄土へ往生するためには、三毒を捨て、現世を厭い、三悪趣道へ墜ちないように、法蔵が成満大願によって開かれた浄土へ、三輩に応じた念仏を行じることによってできるという理解しやすい構成をとっている。

一方の画僧忍海は、僧侶の立場を前面に出した『無量寿経』の教義そのものの理解と普及を前提にした画面構成がなされている。画面の半分以上を、法蔵比丘が世自在王の前で説願する様相を占め、その周りを上縁左端から時計回りに順次巡るように五十余りの標章と絵相で取り囲んでいる様相である。

② 両者のそれぞれの曼荼羅の形状が、大きく異なっていること。

高田敬輔のものは、一般的な掛幅状で、携行しやすく着脱が容易であることから、檀信徒や僧侶への布教用に最適であること。さらに木版印本であるため、大量に同様のものが印施できたこと。

一方の古碯のものは、題字の書き入れがなく、『無量寿経』を知る者でなければ、その内容理解が困難であるので、僧侶や仏理に明るい者向けに描かれたと想定されること。また、縦二m半、横二mの大判の

絹本であることから、携行用よりは寺院の参拝の対象として固定されていたことが想定されること。

- ③ 高田敬輔のものには、増上寺四十三世大僧正連察の題賛や林丘寺松領元秀尊尼の『無量寿経』流通文の書き入れを知る款記があり、高僧や皇族関係との関連性をみることができ、曼茶羅の価値評価が高いことを知ることができること。

(二)

震純・随天と諦忍の論争に関連して

- ① 諦忍の『坐具顕正録』で、坐具は坐臥に用いられ不浄物を包む物であり、礼仏に用るのは不敬であるという論述を糸口に、震純が『彈坐具顕正録』で、そして、随天が『大経曼茶羅開壇記』で批判し、さらに諦忍が『獅子林漫筆』『空華談叢』で反駁するという現実問題が生じたこと。

- ② 論争の経緯から、高田敬輔の「無量寿経曼茶羅」が単なる一介の掛け幅ではなく、浄土宗の僧侶は勿論、真言宗の学僧をも巻き込み、互いに論点・視点のもとに經典を引き、主張しあうほどの大きな影響力を与えるほど価値が高かったこと。

- ③ 論争とはいえ、「華頂義山指南シテ敬輔ニ画シムル所ナリ義山元來文盲ニシテ不知律」等の名指しの非難の記述は、目にあまるものがあるが、一方では、諦忍が、義山と敬輔は師弟関係であることや「無量寿経曼茶羅」は義山と敬輔が一体となって成立したものであることを容認していること。

(注1) 『特別展没後三百年 画僧古磻』(二〇一七年 大和文華館)【一六九頁 作品解説《4 大経曼荼羅図 一幅》】

裏書についての記載事項の中に次のように記されているということである。

「此大経之曼陀羅者予從來依為 / 懇望郡山西岸寺古磻和尚令圖畫 / 給與處也寺内不出之尊像當寺什 / 物也法界之以助力令成就平依之法名 / 俗名為二世安樂結縁裏書記者也 / 皆正徳二壬辰年八月日 / 淨國院第八世 / 心蓮社澄誓欽的」

(注2) 随天『大経曼荼羅開壇記』(本論文第三章第一節参照のこと。) * 衛供【浄全第十九卷二八二頁】の職を受ける。

(注3) 諦忍『坐具顯正録』(宝暦十四甲申歳(一七六四)正月元旦 知恩院町古門前 澤田吉左衛門 神洛書堂)

(注4) 諦忍(妙龍。宝永二年(一七〇五)六月二二日―天明六年(一七八六)六月一〇日。雲蓮社空華、字は諦忍。空華子とも称す。名古屋八事山興

正寺(高野山真言宗)五世。真言宗の僧で戒律や浄土にも通じた。(以下、略)【新纂浄土宗大辞典一四二〇頁】

(注5) 震純『彈坐具顯正録』(大谷大学図書館蔵『彈諦忍破靈芝章 大衣重複辨料簡鈔 全』明和二乙酉三月(一七六五年))

『彈諦忍破靈芝章』に『明和二乙酉三月』の識語。その後「彈坐具顯正録」があり、その識語が『日本明和乙酉年正月』とあり、著作の順序が前後している。)

(注6) 震純(雄蓮社絃譽震純)

* 袋谷隅、学頭寮の学頭【浄全第十九卷三九一頁】(明和八年十二月二十三日蓮馨寺、安永七年八月十一日寂)【浄全第十九卷四一五頁】。

* 川越蓮馨寺二十八世(明和八年十二月二十三日住、安永七年八月十一日化)【浄全二十卷一一四頁《檀林川越蓮馨寺志》】。

(注7) 道宣『四部律刪繁補闕行事鈔卷下』一〇八頁c 14 (大正新修大蔵経四〇卷 律疏部・論疏部一八〇四)

鼻奈耶云。新尼師壇。故者縁四邊以亂其色。若作者應安縁。五分須揲四角。不揲則已。

(鼻奈耶に云わく。新尼師壇には故者の縁の四邊を以って其の色を亂し、若し作らんには、應に縁を安くべし。五分には須らく四角に揲すべく、揲せずんば則ち已む。)《『國譯一切經』和漢撰述部 律疏部二 三四五頁》

同書『四部律刪繁補闕行事鈔卷下』一〇九頁a 09

僧祇得敷坐。在道行。得長疊中疊著衣囊上左肩上擔。若至坐處。當敷而坐。若置本處。當中揲之。後徐舒而坐。凡坐法應先手按然後乃坐。

賢愚經舍利弗以尼師壇著左肩上。入衆降邪道。鼻奈耶多文。著肩上入出坐禪。今在左臂定是非法。

(僧祇に、敷いて坐するを得ん、道行に在りては長く疊み、中^{なかば}は疊みて衣囊の上に著け、左肩上に擔うを得ん。若し坐處に至らば、當に敷いて坐すべし。若し本處に置かんに、當に中、これを掄^おうべく、後に徐に舒べて坐せよ。凡そ坐するの法、應に先に手を以って按じて然して後に乃^{ない}し坐すべし。賢愚經に、舍利弗の尼師壇を以って左肩上に著け、衆に入りて邪道を降せりと。鼻奈耶の多文に、肩上に著きて山に入りて坐禪すとせり、今、左臂に在くは定んで是れ非法なり。)《『國譯一切經』和漢撰述部 律疏部二 三四六頁》

(注8) 川口高風『諦忍律師研究 下卷』七三七頁(一九九五年刊 法藏館)

(注9) 諦忍『獅子林漫筆』(天明五年(一七八五)夏 八事文庫【末尾に《八事山獅子林五十八夏諦忍八十一歳書》】)

(注10) 諦忍『空華談叢』(佛教大学図書館蔵 『空華談叢 四』 天明六年刊 皇都書肆 洛東知恩院門前 澤田吉左衛門壽梓)

「付録追加」部分に有り。卷四の卷末に門人等による「天明二年夏五月」刊行の経緯を記す跋文が有る。

尚、佛教大学デジタルコレクションには、未刊となった卷之五、卷之六、卷之七が公開されている。

終章

高田敬輔の描く浄土の世界

これまで序章から第五章にわたって、高田敬輔の描いた「選択集十六章之図」と「無量寿経曼荼羅」について論述してきたが、それによって知り得た内容を、今章で整理し、究極的に敬輔が描きたかった浄土の世界がどのようなものであったか、その視点を一つは《凡夫のための道しるべ》として「選択集十六章之図」を、もう一つは《目に見える西方極楽浄土》として「無量寿経曼荼羅」が存在したことを再確認するとともに、今後の研究課題を述べ、本論文の総括としたい。

序章は、高田敬輔の画業を先行研究を通して、①美術史、②浄土教教義、③近世の画論の三観点から考察した。

① 美術史の観点からは、各論者が、高田敬輔の伝記を伝える『敬輔画譜』の「高田敬輔翁略伝」をもとに、画歴を伝えている。その中でも特に注目すべき点は、浄土教の教理を教授した良照義山の存在、雪舟様の画風や大画を描く法を古碁から学んだこと、さらに京狩野派四代目狩野永敬に師事し、画法を身につけ、仁和寺に出入りが許され、法橋、法眼の僧位、藤原の姓と大目の官位が叙されたことを知ることができた。

ただ、本論文で考察する「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」については、制作の経緯や時期等は明らかにされているが、両曼荼羅の絵相や構成等についての浄土教的教理に基づく評価がされていない。従ってその教理的根拠を究明することに努めた。

② 浄土教の教理の観点から、「選択集十六章之図」、「無量寿経曼荼羅」の各諸本が何を強調して表現されているかその特色を把握するとともに、浄土宗、浄土真宗、天台宗系等の諸氏の論考をとりあげ、各宗でどのような解釈がされているかをみた。

坂野泰巨、新井俊定両氏は、「選択集十六章之図」の解説書として、湖月の『選擇集十六章圖說』（延享二年（一七四五）刊）と堀尾貫務『選擇集十六章圖略解』（明治廿三年（一八九〇）刊）の内容をほぼそのまま引用している。鷲津清静氏は、『通俗圖繪選擇本願念佛集』（高田敬輔原画と思われる挿絵）と『和字選択集』（高田

敬輔原画とは異なる忍海上人画の和風の挿絵）についてはふれている。これについては、別項（第二章第二節）で対比しながら検討を加えた。大室了皓氏、福原蓮月氏はそれぞれの独自の解釈をしているが、何を根拠に解釈したか出典が明示されず、概説的に自身が捉えた理解内容の記述になっている。

③ 近世の画論の観点からは、谷田輔長の『敬輔画譜』は、高田敬輔没後五十年に、弟子が師のことを書き著したもので、多少誇張された伝記的要素があることも否めない。だが、画論の中では最も詳細な経歴や画業を知ることができる貴重な書である。

近世の画論の中で、高田敬輔の評価は大きく二つに分かれていて、中山、三熊、中尾、白井、朝岡、川喜多の各氏は、概ね高い評価で、特に中山高陽は、鳥羽僧正、尾形光琳、俵屋宗達、馬渡高雲、古礪、松花堂昭乗等と肩を並べる専門画家として注目している。

しかし、中林竹洞は、『竹洞画論』で【画体いやし】と記し、品格に欠ける画風であると表現していることや、『画道金剛杵』で、【俗】の部門に挙げ、著明な絵師ではあるが、格下の取り扱いになっている。

白井華陽も柴田義董の話を取り上げ、狩野派の流れをくむ優れた独自の画風をもっていたが、田舎で満足せず大都会で活躍したら、狩野山楽や海北友松等にひけを取らない人物であると評し、幕府御用絵師のような舞台には立たず、自由に身をおく町絵師として生きた高田敬輔について、その活躍を惜しむ評価をしている。ここでは庶民の立場の町絵師の姿勢を崩していない、高田敬輔の画業と伝記を概観することができた。

これまでの先行研究から、高田敬輔の画業が、『敬輔画譜』『高田敬輔翁畧伝』の伝記の域を出ていないこと。

また、各画論にも絵師として高い評価を得ているものの、本論文で取り上げる「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」について、作成の経緯は触れられているものの、曼荼羅の全体構成や部分構成について、何を根拠に描かれた絵相であるかが、詳細な説明は無いのである。

つまり、高田敬輔の表現の視点に立った解釈が希薄であるということである。

第一章では、絵師高田敬輔の主な画業と宗教的環境について、『敬輔画譜』の「高田敬輔翁畧伝」や『高田敬輔と小泉斐』等の図録資料等を手がかりに考察を加えた。

第一節では、高田敬輔がどのような生涯を送り、どのような画業を成したのか検討した。そして、主な仏画の作成について時系列的に一覧表を作成し、その業績を明らかにした。

第二節では、高田敬輔の浄土教的環境を検討するために、大きく影響を与えたと考えられる良照義山、明誉古礪、曇誉忍海の浄土宗僧侶を『洛東華頂義山行業記並要解』や、近世画論、「忍海上人伝」等の諸資料を通して関わりをみるとともに、三者の関連や関係年譜を作成し、相互の影響を明らかにした。

一 念仏往生の《道しるべ》、「選択集十六章之図」

第二章「選択集十六章之図」の概要では、高田敬輔が描いた「選択集十六章之図」が、法然上人説くところの《凡夫のための浄土往生の道しるべ》であることを各絵相を通して精査した。

まず、第一節では、「選択集十六章之図」の全体の構成がどのようなになっているか検討し、敬輔の原版を元に町版と称される今井重左衛門版や模写本、明治期の銅版印刷本等五本、さらに、注釈書として、湖月、堀尾貫務の二本を検討し、概要を捉えた。

第二節では、高田敬輔原版の「選択集十六章之図」と明治期の銅版「選択集十六章之図」の掛幅二種と解説書である湖月『選択集十六章図説』と堀尾貫務『選択集十六章図略解』と平仮名で書かれた選択本願念仏集に挿絵が組み込まれた刊本『通俗図絵選択本願念仏集』と『和字選択本願念仏集』の計七本の資料を対比することにより、類似点や相違点を検討し、敬輔作成の意図を探るとともにそれぞれの特徴を把握した。

そして、第三節では「選択集十六章之図」の十六章各章の絵相の部分構成とその作成の背景を探るために、原

典とする『選択本願念仏集』の論述の典拠を明らかにしながら、元祖法然上人の説示を繙き、高田敬輔がどのようなことに着眼して描いたかを読み解いた。

この第二章の「選択集十六章之図」各章の分析を通して再確認したことは、高田敬輔が『選択本願念仏集』の一章一章を湛然に読みこなし、引用文、私釈、典拠文献が列举する中から、その章の最も重要な教理を一場面の絵に表現していることである。しかも、凡夫である一般庶民の立場に立って、老若男女、誰がみても理解できることを基本に据えた、まさに、西方極楽浄土への《道しるべ》としての存在と表現である。結果として一場面の絵に描かれているものの、それは決して思いつきや受け売りで描いたものではなく、その章を十二分に精査した結果の究極的な絵相であるといっても過言ではない。

その背景には、浄土宗典籍研究第一人者の良照義山からの教授、絵の師でもある画僧古磧、忍海からの影響は十二分に受けていたことが推測される。

また、高田敬輔の独自性が顕著に表れているのは、『選択本願念仏集』十六章の内容を十六の絵相に表現し、一枚の掛け幅に意図的に配置したことである。特に、第七章の阿弥陀仏を中央最上段に据え、弥陀の光明が他の十五章の念仏の行者に降り注ぎ、摂取不捨する大胆な構図であることは多大な評価をすべき点である。ここには、法然が『摧邪輪』や『興福寺奏状』で批難された『融通念仏縁起絵巻』にみられる「摂取不捨曼荼羅」とは異なる高田敬輔の独創的な発想の展開である。

ただ一つ残念なことは、第五章の標章を「第五 念佛現當利益章」としたことである。第十一章の内容である現當二世始終の両益の【現當】の二文字が第五章に入り、第五章の中心的教理である念仏一念大利無上の功德の主旨から外れ、明らかに誤認したものである。

ところが、この第五章の【現當】挿入の標章であることが、逆に、功を奏している部面もある。例えば、忍海画とする「彩色版・選択集十六章之図」や浄土真宗系で行われた「秘事法門」等に使われたとき

れる「選撰集十六章之図」が、敬輔誤認の【現當】入りの第五章の標章そのままを模写したり、記述した文言の中に表出しているのである。だから、高田敬輔の原画が模写や法座に使用されたという確たる証左となっているのである。

二 目に見える《西方極樂浄土》、「無量寿経曼荼羅」

第二章は、「選撰集十六章之図」が《凡夫のための道しるべ》であることを精査したが、その求める先は、いふまでもなく《西方極樂浄土》である。その念仏往生する浄土を想い描いたのが、第三章「無量寿経曼荼羅」の概要であり、第四章「無量寿経曼荼羅」の部分構成である。

第三章《「無量寿経曼荼羅」の概要》では、第一節で「無量寿経曼荼羅」を詳細に注釈した『大経曼荼羅開壇記』の「靈應」「定月」「随天」それぞれの序を読み解くことによつて「無量寿経曼荼羅」制作の背景と経緯、『大経曼荼羅開壇記』梓行の経過を精査した。その結果、「無量寿経曼荼羅」は、良照義山の教授のもとに前年の「選撰集十六章之図」に引き続いて描かれ、三十年後に嫡子三敬が東都に願い出て梓行されたもので、その際、林丘寺二世松領元秀の題額、増上寺第四十三世連察の題賛を賜わり、敬輔の菩提寺信樂院に保蔵されたことである。

そして、『大経曼荼羅開壇記』は、信樂院の淳公から注釈を依頼された隨天が著したが梓行されず、隨天の道友である靈應が拝覽し、増上寺第四十七世辯秀が賞賛して梓行を薦められたものの遷化し、未刊に終わったこと。その後、靈應が増上寺第四十九世に転昇し、未刊であった『大経曼荼羅開壇記』を錯脱、校正し、安永九年に梓行されたものであることを知ることができた。

第二節では、「無量寿経曼荼羅」の増上寺第四十三世連察による題賛を読み解き、多大な賞賛を得ていること

や右下部の款記から林丘寺二世松領元秀が題字の書き入れがあったことを確認することができたこと。また、『大經曼荼羅開壇記』の総科と「無量寿經曼荼羅」の標文を挿入した対比一覧表を作成したことによって、各絵相の配置と概要を把握することができたこと。

第三節では、「無量寿經曼荼羅」の《延享本》と《天保本》を比較検討し、相違点を明らかにしたことによって、「無量寿經曼荼羅」は、浄土宗寺院関係ばかりではなく、浄土真宗系の寺院にも流布されていたことを知ることができたこと。

また、第四節では、『無量寿經』流通文の書き入れに異字、欠字があることを確認し、さらに林丘寺宮松領元秀がどのような人物であったのか、林丘寺創建の経緯や皇族との関係を明らかにしたことによって、仁和寺における高田敬輔と皇室関係者との接点を探ることができたこと等をあげることができる。

第四章《「無量寿經曼荼羅」の部分構成》では、各部分の絵相について具体的に『無量寿經』の經文や『大經曼荼羅戒壇記』を踏まえながら検討を加え、何を表現したのか明らかにした。

第一節では、『無量寿經』の全体構成を描いた「明能説釋迦序正流三分」、いわゆる「序分説法之相」・「正宗説法之相」・「流通説法之相」の三絵相を精査した。その結果、「序分説法之相」の阿難請問の際の尼師壇に坐す絵相について、隨天の『大經曼荼羅開壇記』の記述を通して、真言宗尾張八事山興正寺諦忍律師と浄土宗僧侶との論争が起こる糸口になったこと。「正宗説法之相」では、西面する阿難、弥勒、釈尊の発遣の相とそれを取りまく八部衆、阿弥陀仏の光照が淨穢二土を照らす様相が描かれていること。「流通説法之相」では、阿弥陀仏の名号を末代まで流通するよう付属する様相が描かれていることを知ることができたこと。

第二節では、「述所説彌陀行成攝三段」の「所行（弥陀因位の願行）」について、「出家修道」では法蔵比丘が出家をする際の様相を描き、「現諸仏土」では二百一十億の諸仏妙土を二十一の仏土の宮殿として描き、中でも

大きい宮殿を西方極樂浄土と連想されるように描いていること。「五劫思惟」は、深山の洞窟の中で偏袒右肩の瘦せ瘦けた法蔵比丘が五劫の長い年月を思惟する様相が描かれること。「成満大願」は、世自在王に四十八願と四誓偈を約誓清証し、莊嚴仏国清淨の行を攝取した姿を表していること。「積功累徳」は、四種・国王・天の三類八種の世界に生まれ変わり、多数の人々を教化して無上正眞の道に導き、四事をもってあらゆる仏を供養恭敬したことにより、多大な功德を得た事が描かれていること。「妙土莊嚴」は、莊嚴妙土の行を已満し、一切法を身に着け、内外の莊嚴の為に供具を如意のままに身諸毛孔や手中から繰り出す法蔵菩薩が描かれることを知ることができた。

第三節では、「述所説彌陀行成攝三段」の「所成（弥陀果上の身土）」について、曼荼羅中央、中台部分に描かれる極樂段の様相を日本三大曼荼羅（當麻・智光・清海）と対比しながら精査した。「無量寿経曼荼羅」は中央宮殿と三種六樓、「當麻曼陀羅」は中央宮殿が無く三種六樓で構図的に共通点が多いこと。「無量寿経曼荼羅」は三輩生相、「當麻曼陀羅」九品生相、三尊と左右の聖衆は「無量寿経曼荼羅」五十一尊、「當麻曼陀羅」三七尊等と相違点があり、『観無量寿経』に基づく「當麻曼陀羅」とは異なり、「無量寿経曼荼羅」は典拠とする經典『無量寿経』の特色をより鮮明に描こうとする意図が表れた高田敬輔独自の曼荼羅であることを確認した。

第四節では、「述所説彌陀行成攝三段」の「所攝（弥陀現在の利物）」について、それぞれ経論を基に考察を加えた。「凡夫往生」では、「選択集十六章之図」と「無量寿経曼荼羅」の絵相の共通点である「三輩往生」を対比し、その特色を検討した結果、「無量寿経曼荼羅」には余行が描かれるが「選択集十六章之図」には描かれないこと。余行が描かれるのは、念仏と余行を並べて捨劣得勝し、廢立・助正・傍正の三義によって、ただ念仏の一行に帰することを強調するためであることを知ることができた。

また「挙煩惱過」「正明三毒」（三毒段）の二十の絵相は、貪・瞋・癡の三毒のうち食欲に比重がおかれ、特に『守護苦』『散失苦』『求財苦』に集中し、凡夫が財産に固執し、守る、失う、求めるの苦に足掻いている様

相が強調されていること。

「挙業苦過」の「業道」（五惡痛焼段）は、一惡痛焼から五惡痛焼までの五枠の中に、四十二の絵相が描かれ、それぞれ殺生惡・偷盜惡・邪淫惡・妄語惡・飲酒惡による業苦であり、五常・五善・善神の影護、善因善果、惡因惡果等の因果応報の道教的思想が色濃く盛り込まれているものの、念仏を通して五惡を離れて五善とし、三塗無量苦悩に堕ちる事無く、極樂浄土に往生して涅槃の妙果を得さしめることを意図した絵相であること。

さらに、「挙業苦過」の「苦道」（三塗無量苦悩段）では、『無量寿経』には直接的に「三塗無量苦悩」の説示はないが、四十八願の第一、第二願に筆頭に掲げられており、三惡趣の存在は重要視されている。敬輔の三塗無量苦悩段の絵相は、畜生道と餓鬼道はそれぞれ一絵相に描かれるが、地獄道は広く画面を占め、八大地獄の八種の絵相に描かれていること。特に地獄道は、『往生要集』の影響を多分に受け、典拠とする『正法念處経』に裏付けられており、黒繩地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄・焦熱地獄・大焦熱地獄・阿鼻地獄の六地獄名が用いられている。また、『俱舍論』からは、等活地獄・衆合地獄の二地獄名が引用されていること。『無量寿経』に説示が無いものを曼荼羅最下段に象徴的に描かれる三塗無量苦悩段は、取りも直さず一般衆生が堕ちてはならない身に迫る苦業として、強く印象づける構成になっていることを知ることができた。

第五章「選択集十六章之図」「無量寿経曼荼羅」の及ぼす影響では、第一節で「選択集十六章之図」が及ぼした影響として、大正期の資料から浄土真宗系の「秘事法門」の法座で「選択集十六章之図」が使用された形跡があることを、『選択集十六章画図講義』の資料及び菊池武氏の論考により確認できたこと。

またごく最近の出来事として、忍海画とされる「彩色版・選択集十六章之図」が、高田敬輔原版的「選択集十六章之図」であると「浄土宗新聞」（浄土宗文化局発行）に誤報道されたことにより、現地調査の結果、忍海画という確証が得られないことや高田敬輔の原版を忍海でない別人が模写した作品である確率が高いことを検証す

ることができ、江戸中期の作品が平成時代の今日まで、影響を与えていることを実感できたこと。

さらに、第二節では、「無量寿経曼荼羅」の及ぼした影響として、敬輔が描いた同時期（延享年間）に、古磗も『無量寿経』の教義を描いた「大経曼荼羅図」を作成していることから、対比的に考察することにより、敬輔は町絵師、古磗は画僧の立場での作画であることを究明することができたこと。

また「無量寿経曼荼羅」について詳細に解説した随天の『大経曼荼羅開壇記』の内容を通して、真言宗尾張興正寺の諦忍が「坐具」について批判したことにより、浄土宗の震純も『弾坐具顕正録』で対抗し、他宗の僧侶との論争を引き起こすほど影響を与えたことを知り得た。また、その論争の中で、他宗の諦忍が、高田敬輔と良照義山が師弟関係であったという記述を提示した著書を梓行しており、義山、敬輔両者の師弟関係を公認されていることを改めて認識することができ、「無量寿経曼荼羅」の存在価値を評価することができた。

終章では、〈高田敬輔の描く浄土の世界〉として、第一節では、迷いや苦悩を抱えた現世の大衆のために、念仏の行者は西方極楽浄土へ往生ができるという救いの道を、老若男女、文字を読めない者にも理解できるように、具体的に絵画表現したものであることを再認識したこと。

そして、第二節では、高田敬輔の想い描いた浄土の世界は、念仏行者が求める西方極楽浄土往生への〈道しるべ〉として「選択集十六章之図」があり、現世を厭い離れて阿弥陀仏とともに生きる〈往き先〉が「無量寿経曼荼羅」に描かれた極楽浄土であるという、高田敬輔が想い描く理想の世界が描かれていることを知ることができ、念仏信仰の指針として存在した優れた作品であるという結論を得ることができた。

三 さらなる充実・発展のために

最後に、さらなる高田敬輔研究の充実・発展のために、課題を提示して、本論考を締めくくりたい。

本論考では、江戸中期に活躍した高田敬輔の独創性に満ちた浄土宗の根本教義である『選択本願念仏集』に係わる「選択集十六章之図」と『無量寿経』に係わる「無量寿経曼荼羅」の二点の曼荼羅について集中的に検討を行った。結果的に今まで明らかにされなかった一つ一つの絵相について、その根拠となる経・論・疏等の裏付けを得て、どの教理の何に着目し、迷える一般衆生の浄土往生への『道しるべ』としての役割を果たしたか探求してきた。

高田敬輔が「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」について、その製作意図や描いた絵相について注釈した記録が残っていれば、より内容の充実した理解が得られたことであろう。しかし、いうまでもなく、絵師は芸術作品を提示するだけで、絵について、その見方や解釈は観る者の理解に委ねるのが一般的である。

「選択集十六章之図」については直接的に注釈を施した文書はなかったので、法然の『選択本願念仏集』の記述通りに順を追って精査することができた。

一方、「無量寿経曼荼羅」については、詳細に注釈された随天の『大経曼荼羅開壇記』があり、それを手がかりに絵相の解釈を行うことができた。見方を変えれば、それはあくまでも随天の理解の記述を再解釈したことになり、随天、靈應の理解以上のものを発見し、言及することができなかったことは否めない事実である。

しかし、随天、靈應の残した注釈の視点、手順は、初学の浄土宗僧侶としての筆者には、『無量寿経』の解釈を確実に教示するものであり、かけがいの無い貴重な財産となった。同書は四巻本であるが、ほぼ全編読み下しであるので、機会があるならば『大経曼荼羅開壇記』の翻刻本として、世に問いたいものだと思っている。

また、今後の研究の方向性を探る視点として、なぜ江戸中期に、それまでの「當麻曼陀羅」等とは異なる新しい形の「選択集十六章之図」や「無量寿経曼荼羅」のような曼荼羅が生まれなければならなかったのか、課題となる視点を二、三点提示しておきたい。

① 江戸中期の宗教的時代背景

例えば、良照義山のように浄土宗の基本典籍の総点検的な研究が行われなければならなかった必然性を考察する必要がある。中世の鎌倉新仏教隆興時から時を経て、幕府による寺檀制度や寺請制度の中で、宗祖法然の教えがそのまま継承されていたとは考え難く、時代の変化と発展に合う教義の確立や見直しが必要であったことも考察する一つの大きな要因になると思われる。

② 江戸中期の文化的時代背景

また、仏教以外の価値体系をもつ国学や洋学等の学問の発達、出家者の墮落や仏教そのものへの批判、「仮名書き選択本願念仏集」等に見られる一般大衆向けの文字の普及や出版物等の流通、「選択集十六章之図」等の版本の大量印刷技術の発達等、文化的時代兆候も見逃せないことである。

③ 江戸中期の情報網の発達と発展

高田敬輔は、町絵師として活躍する一方、近江商人として全国各地を往来し、多くの人材や新鮮な異文化との接触の中で優れた作品を生み出すことができた。全国各地に広く張り廻られた良質の知識や教養に溢れた情報網を精査することも本論考をより充実・発展する方策と思われる。

以上のような課題をふまえて、今後の研究を進めていくことも必要であると考ええる。

念仏往生の《道しるべ》、「選択集十六章之図」。

目に見える《西方極楽浄土》、「無量寿経曼荼羅」。

絵師高田敬輔が描いた《浄土の世界》である。

参考文献

【著作】

- ・高田敬輔「選擇集十六章之図」(紙本摺印着色 一一五・八cm×五一・五cm)【原画：正徳三年(一七一三年)】
- ・高田敬輔「無量寿経曼荼羅」(紙本摺印着色 一五三・二cm×六九・〇cm)【原画：正徳四年(一七一四年)】
- ・重鐫『選擇本願念佛集』(本・末) 元禄九年(一六九六年)
- ・隨天『大経曼荼羅開壇記』卷第一、卷第四 安永九年(一七八〇年)
- ・『科図 淨土三部經』華頂山知恩院藏鐫 寛政十一年(一七九九年)
- ・『通俗選擇本願念佛集』小倉山二尊院足曳堂藏版 延享元年(一七四四年)
- ・『圖画和字選擇集』 関通和字読み下し、忍海插画版 延享元年(一七四四年)
- ・湖月『選擇集十六章圖説』 延享二年(一七四五年)
- ・堀尾貫務『選擇集十六章之圖略解』 明治二十三年(一八九〇年)
- ・谷田輔長『敬輔画譜』 文化元年(一八〇四年)
- ・『円光大師行状画図翼賛』 国立国会図書館デジタルコレクション 元禄十六年(一七〇三年)
- ・珂然『洛東華頂義山和尚行業記并要解』 寛保元年(一七四一)
- ・忍海『當麻曼陀羅正義講聴書』 写本 佛教大学図書館 宝暦九年(一七五九年)
- ・忍海『當麻變相考』 写本 佛教大学図書館 延享三年(一七四六年)
- ・観徹『智光曼荼羅合讃』 正徳元年(一七一一年)版
- ・観徹『清海曼荼羅合讃』 正徳元年(一七一一年)版

- ・藤堂祐範・江藤澂英『大正新校 法然上人行狀繪圖』 中外出版 一九二四年
- ・井川定慶『法然上人行狀絵図』 浄土宗宗務庁 一九七〇年
- ・浄土宗総合研究所『現代語訳 法然上人行狀絵図』 浄土宗 二〇一三年
- ・古瀬^{ふるせ}『人物艸畫』享保九年（一七二四年）復刻版 太平文庫 一九八三年
- ・諦忍『坐具顯正録并衣色之辨』宝暦十四年（一七六四年）
- ・震純『彈坐具顯正録』「彈諦忍破靈之章 大衣重複辨料簡鈔」 大谷大学図書館蔵 明和二年（一七六五年）
- ・諦忍『獅子林漫筆』八事山興正寺 八事文庫蔵 天明五年（一七八五年）
- ・諦忍『空華談叢』 八事山興正寺 八事文庫蔵 天明六年（一七八六年）
- ・川口高風『諦忍律師研究』上・下巻 宝蔵館 一九九五年
- ・第九十一回京都大蔵会展観目録―浄土教絵画と唱導―（京都仏教各宗学校連合会 二〇〇六年）
- ・石井教道『選擇集全講』平樂寺書店 一九七九年
- ・石井教道『選擇集の研究』総論篇 平樂寺書店 一九五一年
- ・石井教道『選擇集の研究』註疏篇 誠文堂新光社 一九四五年
- ・石井教道編『昭和重修法然上人全集』平樂寺書店 一九五五年
- ・望月信亨『佛教經典成立史論』宝蔵館 一九四六年
- ・坪井俊映『浄土三部經概説』隆文館 一九六五年
- ・真野正順『無量寿経講話』大法輪閣 一九六三年
- ・金山正好『増上寺三大蔵経目錄解説』 増上寺 一九八二年
- ・中村元『往生要集』 岩波書店 一九九六年
- ・和田英松『新訂 官職要解』 講談社 一九八三年

- ・『滋賀県立近代美術館研究紀要』第四号 滋賀県立近代美術館 二〇〇二年
- ・『滋賀県立近代美術館研究紀要』第五号 滋賀県立近代美術館 二〇〇四年
- ・畫乘要略 白井華陽 天保三年（一八三二年）（大正八年（一九一九年）復刻版）
- ・伴蒿蹊・三熊花顛・宗政五十緒校注『近世畸人傳 續近世畸人傳 伴蒿蹊・三熊花顛・宗政五十緒校注』
東洋文庫（二〇二）平凡社（一九七二年復刻版）
- ・近藤信彦『日本畫僧』 東方書院 一九三四年
- ・横須賀安枝『本朝畫工便覽』 東洋堂 一九四九年
- ・朝岡興禎『古畫備考』 吉川弘文館 一九〇五年
- ・坂野泰巨『選択集入門―選択集十六章之図―』文化書院 一九九八年
- ・小澤勇幹『選擇集講述』浄土宗 一九七一年
- ・『選択集十六章画図講義』写本 龍谷大学図書館蔵 龍谷大学貴重資料データベース
- ・桑門秀我『選擇集大意・出雲宗要』国書刊行会 一九八四年
- ・紀秀信『佛像圖彙』東都書肆 元禄三年（一六九〇年）
- ・日本思想大系『鎌倉旧仏教』岩波書店 一九七一年
- ・日本古典文学大系『沙石集』岩波書店 一九六六年
- ・松原茂『日本の美術 絵巻Ⅱ融通念仏縁起』至文堂 一九九一年
- ・岡崎讓治『日本の美術 浄土教絵画』至文堂 一九六九年
- ・真保亨『日本の美術 法然上人絵伝』至文堂 一九七四年
- ・濱田隆『日本の美術 来迎図』至文堂 一九八九年
- ・細野正信『日本の美術 江戸の狩野派』至文堂 一九八八年

- ・大田利生編『漢訳五本梵本蔵訳対照 無量寿経』 永田文昌堂 二〇〇五年
- ・香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』 永田文昌堂 一九八四年
- ・久保貴子『後水尾天皇』 ミネルヴァ書房 二〇〇八年
- ・熊倉功夫『後水尾天皇』 中公文庫 二〇一〇年
- ・『近世絵画聚考』 芸艸堂出版部 一九四八年
- ・『唐代詩人 岑参の辺塞詩』 溪水社 一九八八年
- ・『岑嘉州詩』 四部叢刊初編集部 三七
- ・『正明寺小史』 溪道元 一九二九年
- ・『仁和寺史料』 寺誌編二 奈良国立文化財研究所編 吉川弘文館 一九六七年
- ・『真言宗大本山仁和寺門跡略誌』 仁和寺 鷹峰大道社 一九四一年
- ・『真言宗大本山仁和寺門跡要誌』 石堂惠猛 仁和寺寺務所 一九二五年
- ・長忠生『内信心念仏考』 海鳥社 一九九九年
- ・坂本要編『地獄の世界』 北辰堂 一九九〇年
- ・宮次男『日本の地獄絵』 芳賀書店 一九七三年
- ・西田直樹『『往生要集絵巻』 詞章と絵の研究』 和泉書院 二〇〇〇年
- ・田中久美子『地獄百景』 K Kベストセラーズ 二〇一二年
- ・草野巧『図解 天国と地獄』 新紀元社 二〇〇七年
- ・山本健治『地獄めぐり』 三五館 二〇〇三年

【研究論文】

- ・土居次義「天球院障壁画と『敬輔画譜』」（『近世絵画聚考』芸艸堂出版部 一九四八年）
- ・土居次義「信楽院の高田敬輔（上）・（下）」（『季刊アート』21-2、21-3 マリア書房 一九七三年）
- ・土居次義「高田敬輔の襖絵」（『國華』九八三號 國華社 一九七五年）
- ・國賀由美子「京狩野門流 高田敬輔雜考」（『日本画の情景』静岡県立美術館、滋賀県立近代美術館二〇〇〇年）
- ・國賀由美子「近江の画人高田敬輔再考―仁和寺藏『御記』による知見を手がかりとして―」（『滋賀県立近代美術館研究紀要』第4号 二〇〇二年）
- ・國賀由美子「詠注『敬輔画譜』附『高田家系図書』」（『滋賀県立近代美術館研究紀要』第5号 二〇〇四年）
- ・國賀由美子「高田敬輔と小泉斐―近江商人が美術史に果たしたある役割―」（滋賀県立近代美術館、栃木県立美術館 二〇〇五年）
- ・國賀由美子「島崎家伝来「書画帖」について」（『文化史学の挑戦』思文閣出版 二〇〇五年）
- ・國賀由美子「高田敬輔筆 信楽院天井畫」（『國華』一三六八号 國華編輯委員會 二〇〇九年）
- ・國賀由美子「高田敬輔の画業―黄檗絵画との接点―」（『黄檗文華』一三〇号 黄檗文化研究所 二〇一一年）
- ・國賀由美子『近江日野の歴史』第五卷 文化財編 四十頁（編集…日野町史編さん委員会 二〇〇七年）
- ・國賀由美子『近江日野の歴史』第五卷（第一章 第一節 第二項日野出身の画人たち 〈六〉谷田輔長）
- ・山本ゆかり「高田敬輔研究」（『鹿島美術研究』年報別冊 第十九号 鹿島美術財団 二〇〇二年）
- ・山本ゆかり「月岡雪鼎・磯田湖龍齋等への僧位叙任について ―『御室御記』に関する報告―」（『浮世絵芸術』No. 一三二 国際浮世絵学会 一九九九年）
- ・山本ゆかり「永宣旨による絵師の僧位再考―勅許による僧位との差異をめぐって―」（『近世御用絵師の史的研究』 思文閣出版 二〇〇八年）

- ・マニー・L・ヒックマン「〔湖東〕出身の画家、高田敬輔」(『高田敬輔と小泉斐ー近江商人が美術史に果たしたある役割ー』滋賀県立近代美術館、栃木県立美術館 二〇〇五年)
- ・脇坂淳「永敬の和画と漢画」(『京狩野の研究』中央公論美術出版 二〇一〇年)
- ・五十嵐公一「狩野永敬の研究」(『鹿島美術研究』年報別冊第十八号 鹿島美術財団 二〇一一年)
- ・五十嵐公一「狩野永納と狩野永敬永敬」(『近世京都画壇のネットワーク』吉川弘文館 二〇一〇年)
- ・坂野泰巨『選択集入門ー選択集十六章之図ー』(文化書院 一九九八年)
- ・新井俊定「選択集十六章之図」について(『浄土』一九九八年五・六号 法然上人鑽仰会発行 一九九八年)
- ・新井俊定「和字選択集について」(『法然仏教とその可能性』佛教大学総合研究所編 法蔵館 二〇一二年)
- ・大室了皓「選択集絵解き物語」『浄土』一九九八年五・六月号〜九月号 法然上人鑽仰会発行 一九九八年)
- ・福原蓮月「『選択集十六章之図』について」(『印度學佛教學研究』第三十卷第一号 日本印度学仏教学会一九八一年)
- ・鷺津清静「通俗圖繪選擇本願念佛集について」(『西山学会年報』第十四号 西山学会 二〇〇四年)
- ・中山高陽『画譚雞肋』(安永四年(一七七五年)) (『日本絵画論大成』第六卷 ペリかん社 二〇〇〇年)
- ・黒川秀一「中山高陽と『画譚雞肋』」(『日本絵画論大成』第六卷 ペリかん社 二〇〇〇年)
- ・三熊思孝編纂・伴蒿蹊校閲『續近世畸人傳』第五卷(寛政十年(一七九八年))
- ・宗政五十緒「三熊花顛伝」(『近世畸人伝・続近世畸人伝』平凡社 一九七二年)
- ・宗政五十緒「解説」(『近世畸人伝・続近世畸人伝』一九七二年 平凡社)
- ・神谷浩「中林竹洞 画論と画作」(『日本絵画論大成』第六卷 ペリかん社 二〇〇〇年)
- ・中尾樗軒『近世逸人画史』(文化十五年(一八一八)) (『日本絵画論大成』第十卷 ペリかん社 二〇〇〇年)
- ・木村重圭「京都と江戸の画人伝」(『日本絵画論大成』第十卷 ペリかん社 二〇〇〇年)

- ・ 白井華陽『画乗要略』（天保二年（一八三一年））（『日本絵画論大成』第十巻 ペリかん社 二〇〇〇年）
- ・ 川喜多眞一朗『古今墨蹟鑒定便覧』第六巻 （安政二年（一八五五年））
- ・ 松永知海「書師岡村元春と義山版」（『法然浄土教の総合的研究』佛教大学総合研究所紀要 二〇〇二年）
- ・ 吉永岳彦「「宗」の三義説―独尊・統摂・帰趣―」（『佛教論叢』第五十四号）
- ・ 是澤恭三「後水尾天皇の禪學御留書」（『歴史と國文學』第二十四巻第四号 一九四一年）
- ・ 大原性實『眞宗異義異安心の研究』（眞宗教學史研究第三巻 永田文昌堂 一九六〇年）
- ・ 山田文昭『眞宗史の研究』一八七頁（法蔵館 一九七九年）
- ・ 菊池武「東海地方における秘事法門について」（『印度学佛教学研究』21巻 一九七三年）
- ・ 菊池武「特殊念仏結社の説教と絵解き」（『宗教研究』二五〇 第55巻 第三輯 日本宗教学会 一九八二年）
- ・ 菊池武「近世に於ける北陸地方の秘事法門について」（『宗教研究』二二六 日本宗教学会 一九七六年）
- ・ 菊池武「越後地方における秘事法門について」（『宗教研究』二一四 日本宗教学会 一九七三年）
- ・ 菊池武「地獄秘事の本源」（『宗教研究』二二二 日本宗教学会 一九七五年）
- ・ 杉本欣久「増上寺の学僧・忍海の作画と復古思想」（『古文化研究』第十四号（黒川古文化研究所 二〇一五年）
- ・ 『新纂浄土宗大辞典』（浄土宗 二〇一六年）
- ・ 『大本山増上寺史』『歴代上人誌』（一九九九年 大本山増上寺）
- ・ 新井俊定「和字選択集について」（『阿川文正教授古稀記念論集 法然浄土教の思想と伝歴』 山喜房佛書林 二〇〇一年）
- ・ パトリシア・フィスター「三人の近世尼僧と黄檗」（『黄檗文華』一一八号 黄檗文化研究所 一九九九年）

【図録】

- ・「高田敬輔と小泉斐」―近江商人が美術史に果たしたある役割― 滋賀県立近代美術館 二〇〇五年
- ・「近江湖東・湖南の画人たち」 栗東歴史民俗博物館 一九九九年
- ・「日本画の情景」―富士山・琵琶湖から― 静岡県立美術館 滋賀県立近代美術館 二〇〇〇年
- ・「近世京都の狩野派展」 京都文化博物館 二〇〇四年
- ・「画僧古磧」 大和文華館 二〇一七年
- ・「法然 生涯と美術」 京都国立博物館 二〇一一年
- ・「知恩院と法然上人絵伝」 知恩院 一九八二年
- ・「近江と黄檗宗の美術」 栗東歴史民俗博物館 一九九二年
- ・「浄土曼荼羅」―極楽浄土と来迎のロマン― 奈良国立博物館 一九八三年
- ・「尼門跡と尼僧の美術」 中世日本研究所 二〇〇三年
- ・「尼門跡寺院の世界」―皇女たちの信仰と御所文化― 中世日本研究所 二〇〇九年
- ・「近江路の高田敬輔と曾我蕭白」 滋賀県立琵琶湖文化館 一九七八年
- ・「源信」―地獄極楽への扉― 奈良国立博物館 二〇一七年
- ・「當麻寺」―極楽浄土へのあこがれ― 奈良国立博物館 二〇一三年
- ・「知られざる御用絵師の世界展」 朝日新聞社 一九九八年
- ・「狩野派の絵画」 東京国立博物館 一九七九年